

ハイスクールD×D～古代の戦士～

ヤマト・ゼロ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて古代には二つの部族が存在した。

戦いを嫌う優しき部族のリント族！

殺戮を好む戦闘部族のグロンギ族！

グロンギ族に対抗し、誕生した戦士クウガ！

これは悪魔となってしまった主人公が

古代の戦士「仮面ライダークウガ」となり

人ならざる者と戦う物語

目次

第一章 旧校舎のディアボロス

第1話「復活」 | 1

第2話「異変」 | 9

第3話「悪魔」 | 19

第4話「依頼」 | 35

第5話「聖女」 | 54

第6話「悪魔祓い」 | 71

第7話「友達」 | 87

第8話「教会」 | 107

第9話「変身」 | 125

第10話「復活」 | 145

第一章 登場キャラクター | 153

第二章 戦闘校舎のフェニックス

第11話「夢」 | 158

第12話「学校」 | 175

第13話「婚約」 | 191

第14話「条件」 | 203

第15話「特訓」 | 218

第16話「自信」 | 238

第17話「古代の戦士」 | 256

第18話「封印」 | 272

第19話「撃破」 | 287

第20話「魔剣」 | 301

第21話「贈物」 | 318

第22話「決着」	336
第23話「決闘」	355
第24話「不死鳥」	375
第二章 登場キャラクター	400
番外編 異世界とのクロスロード「クウガ編」	
第25話「異界の戦士」	410
第26話「グロンギ」	431
第三章 月光校庭のエクスカリバー	
第27話「新聞部」	452
第28話「球技大会」	473
第29話「聖剣計画」	488
第30話「幼馴染」	501
第31話「聖剣対魔剣」	518
第32話「共同戦線」	535
第33話「仇敵」	551
第34話「宣戦布告」	564
第35話「集結」	587
第36話「覚醒」	607
第37話「真実」	628
第38話「白龍皇」	647
第三章 登場キャラクター	662
番外編 異世界とのクロスロード「手裏剣戦隊編」	
第39話「手裏剣戦隊」	677
第40話「ニンニンジャー」	693
第四章 停止教室のヴァンパイア	

第41話 「魔王来訪」

714

第42話 「プール開き」

732

第43話 「授業参観」

747

第44話 「僧侶」

769

第45話 「邪眼」

789

第46話 「心の扉」

805

第47話 「会談」

824

第48話 「襲撃」

843

第49話 「禍の団」

858

第50話 「裏切り」

883

第51話 「好敵手」

895

第52話 「駒王協定」

923

第四章 登場キャラクター

943

番外編 異世界とのクロスロード 「ティガ編」

第53話 「光の巨人」

957

第54話 「ティガ」

976

第五章 冥界合宿のヘルキャット

第55話 「夏休み」

999

第56話 「入国」

1013

第57話 「実家」

1025

第58話 「若手悪魔」

1043

第59話 「目標」

1058

第60話 「指導」

1072

第61話 「人工神器」

1087

第62話 「パーティ」

1107

第63話「姉猫」	126
第64話「赤龍帝」	145
第65話「冥界猫」	166
第66話「開戦」	182
第67話「撃破」	203
第68話「戦術」	221
第69話「投了」	234
第70話「評価」	251
第五章 登場キャラクター	264
番外編 異世界とのクロスロード「デイケイド編」	280
第71話「通りすがりの」	129
第72話「仮面ライダー」	126
第六章 体育館裏のホーリー	
第73話「転校生」	132
第74話「居場所」	134
第75話「記録」	136
第76話「忠告」	137
第77話「収録」	139
第78話「乱入」	140
第79話「古代の光」	142
第80話「真実」	143
第81話「金色の僧侶」	149

第一章 旧校舎のディアボロス 第1話「復活」

俺に力が有れば、赤い姿なら守れたのに。鮮血にまみれた手を見ながら、俺はそんなことを思っていた。頭に浮かんだその姿はこの手を染めた血と同じ色だった。

—○●○—

兵藤祐介——俺の名前だ。両親、弟、学校の友達は何の事を「ユウスケ」と呼んでいる。青春を謳歌している高校二年生だ。見知らぬ生徒に「あのユウスケさんじゃない？」と言われた事もあるが、どれだけ俺の下の名前が知られているかわからない。以外に人気者？ 顔が良い？、成績優秀？ いや、そんなことはないな。

何せこの学校には、もう一人有名な兵藤がいるからな。そいつの名前は『兵藤一誠』俺の双子の弟だ、あいつは女子剣道部の部室を覗いたなんて嫌疑をかけられるぐらいエロくて有名だ。本人は覗きを否定しているが信じているものは誰一人もない。

家族である俺は信じているあいつが覗きなんて、そんな破廉恥なこと…。

いやあ、一番に疑いました。

実際に現場にいたらしいが、『松田と元浜が邪魔で覗けなかった』と本人が家で愚痴っていた。俺の名前が覚えられているのも一誠がエロで有名な為。『変態のイツセーと普通のユウスケ』とセットで覚えられているんだろう。

最初は普通ってなんだと思ったが、イツセーのインパクトが強すぎるせいで普通と思われるようだ。こう見えても運動は得意なのだ。

そんなエロに情熱を全力で注いでいたイツセーから驚愕の知らせが訪れた。女の子からの告白！頭を鈍器で殴られたような衝撃を受け。これは夢だと疑ったね。

俺もイツセーも彼女はいない。最初は何故イツセーに出来て俺に出来ないとシヨックを受けたが、今ではイツセーに初めての彼女が出来たと家族と共にお祝いした。

イツセーのエロさをよく知る両親は号泣していたがそれも無理はない。写真を見せてもらったが、黒髪がツヤツヤでスレンダーな女の子。名前は天野夕麻というらしい。

驚く事に告白は向こうからで、イツセーは出会った瞬間に一目惚れしたらしい。

『兵藤君！好きです！付き合ってください！』

と言われて即OK出したらしい。それこそ、彼女いない歴年齢の男にとって、それは夢のまた夢のシチュエーションだ。『それなんてギャルゲの話？』と言った俺はおかしくないけど実際に起こりました。本人も確かに奇跡が起こったと喜んでいた。同時に何かのドッキリ企画だと思っただしく、周りに罰ゲームを見守るお仲間がいなか再三疑っただらしい。

その日からイツセーは変わり心にゆとりが出来たおかげか自信に満ち溢れていた。俺は勝ったと言いたげな顔だったのは、素直にむかついたので殴ってやった。

そんなイツセーも今日は初めてのデートの日だ。前々から相談され二人で練ったデートのプランが遂に決行される。

イツセーは勝負パンツを買って来てこれで大丈夫かと相談してきたが、野郎の下着姿など興味もなかったもので、見せる機会なんてないだろうと言ってやった。

チエリー根性マックスで臨んだ今日のデート待ち合わせの3時間前に到着するように出かけて行った。完全にやりすぎである。空回りしなければ良いが、俺に予定がなければ後をついていきたかったが、あいにく今日は所属している新

聞部の活動で博物館に取材に行くことになっている。



博物館に着くと入口にはオレンジの長髪が特徴の少女大空
奈美先輩が待っていた。

「お待ちせしました部長！」

「遅いわよユウスケ！ さあ早く取材に行くわよ」

彼女に連れられてやってきたのは博物館の裏側だった。

「今回取材するのはとある遺跡で発掘された調度品よ」

俺には唯の模様がついた石や石像にしか見えないんだが、
特ダネに目がない先輩が取材に来たのだから特別なもの
なのだろう

「それでこれはどういう物なんですか？」

「この調度品に書かれた文字はね最近発見されたばかり
のプリントと呼ばれる部族の物なの」

要するに最近発見されたばかりの部族の物が何故かこの
街に眠っていたらしい。まだどのような部族かも分かつ
てない為歴史的に価値があるようだそれを今回取材する
事になった。取材はつつがなく終わったが、そこで問題
が発生した。この後うちの学園のオカルト研究部に研究
資料として送る事になっていたが、手配した運送会社の
手違いで今日中に来れないそうだ。俺は帰り道に学園の
近くを通るので小物なら運びますよと提案したら向こう
も急ぎだった為お願いされた。

「ユウスケ！それは大事な物なんだから死んでも
守りなさいよ」

「わかりました部長！俺が責任持って届けます！」

博物館の職員からも念押しで注意された。それにしても
歴史的価値がある物を借りられるってオカ研ですごいん
だな…。

どんな人なのか気になるところだな。俺は学園に向かう途中で公園に入って行くイツセー達を見かけた。急ぎではなかったので、好奇心に勝てず気づけば、俺は二人の後を追いかけた。

—○●○—

※時間は家を出た朝まで遡る

イツセー side

待ち合わせ時間はクリア。何せ夕麻ちゃんが来る三時間前に現地到着してたもん。

前を通り過ぎるメガネっ子を百まで数えたぜ！途中、わけのわからないチラシ配りに怪しげなチラシを手渡されたりしたけどな。

『あなたの願いを叶えます！』って

怪しげな魔法陣が描かれたオカルトなものだ。相手が美人で無かったら貫わなかったのに。：捨てたいけど、いま捨てに行けないし、ポケットに入れておきますか。んで、夕麻ちゃんが到着したら言っっちゃったね。

「いや、俺もいま来たところだから」

決まった！ つーか、言えた。これを、俺はずっと言いたかった！そんな俺らは手を繋いで歩き出した。感動したね。美少女な彼女とお手々繋いでぶらりとデート！感動して目から熱い水が出るところだっぜ。服や小物を見たりしてデートを満喫した。お昼は高校生らしくファミレスだったけど、夕麻ちゃんは美味しそうにチョコパフェを食べてた。ああ、これぞ若者のデートだっけ痛感したよ。俺はいま生きてるって実感できた。なんてことを思っていたら、もう夕暮れですよお客さん！クライマックスは近づいてる夕暮れの公園。人気はなく、俺ら以外は居なかった。そのおかげでエロい妄想はさらにヒ-

トアップしたね。もつとエツちなハウトウ本を詳しく呼んでおくんだった!

「今日は楽しかったね」

バックの夕暮れの太陽がいい演出になっているぜ。

これはキスの予感がする。

「ねえ、イツセーくん」

「なんだい、夕麻ちゃん」

「私たちの記念すべき初デートってことで、ひとつ、

私のお願ひ聞いてくれる?」

これは来たか!

「な、何かな、お、願ひって」

動揺が隠せなかった。そして、はっきりと俺に向かって言った。

「死んでくれないかな」

…は?

「…え? それって…あれ、ゴメン、もう一度言ってくれない?なんか、俺の耳変だわ」

聞き間違いだ。そう思いたかった。そう思ってた。当たり前だ。だから聞き返したんだよ。

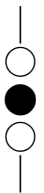
でも。

「死んでくれないかな」

笑いながら言うその姿に俺が動揺していると。

バツ。

夕麻ちゃんの背中から黒い翼が生えた。



ユウスケside

彼女の背中から黒い翼が生えた瞬間に俺は駆け出していた。あれは人間ではないと、俺の本能が言っていた。「貴方とのデートも初々しくて楽しかったわよ」

ブウン。

低い音を立てながら光の槍が彼女の手に現れた。

「イツセー！危ない！」

俺はイツセーに体当たりして突き飛ばすとギリギリで槍を避けることができた。だが預かっていた荷物にかすっていて。中から石のようなベルトがこぼれ落ちたその時ベルトの中央部が光り頭の中にイメージが流れ込んでくる。それは赤い鎧の戦士が怪物と戦っている映像だった。

「なんだ今のは!？」

「ユウスケ！」

振り向くと彼女が光の槍でこちらを狙っていた。間一髪で避けると俺はベルトを拾い腰へ当てる。

「すみません部長こいつを使います」

するとベルトは強い光を発して体の中に吸い込まれる「ベルトがユウスケの中に吸い込まれた!？」

「グツツ、グツウ 熱い!!？」

「何をする気か知らないけど、せつかくの狩を邪魔したんだから貴方はいたぶって殺してあげる」

彼女は俺の首を掴み。宙吊りにする。こんな細い腕のどこにこんな力が！

「おおお！ユウスケを離せ！」

イツセーが俺を助けようと彼女へ殴りかかる。

「邪魔よ、貴方はそこで兄弟が死ぬ様を見てなさい」

イツセーは腕の一振りで吹き飛ばされてしまう。俺はそのまま地面へ投げ飛ばされた。

「ハアッ！ ハアッ！ やられる！殺される！」

ツカツカとこちらへと彼女は歩いてくる。すぐに殺せるはずなのに完全にあそんでやがる。

「うあああ！」

近づいてきた彼女が怖くなり、俺はたまらずパンチを

繰り出す。

「クウツ」

力をそこまで入れてないのに彼女は怯む。俺は不思議に思うが自身の体を見て驚愕した。殴った腕が白い鎧に変わっていた。

「変わった!?!」

「これならー!うおおおー!」

俺はパンチやキックとラツシユを叩き込む。最後の1発で彼女を吹き飛ばした。俺の姿は色こそ違うがイメージで見た姿へと変貌していた。

「セイクリッドギアの覚醒!? 唯の人間が舐めるな!」

彼女は先ほどの倍はあるだろう光の槍を生み出す。

「くたばれえ!」

俺は咄嗟に腕でガードした。

ドサツ。

だが槍は俺ではなく、横に居たイツセーを貫いていた

…え。

「フッフ…、残念ね彼を助けられなくて」

…何で…。

イツセーの死が受け入れられない俺は。呆然と立ち尽くしてしまった。

「そう、その顔が見たかったの。さあ、貴方も

死になさい」

その言葉に振り返ると光の槍が目の前へと迫っていた。ドン。

光の槍は俺の腹を貫いていた。槍を抜こうとしたが、触れる前に槍は消えてしまう。後に残るのはポツカリと穴が空いた俺の腹だけ。血が大量に吹き出して周りに広がる。頭がクラクラし、気がついたら俺は倒れていた。姿も元の姿に戻っている。ツカツカと彼女の近づいてくる音がする。

「ごめんなさいね。彼が私達にとって危険因子だったから始末させてもらったわ。貴方はついでね。恨むなら自分の弱さとその身にセイクリッドギアを宿らせた神を恨んでちょうだいね」

：セイ、なんだそれ？そんなものの為に俺たちは…。聞いただそうにも。もう声も出ない。彼女の足音が遠ざかる。意識も薄れていく。残るのは後悔だった。イメージ通りの赤い姿になっていけば、勝てたかもしれないのに…。イツセーを見れば手に着いた血を見て呆然としている。二人とも助からないだろう。視界もぼやけてきた。もう死ぬのか…。もし生まれ変わるのなら、俺は…。

「私を呼び出したのは。貴方達ね」

突然、俺の視界に誰かが映りこみ、声をかけてくる。目がボヤけてしまっているせいか、もう誰かすらわからなかったが、それは知らない声だった。

「死にそうね。傷は…へえ、面白い事になってるじ

やないの。そう、貴方達がねえ…。本当、面白いわ」
クスクスと興味ありげな含み笑い。：何がそんなに面白いんだろうか…？

「どうせ死ぬなら、私が拾ってあげるわ。貴方達の命。私の為に生きなさい」

意識が途絶える寸前、俺の目に映ったのは、鮮やかな紅い髪だった。

第2話 「異変」

「…ピピー…ピピー…ピピー…」

カチャ。

…最悪の目覚めだ。また自分が殺される夢を見た。ここ最近同じ夢を見ている。貫かれた腹を見ても穴は空いていない。こうして生きているので、あれは夢に過ぎない。イツセーも同じ夢を見ているようだ、双子とはいえこんな偶然があるだろうか。

「イツセー・ユウスケー！起きなさい！」

階段から母さんの声。

「わーってるよ！今起きる！」

隣の部屋からイツセーの声。いつも通りの朝だった。

目覚めも悪く。今日も始まりは最悪だ。

はあ…。

俺は制服に着替えながら。大きくため息を吐いた。

—●—

「行つてきます」

あくびをし、まだ眠そうなイツセーと共に家を出る。

通学途中は、どうしても朝日が厳しくて目を細めてしまう朝から体もダルくてやる気が出ない。あの夢を見るようになってから俺は太陽が苦手になった。別に吸血鬼みたいに燃えるわけではないが、陽光が肌を突き刺すようでキツイ前は朝のジョギングが日課だったのに、今では朝に起きられない。最近では起きてこない俺とイツセーを母さんが叩き起こしに来るのが日課となっている。逆に夜は活発になつてしまい。ハイテンションな状態になっている。

今なら何でも出来ると自身に満ち溢れている。最初は本当に吸血鬼にでもなったのではないかと鏡を見てキバが生えてないか確認してしまった。

おかしい。

ここまでくると怪しすぎる。本当に俺は人間か？緑の血が流れてるのではないかと不安になったが、ケガをしたときに確認したが、血はちゃんと赤かった。

……どうしたものか俺の体は。

自分が死ぬ夢を見たくなくて、無意識に寝ることを拒否してるのか？そんなわけはない。体は眠りを必要としているはずだ。夜の感覚は以前と全く違うものとなっていた。

説明できないが、体の内側から得体の知れない何かが、

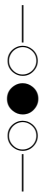
湧き上がる感覚。試しに日課のジョギングを夜に行ったがいつもの倍の距離を走っても息切れもせず、スタミナも上がっている。一度全力で走ってみたが、自分でも信じられない速度がでた。これなら、陸上部でエースになれるし、フルマラソンをジョギング感覚で完走できる。

昼間は夜ほどの力はなく一般男性の平均程度の力しか出なかった。夜が俺を化け物へと変えてしまう。

こんな事言った日には。異常者か中二病患者みたいな発言だけだな。

うっ：現実逃避していても、やはり朝日がキツイな。

あの日、イツセーがデートに行った日から何もかもが変わってしまった気がする。本当にあれは夢だったのだろうかそんなことを俺は何度も考えてしまう。



私立駒王学園。俺達が通う高校だ。現在は共学となっているが、数年前まで女子高だったせいとか、男子よりも女子の割合が多い。学年が下がるごとに男子の比率が上がるが、それでもやはり全体的に女子が多かった。

二年生である俺のクラスでも男女比は三対七だ。三年生だと二対八。発言力も女子の方が圧倒的に強く。生徒会もほ

とんどが女性で占めており、生徒会長も女性であった。男子が強く出れない校風だが、それでも俺達は通っていた。イツセーはハーレムを作る為という完全に下心しかない。女子に囲まれて授業がしたいという理由で受験するのだから驚きだ、そのスケベ根性で難関と言われた試験を突破したのだから大したものだ。

先にイツセーの理由を聞くと俺も似たようなものかと聞かれるが、流石にそんな理由で学校は決めないさ。俺が決めた理由はこの学園が生徒の意思を尊重して。生徒の自由を尊重している校風に惹かれて入学を決めた。

中には自由にやりすぎて意味の分からない部活も存在する。就職率も高く。この学園からは多岐にわたる職種が輩出されている。

俺は将来なりたいものや夢が無いので、それを見つけられると思ひ。この学園に通っているが、まだ目標が見つけれない。ハーレムとはいえ目標があるイツセーを時には羨ましく思う時がある。

「ユウスケー！ ちょっと顔を貸しなさい」

クラスへ向かう途中。奈美先輩が声をかけてきた。

「どうしました先輩こんな朝から？」

ちなみに博物館に行った日の事を聞いたが、俺に荷物を預けていないと言われた。歴史的に貴重な物を唯の学生に渡すわけがないと言われれば、納得もする。

「特ダネよ！ 最近この駒王町で人間大の大きさのクラスが

現れたみたいなの！」

「人間大のクラスですか？」

脳裏には黒い翼を広げた夕麻と名乗った彼女の姿がよぎった。あの彼女にも謎が残る。イツセーの携帯のデータから写真が消え。両親やイツセーの友人も覚えていないらしい。俺達双子だけが覚えている女性。一度部長にも相談してみるのもいいかもしれない。

「すみません。奈美先輩少し相談があるのですが」



「なるほどね みんなの記憶から消えた女性ね」

自身の異変の事は伝えず、全てを話した。

「面白そうじゃない、そんな話！早速調査しましょう先ず

は、その夕麻っていう女性を調べましょう！」

俺と奈美先輩はイツセーに見せてもらった写真から、彼女が通っていると思われる学校の特定から始めた。データは無くなっていたので、自分の記憶を頼りに、制服のカタログとにらめっこしようやく見つけることが出来た。放課後となり先輩と二人でその学校に向かい話を伺った。

「調べた結果、夕麻という生徒が居ない事が分かったけどこれで、振り出しに戻ったわね」

卒業生にも居ないので完全に手詰まりである。

「明日自分が殺された現場に行ってみますか？何か手がかりが見つかるともしれません」

あの後、一度も訪れていないので、

何か見つかるかもしれない。

「いえ、これから行くわよ！」

「ええ☒。もう夕方ですよ。つく頃には真っ暗ですけど」

「今行かないでどうするの！ついでに人間大の

カラスも探すわ」

そんな無茶苦茶な！奈美先輩はたまにこういう時がある。

そしていつも巻き込まれる俺が割を食うんだ。俺達は特ダネカラスの目撃場所を通りながら公園へと向かう。

「あれは…」

公園に向かう途中でイツセーが凄い速さで走っているのを見かけた。その顔は何かあったのか酷く焦っていた。

「何!!？あの速さ普通じゃないでしょ!!？」

「先輩！心配なので、すみませんが先に行きます」
俺は先輩を置いて走り出した。



イツセーside

俺は友人である松田と元浜に最近元気がなかったので、DVDの鑑賞会を急遽松田の家で行う事にした。二人とも夕麻ちゃんの事は覚えていなかった。完全に俺の妄想扱いだ。二人に自慢していたので、覚えていないはずはないんだが夕麻ちゃんの事を覚えているのはユウスケだけだった。

二人との鑑賞会も終わったあと一人帰路に着く。すっかり遅くなり時刻は夜の10時だあまり遅くなると親に心配されるな。帰り道を歩く俺だが、先ほどから体の内側から溢れてくる力の疼きが酷かった。ユウスケも言っていたが

『夜になると力が溢れ出す』ってやつだ。

やっぱり俺達の体、おかしすぎだろ。どう考えてもまともな現象じゃない。目が冴えて、五感が鋭くなる。聴覚、視覚が尋常じゃないぐらいによく働く。

集中すれば、周囲の家の中から会話が聞こえてくるし、暗闇の道でも夜目が利きすぎている。

光が届いていない場所まで鮮明に見えるのは流石におかしいだろう！日に日にこの現象が強くなっている気がする。

いや、これは気のせいじゃない。だって、この体中を走る悪寒は本物だ！さっきから感じる俺へ向けられる冷たい視線。

眼前、道の中から俺へ向けて得体の知れない空気が漂ってくる。震えが凄まじい。体が小刻みに震えていた。

道の先からスーツを着た男が現れ俺を睨んでいる。視線が合うだけで体の芯まで凍ってしまいそうになる。これ、確実に殺意じゃないのか？ 敵意は確実に感じる。だが、それ以上に危険な感じだ。

やっぱ、これ殺意だろう！

男がこちらに静かに歩み寄ってくる。俺に向かって来ているし！ やっぱ俺ですか！ 変質者!? ? ヤバいのか!? ? ヤバいよな！ だつてさ、さつきから震えが止まらない！ 帰り道に危ない人とエンカウントかよ俺！

「これは数奇なものだ。こんな都市部でもない地方の市街で貴様のような存在に会うのだから」

……?

何を言ってるんだ？ いやいや、頭逝っちゃってる人じゃん！ やっぱり、危ない人か！

それとも唯の厨二病患者か？ うわ！ 刃物とか出されたらどうしよう！ こんなとなら護身用に格闘技を習つとけばよかった。こちとらケンカすらしたことないぞ！ どうする俺！

そ、そうだ！

夜中にパワーアップしている俺の力で逃げるしかない！ 後ずさりしつつ、距離を取った。変質者の空気全開な男はスタスタとこちらへ向かって歩いてきている。

「逃げ腰か？ 主人は誰だ？ こんな都市部から離れた場所を縄張りしている輩だ、階級の低い者か、物好きのどちらかだろう。お前の主人は誰なんだ？」
わけわかんないっつーの！

ダッ！

「逃げるんだよスモークー」

俺は振り向き様、一気に来た道に戻った。もちろん全速力だ。夜の闇を掻き分けて、俺はひたすら逃げた。途中で道を曲がったりしながら、見知らぬ街道

を走る。

息は上がってない。まだ走れる。こうなったら、絶対についてこれられないであろう距離を稼いでやるさ！十五分ぐらい走ったところで、開けた場所に出た。公園だ。

足を一旦止め、歩みに変える。少しだけ息を整えながら、噴水の辺りまで歩みを進めた。公園の街灯下で周囲を見回す。

俺は不可思議なものに囚われていた。この公園を俺は知っている。そうだ、ここは夢の、夕麻ちゃんとのデートで最後に訪れた場所だ！

おいおい、なんつー偶然というか、奇跡というか。いや、無意識のうちにここへ足が動いた？

まさかね…。

ぞくつ。

背筋に冷たいものが走る。何かが後方にいる…。

そんな感覚だ。ゆっくりと振り返ると、俺の眼前を黒い羽根が舞った。カラスの羽根？ 違う。

「逃がすと思うか？ 下級な存在はこれだから困る」

俺の前に現れたのは黒い翼を生やしたスーツの男。

さっきの変質者だ。…天使？ いやいや、いくらなんでもそれはファンタジーすぎだろう!?？ コスプレ? にしても凝ってる。ほ、本物? なわけないだろう！

「お前の属している主人の名を言え。こんなところ

ろでお前達に邪魔をされると迷惑なんぞな。こちらとしてもそれなりの…。まさかおまえ『はぐれ』か? 主人無しならば、その困惑している様も説明がつく」

何やら変質者はぶつぶつと言ってくる。自問自答で納得するな！ 緊張が支配する展開だが、俺はふ

と夢の出来事を思い浮かべていた。あのデートの夢だ。最後の最後、

俺はこの公園の噴水前で夕麻ちゃんに殺される。そう黒い翼を生やした夕麻ちゃんにだ。で、目の前には黒い翼を生やしたお兄さんがいます。：正夢か？

おいおい、美少女が男になってるよ!? そうじゃないよ！この展開がまずいってことだよ！あの夢だと、俺はこの後――。

――●――

ユウスケ side

イツセーを追いかけて走り出した俺はイツセーを見失っていた。先輩は気がついていなかったがイツセーの後を黒い翼を生やした男が空から追いかけていた。あれが夕麻と同じ存在ならイツセーが危ない。自身の勘に頼り、公園へと急いだ。するとイツセーが腹に槍を喰らい膝を突いていた。

「イツセーから離れやがれ！このやろう！」

俺は男に向かい跳び上がり拳を顔面にくれてやった。男は吹き飛んでいった。違和感を覚え、自分の体を見下ろすと俺の体は夢と同じ白い戦士の姿に変わっていた。

「変わった、やっぱりあれは夢じゃなかったんだ」

自分の体が変わった事に驚いていると。男が起き上がった。

「もう一人いたのかセイクリッドギアを宿して

ようと同じはぐれならまとめて殺してやる！」

この展開は夢で見た。まだイツセーは死んではいない。だけど、イツセーを庇いながらこいつを倒

せる自信が俺には無いどうすれば!?!?
ヒュッ。

風切り音が聞こえたと思うと、俺の眼前で爆発が巻き起こる。見れば、男の手元から煙が上がっており。その手からは鮮血が迸っている。

「その子たちに触れないでちょうだい」

俺の隣を女性が通り過ぎていく。紅い髪。後ろ姿でも、すぐに理解できた。夢で見た人だ。顔は夢では覚えてなかったが。でもこの人だと確信した。

「…紅い髪…グレモリー家の者か…」

男が憎々しげに紅い髪の女性を睨みつける。

「リアス・グレモリーよ。ごきげんよう、堕ちた天使さん。この子達にちよっかいを出すなら、容赦しないわ」

リアス・グレモリー。そう彼女は俺達の学校の先輩その人。学園のアイドルの一人だ。

「…ふっ。これはこれは。その者達はそちらの眷属か。この町もそちらの縄張りというわけだな。まあいい。今日の事は詫びよう。だが、下僕は放し飼いにしない事だ。私のような者が散歩がてらに狩ってしまうかも知れんぞ?」

「ご忠告痛み入るわ。この町は私の管轄なの。私の邪魔をしたら、その時は容赦なくやらせてもらうわ」

「その台詞、そっくりそちらへ返そう、グレモリ

一家の次期当主よ。我が名はドーナシック。再び見えない事を願う」

男は黒い翼を羽ばたかせる。体が浮き始め。空へ飛翔していく。空へ浮かんだ男は一度だけ俺とリアス先輩を睨むと、夜の空へ消えていった。

…危機は去ったのか?

少し安堵すると、変身が解けていた。

「イツセー！」

重症のイツセーに駆け寄ると既に意識は無かった。

「安心しなさい気絶しただけよ。確かにこれは少し

ばかり危険な傷ね。仕方ないわ。あなた自宅は何処？

彼を連れて行くわ」

「助かるんですか！」

「助かるわ、まずは安静にしないとね。家に運ぶか

ら教えてくれるかしら？」

「ありがとうございます。なら俺が運びます！」

助かるという言葉で安堵したが急いで運ばないと！

「いえ。転移するから住所を教えるだけでいいわそ

れより貴方にはここに向かつてる彼女を家まで送っ

てくれるかしら」

先輩の事完全に忘れてた。

「じゃあ彼女の事任せるわね」

リアス先輩とイツセーが転移にて消えていった。

後に残ったのはイツセーが流した血痕だけだった。

先輩が到着するまでの時間。どうやって先輩に説

明するか、俺は頭を悩ませるのであった。

第3話 「悪魔」

「ピピッ ピピッ」

カチャツ。

起きるといつも通りの朝だった。あの後、奈美先輩に血痕の説明を求められて。流石に話す訳にも行かないから。動物を相手に猟奇的な行いをしてる奴が居たと説明した。相手は殺した動物を持って逃げたと説明して、先輩を危ないから家まで送り届けた。

イツセーの方は家に帰った後、部屋を覗いたら寝ていたので、なんとかなったのだろう。俺は制服に着替えてリビングに向かった。

「おはよう母さん」

リビングに行くとき母さんが朝食の準備をしていた。

「おはようユウスケ 昨日は遅かったみたいだけどどう

したの？早く起きたらなら文句は無いけれど」

昨日色々あつて帰るのが遅くなったので心配だったのだろう。

「ごめん。昨日不審者が出たから先輩を家まで送り届けたら遅くなったよ」

「ユウスケは心配してないけど、それよりイツセーはど

うしたのよあの子も遅く帰ってきたようだし、さっさと起きてこないと朝食食べる時間無いわよ！」

母さんがイツセーを起こすために2階へ上がっていった。

「イツセー！起きてきなさい！もう学校でしょー！」

「母さん、イツセーは部屋にいるのか？」

「お父さん、玄関に靴があるんだから、帰ってきてるの

よ。もう！夜遅くまで友達の家にいるなんて！その上遅刻なんて許さないわよー！」

父さんもリビングに入ってくる。母さんの階段を上がる足音には怒りを感じる。ドタドタと、いつもより、勢い

先輩が優雅に言う。まるで姉が出来たようだ。

「は、はいー」

イツセーは即座に返事をして、ご飯やおかずをかつこんだ。

「そんな下品な食べ方はダメよ。もつとゆつくりと味わって食しなさい。お母さんの作ってくれる朝食ほど掛け替えのないものはないのよ？」

先輩はイツセーの口元を自分のハンカチで拭いていた。なんだこの状況。

「イ、イツセー……」

恐る恐る父さんがイツセーに話しかけている。かなり動揺しているじゃないか父さん。俺もイツセーも実はそうだよ。

「そ、そのお嬢さんは、ど、どちらの方かな？」

「……あいさつが遅れていたとは……。私としたことが大変失礼しました。これはグレモリー家の恥ですわ。改めてご挨拶させていただきます。お父様、お母様、私はリアス・グレモリーと申します。兵藤一誠さんと兵藤祐介くんと同じ学園に通っております。以後、お見知りおきを」

ニツコリと微笑む先輩。父さんはその笑みに鼻の下を伸ばしていた。

「そ、そうですか……。い、いや、これは参ったなあ、ハハハ！外国の方ですか？に、日本語が堪能ですね」

「はい。父の仕事の関係で、日本にいるのも長いものですから」

おおつ。父さんが陥落した。父さんはチョロいからいいが、隣の母さんはまだ納得できていないご様子だ。

「リアス……さん、でよろしいかしら？」

「はい、お母様」

うな。

俺達の隣には学園のアイドル、グレモリー先輩がいるわけだから。イツセーも先輩の鞆を持って、彼女の従者のように歩いている。

「どうしてあんな奴が…」

「リアスお姉様があのような下品な男と…」

方々から男女問わず悲鳴が上がっている。変態で有名なイツセーが隣に居るのが信じられないようだ。

シヨックで気絶した生徒もいたぐらいだ。校門を抜け、学校の玄関で俺と先輩は別れた。

「後で使いを出すわ。放課後にまた会いましょう」

微笑みながら、そう告げてきた。使い？なんのことだ？よく分からないが俺達はそのまま教室に向かう。途中イツセーと別れた後、奈美先輩と会うと先輩はニマニマと笑っていた。

「貴方達がリアスと登校してくるなんてビッグニュースで驚いたわ、今週の新聞の一面はこれで決まりね後で貴方にはインタビューもするからよろしくね」

どうやって言い訳するか考えても良い案がでないからとりあえずインタビュー受ける時の俺に任せる事にした俺はとりあえず約束してしまった。約束しなければそんな事考えなくて良かったと今になって気がついた。

ー○○○ー

放課後。

「祐介君は居るかい？」

俺は自分を訪ねてきた男子を見た。俺の前に居るのは、この学校一のイケメン王子、木場祐斗だ。爽やかなスマイルで学園女子のハートを射抜いている。ちなみに同学年だ。クラスは違うけど。

「それで、用件は？」

「リアス・グレモリー先輩の使いで来たんだ」

そうか、朝に先輩が言ってた使いとはこいつの事か。
「分かった行こうか」

廊下に出るとイツセーも一緒におり。道中は朝と同じように悲鳴が上がっている。イツセーお前は本当に有名人なんだな俺は情け無いよ……。木場のあとに続きながら向かった先は、校舎の裏手だ。

木々に囲まれた場所には旧校舎と呼ばれる、現在使用されていない建物があった。昔、この学園で使われていた校舎なわけだが、人気がなく、学園七不思議があるぐらいの不気味な佇まいだった。

今度奈美先輩と七不思議ツアアの予定があるので存在は知ってはいたが、来るのは初めてだった。まあ、外見は木造で古いけど、ガラス窓とか一枚も割れていないし、壊れた部分も一目ではわかり辛い。古いだけでそこまで酷いものでもない。

「ここに部長がいるんだよ」

そう告げる木場。部長？先輩の事か。ん？リアス先輩は何か部活に属してたのか？つて、木場もその部員？謎は深まるばかりだ。まあ、木場について行けば先輩に会えるのだろう。

二階建て木造校舎を進み、階段を上る。さらに二階の奥まで歩みを進めた。廊下も綺麗だ。使われていない教室も塵ひとつ落ちていない気がする。古い建物に付き物の、幾重にも張り巡らされた蜘蛛の巣や積もった埃も今の所目にしてない。使われていない筈なのに、掃除をマメにしている証拠だな。そうこうしているうちに目的の場所とやらに着いたようだ。木場の足が、とある教室の前で止まる。俺は戸にかけられたプレートを見て驚いた。

『オカルト研究部』

あのリアス・グレモリー先輩がオカルト研究部というのが驚きだ。

「部長、連れてきました」

引き戸の前から木場が中に確認を取ると

「ええ、入ってちょうだい」

と先輩の声が聞こえてくる。先輩は中にいるようだ。木場が戸を開け、後に続いて室内に入ると、俺達は中の様子に驚いた。室内、至る所に謎の文字が書き込まれていた。床、壁、天井に至るまで見たこともない面妖な文字が記されている。そして、一番特徴的なのは中央の円陣。教室の大半を占める巨大な魔法陣らしきものだ。何やら不気味さと異質さを最大級にまで感じるな。あとは、ソファアールがいくつか。デスクも何台か存在する。おや？気づかなかったが、ソファアールに小柄な女の子が座っていた。

あの子は確か一年生の塔城小猫という名前の子だな。前に新聞部で一年生の特集を組んだ時に見た覚えがある。たしか、ロリ顔、小柄で一見では小学生にしか見えない為。一部の男子に人気が高く。女子の間でも「可愛い！」とマスコツト的な存在だ。黙々と羊羹を食べている。

いつ見ても眠たそうな表情だ。そういや、超がつくほどの無表情な女の子なんだっけ、この子。こちらに気づき、視線を此方に向ける。

「こちら、兵藤一誠さんと兵藤祐介くん」

木場が紹介してくれる。ペコリと下げてる

塔城小猫ちゃん。

「あ、どうも」

俺達も頭を下げた。それを確認すると、再び羊羹に集中している。

「それってもしかして光堂の羊羹かい？」

沈黙に耐えられず、子猫ちゃんの食べてい羊羹についで質問してみる。

「はい、そうです。分かるんですか？」

どうやら当たりのようだ。

「うん、以前新聞部で和菓子の特集を、組んだ際にインタビュー時に食べてるからね。直ぐに分かったよ」

「我らが新聞部は色んな特集を組んでいるけど、以前に食べ物関係を俺が特集していたので、食いしん坊と思う小猫ちゃんとは話が合いそうだ。」

「…なるほど、あの特集は私も見ました。話が合い

そうですね。他にもオススメがあつたら教えて

下さい」

シャワー。

小猫ちゃんと親睦を深めていると部屋の奥から、水が流れる音が。シャワーか？見れば、室内の奥にはシャワーカーテン。カーテンに陰影が映っている。

って、何故に部室にシャワーが!?!?専用のシャワーとか、ここの部費はどうなってるんだ!?!?

キュツ。

水を止める音。

「部長、これを」

ん？カーテンの奥に他に人が居たのか？先輩とは違う女の人の声が聞こえる。カーテンの奥で着替えてるようだ。人を呼んだいて自分はシャワーとは凄い出迎えたな。

「…いやらしい顔」

ぽつりと呟く声に振り向くと小猫ちゃんがイツセーの顔を見ていた。鼻を伸ばしてもはや顔が猿になっていた。これでは兄弟の俺から見ても弁護出来ない。誠に申し訳ない。

ジャー。

カーテンが開く。そこには濡れたままの髪を乾かす先輩の姿。先輩は此方を見かけるなり、微笑む。

「ごめんなさい。昨夜、イツセーのお家にお泊まりして、シャワーをあびなかったから、今汗を流していたの。来客の時間に間に合わなくて申し訳ないわね」
シャワーを浴びていた理由より、部室にシャワーがある方が不思議なんだが。ふと、視線が先輩の後方に移る。もう一人の女性はリアス先輩と同じ三年の姫島朱乃先輩だ。横を見るとイツセーが感動に震えていた。嘘だろお前。感動のライン低すぎないか。

「あらあら。はじめまして、私、姫島朱乃と申します。

どうぞ、以後、お見知りおきを」

ニコニコ顔で丁寧な挨拶をされる。

「こ、これはどうも。兵藤一誠です。こ、こちらこそ、はじめまして！」

「兵藤祐介です。よろしくお願います！」

俺達も挨拶を交わす。それを「うん」と確認するリアス先輩。

「これで全員揃ったわね。イツセー、ユウスケ」

「はい」

「私たち、オカルト研究部は貴方達を歓迎するわ」

「え、ああ、はい」

「どうも」

「悪魔としてね」

ーっ。

唯の人間では無いと思ったがまさか悪魔とはね。どうやら、これから何かが起こりそうだな。

「粗茶です」

「どうも」

ソファーに座る俺たちへ姫島先輩がお茶を入れてくれ

た。イツセーはずっと一飲みした。

「上手いです」

「あらあら。ありがとうございます」

うふふと、嬉しそうに笑う姫島先輩。テーブルを囲んでソファーに座る俺、イツセー、木場、小猫ちゃん、リアス先輩、姫島先輩。全員の視線が俺とイツセーに集まる。口を開くリアス先輩。

「単刀直入に言うわ。私たちは悪魔なの」

正直だな、普通は隠すのでは。

「信じられないって顔ね。まあ、仕方ないわ。でも、

貴方達も昨夜、黒い翼の男を見たでしょ

よう」

あの男も確かに人間では無かった、

「あれは堕天使。元々神に仕えていた天使だったんだ

けれど、邪な感情を持っていた為、地獄に堕ちてしま

った存在。私達悪魔の敵でもあるわ」

堕天使か、なら天使にもそのうち会うのかな。

「私達悪魔は堕天使と太古の昔から争っているわ。冥

界ー人間界で言うところの『地獄』の覇権を巡ってね。

地獄は悪魔と堕天使の領土で二分化しているの。悪魔

は人間と契約して代価をもらい、力を蓄える。堕天使

は人間を操りながら悪魔を滅ぼそうとする。ここに神

の命を受けて悪魔と堕天使を問答無用で倒しに来る天

使も含めると三すくみ。それを大昔から繰り返してい

るのよ」

「いやいや、先輩。いくらなんでもそれはちよつと普

通の男子高校生である俺には難易度の高いお話ですよ。

え？ オカルト研究部ってこういうこと？」

イツセーは信じられないようでこれがオカルト研究部

の議題か何かだと思っっているようだ。

「オカルト研究部は仮の姿よ。私の趣味。本当は私達

悪魔の集まりなの」

どうやらイツセーはまだ信じられないようだ。俺も自信が変身したりしななければ、夢だと信じてなかったよ。

「天野夕麻」

その一言でイツセーの表情が真面目な物に変わった。

その名はイツセーと俺を殺した相手だからな。

「あの日、貴方は天野夕麻と

デートしていたわね？」

「…冗談なら、ここで終わってください。正直、その話をこういう雰囲気です話したく無い」

イツセーにしては珍しくその声には怒気が含まれていた。まあ俺以外誰も覚えておらず、信じてくれなかった話だ、ネタにされたと思っただらイツセーでも流石に怒るか。

「彼女は存在していたわ。確かにね」

ハッキリとリアス先輩は言う。

「まあ、念入りに自分であなたの周囲にいた証拠を消したようだけど」

リアス先輩が指をひと鳴らしすると、姫島先輩が懐から一枚の写真を取り出す。そこに写っていたものを見て、俺達は言葉を失った。

「この子よね？天野夕麻ちゃんって」

そう、写真に写っていたのは奈美先輩と一緒に探しても見つからなかった彼女の姿だった。そして、その彼女の背中には黒い翼が生えている。

「この子は、いえ、これは墮天使。昨夜、貴方達を襲った存在と同質の者よ」

なるほど彼女も墮天使だったのか。

「この墮天使はある目的があってイツセーと接触した。そして、その目的を果たしたから、貴方の周囲から自分の記憶と記録を消させたの」

「目的？」

「そうあなたを殺すため、ユウスケが殺されたのは
ついでのようね」

やはり。

「な、なんで俺がそんな！」

イツセーが動揺しているがしかたない。殺すために
付き合っただからな。

「落ち着いてイツセー。仕方がなかった…いいえ、
運がなかったのでしょうね。殺されない所持者もい
るわけだし…」

「運がなかったって！」

自分が殺されたという話に困惑しているようだ。

「あの日、あなたは彼女とデートして、最後にあの
公園で光の槍で殺されたのよ」

「でも、俺生きてるっすよ！ だいたい、なんで俺
が狙われるんだよ」

そう、俺達が生きている事、何故イツセーが狙われ
たのかそれが、ずっと謎だった。

「彼女がイツセーに近づいた理由は貴方の身にとあ
る物騒なモノが付いているかいないか調査するため
だったの。きつと反応が曖昧だったんでしょうね。
だから、時間をかけてゆっくりと調べた。そして、
確信した。貴方がセイクリッド・ギアを身に宿す存
在だと」

その単語に聞き覚えがあった。

「ごめんね。彼が私達にとって危険因子だったから、
始末させてもらったわ。貴方はいいでね。恨むなら、
自分の弱さとその身にセイクリッド・ギアを宿させ
た神を恨んでちょうだいね。」

あの墮天使は確かにそういつていた。イツセーの中
にそのセイクリッド・ギアがあるのか？ 木場が口を

開いた。

「セイクリッド・ギアとは、特定の人間の身に宿る、規格外の力。たとえば、歴史上に残る人物の多くがそのセイクリッド・ギア所有者だと言われているんだ。セイクリッド・ギアの力で歴史に名を残した」

「現在でも体にセイクリッド・ギアを宿す人々はいるのよ。世界的に活躍する方々がいらっしやるでしょう？あの方々の多くも体にセイクリッド・ギアを有しているのです」

木場が続いて姫島先輩も説明してくれた。リアス先輩がさらに続く。

「大半は人間社会規模でしか機能しないものばかり。

ところが、中には私達悪魔や堕天使の存在を脅かす程の力を持ったセイクリッド・ギアがあるの。イツセー、手を上にかざしてちょうだい」

イツセーが意味が分からず困惑している。

「いいから、早く」

リアス先輩が急かす。イツセーは左腕を上にあげた。

「目を閉じて、貴方の中で一番強いと感じる何かを心の中で想像してみてちょうだい」

「い、一番強い存在…。ド、ドラグ・ソボール空孫悟かな…」

「では、それを想像して、その人物が一番強く見える姿を思い浮かべるのよ」

空孫悟ならドラゴン波かね。

「ゆっくりと腕を下げて、その場で立ち上がって」

イツセーはソファーから腰をあげた。

「そして、その人物の一番強く見える姿を真似るの。強くよ？軽くじゃダメ」

皆が見てるまえてドラゴン波は恥ずかしいな。

「ほら、早くしなさい」

イツセーも覚悟を決めたようだな。

「ドラゴン波！」

両手を上下に揃えて前へ突き出す格好のまま、
声を張上げる。

「さあ、目を開けて。この魔力漂う空間でなら、
セイクリッド・ギアもこれで容易に発現するはず」
カッ！

イツセーの左腕が光だす。まさか、ドラゴン波出
せるのか？光は次第に形を成していき、左腕を覆
つていく。そして、光が止んだ時、イツセーの左
腕には赤色の籠手らしきものが装着されていた。
見た感じはコスプレアイテムだ。手の甲の部分に
は丸い宝玉の様なものが嵌め込まれている。

「な、なんじゃ、こりゃあああー！」

イツセーが籠手の出現に驚いているな。

「それがセイクリッド・ギア。貴方のものよ。一
度ちゃんとした発現ができれば、あとはあなたの
意志でどこにいても発動可能になるわ」

あれが、イツセーのセイクリッド・ギア。

「あなたはそのセイクリッド・ギアを危険視され
て、墮天使―天野夕麻に殺されたの」

「それとユウスケが変身したのはセイクリッド・
ギアではないわ貴方が身につけたベルトの力ね。
あれは部活の表向きの研究材料に取り寄せたもの
だけど、セイクリッド・ギアとは異なる力があつ
た、その力を危惧されて貴方も殺されたのよ」

それが殺された理由か。なら今生きているのは…。
「瀕死のなか、イツセーは私を呼んだのよ。」

「この紙から私を召喚してね」

リアス先輩が取り出したのは一枚のチラシ。

『あなたの願いをかなえます』

そんな謳い文句と奇妙な魔方陣の描かれたチラシだ。このチラシの魔方陣は床の巨大な魔方陣と同じ模様だ。

「これ、私達が配っているチラシなのよ。魔方陣は、私達悪魔を召喚するためのもの。最近は魔方陣を描くまでして悪魔を呼び寄せる人はいないから、こうしてチラシとして、悪魔を召喚しそうな人間に配っているのよ。お得な簡易版魔方陣。あの日、たまたま私達が使役している使い魔が人間に化けて繁華街でチラシを配っていたの。それをイツセーが手にした。そして、墮天使に攻撃されたイツセーは死の間際に私を呼んだの。私を呼ぶほど願いが強かったんでしょね。普段なら眷属の朱乃たちが呼ばれているはずなだけけれど」

「召喚された私は貴方達を見て、直ぐにセイクリッド所有者で墮天使に害されたのだと察したわ、問題はここから。イツセーとユウスケは死ぬ寸前だった。墮天使の光の槍に身を貫かれれば、悪魔じゃなくても人間なら即死。イツセーやユウスケもそんな感じだったの。そこで私は貴方達の命を救うことを選んだ」

悪魔の力で俺達は生き返らせて貰えたのか。
「悪魔としてね。イツセー、ユウスケ、貴方達は私、リアス・グレモリーの眷属として生まれ変わったわ。私の下僕の悪魔として」
バツ！

その瞬間、俺とイツセー以外の人間の背中から翼が生える。墮天使達の黒い翼とは違う、コウモリのような翼だ。
バツ。

俺の背中からも何かの感触が生まれる。背中越しに見てみれば、俺の背中からもコウモリの翼が生えていた。隣を見たらイツセーの背中にも翼が生えていた。

「改めて紹介するわね。祐斗」

リアス先輩に名を呼ばれ、木場は俺達に向けてスマイルをする。

「僕は木場祐斗。君達と同じ二年生ってことはわかってるよね。えーと、僕も悪魔です。よろしく」

「…一年生。…塔城小猫です。よろしくお願いします。…悪魔です」

小さく頭を下げる塔城小猫ちゃん。

「三年生、姫島朱乃ですわ。一応、研究部の副部長も兼任しております。今後もよろしくお願いします。…これも悪魔ですわ。うふふ」

礼儀正しく姫島先輩は深く頭を下げる。最後にリアス先輩。紅い髪を揺らしながら堂々と言う。

「そして、私が彼らの主であり、悪魔でもあるグレモリー家のリアス・グレモリーよ。家の爵位は公爵。よろしくねイツセー、ユウスケ」
貴族様とききましたか、どうやら、俺はとんでもないことになったようだな。

第4話「依頼」

俺は深夜、チャリを全力で漕いでいた。

理由は一つ。簡易魔方阵のチラシ配りだ。

欲のある人間がこのチラシを手にとって

願いを込めると、俺たち悪魔が

ババンと召喚される仕組みだ。

手に持った携帯機器を見る。

モニターには周囲のマップが表示され、

赤い点が点滅している。

そこにチャリで向かう。

点滅していた場所、欲のある人間の家に着くと、

ポストへチラシを投函する。

そして、再び近くの点滅している箇所へ移動。

これを繰り返し返す。

あの日俺達が悪魔だと認識した日に時は遡る。

イツセーがセイクリッド・ギア所有者であり、

夕麻が墮天使であり、

リアス先輩が悪魔だとわかった日だ。

ちなみに悪魔の翼は、あのあとすぐにしまった。

日常生活では邪魔だからな。

慣れれば空も飛べるらしいが、

まだ練習すらしてないや。

「私の元に来ればあなたの新たな生き方も

華やかになるかもしれないのよ？」

悪魔になったことで頭を抱えていたイツセーに、

リアス先輩はウインクしながら言ってきた。

どうにも俺たちは、リアス先輩に

悪魔として転生させられた代わりに、

彼女の下僕として生きていけないと

いけなくなったらしい。

人間から悪魔に生まれ変わった者は、
必然的に転生してくれた悪魔の
下僕として生きねばならない。という、
悪魔のルールがあるらしい。

「でもね、悪魔には階級があるの。

爵位ってというのがね。私も持っているわ。

これは生まれや育ちも関係するけど、
成り上がりの悪魔だっている。

最初は皆、素人だったわ」

「どこぞの学校のCMみたいな

ことを言わないで下さい！

つか、本当ですか？いまいち信用できない」

イツセーは信じられないと文句を垂れている。

まあ俺も命を救われた身だが、

下僕になれと言われて

はいそうですかと返事は出来ないな。

不機嫌なイツセーにリアス先輩

が何か耳打ちしている。

「どうやってですか？？」

だらしない顔をしているあたり

ハーレムが作れると言われたのだろう。

「純粋な悪魔は昔の戦争で多くが

なくなってしまったのよ。

そのため、悪魔は必然的に

下僕を集めるようになったの。

まあ、以前のような軍勢を率いる程の力

も威厳も消失してしまっただけだ。

それでも新しい悪魔を増やさないといけなくなった。

悪魔にも人間同様に性別はあるから

悪魔の男女の間に子供は生まれるわ。

それでも自然出生で元の数に戻るには

相当な時間がかかってしまうの。

悪魔という存在は極端に出産率が低いから。

それでは墮天使に対応できない。

そこで素質のありそうな人間を

悪魔に引き込むことにしたわけ。下僕としてね」

「やっぱり下僕じゃないですか」

「話は最後まで聞けってイツセー」

「そう残念な顔しないで。話はここから。」

ただそれでは下僕を増やすだけで力のありそうな悪魔を再び存在させることにはならない。

だから、悪魔は新しい制度を取り入れたわ。

力のある転生者つまり、人間から

悪魔になった者にもチャンスを与える

ようになったのよ。転生者でも爵位を授けようと。

そのせいもあって、世間には割と悪魔は多いわ。

私達みたいに人間社会に潜り込んで

行動している悪魔も少なくないしね。

貴方達も知らず知らずのうちに悪魔と町中で

すれ違っていたと思うわ」

「それならこの学校に他にも悪魔がいるんですか」

「悪魔ってそんなに身近だったんすか！」

「ええ。もつとも、認知できる者

とできない者がいるわ。

欲望が強い者や悪魔の手でも

借りたいほど困っている人間は

悪魔を強く認識しやすいわね。

そういう人たちに魔方陣つき

のチラシを配ると私達は召喚されやすいのよ。

悪魔を認知できても、

先程のイツセーのように

私達の存在を信じない者も多いけれど、

魔力を見せれば大抵は信じるわ」

説明を聞いてようやく死に際の

イツセーの欲望が強かったのかわかるな。

悪魔の世界も政治など大変なんだな。

「じゃ、じゃあ！やり方次第では俺も爵位を!!?」

「ええ。不可能じゃないわ。もちろん、

それ相応の努力と年月がかかるんでしようけど」

「うおおおおおおおおおおおおおッツ!!?」

うるさ！ 叫びすぎだ！

そう簡単ではないだろう爵位持つには

何かしらの成果を出さないといけないだろうし。

何十年掛かるとおもってんだよ。

「マジか！俺が！俺がハーレムを作れる!!?」

エ、エツチなこととしていいんですよね!!?」

すぐにその発想に行き着くのは流石だな。

「そうね。あなたの下僕に

ならいいんじゃないかしら」

「リアス先輩そこはせめて叱って下さい」

煩惱全開だな。

「あら、悪魔にとつて欲望に忠実なのは大事なことよ」

そんなものか。イツセーには悪魔がお似合いなようで。

そういえば俺の欲望ってなんだろう。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!?」

悪魔、最高じゃねえか！何、これ！

何、これ！チョーテンション上がってきたよ！

今なら秘蔵のエロ本も捨てられ」

そこまで言つて。イツセーが考え込んだ。

「いや、エロ本はダメだ。アレはダメだ。

俺の宝だ。お袋に見つかるまではやっていける！

それとこれは別だ。うん、別だ」

部屋のエロ本なら既に母さんに見つかつてるがな。

「フフ。面白いわ、この子」

面白いか!?!?この子。

「あらあら。部長が先程おっしゃって
おられた通りですわね。」

『おバカな弟ができたかも』だなんて」

おバカな弟は同感ですね。

うふふと姫島先輩もにこやかに笑う。

「というわけで、イツセー、ユウスケ。

私の下僕ということでもいいわね？」

大丈夫、実力があるならいずれ頭角を表すわ。

そして、爵位も貰えるかもしれないわ」

「はいリアス先輩」

「違うわ。私のことは『部長』と呼ぶこと」

「部長ですか? 『お姉さま』じゃダメですか?」

リアス先輩は真剣に悩んだ後、首を横に振った。

「うーん。それも素敵だけれど、

私はこの学校を中心に活動しているから、

やはり部長の方がしっくりくるわ。

一応、オカルト研究部だから。

その呼び名でみんなも呼んでくれているしね」

「わかりました! では、部長!

俺に『悪魔』を教えて下さい!」

イツセーの言葉にリアス部長は小悪魔な笑みを浮かべる。
めっちゃ嬉しそうだ。

「自分は新聞部に所属しているので、

ここにはイツセーの手伝いという形で来ます。

なので呼び名は今まで通りリアス先輩でお願いします」

俺にとつての部長は奈美先輩だしな。

「分かったわそれでも構わないけど、

オカルト研究部の活動にはキッチンと出るのよ」

「わかりました!」

イツセーの方を見るとウズウズしていた。

「ハーレム王に俺はなる」

最低な宣言だな。

どこぞの海賊のセリフをパクりおつて。

そして、悪魔としての人生？

悪魔生？を開始して数日。

俺とイツセーは夜中、

チャリをひたすら漕いでいた。

あれから、俺はリアス先輩の下僕となり、

日々汗を流しています。

ここだけ、聞いたら運動部見たいだな。

まず、オカルト研究部の集まりは旧校舎の部室。

そして時間は深夜。

これは夜の方が悪魔としての

力が発揮できるからだ。

俺としても新聞部の活動後に来るので、

都合がいい。以前から俺の体に訪れていた

得体の知れない力は悪魔のものだった。

悪魔は闇の世界において力が増大するそうだと

だが、朝に弱くなったのも

悪魔になったせいらしい。

悪魔にとつて光は毒。光の力が強ければ強いほど、

体に悪いそうだと。

光を武器にする墮天使、天使は天敵であつたら

逃げろと教えられた。

逃げられる気はしないがな。

慣れれば太陽の日差しぐらいは平気になるらしい。

朝に弱いのも悪魔に転生して

朝の光に体が慣れていないから。

しばらくすれば、それにも慣れるらしい。

俺達が悪魔になって数日の間放置されていたのも、自分の変化に自分で気づいて欲しかったらしい。

頃合いを見て俺達を呼び寄せ、真相を話す予定だったそうだ。

それが俺と奈美先輩が夕麻の調査をしていた日で、イツセーが襲われた日だったから、幸いだった。

何はともあれ、俺達は悪魔になって日が浅いので悪魔社会の仕組みを勉強する必要がある。

まずは、下積として自転車でのチラシ配りを夜中にやっているわけだ。

夜中に働くと両親が、心配する筈だが、リアス先輩曰く、「あの日、貴方達の〆〆両親に

お会いしたときにその辺のことは全てクリアしておいたわ」と笑顔で返された。

チラシ配りが終わって帰宅しても怒らないどころか。

「おー、〆〆苦労さん」と言われるだけだ。悪魔の魔力は万能なんだな。

リアス先輩との話で一番驚いたのは学園に及ぼしている権力だ。

俺達に通っている。駒王学園は部長の領土らしく、学園の裏の支配者だ。

学園のお偉いさんも悪魔と繋がりがあリグレモリー家には頭が上がらないそうだ。

あの学園はリアス先輩の私有物と言えるだろう。だから夜中に学園内に

フリーパスで入れるのだけだ。さて話を仕事に戻すか。

リアス・グレモリーの眷属を呼び出す魔方陣が描かれたチラシを

リアス先輩から頂いたデバイスで選ばれた

家のポストに投函する毎日。

このデバイスは悪魔の科学が生んだ秘密道具らしい。まさか、未来ではなく現代で

秘密道具を手にする日がくるとは。

最近の携帯ゲーム機のような形だ。

モニター、ボタンがあり。

タッチパネル形式で、タッチペンもついている。

頂いた説明書を読みながらではあるが、

機器を操っていた。

モニターには駒王町が移っており、

リアス先輩の『縄張り』マップが表示される。

悪魔ごとに人間界で活動できる範囲が決まっており、

その領域内ではしか仕事ができない。まるでヤクザだな。

仕事とはつまり、召喚され、契約を結んで、

相手の願いを叶えることだ。

代償として、それ相応の代償を頂く。

代償はお金だったり、物だったり、時には命を頂く。

そこは人間がイメージする悪魔像そのものだった。

最近はお金を払ってまで強い願いを請う契約者はいないようだけど。

いたとしても代償が願いと釣り合わず破断となる。

リアス先輩も「人間の価値は平等じゃないわ」と言っていた。

厳しいもんだ。破断となる例を聞いてみたが、

「お金持ちになりたい」という願いに対する代償が『命』となり

大量の金が天から降ってきたところで死ぬ事になるらしい。

触れもせずに死ぬのは嫌だと破談になったそうだ。

他に「ハーレムを作りたい」という願いに対する

代償が『命』となり

美女が視界に写った瞬間に死ぬという酷い結果だったそうだ。

この例題が同一人物の願いと聞いたときは本当に人の価値は

平等でないと感じたよ。

で、モニターのマップで点滅している場所が欲張りな人間が

住む家だ。俺たちは手分けして家へ移動してチラシを配っている。点滅が消えるまで俺達のチャリ移動は終わらねえ。悪魔となった為、他の人間、特に警察にも認知されなくなった。最初はビビったが、どういう原理かはわからんが、仕事中は人間に存在を認識されないようだ。だけど、毎日毎日チラシを配っているのに、モニターの点滅は減ることが無い。たまには減ってもいいんだぜ。それだけ人間が欲深いってことだな。まあ身内に性欲の権化と呼べる存在もいるしそんなもんだらう。一度願えば、それが癖になり再び悪魔を呼ぶそうだし、人間楽を覚えたらだめになっていく一方だね。契約は基本夜間限定。悪魔が行動を許されている時間は夜だけらしい。昼間は天使の時間帯のようだ。この町に長く住んでいるが、そんなことがあったとは驚きだ。そのうち奈美先輩辺りが、興味を持つて悪魔か天使を召喚しようといわないか心配だよ。チラシは使い捨てだから使用されたら、再びポストに投函しなければならぬ。つまり、この下積み作業には終わりが無い！契約時に新しいチラシを渡せばいいのにと思うが。俺たちへの貴重な体験としてやらせてるのだろうけど。まあ、そのおかげでリアス先輩達は悪魔として活動出来る仕事も尽きない。悪魔としてのポイントを高めている。契約を取って願いを多く叶えれば、魔王様から評価されるそうだし、仕事をこなせば、評価され魔王様から爵位が貰えるという事だ。それを聞いたイツセーは雄たけびを上げながら。チラシを配っているようだ、離れたこつちにまで、微かに聞こえてくる。認識阻害されていて良かったと思ったよ。でないと、警察に職質されるところだ。この下積みもいつまでやればいいのかやら。

ある日の放課後俺はオカルト研究部の部室に向かっていた。

今日は珍しく新聞部の活動が休みだからだ、

何でも奈美先輩に用事があり。他の部員も都合が合わないので、今日の活動は休むようだ。

そういえばあのチラシ配りは元々リアス先輩の

使い魔が行っていたそうだ。

使役しているネズミやコウモリが人間に化けて

昼夜問わず行っていたそうだ。

俺達にわざわざやらせていたのは悪魔の仕事を一から教え込むためだそうだ。

それと奈美先輩や親しい友人には俺の事は話していない。

話したら信じるだろうが、首を突っ込んで、危険な目に会うのが眼に見えているからだ。俺だって一度死んでいる。

先輩を巻き込むわけにはいかない。

途中でイツセーと会い一緒に部室に向かう。

「失礼します」「入りまーす」

俺達はそう言って部室に入ってみると、

既に俺達以外のメンバーがいた。俺達が最後か。

室内は暗く。窓には暗幕がかけられており、

完全に光をシャットダウンしている。

明りは床に蝋燭が点々と置かれているだけだった。

いかにもな雰囲気だな。

「来たわね」

俺達を確認するとリアス先輩は朱乃さんに指示を送る。

「はい、部長。まずはイツセーくん、魔方陣の中央へ来て下さい」

イツセーが朱乃さんに手招きされ魔方陣の中央に立つ。

「イツセー、ユウスケ、貴方達のチラシ配りも終わりよ。

よく頑張ったわね」

リアス先輩が笑顔で褒めてくれた。ようやく終わりか。

「改めて、貴方達にも悪魔としての仕事を

本格的に始動してもらおうわ」

「俺達も契約取りを行うんですね」「おお！俺も契約取りですか！」

「ええ、そうよ。もちろん、初めてだから、レベルの低い

契約内容からだけれど。小猫に予約契約が二件入ってしまったの。両方行くのは難しいから、片方はイツセーに任せるわ」

「…よろしくお願いします」

ペコリと頭を下げる小猫ちゃん。

イツセーは小猫ちゃんの代わりか、大丈夫かそれは。

可愛い女の子を召喚したつもりが変態が召喚されるのは色々問題があるような。

俺を含めた他の部員が魔方陣の外に出ている。

魔方陣の中央で朱乃さんが詠唱を始めた。

すると、魔方陣が青白く淡い光を発している。

「あ、あの…」

「黙っていて、イツセー。朱乃は、今貴方の刻印を魔方陣に読み込ませているところなの」

とリアス先輩がイツセーに注意をした。

この部屋の床に書き込まれた魔方陣は「グレモリー」を表すものらしい。俺達、リアス先輩の眷属悪魔にとってこの魔方陣は家紋の

ようなものだとして前に教えられた。つまり召喚する者、

契約を結びたい者にとって俺達を表す記号となる。

魔力の運用もこの魔方陣が関係してくるらしく。

木場達眷属悪魔の体にはこの魔方陣が大小各所に書き込まれており、

魔力の発動と共に機能すると説明された。

なら、俺も魔方陣はを体に刻めば、魔法が使えるようになるらしい。だが、悪魔のなりたての頃は先ずは魔力のコントロールを学ばないと

いけないらしく、俺とイツセーが魔方陣を絡めた魔法をえるのは当分先になりそうだ。

「イツセー、手のひらをこちらに出してちょうだい」

リアス先輩に言われるまま、イツセーは左手の手のひらをリアス先輩に向ける。すると、リアス先輩はイツセーの手のひらに指先で何かをなぞっていた。

すると、イツセーの手のひらが光出した。よく見ると、イツセーの手に青白く発光する円形の魔方陣が出現していた。

「これは転移用の魔方陣を通して依頼者の元へ瞬間移動する為の物よ。そして、契約が終わるとこの部屋に戻してくれるようになるほど。これでチャリ移動ともおさらばできるな。」

「朱乃、準備はいい?」

「はい、部長」

朱乃さんが魔方陣から出てくる。

「さあ、中央に立って」

促されて、イツセーが魔方陣の中央に立った。すると、いっそう魔方陣の光が増してくる。

「魔方陣が依頼者に反応しているわ。これからその場所に飛ぶの。到着後のマニュアルも大丈夫よね?」

「はい!」

「いい返事ね。じゃあ、行ってきなさい!」

魔方陣の光が更に強まり。光がイツセーの体を包み込む。

俺はあまりの眩しさに目をつむった。

光が収まったが、何故かまだイツセーは魔方陣の上にいる。

あれ? 依頼者の所へ転移するんじゃないのか?

見れば、リアス先輩が額に手をあて、困っていた。

朱乃さんは「あらあら」と残念そうな表情。

木場もため息をついている。

もしかして?

「イツセー」

「はい」

「残念だけど、あなた、魔法陣を介して依頼者の元へ転移できないみたいなの」

怪訝な表情を浮かべるイツセーにリアス先輩が説明する。

「魔方陣は一定の魔力が必要なわけだけど…。これはそんなに高い魔力を有するものではないわ。いいえ、むしろ悪魔なら誰でもできるはず。それこそ子供でもね。魔方陣による転移は初歩の初歩だもの」

つまりイツセーは。

「つまり、イツセー、あなたの魔力が子供以下。いえ、低レベルすぎて、魔方陣が反応しないのよ」

「な、なんじゃそりやああああ?!」

イツセーが絶句している。

「…無様」

小猫ちゃんが無表情でぼそりと呟く。

「あらあら。困りましたわねえ。どうします、部長」

朱乃さんも困り顔で部長に訪ねている。

しばし考え込んだリアス先輩は、はつきりと言い渡す。

「依頼者がいる以上、待たせるわけにはいかないわ。イツセー」

「はい!」

「前代未聞だけれど、足で直接現場へ向かってちょうだい」

「足?!」

驚愕するイツセー。俺は先ほどから笑いをこらえるのに精一杯だった。

「ええ、チラシ配りと同様に移動して、依頼者宅へ赴くのよ。

仕方ないわ。魔力がないんだもの。足りないものは

他の部分で補いなさい」

「チャリですか?! チャリでお宅訪問?!」

そんな悪魔が存在するんですか?!」

ビシッ。

無言で小猫ちゃんがイツセーを指差す。

「ほら、行きなさい! 契約を取るのが悪魔のお仕事!

人間を待たせてはダメよ!」

急かすリアス先輩。その顔は真剣だ。

「うわあああん！がんばりますうううう！」

そう言つてイツセーは走つて部屋を出ていく。

「さあ次はユウスケね、貴方は魔力があるといいんだけど」
こればかりは願うしかない。

悪魔だから神に頼むのはおかしいが。

「さあ魔方陣の中央に立つて手を向けなさい」

イツセーと同じ手順で魔方陣を手のひらに書き込んでいく。

「これで、準備は完了よ、あとは転移するだけ。」

貴方の依頼人は新規の方だけどマニュアル通りに
進めれば問題ないわ。では行つてきなさい」

「はい」

魔方陣の光が俺を包み込んだ、眩しさに目をつむり
恐る恐る目を開けると目の前には奈美先輩が立っていた。

「ユウスケ？」

マジかよ、神様

ー○●○ー

どうやら俺がチラシ配りをした家の中に奈美先輩の家があつたよ
うで

チラシを使つて悪魔の召喚を試したようだ。

巻き込みたくないと思つていたが、まさか召喚されるとは。

「それで貴方が悪魔になつたと」

奈美先輩には全てを白状した。

夕麻が堕天使で、俺は一度殺され悪魔に転生したこと。

謎のベルトを身に着け戦士に変身したこと。

「なるほどね、それでいくら調べてもわからなかつたのね」

「すみません。黙つていて」

知られてしまったことは仕方ない。素直に謝ろう。

「別に気にしないわ。私を巻き込みたくなかつたんでしょ

でも、一っだけ聞かせて悪魔になつて後悔はしてないの？」

奈美先輩が優しい声で聞いてくる。

「悪魔になつたことに後悔はありません、ただ、

墮天使相手に何もできずにイツセーを殺されたのは後悔しています」

「相手は人間ではなかったのよ。負けて当然じゃない」
相手が墮天使だったから負けて当然。俺はそう思わない。

「いえ、あの時、俺には対抗するための力がありました
戦士の姿に変身した時俺の体が白かったんです。

でも俺がイメージで見たのは赤だった」

「多分赤じゃないといけなかったんですそれなら

あいつにも勝てたはずなのに」

おれはずつと気にしていた。赤ではなく、白だったことに。

「そう、ずつと抱えていたのね。でもそれは過ぎたことよ。

今は悪魔なんだから。もしまたその墮天使と戦うことになったら
今度こそ思い切りぶん殴ってやりなさい」

「どうやら奈美先輩なりに励ましてくれてるようだ。

「ありがとうございます。ならばまずは先輩との契約を結びましょう。
先輩の願いは何ですか。」

「そんな事決まっているじゃない。特ダネを探すのを手伝いなさい。

この町にこんな不可思議なことにあふれているのなら

悪魔側からのネタの提供こそが私の願いよ」

「分かりました。ならば代価はどうやらお金のようなですね」

悪魔専用のけいたいききで調べた結果を先輩に伝える。

「いいわ、なら明日から放課後は私と一緒に街の探索よ

ユウスケと専属の契約を結ぶわユウスケのバイト代とおもえば安いものよ」

こうしておれは奈美先輩との契約を無事に取することに成功した。

—○●○—

「……………」

次の日の放課後。

リアス先輩は怒っていた。眉を吊り上げて、無言で黙り込む。

イツセーはリアス先輩の前に立ち、顔面蒼白となっていた。

「どうやらイツセーの方は契約を取ってこれなかったどころか

「一晩遊んで終えたらしい。」

「前代未聞だよ」

そんなことを言っただけで木場は苦笑していた。

「…イツセー」

低く怖い声音だ。

「はい！」

「依頼者と漫画の事を語って、それからどうしたのかしら？ 契約は？」

「け、契約は破談です…。あ、朝まで依頼者の森沢さんと、

とある漫画のバトルごっこをして過ごしてました！」

「バトルごっこ？」

「は、はい！ま、漫画のキャラを演じて、互いに空想の戦いを

繰り返す行為です！」

何を真面目に説明してんだか

「じ、自分でも高校生として恥ずかしい いえ、いち悪魔としても

恥ずかしいと思えてなりません！は、反省してます！

すみませんでした！」

イツセーは謝罪と共に深く頭を下げる。

朝まで本当になにやっただよ。

「…契約後、例のチラシにアンケートを書いてもらうことに

なっているの。依頼者の方に『悪魔との契約はいかがでしたか？』

って。チラシに書かれたアンケートはこの紙に表示される

わけだけど…」

リアス先輩は文面が見えるようにこちらに向けて見せた。

「…『楽しかった。こんなに楽しかったのは初めてです。』

イツセーくんとはまた会いたいです。次はいい契約を

したいと思います』…。これ、依頼者からのアンケートよ」

めっさ誉められてるな。

「こんなアンケート、初めてだわ。ちよつと、私もどうしていいか

分からなかったの。だから、少し反応に困ってしかめっ面になって

しまっていたでしょうね」

怒ってはいないようだが契約が取れなかったのは事実だ。

「悪魔にとって大切なことは召喚してくれた人間との確実な契約よ。そして代価をもらう。そうやって悪魔は長い間存在してきたの。：今回のことは、私も初めてでどうしたらいいかわからないわ。悪魔としては失格なんでしょうけれど、依頼者は喜んでくれた：」

困惑顔のリアス先輩だったが、ふつと笑みを漏らす。

「でも面白いわ。それだけは確実ね。イツセー、あなたは

前代未聞尽くめだけれど、とても面白い子ね。

意外性ナンバー1の悪魔なのかもしれないわ。けれど、基本のことは守ってね。依頼者と契約を結び、願いを叶え、代価をもらう。いいわね？」

「はい！がんばります！」

許されてよかったなイツセー。

「ユウスケは無事に契約を取ってきたわね

それに専属契約したから毎日同じ依頼者の願いを叶えることになったわ」

「いいなあ ユウスケはもう契約取れたのかよ！

くっそー次は絶対契約取ってやる」

イツセーのやる気が上がったようだな。

ー○○ー

イツセーside

気合いを入れた日の夜。

再び俺の仕事が始まる。

ユウスケは先に依頼者の元へ向かった。

相手はあの奈美先輩らしい、毎日美女の家に行くなんてなんて羨ましいんだ。

俺は深夜にチャリを飛ばして依頼者の元へ。

随分飛ばしてきたもんだが、三十分もかかってしまった。

依頼者はキレてないよな？ドアの前に立ち、呼び鈴を鳴らす悪魔ってのは本当に空しい。

俺もユウスケみたいに魔方陣で召喚されたい。
少ししてインターフォンから反応がくる。

『開いています。どうぞによ』

と野太い声。男性か。ん？『によ』つつつたか？

いや俺の聞き違いだろう。俺も女性に召喚されたいぜ。

ドアを開け、玄関で靴を脱ぎ恐る恐る中を進む。

ガチャリと部屋の扉を開けた瞬間、俺は絶句した。

「いらっしやいによ」

それは圧倒的な巨体だった。そして、圧倒的な存在感だった。
鍛え抜かれた筋骨隆々な男が。ゴスロリ衣装を着込んでいる。
よくみれば、ボタンが引きちぎれそう。服の端々も

いまにも破れそうに悲鳴をあげている。

何よりも双眸が凄まじい殺意を向けてきている。

にもかかわらず、瞳は純粹無垢な輝きを放っていた。

いや、何よりも頭部だ。ネコミミを付けている。

頬に一筋の汗が流れる。手は緊張から小刻みに震えていた。

男ではない。漢字の漢と書いて漢だろう。

死地に足を突っ込んでいる危機感。

なんとなく直感だった。理不尽な死が自分を襲おうとしている。

「あ、あの…あ、悪魔を…グレモリーの眷属を召喚しましたか？」

恐る恐る尋ねた。

カツ！

そんな効果音を立てるように漢の目が光る。

俺達の間の空間が鬨気で歪んだような気がした。

殺されるツツ！

俺は咄嗟に身を守るような体勢になっていた。

「そうだによ。お願いがあつて、悪魔さんと呼んだによ」

野太い声から不可解な言語が飛び出す。

語尾に「によ」！

バカな…そんなことが許されるのか？

「ミルたんを魔法少女にしてほしいによ」

「異世界にでも転移してくれ」

俺は即答した。

無理だって。そりゃ無理だって。マジで。

願いが規格外過ぎるぞ。

ミルたん!? ミルたんってなんだ!?

漢の言動が俺を混乱させる。

そのからだなら異世界でも生き抜けるよ!魔王だって倒せるよ!

「それはもう試したによ」

「試したのかよ!」

どうやってだよ!

「でも無理だったによ。ミルたんに魔法の力をくれるものは

なかったによ」

「いや、ある意味、今の状況が魔法的だけどさ…」

「もう、こうなったら宿敵の悪魔さんに頼み込むしかないによ」

宿敵扱いされてる。願い叶えられてもそのあと殺されるんじや。

「悪魔さんツツ!」

ミルたんが発する音量で部屋全体が震える。

なにこれ!?!音魔法!?!

「ミルたんにファンタジーなパワーをくださいによおおッ!」

泣きながら叫ぶ。

「いえ、もう既に俺よりファンタジーな存在ですよ!」

ちくしよ!

俺の依頼者は変態ばかりか!?!どういうことだよ、これ!?!

「ミルたん!落ち着いて、俺で良かったら相談乗るから!」

とりあえず、この漢を落ち着かせて話でも聞いてやらねば

ならない気がした。

ミルたんは涙を拭うと強面に満面の笑みを浮かべた。

「じゃあ、一緒に『魔法少女ミルキースパイラル7オルタナティブ』

をみるによ。そこから始まる魔法もあるによ」

俺の長い夜が始まった。

第5話「聖女」

俺は今日の奈美先輩との依頼の為に、部室に向かっていた。時刻は既に夕方だ、今日は休日の為人通りは少ない。

「まさか、依頼であんな珍妙な生物に会うとは、思わなかったぜ」昨夜の奈美先輩との依頼は駒王町の池に夜な夜な出現する人魚を見つける事だった。

認識障害をしていた悪魔関係者だと思った俺は先輩を連れて、件の池まで行ってきた。そこでは、

美しい歌声が聞こえてきたので、期待して近づいた。だが、そこにいたのは人間の足が生えたマグロという意味不明な生物だった。

誰だよ、こいつを見て人魚って言ったやつは。出てこい！

奈美先輩も困惑しており、現実を受け入れられなかった。

何故マグロが池にいるのかわからなかったが、どうやらこのマグロは同じ学校の阿部清芽先輩の従えている魔獣だったみたいだ。

阿部先輩はテニス部の部長だが、代々魔獣使いの家系らしく。他にも雪女やデュラハン等を従えているらしい。

何故マグロが池にいるか聞いたところ。広い場所で思い切り歌いたかったらしい。

このマグロはエラ呼吸しかできず、水中でしか歌えない為、ここに来たそうだ。

どうやってここまで来たのかは謎だが、人魚の夢を壊す形で以来の方は達成した。

イツセーがあの人魚に会う日が来たら、さぞがっかりするだろう。

明日の依頼は夜の町に現れる。猫人間を探すらしい。話を聞くに見た目は猫耳を付けたゴスロリらしく。

だがその体は筋骨隆々で強者の風格を漂わせているのだと。その組み合わせが一緒になる姿は想像できないが、

多分悪魔だろう。

今夜あたり、リアス先輩に聞いてみるか。

「はわうー！」

突然の音が後方から聞こえると同時にボスンと路面に何か転がる音がする。

振り向くと、そこにはシスターが転がっていた。

手を大きく広げ、顔面から路面へ突っ伏している。

なんとも間抜けな転びかただな。

「大丈夫ですか？」

俺はシスターへ近寄ると、起き上がれるように手を差し出した。

「あうう。なんで転んでしまうんでしょうか…ああ、すみません

ありがとうございますうう」

声からして若いのが分かる。俺と同じ年位か？

手を引いて、起き上がらせる。

ふわっ。

風でシスターのヴェールが飛んでいく。

スツとヴェールの中で束ねていたであろう金色の長髪がこぼれ、

露になる。ストレートのブロンドが夕日に照らされてキラキラと

光っていた。そしてシスターの素顔へ俺の視線が移動する。

っ。

俺は一瞬彼女の笑顔に心を奪われていた。

グリーン色の双眸があまりにも綺麗で引き込まれそうだった。

……。

しばし、俺は彼女に見入っていた。

「あ、あの……どうしたんですか……？」

訝しげな表情でシスターは俺の顔を覗き込んでくる。

「あつゴメン。つい、えつと……」

言葉が続かない。見惚れていたなんて言えないや。

この気まずい状況どうする、俺！

イツセーならフラグが立ったと喜ぶところだが。

女性との付き合った経験もない俺にはどうしたらいいかわからな

い

ふいに彼女が肩にかけている旅行鞆が視界に移る。
そういや、この町でシスターを見かけるなんて相当なレアだな。
俺も生まれて初めてだった。

とりあえず、飛ばされたヴェールを拾ってあげる。

「旅行ですか？」

俺の質問にシスターは首を横に振る。

「いえ、違うんです。実はこの町の教会に今日赴任すること
になりました：あなたもこの町の方なのですね。

これからよろしくお願いします」

ペコリと頭を下げる彼女。

この町よ教会に赴任ねえ。人事異動かねえ？

「この町に来てから困っていたんです。その：私って

日本語がうまくしゃべれないので：道に迷ったんですけど、
道行く人に言葉が通じなくて：」

困惑顔でシスターは胸元で手を合わせる。

ということ、彼女は日本語が喋れないのか。

なのに俺と言葉が通じるのは、悪魔の力だ。

以前、リアス先輩が言っていた。

「悪魔になった特典のひとつに『言語』があるの。

悪魔になった瞬間から、あなたの言葉は全世界で通じるわ。

あなたの声を耳にする人間は一番聞き慣れた言語として

受け入れるの。アメリカ人なら英語。スペイン人ならスペイン語

としてあなたの言葉が聞こえる。逆にあなたが日本語以外の

言語を耳にしてもすべて日本語として変換されて聞こえるわ」

その効果は英語の授業で実感した。

俺は英語が全部日本語として変換されて耳に届いた。

英語の授業が日本語の授業になって。

大分シユールな授業風景だった。

英文を読めば、発音まで完璧となり、先生にも驚かれた。

流石に文字までは日本語には変換されなかったがな。

てなわけで俺は、急にバイリンガルになった。

「教会なら俺が場所を知っているよ」

町の外れに古びた教会があったはずだ、だが、あそこは今使われていたかな。覚えてない。

「本当ですか！ありがとうございますー！これも主の

お導きのおかげですね！」

涙を浮かべながら、シスターは俺に微笑む。

だけど、彼女の胸元で光っているロザリオを見ていると今までに感じたことのない拒否反応を覚えた。

もう俺は悪魔だからな、本来、関わってはいけない関係だよな。でも困った人を放つてもおけない。

こうして、俺はシスターを引き連れて、教会へ向かう。

教会へ向かう途中、公園の前を横切る。

「うわあああん」

そのとき、子供の泣き声が聞こえてきた。

「大丈夫、よしくん」

母親がそばにいるから大丈夫かな。転んだだけらしい。

すると、後ろを歩いていたシスターが公園の中へ。

座り込んで泣いている子供の傍へシスターは近寄っていった。

俺も後を追う。

「大丈夫？男の子ならこのぐらいのケガで泣いてはダメですよ」

シスターが子供の頭をやさしくなでる。

言葉は通じていないが、その表情は優しさに満ち溢れていた。

シスターがおもむろに自身の手のひらを

子供がケガを負った膝へ当てる。

次の瞬間、シスターの手のひらから淡い緑色の光が発せられ、

子供の膝を照らしている。

なんだ、あれは？魔力か？だが悪魔や悪魔と通じた者にしか使えない筈だ。

見れば、子供のケガがみるみるうちに消え去っていく。

手の光が、傷を治しているのか。もしかして。

セイクリッド・ギアか。

特定の人間に宿る、規格外の力。だと木場は言っていた。俺はそうだと直感で感じた。

いつの間にか、子供の傷は塞がり、跡も残っていなかった。すごい。

これもセイクリッド・ギアの力か。いろんな種類があるんだな。子供のお母さんも困惑している。

信じがたい現象が目の前で起ればそりやなるか。

「はい、傷は無くなりましたよ。もう大丈夫」

シスターは子供の頭を撫でると、此方へ顔を向ける。

「すみません。つい」

彼女は舌を出して、笑う。

困惑していた母親は頭を下げると、子供を連れてその場をそそくさと去ってしまった。

「ありがとう！お姉ちゃん！」

子供の感謝の言葉だ。

「ありがとう、お姉ちゃん。だって」

通訳すると、彼女は嬉しそうに微笑んでいた。

「…その力…」

「はい。治癒の力です。神様から頂いた素敵なものなんですよ。

この力のお陰で以前いた所では『聖女』と呼ばれていました」
微笑む彼女だけど、その顔はどこか寂しげだった。

苦勞しているのだろうか、凄い力を持っているのに

こんな町に移動されるなんて、普通ならあり得ないしな。
あまり深く追及するわけにはいかないな。

此処で気の利いたセリフを言えれば良かったんだがな。

セイクリッド・ギア

神 器は異質な力だ、人によつては苦勞するのかもしれない。

俺のベルトも始めてつけた時は驚きしかなかったしな。

未だに使いこなせず、赤の姿になれないしな。

会話はそこで一旦途切れ、再び教会へと向かう。

先程の公園から数分の所に古ぼけた教会が建っていた。

この町の教会は此処しかないが、相変わらず古ぼけている。此処が使われているなんて聞いたことないが、

遠目に見ても建物に灯が点いているようだから誰かはいらんだろう。オカルト研究部がある旧校舎と違って、本当に誰の手も入っていないようで、ホラー映画の舞台になりそうな外観だぞくり。

体中を嫌な汗と共に悪寒が走っている。

俺は悪魔だ。神様の関係する教会は敵地といえる。

リアス先輩からも教会と神社には近づくなと強く説明されている。

「あ、此処です！良かったあ」

シスターは地図の描かれたメモと照らし合わせて安心している。

やはり此処で合っていたのか。

日も暮れてきたし、あまり長居は出来ないな。さっさと撤退しよう。

「無事に着いたし、俺はこれで失礼するよ」

「待つてくださいい！」

その場を去ろうとしたらシスターに呼び止められる。

「私をここまで連れてきてもらったお礼を教会で」

「いや、俺この後用事があるから」

「…でも、それでは」

困る彼女。ここまでのお礼にお茶ぐらいはって話だろうけど。

まだ敷地の外なのにここまで悪寒がするんだ、中に入ったら

何が起ころるか分からない。最悪天使に囲まれてピンチになる。

「俺の名は兵藤祐介。みんなからはユウスケって呼ばれてるから

ユウスケでいいよ。それで君の名は？」

俺が名乗ると、シスターは笑顔で答えてくれる。

「私はアーシア・アルジェントと言います！アーシアと呼んでください」

「じゃあ、アーシア。また会えるといいな」

「はい！ユウスケさん、必ずまた会いましょう！」

ペコリ、深々と頭を下げるアーシア。

俺も手を振って別れを告げる。彼女は俺が見えなくなるまで、見送ってくれた。本当にいい子だな。

そして、これが俺と彼女の数奇な運命、その出会いだった。

「二度と教会に近づいちゃダメよ」

その日の夜。

俺は部室でリアス先輩に釘を刺されていた。

というよりも怒られております。

「教会は私たち悪魔にとって敵地。踏み込めばそれだけで神側と

悪魔側の間で問題になるわ。今回はあちらもシスターを送ってあげた

貴方の厚意を素直に受け止めてくれたみたいだけれど、

天使たちはいつも監視しているわ。いつ、光の槍が飛んでくるかわ

わからなかったのよ？」

マジかよ。敵地とは思っていたが、そこまで天使と悪魔で仲が悪かったのか。

完全に楽観視していたな。見つければ、悪即斬かよ。

天使なら話し合いでどうにかなると思っていたが、

現実はそのなにごくなかったか。

教会に感じた際に感じた悪寒は、悪魔の本能が危険を教えていたからか。

「教会の関係者にも関わってはダメよ。特に『悪魔祓い』エクソシスト

は我々の仇敵。神の祝福を受けた彼らの力は私たちを滅ぼせるほどよ。」

セイクリッド・ギア 神器 所有者が悪魔祓いなら尚更。もう、それは

死と隣合せるのと同義だわ。ユウスケ」

紅の髪を揺らしながら、リアス先輩は青い瞳で直視してくる。

その眼力には凄まじい迫力がある。それだけ真剣だったことだ。

「はい、すみませんでした」

「人間としての死は悪魔への転生で免れるかもしれない。けれど、

悪魔祓いを受けた悪魔は完全に消滅する。無に帰すの。」

—無。 何もなく、何も感じず、何も出来ない。

それがどれだけの事か貴方に分かる？」

正直、わからない。

返答に困っている俺をみて、リアス先輩はハッと気づいたように首を横に振った。

「ごめんなさい。熱くなりすぎたわね。とにかく、

今後は気を付けてちょうだい。これはイツセー、貴方もよ」

「はい」

近くにいたイツセーはとぼちちりを受ける形で、

俺と共に注意を受けた。リアス先輩との会話はそこで終わった。

「あらあら。お説教は済みました？」

「おわっ」

背後にいた朱乃さんが声をかけてきたが、イツセーは気づいていなかったらしく、驚いていた。

「朱乃、どうかしたの？」

リアス先輩の問いに朱乃さんは少しだけ顔を曇らせた。

「討伐の依頼が大公から届きました。」

—○○●〇—

はぐれ悪魔。

そういう存在がいるらしい。

爵位持ちの悪魔に下僕としてもらった者が、主を裏切り、

または主を殺して主無しとなる事件が稀に起こるそう。

悪魔の力は強大だ。人間の時とは比べ物にならない。

その力を自分の為に使いたくなる者もいるだろう。

そういう者達が、主の元を去り、各地で暴れている。

それが「はぐれ悪魔」らしい。

以前イツセーが墮天使のドーナシックとかいうスーツを着た男にはぐれと勘違いされたらしい。

はぐれ悪魔は害を出す。見つけ次第、主人、もしくは他の悪魔が消滅させることとなっているそう。それが悪魔のルールだ。

これは、他の存在でも危険視されていて、

天使側、墮天使側も「はぐれ悪魔」

を見つげ次第殺す事になっている。
制約を逃れた、悪魔が野に放たれる事ほど、
恐ろしいものはないそうだ。

俺は、イツセー、リアス先輩、木場、朱乃さん、小猫ちゃんと
共に町外れの廃屋近くに來ていた。

毎晩、ここで「はぐれ悪魔」が人間を誘き寄せて、
食らっているというのだ。それを討伐するように、
上級の悪魔から依頼が届いたらしい。

「リアス・グレモリーの活動領域内に逃げ込んだため、
始末してほしい」と。これも悪魔の仕事の一つだそうだ。
人間を食らう…。そういう邪悪な悪魔もいるってことだ。
時間は深夜。灯りの無い暗闇の世界だ。

周囲は背の高い草木が生い茂り、遠目に廃屋が見えている。
暗闇でも目が利くのは悪魔だからだ。
不気味な雰囲気が目が利くのも考えものだな。

「…血の臭い」

小猫ちゃんがぼそりと呟き、制服の袖で鼻を覆った。
血の臭い？俺は感じない。小猫ちゃんの嗅覚が凄いな。
周囲は静まり返っている。だが、これだけは分かる。

周囲に満ちている敵意と殺意が半端じゃないな。
以前墮天使と戦った時に感じたものと同じだ。

「イツセー、ユウスケ、いい機会だから
悪魔としての戦いを経験しなさい」

「マ、マジっすか!?!お、俺、戦力にならないと思いますけど!」
イツセーは完全に腰が引けてるな。

「俺も勝てる気はしないんですが」
今までの白では不完全で勝負にならないと思う。

「そうね。それはまだ無理ね」
あっさり言い渡される。自分で言ったことだが、
ここまで即答されるとは。

「でも、悪魔の戦闘を見ることはできるわ。今日は私たちの戦闘を

よく見ておきなさい。そうね、ついでに下僕の特性を説明してあげるわ」

「下僕の特性ですか？」

リアス先輩は説明を続ける。

「主となる悪魔は、下僕となる存在に特性を授けるの。」

：「そうね、頃合いだし、悪魔の歴史も含めてその辺を教えてあげるわ」

リアス先輩は語り出す。

「大昔、我々悪魔と墮天使、そして天使を率いる神は三つ巴の

大きな戦争をしたの。大軍勢を率いて、どの勢力も永久とも思える期間、争いあったわ。その結果、どの勢力も酷く疲弊し、勝利する

者もないまま、戦争は数百年前に終結したの」

リアス先輩の言葉に木場が続ける。

「悪魔側も大きな打撃を受けてしまった。二十、三十もの軍団を

爵位持った大悪魔の方々も部下の大半を長い戦争で

失ってしまったんだ。もはや、軍団を保てないほどにね」

今度は朱乃さんが説明してくれる。

「純粋な悪魔はそのときに多く亡くなったと聞きます。

しかし、戦争は終わっても、墮天使、神とのにらみ合いは

現在でも続いています。いくら、墮天使側も神側も部下の大半

を失ったとはいえ、少しでも隙を見せれば危うくなります」

そしてリアス先輩が再び語る。

「そこで悪魔は少数精鋭の制度を取ることにしたの。」

それが『イーヴィル・ピース悪魔の駒』」

「イーヴィル・ピース？」

俺とイツセーは初めて聞く名前に首を傾げる。

「爵位を持った悪魔は人間界のボードゲーム『チェス』

の特性を下僕悪魔取り入れたの。

下僕となる悪魔の多くが人間からの転生者だからって

皮肉も込めてね。それ以前から悪魔の世界でもチェスは

流行っていたわけだけれど。主となる悪魔が『キング王』。

私たちの間で言う私の事ね。そして、そこから

『女王』、^{クイーン}『騎士』、^{ナイト}『戦車』、^{ルーク}『僧侶』、^{ビショップ}『兵士』と五つの特性を作り出したわ。軍団を持ってなくなった代わりに少数の下僕に強大な力を分け与えることにしたのよ。この制度ができたのは

ここ数百年のことなのだけれど、これが以外にも爵位持ちの悪魔に好評なのよね」

「好評？チェスのルールがですか？」

「競うようになったのよ。『私の騎士は強いわ！』、『いえ、私の戦車の方が使える！』ってその結果、チェスのように実際のゲームを、下僕を使って上級悪魔同士で行うようになったのよ。

駒が生きて動く大掛かりなチェスね。

私たちは『レーティングゲーム』と呼んでいるけれど。

どちらにしても、このゲームが悪魔の間では大流行。

いまでは大会も行われている位だわ。駒の強さ、

ゲームの強さが悪魔の地位、爵位に影響するほどにね。

『駒集め』と称して、優秀な人間を自分の手駒にするのも

最近流行っているわ。優秀な下僕はステータスになるから」

なるほど。生きている者を駒としか見てないのは

悪魔らしいのか、そこは文化の違いが伺えるな。

複雑だが、いずれは俺達もそのゲームに駆り出されるのか。

「私はまだ成熟した悪魔ではないから、公式な大会などには

出場できない。ゲームをすることも色々な条件をクリアしない

と

プレイ出来ないわ。つまり、当分はここにいる私の下僕が

ゲームをすることはないってことね」

「じゃあ、木場たちもそのゲームをしたことはないってことか？」

「うん」

イツセーの質問に木場は頷いた。

イツセーは木場のことイケメンだからと張り合ってるからな。

木場に経験がないとわかり安堵している。

それぞれに駒の特性があるのなら俺達の『駒』は何だ？

「部長、俺達の駒は、役割や特性って何ですか？」

イツセーが俺が気になって聞いたことを聞いてくれた。

「そうね、イツセーとユウスケは」

そこまで言つて、リアス先輩は言うのを止めた。

俺にもその理由はわかる。全身を悪寒が駆け巡る。

立ち込めていた敵意と殺意がいつそう濃くなつたのを感じる。

何かが俺達に近づいている！

悪魔歴の浅い俺でもすぐに理解できた。

「不味そうな臭いがするぞ？でも美味そうな臭いもするぞ？

甘いのかな？苦いのかな？」

地の底から聞こえるような低い声。

何よりも不気味さが半端じゃないな。

横を見ればイツセーの膝が震えていた。

「はぐれ悪魔バイサー。あなたを消滅しにきたわ」

リアス先輩は一切臆さず言い渡す。

ケタケタケタケタケタケタ…。

異様な笑い声が辺りに響く。

ぬう…。

暗がりから姿をゆっくりと表したのは上半身裸の女性だった。

しかし、女性の体は宙に浮いている。

「うおー」

裸の女性にイツセーが反応する。

相手ははぐれ悪魔なんだからもうちよつと危機感もてよ。

ずんつ。

重い足音。次に姿を現したのは巨大な獣の体だった。

女性の上半身とバケモノの下半身を持った、

形容しがたい異形の存在がそこにいた。

「うげ」

イツセーが現実面に直面してゲンナリしてる。

何を期待してたのやら。

はぐれ悪魔は両手に槍らしき獲物を一本ずつ所持してる。

バケモノの下半身は四足であり、すべての足が太く、爪も鋭い。尾は蛇で独立して動いている。

大きさも五メートル以上はある。

これも悪魔なのか、悪魔にもいろんなのがいるのか。

「主の元を逃げ、己の欲求を満たすためだけに暴れまわるのは万死に値するわ。グレモリー公爵の名において、

貴方を消し飛ばしてあげる！」

「ごごかしいiiiiiii！小娘ごときかああああ！」

その紅の髪のように、おまえの身を鮮血で染め上げてやるわああ！
吼えるバイサーだが、リアス先輩は鼻で笑うだけだ。

「雑魚ほど洒落のきいた台詞を吐くものね。祐斗！」

「はい！」

バツ！

近くにいた木場がリアス先輩の命を受けて飛び出す。速い。なんて速さだ。反応出来なかった。

「イツセー、ユウスケ、さっきの続きをレクチャーするわ」

リアス先輩が言ってくる。

レクチャー？イヴァイル・ピース悪魔の駒の特性うんぬんですか？

「祐斗の役割は、『騎士』ナイト、特性はスピード。『騎士』となった者は速度は増すの」

リアス先輩の言うとおり、木場の動きは徐々に速度を増していき、ついに目で追えなくなった。バイサーも槍を振るって攻撃するが、まったく当たる気配がない。

「そして、祐斗の最大の武器は剣」

一度、足を止めた木場はいつの間にか手に西洋剣を握っていた。

それを鞘から抜き放つ。

銀光を放ちながら、長剣が抜き身となった。

スッ！

再びその場から消えた木場。次の瞬間、

バイサーの悲鳴が木霊する。

「ぎゃああああつー！」

見れば、バイサーの両腕が槍と共に切り落とされていた。傷口から血が噴き出す。

「これが祐斗の力。目では捉えきれない速力と、達人級の剣さばき。ふたつが合わさることで、

あの子は最速のナイトとなれるの」

悲鳴をあげるバイサーの足元に小柄な人影、あれは小猫ちゃんか。

「次は小猫。あの子は『戦車』^{ルック}。戦車の特性は」

「小虫めえええっっ！」

ズズンッ！

バイサーの巨大な足が小猫ちゃんを踏み潰す！

イツセーは慌てているが、他のみんなは落ち着いている。

よく見ると、バイサーの足は少しだけ地から離れていた。

踏み潰しきれていない。

ぐぐぐ…。

小柄な少女がバイサーの足を少しずつ持ち上げる。

『戦車』の特性はシンプル。バカげた力。そして、

屈強なまでの防御力。無駄よ。あんな悪魔の踏みつけぐらい

では小猫は沈まない。潰せないわ」

グンッ！

完全にバイサーの足を持ち上げてどかす小猫ちゃん。

「…ふっ飛べ」

小猫ちゃんは空高くジャンプし、

バイサーの腹に拳を鋭く打ち込んだ。

ドドンッ！

巨大なバイサーの体が後方へ大きくふっ飛んだ。

バカげた力とは納得だな。

「最後に朱乃ね」

「はい、部長。あらあら、どうしようかしら」

朱乃さんがうふふと笑いながら、小猫ちゃんの一撃で倒れこんで

いるバイサーのもとへ歩み出す。

「朱乃は『女王』^{クイーン}。私の次に強い眷属で、

『ボーン』、『ナイト』、『ビショップ』、『ルーク』、『兵士』、『騎士』、『僧侶』、『戦車』、すべての力を兼ね備えた無敵の副部長よ」

「ぐううう…」

朱乃さんを睨み付けるバイサー。朱乃さんはそれを見て、不敵な笑みを浮かべる。

「あらあら。まだ元気みたいですね？それなら、これならどうでしょうか？」

朱乃さんが天に向かって、手をかざす。

カッ！

刹那、天空が光輝き、バイサーに雷が落ちた。

「ガガガガッ！」

激しく感電するバイサー。

じゆううう、と煙をあげて全身丸焦げとなってしまうた。

「あらあら。まだ元気そうね？まだまだいけそうですわね」

カッ！

再び雷がバイサーを襲う。

「ギャアアアッア！」

感電するバイサー。すでに断末魔に近い声をあげている。

それにもかかわらず、朱乃さんは三発目の雷を繰り返していた。

「グアアアアッ！」

雷を落とす、その朱乃さんの表情は冷徹で

怖いほどの嘲笑を作り出していた。

うわ。あの人、楽しんでるよ…。笑ってる。

「朱乃は魔力を使った攻撃が得意なの。雷や水、炎などの自然現象を魔力で起こす力ね。そしてなによりも彼女は究極のSよ」

サラリと告白するリアス先輩。

Sって話じゃない気がするが。

「普段、あんなに優しいけれど、一旦戦闘となれば相手が

敗北を認めても自分の興奮が収まるまで決して手を止めないわ」

「…うう、朱乃さん。俺、怖いッス」

イツセーは完全にびびってるが俺もあのギャップには引いている。

「怯える必要はないわ。朱乃は味方にはとても優しい人だから、問題ないわ。貴方達のことともとてもかわいいと言っていたわ。今度甘えて上げなさい。きつと優しく抱きしめてくれるわよ」
「うふふふ。どこまで私の雷に耐えられるのかしらね？」

ねえ、バケモノさん。まだ死んではダメよ？

トドメは私の主なのですから。オホホホホッ！」

一番常識がある人だと思っただが、悪魔としての顔は恐ろしいな。それから数分間、朱乃さんの雷攻撃は続いた。

もはや拷問だな。

朱乃さんが一息ついた頃、リアス先輩がそれを確認して頷いた。完全に戦意を失ったバイサーのもとへ、リアス先輩が近づく。

地面に突っ伏すバイサーに向かって、リアス先輩は手をかざす。

「最後に言い残すことはあるかしら？」

リアス先輩が聞く。

「殺せ」

バイサーから発せられたのはその一言だけだった。

「そう、なら消し飛びなさい」

冷徹な一声。

ドンッ！

リアス先輩の手のひらから巨大で

どす黒い魔力の塊が打ち出される。

巨大なバイサーの体を余裕で覆うほどの魔力だ。

魔力の塊はバイサーを包み込む。魔力が宙に消えたとき、

バイサーの姿も完全に消えていた。

リアス先輩の宣言通りに消し飛ばされたのだろう。

それを確認すると、リアス先輩は息をつく。

「終わりね。みんな、ぐっ苦労様」

リアス先輩が皆にそういった。

皆もいつもの陽気な雰囲気に戻っていた。

これで「はぐれ悪魔」討伐も終わりか。

これが悪魔の戦いか…。思っていたより凄まじいものだった。

墮天使相手に戦闘にもなっていないなかったのだと痛感した。

そういえば俺とイツセーも何かしらの駒に成ってるんだよな。

「リアス先輩、聞きそびれていたことが」

「何かしら、ユウスケ」

笑顔で応じてくれるリアス先輩

「俺とイツセーの駒は役割はなんですか」

チェスのルールと同じなら駒の数も関係するはず。

リアス先輩の下僕ではまだあつてない駒もいる。

おれがなんの駒か気になるところだ。

「『^{ポーン}兵士』よ、イツセーとユウスケは『兵士』なの」

イツセーはそれを聞いてガツカリしたが、

おれはそうは思わない『兵士』は一番可能性がある駒なのだから。

第6話 「悪魔祓い」

俺達が『兵士』^{ポーン}であると分かって数日。

どうやらイツセーが柄にもなく落ち込んでいるようだ。

自分が『兵士』^{ポーン}で一番の下っ端だと感じ不服みたいだ。

まあ悪魔の特性に『チェス』のルールがどこまで反映されているかにも

よるが、『兵士』は決して弱い駒ではないだろう。

気にすることではないが、今日の依頼はサポートで一緒に行つてやるかね。

あいつ未だに契約取れてないようだし。

イツセーが落ち込んでいる理由としては、他にも、

セイクリッド・ギア
神器 所有者として

墮天使に目を付けられ殺されたことだろう。

しかも恋心まで利用されている。

俺もイツセーに彼女なんて有り得ないと思つたが、

これには俺だつて思うところがある。

いつか2人で奴の顔をぶん殴つてやるとひそかに思っている。

そういえばリアス先輩の『僧侶』^{ベシヨッフ}

はまだ会つてはいないが、

一人いるらしい。俺達が何の駒か教えられた日に続けて説明してくれた。

「私の『僧侶』は既に存在するの。ここにはいないわ。他の所で

他の命令を受けて、私の為に働いてくれているの。機会があれば、

紹介するから」

その説明されたが、部屋であつたことは無いのでもしかしたら外部の

人なのかもしれない。

—○●○—

時刻は悪魔が活動する深夜だ。

今俺は自転車で依頼者の元へ向かっている。

何故かと言うとイツセーの依頼に同行する事は許可を得たのだが、イツセーが転移出来なかったため、先に担当でもない悪魔が行くわけにも行かず。

こうして自転車に乗ってるわけだ、

「何で俺まで自転車なんだよ。イツセー！お前の依頼なんだから

後ろにでも載せろよ！」

イツセーに愚痴りながら、必死に自転車を漕いでいる。

「来てくれたことにはありがとうよ。」

だが、自転車の後ろに乗せるのは美少女と決めてるんだよ！」

イツセーも必死に自転車を漕ぎながらふざけたことを言っている。

「そんな機会いつ来るんだよ!!?」

「未来は分からないだろ！」

二人して悪態つきながら自転車を漕いでいると依頼者の家に到着した。

「で、着いたけど、この後どうしてるんだ？」

家族もいるだろうし流石に玄関からは入れないよな？

「普通にチャイム押して、玄関から入るけど？」

本当に悪魔の召喚とは思えないシユールな光景だ。

家族に秘密にしてたらどうするのかね。

友達の家遊びに行くんじゃないだぞ。

興味本位で召喚したら忘れた頃に玄関からやってくるとか。

俺が当事者だったら即警察を呼んでいるな。

「確かに、一軒家は初めてだけど、他に方法もないだろう」

イツセーがインターホンを押そうとしたその時、俺は気づいてしまった。

「なあ。玄関の扉空いてないか？」

「本当だ。こんな深夜に物騒だな」

おかしい。これがイツセーのお得意様なら開けといてくれたと思うが、

今回はイツセーの新規の依頼者だ玄関から来るなどわからないはずだ。

何か言い知れない不安が俺達を襲う。

とりあえず、俺は玄関から中を覗き込む。

廊下には灯りは付いていない。二階へ続く階段もあるが、電気はついていないようだ。

一階奥の部屋だけ灯りらしきものがついているが、照明ではない淡い光だ。

やはり、おかしい。人氣が感じられない。

悪魔召喚の為の演出？馬鹿な。なら、この異常な空気は感じられないだろう。

俺達は玄関で靴を脱いで、その靴を手に持って廊下を足音を殺し進む。

本来なら、何かあった場合に備えて、靴を履いて入りたいが、勘違いだった時に怒られてしまうので、仕方ないな。

奥の部屋に行きついたので、顔だけ開いているドアから覗き込むと、

先ほどの淡い光がロウソクのものだとわかった。

「…ちわーす。グレモリー様の使いの悪魔ですけど…。依頼者の方、いらっしやいますか？」

イツセーが小さい声で人がいるか確認するが、返答は無い。

「おい、声出すなよ。また墮天使とかやばい奴いたらどうするんだよ」

「わりい、考えてなかった」

小声で注意したが、俺達の声で誰かが現れる様子はない。

意を決して、中へと足を踏み入れる俺達。

そこはリビングで、ソファやテレビ、テーブルなどが置いてある。どこにもあるリビングの風景だった。

「やっぱりおかしい。イツセー一旦ここは外へ出」

俺はそこで息を詰まらせた。イツセーに声をかけようと振り返ると。

反対側の壁に死体が上下逆さまで張り付けられている。

…人間の男性だ。この家の主人か？だが、なんで…？

その体は切り刻まれており、臓物らしきものも傷口からこぼれてい

る。

ゴボツ。

俺達は住人の無残な姿に耐え切れずこみ上げてきたものを吐いてしまった。

その遺体は見るに堪えなかった。逆十字の恰好で壁に貼り付けられている。

それも太く、大きな釘が男の両手、両足、胴体に打ち付けられている。

その姿はまるでキリストの磔刑のようだった。

だが、体の切り傷はまるで拷問、

普通の神経をしてたらこんな事は出来ないだろう。

遺体から血が床に滴り落ちて、血だまりとなっていた。

男が打ち付けられている壁には文字らしきものが血で書かれている。

「な、なんだ、これ…」

「そんな文字気になっている場合じゃないぞ、

イツセー急いで逃げるぞ。早く!!」

『悪いことする人はお仕置きよ!』って聖なるお方の言葉を借りたものさ」

突然、俺達の後方から若い声が聞こえてきた。

振り向くと白髪の男が立っていた。若い。外国人みたいだが、

神父の恰好をした十代ぐらいの男だった。

神父は俺達を見るなり、ニンマリと笑った。

「んーんー。これはこれは、悪魔くんたちではあーりませんかー」

実に嬉しそうだ。俺の脳裏にリアス先輩の言葉がよぎる。

―教会の関係者にも関わってはダメよ。特に『悪魔祓いエクソシスト』

は我々の仇敵。神の祝福を受けた彼らの力は私たちを滅ぼせるほどよ。

こいつは教会関係者か。まずいな。

俺達の事を悪魔だってわかっているのか、事態は最悪だ。

「俺は神父♪少年神父♪♪デビルな輩をぶった斬り♪、

ニヒルな俺が嘲笑う♪おまえら、悪魔の首刎ねて、俺はおまんま貰うのさ♪」

突然、神父が歌いだす。

なんだこいつは☒

「俺のお名前はフリード・セルゼン。とある悪魔祓い組織に所属している末端でございますですよ。あ、別に俺が名乗ったからっておまえさんらは名乗らなくていいよ。俺の脳容量にお前達の名前なんざメモリしたくないから、止めてちよ。大丈夫、すぐに死ぬるから。俺がそうしてあげる。最初は痛いかも知れないけど、すぐに泣けるほど快感になるから。」

新たな扉を開こうZE!」

今まで出会ったことの無いタイプの異常者だ。

思った通り悪魔祓いか、ヤバイかもな、

だが、こいつには聞きたいことがあるからな。

「おい、お前か?この人を殺したのは?」

イツセーが俺が聞きたかったことを聞いてくれた。

思う事是一緒か。

「イエスイエス。俺が殺っちゃいました。だってー、

悪魔を呼び出す常習犯だったみたいだし、殺すしかないっしょ」
なんだよそりや。

「あんれ?驚いてるの?逃げないの?おかしいねえ、変だねえ。

っーかね、悪魔と取引するなんて人間として最低レベル、

クズ街道まっしぐらっすよ。その辺ご理解できませんかねえ?

無理?あーそうですか。クズの悪魔ですもんねえ」

話にならねえな!

「人間が人間殺すつてのはどうなんだよ!おまえらが殺すのは

悪魔だけじゃないのか?」

「イツセーの言う通りだ、それにお前は殺しを楽しんでいるだろう」

「はあああ? 何それ? 悪魔の分際で俺を説教?」

ハハハ、笑える笑える。お笑いの賞取れますですよ、それは。

いいか、よく聞けクソ悪魔。悪魔だって、人間の欲を糧に生きてる

じゃねえか。悪魔に頼るってのは人間として終わった証拠なんですよ。

エンドですエンド。だから、俺が殺してあげたのさー。

俺、悪魔と悪魔に魅入られた人間をぶっ殺して生活してるんで、お仕事でござんすよ」

「悪魔だって、ここまでの事はしねえー！」

「はあく？何、言ってるの？悪魔はクソですよ。クソのような存在なのですよ？常識ですよ？知らないんですか？マジ、

胎児からやり直したほうがいいって。って、人間から転生したっばい悪魔のおまえさんらに胎児もクソもないか。むしろ、

俺がおまえらを退治！なーんてな！最高じゃね？最高じゃね？」

神父が懐から、刀身のない剣の柄と、拳銃を取り出した。ブイン。

空気を振動させる音。

柄だけの剣が、ビームサーベルみたいに光の刀身を作り出す。

あれは、なんだ。ガンダムのビームサーベルか？

「俺的におまえらがアレなんで、斬ってもいいですか？」

撃ってもいいですか？OKなんですネ？了解です。今から

おまえらの心臓にこの光の刃を突き立てて、このカツコイ銃でおまえらのドタマに必殺必中フォーリンラブしちゃいます！」

ダッ！

神父がその場から俺達に向かって駆け出した！

光の刀身が横薙ぎに放たれる。

「うわっ！」

俺達は寸でのところでそれをかわすが、俺の足に激痛が走った。

神父の持つ拳銃から煙が上がっている。撃たれたのか？

けど、銃声はしなかった。剣はブラフで本命は銃か！

「ぐあああー！」

イツセーが呻き、その場に膝をついた。

銃声はしなかったが、腹を撃たれたようだ。

「このやろろー！よくもイツセーを！」

その時再び俺の足に激痛が走る。

この痛みは知っている。

「どうよ！光の弾丸を放つエクソシスト特性の祓魔弾は！

銃声音なんざ発しません。光の弾ですからねい」

そうだ、これは光の痛みだ。

光は悪魔にとつて毒。一度食らえば全身に痛みが走る。

完全に経験不足だった。こんなやつに負けるなんて！

「死ね死ね悪魔！死ね悪魔！塵になって、宙を舞え！全部、

俺様の悦楽のためにい！」

神父がキレた笑いを発しながら、俺へトドメを刺そうとしてきた。

「やめてくださいー！」

そこへ、聞き覚えのある女性の声。

神父は襲い掛かろうとする格好のまま、動きを止め、

視線だけ声のした方へ向ける。俺達も視線だけそちらへ。

ーっ。

俺はその子を知っている。

「アーシア」

そう、金髪のシスターがそこにいた。

「おんや、助手のアーシアちゃんじゃありませんか。

どうしたの？結界は張り終わったのかなかな？」

「！、いやあああああっ！」

アーシアが壁に打ち付けられているこの家の遺体を見て、悲鳴を上げた。

「かわいい悲鳴ありがとうございます！そっか、アーシアちゃんは

この手の死体は初めてですかねえ。ならなら、よーく、とくとご覧なさい

悪魔に魅入られたダメな人間さんはそうやって死んでもらうのですよお」

「…そ、そんな…」

そして、アーシアの視線が此方へ向くと、目を見開いて驚いている。

「…フリード神父…その人達は…」

「人？ 違う違う。こいつはクソの悪魔達だよ。ハハハ、何を勘違いしているのかなかな」

「っ。ユウスケさんが…悪魔？」

彼女は俺が悪魔だったのがショックだったらしく言葉を詰まらせていた。

「何何？君ら知り合い？わーお。これは驚き大革命。」

悪魔とシスターの許されざる恋とかそういうの？マジ？マジ？」

おもしろおかしそうに神父は俺とアーシアを交互に見ている。

：知られたくなかったな。

俺は二度と会うつもりはなかったから、知らないままで良かったのに。

親切的な男子高校生で良かったんだ。

参ったな、普段の行いか、あの子の視線が辛い。

悪魔でごめんよ。

「アハハ！悪魔と人間は相入れません！特に教会関係者と悪魔は天敵さ！それに俺らは神にすら見放された異端の集まりだぜ？

俺もアーシアさんも堕天使さまからのご加護がないと

生きていけない半端ものですよ？」

堕天使だと？

聖女と呼ばれたアーシアがどうして神の下でなく堕天使なんかになんか？

「まあまあ、それはいいとして俺的にこのクズ男達を斬らないと

お仕事完了出来ないんで、ちよちよいといきますかね。

覚悟はOK？」

神父が光の剣を改めて俺へ突きつける。

あれで胸にでも一突きされたら、死ぬだろうな…。

仮に生きていても、壁に打ち付けられている依頼者のように切り刻まれるに違いない。

光の痛みで体が動けないまま殺される！

そんな俺と神父の間にアーシアが入り込んだ。

俺の前に立ち、庇うように両手を広げる。

それを見て、神父の表情は先程までのおちやらけた雰囲気は消えて
険しくなる。

「おいおい。マジですかー。アーシアたん、キミ、
自分が何をしてるか分かってるのでしょうか？」

「…はい。フリード神父、お願いです。この方達を許して下さい。
見逃して下さい」

ーっ。

その一言に俺は声を詰まらせた。

俺を庇ってくれるのか？

「もう嫌です…。悪魔に魅入られたと行って、人間を裁いたり、
悪魔を殺したりなんて、そんなの間違ってますー！」

「はああああああああつ!? バカこいてんじやねえよ、クソアマ
が！」

悪魔はクソだって、教会で習っただろうが！お前、マジで
頭にうじでもわいてんじやねえのか!?？」

フリードの表情は憤怒に包まれていた。

「悪魔にだって、いい人は居ます！」

「いねえよ、バアアアカー！」

「私もこの前までそう思っていました…。でも、

ユウスケさんはいい人です。悪魔だって分かっても

それは変わりません！人を殺すなんて許されません！

こんなの！こんなの主が許すわけがありません！」

死体を見かけ、俺が悪魔だと知り、ショックだろうに、

アーシアは強い意志で神父に物申した。

なんて精神の強い子だろうか、聖女と呼ばれるわけだ。

バキッ！

「キャッー！」

神父の野郎が、拳銃を持った手でアーシアを横薙ぎにぶっ叩きや
がった。

床に転がるアーシア。

「アーシアー！」

俺は吹っ飛ばされたアーシアの側に近づく。

：顔に痣。野郎、本気で殴りやがったのか。

その時俺の脳裏に一つのイメージが浮かんだ、

それはいつもの戦士ではなく闇の様に黒く、

全身から棘の様な鎧をしている。

その戦士は周りを火の海に変えていた。

「墮天使の姉さんからはキミを殺さないように念を押されているけれど。」

ちよつとムカつきマックスさんすよ。殺さなきゃいいみたいなん
で、

半殺しまでしていいですかねえ？それぐらいしないと俺の傷心は

癒えそうにないんでやんすよ。と、その前に其方のクス丸達を

殺さないとダメダメですねえ」

再度、神父は俺へ光の刃を向けてくる。

：アーシアを置いては逃げられない。

イツセーも光のダメーヅが、大きくて動けそうにない。

！
それにあんな事言うこいつの元に彼女を置いていけるはずもない

逃げるなら皆んなと共にだ。戦うことは…。

今の俺で戦えるのか？赤にもなれないのに？

先程の黒に成れば勝ち目もあるのか？

でも、俺は…。

「庇ってくれた女の子を前にして、逃げらんねえよな」

「グフツ ユウスケ」

瀕死のイツセーの横で立ち上がり、俺は神父の目の前で

戦う構えを作った。

それを見た神父が「ヒユウ」と嬉しそうに口笛を吹く。

俺は構えのまま神父を見据える。

すると俺の腰にベルトが現れた、それだけでなく。

俺の体から黒いモヤと雷が発生した。

「えっ…えっ…マジっ？マジっ？俺と戦うの？何をする気か知らないけど？」

死んじやうよ？苦しんで死んじやうよ？

楽に殺すなんて俺様にはないからね？さてさて、どれくらい肉が細切れになるか世界記録に挑戦しましょうかね！」

そんな不気味なことを言ってくる。

俺が負ければ、イツセーもアーシアもやられる。

俺がやるんだ！例え俺が俺じゃなくなっても！！

俺が黒い戦士へと変身する覚悟を決めた。

その時、床が青白く光出した。

「何事さう？」

疑問を口に出す神父の足元を光が走る。

青い光が徐々にとある形を作っていく。

―魔方阵だ。

しかもこれは、グレモリー眷属の魔方阵！まさか！

カツ！

床に描かれた魔方阵が光出す。そして、光の中から現れたのは

見知った悪魔達。

「二人共、助けに来たよ」

スマイルを送ってくる木場。

「あらあら。これは大変ですわね」

「…神父」

朱乃さんに小猫ちゃん！

そう、グレモリー眷属の悪魔達だ。

仲間が駆けつけてくれた事で俺は安心して、

力が抜けて膝をついてしまった。

もはや俺の身体からモヤも雷も出ていなかった。

「ひゃっほう！悪魔の団体さんに一撃目！」

神父が構わず切り込んでくる。

ガキン！

金属音が部屋中に鳴り響く。神父の一撃を木場が剣で受け止めた。

「悪いね。彼等は僕らの仲間でさー…こんなところで

やられてもらうわけにもいかないんだ！」

「おーおー！悪魔のくせに仲間意識バリバリバリューですか？
悪魔戦隊デビルレンジャー結集ですか？いいねえ。熱いねえ。
萌えちゃうねえ！」

罅迫り合いを繰り返している最中なのに、
神父は舌をベロベロンと出して、舌と一緒に頭まで揺らしていた。
完全にこちらをバカにしているな。

木場も珍しく嫌悪の表情を浮かべていた。

「…下品な口だ。とても神父だと思えない…。いや、だからこそ、
『はぐれ悪魔祓い』^{エクソシスト}をやっているわけか」

「あいあい！下品でござりますよ！サーセンね！だって、
はぐれちゃったもん！追い出されちゃったもん！ていうか、
ヴァチカンなんてクソ食らえって気分だぜい！

俺的に快樂悪魔狩りさえ気が向いた時に出来れば大満足なんだよ
これがな！」

剣と剣で罅ぜり合う両者。

穏やかな表情をしているが、木場の眼光は相手を捉えている。
神父の方はケテケタと不気味な笑いを発しながら楽しんでいる。

「一番厄介なタイプだね。君は。悪魔を狩る事だけが生き甲斐…
俺達にとつて一番の有害だ」

「はあああああ!!悪魔さまには言われたか無いのよおお？」

俺だって精一杯一生懸命今日を生きているの！てめえら、
糞虫みてえな連中にどうこう言われる筋合いはねえぞんす！」

「悪魔だって、ルールはあります」

微笑みながら言う朱乃さんだが、視線は鋭い。
敵意と戦意を神父へ向けている。

「いいよ、その熱視線。お姉さん最高。俺を殺そうって
思いが伝わってくる。これは恋？違うね。俺は思うよ。

これは殺意！最高！これ最高！殺意は向けるのも
向けられるのもたまらんね！」

「なら、消し飛ぶがいいわ」

スツと俺の横に現れたのは紅の髪の少女ーリアス先輩だ。

「イツセー、ユウスケ、ゴメンなさいね。」

まさか、この依頼者の元に、『はぐれ悪魔祓い』の者が訪れるなんて計算外だったの」

謝るリアス先輩は俺達の姿を見るなり、目を細めた。

「…イツセー、ユウスケ、ケガをしたの？」

「す、すみません…そ、その、撃たれちゃって…」

半笑いで誤魔化すイツセー。

「申し訳ありません。リアス先輩、負けてしまいました」

リアス先輩は冷淡な表情を神父に向けた。

「私のかわいい下僕達を可愛がってくれたみたいね？」

低く怖い声だ。

リアス先輩はキレてるな。

「はいはい。可愛がってあげましたよお。」

本当は全身くまなくザクザク切り刻む予定で

ござんでしたが、どうにも邪魔が入りまして、

それは夢幻となつてしまいましたあ」

ボンツ！

神父の後方、リビングの家具の一部が消し飛んだ。

リアス先輩が魔力の弾を手から発した。

「私は、私の下僕を傷つける輩を絶対に許さない

ことにしてるの。特にあなたのような下品極まりない

者に自分の所有物を傷つけられる事は本当に我慢できないわ」

空気さえ凍えるような迫力だ。

殺気がリビングを包み込んだ。

リアス先輩の周囲に魔力の波動らしきものが発生している。

「…部長、この家に墮天使らしき者たちが複数近づいて

いますわ。このままでは、こちらが不利になります」

何かを感じたのか、朱乃さんがそう言う。

墮天使が近づいてくるのか？

リアス先輩は神父をひとにらみする。

「…朱乃、イツセーとユウスケを回収しだい、

本拠地へ帰還するわ。転移の用意を」

「はい」

リアス先輩に促され、朱乃さんが何やら呪文を唱えだした。転移？このまま部室へ逃げるのか？

俺は不意にアーシアを見る

リアス先輩！あの子も一緒に！」

俺はリアス先輩にアーシアを連れていきたいとお願いする。

「無理よ。魔方陣を移動できるのは悪魔だけ。

しかもこの魔方陣は私の眷属しか転移できないわ」

そんな…。

俺とアーシアの視線が合う。彼女はニツコリと笑うだけだ。

「アーシア！」

「ユウスケさん。また会いましょう」

それがその場での最後の会話だった。

次の瞬間、朱乃さんの詠唱が終わり、

床の魔方陣が再び青く光出した。

「逃がすかって！」

神父が切り込んでくるが、小猫ちゃんが大きなソファアートを軽々と持って投げつける。

それを神父が光の剣で薙ぎ払う頃、

俺達は部室へ転移していた。

部室に戻ってきた俺はアーシアの最後の

笑顔だけを思い出していた。

ー○○ー

「悪魔祓いは二通りあるわ」

俺達は、部室で治療を受けながら

リアス先輩の話を聞いていた。

「ひとつは神の祝福を受けた者たちが行う正規の悪魔祓い。

こちらは神や天使の力を借りて、悪魔を滅するの。

そして、もうひとつ。『はぐれ悪魔祓い』よ」

「はぐれ？」

イツセーの問いにリアス先輩は頷く。

また「はぐれ」か。

「悪魔祓いは神の名の下に魔を滅する聖なる儀式。

だけれど、悪魔を殺す事自体を楽しむようなる

エクソシストがたまに現れるわ。

悪魔を倒す事に生き甲斐や悦楽を覚えてしまった輩の事。

彼等は例外なく神側の教会から追放されるわ。もしくは、

有害とみなされて裏で始末される」

「始末…殺されるのか」

「あの神父は始末されてもおかしくない異常者だからな」

「でも、生き延びる者もいる。そういう輩はどうなるか

思う？簡単よ。墮天使のもとへ走るの」

「墮天使って黒い翼のですよね？」

「俺とイツセーを殺した奴らですね」

「ええ。墮天使も天から追放されたとは言え、光の力

悪魔を滅する力を有しているわ。墮天使も先の

戦争で仲間や部下の大半を失った。

そこで彼らも私たちと同じように下僕を

集めることにしたの」

そこまで説明されて、俺でもわかった。

「悪魔を殺したいエクソシストと悪魔が邪魔な墮天使は

利害が一致したってことですね？」

「そうよ。『はぐれ悪魔祓い』とはそういうこと。

悪魔狩りにハマりこんだ危険なエクソシストたちが

墮天使の加護を受けて悪魔と悪魔を召喚する人間へ

牙をむいたのよ。さっきの少年神父はそれ。

背後に墮天使がいる組織に属する『はぐれ悪魔祓い』

の者。正規の悪魔祓いではなくても危険極まりないわ。

いえ、リミッターが外れている分、普通の悪魔祓い

よりも相当危ないわね。関わり合いになるのは

私たちにとって得策ではないわ。ユウスケの行った

教会は神側ではなく、堕天使が支配しているようね」
「…やばいのはわかる。

さっきの神父と対峙しただけでどれだけ危ないか
理解できた。

あれは相当邪悪な存在だ。完全に戦うこと、殺す事に
喜びを感じてやがった。

あんな神父がたくさんいるであろう堕天使陣営に
関わるのは危険だ。

それはわかっているんだ。だが、俺はリアス先輩に言う。

「リアス先輩、俺はあのアーシアって子を救いたい！」

「無理よ。どうやって救うの？あなたは悪魔。

彼女は堕天使の下僕。相容れない存在同士よ。

彼女を救うってことは、堕天使をも敵に回すこと

になるの。…そうになったら私たちも戦わねばならないわ」

「……」

俺は何も言い返せなかった。

俺の独断専行で迷惑をかけられない。

どうにかリアス先輩達に迷惑をかけずに

アーシアを救う方法はないか？

考えてみたが、答えは見つからない。

答えの出せない俺の無力さを痛感する。

女の子一人救えない。

俺は弱すぎる。

第7話「友達」

悪魔祓いに襲われた翌日の昼俺とイツセーは学校を休んで、公園のベンチに座っていた。

何故こういう事になっているかと言うと、

神父に負わされた傷が癒えるまでの間、

学校と夜の活動の休みをもらったからだ、

先日の神父にやられた銃傷が思いの外、ダメージが残り、

足は未だ完治していない。

リアス先輩が言うには、神父に力を与えた堕天使の光力が濃いそう
だ。

学校が病欠なのだから外にいるのは可笑しいが、今は気分転換したかったから二人で公園に来た。

学校の方はリアス先輩の方で何とかしてくれるだろう

何せあの学校はリアス先輩の所有物なのだから。

イツセーも腹に受けた傷が完治せずにはいた。

「やっぱり悔しいよな…」

「ユウスケもそう思うよな」

思わず心の声が出てしまった。

「ああ、あの子は自分を殴るイカレた神父がいる職場になんて

居たくないだろうけど、連れ出す力も守る力も無いしな」

「神父にボコボコにされたしな。部長が来なかったら

俺達死んでたよな」

俺が独断で動けばリアス先輩に迷惑がかかるしなあ。

「…強くなりたい」

俺は思わずつぶやいた。

「リアス先輩達が来る直前にベルトが又、俺に映像を見せたんだ、

それは、自分以外の全てを滅ぼす程の力だった」

「……」

イツセーは黙って俺の話聞いていた。

「あの力は恐ろしいものだ、だけど、一番恐ろしいのはあの場で、

その力を使おうとした俺自身だ。怒りに飲まれて、あの姿に変身してたら、神父には勝てたかも知れないが、イツセーやイツセーもこの手で殺してたかもしれない」

「そう、あの姿は俺の闇そのものだった。」

「俺だつてこの神セイクリッド・ギア器を使えねえよ

そもそも使い方さえわからない、なら、二人で強くなろうぜ！

俺はこの籠手を使いこなす。お前はその力に頼らない戦い方を見つけれ。それしかないだろう！」

珍しく、イツセーが熱く語る。

「そうだな、黒ではなく赤い姿になればいいだけだ、

「そうだな、うだうだ考えるのはもうやめだ

二人で強くなつてあの墮天使と神父に2人で一発殴つてやろうぜ
！」

ぐうぐ。

「そーいや、朝から何も食べてないっけ」

「しまらないけど、元気になつた証拠だな」

「とりあはず飯食つて帰ろうぜ」

「そーいうとイツセーがベンチから立ち上がる。

「そーだな、先ずは傷を癒して筋トレを始めよう！」

「それと木場にも剣の使い方を教えてもらおうかな」

「イケメンに物を習うのは遺憾だが仕方ないな」

「目標も新たにし、重い腰をベンチから上げたその時、

「視界に金色が移り込んだ。」

「ハツと思ひ顔を向けるとそこには見知つた金髪の

少女が立っていた。あちらもこちらに気づき、

「お互い、その出会いに驚いていた。」

「…アーシア？」

「…ユウスケさん？」

「良かった無事だったんだな」

「はい。ユウスケさんもご無事で良かったです」

俺を見たアーシアは気が抜けたように

安堵の表情を浮かべていた。

「そうだ、紹介するよ俺の弟のイツセーだ」

俺はアーシアにイツセーを紹介する。

「ど、どうも、ユ、ユウスケの弟でイツセーと申します」

イツセーは美少女を前に完全に完全に緊張していた。

「昨日ユウスケさんと一緒にいた方ですね」

初めまして、アーシア・アルジエントといいます

よろしくお願ひいたします」

アーシアはイツセーにお辞儀して挨拶をする。

「ああよろしく」

「とりあはず、腹も減ったし、飯でも食べに行こうぜ、

アーシアはお昼もう食べたのか？

マックで良ければ俺達と一緒に食べないか？」

「マックは分かりませんが、お昼はまだなので

一緒にしてもいいでしょうか」

俺の昼飯のお誘いに不安そうに聞いてくるアーシア。

「こちらの方から頭を下げてもお願ひしたい！」

イツセーがふざけて答えているが。

迷惑なんて有り得ない。そうして、俺達三人でマックへと

向かうことにした。

ー●〇〇ー

「あうう…」

不思議な光景だった。マックのレジでシスターが困惑している。

「あ、あの注文は…」

対応に困っているのは店員も同じだった。

昼飯に俺とイツセーはアーシアを連れて繁華街のマックを訪れて

いた。

どうやら、アーシアはこの手の店に入る事自体初めてだったらし

く。

注文に四苦八苦していた。

俺が手伝うと申し出たのだが、

「大丈夫です。一人で何とかして見せます」と胸を張りながら宣言したもんだから見守っていたのだが…。

よくよく考えれば、彼女は日本語を喋れないじゃないか。

その事実が気が付き、俺が隣からフォローを入れる。

「すみません。俺と同じメニューでお願いします」

「わかりました」

店員さんもそれで注文を受け取ってくれた。

アーシアは軽いショックを受けているようだ。

「がーん」と効果音が聞こえてきそうだ。

普段どうやって買い物してるのか疑問だな。

「あうう、情けないです。ハンバーガーひとつ買えないなんて…」

「まあ、言葉が伝わらないのは仕方ないよ、

まずは日本語を勉強するしかないよ」

「はい！頑張ります！」

落ち込む彼女を励まして、俺とアーシアは

ハンバーガーのセットメニューを受け取って

先に席を確保してくれたイツセーの元へ向かう。

店内を移動中、どの男性客もアーシアを目で追っていた。

シスターが珍しいってのもあるだろうけど

目を引くほどかわいいからな。

そりゃ、見かけた男なら誰でも二度見以上してしまうだろうさ。

イツセーの待つ席へ到着し、俺達とアーシアで対面に座った。

「はい、おまちどうさん」

持ってきていたイツセーの分を渡してやる。

「待ってたぜ、もう腹ペコだよ」

イツセーは待ちきれないとハンバーガーにかぶりついた。

俺も食べようとしたとき、

アーシアがハンバーガーをマジマジと見つめるだけで

なかなか食べようとしなない。

もしかして、食べ方が分からないのか？

マジか、なんてベタな展開だよ。

「アーシア、こうやって包み紙を少しだけ開いて
一気にかぶりつくんだよイツセーみたいだね」

「ふあんだ？」

「イツセーは急に話を振られて「何だ？」

といったのだろうか、口に物がはいっているから

何と言っているのかわからんな

「そ、そんな食べ方があるなんて！す、すごいです！」

…なんて新鮮な反応だろうか。

「ポテトもこうやって手づかみで食べるんだ」

「なんと！」

「フライドポテトを食べる俺を興味深そうに眺めるアーシア。

「いやいや、感心してないでアーシアも食べな」

「は、はい」

ハンバーガーに小さくかぶりつく彼女。

もぐもぐと口を動かし食べ始める。

「お、おいしいです！ハンバーガーっておいしいんですね！」

目を輝かせながら言ってるよ、この子。普段は何を食べてるんだ？

「ハンバーガー食べたことないの？」

「はい。テレビではよく見ていたのですが、

実際に食べるのは初めてです。感動です！おいしいです！」

「えーじゃあ普段は何を食べているの？」

ハンバーガーにかぶりついていたイツセーが思わず尋ねる。

「パンとスープが主です。お野菜やパスタのお料理も食べますよ」

なんとも質素だな、やっぱり教会ってそんなもんなのかな？

「へえ、すごいな俺だったら物足りないかもな」

イツセーはそう言っているが、高校生なら確かにそれでは足りない

よな。

「なら、今日ぐらいはいいだろうよく味わって食べようぜ」

「はい、おいしく頂きます」

パクパクと本当においしそうに食べているアーシアを見ると

こっちまで嬉しくなるな。連れてきて良かったよ。

しかし、アーシアはなんであの公園にいたんだ？
休み時間に出てきたと言っていたが、
どうも気になる。何かにおびえながら移動していた。
聞きたいことは多くある。

俺を見た瞬間気が抜けたように安心してたのは俺が無事だったか
ら

だけじゃないと思う。

だがそれは、彼女自身から話してくれた方がいいと思う。

俺ならいつでも力になるし、イツセーも居るから一人じゃない。

だけど、部長たちの事もある。気軽にこちらから首を

突っ込むことはできない。もどかしいがな

今は、ハンバーガーを嬉しそうに食べているし、

今を憂鬱な気分させるのもかわいそうだ。

うん、そうだな。今日はそうしよう。

俺の中で一つの結論が出る。

「アーシア」

「は、はい」

「今日は目一杯遊ぶぞ」

「え？」

「次はゲーセンだ」

「勝負だイツセー！」

ブウウウン！

アクセルを踏み、カーブで手早くギアチェンジ！

一気にCPUの車を抜き去る。

だが、そこで後ろから来たイツセーに抜かれてしまう。

「早いです！早いですユウスケさん！イツセーさん！」

しまった！イツセーは今まで帰宅部だからな

友達とよくゲーセンに行っていたんだった。

経験が違うか。だがアーシアの前でかっこ悪いところは

見せられないぜ！

仕掛けるポイントはこの先の五連続ヘアピンカーブ！

ブウウウン！

「オーバースピードだぞユウスケ！ぶつかるぞ！」

ガゴアアアア！

カーブのガードレール脇の溝を利用して

カーブを強引に曲がりイッセーを抜き去る。

「？だろこのゲームそんなところまで再現されてるのかよ」

『WIN！』

俺の勝利を告げる文字が画面に映し出される。

「まさかあそこでユウスケに抜かれるとは」

「グッドゲームイッセー次も負けないぜ」

ふとアーシアが視界から消えていた。

「アーシアがいないから探してくるよ」

「あいよ、俺はまだこのゲームやってるよ」

そんなに悔しかったのかよ。俺はレーシングエリアから離れ

周りを見渡すと、アーシアはクレイニングゲームの前に張り付いていた。

「どうした？」

「はう！い、いえ…。べ、別に何でもないです」

俺が声を掛けると、何やら誤魔化してくる。

「何か欲しいのか？」

クレイニングゲームの中身を見ると、

人気キャラクターの『ラッチューくん』の人形があった。

ネズミが元のかわいいマスコットキャラだ。

そういや、このキャラクター日本発なのに世界的に

人気だったな。だからアーシアも知っているのか。

「アーシア、ラッチューくん好きなのか？」

「え！ い、いえ、そ、その…」

アーシアは顔を紅潮させ、俯きながら

恥ずかしそうに頷いた。

「よし。俺が取ってやる」

「えっ！ で、でも！」

「いいから、いいから、俺がとるよ」

俺はコインを投入して、クレーンを動かし始めた。

クレーンゲームは得意ではないが、

このクレーンは三本爪でわりかしやりやすい。

回数重ねればとれるだろう。

一度目はいいところで人形を落とし、2回、3回と同じ

事が続く、アーシアを見ると不安になっているが、

4度目でやっと人形を落とし口に入れる事ができた。

「よっしゃー!」

俺は思わずガッツポーズを取りながらも人形を拾い

アーシアへ渡してあげる。

「ほら、アーシア」

人形を受け取ったアーシアは心底嬉しそうに

その人形を胸に抱いた。

「ありがとうございます、ユウスケさん。」

この人形、大事にしますね」

「ああ、そんな人形で良かったら、また取ってあげるよ」

そうは言ったものの、彼女は首を横に振る。

「いえ、今日頂いたこのラッチューくんは今日の

出会いが生んだ素敵なものです。

この出会いは今日だけのものですから、

この人形を大事にしたいです」

…なんとも恥ずかしいセリフだ。

でもこの子が言うとなんか様になるな

ここまで喜んでくれると取ったかいがあったよ。

「よし…まだまだこれからだ!アーシア、

今日は一日遊び尽くすぞ!まずはイツセー

と合流だついてこい!」

「は、はい!」

俺はアーシアの手を引き、ゲーセンの奥へ向かった。

—●—

「あー、遊びすぎたな」

「は、はい…少し疲れました…」

「いやあ、ここまで遊んだのは久しぶりだなユウスケ」

三人で苦笑しながら、歩道を歩いていた。

既に空は夕日となっている。

ハハハ、学校休んで夕方まで思う存分遊んでしまった。

部活もサボっているから奈美先輩に見つかったら

お説教だな。

結構、クタクタになっていた。俺もイツセーもアジアも。

でもゲーセンや色んな店に行くとそのたびに

反応が新鮮で、横で見ているとも飽きなかった。

「とこと」

俺はふいに訪れた足の違和感に躓きそうになった。

「いたた」

と、痛みも少しだけ走る。

例のケガだ。クソ神父に撃たれた銃創がいまだに痛む。

完治はもう少し先かな。

「…ユウスケさん、ケガを…もしかして、

先日の…したらイツセーさんも」

アジアの表情が曇った。

まずったな。せつかくの楽しい時間を送っていたのに、

嫌なことを思い出させてしまったかもしれない。

けれど、アジアはその場で身をかがめて、

俺の幹部を調べだしていた。

「ズボン、あげてもらってもいいですか？」

「あ、ああ」

裾を上げてふくらはぎを露にする。

銃創が残っていた。

アジアがそこへ手のひらを当てる。

俺のふくらはぎを温かく、やさしい光が照らす。

本当に、温かい光だ。緑色の光。アジアの瞳と

同じで綺麗だよ。彼女の優しさが光に込められている
ような気がした。

「これでどうでしょうか？」

アーシアの光が止まり、俺に足を動かすように促してくる。
俺は軽く動かしてみた。

おつ。これはすごい。

「すごいよ、アーシア。違和感がなくなった！」

痛みも感じない」

そしてアーシアは俺にやったようにイツセーの傷も
癒してくれた。

「すごいな、アーシアは。治療の力、

すごい力だけど、これって、セイクリッド・ギア 神器だよな？」

「はい。そうです」

やはりそうか。

「やっぱりか、俺もセイクリッド・ギア 神器持ってるんだ。

対して役に立っていないけど。いまのところは」

イツセーの告白にアーシアは目を丸くしていた。

「じゃあユウスケさんも……」

「いや俺はセイクリッド・ギア 器を宿していないよ

似たような力は手に入れたけど、これは別の力らしいしね」

「ははは、なんか俺の効果とかまあだ分からないし、

ユウスケみたいに変身するわけでもないからな。

それに比べたら、アーシアの力はすごいよ。これって、

人や動物、俺達みたいな悪魔まで治せるんだね」

少しして、彼女の頬を一筋の涙が流れる。

それは一度だけではなく、徐々に流れ出した。

彼女はその場で咽び泣き出した。

「おい、イツセー何泣かしてんだよ！」

「え、やっぱり俺のせいなのか？ご、ごめんよアーシア」

俺達はどうしたらいいか分からず、アーシアを連れて
座れる場所を探した。

街路樹に設けられたベンチへ俺とアーシアは腰をおろす。

「すみません二人は悪くないんです。私が勝手に泣いてるだけです」

「そこまで泣くつてことは君に何かあったんでしょ」

「良ければ俺達に話してくれよ」

そこで彼女の口から語られたのは「聖女」と祭られた少女の末路だ。欧州のとある地方で生まれた少女は生まれてすぐに両親から捨てられた。

捨てられた先の教会兼孤児院でシスターと他の孤児達と共に育てられる。

子供の頃から信仰深く育てられた少女の身に力が宿ったのは、八つの頃だ。偶然、負傷をした子犬のケガを不思議な力で治療したところをカトリック教会の関係者に見つけられる。それから、少女の人生は変わりだす。

少女は、カトリック教会の本部に連れて行かれ治癒の力を宿した「聖女」として、担ぎ出された。

訪れる信者に加護と称して、体の悪い所を治療してあげる。噂は噂を呼び、少女は多くの信者から「聖女」として崇められた。

少女の意思など関係なしに。

待遇に不満はなかった。教会の関係者は良くしてくれるし、ケガをした人を治すのは嫌いではない。

自分の力が役に立つのが嬉しかったぐらいだ。

神様が授けてくれたものに少女は感謝した。

だけど、少しだけ寂しかった。

少女には心を許せる友人が一人もいなかったからだ。

どの人も優しくしてくれて、大事にしてくれる。

だが、誰も少女の友達になつてくれる人は居なかった。理解していた。

彼らが裏で自分の力を異質なものを見るような

目で見ていることを。人間ではなく、

まるで、「人を治療できる生物」のような感じで。

ある日、転機が訪れる。

たまたま少女は自分の近くに現れた悪魔を治療してしまっただ。

ケガをしていた悪魔。少女は見捨てられなかった。

悪魔といえど、ケガをしているなら、

治さなくちゃいけない。

生来の優しさがそうさせたのだろう。

それが少女の人生を反転させた。

その光景を偶然見ていた教会関係者の一人が、

それを内部に報告する。

内部の司祭は、その事実に驚愕した。

「悪魔を治療できる力だと?!」

「そんなバカなことがあるはずがない!」

「治療の力は神の加護を受けた者にしか

効果を及ぼせないはずだ!」

そう。治療の力を持った者は世界の各地にいた。

けれど、悪魔を治療する力は規格外だった。

治療の力は悪魔と墮天使には効果がない

というのが常識として教会内部で認知されていたからだ。

事例は過去にもあったようだ。

神の加護を受けない悪魔、そして墮天使すらも治療できる力。

しかし、それは「魔女」の力として恐れられていた。

そして教会の司祭達は少女を異端視するようになる。

「悪魔を癒す魔女め!」

聖女として崇められた少女は、悪魔を治療できるというだけで

今度は「魔女」と恐れられ、呆気なくカトリックから捨てられた。

行き場のなくなつた少女を拾つたのは極東にある

「はぐれ悪魔祓い」^{エクソシスト}の組織。

つまり、墮天使の加護を受けなければならなくなつただ。

間違つても少女は一度も神への祈りを忘れたことなどない。

感謝も忘れたこともない。なのに少女は捨てられた。

神は助けてくれなかったんだ。

一番シヨックだったのは、教会で自分を庇ってくくれる人が一人も居なかったこと。

少女の味方は誰もいなかった。

「…きつと、私の祈りが足りなかったんです。

ほら、私、抜けているところがありますから。

ハンバーガーだって、一人で買えないぐらい

バカな子ですから」

少女 アーシアは笑いながら、涙を拭った。

俺は、かける言葉を失っていた。

想像を絶する彼女の過去を知り、

どうやって声をかけていいか

分からなくなっていたんだ。

先ほどのように、彼女は悪魔の傷ですら

治してしまう治療の力を持った神セイクリッド・ギア 器 所有者だ。

「これも主の試練なんです。私が全然ダメなシスターなので、

こうやって修行を与えてくれていているんです。

いまは我慢のときなんです」

笑いながら自分に言い聞かせるようにアーシアは言う。

もう、それ以上は言わなくてもいいんだよ…

「お友達もいつかたくさんできると思っていますよ。

私、夢があるんです。お友達と一緒にお花を買ったり、

本を買ったりして…おしやべりして…」

彼女は涙を溢れさせていた。

見ていられないほどだった。

きつと、ずっと我慢してきたんだ。

ずっとずっと自分の意思を心の奥へ引込めて、

神の加護を待っていたんだ。

おい。おい、神様！

どういうことだよ!?なんでこの子を救わないんだよ!

誰よりもあんたの救いを求めるあの子を!

誰よりもあんたへの敬意を払っているあの子を！
何で何もしてくれないんだ！

俺は神様のことは何も知らないし、信仰もしてない
しかも悪魔だしな。

「セイクリッド・ギア
だけど、声をかけるぐらい俺にだってできる。」

神 器はあんたが

与えたものだろう！

そのせいで不幸になるなんて

こんなのないだろう！

それなら俺は、俺のやりたいことをやるだけだ！

俺は彼女の手を取る。涙に濡れる彼女の目を

真つ直ぐ見つめながら俺は言う。

「アーシア、俺達が友達になってやる。」

いや、俺達、もう友達だ」

俺の言葉にアーシアはキョトンとしている。

「悪魔だけど、大丈夫だ。アーシアの命なんて

取らないし、代価もいらぬい！

気軽に遊びたいときに俺を呼べばいい！

あー、携帯の番号も教えてやるからさ」

「ああ、俺だって友達だまたユウスケと

俺とアーシアで遊びに行こう」

「…どうしてですか？」

「どうしてもこうしてもあるか！

今日一日俺とイツセーとアーシアは

遊んだろう？話したろう？

笑いあつたろう？なら、俺達は友達だ！

悪魔だとか人間だとか、

神様だとかそんなの関係ない！俺達は友達だ!!」

「…それは悪魔の契約としてですか？」

「違うさ！俺達は本当の友達になるんだ！わけの

わからないことは抜きにして！

話したいときに遊んで、買い物だつて付き合うさ」

我ながら下手な会話だと思ふ。

けれど、アーシアは口元を手で押さえながら、再び涙を溢れ出させていた。

でも、今度の涙は哀しそうなものではない。

「…ユウスケさん。私、世間知らずです」

「これから俺と一緒に町へ繰り出せばいいさー」

いろんなものを見て回れば、そんなこと問題ないさ」

「…日本語もしゃべれません。文化もわかりませんよ?」

「俺とユウスケで教えてやるよ!」

ことわざまで話せるようにしてやらあ!俺達に任せろ!

なんなら日本の文化遺産でも見て回ろうぜ!

サムライ!スシ、ゲイシャだぞ!」

「…友達と何を喋っていいかもわかりません」

俺はアーシアの手を強く握ってやる。

「今日一日、普通に話せたじゃないか。それでいいんだよ。

俺達はもう友達として話していたんだ」

「…私と友達になってくれるんですか?」

「ああ、これからもよろしくな、アーシア」

その言葉に彼女は泣きながら笑って頷いてくれた。

これでOKだ。俺達は友達だ!

辛い過去の出来事。俺にはどれくらい辛かったのかはわからないかもしれない。

でも、これから彼女を楽しませる自信はある!

悪魔とシスターの友達でもいいじゃないか。

最初はダメな関係だとは思ったけど、

そんなもの、あんな話を聞いたら関係無い。

俺はこの子と絶対に友達としてこれからも出会う。

それは誰にも邪魔はさせない。

俺達がアーシアを守る!

「無理よ」

俺の心中を否定するかのよう
に、
第三者の声が入った。

声が出た方向へ顔を向けた時、俺は絶句した。
そこにはよく知った顔があったからだ。

天野夕麻の姿がそこにあつたからだ。

「ゆ、夕麻ちゃん…」

イツセーの驚いた声音に、

彼女はクスクスとおかしそうに笑っている。

「へえ。生きてたの。しかも悪魔?、

最悪じゃないの」

「…レイナーさま…」

アーシアが天野夕麻をそう呼んだ。

レイナーレ? ああ、そうか、忘れていたよ。

天野夕麻は墮天使だ。

なるほど、墮天使レイナーレ。それが彼女の本当の名前か

「…墮天使さんが、何か用かい?」

イツセーが話しかけると彼女は嘲笑する。

「汚らわしい下級悪魔が気軽に私へ話しかけないで
ちようだいな」

墮天使は心底汚らわしいものを見るかのような
侮蔑的な目で俺を睨む。

「その子、アーシアは私たちの所有物なの。返して

もらえるかしら? アーシア、逃げてても無駄なのよ?」

逃げる? どういうことだ?

「…嫌です。私、あの教会へは戻りたくありません。

人を殺すところへ戻りたくありません。

…それにあなたたちは私を…」

はつきりとアーシアは嫌悪の言葉を返す。

何があつた? あの教会で何かあつたのか?

「そんなこと言わないでちようだい、

アーシア。あなたの神 セイクリッド・ギア 器

は私たちの計画に必要なのよ。ね、私と一緒に帰りましょう？

これでもかなり捜したのよ？あまり迷惑を掛けないでちょうだい」
近づいてくるレイナーレ。

アーシアは俺の陰に隠れる。

彼女の体は恐怖で震えていた。

俺も彼女を庇うように前へ出る。

「待てよ。嫌がってるだろう？レイナーレさんよ、

あんた、この子を連れて帰ってどうするつもりだ？」

「下級悪魔、私の名を呼ぶな。私の名が汚れる。

あなたに私たちの間のことは関係ない。

さつさと主の元へ帰らないと、死ぬわよ？」

レイナーレは手に光を集めだす。

槍か？

一度、それで俺達は殺されている。

「はああ」

俺の体が白の戦士へと変貌する。

「せ、セイクリッド・ギア！」

イツセーが天に向かって叫ぶと、左腕が光を覆い、
赤い籠手へ変貌していく。

例のポーズをとらなくってもセイクリッド・ギア神器

を発動するように練習していたからな。

イツセーの神セイクリッド・ギア器を見て、

レイナーレは一瞬虚を衝かれるが、すぐに哄笑を上げる。

「上の方々にあなたの神セイクリッド・ギア器

が危険だからと以前命を受けたわけだけれど、

どうやら、上の方々の見当違いだったようね！」

心底笑うように墮天使は嘲笑う。

何がおかしいんだ？

「あなたの神セイクリッド・ギア器ありふれた

もののひとつなのよ『トウワイイス・クリティカル龍の手』

と呼ばれるもの。所有者の力を一定時間、倍にする力を

持っているけれど、あなたの力が倍になったところで
全く怖くないわ。そちの白い方も鎧の神セイクリッド・ギア 器

にしては、防御力は皆無のようだし下級悪魔にお似合いの代物ね」
痛い所をつかれたな。だがそれでも、アーシアを連れて逃げる
位はできる！

だが、何処へ逃げる学校か？

だめだ。部長たちに迷惑をかける。

俺の家？家族にどう説明すればいいんだ？

：ちくしよう。俺、友達って言ったのにアーシアを
どうするかわからねえ。

いや！そんなことは後で考える！

まずは目の前の墮天使を倒す！

セイクリッド・ギア
「神器！動きやがれ！」

俺の力を倍にしてくれんだろう!! 動いてみせろ!」

『Boost!!』

イツセーの籠手から音声が発せられた。

ズンツ。

鈍い音がする。俺の腹部に突き刺さるものがあった。

光の槍だまた投げられた。

横を見ればイツセーも同じように腹に槍をくらっていた。

「力が倍になっても、こんなに弱めて撃った槍すら跳ね返せない。

一の力が倍の二になったところで、私との差は埋められないわ。

よくわかったかしら？下級悪魔達」

倒れ込む俺達。

ヤバイ。光は毒。悪魔にとって毒なんだ。

しかも腹部、これは。

激痛と死を覚悟した俺達だが、体に痛みが走ることはなかった。

俺達の体を緑色の光が包み込んでいたからだ。

見れば、俺達の体をアーシアが治療してくれていた。

俺達の腹部へ手を当てて治療してくれている。

光の槍が小さくなり、次第に消えていく。

痛みは一切感じない。むしろ、

逆にアーシアの温かさを感じるぐらいだ。

「アーシア。その悪魔を殺されたくなかったら、私と共に戻りなさい。あなたの神セイクリッド・ギア 器

は我々の計画に必要なのよ。その力、『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑』

はその下級悪魔くんの神セイクリッド・ギア 器と

違って希少な神セイクリッド・ギア 器なの。

応じないのなら、その悪魔を殺すしかないわ」

レイナーレは冷酷な提示をしてくる。

俺達の命が人質か！そうはさせるか！

「うるせえ！お前なんかに」

「わかりました」

俺の言葉を遮って、アーシアは墮天使の提出を受け入れる。

「アーシアー！」

「ユウスケさん、イツセイさん。今日は一日

ありがとうございました。本当に楽しかったです」

彼女が浮かべる満面の笑み。

俺達の腹部の傷は完全に塞がった。

それを確認すると、アーシアはレイナーレ

の方へ進みだす。

「いい子ね、アーシア。それでいいのよ。問題ないわ。

今日の儀式であなたの苦惱は消え去るのだから」

レイナーレはいやらしい笑みを浮かべていた。

儀式ってなんだ。不吉な単語じゃないか。

俺はアーシアへ叫ぶ。

「アーシア！待てよ！俺達友達だろ！」

「そうだ！行く必要はないさ」

「はい。こんな私と友達になってくれて本当に

ありがとうございます」

俺はアーシアを守ると誓ったんだ。

「お、俺がアーシアを！」

振り返った彼女の表情は、いまだ満面の笑みに包まれている。その笑顔に俺は一瞬見入ってしまった。

「さようなら」

それが彼女の別れの言葉だった。

アーシアの体をレイナーレの黒い翼が覆う。

「下級悪魔、この子のおかげで命拾いしたわね。

次に邪魔をしたら、そのときは本当に殺すわ。

じゃあね、あなたたち」

嘲笑う堕天使は、アーシアを抱いたまま

空高く飛び上がる。

そして、空のかなたへ消え去ってしまった。

後に残されたのは、黒い羽根と俺達、

そして、ラツチューくんの人形が路面に落ちていた。

何も出来なかった。

何が「アーシアを守る」だよ。

俺は地面に膝をつき、何度も何度も拳を

アスファルトへ打ち付けた。

激しく歯齧みして、悔しくて涙が流れてくる。

「やめろユウスケ…もう手が！」

ちくしよ。ちくしよ。

ちくしよおおおおおおおおおおおおおつ！

「アーシア…」

俺は空へ消えた友達の名を呼んだ。

返事は返ってこない。

「アーシアアアアアアアアアアアアアアアアツツ！」

俺は自分の非力さを呪った。

第8話「教会」

パン！パン！

部室に乾いた音が二回こだました。

音の発生源は俺とイツセーの頬だ。

叩かれた。俺達はリアス先輩に頬を平手打ちされた。

リアス先輩の顔は険しい。

「何度言ったら分かるの？ダメなものはダメよ。」

あのシスターの救出は認められないわ」

アーシアを助けられなかった俺達は、

一度学校に赴き、事の詳細をリアス先輩へ報告した。

報告した上で俺達は、あの教会へ行くことを提案した。

もちろん、アーシアを助けるためにだ。

しかし、リアス先輩はその件に関して一切関わらないと言ってきた。

納得できない俺達はリアス先輩へ無礼承知で

詰め寄った。そして、叩かれたわけだ。

初めて叩かれた頬は、予想以上に痛かった。特に心が。

リアス先輩を裏切る事ばかり言ってるからな。

それでも譲れないものがある。

「なら、俺達二人でも行きます。あいつが言っていた。

儀式つてのが気になります。堕天使が裏で何かするに決まっています。」

アーシアの身に危険が及ぶ可能性がありますから」

「貴方達は本当にバカなの？行けば確実に殺されるわ。」

もう生き返ることは出来ないのよ？それがわかっているの？」

リアス先輩は冷静さを振る舞いながら、諭すように俺達へ言ってくる。

「行かなければ、後悔します！」

「貴方達の行動が私や他の部員にも多大な影響を及ぼすのよ！」

貴方達はグレモリー眷属の悪魔なの！それを自覚なさい！」

「では、俺達を眷属から外して下さい。

俺達個人であの教会に乗り込みます」

「そんなことできるはずないでしょう！」

貴方はどうしてわかってくれないの!?!」

初めてリアス先輩の激昂した姿を見た気がする。

俺達は、本当に迷惑ばかりかけているな。

でも、やっぱり譲れないな。だって

「俺達はアーシア・アルジエントと友達になりました。

アーシアは大切な友達です。俺は友達を見捨てられません！」

「ユウスケの言う通りです俺達の意味は何を言われようと変わりませ
ん」

「…それはご立派ね。そういうことを面と向かって

言えるのはすごい事だと思っわ。

それでもこれとそれは別よ。貴方達が考えている以上に

悪魔と墮天使の関係は簡単じゃないの。

何百年、何千年と睨み合ってきたのよ。

隙を見せれば殺されるわ。彼らは敵なのだから」

「敵を消し飛ばすのがグレモリー眷属じゃなかったんですか？」

「……………」

俺とリアス先輩は睨み合う。

視線はずらさない。じっと正面から見つめる。

「あの子は元々神側の者。私達とは根底から相容れない存在なの。

いくら墮天使のもとへ降ったとしても

私達悪魔と敵同士であることは変わらないわ」

「アーシアはあの子は敵じゃないです！」

俺は強く否定する。

あんな誰よりも優しい子が敵なわけがない！

「だとしても私にとっては関係のない存在だわ。

ユウスケ、イツセー、彼女の事は忘れなさい」

そんなこと言われて忘れられる程俺は薄情じゃあない！

そこへそそくさと朱乃さんが部長に近づき、耳打ちする。

何かあったのか？朱乃さんの表情も険しい。

でもそれは俺とリアス先輩の言い合いに関してではなさそうだ。朱乃さんの報告を耳にしたリアス先輩の表情が一層険しくなる。やはり、何かあったみたいだ。

リアス先輩は俺をちらりと一目見た後、今度は部室にいる部員全員見渡すように言った。

「大事な用事が出来たわ。私と朱乃はこれから少し外へ出るわね」

ッ！

そ、そんな。

「リアス先輩、話はまだ終わって」

言葉を遮るように、リアス先輩は人差し指を俺の口元へ。

「ユウスケ、イツセー貴方達にいくつか話しておくことがあるわ。

まず、ひとつ。イツセーは『^{ポーン}兵士』を弱い駒だと

思っているわね？どうなの？」

イツセーはリアス先輩の問いを静かに肯定し、頷いた。

「それは大きな間違いよ。『兵士』には他の駒にはない

特殊な力があるの。それが『プロモーション』よ」

やはり、チェスと同じで、プロモーションが出来るのか。

「実際のチェス同様、『兵士』は相手陣地の最深部

へ赴いた時、昇格することができるの。

『^{キング}王以外のすべての駒に変化することが可能なのよ。

ユウスケ、イツセー、貴方は私が『敵の陣地』と認めた場所の

一番重要なところへ足を踏み入れたとき、『^{キング}王』

以外の駒に変化することができるの」

プロモーションの力で騎士の速さ、

戦車のパワーを手に入れることが出来るのか。

「貴方達は悪魔になって日が浅いから最強の駒である『女王』

へのプロモーションは負担がかかって、現時点では無理でしょう。

けれど、それ以外の駒なら変化できる。心の中で強く

『プロモーション』を願えば、あなたの能力に変化が訪れるわ」

この力とベルトの力を合わせれば、

俺はまだ強くなれる。あの神父でも戦えるはずだ。

「それともうひとつ。セイクリッド・ギア神器について。」

イツセー、セイクリッド・ギア神器を使う際、これだけは覚えておいて」

リアス先輩がイツセーの頬を撫でている。

「想いなさい。セイクリッド・ギア神器は想いの力で動き出すの。」

そして、その力も決定するわ。あなたが悪魔でも、想いの力は消えない。

その力が強ければ強いほど、セイクリッド・ギア神器は応えるわ」

想いの力か、俺のベルトも想いの力で赤の戦士になれるのかもな。

「最後に、絶対にこれだけは忘れない事。『兵士』でも『王』を取れるわ。」

これは、チエスの基本よ。それは悪魔の駒でも変わらない事実なの。

あなたは、強くなれるわ」

それだけ言い残すとリアス先輩は朱乃さんと共に魔方陣からどこかへ転移してしまった。

部屋に残されたのは俺とイツセーと木場と小猫ちゃんのみ。

「行こうイツセー」

俺は意を決してその場から去ろうとする。

「二人共」

木場が呼び止める。

「行くのかい？」

「ああ、行かないといけない。アーシアは友達だからな。」

俺達が助けないといけないんだ」

「…殺されるよ？いくらセイクリッド・ギア神器や戦う力

を持つていても、プロモーションを使っても、

エクソシストの集団と墮天使を二人で相手にはできない」

正論だな。

そんなことはわかっている。重々承知だ。

「それでも行く。男なら出来る、出来ないではなく

やるか、やらないかだ！やらないと絶対に後悔する。
たとえ死んでもアーシアだけは逃がす」

「いい覚悟、と言いたるところだけど、やっぱり無謀だ」
「だったら、どうすりゃいいってんだー！」

怒鳴るイツセーに木場はハッキリと言ってくる。

「僕も行く」

「なっ…」

「ふっ 頼もしいな」

イツセーは予想外の木場からの一言に言葉を一瞬失う。
そりゃそうか。まったくもって予想に反した言葉だった。

「僕はアーシアさんをよく知らないけれど。」

君達は僕の仲間だ。部長はああおっしゃったけど、
僕は君達のことを尊重したいと思う部分もある。

それに個人的に堕天使や神父は好きじゃないんだ。

憎いほどにね」

…こいつはこいつで何かの過去があるんだろうな。

「部長もおっしゃっていただろう？ 『私が敵の陣地と認めた
場所の一番重要なところへ足を踏み入れたとき、

王以外の駒に変ずることができるの』って。これって、
遠回しに『その教会をリアス・グレモリーの敵がいる

相手陣地だと認めた』ってことだよね」

「あっ」

イツセーはやっと気づいてようだな。

「今更気づいたのかよ」

「ユウスケは気づいてたのか？」

「当たり前だろう。途中から論点ずれてたろ」

「部長は君達に行ってもいいって遠回しに認めてくれたんだよ。

もちろん、それは僕にフォローをしろって意味合いだとも思っ
けど。

部長に何か考えがあるのだろうね。じゃなければ、

君達を閉じ込めてでも止めると思うよ」

木場は苦笑する。

：リアス先輩。感謝します。

ここにいないリアス先輩に感謝していると俺のもとへ、
小柄な少女が一步前へ出る。

「：私も行きます」

「なっ、小猫ちゃん？」

「君も来てくれるのか」

「：三人だけでは不安です」

「感動した！俺は猛烈に感動しているよ、小猫ちゃん！」

少女の申し出にイツセーは感無量となつてしまっていた。

「あ、あれ？ぼ、僕も一緒に行くんだけど…？」

放置された木場がなんとも寂しげに笑みを引きつらせている。

木場も感謝しているよ。

「んじゃ、四人でいっちょ救出作戦といきますか！」

「ああ、待ってるよアーシア！」

俺達四人は部屋を出て教会へ向かう。

その途中俺達に声を掛ける人物がいた。

「あら、ユウスケにオカ研のみんなじゃない」

声のした方へ向くとそこには、奈美先輩が立っていた。

「奈美先輩どうしてここに？」

「今日の依頼の事でリアスに聞きたいことがあったのよ」

「すみません。部長、今日は悪魔の仕事はできません。

やらないといけないことが出来たので」

リアス先輩を訪ねてきた奈美先輩に返答する。

「その目は何かあった様ね。いいわ依頼はまた今度にするわ」

「すみません。部長前に言っていた墮天使と決着をつけてきます」

「そう、なら必ず生きて帰って来なさい。待ってるから、絶対よ」

「はい！わかってます！」

俺は奈美先輩に返答しイツセー達を連れて教会へ向かう。

「いい先輩だね」

「わかってるよ。必ず皆で無事に帰ってくるぞ！」

「「ああー（はいー）」」

ー○○ー

すでに空は暗く、街灯の光が道を照らす時間となっている。

俺とイツセー、木場、小猫ちゃんの四人は教会が見える位置で様子を伺っていた。人の出入りは無いようだ。

けれど、近づけば近づくほどに悪寒が走る。

「この気配からして、堕天使が中にいるのは確実だよ
なるほど、レイナーレだけならいいが。」

「これ、図面」

木場が路面に建物の見取り図を広げた。

それは教会の図面だった。こんなものいつの間にも…。

「まあ、相手陣地に攻め込む時のセオリーだよね」
にこやかに笑う木場

こうなることが分かってたのか?! 随分前から用意してたんじゃない
? ?

前準備もせずに突撃をかまそうとしてた俺達が恥ずかしくなっ
てくるよ。

「聖堂のほかに宿舎。怪しいのは聖堂だろうね」

と木場は、図の聖堂を指さす。

「宿舎は無視していいってことか?」

イツセーが木場の推測を不思議に思っていた。

「おそろくね。この手の『はぐれ悪魔祓い』の組織は決まって

聖堂に細工を施しているんだ。聖堂の地下で怪しげな儀式を行う
ものなんだよ」

映画のお約束じゃあるまいし、信じられないがな。

「どうしてだ?」

俺は疑問を口にしていった。木場は苦笑している。

「今まで敬っていた聖なる場所、そこで神を

否定する行為をすることで、自己満足、

神への冒瀆に酔いしれるのさ。愛していたからこそ、
捨てられたからこそ、憎悪の意味を込めて

わざと聖堂の地下で邪悪な呪いをするんだよ」

イカレてるな。いや俺があつた神父はもう充分に

イカれていたか。熱心な信徒を捨てる神にも

問題があるのかもな。

アジアの件で神様にはいい印象はないから

そう思うだけかもな。

「入口から聖堂までは目と鼻の位置。一気に行けると思う。

問題は聖堂の中へ入り、地下への入口を探すことと、

待ち受けているであろう刺客を倒せるかどうか」

刺客：。

それを聞いた時、俺は嫌な予感がしていた。

月明かりに照らされながら、俺達は教会入口で顔を見合わせて、領

き合った。

覚悟は出来ている！

あとは乗り込むだけだ！待ってるよアジア必ず助けてやるから

な！

ダッ！

入口を潜り、一気に聖堂まで走りぬく。

この時点で堕天使は俺達が乗り込んできたことを察知するという。

もはや、後戻りはできない。先に進むだけだ！

勢い良く両開きの扉を開け放ち、聖堂の中へ足を踏み入れた。

長椅子と祭壇。見た感じは普通の聖堂だ。

ロウソクの灯りと電気の灯りが内部を照らしている。

周りを見渡すとその中で、まともじゃない部分もあった。

十字架に磔となつている聖人の彫刻。

その彫刻の頭部が破壊されていた。

なんとも不気味な雰囲気漂っていた。

パチパチパチパチ。

突然、聖堂内に鳴り響く拍手。

柱の物陰から神父らしき人影が現れる。

「ご対面！ 再会だねえ！ 感動だねえ！」

あの時の白髪のクソ神父だ！

確かフリードと名乗っていたか？

こいつが刺客か。まあ本拠地なんだ居るのは当然か。相変わらずふざけた笑みを浮かべている。

「俺としては二度会う悪魔は居ないってことになってんだけどさ！

ほら、俺、メチャクチャ強いんで悪魔なんて初見で

チョンパなわけですよ！一度会ったらその場で解体！

死体にキスしてグッドバイ！それが俺の生きる道でした！

でも、お前らが邪魔したから俺のスタンスがハチャメチャ

街道まっしぐら！ダメだよねえ。俺の人生設計を

邪魔しちゃダメだよねえ！だからさ！ムカつくわけで！

死ねと思うわけよ！つーか、死ねよ！

このクソ悪魔どもがよおおおツツ！」

喜怒哀楽をいっぺんに表した後、神父は一気に激昂する。

懐から以前見た拳銃と柄だけの剣を取り出した。

ブイーン。

光の刃を出現させる。あれで切られると厄介だな。

銃弾も危険だ。

ただ、あの時とこちらは違う。四対一だ。

「てめえら、アーシアたんを助けにきたんだろう？

ハハハ！あんな悪魔も助けちゃうビツチな子を救うなんて

悪魔さまはなんて心が広いんでしょか！てか、

悪魔に魅入られている時点であのクソシスターは

死んだ方がいいよね！」

「死ぬ？どういう意味だ！アーシアはどこだ！」

「んー、その祭壇の下に地下への階段が隠されてございます。

そこから儀式が行われている祭儀場へ行けますぞ」

祭壇を指さしながら、あっさり地下の隠し場所を吐いた。

こいつ、本当に刺客の自覚があるのか？

それともこの人数差で俺達を殺せる算段があり、

話しても問題無いという自信からか。

「はあああッッ！」

腰にベルトを出現させベルトの発光と共に

俺の姿は白の戦士に姿を変える。

「セイクリッド・ギアア！」

イツセーの叫びに呼応して、左腕に赤い籠手が装着される。

木場も鞘から剣を抜き放つ。

そこで、小猫ちゃんの方へ視線を向けると驚きの光景が飛び込んできた。

ゴゴゴ…。

小猫ちゃんが、自身の何倍もあるであろう長椅子を持ち上げている。

「…潰れて」

ブウン！

小猫ちゃんは神父へ向けて長椅子を投擲する。

これが、『戦車』である小猫ちゃんの戦い方かなんとも豪快だな。

「わーおー！しゃらくせえ！」

神父は小躍りしながら、投げ飛ばされた長椅子を光の剣で一刀両断した。

両断された長椅子が床へ叩き付けられる。

「そこだ」

ダッ！

木場が飛び出したと思ったら、すでに消えていた。

目では追えない程のスピードだ！

木場の剣と神父の剣が火花を散らす。

光とはいえ、硬度があるのか、木場が剣で正面から

斬りつけても金属音を出すぐらいだからな。

「んー！…んー！邪魔くせえ！しゃらくせえ！てめえら、

なんでそんなにウザイのよ！もうチョベリバ！

死語でゴメンね！死後に許してちょよ！」

音もなく発射される銃弾を自慢の足で避けながら、

木場は相手への攻撃の手を休めない。

神父の攻撃をすべて避ける木場はすごいと思う。

だが、悪魔とまともにやり合っている神父も

相当な腕の持ち主だ。

何度も木場の斬撃を受け止めている。

俺では木場の動きを捉えきれないが、神父は捉える事が出来る様だ。

あの神父は俺一人ではどうこうできる相手ではないってことだ。

木場と神父は遂に鏝迫り合いとなり、両者が睨み合う。

「やるね。かなりキミ強いよ」

「アハハ！あんたもやるねえ！『騎士』か！無駄のない動きだぜ！

もう最高！そうそう、これこれ。最近、

こんなにいいバトルをしてなくてさあ！

ちよいと泣きが入ってたところなんですわ！んー！んー！ぶっ殺す！」

「じゃあ、僕も少しだけ本気を出そうかな」

なっ！ まだ本気じゃなかったのか！

「喰らえ」

低い声音。普段の爽やかな木場の口から出たとは

思えないほどの迫力があつた。

刹那、木場の剣から黒いモヤが出現する。それは剣全体を覆いだした。

形容するならそれは闇だ。

闇が木場の剣となつている。

闇の剣は鏝迫り合っている神父の光の剣を浸食しだした。

「な、なんだよ、こりゃー！」

神父も驚いている様だ。

『ホーリー・インレイザー光 喰 剣』光を食らう闇の剣さ」

「て、てめえも神 セイクリッド・ギア 器 持ちか!?!」

木場も神 セイクリッド・ギア 器を持っていたのか。

神父の光の剣は完全に木場の剣に食われて、光を失い、刃を形成できないほどとなつた。

今だ！

俺とイツセーは駆け出した。

セイクリッド・ギア
「神器！動けえええー！」

『Boost!!』

イツセーの籠手の宝玉から音声が発生される

目標は神父！

その神父が俺達の動きに気づいた。

「だからああ！しゃらくさいんだってばあー！」

光の弾丸が込められた銃口をこちらへ向ける。

音もなく光の弾丸が連射される。

ここで！

「プロモーションッ！『戦車』ッ！」

バシンン！バシンン！

光の弾丸は俺達の体を打ち抜くことは出来ずに無へと還った。

「！プロモーション！お前達「兵士」か！」

酷く驚いた様子の子の神父。

ああ、俺達は『兵士』！お前をぶん殴る「兵士」だ！

『戦車』の特性！有り得ない防御力と！」

俺とイツセーの拳が神父の顔面に食い込んだ、

と思っただが、俺の拳に硬い感触が残った。

だが、一気に吹っ飛ばす！

神父が後方に大きく吹き飛ばす。

「バカげた攻撃力だ！」

「あの時はよくもアジア殴ってくれたな。これはそのお返しだ」

倒れた神父だが、口から血をペツと床へ吐き出すとよろよろ立ち上

り始めた。

思っただよりも軽傷だ『戦車』にプロモーションしたが、

小猫ちゃん程の攻撃力はまだないようだ。

いや、よく見れば神父の持つ武器がボロボロになっていた。

拳を食らう寸でのところであれを盾にしたのか？

硬い感触はそれだな。とんでもない反射神経だな。

「…んー。…あらら、クズ悪魔に殴られたうえ、わけわからんこと
言われてますよ、俺ちゃんつてば…。っけんな」

神父は怒声を張り上げた。

「ふざけんなよツ!!クソがああああっ!何、悪魔の分際で
チヨーシくれてんだよおおおおおつ!殺す!絶対にだ!

ぶつ殺す!徹底的に切り刻みまくつてやるよ、クソがあああ!」

神父は懐から別の柄だけの剣を取り出す。

まだあったのか。

しかし、神父の周囲を囲うように俺達が立っていた。

それに気づき、目で周りを見渡す神父。苦笑いしだす。

「おーおー。これはもしかしてピンチってやつですかね?」

んー、俺的に悪魔に殺されるのは勘弁と思う心情なので、
退散したいねえ。悪霊退散できないのが心残りだけどよお、
でも死ぬのは嫌だよね!」

神父は懐から丸い物体を取り出したと思ったら

それを床に叩きつけた。

瞬間、眩い光が俺達の目を襲う。

目くらましか!

視力が回復した頃、周りを見渡すと神父の姿がなかった。

すると、どこからか神父の声だけが聞こえてくる。

「おい。そこの雑魚悪魔…ユウスケにイツセーくんだったけ?」

俺、おまえらにフォーリンラブ。絶対に殺すから。絶対だよ?

俺のこと殴ったクソ悪魔は絶対に許さないよ?んじや、ばいちゃ

…逃げやがったか。しかも、捨て台詞付きで。

そう思っていたが、これ以上あの神父に関わってもいられない。

俺達は頷き合うと、祭壇の隠し階段へ足を向けた。

―○●―

祭壇の下にあった地下への階段を降りる俺達四人。

地下まで電気が来ているようだ。

木場が先頭をつとめ、先へ進む。

階段を下りると、奥へ続く一本の通路だけが存在した。

両脇の壁には時折り扉があるがこれら地下室か。

「多分、この道の奥……。あの人の匂いがするから……」

小猫ちゃんが道の先を指差して眩く。

奥へ進むと、大きな扉が現れる。

「あれか」

「おそらく、奥には墮天使とエクソシストの大群が

いると思う。覚悟はいい？」

木場の言葉に俺達は頷く。

「わかった。じゃあ、扉を」

俺達が扉を開け放とうとした時、扉の方が勝手に開きだした。重い音をたてながら、儀式場とやらの内部が見えてくる。

「いらつしやい。悪魔の皆さん」

墮天使レイナーレが部屋の奥から言葉をかけてきた。

部屋中、神父だらけだった。全員、

光の刃を発生させる剣を持っていた。

俺は奥の十字架に磔にされた少女を見て、叫んだ。

「アーシアアアア！」

俺の声に気付き、アーシアがこちらへ顔を向ける。

「……ユウスケさん？」

「ああ、助けに来たぞ！」

俺が微笑むと彼女は涙を流した。

「イツセーさん……」

「感動の対面だけれど、遅かったわね。今、儀式が終わる所よ」

「それはどういう？」

突然、アーシアの体が光出す。

「……あああ、いやあああああツツ！」

アーシアが絶叫を上げる。とても苦しそうだ。

「アーシアア！」

駆け寄りたいが、俺達を神父が取り囲む。

「邪魔はさせせん！」

「悪魔め！滅してくれるわ！」

「どけ！神父ども！お前らには用はないんだよ！」
バン！

大きな音。見れば、小猫ちゃんが神父の一人を殴り飛ばしていた。
「…触れないでください」

木場も闇の剣を抜き放つ。

「最初から最大で行かせてもらおうかな。僕、

神父が嫌いだからさ。こんなにいるなら、

遠慮なく光を食わせてもらおうよ」

木場の目は鋭く、冷徹な意思を感じられた。

闇の剣がどす黒い殺気を発していた。

「いやああああ…」

そうこうしているうちに、

アーシアの体から大きな光が飛び出してきた。

それをレイナーレが手につかむ。

「これよ、これ！これこそ、私が長年欲していた力！

セイクリッド・ギア

神器！これさえあれば、

私は愛をいただけるの！」

狂喜に彩られた表情でその大きな光を、レイナーレは抱きしめた。

途端に眩い光が儀式場を包み込む。

光が止んだとき、緑色の光を全身から発する堕天使がそこにいた。

「うふふ。アハハハハハ！ついに手に入れた！」

至高の力！これで、これで私は至高の堕天使となる！

私をバカにしてきた者達を見返すことができるわ！」

高笑いする堕天使。

俺とイツセーは構わずアーシア元へ駆け出す。

神父が行かせまいと行く手を阻むが、それを木場と小猫ちゃんが

フォローで道を切り開いてくれる。

木場の剣が神父の光の剣を食らい、武器を失った神父を

小猫ちゃんが怪力で打倒した。

そのコンビネーションは熟練されており、

二人の連携が一日二日で築き上げたものではない事を物語ってい

る。

「ありがとう二人とも！」

礫にされたアーシアはグツタリしている。

いや、未だ死んではない！

俺達は手足の拘束具を解き、彼女を抱き抱える。

「…ユ、ユウスケさん…」

「迎えにきたよ。アーシア。」

「…はい」

返事をする彼女の声はあまりに小さく、

生気を感じさせなかった。

まだ大丈夫だろうか？こんなことで…。

「無駄よ」

俺の心中を否定するかのようにレイナーレが冷笑を浮かべる。

セイクリッド・ギア
「神器を抜かれた者は死ぬしかないわ」

「っ！ なら神器を返せ！」

俺は怒鳴るが、墮天使は笑うだけだ。

「返すわけないじゃない。これを手に入れるために

私は上を騙してまでこの計画を進めたのよ？」

貴方達も殺して証拠は残さないわ」

「…くそ、夕麻ちゃんの姿が憎いぜ」

イツセーのその一言を聞いて、彼女は高笑いする。

「ふふふ、それなりに楽しかったわよ。あなたとの付き合いわ」

「…初めての彼女だったんだ」

「ええ、見ていてとても初々しかったわ。」

女を知らない男の子はからかいがいがあったわ」

「…大事にしようと思ったんだ」

「うふふ、大事にしてくれたわね。私が困ったことになったら、

即座にフォローしてくれた。私を傷つけないように。でも、

あれ全部私がわざとそういう風にしたのよ？だって、

慌てふためくあなたの顔が可笑しいんですもの」

「…初デート、ユウスケにも相談して念入りにプランを考えたとよ。」

絶対にいいデートにしようって思ったから」

「アハハハハ！そうね！とても王道なデートだったわ！

おかげでとてもつまらなかったわよ！」

「…夕麻ちゃん」

「うふふ、あなたを夕暮れに殺そうと思っていたから、

その名前にしたの。素敵でしょ？ねえ、イツセーくん」

「レイナーレエエエエエエエエエエツツ！」

「てめえはイツセーの純粹な恋心を踏みにじり

純情なアーシアを自分の目的の為に利用したよ

悪魔の俺はお前達から見れば「悪」だろう。

だが、そんな俺でも吐き気をする「悪」は分かる!! 「悪」とは、

てめえ自身の為だけに弱者を利用し踏みつける奴のことだ！

てめえだけは、この兵藤祐介がぜってえに許さねえぞ！」

「アハハハハ！腐ったクソガキが私の名前を気安く呼ぶんじゃないわよ！

できるものなら、やってごらんなさい」

今までの人生でここまでの外道に会うのは初めてだ。

こいつこそ、本当の悪魔じゃないか！

「二人共！…ここでその子を庇いながらでは形勢が不利だ！

一度上に上がってくれ！僕たちが道を開ける！さあ、早く！」

木場が神父を薙ぎ払いながら言う。

確かに。まだ神父がかなりいるし、この地下でアーシアを守りなが

ら墮天使と

戦うのは限界があるかもしれない。

俺はレイナーレをひと睨みすると、アーシアをお姫様抱っこして、

イツセーと共にその場から駆け出した。

「小猫ちゃん、二人の逃げ道を作るぞ！」

「…了解」

二人が邪魔をしそうな神父を薙ぎ倒していく。

中には二人の連携をかくぐって近づいてきた神父も

イツセーが殴り飛ばして道を開いていく。

二人のフォローもあつて、俺達は一気に儀式場の入口まで進むことができた。

「木場！ 小猫ちゃん！」

「二人共！ 早く来い！」

「先に行くんだ！ ここは僕たちで受け止める！」

「…早く逃げて」

「でも！」

「いいから行くんだ！」

「イツセー！ 俺達が居たら逆に足手まといだ！」

先に進むしかない！」

あの二人の強さはよく知っている。ここで死ぬはずがない。

二人を信じ、俺達は先へ進むしかない。

「木場！ 小猫ちゃん！ 帰ったら、絶対に俺の事はイツセーって呼べよ！」

絶対だぞ！ 俺達、仲間だからな！」

イツセーがそれだけを告げる。最後に見た二人はかすかに微笑んでいた気がした。

俺達はその場を後にして、そのまま一気に地下の廊下を駆け抜けていった。

第9話「変身」

階段を上りきり、俺はアーシアを抱えたまま、
聖堂へと出てきた。

「おい！ユウスケ、アーシアの様子がおかしいぞ！」
イツセーに言われアーシアを見ると、

顔が真っ青だった。俺は近くの長椅子に彼女を横にする。

「待ってくれよ！もうすぐアーシアは自由なんだ！」

俺達といつでも遊べるようになれるんだ！」

俺の言葉にアーシアが小さく微笑む。

そして、俺の手を取った。その手から生気は感じられず、
体温も失われつつあった。

「私、少しの間だけでも…友達ができて…幸せでした…」

苦しみながらもアーシアは微笑む。

「…もし、生まれ変わったら、また友達になつてくれますか…？」
「何を言っているんだ！そんな事言うなよ！これからも

楽しい所へ連れていくさ！アーシアが嫌がっても連れていく！

カラオケにゲーセンにボウリングだって！他にも

連れていってやるさ！」

涙が止まらなかった。

理解できてしまった。

この子は、死ぬ。

死んでしまうんだ。

わかっていてもそれを、否定したかった。

こんなこと、嘘に決まっていると。

「俺ら、ダチじゃねえか！ずっとダチだ！ああ、そうさ！

松田や元浜にも紹介するよ！あいつら、

ちよつとスケベだけどさ、すつげえイイ奴らなんだぜ！

絶対にアーシアの友達になつてくれる！絶対だぜ！

みんなでワイワイ騒ぐんだ！バカみたいにさ！」

「イツセーの言うとおりだ！木場や小猫ちゃんだって

友達になってくれるさ！二人ともアーシアの為に
ここまで一緒に来てくれたんだ皆で帰ろう！」

「…きつと、この国で生まれて…
ユウスケさんと同じ学校に行けたら…」

「行こう！俺達の学校に」

アーシアの手が俺の頬を撫でる。

「私の為に泣いてくれる…もう、何も…」

頬を触れている手が静かにゆつくりと落ちていく。

「…ありがとう…」

それが彼女の最後の言葉だった。

微笑んだまま、逝った。

力が抜ける。俺達はその場で呆然と彼女の死に顔を眺めていた。
涙が止まらない。

「なんでだ？　なんで、この子が死なないといけない？

こんないい子なんだぜ？　傷ついた相手なら誰でも治してくれる
優しい子なんだ。どうしてそんな子と今まで誰も友達になつて

あげなかつたんだ？　どうしてこんなタイミングで

俺達は出会つたんだ？」

俺はアーシアの死に後悔するばかりだった。

「なあ、神様！神様、いるんだろう！？悪魔や天使がいるんだ、
神様だっているんだよな！？見てるんだろう！？

これを見ていたんだろう！？」

イツセーは教会の天井に向かって叫ぶ。

誰かが答える訳もなく、それでも上に向かって叫び続ける。

「この子連れて行かないでくれよ！頼む！頼みます！

この子は何もしてないんだ！ただ、友達が欲しかっただけだよ！
ずっと俺達が友達でいます！だから、頼むよ！神様！」

天へ訴えかけても応じてくれる者はいない。

俺はイツセーが叫ぶなか只涙を流すだけだった。

「俺達が悪魔になつたから、ダメなんすか!？」

この子の友達の俺達が悪魔だからナシなんすか!？」
今は立ち上がるしかない。後悔を今更しても、
彼女は笑顔を見せてくれない。

「あら、こんなところで悪魔が懺悔？」

それともお願いでもしてたのかしら？」

俺達の後方からレイナーレの声が聞こえた。

振り返ると、俺達を嘲笑する墮天使の姿があった。

「見てごらんなさい。ここへ来る途中、下で、『騎士』

の子にやられてしまった傷よ」

レイナーレが自信の傷口へ手を当てる。

淡い緑色の光が発せられ、傷を塞いでいく。

「見て、素敵でしょう？どんなに傷ついても治ってしまう。

神の加護を失った私達墮天使にとってあの子の神セイクリッド・ギア器は素晴らし

い贈り物だったわ」

木場達は無事なのか？気になるが、

今度は怒りに飲まれたりしない。

「墮天使を治療できる墮天使として、

私の地位は約束されたようなもの。偉大なるアザゼルさま、

シエムハザさま、お二方の力となれるの！

こんなに素敵なことはないわ！ああ、アザゼルさま…。

私の力を、私の力をあなたさまのために…」

「知るかよ」

俺はレイナーレを激しく睨み付ける。

「そんな事、知らねえよ。墮天使だとか、神様だとか、

悪魔だとか…。そんなもの、この子には関係無かったんだ」

「いえ、関係あったわ。この子は神セイクリッド・ギア器

を身に宿した選ばれた人間だった」

「…それでも、静かに暮らせた筈だ。普通に暮らせた筈だ！」

「出来ないわよ。異質な神セイクリッド・ギア器を

有した者はどこの組織でも爪弾き者になるわ。強力な力を

持っているが故に。ほら、人間ってそういうの毛嫌いするでしょ？

「こんなに素敵な能力なのにね」

「…俺が、アーシアの友達として守った。そんなことはさせない」
「アハハハハ！無理よ！だって、死んじゃったじゃない！」

その子、死んでるのよ？もう守るとか守らないじゃないの。

あなたは守れなかったの！夕刻の時には、その彼を、

さつきも！その子を救えなかったのよ！本当におかしな子！

おもしろいわ！」

「……………知ってるさ。だから、許せないんだよ。

お前も。そして、俺も」

「ユウスケ！入口が！」

イツセーの声で入口の方へ振り向くと

聖堂の全ての扉が燃やされていた。

「証拠隠滅の為に殺すって言ったでしよ？」

その子も貴方達もここで燃えてしまいなさい」

俺は一度変身を解除し、人間の姿に戻る。

「あら？あきらめたのかしら？」

なら、槍の一刺しで楽に死なせてあげるわ」

「さつきも言ったらお前は許さねえって

今まで俺には覚悟が足りなかった。

足りなかったからアーシアを救えなかった。

それが、分かったんだ」

「何を言ってるのかしら？今更後悔しても

遅いわよ！」

「お前らみてえな奴らの為に！誰かが死ぬのはもう見たくない！

だから！見てくれアーシア！俺の！『変身』！」

その瞬間、俺の覚悟に呼応するように、銀のベルトが現れる。

中央の宝玉は今までと違いリアス先輩の髪のように

赤よりも濃い、紅である。

ベルトに手をかざし、右手を前に突き出す。

右腕を右前方へ動かしきったあと、勢いよく左腰の拳を落とす。

そして、ベルトの起動スイッチを押し込む。

これが、このベルトの本来の使い方だと、理解できた。
ダッ！

俺はレイナーレに飛び掛かる。

「うおおおおおッッッ！」

レイナーレには当たらずよけられていたが、
次の瞬間驚くべきことが起こる。

拳の速度が徐々に上がっていき、

レイナーレが回避ではなく、応戦する。

「はっ！」

ガッ！

「おらあー！」

パシィ！

ユウスケの拳はレイナーレにさばかれていたが、
驚くべきはそこではない！

ユウスケの肉体が戦士の姿に変わっていく。

全身が黒い皮膚に覆われて、胴体には鎧が装着される。
だがその色は今までの白ではなく、ベルトと同じ紅。

顔も黒い装甲が覆い隠す。

「なによーその姿は!?」

レイナーレは驚愕していた。鎧や腕・足首の装甲など、
今まで白かった鎧が全て紅に変わっていた。

頭の二本の角も倍の長さに伸びていた。

これが戦士の完全な姿である。

—心清く、身体健やかなるもの、これを身につけよ。

されば戦士『クウガ』となるん。

ユウスケ脳裏にその言葉が浮かんできた。

以前見た正しき戦士の姿にようやくなれたのである。

「姿が変わったからって何なのよー！」

今付けた傷だっけこうして治せるのよ。

貴方に勝ち目はないわ」

先ほどの攻防で傷ついた手を緑の光で治療する。

「返せよそれはアーシアの力だ！」

傷をいやしたレイナーレを見てイツセーが叫ぶ。

「アーシアを返せよオオオオツツ!!」

『Dragon booster!!』

イツセーの叫びに応えるように、左腕の神セイクリッド・ギア器

が動き出す。手の甲の宝玉が眩い輝きを放った。

籠手には何かの模様らしきものが浮かんだ。

そして、俺達は一気に駆け出す。

嘲笑を浮かべる敵へ向けて拳を打ち込む。

レイナーレは先ほどとは動きが変わり

怒涛の攻撃を華麗に避ける。まるでその場で踊るように。

どうやらイツセーの方を脅威とは思っておらず、

俺の攻撃は避けているのに、

イツセーの攻撃は受け流すだけだ。

二人共戦いになれていない為上手く連携が取れていない。

お互いが邪魔にならないようにするので精一杯だった。

「おバカな貴方にも分かるように説明してあげるわ。単純な戦力差よ。」

私が千。あなたは一。この差はどうやっても埋められないわ。

たとえ、その神セイクリッド・ギア器が発動しても、倍の二。

どうしようもないのよ! 鎧の彼は確かに強くなったけれども、

貴方という足手まといがいて、どうやって私に勝とうというの!

アハハハハ!

『Booster!!』

宝玉から音声が再び鳴り響く。

甲の宝玉に浮かぶ文字が『I』から『II』へ変わる。

「うおおおおおおおおおー!」

音声のあとイツセーが一気に詰め寄る。

「へえー少し力が増したの? でもまだねー!」

イツセーの攻撃は再び避けられる。

回避する瞬間、レイナーレは両手に光が集まりだし、

槍の形に形成していく。

まずい！

「下がれ！イツセー！」

「おそいわ、食らいなさい！」

ズドンッ！

イツセーの両足を光の槍が貫く。両足の太ももへ鋭く深く撃ち込まれた。

「ぐああああああああああつ！」

イツセーは絶叫を張り上げた。

「てめえ、よくも！イツセーは殺させないぞ！」

俺はイツセーを庇うように前に立ち。レイナーレと応戦する

イツセーはすぐさま光の槍に手をかけた。

ジュウウウウウウ。

「ぐうううううああああああああ！」

肉が焼ける音だ。槍を掴むイツセーの手を容赦なく焦がしている。

イツセーの手と足からは煙が上がっていた。

必死に槍を抜こうとする様子を見て、レイナーレは嘲笑する。

「アハハハハ！その槍に悪魔が触れるなんて愚の骨頂よ！」

光は悪魔にとつて猛毒に等しいわ。触れるだけで

たちまち身を焦がす。その激痛は悪魔にとつて最大級！

貴方の様な下級悪魔では」

「ぬがああつあああ！」

イツセーは声にならない声を張り上げて、

光の槍をいつそう強く握りしめて足から少しずつ

引き抜いていく。

「こんなもの！アーシアが受けた苦しみに

比べたらなんだってんだよ!!」

涙とよだれを垂らしながら、

イツセーは槍を少しずつ引き抜いていく。

ずりゆずりゆ。

嫌な音を立てながら、槍は両足から抜かれていく。

両足から引き離し、手から落したとき、
光の槍は音もたてず床に触れず宙へ消えた。
どぼっ。

塞いでいたものがなくなつたせいか、
両足に空いた穴から鮮血が溢れ出す。

『Boost!!』

闘っていない状況でも籠手による強化は止まらない。

「イツセー……は俺に任せて下がっている！」

「アーシアの仇は俺が取る！」

イツセーを庇いながらでは戦えない。

ここはどうかこの墮天使を外まで連れ出して倒すしかない。

「いいや、下がらねえ！俺はまだ戦えるさ！」

イツセーは立ち上がろうとしているが、

足に力が入らないようで、立ち上がれない。

「その足では、戦うなんて出来ないだろ！」

「いいや……。戦える！今までずっと、

ピンチの時にユウスケに庇ってもらって

自分は動けないでいた！そんな自分が嫌だった！

ダチを殺された！その仇も取れずにまた庇ってもらうなんて

そしたら俺は自分を許せねえ！男の選択は出来る、出来ないじゃない

く！

やるか。やらないかだろ！」

全身をガクガク震わせながら、それでも少しずつ上へ立ち上がる。

「ッ！嘘よ！立ち上がれる体じゃないのよ!!

光のダメージで」

驚愕しているレイナーレ。

「よー、俺の元カノさん。色々と今までお世話になりました」

「……立ち上がれるわけがない！か、下級悪魔ごときがああ傷で

動けるはずがない！全身を内側から光が焦がしているのよ!!

光を緩和する魔力を持たない下級悪魔が耐えられる

はずがないわ！」

「お前はイツセーを馬鹿にしすぎだ！こいつはやる時はやる男さ！」

「確かに痛えよ。チョー痛え。意識も飛びそうだ。

でもよ、ユウスケだって戦ってた。俺だけ寝てるわけにはいかないだろう」

「イツセーは立ち上がる。そして、俺はイツセーを庇うのではなく横に並ぶ。」

「さあ、やろうぜ！俺とお前でこの墮天使をぶん殴るぞ！！」

「ああ、やろうぜ！なあ、俺の神セイクリッド・ギア器さん。

目の前のこいつを殴り飛ばすだけの力はあるんだろうな？

ユウスケと二人でトドメとしゃれ込もうぜ」

『EXPLSION!!』

その機械的な声はその時だけ、とても力強かった。

何やら宝玉が一層光り輝く。すごい光だ。

だが墮天使の光と違って、この光には安らぎすら感じる。

それはアーシアの癒しの光に似ている。

イツセーは足を前に動かす。足の傷口からドバッと血が出て、

床に落ちた。口からも血を吐いている。その姿は瀕死の重傷だ。

なのにその体から力強い波動を感じる。

「…ありえない。何よ、これ。どうして、こんなことが…。」

その神セイクリッド・ギア器は持ち主の力を倍にする

『龍トウワイズ・クリティカルの手』でしょ？なんで。

あ、ありえないわ。どうして、あなたの力が私を超えているの…？

この肌伝わる魔力の波…魔の波動は中級…いえ、

上級クラスの悪魔のそれ…」

イツセーの力が上級悪魔？原因は神セイクリッド・ギア器か？

「？よー…こんなの嘘だわ！わ、私は究極の治癒を手に入れた墮天使よ

！

『聖母の微笑』を手に入れ、

この身に宿した私は至高の存在と化しているの！

シエムハザさまとアザゼルさまに愛される資格を得たのよ！

あ、貴方達のような下賤な輩に私は！」

レイナーレが両手に光の槍を再び作り出す。

それを勢いよく俺達に投げってきた。

俺達はそれを横殴りに拳で薙ぎ払った。光の槍はなんなく消し飛んだ。

今まで、俺達を苦しめてきた光の槍をなんなく薙ぎ払ったのを見て、

レイナーレの表情はさらに青ざめる。

「い、いやー！」

バツ！

黒い翼を羽ばたかせ、レイナーレは今にも飛び立とうとしていた。

逃げる気か。おいおいさっきまでの余裕はどこいったんだよ。

だが逃がすわけないだろ！

ダツ！

俺達は相手が飛び立とうとした瞬間に駆け出した。

だがイツセーが俺よりも早くレイナーレにたどり着くと、その手を引く。

墮天使が反応できない程のスピードが出ていた。

「逃がすか、バカ」

「押さえとけよイツセー！」

「私は、私は至高の！」

「吹っ飛べ！クソ天使ツ！」

「おのれええええええええええ！下級悪魔がああああああ！」

「おりやああああああああああつ！」

イツセーは左腕の籠手で、俺は右腕に力を集結させる。

右腕が燃えるように熱くなっているのを感じる。

それを憎むべき相手の顔面へ鋭く、正確に真っ直ぐ打ち込んでやった。

ゴツ!!?

派手な音が鳴り響く。俺達は拳を顔面に食い込ませたまま、

力強く押し出す！

レイナーレが拳の一撃で後方へ吹っ飛ぶ。

ガツシヤアアアアン!!？

大きな破砕音を立てて、墮天使は壁に叩きつけられた。壁は見事に壊れ、デカイ穴が生まれている。

宙を舞う埃が落ち着いてきた時、

レイナーレが吹っ飛んだ先が鮮明になってくる。

穴は外まで達しており、墮天使は地面に転がっていた。動く気配は無い。死んだかどうかまではわからないが、そうそう立ち上がったはこないだろう。

一矢報いた。

「ざまーみろ」

「やったんだなユウスケ…」

「ああ」

思わず笑みがこぼれた。本心さ。

本当に気持ちのいい一撃だった。

けどすぐに涙もこぼれた。

「…アーシア」

もう二度と彼女の笑顔は見れないのか。

「○○○」

墮天使を殴り飛ばし、完全に力を使い果たしたイツセーはその場に倒れ込んだ。

とん。

すぐに支えようとしたが俺より先にイツセーの肩を抱いた者がいた。

それは俺たちの為に下に残った木場だった。

「お疲れ。墮天使を倒しちゃうなんてね」

笑顔でイツセーの肩を持ち、体を支えている。

よく見れば木場もボロボロだった。

「無事だったんだな」

「よー、遅えよ、色男」

「ふふふ、邪魔するなって部長に言われていたんだ」
リアス先輩に？

「その通りよ。あなたたちなら、堕天使レイナーレを倒せると信じていたもの」

声のする方へ振り向けば、紅の髪を揺らしながらリアス先輩が笑顔で歩いてくる。

「リアス先輩、どこから？」

「地下よ。用事が済んだから、魔方陣でここへ転移してきたの。」

教会に転移なんて初めてだから緊張したわ」

リアス先輩はそう言いながら息をつく。

なるほど、それで木場たちと共に上へあがってきたのか。

つてことは、下の神父は全滅だな。リアス先輩相手じゃ、

無事に済まないだろうし。

と俺達の横をスタスタと小猫ちゃんが横切っていく。

どこに行くんだ。

俺達の前にリアス先輩が来る。

「それで無事に勝ったようね」

「ぶ、部長……。ハハハ、なんとか勝ちました」

「イツセーはボロボロだけだな」

「フッフ、偉いわ。流石私の下僕くん」

そう言うと、リアス先輩はイツセーの鼻先を小突く。

「ユウスケもようやく本来の姿になれたようね」

俺はリアス先輩の言葉に驚く。

「先輩は知ってたんですか!?!?」

「ええ、奈美にも相談されたしね」

「気落ちしてるから気にかけてと」

「部長がそんな事を……」

「あらあら。教会がボロボロですわ。部長、よろしいのですか?」

何やら困り顔の朱乃さん。

「……なんか、ヤバインすか?」

イツセーが恐る恐るリアス先輩に聞く。

「教会は神もしくはそれに属する宗教のものだし、今回みたいに墮天使が所有している場合があるでしょ？そのケースだと、私達悪魔が教会をボロボロにすると、あとで他の刺客から付け狙われることがあるの。恨みと報復よ」
っ。

それはマズイ事になるな。

「でも今回それは無いでしょうね」

「どうしてですか？」

「ここは元々捨てられた教会だったわ。そこをとある墮天使達が自分の私利私欲のために活用したわけで、私達はそこでちよつとした喧嘩をしていただけよ。

相手の公式な陣地へ戦争を吹っつけたわけではないの。

あくまで、いち悪魔といち墮天使の野良試合の小競り合い。

そんなのどこでも年中起こっているわ。ただそれだけのことよ」
なるほどね、ものは言いようだな。

「部長。持つてきました」

ズルズルと何かを引きずる音と共に現れたのは小猫ちゃんだ。

壊れた壁から姿を現したが、引きずっているのは黒い羽

墮天使レイナーレ。

子猫ちゃんは俺達が殴り飛ばし、

気絶したレイナーレを引きずってきたのか。

相変わらず小さい体に似合わず行動が豪快だな。

「ありがとう小猫。さて、起きてもらいましょうか。朱乃」

「はい」

朱乃さんが手を上へかざす。すると、宙に水らしきものが生まれてくる。

これが悪魔の魔力か。

宙に生まれた水の塊を朱乃さんは

倒れているレイナーレへ被せる。

バシヤッ！

水音のあと、「ゴホツゴホツ！」と咳き込むレイナーレ。

気がついたのか、ゆつくりと目を開ける堕天使。
それをリアス先輩が見下ろす。

「ごきげんよう、堕天使レイナーレ」

「…グレモリー一族の娘か…」

「はじめまして、私はリアス・グレモリー。」

グレモリー家の次期当主よ。短い間でしようけど、

お見知りおきを」

笑顔で言い渡すリアス先輩だが、

レイナーレはリアス先輩をにらみつけている。

と、途端にあざ笑う。

「…してやったりと思っているんでしようけど、

残念。今回の計画は上に内緒であるけれど、私に同調し、

協力をしてくれてる堕天使もいるわ。

私が危うくなったとき、彼らは私を」

「彼らは助けに来ないわ」

レイナーレの言葉を遮り、リアス先輩ははっきりとそう言った。

「堕天使カラワーナ、堕天使ドーナシック、堕天使ミツテルト

彼らは私が消し飛ばしたから」

「嘘よー！」

レイナーレは上半身だけ起こし、リアス先輩の言葉を強く否定する。

リアス先輩は懐から三枚の黒い羽根を取り出した。

「これは彼らの羽。同族のあなたなら見ただけでわかるわね？」

羽を見て、レイナーレの表情が一気に曇る。

どうやら、リアス先輩の言った事は真実だったようだ。

「以前、イツセーを襲った堕天使ドーナシックと出会った時から、

この街で複数の堕天使が何かの計画を立てているのは察していたわ。

けれど、それは堕天使全体の計画だと思って、

私は無視していた。いくら私でも堕天使全体を敵に回すなんて

愚は冒さないわ。でも、何やら突然こそこそと動き出したと

耳にしたから、私は朱乃を連れて少しだけお話をしに行ったの。彼らに実際会ってみたらすんなり独自の計画だと吐いてくれたわ。あなたに協力すると、地位を約束してくれるとか言っていたかしら。

裏でコソコソくだらない計画をしている下賤なものほど、自分たちのやっていることを喋りたくなるものよね」
リアス先輩が嘲笑する。

レイナーレは悔しそうに齒噛みしていた。

「女2人が近づいてきただけだから、甘く見ていたのでしようね。冥土の土産に教えてもらったの。フッフ、どちらが冥土に近いかもわからないお馬鹿な堕天使さんだったわ。あなたのくだらない計画に同調する位だから、程度は低かったのでしょうね」

そうか。リアス先輩の用事はそれだったのか。

裏で他の堕天使を始末していた…

リアス先輩はちゃんと考えてくれていたんだ…。

それなのに俺は、ひどいことを言ってしまった。

後で謝らなければな。

「その一撃を喰らえばどんなものでも消し飛ばされる。

滅亡の力を有した公爵家のご令嬢。

部長は若い悪魔の中でも天才と呼ばれるほどの実力の持ち主ですからね」

と、主をほめたたえるように木場は言う。

「別名『ベニガミ紅髪ルインの滅殺プリンセス姫』

と呼ばれるほどの方なのですよ?」

うふふと笑う朱乃さん。

なんと物騒な二つ名だな。

俺はそんな人の眷属ってことになるのか。恐ろしい…。

リアス先輩がイツセーの左腕に視線を向ける。

「…赤い龍。この間までこんな紋章はなかったはず…。

そう、そういうことなのね」

少しだけリアス先輩の目元が驚いているように見えるのは気のせいだろうか。

「イツセーが墮天使に勝てた最大の理由が分かったわ」

リアス先輩は静かに述べる。

「墮天使レイナーレ。この子、兵藤一誠の神セイクリッド・ギア 器

はただの神セイクリッド・ギア 器じゃないわ。

それがあなたの敗因よ」

リアス先輩の言葉には怪訝そうに片方の眉を吊り上げる。

『赤龍帝の籠手』ブラステッド・ギア 神セイクリッド・ギア 器の中でもレア中のレア。籠手に浮かんで

いる赤い龍の紋章がその証拠。あなたでも名前ぐらいは知っているでしょ？」

リアス先輩の言葉を聞いて、レイナーレは驚愕の表情を浮かべる。

「ブ、ブラステッド・ギア…。『神滅具』ロンギヌス のひとつ…」

一時的には言え、魔王や神すらも超える力が得られると言う…あの忌まわしき神セイクリッド・ギア 器がこんな子供の手に宿っていたと言うの!?!?」

「言い伝えの通りなら、人間界の時間で10秒ごとに持ち主の力を倍にしてくれるのが『赤龍帝の籠手』の能力。最初が一で10秒ごとに力が倍になっていけば、いずれ上級悪魔や墮天使の幹部クラスの力になるわ。そして、極めれば神すらも屠れる」

…それがイツセーの力か。とんでもない代物だな。

「まあ、どんなに強力でも時間を要する神セイクリッド・ギア 器

はリスクも大きいわね。そうそう増大するのを待ってくれる相手なんていないわ。今回は相手が調子に乗ったのが勝敗を決めたようなものね」

リアス先輩は釘を打っている。

イツセーに近づくりアス先輩。

なでなで。

リアス先輩はイツセーの頭をなでている。

「でも面白いわ。さすがは私の下僕君。やっぱり、イツセーは

面白い子ねもつともつと可愛がってあげるから」

フフフと微笑むリアス先輩。いい笑顔なんだけど、ある意味怖い

な。

リアス先輩は次に俺のベルトに視線を向ける。

「ユウスケのベルトも特殊なものよ。過去の対戦で戦いを止めた。

『究極の闇』と呼ばれた戦士の力よ」

「馬鹿な、なぜそんなものがこんな所に」

「私も驚いたけれど、以前発掘された

とある民族の装飾品の中にベルトが紛れていたようね」

究極の闇？物騒な呼び名だな。

戦争を止めた？そんなすごい力なのか。

「今はまだそれほどの力は無いようだけれど、

いずれ同等の力を手に入れるはずよ」

「リアス先輩」

「何？」

笑顔のリアス先輩。俺は申し訳なくなつて、頭を下げた。

「すみません。あの時、俺がアーシアを助けに行くつて言った時に

リアス先輩が手を貸してくれないからつて、すごく失礼なことばか

り言つて……。でも、リアス先輩は裏で動いてくれていたのに」

心底謝りたかった。

俺はリアス先輩のことを本当に冷たい悪魔だと思つていた。

だから、失礼千萬なことを言いまくつてしまった。

それを心から謝りたかった。そんな俺の頭を先輩は撫でてくれる。

いつの間にか、俺は泣いていた。そう、目的を果たせなかったから。

「リアス先輩…俺、アーシアを…守つてやれなかった…」

「泣くことはないわ。今の貴方達の姿を見て、

誰があなたたちを咎められると言ふの？」

「ですが、俺は…」

先輩が俺の涙を指で救つてくれる。

「いいのよ。貴方達はまだ悪魔としての勉強が足りなかっただけ。

ただ、それだけよ。強くなりなさい。これからもこき使うから

覚悟しなさい。私の兵士、ユウスケ、イツセー」

「はい」

俺、これから頑張つてさらに強くなります。
みんなの笑顔を守るようにがんばります。
俺は心の中で強く誓った。

「じゃあ、最後のお勤めしようかしらね」

途端にリアス先輩の目が鋭くなり、冷酷さを帯びる。

リアス先輩はレイナーレに近づく。怯える堕天使。

「消えてもらうわ、堕天使さん」

冷たい口調だ、殺意がこもってる。

「もちろん、その神セイクリッド・ギア器もう回収させてもらうけれど」

「じよ、冗談じゃないわ！こ、この癒しの力はアザゼル様と
シエムハザ様に」

「愛のために生きるのもいいわね。でも、あなたはあまりに
薄汚れている。とてもエレガントではないわ。」

そういうの私は許せない」

リアス先輩の手がレイナーレへ向けられる。

一気に殺す気か。

「俺、参上」

その時、穴の開いた壁から人影が現れる。

神父 フリード・セルゼン。

あいつ！ いちど逃げたのに帰ってきたのか！

「わーお！俺の上司がチョーピンチくせえ！どうしたものか！
神父の登場にレイナーレが叫ぶ。」

「助けなさい！私を助ければ褒美でも何でもあげるわ！」

「んーんー。天使様から素敵な命令をいただきました。え？

それって、エッチなことともOKなんですか？」

「くっ…ふ、ふざけてないで、私を助けるのよ！」

怒りに顔を歪ませる堕天使。あせっているように感じられる。

いや、焦っている。「人間ごときが私を裏切るなんて事はあつては
ならない！」なんて思っているのだろう。

「あらららららら、俺的には本気だったわけですが…。」

っーか、それぐらい、いいじゃないですか、天使様。

だめですか、そうですか。なら、俺は消えますよ。
どう見ても戦況不利マキシマムシユートじゃないですか」
フリードは体をクネクネさせながら、ふざけた口調だ。

「あ、あなたは神父でしよう¹⁹? 私を救うべきなのよ!

私は誇り高き墮天使! お前らを」

「クズの悪魔に圧倒されている上司なんて願い下げさあ。

あんた、美人だけど、詰めが甘いつていうか、

頭も弱いよね。逝ってくださいええ。まあ、

神様に見放された墮天使様じゃあ天国にも地獄にも

行けずに無に帰るだけでしようが。その際はぜひとも

『無の体験』レポートを提出していただけると嬉しいかもしれませんぞ?」

あ、無理か。無だもんね。無理だねえ。無が3つで南無三!

なんてね! あつ、俺は元クリスチャンでした! 俺って悪い子ね!

それだけ言うと、興味がなさそうにレイナーレから視線を外した。

その行為にレイナーレは絶望的な表情を浮かべる。

哀れだ。これが力を求め、暴れ回った墮天使の成れの果てか。

フリードは満面の笑みを俺たちに向けてきた。

「ユウスケくん、イツセーくん。君達、素敵な能力もってたのね。

さらに興味津々なり。殺しがいいがあるよねツツ!

君たち、俺的に殺したい悪魔ランキングトップ5入りだからよろしく。

次に出会ったら、ロマンチックな殺し合いをしようぜ?」

ぞくり。

冷たいものが俺の背中を伝う。

やつは笑顔だが、とんでもない殺意をにじませている。

俺たちへの明確な挑戦状。いや、殺害予告だ。

「じゃあねーバイバイー! みんな、歯磨けよ!」

手を振ったあと、フリードはその場から素早く姿を消した。

なんとなくだが、これからもやつと会いそうな気がする。

「さて、げぼくにも捨てられた墮天使レイナーレ。哀れね」

リアス先輩のその口調には少しの同情も感じられない。

ガクガクと震えるレイナーレ。

レイナーレの視線がイツセーに移る。

「イツセーくん！私を助けて！」

その声は今までの声と違く、

恐らく夕麻に扮していたころの声だろう。

「この悪魔が私を殺そうとしているの！私、あなたのことが大好きよ！

愛している！だから、一緒にこの悪魔を倒しましょう！」

何言ってるんだ。この堕天使は？

レイナーレは夕麻を再び演じ、

涙を浮かべながらイツセーへ懇願している。

「グッバイ。俺の恋。部長、もう限界つす…。頼みます…」

それを聞いた途端、堕天使は表情凍らせていた。

「…私のかわいい下僕に言い寄るな。消し飛ばす」

ドンッ！

リアス先輩の手から放たれた魔力の一撃は、

堕天使を跡形もなく吹き飛ばしてしまった。

第10話「復活」

聖堂の宙に淡い緑色の光が浮かぶ。

アーシアの神セイフリッド・ギア器だ。

レイナーレを倒したことで、解放されたようだ。

温かい光が俺を照らす。リアス先輩がその光を手にとった。

「さて、これをアーシア・アルジエントさんに返しませうか」

「でも、アーシアはもう…」

そう、アーシアはもう生き返らない。

結局、俺は彼女を救えなかった。

守ると誓ったのに！救うと誓ったのに！

仇は取ったが、何も得るものはなかった。

いやそれは仲間達に失礼だ。

彼らは自分達に得なことは無くとも、共に戦ってくれた。

「…リアス先輩、みんな、俺のわがままの為に

本当にありがとうございました。でも、

せっかく協力してくれたのにアーシアは…」

「ユウスケ、これ、なんだと思う？」

リアス先輩がポケットから、何かを取り出す。

紅い。

血のように紅い、リアス先輩の髪の色と同じ紅いチェスの駒だ。

「それは、まさか!?」

「これは『僧侶』の駒よ」

「他にも駒があつたんですか?」

「あなたたちに説明するのが遅れたけれど、

爵位持ちの悪魔が手にできる駒の数は『兵士』が八つ、

『騎士』、『戦車』、『僧侶』

がそれぞれ2つずつ、『女王』が一つの計十五体なの。

実際のチェスと同じね。『僧侶』の駒を

1つ使ってしまったているけれど、私にはもう一つだけ『僧侶』の駒があるわ」

そう言うと、リアス先輩はその紅い駒を持ったまま、
アーシアの下へ向かう。

眠るように死んでいる。アーシアの胸に紅い、『僧侶』の駒を置いた。

「『僧侶』の力は眷属の悪魔をフォローすること。この子の回復能力は『僧侶』として使えるわ。前代未聞だけれど、このシスターを悪魔へ転生させてみるわ」
リアス先輩の体を紅い魔力が覆う。

「我、リアス・グレモリーの名において命ず。汝、
アーシア・アルジェントよ。今再び我の下僕となるため、
この地へ魂を帰還させ、悪魔となれ。汝、我が『僧侶』として、
新たな生に歓喜せよ！」

駒が紅い光を発して、アーシアの胸へ沈んでいく。

同時にアーシアの神セイクリッド・ギアも淡い緑色の

光を発しながら彼女の体へ入り込んでいった。

駒と神セイクリッド・ギアが完全にアーシアの

の中に入ったのを確認すると、リアス先輩は魔力の波動を止めた。

そして、リアス先輩は「ふう」と息を吐く。

呆然と眺める俺。

少しして、アーシアの瞼が開き始めた。

俺はそれを見て、こみ上げてくるものを止められなかった。

「あれ？」

アーシアの声。二度と聞けないと思った。

リアス先輩が優しい笑みを俺へ向ける。

「悪魔をも回復させるその子の力が欲しかったからこそ、

私は転生させたわ。ふふふ、ユウスケ、

あとはあなたが守ってあげなさい。先輩悪魔なのだから」

「よかったな…ユウスケ！」

イツセーも泣きながら喜んでいる。

アーシアが上半身を起こす。きよろきよると見回したあと、
俺の姿を捉えた。

「…ユウスケさん?」

怪訝そうに首をかしげる彼女を俺は抱きしめていた。

「帰ろう、アーシア」

—●—

俺とイツセーは朝早く部室へ向かっていた。

「あら、ちゃんときたわね」

部室にたどり着くと、リアス先輩だけしかいなかった。

まだ学校は始まっていない。

今日は朝から集まりがあると昨夜言われて、

朝早くからここに来たんだ。

リアス先輩はソファアに座り、優雅にお茶を飲んでいる。

「おはようございます、リアス先輩」

「ええ、おはよう。二人共もう朝は大丈夫のようね」

「はい、おかげさまで」

リアス先輩の視線がイツセーの足に写る。

「墮天使にやられた傷は?」

イツセーは先日の戦いにおいて、光の槍で太ももを貫かれた。

「はい、例の治療パワーで完治です」

と、イツセーは笑顔で答える。

「そう、あの子の治療能力は無視できないもののようなね。」

いち墮天使が上に黙ってまで欲するのも頷けるわ」

俺達もリアス先輩の対面の席へ腰を下ろした。

イツセーがリアス先輩に聞きたい事があるらしい。

「あの部長。チェスの駒の数だけ『悪魔の駒』」

があるのだったら、俺達の他にも『兵士』^{ポーン}があと六人

存在できるんですよね? いつか俺達と同じ『兵士』が増えるんです

か?」

確かに、チェスの駒と同数の『兵士』の駒が存在しているはずだ。

俺とイツセーの他にも兵士は作れるのか。

イツセーの質問にリアス先輩は首を横に振った。

「いえ、私の『兵士』は貴方達だけよ」

それってどう言うことだ？

「人間を悪魔へ転生させる時、『悪魔の駒』を用いるのだけれど、その時転生者の能力次第で駒を通常よりも多く消費しなくてはいけない」

なるの」

なるほど、俺たちで全部使っているのか。

「チェスの世界ではこういう格言があるわ。

女王の価値は兵士九つ分。戦車の価値は兵士五つ分。

騎士と僧侶の価値は兵士三つ分。そんなふうに価値基準があるのだけれど、悪魔の駒においてもそれは同様。

転生者においてもこれに似たような現象が適用されるの。

騎士の駒を二つ使わないと転生させられない者もいれば、

戦車の駒を二つ消費しないといけない者もいる。

駒との相性もあるわ。二つ以上の異なる駒の役割は与えられないから、

駒の使い方は慎重になるのよ。一度消費したら、

二度と悪魔に駒は持たせてはくれないから」

「それと俺たちがどういう関係にあるんですか？」

「どうやらイツセーはまだわかってないようだ。

「貴方達を転生させる時、ユウスケは『兵士』の駒を一つだったけれど

イツセーは『兵士』の駒を残り全部使用したのよ。

そうしないと貴方達を悪魔にすることは出来なかったの」

イツセーが『兵士』七つは今なら理解出来るが、

俺が駒一つ分かよ。

「それがわかった時、私はイツセーを絶対に下僕にしようと思ったの。

でも、長らくその理由が判明しなかったわ。今なら納得できる。

至高の神セイクリッド・ギア器と呼ばれる。

『神滅具』のひとつ、

『赤龍帝の籠手』を持つイツセーだからこそ、

を持つイツセーだからこそ、その価値があったのね」

俺はイツセーの左腕へ視線を動かした。

赤い籠手。十秒毎に能力が倍になっていく、狂ったような力の結晶。

使い方次第では神すらも倒せると言う。

「貴方達を転生させようとした時、私の残りの駒は騎士、

戦車、僧侶が一つずつ、兵士が八つしか無かったわ。

ユウスケを相性を見て、兵士一つ消費して転生させたあと。

イツセーを下僕にするには、兵士を七つ消費するしかなかったの。

兵士の駒と相性も良かったし。他の駒では転生できる力はなかった。

でも、元々兵士の価値は未知数。プロモーションなども含めてね。私はその可能性にかけた。結果、貴方は最高だったわ」

「それに、ユウスケの方はあの『究極の闇』の力を持っているのに兵士一つ消費で済んだのは良かったわ。理由はまだわからないけれどね」

そう、『究極の闇』と呼ばれる存在、詳しくは分からなかったが、当時の人間が生み出した戦士という事。

以前イメージで見た。あの黒い姿がそうだったのかもしれない。

そこで、リアス先輩の方へ視線を向けると、嬉しそうに微笑んでいた。

「『紅神の滅殺姫』と

『赤龍帝の籠手』と『赤いクウガ』全員紅いと赤で相性は

バッチリね。貴方達、とりあえず最強の『兵士』を目指さない。

貴方達なら、それが出来るはず。だって私のかわいい

下僕なんだから」

最強の『兵士』か。目指してみるか、最強を！

そんな事を思う俺達にリアス先輩が近づいてくる。

そして、俺の額にリアス先輩の唇がふれた。

「これはお呪い。強くおなりなさい」

イツセーも同じくキスを貰ってたが顔を真っ赤にして慌てていた。

そう言う俺も狼狽えてはいなかったが、

顔が真っ赤になっていた。

「と、ユウスケを可愛がるのはここまでにしないかね。」

新人の子に嫉妬されてしまうかも知れないわ」

嫉妬？何の話だ？

「ユ、ユウスケさん…？」

俺の背後から声。聞き覚えがあるな。

振り返ると、金髪の少女。

アーシアが何やら笑顔をひきつらせていた。

「アーシア？」

え？怒っているのか？どうして？

「そ、そうですね…。リ、リアス部長は綺麗ですから、そ、

それはユウスケさんも好きになってしまいますよね…。いえ、

ダメダメ。こんなことを思っではいけません！

ああ、主よ。私の罪深い心をお許してください」

手を合わせてお祈りポーズのアーシア。

だが、「あうっ！」と途端に痛みを訴える。

「頭痛がします」

「当たり前よ。悪魔が神に祈ればダメージぐらい受けるわ」

「さりとリアス先輩が言う。」

「うう、そうでした。私、悪魔になっちゃったんです。

神様に顔向け出来ません」

ちよつと、複雑そうな彼女。アーシア、

そんなに哀しそうな顔をしないでくれ。

生き返らせたのは間違いだったのかな。

「後悔してる」

リアス先輩がアーシアに訊く。

アーシアは首を横に振った。

「いいえ、ありがとうございます。どんな形でもこうして

ユウスケさん達と一緒に居られるのが幸せです」

っ。

恥ずかしい台詞に俺たちの顔は紅潮する。

これは嬉しいな、助けに行った甲斐があったな。

それを聞いて、リアス先輩も微笑む。

「そう、それならいいわ。今日からあなたも私の下僕悪魔として彼らと同じ様に走り回ってもらおうから」

「はい！頑張ります！」

元気よく返事をするアーシア。

まずはチラシ配りだけど、アーシア大丈夫か？

不安は募る。

「そういえば、アーシア、その格好」

俺の言葉にイツセーも気が付いた様だが、

彼女は俺達の通う駒王学園、女子の制服を着ていた。

「に、似合いますか…？」

恥ずかしそうに彼女は訪ねてくる。

「ああ、似合ってるよ！」

俺はアーシアの質問にサムズアップで答える。

「最高だ！後で俺と写真を撮ろう！」

「え、は、はい」

興奮したイツセーを見て、反応に困っている彼女だった。

「アーシアにもこの学園へ通ってもらうことになったのよ。

貴方達と同じ年みたいだから、二年生ね。

クラスもユウスケと同じところにしたわ。

転校初日ということになっているから、

二人共彼女のフォローよろしくね」

リアス先輩がそう言ってくる。

「よろしく願います、ユウスケさん、イツセーさん」

ぺこりと頭を下げるアーシア。

「ああ、あとで俺の悪友二人も紹介するからな」

「なら俺も奈美先輩や新聞部の皆を紹介するか」

「はい、楽しみです」

すると部室に木場、小猫ちゃん、朱乃さんが入ってくる。

「おはようございます、部長、ユウスケくん、アーシアさん」

「…おはようございます、部長、ユウスケ先輩、

イツセー先輩、アーシア先輩」

「ごきげんよう、部長、ユウスケくん、イツセーくん
アーシアちゃん」

それぞれが挨拶をしてくれた。

みんな、俺とイツセーをそれぞれ名前で呼び、アーシアを
一員と認めてくれていた。

大抵「二人共」とセットで呼ばれてたからな。

リアス先輩が立ち上がる。

「さて全員が揃った所でささやかなパーティーを
始めましょうか」

そういうとリアス先輩が指を鳴らす。

すると、テーブルの上に大きなケーキが出現した。

これも魔力か?! もはや、何でもありだな。

「た、たまには皆で集まって朝からこういうのも

いいでしょう? あ、新しい部員もできたことだし、
ケーキを作ってみたから、みんなで食べましょう」

リアス先輩が照れくさそうに言った。

手作りケーキとは! ありがたく頂きます!

リアス先輩、とりあえず俺はここにいるみんな
と共に頑張ります。

『究極の闇』と言われた強さを目指して。

俺は、心の中でそう誓った。

第一章 登場キャラクター

第一章までの主な登場人物特集

兵藤祐介 本作の主人公

誕生日：4月16日

駒王学園2年生

役割：『兵士』^{ポイン}

所属：新聞部

通称：「ユウスケ」

種族：人間↓転生悪魔

新聞部に所属している。高校2年生

弟であるイツセーと比べて特徴が無いことが悩み。

ある日イツセーが襲われているところに助けに入るが

殺されてしまい、その後悪魔に転生する。

普段はクールにふるまっているが、怒ると口が悪くなる。

とあるベルトを手に入れたことで、

戦士クウガへと変身する能力を得る。

能力：「クウガへの変身」

各フォーム

グロイーニングフォーム

覚悟が定まっていなかったときになってしまう姿

はつきり言って弱い戦う力は無い。

マイティーフフォーム

覚悟が決まり変身が可能になった姿。

炎のごとき真っ赤な姿で徒手格闘で戦う。

兵藤一誠 原作の主人公

誕生日：4月16日

駒王学園2年生

役割：『兵士』^{ポイン}

所属：オカルト研究部

通称「イツセー」

種族：人間↓転生悪魔

自他ともに認めるエロ学生で、学園でも変態で有名
病気レベルとも言えるエロさから女性から嫌われていた。
ある日彼女との初デート中にその彼女にユウスケと共に
殺され悪魔に転生する。

夢はハーレムを作ること。

能力：『赤龍帝の籠手』
ブーステッド：ギア

「Boost」の声と共に10秒毎に力を倍加させる。

「Explosion」の声と共に倍加した力を発動する。

主人の実力によって倍加の上限は決まる。

リアス・グレモリー ユウスケたちの主人

誕生日：4月9日

駒王学園3年生

役割：『王』
キング

所属：オカルト研究部 部長

通称：『紅髪ベニガミの滅殺ルインプリンセス姫』

種族：純血悪魔

紅髪のロングヘアの美少女

学園では絶大な人気を誇り三大お姉さまの一人
だが、悪魔という裏の顔を持ち通う学園は彼女の所有物
情に厚く、部下想いな一面を持つ、
敵には一切の加減はせず非情となる。

アシア・アルジエント ヒロインの一人

誕生日：5月11日

駒王学園2年生

役割：『僧侶』
レシヨツク

所属：教会↓墮天使陣営↓オカルト研究部

種族：人間↓転生悪魔

金髪ロングヘアアの美少女
かつて聖女と呼ばれていたが
悪魔を治療したことで、魔女と恐れられる。
教会から追放され堕天使陣営に拾われる。
最後は悪魔に転生しオカ研の仲間となる。
能力：『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑』
手から出る淡い緑の光でどんな傷も癒してしまう。

姫島朱乃　グレモリー眷属

誕生日：7月21日

駒王学園3年生

役割：『クイーン女王』

所属：オカルト研究部　副部長

種族：転生悪魔

黒髪のポニーテールの美少女
いつもリアスの傍に使えリアスを支える
頼れるサブリーダー。

学園でも三大お姉さまと呼ばれる人気
だが敵には非情で自身が満足するまで
雷を放ち続ける「DOS」

木場祐斗　グレモリー眷属

誕生日：5月30日

駒王学園2年生

役割：『ナイト騎士』

所属：オカルト研究部

種族：転生悪魔

金髪の美少年

基本的はクールで物腰柔らかか男だが
神父に相手する時はただならぬ恨みがあるもよう
イケメンに敵意をもつイツセーにも

普通に接している。

塔城小猫 グレモリー眷属

駒王学園1年生

役割：『戦車^{ルイック}』

所属：オカルト研究部

種族：転生悪魔

白髪の小柄な少女

小柄な外見とは裏腹に

常識外れな怪力を発揮する。

口数は少ないがマスコットとして人気である。

大空奈美 ユウスケの頼れる先輩

誕生日：7月3日

駒王学園3年生

所属：新聞部 部長

種族：人間

オレンジ色のロングヘアの美少女

ユウスケと同じ新聞部の部長

ユウスケが悪魔とわかっててもこれまで通り

接してくれる優しい女性

また特ダネに目が無くよくユウスケを振り回している

ちなみに三大お姉さまの最後の一人である

ミルタン イッセーの顧客

悪魔召喚の常連客

所属：民間人

種族：人間？

ムキムキな筋肉で魔法少女を夢見る漢の娘

ゴスロリに猫耳と出会ったら即逃走&通報レベルのヤバイ人
人かも怪しいが、こう見えてもピュアな瞳をしている。

語尾は「によ」と話す。

作者はアニメで最初見たときは思わず叫んでしまった。
インパクトは絶大だった。今後の活躍はあるかもしれない。

レイナーレ／天野夕麻 ユウスケ達を殺した墮天使

はぐれ神父のリーダー

所属：墮天使陣営

種族：墮天使

イツセーの神器を調査する為人間に化け

イツセーと付き合う。

ユウスケとイツセーを殺した犯人

アーシアを利用したことで

二人に倒される。

第二章 戦闘校舎のフェニックス 第11話「夢」

とある雪山、強い吹雪の中それはいた。
白い表皮に金色の装飾。
まるで黒いクウガのような姿をしていた。

『ようやく僕と同じになれたんだね』

異形の怪物はそう言った。
自身の手足を見ると以前見た
究極の闇と呼ばれた黒いクウガとなっていた。
同じ存在？じゃあこいつも、究極の闇だっというのか？
その時その怪人が手のひらをこちらに向けると
俺の体が発火しだした。
熱い！
俺の体を炎が包み込む。
とっさに消そうとしたがどうやっても消えない。

『どうやら君はまだ目覚めていないんだね』

その異形が広げていた手のひらを閉じると、炎が消えた。

『残念だけど、君と遊ぶのはまだ無理そうだね』

俺はその異形に恐怖を覚えた。

こいつはゲーム感覚でこんな事をしたのか!!
それはまるで残虐な子供のようなセリフだった。
「何がしたいんだ！お前は誰なんだ！」

俺が叫ぶと、異形の怪物は人の姿へと形を変えた。

『君と等しい存在さ「究極の闇をもたらすもの」

僕はそう呼ばれていた。「究極の闇」と呼ばれた君と同じさ』

究極の闇はリアス先輩に教えられた。

クウガの本来の姿の事じゃ？

こんなのが俺が目指していた強さかよ。

『目的はね君と殺し合うためだけど今の君は殺しても面白くない。もっと強くなって僕を笑顔にしてよ』

狂っている。おれはそう感じた。

こいつは戦いを楽しんでるんだ。

自分が殺されようとも戦い自体を楽しんでやがる。

「俺はお前みたいにはならない！」

究極の闇が唯の殺戮者なら俺は皆を救う光になる！」

自分でも何を言っているのかわからないけど

闇の姿になるのだけは嫌だった。

悪魔なのに光なんて矛盾してるけどな。

『究極の光か、面白いね君。今後も楽しみにしてるよ
なら今はまだ僕の事は忘れていようか……』

そこで俺の意識は闇に包まれた。

—○●○—

イツセーside

俺は今日の前で起こっていることにどうしたらいいかわからないでいた。何故か、俺は教会らしき場所にいた。周囲には見知った人々。

「ちくしょう！イツセーがなんで結婚なんて！」

「何かの間違いだ！これは何かの陰謀だ！」

坊主頭の松田、眼鏡をかけた元浜。

俺の悪友二人が恨めしそうな表情で俺に言葉を贈る。

「イツセー！初孫は女の子だよー！」

「うう、立派になって！性欲だけが自慢の

どうしようもない子だったのに！」

「父さん、母さん祝いの席なんだからしつかり祝いなよ」

父さん母さんも号泣している。

勝手なことを言ってるやがるが、ユウスケに注意されてやがる。

俺の格好も白のタキシード。

まるで結婚式のような場面。いや、結婚式だろこれ！

教会内をお約束の音楽が流れている。

俺の!?俺の結婚式なのか!!

唐突で驚愕的な場面に呆気にとられるが、

肝心なお嫁さんは？俺の相手は誰だ？

「イツセー、きよろきよろしてはだめよ」

隣から聞き覚えのある声。

横を向けば、そこには腰の辺りまである紅の髪をした美少女。

リアス・グレモリー部長がそこにいた。

俺とユウスケを悪魔に転生させ、彼女自身も爵位持ちの上級悪魔だ。

おれはリアス部長の眷属悪魔であり、下僕でもある。

つか、ウエディングドレス姿が眩しすぎて直視できないぜ。

その部長が俺の隣に！ってことは、俺のお嫁さんか！

「リアスお姉さま！お綺麗です！」

「ああ、リアスお姉さま！どうしてそんな男と！」

教会の各地から参列者の悲鳴も上がる。てか、

誰も俺のことなんて祝福してくれないのね…。

そうか、これは俺とリアス部長の結婚式！

なんてことだ。俺と部長はいつのまにか、

そういうご関係になっでいて、
ついにこういう展開に、なっでしまっでいた訳だ。
いや、肝心の間はどうした!!? なんも思っで出せない!!?
あー、なんだかよくやからないが、こんな憧れの
部長と結婚できるなら何も問題ねえ!

「いついかなるときも」

何やら神父がありがたっでいお言葉を話し始めてるが、
俺の脳内は他のことだっでいっばいになっでいた。

結婚Ⅱ夫婦、夫婦Ⅱ家庭、家庭Ⅱ子供、子供Ⅱ子作り、
そこまで考えて、俺の頭の中は既にお祭り騒ぎとなり、
エロい妄想を止めることは出来なかつた。

そうか、俺が今までそつちに縁がなかつたのもすべてはこの日、
この日の夜のため! お、俺に事を無事に完遂する事ができるのか!!
?

い、いや、知識だけなら豊富にある! 脳内シミュレーションを
来る日も来る日も繰り返してきた!

言うなれば、模擬戦では負けなしのエアスパイロット!

後は実戦を待っでだけのスペシャルエリートだ!

「それでは、誓いの口づけを」

何だと!!?

そうだつた! まずはこちらだ!

教会でのキス! 部長とのキス! 誓いのキス!

横を見れば部長が目を瞑り、こちらへ顔を向けてる!

いいのか!!? いいんだよね! よし! よし! よし! 部長の唇、いただきま
す!

俺は荒い鼻息を何度も出しながら、
唇を突き出して徐々に部長のほうへ。

『随分と盛り上がっでいるじゃないか、クソガキ』

ツ!!?

俺の頭の中に謎の声が響いた。
低く、迫力のある声だ、聞き覚えは無い。だが、
なぜか俺はそいつを知っているような気がした。
しかも、身近にいるような…。

『そうだ。俺はお前のそばにいる』

…誰だ？ いいところで邪魔しやがって！

周囲を見回すと、いつの間にか教会は無くなっていた。

隣にいた部長もいない。家族も友達も誰も彼もいなくなっている

！

というか、今俺が居るのはどこだ？ 感覚がなくなっていく。

平衡感覚も触覚も何もかもがない。視覚も聴覚も突然と消えた。

目の前が真っ暗だ。闇。

耳に何も聞こえてこない。無音。

…：…どうということだ？

無の世界がそこには広がっている。

部長！ 父さん！ 母さん！ ユウスケ！ 松田！ 元浜！

見知った人たちの名前を心の中で叫んでも反応が無かった。

俺はどうなったんだ？ さっきの声はいったい誰だ？

『俺だ』

うわっ！

声は出ないが。俺は心中で心底驚いた。

当然だ。目の前に巨大な怪物が姿を現せば誰でも驚くさ。

大きな目。血のように赤い瞳。耳まで裂けた口に鋭い牙が

何本も生えそろっている。

頭部にも太い角が並び、全身を覆う鱗はマグマのように真っ赤だ。

巨木のような腕、足。鋭角で凶悪そうな爪。

何よりも、バツと広がっている両翼がこの巨大な怪物を

一層デカく見せている。

俺の眼前に……巨大な怪物……

俺の知っているものの中で一番似ているとしたら。

ドラゴン。

声に出していない俺の言葉がわかったのか、目の前の怪物

ドラゴンが口の端を吊り上たように見えた。

『そうだ。その認識でいい。俺はずーっとお前に話しかけていた。

だが、お前が弱小すぎたせいかな、今の今まで俺の言葉が届かないでいた。

やっとだ。やっとお前の前に出現できた』

……こいつが何を言っているのか全然わからねえ。

出現？ずっと俺に話しかけていた？暇なのかよ？そんなの知ら

ねえぞ！

なんだ。俺を食べる気なのか？

『食べる？不味そうなおまえをか？冗談はやめてくれ。

そうじゃない。これからともに戦う相棒に挨拶したかっただけだ』

相棒？

ちよっと、待て。さっきから、わけがわからないっての！

ドラゴン！お前はいつたい。

『わかっているはずだ、なんとなく、そうかもしれないと思ったはずだ。

そう、それでいい。俺はお前の想像通りの存在だ。いずれ、
また話そう。なあ、相棒』

自分の左腕に視線を移した時俺の左腕は赤い鱗に包まれ、
鋭い爪むき出しの異形なものになっていた。

ー〇〇ー

ユウスケ side

はあッ!

息苦しさに目を開けると、そこは見慣れた自室の天井だった。

悪夢でも見たのか俺の心臓がバクバク鳴っており。呼吸も荒い。

上半身を起こし、額の寝汗を手で拭うと予想以上の汗を掻いていた。

そこで、時計に視線を向けると時刻は四時。

そろそろ家を出る時間か。

俺は部屋着からジャージに着替える。

リビングへ降り、朝食を食べ終わったころ。上の階が騒がしくなる。

どうやら双子の弟であるイツセーが起きたようだ、

時計を見れば時刻は四時半もうリアス先輩がくるころだ。

俺はイツセーを待たず、先に家の外へ出た。

すると家の前に赤髪の美少女 リアス・グレモリー先輩が立っていた。

「待たせたようですみません。リアス先輩」

「時間通りねユウスケ関心ね」

ガチャッ!

大きな音を立てながらドアを開けてイツセーが家から飛び出してくる。

「すみません部長!お待たせしました!」

朝練はこれからだつてのに既に汗をかいているイツセー。

「じゃあ行きましょうか」

俺達はリアス先輩に連れられて朝練へと向かう。

「はあッ はあッ」

「ぜーはーぜーはー」

「ほら、イツセー、だらしなく走らないの。」

連帯責任でダッシュ十本追するわよ」

俺達は今早朝の住宅街を走り込んでいた。元帰宅部のイツセーにはきつかったらしく息を切らしながら、走っている。

後ろから自転車に乗った先輩が遠慮なく気合を入れてくる。一カ月ほど前、俺達はひよんなことから人間から悪魔へ生まれ変わった。

先輩リアス・グレモリー様の眷属悪魔になってしまったわけだ。悪魔ってのは人間に呼び出され、代価をいただく代わりに相手の願いを叶える。そんな非日常的な仕事を生業にしていた。先輩も例外じゃない。

俺達は先輩の下僕悪魔として、日々下働きしつつ、目標に向かって一步一步前へ進もうとしていた。

俺の目標か？それは…

「ハーレム王に俺はなる……ぜーはー」

最初に言っておくこれが俺の願いではない。

今のはイツセーの願いだ。タイミングが良すぎだろう。

そうイツセーはハーレムを作ることが夢だ。

イツセーには夢があるが、俺には夢はない。

まずは夢を探すことから始めようと思っている。

とりあえず今の目標は強くなること。

大切な人の笑顔を奪わせないように強くなる。

それが今の目標だ。

俺の能力はかつて『究極の闇』と呼ばれた力らしいが、どんなものかはわからない。けど、とりあえずその強さを目指そうと思っていたが、今朝起きてから、

何故かその強さを本当に目指していいものなのか悩んでいる。

俺はそのモヤモヤを振り払う為にランニングに集中する。

「イツセーの言う夢のためにも、まずは日々の基礎鍛錬から少しずつでも強くなるといけないわ」

先輩の言う通りだ、俺達は未だ見習い悪魔だが、活躍して出世すれば爵位を頂けるらしい。

そうになると、先輩のように自分だけの下僕が持てる。イツセーはそこに目を付けて、下僕を女の子で揃えてハーレムを作ろうと考えているようだ。

そのためにもまずは強くならないといけない。

悪魔の世界は圧倒的に魔力がものを言う。

単純な力が強ければ強いほど上を目指せる。

まあ、知力や交渉力、他の能力でも上へ行けるらしいが、おいにく俺達にはそちらの才能は今のところない。

なので、まずは体力を上げないことには話にならない。

だから、現在こうやって毎日朝練をしていた。

だが、リアス先輩はスパルタだった。

「私の下僕が弱いなんてことは許されないわ」

と、朝練に関して妥協はない。

朝から二十キロ近く走り、そのあとにダツシユを百本以上。

さらに筋トレを各種数えたくない程やらされる。

元々運動はやっていたので前半はいいが、

後半になってくると流石にグロツキーになってくる。

悪魔は夜に力を発揮する夜の住人だ。

朝にやるよりも夜にやった方が練習もいいと思うと

イツセーが提案したが、そうでもないらしい。

苦手な朝日に照らされながら鍛えた方が精神的にも

強くなれると先輩は言う。

毎日筋肉痛で悩まされるが、習慣となると、

始めた時ほど苦しくもない。

以外にも最近はこなせている。

確実に日々成長しているのが窺えた。

体育の授業ではあからさまに結果が出ていた。

夜中ほどではないが、最近では記録が良くなっている。

「はあはあ……」

ゴールである公園に到着すると、俺達は走るのを止めた。二人共、全身から汗が噴き出している。

「お疲れ様。さて、ダツシユ行くわよ」
鬼教官の笑顔が眩しいぜ。

—●—

「イツセーの能力は基礎が高ければ高いほど意味があるのよ」

「ういっす……六十五……」

「六十五……六十六……」

朝のマラソンとダツシユを終えた俺達は公園の広場で
筋トレメニユーとして腕立て伏せに臨んでいた。

俺は重りを装着し、イツセーはリアス先輩を背中に乗せて
トレーニングしている。

先輩はこの短い時間でイツセーの扱い方がよくわかってらっしゃ
る。

あいつのことだ、美少女の尻に敷かれて喜んでいるよ。
たまに鼻の下が伸びてやがる。

べしっ！

「あうっ！」

イツセーがリアス先輩に尻を叩かれた。

「邪念が入っているわ。腰の動きがいやらしいわよ」

「……そ、そんな……六十八……。部長が俺の上に乗っているかと

思うと……六十九……つい興奮して……七十！」

「や、やめろ……イツセー……七十

そんな変態が……兄弟とか泣けてくるよ……七十一」

「腕立て伏せをしながらお喋りなんて、成長したわね。

貴方達もう百回追加しましょうか？」

リアス先輩は苦笑しながら無茶を言う。

先輩それは無理ですよ。勘弁してくれえ。

「うーん、そろそろ来てもおかしくないんだけど……」

「へ？誰か来るんですか？」

無駄口叩いてるとまた追加させられるぞ。

俺がそうイツセーに文句を言おうとしたら。

「すみませーん」と聞きなれた声が聞えてくる。

腕立て伏せの姿勢のまま、声のした方へ顔を向けてみれば。

「ユウスケさーん、イツセーさーん、部長さーん！

遅れてすみませーん。……はうう！」

と金髪の少女 アーシアが転んでいた。

「ユウスケさん、お茶です」

「ありがとう。アーシア」

「イツセーさんもどうぞ」

「あ、ああ、ありがとう」

水筒持参のアーシアからお茶を飲みながら、

俺達は一息付いていた。

あのあと、腹筋と背筋をこなしたので全身が痛いかな。

「それで、アーシアはどうしてここに？」

俺が問うと、金髪美少女は頬を赤くそめる。

「毎朝、お二人がここで部長さんとトレーニングを

していると聞きました……その、

私もお二人のお力になりたいなーって。

今日はお茶ぐらいしか用意出来ませんでしたけど」

アーシア……。なんていい子なんだ！

「いやお茶だけでもありがたいよ」

本音は神器で体の痛みも消してほしいがそれだと意味がないしな。

「ううう、アーシアー俺はアーシアの心意気に感動した！

ああ、かわいい子にそんなことを言われる時が俺に訪れようとは」

イツセーは号泣しながらお茶を一気に飲み干した。

彼女はアーシア、長い金髪と透き通ったグリーン目の目を持った

元シスター。「元」ってことは、現在彼女はシスターではない。

今は俺達と同じグレモリー眷属の悪魔だ。

先月、この子はある事件に関与し、その結果墮天使に殺された。

死んでしまったアーシアだが、リアス先輩の力で悪魔として転生

し、

いまここにいます。

それで、墮天使ってのは聖書や一般書籍にも登場する
悪い天使の事だ。黒い羽根が特徴的だ。

悪魔とは天敵どうしで、いつも小競り合いをしている。
その小競り合いに俺達も先月参戦したわけだ。

その時、ほとんどの敵を仲間倒してもらったことで、
自分の弱さを痛感した俺達は、こうやって強くなるための
トレーニングをしている。

二度とアジアに哀しい思いをしてもらいたくない。

あの笑顔は必ず守ってやりたいと思っている。

横を見ると、俺達の主様 リアス先輩はお茶を飲みながら
何か考え込んでいるご様子だった。

「どうかしたんですか、部長？」

イツセーが声を掛けると、

ハツと我に返った様でコホンと咳払いをした。

「いえ、何でもないわ。それより、ちようどいいわね

今日にしようと思っていたから、このまま二人のお家へ
行きましようか」

はい？ 俺達の家？ 何がちようどいいんだろうか？

「もう荷物が届いている頃だろうし」

この言葉の意味を俺は十数分後に理解することになる。

ー〇〇ー

「……これはいつたい」

自宅玄関前に積み置かれた段ボール箱を見て、

俺の顔は引きつっていた。

なんだ、これ？ 送り主も不明だが？

不審物かよ、爆弾とか危険物が入ってないよな。

怪しむ俺達にリアス先輩が言い渡す。

「さあ、二人共。この段ボールを部屋へ運んであげなさい」

「へ？運ぶ？……これを俺達が？…俺の家に!!」

「いいですけど、リアス先輩これは何ですか」

「これはアジアの荷物よ。なら運んであげるのが

紳士的だとは思わない?」

「これ、アーシアの荷物っ?!!」

「これを運び込むってことはまさか!?!」

心底驚愕する俺達にリアス先輩が追い打ちの一言。

「そうよ、今日からアーシアは貴方達の家に住むの」

家族会議。

とても大事な交渉場だ。

権力者である両親の一声が大きな決定権を持つ。

俺ら子供はいかに言葉巧みに交渉を続けられるかが鍵になる。

そして会議は始まったが、開始早々、

権力者のはずだった父さんと母さんは先輩の前では、なぜか縮こまっていた。先輩からは目には見えない

プレッシャーでも放っているのかもしれない。

「お父様、お母様、そういう事情でこのアーシア・アルジェントのホームステイをお許してくださいますか?」

先輩が優雅に無茶な注文を両親に突き付けていた。

当の二人はアーシアをまじまじと見つめながら、

お互い耳打ちし合っている。

まあ、いきなり荷物と共にきて住まわせてなんて厳しいよな。

俺達にも相談なかったし。先輩の中では既に確定事項なのだろう。

……なんだ、二人がチラチラと俺達の方にも視線を向けてくるんだが。

父さんがゴホンと咳払いしたあと、アーシアへ質問する。

「アーシア……さんでいいかな?」

「はい、お父様」

緊張の面持ちでアーシアが応える。

「お、お父様……。くう……きれいな外国人のお嬢さんに

立て続けに『お父様』って言われると、その、なんていうか、

心身に響くね…いい意味で」

父さんは何やら感無量になっている。

先輩、アーシアと年頃の美少女二人に「お父様」

と呼ばれて喜んでいるのか。

やはり血は争えないな。

イツセーと反応がそっくりだ。

「お父さんー」

母さんが父さんを小突く、ハッと父さんも我に返った。

「ゴ、ゴホーン！ホームステイするにしても我が家には

性欲の権化とも言えるバカ息子がいる。残念だけど、

家よりも同じ女の子がいるお宅の方がいいんじゃないかな。

何かあつたあとじや、申し訳が立たない」

実の息子に容赦のない一言だ。それは、俺も否定ができないが。

だが父さんの言っていることは正論だ。

女の子をホームステイさせるなら女の子のいる家の方がいい

たとえば、小猫ちゃんの家とか、

横で母さんが「そーよ、そーよ」と相槌を打っている。

こんな金髪美少女をイツセーのような年頃の男と一緒に住んだら、

何が起こるか分からない。それこそ国際問題だ。と、両親は

言いたいのだろう。

イツセーに対する信頼が皆無だが、こればかりは反論できんな。

ちなみに俺達が悪魔になってしまっていること、

アーシアが堕天使に利用されそうになったことは話していない。

二人にそんなことを話しても信じないだろうし、

父さんも母さんも悪魔に関与しない方がいい。

今回の事はだいぶ砕いて説明してある。捏造設定込みで。

リアス先輩は両親の拒否にも動じず笑顔で交渉を続けた。

「では、このアーシアが娘になるとしたらどう思いますか？」

なんだよその意味深な発言は…？

「どういうことかな？」

「お父様、アーシアはユウスケやイツセーの事を信頼しております。

それは深く私も同様ですわ。

ユウスケは冷静に物事をこなすタイプですが、

誰かの為なら傷つく事も恐れず窮地に飛び込み人を救う。

強く真つ直ぐな心を持っています。

かたや、イツセーは直情型でやや思慮のたりない部分も

ありますけれど、愚かではありません。

むしろ、向かってくる困難を切り開こうと前へ前へ突き進んでいける

熱いものを家に秘めています。私もアーシアも二人のそのようなところに惹かれますわ。特にアーシアは。ねえ？アーシア」

「は、はい！ユウスケさんは私を命がけで助けてくれました。

2人は私の命の恩人です。学校でもたくさん助けてもらっています。

授業の時も」

と、アーシアが満面の笑みで俺たちに助けてもらっている日々を嬉々として話し始めた。学校で起きた些細な出来事でさえ、過大評価で話してくれる。

ううう…恥ずかしくてこの場から逃げ出したいくらいだ。

両親はと言うと、「ほー、うちの息子達がねー」、

「人様の役に立つなんてねー」とまんざらでもない様子だ。

まあ、自分たちの子供が褒められれば親なら誰しも嬉しいものか。

そこへ先輩からのダメ押しの一言。

「今回のホームステイは花嫁修行も兼ねてと言うのはどうでしょうか？」

『花嫁!??』

はあ? なんでそうなる!??俺とイツセーと両親が

素頓狂な声を上げた。頭のアーシアは意味がわかってないようで

疑問符を浮かべている。

ぶわっ。

父さんの目から大量の涙が流れだす。涙を拭いながら口を開いた。

「…イツセーがこんなのだし、ユウスケも消極的だから、

父さんは一生孫の顔なんて見れないと思っていた。老後も
独り身のお前らを心配しながら暮らさないといけないのかと
心配していたよ」

突然何言っただこの人は。勝手に息子の未来を決めつけて
悲嘆になるなよ。横では母さんもハンカチで目元を拭いながら
泣いていた。

「アーシアさんはどっちの息子が気に入ってくれたのかは
分からないけどこんなイツセーの事もよく言ってくれる
いい子なんて見た事ないわ」

酷い言い草だな。

確かに女性から嫌われているけどさ、

イツセーにだって良いところぐらいあるぜ。

「アーシアさん！こんなだめな息子だけどよろしくお願いできるかい
？」

「そんな…、お二人はダメな方なんかじゃありません。

とても素敵な方ですよ」

完全に話が噛み合っていないなあ。

アーシアが父さんの問いかけの意味に気づかず、

ニツコリと微笑んだ。

それを見て、母さんが嗚咽を漏らしていた。

なにこれ？何かドラマのワンシーンかよ!?!?

「リアスさんーアーシア・アルジエントさんを

我が家でお預かりしますよ！」

父さんの快諾を聞き、先輩も微笑む。

「ありがとうございますお父様。と言うわけで2人とも。

これからアーシアをよろしくお願いね。アーシア、これから

二人のお家にご厄介になるのよ。失礼のないように。

親御さんと仲良くしなさい」

「本当によろしいのでしょうか？私なんかが…

ご厄介になるなんて…ご迷惑じゃ…」

困惑した様子の方々に先輩が言う。

「日本の文化、生活に慣れるにはその土地の者の家で習うのが一番。貴方に『部員の中で一緒に住みたいのは誰?』と訊ねたら、迷いもなくユウスケがいいと言ったでしょう?」
なるほど、そういうことか。アーシアは先輩の元で厄介になっ
た。

俺たちが通う学校の旧校舎の一室を間借りしていたんだ。

「は、はい。確かにそう言いましたけれど…」

「いいんだよ、アーシアさん! 我が家で日本に慣れなさい!

これから永住するかも知らないんだから!」

父さん、嫁にもらう気満々じゃないか全く。

「ほら、お父様もこうおっしゃっているのだから」

先輩の笑を見て、困惑していたアーシアもやつと笑顔見せる。

「分かりました、部長さん、なんだかわからないところもありましたが、

ユウスケさん、イツセイさん、お父様、お母様

不束者ですがこれからよろしく願います」

…まんまと懐柔されちゃったよ。父さん母さん。

嫁宣言攻撃はうちの親にとっては必殺の一撃だろうけどさあ。

「ユウスケ・イツセイからアーシアさんをちゃんと守るのよ

未来の花嫁をしつかりと貴方が守りなさい!」

母さんが俺にそんな事を言ってきたが、そこは息子を信じてやれよ!

こうして、アーシアは俺たちと一つ屋根の下で暮らす事となった。

「…花嫁、ね」

第12話 「学校」

アーシアが家で暮らすようになって数日後

「いい天気ですね。今日は体育の授業でソフトボールをやるんですよ。私、初めてなので今から楽しみなんです」
楽し気に通学路を歩くアーシア。

その横には俺とイツセーが挟む形で並んで歩く。

俺達と同じ学校へ通う奴らの好奇心の視線が凄まじい。

「どうして、アルジェントさんと兵藤兄弟が同じ方向から…」

「バカな……何事だ……」

「嘘よ、リアスお姉さまだけじゃなく、

アーシアさんまで毒牙に……」

など、悲鳴に近い声が聞えてくる。まあ、そうだよな。

イツセーを知る奴からしたら、この状況は有り得ないだろう。

唯のモテない犯罪者予備軍だったイツセーが、

ここ最近突如として学校のアイドル達と仲良く

しているわけだからな。

ちなみに、俺は嫉妬の対象には入っていない。

どうやらイツセーの事がショックだったようで、

みんな俺の存在に気が付いていないようだ。

何故かな……悲しくなってきたは……。

さらには転入初日から全校生徒の間で話題騒然だった

金髪美少女とも、こうやって毎日登下校している。

他者からしたら信じがたい現象だ。

アーシアの人気は思っていたよりもデカく。

学校新聞で特集が組まれるほどで、

インタビューまでうけた。

まあそれ書いた俺だけど、

最近では同じ部活の人間から同棲を疑われており

部室に顔を出しづらくなっている。

悪魔の事を知っている部長には、

事情を教えているが、今の俺は特ダネを抱えたカモでしかないので、完全に面白がっている。いつか学校新聞に捏造された内容まで書かれそうだが、イツセーに関しては、男たちから恨みを買っている。今も憎悪に満ちた視線をあちこちから送られている。学校では、イツセーが美少女をとつかえひつかえしている噂が流れて、新聞の一面にもなった。そんな事実はないので放っているが、イツセーはモテていると勘違いされている現状を楽しんでいるようだ。

イツセーを見れば、妬みの視線に対して胸を張って我関せずとニヤつきながら歩いてやがる。

「何か面白いことありました？」

ニヤついているイツセーを

不思議そうにのぞき込んでいるアーシア。

イツセーはいきなりなことに驚き赤面している。

「いや、なんでもないよ。ところでアーシア、学校で

何か困ったことはないか？その、

女子とも仲良くやっているか？」

アーシアは元シスターだ、浮世離れた生活を

送っていたから学校生活で戸惑っていると

イツセーは気にしているようだ。

「早く慣れるようにいろんな

ことを教えてくれます。お友達もたくさん出来ました

今度、一緒にお買い物に行こうって誘われました」

そんな会話をしながら学校に到着し、教室へと向かう。

「あらユウスケじゃない。朝から美少女を侍らせて

そのうち新聞の一面を飾るのも時間の問題ね」

途中であったのは先程話した新聞部の部長にして、

俺の悪魔契約の契約者でもある。

大空奈美先輩だ、腰まである長いオレンジ色の髪

と特ダネに目がないのが特徴だ。

「事情知っているんですから。からかわないでくださいよ」

「あら、私は記事にはしないわよ。でも他の皆は分からないわよ
どんな記事を書くかは個人の自由よ。問題でも起きない限りは
新聞に載せるは」

部長は記事の内容が取材先へ迷惑が掛かるものは載せないの
身内だろうが、プライベートに関わるものは載せないだろう。

「じゃあユウスケ今夜もお願いね」

それだけ言うと部長は去っていった。

今夜とは悪魔の依頼で『夜に現れる鎧武者』の正体について
調べるのが今夜の依頼だ。

毎日新聞部の取材でこの町に流れる噂や謎を一緒に究明するのだ。

大抵、悪魔に関係する事か、人間の変質者なので、用心棒として、
俺が同行している。割合としては変質者の方が多いけどな。

ところで、話は戻すが、アーシアにとって学校生活での
問題点が一つある。これに関しては俺も頭を悩ませている。

「アーシアちゃん！おはようー！」

「おはよう、アーシアさん。今日もブロンドがキラキラ

輝いてるね」

廊下を歩いていると、坊主頭の男子松田と、眼鏡をかけた男子

元浜がアーシアへ近寄ってくる。イツセーの悪友二人だ。

学内でもスケベで有名だ、イツセーも含めてな。

「おはようございます、松田さん、元浜さん」

ニッコリ、アーシアから朝の挨拶をもらい、感無量の二人。

「やはり、これだね、元浜くん」

「ああ、そうだな、松田くん。美少女からの

『おはようございます』、朝から生き返る思いだ」

…この二人はこんなことでも幸せを感じるのか。

そう、俺が頭を抱えてる悩みは、こいつらだ

こんな歩くわいせつ物はアーシアに近づいて

欲しくないが、あの教会でイツセーが紹介するって

約束したからな、それは仕方ない。

まあ、アーシアに悪影響を及ぼす様なら、俺が何とかするか、

俺も紹介されるまで、話もしたことなかったが、話してみれば悪い奴らではないしな。

唯の変態なだけで。

ドゴツ！

「ぐふっ！」

二人について考えていると、イツセーが松田からボディーブローを食らっていた。

「何しやがる、このハゲー！」

イツセーが抗議をするが、松田は笑みを浮かべたまま、さらにイツセーへローキックをお見舞いしている。

「大丈夫ですか!! イツセーさん!!」

「大丈夫だよアーシア。これは男同士のじゃれ合いだよ」

「そうそうユウスケの言う通りこれはスキンシップだよ」

俺はアーシアに心配かけないように誤魔化すことにした。多分嫉妬からの犯行だろう。

「そうなんですネ、まだ知らない事ばかりで、

突然のことで、驚いてしまいました」

俺の言い訳に元浜が賛同したことで、

なんとかアーシアを誤魔化すことが出来た。

「ハハハ、イツセーくん。聞いたよ」

「何がだ？」

「なんでもアーシアちゃんと毎日登校しているんだって？」

「それがどうした」

「これはやばいんじゃないか？」

「おかしいじゃないか。何故に毎日同じ方向から朝登校してくるのかな？かな？ユウスケならまだわかる。

前にも不登校の奴を家まで向かいに行ってたからな。

アーシアさんの護衛みたいなもんかと思ったが、

君はそんな奴じゃないよな？」

知らん間に俺の評価も高いんだな。

友人に弟が死んだショックで引きこもった奴がいた。

俺はそいつを向かいに行っただけだがな。

今では新聞部の頼れる仲間情報収集担当だ。

いずれ紹介する時があるだろう。

だが、これは不味いな俺達の事が噂になってきているようだ。

これはもうあいつの耳に入っけていてもおかしくない。

すると、イツセーはニヤリといやらしく口の端を

吊り上げていた。

「いいか、松田、元浜。俺とおまえたちは決して

超えられない壁で隔てられてしまった。

これは仕方ないんだ」

「な、何を勝ち誇ってやがる！」

「そ、そうだぞ、イツセー。アーシアちゃんと

仲良くなつたからって」

イツセーは勝ち誇った表情を浮かべて話を続けた。

「俺、アーシアと暮らしているんだ。

ひとつ屋根の下で。なあ、アーシア」

「はい。お二人のお家でご厄介になつてます」

『ツツ!』

ニコニコ顔で応えるアーシアを見て絶句する二人。

もはや言葉すら出ないらしい。

「嘘だ！」

松田は涙を流して全否定している。

どこぞのひぐらしかよ。

「フハハハ！泣け！喚け！そして死ねえ！」

イツセーも勝ち誇って嬉しそうだ。

テンションが上がってさすらいの吟遊詩人みたいになってやがる。

「バ、バカな…。イツセーが、金髪美少女と

ひとつ屋根の下で…？有り得ない…

世界の法則が崩れるぞ…」

手を震わせながら、元浜はズレた眼鏡を直している。

「じゃ、じゃあ、朝、アーシアちゃんに起こされることも?!」
松田が質問をしてくる。

「アーシアには今朝も起こされてしまったな」

格好つけるな、流石に自分で起きろよ。

「イツセーさんはお寝坊さんですからね。うふふ」

アーシアの返答を聞き、松田が床に突っ伏した。

実際には俺とアーシアの二人に起こされている。

「ご飯をよそってもらったりもか…?」

今度は元浜が聞いてくる。

「アーシアは気が利く子だって、母さんも褒めていたよ」

「そんな…：照れますよ」

質問に俺が答えてやると、アーシアは自分の頬に手をあてて顔を赤くしている。

その光景を見て、血涙を流すんじゃないかって形相で

元浜がこちらを睨んでいた。

不味い、ヘイトがこっちにもきたな。

今は刺激しない方がよさそうだな。

イツセーが、女性の知り合いが出来たってだけで、

ここまです嫉妬するとはな、

「ユウスケはいろんなかわいい子と知り合っているん

だろう?! リアス先輩! 姫島先輩! 大空先輩! この学園の

三大お姉さまだぞ?! さらに学園の小さなアイドル小猫ちゃん

ときて今度は金髪美少女のアーシアちゃんだ!

同じ学校にいるのに、この差はなんだよ!

イツセーだってついこの間までこっち側だったろ。

理不尽だ! 俺達が壊れそうだよ」

「俺達に誰か紹介してくれよ!」

やはり俺に矛先が向いたか。だが答えは決まっている。

「だが、断る!」

「な、なんだと！」

俺の即答に二人は驚愕していた。

こいつらを紹介したら迷惑になりそうだしな。

流石にそれは俺には出来ないな。

「なら、イツセー！一人ぐらい紹介してくれても

罰は当たらないと思うぞ。というか、

誰か紹介してくれ。頼む。頼みます」

ずずいっと顔を近づけながら元浜がイツセーにお願いする。

凄いい迫力だな。だけど、イツセーに紹介できる女性なんていたかな

？

イツセーは心当たりがあつたらしく、

携帯を取り出し電話帳を確認していた。

「ちよつと待ってろ」

イツセーは俺達を残して離れたところで電話している。

数分電話をして、ニヤつきながら戻ってきた。

「なんか、大丈夫な子がいたぞ。今日OKだとき。友達も連れてつれてくるって。

これ、紹介できる子の番号。メールアドレスもあるから。てか、まずはメールで

連絡取れ。そのほうが幸せになれる」

「サンキューー！」

さつきまで嘆いていた松田が一瞬でイツセーの携帯を奪う。

今まで泣いていたのにすぐさま反応して、変化早すぎるだろ。

だけど、イツセーに紹介できる女性がいたのも驚きだが、

あのニヤけ顔は何か企んでいるな。

早速番号を登録する二人。

「ありがとうございます！イツセー様！この御恩は一生忘れません！」

「俺達も速攻で彼女作るからよー！」

「まずはお互いの事を知るところから始めろよ。」

恋人は急いで作るもんじやないだろう」

「そうだな、ユウスケの言う通りだな」

「で、どんな子なんだ？美少女なんだろうな？」

紹介した子の容姿を松田が訪ねてくる。

イツセーは頬をポリポリかきながら答える。

「ああ、まあ、乙女だな。それは間違いない」

乙女？イツセーにしてはおかしな言い回しだな。

俺達の知り合いで乙女？ アーシアぐらいしか思いつかないが？

「乙女……す、素晴らしい……素敵だよ、イツセーくん！」

「全くイツセー先生には頭が下がる思いだよ」

こいつらこころ態度を変えてどうしようもない奴らだな。

アーシアに出会わなかったらイツセーもこうなっていたのか。

知人ならいざ知らず、家族がこうなったら流石に嫌だな。

その点ではアーシアには感謝しないとな。

「ありがとうなアーシア」

「どうしたんですかユウスケさん。」

感謝するのはこちらの方ですよ」

「いや、ただ感謝の気持ちを伝えただけだよ」

有頂天になっている二人をさておいて。

俺はアーシアに感謝の気持ちを伝えていた。

するとニコニコ顔の松田がイツセーに尋ねていた。

「いやー、イツセーくん。ところで『ミルたん』って

どうして『ミルたん』なんだ？」

それを聞いて俺の脳裏には

メイド服を着た覇者の姿がよぎった。

なるほど、そういうことか、全てを理解した俺は

それ以上この件に関して考えるのを止めた。

彼らが無事に帰ってくる事を祈っておこう。

ー〇〇ー

俺は本日の依頼の前に部屋でくつろいでいた。

ここは学校の裏手にある誰も使用していない旧校舎。

その三階の一室にオカルト研究部の部室兼グレモリー眷属悪魔の集会場があった。

まあ、俺だけオカルト研究部には所属していないがな。

「ただいま戻りました！」

そこにチラシ配りを終えたアーシアとイツセーが帰ってくる。

アーシアも俺達と同様にチラシ配りを行っている。

だがそこで問題が発生した。

アーシアは自転車に乗れないのだ。

そこで、俺とイツセーが日替わりで自転車に乗せて配っている。

「お疲れアーシア」

「はい！ユウスケさんもお疲れ様です」

「おいおい、ユウスケ俺にも劳いの言葉ぐらいあってもいいんじゃないかねえの」

アーシアにのみ声を掛けた俺にイツセーが皮肉を言ってくる。

「馬車馬ばこ苦勞」

俺は上から目線で言っちゃった。

「ぐぬぬ。まあアーシアとの自転車デートで俺はハッピーだもんね」

「言ってる」

「あらあら、お疲れ様。いまお茶を入れますわ」

次に出迎えたのは副部長でありリアス先輩の参謀、姫島朱乃先輩。

三年生の先輩で、つやつやの黒髪でいつもニコニコ笑顔が特徴の人だ。

「やあ、夜のデートはどうだった？」

爽やかな笑顔を浮かべるイケメンは木場祐斗。

多くの学園女子のハートを射抜くこの学園の王子だ。

イケメン嫌いのイツセーには天敵のようなものだ。

「最高に決まっているだろ」

木場の質問に対して親指を立てるイツセー。

「……深夜の不純異性交遊」

「それはちがうよ小猫ちゃんあれは唯の自転車をこぐだけの馬車馬だよ」

静かな声で厳しい事を言っているのは小柄な一年生、塔城小猫ちゃん

一見小学生にしか見えないロリ少女のせいか、学園のマスコットとして人気が高い。

イツセーとアーシアは奥のソファアーに座るリアス先輩のもとへ向かう。

「部長。只今帰還しました」

イツセーが報告するがリアス先輩はボーツとしたまま、あらぬ方向を見つめていた。

物思いにふけっているのか？深いため息もついているし。

イツセーの横でアーシアもリアス先輩の視線の先を追ったりして

る。

「部長、ただいま帰還しました！」
さつきよりも大きい声で報告する。そこでようやく気が付いたよ

うで、
リアス先輩はハツと我に返った様子だった。

「ご、ごめんなさい。少しボーツとしていたわ。」

「ご苦労様、イツセー、アーシア」

俺の時も同じような反応だった。最近は考え込む時間が多くなつた気がする。

普段はいつも通りエレガントに俺らに命令を下すのに、少し目を離すと

ボーツとしたり。ため息も多くなった。

彼女は上級悪魔だからな、俺達にはわからない悩みがあるのかもしれない。

月のノルマが達成できていないとか、まあそれは未だに依頼を満足に達成できない男が一人いるからなあ。

とこれでグレモリー眷属の悪魔は全員そろったか。

皆俺以外は学園での有名人ばかりだ、

まあ、イツセーはエロくて有名なんだけどな。

全員がそろったことを確認したりリアス先輩が言った。

「さて、今夜からアーシアにもデビューしてもらいましょうか」
ついにか！

「え？」

きよとんとしているアーシアに俺が説明する。

「アーシア、今日から悪魔として本格的にデビューだ！

魔方陣から契約者の元へ転移して契約してくるんだ」

「わ、私がですか？」

狼狽しながら、自分を指さすアーシア。

「そうですよね、リアス先輩？」

俺の問いにリアス先輩も頷く。

「そうよ。チラシ配りは今夜で終了。

いつまでもやらせておくと、イツセーとユウスケが喧嘩しそうだもの」

別に取合っているわけではないけど、

二人共アーシアが心配なだけだしな。

そして、俺達のデビュー時と同様、アーシアの手のひらにリアス先輩が

グレモリー眷属印の魔方陣を記していく。

あの印のおかげで、魔方陣を行き来できるようになる。

「朱乃、アーシアが魔方陣を通れるだけの魔力があるか、調べてみて」

「はい、部長」

リアス先輩に頼まれ、朱乃さんがアーシアの額に手を当てていた。

指先から淡い光が出て、魔力を感じ取っている様子だ。

「イツセーの前例があるから、ちゃんと調べないとね。

さすがにないとは思うけれど」

そうだった。イツセーのデビューは散々なものだった。

微量な魔力があれば使える魔方陣だが、

その微量な魔力さえなかったので、前代未聞の

契約者の所へチャリ移動を強いられている。

俺の時も、部長に悪魔だとバレたし、何かしらトラブルはあるかもな。

「部長、大丈夫ですわ。問題ありません。それどころか、眷属悪魔としては部長と私に次ぐ魔力の持ち主かもしれません。魔力の潜在キャパシティが豊富ですわ」
朱乃さんの報告にリアス先輩も微笑む。

「それは吉報だわ。『僧侶』^{ビショップ}としての器が十分に生かせるわね」
リアス先輩が言った『僧侶』とは、アーシアの悪魔としての役目だ。現在の悪魔は人間界の盤上ゲーム『チェス』を模したルールを下僕悪魔に与えていた。

主である悪魔が『王』^{キング}であり、下にそれぞれ『兵士』^{ポーン}、『騎士』^{ナイト}、『僧侶』^{ビショップ}、『戦車』^{ルーク}、『女王』^{クイーン}と続く。『悪魔の駒』と呼ばれる現代悪魔が有する独自の眷属悪魔システムだ。

これは大昔の戦争で多くの悪魔が無くなったため、他の勢力に対抗するべく少数精鋭のシステムで他の陣営との均衡を保とうと生み出されたものだ。

駒の種類により特性が異なり、それぞれが下僕悪魔に能力の後押ししてくれる。

もちろん、主であるリアス先輩を筆頭に俺達にも役目がそれぞれ与えられている。

木場は機動力が向上する『騎士』、小猫ちゃんは力・防御力が向上する『戦車』、

アーシアは魔力が向上する『僧侶』、朱乃さんは三つの駒の能力全ての向上する『女王』、

そして、俺とイツセーは、敵の陣営でのみ他の駒に『昇格』^{プロモーション}する『兵士』だ

話は戻るが、アーシアの魔力が魔方阵を通るのに問題がないようだ。

イツセーみたいなことはそうそう起きないだろうが安心だ。横を見ればイツセーも安心したのか頷いていたが、急に考え込むと、顔に不安の表情が見えてくる。

すると、イツセーが突然涙を流し始めた。

急すぎるだろ、妄想でどこまで想像してるんだよ！

「…イツセー、泣いているの？」

怪訝そうな表情でイツセーの顔を覗き込むリアス先輩。

「部長、ダメです。ダメです！」

イツセーは首を横に振りながら、涙を流していた。

「部長！アーシア一人では不安ですう！アーシアが！」

アーシアが変な奴にいかかわしい注文されたら俺は我慢出来ません！」

何を言うかと思ったら、流石におかしいだろ。

「落ち着けイツセー！それはお前の妄想だ、流石にそんな契約を

リアス先輩が許すとは思わないが」

「ユウスケの言う通りよイツセー、呼び出した悪魔に対しての

過度のいやらしい依頼はグレモリー一族の悪魔にはこないわ。

そういう注文をしている人間もいるけれど、

その手の専門悪魔がいるから。そちらが引き受けてくれているわ。

私の所は安心なのよ？悪魔にだって専門職はあるの」

「部長、本当ですか？本当なんですネ？でも、俺、メツチャ不安なんですよ！」

「落ち着けよ、来たとしても、お前の依頼者みたいな濃いキャラぐらいだろ」

俺はイツセーの過剰ともいえる心配にあきれていた。

リアス先輩もため息をついているし。

「わかったわ。初めのうちはアーシアの助手にイツセーを付けるからそれでいいかしら？」

「ありがとうございます！アーシア！変態相手は俺に任せてくれ！」

アーシアは普通に何事もなく契約を取ればいいんだからな！」

「は、はい」

イツセーはアーシアの手を取り安堵していた。

「そうそう、変態の相手は変態に任せておけばいいよアーシアもイツセーが勝手にやることだから気にする必要はないぞ」

周りに心配をかけてしまっていると困惑気味のアーシアに俺は声を掛ける。

「イツセーはアーシアが来なくていいと言うまで、一緒に依頼についていくだろうから。」

慣れてきた辺りで、辞めさせないとな。

契約自体は取れてはいないが、依頼者には人気だからなあいつは。

「というわけで、依頼が入ったら、アーシアは」

「イツセーを連れて魔方陣から転移してね」

「はい、わかりました部長さん」

と、そんな会話をしている傍から魔法陣が光出す。

魔方陣を管理している朱乃さんが魔方陣の一角に現れた

悪魔文字を読みだした。

「あらあら、さっそくアーシアちゃんがこなせそうな願いを持った方が」

「私たちを召喚しようとしていますわ」

朱乃さんの報告を受けてリアス先輩が微笑む。

「それは都合がいいわ。契約者の元へ行くのに必要な魔力は」

「アーシアが捻出することで、魔力の足りないイツセーを」

「フォローしてくれるから。それでいきましょう」

サポートがフォローしてもらってどうするんだよ。

複雑な心境のイツセーがアーシアと共に魔方陣へと近づく。

「行くぞ、アーシアー！」

「はい、イツセーさん！」

イツセーとアーシアは気合を入れて魔方陣で転移する。

「やっと思ったか。イツセーも心配しすぎだな、」

「では俺も部室に行つて、依頼を行つてきます」

「行つてらっしゃいユウスケ」

俺が依頼の為椅子から立ち上がると木場が声をかけてきた。

「ユウスケ君もアーシアさんが心配で行くまで待つてたんでしょ」

「俺は奈美部長との待ち合わせの時間まで待機してただけだよ」

「確かに心配ではあったけど。なぜばれたんだろうか。」

「とりあえず行つて来ます！」

凶星をつかれ、恥ずかしくなったため急いで依頼へと俺は向かう。

ー○○ー

深夜、イツセー、アーシアと共に帰宅した。

話を聞けば、アーシアの仕事も無事に済んだらしい。

イツセーとは違いスムーズに事は進んだらしい。

まあ、イツセーの場合は悪魔だと信じてもらえなかったらしいからな。

「すみません、先にシャワーを頂きますね」

そう言つて、アーシアは風呂へ行つた。

無事に初仕事を終えて彼女も嬉しそうだ。

俺達も部屋へと戻るが、俺はアーシアの入浴中はイツセーを監視することに

しているので、イツセーの部屋でくつろいでいる。

イツセーはいつもこの時間は理性と欲望の間で揺れているので

監視することに決めたのだ、流石にアーシアで興奮したら最低だと理解しているようで、実力行使を行う必要はなさそうだ、

イツセーが邪念を消すために床で座禅を組んで目を閉じ精神統一している。

ここまでしないといけないとはもはや病気だな。

ついにはお経を唱えだし、頭を押さえていた。

悪魔がお経を唱えてどうするよ、自分を成仏させる気か。

カッ！

そのとき、イツセーの部屋の床に光が走る。

光は見覚えのある凶柄を描き出す。

これは、グレモリー眷属の紋様か！

グレモリー眷属の誰かがこの部屋に転移してくるのか！

光がいつそう眩しくなった時、魔方陣から人影が現れる。

女性のシルエットに紅の髪をした。

「部長…？」

「リアス先輩…？」

魔方阵から現れたのはリアス先輩だが、なぜイツセーの部屋に？
何やら思いつめた表情をしているのでただ事ではない様子だ。
リアス先輩はイツセーを確認するとズンズンと詰め寄っていく。
そして、開口一番に爆弾を投下する。

「イツセー、私を抱きなさい」

……は？ 突然の出来事に頭が付いていかない。

今なんだった？空耳か。言語変換にバグでも入ったか？

あれか、リアス先輩は日本人では無いから意味が分かっていないと
か？

怪訝そうな表情を浮かべるイツセーにリアス先輩はダメ押しの一
言を言う。

「私の処女を貰ってちょうだい。至急頼むわ」

……俺は考えるのを止めた。

第13話「婚約」

「ほら、ベットへお行きなさい。私も準備するから」

と、リアス先輩がイツセーを急かしながらも部屋で制服を脱ごうとした。

「いや、いや、いや、おかしいでしょ」

突然の出来事に驚き固まっていたが、

流石にそれ以上は止めさせてもらう。

「あら、ユウスケもいたのね。いつからいたの？

気付かなかったわ、それなら少し席を外してもらえるかしら？」

今気が付いたとばかりにリアス先輩が言っているが、

最初から居たわ！そんなに俺って影が薄いか！

いやそうじゃなくてこの事態は流石に異常だ、

まずは皆冷静になるべきだ。

イツセーなんて状況についていけず、顔を真っ赤にして固まっている。

イツセーはエロの権化だがウブだからステップを踏まないと

心の準備が出来ない様子だ。

今回大人の階段どころか、昇降機でいきなり上まで連れてこられて、

戸惑ってやがる。

「急でごめんなさいイツセー、色々考えたけれど、

これしか方法がないの」

リアス先輩がイツセーに謝っているが話が見えてこない。

ただリアス先輩が自暴自棄になっていることは確かだ。

俺はとりあえずリアス先輩を止めようとしたその時、

カッ！

部屋の床が再び光出した。

それを見て、リアス先輩が嘆息する。

「…一足遅かったわけね…」

忌々しく床の魔方陣を見つめるリアス先輩。

魔方陣の紋様はグレモリー眷属。

リアス先輩を止めるために朱乃さんが来てくれたんだろう。

そんな俺の予想とは裏腹に魔方陣から現れたのは、銀色の髪をした見知らぬ若い女性だった。

メイド服を着ているってことは、グレモリー家に仕える人か？

見た目は某時を止めるメイドだが。

銀髪のメイドさんがリアス先輩を確認するなり、静かに口を開いた。

「こんなことをして破談へ持ち込もうというわけですか？」

メイドさんはあきれた口調で淡々と言う。

それを聞いたリアス先輩は眉を吊り上げる。

「こんなことでもしないと、お父様もお兄様も私の意見を

聞いてはくれないでしょう？」

「このような下賤な輩に操を捧げると知れば旦那様とサーゼクス様が悲しまれますよ」

旦那様？サーゼクス？話から察するにリアス先輩のお父さんと

お兄さんのことか？

しかし下賤ってイツセーの事だよな？まさか初対面でそこまで言われるとは

俺も驚きだよ。イツセーもショック受けてるようだな。

そんなメイドの言葉を耳にして、リアス先輩は一気に不機嫌になる。

「私の体は私の物よ。私が認めた者に捧げて何が悪いのかしら？」

それに、私のかわいい下僕を下賤呼ばわりしないでちょうだい。

たとえ、あなたでも怒るわよ、グレイファイア」

イツセーの性欲は下賤と言われてもおかしくないが、

それを庇ってくれるなんてなんて眷属想いなんだ。

兄弟の俺なんて、言われても仕方ないと

反論する気もなかったのに。

グレイファイアと呼ばれた女性は嘆息する。

「何はともあれ、貴方はグレモリー家の次期当主なのですから、

無闇に殿方へ肌を晒すのはおやめください。ただでさえ、事の前なのですから」

次期当主?…お兄さんが居るのに?

女性の視線が俺達へ移る。途端に頭を下げた。

「はじめまして。私は、グレモリー家に仕える者です。」

グレイフィアと申します。以後お見知りおきを」

丁寧な挨拶を頂いた。クールな印象を受ける。

キラキラ光る銀髪は三つ網編みにして一本にまとめており。

瞳の色まで銀色だった。

「痛いっす、部長」

横を見るとグレイフィアに見惚れてたのかイツセーが

リアス先輩にほっぺをつねられていた。

「グレイフィア、あなたがここへ来たのはあなたの意志?

それとも家の総意?…それとも、お兄様のご意志かしら?」

半眼で口をへの字に曲げたリアス先輩。なんか、普段は大人っぽい

クール態度だから

年相応の女の子っぽい反応は新鮮だな。

「全部です」

グレイフィアさんは、そう即答した。それを聞いて部長は諦めたかのように深く息をつく。

「そう。兄の『女王』であるあなたが直々人間界へ来るのだもの。」

そういうことよね。わかったわ」

「ごめんなさい、イツセー、ユウスケ。私も少し冷静ではなかったわ。今日の事は忘れましょう」

「まさか、この方達が?」

グレイフィアさんが俺達の事を驚愕した表情で見てくる。

「ええ、兵藤一誠と兵藤祐介。私の『兵士』よ。イツセーは
フーステッド・ギア
『赤龍帝の籠手』

の使い手で、ユウスケは『究極の闇』と呼ばれたクウガになれるわ」

「…『赤龍帝の籠手』龍の帝王に憑かれた者に『究極の闇』に至る存在
……」

突然、グレイファイアさんが俺達を異質なものでも見るような目で見つめてくる。

「グレイファイア、私の根城へ行きましょう。話はそこで聞かろう。」

朱乃も同伴でいいわよね？」

『雷の巫女』ですか？私は構いません。上級悪魔たる者、『女王』を傍らに置くのは常ですので」

「よろしい。イツセー」

リアス先輩がイツセーを呼ぶ。ツカツカと歩み寄ってくると、イツセーの頬へキスをする。

「今夜はこれで許してちょうだい。ユウスケあなたにも迷惑かけたわね。」

二人共明日、また部室で会いましょう」

リアス先輩は別れを告げ、グレイファイアさんと共に魔方陣の放つ光の中へ消えていった。

イツセーは頬をさすりながらブーツとしていた。

「イツセーさーん、ユウスケさーん、シャワー上がりましたー！」

俺はイツセー部屋にいる必要もなくなったので呆けているイツセーを残し、

風呂へと向かうのだった。

—●—

次の日の朝。通学路を歩く俺達。

イツセーは昨日の事が忘れられず、一睡もできなかったようで、眠そうに眼をこすっており、顔もゲツソリとしている。

「大丈夫ですか？」

アーシアが心配そうに声をかけている。

「イツセーさんは今朝のトレーニングをしなかったのです、お体を壊したのかなって心配しているんですよ」

心配しているアーシアには申し訳ないが、唯の寝不足だ。

リアス先輩から今日のトレーニングの中止と連絡来たので、

イツセーはトレーニングを行わなかったのだ。

俺は日課となっていたので、行った為、余計に心配だったのだろう。今もフラフラとおぼつかない足取りだ。

寝不足とはいえこれはひどいな。

「イツセー、そのままだと仕事に響くから保健室で寝てくれば？」

「いや、大丈夫だろ、授業中に居眠りはするかもしれないが、

夜には元気になってるさ」

「それならいいんですが」

アーシアも心配しているが、大方昨日の事が忘れられないのだろう。

俺達は教室へ向かう為、廊下を歩いていると。

「イツセエエエエエエエエエエツツ!!」

松田が憤怒の形相で、廊下の先からイツセーに向けて駆け寄ってくる。

昨日イツセーが企んでた件かな？

「死ねええええええええええええええええ！」

逆方向から元浜が凄いやつで走ってくる。俺はアーシアと廊下の端に避難する。

二人が同時にラリアットの体制に入った。ここは廊下だから逃げ場がないぞ！

ドゴツ！

イツセーの首元に二人のダブルラリアットが炸裂する。

会心の一撃だ！イツセーには効果抜群のようだ。

イツセーは首元を押しえながら咳き込みラリアットをかました

二人をにらみつける。

「ふ、ふざけんなああああー！」

松田が突然叫び出す。

「イツセー！お前って奴はー！」

イツセーの襟元をつかみ、殺意の籠った目で元浜が睨んでいる。

「なんだよ、いったい」

イツセーはわざとわからないふりをしているが、二人の怒りは収ま

らない。

「ふぎげんなー！ふぎげんなよーなんだ、あれ?!どう見ても格闘漫画の強敵

みたいな漢じゃねえか！しかもなんでゴスロリ着てんだよ！最終兵器か?!」

松田が涙ながらに訴えている。どうやら昨日二人は出会ってしまったようだ。

「ミルたん」の衝撃はすごいからな。

ミルたんはイツセーのお得意様で契約相手だ。

世紀末覇者としか思えない筋骨隆々の肉体を持った、魔女っ子に憧れる漢の娘だという。

ゴスロリ衣装とネコミミがチャームポイントである。

この説明だけでは何を言っているのかわからないが、他に説明のしようがないかい仕方ないだろう。

体は漢！心は乙女！その名は魔法少女ミルたん！

そんなフリーズが頭によぎったが、

そんな番組作ろうものなら苦情が殺到しそうだな。

俺も部長の依頼で初めて会ったときは変身して警戒したしな。

皆も考えてみてほしい。夜中に暗がりからそんな相手が現れてみな、

驚き通り越してもはや恐怖しかないからな。

部長はミルたんの登場に驚きはしたけど、

すぐにインタビューを始められるのはこっちが驚かされたがな。

俺がミルたんとのファーストコンタクトを思い出していると

今度は元浜が叫び出す。

「しかも、お前！お友達とか言っつてよー！なんの集会か

分らないけどさ！『ミルたん』と同じようなのが

複数集まってきたんだぞ！怖かったよ！ああ、

死ぬかと思ったよ！」

まじかよ、あんなのが他にも存在したのか…。

想像すらしたくないが、ミルたんのファーストコンタクト

は最悪なものとなったようだな。

しかし、どこで、量産されてるんだ、ミルたんシリーズは？
まあ、出会いたくはないがな。

「魔法世界について延々と語られたんだぞ！」

なんだよ『魔法世界セラピニア』ってよおおおおッ！」

イツセーの体をブンブンと揺らして訴えかける松田。

「俺なんて、邪悪な生物『ダーククリーチャー』に

出くわした時の対処方法なんて習ったよ…。

死海から抽出した塩と夜中しか咲かない月 ムーンライトフラワー 見花

を焼いて潰して粉にして作る特殊なアイテム

で退けるらしいぞ…。どう考えてもミルたんの

正拳突きの方が効果的だと思うんだ…。」

元浜も頭を抱えながら唸るように呟いている。

相当なトラウマになってるな。

「よかったじゃないか、これから『ダーククリーチャー』」

が現れても勝てるぞ」

そう言ったイツセーは、そのあと松田元浜コンビが放つ

ダブルブレーションバスターをまともに食らうのだった

自業自得だな。

ー○○ー

「部長のお悩みか。多分、グレモリー家
に関わることじゃないかな」

旧校舎にある部室に向かう途中、

木場は俺達にそう答えた。

アジア、イツセーと共に部室へ移動中に

木場が合流してきた。そこで、イツセーがリアス先輩が最近

「心ここにあらず」状態になっていることを聞いてみたわけだが、

木場も詳しく知らないようだ。

「朱乃さんなら知っているよな?。」

イツセーの質問に木場はうなずいた。

「朱乃さんは部長の懐刀だから、もちろん知っているだろうね」

イツセーは無い頭を使っているようだが、詮索しない方が、いいと思うけどな。兄がいるのに次期当主ってことは

兄に家を継ぐ資格がないか、兄が父親よりも

偉くなつたかだろうから。リアス先輩からしたら

兄が継ぐものだと思っていただろうし、

俺達に出来ることはないだろう。

協力を求められたら、力を貸せばいいさ。

部室の扉前に到着した時、悪寒を感じた。

それは室内に入ることをためらう程だった。

何故かわからないが、入らない方がいい気がする。

すると木場も何かを気づいたようだ。

「…僕がここまで来て初めて気配に気づくなんて…」

目を細め、顔を強張らせる木場。

イツセーはそんな木場の反応に何のことかと

不思議がっている。

どうやらイツセーには感じないようだ。

するとイツセーは気にせず部室の扉を開いた。

室内にはリアス先輩、朱乃さん、小猫ちゃんがおり。

そして、銀髪のメイド、グレイフィアさんがいた。

機嫌の悪いリアス先輩。いつも通りニコニコ顔の朱乃さんだが、

どこか冷たいオーラを漂わせている。

小猫ちゃんは部屋の隅で椅子に静かに座っていた。

できるだけ部屋にいる人たちと関わりたくないって感じた。

俺も出来れば帰りたいたいぜ。

なぜなら、会話の無い張り詰めた空気が室内を支配しているからだ、

木場が後ろで「まいったね」と小さく呟いていた。

部屋に入る俺達だが、いつもみたいに皆から声を掛けられることは無い。

それだけ余裕がないという事だ。

アーシアも部屋の空気に気圧されたのか、

不安げな表情で俺の制服の裾を握っている。

俺はあまりの空気に大丈夫と言って頭を撫でてやる事しか出来なかった。

リアス先輩がメンバーの一人一人を確認して口を開く。

「全員そろったわね。では、部活をする前に少し話があるの」

「お嬢様、私がお話ししましょうか？」

リアス先輩はグレイフィアさんの申し出を手を振っていない。

「実はね」

リアス先輩が口を開いたその時だった。

部室の床に描かれた魔方陣が光出す。

誰かが転移してくるのか？だが、皆ここに集合している。

グレイフィアさんのような使用人が又来るのか？

そんな俺の予想は間違っていたようで、

床に描かれたグレモリーの紋章が知らない形へと姿を変えた。

「フェニックス」

近くにいた木場がそう呟く。

室内を眩い光が覆い、魔方陣から人影が姿を表す。

ボワツ！

魔方陣から炎が巻き起こり、室内を熱気が包み込む。

火の粉が飛んで来て肌に当たる。

炎の中で佇む男性のシルエット。

そいつが腕を横に薙ぐと、周囲の炎が振り払われた。

「ふう、人間界は久しぶりだ」

そこにいたのは赤いスーツを着た一人の男。

スーツを着崩しているせいか、ワイルドな印象だ。

見た目は二十代前半で、整った顔立ちだが、

どこか悪ガキっぽい雰囲気だ。

まるでホストみたいな男だな。

男は部屋を見渡し、リアス先輩を見つけると口元をにやけさせた。

「愛しのリアス。会いに来たぜ」

愛しのリアス？この男、やけにリアス先輩に馴れ馴れしいな。

リアス先輩の方は半眼で男を睨んでいる。とても歓迎しているとは思えない。

そんな、先輩の様子などお構いなしに、男は近づいていく。

「さて、リアス。早速だが、式の会場を見に行こう。」

日取りも決まっているんだ、早め早めがいい」

男はリアス先輩の腕をつかむ。

「…放してちょうだい、ライザー」

低く迫力のある声でリアス先輩は男の手を振り払う。

完全にキレてるな、ここまで怒っているのは初めて見るな。

ライザーと呼ばれた男は手を振り払われたことなど気にもせず、に笑うだけだった。

するとイツセーがホスト相手に怒り出す。

「おい、あんた。部長に対して無礼だぞ。つか

女の子にその態度はどうよ？」

そうイツセーが物申す。男はイツセーへ顔を向けると道端のゴミを見るような目で見ている。

イツセーはさらにムカついているようだ。

「あ？誰、おまえ？」

不機嫌な口調だ。先ほどのリアス先輩への対応とはまるで違うな。

完全にこちらを下に見ているな。

この態度は俺もイライラしてくるな。

「俺はリアス・グレモリーさまの眷属悪魔！」

『兵士』の兵藤「誠だ！」

言ってやったとどや顔のイツセー。

いつもなら名乗っただけでドヤ顔するなど

おちよくるところだが、今回は相手が格上だ。

よくやったと褒めておこう。

「ふーん。あつそ」

ズル。

これは、面倒なことに巻き込まれたかもしれないな。

第14話「条件」

いつものオカルト研究部の部室。
そこに招かれざる客が現れた。

「いやー、リアスの『女王』が淹れてくれるお茶は
美味しいものだな」

「痛みいりますわ」

朱乃さんのお茶を褒める男ライザー。

朱乃さんもニコニコしているが、いつもの

「あらあら」や「うふふ」といった返しが無い。

朱乃さんもライザーに対して

思うところがあるようだ。

ソファに座るリアス先輩。その隣につき、

軽々しく先輩の肩を抱くライザー。

先輩が何度も肩を抱く手を振り払うが、

ライザーは構わず肩やら手やら

髪やらを触っている。

婚約者といえど馴れ馴れしいだろ。

唯のセクハラだと思うがな。

俺達下僕は二人の上級悪魔から少し離れた

席に集まって、二人の様子を見ているしかない。

他の部員達を見れば皆悔しさが顔に出ていた。

「いや、一人だけニヤついている奴がいた。

誰であろう、馬鹿のイツセーである。

「あ、あの、イツセーさん。

何か楽しいことありました？」

隣にいるアジアが怪訝そうに尋ねている。

違うんだアジア！そいつは

妄想の世界にトリップしてた

だけだ。悲しいけどこれは現実か？

皆が真剣に悩んでるのにお前ってやつは。

「…卑猥な妄想禁止」

小猫ちゃんがぼそりと呟く。

「イツセーくん。とりあえず涎を

拭いた方がいいよ」

爽やかスマイルでハンカチを差し出す木場。

「よ、余計なお世話だ!」

イツセーは制服の袖口で拭おうとしてアジアに

自身のハンカチで拭いてもらう

「そろそろお茶の時間ですから、

お菓子の事を考えて涎が出ちゃったんですね」

屈託な笑顔でそう言われて

流石のイツセーも心が痛むようだ。

「ありがとうアジア」

「ユウスケくんも涙を拭きなよ」

そう言つて木場は俺にハンカチを差し出す。

「ありがとう」

イツセーのあまりにも情けない姿に

俺は涙を流していた。

俺が涙を拭き木場にハンカチを返したその時、

「いい加減にしてちょうだい!」

怒った先輩の声が室内に響き渡る。

そちらを向くと、ソファから立ち上がった先輩が

ライザーを睨んでいた。

ライザーの方は変わらずにやけた表情だ。

「ライザー!以前にも言ったはずよ!私はあなたと

結婚なんてしないわ!」

「ああ、以前にも聞いたよ。だが、リアス、

そういうわけにはいかないだろう?」

君の所のお家事情は意外に

切羽詰まっていると思うんだが?」

「余計なお世話だわ！私が次期当主である以上、

婿の相手ぐらい自分で決めるつもりよ！

父も兄も一族の者も皆急ぎすぎるわ！

当初の話では、私が人間界の大学を出るまでは

自由にさせてくれるはずだった！」

「その通りだ。君は基本的に自由だよ。

大学に行ってもいいし、下僕も好きにしたらいい。

だが、君のお父様もサーゼクス様も心配なんだよ。

お家断絶が怖いのだ。ただでさえ、

先の戦争で純血悪魔が大勢亡くなった。

戦争は終わったとはいえ、墮天使、

神陣営とも均衡状態。

奴らとのくだらない小競り合いで

純血悪魔の跡取りが殺されてお家断絶したなんて

話もないわけじゃない。純血であり、

上級悪魔のお家同士がくつつくのは

これからの悪魔情勢を思えば当然だ。純血の上級悪魔。

その新生児が貴重なことは君だって

知らないわけじゃないだろう？」

どうやら話の内容から、悪魔世界の大事な話のようだ。

俺達が口を出せることではないな。

ライザーがカップの紅茶に口をつけてから、

さらに話を続ける。

「新鋭の悪魔。

君の下僕みたいに人間からの転生悪魔が最近幅を利かせているけど、

それでは俺達古い家系である上級悪魔の立場が無い。

力に溢れているというだけで転生悪魔と通じる旧家もいる。

まあ、それもいい。

新鮮な血もこれからの悪魔には必要だ。

だが、純血の悪魔を途絶えさせるわけにもいかないだろう？

俺と君は純血を途絶えさせないために選ばれたんだ。
俺の家は兄たちが居るから問題ない。

しかし、君の所は兄妹二人だけ。

しかも君の兄君は家を出られたお方だ。

そうなるよ、リアスしかグレモリー家を継ぐものが居ないんだぞ？

婿を得なければ君の代でグレモリーは潰えるかもしれない。

君は長く続いた家を潰すつもりなのか？

先の戦争の影響で『七十二柱』ななじゅうふたはしらと称された悪魔はもう半数も残っていない。

この縁談は悪魔の未来が掛かっているんだ」

話もヒートアップしてきたが、純潔の悪魔がどれだけ

希少なのかも理解できた。

『七十二柱』に関しても以前木場に説明を受けたことがある。

人間界でもソロモン王の指輪の話は有名だ。

木場に説明された話では、大昔は七十二もの爵位持ちの一族がいて、

一族ごとに複数の軍団を率いていたが、戦争ではほとんどが消滅した。

部長の家はその戦争で生き残った貴重な純血悪魔一族のひとつであること。

ライザーの発言にはムカつくこともあるが、

そこは悪魔と人間との価値観の違いがあるのだろうか。

まあここはリアス先輩の決定を待とう。

「私は家を潰さないわ。婿養子だつて迎え入れるつもりよ」

先輩の言葉を聞き、ライザーは満面の笑みを浮かべる。

「おおっ、さすがリアス！じゃあさっそく俺と」

「でも、あなたとは結婚しないわ、ライザー。私は私が良いと思った者と結婚する。古い家柄の悪魔にだって、それぐらいの権利はあるわ」

ライザーの言葉を遮り、先輩はハッキリ言った。

それを耳にして、途端に機嫌が悪くなるライザーは目を細め舌打ち

をする。

「…俺もなりアス、フェニックス家の看板背負った悪魔なんだよ。

この名前に泥をかけられるわけにもいかないんだ。

こんな狭くてボロい人間界の建物なんかに来たくなかったしな。

というか、俺は人間界はあまり好きじゃない。

この世界の炎と風は汚い。炎と風を司る悪魔としては、耐え難いんだよ！」

ボワツ！

ライザーの周囲を炎が駆け巡り火の粉が部屋中に舞う。

「俺は君の下僕を全部燃やしてでも君を冥界に連れ帰るぞ」

ザワツ。

殺意と敵意が室内全体に広がる。ライザーが全身から放つ

プレッシャーが俺達を襲った。

背中に冷たいものが走る。上級悪魔からの殺意。

俺はこのプレッシャーの中腰に手をかざしてベルトを出現させる。

直ぐに変身しようとポーズを決めようとしたが、

怖くなったのか、アジアが震えながら俺の腕に抱きついてきた。

ああ、アジアじゃあこの殺気には耐えられないだろう。

イツセーも震えている。木場と小猫ちゃんは震えていないが、

臨戦態勢に入ってもおかしくない空気が流れる。

ここは様子を見るしかない。

木場も剣を出現させていない。

ここで俺が余計なことをして、話をややこしくさせるのは

避けるべき事態だしな。

リアス先輩もライザーと対峙し、紅い魔力のオーラを全身から薄く発し始めている。

ライザーも炎を纏い始めた。凄まじい熱気が部屋を包む。

熱い…あの炎、まともに食らったら直ぐに灰になってしまうな。

リアス先輩と同等の力強さを感じるしな。

見た目はエセホストのくせに実力は本物か、嫌になるぜ。

ライザーの炎が背中に集まり、翼のような形になる。

その姿はまさに火の鳥。

そんな張り詰めた空気の中で冷静に介入する人物がいた。
グレイフィアさんだ。

「お嬢様、ライザー様、落ち着いて下さい。これ以上やるのでしたら、私も黙ってみているわけにもいかなくなります。」

私はサーゼクス様の名誉のためにも遠慮などしないつもりです」
グレイフィアさんの言葉は静かだが迫力のあるものだった。

先輩もライザーも表情を強張らせていた。

まるでグレイフィアさんを畏怖しているようだ。

ライザーは体を覆っていた炎を弱めると、

息を深く吐きながら頭を振った。

「…最強の『女王』と称されるあなたにそんなことを言われたら、俺もさすがに怖いよ。バケモノ揃いと評判のサーゼクス様の眷属とは

絶対に相対したくはないからな」

先輩のお兄さんはこんなに影響力がある地位の方なのか。

グレイフィアさんも只者では無いとは思っていたが、

まさか、最強の『女王』とはな。

先輩も紅い魔力を止め、臨戦態勢を解いていた。

どうやら、最悪の状況は脱したらしいな。

先輩とライザーの戦意が無くなったのを確認すると、

グレイフィアさんが言う。

「こうなることは、旦那様もサーゼクス様もフェニックス家の方々も重々承知でした。正直申し上げますと、これが最後の話し合いの場だったのです。

これで決着がつかない場合の事を皆様方は予測し、

最終手段を取り入れることとしました」

「最終手段? どういうこと、グレイフィア」

「お嬢様、ご自身の意志を押し通すのでしたら、ライザー様と

『レーティングゲーム』にて決着をつけるのはいかがでしょうか?」

「ッ!」

グレイファイアさんの意見に先輩は言葉を失っている。
レーティングゲームは以前に説明を受けた

下僕悪魔を戦わせて競い合うゲームの事だったはずだ。

ゲームの強さが悪魔の中では上下関係に大きく影響しているって。
だが、あれは成人した悪魔しかできないはずだ、

ライザーは成人しているように見えるが、

先輩はまだ学生だ、参加する資格は持っていない。

そんな俺の疑問に答える様にグレイファイアさんは

説明を続ける。

「お嬢様もご存じの通り、公式な『レーティングゲーム』

は成熟した悪魔しか参加出来ません。しかし、非公式の純血

悪魔同士のゲームならば、半人前の悪魔でも参加出来ます。

この場合の多くが」

「身内同士、または御家同士のいがみ合いよね」

グレイファイアさんの言葉をため息を吐きながら先輩が続ける。

「つまり、お父様方は私が拒否した時の事を考えて、

最終的にゲームで今回の婚約を決めようってハラなのね？

「…どこまで私の生き方をいじれば気がすむのかしら…っ！」

先輩はいらついたご様子で、殺気がみなぎっている。

「では、お嬢様はゲームも拒否するど？」

「いえ、まさか、こんな好機はないわ。いいわよ。

ゲームで決着をつけましょう、ライザー」

挑戦的な先輩の物言いにライザーは口元をにやけさせる。

「へー、受けちゃうのか。俺は構わない。ただ、

俺は既に成熟しているし、公式のゲームも何度かやっている。

今のところ勝ち星の方が多い。それでもやるのか、リアス？」

ライザーはさらに挑戦的な態度で先輩に返す。

先輩は勝気な笑みを浮かべていた。

「やるわ。ライザー、貴方を消し飛ばしてあげる！」

「いいだろう。そちらが勝てば好きにすればいい。」

俺が勝てばリアスは

俺と即結婚してもらおう」

睨み合う二人。火花が散るガンの飛ばし合いだ。

「承知いたしましたお二人のご意志は私グレイフィアが確認させて頂きました。ご両家の立会人として、私がこのゲームの指揮を執らせてもらいます。よろしいですね？」

「ええ」

「ああ」

グレイフィアさんの問いに二人も了承した。

「わかりました。ご両家の皆さまには私からお伝えします」

確認したグレイフィアさんはペコリと頭を下げた。

俺もゲームに参加することになったか。

相手は経験者で人数も差があるだろうから

勝つのは容易じゃないはずだ。

それとフェニックスということは、

伝承の通りならその身は不死身であり涙には癒しの力があるとか。

だが、リアス先輩がそれをわかっていないはずがない。

何か勝算があるのかもしれないな。

俺はルールもわからない、チェスと同じで王を倒した方が勝ちなら大分きつくなる。ゲーム自体どの様な形式かで作戦も変わる。

『レーティングゲーム』について少し勉強した方がいいな。

すると、ライザーが俺達に視線を向けてくる。

途端にむかつく笑みを浮かべた。

「なあ、リアス。まさか、ここにいる面子がキミの下僕なのか？」

ライザーの言葉に先輩は眉を吊り上げる。

「だとしたらどうなの？」

先輩の答えにライザーはクククと笑い出した。

「これじゃあ話にならないじゃないか？キミの『女王』である

『雷の巫女』ぐらいしか俺のかわいい部下に対抗できそうにないな」

そっぴいながら、ライザーが指をパチンと鳴らすと、

部屋の魔方陣が光りだす。紋章はライザーが出てきた時と同様の

フエニツクスの魔方陣だ。魔方陣の光から続々と人影が現れる。俺達は魔法陣から現れた人数に言葉を失う。

「と、まあ、これが俺のかわいい下僕達だ」

堂々と言うライザーの周囲を十五名の眷属悪魔らしき者が集結した。

『騎士』と思われる鎧を着こんだ者。

『僧侶』と思われるフードを深く被った魔術師。

『戦車』と思われるチャイナドレスの拳法家。

チェスの駒と同じ数がそろっているとと言う事は相手はフルメンバーという事だ。

それに比べてこちらは『王』、『女王』、『騎士』、『戦車』、『僧侶』が一人ずつで『兵士』が二人だ。

イツセーは駒を七つ消費していて、七人分だが、如何せん実力も経験も無い。

勝ちが見え無い戦いだけど、先輩の将来が掛かっている戦いだ！避けるわけにはいかない。それと個人的にもライザーの野郎が気に入らないしな。

それと気になることがもう一つ眷属が全員女という事だ、身内にもいたよなハーレムを目指している奴が、

横のイツセーを見ると、目の前の光景に感動して号泣している。まじで、勘弁してほしいこの空気では締まらないから後でやってほしい所だ。

「お、おい、リアス…。この下僕くん、俺を見て大号泣しているんだが」流石のライザーもイツセーを見て引いているようだ。

先輩はそれを見て、額に手を当てて困っていた。

…弟が申し訳ない。

「その子の夢がハーレムなの。きつと、ライザーの下僕を見て感動したんだと思うわ」

「きもーい」

「ライザーさまー、このヒト、気持ち悪ーい」

ライザーの眷属達はイツセーを見て心底気持ち悪がっていた。

そんな女の子たちを体を撫でながらライザーが慰める。

「そう言うな、俺のかわいいお前たち。上流階級の者を羨望の眼差しで見ているのは下賤な輩の常さ。あいつらに俺とお前たちが熱々な所を見せつけてやろう」

そう言うのと、ライザーは眷属の一人とディープキスをしだした。俺はアーシアに悪影響なので耳と目を塞いだ。

先輩は呆れて見ている。

やっと終わったと思ったら別の女の子とも始めやがった。

てめえは盛りの付いた犬かよ！

婚約の話をしに来たのに相手の領土で他の女といちゃつくのはどうかと思うんだが、礼儀云々の前に男としてどうなんだ！

「お前じゃ、こんなこと一生できまい。下級悪魔くん」

「俺が思っていたこと、そのまま言うな！ちくしょう！

ブーステッド・ギア！」

嫉妬心で我を忘れたイツセーが左腕を天にかざして、叫んだ。

赤い光を発しながら、イツセーの左腕に宿っているものが姿を現す。

ドラゴンの紋様が刻まれた赤い籠手『ブーステッド・ギア 赤龍帝の籠手』。

強力な力を宿主に与える神セイフリッド・ギア 器と呼ばれる代物だ。

イツセーはライザーに指を突き付けて物申す。

「お前みたいな女だったらしと部長は不釣り合いだ！」

「は？お前はその女だったらしにあこがれてるんだらう？」

それを言われるとぐうの音も出ないな。

「うっ、うるせえ！それと部長のことは別だ！そんな調子じゃ、

部長と結婚した後も他の女の子とイチャイチャしまくるんだらう」

「英雄。色を好む。確かに、人間界のことわざだよな？いい言葉だ。

まあ、これは俺と下僕たちとのスキンシップ。

お前だって、リアスに可愛がってもらっているだらう？」

ライザーの言葉にイツセーは怒りを抑えきれないようだ、

同族嫌悪かね？あれを夢見るのは違うと思うがな。

「何が英雄だ！お前なんか、唯の種まき鳥野郎じゃねえか！

火の鳥フェニックス？ハハハ！まさに焼き鳥だぜ！」

「ぶふっ、くくくくくっ！やべえ！イツセー！それはセンスあるな」

俺はイツセーの挑発に不意をつかれて笑ってしまった。

そんな俺達を見たライザーは憤怒の表情へ変貌する。

「焼き鳥?! こ、この下僕悪魔ああああ！調子こきやがつて！」

上級悪魔に対して態度がなってねえぜ！リアス！

下僕の教育はどうなってんだ!?!」

先輩は「知るか」と言わんばかりにそっぽ向いていた。

この空気で笑ってしまった俺も悪いが、イツセーも熱くなってやがる。

戦いは止められないだろう。

俺は変身の構えを取り、叫ぶ。

「変身!!」

腰のベルトのスイッチを手の甲で押し込むと

ベルトの宝玉が赤く発光し俺の姿が戦士の姿へと変身する。

「姿が変わっただと?!」

ライザーが俺の姿に驚いていた。

イツセーも俺の変身を確認して隣に立つ。

「焼き鳥野郎！てめえなんざ、俺のブーステッド・ギアで

ぶっ倒してやる！」

「ゲームなんざ必要ねえさ！俺とユウスケがこの場で

全員たおしてやらあ！」

『Boost!!?』

籠手の甲部分にある宝玉から音声が発せられる。

俺達は気合を入れるが、ライザーの方はため息を吐くだけだ。

「ミラ。やれ」

「はい、ライザーさま」

ライザーが下僕の女の子に命令を下す。

相手は小猫ちゃんと同じぐらい小柄な女の子。

棍を取り出し、くるくると回した後、俺達へ構えた。

すると、ミラと呼ばれた女性が前に踏み込み棍による

突きを放ってきた。俺は反応出来て避けることが出来たが、イツセーは相手が小柄な女の子だった為に油断していた様で、反応ができていなかった。

「イツセー！相手が実力者だぞ！油断するな！」
ダツ！

俺はイツセーにそう叫ぶと、相手へ走り出す。
拳を握り相手の腹めがけて拳を放つ。

バシツ！

だが相手の棍による払いで腕が弾かれる。
だが！

「今だイツセー！」

「はあああつ！」

俺の腕を払った為に棍による防御が無くなった相手へ
イツセーが拳を放つ。

その時、

ボオオンツツ!!?

ミラへ攻撃が当たる直前、突如体が軽くなり吹き飛ばされる。

ガツシヤアアアアンツツ！

俺は何かにつつかり床に転がる。

…つつ…。全身に燃える様な痛みが駆け巡る。

…なんだ、何が起こった？

「ガハッ！」

すぐ横からイツセーの悶える声が聞こえた。

「イツセー、ユウスケ！」

皆の心配する声が聞こえた。

俺達の元へアーシアが駆け寄り俺達に手をかぎす。

瞬間、緑色の淡い光が俺達を包み込む。

温かいものが俺の痛みを消し去っていく。

アーシアの持つ癒しの力だ。

神の加護を受けられない悪魔すらも治療できる神器の能力。
そのせいで以前アーシアは墮天使に狙われたわけだが…。

周りを見れば部室のデスクが壊れており、上に置いてあった雑貨品が床に散らばっている。

ライザーの方へ視線を向ければ、

奴の眷属の一人が手を此方にかざしていた。

「どうやら爆発の魔法を食らった様だ、仲間も近くに居たのになんて奴だ、

魔法を食らってデスクまで飛ばされたのか。

ライザーが倒れ込むイツセーに近づき、見下ろしながら言う。

「弱いな、お前」

「さっきお前らが戦ったのは俺の『兵士』ミラだ。

俺の下僕では一番弱いけど、少なくともお前よりも

実戦経験も悪魔としての質も上だ、お前、最初の一撃見えてなかったらろ

ブーステッド・ギア？ はっ」

イツセーの神器をコンコンと叩き、奴は鼻で笑った。

「確かにこいつは凶悪で最強の無敵の神器の一つだ。

やり方次第じゃ、俺どころか、魔王も神も倒せる。

お前の他にも過去に使い手は数えるぐらいだが、存在した。

だが、未だに魔王退治も神の消滅も成された事はない。

この意味わかるか？」

ライザーは嘲笑う。

「この神器が不完全であり、使い手も使いこなせない

弱者ばかりだったってことだ！お前も例外じゃない！

こういうとき、人間の言葉でなんて言ったっけかな。

…そうだ、『宝の持ち腐れ』、『豚に真珠』だ！

フハハハ！そう、『豚に真珠』だ！お前のことだよ！

リアスの『兵士』くん！」

愉快そうにイツセーの頭をペチペチ叩くライザー。

「ふざけるなよ！テメエ!!？」

「はあっ？」

「さっきの一撃は仲間も巻き込み兼ねなかったらろ

それに、これ以上イツセーを侮辱するなよ！

俺も切れちまいそうだ！」

「お前はこいつよりは強いみたいだが、まだまだだな

手加減した一撃でダウンするなら俺には勝てないぞ

兵士くん」

俺はさつきからのライザーの態度にイラついていたが、

先程の一撃とイツセーへの侮辱で堪忍袋の尾が切れた。

腰のベルトから黒いモヤが広がり。

体に雷が走る。

「見せてやるよ、闇の力を！」

俺が怒りに飲まれると感じたその時、突如背筋が凍った。

「いい加減にしてください。両者とも、それ以上の戦闘は

容認できかねます。これ以上やるのであれば、私が相手になります

よ。

よろしいのですか？」

グレイフィアさんの放った言葉には怒気が含まれていた。

殺気を放つ彼女の姿は先程と違い恐ろしいものだった。

怒りはうせ、恐怖のみが心を支配する。

体は震えて、歯がガチガチと音を鳴らす。

「すみません、これ以上は暴れません」

俺は大人しく、変身を解除して後ろに下がる。

「ライザー様もやりすぎです、他にやり方があったかと、

リアス様も直ぐに眷属を止めていただかないと困ります」

「ええ、ごめんなさい。グレイフィア」

「俺もやり過ぎたよ、すまなかつたなリアス

だが、こいつらの実力も見れた、少しでも使いこなせる様に

なれば、面白い戦いが出来そうだな」

ライザーは顎に手をやり、何か思いついた感じだった。

「リアス、ゲームは十日後でどうだ？」

今すぐやってもいいが、それでは面白く無さそうだ」

「…私にハンデをくれるっていうの？」

「嫌か？ 屈辱か？ 自分の感情だけで勝てるほど『レーティングゲーム』は甘くないぞ。 下僕の力を引き出してやらないと即敗北だ。

初めてゲームに臨む君が下僕達との修行を行なっても何らおかしくない。

いくら才能があろうと、いくら強かろうと、初戦で力を思う存分に
出せず負けた奴らを俺は何度も見たぞ」

ライザーの言葉を先輩は文句も言わず黙って聞いていた。

ライザーが手のひらを下に向けると、魔方阵が光を放つ。

「十日。 君ならそれだけあれば下僕をなんとか出来るだろう」

奴の視線が俺達へ移る。

「リアスに恥をかかせるなよ、リアスの『兵士』諸君。 お前達の一撃が

リアスの一撃なんだよ」

っ！

その言葉は、先輩を思っただの一言なのだろう。

「リアス、次はゲームで会おう」

そう言い残し、ライザーは下僕達と共に魔方阵の光の中に消えて
いった。

その時、ユウスケは気づいていなかったが、

一人の眷属がユウスケを睨んでいた。

その瞳には憎しみの感情が宿っていた。

その女性は魔法を放った人物であり、

その首筋にはタトウーが特徴的だった。

第15話「特訓」

オカルト研究部の一件の翌日

土曜日の朝、俺はアーシアの部屋で正座をしていた。
こうなつた理由は数時間前に遡る

―早朝―

今朝のトレーニングは昨日の一件があつた為
お休みとなつた。俺はいつも通り自主練を行い
家に帰つてきた。

早朝とあつてまだ誰も起きてはいない。

朝食の前に汗を流そうと、

風呂場に行き、扉を開け中に入るとそこには、裸のアーシアがいた。

「きゃッ！」

「なあッ！ごめんアーシア！直ぐに出ていくから」

俺は直ぐに廊下へ出ようとしたが、アーシアに止められる。

「いえ、驚きはしましたが、こういう場合は裸の付き合い？

で仲のいい方ともっと仲良くなれると聞きましたので、

一緒に入りませんか？」

アーシアの誘いに一瞬何を言ってるのかと

頭が真っ白になつたが、直ぐに意識を取り戻す。

「それは同性の場合だ！とにかく俺は後で入るから

アーシアはゆっくり入りなさい！」

俺は慌てて脱衣所から出て部屋へと戻る。

―時は戻り朝食後―

俺は今朝の件でアーシアを説教する為部屋に訪れる。

コンコン

「はいどうぞ」

「入るよ、アーシア」

中に入ると部屋着のアーシアが出迎える。

「今大丈夫かい？朝の件で話があるんだけど」

「はい、大丈夫です。朝のお祈りをしていた所なので」

アーシアは悪魔になった後も神への祈りを欠かさず行っていた。祈りの後に悪魔ゆえにダメージを食らってはいるが、

それでも、自分には捨てられないものだど、痛みを覚悟で行っている。

こんな健気な様子を見て俺とイツセーは神に会ったら必ず一発入れてやると決意した。

「さて、アーシア、まずは朝の事はすまなかつた俺も確認せずに入ってしまったて

申し訳ないと思っている」

「いえ、私は気にしてないので、大丈夫です」

そこが、問題なんだがね。

「いいかい、アーシア、男は狼と思いなさい。

ああいう場合は、気にするのが普通だ。

あの場に母さんが居れば、孫が出来ると喜ぶだろうが、俺だから安心だろうと思っではいけない。

何かあつてからじゃ遅いんだから」

「ですが、ユウスケさんもイツセーさんもいい人

ですし、お二人は人狼ではないですよね」

「まあそうなんだが、もうちょっと危機感を持つてほしい、一緒に入ろうといわれても俺も困ってしまうし、俺もアーシアの

事を困らせたくないしな」

俺はアーシアの事を妹のように思っているなので、悪影響になりえる男は近づけ

させないようになっているし、

だが、一番悪影響なのが、

身内というのがなんだろうか。

まあ、今回の事件の当事者が

イツセーでも同じ対応をしただろうか、

イツセーもアーシアの事は妹という認識だ、両親は娘と思っっているが、どちらかというところ、未来のお嫁さんという考えだろうか。

俺が考えにふけっていると、アーシアが言う。

「わかりました。私、ユウスケさんを困らせること、絶対にしません。ですから、いろいろと教えてください」

「ああ、わかってるよ。でも、異性の俺よりも同性からのアドバイスの方が有効的だと思う。」

リアス先輩か朱乃さんにも相談して、少しずつ今の生活に慣れていこう」

「はい」

ふう。俺は大きく息をついた。

とりあえず、夜に学校へ行ったときにオカルト研究部の女子にわけを話そう。

もちろん、風呂場のアクシデントは内緒の方向で。

「ユウスケー・アーシアー・行くわよ。宿泊出来る準備をしなさい」
「はあ？行く？何処へ？つか宿泊!？」

戸惑っている俺にリアス先輩が振り返り笑顔で答える。

「修行しに山に行くわよ」

—○○●○—

「ひーひー…」

俺とイツセーは尋常じゃない量の荷物を背負って歩いていた。後ろではイツセーが本当にひーひー言っている。

「やっほー」

『やっほー』

誰かのやまびこが聞こえてくる。

今俺達は山にいる。先輩が山に修行に行くというので連れられてきた。

今朝、突然家へ訪問してきた先輩は俺達に身支度をさせたんだ。仲間達も既に集まっており、早々に魔方陣から山のふもとへ皆で転移した。

空は抜けるほど青く快晴だ。周囲には自然豊かな木々が生い茂り、小鳥がチュンチュン鳴いていた。

山の風景は最高だった。

だが、問題は目の前に続く階段だ。

いったい何段あるのか、数えるのも嫌になってくる。

「ほら、二人共。早くなさい」

遙か前方から先輩が檄を飛ばしてくる。

先輩の隣にはアーシア。

心配そうにこちらを見ている。

「…あの私も手伝いますから」

「いいのよ、二人はあれぐらいこなさないと強くなれないわ」

という二人の会話がきこえてくる。

ありがとうアーシア。そして鬼ですねリアス先輩。

俺達の背中には巨大なリュックサック。

そして、両手に俺自身とアーシアの荷物だ。

イツセーも自身の荷物と先輩二人の荷物を抱えている。

俺の方が楽に見えるが、背中のリュックサックは

イツセーのものよりも大きく、重量と時折聞こえる

金属の擦れる音からトレーニング器具が入っていると

思われる。これも修行の一環らしいが、

目的地に着く前に死んでしまう。

「部長、山菜を積んできました。夜の食材にしましょう」

素晴らしいながら、涼しい顔で木場が通り過ぎていく。

奴も背中に巨大なリュックサックを背負っている。

苦も無くすいすいと山道を登っていく姿に俺は言葉を失う。

途中で山菜を摘みだすぐらいだ、奴の体力はこのぐらいは

軽いのだろう。

「…お先に」

さらに横を俺達以上の荷物を背負った小猫ちゃんが通り過ぎていく。

『戦車』の怪力だろうが、ここまで強いとは。俺も負けられないな。

「うおりやあああああ！」

イツセーが小猫ちゃんに先を越されたのが悔しかったのか、気合を入れて一気の階段を駆け上っていく。

俺も負けてられないとイツセーを追いかけて階段を駆け上がる。

そして、追い越し、追い越されと何度も繰り返す内に

俺達は目的地である頂上へ辿り着いた。

「やつと着いたあゝ」

頂上には古い木造の建物がありまるで、

漫画に出てくる。

寺院の修行所のようなだった。

俺達は建物の中へ入ると木造独特な木の香りが漂ってくる。

俺が疲れて床に倒れ込んでいると、

そこへ声をかけてくる人物がいた。

「もお、だらしないわね。これから修行開始なのに

もうダウンしてるのユウスケ」

俺は声が出た方へ顔を向けると。

そこには私服姿の奈美先輩が立っていた。

「ええーなんで奈美先輩がここに!?」

「あら、ここは家の修練所よ私が居たっておかしくないでしょ」
いや、どゆこと？

リアス先輩の話によるとここは奈美先輩のお父さんである大空厳さんが師範を務める。

『大空棒術』の修練場であるらしい。

今回、奈美先輩のご厚意で貸してくれるとのこと。

門下生もおらず身内しかいない為、

この修練所も使われておらず、手に余っていたらしい。

今回の修行で使わせてもらう代わりに

特ダネを要求しそうだがね。

「この修練所は使われていないから

最悪壊してもらっても大丈夫よ

お父さんから許可取っているし

今回の修行も手伝うわ」

どうやら知らない間に話が進んでいたようだ。

—○●○—

リビングに一旦荷物を置くと女性陣は

動きやすい服装に着替えるため二階へ行った。

「僕も着替えてくるね」

木場も青色のジャージを持って一階の浴室へ向かった。

「覗かないでね」

などと、ふざけたことを俺達へ行ってくる。

「マジで殴るぞ、この野郎！」

俺は疲れていたのでスルーしたが、

余裕のなかったイツセーは殺意の籠った目で睨んでいた。

俺達も一休みして体力が戻った所で、適当な空き部屋で

ジャージに着替えた。

着替えから戻ってくると他のメンバーはリビングへ

集結していた。赤いジャージ姿のリアス先輩が

俺達を視界に捉えると、笑みを浮かべながら言う。

「さて、早速修行開始よ」

レッスン1 奈美先輩と精神修行

バシッ!

俺達は敷地内にある武道場にて座禅を行っている。

精神修行と言ったらこれだ。

今もイツセーが雑念があったのか。

奈美先輩に肩を板で叩かれている。

顔が緩んでいたから、妄想に入ってたのかもしれないが、

俺も先日は怒りに飲まれていたので、

精神力は鍛えないとまずいな。

バシッ！バシッ！

「あいたあ！」

余計なことを考えていたせいで、
イツセー共々叩かれてしまった。

レッスン2 木場との剣術修行

次は修練場の外に出て。次の修行に入る。

「よっはっ」

「おりや！ おりやああ！」

「はあああ！」

俺とイツセーが木刀を振り回し、木場との剣の修行に入っている。
軽やかに俺達の攻撃をいなす木場。

イツセーは剣を力任せに振るっっているだけなので、
当たる気配はない。

俺もイツセーの攻撃を避けた後を
狙って攻撃するがかすりもしない。

二人がかりでこれとは、

流石に実力差がありすぎるな。

バシッ！

木刀を木場に叩き落された。

この修行を開始して数回は落とされてる。

「そうじゃないよ。剣の動きを見るだけじゃなく、

視野を広げて相手と周囲を見るんだ」

説明されて簡単に来ることではない。

だが、目の前の敵だけに集中していた為に

この間は魔法を食らってしまった。

周囲をちゃんと見れていれば、

あの攻撃は避けられたのだろう。

やっぱり、『騎士』だけあって木場の技量は凄まじい。

最小限の動きだけで俺達はやられてしまう。

練習量、実戦での経験がものをいうのだろう。

「これは、俺達の修行にはなるけれど、木場の修行にはならないよな？せつかくの時間を使ってもらって、申し訳ないな」

「大丈夫だよ、ここまではウォーミングアップで

僕自身の修行はこれから始めるから」

そう言っつて木場は、腰の高さ程のチェスの駒を持ってきた。

「なんだよそれは？」

「トレーニング用の器具さ」

そう言っつて木場は駒に魔力を送ると、

駒は変形し、人型に姿を変えた。

その姿は西洋の騎士のような

甲冑を見に纏っているが、

頭だけは、馬の形をしていた。

「なんだこれー！」

イツセーが突然の事に驚きの声を上げている。

実際俺も驚いていた。

「これは、トレーニング用の魔導人形の一つ。

ナイトチェスよ。どのような武器も使用でき、

『騎士』の特性も使えるわ」

後ろから来たリアス先輩が説明してくれた。

「祐斗はこの修行期間の内に駒二つ分の人形を

倒す事を目標にしなさい」

「はい。わかりました」

そう言っつた木場は木刀ではなく神器を取り出し、

修行を開始する。

人形の方も剣で戦っているが、

先ほどの俺達との戦いでは、木場が本気を出していないとは思っつていたが、ここまで違うとは思っつていなかった。

『騎士』の特性である速度を生かして、

相手を奔放しながら戦っつており。

俺も目で追うことが出来ないうでいた。

そんな、木場の攻撃も人形は対応できていた。

「リアス先輩、先ほど駒二つ分と言ってましたが、これ以上あの人形が強くなるんですか？」

「ええあれと同じものももう一つあるのだけれど、

合体して人馬型になると速度がけた違いにあがるは」

もしかして、俺がここまで運んだ荷物ってこいつだったんじゃ？

「ほら、貴方達も次の修行に移りなさい！」

「は、はい！」

レッスン3 朱乃さんと魔力修行

「そうじゃないのよ。魔力は体全体を覆うオーラから流れるように集めるのです。」

意識を集中させて、魔力の波動を感じるのですよ」

俺は集中し、手のひらに何かを生み出すイメージで魔力を集める。

「出来ました！」

隣で白いジャージを着たアジアが

魔力の塊を手のひらに作り出していた。

緑色の淡い魔力。アジアの魔力はキレイな緑色をしていた。

「あらあら。やっぱり、アジアちゃんは

魔力の才能があるかもしれませんね」

朱乃さんに褒められ、頬を染めるアジア。

俺もようやく魔力の塊を作ることができた。

俺のは黄色で、アジアのようにソフトボール大ではなく。

ゴルフボールぐらいの大きさだ、

「ぐぬぬぬぬ…」

イツセーも魔力を集めているが、

米粒程の赤い魔力の塊があるだけで、

それ以上大きくならない。

まあ、魔方陣を使用できないんだから、

当然といえば当然か。

「では、その魔力を炎や水、雷に変化させます。

これはイメージから生み出すこともできますが、

初心者は実際の火や水を魔力で動かす方がうまくいくでしょう」
朱乃さんがペットボトルの水に魔力を送る。

ザシユ！

魔力を得た水が鋭い棘と化して、

ペットボトルを内側から破っていた。

すごいな、これは。

「アーシアちゃんとユウスケくんはこれを真似して下さいね。

イツセーくんは引き続き魔力を集中させる練習をするんですよ。

魔力の源流はイメージ。とにかく頭に思い浮かんだものを

具現化させることこそが大事なのです」

イメージかあ。

「得意なもの、いつも想像しているものならば、

比較的早く具象化できるかもしれませんわ」

得意なものか。俺のベルトから雷が出てたし、

雷を練習してみるか？

「朱乃さん、ちよつといいですか？」

イツセーは何か思いついたようで、

朱乃さんに相談していた。

そして、朱乃さんはポカンとした後、

「うふふ、イツセーくんらしいですわ」

と微笑んでいた。

そして、何か準備があるのか一度建物の中に戻る朱乃さん。

何かを持ってくるとイツセーの前に置いた。

大量のタマネギ、人参、ジャガイモだ。

カレーの具材一式じゃないか。

「では、イツセーくん。合宿中、これを全部魔力でお願いしますね」

どゆこと？

まあ、人のことを気にしてる場合ではない。

俺も修行を続けよう。

レッスン4 小猫ちゃんとの組手

「ぬががああああ」

ドゴツ!

イツセーが小猫ちゃんのパンチで、

吹き飛んで今日十回目の巨木との抱擁をしていた。

「…弱っ」

黄色のジャージを着た小猫ちゃんがぼそりと呟いた。

これには、イツセーもショックだろう。

小猫ちゃんは立ち技、寝技、

その他いろいろな格闘技が得意な悪魔少女。

『戦車』の特性、バカげた腕力と強固な防御力も相まって

相当強い。小柄な体のせいで、結構俊敏で、

少しでも目を離せば懐に潜られてボディに一撃をもらおう。

手加減されてるようだが、それでも痛いもんは痛い。

「…打撃は体の中心線を狙って、的確かつ決り込むように打つんです」

そうは言っても俺達は素人だから当てることすら難しいぞ。

小猫ちゃんは腕をぶんぶんと回した後、俺へ拳の照準を定めた。

「…さ、次はユウスケさんの番です」

どうやら、次にあの木に抱擁するのは俺らしい。

レッスン5 リアス先輩と修行

「ほーら、二人共！気張るのよー！」

「…おおっす！」

俺達は朝の階段を駆け上っていた。

背中には岩。体に縄で巻き付けていた。

階段を駆け上っては降りての繰り返し。

重りを付けてこの長さの往復はマジでキツイ。

何十往復もして足がガクガク状態になったころ、

やっとリアス先輩が「はい、OK」と許してくれる。

「次は筋トレね。腕立て伏せいくわよ」

「…はい…」「へ、へーい…」

この人は鬼だ。いや悪魔か。

基礎能力が俺達には絶対的に不足している。

俺は鍛えていたつもりだが、悪魔からしたら、
そこまで変わらないからな。

俺達は、他の部員と比べると練習量がハンパじゃない。

特に戦場を一番駆け巡るであろう『兵士』のため、

筋力、体力を高めるのは必要条件だった。

「ぐわっ!」「ぐうっ!」

腕立てをしている俺達の背中に、

リアス先輩が容赦なく岩を載せてくる。

魔力で岩を軽々と持ち上げているが、

それなら、それで荷物も運べばいいのにな。

「さーて、腕立て伏せ三百回。行ってみましようか」

「オースツ!」

悪魔じゃなかったら俺達は何回死んでいるだろうか。

—●—

「うおおお!うめえええ!マジで美味しい!」

「確かにこれは美味しい。疲れているのもあいまって

いつもより飯がうまく感じる」

今日一日の修行を終え、俺達は夕食をいただいていた。

テーブルに豪華な食事が盛りられている。

木場が採ってきた先ほどの山菜はおひたしにされていた。

そしてメインの肉料理はリアス先輩が仕留めてきた猪らしい。

牡丹肉は初めて食べるがクセもなく美味しいな。

魚料理。これは奈美先輩が川で釣ってきたようだ。

シンプルな塩焼きが美味しい。

その他にも各種色とりどりの料理がずらりと並んでいた。

「あらあら。おかわりもあるからたくさん食べてくださいね」

「ユウスケー!そこは普通料理の腕を褒めるところでしょう」

「この料理は朱乃さんと奈美先輩が作ってくれたようだ。

「すみません。お二人の料理の腕は天下一品です」

実際二人の料理の腕は高く。皆も箸を止めずに食べている。今日の練習はかなりハードだったからな。飯が進むぜ。

イツセーが運んでいた荷物のほとんどが、調理器具と聞いた時は別に要らないのではと

二人して思っていたが、こんな美味しいものが食べたのだから、一生懸命運んだかいたがあったというもの。

それと、視界の端に小猫ちゃんが静かにそして豪快にパクパク食べているのはツツコミを入れないでおこう。

「朱乃さん、最高っス！嫁に欲しいぐらいです！」

「うふふ、困っちゃいますね」

と、イツセーに褒められて、朱乃さんは頬に手を当ててニコニコ微笑む。

「ユウスケさん、私もスープ作ったんですよ」

俺の横に座るアーシアが話しかけてきた。

テーブルに置かれているオニオンのスープ。

これはアーシアのお手製らしい。

俺はスープの皿を手にとると一気に飲み干した。

うん、美味しい。

「スープも美味しいよ。もう一杯欲しいね」

「本当ですかー！じゃあ、よそってきますね」

アーシアは嬉しそうによそいにいく。

「さて、イツセー、ユウスケ。」

今日一日修行してみてどうだったかしら？」

リアス先輩がお茶を飲んだ後訊いてくる。

イツセーが箸を一旦おいて今日の感想を口にした。

「…俺が一番弱かったです」

「そうね。それは確実ね」

俺も箸をおき正直に答える。

「今日木場のトレーニングを見て、

俺達とみんなの実力差がはつきりわかりました。

俺は能力的に得意分野がないので、

総合的に能力の引き上げをしないと

『兵士』として強くなれないと感じました」

「そうね、その為の「プロモーション」が

存在するわ、でもね、各駒の特性を引き出せても

それを扱えるだけの力が今のあなたには、

無いわね」

ハッキリ言われると流石に傷つくのだが、

「朱乃、祐斗、小猫はゲームの経験が無くても

実戦経験が豊富だから、感じをつかめば戦えるでしょう。

貴方達とアーシアは実戦経験が皆無に等しいわ。

それでもアーシアの回復、イツセーのブーステッド・ギア、

ユウスケのベルトの力は無視できない。

相手もそれは理解しているはず。

最低でも相手から逃げられるぐらいの力は欲しいわ」

「逃げるって…。そんなに難しいですか？」

イツセーの質問に先輩はうなずく。

「逃げるのも戦術のひとつよ。

一旦退いて態勢を直すのは立派な戦い方。

そうやって勝つ方法もあるの。けれど、

相手に背を向けて逃げるといふのは、

実はかなり難しいものよ。

実力が拮抗している相手ならともかく、

差が開いている強敵に背を向けて逃げ出すという

のは殺してくださいと言っているようなものよ。

そういう相手から無事に逃げられるのも実力の一つ。

三人には、逃げ時も教えないといけないわ。

もちろん、面と向かって戦う術も教えるから覚悟なさい」

「了解っす」「了解です」「はい」

俺達三人は同時に返事をする。

アーシアを戦いに巻き込んだのは、

グレモリー眷属に転生してしまった以上避けられなかった。

：俺はアーシアを守る力を得ないとだめだ。

最低でもアーシアの盾になる。そのぐらいの覚悟はある。

「食事を終えたらお風呂に入りましょうか。」

「ここは温泉だから素敵なのよ」

「ここは修練所のはずだが、まるで旅館だな。」

「僕は覗かないよ。イツセーくん」

木場が温泉と聞いてニヤついている

イツセーに先制を入れる。

「バツカー！お、おまえな！」

「否定しても顔に書いてるぞ、イツセー」

「あら、イツセー。私たちの入浴を覗きたいの？」

リアス先輩の言葉に全員の視線がイツセーに集中する。

これは、流石に気まずいだろう。

さっさと謝らないとな。

「あら、なら次の新聞の一面は決まりかしら」

そう、奈美先輩が笑いながら言ってくる。

あの人は、マジで記事にするからな。

すると、リアス先輩はクスツと笑う。

「なら、一緒に入る？私は構わないわ」

いやだめでしょう！

「朱乃はどう？」

「イツセーくんなら別に構いませんわ。」

うふふ。殿方の背中を流してみたいかもしれません」

満面の笑みで朱乃さんが肯定する。

バカな！ありえないだろ！

「奈美はどうかしら？」

「別に構わないわよ。それなら、ユウスケに

背中を流してもらおうかしら」

絶対に後でゆすられるじゃん。

当分は奈美先輩の奴隷だろ。

「アーシアは？ユウスケも一緒なら大丈夫よね？」
先輩の問いかけにアーシアは顔を真っ赤にして、
うつむいてしまったが、小さくこくりと頷いた。
うわっ！ありえない展開になってきたぞ。

「最後に小猫。どう？」

当の小猫ちゃんは両手でバツテン印を作る。

「…嫌です」

拒否した。これが普通の女子の反応だ！みんなが可笑しいんだ！

「じゃ、なしね。残念、イツセー」

クスクスと悪戯っぽい笑みで先輩が言う。

多分この流れは予想してたんだろうな。

「覗いたら、恨みます」

小猫ちゃんにも先制を食らっている。

「大丈夫俺が見張っておくよ。ほら行くぞイツセー

俺の背中でも流してくれ」

「イツセーくん。僕と裸の付き合いをしよう。背中、流すよ」

「うっせええええッ！マジで殺すぞ、木場ああああ！」

イツセーの怒りの怒声が建物内に響き渡った。

—○●—

修行二日目。

昨日は風呂の後に夜中まで練習があつた為。

筋肉痛がひどい。リアス先輩いわく

「夜には夜の練習があるわ。元々夜の住民だものね、私達」

だそうだ、毎朝のトレーニングよりハードな為。

同じ部屋ではイツセーが筋肉痛に悶えていた。

で、二日目の午前中は勉強会だ。

リビングに集まり、俺とアーシアとイツセーに

悪魔の知識を教える事になったらしい。

一気に人名を覚えさせられたが、

神話などが好きな俺は比較的覚えやすかったが、神話と実話で、若干違うところがあり、そこで躓くことが多々あった。

ある程度教えてもらった後、木場が改めて問題を出してくる。

「ではイツセーくん、僕らの仇敵。神が率いる天使。

その天使の最高位の名は？さらにそのメンバーは？」

「えっと『熾^{セラフ}天使』だろ。メンバーは…

ミカエル、ラファエル。ガブリエル…うーん。

ウリエルか」

「正解」

「次に僕らの王、『魔王^{サタン}』さま。

四大魔王様を答えてもらおうかな」

「おう！任せておけ！いずれ、出世してお会いする予定だ！

バッチリ覚えてるぜ！ルシファアさま、ベルゼブブさま、

アスモデウスさま！そして憧れの女性魔王さまであら

せられるレヴィアタンさま！」

「正解」

流石に自分が所属している勢力のトップは覚えているか。

「絶対にレヴィアタンさまにあつてみせるぜ！」

そう宣言したイツセーは、顔がニヤついているので、

レヴィアタン様の姿を想像しているのだろう。

「では、イツセーくんが一番苦手な墮天使の幹部を全部言ってもらお

うかな」

墮天使は他の勢力と比べて数も多いし、名前も覚えにくいからな。

果たしてイツセーは覚えているかな？

「墮天使の中核組織を『神の子^{ゴリ}を見張る者』と言って、

総督がアザゼル、副総監がシエムハザ。ここまでは完璧だ。

で、幹部連中は…。アルマロス…、バラキエル…、タミエル…。

あー、えーと、えーと、アレ？ベネなんとか、コ、コ、コ、コカイ

ン…？」

うる覚えのイツセーに俺は代わりに答えてやる。

「ベネムエ、コカビエル、サハリエルだろ」

「正解、イツセーくんもちゃんと覚えないと、一応、これは基本だから。日本の首相や各大臣、近隣諸国の首相のお名前を覚えておくようなものだよ」

まあ、近隣の首相の名前なんて、ニュースで見ても覚えないなあ。興味ないと覚えるのはきついよな。

イツセーも堕天使は嫌いだから余計にな。

堕天使は組織を作って神器を研究しているらしい。

有益な神器所有者は招き入れて仲間にするか、神器を奪うか。

有害な所有者ならばその場で処刑するという話だ。

神器という存在を知らない所有者さえ。その手にかける。

イツセーもそうだったしな。

悪魔の一番の敵みたいだし、俺も容赦はしない。

アーシアもイツセーもあんな目に遭わせた奴らに

手加減は不要だろう。

こんな感じに天使、堕天使について教えてもらった。

次はアーシアが俺たちに授業を始める。

「ゴホン。では、僭越ながら私、アーシア・アルジエントが

悪魔祓いの基本をお教えします」

パチパチ。みんなの前に出て話を始めるアーシアに

拍手でエールを送る。

すると、途端に赤面してしまった。かわいいかよ。

「え、えつとですね。以前、私が属していた所では、

二種類の悪魔祓いがありました」

「二種類？」

イツセーの問いにアーシアは頷く。

「一つはテレビや映画でも出てくる悪魔祓いです。

神父様が聖書の一節を読み、聖水を使い、

人々の体に入り込んだ悪魔を追い払う

『表』のエクソシストです。そして、

『裏』が悪魔の皆さんにとって脅威となっています」

アーシアの言葉にリアス先輩が頷く。

「イツセーとユウスケも出会っているけれど、

私達にとって最悪な敵は神、

あるいは墮天使に祝福された悪魔祓い師よ。

彼らとは歴史の裏舞台で長年に渡って争ってきたわ。

天使の持つ光の力を借り、常人離れた身体能力を駆使して

全力で私達を滅ぼしに来る」

俺はの脳裏にはあのイカレた神父が浮かび上がる。

白髪のイカレたエクソシストで、

悪魔だけでなく、関わった人間さえ切り捨てる。

正直二度と会いたくないな。

俺がエクソシストについて考えていると、

アーシアはバッグからたくさん道具を取り出す。

リアス先輩は汚いものに触れるような感じで

液体の入った小瓶を指でつまんでいる。

「では、聖水や聖書の特徴をお教えします。

まずは聖水。悪魔が触れると大変なことになります」

「そうね、アーシアも触れちゃダメよ。

お肌が大変なことになるわ」

「うう、そうでした…。私、

もう聖水を直に触れられません…」

リアス先輩の言葉にアーシアはショックを受けている。

まあ、悪魔だからな。

「作り方もあとで、お教えします。役に立つかどうかわかりませんが、
ど、

いくつか製法があるんです」

得意分野なのか、ハキハキと楽しそうに

アーシアは講義を続けていた。

「次は聖書です。小さい頃から毎日読んでいました。

今は一節でも読むと頭痛が凄まじいので困っています」
「悪魔なもの」

「悪魔ですもんね」

「…悪魔」

「うふふ、悪魔は大ダメージ」

「ううう、私、もう聖書も読めませんー!」

部員から総ツツコミされて、涙目のアジア。

リアス先輩から聞いたことがあるな。

聖書を読まれると、俺ら悪魔は相当苦しむって話だ。

俺はまだ経験したことがないが、

というか、聖書を愛読してたらいつか死んじまうぞ。

「でもでも、この一節は私の好きな部分なんですよ…。」

「ああ、主よ。聖書を読めなくなった罪深き私をお許し あうー!」

あつ、またお祈りしてダメージ食らっている。

神様、この子のお祈りぐらい見逃してくれよ。

こうして、午前の勉強会を終え、俺達は午後の修行へと移っていつ

た。

第16話「自信」

イツセーside

何日もの間、山にこもって皆と修行して、
わかったことがいくつかあった。

俺には剣の才能がない。

俺には格闘技の才能がない。

俺には魔力の才能がない。

一番大きいのが、俺が壊滅的なほど弱いつてことだ。
皆と修行すればするほど、

自分がどれだけ矮小な存在か突き付けられた。

ゲームで役に立たない。

そう、俺にはアシアのような回復もできない。

俺にはユウスケのような体力もない。

順調といえば、野菜の処理だろうか。

まあ、これも修行の一環だ。

俺は：本当に弱くて、役立たずだったんだ。

―●―

別荘での夜。

俺はベッドの上で天井を見上げていた。

山に籠ってから一週間過ぎている。

朝から晩まで練習だ。

ゲームで想定される連携や攻防バリエーション

なんかも何度も繰り返し返した。

隣のベッドで寝ている木場へ視線を移す。

すやすやとよく寝ているようだ。

：木場は凄い。

修行すればするだけ差を大きく感じてしまった。

俺は一生かけても木場に剣術で勝てないだろう。

生まれ持ったの才能と死に物狂いで努力して得た技術。どちらも俺にはない。

これから努力して果たして木場と同等の腕に届くのだろうか？

それは何年後だ？ いや、何十年後か？

ううん、一生届かないかもしれない。

俺は…。

魔力の修行。隣でぐんぐん成長するアシア。

炎や水、雷も小規模ながら使えるようになってきていた。

俺は、いまだ米粒程度の魔力の塊しか作れない。

俺は…。

部長の修行。俺と同じ修行をしているのに常に俺の先を行くユウスケ。

俺よりも負荷をかけて修行していた。

俺は、ユウスケの背中を見ているだけなのか。

俺は…。

あー、くそっ！

俺はたまらなくなり、寢床を飛び起きた。

のろのろと起き上がり、キッチンへ向かう。

台所で水を一杯飲み干している。

「あら？ 起きたの？」

リビングから部長の声が聞こえる。

見ればテーブルの所に部長が座っていた。

「あ、部長。こんばんは」

「何改まっているの？ ちょうど良かった、

少しお話ししましょう」

テーブルライトキャンドルがテーブルの上で淡い灯を灯している。

悪魔は灯りが無くても夜目が利く。

おかげで夜の山でトレーニング出来たわけだが。

となるとあのキャンドルは雰囲気的なものか。

俺はテーブルを挟んで部長の対面の席に腰を下ろす。

赤いネグリジェ姿の部長は紅の髪を一本に束ねて眼鏡をかけてい

た。

「あれ？部長って目が悪いんですか？」

「あー、これ？気分的なものよ。考え事をしている時に眼鏡をかけていると頭が回るの。ふふふ、人間界の暮らしが長い証拠ね」

部長はクスクスと小さく笑う。

眼鏡の部長も麗しいなあ……。てか、ネグリジエ姿も最高だ！

テーブルの上に何やら地図らしきものとフォーメーションなどが書き込まれた紙が置かれていた。

：夜中、一人で作戦を練っていたのかな。

部長は戦術が書かれているノートを閉じてしまった。

「…正直、こんなものを読んでいても気休めにしかならないのよね」

部長は溜息まじりにそう言う。

「どうしてですか？」

「相手が他の上級悪魔なら、これを読んでいれば戦いはできるわ。

この本は研究された戦いのマニュアルだもの。問題はそこじゃないの」

「？じゃあ、いったい何がヤバいんですか？」

「ライザー本人よ。というよりもフェニックスが相手なのが一番問題なの」

俺の疑問に答えた部長は一冊の書物を取り出してテーブルの上に置いた。

開かれているページに指を指す。そこには雄々しく炎の翼を広げる

火の鳥が描かれていた。

「その昔、フェニックスは命を司りし聖獣として人々に崇められていた。

流す涙はいかなる傷をも治し、その身に流れる血を飲めば不老不死を手に入れられると人間界の国々に伝説を残すほどだったわ」

だが、聖獣であるフェニックスにはもうひとつの一族がいた。

侯爵の地位を持ち、『七十二柱』にも数えられた悪魔側のフェニックスだ。

「人間達は聖獣フェニックスと区別する為に悪魔のフェニックスを『フェネクス』と呼ぶようだけど、聖獣のフェニックスとライザーの一族は能力はほとんど一緒。つまり、不死身。私達はそれと戦わないといけないのよ」

不死身!?! ちよつ、ちよつと、それって!-

「最強じゃないですか!不死身って、そりやいくらなんでも無敵すぎる!」

「そうよ。ほとんど無敵ね。攻撃してもすぐに再生して傷を治すわ。業火の一撃は骨すら残さない。八勝二敗。これ、ライザーの公式『レーティングゲーム』の戦績よ。十回戦って八勝。二敗は懇意にしている家系への配慮で、わざと負けただけ。実質は全勝よ。すでに公式タイトルを奪取する候補にもなっているわ」

…なつ。俺は絶句していた。

部長が言っていた問題ってのがわかったからだ。

ライザーだ!野郎をどうやって倒そうか、

それを練っていたんだ!

「ライザーが婚約相手選ばれた時、嫌な予感がしたの。そうね、今思えばこうなることを見越してお父様達は最初から仕組んでいたんだわ。私が否応なしに結婚するように、ライザーを当てた。こうして身内同士のゲームになってもライザーが相手なら、フェニックスが相手なら、勝てるはずが無いと踏んでいたんだわ。チエスで言う所の嵌め手。スウィンドルね」

いくら部長が強くても不死身が相手ではどうにもならないって、

部長の親御さんは考えたのか。ずるい!

それならどんな娘でも確実に結婚するしなくなる。

「レーティングゲームが悪魔の中で流行るようになって、一番台頭したのがフェニックス家だった。悪魔同士で戦うなんて、ゲームをするようになるまで殆ど無かったわ。『王』も参加するこのゲームで、フェニックスの強さが浮き彫りになったの。フェニックス家は公式『レーティングゲーム』で最強クラスの筆頭。不死身。これがどれだけ恐ろしいものか、悪魔達が初めて理解したのよ」

不死身なら、何度やられても復活できる。

フェニックスと違って他の悪魔の力には限度があるだろうから、
疲れた所を一気に叩かれるのか。うわ！

卑怯なぐらいマジで強いじゃ無いか！

そ、それが俺達の相手か！

ライザーの下僕美女軍団を倒したとしても、

ライザーを倒せなければ意味が無い。

いや、倒せるのか？まさか、

最初から筋書き有りのインチキ八百長試合じゃないよな？

俺が暗い顔をしていたのに気がついたのか、部長が苦笑する。

「ライザーを倒せないことも無いのよ？」

「マジっすか!?!？」

「ええ。倒す方法は二つ。圧倒的な力で押し通すか、起き上がる度に
何度も何度も倒して相手の精神を潰すか。前者は神クラスの力が必
要。後者はライザーの精神が尽きるまでこちらのスタミナを保つこ
と。身体が再生して不死身でも心、精神までは不死身じゃないわ。倒
すたび確実に相手の精神は疲弊する。フェニックスの精神を押しつ
ぶせば私達の勝ちよ。再生も止まり、相手は倒れるわ。まあ、神みた
いに一撃で相手の精神も肉体も奪い去る力があれば一番楽なんで
しようけどね」

∴どちらも相当な努力をしないと無理なんじゃないか？

初陣でそこまでできるのかな？

いや、やらないといけないんだろうけど。

つまり、相手が「何度も再生しまくって精神的に辛いんで勘弁して

下さい」

って言うまで戦えばいいのか。

そうだ、前から疑問に思っていた事を訊いてみるか。

「部長」

「なにかしら？」

「どうしてライザーの事を嫌っている…って言うか、

今回の縁談を拒否しているんですか？」

俺の質問に部長はため息をつく。

確かにライザーは女たらしで最低そうだけど、

お家の事情も考えると無下に断れないものだと思う。

「…私は『グレモリー』なのよ」

「え？ま、まあ確かに…」

「いえ。改めて名を言ったわけじゃないのよ。

私はあくまでもグレモリー家の人間で、

どこまでいってもその名が付き纏うってこと」

あー、なるほど。

「嫌なんですか？」

「誇りに感じているわ。けれど、私個人を殺しているものでもある。

誰しも私の事をグレモリーのリアスと見るわ。リアス個人として

認識してもらえない。だから、人間界での生活は充実していたの。

誰も悪魔グレモリーのことなんて知らないものね。

皆、私を私として見てくれている。それがたまらなく好きだわ。

悪魔の社会ではそれを感じる事は出来なかつたし、

これからも感じる事なんて出来ないわ。

私が私として充実出来るのはこの人間界にいる間だけ」

遠い目をしている部長。その横顔はどこか寂しそうに見えた。

俺には想像も付かない世界の話だ。

俺は兵藤一誠で、名について特に何も感じた事なんてない。

俺は俺だし、俺の親父と俺のお袋の息子で祐介の弟でしか無い。

今のところ、何処にいても、何処に出ても俺は

「兵藤一誠」個人として認識されている。

部長はグレモリー家の看板を背負ったまま生きてきた。

これからもそうだ。

「私はグレモリーを抜きとして、私を、リアスを愛してくれる人と

一緒になりたいの。それが私の小さな夢。

…残念だけれど、ライザーは私のことをグレモリー

のリアスとして見ているわ。そして、

グレモリーのリアスとして愛してくれている。

それが嫌なの。それでもグレモリーとしての誇りは大切なものよ。矛盾した思っただけ、それでも私はこの小さな夢を持っていたいわ

部長は『リアス・グレモリー』としてではなく、『リアス』として異性に愛されたかったわけか……。乙女の想いつていうのかな。

でもお家の事情もあるし、部長自身も複雑なのは間違いないと思う。

うーん、俺には乙女的心情も悪魔社会の構図もわからんから、うまいこと言えそうにないな……。

「俺は部長の事、部長として好きですよ」

何気なく俺の口から出た言葉だ。だが、部長はそれを聞いて目を丸くしていた。

「グレモリー家の事とか、悪魔の社会とか良く分からないし、

俺にとってリアス部長はリアス部長であって……。

うぬぬ、小難しい事は良く分からないですけど、

俺はいつもの部長が一番です！」

俺は頭に浮かぶ精一杯の事を笑顔で言った。

ハハハ、我ながらシャレの利いた言葉すら口に出来なかったけどさ。

……つて、部長さま？　なんだか、部長が頬を真っ赤に染めている。

「ぶ、部長？　お、俺、何か変なこと言いました？」

怪訝に思い、聞いてみると部長は首を振り、

「な、なんでもないわ！」とあわてていた。

なんだ？　何事だ？　まあ、いいか。

「しかし、天才の部長の初陣がそんな奴だなんて、前途多難ですね」

「天才って言葉はあまり好きじゃないわね」

頬を赤く染めたまま、部長は答える。

「どうしてですか？」

「天から授けられた才能……神から与えられたようで嫌な気分になるわ。」

私の才能はグレモリー家が代々培ってきたものの結晶。

それを私は悪魔として受け継いだ。神からもらったものだなんて思ったことは一度もないし、そんなことは有り得ない。

私の力は我がグレモリー家と私のものよ。

だから私は負けない。戦う以上は勝つわ。勝つしかないのよ」
自分に言い聞かせるように部長は言った。

すごいな。強いよ、部長は。それに比べて俺は……。俺は……。

「部長、俺、ダメです。山に来てから……てんでダメっス」

弱弱しくつぶやき始めた俺を見て、部長は怪訝な表情を浮かべる。

「イツセー？」

「皆と修行してて、強くなっているような気がするんですけど、

それ以上に……差を感じてしまいました。剣の修行をすれば、

木場の凄さがわかって『ああ、俺は木場みたいな剣士にはなれない』

とわかつちやつて……。小猫ちゃんとの修行をすれば、

小猫ちゃんの力を思い知って、魔力の修行をすれば、

朱乃さんの偉大さを痛感して、横でアーシアはぐんぐん成長し

ちやつて……

筋トレをすれば横で俺以上の負荷でユウスケが修行していて……

俺は何も出来なくて……。ブーステッド・ギアがあるから、

大丈夫だ！って強がってみたりして……」

俺はいつの間にか信じられないぐらい涙を流していた。

悔しくて、悔しくて。やればやるほど自分の矮小さが理解できた。

——俺には戦いの才能がない。

それがわかってしまったんだ。

「自分が一番弱いって、わかりました……。俺が一番役立たずだつて……
十分にわかつちやつたんです……。たとえ凄い神器を持っていて

も

俺が持ち主じゃ、意味がないんだつて。だから、

あのときライザー・フェニックスは俺を笑ったんですよね。

『宝の持ち腐れ』、『豚に真珠』、まさに俺の事じゃないですか」

部長の前で俺はボロボロと涙を溢れさせていた。情けないぐらい、

俺は悔し涙を垂れ流していた。無様に鼻水まで出して。

スツ。

—っ。

部長が俺を優しく抱き寄せる。何度も何度も俺の頭を撫でてくれた。

「自信が欲しいのね。いいわ、貴方に自信をあげるわ。ただ、今は少しでも体と心を休ませなさい。

眠れるようになるまで私が傍にいるから」

その時は、その言葉の真意がわからなかった。だが、部長の温もりが俺の心身を癒してくれる。

今はそれだけで十分だった。

—○○●—

「ブーステッド・ギアを使いなさい、イツセー」

次の日。練習を始める前に部長が俺にそう言った。

この山に入ってから、一切禁止されていた神器の使用。

それを今許されたわけだが…神器を使ってどうすればいいんだ？

「相手は祐斗でいいわね」

「はい」

部長に促され、木場が一步前へ出た。俺と対峙する。つて、木場と戦えっつか！

「イツセー、模擬線を開始する前に神器を発動させなさい。

そうね…発動から二分後、戦闘開始よ」

「は、はい」

俺は部長に言われるままブーステッド・ギアを左腕に出現させる。

「ブースト！」

『Boost!!』

俺の言葉に反応して神器が音声を発し、体に力が流れ込んでくる。

これで、俺の力は元の倍になった。

十秒後。

『Boost!!』

さらに俺の能力が倍になった。神器から伝わるパワーが俺の全身を駆ける。

こうやって能力が倍になっていくのはいいんだが、

『ブーステッド・ギア
赤龍帝の籠手』には使用する際の注意があった。

能力の増大には上限がないと思われるが、実はそうでもない。

一度、どこまで増大するのか試しに発動させてみたんだけど、

発動から数分後、俺は倒れてしまった。

理由は簡単だ。俺の体が増大されていく力に耐えられなくなったからだ。

あとで部長に訊いたら、

「貴方がトラックだとして、想定されている積載量を遥かに超える

荷物を載せられた場合、どうなると思う？動かなくなるでしょう？

そういうことよ」

と説明された。

荷物とは倍になっていく俺の力。荷がどんどん倍になっていけば、トラックは速度が出なくなり、最終的に動けなくなる。

つまり、力が増大しすぎると俺の体に負荷がかかるってことだ。

だから、倒れた。力を蓄える体という器が増加に耐えられなくなつたから。

数分間試した時も確かにそうだった。籠手の宝玉から『Burst』

と発せられた瞬間に、体中が重くなり、全身の機能が一瞬止まったように思えた。

神器に限界が無くても、使い手の俺が先に限界を迎えちまう。

それが俺の神器の弱点。

というよりも俺の弱点だな。神器は悪くない。

部長にパワーアップを命じられ、力の増大を十二回繰り返す。

部長が「ストップ」とブーステッド・ギアのパワーアップを止めるよう指示してきた。

「いくぞ、ブーステッド・ギア！」

『Explorion!!』

その音声は、力の増加を止める意味も含まれていて、一種のストッパーになっている。

一度パワーアップが止めると、一定時間、力が上昇した状態で戦える。

使用できる時間は、パワーアップ中の行動次第だ。

動けば動くほど、攻撃すればするほど、時間は縮小される。

これは俺の体力にも影響し、疲弊している状態だと、やはり使用時間は少ない。

この神器をうまく使うコツのひとつが、俺がダメージを負っていないことだ。

そう、怪我もしてなくて、体力も十分の今がブーステッド・ギアの能力を存分に使える。

倍加中も力が上がっているが、増加を一度止めて一定時間パワーアップしている状態の

時に比べると神器の力が不安定の為、下手に動くとも元の体力に戻ってしまう危険性があった。

そのため、ちゃんと一度止めて使用したほうが能力的に確実だ。

倍加中は下手に動かず、逃げ回るか隠れていた方が賢明だと思う。

さて、二分間高めた俺の力はトンでもないことになっていた。体に溢れる力は尋常じゃない。

「その状態でイツセーは祐斗と手合わせしてみてちょうだい。祐斗、相手をよろしく頼むわね」

「はい、部長」

部長の指示に従い、木場は木刀を俺へ構えた。

「イツセー、剣を使う？それとも素手でいく？」

部長が俺の攻撃手段を確認してくる。

うーむ、木刀を持ったところで使いこなせるわけもないしな…。

「素手でやってみます！」

「よろしい。では、二人共始めてちょうだい」

俺も木場に対して構えを取る。まあ、素人の構えだけ。

フツ。

！
目の前から突然木場が消えた！やばっ！『騎士』の特性はスピード

！
木場の動きは神速だ！いったん目を離せば、軽々と攻撃を。
ガシツ！

木場の一撃が俺へ繰り出されるが、瞬時に腕を交差させてガードした。

よし！これぐらいなら平気だ！

「っ！」

木場が少しだけ驚く様子を見せた。隙あり！
いったん足を止めた木場へ拳を放つ。

スツ！

拳が当たる寸前、木場の体が消え去り、
拳は空を切った。チツ！避けられたか！

木場はどこに避けた？辺りを見回して奴を追う。

…いない！左右と真正面にいないってことは背後！

しかし、振り返ってみても木場の姿はない。ツ！

上か!? 上空を見上げたとき、木場が剣を下へ突き出して降ってくる寸前だった。

ゴツ！

鈍い音が木霊する。ぐはっ！俺の頭部に一撃が入った。
痛えええええ！

「痛っ…！」

俺は打たれた箇所を押さえもせず、地面へ降り立った木場に蹴りを放った。

ヒュツ！

また、かわされた！くっそ！全然当たらない！

『騎士』が相手だところこまで素早さに手こずるのか！

「イツセー！魔力の一撃を撃ってみなさい！魔力の塊を出すとき、

自分が一番イメージしやすい形で撃つの！」

部長からの指示が飛んでくる。

魔力の一撃ですか？ここで俺に？

木場に当たるかどうか分からないけど、仕方ない！部長の指示に従うぜ！

俺は体に流れる魔力を手のひらに集中させる。

小さな米粒程の魔力の塊が出来上がった。相変わらず小さい！

それを木場に向かって放り出す！その瞬間、俺は度肝を抜かした。

グオオオオオオオオオオオンッ！

デカイ！俺が放った米粒ぐらいの魔力の塊は、手から離れた瞬間に

巨大なものへ変貌を遂げていた！

米粒が巨岩ぐらいになってる！これって！そうか、ブーステッド・

ギア

でパワーアップされたのか！

木場に迫る巨大な魔力の塊。速度もなかなかのものだが。

スッ。

簡単に木場が躲してしまった。そりやそうだよ。あー、

当たらないと意味が無いのに。そんな悲観を感じていたが、その認

識は直ぐに消え去った。

目標を失い、遙か先に飛んで行った魔力の塊は隣の山に飛んで行っ

たんだが。

ドツゴオオオオオオオオオオオンッ！！

凄まじい爆音と爆風を撒き散らしながら、隣の山が吹っ飛んだ！！

え！え？ええええええええええええええええ！！

…俺の放った魔力の一撃が、山ひとつを消し飛ばしてしまった…。

大きく抉れた形を残す山。風景が大きく変わってしまった。

…え？マジで？マジで消し飛んじやったの？山だよ？お山だよ？

『Reset』

籠手から音が発せられ、同時に増幅されていた力が

俺の体から抜けていく。強化されている時間が終わったようだ。

途端、一気に力が抜けた。体の内側が空になる感覚。魔力が尽きた

みたいだ。

「そこまでよ」

部長が俺と木場の手合わせを止めた。木場も木刀を下ろす。

俺も腰を抜かしたように地面へ座り込んだ。
や、山が消えちまった。

俺はその衝撃に心臓をバクバク鳴らしていた。

お、俺がやったのか？ いまだに信じられん。あ、あんな攻撃が俺の手から出るなんて…。

「え？…あの山も修練場の敷地じゃなかったか？」

ユウスケが聞き逃せないことを呟いた。

「マジで？ 弁償なんて出来ないぞ！ つかお山の弁償っていくら!!」

「大丈夫よイツセー、消えた山については気にしなくていいわ」

部長はこうなることを分かっていたのか、驚いた様子もなく答える。

「とりあえずお疲れ様、二人とも。さて、感想を聞こうかしら。祐斗、どうだった？」

部長の問いかけに木場が答える。

「はい。正直、驚きました。実は最初の一撃で決めようと思っていたんです」

え？ 最初の一撃って、俺がガードできた攻撃の事か？

「ところが、イツセー君のガードを崩せませんでした。打ち破る気まんまんでしたんですけどね。」

二撃目、上からの振り下ろしで頭部を狙い、打ち倒そうとしましたが、これも無理でした」

ハハハと爽やかに笑う木場。木刀を皆に見せるように前へ出す。

っ。その木刀はすでに折れかけていた。

「魔力で木刀を覆って強化していたんですが、それでもイツセーくんの体が

硬すぎて大したダメージも与えられずって感じですよ。

あのままやっていたら僕は獲物を失って、逃げ回るしかなかったです
すね」

「ありがとう、祐斗。そういう事らしいわ、イツセー」

そういうことらしいわって、部長、これがもしかして昨夜話していた

「自信をあげる」ってやつですか？

「イツセー。貴方は私に『自分は一番弱く、才能もない』と言ったわね？」

「は、はい」

「それは半分正解。ブーステッド・ギアを発動していないあなたは弱いわ。」

けれど、籠手の力を使うあなたは次元が変わる」

部長が吹っ飛んだ山へ指をさす。

「あの一撃は上級悪魔クラス。あれが当たれば大抵の者は消し飛ばわ」

マジっすか！確かにあんなの食らえば無事じゃ済まないよな。

「基礎を鍛えたあなたの体は、莫大に増加していく神器の力を蓄えることの出来る

器となったわ。現時点でも力の受け皿として相当なものよ。ね、言ったでしょ？あなた

は基礎能力を鍛えれば最強になっていくの。始まりの数字が高ければ高いほど、増大して

いく力も大きいだよ。源の体力『一』が『二』になる。貴方にとってはそれだけでも

強大な成長なの」
っ。

俺の力は、凄い…のか？

いまだ自分の力を疑う俺に、部長が自信満々に言う。

「貴方はゲームの要。イツセーの攻撃力が状況を大きく左右するの。あなた一人で戦う

のなら、力の倍加中は隙だらけで怖いでしょうね。けど、勝負はチーム戦。あなたを

フォロワーする味方が居る。私達を信じなさい。そうすれば、イツセーも私達も

強くなれる。勝てるわ！」

強くなる。俺が？

「貴方をバカにした者に見せつけてやりましょう。相手がフェニックスだろうと関係な

いわ。リアス・グレモリーとその眷属悪魔がどれだけ強いのか、彼らに思いを知らせてやる

のよ！」

『はい！』

全員が力強く返事をした。そうだ！俺には部長と仲間たちがいる！

強くなる！俺は皆と共に強くなってやるんだ！

ライザー・フェニックスに勝ってやる！

決意を新たに、結束を深め合った山籠もり修行合宿は順調に進み、その後無事に終わりを告げるだろう。

—○●○—

深夜。ここは駒王町の外れにある廃墟。

そこには数人の男女が集まっていた。

「あれが見つかつたとは本当か？」

そう声を上げたのはスーツを着たガタイの良い男性だった。

「ええ、先日ようやく見つけたわグレモリー家の娘の眷属になつていたわ」

男の質問に答えたのはライザーの『女王』であるユーベルーナであつた。

「本物だろうな依然見つけた奴はハズレだったろ」

ユーベルーナの言葉にタンクトップの男が突っかかる。

「間違いないわ、怒りに飲まれかけた際に彼の力の片鱗があつたわ」「ラ』であるお前が言うなら間違いないだろう」

ユーベルーナの言葉にスーツの男は納得していた。

「遂に、『ザギバス・ゲゲル』を再開する時がきたわ」

「ようやく、ゲゲルが出来るのか。腕が鳴るぜ」

ユーベルーナに同調するようにタンクトップの男も唸る。

「もう話し合いは始まっているようだな」

そこにニット帽を深くかぶり、白い布で口元を覆う男性が立っていた。

「遅かったわね。ドルド、先に始めていたわ」

「構わない、それで、クウガが見つかったようだが、今後はどう動くんだ？」

ドルドと呼ばれた男がユーベルーナに今後の方針を尋ねる。

「先ずは目覚めてもらわないと意味がないわ。」

私達はこれまで通りそれぞれ潜みながら期を伺うわ。

ただ、フェニックスの涙にはまだ使い道があるから

ライザー・フェニックスに負けてもらおうと困るのよね」

「あのフェニックスが負けると？」

「負けるでしょうね。敗北を知らないようだけど、クウガの成長速度は

侮れないわ。念には念を入れて、クウガは今回の勝負から降りてもらいましょう」

スーツの男にユーベルーナが即座に答える。

自身の主であるはずのライザーの勝利を微塵も信じていないようだった。

「簡単に言うが方法は？」

「簡単よ身内をさらってしまおうのそして、

ここに一人で来いと伝えるだけよ」

ドルドの質問にユーベルーナは残忍な笑みを浮かべながら答える。

「なるほど、ならクウガと戦闘となるだろう、誰がやる？」

「俺様にやらせろ！ずっと待っていたんだもう我慢できねえ！

俺様がこの手で殺してやる」

レスラーを思わせるタンクトップの男が名乗りを上げた。

「ならば、ザイン、貴方に任せるわ。目覚めれば良し。死ぬようなら、

ベルトを次に回せばいいわ」

ユーベルーナはザインと呼んだ男に微笑みながら答える。

ガタッ！

「お前達！……ここで何をやっているんだ！俺の敷地で好きにやりおつて！」

突然部屋の入口から懐中電灯を持った老人が入ってきた。

「お客よザインもてなしてやりなさい」

ユーベルーナは残虐な笑みを浮かべながらザインへ指示を出す。

ザインと呼ばれた男の姿が変わっていき、サイの化け物へと姿を変えらる。

「ぶち殺す！」

ダツ！

「うわああああああ！」

グチャツ。

ザインは老人へタツクルしそのまま壁もろとも潰してしまった。

「ザインの奴はやりすぎだ音を聞きつけて他にも来るだろう。」

さっさとおいとまするか、それで、人をさらうのは俺がやる

誰をさらえばいい？」

ザインの行いに呆れた様子で、人質を殺しかねないザインには任せられないと思い、ドルドが誘拐を名乗り出た。

「この女をさらいなさいあとは私がするわ」

ユーベルーナが懐から出した写真をドルドへと差し出した。

そこにはユウスケと一緒に写るオレンジ色の髪の女性が写っていた。

第17話 「古代の戦士」

決戦当日。

「よし」

俺は自室で気合を入れていた。

現在、夜の十時。決戦は二時間後の深夜零時ちょうどからだ。

今日に限っては悪魔の仕事も休み。学校が終わると、そのまま帰宅となった。

余計なことでも力を使うこともないからな。

三十分前に部室へ集まる予定だからあと一時間と少ししか、ここには居られない。

それでも自室が一番落ち着くからな。ギリギリまでここに居たい。

部室に行けば否応無しに緊張感が頭を支配する。

こんなに緊張するのは、高校の受験の時以来じゃないか。

俺の今の格好は学生服だ。学生の正装といったらこれが一番だと思っただ。

というよりも、戦闘用に服を用意したほうがいいのか？とリアス先輩に尋ねたら、

「私の眷属のユニフォームがあるとすれば、駒王学園の学生服かしら。

オカルト研究部ですものね」

そんなわけで、俺の戦闘服は学生服だ。

P r r r r r r r r

携帯に電話がかかってきて画面には『奈美部長』と表示されていた。ピッ！

「はい、もしもし」

『こんばんは、ユウスケ、今電話大丈夫かしら？』

「ええ、大丈夫ですけどこんな時間にどうしたんですか？」

『今日試合でしょ、かわいい後輩が気になってね』

緊張しているようなら緊張をほぐしてあげようと思ってね』

「まだ緊張してないですよ。でも部室に行けば

嫌でも緊張すると思いますけどね」

『ならちようど良かったわ。今学校に向かっている途中なの
おにぎり用意したから、試合前に食べて気合を入れなさい』
奈美先輩は嬉しそうな声で話す。

「この時間にですか一人では危ないですよ直ぐに向かいますか
待っててください」

『馬鹿にしないでよね、私だって鍛えてるんだから、大丈夫よ。
それにもうすぐ着くから心配は無用よ。』

準備もあるから時間通りに来なさい』

「わかりました。後から行きますんで待っててください」
ピツ。

俺は部長との通話を切る。

コンコン。

部屋をノックする音。アーシアかな？

「ユウスケさん、入ってもいいですか？」

「ああ、入っていいよ」

ドアを開けて入ってきたアーシアの格好を見て俺は軽く驚いた。
シスターの服を着ていたからだ。もちろん、ロザリオは首に下げ
ていない。

ヴェールも頭につけていないな。

「アーシア、その格好…」

「は、はい。部長さんに訊いたら、『自分で一番良いと思える服で来て
欲しい』と。」

私、悩んだんですが、これが一番動きやすいかなって思いました。

：クリスチャンではなくなつてしまいました、

信仰を忘れたことはありません。今は悪魔ですけど…」

そうか、この子なりに考えてたんだな。

悪魔同士の戦いであえてシスター服で臨むってのも相当な根性が
あると思うが、

アーシアが決めたなら俺は文句もない。

リアス先輩だって笑って許してくれるだろう。

「うん。アーシアはシスターの姿が一番しっくりくるかもしれんな。」

学校の制服も似合っていたけど、俺とアーシアが初めて出会った時は

シスターの格好だったし。やっぱり、よく似合っているよ」

「ありがとうございます」

俺が褒めてあげると、アーシアは心底嬉しそうな笑顔を浮かべた。

「あ、あのユウスケさん」

突然もじもじしだすアーシア。

「そばにいてもいいですか?」

「あ、ああ、いいけど」

ベッドに座っていた俺のもとへ近づいてきて、

隣にアーシアが座る。すると俺の腕に絡み、ぎゅっとしてきた。

「ど、どうしたんだ、急に」

慌てる俺だが、直ぐにアーシアからふるふると

震えているのが腕から伝わってきた。

「…これから怖い戦いが待っていると思うと、震えが止まらないんです。

でも、ユウスケさんが居てくれるなら私は大丈夫です」

「アーシア…」

「えへへ。やっぱり、ユウスケさんのそばに居ると怖くなくなります。

…お家を出る時間までこうしてていいですか?」

「うん」

「…これからもずっとユウスケさんのそばに居てもいいですか?」

「ああ、ずっと一緒さ」

「……よかった」

俺はアーシアの震える手を優しく握り、家を発つ時間まで静かに過ごした。

いつの間にか、アーシアの震えは止まっていた。

—●—

深夜十一時三十分頃。

俺たちは部室へと到着した。

中に入るともうみんなが集まっていた。

皆学生服を着ていて、それぞれ、一番リラックスできる方法で待機している。

木場は手甲を装備し、脛当ても付けていた。剣は壁に立てかけている。

小猫ちゃんは椅子に座り、本を読んでいた。

手にはオープンフィンガーグローブ。格闘家がつけているようなものだ。

朱乃さんとリアス先輩はソファに座り、

優雅にお茶を飲んでいた。

「あれ？奈美先輩は居ないんですか？」

「奈美なら来てないけど、呼んでいるの？」

俺は嫌な予感がしていた。

「はい、家にいた時に部室へ向かっている」と

連絡がありました」

「それは気になるわね、一度連絡を入れてみましょう」

「なら俺が連絡します。何でもないといいんですが」

俺は携帯を取り出して部長へと電話をかける。

P r r r r

ガチャッ。

「あ、もしもし、ユウスケです！部長今どちらですか？」

『随分遅かったじゃないか、かけてこないと思ったよ』

電話に出たのは、部長ではなかった。

変声機を使っているようで、誰かはわからなかった。

「誰だお前！部長はどうした」

俺の様子から皆が椅子から立ち上がる。

『そう興奮するな彼女は生きてる。今の所はな、

君の行動次第だと思え』

「どうすれば良い？」

『メールで指定した場所に一人で来い。』

誰かを連れてきたら来なければこの女の命は補償できない』
相手の要求に俺は拳を握り怒りを抑える。

「わかった。」

ブチッ。

返事をする相手は電話を切ってしまった。

「ユウスケ、状況を説明なさい」

リアス先輩が俺に説明を求め。

周りの皆も奈美先輩に何かがおきたことは

分かったようで、皆が真剣な表情をしていた。

「奈美先輩が何者かに拐われました。」

相手は指定した場所に一人で来るようにと

要求してきました」

ピロントッ。

通知音が鳴り、携帯を見ると一件のメールが来ていた。

そこには地図が添付されており、

町外れのとある建物にピンが表示されていた。

「どうやら、場所の指定がされたようです。」

町外れのおそらく取り壊し予定の建物だったはずです」

学校から大分離れており、移動だけでも時間がかかる距離だ。

「ユウスケ！こっちの事はいいから直ぐに向かいなさい」

リアス先輩がすぐさま指示を出す。

「ですが、試合の方は…」

「貴方が抜けてもカバーできるわ

確かに数的不利はあるけれど、今は仲間を信じて

向かいなさい」

「そうだぜユウスケ！お前の分も俺が頑張るからよ

奈美先輩を救って来いよ！」

「行ってください。ユウスケさん、

私も頑張りますから」

「ここは、僕たちに任せて行ってきなよ。」

攫われたお姫様を救うのは騎士の務めだよ」

「みんな…」

俺は助けに行きたいが、俺が抜けていいものかと危惧していた。だが、心配は無用だったようだ。

「でもこの距離を自転車は厳しいでしょう。」

朱乃、確かあれがあつたわよね」

「はい、部長」

朱乃さんが答えると依頼者から受け取った

美術品などの倉庫としてある部屋へと向かった。

「私達はこつちよ」

俺達はリアス先輩に連れられて旧校舎の裏手に来ていた。

「はいよ」

そこは教室の外部を改修したのか、本来壁だったところに大きなシャツターが取り付けられていた。

「以前に依頼人から代価としてもらったけれど

使い道が無くて、とりあえず保管していたものよ」

そう言つてリアス先輩がシャツターを上げた。

ガラガラガラッ。

「これは…」

シャツターを上げた先にあつたのは、

一台のバイクだった。

シルバーの車体に黒のアクセントが入った

オフロードタイプのバイクだ。

「このバイクは『トライチエイサー2000』

以前に白バイの新型モデルとしての試作品として

作られたものだけど、白バイでこの見た目は不適切

という理由で投入がされなかったものを依頼人が

引き取ったものよ、性能は保証されてるわ」

「凄い」

「ユウスケはバイクの免許持っていたわよね？」

「はい直ぐに免許は取りましたが、バイクは持って

いなかったので移動は主に自転車でした」

「ならこのバイクはあなたにあげるから

奈美を無事に救出してきなさい」

「はいー」

俺はすぐさまバイクにまたがったが、

エンジンを掛けようとしてハンドルの片方が無いことに気が付いた。

「あれ？このバイク、片方のハンドルがないんですか？」

「ええ、そのバイクは盗難防止で片方のハンドルグリップが始動キーになっているの」

「部長、これを」

先ほど倉庫に行った朱乃さんが小さなアタツシケースを部長に手渡す。

「さあ、受け取りなさいユウスケ」

リアス先輩がアタツシケースを開けてこちらに向けると中にハンドルのグリップが入っていた。

カチャッ。

俺はグリップを受け取りハンドルに差し込む。

ピピッ。ピー。

差し込むと電子音が鳴りロックが外れる。

「ユウスケさん、どうか無事に帰ってきてください」

アーシアが不安げな表情でヘルメットを渡してくる。

「わかってるさ、二人で無事に帰ってくるよ。」

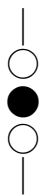
アーシアも気をつけてな」

「はい」

ブオン！ブロロロロロツツ。

俺はエンジンを始動し、走り出す。

目指すは町の外れにある廃墟だ！



キイキイイイツツ！

俺はブレーキを掛けバイクを止める。

「ここがそうか」

目的地の廃墟に到着した。

ここは昔は製紙工場だったが潰れてしまい、今は使われていない。敷地も広くこの中から探すのも一苦労だ。

ガララララララッ。

入口の門扉を開け中に入る。

「おい！言われた通りに来たぞ！先輩を返しやがれ！」

俺の叫び声に返答は無く、風の音だけが周りに響く。

カランッ！

不意に近くの建物から何かが落ちる音がした。

「誰かいるのか！」

返事はない。俺は慎重に建物へ近づく。

向うは既に俺が来ていることは分かっているだろう。

こんな静かな所ではバイクのエンジン音でばれてしまう。

敷地に入った時から視線をずっと感じていた。

中は暗いが悪魔の俺には関係ない。

「ようやくご到着か」

知らない男の声が聞こえてきた。

「上か！」

上を見上げると、大きな機材の上に男が立っていた。

ニット帽をかぶり、白い布で口元を隠した不気味な男だった。

そして、その後ろで天井から奈美先輩が縛られてつるされていた。

意識は無いようで気を失っているように見える。

「先輩は無事なんだろうな！」

「無事さ、今は眠らしているだけだ」

「何が目的だ、何故先輩を狙った！」

俺の質問に男は楽しそうに答える。

「何故その女なのかは知らんさ、俺は命令で攫っただけだ」

命令されたって事はこいつより上の存在がいるってことか。

「お前たちは何者だ！」

先輩の無事は確認した後はどうやって救い出すかだが。

「そうだな、自己紹介ぐらいはしておこう。」

俺の名前は『ラ・ドルド・グ』グロンギ族の審判を務めるものだ」

「グロンギ族!?」

何処かの部族か?、だけど、狙われる覚えはないぞ。

「貴様が生まれるよりも昔、まだ悪魔・天使・墮天使の勢力が争っていた。」

古代から存在する人間の戦闘民族さ」

「そんな民族の末裔さんが何故俺達を狙う」

「勘違いしているな。私は末裔ではなく当時を生きた部族の生き残り
さ」

ッ!

「狙いはベルトか?」

俺のベルトは昔の民族が使用していた装飾品だったはずだ、
こいつらの物で取り返しに来たのか?

「惜しいな、確かに目的はベルトを持つ貴様だが、

欲しいのはベルトではない」

「なんだ、仲間になれとでも言うのか?」

「いや、クウガと我らグロンギで協力なんてありえない」

「クウガ?」

もしかして、あの姿の名前か?

「なんだ、自分の名前も知らなかったのか」

男は呆れたようにつぶやく。

「ううん、ここは…」

どうやら俺達の声を聞いて、奈美先輩は気がついたようだ。

「奈美先輩!」

「ユウ、スケ…?。え、なにこれ!?!」

気が付いた先輩は自分が縛られている事に気づき動揺している。

「ドルドって言ったな。俺は来たんだ。先輩は解放しろ」

「ああ、解放はしよう。だが、その前に

お前には『ゲシリベベギオン・ゲゲル』を行ってもらおう」

「何だよそれは」

俺を試されているのか？そのために先輩は攫われたつていうのかよ！

ギユツ。

俺は拳を握り、怒りを抑える。

「要するに予選だ、君がゲゲルを行うに足る存在か、

試させてもらう」

「お前と戦えばいいのか？」

奴と戦うとなると、勝ち目があるか正直分らない。

人質を取っているからか、奴からは余裕を感じる。

「いや、君の相手は別にいる。

出てこいザイン」

ガチャツ

ドルドが誰かを呼ぶと、別の部屋から

レスラーと思われる男が現れる。

興奮しているのか目が血走ってやがる。

「ふうう、やっと出番か、待っていたぞクウガ」

「彼は『ズ・ザイン・ダ』グロンギ族の戦士で

今回、君の相手をするものだ」

相手は小猫ちゃんと同じパワータイプか、

だが古代の戦士という事は人間ではないはずだ、

気を付けていかないと。

「ではこれより、『ゲシリベベギオン・ゲゲル』を行う。

ルールは倒されたら負けの単純なものだ、

「勝者がこの女の処遇を決める」

なっ！

「ふざけるな！なんでそうなる！」

「君が勝てばいいだけだろう。」

君が死んだ場合、彼女は解放し、ザインが彼女を狩る

解放するという約束は守るさ、そのあとは知らないがな」

ふざけやがって！こいつら完全に先輩を狩りの獲物としか見てい

ない！

「ユウスケ！」

先輩が俺に向かって叫ぶ。

「私の事は気にせず、戦いなさい！」

あなたなら勝てるわ、私はそう信じてる！」

俺は先輩の言葉に目が覚めた。

相手は何者か、目的が何だとか、考えるだけ無駄だ！

「奈美先輩！俺戦います。俺は皆の笑顔を守りたいから

強くなつたんだ、俺が笑顔を忘れたらダメなんだ！」

俺は腰に手をかざし、ベルトを出現させる。

そしてベルトに手をかざし、右手を前に突き出す。

そして交差していた腕を開き叫ぶ。

「見ていてください、俺の変身！」

ベルトの側面のボタンに拳を押し込む。

そして、ベルトの赤い発光と共に

俺は戦士クウガへと姿を変える。

「これが、ユウスケの戦士の姿……」

かっこいいじゃないのユウスケ！」

ビシッ。

俺は先輩に向かってサムズアップし、

ザインへと立ち向かう。

「変身できるのがお前だけだと思ふなよ！」

うおおおおおおお！

ザインの雄たけびと共に体が膨れ上がり

その体が変わっていく、

俺の変身と違い、体事態を変貌させている様だ。

「ふしゆゆゆう これが、俺の戦闘体だ！」

ザインの姿は二足歩行のサイの怪物へと変貌した。

「人間とは思っていなかったけど、

ここまでとはな」

俺は驚いていた。

以前見たイメージの中の怪物に似ていたからだ。

クウガはこいつらと戦うために生まれたのかもしれない。

「戦闘中に考え事とは、愚か者があー！」

ザッ、ザッ、ダッ！

ザインが角を突き出しながら突進する。

バツ。

横に飛び、タツクルを回避する。

ドガアツツ！

回避されたザインはそのまま後ろの壁にぶつかり

コンクリートの壁を壊してしまう。

下手に室内で戦うと建物が崩壊する危険がある。

どうにかして外に連れ出さないと！

「ちよろちよろするな！大人しく殺されろ！」

ブンツ。

ザインは拳を放ってくる。

「おとなしくするわけないだろ」

スツ。

木場との訓練の成果だな。

相手の動きが見える！

俺は相手の拳を避けながら、相手の隙を伺う。

「死ねえええ!!」

ブウン！

当たらないことに苛立ったのか、

大振りに拳を放ってくるが、

それを躲し、こちらに背中を見せたザインに拳を放つ。

バキイ！

すると振り返ったザインの顔に拳が当たる。

「何だと!!」

拳を顔面に食らったザインだが、怯みもしなかった。

「フーン…こんな拳、俺には通用しない！」

ザインの皮膚が厚く打撃が全く効いていないようだった。

「ウオオオオオ！」

俺は打撃が効かないことに驚いた隙をつかれて、体を持ち上げられる、そして、そのまま突進するザイン。ドガアツ！

「グウツ」

俺は壁に叩きつけられた。その威力は凄まじく、壁をぶち破り、俺はそのまま外へと放り出された。痛っう、威力は凄まじいが、こっちだって

伊達に小猫ちゃんのパンチを毎日食らっていないさ。なんとか耐えられる。だが、何発も食らうのは危険だ。特訓中に考えてた奴を試してみるか。

「今ので倒れないとは、思っていたよりタフなんだな」

「ああ、この程度でくたばったりはしないさ」

「その減らず口をきけなくしてやるぜ！」

ザインはもう一度突進の体制に入る。

俺は皆と修行していた際に攻撃の決め手がないことを気にしていた。

レイナーレを倒した時と同様に力を集中させての攻撃を足で放てないかと、密かに特訓していた。

今特訓の成果を見せる時だ！

ザツ、ザツ。

「ならもう一度食らいやがれ」

俺は変身時と同じように手を構え、

腕を広げて腰を落とす。

シュウウウウン！

足にエネルギーが集まり、燃えるように熱くなる。

ダツ！

俺とザインが同時に駆け出す。

バツ、クルツ。

俺は跳躍し一回転し右足を伸ばし飛び蹴りの体制に。

「おりやあああああ!!」

ガツ、パキイーン！

キツクは見事ザインの顔面に決まり、
角を根元からへし折った。

ザインは突進の勢いもあり、蹴りを受けて
吹き飛んだ。だが、その一撃で倒す事は出来ず、
顔を押しえながら立ち上がる。

「それでも、倒せないのか、どんだけ頑丈なんだよ」

「よくも俺様の角を…、ぐあっ！」

突如ザインが苦しみだしたかと思うと、

先ほどキツクを食らった顔に紋様が浮かび上がってくる。

ビキツ、ビキツ！

紋様から光が広がり、ザインの腰の装飾へと伸びてゆく。

「バカな！俺が、こんな所でえええええ！」

ドカアアアアアアアン！

光が装飾へ到達すると、体が爆発してしまった。

「なんだよ、これは…」

「それが、クウガの力さ」

俺のつぶやきに建物から現れたドルドが答える。

「クウガの力…？」

「我々グロンギ族はゲゲルを行う際に爆弾を

体に埋め込むのさゲゲルに失敗すれば、

爆死するようにね、クウガの力はその爆弾を

起爆できるのさ」

体に爆弾を埋め込むだって…。

「いかれてやがる」

「それが、我々のルールなのさ、今更理解されようとは思わんさ」

「奈美先輩は？」

俺はドルドを警戒しながら、尋ねる。

「何もしてないさ、今回はただ、君の実力が分かればいいからな」

「もう、先輩を巻き込むな！」

俺はドルドに向かって叫んだ。

「それを決めるのは、俺ではない。

では、近いうちにまた会おう」

ドルドがそう言うのと、その姿が鳥人の姿に変わり空へと消えていく。

敵が居なくなり気が抜けたのか、

変身が解除される。

とりあえず、今は奈美先輩を助けないと。

ダッ。

先ほどの建物へ入ると先ほどと変わらず

奈美先輩は吊るされていた。

「奈美先輩、大丈夫ですか！」

「ユウスケ！勝ったのね。なら、早く降ろしてちようだい」

先輩は俺の姿を見ると、安心したのかいつも通りの軽口をたたく。

俺は柱に縛られたロープを解きゆっくりと先輩を下す。

「すみません先輩、俺の問題に巻き込んでしまって」

「何言ってるの！いつも振り回してるんだから

この程度の危険ぐらいなんてことないわ」

振り回してる自覚あったんだ。

「それに、必ず助けてくれるって信じていたし、

これからも何かあったら助けてくれるんでしょう？」

「当たり前です！」

奈美先輩の言葉に即座に返答した。

「それに今回の事件は特ダネよ、必ず新聞に載せるんだから！」

いつも通りの先輩に俺は安堵する。

今回の一件で怖い思いをしたはずなのに。

この人は本当に強いんだな。

「帰りますよ。家まで送ってあげますから」

「そういうえば、リアスの婚約者との試合があるでしょう

先ずはそっちに行かないと！」

「そっちは皆に任せてきたので、大丈夫ですよ。

それより、また奴らが来るかもしれないですから

「今度は責任もって送りますよ」

「分かったわ。なら二人でオカルト研究部に向かいましょう。

私が攫われたせいで、戦力が欠けたんだもの。

試合の結果もわからずに帰えれないわ!」

俺達はオカ研の部室へと向かう事になった。

バイクまで戻りヘルメットが一つしかないことに気付く。

「しまった。ヘルメットは一つか。

とりあえず先輩が使つて下さい、

俺は悪魔なんで事故つても平気ですから。

まあ、事故るつもりはないですけど」

「警察に見つからないようにだけ

気を付けなさい」

俺と奈美先輩はバイクに二人乗りして走り出す。

「先輩…」

「何?」

「変身した俺、怖くなかったですか?」

俺はずっと気にしていたことを先輩に尋ねる。

俺とあのグロンギ族は根本的に似ていると感じた。

根拠があるわけじゃない。

俺がそう感じたただけだ。

今回の一件で先輩に怖がられるんじゃないかと考えがよぎる。

先輩はそんなこと言わないかもしれないが、

聞かずにはいられなかった。

「かっこよかったわよ。助けに来てくれて、

嬉しかった。怖がるなんてあるわけないでしょう。馬鹿ね」

「ありがとうございます」

俺は嬉しくなって、涙があふれてきた。

俺はこの時間が長く続けばいいと思っていた。

第18話「封印」

俺と奈美先輩はオカルト研究部の部室へと到着した。
ガチャッ。

「お待ちしておりました。ユウスケ様」

中に入るとグレイフィアさんが俺達を待っていた。

「お嬢様の言った通り、無事に助けてきたのですね」

グレイフィアさんは関心したように呟く。

「はい、俺はまだ戦えます！」

俺はグレイフィアさんへ試合参加の意志を示す。

「すみません、ユウスケ様はゲームに参加することはできません」

そんな！せつかく戻って来たのに参加も出来ないなんて!!

「どうして、途中参加は出来ないんですか！」

俺の質問にグレイフィアさんはためらいながらも答えてくれた。

「…試合はもう、終了しました」

「え…?」

俺は自分の耳を疑った。

「俺は間に合わなかったのか」

そうだ、結果は?! リアス先輩達は勝ったのか?

「リアス先輩は勝ったんですよね！」

俺の質問にグレイフィアさんは直ぐに答えてくれた。

「この試合の勝者は……」

—○○—

深夜十一時四十分頃。

時はユウスケが出ていった後に戻る。

イツセーside

ガタガタッ、ガタガタッ。

俺は心配で貧乏ゆすりしてしまう。

「イツセー、心配なのは分かるけど、

今はユウスケを信じなさい」

落ち着かない様子の俺に、部長が声を掛けてくる。

「は、はい。わかつているんです。」

あいつが簡単に負けるような奴じゃないことは」

ただ、今回は人質を取られているし、

相手もどんな奴か分からない。」

「奈美の事はユウスケに任せただけだから

必ず助け出してくれるわ、私達は試合に

集中するべきよ」

部長の言葉はもつともだ。

今は落ち着いて時間まで待とう。

開始十分前になった頃、部屋の魔方陣が光だし、

グレイファイアさんが現れる。

「皆さん、準備はお済みになりましたか？開始十分前です」

グレイファイアさんが確認すると、皆が立ち上がった。

「ユウスケさまがいらっしやらないようですが？」

グレイファイアさんが、ユウスケの不在に気づく。

「ええ私達の友人が何者かに拐われたわ、

相手の要求でユウスケが一人で救出に向かったわ」

「わかりました。試合は延期も出来ないのです、

ユウスケ様を待つ事は出来ませんが宜しいですか」

悪魔の未来を賭けた戦いだ、人間が一人拐われたぐらいでは

中止にはならないか。

「仕方ないけど、ユウスケなら無事に救い出して

戻って来るわ」

部長の返答を聞き、グレイファイアさんが説明を始める。

「開始時間になりましたら、こここの魔方陣から

戦闘フィールドへ転送されます。場所は異空間

に作られた戦闘用の世界。そこでは

どんなに派手なことをしても構いません。

使い捨ての空間なので、思う存分にどうぞ」

はあ。なるほど。戦闘用のフィールドか。

悪魔はそんなものも用意できるんだな。

確かに人間界や悪魔の世界の

どこかで戦いを始めたら破壊は免れないし、
色々な影響が出るかもしれない。

何をやっても害の出ない世界は必要ってことか。

それはいいとして、このゲーム参加する

前に俺は疑問があった。

「あの、部長」

「何かしら？」

「部長にはもう一人、『僧侶』がいますよね？その人は？」

そう、アジアを悪魔へ転生させる前に部長は言っていた。

すでに自分には『僧侶』がいると。

他の任務があるから合わせる事は出来ないって話だけど、

この大事にいないってのはどうなんだ？

俺の質問を受けると、俺とアジア以外のメンバーの

様子がおかしかった。

なんだか、腫物に触ってしまったような感じだ。

空気がガラリと変わってしまった。

みんな黙ってしまったている。

「残念だけど、もう一名の『僧侶』は参加できないわ。」

いずれ、そのことについても話す時がくるでしょうね」

部長は俺に目を合わせずに言う。

とんでもない問題児みたいだな。

この話題はここまでにしておいた方がいいかも知れない。

でも、主の大事なゲームを放り投げてまで

やっていることってなんだ？疑問は尽きない。

重たい空気の中、グレイファイアさんが口を開く。

「今回の『レーティングゲーム』は両家

の皆さまも他の場所から中継でフィールド

での戦闘をご覧になります」

マジか。見られるの？高みの見物か。

いいご身分ですね、上級悪魔の親御さんは、
つて、部長の親御さんも見ているのだから、
俺も無様な所は見せられないな。

「さらに魔王ルシファー様も今回の一戦を
拝見されておられます。それをお忘れなき
ように」

魔王！魔王様が?! うっわ、それは緊張するよ。
俺らのトップが見ているなんて、
どんだけ注目されてんだ、この試合！
と、部長が心底驚く様子を見せる。

「お兄様が?... そう、お兄様が直接見られるのね」
...え?

俺は我が耳を疑った。いま、部長は何て言った?
お、お兄様...?

俺は疑問を感じ、手をあげながら口を開く。
「あ、あの、今、部長が魔王様の事をお兄様つて...
俺の聞き間違いでしょうか?」

だが、木場はさりと答える。

「いや、部長のお兄様は魔王様だよ」
なっ...。

「ま、魔王おおおおっ!!」

部長のお兄さんって魔王なんですか!!」

「ええ」

即肯定する部長。

マジですか! マジで!! いや、待てよ。

でも部長は「グレモリー一族」だよな。

魔王様方のお名前と違う気がするんだけど...。
ルシファー、ベルゼブブ、レヴィアタン、アスモデウス。
どの名前にも当て嵌らないぞ?

「部長のファミリィネームと魔王様方のお名前が違うから、
混乱してたりする?」

木場に思っていた事を言い当てられる。
不愉快だが、まさにその通りだ。

「ああ、まあな」

俺が渋々同意すると、木場は説明を始めた。

「先の大戦で魔王様は致命傷になられてね、

既に亡くなられたんだよ。しかし、

魔王なくしては悪魔はありえない。そこで…」

「悪魔達は魔王の名前を残し、強大な力を持つ

者へ名を受け継がせた。

現四大魔王は、初代から名を受け継いだ

後継者の最上級悪魔だそうだ。

そうか。「ルシファー」も「ベルゼブブ」も、

個人名じゃなく、今では役職名か。

「正直言うと、神陣営、墮天使の組織、悪魔、

この三すくみのうちで現在一番力を持って

いないのは悪魔なんだよ。結構、

危ない状況なんだけど、現魔王様に

負けず劣らずなんのでどうにか保っているんだ」

…悪魔社会も薄皮一枚で繋がっているってところなのか…。

図書館の書籍にも書かれている魔王が既に死んでいるって、

かなりショックだ。

「じゃあ、最上級悪魔として部長のお兄さん

が魔王に選ばれたわけか？」

俺の問いに木場も頷く。

「サーゼクス・ルシファー。『クリムゾン・サタン紅髪の魔王』、

それが部長のお兄様であり、最強の魔王様だよ」

サーゼクス・ルシファー。

『グレモリー』でなく『ルシファー』か。もう、

部長と同じ家名を名乗ってないわけだ。

「…だから、部長は家を継がないといけないのか」

兄貴が魔王になっちゃったら、そりゃ仕方ないな。

お兄さんは悪魔社会を背負わないといけないんだから。すつげえ。部長つてば、身内まで桁外れなんだな…。

「そろそろ時間です。皆さま、魔方陣のほうへ」

グレイファイアさんに促され、俺達は魔方陣に集結する。

「なお、一度あちらへ移動しますと終了するまで

魔方陣での転移は不可能となります」

帰ってくる時は勝敗が決しているってことだな。

魔方陣の紋様がグレモリーから見知らぬものへ変わり、

光を発した。フェニックス家でもない。ゲーム用の物かな？

そんな疑問が頭を過っているうちに、

俺達を光が包み込み、転移が始まったのだった。

—○●○—

…目を開けるとそこは。

…あれ？俺は眼前の風景に首をかしげた。当然だ。

だって、ここは部室だもの。

あらら、転移失敗？だが、

俺とアーシア以外は落ち着いたもので

この状況に何も動じていない。

つか、グレイファイアさんが居ないんですけど。

まさか、一人だけ転移しちゃったのか？

と、思っていたら。

『皆さま。この度グレモリー家、フェニックス家の

「レーティングゲーム」の審判役を担うことになりました。

グレモリー家の使用人グレイファイアでございます』

校内放送？グレイファイアさんの声だ。

『我が主、サーゼクス・ルシファアの名のもと、

ご両家の戦いを見守らせていただきます。

どうぞ、よろしくお願い致します。

早速ですが、今回のバトルフィールドは

リアス様とライダー様のご意見を参考にし、リアス様が通う人間界の学び舎「駒王学園」のレプリカを、異空間にご用意しました』
なっ！じゃ、じゃあ、この部屋は作り物？

まんま同じじゃん！飾り物の位置や

部屋の壁の傷まで再現率が高すぎるだろう！

あ、でも。窓から外を見ると、空が白い。

深夜のはずなのに空は暗くなかった。

真っ白な世界に学校のレプリカが存在する感じなのか？

っーか、異空間に俺の学校を再現って悪魔の力はどこまで

凄まじいんだ！

『両陣営、転移された先が、「本陣」でございます。』

リアス様の「本陣」が旧校舎のオカルト研究部の部室。

ライダー様の「本陣」は新校舎の生徒会室。

『兵士』の方は「プロモーション」をする際、

相手の「本陣」の周囲まで赴いて下さい』

俺の事だ！相手の本陣とやらに行かないと

『プロモーション』出来ないのか。

俺の駒の特性上、『プロモーション』は必須。

『プロモーション』とは、チェスのルールと同様、

『兵士』が相手陣営の最深部に駒を進め

た時に発動できる特殊なものだ。

『王』以外の駒に変化可能となる。

是が非でも俺は相手の本陣に突っ込まないといけない。

生徒会室か。校舎の最上階の一番端っこだ。

俺はそこを目指す！

逆を言えば、ライダー側の『兵士』がここまで

来ると『プロモーション』出来る。

あちらは俺一人と違い、八名もいる。

全員、『女王』に変化したら手のつけようが

ないじゃないか!!

『女王』は最強の駒。昇格されたら
大変な目に遭うのは必定だ。

『兵士』が最初の動いて潰し合うのが定石らしい。
ってことは、俺一人で美少女『兵士』
を八名も相手にしないのかな…。

こういう時ユウスケが居ればなあ…。
それでも、人数差は覆せないけど。

「全員、この通信機器を耳に付けてください」
朱乃さんがイヤホンマイクタイプの通信機器を配る。
それを耳に付けながら部長が言う。

「戦場ではこれで味方同士やり取りするわ」
これで離れた場所から命令を受けたりするのか。
大事なアイテムだ。壊さないようにしなくては。

『開始のお時間となりました。なお、
このゲームの制限時間は人間界の夜明けまで。
それでは、ゲームスタートです』
キンコンカンコン。

鳴り響く学校のチャイム。これが開始の合図か。
こうして、俺達にとつての初『レーティングゲーム』
の狼煙があがった！



「さて、まずはライザーの『兵士』を撃破
しないといけないわね。八名全員が『女王』に
『プロモーション』したら厄介だわ」

部長がソファに腰を下ろしながら言う。以外に余裕だ。
朱乃さんもお茶の準備をし始める。

あ、あの、戦闘中ですよ…？

「ぶ、部長、結構落ち着いてますね…」

「イツセー、戦いは始まったばかりよ？もともと、

『レーティングゲーム』は短時間で終わるものではないわ。もちろん、短期決戦^{ブリッツ}の場合もあるけれど、大概は長時間使うわ。実際のチェスと同様ね」
そ、そういうものなのか？

俺はてつきり映画の合戦シーンのような戦いを想像していたんだけど…。

こう、「入り乱れて超決戦！」みたいな。

『レーティングゲーム』は戦場を使い込んで

こそ意義がある。大抵の場合。

両陣営の本陣は砦か城、または塔になるわね。

本陣と本陣の間に森や山、川、湖を挟んで大掛かりな

戦闘をするのよ。今回は学校が舞台。祐斗」

「はっ」

部長に促され、木場がテーブルの上に地図を広げた。

おおっ、俺達の学校の全体図だ。

マスで区切られ、縦と横に数字やら英字やらが書かれている。

ああ、わかったぞ。これ、チェスのボードと同じなんだ。

部長は旧校舎、

新校舎の端っこを赤ペンで丸をした。ああ、なるほど。

俺達の本陣と相手の本陣に印を付けたのか。

「私達の本陣近辺に森があるわ。これは私達の領土

と思って構わない。逆に新校舎はライザーの陣営ね。

入った瞬間に相手の巢の中に入ったと思っただろうかい。

校庭は新校舎から丸見え。ここをただ通るのは危険だわ」

確かに。窓から丸見えだもんな、校庭。戦闘フィールド

に一度来てしまうと、この中で魔方阵転移は不可能。

つまり、旧校舎から新校舎に移動などの小規模

の魔方阵移動もできなくなる。

ここから他の場所へ移動するのは足でのみ。

まあ、翼を広げて空からつてもあるだろうけど、

目立つから得策じゃないな。それに俺はまだ飛べないし。

「じゃあ、新校舎に入るなら、裏の運動場からですか？」
俺の問いに部長は苦笑する。

「普通ならね。でも、そんなの相手だって理解しているわ。
運動場に下僕を配置するでしょうね。」

…運動場にある部活の棟。ここに『戦車』か『騎士』
を置かしたら。いえ、運動場みたいに広い場所なら

機動力が求められる。『騎士』を一名置いて、
下に『兵士』三名ないし、四名配置かしたら。

それなら運動場全域を把握できる」
そこへ木場が意見を言う。

「部長、旧校舎寄りの体育館。

これを先に占拠しませんか？

ここを取れば新校舎までのルートを確保できます。

体育館は新校舎とも旧校舎とも隣接してますし、

相手への牽制になります」

木場の意見に部長も頷く。

「ええ、私もそう思っていたわ。まずは体育館を取る。

…場所的に相手が投入してくるのは『戦車』かもしれない。

室内だから、機動力の『騎士』よりも破壊力の『戦車』

のほうが特性を活かせるわ」

…うお、俺にわからない戦略分析会議が行われているぞ！

ま、まあ、俺は命令された指示に従うだけさ！

迷惑だけは掛けないようにしようつと。

「…祐斗と小猫は、まず森にトラップを仕掛けてきて

ちようだい。予備の地図を持って行って、

トラップ設置場所に印を付けるように。

あとでそれをコピーして全員に配るわ」

「はい」

「…了解」

命令されるやいなや、木場と小猫ちゃんは

地図と怪しげなトラップグッズを手に持って

部室を出ていった。

「トランプ設置が終了するまで他の皆は待機。あー、朱乃」

「はい」

「祐斗と小猫が帰ってきたら、森周辺、空も含めて霧と幻術を掛けておいてくれるかしら。」

もちろん、ライザーの眷属のみ反応する仕組みよ。

オレフニング
序盤はこんな感じかしら、
ミドルゲーム
中盤に動きが激しくなりそうだけど。

霧と幻術の件、お願いね、朱乃」

「わかりました、部長」

朱乃さんが了承する。

すでに作戦が始まっているんだな。

俺とアーシアはどうしたらいいかわからんぜ。

「あ、あの、部長。俺はどうしたらいいんですか？」

流石に俺だけ動かないってのもダメな気がする。

何か仕事したい！

「そうね。イツセーは『兵士』だから『プロモーション』

しないといけないわね。」

「はいー」

元気よく返事した俺。部長はちよいちよいと手招きする。

はて？なんだ？

「ここに座りなさい」

隣に座るように指示してくるので、部長の隣に座った。すると、部長は自分の太ももを指差す。

「ここへ横になるのよ」

ッ！ ま、まさか、それは伝説の…

伝説の膝枕ってやつですかああああ!!

そ、そんな…その白いおみ足を枕にしてい

なんてこと…許されるのかっ！

「よ、よろしくお願ひしますー」

俺は無意識のうちに部長へ行儀よく頭を下げていた。
ゴクリ……。生唾を飲み込みながら、
少しずつ東部を部長の太ももへ。
びと。

俺の頬に柔らかい感触が伝わってくる。
ぬおおおおおっ！

なんで部長はこんなに柔らかいんですか!!

部長との肌の触れ合いが多すぎて、俺、
どうにかなくなってしまいそうです!!

部長のスキンシップは多感な時期をお過ごし
俺にとって必殺すぎるっ！

このまま頬擦りしたいけど、
そんなことしたら俺がダメになるっ！

「うっうっ」

いつの間にか、涙がこみ上げてきた。

膝枕。女の子にやってもらいたい百の願
いの中でもトップ10に入る。それが、

それが今実現できているなんて……。

自然と涙が流れて仕方ない。ああ、
大切なゲーム中なのに何をやってるんだ俺。

でも、モテないエロ学生だった俺が
こんなことをしてもらえるようになるなんて、
世の中分らないものです。

ああ、父さん母さん生んでくれてありがとう！
そんな俺を見て部長が溜息を吐く。

「もう、何を泣いているの？」

「うう、部長に膝枕してもらえるなんて
感動で涙が止まりません。この感触を

俺は一生忘れません。うう、生まれてきて良かった」

「膝枕位またしてあげるわ。本当に大袈裟な子ね」

なっ!! バ、バカな!! アリなんですか!!

なんで部長はここまで俺を甘えさせてくれるんだ!?

いや、それはいまでもいい!あー、

俺の学園ライフはなんて素晴らしいものなんだろうか!

松田と元浜との距離がどんどん広がっていく!

逆に申し訳なくなってきた。

あいつらの人生、これから楽しくなるよう願うしかない。すっ。

俺の頭に部長の手が置かれた。

「…あなたに施した封印を少しだけ解くわ」

「え? 封印?」

疑問を口にしたとき、俺の体が大きく脈動する。

ドクン!

同時に体の底から力が湧き上がってきた。

なんだ、これ?すげえ、

ブーステッド・ギアのパワーアップとは違う感覚だ。

あれが他の場所から流れ込んでくる力だとすれば、

今のこれは体の奥底から噴きあがり、

全身に馴染んで解けていく感じだ。

これは、いったい。

部長が不思議に思う俺の耳元で口を開く。

「覚えてる? 貴方を下僕に転生する時、『兵士』

の駒を七つ使ったって話を」

「はい」

「そのとき、イツセーの力は悪魔として

未成熟すぎたから、『兵士』の力に

制限かけたの。唯の人間から転生した

ばかりのあなたでは、七個分の『兵士』の力に

耐えられなかった。単純な話。

朱乃の次に強力な力となるのだから、よほど力を

付けないとイツセーの方が壊れてしまう。

だから、何段階かに分けて封印を掛けたのよ。

それを今少しだけ解放させたの」
解放。　じゃあ、今は俺の体に溢れる

この力は本来俺のものか。

「あの修行は、ブーステッド・ギアと『兵士』
の力に対応する為のもの。」

まだまだ足りない部分もあるけれど」

あの過酷な修行にここまで意味があるとは！

死にかけてまで必死に乗り越えてきてよかった！
なでなで。

俺の頭を撫でてくれる部長。

あー、お姉さまに頭を撫でられるのって気持ちいいなあ。

アーシアがこちらを興味深く観察している。

「ユウスケさんにも膝枕したら喜んでくれるでしょうか…」

「いい、イッセー？　相手が女の子でも倒すのよ？」

手加減しちゃダメ。あちらは手加減なんてしないのだから」

「わ、わかりました！」

「そう、いい子ね。『プロモーション』は『女王』

になること。最強の力を持つ『女王』になれば

戦況も変わるわ」

「男の俺が『女王』になるってのもなんだか

変な感じですよ」

俺の意見に部長が小さく笑う。

「駒の役割名なんだから、深く考えなくていいのよ。

うちはただでさえメンバーがライザーよりも少ないわ。

今はユウスケもいないのだから、

別の役割を覚悟でやらないといけないから、

一人でも欠いたら戦いが厳しくなるわね」

部長は俺達の役割をちゃんと把握して、戦場での使い方を

模索しているんだな…。

俺が遠くから神器で高めた魔力の弾を校舎に向けて

放てば一気に勝負がつく…ほど甘くはないか。

あちらもそんな手、重々承知だし、
対策されているかもしれない。

それにパワーアップした攻撃には限りがあるし、
俺は魔力が苦手だから、無駄なことはできない。

やるなら、『女王』に昇格してからのほうが、
威力も含めて安心できるだろう。

うん、俺は部長と仲間達を信じて前へ出るだけだ！

「部長！俺、絶対に部長を勝たせて見せます！」

本心だ！決心だ！やっぱ、こういうのは

言葉に出してナンボだろう。

それを聞いた部長が微笑む。

「ええ、期待しているわ。私の可愛いイツセー」

絶対に部長を勝たせて見せる！

あんな奴に部長を渡してなるもんか！

と俺は木場と小猫ちゃんが帰ってくるまで

部長のおみ足を堪能していたのだった。

おかげで英気に満ちた！

第19話「撃破」

「よしー」

旧校舎の玄関で俺は気合を入れていた。
横には小猫ちゃん。

次の作戦で俺のパートナーとなる。

「いい、イツセー、小猫。体育館に入ったら

バトルは避けられないわ。指示通りに頼むわね。

あそこは重要な場所になるわ」

玄関までお見送りに来てくれた部長。

隣で小猫ちゃんが頷く。

「俺も問題ありません」

目的地は体育館。

そこで起こるであろうバトルに勝つこと。

動く駒は俺と小猫ちゃんだ。

失敗は許されない。ああ、負けられない。

『プロモーション』もせずにリタイアしてたまるか！

「では、僕も動きます」

木場も剣を腰に携えて出向く準備をしていた。

「祐斗、例の指示通りに動いてちょうだい」

「了解」

「アーシアは私と待機。けれど、イツセー達の

合図があつたら、私と共に前へ出るわ。

絶対に貴方はやられちゃダメよ。

回復サポート要員に倒れられたら元も子もないわ」

「は、はいー」

アーシアも緊張しながら元気よく返事をした。

アーシアの回復能力は俺達の生命線。

あの力があるから、

俺達は多少の無茶も作戦に入れる事が出来た。

彼女と『王』である部長を守り切るのが

ゲームを勝ちへ持って行く為の必要な要素だ。

本来なら、俺とユウスケと小猫ちゃんで

チームを組み、部長が前線に出る際に

ユウスケがそちらに合流する手はずだったんだが、

居ない者を当てには出来ない。

俺達で頑張らないとな。

「朱乃は頃合を見計らって、お願いね」

「はい、部長」

最強の下僕、朱乃さん。この人の動きで

全てが決まると部長からも言われている。

ニコニコ顔の奥に潜んだ

凶悪な魔力の一撃を期待します！

全員の確認を取ると部長が一步前へ出る。

「さて、私のかわいい下僕達。準備はいいかしら？」

もう引き返せないわ。敵は不死身のフェニックス家

の中でも有望視されている才児

ライザー・フェニックスよ。さあ！

消し飛ばしてあげましょう！」

『ほーー』

全員で返事をしたと同時に駆け出した！

俺と小猫ちゃんと木場が旧校舎を離れていく！

「皆さん！頑張ってください。」

アーシアの応援が後ろから聞こえる。

俺達は後ろ手に腕を上げて振って見せた。

さあ、後戻りは出来ないぜ、

兵藤一誠！ 覚悟を決めて突貫だ！

体育館に向かって走り出す俺達。

途中で木場が別方向に向かう。

最初から木場とはそこで分かれる算段だ。

「じゃあ、先で待っているよー！」

「ああ、先で待ってろ」

お互い別れの挨拶を決め込んで、
散開する。奴は奴の仕事。俺は俺の仕事だ！
小猫ちゃんと共に体育館へ。

正面からは新校舎と繋がっている為、
そこから入れない。侵入がバレるからな。
体育館の裏側から侵入を試みる。

そこへ向かい、扉のノブを回す。開いてる。
鍵は掛かっていない。

しつつかし、この体育館、外観だけでも再現度高すぎだ。
旧校舎もそうだけど、本当にそっくりだ。

あとで、「実は本物の駒王学園が舞台でした」って
言われても信じるぞ。

裏口から入ると、演壇の裏側に出る。

演壇には幕が掛かっていない為、

内部が丸見えだ。

俺はそろりそろりと演壇の端っこから、

コートを見ようとしたら、

小猫ちゃんがぼそりと呟く。

「…気配。敵」

ッ！ 驚く間もなく、体育館に大声が響く。

「そこに居るのは分かっているわよ。グレモリーの

下僕さん達！ 貴方達がここへ入り込むのを監視

していたんだから」

女の声だ。ライザーの下僕！

やはり侵入を見られていた！

なら、ここそ隠れる必要もないか。

俺と小猫ちゃんは堂々と壇上に現れる。

体育館のコートには女性悪魔が四名。

チャイナドレスのおねえちゃんと双子、それに。

あのロリな女の子は俺とユウスケが戦った。

棍使いの女の子だ。まさか、こんな早く再開するとは…。

確か、チャイナドレスのおねえちゃんが『戦車』。

双子は『兵士』。小柄な子も『兵士』だ。

ここに来る途中、部室にて敵の写真付きで説明を受けたからわかる。

『兵士』三、『戦車』一か…。

こちらも『戦車』と『兵士』だが、数が倍も違う。

だが、作戦のためにも激突は避けられない。

「ブーステッド・ギア、スタンバイ」

『Boost!!』

倍加が始まった。よし！やるしかねえ！

「…イツセー先輩は『兵士』をお願いします。

私は『戦車』を」

「ああ！」

俺と小猫ちゃんはお互いに相手と対峙する。

チャイナドレスのおねえちゃんが

中国拳法っぽい構えを取り、小柄な女の子が棍で構える。

最後に双子が小型のチェーンソーをニコニコ顔でって、

チェーンソー!!

ドル、ドルルルルルルルル!

危険な音を立てながらチェーンソーに火が入った!

うお！ マジか！ そんな危険なシロモノ、

女の子が持つちゃダメだろ!

「解体しまーす♪」

双子が同時に楽しそうに宣言してくる!

うおーい！とつても明るい声でそんなこと

口にしちやダメだぞ!

つーか、解体されたくねえ!

チェーンソーを受けたらヤバイ!

ガッ！ ドツ!

少し離れた所では、既に小猫ちゃんと

チャイナドレスさんの戦闘が開始している。

打撃と打撃で繰り広げる格闘試合になってるぞ！

『戦車』同士だから一撃一撃が重そうだ。小柄な分、機敏に動ける小猫ちゃんの方が有利かと思っただが、あのねえちゃんも軽快な動きで

トリツキーな攻撃をしやがる。

ヒュン！

風切り音を出しながら、棍を器用に回す『兵士』の少女。確か、ミラとかいう名前だったかな。

よそ見している余裕は無いな。

バラバラバラバラバラ！

双子がチェンソーを床に当てながら同時に直進してくる！火花を散らし、床に傷を作りながら俺へ

目掛けてチェンソーを振り上げた！

ドルルルルルル！

危険な駆動音が俺の耳元を通り過ぎていく！

うはっ！ 危ねえ！ ギリギリで避けられた！

俺は双子の片方をシオルダータックルで吹っ飛ばして、

距離を取る。このぐらいの行動なら倍加中の

ブーステッド・ギア状態でもリセットがかからないようだ。あんま調子こいて攻撃すると元の状態に戻って一から増加

をやり直しだな！

ヒュッ！

俺の背後から何かが向けられる音。

「おっと！」

これもまたギリギリで避ける。

俺の脇腹を棍が鋭く過ぎ去っていく！

ミラって子の攻撃だ！今度は自力でかわしたぜ！

思った以上に体が動ける！

修行の成果、それと先ほどの『兵士』の力の

封印解除が効いているのか！

いける！いけるぞ！俺は自分の力に確信が持てた。

と、余裕を見せていたら頬をチェンソーがかすっていった！
痛みからして血が流れただろう。
よく見れば、俺の制服が所々裂けている。
うっ、実は結構危ないかも。

『Boost!!』

これで二段階め！

倍加中も容赦なく女の子達の攻撃が襲い掛かってくる！
だが。よっ！ ほっ！

上から降りかかる攻撃は体を横向きにして攻撃を避け、
横薙ぎの攻撃はジャンプしたり、
屈んでやり過ぎす！

真正面からの棍による突きは腕を交差させて
しつかりガード！よっしや！ 全部成功！
どうだ、ちくしょう！

「あー、もう！ ムカつくうううう！」

「どうして当たらないのよ！」

双子のチェンソー使いがその場で地団駄を
踏みながらムカついている様子だった。

「…ガードが崩せない」

棍使いの少女も自分の攻撃が効果的に
入らないことが気に入らないようだ。

残念。俺だって必死こいて修行したんだ。

はい、即敗北じゃ、部長や仲間にも申し訳がたたない！

『Boost!!』

きた！三度めのパワーアップ！ここだ！

「いくぜ、俺の神器くん！」

『Explosion!!』

この段階で戦う！体中、力が溢れる！

一定時間のパワーアップ状態！

一瞬でも無駄にしないぜ！

「まずはキミたち！」

俺は双子の片方向かって駆け出した。

速い！自分で言うのもなんだが、

いいダツシユだ！

目標も俺の動きに一瞬反応できないでいた。

認識してから行動に移し、

チェーンソーを振り回そうとしたときには俺の拳

が先に届いていた！

ドツ！

俺の放った攻撃で吹っ飛ぶ双子『兵士』の一人。

「この！よくもお姉ちゃんを！」

妹と思われるもう一人がチェーンソーを向けてくるが、

その前に俺は上半身を回して裏拳で少女に一撃当てる！

チェーンソー少女の妹が床に倒れ込んだ。

「はっ！」

間髪入れず、棍使いの童顔少女が俺へ突きを繰り広げてきた！

あの時は一瞬でやられたけど！今度こそは！

体を捻って突きを避ける！

渾身の突きを出したばかりで少女に隙が生じる！

「ここだ！

「ダッ！」

バキッ！

俺の手刀が棍を叩き折った。って、

痛え！棍が思った以上に硬かった！

間も空けずに得物を無くした少女を突き飛ばす！

「キャッ！」

少女が悲鳴をあげながら床に転がっていく。

「くっ！」

チャイナドレスのねえちゃんの声。

小猫ちゃんの方へ視線を向けてみれば、

床に手をつくチャイナドレスのねえちゃんと

変わらずに攻撃の構えを取っている小猫ちゃんの姿。

おおつ。見ているだけで小猫ちゃんの方が優勢だつて分かるぜ。

「もう！こんな男に負けたらライザーさまに怒られちゃうわ！」

体勢を直したチェーンソー娘の一人が毒づく。

「絶対にバラバラにする！」

再びチェーンソーに火を入れる娘たち。

ふふふ、息まいているのも今の内だ。

俺は既に必殺技の発動条件を整えたぞ。

「くらえ！俺の新必殺技！『洋服崩壊』ッ！」

パチン！俺が指を鳴らすと同時に

チェーンソーの双子、棍使いの服が弾け飛んだ。

そう、下着すらも粉々だ！

白く丸みを帯びた女性の裸体が俺の眼前で展開する。

おお、三人とも少々発育が足りないけど、これはこれで！

ブバツ！俺は笑みを浮かべながら鼻血を噴き出した。

「イ、イヤアアアアアアアアアアアアアアアアツツ！」

体育館中に響き渡る悲鳴。

三人ともその場にうずくまり、

大事な部分を隠そうとしていた。

「アハハハハハハ！どうだ、見たか！これが俺の技だ！

その名も『洋服崩壊』！」

俺は脳内で女の子の服を消し飛ばすイメージだけを延々と、

延々と妄想し続けたんだよ！魔力の才能を、

全て女の子を裸にするだけに使った！」

そう、その為だけに俺は魔力の才能を使い切ったと言える。

もともと、俺には魔力の才能がない。ならば、

自分の得意なイメージだけでも具現化出来るよう、

全部使い込んだ。全てはこの光景を見るがために！

ハハハ！見ろよ！女の子を裸にしてやったぜ！

このために野菜と果物の皮を、

手を使わずに魔力で？いてきた。

気が遠くなるぐらい、数々の野菜と果物で練習してきたんだ！

発動の条件は相手に手で触れること。

その際にイメージで高まった魔力を相手へ流し込む。

その結果がこれだ。

「最低！女の敵！」

「ケダモノ！性欲の権化！」

チエーンソー娘達が涙目で俺を罵ってくる。

その言葉、甘んじて受けよう。

「…見損ないました」

グサツ。

遠くからぼそりと聞こえてきた小猫ちゃん

のつぶやきは流石に胸に刺さったけどさ…。

そのとき、耳に付けていた通信機器に音が入る。

『イツセー、小猫。聞こえる？私よ』

部長の声だ。小猫ちゃんの方にも届いているようだった。

「はい！俺も小猫ちゃんも無事です！っーか、

今のところいい感じですよ！」

『それは結構。でも、朱乃の準備が整ったわ！

例の作戦通りをお願いね！』

部長のオーダーが入った！

俺は小猫ちゃんと視線で合図を送り合い、頷いた。

ダツ！

うずくまる少女たちに目もくれずに俺と小猫ちゃんは

体育館の中央口へ向かった。

「逃げる気！此処は重要拠点なのに！」

俺達の行動に驚くライザーの下僕達。

ああ、そうさ。ここは重要拠点だ。

旧校舎と新校舎を繋ぐ場所。

チエスで言う所の『センター』。

とても大切なものらしい。だから、

俺もあんた達も集まった！此処をゲットしよう！

それだからこそ、意味がある！此処を囲にすることに！

中央口から飛び出た俺と小猫ちゃん
カッ！

一瞬の閃光。刹那。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオンツツ！！

轟音と共に巨大な雷の柱が体育館へ降り注いだ。

雷が止んだ時、目の前にあつたはずの体育館
は根こそぎ消失していた。

「撃破^{ディク}」

朱乃さんの声だ。

振り返ると、ニコニコ顔の朱乃さんが

黒い翼を広げて空に浮かんでいた。

右手を天にかざしている。

その手はパチパチと電気が走っていた。

『ライザー・フェニックス様の「兵士」三名、

「戦車」一名、戦闘不能！』

審判役のグレイフィアさんの声がフィールド中に響く。

って、今ので俺と小猫ちゃんが相手した

連中が全員戦闘不能っ！！

マジかよ！今の一撃で!? そういや、

以前に木場から聞いたことがある。

『雷の巫女』、それが朱乃さんの通り名だよ。

部長が正規のゲームができる年齢じゃないから、

まだ朱乃さんは知る人ぞ知る存在だけど、

それでも一部の者の間では有名になっているんだ」

い、雷の巫女…。怖い。あんなのでお仕置きされたら確実に死ぬ！

…うん、朱乃さんを絶対に怒らせないようにしよう。

「やったね、小猫ちゃん」

と、俺が小猫ちゃんの肩をポンと叩こうとしたら、

彼女はさらりと避ける。

「…触れないで下さい…」

蔑んだ声と顔で俺をジトと睨む小猫ちゃん。

うう、その反応は悲しい。だけど、

当たり前か、あんな技を見たら女の子ならば警戒しちゃうよね。

「ハハハ、大丈夫だよ。俺、味方には使わないから」

「…それでも最低な技です、女の敵です…」

あらら。どうやら、本格的に嫌われてしまったような…。

『皆、聞こえる？ 朱乃が最高の一撃を派手に決めたわ。』

これで最初の作戦は上手くできたわね』

耳に付けた通信機器から部長の声が聞える。

何やら嬉しそうな声だ。部長の作戦。

それは、重要なポイントと思われる

体育館を破壊すること。相手の下僕を巻き込む事を前提に。

俺と小猫ちゃんとは裏から侵入したが、

これは相手が監視している事を承知でやった演技だ。

相手の下僕も体育館に入り込ませて、

バトルするように仕向ける。

ある程度戦闘したら、俺達は逃げるだけ。

その後、天空から朱乃さんが体育館ごと一網打尽だ。

俺らは相手を檻に入れる為の餌だった。

檻に入ったところで餌は取り払われ、檻ごと処分。

部長の作戦は成功だ！重要拠点を丸ごと捨て去り、

逆に攻撃に利用するなんて流石です！

『戦車』一名に『兵士』三名を倒したのはデカイ！

こちらはまだ一名も欠いていないし、

出だしは最高に決まった！

部長が話を続ける。

『あの雷は一度放つたら二度目を撃つまで時間がかかるの。

連発は不可能。まだ相手の方が数では上。

朱乃の魔力が回復ししだい、私達も前へ出るから、

それまで各自にお願いするわね。

次の作戦に向けて動き出してちょうだい！』

「はいー」

部長とアーシアが出るのか。
俺と小猫ちゃんの次の行動は：
木場と合流して運動場にいる敵を撃破すること！
と、その時だった。

ドオンツツ!!

突然の爆碎音が近くから発生する。

音の出先に目を向けると。

「……、小猫ちゃんー!」

小猫ちゃんが少し離れた場所で煙を上げながら倒れていた。

俺は急いで駆け寄り、抱きかかえる!

小猫ちゃんの体と制服は爆発に巻き込まれた

ようにボロボロになっていた。

所々、服が消し飛んでいる。さっきの爆発音はもしかして…。

「撃破^{テイク}」

謎の声。見上げれば、翼を広げて空に浮遊している人影が一つ。
フードを被り、魔導師の格好をしている女性。

ライザーの『女王』か!

ライザーの下僕が小猫ちゃんをやったのか!

いきなり最強の下僕登場かよ!

「ふふふ。獲物を狩る時、獲物が何かをやり遂げた瞬間が

一番隙だらけとなっていて、狩りやすい。

こちらは多少の駒を『犠^{サクリファイス}牲』にしても

貴方達を一つ狩れば十分。唯でさえメンバーが不足している上に、
誰かさんが不在ですもの。それだけで大打撃でしょう?

どうせ、私たちを倒しても家の『王』は倒せないんですもの。

あがいても無駄よ!」

愉快そうに笑う魔導師の女性。

部室の時も思ったが、仲間を何だと思っているんだ!

「…イツセー先輩…。朱乃先輩…」

小猫ちゃんが消え入りそうな声で呟く。

「…すみません。…もつと部長達のお役に立ちたかったのに…」

「あ、謝ることなんざねえさ！俺らは仕事をしたんだ！

問題ねえ！待ってろ、アジアが来れば直ぐに回復」

小猫ちゃんの体が光に包まれる。次第に体が透けていき、
ついにはこの場から消失してしまった。

……。

『リアス・グレモリー様の「戦車」一名、リタイア』

無情のアナウンスが聞えてきた。

部長から説明は受けている。

俺達は一定以上のダメージを食らい、

その戦闘で再起不能になった場合、

リタイアとなってフィールドから強制転送されてしまう。

転送先は医療設備の整ったところらしい。

だから、大ダメージを受けても問題ない。死んだわけじゃない。

先ほど朱乃さんが倒したライザーの部下も小猫ちゃん

よりも先にそこへ転送転送されているだろう。

わかってる。頭ではわかっているんだ。これは勝負。

それでも俺は……俺は！

腕から消えた小猫ちゃんの重さ。

……ちくしよう。ちくしよう！

俺は怒りで体中が震えていた。

「降りてきやがれええええ！俺が相手だ！」

俺は次の作戦のことなど忘れて、

小猫ちゃんを倒した敵を挑発していた。

自分でも愚かなことだと分かっているつもりだ。

それでも俺は許せなかった。

小猫ちゃんは消える瞬間泣いていた。

無念の涙を浮かべていた！

まだ戦えたはずなのに！クソ！

俺がもう少し早く気づけば小猫ちゃんを

助けられたかもしれないのに！

最初の作戦が成功したことで舞い上がっていた！

「ふふふ。うるさい『兵士』のボウヤね。

貴方もさつきのお嬢さんみたいに爆発してみる？」

女王の腕がこちらへ向けられる！撃たれる！

「あらあら。貴方のお相手は私がしますわ。

ライザー・フェニックス様の『女王』、

ユーベルーナさん。『爆弾王妃』^{ボム・クイーン}

とお呼びすればいいのかしら？」

俺を庇うように此方と女王の間に入る朱乃さん。

「その二つ名センスが無くて好きではないわ、

『雷の巫女』さん。貴方と戦ってみたかったの」

「イツセーくん、祐斗くんの元へ向かいなさい。

「ここは私が引き受けますから」

「でも」

食い下がる俺に、朱乃さんは始めて真顔を見せる。

ドキッとした。凄まじい迫力が伝わってくる。

「イツセーくん。貴方は貴方の役目があるでしょう？」

「お行きなさい。ここは私の仕事です」

その通りだ。俺では朱乃さんの邪魔になるかもしれない。

俺は俺のやるべき事に殉じなきやいけないんだ。

歯噛みする俺へ朱乃さんがいつもの笑顔を見せてくれる。

「大丈夫。小猫ちゃんの仇は私が取ります。

この『女王』は、私の全身全霊をもって消し飛ばしますわ！」

ッ！ 朱乃さんの体を金色のオーラが包み込む！

見ているだけで力強さが理解できる。

朱乃さんの魔力。俺達の中でも最強の『女王』！

「朱乃さん！頼みます！」

俺はそう告げると、踵を返して木場が持つ

運動場へ走り出す。

そのすぐあと、後方で激しい爆音と雷鳴が鳴り響いた。

そして、戦いは序盤オープニングから中盤ミドルゲームへ

移っていきこうとしていた。

第20話「魔剣」

木場の待つ運動場へ移動中の事だった。

『ライザー・フェニックス様の「兵士」三名、リタイヤ』

校内アナウンスだ！ライザーの『兵士』が三名もリタイヤ!!

誰がやったんだ？俺は移動中だし、朱乃さんは『女王』と激闘中、部長とアーシアも移動中だろうし…木場か！

これで相手は七名リタイヤ。残りはライザー含めて九名。

相変わらずの此方は小猫ちゃんを欠いて、残り五名。

まだ予断は許されない状況だ！

ッ！

運動場へ走る俺の腕を突然誰かが掴む！

敵!! 身構える俺だが、俺の腕を掴んでいたのは木場だった。

相変わらずの爽やかなスマイルだ。

「なんだ、お前か」

「うん」

死角になっている体育用具を入れる小屋の

物陰から木場は運動場の様子を伺っていたようだ。

「すまん、木場。小猫ちゃんは…」

「アナウンスを聞いていたから僕も知っているよ。

無念だったろうね。いつも何を考えているか

分からない子だけど、今回はユウスケ君の分もと

張り切っていたよ。森にトラップを作る時も

一生懸命にしていた」

「…勝とうぜ。ここに来れなかったユウスケと

やられちまった小猫ちゃんに分まで！」

「もちろんだよ、イツセーくん」

木場は普段の学園生活では腹の立つイケメンだが、

こと戦闘に関しては最高の味方だ。

オカルト研究部の男子コンビ！根性を出さないと

女子に恰好が付かないだろう！

「で、相手の『兵士』をやったのはお前か？」

俺の質問に木場は頷く。

「まあね。運動場の部室棟は重要なポイント。

敵が多くなるのは当たり前。なんとか、

見回りの『兵士』だけ集めて一網打尽にしたんだけど、

此処を任せられているボスが冷静でね、

まだ挑発に乗ってこないんだ。

というよりも『兵士』を使って僕の攻撃を

見ていたのかな。犠牲

サクリフアイズ

が好きな戦法のようなだね、ライザー・フェニックスは。

自分が不死身ってことと、下僕の人数が多いから

出来る事なんだろうけど」

木場の口元は笑っていたが、目元は一切笑っていなかった。

「ここを仕切っているのは『騎士』、『戦車』、『僧侶』

が一名ずつ。合計三名だよ」

「…すげえ嚴重じゃないか」

「まあ、それだけ警戒されているのさ。此方からの侵入を。

唯でさえ、体育館を消し飛ばされたわけだから、

こちらに力も集中するよ」

目ぼしいと思われた二つの侵入ルート。

体育館からのルートと、新校舎裏手の運動場からのルート。

片方は部長の作戦で消し飛び、

守備する所が運動場のみとなった。

こちらへ力を込めるのも当然か。まあ、

あの作戦を展開したせいで、前線に相手の『女王』が

突っ込んでくるなんて事態も起こったわけだけど…。

ここは体育館以上の激戦区になりそうだ。

うう、ちよつとビビってきたぞ！

「緊張しているのかい？」

木場がにこやかに訊いてくる。

「あ、当たり前だ！こちとら戦闘経験なんて

無いに等しいんだぞ。それでいきなり本番だ。

戦闘経験豊富そうなお前に比べたら俺は雑魚もいいところさ」

俺には強力な赤龍帝の籠手がある。本来、

それだけでも驚異的なところなのだと思う。

けど、使う俺自身がまだ戦いの素人だ。これじゃ、

宝の持ち腐れどころの話じゃない。

それでも部長の為に戦いたい。

部長の為に何かしたいんだ。

このフィールドで俺が弱者だとしても、絶対に唯では倒れない。

倒れるなら、必ず相手を一人でも多く道連れにする覚悟だ。

「ほら」

そんな決死の思いを誓った俺に木場が自分の手を見せる。

ッ。木場の手は震えていた。

「イツセーくんは僕を戦闘経験豊富だと言ってくれろ。

確かにそれは本当だ。でも、レーティングゲームに

参加するのは初めて。悪魔同士の本気の戦い。

今回が特例だとしても、本気だという事は変わらない。

いずれ、僕たちは否応無しに悪魔競技に参加していく。

これがそのファーストゲーム。油断も隙も見せられない。

これは部長の眷属悪魔としての全てをぶつけ合う勝負なんだよ。

今後の全てにも繋がる大事なものだ。僕は歓喜と共に恐怖も感じてる。

僕はこの手の震えを忘れたくない。この緊張も、

この張り詰めた空気も、全て感じ取って自分の糧にする。

お互いに強くなろう、イツセーくん」

木場……そこまで考えていたのか……。やっぱり、

戦闘に関してのこいつは。

「んじゃ、俺達はユウスケより一步リードって事だ

なら、俺達の超協力プレーでクリアしてやろうぜ！」

「ああ、頑張ろうイツセーくん！」

お互いに拳をコンと当て合う。

その時、勇んだ女性の大声が聞えてくる。

「私はライダー様に仕える『騎士』カーラマイン！」

こここそと腹の探り合いをするのも飽きた！

リアス・グレモリーの『騎士』よ、

いざ尋常に剣を交えようではないか！」

野球部のグラウンド。

その中心で甲冑を装備した女性が堂々と立っている。

なんつー豪胆な女性騎士だ！

陰から狙い撃ちされても文句言えないぞ！

それとも、撃たれても防ぐ自信があるのか

ふっ。隣で木場が笑う。

「名乗られてしまったら、『騎士』として、

隠れているわけにもいかないか」

そう呟くと、用具小屋の物陰から出て行ってしまう。

そのまま真正面から野球のグラウンドへ向かっていく。

「あのバカ」

俺は文句を言いつつも木場の後を追って真正面から出ていく。

カツコイイ。

堂々と表へ出ていった木場の背中を見て俺はそう思った。

「僕はリアス・グレモリーの眷属、『騎士』木場祐斗」

「俺は『兵士』の兵藤一誠だ！」

俺と木場がライダーの『騎士』、カーラマインに名乗る。

女騎士はそれを聞き嬉しそうに口の端を吊り上げた。

「リアス・グレモリーの眷属悪魔にお前達

のような戦士がいたことを嬉しく思うぞ。

堂々と真正面から出てくるなど、

正気の沙汰ではないからな」

おいおい、俺らはまともじゃありませんか。

「だが、私はお前達のようなバカが大好きだ。さて、やるか」

剣を鞘から抜き放つカーラマイン。

木場も銀光をきらめかせながら剣を抜き身にしていく。

『騎士』同士の戦い 待ち望んでいた。個人的に尋常じゃない斬り合いを演じたいものだね」

木場の攻撃的な物言い。おおつ、木場が生き生きとした笑みを浮かべちゃってる！

「よく言ったー！リアス・グレモリーの『騎士』よッ！」

カーラメインが踊るように斬撃を繰り出した！
ギンツ！

火花を散らし、剣と剣がぶつかり合う！お互い

『騎士』のせいかな、動きが神速だ！

おおつ始めやがった！目では追いきれない剣戟！

二人共高速で消えたり、つばぜり合いで

現れたりの繰り返しだ！

で、俺はどうしたらいい？…うーん、

木場のフォローに回ったら無粋だろうしな。

どう見ても「一対一の決闘」ってやつですよ。

うーむ、ここで「木場がんばれ！」「木場ファイト！」

って応援でも送るべきか？

「ヒマそうだな」

「ッ！」

声のした方を振り返れば、顔の半分だけ仮面を付けた女性がいた。

確か、この女性は『戦車』だったはずだ。

そこへさらにもう一人が文句を言いながら現れる。

「まったく、頭の仲間で剣剣で塗潰された者同士、

泥臭くてたまりませんわ。カーラメインったら、

『兵士』を『犠牲』にするときも渋い顔していましたし、

主である『王』の戦略がお嫌いなのかしら？

しかも、せっかくなにかわいい子を見つけたと思ったら、

そちらも剣バカだなんてついてませんわね」

西欧のお姫様みたいなドレスを着こんだ美少女さんもいらっしやった。

こちらは確かライザーの『僧侶』だ。

頭の両側にドリルみたいな縦ロール。

典型的なお嬢様って感じた。戦う恰好ではないよなあ。

うおっ！俺達この運動場を監視している悪魔達に囲まれている!!

『僧侶』のお姫様はこちらをジーっと半眼で見つめてくる。

な、なんだよ。

「うーん。この子がリアス・グレモリー様の可愛がっている

『兵士』さんの一人？ あの方、殿方の趣味が悪いのかしら」

などと、失礼極まりない事を言ってくる。くっ！

かわいい顔して毒舌だ！

俺はその場から飛び退き、二人に対して構えを取った。

「ブーステッド・ギア、スタンバイ！」

『Boost!!』

神器のパワーアップも始まった。あの騎士は木場に任せて

俺はこいつら二人を相手にするしかないか！

しかし、『僧侶』の女の子は溜息をつくだけだった。

「私、貴方のお相手はしませんわよ。イザベラ、

貴方が相手してあげたら？」

イザベラと呼ばれた仮面の女性は素直に頷く。

それを確認するとドレスを着た女の子はその場から

一步身を退いて離れた場所からこちらを見守りだした。

えー！ドリルロールの女の子は戦わないのかよ！

「元からそのつもり。さ、お互い手持ち無沙汰ならば戦い会おう」

「あ、うん。それはいいんだけど、そっちの『僧侶』さんは

バトらないのか？」

俺の質問だ。だって、これは大切なゲームなんだろう？

いきなり戦いを放棄されると俺もどうしたらいいか

分からないんだが…。

その問いを受けて、仮面のイザベラさんも額に

手を当てて困り顔になっていた。

「あー、気にしないでくれ。あの子は特殊だから。

今回の戦いもほとんど観戦しているだけだ」

イザベラは体を揺らしながら、怪しげな動きを見せる。だが、ビュッ！ ドッ！

有り得ない角度、信じられない所から打撃を仕掛けてくる！
おわっ！ 折り曲げた腕を横に振っていたと思ったら、
鞭みたいな打撃が放たれてきた！

これ、ボクシングのフリッカーか？！ 当たったら絶対に痛い！
こいつはボクサータイプの戦士か！

ボクサー特有の速度に『戦車』のパワーは凶悪な組合せだな！
ブーステッドギアが一定まで上がらないとこちらも
攻撃に転じられない！ 今はなんとかして逃げの一手！
と、必死に攻撃を避けていたが。

ズドンッ！

「…がつ！」

腹部を激痛が襲う。蹴りだ。蹴りを入れられた！

パンチに気を取られていたせいか、

足元を見ていなかった…ッ！

ボクサーだと勝手に決めつけていた？！

キックボクシングか？ いや決めつけてはダメだ！

よろめく俺の顔面にさらにラツシユが叩き込まれる！

フリッカーのコンビネーションが俺の顔面に何発も入れられる。

痛い！ マジでヤバいぞ、これは！

『Boost!!』

くっ！ 確か今ので五回目のパワーアップだったはず！

『兵士』相手なら十分だろうけど、まだまだ上げないと

『戦車』は倒せない！ 『戦車』の駒としての価値は『女王』

の次に高い！ 生半可な攻撃じゃ沈められない！

腕を交差させてクロスガードでなんとかフリッカー

の攻撃を防御する。ガード越しでも拳が重い！

こんなの食らい続けたらソツコーでリタイヤだぞ！

フリッカーの拳を引くタイミングを見極めて、

一步後ろへ退く！ 相手の攻撃が止まった。だけど、

未だにステップは軽快だ。

いつ拳が再び飛んでくるか分からない。

木場や小猫ちゃんとのスパarringをしてきて良かった。
マジで役に立っている。

特に相手の攻撃が止む瞬間を見極める感覚。

部長からも逃げる方法を学んでいたから、

今の攻撃は何とかなった。

その『戦車』イザベラが笑みを見せる。

「悔っていた。正直、蹴りが入った時点で勝負は決まったかと

思ったんだが……。どうやら、リアス・グレモリーは

よく鍛え込んでいる様だ。何よりも体力が凄まじいな」

体力……。俺、凄いことをしているのか？

「真剣勝負の場合、一番重要なのは体力だ。

ただ対峙して戦うだけならバカでもできる。

だが、それを継続して数分間でも戦うには

かなりの体力が必要だ。戦闘は体力と

精神を激しく使う。避けるだけでも

相当な労力があるからな。

それが今の所可能なのは、君が相当な

体づくりをしてきたからだ」

ッ。

胸がいっぱいになった。辛い修行。

鬼だと思っていた部長の檄。朝から走り込まされ、

山では岩まで背負わされて階段を駆け上がった。

死ぬかと思った。こんなの本当に必要なのか

と思つた。でも、部長は朝から晩までずっと

俺に付き合ってくれた。

自然と目元が潤んだ。俺は敵が見ている

前で涙をだらしなく流した。

部長！

部長！ 俺は戦えています！ 俺は立っています！

部長のやってくれたことは全部俺の糧になっています！
負けない。負けるもんか！

俺は絶対に部長を勝たせて見せる！

こいつを！目の前の『戦車』をぶっ倒す！

「…どうやら、余計なことを言ったようだ。」

君から感じる重圧が増したよ」

『戦車』イザベラ。俺はリアス・グレモリー様の

下僕で一番弱くて戦闘の経験も少ない。

それでもあんたを倒す！」

俺が決意を新たにしたら時だった。

ブウン！

風を切る音が聞こえる。

そちらを見ると木場の闇の剣が霧散していた。

ホーリー・イレイザ
光喰 剣。

刀身が闇に包まれた、光を食らう剣の神セイクリッド・ギア器なんだが、

相手『騎士』の攻撃で闇の刀身が

一度消し飛ばされたみたいだ。

「残念だが、私に貴様の神器は通用しない」

カーラマインの剣は炎に包まれている。炎の剣か？

あれで闇の剣をやられたわけだな。

だが、木場は臆した様子も見せず、

逆に不適な笑みを見せる。

「では、僕もこう返そうかな。残念だね。」

僕の神器はこれで全てではないんだ」

「何？戯言を。グレモリー家の『騎士』よ、

見苦しきは剣士としての本質を曇らせて」

「凍えよ」

木場が低く唸る様に言うと、刀身を無くした剣に

何かが集まっていく。

ん？　なんか、肌寒くなってきたような…。

冷気が辺りに漂い始める。

そんなことを感じていたら、木場の剣が凍っていく。氷が積み重なっていき、刀身を形作っていった。パリン！

氷が割れる音と共に、木場の獲物が氷の剣と化した。
「炎凍剣フレイムニテリットこの剣の前では、いかなる炎も消え失せる」

こ、氷の剣!?

おいおいおいおい！闇の剣だけじゃないのか、木場の武器は!!

この場にいる、木場以外の全員が驚愕の表情を浮かべていた。いや、当然だ。

んなことが可能なのかよ！

「バ、バカな！神器を二つも有するというのが!!」
炎の剣を横薙ぎに放つカーラマイン！

その顔は焦りに包まれている。

パキ、パキパキ…。

木場の剣に触れた途端、

カーラマインの炎の剣が冷えて固まっていく。

そして。パリンと儂い音を立てて、

崩れて消えた。

しかし、彼女は攻撃の手を休めない。

剣を早々に捨てると、腰に携えていた短剣を抜き放った。

それを天にかざして叫ぶ。

「我ら誇り高きフェニックス眷属は炎と風と命を司る！受けよ！炎の旋風を！」

ゴウウウウウウウウ！

彼女と木場を中心にして、野球のグラウンドに炎の渦が巻き起こる。熱い風が俺の肌をチリチリと焼いてきた。

「カーラマインめ。味方が近くにいることを忘れていいのか！」

旋風から顔を守るため腕でガードするイザベラが毒づく。
熱風を受けて、木場の氷の剣がポタポタと
次第に融けていく。

それでも木場は動じなかった。

「なるほど、熱波で僕らを蒸し焼きに
するつもりか…。だけど」

木場は刀身が融けて無くなった剣を前へ突き出した。
そして、力強い言葉を吐き出す。

「止まれ」

ヒュウウウウウンツッ!

豪快な音を立てていた旋風が木場の剣の
方へ吸い込まれていく。

ついに数秒もしないうちに熱風は止み、

グラウンドがしんと静まり返ってしまった。

リプレッション・ゲーム
「風 風 剣、一度の戦闘で

二本以上も魔剣を出したのは久しぶりだよ」

そういう木場の持つ剣の刀身には円状の特殊な

刃が生えていた。円の中心に不可解な

謎の渦が出来ている。

まさか、あそこに風を吸い込ませたのか?

つか、あんな剣まで持っているのか!

「…複数の神器。神器所有者から獲物を奪い、

自分の者に行っている後天的な神器所有者か?」

カーラマインの質問に木場は首を横に振る。

「僕は複数の神器を有していないし、

後天的な神器所有者でもない。

創ったのさ」

「創る…だど?」

「そう、『魔剣創造』。僕は任意に魔剣を造り出せる。

それが、僕が持っている神器の本当の能力であり名称だ」
木場が地面に手のひらを向けると、グラウンドから

複数の剣が勢いよく飛び出してくる！
いろんな形状の剣。刀身も全て違う！

木場の話からすると、これ全部魔剣なのか！

「すなわち、僕に切れない物は無い！」

『Boost!!』

来た！

ジャスト百五十秒！こちらも準備が整ったぞ！

『魔力の塊を出すとき、自分が一番イメージしやすい形で撃つの』

部長のアドバイスが脳裏を過ぎる。俺の中で一番パワー

を放出しやすいイメージ、それは『ドラグ・ソボール』

の主人公「空孫悟」の必殺技『ドラゴン波』！

「ブーステッド・ギア！爆発しろっ！」

『Explosion!!』

強大な力の波動が俺の両手に集まりだした。

両手を広げて上下に合わせる！

撃つイメージを頭に浮かべ、

体に流れるエネルギーを感じ取って一気に打ち出すッ！

ただし、セーブしないと。

山を消し飛ばした時の威力はマズイ。

校舎を吹き飛ばしてしまったら、

部長の戦略に支障が出るに違いない。

できるだけ威力を抑える感じで。

必殺！「ドラゴンショット」！

言葉にだすと気づかれるから、

俺は自分の必殺技を心の中で叫んだ。

ドンッ！

俺の手のひらから、魔力の塊が飛び出した。

「ぐわっ！」

俺は飛び出た魔力の勢いに負けて後方に吹き飛んだ。

吹っ飛びながらも俺は自分の両手から出された

魔力の一撃を視界に映した！

デカいッ!!

俺との対比にしても、

俺の体の五倍は大きい魔力の塊だ。

それが凄まじいスピードで相手の方へ飛んで行く。

目標はライザーの『戦車』だ。

部長に言われた。レーティングゲームをする時、

一番厄介なのは『戦車』なのだ。

攻撃力と防御力が高くなる。

これは『戦車』の特性だが、これが何よりも怖い。

元から攻撃と防御が高い者に『戦車』の

役目を与えるのは王道だが、

それ以外の場合もあり得る。

魔力の高い者、速度が速い者にも『戦車』の

特性を与える事が出来るんだ。

魔力で戦う者はどうしても肉体的なものが

弱い傾向にある。それを特性で底上げするわけだ。

足の速い奴に『戦車』の駒を与えれば、

足が速くて攻撃力も防御力も高い

オールラウンダーが誕生する。

何よりも『戦車』は『兵士』の

プロモーションみたいな技も有していた。

『キャスリング』だ。

『王』と自分の位置を瞬間的に取り換えることができる。

これが一番厄介だと部長は言っていた。

チェックメイト後にその効果は無いが、

『王』と『戦車』の位置が入れ替わるの

は確かに強力だ。長所を伸ばすのも、

短所を補うのも主次第。駒の使い方は千差万別。

ってわけで、『戦車』イザベラを叩く!

「イザベラ! 受け止めるな! 避ける!」

ライザーの『騎士』カーラメインが叫ぶ。

受け止めようとしていたイザベラが、
途端に回避行動を取った。

ヒュンツ！

イザベラは既での所で俺の一撃を躲す。

目標に避けられた俺のドラゴンショットは
遙か前方へ飛んでいく。

そちらにはレプリカのテニスコートがあった。

次の瞬間。

ゴオオオオオオンツツ！

地を響かせる轟音！巻き起こる突風と共に

赤い閃光が俺達を襲う！

俺はドラゴンショットが衝突した

テニスコートの方を見て目を見開いた。

ないっ！ テニスコートが、

周囲の運動場の一部と共に丸つきり無くなっているっ！

消し飛んだのか？！俺の一撃で？！レプリカとはいえ、

学園の風景が一気に様変わりしちゃったぞ！

テニスコートが跡形もないじゃないか！

それどころか、大きなクレーターが生まれていた！

セーブを意識しておいて、なおこの威力！

改めて身に沁みる。俺の神器は異常だ！

「イザベラツツ！その『兵士』を倒せ！

そいつは！その神器はこの戦場を

一変させるほどの力があるツ！」

カーラマインの怒号に応え、

ライザー『戦車』イザベラが俺へ照準を定める。

「承知！ブーステッドギア！

『プロモーション』させれば我々にとって

脅威となる！その前に叩く！」

さつきとは違うぜ、イザベラさん！

今の俺は上級悪魔クラスの攻撃力なんだよツ！

相手が拳、蹴りのラツシュを放ってくるが、俺はガードしてやり過ぎ、左拳に力を込める！

「だっ！」

俺の拳がイザベラに放たれる。

イザベラは腕を交差させて防御姿勢に入るが。

ドズンツ！

俺の重い一発がガードを崩し、

仮面の『戦車』を吹っ飛ばした！

よし！触れた！発動条件が揃ったぜ！

「弾ける！『洋服崩壊』！」

ババツ！その瞬間、イザベラの服が弾け飛んだ。

露になる裸体。おおっ、大きなおっぱいだ！

引き締まった体が健康的に最高です！

脳内に記録保存完了！

「なっーなんだ、これは！」

反射的に自分の大事な所を隠すイザベラ。

そうだよ、そう反応しちゃうよね！

ここだ！俺は間髪入れず、

右手の中に作り出していた魔力の

小さな塊を突き出した！

イメージは手のひらから噴出される

魔力の一撃！それを相手へ放つ！

「いっけえええええ！」

ドシユウウウウ！

籠手の力によって高められた膨大な

魔力の波動が前方へ放たれた！

「くっ！んんんんことっ！」

魔の波動がイザベラを包み込む。

ドオオオオオオオ！

大きな衝撃が周囲へ広がる。

衝撃が収まった時、地面に倒れていた

イザベラの体が光り輝く。

次第に透けていき、この場から消えていった。

『Reset』

ブーステッドギアの効果が切れた。

その時、

『ライザー・フェニックス様の

『戦車』一名、リタイヤ』

グレイフィアさんのアナウンスが耳に届く。

「よっしやああああああつ！」

俺は『戦車』の撃破に歓喜の叫びを上げた。

戦えます！部長、俺は部長のおかげで

戦えます！

俺は一時の勝利の余韻に浸るのだった。

第21話「贈物」

イザベラとの決着がつき、俺は息を整える。

…かなり、体力と魔力を使った。

魔力に関してみれば、潜在的な力を

引き出して打ち出しているものだから、

威力が上がれば上がるほど消耗も激しくなる。

今の威力の魔力は、あと二発撃てれば上出来か。

いや、二発目を撃つたら魔力が空になって

昏倒する恐れがある。

あと一発と踏んだ方がいいな。

イザベラを失い、ライザーの『騎士』

カーラメインが苦笑する。

「どうやら、あの『兵士』を、

ブーステッドギアを侮っていたようだ、

私もイザベラも。やはり、

唯の『兵士』と思わない方が賢明なようだな」

敵に褒められる。これって結構悪くない。

ちよつとうれしいな。

「しかし、酷い技だ。いや、恐ろしい技

と言うべきか。お、女の服を消し飛ばすとは…」

「いやー、面目ないね。

そればかりは僕からも謝るよ。

うちのイツセーくんがスケベでゴメンなさい」

と、カーラメインに謝る木場。

…なぜにお前が謝る。複雑な気分だ。

カーラメインが短剣を逆手に持ち直しながら言う。

「しかし、魔剣使い…数奇なものだ。

私は特殊な剣を使う剣士と戦い合う運命

なのかもしれない」

それを聞き、興味深そうな表情となる木場。

「へえ、僕以外の魔剣使いでもいたのかな？」

「いや、魔剣ではない。 聖剣だ」

「っ」

その一言を聞いた木場の表情がガラリと変わったのをここにいる全員が認識した。

刹那、木場の体から有り得ない程の殺気が生まれる。うわっ。なんつー殺気だよ！寒気が凄まじいぞ。

全身がざわざわいつている。

木場は冷淡な光を瞳に寄せ、低い声音で訊く。

「その聖剣使いについて訊かせてもらおうか」

…とんでもない迫力だ。キレた時の部長並の敵意だぞ。

聖剣？それが木場とどんな関係があるんだ？

「ほう、どうやらあの剣士は貴様と縁があるのか。

だが、剣士同士、言葉で応じるのも不粋。剣にて応えよう！」

「…そうかい。…口が動ければ、瀕死でも問題ないか」
ぞわっ。

二人の間に殺気が立ち込める。こちらまで震え上がるほど、

殺意がピリピリと肌を刺す。木場！お前、

どうしちまつたんだ！

いつもの爽やかフェイスが消えちまつてる！

木場の変化にあたふたする俺へ気配が近づいてくる。

「こっかね」

「あれ？イザベラ姉さんは？」

「まさか、やられちゃったの？」

続々と集まるライザーの下僕少女達。

顔は覚えている。『兵士』が二名、『僧侶』が一名、

『騎士』が一名…って、

残りの下僕悪魔大集結じゃないか！

なっ。ここで大戦争開始する気かよ!!

こっちは俺と木場の二人しかいないんだぞ！

朱乃さんは相手の『女王』とやりあっているだろう。

いまだ空には雷鳴が走っているからな。

部長とアジアは……。そうだ、

二人はどうしたんだろうか？

予定では本拠地から動いて前へ

出ていると思うんだけど……。

「ねーその『兵士』君」

ライザーの女の子に呼ばれる俺。なんだ？

「ライザー様がね、貴方の所のお姫様と

一騎打ちするんですって。ほら」

女の子が天高くどこかを指差す。

追うように視線を向ければ、

新校舎の屋上に炎の翼を羽ばたかせる

人影と黒い翼を羽ばたかせている人影があった。

黒い翼の人影はどう見ても髪が紅色だ！

っーか、部長だ！

『イツセイさん！聞こえますか、イツセイさん』

通信機器からアジアの声が飛び込んでくる。

「アジアー！どうかしたのか？」

もしかして部長のことか？」

『はい。今、私と部長さんは学校の屋上にいるんです。』

相手のライザーさんに一騎打ちの申し出を頂きました。

部長さんが応じたんです！おかげで何事も無く

校舎まで入ってこられたんですけど……』

……なんっーこちになつてんだ。

どうしてらいいか分からない俺へ、

ライザーの妹が嫌味な笑みを浮かべながら

話しかけてくる。

「お兄様ったら、リアス様が以外に善戦するものだから

高揚したのかしらね。普通に戦えば私たちの勝利ですもの、

情けを与えたのでしよう。このままでは、

対峙する前にやられてしまいそうですし」

妹さんが「ホホホ」と口に手を当てて笑っている。
なんか、ムカツと来たぜ！

「部長は強い！朱乃さんだつて『女王』を倒して
すぐに駆け付けてくれる！木場も魔剣コンビで
この場にいる連中全員撃破だ！

俺だつてブーステッドギアで」

「『紅髪の滅殺姫』、『雷の巫女』、『魔剣創造』、

そして『赤龍帝の籠手』。聞いているだけだと

尻込みしてしまうようなお名前ばかりですわね。

けれど、あなた方の相手は『不死鳥』です。

どんなに絶対の力を持っていても不死身が

相手ではどうしようもありませんわ」

「だが、フェニックスだつて弱点がある！」

俺の叫びを妹さんは鼻で笑う。

「精神がやられるまで何度も倒すのかしら？

それとも神クラスの一撃必殺？

貴方達、このゲームに勝とうとか思ってるの？

お笑いね」

「なんでだよー！」

「だつて、この試合は最初からリアス様に

勝ち目なんて無いんだもの。不死身って、

それぐらいあなた方にとって絶望的なのですわよ？」

ライザーの妹が指をパチンと鳴らす。

下僕悪魔達が俺を囲んだ。

「カーラマイン。その騎士の子は貴方に

任せますけれど、貴方が負けたら私達は

一騎打ちなんてむさ苦しいことはしませんわよ？

皆で仲良く倒しますわ。それとも

これ以上フェニックス家の看板に泥を塗るつもり？」

妹の迫力のある言葉にカーラマインも渋々うなずいた。

「シーリス」

「御意」

一步前に出てきたのはワイルドな出で立ちのお姉さん。背中には剣を背負っていた。

「彼女はお兄様のもう一人の『騎士』。」

そのカーラマインと違って、

騎士道うんぬんにこだわりませんわ。

相手を必ず倒す。それだけです」

シーリスとかいう『騎士』のお姉さんが

剣を背から抜き放った。

：大きい剣だ。幅の広い。

あんなので斬られたら死ぬか？うん、死ぬわ。

「でも、彼女はトドメの時でいいかしら。ニイ、リイ」

「にや」

「にやにや」

妹の声に答えたのは獣耳を頭にはやした女の子二人。

『兵士』だったか。

「彼女たちは獣人の女戦士。体術は、

それはそれは大したものですよ？」

スッ！

獣娘二人が視界から消える！瞬間、

俺の腹部と顔面に打撃が入る！

「ぐはっ！」

痛みを訴える暇もなく、

足に、腕に、肩に、背中に、全身に攻撃が加えられる！

こ、拳が見えない！なんて速度だ！

この速度で、『兵士』かよ！

「ブ、ブーステッド・ギア！」

『Boost!!』

力の倍加が始まる！だが、敵の攻撃は

激しくなる一方だった。

「ニイ！リイ！ブーステッド・ギアは十秒ずつ

能力が倍になっていく神器ですわ！

イルとネルのチェーンソー姉妹が撃破された
具合から考えても三回倍加したら、

あなた方では手に負えなくなります！

二十秒以内にカタをつけなさい！

そちらは神器の特性上、増加中は

手を出してきませんわよ！

逃げるだけです！足を狙いなさい！

それと手に触れてはいけませんわよ！

その方、手で触れた者の衣類を吹き飛ばす

破廉恥極まりない技を持っているようですわ！」

それを聞き、畏怖するような表情を浮かべる娘達。

「最低！」

「ケダモノ！」

うっさい！何が悪いか！女の子を

丸裸にする技を会得して、何が悪いのか！

「下半身で物を考えるなんて愚劣よ！」

「下半身で物を考えて何が悪いか！俺は男なんだよツツ!!」

と、言葉の売り買いをしても仕方ないか。

まあ、ここにユウスケがいたら、

『そんな技を思いつくのはお前だけだ！』って言われそうだが、
変態で何が悪いか！

しかし、あちらの妹さん、こちらの弱点を

よくくご存じでいらつしやる！

ゴツ！

痛え！クソ！足を狙ってきやがった！

太ももにローキック入れてきやがって！

獣娘の蹴りってこんなに痛えのかよ！

獣だから身体能力が基本的に高いのか!!

ブーステッド・ギアの倍加中は下手に攻撃できない！

こんな余裕のない状態で一に戻るなんて最悪だ！

逃げて逃げて。

ドゴツ！

「痛ッー！」

再びローキック！効く！なんてもんじゃねえぞ！

足が痛みでガクガクしてきやがった！

これだと、まともに逃げられ。

「ぐはっー！」

顔面に思いつきりパンチが入った。

飛び出る血。血。血！

鼻からも口からも！

あまりの痛さに涙がボロボロ出てきやがった！

「イツセーくん！クソ！」

木場が俺の惨状を見て、カーラマインを

早く倒そうと剣を両手に持って切り込んでいく。

「カーラマイン！あと十数秒耐えなさい！

貴方がその『騎士』に勝てないのは

わかりましたわ！でも、あと少しで

ドラゴン使いを葬れそうなの！

その『騎士』を止めていてちようだいな！」

楽しそうに笑うライザーの妹。

てめえは高みから余裕の見物ですか！

腹立つ女だ！

ドサツ。

ついに足が動かなくなっちゃった。

地面に膝をついてしまう。

……ダメだ。足に力が入らない。

頭もブーツとしてきた。

ダメージを受けすぎた……。

クソ！此処で意識を失ったら、

絶対になりタイヤだ！そんなの嫌だ！

部長の力になれずに負けるなんて嫌だ！

ドオオオオオオンツツ！

フィールド全体を震わせる振動！

もしやと思い屋上を見上げれば、

部長とライザーがやり合っていた。

お互いに紅い魔力と炎の魔力を

空中でぶつけ合っている。

ライザーの方は無傷。

服すら破れていない。

対する部長の制服は所々が破けていた。

心なしか、息も上がっているように見える。

『だって、この勝負は最初からリアス様に

勝ち目なんて無いんだもの。不死身って

それぐらいあなた方にとって絶望的

なのですよ？』

先ほどのライザーの妹が口にした一言

が脳裏を過ぎる。

：負ける？俺達が？部長が？

負けたらどうなる？部長が…あいつに…。

そんなの！そんなの絶対に許せねええええ！

立つしかないのさ。たとえ、

体がボロボロのグチャグチャになろうとも

俺は立つしかない。

あの人が好きだから？

それもある。惚れた弱みだ。

けど、それ以上に俺はあの人を守りたかった。

契約とか制約とかそういうのじゃない。

あの人は紅の髪を揺らしながら、

威風堂々としていなきやいけない。

それが、部長だ。それが、

俺が憧れた部長なんだ！

部長が奴を嫌だと言った。

部長が俺に戦えと言った。

なら、俺は……戦うしかない！

赤い龍帝」さんよ。聞こえているなら、応えろ！

「俺に力を貸しやがれ！ブーステッド・ギアッ！」

『Dragon booster!!』

赤い閃光を放つ俺の神器。

足りない。こんなのじゃダメだ！

もつと力が欲しいんだ！

「もつとだ！あの時はアースアだった！

今度は部長だ！俺の想いに応えてみせろ！

ブーステッド・ギアアアアアアアアッ！」

『Dragon booster second Liberatori

on!!』

今まで耳にしたことのない音声が籠手から

発せられ、俺の左腕に変化が訪れる。

赤いオーラが左腕を覆い、

何かを形作っていく。

籠手が徐々に姿形が変質させていった。

オーラが消え去ったとき、ブーステッド・ギアは。

「…変わった？」

並外れた力の結晶と称された籠手は、

新たな姿となっていた。

甲の部分にあつた宝玉の他に、

もう一つの宝玉方にも現れ、

全体のフォームも少しばかり変わっている。

…え？これはいったい…。

疑問に思う俺の頭に宝玉から情報が流れ込んでくる。

……。

…そうか、それが新しい力の使い方…。

俺は自然と笑みを浮かべていた。

俺は、俺達はまだ強くなれる！

「木場アアアアアッ！」

足を踏ん張り、勢いづけてから

一気に立ち上がる！ははっ、

体中から悲鳴が聞こえてくるぜ！

だけだよ、もう少しだけ動いてくれ、

俺の体！そして。

俺は駆け出す！目標は木場！

「お前の神器を解放しろオオオオオッ！」

俺の叫びに木場がこちらの真意もわからず当惑する。

だが、奴は剣を地面に突き刺し高らかに吼える！

「魔剣創造！」

ギヤアン！

グラウンドが光り輝き、

いくつもの魔剣が地面から姿を現す。ここだ！

俺は光り輝く地面に拳を放ち叫んだ！

「ブーステッド・ギア！第二の力！」

ブーステッド・ギアで高めた力、

それを地面へ流し込む！目標は唯一つ！

木場の魔剣を創造する能力だッ！

『ブーステッド・ギア・ギフト
赤龍帝からの贈り物』！』

『Transfer!!』

ギイイインツツ!!

金属の激しくこすれる音がこの一帯に鳴り響く。

この運動場全域が刃の海と化した。

いたるところから様々な形状の刀身が

天に向かって鋭く飛び出している。

辺り一面、魔剣の見本市となっていた。

その全部が木場の創造した魔剣だった。

第二の力、『赤龍帝からの贈り物』。

その効果は、籠手で高めた力を他の者、

もしくは物に譲渡し、

力を爆発的に向上させられること。
俺は地面から創造される木場の
神器の能力に籠手の力を譲渡した。
結果がこれだ。

魔剣を生み出す力を飛躍的に高め、
周囲を全域刃だらけとなった。

「…バカな」

「これもドラゴンの力だというのか……？」

苦悶の声をあげるライザーの下僕達。

当たり前か。彼女達の体は地面から鋭く生えてきた
幾重もの魔剣に貫かれている。

瞬時にその体が光出し、このフィールド
から透けて消えていく。

リタイヤだ！

『ライザー・フェニックス様の「兵士」二名、

「騎士」二名、「僧侶」一名、リタイヤ』

「よっしゃー！」

グレイフィアさんのアナウンスを聞き、

俺はその場でガッツポーズを取った。

今の攻撃で一気に大量撃破だ！

いける！いけるぞッ！

この新しい力、『譲渡』^{ギフト}を使えば

部長も朱乃さんも木場も、

皆の力が一気に膨れ上がるっ！

そうだ！アシアの回復能力を強化してもいい！

ああ、この新能力なら俺達はライザーに勝てるッ！

「イツセーくん。驚いたよ。この力は…」

木場は困惑しながら地面から生えている

魔剣群を見渡していた。

自分の能力が思っていた以上の効果を出して驚いている様子だ。

「ああ、木場。この籠手でお前の力を強化」

そのとき、信じがたいアナウンスが飛び込んでくる。

『リアス・グレモリー様の「女王」一名、リタイヤ』

「ッ!?!」

「なっ!?!」

俺と木場は同時に我が耳を疑った。

当然だ!信じられるか!

あ、朱乃さんが…。そんなわけがない!

朱乃さんは俺達の中でも最強の。

ドオオオオオオオオオオオオオオオ!

足元が激しく振動し、聞き覚えのある

爆発音が俺の鼓膜を激しく揺さぶる。

その爆音は木場がいた場所からだった。

そちらへ恐る恐る視線を向けた時、俺は絶句した。

木場が。俺達の『騎士』が、

全身から煙を立ちのぼらせながら地面に突っ伏していた。

辺り一面に鮮血が飛び散っている。

駆け寄る間もなく、木場の体が光に包まれ、

この場から消えていく。

『リアス・グレモリー様の「騎士」一名、リタイヤ』

再び有り得ないアナウンスがフィールドに流れる。

俺は立て続けに起きた理解不能の出来事に

呆然と立ち尽くすしかなかった…。

—○○●—

時は少し遡り朱乃とユーベルーナが戦いを広げている最中。

状況は朱乃が優位に立っており。

ユーベルーナは手傷を負っており

地面に膝を付き、敗北寸前であった。

「フフフフフフッ」

「何故笑っているんですか?」

「負けているのはそちらですが」

「いえ、『雷の巫女』と言われてもこの程度かと思っ

本気を出せばすぐに決着はつくものを」

ユーベルーナは心底おかしそうに笑っていた。

その自分が不利だと感じてない様子に朱乃は困惑していた。「負け惜しみですか、既にポロポロのあなたに何を言われても悔しくないですよ」

『光』の力を使えばいいものを何故使わないの？

それとも使えないの？まあ、この試合は我々の勝利なのでここでの勝敗はどうなろうと興味はないですけど、

出来れば本気の貴方と戦いたかったわ」

その言葉に朱乃は目を見開き怒りをあらわにした。

「どうやって知ったのかは知りませんが、

ここで倒されるあなたには関係ありません！

さつさと消えなさい!!」

ドオオオオオオオオンツツ!!

渾身の一撃がユーベルーナに直撃した。

先ほど体育館を吹き飛ばした雷よりかは小さいが人を一人吹き飛ばすには十分な威力があった。

ユーベルーナが立っていた場所には黒い煙が立ち込めていた。

「早くりアスの元へ向かいましたよう」

すると本来聞こえるべきものがいつまでたっても聞えてこなかった。

「アナウンズが流れない!! あの雷は直撃したはず」

「あらあら、つれないじゃない。お楽しみはこれからなのに」黒い煙の中に何かが動いた。

ユーベルーナだろうが煙でよく見えない。

ブーーン…

かすかに聞こえる虫の羽音に気が付いた時には、

朱乃の目の前が閃光に塗潰されていた。

ドオオオオオオオオンツツ!!

爆発に？み込まれた朱乃は鮮血をまき散らせながら落ちてゆき地面に落ちる前に光に包まれ消えていく。

「何が……」

消える最中最後に朱乃がみた光景は煙の中に蠢く異形のシルエツトだった。

『リアス・グレモリー様の「女王」一名、リタイヤ』

『女王』撃破」

煙の中からユーベルーナが呟いた。

—○●○—

イツセーside

あれほど敵味方入り乱れていた運動場はもはや俺一人だった。

パキ：ツ。

グラウンドを支配する魔剣の世界。

しかし、主を失った魔剣は儂い音を立てて、

一本、また一本と折れて崩れて散っていく。

魔剣の欠片が銀の光沢を放ちながら運動場に舞う。

キラキラと光って幻想的な雰囲気を作り出している。

数秒もしない内に魔剣は全てこのグラウンドから消え失せていた。

ツ！

悲嘆に浸るヒマも無く、俺の視界が空を漂う影を捉える。

そちらを見上げてみれば、フードを被った魔導師の姿があった。

ライザーの『女王』だ！

朱乃さんと戦っていたはず！

なのに朱乃さんだけリタイヤ!!

相手は服が所々破れているだけで、

傷を負ったように見えない！どうなってやがる！

朱乃さんがただ負けるなんてあり得ないんだ！

『騎士』、撃破」

ライザーの『女王』は笑みを浮かべながら、

非情な一言を口にした。

その瞬間、俺の頭に血が上る。

「朱乃さんと木場をやったのもてめえか！」

あの爆発！そう、小猫ちゃんも爆破の魔力でやられた！

ちくしょう！木場までやられたってのか！

「降りてこい！朱乃さんの！小猫ちゃんの！」

木場の仇を取ってやる！降りてこい！

てめえに俺の神器の力を叩きこんでやるから、
降りてきやがれえええッ！」

俺が拳を天に突き上げて、『女王』を挑発する。

だが、『女王』は俺を嘲笑うかのような

眼差しを向けるが、興味が失せたように

新校舎の屋上の方へ黒い翼を羽ばたかせた。

「待て！待ちやがれ！」

俺は怒りに身を任せて、『女王』を追う！

「逃がすもんか！逃がすもんかよ！」

そつちには部長がいるじゃねえか！

アーシアもいるんだ！

てめえなんかこれ以上俺の仲間をやらせてたまるか！

やらせてたまるかよオオオオオッ！

ガッ！

「あがつ！」

足から力がなくなつて、地面に転倒する俺。

すぐに立ち上がろうとするが、

体に力が入らない…っ！

全身がぶるぶる震えて動いてくれない…。

俺でもわかつた。体力が限界。

部長が鍛えてくれたからここまで保つたけど、

戦闘経験のない俺が度重なる戦闘を繰り返せば

納得できることだった。

心臓の動悸も激しい。息もあがつていた。

ダメージも蓄積されて、酷いことになっている。

顔も腕も足も腹も痛くて、

気がどうにかなりそうだ。

精神の負担も半端じゃない。

目の前で仲間を失う。
心をえぐられるような場面を何度も見れば
精神に異常をきたしてもおかしくない話だ。
立たなきや。

そんな状況でも頭を支配したのは、
立って部長の元へ行かなきやいけないってことだった。

「ぬがああああああああああつ！」

声を張り上げて気合を入れる。

まだ足に力が入りそうさ。なら、立てるだろう！

ゆっくり立上り、ついに校舎へ体を向けることが出来た。

よし、屋上へ行こう。

そう思っただけで歩み出した俺へ声が掛けられる。

「まだ戦いますの？」

振り返れば、ライザーの妹が炎の翼を広げて

空から降りてきた。

…さっきの魔剣攻撃でやられなかったのか？

空を飛んで回避したのか？

そういえばアナウンスでは『僧侶』一名

と言われてたかもしれない。

俺がそちらへ拳を構えるが、ライザーの妹は

肩をすくめるだけだった。

「私、もうやりませんわよ。だって

どう考えても貴方の負けですもの」

「うるせえ。まだ俺も部長も倒れてねえぞ」

「先ほどのドラゴンの力。確かに凄まじいものでしたわ。

相手へ増大した力を譲渡できるだなんて、

異常な能力だと思いますし、

『雷の巫女』やリアス様の滅殺の力が

膨れ上がると考えるだけで怖いですわ。

『レーティングゲーム』で、

その力は上級の方々にとって脅威となりますわね。

でも、この戦いはあなた方の負け」

「…フェニックスが不死身だからか？」

「それもありますけど、貴方もリアス様も体力が残っていないでしょう？」

どんなに傷が癒せても体力までは戻りません。

今の状態ではジリ損で敗北します。それに」

ライザーの妹は懐から小瓶を取り出した。

…なんだ、それ？まさか、聖水とか？

そんなわけないか。

下手したら自分がやばいもんな。

「フェニックスの涙。聞いたことあります？」

これはそれ。私達フェニックスの涙は

如何なる傷をも癒すんですよ」

フェニックスの涙!!

修行合宿の時に部長から聞いたことがある。

だけど、そんなのアリなのか!!

「卑怯とおっしゃらないでくださるかしら。」

そちらだって、『聖母の微笑』を持つ者がいるでしょう？」

俺の心中を把握したようにライザーの妹は言う。

「それにちゃんとルールに記載されていますわ。」

『フェニックスの涙はゲームに参加する

悪魔二名までしか所持できない』と。

あまりに強力なので規制されてしまいましたの。

まあ、当然ですわね。私達の場合は私と『女王』が

持っていましたの。だからうちの『女王』は

『雷の巫女』を倒せたのですわね。」

それに私たちの一族の涙は高値で取引されますのよ。

おかげでフェニックス家の財政はとつても潤ってますわ。

ゲームが始まってからいいことづくめですの。

不死身と涙、私たちの時代ですよ」

自慢げにペチャクチャしゃべりだすライザーの妹。

フエニツクスの涙。

：そ、そんな、対戦相手が戦闘中に回復したら、朱乃さんでも…。

ここで悲観的になっても始まらないか。

俺は意を決して再び歩き出す。

「ちよ、ちよっと！私は無視!! どうせ負けるのですから、

ここで私とおしやべりしていた方が健全で安全ですわよ!!」

「うっせー。一人で勝手にしやべってろ、鳥娘」

俺はライザーの妹を無視して校舎へと向かう。

しばらくの間、後方から金切声が聞えてきていた。

第22話 「決着」

校舎の裏手から侵入し、廊下を走る。

目指すは屋上！部長の元！

ドクン。

俺の中で『特性』が脈動する。

相手の本陣に来たことで条件が揃ったんだ！

「『プロモーション』！『女王』！」

俺の体に力がみなぎる。

廊下を一気に走り抜く！ だが。

ズザアアアアアア！

廊下で激しくコケてしまった。

唐突に足の感覚がなくなる。

わかっちゃいるさ。体力の限界なんだろう？

能力が増えてもそれを使えるだけの体力がもう空っぽに近い。

それでも立たなきゃいけない。

這ってでも屋上へ向かう！朱乃さんもない。

小猫ちゃんもない。木場もない。

俺の仲間は皆このフィールドから居なくなっちゃった。

部長を守る戦闘要員は俺だけだ！

俺が踏ん張らないとダメなんだ！

負けたくない！負けたくねえ！

部長！俺は部長を勝たせて見せます！

立ち上がっては転倒して、転倒しては立ち上がって…

…そんなのを繰り返しながら俺は上へ上へ駆け上がっていく。

汗、血、涙、涎、無様に全部垂れ流しながら俺は部長の元へ。

屋上の扉が見えてきた！休むヒマも無く、

俺は扉を勢いよく開け放った！

っ。

眼前で対峙する部長とライザー。

アジアは二人を少し離れた場所から

オロオロと死ながら見守っている。

よかった。二人共無事だ。

でも、部長は辛そうに肩で息をしている。

きれいな紅の髪も乱れ、制服もボロボロだ。

俺は大きく息を吸い込んで、

「部長オオオオオオツツ！兵藤一誠！

ただいま参上しましたああああッ！」

屋上全体に聞こえるような声を張り上げる。

全員の視線がこちらへ集中した。

「イツセー！」

「イツセーさん！」

部長とアーシアが歓喜の声をあげてくれる。

へへへ、俺！参上！ここからクライマックスだぜ！

「ドラゴンの小僧か？レイヴェルの奴、見逃したのか」

舌打ちするライザー。どうやら妹は反抗期みたいだな。

おかげでここまで五体満足で来られたぜ。

「ライザー様、私が『兵士』の坊やと『僧侶』の

お嬢さんをお相手しましょうか？それに『兵士』

の坊やが持つ能力が厄介さもしれませんわ。

相手が身に纏っているものを消し飛ばす能力」

一歩前へ出る『女王』を、ライザーは手で制した。

「俺が纏っている炎を消されたら厄介だと？」

どうだろうな。その能力と、リアスの『兵士』

の性格を考えても、女にしか効果が無いんじゃないか？

リアス達の相手は俺がやる。

その方がコイツらも納得するだろう」

…なんだ、その言葉？

「最後だから好きにやらせてやる」ってか？

って俺の『洋服崩壊』^{ドレス・ブレイク}の能力を完全に読んでやがる。

そうさ、あれは女性にしか効果をが無い。

そういう風に俺がイメージして作ったからだ。

野郎の裸なんて見たくも無いし、
触りたくも無い。

一応、野菜と果物の皮を取るぐらいの力はあるが、
それ以上のことは女性以外には効果は見られなかった。

「ふざけないでライザー！」

怒った部長が、魔力の弾をライザーの顔面を撃ち放つ！

避けもしないで直撃を食らうライザー。

うわ、頭部が消し飛んでいるじゃん！

やった！と、喜ぶのもつかの間、

消し飛んだ頭部から炎が立ち昇り、形を成していく。

炎しだいに顔となり、髪となり、

ライザーの頭部は元の状態に戻ってしまった。

ライザーは何事もなかったかのように

コキコキと音を鳴らすだけだ。

不死身。

これが、不死鳥の再生能力か…。

「リアス、^{リザイン}投了するんだ。これ以上は

他の場所で見られている君の御父上にも

サーゼクス様にも恰好がつかないだろう。

君はもう詰んでいる。こうなることは

既に読んでいたことだ。

チエックメイトだ、リアス」

諭すようにライザーは言う。

だが、部長は睨むだけだ。

「黙りなさい、ライザー。私は諦めない！

読んでいた？詰んだ？まだ『王』

である私は健在なのよ？」

不敵に笑う部長。

そうさ！まだ部長がそう言うなら戦える！

まだ終わりじゃない！ここから逆転するんだ！

俺は部長の元へ走り、ライザーとの間に入る。

「アーシア！」

俺がアーシアを呼ぶと、恐る恐るライザーと『女王』の様子を窺いながら、こちらへ走り寄ってくる。

ライザーも『女王』も屋上を移動する

アーシアを狙い撃ちしなかった。

なんとなくわかっていたことだが、

そんなに余裕かよ！

部長と俺の治療を始めるアーシア。

アーシアの手が俺と部長の体に触れると、

緑色の淡い光がやさしく俺達を覆う。

：体から痛みが嘘のように消えていく。

顔の腫れが引いていき、ローキックの

連発で感覚を失っていた足にも

少しずつ感覚が戻ってくる。

だが疲れだけは取れなかった。

傷が癒えても体力は戻らない…か…。

「俺を治療したらアーシアは下がっている」

「！」

驚いた顔のアーシア。

「でも、ユウスケさんからも頼まれてるんです！」

私だけ何もしないなんて、私だって魔法で戦えます！」

「アーシアが残っていれば、

俺と部長を癒すことができる。

アーシアは俺達の生命線なんだ」

沈痛な面持ちで何かを言いたげなアーシアだったが、

すぐに口を閉ざして後ろに下がった。

これでいい。別に足手まといって訳ではない。

アーシアが無事なら。

「キャッ！」

なに?! アーシアの悲鳴が耳に届く。

俺が目にしたのはアーシアの足元に出現した見知らぬ魔法陣だった。

それがアーシアの動きを封じているのかのように見えた。「悪いな。あんま長引いても君らが可哀想だ。」

その子を倒しても良かったんだが…。

とりあえず、回復だけは封じさせてもらった。

その魔法陣は俺の『女王』を倒さない限り解けない」ライザーが淡々と言う。

相手の『女王』は手を突き出して指先を光らせていた。

そうか、あの『女王』が魔力でアーシアを…。

クソ！アーシアが最後の頼みの綱だったのに！

だけど、文句も言っていられない！

ラストバトルだ！

「部長。勝負は続行ですよね？」

「ええー」

部長の声音はまだ諦めの色を出していない！

そうさ！まだいけるんだ！

「でも、こちらも俺と部長とアーシアしかいません。」

しかもアーシアは捕らわれてしまった。

あちらは不死身。眷属悪魔は二名もいる。

状況は最悪でもあります」

俺は口の端を吊り上げて高々と言ってやった。

「諦めないっす。俺はバカだから、『読み』とか

『詰んだ』とかよくわからないんです。」

でも、まだ俺は戦える。拳が握れるかぎり

最後まで戦います！」

「よく言ったわ！イッセー、一緒に

ライザーを倒すわよ！」

「はい、部長！」

部長はいつも通り、高らかに命令を下してくれた。

聞いたかよ、ブーステッド・ギア！

俺の主様が俺へ命令をくれたぞ！

簡単なことだ！目の前の相手をぶん殴ればいい。

そう、たったそれだけだ！

「行くぜ！」

『Burst』

それは、一番聞きたくない音声だった。

その音声が宝玉から発せられた時、

俺の体が急激に重くなり、

全身の機能が停止したように。

意識が飛ぶ！ダメだ！それだけはマズイ！

下へ四つん這いに崩れて、

腹からこみ上げてくる物を吐き出してしまった。

「ゲホッ」

それは血反吐だった。

それを目にして単純に理解してしまう。

俺の体は内部も限界なのだ。

籠手の宝玉から光が消える。

宿主である俺が本当に限界だから、

機能停止してしまったのだろう。

…傷は、傷はないのに…。

まだ、戦えるはずなのに…。

倒れる俺にライザーが声を掛ける。

「ブーステッド・ギアの能力はな、想像以上に宿主を

疲弊させるんだよ。力を無理やり倍加させていく

こと自体、異常すぎることなのさ。

体への負担は他の神器に比べると段違いに高い。

この戦場を駆け廻り、俺の下僕達と戦いながら、

ブーステッド・ギアを使い続けた。

リアスの『兵士』、お前はとっくに限界だったんだよ」

…まだだ。そんなこと言われても、そうだとしても、

俺はまだ戦える…。

ここで負けたら、あいつにどんな顔を見せればいいんだよ。
俺達を信頼している任せてくれたんだ、
勝たなくちゃ…。

あいつは自分のせいにするから人一倍責任感が強いあいつは、
負けちまつたら絶対に自分のせいにするから。

俺はまだ…。

横で部長が悲しそうな顔をしている。

すみません、心配をかけちゃって。

問題ありません。今、立ちます。立ちますよ。

ぐぐぐと足に力を入れて、起き上がる。

倒れたり立ったり、もう何回繰り返したかな？

「部長、行きましょう！」

俺はライザーへ向かって突っ込んでいった。

—○●○—

「ぐほっ！」

激痛が俺を襲う。

今日、何度目か知れない激しい痛み。

…何度も倒れてしまった。

カッコ悪いよな…。

部長…、勝ちましょう。

俺勝ちますよ。

部長は、既に膝をついて立たないでいた。

部長の魔力は尽きている。

何度も何度もライザーを吹っ飛ばしたけど、

その度にライザーは炎を巻き上げさせながら復活した。

何事もなかったかのように。

部長とアシアを守らないと…。

もう俺しか二人を守る奴がいらないんだ…。

俺が…。

ドゴンツ！

ライザーの拳が俺の腹に深く突き刺さり、さらに抉り込ませるように拳を、回転させてきた。

ゴボツ。

口から血が吐き出される。

…あんなに血を吐いたのにまだ出るんだな…。

視界が霞んできた…。

頭を振って、なんとかボヤける視界を戻そうとした。

大丈夫っすよ…。

勝ちますから…。

このライザーをぶっ倒して…。

部長に勝利をプレゼントします…。

そしたら、きっと部長は笑ってくれますよね…？

…俺、部長が笑ってくれるなら…。

そうだ、部長…。

鍛えてくれてありがとうございました…。

こうやって、立てるのも部長のおかげ…。

…勝ちます。

…俺は『兵士』…。

…最強の『兵士』になるんです。そう最強の

ズドン。

顔面に食い込んだ拳。

当たる瞬間、スローモーションだった。

…まだ、戦えますから…、部長…。

…約束、守りますから…。

…勝ちますから。

—○●○—

リアス side

戦況は終局へ移ろうとしていた。
理解している。

私、リアス・グレモリーは詰んだ。

つまり、チエツクメイトだ。

もう誰も戦える力が無い。

それでもあの子だけは立ち上がっていた。

イツセー。

彼だけが詰んでいる状態でもライザーへ向かっていく。

けれど、それも終わり。

さっきのライザーの一撃がイツセーの全てを断った。

後方へ倒れ込むあの子を見て、私は無意識に駆け寄っていた。

抱きとめたイツセーの体は血と汗にまみれ、酷い有様だ。

それでも私はこの子が愛しかった。わ

「…イツセー、よくやったわ。もういいわ。よくやったわ」

私は優しくつぶやくが、

イツセーは私の体から離れて身を起こそうとしていた。

「もういいのーイツセー！」

私の手を払い、のろのろと力なく立ち上がっていく。

無言のまま一歩、また一歩と前へ進みだす。

その光景は異様な迫力を生んでいた。

誰もが彼の事を、息を呑んで見守っている。
相手のライザーも無表情で彼を迎えていた。
ダメ！

これ以上やらせれば、私はイツセーを失う。
可愛い下僕。私のイツセー。

これからも沢山可愛がるつもりなのに、
こんな所で失いたくない！

ダッ！

私はイツセーとライザーの間に入り、
イツセーの前に立つ。

「イツセー！止まりなさい！私の言うことが聞けな
そこまで言い、私は言葉を詰まらせた。
当然だ。

こんなの…。

こんなの…。

イツセー…。

あなたは…。

イツセーは、既に意識を失っていた。

眼は虚ろで、口も開いたまま。

それなのに、この子は前へ前へ出ようとしている。
震える拳を握りしめたまま…。

「…あなた、こんなになつてまで…」

私の頬をいつの間にか涙が伝っていた。

私は可愛いこの子の頬へ手を伸ばす。

頬は腫れあがり、元気を感じさせてくれたこの子
ほっぺの感触が伝わってこない。

「…バカね」

前へ出ようとするイツセーを私は抱きしめた。

「お疲れ様、イツセー」

その言葉を発した時、彼の全身から力が抜け、その場に倒れ込んだ。

私はイツセーの体を抱きしめ、そのまま下へ寝かした。

彼の頭を膝に乗せる。膝枕、

して欲しいって言ってたものね…。

この子は私の為に戦った。

『部長！俺、絶対に部長を勝たせてみせます！』

イツセーはまだ魔力の使い方もろくに覚えていないというのに、全力で戦場を駆け回った。

実戦経験なんて皆無に等しいのに。

怖かった筈だ。死ぬであろう場面もあつたのに…。

『諦めないっす。俺は馬鹿だから「読み」とか「詰んだ」

とかよく分らないです。でも、

まだ俺は戦える。拳が握れるかぎり最後まで戦います！』

拳をこんなに腫れさせるまで、

この子は私の為に戦ってくれた…。

いつも。いつもこの子は笑顔だった。

いつでも一生懸命で、

いつでも私の為に動いてくれた。

私は知らない内にこの子に惹かれていたのね。

もう少して私はイツセーの笑顔を

永遠に失うところだった。

「ありがとう、朱乃、祐斗、小猫、ユウスケ、

アーシア…イツセー。

不甲斐ない私の為に、よく頑張ってくれたわ」

そつと、イツセーの頭を撫でた後、

ライザーに言う。

「私の負けよ。投了リサインします」

初のレーティングゲーム。
それは苦く、辛い敗北から始まった。
私は、この敗北を絶対に忘れない。

—○●○—

ユウスケ side

「以上が今回のレーティングゲームの結末です」

俺はグレイフィアさんから試合の内容を聞かされた。

「そうですか、俺は：間に合わなかったのか：」

「皆さまも、もうじき此方へ戻ってきます」

「皆さんは無事なんですよね？」

ゲームだから、怪我はないだろうけど、

精神に受けた傷は癒えない。

イツセーは大分やられたようだから心配だ。

カッ！

床の魔方阵が光だした。

紋様は俺達のグレモリー眷属のもの。

どうやら、皆が戻ってきたようだ。

いつそう眩い光を放ち、

光のなかから皆が現れた。

皆、暗い雰囲気ですッセーはリアス先輩に膝枕されており

眠っているようだった。

「戻っていたのね。ユウスケ」

俺が戻っていたことにリアス先輩が気がついた。

「はい奈美先輩は無事に助け出しましたが、

すみません間に合うことができなくて」

「いえ、私もライザーを甘く見ていたわ。

イツセーの覚醒は作戦にはなかった事

当初の作戦通り進めていても

私に勝ち目はなかったわ。

皆、不甲斐ない私の為によく頑張ってくれたわね」
リアス先輩が俺達に謝るが、
誰も返答出来なかった。
もし、俺が居れば。

もし、イツセーの負担が少なければ、

もしかしたら、勝っていたかもしれない。

そんな考えが頭を過るが、

頭を振って、そんな考えを振り払う。

皆頑張った結果にケチをつけるなんて、
一番やってはいけない事だ！

俺は今回もできなかったんだから。

「皆さまお揃いになりましたので、

今後の予定をお伝えします」

静かな部室にグレイフィアさんの声が周りに響く

「リアス様には二日後、婚約を発表する

パーティーに出席していただきます。

その為『女王』と共に一度実家に戻って頂きます」

準備に時間が掛かるはずなのにその日数ってことは。

やはり、負けることは皆分かり切っていた事だったのか。
頭にくるよな、

誰もリアス先輩の勝利を考えていないなんて

「わかったわ。朱乃、一緒に来てもらえらる？」

他の皆は今日は帰ってちょうだい。

皆、ありがとうね」

「はい、部長」

リアス先輩が朱乃さんに命令して、

今日は解散となった。

「イツセーはいつ目覚めるんですか？」

俺はずっと気になっていた。

イツセーは寝ているようだが、目覚める様子はない。

「イツセー様は今回の戦いによる肉体・精神両方を疲労しているので、数日は

眠ったままかもしれません」

眠っている間に全てが終わっている可能性もあるのか。

「なら、俺が背負って帰ります

リアス先輩達は準備があるのでしようから」

「そうね。お願いするわユウスケ」

俺はイツセーを背中に乗せる。

そして、部屋の入口でずっと黙っていた

奈美先輩に声を掛ける。

「では、奈美先輩一緒に帰りましょう

家まで送りますよ」

すると奈美先輩が反論する

「いえ、貴方はイツセー君を家に運びなさい。

試合には出ていなくても私をさらった怪物と

戦ったのよ。気づいていないだけで

疲労しているはずよ。

私は一人で帰るから安心しなさい」

奈美先輩は自分がこれ以上迷惑を掛けたくないようで、

俺の誘いを断った。

「ですが、また他のグロンギが出るか分かりません。

夜だけは誰かと一緒にいないと」

そう、俺が倒した他にもグロンギはいる

奴らの目的が分からない以上安心はできない。

「なら、僕と小猫ちゃん先輩は送ってくるよ

それなら君も安心でしょ。幸いにも僕たちの家と

先輩の家は同じ方向だからね」

口論になろうとした俺達を木場が間に入って止めてくれる。

「お願いしていいか、木場、小猫ちゃん！」

「…私は今回、活躍できなかったのだから。」

「これくらいさせて下さい」

二人も今回の試合結果に思うところがあるようだ。声にいつもの元気はない。

俺は二人の厚意に甘えることにした。

「なら頼んだ、俺は二人と帰るよ」

「ユウスケ！落ち込んだじゃダメよ！」

貴方はやりたい事をやったのだから結果を気にするんじゃないよ

「この後も好きにやりなさい！」

奈美先輩はそう言い残して木場達と共に部室を後にする。

「…好きにやれか…」

「ユウスケ様、先ほどの話にあった

グロンギについて教えていただけますか？

今回の婚約に関係する者の仕業とは

思えません、お嬢様の領地で行われたことですので、こちらでも調べておきます」

「わかりました詳しく説明します」

俺はグレイフィアさんに

工場跡地で起きたこと。グロンギについて全て話した。

「情報ありがとうございます。」

何か分かりましたらお嬢様へご報告いたします。

では、お嬢様行きましょう」

「ええ、分かっているわ」

「リアス先輩！」

俺は魔方陣に向かう先輩に声を掛ける。

「俺もイツセーもまだ諦めていませんから！」

「ありがとうユウスケ、イツセーをお願いね」

そう言ってリアス先輩達は魔方陣にて転移した。

残された俺達は学校を出て帰路につく。

「ユウスケさん、先ほどのあきらめないって

どういうことですか？」

帰り道の途中、アジアが先ほどの俺の発言に

ついて訪ねてきた。

「そのままさ、まだ婚約を止める方法は

あるはずさ、イツセーはこんなことで

好きになつた人が不幸になるのを

ほっとける人間じゃないしな」

「そうですね…。私の事も

ほっとけなかったから

助けてくれましたし、

でも、どうやってですか？」

当然の疑問だな。

リアス先輩の婚約を止める方法、

それは……。

「分からない！」

「え!?!」

「分からない、けど、

とりあえず、イツセーが起きてから

考えよう」

問題の先送りだがな、

「余計なお世話はヒーローの本質さ」

不意に後ろから声をかけられた

「初めまして、兵藤祐介君

いや、仮面ライダークウガ」

そこに居たのは、黒いコートにフードを

被った一人の男性だった。

「お前、何者だ」

「ユ、ユウスケさん」

俺は直ぐさまアーシアを背後に隠し

黒コートの相手を警戒する。

「おいおい、そんなに警戒するなよ傷つくだろ」

その男はおちやらかした態度でいるが、

隙が一切見当たらなかった。

確実に格上だ、今までにあつた中でも

一番かもしれない。

「お前は何者だ？何が目的だ？」

今戦闘は避けなくてはならない。

「俺の名は『メモリー』。今回は挨拶に来た。

此処の仮面ライダーであるクウガ、君にね」

仮面ライダーという名に聞き覚えはないが、

クウガはグロンギが俺の事をそう呼んでいた。

「仮面ライダーってなんだ？」

「そうか、ライダーの概念はないのか。そうだな、

仮面ライダーとは、誰かの自由の為に戦う

仮面の戦士の称号さ」

「…自由の為に」

その称号が俺にふさわしいとは思えないが、

俺をそう呼んでくれる人がいることが

嬉しく思えた。

「お前もいずれ実感するさ。自分が仮面ライダーだと

それはそうとこれを渡しておこう」

ヒュッ！

黒コートの男が俺に何かを投げ渡す。

パシィ。

「これは…」

受け取ったものを見るとそれは変な形をした

何も描かれていないスタンプの様だった。

「それはいずれ、お前の役にたつものだ

大事に持つておけ。使い方はいずれ分かる
機会があればまた会おう」

そう言つて。

黒コートの男は去つていった。

最後まで何者か分からなかった。

顔もフードの中が見えなかったしな。

「何者だつたんでしようか、あの人は」

アーシアが不安そうに聞いてきた。

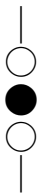
「分からない、敵ではないんだらうけど」

とりあえずスタンプを懐にしまい、俺達は

家に帰ることにした。

「仮面ライダーか…」

俺は先ほどの黒コートの男の話が気になっていた。



赤い。

赤い夢を見ていた。

俺の中で唐突に何かが訴える。

神器で今まで振るつていた力は

本来のものではないと。

誰が？ 神器が？

それは、俺の中で渦巻く何かだ。

灼熱の炎を揺らしながらそいつは

口の端を吊り上げる。

『そんなんじゃないよお前はいつまで経つても強くなれない』
頭にそんな言葉が通り過ぎる。

俺が思つていたわけではない。

心の奥底から…いや、この声は俺の左腕から…。

『お前はドラゴンを見に宿した異常なる存在。

無様な姿を見せるなよ「白い奴」に笑われるぜ?』

お前は、あの夢に出てきたドラゴンか?

例のパワーアップもお前の仕業か?

『ああ、お前が望み、俺も望み、そして

「白い奴」も望んだ。だから、新しい段階に

入ったのさ』

望む? 何を言ってるやがる…。

つか、『白い奴』って誰だよ!

『いずれ、奴はお前の前に現れる。そうさ、

俺とあいつは戦う運命にあるからな。

そうだ。ついでだ。俺の力、その本来の使い方を

教えてやる』

何を…。

お前は何を言ってるんだ!

…お前は一体…。

『ウエルシュ・ドラゴン赤い龍の帝王、ドライグ』。

兵藤一誠、お前の左腕に居るものだ』

ウエルシュ・ドラゴン…ドライグ…。

『負けるのもいい。死ななければ敗北も力の糧になる。

だが、それは次に勝つてこそ意味があるものだ。

負けて勝つて、そして勝ち続ける。

そうすれば、奴とおまえは出会う』

俺と誰がどうなるっていうんだ…。

『その内わかるさ。その日の為に強くなれ。

俺はいつでもお前に力を分け与える。

だが、それは大きな犠牲を払うと頭に

入れておくといい。なに、犠牲を払うだけの

価値をお前に与えてやるさ。

嘲笑った連中に見せてやればいい。

『ドラゴン』って存在をな』

第23話「決闘」

婚約パーティーの当日。

遂にパーティー当日となったが、イツセーは未だに目覚めてはいない。

あれから二日間眠りっぱなしだ。

もうすぐパーティーの時間であるが、

今は待つしかない。

両親も今回の事で不安になつてはいるが、

事情を説明するわけにもいかないのに、

倒れたこと、命に別状はないことは

伝えてある。

「ユウスケさん、イツセーさんは

目覚めますよね？」

アーシアも不安になつているようで、

毎日神器を使つて回復してくれてはいるが、

神器は外傷にしか効果が無い為、

気休めにしかならない。

「神様、どうかイツセーさんが目覚めます、あうっ」

アーシアは何度もイツセーが目覚めるように

祈っているがそのつど頭を痛めてる。

「大丈夫だよアーシア。すぐに目が覚めるさ、それと、

そろそろパーティーに行くの木場から連絡が来たけど、

アーシアはいかなくて良かったのか？」

「はい、皆さんは優しくて良い方たちなのは

よくわかつているんですが、やはりまだ、

悪魔は怖いのでユウスケさんと

一緒じゃないと式場にはいけそうにありません

ユウスケさんも行かないで、イツセーさんが

目覚めるのを待つんですよね？」

今回の件で悪魔の怖い部分を見たせいで、

悪魔への苦手意識はまだあるんだな。

「ああ、イツセーが目を覚ましたら説明とかしないといけないしな
流石にほっとけないよ。」

「そうだ、起きたら二日間何も食べてないし飯を用意しないとだよな」

「フフツ、そうですねでは、」

「下でおかゆでも作って来ますね」

「そう言つて、アーシアは部屋を出ていった。」

「はあ、さっさと起きろよイツセー、」

「リアス先輩を笑顔にするには」

「お前の力が必要なんだからさ」

「カツ！」

その時、部屋の床に魔方陣が出現した。

紋様はグレモリー家の紋様。

誰かが、迎えに来たのかな。

そして、光の中から現れたのは

グレイフィアさんだった。

「お久しぶりです。祐介様」

「どうして、グレイフィアさんが家に？」

「リアスお嬢様からイツセー様の容態の確認するように言われ。」

「主から、一誠様へのお届け物を渡しに来ました」

「グレイフィアさんは懐から一枚の封筒を取り出した。」

「すみません。イツセーはまだ目覚めていないんです」

「そのようですね、なら、目覚めるまで介護の」

「お手伝いさせていただきます」

「うう…」

グレイフィアさんと話していたとき、

イツセーの声が聞えた。

そちらを見てみると、

イツセーが目覚めて上半身を起こしていた。

「目が覚めたようですね」

イツセーは状況を理解できていないようで、
必死に何があったか思い出そうとしているようだ。

「グレイファイアさん！勝負は？」

部長はどうなったんですか!!」

「落ち着けイツセー！」

勝負なら……」

「勝負はライザー様の勝利です。」

リアスお嬢様が投了リザインされました」

イツセーは聞かされた内容に絶句し、

言葉も出ないようだ。

突然、イツセーは俺達の前で泣き出した。

試合の結果がよほど悔しかったのか、

そうだよな、あんなだけ修行して、

能力も覚醒して、あと少しの所で、

大見得きった挙句、惚れた女の前で

倒れたんだ、男のプライドはボロボロだ。

「現在、お嬢様とライザー様の婚約パーティー

が行われています。グレモリー家が用意した

冥界の会場です」

俺がイツセーになんて声を掛けようか

考えていると、グレイファイアさんが

今の状況を説明してくれた。

「……木場達は？」

「先に会場に行ってる。ここに居るのは、

俺とお前とアーシアだけだ」

「俺もアーシアも心配だったからな

リアス先輩に無茶言っつて、ここにいるんだ。

リアス先輩も最初からそうする

つもりだったみたいだけどな

今は下におかゆを作りに行ってるよ」

イツセーは何かを悩んでいる様子だ。

「…納得されませんか？」

グレイファイアさんがそうイツセーに尋ねる。

「ええ。勝負がついたとしても、俺は納得できません」

「リアスお嬢様は、お家の決定に従ったのですよ？」

「わかってます！わかってはいるんです！それでも俺は」

お前ならそういうと思ったぜ。

誰かが悲しむ顔は見たくない。

俺はそう思っている。お前だつてそうだろう。

惚れた女なら、なおさらな。

「俺だつて諦めていないぜ、イツセー！

今回の俺は何もできていないからな

リベンジしないと気が済まない！」

「ふふふ」

突然、グレイファイアさんが小さく笑った。

この人が笑うのは初めて見たな。

いつも冷淡で淡々と話しているから…。

「貴方達は本当に面白い方達ですね。

長年、色々な悪魔を見てきましたが、

貴方達のように思った事を顔に出して、

思った通りに駆け抜ける方は初めてです。

私の主、サーゼクス様も貴方達の活躍

を報告や先日の試合で見えていて、

『面白い』とおっしゃっていたのですよ」

まじかよ。俺達魔王様にそんな評価

を受けていたのか。

喜んでいいのか分からないな。

グレイファイアさんは懐から一枚の紙きれを取り出した。

あれが、先ほど言っていた届け物か。

その紙切れには魔方阵が描かれている。

「この魔方阵は、グレモリー家とフェニックス家の

「婚約パーティーの会場へ転移出来るものです」
っ。

「なんで、そんなものを！」

「サーゼクス様からのお言葉を貴方へお伝えします」

「一泊あけ、グレイフィアさんは真剣な面持ちで言う。」

「妹を助けたいなら、会場に殴り込んで来なさい」

「だそうです。その紙の裏側にも魔方阵があります。」

「お嬢様を奪還した際にお使い下さい。」

「必ずお役に立つと思いますので」

……。

「まじか魔王様公認で婚約パーティーに殴り込みか、

返答に困っている俺達。」

「グレイフィアさんは魔方阵が描かれた紙を

イツセーに手渡す。」

「先ほど、一誠様の中から強大な力を感じ取りました。」

「ドラゴンは、神、悪魔、堕天使、そのどれとも手を

結ばなかった唯一の存在です。」

「忌々しきあの力ならば、あるいは……」

「それだけ言うとグレイフィアさんは俺の方を見る。」

「以前教えて頂いた、グロンギと呼ばれた存在ですが、

調べたところ。怪しい人物がおりました。」

「ライザー様の『女王』、ユーベルーナ様です。」

「祐介様を見た者と似た人物と接触した疑いがあります」

「なら、奈美先輩をさらうように仕向けたのは

あの女か！」

「最初の爆破といい、良い印象は持っていなかったが、

あいつは絶対に許さない！」

「ライザー様はそんなことはお許しにならないので、

『女王』の独断でしょうが、これで、結果が

変わる事はありません。」

「ですが、婚約パーティーの後に然るべき

処分は行います」

仕方ないか、関係があつたからと言って
指示を出した証拠はないしな。

グレイファイアさんはそれだけ伝えると
魔方陣で帰ってしまった。

「どうするんだイツセー?」

「考える必要なんてないよな」

俺の質問にイツセーは立ち上がり答える。

「なら、さつさと着替えろ、服はそこに置いてある」

俺は机の上にある新品の制服を指差す。

「…戦闘であんなにボロボロだったのに」

「リアス先輩が新しく用意してくれたんだ」

「そうか…、感謝しないとな」

イツセーが制服に着替えたところで部屋の扉が開き、

アーシアが入ってくる。

「イツセーさん!目が…覚めたんですね…」

イツセーが起きていることに気が付いた

アーシアは突然泣き出してしまった。

「私、イツセーさんが二日間も眠つたままだから、

このまま目が覚めないんじゃないかって思つて…」

「もう心配かけさせなよ、イツセー」

「悪かつたよ二人共、心配かけて」

イツセーはアーシアを泣かせてしまったことが

こたえたのか素直に頭を下げた。

「アーシア、俺とイツセーはこれから

リアス先輩の元へ向かう」

「っ!」

俺の言葉にアーシアは酷く驚いた様子だった。

俺達が何のために向かうのか分かつているからだろう。

「…お祝いの為じゃ、ありませんよね…」

「ああ、今回の件を終わらせるためだ、

リアス先輩を取り戻して、皆で戻ってくる。

大丈夫。会場までのルートは合法で手に入れたから」

「私も行きますー！」

間髪入れずにアーシアが言う。

その顔は真剣そのものだ。

「ダメだ、アーシアはここに残るんだ」

「嫌ですー！私も二人と戦えますー！」

修行して魔力だって使えるようになりました。

もう！守られるだけは嫌なんです！」

アーシアは俺とイツセーの手を握る。

絶対に放さないという意志の表れだろう。

「大丈夫だよアーシア、俺とユウスケで部長を取り戻す。

ほら、ブーステッド・ギアはそういうの専門だと思おうしき。

大丈夫、軽くライザーをぶん殴って倒して」

「大丈夫なんかじゃありませんー！」

アーシアは声を張り上げた。その声には涙も混じってる。

グリーンの瞳からボロボロと涙を流しながら、

哀しそうな表情を浮かべていた。

アーシアがここまで感情的になるのは初めてかもしれない。

「…また、血だらけで、ボロボロになって、

グシャグシャになって…。いっぱい痛い思いするんですか…？

私、もうそんなお二人を見たくありません…。

ユウスケさんだって、そうなるこつもしれないなんて…」

アーシアを墮天使とはぐれ悪魔祓いの集団から

奪い返した事件で俺達傷を負った。

ライザーとの顔合わせでも負傷して、

試合ではイツセーはボロボロになった。

アーシアの治療がなかったらヤバイ場面も何度もあった。

俺達の傷を一番近くで見てきたのはこの子だ、

この子が涙を流しながら俺達を治療してくれたのを

思い出す。きっとこれからこの子を悲しませるかもしれない。

そんな未来を少しだけ想像してしまった。
それは俺が望む光景ではないな。

俺は満面の笑顔でアーシアの手を握り返す。

「俺は死なない。イツセーだって死なない。」

絶対にだ。約束する。今までいっぱい心配かけた。

これからもかけるかもしれない。だけど、

生きて、アーシアと一緒にこれからも過ごすよ」

「俺もユウスケも死に行くつもりはないぜ」

アーシアは涙を流しながら、小さくうなづいた。

「…それなら、もうひとつだけ約束してください」

「約束?」

「必ず部長さんと帰ってきてください」

笑顔で俺に言うアーシア。

「もちろんだ」

俺達がそう答えると、

アーシアは嬉しそうに微笑んでくれた。

「と、思い出した。アーシア実はな用意して

もらいたいものがあるんだ」

イツセーがアーシアに耳打ちすると

アーシアは了承して部屋を後にする。

「アーシアに何を頼んだんだ?」

「ライザーに勝つための秘密兵器だ、あとは…」

イツセーはそう言うと、目をつぶり集中している

ようだ、何をしているんだいったい?

ガチャッ!

「お待たせしました。イツセーさん」

しばらくするとアーシアが小包を持って

部屋に入ってきた。

「頼まれていたものはこの中に」

「よし!これで準備は出来た、パーティーに
乗り込もうぜユウスケ!」

「ああ、今度は俺も一緒だイツセー！」

—○●○—

シユウウウウウン…。

グレイフィアさんからもらった魔方陣から、俺達は見知らぬ場所へ転移した。

イツセーの魔力で大丈夫か不安だったが、

この魔方陣は特殊なのか無事に転移できた。

出現した辺りを見回すと、果てしなく広い廊下だった。

壁には蠟燭らしきものがずらりと奥まで掛けられている。

ふと、視界の端に巨大な肖像画が写り込む。

その絵は紅髪の男性が描かれている。

リアス先輩のお兄さんかな？

ってこんなことしている場合ではなかったな。

「向うに行こうイツセー、騒がしいってことは

会場はこつちだろう」

俺達はガヤガヤと声が聞こえる方向に歩き出す。

辿り着いた場所には、開かれた巨大な扉があった。

扉には大きな獣の彫り物がされている。

…これは何かの魔獣がモデルなのだろうか。

扉から中を窺うと、着飾った大勢の悪魔達が

広場で楽しそうに談笑していた。

こういうのは以前奈美先輩に連れられて行った

人間界の社交界と似ているな。

まあ、そこは人間も悪魔も変わりはないんだろう。

俺達は悪魔達をかき分けて見知った顔を探す。

しかし、この会場は校庭よりも広そうで、

人を探すのも一苦労だ、

天井も遙か上で見上げれば、

とんでもなく大きいシャンデリアが吊り下がっている。

そんな事を考えていると視界の端に紅が写り込んだ。

長い紅の髪をアップにした女性。

間違いなくリアス先輩だった。

「おい、イツセーあれ」

俺がイツセーに声を掛けたその時、

「部長オオオオオオオツッー」

会場全域に響き渡る大声でイツセーが部長を呼んでいた。

流石にこれは予想外だった。

周囲の悪魔達の視線が俺達に集まり、

リアス先輩もこちらを見ていた。

そして、リアス先輩が目を見開き、涙を一筋流していた。

イツセーが無事に起きて安堵したんだろう。

小さく「イツセー」と口を動かしたのがわかる。

横にいたライザーも俺達に気づく。

キザったらしいタキシードで更にホストぽく

見えてくる。

イツセーは続けて宣言した。

「ここにいる上級悪魔の皆さん！それに部長の

お兄さんの魔王様！俺達は駒王学園オカルト

研究部の兵藤一誠と兵藤祐介です！部長の

リアス・グレモリー様を取り戻しに来ました！」

正確にはオカ研には所属していないがな。

そんなことを思っていると、会場がいつそう

ガヤガヤとうるさくなった。

俺達は周りに構わず、リアス先輩の元へ

歩いて行く。

「おい、貴様らー！ここがどこだと」

衛兵らしき者が俺達を止めようとする。

が、それを邪魔する者たちがいた。

「二人共！ここは僕たちに任せて！」

それは、白いタキシードを着た木場だった。

「…遅いです」

ドレスを着た小柄な女の子が

同じく衛兵を止める。

「あらあら、やっと来たんですね」

豪華な和服を着た朱乃さんも同様だった。

全員が俺達の邪魔をしそうな輩

の足を止めてくれる。

「ありがとう」

俺達は皆へ礼を言い、ライザーの元へ

堂々と向かう。

そして、俺達が向かい合うと

イツセーがライザーへ宣言する。

「部長、リアス・グレモリー様の

処女は俺のもんだ!!」

「……ッッッ！」

形容しがたい表情でライザーは

目元を引きつらせる。

俺も同じような顔をしているだろう。

他にいう事あるだろうに、

さすがイツセーだな。

「どういうことだ、ライザー?」

「おい、リアス殿。これはいったい?」

身内、関係者達が困惑した

表情で落ち着かない様子だった。

上級悪魔だったって、人間みたい

突然のことに対応できないんだな。

「私が用意した余興ですよ」

その時、一番奥にいた紅髪の男性が

歩み寄ってくる。

廊下の肖像画に描かれていた人だ。

リアス先輩に似た面影がある。

「お兄さま」

リアス先輩がその男性をそう呼ぶ。

ということとは、この人が魔王！

木場達から聞いてはいたが、

この方が魔王サーゼクス・ルシファー様

「ドラゴンとクウガの力が見たくて、

ついグレイフィアに頼んでしまいましたね」

「サーゼクス様！そ、そのような勝手は！」

魔王様の言葉に、中年風の男性悪魔が

慌てふためいている。

「いいではないですか。この間の

『レーティングゲーム』、実に楽しかった。

しかしながら、リアスの眷属であるクウガ

が不在で戦いが見れなかった事、

ゲーム経験も無い妹が、

フェニックス家の才児であるライザー君と

戦うには少々分が悪かったかなと」

「…サーゼクス様は、

この間の戦いが解せないと？」

「いえいえ、そのようなことは。

魔王の私があればこれ言ってしまったら、

旧家の顔が立ちますまい。

上級悪魔同士の交流は大切な物ですからね」

食えないことを笑顔で喋る魔王様。

話からすると、リアス先輩側の味方だが、

立場的に介入は出来なかったのだろう。

「では、サーゼクス。

お主はどうしたいのかな？」

紅髪の中年男性が魔王様に問う。

もしかして、リアス先輩のお父さんか？

「父上。私は可愛い妹の婚約パーティーは

派手にやりたいと思うのですよ。

ドラゴン対フェニックス。

最高の催しだとは思いませんか？

伝説の生物同士で会場を盛り上げる。

これにまさる演出はないでしょう」

魔王様の一言に全員が黙り込んでしまった。

サーゼクス様が俺達へ視線を向けてくる。

「ドラゴン使い君、クウガ君。お許しが出たよ。

ライザー、リアスと私の前でその力を今一度

見せてくれるかな？」

魔王様の問いを聞き、ライザーが不敵に笑う。

「いいでしょう。サーゼクス様に頼まれたの

なら断れるわけもない。このライザー、

身を固める前の最後の炎をお見せしましょう！」

「さて、クウガ君。君の話も報告を受けている。

君にも、戦いたい相手が居るのだろうか？」

「はい！俺は、ライザーの『女王』との

決闘を望みます」

「何故、試合にも出ていなかったお前が、

ユーベルーナと戦うんだ？」

関係はないだろう？仲間の仇か？」

ライザーが俺に問う。

「仇もあるが、試合の為に俺の知人

を誘拐を指示したからな。

その借りを返すだけだ！」

「なんだと！」

俺の言葉にライザーは絶句していた。

やはり奴も知らされてはいなかったのだろうか。

「本当か！ユーベルーナ!!」

ライザーがユーベルーナを怒鳴りつける。

「…はい、真実です」

「…ふう、いいだろうその申し出は受けよう

知らなかったとはいえ、貴様の知人を

誘拐した件は謝罪しよう。だが、
貴様が居たところで俺様の勝利は
揺るがなかった。

それだけは、覚えておけ！」

これで、俺達の勝負の舞台は整った。

よし！あとは勝利するだけだ！

気合を入れる俺達に魔王様が訊いてくる。

「二人共、君達が勝った場合の代価

は何がいい？」

「サーゼクス様!!」

「なんとということを!!」

魔王様の申し出に身内の方々が

非難の声をあげる。だが。

「悪魔なので、何かをさせる

以上はこちらも相応のものを払わねば

ならないでしょう。さあ、君達。

なんでもあげるよ。爵位かい？

それとも絶世の美女かな。

あるいは財宝かな？」

まさしく悪魔の囁きだ。

それは、誰もが求める物だろう。

だが、俺達の願いはもう決まっている。

「リアス・グレモリー様を返してください」

迷いのない俺達の一言に魔王様は

満足したような笑みを見せた。

「わかった。君達が勝ったら、

リアスを連れて行けばいい」

このやり取りによって、

俺達の決闘がこの会場で執り行われることとなった。

「ありがとうございます！」

会場の奥へ去っていく魔王様を、

俺達は頭を深く下げて見送った。



会場の中央に急遽作られた空間。

その周囲を会場にいる悪魔達が好奇の視線で見守ってきている。

部員メンバーもリアス先輩と共に関係者席に座っていた。リアス先輩の隣には魔王様もいらつしやる。

逆にフェニックス家側の方には身内の方々と下僕悪魔、ライザーの妹も列席していた。

そして、俺達はライザーとユーベルーナと空間の中央で対峙していた。

これは悪魔式のリングみたいなものだろう。

「ライザー様はお下がりがりください。」

先ずは前哨戦として、私が戦います」

「いいだろう。『女王』の力を見せてこい」

俺とユーベルーナが前に出る

すると、ユーベルーナが俺にだけ声をかけてきた。

「私に勝てると思っっているのでしょうか」

私はザインみたいな雑魚では無いわよ」

「やっぱり仲間だったか、

お前もグロンギか？」

「それはどうかしらね、

この試合で確かめてみたら」

この女が放つプレッシャーはその言葉通り

ザインのものよりは上だ。だが、

勝てない事はない。

『試合開始！』

会場の男性悪魔が開始の合図を出す。

「さっさと変身しなさい。」

その姿のままじゃ倒しても面白くないわ」
ユーベルーナが挑発してくる。

俺は腰に手をかざして構えを取る。

「変身ー！」

俺は掛け声とともにベルトのスイッチを押込む。

俺の体は一瞬の発光と共にクウガの姿へと変身する。

「いくぞー！」

ダッ！

俺はユーベルーナに向かい駆け出す。

対してユーベルーナはこちらに手を向け

魔力の塊を放ってくる。

ヒュンッ！

目の前に迫る魔力を躲し距離を詰める。

「そんな速度じゃ、私は捉えられませんよ？」

『プロモーション』はしないの？

それとも、出来ないのかしら？」

「くうッ」

そう、俺はクウガの姿の時には『プロモーション』
が出来ない。何度も試したが、

人の姿の時でないといけないようだ。

『プロモーション』出来ない『兵士』

なんて怖くないわ！」

「それがどうしたー！」

ユーベルーナは引き続き魔力を放ってくる。

「当たらなければ、どうってことは無い」

魔力の塊をステップでかわす。

躲した弾は、地面に穴を穿つ威力があった。

威力はあるが、この弾速なら躲すことは容易だ。

「ちよこまかと、それなら、これならどう？」

ユーベルーナが手のひらを上に向けると、

先ほど地面に空いた穴から魔力の塊が浮き上がってくる。

「しまっ！」

既に周囲を囲まれ回避する術はなかった。

ドガガアアアツアアンツツ!!

包围した魔力が爆発し、

ユウスケが立っていた場所は

黒煙に包まれる。

「無様だわ。クウガといえど、

この程度なんて、期待以下ね」

『プロモーション』! 『女王』!

俺は黒煙から飛び出し、『女王』

の強化された速度でユーベルーナの眼前へ接近する。

飛び出したユウスケの姿は変身を解除していた。

「まさか!?!」

「変身!」

祐介は拳を振り上げながら、変身する。

その右手にはエネルギーが集まり真っ赤に燃えていた。

「おりやああああッ!」

ドゴツ!

「ガハッ!」

俺はユーベルーナに渾身の一発を顔面に叩き込んだ。

爆破を食らった後に変身を解除し、

『女王』に『プロモーション』すること、

機動力と防御力を上げて接近した。

連続で攻撃を食らっていたら無事ではなかったので、

そこは運頼みだったが、

「どうだ!この方法なら

『プロモーション』出来るんだ!」

俺の渾身の一撃を食らったユーベルーナは

ふらふらと立上り顔を抑えながら。

此方を睨んでいる。

「ふふふ、流石はクウガね。

悔っていたわ。いいでしょう

今回は貴方に勝ちを譲ってあげるは」

そう言い、ユーベルーナが手をどかすと

顔にザインの時と同じように紋様が現れる。

そして、ユーベルーナの姿が蜂の怪物へと変わる。

「はあ、こんな形で正体がばれるなんて」

ユーベルーナの顔の紋様が薄れていき

次第に消えてしまった。

「残念だけど私はプレイヤーでは無いの

私を倒すには実力不足のようね」

「ユーベルーナ！その姿はなんだ？！」

ライザーはユーベルーナがグロンギであることは

知らなかったようで驚愕していた。

「私は『ラ・ザビネ・バ』グロンギ族の審判

であり、処刑人」

「なんだと…、ユーベルーナ！貴様は

俺の『女王』だろう！勝ちを譲るなど

勝手な真似をするな！」

ライザーはザビネの発言に怒りを露にする。

「所詮、フェニックスといえど半端者。

目的の為に貴方に取り入ったが、

貴方のような者の下につくのは

嫌だったので、ここが潮時だわ」

こいつは何の目的があつて、

悪魔社会に潜り込んだんだ。

ブウウウンツツ

ザビネの肩から複数の蜂が現れた。

「貴方がフェニックスの涙の製造の一部を

任せてくれたおかげで、『薬蜂』の養蜂

に成功したの感謝するわ」

現れた蜂の一匹がザビネの腕に針を

刺すと先ほどの顔の傷が消えていく。
ッ！

まさか、あの蜂はフェニックスの涙
と同じ効果があるのか!!

「バカな?! フェニックスの涙を複製するだ」と

ザビネは不敵に笑うだけで、返答はしない。

「ふざけた真似をー!」

ライザーは炎をザビネに向かい放つ。

それに対してザビネは先ほどとは、

別の蜂を放ち炎を相殺した。

「俺の炎を消しただとー!」

俺には炎に当たった蜂が爆発し、

炎を打ち消したように見えた。

「ふふふ、この子たちは

『魔力蜂』、私の魔法を

その腹に蓄える特殊な蜂よ」

こいつは特殊な蜂を使って

戦うのか!!

驚愕しているライザーには

目もくれずにザビネはこちらに

振り向き俺に言う

「貴方は私の期待に応えてくれたから

次は『ザザグド・ゲゲル』で会いましょう」

そう言うのとザビネは水晶の玉を取り出す。

「クソッ! 逃げる気か!」

「待てー! ユーベルーナー!」

俺達は逃走を阻止しようと走り出すが、

時既に遅く、水晶の発光と共に

ザビネの姿は消えてしまった。

「とりあえず、試合は中止か」

俺がそう呟くと、ライザーが反論する。

「中止だとー！ふざけるな！魔王様の前でこんな無様な姿をさらしたんだぞ！このまま、引き下がれるか！」

前に出ろリアスの『兵士』

決着を付けよう！」

両家の身内たちは捜索隊をだし、

ザビネの討伐を命じ。話の結果、

試合は継続されることが決まった。

勝った気はしないが、ユーベルーナと

俺の試合は俺の勝利に決まった。

俺はイツセーに後を任せて客席に向かう。

「後は任せるぞイツセー！」

「ああ、任せろ！」

パァンツッ！

俺達は片手でハイタッチし、交代する。

第24話 「不死鳥」

そして、中央にてライザーとイツセーが対峙する。

イツセーは既に籠手を出現させていた。

ライザーはイツセー相手に余裕の表情だ。

「開始してください」

審判の男性が開始を告げる。

ライザーは炎の翼を生やすと、イツセーの

籠手を指差した。

「お前の能力は既に全て割れている。

自分の能力を倍にしていく神セイクリッド・ギア器

『赤龍帝の籠手』で、倍加した力を

仲間や武器に譲渡する新しい能力も発現したそうだな」

イツセーの能力を警戒しているようだが、

新しい能力『赤龍帝からの贈り物』ブーステッド・ギア・ギフト

は仲間や武器があつた方が強い。

素手で戦うイツセーのスタイルだと、

一人で戦う時は、その能力は活かせないだろう。

そんな事を考えていると、

イツセーがリアス先輩のほうへ満面の笑みを送った。

「部長、十秒でケリをつけます」

「…イツセー?」

イツセーの言葉にリアス先輩は怪訝な表情を浮かべる。

それはそうだ、イツセーは奴に一度負けている。

勝つというならまだしも、十秒で終わらせる。

その根拠がどこにあるのか他の皆も同様の思いだろう。

「十秒とは大きく出たな。ならば、俺はお前を五秒

で片付けよう。以前のようにはいかないぞ、

リアスの『兵士』!」

「『プロモーション』! 『女王』!」

イツセーは最強の駒に昇格した。

十秒以内に終わらせる！

『そうだ、だが、十秒あれば、おまえは』

ああ、十秒あれば俺は。

「俺達は奴を殴り飛ばせるッツ!!」

赤いオーラを放ちながら、

俺は前へ飛び出す。

俺の体は赤い鎧を身に纏っていた。

ユウスケとは違い。

ドラゴンの姿を模した全身鎧。^{プレートアーマー}

全体的に鋭角なフォルム。

いつもの籠手は左だけでなく、右腕にも装着されている。

籠手にあつた宝玉が両手の甲、両腕、両肩、

両膝、胴体中央にも出現していた。

背中にはロケットブースターの

様な推進装置もついている。

「鎧?! 赤龍帝の力を鎧に具現化させたのか?！」

驚愕しているライザー。奴の見解は概ね正しい。

というか、見た目は小柄なドラゴンみたいな

もんだ。顔すら鎧に包まれているからな。

「これが龍帝の力! ^{パランス・レイカー} 禁手、^{ブーステッド・ギア} 『赤龍帝の鎧』

俺を止めたきや魔王様に頼み込め! 何しろ、

『禁じられた忌々しい外法』らしいからな!」

スケイルメールの能力は、

十秒の間、爆発的な力を解放する事。

一度解放されたら、十秒間無敵になる。

だが、リスクも大きい。能力解放の十秒後、

丸三日は神器が使えなくなる。

赤いドラゴン、ドライグにそう説明された。

つまり、一か八かの十秒だけの無敵モードだ。

『X』

カウントが開始された。

こいつが開始された以上時間はない！

一気に決めさせてもらうぜ、

ライザー・フェニックス！

両の手のひらを少し開けるように合わせ、

手のひらの間に魔力の塊を生み出す。

それを一気にライザーの方へ放出する。

手のひらから生み出された魔力は、

巨大な帯となってライザーに襲い掛かった！

なんつー量の魔力だ！

この広い会場の半分を占めるほどの大きさだ。

放った俺自身が驚いちまったぞ！

「デカイー！」

ライザーの予想に反する大きさの魔力砲

だったためか、受け止めることを

やめて避ける体勢を作り出していた。

ここだ！

『IX』

カウントは容赦なく刻まれる。

わーってる。急かすなよ！

俺はライザーが避けるであろう先に向かって

飛び出した。

鎧の背部にある噴出口から魔力が噴き出す。

刹那、爆発的な速度が生み出された！

体にかかるGの影響でまともな動きができない

ままライザーとの距離が近づいていく。

避ける先に俺が猛スピードで迫ってきたせいか、

ライザーは驚き、対応もできない状態で身構えていた。ここで攻撃！と、いきいたいところだったが、俺は何も出来なかった。

ゴオオオオオオンツ！

会場の壁に激突してしまった。

まだこの速度に対応できてないんだ。

なんとという不甲斐なき！

せつかくのチャンスだったのに！

激突の瞬間、両腕でガードしたおかげか、

目立ったダメージもない。

壁には大きな穴が出来てしまったが。

つか、すげえ！あのスピードで激突したのに

鎧も俺の体もダメージを受けていない。

鎧のこの硬さなら、さっきの速度で相手に

タツクルするだけでも十分攻撃になるな。

『VIII』^{エイト}

残り八秒！

俺は壊れた壁の欠片を払いながら立上り、

再びライザーと対峙する。

当のライザーは、今の俺の攻撃を見たため、

さっきよりも警戒を強くしていた。

奴の体を虹色のオーラが覆う。

凄まじい魔力をピリピリと感じる。

「赤龍帝のクソガキ！悪いが手加減しないぜ！

認めたくないが、今のお前はバケモノだ！

主であるリアスの前で散れエエエツッ！」

咆哮を上げるライザーの背中に巨大な炎の翼

が出現した。奴の全身を炎が渦巻き、

会場を激しい熱気が包み込む。

会場に居た他の悪魔達も自身を守る
魔力の防壁を生み出すぐらいだ。

まともにくらったら、骨も残らないだろう。

「火の鳥と鳳凰！そして不死鳥フェニックス

と称えられた我が一族の業火！」

その身に受けて燃え尽きろツツ！」

火炎に包まれたライザーが高速で迫ってくる。

眼前に広がるあり得ない質量の炎。

その姿は巨大な火の鳥そのものだった。

翼から生み出される業火の塊。

触れればやばそうだ。

『不死鳥フェニックスの炎はドラゴン

の鱗にも傷を残す。食らい続けるのは

得策じゃない』

そうか、でも、俺はそういうわけにも

いかないんだ。あの人が見ている。

部長が見ている前で無様な姿を見せられない！

受け止めてやる！

「てめえのチンケな炎で俺が消えるわけねえだろ

オオオオオオオツ！」

吼えながら俺も突っ込む！

背中 of 噴出口から魔力の火をふかしながら

ドゴンツ！お互いの拳がお互いの顔面に

ぶつかり合った瞬間、力の衝突が波動となって

会場全体を振動させる。

会場のど真ん中で俺とライザーは力比べを始める。

ぐっ！

一撃一撃を食らう度に全身へ重い衝撃が響き渡る！

途端に高熱が俺を襲う！

熱い！

クソ！

メチャクチャ熱いじゃねえか！

ライザーの拳から伝わる業火の熱。

この鎧がなかったら、

本当に骨すら残らなかつたんじゃないか？

怖い！

この場から離れたい！

死にたくない！

拳を交わせば交わすほど、

ライザーとの本来の実力差を感じてしまう。

この鎧を脱いだ瞬間、

俺とライザーの力関係はアリと象になる。

所詮、俺は下級悪魔で奴は上級悪魔なんだ。

俺が恐怖しているのを感じ取ったのか、

ライザーがにやける。

「怖いか！俺が怖いか！当たり前だ！

お前はブーステッド・ギアが無ければ

唯のクズだ！その鎧が無ければ、

俺の拳が届く以前に業火の熱で

お前は消失している！そう！

お前からその籠手を取つたら、

お前は何の価値もない！」

言いたいこと言いやがって！

だが、正論だ！

俺は籠手が無ければ何も出来ない！

『VII』^{セブン}

本気の悪魔との戦い。

全身を恐怖が支配する。

こんな怖い思い、したくないさ！

でも！

でもよ！

俺は籠手の一部に隠していたものを
手のひらにセットした。

ガゴッ！

俺の拳がクロスカウンターの要領で

ライザーの顔面に鋭く入り込んだ。

大きく仰け反るライザー。

「そんなもの！効くー」

ゴバツ！

ライザーの口から大量の血が吐き出される。

俺の一撃はライザーにとって致命的だった。

当然だ。

俺の拳にはこいつが握られているからな。

俺が手のひらを開き、持っているものを

ライザーに見せつける。

「十字架！十字架だと?!」

驚愕するライザー。

会場にいる悪魔達からも悲鳴が上がる。

そうさ、悪魔の苦手なアイテム。

十字架。

俺は十字架を手にしてライザーを殴っていた。

アーシアから借りたものだ。

此処へ来る途中に受け取った

こいつを隠しておいた。

『^{シックス}
VI』

「十字架の効果を神器で増大させて、

あんたを殴った。高めた聖なる攻撃は

上級悪魔にだって効果抜群だろ。

たとえ不死身のフェニックスでも

「このダメージはそうそう癒せないんじゃないか？」
「バカな！十字架は悪魔の身を激しく痛めつける！」

いかにドラゴンの鎧を身に着けようと
手にすること自体が愚の骨頂……」

そのとき、

ライザーは初めて俺の左腕の変化に気が付く。

全身を包むドラゴンの鎧の一部になっている
から分かりにくかっただろうが、
近くでよく見れば気づくだろう。

無機質の質感に見える全身鎧と、
生きているかのような脈動を続ける左腕との差を。

「…籠手に宿るドラゴンに……」

自分の腕を支払ったのか……？

それがそのバカげた力の理由か……ツ！」

「ああ、そうだ。俺はこの力を

一時的にでも得るために、

左腕を代価にくれてやった。

俺の左腕は本物のドラゴンの腕だ。

だから、十字架は効かない！」

左腕をドラゴンにすることが、

ドライグの絶大な力を使う代償。

籠手はドラゴンの腕の一部と化している。

この取引をする際にユウスケに

止められたけどな。

「そんなことすれば二度と元の

腕には戻らない！お前はそれが

分かっているのか?!」

「それがどうした」

くだらない話をしているカウントは刻まれる。

「俺みたいな奴の腕一本で部長が戻って

こられるんだぜ？こんなにあい取引は無いだろう？」

俺の言葉を聞いてライザーの目を引きつけた。

「イカレているな」…。だからこそ、迷いのない

一撃を放てるのか…。怖いな。初めて

俺はお前に心底畏怖した。だから！」

ライザーの両翼がいつそう大きく燃え上がる。

「俺は全力でお前を倒すッ！」

火の鳥。

周囲を炎に包みながら、俺へと突っ込んでくる！

負けるか！負けてたまるか！

『フォー
IV』

「うおおおおおおおおおおおッッ！」

手に握る十字架に力を込める！

一撃を！

最大の一撃をこの十字架に込めてやるッ！

ライザーの拳が！

俺の拳が！

お互いの拳が重なり合った！

カッ！

激しい力と力のぶつかり合い。

その衝撃に閃光が走り、俺の視界を覆う！

それと同時に俺を包んでいたものが

消失した感覚を感じた。

代わりに熱気が俺の全身を包み込む。

馬鹿みたいに熱い！

さつきまではここまで熱を

感じなかったはずなのに！

視界が元に戻った時、

俺は自分の変化に気が付いた。

— 鎧が解除されている!!

俺の全身を覆っていた赤いドラゴンの鎧がなくなっていた!

今はドラゴンの腕と化した

左腕だけが残されていた。

手の中の十字架もさっきの衝撃で弾かれたのか、少し離れた場所の

床に転がっている。

おい、龍帝!

どういうことだ!?

まだ十秒も経ってないだろう!

なんで鎧が解除された!?

まさか、俺の支払った対価じゃ、

これが限界だったのか!?

『いや、お前がこの力を得る為、

俺に支払った物は十分だ。

如何せんお前の基礎能力では

鎧の力を制御するのに足りなすぎる。

修行不足だ』

あんなに仲間と修行したのに

まだ足りないのか!

『あの程度、悪魔としての永い生の中

では、微々たるものにすぎんさ。

悪魔の修行っていうのは、

何十年も繰り返し返してこそ意味がある』

あー、もう! そういう説教はいい!

もう一度、鎧を具現化してくれ!

今度は何を支払えばいい!?

目か? 足か? 寿命か?

なんでもくれてやる！

『短期間で二度目の鎧は、

今のお前では無理だ』

…俺が弱いからか…。

クソ、なんで俺は肝心な場面で

カツコつけられないんだ…。

何も無い俺が唯一できることだったのに！

『鎧の力が解除される瞬間、

ドラゴンの力を少しだけ

宝玉に移せた。込めた力で

ライザー・フェニックスを

一時的に圧倒できるだろうが、

それで終わりだ。

再生能力の高いフェニックス

一族を倒すには—』

何度も倒すか、絶対の力で屠るか、だけ。

『そうだ。残念ながら、今の籠手の力では何度も

倒せない。倍増した状態も「絶対の力」とは

程遠い。倒す条件をどちらも満たしては

いない事になる』

グイッ！

俺は襟元を強く掴まれた。

—ライザーだ。首を絞められたまま、

宙に浮かされる。

ライザーが苦笑しながら、

さらに俺の首を絞める。

く、苦しい…。

『『兵士』の力でよくやったと褒めてあげよう。

本当によくやったよ。正直、ここまでやれると

は思わなかった。ドラゴン使いの力、この身で

十分に体験できた。お前さんがあと一年

いや、半年、ドラゴンの力に慣れていたら俺は負けていただろうな」

：冗談ではないようだ。

奴の表情は真剣そのもの。

あと半年か：だったら、あと半年結婚待てよ！

って、言いたいところだ。

ライザーは服から体までボロボロだった。

やはり再生能力の高いライザーでも、

強化された聖なる攻撃を喰らえば

ダメージの回復が遅くなるようだ。

炎の両翼も先程よりかなり小さくなっていた。

ダメージは相当なものか：。

「なに、引け目に感じる事はない。

俺がリアスの婿になったら、

俺がお前さんを鍛えまくってやる。

強い悪魔になるぜ、お前」

そんなの、いらねえ世話だ！

「さて、ユーベルーナを追わんといかんし

そろそろ眠って貰おうかな。

少し意識がなくなるだけだ。

起きた頃には無事式も終わってる。

お前もこれ以上心身共に苦しむのは嫌だろう。

俺もサドじゃないんでね、

一気に決めさせてもらう」

ライザーの勝利を確信する表情。

俺が負ける？

いや、そんなの許されない。

ー後は任せるぞイツセー！

ああ、任せろ、ユウスケ。

ー必ず、部長さんと帰ってきてください。

ああ、わかっているよ、アーシア。

ーとりあえず、最強の『兵士』を目指しなさい。
ええ、わかっていますよ、部長っ！

一緒に帰りましょう。

朱乃さんも木場も小猫ちゃんもアーシアも

ユウスケも俺も、貴方の帰りを

待っているんです！

だから。

俺は懐から小さな物体を取り出した。

「火を消すなら、水だよな！」

俺が手にしていたのは聖水の入った小瓶だった。

こちらへ転移する前に十字架と共にアーシアに

用意してもらった物の一つだ。

上級悪魔には余り効果が無いとされているアイテム。

この場にいる悪魔がこれを見ても鼻で笑うぐらいだろう。

だが、ライザーの表情が一気に青ざめる。

そうさ、俺は何を左腕に宿している？

俺の左腕はどんな能力を持っている？

答えてみやがれ、ライザー・フェニックス！

「ちくしょう！」

俺を締め上げるライザーの手が強まる。

くっ、喉が潰される…その前に！

俺は瓶の蓋を開き、中の聖水を

ライザーの全身にふりかけてやった。

聖水の効果を倍増する！

上級悪魔が無視できないほどになっ！

「ブーステッド・ギア！ギフト！」

『Transfer!!?』

倍増された力が籠手から流れ出し、

ライザーにふりかかった聖水へ譲渡される。

「しまっ」

ライザーが俺の攻め手に気がついた

時はもう遅い。

譲渡された籠手の力が聖水の効果を倍増させる。
ジユワアアアッ！

水が熱で蒸発する時に出る音を最大にしたような
ものが会場に響き渡る。

ライザーの炎の翼がぐにやぐにやとうねり始め、
翼の形を成せなくなってきた。

俺は緩んだ手から逃れ、

喉元を押さえながら距離を取る。

つたく、思いつきり首を絞めやがって！

「うがあああああああああッッ！」

聖水の効果にのたうち回るライザー。

聖水を浴びた体からは煙が立ち上る。

「…死ぬのか？」

『いや、いくら効果を強めた聖水でも

フェニックス一族を容易に殺す事は出来ない』

ああ、そうかい、ドライグ。

『だが、聖水の力が体力と精神を激しく消耗させる。

いくら灰の中からでも再生するフェニックスでも

一度に大量の体力と精神を失えば。

精神だけは瞬時に回復出来ないからな』

シユウウウウ…。

ライザーを包む煙が徐々に弱まっていった。

後に残ったのは服も体もボロボロになった

ライザーのみ。

俺は床に転がっていた十字架をドラゴンと化して

いる左手で拾った。

ぎゅっと握りしめて力を込める。

ついでに懐にしまっていた二つ目の

聖水も拳へふりかけた。

「アーシアが言っていた。十字架と聖水は

悪魔が苦手だつて。それを同時に強化して、同時に使ったら、悪魔には相当なダメージだよな」
「くっ…」

聖水の効果に苦しむライザーが俺の次に何をするか理解し、顔を強張らせていた。

俺はライザーとその周囲を見渡す。

ライザー以外に何も無い。

ああ、問題ねえよ。

もう横やりでやられる事は無い。

「木場が言っていた。

視野を広げて相手と周囲も見ろと」

体中に流れている魔力のオーラを一点に集中。

さらにそれをドラゴンの力に変化させて、

十字架と聖水に譲渡する。

『Transfere!!』

これで聖なる力が圧倒的なパワーを得た。

「朱乃さんが言っていた。

魔力は全体を覆うオーラから流れるように集める。

意識を集中させて、魔力の波動を感じればいいと。

ああ、ダメな俺でも感じられましたよ、朱乃さん」

さらに体制を整えて、

相手へ打撃を繰り出すために拳を構える。

「小猫ちゃんが言っていた。

打撃は体の中心線を狙って、

的確に決り込むように打つんだと！」

全部、修行で習ったことだ。

ああ、皆、俺は全部覚えているよ。

全部役に立ってるよ。

ユウスケも女王に勝ったんだ！

部員全員の力で部長を取り返すんだ！

俺が奴に狙いを定めた時、ライザーが慌てふためく。

「ま、待て！わ、分かっているのか！この婚約は悪魔の未来のために必要で大事なものなんだぞ!! お前のような何も知らない小僧悪魔がどうこうするようなことじゃないんだ！」

「難しいことは分からねえよ。でもな、

お前に負けて気絶した時、うっすらとだけ覚えていたことがある。

部長が泣いてたんだよっ！

そして、さつきも泣いていた！

俺がてめえを殴る理由はそれだけで

十分だアアアッ！」

ドゴンツツ!!

十字架と聖水付きの俺の拳がライザーの腹に深く正確に抉り込む！

「ガハッ！」

血反吐を吐きながら、

数歩後ずさるライザー。

「こ、こんなことで、俺が……」

そう一言漏らすと、ライザーは床へ前のめりに突っ伏す。奴はその場で二度と立ち上がることはなかった。

—○○●○○—

ユウスケ side

イツセーがライザーに勝利した！

切り札の鎧が解除された時は

どうなるかと思ったが、

「よくやったなイツセー！」

倒れ込み、立ち上がる気配のない

ライザーを確認し、俺達の方へ歩いてくる。

すると、間に飛び込んでくる人影があった。

それはライザーの妹だった。

無言でイツセーを睨み、

何かを訴えようとしている。

イツセーはドラゴンの左腕を

ライザーの妹に突き出し言った。

「文句があるなら、俺の所へ来い。」

いつでも相手になってやる！」

イツセーの迫力に押されたのか、

ライザーの妹は後ずさりしながら道を開ける。

イツセーはライザーの妹を通り過ぎて、

部長の前に立つ。

そして、笑いながら部長へ語りかける。

「部長、帰りましょう」

「…イツセー」

イツセーは次に部長の隣に座る

リアス先輩のお父さんの前に歩み寄り、

深く頭を下げた。そして、ハツキリ宣言した。

「部長を、俺の主であるリアス・グレモリー様

を返してもらいます。勝手な振る舞いを

してしまい、大変申し訳ございませんでした。

でも、部長は連れて帰ります」

イツセーの言葉にリアス先輩のお父さんは

何も言わず、ただ静かに目をつむった。

その隣に座っていた魔王様は勝負が付いて直ぐに

何処かへ行ってしまった。

一言お礼を言いたかったが、

恐らくザビネの追跡に行ったのだろう。

今度お会いする機会があったら、必ず礼を言おう。

イツセーはリアス先輩の手を取る。

そして、懐からグレイファイアさんからもらった

魔方阵の紙を取り出した。

確か、リアス先輩を奪還したら使えって。

その紙を裏側に向けた時、眩い光が発せられる。

キュイイイイッ!

魔方阵から現れたのは、ライオンの胴体に

鷹の頭と翼を持つ生物。

「グリフォン：」

会場から誰かの小さな声が聞える。

なるほど、グレイフィアさんは

これに乗って逃げろと言いたかったのかな?

イツセーがグリフォンの背に乗り、

リアス先輩の手を取って自身の前に乗せる。

キュイイイイッ!

グリフォンはひと鳴きすると、

先ほどイツセーが激突して開けた壁の穴へと

向かって羽ばたき始める。

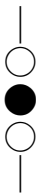
飛び立つ前、イツセーは俺達に向かって叫ぶ。

「部室で待っているからな!」

イツセーの言葉に俺達は笑顔で手を振った。

そして、グリフォンはイツセーとリアス先輩を

乗せて冥界の空へ飛び出していった。



パーティー会場のとある一室。

「フェニックス卿。今回の婚約、

このような形になってしまい、

大変申し訳ない。無礼承知で悪いのだが、

今回の件は」

「みなまで言わないでください、グレモリー卿。

純血の悪魔同士、いい縁談だったが、

どうやらお互い欲が強すぎたようだ。

私の所も貴方の所もすでに純血種の孫がいる。
それでもなお欲したのは悪魔故の強欲か。
それとも先の戦争で地獄を見たからか」

「…いえ、私もあの子に自分の欲を重ねすぎたのです」

「一誠君と言ったかな。祐介君には言えたが、

彼にも礼を言いたかった。息子に足りなかった

のは敗北だ。あれは一族の才能をあまりにも

多く過信しすぎた。それに眷属に裏切者まで

これは、息子にとつていい勉強になっただろう。

フェニックスは絶対ではない。

これを学べただけでも今回の婚約は十分でしたよ。

グレモリー卿」

「フェニックス卿…」

「貴方の娘さんはいい下僕を持った。

これからの冥界は退屈しないでしょうな」

「…しかし、よりにもよって、私の娘が拾うとは

思いませんでした」

ウエルシュ・ドラゴン
「赤い龍に『究極の闇』」

忌々しいあれがこちら側に来るとは実際

目にするまでは信じがたいものでした」

「私達が見た物と色も姿も違ったがあれは

間違いなくクウガで間違いない。

彼がああ殺戮マシーンとならん事を

願うのみだ」

「次はやはり」

「ええ、でしょうな。いや、

すでにいるのやもしれません」

パニシング・ドラゴン
「白い龍。」

赤と白が出会うのは時間の問題か」

―〇〇―

冥界上空。

冥界の空は人間界の空と違い、紫色だった。
なんとも不気味な感じだけど、
不思議と安心感を覚える。

これは、俺が悪魔だからか？
スツ。

空を眺めていた俺の頬に部長の手が触れた。

「バカね」

苦笑いしながら、そう言ってくれた。

部長はどこか安堵したような表情だった。

やっと辛いものから解放されたって感じに見える。

「っ」

部長は俺の左腕に視線を移した時言葉を失う。

沈痛な面持ちで俺の左腕をさすっていた。

当然かもな。俺の左腕は赤い鱗に包まれ、

鋭い爪むき出しの異形なものになっているからだ。

「腕を。腕をドラゴンに支払って、

あの力を借りたのね？」

「はい。お得だったんですよ。

俺みたいに才能が無い奴が腕一本で

最強の力が手に入ったんです！

お陰でライザーも倒せまし、

部長も取り返せました！」

無理やり笑みを浮かべて見せても、

部長は目元を悲しそうに細めるだけだ。

「もう、この腕は元に戻らないのよ？」

「あー、ちよつと困りましたね。

コスプレアイテム！で学校じゃ通じませんよね。

いやー、どうしたものか」

「アーシア、これを知ったらきつと泣くわね」

…うう、確かに泣きそうだ。

俺、あの子を泣かしてばかりだな…。

そしたら、ユウスケに怒られるな。

「…今回は破談にできたかもしれない。でも、また婚約の話が来るかもしれないのよ？」

「こんな事続けたら」

悲哀に暮れている部長に俺は笑って答えた。

「次は右腕を支払います。その次が来たら、

今度は目をくれてやります。何度でも何度でも

部長を助けに行きますよ。俺にはそれぐらい

しかできません。でも必ず貴方を助けに行きます。

俺はリアス・グレモリーの『兵士』ですから」

「っ。」

そんな事を言った直後、俺の唇が塞がれた。

俺の唇を塞いでいるのは。

部長が俺の首に手を回し、唇を俺へ重ねていた。

それは一瞬のものではなかった。

一分ほど唇を重ねた後、部長の唇が離れていく。

そして、部長はふっと笑う。

……………。

キ、キスウウウウウ!!?

お、おれ！部長とキスしちゃったよ！

キス！キスウウウウウ!!

脳みそが弾け飛んだ！うあ、うわ、

うお、うおおおおおおおツツ！

「私のファーストキス。日本では、

女の子が大切にされるものよね？」

「え、ええ、そうですね！って、

ファーストキスウウウウウ!!?」

心底驚いた！だって、ファ、ファ、

ファーストキスって言ったなら

女子にとって最大級に大切なものでしょうに！

「い、い、いいんですか！お、俺なんかで？」

「貴方は私と唇を重ねるだけの価値のある
事をしたのだから。ご褒美よ」

ニツコリ微笑みながら言ってくれる。

ああああ、もうどうにかなっちゃんさうですよ！

このご褒美のためだけでも頑張ったかいがあつたぜ！

「ファースト繋がりだけど、私の処女、そんなに欲しいの？」

「欲しいですーあっ！」

即答してしまった。我ながら欲棒に正直すぎるな…。

でも本音だ。あんな大勢の前で欲したぐらいだからな！

「…まったく、エッチなことにも正直な子ね」

困ったような表情だけど、部長は笑っていた。

あー、エロに正直ですみません。

心の中で反省する俺の頬を部長がなでなでしてくる。

部長はうれしそうに笑うだけだ。

良かった。部長に笑顔が戻って本当に良かった。

やっぱり部長には笑顔が似合うぜ。

ー〇〇〇ー

「と、そのような感じで私、リアス・グレモリーも

この兵藤家に住まわせてもらう事となりました。

不束者ですが、どうぞよろしくお願いしますわ。

お父さま、お母さま」

兵藤家のリビング。イツセーの隣でリアス先輩が

両親に挨拶をしていた。

俺の隣ではアールシアが先輩の突然の同居に驚いていた。

あの一件のあと、リアス先輩が突然俺達の家に住むと言い出した。

よくわからなかったが、イツセーから先輩にキスしてもらったと

聞いたからそういう事なのだろうか？

説明の意味もよくわからないが、リアス先輩は

半端強引に話を進めてしまった。

「下僕との交流を深めたいのよ」って言ってたけど、

本当に家でいいのか？その内皆が我が家に住み着きそうだな。で、グレモリー家とフェニックス家の話は破談となった。

リアス先輩も喜んでいたし、これにて一件落着と。

ライザーは生涯初めて味わった敗北と信頼していた『女王』の裏切りに

にシヨックで寝込んでしまったらしい。

「まあ、どうしましょう。アーシアちゃんにリアスさん、

娘が二人もできちゃうのね」

母さんはアーシアと同居以降、アーシアを娘の様に

可愛がり始めていたので、女の子が増えることは賛成っぽい。

父さんに至っては大号泣している。

「うんうん。男の夢だよな。女の子がいっぱいって！

俺の若い頃の夢をお前ならなら叶えるかもしれないな！」

ああ、なるほど。イツセーは父さんの血筋か間違いないよ。

夢まで同じだったとは。

そして、鎧の代償にしたイツセーの左腕は。

未だにドラゴンの腕だ。でも、

リアス先輩や朱乃さんが懸命にドラゴンのことを

調べてくれたおかげで、日常では人間の腕に戻っていた。

なんでもドラゴンの魔力を散らせることで

ドラゴン化を防ぐらしい。ドラゴンの力を

散らす作業は数日毎にやらねばならないらしい。

それを怠ると元のドラゴンの腕に戻ってしまうらしい。

まあ、それはリアス先輩達に任せよう。

イツセーも人間の腕になって喜んでいたしな。

「さあ、二人とも。ご両親の許可は得たわ。

これで今日から私もこの家の住人ね。

さっそく、部屋へ荷物を運んでくれるかしら？」

リアス先輩が紅の髪を揺らしながら、

高らかに俺達へ命令する。

「は、はい！」

「ユウスケさん、私もお手伝いします」

「…あうう、ユウスケさんとの二人っきりの時間も
少なくなるかもしれないです…。でも、

部長さんに習ってユウスケさんにアタックすれば…」

「え？なにか言った？」

「何でもありません」

俺が聞き返すとアーシアは俯いてしまった。

「ほら、イツセー。その装飾品はこちらよ

ユウスケの荷物はそっちよ」

リアス先輩の部屋に荷物を運ぶと早くも指示が飛んできてる。

「はい」「わかりました」

「イツセー、これが終わったからお風呂に入りたいわ。

…そうね背中、流してあげるわ」

「マジっすか!?!？」

「なら、ユウスケさんの背中が私に流しますね」

「アーシア、ダメだよ!?!?先輩の真似しなくていいからね」

「なら、皆で入りましょっか!」

「家の風呂はそんな大きくありませんよ」

「こんなことが毎日起こるのかよ！

リアス先輩が住むことになり、

俺の日常はどんどん賑やかになりそうだ。

第二章 登場キャラクター

グレモリー眷属

○兵藤祐介：本作主人公

駒王学園2年生

役割：『^{ポーン}兵士』

種族：転生悪魔

人間だったが、殺されたことで悪魔に転生した。

今では悪魔の仕事と学校生活を両立している。

大昔に居た民族のベルトを手に入れて、

平凡な日常が一変してしまった。

又、グロンギと呼ばれる、

戦闘民族にベルトを狙われている。

能力：『クウガへの変身』

①グローイングフォーム

ユウスケがベルトの力を受け継ぎ始めて変身した姿。

完成形態である赤のクウガになり切れない

不完全な形態で、戦う覚悟のなかった為

この姿になってしまった。

未完成故に弱く、戦いの為の姿ではない為、

最弱のフォームである。

S P E C

身体能力は赤のクウガの半分程度

②マイティーフォーム

大切な友人の死を目の当たりにした事で、

自分の覚悟が定まっていなかった事を悟った

祐介が、相手を倒す覚悟と共に変身した姿。

ベルトの力で数十倍の運動能力と

超感覚を持つ戦士で、悪魔の能力も加わり

並大抵の敵には負けることは無いだろう。

だが、祐介自身がまだ未熟な為、

能力をフルに使いこなせていない。
戦闘スタイルは身体能力を活かした、
パンチやキックで戦う。

S P E C

パンチ力：約5 t

キック力：約15 t

ジャンプ力：15 m（ひと跳び）

走力：5.2秒（100 m）

視力：人間の数十倍

聴力：人間の数十倍

必殺技：マイティキック（威力は約30 t）

○兵藤一誠：原作主人公

駒王学園2年生

役割：『兵士』駒七個分

種族：転生悪魔

堕天使に騙されて、殺されてしまうが、

悪魔へと転生したことで、

悪魔の世界について知ることになる。

殺された理由が自身に宿る

神器が危険視されたためだった。

助けられたリアスに自分なりの

忠生を誓っている。

神器：『赤龍帝の籠手』
ブーステッド・ギア

かつて暴れた二天龍の片割れ

ウエルシユドラゴン、ドライグを宿す籠手。

能力は持ち主の能力を時間経過と共に倍加していく。

神をも殺せる神器『神滅具』の一つ

倍加の上限は持ち主の実力による。

赤龍帝の籠手の能力

Boost：音声と共に10秒毎に力を倍加する。

B u r s t : 倍加の限界を超えてしまい。

音声と共に貯めた力が霧散してしまい、

反動で身体能力が低下してしまう。

E x p l o s i o n : 音声と共に倍加のカウントを止めて、

それまでに倍加した力で戦う事ができる。

『赤龍帝からの贈り物』

イツセーが勝利を願ったことにより発言した

第二の能力。蓄積した倍加能力を他人に譲渡する。

T r a n s f e r : 音声と共に倍加した力を他人に譲渡する。

『赤龍帝の鎧』

赤龍帝の籠手の禁じ手

全身を覆う龍を模した鎧。

一気にパワーアップし、時間経過の制限が無くなり

一瞬で限界まで倍加し、使用、譲渡が可能となった。

本来禁じては強い意志が切っ掛けとなり、

類まれなる運により至ることができる形態だが、

イツセーはライザーに一泡吹かせたいという思いから、

ドライブと取引を行い。片腕を代償に時間制限付きで発動した。

技：洋服崩壊

イツセーの欲望が形となった技。

女性の体に触れて魔力を流すことで、

相手の装備を破壊する。

衣服も含めて破壊するので、

女の敵と仲間からも言われる始末。

だが防御魔法、装備の強度等は無視できるので、

大分強い技である。

弱点としては触れないと発動できないことだ。

○リアス・グレモリー

駒王学園3年生

役割：『王』

種族：生来の悪魔

オカルト研究の部長であり、祐介達を転生させた悪魔。

冥界の貴族グレモリー家の跡取り

人間界では欧米からの留学生として振舞っている。

真紅の長髪が特徴で、成績優秀、容姿端麗、

まさに貴族の振る舞いで人気も高い。

自身を唯の『リアス』と見てくれる

人間界が気に入っており。

悪魔の未来の為、ライザーと婚約を決められるが、

自身を『グレモリー』としか見ない、

ライザーを嫌っており、婚約に反発し

レーティングゲームで勝負を決しようとしたほどだ。

彼女は眷属を家族と思っており情も深い、

自身を唯のリアスとして見てくれ、

ライザー相手に自信の為戦ったイツセー

を異性として意識し始めた。

○姫島 朱乃

駒王学園3年生

役割：『女王』クイーン

種族：転生悪魔

黒髪ポニーテールで清楚な振る舞いで

学園では人気がある。

他の眷属からも頼りになる女性だが、

ドが付くほどのSで、

リアスからも究極のSと言われるほど、

眷属内でもトップクラスの魔力で、

敵を甚振りながら高笑いする一面を持つ。

○アーシア・アルジエント

駒王学園2年生

役割：『僧侶』レシヨツフ

種族：転生悪魔

高位の神器を宿していた為

堕天使に利用されて殺されたが、

リアスに悪魔へと転生してもらう。

金髪碧眼の美少女で誰にでも優しい。

学園でも転校当初から人気があり

仲の良いイツセーが恨みを買ったりしている。

今では兵藤家に居候しており、

祐介達の両親からは娘の様に可愛がられている。

神器：『聖母の微笑み』トワイライト・ヒーリング

あらゆる傷を癒す能力があり、

他の回復用の神器と違い

種族を問わず癒すことが可能な為

教会を追放される原因にもなった。

強力だが、制限も多く、

至近距離でないと効果がない。

○木場 祐斗

駒王学園2年生

役割：『騎士』ナイト

種族：転生悪魔

学園一の爽やかイケメンで、

リアスを守る騎士。

柔らかい物腰で頭も良い完璧超人。

魔剣を生み出す神器を持ち

速度を活かしたテクニクタイプ

の剣士で、騎士としての誇りを持つ。

神器：『魔剣創造』ソード・パース

自身が思い描いた魔剣を

自由に生み出すことが可能である

だが、伝説上の魔剣に匹敵するものは

生み出せない
生み出した剣

- ・光喰剣：光を消す能力
- ・炎凍剣：炎を凍らす能力
- ・風凧剣：風を鎮める能力

○塔城 小猫

駒王学園1年生

役割：『』

種族：転生悪魔

駒王学園のマスコットの存在なロリ娘

小学生にしか見えない小柄な体格から

一部の生徒に人気がある。

何を考えてるのか分からない寡黙な性格で、

何かを食べていることが多い食いしん坊キャラだ。

戦車の能力を活かした怪力で戦う。

ライザー眷属

○ライザー・フェニックス

フェニックス家三男

役割：『^{キング}王』

見た目はちよい悪系のホストで

リアスの婚約者だった。

純血の悪魔を絶やさないと理由で選ばれた婚約だったが、
彼なりにリアスの事を愛していた。

既に公式のレーティングゲームにも参加しており

公式タイトルも確実に言われていた。

眷属を大事にはしているが、

彼が犠牲戦術を好む性質がある。

眷属を美女で固めており。

イツセーに負けず劣らずのスケベだった。

要するに同族嫌悪で、イツセーとぶつかったのだ、

だが、性格が悪いわけではなく、

イツセーの実力を高く評価しており、

リアスに修行の猶予を与え、

強くなることを確信していた。

不死鳥フェニックスの家系で、

どんな傷も瞬時に回復する不死性を持ち

例え、頭を消し飛ばされても炎と共に

再生する。

しかし絶対的な力ではなく、再生の度に

精神力を消耗し、やがて再生できなくなる。

レーティングゲームでは不死性と経験の差で勝利したが

その後の婚約パーティーにて

赤龍帝の鎧を発現したイツセーに敗北してしまう。

○ユーベルーナ

役割：『女王^{クイーン}』

爆弾王妃の異名を持つライザーの右腕だったが、

実はフェニックスの涙を手に入れるのが

目的で悪魔社会に潜り込む戦闘民族だった。

首に女王バチのタトウーがあり、

祐介達に正体を明かしたあと

消えてしまった。

○レイヴェル・フェニックス

役割：『僧侶^{レインョツ}』

金髪ドリルツインテの美少女

自身の立場もありレーティングゲーム

では最初から戦う気が無く傍観していた。

最初から勝ち目のない勝負を仕掛けた

イツセー達を鼻で笑っていた。

だが、婚約披露宴でライザーを打ち負かし、真つ向から気圧されてイツセーへの評価が変わった様子。

○美南風（みはえ）

役割：『僧侶』レシヨツフ

十二単を着た女性。

グラウンドでの戦闘にて

力を譲渡された木場の攻撃にて敗北した。

○カーラマイン

役割：『騎士』ナイト

騎士道精神の強い甲冑装備の女性。

校庭で木場と戦うが、

力の譲渡された木場の攻撃に敗北した。

○シーリス

役割：『騎士』ナイト

ワイルドないでたちの

大剣使いの剣士。

力の譲渡された木場の攻撃に敗北した、

○雪蘭（シユエラン）

役割：『戦車』ルーク

チャイナドレスを着た拳法家

体育館にて小猫ちゃんと戦い敗北した。

○イザベラ

役割：『戦車』ルーク

仮面で顔の半分を覆う女性。

イツセーの洋服崩壊を食らい

ドラゴンショットを受けて敗北した。

○ミラ

役割：『兵士』ポーン

最初に祐介達と戦った

棍使いのロリ顔少女

体育館にてイツセーと

戦うが洋服崩壊を受け、

その後、体育館ごと朱乃の雷により敗北した。

○イル&ネル

役割：『兵士^{ポイン}』

チエーンソーを武器にする。

小さい双子の女の子。

体育館にてイツセーと

戦うが洋服崩壊を受け、

その後、体育館ごと朱乃の雷により敗北した。

○シュリヤー&マリオン&ビュレント

役割：『兵士^{ポイン}』

グラウンドにて木場と戦い敗北

○ミイ&リイ

役割：『兵士^{ポイン}』

獣人の女戦士の双子

連携でイツセーを圧倒してたが

力の譲渡をされた木場の攻撃にて敗北した。

グレモリー家関係者

・サーゼクス・ルシファー

リアスの実兄であり、

四大魔王の一人

紅髪の魔王と呼ばれている。

婚約パートナーにてユウスケ達を

支援してくれており、

実はリアスの婚約は反対の様だった。

・グレイフィア・ルキフグス

グレモリー家に使える使用人であり、

レーティングゲームでは進行を勤めていた
実力も高く、リアス、ライザー両者が恐れるほどだ。
グロンギ族

・ラ・ザビネ・バ

グロンギ族の審判であり処刑人

フェニックスの涙を生成する葉蜂や

自身の魔力を蓄える魔力蜂など、

特殊な蜂を使い戦う。

レーティング・ゲームでは

朱乃をこの蜂で倒していた。

・ラ・ドルド・グ

グロンギ族にてゲームの進行役を務める

今回は奈美を攫い、ユウスケを呼び出した。

その実力は未知数である。

・ズ・ザイン・ダ

グロンギ族の戦士であり、

誘き出した、ユウスケと戦った。

力と皮膚の硬さに自信があったが、

クウガのマイティーキックを顔面にくらい

ベルトが起爆したことで敗北した。

番外編 異世界とのクロスロード 「クウガ編」
第25話 「異界の戦士」

とある街道。

俺は夜道をバイクで走っていた。

「それで、部長。これから行く市民プールには

なにがあるんですか？」

俺は後ろに乗せている。

今回の依頼者の大空奈美先輩に尋ねる。

彼女は俺が所属している新聞部の部長で、

俺が悪魔だと知る数少ない人間だ。

オレンジ色の長髪が特徴的な女性だ。

「今回のネタは『市民プールに現れた

半魚人』よその正体を暴いて記事にするわよ」

そう、この人の依頼は駒王町に現れる。

未確認生命体の調査だ、

俺が記事を担当するんだが、

結構人気がある。

俺からしたら、自分自身が

周りから見たら未確認生命体だからな、

複雑な気持ちだ、正体も

大体は変人か悪魔関連か。

ぶっちゃけ変人の方が多いいぐらいだ、

この町もどうかしてるよまったく。

「今回の正体ってもしかしたら

自称人魚のあのマグロですかね？」

俺の脳裏には以前出会った。

人間の足が生えたマグロがよぎった。

「いえ、今回の目撃情報は

人型だったわ」

なら良かった。

あのマグロ声だけはきれいだからな
パンチがききすぎなんだよ

二度と会いたくないよ。

そんなことを考えていると、

前方の風景が一瞬歪んで見えた。

「なんだ…?」

「どうしたのユウスケ?」

一瞬だったが、目の疲れか?

「いえ、気のせいだったみたいです」

俺が後ろの部長に声をかけたその時。

「ユウスケ、前!」

シユウウウウン。

前方から銀色のオーロラが現れた。

「捕まっついて下さい先輩!」

俺はバイクにブレーキを掛けて、

止まろうとしたが、

オーロラがこちらに迫ってきた。

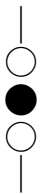
回避は不可能と感じた俺は、

腰に回された部長の手を上から握る。

「絶対に放しません!」

「信じているわよ、ユウスケ!」

そして、俺達は銀色のオーロラに?み込まれた。



カタカタカタカタツ

ここは研究室と思わしき場所。

部屋の電気も付けずに一人の男が

パソコンで作業していた。

ピコンッ!

突如、目の前のモニターに
通知が現れる。

「ほう、イレギュラーの少年が世界を越えたか」
そう言って男は椅子に掛けてあった。

黒いコートに袖を通す。

「なら、この目で見てみよう。」

あの世界で彼が何をなすか見ものだね」

そうして男は歩き出し、

銀色のオーロラを出しその中を通っていった。

そして、残されたパソコンには

『MEMORY・PROJECT』

の文字が映し出されていた。



俺達はバイクごとオーロラに？み込まれた。

気が付くと俺達は工場跡にいた。

周りを見渡せば、以前戦った工場跡に似ているが

それよりも気になることがある。

「どういふこと？さっきまで夜だったのに

昼になってる!?!」

奈美先輩の言葉通り夜だったはずが、

今は太陽が真上に上っている。

「わかりません。場所だけではなく

時間も移動したのかもしれない」

自分で言ったことだが、

そんなことあり得るのか？

すると、近くから何か壊れる音が聞こえてくる。

「何かしらあの音」

「解体工事の音だといいんですが」

俺達はとにかく音の方へ行くことにした。

「バキイツ！」

音がだんだん近づいている。

広場と思わしきに出るとそこで、

二人の異形が戦っていた。

「はああああッ！」

「ジャラゾグスバ、クウガ」

片方は虫と思わしき異形だったが、

もう一人は俺も良く知るものだった。

いや、自分は鏡でしか見たことは無いが、

「あれって、クウガよね！」

そう、そこでグロンギと戦っていたのは俺が変身する。

赤い鎧のクウガであった。

—○○—

俺達がクウガの戦闘に釘付けになると、

「君達！何処から入ったんだ！此処は危険だから

直ぐに避難しなさい！」

此方へ、ライフルを持ちながら

警察と思わしき男性が走ってくる。

「すみません。私達も気がついていたらここに居て

何が何だか!？」

部長が刑事さんへ説明する。

「未確認にさらわれてきたのか？」

ならこちらへ来なさい。

此処は危険だ！」

すると、グロンギがクウガとの戦闘を止め

此方へ飛びかかってきた。

「超変身！」

すると、先ほど戦っていたクウガが

鎧を青に変化させてグロンギに

飛びかかり、邪魔をする。

その一瞬の隙に俺達は離れる子音が出来た。

「青くなつた!!」

「このおー!」

青いクウガはグロンギから離れると

近くに落ちていた鉄パイプを拾うと、

シューイイーン!

鉄パイプが即座に青い棒へと姿を変える。

シャツコン!

それは、両端が伸びロッドとなった。

「鉄パイプが武器になつた!!」

「君達! 惚けてないで、急げ!」

刑事さんが催促してくれるが、

俺は戦っている彼をおいていくことが出来なかつた。

「部長、刑事さんの指示に従つてつください

俺はあの人を一人だけで戦わせることは

出来ません!」

「分かつたわ、頑張つてユウスケ」

俺は部長にそう言つて戦いの場に走り出す。

「君何をやってる! 危ないぞ!」

刑事さんの言葉を背に、俺はいつもの

構えを取る。

「変身!」

俺はボタンを押すのと同時に跳躍した。

そして、俺の体は空中でクウガへと変わった。

「な! 四号がもう一人!!」

「はあッ!」

俺は跳躍の勢いのまま、グロンギを殴りつける。

「貴方が誰か知りませんが、俺も一緒に戦います!」

俺はもう一人のクウガに対して声を掛ける。

「分かつた今はこいつを倒そう!」

青いクウガがそう言うと、
ベルトに手をかざして叫ぶ。

「超変身！」

クウガの掛け声と共に姿が又変わる。
その姿は銀色の鎧に紫色の模様が加わった
ものへと変貌した。

それは、紫のクウガと呼ばばいいか。

「この姿はのろいので、奴をおさえて
もらえますか」

「わかりました！」

紫のクウガは近くに落ちていた鉄くずを拾うと、
それは、一本の剣へと姿を変えた。

「やっぱり俺とは違うのか!!」

考えるのは後だ、まずは目の前の敵だ！

「はあああぁッ！」

俺はグロンギに殴りつける。

相手もクウガが二人になったことに驚愕しており、
隙だらけだった。

俺がグロンギの相手をしていると

紫のクウガが直ぐそこまで近づいていた。

俺は後は任せようと後ろに下がると。

「はああー！」

ガキイイインツ！

剣がグロンギの腹を切り裂き、

硬い皮膚に当たり火花を散らす。

「ボボパギダダンジバゲデロサグ」

グロンギが何か叫ぶと背中の中を羽根を広げて
飛び去ろうとする。

そりや虫だからな。空も飛ぶか。

「五代！これを使え！」

先ほどの刑事さんが、五代と呼んだ

紫のクウガに拳銃を投げ渡した。

「よしー！」

もう一人のクウガが拳銃を受け取ると
頷き、先ほどと同じようにベルトに
手をかざす。

「超変身！」

もう一人のクウガがまた姿を変えた。

今度は緑色の鎧に変わり。

受け取った拳銃もボウガンに形を変えた。

「フッ！」

緑のクウガが弓を射るかのように

ボウガンの取っ手を引き、

引き金を引く。

すると、緑の閃光がボウガンから放たれると、

グロンギを撃ち抜く。

ドカアアアッ！

撃ち抜かれたグロンギは爆発し四散した。

「さて、君はどなたかな？」

もう一人のクウガが、変身を解除して、

此方に振り返る。

その人二十代ぐらいの青年だった。

「はい、俺は兵藤祐介と言います」

俺も変身を解除して、挨拶をする。

「おお、俺もおんなじユウスケなんだよ

俺は五代雄介。よろしくね」

そういつて俺達は握手を交わした。



戦闘が終わり刑事さんと部長が合流する。

「君は何者だ。五代と同じく姿を変えたが

詳しい話を署で訊きたいのだが
どうこうしてもらっていいかね？」

刑事さんからしたら俺は突如現れた
不審者だからな。

「まあまあ、一条さん。」

彼は怪しい人じゃないですよ。

だって俺を助けてくれたし」

「そういうが五代、突如現れた二人目のクウガだ
気になるのは当然だろ。」

それとまだ名乗っていなかったな

俺は一条薫。警視庁の未確認生命体関連事件
合同捜査本部の刑事だ」

「どうも、駒王学園所属の2年生兵藤祐介です」

「同じく駒王学園3年の大空奈美といます」

俺達が名乗ると一条さんは考え込むとこちらに質問する。

「聞いたことが無いな。それはどこの学校だい？」

「駒王町です」

「やはり聞いたことが無い」

そういつて、一条さんは携帯を取り出した。

大分古い機種だなまだ使えるんだ。

「署に確認しよう」

「私達も質問していいでしょうか？」

「おお、何でも聞いて」

部長が質問すると、五代さんが返事してくれる。

「未確認生命体ってなんででしょうか？」

部長の質問に五代さんが目を丸くする。

「知らないの？未確認？」

どうやらそれは常識のようだな。

俺は言いえぬ不安があった。

「署に確認したが、そんな町は

存在しないようだ。あらためて聞くが

君達は何者だ？」

「あははは…マジか」

俺は突然の出来事に驚くだけだった。

まさかの異世界召喚ってやつ？



警察庁の会議室。

「異世界から来た!?!」

俺の答えに一条さんは驚愕している。

驚くのも無理はない俺も信じられなかったし。

「その話は、本当なのかな?」

一条さんは信じられない様で再度訪ねてくる。

「はい、疑問に思っていたのが、一条さんの携帯です」

「私の携帯?」

「はい、俺達からしたらその携帯は大分昔の旧式なんです

それにこの警察署の内で使われているパソコンなども

旧式なので、少なくとも最先端の技術を使う警察では

あり得ませんこの段階では、過去にタイムスリップしたと

思いました」

「待ってくれ、それじゃあ君たちは、

異世界の未来人ということか?」

「そうなります」

「何か未来人という証拠はあるかね?」

まだ疑っている一条さんに俺は

携帯と免許証を取り出した。

「これを見ればわかるかと」

一条さんが免許証をマジマジと見つめる。

「ふむ、生年月日や発行日を見れば未来から

来たとわかるか。ならこっちの板は何だい?

何かの機械だとは思うが」

一条さんはスマホを持ちながら訪ねてくる。

「この薄さで携帯ですよ。」

俺達の時代だとこれが普及しています
名前はスマートフォンと呼びます。

これ一つで通話、メール、ネットなど見れますよ」

「何と、確かにそれはまだ無いものだ、

それが本当なら未来人というのは

理解できた」

一条さんはようやく未来人ということは理解してくれた。

「へえー未来ではこういうのがあるのかあ」

五代さんもスマホを眺めて感心していた。

「それでは、もう一つ異世界から来たという話だが、

何か証明できるものはあるかね？」

そう、俺がここが異世界と思った理由は。

「それは、先程の怪物です」

「ふむ、君達の世界には居ないのかな？」

「いえ、グロンギ族自体は居ました。」

唯、過去の記録にも東京でここまで大きな事件はありませんでした」

そう、聞くところによると、グロンギによる大量虐殺は
グロンギが出るたびに必ず出ているらしい。

俺達もまがりにも新聞部だそんな大事件があれば

必ず調べてる筈だ、それにこの時代でも新聞で大々的に
取り上げられているしな。

「俺が出会ったグロンギは二体だけですが、

人の目を忍んで悪魔勢力に潜入していました。

この世界のグロンギとは目的が違うと思います」

「悪魔!?？」

一条さんと五代さんは

悪魔という単語に驚いていた。

「君の世界には、悪魔が実在するののか？」

「というか、俺自身が人間から悪魔になった
転生悪魔なんです」

バサツ！

俺は証明する為に悪魔の羽根を出した。

「な!??なるほど、本当のようだな

それなら、とりあえず君について

教えてくれないか？」

「はい、俺には双子の弟が居るのですが、

堕天使に狙われて二人共その時殺されました

そして、同じ学園に通う悪魔の先輩に

悪魔として転生することで、

生き返ることが出来ました」

「なるほど、では大空さんも

悪魔なのかい？」

「いえ、私は普通の人間です」

「ふむ、悪魔はてつきりもつと

恐ろしいものと思っていたが」

一条さんが俺を見ながら呟く。

「いえ、俺は元人間ですし、

想像されているのは、

悪魔社会から逃げ出した

はぐれ悪魔などですね」

「ほお、悪魔にも色々あるのか」

「そこは、人間にも犯罪者が居るのと

同じだと思っただけだよ」

「まあ、異世界人なら君が

トライチエイサー2000を

所持しているのも不思議ではないか」

「あのバイクは契約の代価で

頂いたものですが、何かあるんですか？」

「あのバイクは警察内で試験機として

開発されたばかりで五代だけが所持しているんだ」

細かい歴史も違うな。

たしか、あのバイクは

白バイとしては導入されなかったはずだし。

「よし、では異世界の未来人という話は理解した。

なら、君達がここへ来るときに通った

銀色のオーロラについて調べるように

依頼しておこう。帰る伝手も無いと

不安だろう。それと、世界を渡ったなら

体の検査もしておこう。

世界が違うし、種族も違うから

分からない事もあるだろうが、

健康かぐらひは分かるだろう」

そういつて一条さんは携帯を取り出し。

何処かへ連絡している。

「俺だ、一条だ。

至急見てもらいたい患者がいるんだが、

：いや、生きている人間だよ

普通ではないが、他の医者に

任せるわけにはいかないんだ」

「大丈夫なんでしょうか？

俺、クウガで悪魔ですけど」

俺の疑問に五代さんが答えてくれる。

「大丈夫。多分連絡しているのは

椿さんだと思うから、

俺の事も見てくれるから

今更驚かないと思うよ」

五代さんの言葉に俺は安心した。

「話をついた、これから

関東医大病院へ向かおう」

こうして、俺達は病院へ向かった。



俺達は一通りの検査を受けて

一人のお医者さんと対面している。

「こいつは、椿 秀一俺の高校時代の同級生
でここに努める医者だ」

「正確には死体解剖専門なんだが、

椿だよろしくね」

そういつて椿さんは握手を求めてきた。

「よろしくお願いします。」

兵藤祐介です」

「よろしくお願いします。」

大空奈美です」

俺達が握手に答えると

椿さんはカルテを取り出す。

「結果から言うと二人共健康そのものだ

世界が変わろうと人体に変わりはなかったよ。

唯、祐介君はね。あ、この場合は

兵藤君ね。背中に羽根があること以外。

人間とは変わりなかったよ。

普通の学生に比べたら鍛えている

ぐらいかな。悪魔と聞いて楽しみだったに

肩透かしだったよ」

椿さんは俺の結果にがっかりしていた。

「あの、悪魔は日中身体能力は弱るので
夜なら五感や肉体も強化されますが」

「なら、夜にまたおいでよ

入口なら開けとくからさ！」

大分変った人だな。

「そうもいかないだろう。」

「この世界に急に来たのだから」

「今日の宿もないだろう」

「そういえば、そうだ」

「金は持っているけど。」

「未来でのお金なんて下手に使えないしな。」

「それなら、俺に任せてください」

「止まる場所について、五代さんに案が」

「あるようだ。此処はお任せしよう。」

「なら、五代に任せよう。」

「それで、彼のベルトも五代と」

「同じものなのか？」

「ああ、細部は違うが同じものだった。」

「体内のベルトが体中の神経組織に侵食している。」

「多分リスクはあるだろうな」

「一条さんの質問に椿さんが答えたが、」

「リスクって何の話だ。」

「兵藤君。君のベルトについてなんだが、」

「それを使い続ければ君もいずれグロンギと」

「同じ戦う為の存在になる恐れがある」

「そんな…?!」

「一条さんの言葉に奈美先輩が驚く。」

「あまり。驚いてないんだな」

「椿さんは俺が驚いていない事に指摘する。」

「はい、今までも何度か力に飲まれそうになつたことがあつたので」

「もしかしたらと思っていました」

「ユウスケ！何で黙っていたの?!」

「すみません。まだ、」

「憶測程度のもので」

「俺が以前闇に飲まれかけた」

「俺が以前闇に飲まれかけた」

事を知り部長に怒鳴られてしまった

「でも、大丈夫です！」

俺は闇にはなりません。

部長やアジアを悲しませる事は
したくないので」

俺の話に部長は納得してくれたのか
涙ぐみだなが頷いてくれた。

「わかったわ。信じてるから

貴方も頑張りなさい！」

「おお、青春だねえ」

俺達の会話に椿さんがちやちやを入れる。

「ところで、五代と細部が違うといったな
どんなところが違うんだ？」

一条さんが先ほどの椿さんの

説明で気になることを訊いた。

「ああ、前に五代はベルトから足にも
ベルトの神経が伸びているんだが、

兵藤の場合は足だけでなく

腕にも伸びているんだ。

そこには、何か思い当たることは
あるか？」

「以前墮天使と戦った時に

相手を殴る直前に拳が熱くなりました。

多分それが関係しているのかもしれない」
「なら、足に神経が言っているのも

同じ事か？」

「はい、俺が修行した時に先ほどのパンチを
キックの時にも同じ様に力を

込められればと思いき自分で考えました」

俺の説明に皆さんは納得した様だ。

「なんか、俺と違う変化が、

兵藤君には起きてるんだね。

なら、赤以外のクウガは

どんな変化があるんだろう?」

五代さんは自分と違うクウガに

興味津々の様子。だが、

「期待している所、すみませんが

俺は赤以外のクウガにはなれませんが

他の色のクウガがある事自体

ここで初めて知りました。

それぞれどんな特徴があるんですか?」

俺の質問に五代さんが答えてくれる。

「そうだね、まず青のクウガは跳躍力が

上がるけどその分防御力が下がるかな。

緑のクウガは五感を強化して敵を

射抜くんだけど、五感を強化するから

長時間は変身できなくて

制限時間いっぱいを使うと

白のクウガになって

暫く変身できないんだ。

最後に紫のクウガだけど、

防御力と攻撃力が上がる

けれど増えた重量のせいで

動きが鈍くなる

とりあえず、こんな所かな」

「それを考えると兵藤君には

別の変化が起きてもおかしくないな。

彼は翼があるから空が飛べる。

なら跳躍力が高まる青のクウガは

必要ない。

先ほどの話から夜には

五感も強化されるから

緑のクウガも下手になれば

さらに五感が強化されて

脳の処理が追い付かない。

彼としても紫のクウガしか

変身するメリットはないだろう」

一条さんの話に俺は

自信の事を正直に話す。

「いえ、クウガの状態だと

悪魔の能力は使えないんです。

身体能力や五感の向上はされますが、

翼を生やしたり、悪魔としての力

が使えないんです」

「悪魔の力とは何だい？」

「転生悪魔はチェスの駒と

同じ役割を貫きます。

『騎士』なら速度の向上

『僧侶』なら魔力の向上

『戦車』ならバカげた力と防御力」

『女王』ならその全てが向上します。

そして俺の『兵士』はチェスでいう

『プロモーション』を行えば

それぞれの駒の力が使えます」

「なるほど、興味深いな

悪魔もいるから魔法も存在するか」

椿さんは駒の特性の説明を聞き

考えこんでしまった。

「なら、やっぱり俺と君は違うはずだよ。

姿は同じクウガでも種族も違うし

願う力も違うはずだ」

五代さんの発言に気になることがあった。

「願う力ですか？」

「そう、俺も最初青のクウガになった時はもつと高く跳びたいって思ったから変身できたんだ、だから君も自分のなりたい者になればいいと思うよ
想いが君の力になるよ！」

そういつて五代さんはこちらに親指を立てる。

自分のなりたい者…。
想いが、力にか…。

「よし、とりあえず、知りたいことは一通り知ることが出来た。
銀色のオーロラについては分かり次第連絡しよう」

「わかりました。本日はありがとうございました」
俺と部長は一条さんと椿さんに頭を下げ退室する。

三人が退室し二人つきりになる
一条と椿。

「あの二人どう思う？」
「無事に返してやりたいな。
ただでさえ右も左も分からない異世界に来たのに俺達に心配かけないように
気丈にふるまっていたが、
まだ子供だ不安でいっぱいだろうに」
一条の質問に椿は気になっていた事を
呟いた。

「何かあれば、あてにさせてもらおうぞ」
「ああ、構わないさ。だけど、

あの子にはこの世界の戦いに
巻き込みたくはないな」

「それは難しいだろう。」

咄嗟に五代を助けに入る

優しい子だ。俺達大人が

しつかりしないとな」

一条はそう語ると

今後の事を椿と語り合うのであった。

—○○●○○—

俺達は病院を出た後、

五代さんの先導でバイクを走らせていた。
すると、一軒の建物の前で停車した。

「よし、到着！」

付いた場所はレンガ造りの

2階建ての建物だった。

「喫茶店ポレポレ？」

そう、ついた場所は宿ではなく

喫茶店だった。

「ほら、こっちこっち」

俺達は五代さんに呼ばれて中に入る。

カラン！

「おお、お帰り雄介！」

「おやっさん。ただいま」

店内に入ると壮年の男性が五代さんに

声を掛ける。

「二人に紹介するよ。こっちはおやっさん

俺の育ての親でこのポレポレのマスターだよ」

「なんだよ雄介その紹介は!!」

いらっしやいお客さん。

私は『オリエンタルな味と香りの店』

喫茶店ポレポレのマスターです」

「だって、おやっさんはおやっさんだし

二人も気軽におやっさんって呼んであげて」

五代さんからマスターのおやっさんを紹介された。

「とりあえず、おなかすいたでしょ

此処のカレーおいしいから俺がおごってあげるよ」

「なら、雄介店手伝えよ。奈々の奴は今日は

休みだから人手がいるんだ」

俺達は五代さんに案内されてカウンター席に座る。

「はいどうぞ、当店名物ポレポレカレーだ

めしあがれ」

俺達の前にはおいしそうなカレーが

運ばれてくる。

「いただきます！」

俺達はせっかくの厚意に甘えカレーを頂くことに。

一口食べたが、今まで食べたカレーの

中でも一番美味しかった。

「美味しい」

「そうですね。どんなにつらい時でも

美味しいものを食べれば笑顔になれる

連れてきてよかったよかった」

五代さんは俺達が知らない世界に

来て帰れるか不安になる俺達を

気遣ってここに連れてきたのか。

「そうだ、おやっさん。

わけあってこの二人泊まるところが

ないんだよ。此処に泊めてあげられないかな」

「それはいいけど、訳ありって？」

いや、聞くのは野暮って奴か

いくらでもいればいいさ

家賃は気にするな店を

たまに手伝ってくれればいいさ」

「ありがとうございます」

二人のやさしさに俺は嬉しくなった。

だけど、おやっさん絶対に変な勘違い

してそうだけどね。

「大空奈美です。これから

よろしくお願いします」

「兵藤祐介です。

よろしくお願いします」

「おお、同じユウスケかいね。

ダブルユウスケか

だけど呼び名に困るな

まあ、いいか」

こうして俺達の異世界生活は始まった。

第26話「グロンギ」

俺達は今城南大学という場所に来ている。

五代さんが俺に合わせたい人がいるそうだ。

俺達は五代さんの案内で大学内を進む。

「俺、大学なんて始めて来ましたよ

初めての大学がまさか異世界とは

思いませんでしたけど」

俺はきよろきよると周りを観察しながら、

五代さんの後をついていく

「祐介。気持ちは分かるけど、

そんなきよろきよるとしてたら

誰かにぶつかるわよ」

俺の挙動に部長からおしかりを受ける。

「すいません。部長気を付けます」

俺が部長に謝った直後目の前の扉が

開き中から人が飛び出してくる。

ドカッ

俺にぶつかり相手の女性が

尻もちをついてしまう。

「すみません！大丈夫ですか？」

「イテテテ。大丈夫よ。」

此方こそ不注意だったわ」

俺が女性に手をといたら

俺より先に五代さんが駆け寄って

彼女の手を取り立たせてあげる。

「大丈夫桜子さん。凄い急いで

出てきたようだけど気を付けないと

ダメだよ」

「合わせたい人がいるって

急に連絡してきたのは五代君でしょ！

急いで用事を済ませてたのよ」

「どうやら、五代さんが俺達に合わせたいのはこの女性のようだった。」

「最悪な初対面になってしまった。」

「そして俺達は女性と一緒にとある研究室へとやってきた。」

「部屋の入口には『考古学研究室』と書かれている。」

「さあ、入って入って。」

「散らかっているけど、ゆっくりして行ってね」

「お邪魔します」

「さてと彼女は沢渡桜子さん。」

「クウガやグロンギについて調べてくれているんだ。」

「五代さんが沢渡さんを俺達に紹介してくれる。」

「この二人は、兵藤祐介君に大空奈美ちゃん」

「此処とは別の世界から来たようで、」

「祐介君は俺と同じでクウガなんだよ」

「ええ!? クウガ!? 異世界!? なんの話?」

「沢渡さんは俺達が異世界から来た事、」

「俺がクウガである事に驚愕していた。」

「こんな簡単に説明する事では」

「無い筈なんだが、沢渡は落ち着くと」

「俺達の話聞いてくれた。」

「五代さんが信頼できると言って」

「いたので隠し事なくすべてを説明した。」

「へえ、異世界の未来からねえ。」

「しかも、悪魔だなんて驚きよ。」

「五代君もさらっと話す内容じゃないでしょ」

「ごめんごめん桜子さんなら」

「信じてくれると思って」

「まあ、いいけどそれで、」

「今日はどんな用事なの」

沢渡さんは呆れながらも

五代さんに今日来た理由を尋ねる。

「今日は二人にリントやグロンギについて
教えてあげてほしいんだ」

そして、沢渡さんによる古代文明の説明が始まった。

「まず、クウガについて説明するわね。

遙か昔に存在したリント族と呼ばれる部族

が存在してクウガはそのリント族の戦士なの。

彼らは戦いを好まないけれど、グロンギ族に狙われていたらしいの。だから、クウガのベルトを作って。

戦士はグロンギ族からリント族を守っていたらしいの

彼らはグロンギ族を倒すのではなくて封印したのも

殺すという概念がなかったからだと思われるわ」

「優しい部族なんですね。自分たちが襲われている

っていうのに相手の事を恨んでもいないなんて」

俺はそのリント族の説明を聞き驚きを隠せなかった。

なぜ彼らは一方的に襲われているのに、

封印なんて手段を取ったのか。

それが、簡単に出来たのか？

ベルトだって俺達の時代でだって

作ることは不可能だろう。

大分謎の多い部族だな。

「次はグロンギ族ね彼らは九朗ヶ岳遺跡で封印

されていたんだけどこの発掘チームが

封印を解いてしまったのが始まり。

グロンギ族は残虐で発掘チームもその時殺されたわ。

彼らは独自の言語で喋って、

私達やリント族とは違う文化があるようなの

だから、一連の殺害も何か意味があるんじゃないかと

私は思っているの」

「うん、以前現れた蜂のグロンギも最初の事件現場から

渦巻き状に犯行を行っていたから
最近のグロンギは何かルールに
従っている節があったね」

沢渡さんの説明に五代さんが実際にあった
グロンギの行動を話してくれた。

「蜂ですか。俺の世界でもいましたが、

俺は目の前で逃げられてしまい
ました。参考程度にどうやって

倒したか教えてくれませんか？」

俺の質問に五代さんが真剣に答えてくれる。

「そうだね、あの時は、緑のクウガになって
腕から飛ばした針をキャッチして

一条さんから借りた銃で撃ち抜いたんだ」

「えっ！」

俺の知っている蜂のグロンギと違い

俺は驚いた。

「どうかしたの兵藤君？」

そんな俺に沢渡さんが質問してくる。

「いえ、俺が戦った奴とは戦い方が

違ったので、俺があつたのは

爆発魔法を蜂に込めて飛ばしてきました」

「それは俺が倒した奴とは違うな。この世界には
魔法を使うグロンギは出ていないから」

確かに、奴らは古代から生きていたらしいが、
こちらの世界では封印されたからな

それだけ長い間生きていれば

生態も変わってくるか。

P r r r r r !

突如部屋に置いてある携帯が鳴り出した。

「桜子さん鳴ってるよ」

「多分五代君によ」

「そう言われ五代が携帯を手にとると、

「あ、一条さん」

「どうやら相手は警察の一条さんらしい

「良くここに居るって分かりますね」

「違うのよ。五代君携帯持ってないから

「ここか、ポレポレしか五代君に

「連絡する当てがないのよ」

「なるほど」

「ごめん、桜子さんグロンギが出たから

「行ってくる！」

五代さんは携帯を切ると急いで部屋を後にする。

「俺も行ってきます」

俺もそれに続き部屋を出る。

後には沢渡さんと奈美だけが残る。

「沢渡さんは凄いですね

色々やることが多いのに」

「そうね、グロンギの調査に自分の

修士論文それにリント族の文字の解析

やることは山積みねだけど、

私にしか出来ない事だから

「頑張らないと少しでも

分かることが増えれば

五代君の助けにもなるから」

沢渡さんが自身の出来ることを

必死に取り組む姿に奈美は感銘を受ける。

「羨ましいです。二人の関係が、

私は新聞部の部長ってだけで

彼に何もしてあげられないから

「悔しいんです」

涙をこぼしながらの奈美の告白に

沢渡さんは真剣な面持ちで奈美に答える。

「そんなことないわよ。」

彼が戦い終わった後帰る場所があるってだけでうれしいと思っ
思うわよ。戦ってばかりいたら心
心がすり減ってしまうもの。

貴方は彼の日常を守ってあげて。

体は悪魔でも、心は人間なんだから。

それは、悪魔の彼を知る人間の

貴方にしかできないんじゃないかしら

「はー！」

沢渡さんの答えに奈美は

涙を拭いながら答える。

「とりあえず、コーヒーでも

飲んで一息つきましよう」

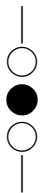
「なら私がいれますよ」

二人にはやりたいことがある

片や友人の負担を減らすため。

片や友人の日常を守るため。

今後も努力するだろう。



現場の公園に急行した俺達が目にしたのは。

バラバラに切り裂かれた死体が散らばる

血の海だった。

「なんだよこれ…」

今までに嗅いだことが無い

濃い血の匂いに俺も五代さんも

気後れしてしまう。

「あれは！」

五代さんが指を差し叫んだ先には。

水の竜巻が広場の中央の噴水に鎮座していた。

「水が渦巻いている…」

俺はこみ上げてくる吐き気を
押えながら。

目を背けず、渦巻きを睨みつける。

「ようやく来たか。クウガ」

渦巻きが消えると中から鮫の特徴のグロンギが現れる。

「人間の言葉を喋った?」

五代さんがグロンギが人間の言葉を話驚愕している。

この世界のグロンギは独自の言葉をしゃべるはずだ

まさか…。

「お前!この世界のグロンギじゃないだろう!」

グロンギは頬をかきながら答える。

「よくわかったな。そうだ、俺はお前と同じ

世界から来た。こちらも驚きだよ

お前もこの世界に来るなんてな」

「なんでこんなことをするんだ!」

五代さんがグロンギにこの凄惨な犯行

の理由を尋ねる。

「憂さ晴らしさ。俺達の世界では長い間

ゲゲルが行えなかった。

もうメに上がるのも目前だったんだ。

くだらない理由でゲゲルが出来なくなった。

だが、俺は運がいい。別の世界のここなら

いくら暴れようとルールには違反しないからな」

「そんな身勝手な理由で多くの人間の

命を奪ったのか!」

「ゆるせない。お前が俺の世界から来たのなら

俺がこの手で止めてやる!

もう人は殺させない」

俺達は腰に手をかざしベルトが出現する。

そして、二人で叫ぶ。

「変身！」

俺達のベルトが赤く光を放ち。

その身を赤いクウガに姿を変える。

「いこう！兵藤君！」

「はい！五代さん！」

ダッ！

俺達はグロンギに向けて走り出す。

「二人のクウガと戦うなんて俺はやはりついてるな

さあ、俺を楽しませてくれよ！」

そう言うのとグロンギは腕を横に振るう。

すると噴水の水が水刃となって

俺達を襲う。

前転し、攻撃を交わす。

五代さんを見ればトライチェイサーのハンドルを

持っていた。

「超変身！」

五代さんが叫び紫のクウガに姿を変える。

そして、もっていたハンドルも剣に変わる。

そうか、紫のクウガの防御力なら、

あの水刃でもダメージは無い。

「ほお、その姿なら知っている。

もちろんその弱点もな」

そういつてグロンギが拳を合わせて握り

その手を前に突き出す。

すると噴水の水が、

全て五代さんへと襲い掛かる。

「うわっ！」

「五代さん！」

それは、まるで水で出来たハンマーだった。

五代さんは耐え切れずに吹き飛ばされてしまう。

「その鈍足で俺の攻撃は避けられないだろう」

五代さんを吹き飛ばした水がグロンギの元へ戻る。

— 今だ！

グロンギが五代さんの方へ注意を向けてるうちに
奴へ近づいたため走り出す。

「見てないと思っただか？」

グロンギはこちらに向かって手のひらを向ける。

すると、水が散弾のように俺に襲い掛かる。

「ぐはッ！」

俺はとっさの出来事に避けることが出来ず

攻撃を食らってしまう。

「五代！ 兵藤君！」

吹き飛ばされた俺の傍に一条さんがやってくる。

警察の応援がやってきたようだ。

「うてえ！」

年配の刑事さんの掛け声で皆が一斉に射撃を開始する。

だが、グロンギは手を前にかざすと水が盾となる。

水を貫通すると思われた弾丸は水を受け止められ、

空中で制止する。

「そんなバカな、水で弾丸を止めるなんて…」

よく見れば水はゼリー状に固まっていた。

とてつもない魔力操作だった。

五代さんも傍まで戻ってきていた。

「兵藤君、アレは魔法かい？」

「ええ、ですがあそこまで精密な

魔力操作は初めて見ました」

応援の警察も初めて見る魔法に

驚き攻撃の手が止まっている。

「ちい水が減ってきたか、なら」

グロンギは俺の方へ向いた。

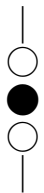
「俺の名は『ズ・スクア・ギ』いずれ貴様らは

俺が倒す。それまで首を洗って待っている！」
「逃がすわけないだろう！」

俺と五代さんが奴へ向かい駆け出すのと同時に
奴の周りの水が霧へと変わり、
俺達の視界が霧に覆われる。

そして、霧が晴れたころには
スクアの姿はどこにもなかった。

そして、俺達はここで奴を倒せなかったことを
後悔することになる。



新たな未確認生命体であるスクアとの戦闘から翌日
俺は一条さんに呼ばれて

未確認対策本部へ呼ばれていた。

そして、会議室で俺は多くの警察官に囲まれていた。

「では新たな未確認の対策会議を行います」

一条さんが会議の開始を告げる。

「まず、今回の打ち合わせに同席していただく

兵藤君の説明から、彼はこことは違う世界の未来
から来た存在です。詳細は資料の通りです。

裏付けとしまして、彼の戸籍は存在せず、

所持していた身分証明書の日付が未来の日付で
あったこと、さらに彼の所持していた携帯が

現在の技術では作成が不可能であるで判断しました。
携帯に関しては榎田さんに確認を取ったので

間違いないです」

「ええ、このスマホという携帯に使われている
技術はまだないものです。

再現しようにも分解して元に戻せる

保証はないので止めておきましょう」

一条さんの説明に榎田さんと呼ばれた女性が補足する。

「この種族が悪魔というのはどういうことかね。見た目は人間と変わりがないが上座に座っていたいかにも偉いと思わせる高齢の男性が質問する。」

「はい、これは実際に見てもらった方が早いでしょう兵藤君お願いする」

「はい」

俺は立ち上がり背中から羽根を生やす。すると驚きの声を上げる。

「自分は純粋な悪魔ではなく」

一度死に悪魔に転生しましたので肉体以外は人間と変わりなく

日中は唯の学生と変わりません」

「ふう、実際に見ても信じられないな悪魔が存在してそれも俺達より若い学生なんてな。」

一つ聞きたいんだが、君達は何を食べて生きているんだい」

一条さんと一緒にいた中年の男性が食事について質問する。

「人間と変わりません」

純血の悪魔は見たことありますが、基本食べ物と同じものを食べます皆さんが想像しているのは

悪魔の中でも力に溺れたはぐれ者です。ただ、

この世界にも悪魔が居るかはすみませんが分かりません」

俺の答えに全員考え込んでしまう。

「まずは彼の事より、新たに現れた未確認についてだ。

まず昨日現れた未確認は噴水の水を操り

攻撃を行っていた。兵藤君あれは魔法で

間違いないかね？」

「正確には魔力で水を操っています。

魔法は魔力を水や雷に変換させて放つ力です。

恐らくですが、奴は魔法を使えません。

なぜなら、使えるのであれば水がなくなり

逃げる必要は無い筈なので」

俺が質問に答えると皆、動揺していた。

それもそうだ、手に負えない狂的な力が

その実、不完全な力なのだから。

「動揺するのは分かりませんが、

逆を言えば水辺で戦わなければいいだけ。

既に川や海、プールなどには近づかないように

手配しております。未確認を陸地で迎え撃ち

水を消費させて。とどめを刺すのはどうでしょうか」

「作戦としてはいいが、

その水を消費させる方法をどうするかだな」

「それなんです、なんにも全ての水を

無くす必要はないと思います。

魔力操作を行うには集中する必要があるので

集中を乱すことが出来れば、

あの水も操れないと思います」

「なるほど、なら手はいくらでもあります。

では、強烈な光や音で怯ませてはどうでしょうか？」

一条さんの提案に全員が賛成しこの会議は終了した。

俺が一条さんに連れられて帰る途中で声をかけられた。

「よお兵藤君。挨拶が遅れたが、

俺は杉田だ、よろしくな」

先ほどの会議でも俺に質問していた

中年の刑事さんだ。

「どうも、よろしくお願いします」

「君も大変だな突如異世界に連れてこられるなんてな何か困ったことがあれば俺達を頼れよ

それじゃあな、一条あとは頼むぞ」

杉田さんは挨拶も早々去ってしまった。

「せわしないですね」

「装備の手配などやることは

多いからな。多分、自分のお子さん

と君が重なって放ってはおけなかったんだろう。

杉田さんも言っていたが、何かあれば連絡してくれ

此方も未確認の事で協力してもらっているのだから」

俺達が玄関まで来ると、後ろから杉田さんが走ってくる。

「一条！未確認が現れた。俺は装備を取りに行く

からお前は先に行け！」

「分かりました」

杉田さんの報告を聞き俺と一条は現場に急行する。



現場に到着すると、既に五代さんがスクアと戦っていた。

だが、やはり攻撃を避けるので精一杯で

防戦一方だった。

「五代さん！」

俺は走り出す。

「変身！」

俺はクウガに変身し、五代さんの隣に立つ。

「五代さん。警察で奴の隙を作るように

作戦がたてられています。

合図はあると思いますが、気をつけてください」

「大丈夫、一条さんから聞いているから」

五代さんの声がじやつかん嬉しそうに感じた。

「どうしたんですか、五代さん？」

「いや、こうやって誰かと並んで戦う事なんてなかったから今までみんなの協力があって戦ってきたけど

横に誰かが居るだけでこんなに頼もしいなんてね」

五代さんはグロンギと一人だけで戦ってきたわけではないのだ、警察の方、主に一条さんの協力があって戦ってこれたからだろう。

俺はこの世界に来て五代さん達の関係が羨ましく思えた。

俺はオカ研の皆と一緒に戦う機会がなかった。

大抵、一人で戦っていた。

それが不満ってわけじゃあない。

皆で修行して、俺だけ貢献出来なかった。

それが歯がゆかった。だけど、

この世界に来て分かったことがある。

共に肩を並べて戦えなくても、

——一緒に戦う方法はあるんだってな！

「話は終わったか？」

スクアが俺達に語りかけてくる。

「待たせてすまなかつたな！

お前とはここで決着をつける！」

「昨日は手も足も出なかつたくせに

貴様らに何が出来る！」

スクアが頭上に大きな水の塊を作り出す。

あれを、俺達にぶつけようってか。

俺達は水塊を確認した時既に走り出していた。

カンッ！

俺達とスクアの間にグレネードが落ちてくる

「五代さん耳を！」

ギイイイイインッ！

俺が五代さんに忠告した直後、

甲高い音が周りに鳴り響く。

耳を押さえていたが、

大分応える。だが、戦えない程じゃない。

「グウウウウー！耳がああー！」

スクアは音をもろに受けて耳を押さえて苦しんでいる。

バシャアッ！

空中に浮かんでいた水が地面に落ちる。

制御の為の集中が切れたからだろう。

—今だ！

ドゴッ！ドカツ！

俺と五代さんがすかさず殴りつける。

スクアの体は以前戦ったザインより柔らかく、唯のパンチも大分聞いている様子。

だから、俺達を近づかせたくなかったのか。

「ナメるなあー！」

スクアが水刃を飛ばしてくる。

俺達は難なく避けたが、

そのすきに距離を離されてしまう。

「ネタが分かればもう食らわねえ」

自身の血を見たことで獯猛になった様で

歯をむき出しにこちらに叫ぶ。

そして、先ほどと同じように

グレネードが飛んでくるが、

スクアは即座にグレネードを水で包み込む。

「残念だったな、空気ごと包めば、

中で反響して意味なくなるだろう」

奴はしてやったりと笑っていたがそれも長く続かなかつた。
カツ！

突如激しい光が辺りを包み込む。

「グアア！目がアアアアアアッ！」

奴が音攻撃を封じ込めようと

凝視するのを逆手に取った作戦だ。

ダッ！

「俺達は一人で戦ってるんじゃない！

皆に支えられて戦っているんだ！」

俺はスクアを殴り叫んだ。

感情の高ぶりに呼応するように、

体が燃えるように熱くなるのを感じる。

「さらに、赤くなった…」

立ち上がったスクアが俺を見て眩く。

そこで俺は自身の鎧の色が変わっていることに気が付く。

その姿は更に赤くなり紅色となっていた。

「変った…?」

「たかが色が濃くなった程度で！」

立ち上がったスクアは立っているのもやっとという様子だった。

「五代さん！」

「うん、決めよう！」

俺達は横に並び構えを取り腰を落とす。

ダッ！

右足に熱がこもるのを感じる。

地面を燃やしながら駆け出し

宙へ飛び一回転し跳び蹴りを放つ！

「オリヤアアアアツツ!!」

ドゴツ！

二人の蹴りはスクアの胴体に命中し吹き飛ばす。

ドガガアアアツアアン！

そして、蹴りを食らったスクアはそのまま爆発してしまう。

グッ！

俺と五代さんはお互いにサムズアップするのであった。



事件解決後俺達はまた城南大学へと来ていた。

俺達が戦ったグロンギについて沢渡さんへ報告するためだ、

「今後も魔法を使うグロンギが
現れるのかしら？」

沢渡さんが不安そうに聞いてくる。

「うーん、分からないけど、

今回みたいに皆で戦えば大丈夫だよ」

五代さんが沢渡さんに答える。

「そうですね、多分あいつは俺達を探していた

奴だと思うので、又銀色のオーロラが現れない限り
は大丈夫かと」

「あつ、『市民プールに現れた半魚人』！

正体はグロンギだったのね」

そう俺達が当初探していた半魚人は
恐らくあいつだろう。

「おそらく市民プールでトレーニング

しているところを目撃されたのでしよう」

俺達の探していたスクープが思わぬ正体だった。

「でも、あの銀色のオーロラはなんで現れたのか
分からないんでしょう？」

「ええ、一条さんから目撃情報あったら
連絡してくれるって話でしたが、

音沙汰無しですね」

沢渡さんの疑問に俺は答えたが、

この世界に転移された時、感じたがあれは
魔法とも違う別の何かかもしれない。

「でも、早く帰りたいでしょ。

家族だって心配しているだろうし」

「まあ、こればかりは待つしかないですからね
五代さんと協力してグロンギ倒しながら
気長に待ちますよ」

俺を心配する二人には言えないが、俺も早く帰りたい。というより

部長を返してあげたいという思いが強い。

あの人は心配かけないように俺には弱音を言わなかった。俺がそんなことを思っている。

「君にこの世界に居座られると困るんだけどね」

突如男の声が聞えてくる。

「誰だ!？」

俺達が声の方に振り返ると、

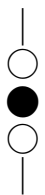
そこには銀色のオーロラが現れた。

「銀色のオーロラ……」

俺達が突然の事に驚いていると。

オーロラの中から黒ローブの男が現れた。

「ハロー、祐介君また会ったね。迎えに来たよ」



以前にも会った『メモリー』と名乗った男だ。確かに以前も銀色のオーロラを使って消えたな。

「今回の事はお前が犯人なのか?」

俺はメモリーに向かって叫ぶ。

それが本当なら俺はこいつを許せないからな。

「おいおい、勘違いするなよ。」

俺は迷子になった君を迎えに来ただけさ

あれは事故だよ」

メモリーは飄々とした態度で応える。

∴此処はこいつを信じよう。

元の世界に帰る為の手がかりだからな。

「何故俺達がこの世界にいるって分かったんだ?」

「答えは簡単俺は君を観察していたっからさ。」

今『悪魔』と『仮面ライダー』の組み合わせは

激アツだからね。俺の研究の為にも

君の力はちようどいい研究対象それだけさ」

「俺をモルモットとでも思ってるのか？」

「いや、俺が何かしようとは思ってないさ」

僕は君の今後の可能性に興味があるのさ

いずれ君には手を貸してもいたいからね

これは、先行投資だよ」

へらへらしてるが嘘はついてなさそうだ。

「よかつたじゃないか。二人共

無事に帰ることが出来て、なら皆でお別れ会

でもやろうか！」

五代さんが場の空気を換えようと提案する

「いや、そんな時間は無いだろうね

余り別の世界の住人が長いすることは

この世界の秩序を乱すことになるからさ

出来れば今すぐ帰れば、この世界への影響はそんな

大きくないだろうし」

急な事に俺達は困惑していた。

確かに帰れるのは嬉しいがお世話になった人達に

お礼も出来ないなんて思わなかったからな。

「そうか…、なら仕方ないね。

そうだ、桜子さん、紙とペン借りるね」

五代さんはメモ帳に何かを記入している。

「はい、これポレポレカレーのレシピ

俺とおやつさんで考えた秘蔵のレシピ

なんだけどね。異世界の君達なら

教えてもいいかなって」

「ありがとうございます

他の皆さんにはよろしく

言つといてください」

レシピを受け取ると沢渡さんがポラロイドカメラを持って来る。

「これで、会うのが最後なら記念写真取りましょう」

「まあ、それぐらいならいいけどね」

「ならカメラはメモリーあんたが撮ってよ

タイマー機能なんてないし」

俺はカメラをメモリーに渡す。

「ハイハイ、並んで並んで、ハイチーズ！」

カシャッ！

こうして俺達の異世界旅行は終わりを告げた。

—○○—

シユウウウウン！

俺達は銀色のオーロラを抜け元の場所に戻って来ていた。

「戻ってきたのね」

「ええ」

俺はトライチエイサーを押しながら

部長に応える。

たった数日の出来事だったが、

それでも俺にはもつと長く感じた。

「じゃあ、俺の仕事はこれにて完了！」

ではお二人さんまたね〜」

メモリーは俺達に手を振りながら

銀色のオーロラで消えていった。

「何者なのかしらあの男？」

「分かりません。ですが、敵ではなさそうですね」

いまいち正体が分からない男だが、

今は無事に帰ってきたそれだけで良しとしよう。

「じゃあ、帰りましょうか。」

来た時と同じ時間に帰ってきたけど

目的の半魚人はもういないんですし」

「そうね、なら次のネタどうしするの？」

「もう決めてますよ。『この町のどこかに現れる
人を攫う銀色のオーロラ』なんてどうですか？」

俺の答えに部長は微笑む。

「そうね、ならそれで行きましょう」

さあ、レッツゴー！」

そして、俺達はバイクで走り出す。

一時の夢のような体験だったが、
確かにあった出来事だと

一枚の写真が証明する。

第三章 月光校庭のエクスカリバー 第27話「新聞部」

「…ピピー…ピピー…ピピー！」

カチャ。

「んううんう」

俺は固まった体を伸ばす。

「はああ」

まだ頭が起きて無い様でぼおつと虚空を見つめる。

「さて、起きるか」

ようやく目が覚めたようなので布団から出る。

俺、兵藤祐介は悪魔になってから朝が弱くなり

朝目覚めるまでに時間が掛かるようになってしまった。

コンコンッ！

「ユウスケさん、入って大丈夫ですか？」

「着替えは終わってるから大丈夫だよ」

ガチャッ。

扉を開けてアーシアが部屋に入ってくる。

「おはようございます。ユウスケさん」

「おはようアーシア」

毎朝恒例の挨拶を済ませると

「では洗濯物は持っていきますね」

アーシアは俺の寝間着を手に取り

そそくさと部屋を出ていこうとする。

「いや、洗濯物持っていくぐらい自分でやるからね」

「いえ、私がやりたいんです。やらせてください！」

珍しく強気なアーシアに何も言い返せずにそのまま見送る。

「仕方ない、説得は失敗か、ならイッセーでも起こしてくるか」

俺は隣のイッセーの部屋まで来る。

ドンドンッ！

「へい！ イッセー トレーニングの時間だぜえ
とつとと起きろー！」

ガチャツ！

ふざけた掛け声とともに扉を開けると。

「ユウスケ、もう少し待っていなさい。」

私もイッセーも準備しなくてはいけないから」

部屋のベッドには上半身だけ起こしてる寝間着のイッセーと
全裸のリアス先輩がいた。

「おつと、ぐゅっくり〜」

そういつて扉を閉める俺。

リアス先輩はここ最近イッセーを抱き枕に寝ているようで、
まだ慣れないがこれも朝の日常へとなっていた。

「なんつう朝だよ」

—○○—

「いただきます」

朝食の時間。俺の隣にはアーシア。

イッセーの隣にはリアス先輩が座っている。

大して広くないリビングが大所帯になったもんだ。

突如同居するようになったリアス先輩も

今では普通に俺の両親と談笑しながら食事を摂っている。

「いやー、リアスさんは和食まで作るのが上手なんだねー」

「ありがとうございます、お父様。日本で暮らすのも

長いものですから、一通りの調理は覚えましてわ」

そう、今日の朝食のメニューのうち何品かはリアス先輩が作っ
た。

イッセーもリアス先輩が作った玉子焼きをマジ美味しいと言いな
が

バクバクと食っている。

「イッセー、おかわりはたくさんあるから落ち着いて食べなさい」

「は、はい、部長…」

注意される様がるで子供だな。

同居するようになって分かったが、リアス先輩は料理上手だ。

和洋中、レパートリーは広く、大概のものを極上の一品として出していた。

家が家だから箱入り娘で、てつきりこの手の作業は苦手だと思っただが、

一人日本で生活しているのは伊達ではなく、

料理洗濯掃除はそつなくこなす様は。

驚きの光景だった。

本人はお嬢様だからという偏見が嫌だから出来る事はやりたいとのこと。

実家暮らしの俺達は頭が上がらないわ。

同じく同居人のアジアも家事を頑張ってくれているが、

リアス先輩との差を見せつけられてがっかりしていた。

頑張れアジア！

そんなアジアも短期間で日本語の文字を覚えてきており、

ひらがなカタカナはマスターし、

漢字の読み書きに踏み込んでいた。

小学生低学年レベルの漢字は読めてきている。

多くは彼女の努力の賜物だと思うが、生来、彼女は

勉強の才能があったのだろう。

学校に通うのが初めてにも拘わらず、

理数系、語学系、共に分け隔てなく苦にしていな。

何よりも勉強が楽しいと言っていたので、

その辺も相まって？み込みが早いのかもしれん。

以前まではイッサーと共に勉強を教えてもらっていたのに

いつの間にか一緒になってイッサーへ教える立場へと変わった。

俺がみそ汁を飲みながら感傷に浸っていると。

ぎゅっ。

アジアがふくれっ面で、テーブルの下で俺の服をぎゅっつと掴んで

いた。

アーシアが俺にだけ見せる行為だ。

何か機嫌が悪くなるとうとうやって訴えてくる。

その行為は可愛いんだけど、何をしたんだ俺は？

「っは！アーシアが何か作ったのか？！それを俺が一切口につけてないんだ。

俺はアーシアの機嫌がよくなるまで、

おかずを手当たり次第に口に詰めていると。

「そういえば二人共、今日は部員達がここへ来るの」

とリアス先輩が言う。

「え？小猫ちゃん達がですか？家で何かするんですか？」

「ええ、今日は放課後のオカルト研究部会議をここで行おうと思ってるの」

「この家で、ですか」

「前にも言ったでしょう？そろそろ旧校舎の中を全体的に掃除する時期なのよ。

業者さんに頼んでお掃除するらしいわ」

というのも半分嘘。本当は使役している使い魔に言いつけ、

旧校舎を掃除させている。両親の手前、旧校舎の事情はそういう事にしていた。

で、家でオカ研をするのね。まあ、今日は新聞部もお休みだから。

偶には俺も出席するか。

リアス先輩が俺のリアス先輩が両親に頭を下げる。

「申し訳ございません、お父様、お母様」

「いいのよ、リアスさん。聞けばイツセーとユウスケの二人が

大変お世話になってるって。私もうれしいわ、

イツセーにも女の子のお友達が増えて」

母さんの言葉に父さんもうんうんと頷く。

「そうだなあ。父さんは、松田君や元浜君も好きだが、やはり、

健全なお付き合いの出来る仲間も大事だと思うぞ。

部屋に集まってエッチなことばかり語り合っているだけじゃ

青春は謳歌できん。祐介だつて友達を家に呼んだつていいんだぞ」
「その通りよ、お父さん。松田君も元浜君はいい子だけど、
目つきがいやらしいのよね。基本的にエッチな学生だし、
イツセーにも悪影響だわ。それに
アーシアちゃんとりアスさんが同居する以上、
あの子たちにはこの家に上がってもらいたくないわね。
年頃の娘さんが汚れてしまうと思うの」
「言いたい放題だが、フォローのしようもないが、
イツセーは同類だから今更だと思うぞ。」
「そういうわけで、今日の会議はこのお家で行うわ。
よろしくね、二人共」
「さたさて、どうなるやら。」



「で、こつちが小学生の時の二人なのよー」
「あらあら、全裸で海に」
「ちよつとストップ朱乃さん！つて母さんも見せんなよ！」
「そうですよ、会議しましょう」
「会議なんてなんのその。」
「家で行うはずだった放課後のオカ研会議は、
母さんが持ってきたアルバムで崩壊した。」
「…お二人の赤裸々な過去」
「小猫ちゃんも見ないでええ！」
「そうそう、そんなの見てもつまらないから
お茶菓子持ってきたからこれでも食べなよ」
「いただきます」
「とりあえず一人は釣れたが、事態は最悪だ、
まさか、アルバムなんて存在するとは、
過去の事とはいえ見られるのは非常に気まずい。
イツセーなんて破天荒な行動ばつかだからな」

余計に恥ずかしいだろう。

そういや、母さんは昔から言ってたな。

「いつか、女の子のお友達がたくさん家に来たら、

二人のアルバムを見せてみたいわあ」

その夢はまずあり得ないと思っただけから、

気にしてなかったが、まさかこんな事態になるとは。

「…小さいイツセー」

リアス先輩は幼年期のイツセーの写真をまじまじと見つめてその頬を真っ赤に染めている。

「…幼い頃のイツセー幼い頃のイツセー幼い頃のイツセー…」

と、何やら呟いてる。

まあ、満足そうで良かった。

「私もなんとなく、部長さんの気持ちが変わります！」

俺のアルバムを見ていたアーシアがリアス先輩の手を取る。

その瞳は爛々と輝いている。

「そう、あなたにもわかるのね。嬉しいわ」

おっと、二人だけの世界に入ってるよ…。

この流れはまずい、誰か助けは。

部屋の中を見回すと、木場もニコニコ顔でアルバムを見ている。

「お、おい！木場！お前は見なくてもいいだろう！」

このままでは、幼年期の映像まで引張って来そうだ。

俺は木場の手からアルバムを取ろうとするが、

ひょいっと軽快な動きでかわしやがる。

「ハハハ、いいじゃないか。もう少し二人の

アルバムを楽しませてよ」

いや、それは勘弁してくれ！

さらに俺はイツセーとふたりがかりで取り戻そうとするが、

木場はものともせずひょいひょい避ける！

騎士の力をこんな所で使うなよ！

流石に取り上げるのは無理か。

イツセーは諦めずに取り上げようとしている。

イツセーは木場をライバル視しているからな
いつか越える壁と見ているが、ここはそんな場面でも
ないだろうに…。

すると木場の足が止まり、とあるページをまじまじと見ている。
楽しむと言うより、何かあり得ないものでも見たかのような。

イツセーもその変化に気が付き、

木場に近づきそのページへ視線を落とす。

「イツセー君これに見覚えは？」

「いや、これは俺じゃなくてユウスケだよ、

この時は似てるからわからないだろうけど」

俺も近づきそのページを見てみるとそこには園児時代の
俺の姿があつた。

写真には俺だけでなく、同い年の園児とその親御さん、
お父さんらしき人が写り込んでいた。

「この男の子って確かよくヒーローごっことか
して遊んでた近所に住んでた子だよな。」

もしかしてこれお前だったとか？」

イツセーが予測を立てているが、

一つ重大な間違いがある。そもそも…

「イツセー、この子女の子だから、

木場じゃないだろ」

「嘘だろ、え、女の子だったの

だっていつも短パンだったし」

「お前な、本人いたら怒られるぞ」

確か小学校上がる前に、親の転勤で外国に行つて
それつきり会つてはないけど手紙やメールは

今でもやりとりしている。

「今では親父さんの仕事を継いだみたいだな

近々こっちに戻ってくるらしい」

すると、木場が写真に写る親御さんを指差す。

というよりも、親御さんの持っている物の

方を指差している様だ。
剣。

模造品だとはおもうが、女の子のお父さんは
古ぼけた西洋剣を携えていた。

「これ、見覚えは？」

真剣に問う木場。おいおい、ちよつと声のトーンがいつもと違
ぞ。

「うーん、いや、何せ昔の事だから覚えてないけどな…」

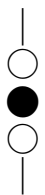
「こんなことがあるんだね。思いもかけない場所で見かけるなんて
…」

一人ごちて、木場は苦笑する。だが、

その目は寒気がするほどの憎悪に満ちていた。

その一枚の写真が、今回の出来事の始まりだった。

「これは聖剣だよ」



カキーンッ！

グラウンドから甲高い金属音が聞えてくる。

「さて、来週は駒王学園球技大会よ。部活対抗戦では、

他の文系部には負けられないわよ！」

奈美部長が力強く宣言する。

「でも、部長。さすがに、オカ研には勝てないっすよ」

相手は全員悪魔だ、俺以外人間の新聞部では勝ち目は無いだろう。

「流石に、全ての競技で勝とうとは思っていないわ

種目によっては勝ち目だってあるはずよ

そこを狙うわ。私たちの強みは情報収集能力よそうでしょ！」

行いう球技は当日知らされるので、

今は主に他の部活の出場選手について調べるしかないだろう。

「じゃあ、報告を聞きましょう。スイッチ！」

奈美部長に呼ばれてメガネをかけた黒髪の男子生徒が説明する。

『今年、最も注目される部活はオカルト研究部だろう。二年生が二名加入して、最近ではグラウンドで球技の練習をしている。』

その力は、運動部顔負けの実力だろう

2年生木場祐斗、足が速くそのタイムは陸上部のペースと引けを取らず

野球などの、競技でその力は脅威となるだろう。

もう一人脅威となるのは1年生塔城小猫、その小柄なからだからは予想のつかない

怪力で、ドッチボールなどの相手に当てる球技では危険な相手だ

加えて、全員身体能力は高いので他の部活に比べても運動部を押さええて優勝候補だ』

今、説明したいかにも普通な見た目の男は、スイッチこと笛吹和義うすいかずよしだ。俺と同じ二年生で、

新聞部では主に学校内での情報収集を担当しており。

主に学校内のニュースを担当している。

とある事情で声を出すことをせず、

手元のパソコンで合成音声ソフトを使い会話する。

『今回の対抗戦で俺は戦力にはならないからな

裏側でのサポートに回ろう』

そうスイッチは運動音痴の為、今回は競技によっては出場しない。

『流石にどの種目になるかは調べることが出来なかった』

『まあ、そこはフェアに戦おうぜ』

―今回の球技大会で戦力になるとしたら。

俺は視線を机に頬杖付いている男子生徒に向ける。

『もしかして、俺を当てにしていますか、』

だるいんで、出来ればパスしたいんですけど』

『ちよつとシカマル！あんたやる気出さないよ！』

あんたも新聞部の一員でしょ。

ほら、チヨウジもなんかいつてやんなさい！』

「ポリッ。 うーん、でも僕も運動は得意じゃないし
出来れば応援してたいな〜」

「二人共先輩に失礼よ！やる気を出しなさい！」

この三人は新聞部の一年生でだるそうに話していた

黒髪をちょんまげのように一つ縛りにした三白眼の男子生徒が、
奈良シカマル、こう見えてIQが高く成績はトップに入ることもある
が、

そのめんどくさがりな性格上テストをサボる事がある為、

成績は中間ぐらいを常にキープしている。

本人が言うには「卒業出来れば、問題ないでしょ」とのこと。

そして、この打合せの中呑気にポテチを食べている小太りで

ハリネズミのような逆立った茶髪で糸目が特徴の男子生徒は

秋道^{あきみち}チヨウジ、この見た目で運動神経は良く。

普段はのほほんと温厚だが、デブと呼ばれることを嫌い、言った相
手には

その体でタツクルしてくると言う二面性を持っている。

俺もその現場にいたことがあったが、気のせいかチヨウジが少し膨
らんでいた気がした。

次にそんな二人を叱った、金髪の長いポニーテールが特徴の女子生
徒は。

山中^{やまなか}いの、彼女は二人の面倒をよく見ており。

新聞部以外でもよく三人で行動している。

三人は幼馴染で小学校の時から同じ学校、クラスと続いているそう
だ、

言わば腐れ縁というやつだ、新聞部にも嫌がる二人をむりや連れて
きて

所属させていた。最初は面倒に思っていた二人も

今では、町の美味しいお店の特集を組むほどだ。

チヨウジが味の感想を言い。いのがインタビューし、

シカマルが文章にまとめる。いい連携を取っており。

今では、中々人気があり、ファンまでついている。

「なあに、ユウスケ。ここは俺に任せろよ！」

この忍者の末裔、服部様が見事に活躍してやるよ」
俺に声を掛けてきたのは、三年生の男子生徒服部全蔵先輩だ、

いつも亜麻色の前髪で目が隠れていて、常にマフラーを巻いている変人だ。

「ですけど、服部先輩は去年の大会の時に痔が悪化したって言ってトイレから

戻ってこなかったじゃないですか。まったく役に立たなかったし」
「今回は大丈夫だボラギノールは買ってきたから！」

この人は自称忍者を語っており、いうだけあって身体能力は高いのだが、

いかんせん大事な時になると、腹を壊してトイレに立てこもるので、

活躍した覚えがない気がする。

「そんな体たらくだから自称忍者なんて呼ばれるのよ
幼馴染としてこつちが恥ずかしいわ」

服部先輩に悪態付くのは三年生の猿飛あやめ先輩で
淡い紫色のロングヘアにメガネをかけた女性だ。

この人も忍者を語っているが、実力は本物で、
今ではとある生徒のストーカーにその実力を発揮している。

「猿飛先輩もストーカー行為もいい加減にしないと警察呼ばれますよ」

「ストーカーじゃないわ！私は銀さんを見守っているだけだよ！
ーそれをストーカーというんだよ。」

「まったく、あの男のどこがいんだか？」
「ちよつと全蔵！私の銀さんを悪く言うつもり！」

「いや、あの男トイレで紙をくれて言ったたら。
紙やすりよこしたんだぞ、殺す気か！」

「服部先輩。俺も持っていたら紙やすり渡してましたよ」
出来れば、両面紙やすりの奴を渡してやりたいところだな。

「ねえ、もうちよつと先輩を敬えよ！俺これでも一応先輩だぞ！」

「だって、毎度紙が無いって指定のトイレットペーパー

持って行かされる身にもなってくださいよ

そもそも、紙の有無位確認してくださいよ」

他に友人もおらんのかこの先輩は。

「いやあ、悪いと思うけどさ、切羽詰まった時は

そんな余裕ねえよ」

ー常にピンチじゃねえかこの人。

「言い合いもその辺にせい、とりあえず、この部に所属している者は皆
武道経験者だったり、

忍者の末裔だったりしておる。最近では兵藤も鍛えておるよう
じゃし、

頑張れば上位には食い込めるじやろうな」

俺と全蔵先輩の言い合いを止めたのは二年生の吉原月詠だ、
金髪を後ろでまとめ前髪を簪で留めている。

顔の左側には過去の事故のせいで縦横二本の大きな傷がある。

それでも、学園の上位に入る美人だ。

彼女は何故か古いこと使いで喋るが、

理由を聞けば「婆様の喋り方が写ったのじゃ」という。

よく忍者コンビの暴走を止める役割で一緒にいることが多い。

そんな二人の影響なのか何故か制服の裏に苦無を隠し持っていて
手荷物検査の度に、

見つかっているのをよく見る。

ちなみに忍者コンビは手荷物検査に引つかかる事が無く。

全蔵先輩に至ってはよくジャンプを読んでいるところを見かける
のに

どうやって通過したか不明なのだ、

本人に聞いても「忍者だから」としか言わないしな。

この三人は部活動の活躍などを主に特集を組んでいる。

そして俺と部長で都市伝説のオカルト特集を組んでおり、

総勢9人で新聞部を回している。

なんやかんや言ったが、全員頼りになるメンバーだ。

「じゃあ、今日ももらった記事で新聞はしばらくお休みよ。

練習なんだけど今日は各自予定があるから明日からビシバシやるわよ」

「「おー」」

部長の掛け声に何人かが返事する。

—○○—

翌日の昼休み。

俺は弁当をスイッチと月詠の二人と取っていた。

「そういえば、オカルト研究部について、一つ噂が出回っているんだが、

ユウスケにも関係のある話なんだが」

噂：？ 悪魔に関連する物だろうか流石に正体がばれたなんてことは無いだろうが。

「何でも、兵藤がオカルト研究部の女性陣の弱みを握り、良からぬことをしているとな」

：？なんだその噂は、この場合の兵藤はイツセーの事だろうが、完全に風評被害だな。

「それ、情報源どこなんだ？」

「兵藤一誠の友人である。元浜と松田の二人が言いふらしているまあ、あの二人の事だから嫉妬から妄想を吹聴しているだけだがな」

なるほど、これは叱っておかないとな。

「サンキュー、スイッチあの二人には俺からもお灸をすえとくよ」

「なら、その時はわっちも手を貸そう。あの二人には覗きやら被害の相談が絶えないからな。最近は無くなったがぬしの弟について

いても

相談が来ておるからの」

—まったくもつてもうしわけない。

「これからオカルト研究部に行くから、イツセーには

俺から言っとくよ」

「最近ぬしはオカルト研究部によく言っ居る様じやの掛け持ちでもするのか？」

月詠が俺に尋ねてくる。

「いや、イツセーとアーシアが所属しているからな。

アーシアは留学で家にあずかっているからな何かと心配だし。

イツセーは被害報告あるから何か迷惑かけてないか心配なんだよ」

「なるほど、相変わらずその世話焼の性格は変わっていないようだな」

「まあ、わっちらもそんなお前は嫌いではないがな」

「人の性格なんて簡単には変わらないさ、じゃあまた後でな！」

俺は空になった弁当箱をしまい、席を立つ。

そして、教室を見回す。

—アーシアはどこだ？

あつと、クラスの端っこで他のクラスメイトと昼食を摂っている。

「おい、アーシア。ぐ飯食べたかー？」

俺はアーシアの方へ声を掛ける。

「アーシア、彼氏が呼んでるよ」

アーシアと一緒に食事していたメガネをかけた女子

桐生藍華きりゆうあいかがいやらしい表情で言う。

「かつ、かかかかかか彼氏いいっ!」

桐生の言葉にアーシアはかつてないほどに動揺していた。

アーシアがそんな風に慌てふためくところ、初めて見た気がする。

そりゃ、仲良くしている男子をいきなり「彼氏」だなんて言われ

ば

誰しも動揺するだろうが、何もそこまで驚かなくても…。

「え？違うの？あんたらよく二人でいるから、

てつきり付き合っているのかと思っちゃった」

「そ、そそそそそ、そんなこと…あうううあ…」

お顔が真っ赤になってしまったアーシア。

教室でそんなこと言う俺にまで視線が集まってくる。

流星に恥ずかしいんだが!

「その条件で言う俺は何人彼女がいることになるんだよ

流星に話が飛躍しすぎだろ」

「ふーん。そうなんだ。でもさ、傍から見たら、

「あんたたち毎晩合体しているカップルにしか見えないう？
いつつ二人でいるし、仲睦まじいじゃん？」

「一応親公認で同居してるんでしょ？」

「若い男女が若い男女の一つ屋根の下で夜にすることと
言ったら、そりゃねえ。むふふふ。ちなみに『裸の付き合い』
を教えたのも私さ！どう？堪能した？」

「マジか、こいついかれてやがる。」

「こいつの頭の中での俺はどんな印象なんだよ。」

「ほう、面白そうな話をしているな俺も混ぜてくれないかな」
話を聞きつけてスイッチまできやがったか、
失言すればゴシップ特集に乗ってしまう。

「前は当たり障りのない記事にしたから逃れられたが、
今回は、そもいかなそうさだ。」

「あれは、桐生の仕事だったのか、！そもそも、
お前は俺を何だと思ってるんだ、

「ロボットじゃないんだから合体なんかしません」

「ええ、だってあのイツセーの兄だし
意外とムツツリだと思っただけだ」

「そんな理由かよ！この話はそうそうに切り上げないとな。」

「それで？『裸の付き合い』って何の事かなユウスケ君？」

「畜生スイッチの奴は終わらせる気がなさそうさ、

「でも、おかしいなあ。アーシアってあんたの事ーむがっ！」

「何かを言いかけた桐生の口元をアーシアが両手を使って全力で塞
ぐ。」

「あーあーあーっ！桐生さああん、やめてくださいいいいい！」

「アーシア…？ かつてないほど、お顔が紅潮しているんだが…。
しかも涙目だしな。」

「何か俺に知られたくない秘密でも握られているのだろうか？」

「うーむ、女の子同士の話だろうし、俺も介入しにくいぞ。」

「止めぬか二人共、桐生もアーシアが困っておるじやろう。」

「スイッチもそういう話はあまり詮索をするものじやなからう」

俺がどうやってこの場を切り抜けようか悩んでいると、そこへ 原やってきて救いの手を差し伸べてくれた。

ーありがとう 原！

いつもは傷のせいかな怖い見た目だが、

今は女神に見えてくるよ。

「ありがとう。 原！よし行こうアースア」

「は、はいいいー」

そうして、俺とアースアは途中でイツセーを拾って

旧校舎へ向かうのだった。

—●—

部室に入ると、既に他のメンバーは集まっていたが、部員じゃない方もいらっしやっていた。

ーなっ！

ソフアーに座る部員以外の人物に俺は驚愕した。

「生徒会長!」

そう、ソフアーにているのはこの駒王学園の生徒会長様だ。

冷たく厳しいオーラを発している知的でスレンダーな美人だ。

日本人離れた美貌の持ち主で、名前は支取しとり蒼那そうな先輩。

三年の上級生だ。学内では、四番に人気がある。

ちなみに一番はリアス先輩で二番は奈美先輩で三番は朱乃さんだ。

怖そうな雰囲気邪魔して、他者を近づけさせなかった。

キツそうな目つきも関係しているとは思うが、この人も相当な美人だ。

その隣を見れば、会長だけでなく生徒会の関係者らしき男子が一人付き添っていた。

「なんだ、リアス先輩、もしかして俺達の事を兵藤達に話していないんですか？

同じ悪魔なのに気づかない方もおかしいけどさ」

随分上から目線だなこいつ、最近生徒会の書記として追加メンバー

で入った男子生徒だっけ？

その書記の男子に生徒会長が静かに言う。

「サジ、基本的に私たちは『表』の生活以外ではお互いに干渉しないことになっているの

だから仕方ないのよ。それに彼らは悪魔になって日が浅いわ、当然の反応をしているだけ」

―なるほどね。

今の話の通りなら、生徒会メンバーは全員悪魔なのかな？

横で驚愕しているイツセーを見て朱乃さんが説明してくれる。

「この学園の生徒会長、支取蒼那様の本当の名前はソーナ・シトリー。

上級悪魔シトリー家の次期当主さまですわ」

上級悪魔!?!しかもシトリー家といえば、七十二柱の一つじゃないか。

この学園にリアス先輩以外の上級悪魔が居たなんてな。

朱乃さんがさらに説明してくれる。

「シトリー家もグレモリーやフェニックス同様、

大昔の戦争で生き残った七十二柱の一つ。

この学校は実質グレモリー家が実権を握っていますが、

『表』の生活では生徒会―

つまり、シトリー家に支配を一任しております。

昼と夜で学園での分担を分けたのです」

書記の男が再び口を開く。

「会長と俺達シトリー眷属の悪魔が日中動き回っているからこそ、

平和な学園生活を送れているんだ。

それだけ覚えてくれてもバチは当たらないぜ？

ちなみに俺の名前は匙さじげんしろう元士郎。二年生で会長の『兵士』だ」

「おおつ、同学年で同じ『兵士』か!」

イツセーが嬉しそうに反応する。

「同じ『兵士』同士これからよろしく頼むな」

そんな俺達を見て書記の匙は溜め息をつく。

「俺としては変態三人組の一人だったり、学校新聞を使って妄想を書

いてる

おまえらと同じなんて酷くプライドが傷つくんだけどな…」

「な、なんだと！」

イツセーの事は仕方ない今まで行ってきた事は反論できないからな。

だが、俺達の学校新聞が妄想だと言ったか！

「喧嘩売りに来たのかてめえ！何が妄想だ、全て真実しか、かいとらんなわ！」

それ以上侮辱するなら気なら表出ろ！白黒つけてやる」

「おっ？やるか？銀色のオーロラなんて出まかせ書きやがって

何が真実だ！こう見えても俺は駒を四つ消費の『兵士』だぜ？

最近悪魔になったばかりだが、お前らなんぞに負けるかよ」

挑戦的な物言いをする匙だが、会長が鋭く睨む。

「サジ。お止めなさい」

「し、しかし、会長！」

「今日ここに来たのは、この学園を根城にする上級悪魔同士、

最近下僕にした悪魔を紹介し合う為です。

つまり、あんたとリアスの所の兵藤兄弟とアルジエントさんを

合わせる為の会合です。私の眷属なら、私に恥をかかせない事。そ

れに——」

会長の視線が俺達へ向けられる。

「サジ、今の貴方では二人には勝てません。

フェニックスの三男を倒したのは一誠君なのだから。

——『兵士』の駒を七つ消費したのは伊達ではないという事です。

祐介君の方も異世界の話は真実です。私にも報告は来ています。

それに彼は駒こそ『兵士』一つの消費ですが、

命を掛けた実戦を多く経験していますよ」

「駒七つ!?というか、フェニックスをこいつが!？」

あのライザーを倒したのがこいつだなんて…。

俺はてつきり木場か姫島先輩がリアス先輩を助けたものだ…

それに、異世界なんてやっぱり信じられないというか…」

匙は俺達を目元を引きつらせながら見てくる。
すると、会長が俺達へ頭を下げる。

「ごめんなさい、兵藤祐介君、兵藤一誠君、アーシア・アルジェントさん

家の眷属は貴方達よりも実績がないので、失礼な部分が多いのです。

よろしければ同じ新人の悪魔同士、仲良くしてあげてください」

薄く微笑みながら会長はそう言ってきた。

氷の微笑というのかな。悪魔的なものを感じないし、

元来こういう笑い方しかできないのかも。

「サジ」

「え、は、はい！…よろしく」

渋々ながらも匙は俺達へ頭を下げてきた。不満たらたらっぽいけど。

「はい、よろしくお願いします」

アーシアが屈託なくニツコリしながら挨拶を返す。

この子はいつもいい子だなあ。

「アーシアさんなら大歓迎だよー」

匙がアーシアの手を取り、俺達の時とは正反対の行動をとる。

この野郎！

俺とイツセーは匙の手をアーシアから引き離し

それぞれの手を思いっきり力を込めて握手してやった。

「ハハハハ！匙君！俺の事もよろしくね！

内の純粋なアーシアに気安く触れるなよ！」

「そうそう、同じ『兵士』なんだよろしく頼むよ

っーか、アーシアに手を出したらマジ殺すからね、匙君！」

無理に作った笑顔で言っつてやった。

するとあつちも半笑いしながら握る手に力を込めてきやがった。

「うんうん！よろしくね、二人共！男の嫉妬なんて醜いぞ！

やー、天罰でも起きない物かな！下校途中、

落雷でも当たって死んでしまえ！」

暴言を暴言で返す俺達。異様な光景だろうな。でもこいつだけは許さん！

何故かこつちを下に見ているこの態度が気に入らない。つーか、こいつマジで殴りたい！

アーシアに手を出したらただじや置かないよ！

お互いのご主人である先輩達は「大変ね」「そちらも」なんて会話を溜息をつきながらしていた。

「ちっ。俺んところの生徒会メンバーはお前の所よりも強いんだからな」

匙は吐き捨てながら、握手の手を離す。

会長は出されていたお茶を一口飲むと、静かに語りだす。

「私はこの学園を愛しています。生徒会の仕事もやりがいのあるものだ」と

思っています。ですから、学園の平和を乱すものは人間であろうと悪魔であろうと許しません。それは貴方でもこの場に居る者たちでも、

リアスでも同様の事です」

その言葉は俺とイツセーとアーシア、匙、新人悪魔に向けられたものだとすぐに理解できた。

要するに学園生活を妨害する者は誰であつても許さない——と。この人はそれだけ駒王学園を愛しているのだと思う。

流石会長の座に座っている方だ。

「お互いのルーキー紹介はこれで十分でしょうね。では、私たちはこれで失礼します。お昼休みに片付けたい書類がありますから」

会長は立ち上がり、この場を後にしようとする。

「ソーナ・シトリー様。これからもよろしく願います。」「二よ、よろしく願います」

俺が改めて会長へ頭を下げて挨拶をし、イツセーとアーシアもそれに続いた。

いち新人悪魔としての挨拶だ。相手は上級悪魔でリアス先輩の知

人。

相手の下僕があんなのでも。礼を欠くわけにはいかない。

俺達グレモリー眷属の悪魔が頭を下げるのは当然のことだ。

―ライザー？なんのことだか？

会長は微笑み、「ええ、よろしくお願いします」と返してくれた。

部室を出る時、微笑んだまま会長がリアス先輩に言う。

「リアス、球技大会が楽しみね」

「ええ、本当に」

リアス先輩も笑顔で返していた。

ああ、この二人、基本的に仲がいいんだなってすぐに理解できた。

会長はそれだけ言うと、足早に部室を後にした。

「イツセー、ユウスケ、アーシア。匙君と仲良くね。」

他の生徒会メンバーともいずれ改めて悪魔として

出会うでしょうけど、同じ学び舎で過ごす物同士、喧嘩はダメよ？」

ニッコリとリアス先輩が言う。

「はい！」

先輩にそこまで言われたら従うさ。

野郎がどんなにムカついても喧嘩はしません！

しかし、この学園にこんな秘密があったとは…。

この学園にはまだまだ俺の知らない事はあるそうだな。

第28話 「球技大会」

パーン！ パーン！

球技大会を知らせる花火が空に響く。

今日の天気予報では夕方から雨だそうだが、大会が終わるまで降らないことを願おう。

『漫画研究部の塚本くん、橋岡先生がお呼びです。』

至急、職員室までー』

体操着に着替えた俺と新聞部の部員達は校庭の一角に集まり、それぞれのリラックスする方法で時間まで体を休めていた。

と言っても、部活対抗戦は最後の方だ。

まずはクラス対抗戦。俺のクラスは野球だった。

アジアはオカルト研究部で練習していたから、クラスに貢献すると頑張っていた。

次に男女別の種目。で、昼を挟んで午後に部活対抗戦だ。

俺は体を温める為に軽い筋トレ。

シカマルは下に敷いたシートに横になり仮眠を取っている。

チョウジはその横でポテチを頬張り。

スイッチはルールブックを読んでルールの最終確認をしている。

月詠はいのに手伝ってもらってスイッチ中。

服部先輩はトイレに行って帰ってこず、

猿飛先輩は現在ストーカー中。

奈美部長は部活対抗戦の種目が発表されるのを確認しに行っている。

あつと帰ってきたようだ。

戻ってきた奈美部長は不適な笑みを浮かべていた。

「上位に入るのは確定したわ！」

「部長、それで種目は何ですか？」

奈美部長は此方を向き答える。

「ドッジボールよー！」

俺は嫌な予感しかしなかった。

俺は空いた時間を利用して奈美先輩のクラス対抗戦を見に来ていた。

先輩のクラスはテニスでの勝負らしい。

個人競技の為、代表者一名でのシングル戦らしい。

奈美先輩は選手じゃないらしいが、

俺の知っている人物が選手だというので

こうして応援に来ていた。

「部長おおおー！がんばれええええー！」

テニスコートに到着すると、

イツセーがフェンスからリアス先輩にエールを送っていた。

コートではリアス先輩がクラス代表選手として、

他の上級生女子とテニス勝負をしている。

パコーン！

軽快な動きでリアス先輩が相手を翻弄しようとするが、

その相手もすごい！

「会長さまあああ！キヤーー！」

女子達の黄色い声援が沸いた。

そう、リアス先輩の相手は生徒会長の支取蒼那先輩だ。

「凄いわね、二人とも悪魔つてのも驚きだけど」

こんなところで悪魔同士の戦いを見られるなんて」

隣で奈美部長も楽しそうに観戦している。

本当にその通りだ。まさか、こんなところで

上級悪魔の戦いが始まるなんてね。

しかも二人ともまったく手を抜いていない。

真剣そのものでラケットを振るっている。

「いくわよ、ソーナー！」

「ええ、よくつてよ、リアス！」

なんて会話までしている。実はノリノリだろ、あの二人。

まるで、スポコンものようだ！、見ている周りも燃えている！
「会長おおおお！勝つてくださあぁあぁい！」

あ、生徒会の匙の奴も反対側のフェンスで応援している。
『生徒会』と刺繍された旗まで振っているぞ。

すげえな、あいつ気合入ってんな！

「おくらいなさい！支取流スピボール！」

会長の放つボールが高速回転でリアス先輩に迫る。

「甘いわ！グレモリー流カウンターをくらいなさい！」

ラケットで返そうとするリアス先輩だが、ボールが突然軌道を
変えて急落下した！

うおおおおお！ すげえ！魔球か!?

「15-30！」

いまので、会長にポイントが入った！

「やるわね、ソーナ。流石私のライバルだわ」

「うふふ、リアス。負けた方が小西屋のトツピング全部つけた

うどんを奢る約束、忘れてはいないわよね？」

「ええ、私ですらまだ試していないそれをあなたに先を越される
なんて屈辱だわ。絶対に私が勝たせてもらう！」

私の魔動球は百八式まであるのよ？」

「受けて立つわ。支取ゾーンに入ったものは全て打ち返します」

何やら二人共瞳に炎が宿っているのですが…。

てか、賭けの対象が庶民的すぎないか二人共…。

まあ、それが二人のいい所なのかもしれない。

人間界に住むのも長いと感覚も人間っぽくなるのかな。

結局リアス先輩と会長の凄まじい決戦は長い一戦となり、

最終的には両者共にラケットが壊れたことよって、

同位有償ということ片が付いた。

そりゃ、あんな激しいラリーを繰り返していれば普通のラケット
なんて壊れるよ。もはやそれは、テニスを越えた何かだったよ。

誰かがあの二人は立派なテニスプレイヤーとか

言っていたがなんのことだったのだろうか…

そして、大会は部活動対抗戦の時間となった。



「先輩なんすかその恰好？」

新聞部の皆が集まると服部先輩だけおかしな恰好をしていた。

「何ってコスチュームだよ！」

忍者のコスチュームっていったら忍装束だろ！」

そう、服部先輩はよく映画とかでもよく見る忍装束に着替えていた。

「だけど…。」

「全身青っておかしいでしょ！忍者戦隊でも作る気ですか！」

服部先輩の格好は全身鮮やかな青色だった。

水の中ならいざ知らずこんな所では目立ってしょうがない。

今も他の生徒がなんだあれと注目を集めている。

「いいねえ、人に隠れて悪を斬るってか面白そうじゃないか」

「いや、隠れられてないでしょ！目立ってますから」

そういうのは、普通日常は目立たず生活するものでは、

「忍びなれども忍ばない、いや！忍ぶどころか暴れるぜ！」

「「「いや、忍べよ！」」」

ポーズを決めてカッコつける服部先輩に部員皆でツッコむ。

「全蔵のボケも今に始まったことじゃなけど、

他の部活は共通の鉢巻きだったり帽子やユニフォーム

を用意しているみたいね。内もそういうの用意するべきだったわ

ね」

「心配ないさ、この時の為に皆の衣装は用意してきたからな」

そう言っつて服部先輩は近くに置いてあつた段ボールから色違いの

忍装束を出してきた。

色は赤・黄・黒・白・オレンジ・桃・緑。

「ユウスケお前には特別に金色の衣装を用意したぜ！」

服部先輩は段ボールから金ぴかの衣装を出してきた。

「いや、更に目立ってどうするんですか！
遠慮しますよ！」

「私も流石にこれは着たくないわね」

「わっちらは新聞部じゃぞ、なぜ衣装が忍びなんじゃ」

「俺もパスつすね、流石に恥ずかしいつす」

皆も流石にこれは嫌だったらしい。

「そんなあせつかく用意したのに」

崩れ落ちる服部先輩をみて流石にかわいそうになってくる。

「なら、額当てぐらいは付けてあげますよ。」

鉢巻き代わりにはなるでしょう」

俺が額当てを付けると皆も渋々つけてくれた。

「元氣出してください先輩。そもそもチョウジは寸法あってないから
皆は着れませんよ。次からは皆に相談してからにしてくださいね」

「ああ」

『オカルト研究部の皆さんと新聞部の皆さんはグラウンドに集まって
下さい』

アナウンスでの呼び出しだ！初戦からオカ研との戦いとは、
さあ、勝ちに行こう！



「喰らええー！イッセー！日頃の恨みいいいい！」

「うおおおおっ！てめえ、ふざけんなあああ！」

俺が何したってんだああ！」

俺が投げた球を避けて、イッセーは泣きながら叫んでいた。

開始された球技大会の部活対抗戦！

種目はドッジボールで初戦からオカルト研究部が相手だ。

だが、開始早々から俺はイッセーを集中的に攻撃していた。

単純な話だ。俺はイッセー以外を狙うわけにはいかないからだ、

リアス先輩、駒王学園の三大お姉さまの一人。

大人気の学園アイドル。狙うだけで非難を浴びるだが、

彼女は上級悪魔だ、つまり当たらない。

朱乃さん、リアス先輩と同じく二大お姉さまの一人。同じく学園のアイドルでリアス先輩の右腕だ、実力も俺よりも上、当たらない。

アーシア、二年生ナンバー1の癒し系天然美少女。

今は敵だが、傷つけたくないから俺には当てられない。小猫ちゃん、学園のマスコットのなロリ少女。

あの力と頑丈さならどんな球でも受け止めるだろう。逆にパスにしかならないから狙えない。

木場、女性人気ナンバー1の王子様。

そのスピードを生かしてどんな球も余裕で避けられる為当たらない。

そしてイツセー、神器が使えない状態なら実力は均衡している。

何よりあいつが問題を起こすたんびに呼び出されていたからな。今日はその鬱憤を晴らさせてもらおうぜ！

そして、イツセーは全校生徒から嫌われているからな。奴への悪意が集中している。

「イツセーを殺せえええ！」

「お願い！イツセーを倒して！リアスお姉さまの為に！」

朱乃お姉さまの為に！」

「アーシアさんを正常な世界へ取り戻すんだ！」

「落ちろ！右！いや、正面か！」

「殺せえええ！死ねえええ！」

ロリコンは俺だけでいいんだあああ！」

「出てこなければやられなかったのに！」

ギャララーから死ね死ねコール！全員イツセーへの妬みや憎しみで目がギラギラと殺意に満ちている。

他の部員達も声援に流されてイツセーしか狙っていない。

もしかしたら、イツセーは全校生徒から嫌われてるんじゃないやなからうか。

「イツセーにボールが集中しているわ！戦術的には『犠牲』」

つてことかしらね！イツセー、これはチャンスよ！」

「部長おおお！がんばりますううう！クソ！」

遊びでやってんじゃないんだよ！」

イツセーが叫び反撃に出る。

イツセーに集中した玉も小猫ちゃんがすかさず庇い玉をとられてしまった。

その細腕から繰り出されるパワフルな一撃に皆やられてしまった。

皆避けようとする中、唯一チョウジだけがその体型を活かして、ボールを受け止めようとしたが、

衝撃を受け止められず、外野まで吹き飛ばされてしまった。

これで、内野には俺と服部先輩だけとなった。

「ふ、忍びの俺に当てることが出来るかな？」

「服部先輩、カツコつけているところ

悪いですが、俺達誰も当てられてませんよ」

普段の修行の成果かイツセーの奴避けるのが上手い

以前と違って視野が広がってやがる。

「なら、当ててやるさ！喰らええ！イケメンがああ！」

服部先輩はイツセーではなく遠い目をして

あからさまに試合に集中していなかった木場へボールを打ち出す

！

皆の意表を突き、そのまま当たると思っていたが、

「何ボールつとしてやがるんだ！」

イツセーが毒づきながらも駆け寄り木場を庇うように前に出る。

「…あ、イツセーくん？」

木場らしくなく気の抜けた声が聞える。

何やってるんだ？あいつ。

そして、イツセーが体をはりボールを受け止めようとした

その時、ボールの軌道がフォークボールのように降下していく。

そして勢いをそのままにイツセーの下腹部へ。

ドオオオオオンツツ！

「ーッ!!」

直撃するボール…。

…球が、玉に…。うわあ、なんちゆう攻撃を…。

イツセーはあまりの痛さに股間を押さえつつ、

その場に倒れ込んでしまった。

「先輩流石にあれはまずいんじや」

「忍びはな合理的主義なのさ弱点を狙うのは当たり前だろ」

あれは、男にしか分からない痛みだ…。

倒れたイツセーに駆け寄るオカ研の部員達。

リアス先輩がイツセーを抱える。

「ぶ、部長…。た、玉が、俺の…」

「ボールならあるわ！よくやってくれたわね、イツセー！

さして、私のかわいいイツセーをやった相手を倒すわよ」

リアス先輩の目がマジだ。

てか、イツセーは上手く呼吸が出来ないのか

口をパクパクしている。

「あらあら、部長そうではなくて、違うボールが

大変なことになっているようですよ？」

朱乃さんの話でようやく事態を理解した様子のリアス先輩は絶句

していた。

「ーっ。なんてことーアジア、ちょっと来て。

こんなことで不能になったら困るわ！」

「は、はい。もしかして、イツセーさん、怪我を…?」

「ええ、どうやら大事な所をね。悪いのだけれど、

物陰で回復してあげてちょうだい」

「大事な所？よくわかりませんが、分かりました！」

「小猫、人の見えない所までイツセーを連れてってあげてね」

「…了解」

これは、チャンスかやりづらい二人が一気にいなくなるとは。

「ぶ、部長、お、お役に立てなくて…」

「いいのよ、イツセー。あなたはよくやってくれたわ。あとは私達に任せなさい」

そう言うと、リアス先輩はイツセーの頬を撫でる。なんか、感動のワンシーンみたいになってるがこれってドツチボールだよな。

そこで、むんずとイツセーの襟首が掴まれる。ズーリズーリ。引きずられていくイツセー。

引きずっているのは小猫ちゃんだ。

「イツセーさん！気をしつかり！」

アーシアが励ましながら付いていく。

「イツセーの吊い合戦よ！」

リアス先輩が怒りと気合の入った声で宣言する。

いや、イツセー死んだことになってるよ。

だが、まずいいリアス先輩が本気になってしまった。

「ユウスケ！仕方ないけど今は敵同士よ！」

本気で行くわ！」

「ちよつと服部先輩！相手をマジにさせちゃったじゃないですか

この後どうするんですか!？」

「落ちつけユウスケ、焦っても状況は変わらない。

なら、落ち着いて球を避ける、いずれ反撃の

チャンスがやってくるはずだ、…多分、きっと…」

せめて最後まで言い切ってくれよ！

「食らいなさい！」

リアス先輩が球を放つ！

放たれた剛速球は服部先輩を狙う。

「甘い！」

常人なら当たっていただろう球だが、

そこは自称忍者、紙一重で避けて見せた。

「拾え！ユウスケ反撃だ！」

服部先輩がリアス先輩達から目を離すことなく指示をだす。

「はい！」

俺は球を拾おうと近づこうとしたがそこで異変に気付く。

「言ったはずよ、本気で行くって、」

さっきの玉には本気で回転を掛けたのよ!」

そう、地面に落ちた球は今も回転しており、

そのまま、背中を見せている、服部先輩に飛んでいく。

「避けてください!服部先輩!」

ドオオオオオンツツ!

「ッ!」

ボールが服部先輩の尻に直撃する。

「ぐあああ、け、ケツがあああ!」

イツセーと同様に尻を押さえて倒れる服部先輩。

「大丈夫ですか、服部先輩!」

「まずい、ケツが割れたあ」

「落ち着いてください先輩、ケツは元々割れています!」

「ちよつと全蔵何やってるのよ」

外野に居た猿飛先輩が近づいてくる。

取り敢えず保健室に連れていくか、

アジアに回復してもらうわけにはいかないしな。

「保健室に運びましょう。流石に部員が連れていくと

戦力が減るので、できれば他の人をお願いしたいところですけど」

「大丈夫よ、それなら知り合いに運ばせるから。」

「ちよつと!全蔵を保健室に運んで頂戴!」

猿飛先輩の呼び声で観戦していた生徒達の中から、

服部先輩と色違いの忍装束をきた連中が現れて、

服部先輩を連れて行ってくれた。

まじで忍者戦隊作る気だったのか…。

これで、内野は俺一人か…。

俺はボールを拾い構える。

「やあああってやるぜえええ!」

リアス先輩へとボールを放った。

そうして、俺とオカ研とのガチンコ対決が幕を開けた。

『オカルト研究部の勝利です』

結果俺達は負けた。

まあ仕方ない。皆ベストは尽くした。

俺はグラウンドに大の字に倒れながら敗北を告げる放送を聞いていた。

—○●○—

ザーツと、外はすっかり雨模様だった。

大会が終わった後だったのが幸運だった。

俺はとあることが気がかりでオカ研の部室まで来ていた。

パン！

雨音に混じって乾いた音が響く。リアス先輩に叩かれたからだ。

俺でもイツセーでもない。—木場だ。

「どう？少しは目が覚めたかしら」

リアス先輩、かなり怒っている。

競技はオカルト研究部の優勝に終わった。

途中から離脱していた三人も復帰し、チーム一丸で勝利を

勝ち取ったが…。

一人だけ非協力的な奴がいた。木場のことだ。

何度か貢献はしていたが、終始ボケっとしていた。

試合中もリアス先輩に怒られていたが、

それでも木場はどうでもよさそうにしていた。

まあ、リアス先輩が怒らなくても、イツセー辺りが怒りそうだけだな。

頬を叩かれても木場は無表情、無言だった。

…な、なんだ、こいつ？本当に木場か？

宇宙人がアンドロイドが木場に擬態しているんじゃないか？

あまりの変貌ぶりに別人のように思えてしまう。

いつもはニコニコ顔で爽やかなイケメンだったのに。

と、木場は唐突にいつものニコニコ顔になる。

「もういいですか？球技大会もおわりました。」

球技の練習もしなくていいでしょうし、

夜の時間まで休ませてもらってもいいですよね？

少し疲れましたので普段の部活は休ませてください。

昼間は申し訳ございませんでした。どうにも調子が

悪かったみたいです」

「木場、おまえマジで最近変だぞ？」

「君には関係無いよ」

イツセーが問うが、木場は作り笑顔で冷たく返してくる。

「そんな言い方ないだろ、俺達だって心配してるんだ」

俺の言葉に木場は苦笑する。

「心配？誰が誰をだい？基本、利己的なのが悪魔の生き方だと思うけど？」

まあ、主に従わなかった僕が今回は悪かったと思ってるよ」

何かあったのか？いつものこいつらしくない。

俺がどうやって説得するか悩んでいると、イツセーが話しかける。

「チーム一丸でまとまっていこうとしていた矢先でこんな調子じゃ困る。」

この間の一戦でどんだけ痛い目に遭ったか、俺ら感じ取ったことだろう？

お互い足りない部分を補うようにしなきゃこれからダメなんじゃねえかな？

仲間なんだからさ」

イツセーの言葉に木場は表情を陰らせる。

「仲間か」

「そうだ、仲間だろ俺達は！」

「君達は熱いね。：イツセーくん、ユウスケくん、

僕はね、こここのところ、基本的なことを思い出していたんだよ」

突然、木場が勝手にそう話し出す。

「基本的なこと？」

「ああ、そうさ、僕が何のために戦っているか、を」
「部長の為じゃないのか？」

イツセーはそう質問するが、それは即否定される。
「違うよ。僕は復讐の為に生きている。」

聖剣エクスカリバー。それを破壊するのが僕の戦う意味だ」

木場の強い決意を秘めた表情。

そのとき、俺は初めてこいつの本当の顔を見た、
その瞳には憎しみの炎がともっていた。

—○○●○○—

木場 s i d e

土砂降りの中、僕は傘もささずに歩いていた。

熱の上がった頭にはちようどいぐらいだと思う。

—ケンカしてしまった、部長と。

自分を救ってくれた主に初めて反抗してしまった。

『木場祐斗』として失格だろう。

けれど、聖剣エクスカリバーへの復讐心を忘れたことなんてなかった。
た。

ちよつと学園の空気に呆けていただけだ。

仲間も出来て、生活も得て、名前も与えられた。

生き甲斐も主であるリアス・グレモリーにもらった。

これ以上の幸せを願うのは悪いことだ。悪いに決まっている。

想いを果たすまで、同志たちの分を生きていいなんて思ったことなど…。

ぴちや。

雨とは違う水の音を僕の耳が捉える。

眼前に神父がいる。十字架を胸につけ、

憎き神の名の下に聖を語る者。僕の大嫌いなもののひとつだ。

憎悪の対象。エクソシストならば、

ここで牽制してもかまわないとさえ思った。

「ッ！」

神父は腹部から血を滲ませ、口から血反吐を吐き出すと、その場に倒れ伏した。誰かにやられたのか？

誰だ？―敵？

「ッ！」

異常な気配を察し、僕は瞬時に魔剣を創り出した。

―殺気だ！

ギイイイインツツ！

雨の中で銀光が光り、火花が散った。

殺気の方へ体を向けた時、

長剣を振るう何者かが襲い掛かってきたのだ。

相手は眼前で死んだ聖職者と同じ格好 ―神父。

ただ、こちらは明確なほどの強烈な殺気を飛ばしてきている。

「やっほ。おひさだね」

嫌な笑みを見せるその少年神父を僕は知っていた。

白髪のイカレた少年神父――フリード・セルゼン。

先日 of 堕天使との一戦で僕たちとやり合った輩だ。

…相も変わらず癪に障る笑みを見せてくれる。

「…まだこの町に潜伏していたようだね？」

今日は何の用かな？悪いけど、今の僕は至極期限が悪くてね」

怒気を含んだ口調で言ってみるが、彼は嘲笑うだけだ。

「そりやまた都合がいいねえ。すんばらしいよ！

俺っちの方はキミとの再会劇に涙涙でございますよ！」

ふざけた口調は健在か。本当、腹が立つよ。

神父っただけで憎いのね。

左手にも魔剣を創ろうとしたとき、彼の振るう長剣が聖なるオーラを

発し始める。

ツツ！ あの光は！ あのオーラは！ あの輝きは！

――誰が忘れるものか！

「神父狩りも飽きてきたところでさ、ちょうどいいや。

バツチグー。ナイスタイムイング。お前さんの魔剣と

俺さまのエクスカリバー、どちらが上か試させてくれないかね？

ヒヤハハハハハ！お礼は殺して返すからさ！」

そう、彼の持つ剣は聖剣エクスカリバー、そのものだった。

第29話 「聖剣計画」

「聖剣計画？」

俺の言葉にリアス先輩はうなずいた。

「そう、祐斗はその計画の生き残りなのよ」

あのあと、一通りの活動を終えて家に戻ってきた

俺、イツセー、アーシア、リアス先輩。

話があると俺とアーシアはリアス先輩に連れられて

イツセーの部屋へ集まり、

改めてリアス先輩から切り出されたのは木場のことだった。

「数年前まで、キリスト教内で聖剣エクスカリバーが

扱える者を育てる計画が存在したの」

「…初めて知りました」

アーシアはこの計画を知らなかった。

聖女として祭られていた彼女の耳にまで極秘の

計画が届くわけもないか。

「聖剣は対悪魔にとって最大の武器。

私達悪魔が聖剣に触れたらたちまち身を焦がす。

斬られればなす術もなく消滅させられる。

神を信仰し、悪魔を敵視する使徒にとっては

究極とも言える兵器よ」

聖剣：ゲームや小説にもよく出てくるものだ。

俺達も悪魔だし、遭遇したくないものだ。

「聖剣はその出自は様々だけれど、一番有名なのは

エクスカリバーかしら。日本でもいろいろいな

書物で取り上げられているわね。神の領域にまで

達した者が魔術、錬金術などを用いて

創り上げた武器それが聖剣。けれど、

聖剣は使う者を選ぶの。使いこなせる人間は

数十年に一人出るかどうかだと聞くわ」

たしかにエクスカリバーは石に刺さっており、

選ばれた者しか抜けなかったと言われているな。

「木場は魔剣を創り出す神器を持った能力者ですよね？」

それと同じように聖剣を創り出す神器はないんですか？」

イツセーの質問だ、確かに魔剣があるなら聖剣の神器だって存在するんじゃないか？

「ないわけじゃないわ。けれど、現存する聖剣と比べると、今のところ聖なる神器は今一つね。もちろん、弱いつて

ことではないのよ？中にはイツセーの神器同様に

『神滅具』の聖具もある。

イエス・キリストを殺した者が持っていた神器

『黄昏の聖槍』が有名かしら。

『神滅具』の代名詞となったとも言われているわ」

——『神滅具』。

神を倒せるほどの力を有した神器のことか。

イツセーの左腕にもそれが宿っている。

聖なる武具の神器にも『神滅具』があるとはな、

しかもそれが、磔にしたキリストを処刑し、血に触れたことにより神聖化したと言われていたが、そもそもが神器だったのか、

歴史の謎が豆知識レベルで披露されるとは、

悪魔目線での歴史の話は奥が深いぜ。

「ただ、エクスカリバー、デュランダル、日本の天叢雲剣、

それらの聖剣が協力すぎて、匹敵する聖なる神器は現時点で存在しないわ。

魔剣のほうもほぼ同様かしら」

今名前が挙がった剣をポンポン量産されようものなら

既に悪魔は滅んでいるからな。

「祐斗は聖剣——特にエクスカリバーと適応する為、

人為的に養成を受けた者の一人なのよ」

「じゃあ、木場は聖剣を使えるんですか？」

イツセーの問いにリアス先輩は首を横に振る。

「祐斗は聖剣に適応出来なかった。それどころか、

祐斗と同時期に養成された者たちも全員適応出来なかった
ようだけれど……」

そうだったのか……。

あれほど剣に精通し、魔剣を数多く扱える木場でも
聖剣はダメだったのか。

「適応出来なかったと知った協会関係者は、

祐斗達被験者を『不良品』と決めつけ、処分に至った」

—— 処分。

人に使う言葉じゃないだろうに、まあ内容も大体予想はできるが、
リアス先輩も不快な思いなのか、目を細める。

「祐斗を含む被験者の多くは殺されたそうよ、

ただ『聖剣に適応出来なかった』という理由だけで」

「…そ、そんな、主に仕える者がそのようなことを

していないはずがありません」

アジアにとってその情報はショックだったようだ。

目を潤ませている。

自分の信じていたものが次々と裏切ってくれば、

泣きたくもなるだろう。

「彼ら教会の者たちは私達悪魔を邪悪な存在だと言うけれど、

人間の悪意こそが、この世で一番の邪悪だと思うわ」

リアス先輩の瞳は憂いを帯びていた。

リアス先輩は悪魔だ。けど、とても優しい。

人間界にいるのが長いから、

人間のような感情を得てしまったとリアス先輩は言っていたけど、

それだけではないと俺は感じる。

彼女は生来やさしい女性なんだと思う。

種族なんて関係ない。優しい者もいれば、

救いような無いクズだっている。

人間だってそれは変わらない。

まあ俺の持論だな。

「私が祐斗を悪魔に転生させたとき、あの子は瀕死の中でも

強烈な復讐を誓っていたわ。生まれた時から聖剣に狂わされた才能だったからこそ、悪魔としての生で有意義に使って貰いたかった。祐斗の持つ剣の才能は、聖剣にこだわるにはもつたないものね」

リアス先輩は聖剣によつて無惨な人生にされてしまった木場を悪魔にすることで少しでも救いたかったのだろう。

聖剣なんかにこだわらないで、悪魔として力をふるい生きてくれ——と。

でも、木場は——。

「あの子は忘れられなかった。聖剣を、聖剣に関わった者たちを、教会の者たちを」

神父を嫌悪していたこと、聖剣の情報にこだわったこと、

木場は結局いまだに引きずっているわけか。

いや、自分の人生を好き勝手にしておいて殺されたんじゃ、恨んでも仕方ないと思う。

俺も墮天使にイツセーやアーシアを殺された時は恨みを感じたからな。

それが幼少の頃からとなると、恨みの大きさも相当なものなんだろう。

リアス先輩は大きく息をつく。

「とにかく、しばらくは見守るわ。」

いまはぶり返した聖剣への想いで頭がいっぱいでしょうから。

普段のあの子に戻ってくるといいのだけれど」

「そのことなんです、切っ掛けがこの写真みたいなんです」俺は例の写真をリアス先輩へ手渡す。

木場がこの写真に写っている刀剣を「聖剣」と言っていた。

何か関係あると思うんだが…。

リアス先輩は写真を見るなり、眉をひそめる。

「イツセー、ユウスケ、あなた達の知り合いに

教会と関わりを持つ人がいるの？」

「身内にはいませんが幼馴染の親父さんが教会で働いていました。」

彼女も親父さんの仕事を継いだと以前メールが来ましたね」

「そう、貴方達の近くに——いえ、十年以上も前にこの町にも

聖剣があったなんてね。恐ろしいわ」

「じゃあ、その剣はマジで聖剣なんですか？」

イツセーの質問にリアス先輩が頷く。

「ええ、聖剣のひとつね。先ほど説明した伝説の聖剣程ではないけれど、

本物だわ。となると、この男性が聖剣使い…。

なるほど、私の前任悪魔が消滅させられたと聞いては

いたけれど、その理由がこれなら説明もつくわ。

でも、確か——」

リアス先輩が独り言を始めてしまったな。

何か思い当たる事でもある様だが…。

しかし、リアス先輩がしばし考え込んだ後、

「もう寝ましょう。あまりあれこれと考えていても

祐斗の機嫌がおいそれと直ってくれるわけでもないわ」

そう言うどリアス先輩は服を脱ぎだした!?

「ぶ、部長!?! な、なぜにここで服を!?!」

慌てふためくイツセーに様子に既に

下着姿のリアス先輩はきよとんとしている。

「なぜって、私は寝るときは裸じゃないと眠れないってイツセー

も知っているでしょう?」

「いやいやいやいや! リアス先輩そこはご自身の部屋でお願いしますよ!」

俺だっているんですよ何故イツセーの部屋で!」

すかさず、アーシアが俺の目を塞いでくる。

「ユウスケさん! 見ちゃだめですよ!」

「イツセーと一緒に寝るからに決まっていますでしょう」

当然のような口調でリアス先輩は答えた!

ぶ!

何かが勢いよく噴き出す音がしたが、

恐らくイツセーの鼻血だろう。

イツセーからしたら夢に見たシチュエーションだろう

「なら、私も今夜は、ユウスケさんと寝ますう！」

そう言ってアーシアは俺の背中を押して部屋から連れ出そうとする。

おいおいおいおいおい！うれしいけどそれはダメだろう！

そこはリアス先輩の真似はしなくていいんだぞ！アーシア！

「リアス先輩！アーシアに悪影響です！服を着てください！」

俺の言葉にリアス先輩は不機嫌そうに眉を吊り上げる。

「悪影響？それはずいぶん言い方ね、ユウスケ。

私が裸で寝ているのは知っているでしょう？

イツセーと私は何度か寝ているのだから今更よ」

「…な、何度も寝た…？そ、そんな二人共

そこまで進んでいるなんて…!？」

アーシアがリアス先輩の発言に驚愕し固まっている。

「なら、私もユウスケさんと裸で寝ます」

ちよつと！なぜそうなる！

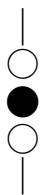
「いや、裸はまずいよ！イツセーも先輩に服着てもらえ！」

「うえ、俺に振るのかよ！」

「あら、イツセーだって裸がいいわよね？」

そう言ってリアス先輩はイツセーに視線を向ける。

イツセーは理性と煩惱がぶつかり頭を抱えているのであった。



イツセーside

「…ふう」

俺は台所で水を一杯のんで一息入っていた。

…あのあと、なんとか部長を説得し今夜だけは寝間着を着てもらい一緒に寝ることに決着はついた。

ユウスケは説得した俺にサムズアップしてたが、

心境は複雑だ、アーシアは俺達が守らないといけない妹のように思っている子だ、

その子が、部長の影響でエロくなるのはうれしいが、悪い事でもあるような…。

うう俺の小さな脳みそじゃ対処しきれないよ。

ユウスケはリアス先輩については自身でどうにかしろとしか言わないしなあ、

ベッドでは俺を抱きしめるように部長が寝ている。

夢にまで見たシチュエーションだ、

これほど素敵なものはないだろう！男として最高だぜ！

と、思ってみても部長に手を出せば皆に怒られる。

それだけで済むのか…？

生殺しだ！ちくしょう！生殺しだ！！

うう、どうすればいいんだ？

『よー、相棒。悩んでいるところ悪い』

——っ。

…まさか、そちらから話しかけてくるとは思わなかった。

俺の左腕、神器『赤龍帝の籠手』に宿る存在、

『赤い龍の帝王』——ドライグ。

フェニックス家とのレーティングゲームのあと、

突然俺へ語りかけてきたんだ。

そして、俺に『禁手』と呼ばれる神器の

持つ究極の力を貸してくれた。

それにより、俺はライザー・フェニックスを倒して、

部長の婚約を破棄させることに成功した。

しかし、そのとき俺の左腕は力の代償としてドラゴンの腕と化してしまったんだ。

今は部長と朱乃さんの力で普通の腕に戻っているが、

ドラゴンの力を散らす術を定期的にしないとドラゴンの腕と
なってしまう。

てか、あれから出てこなかったうえに呼びかけてもシカトしやがっ

て！

『まあ、そう言うなよ。』

今回は逃げない。ちょっと話そうや』

俺はリビンググにあるソファアに座り込む。

「急に出てきやがって」

『まあ、そういうな』

もしかして、俺の中のドラゴンの力が溜まってきていたのか？

こいつが話かけてきたのはその影響だろうか…。

「で、話つてのは？」

『異性の話でもいいんだがな』

「…聞いてたのか？」

『まあ、俺とお前は常に共にあるから、』

否応なく聞こえてしまうさ』

そうですか、丸聞こえですか。

しかも心の声まである程度聞こえているっぽいから、性質が悪いな。下手に妄想もできないじゃないか。

『ククク、色を知るのも良い年ごろだろう。』

そういうのは早め早めに体験しておいたほうがいい。

いつ「白い奴」が目の前に現れるか分かったものではないからな』

「…なあ、前から訊きたかったんだけど、』

その『白い奴』ってなんだ？」

『——白い龍、バニシング・ドラゴンさ』

——っ。

バ、バニシング…：ドラゴン？

ドライグ——ウエルシュ・ドラゴンと関係があるのか？

そういや、ドライグは『赤龍帝』と呼ばれているんだよな。

じゃあ、白い龍つてのは——。

そう考えこむ俺にドライグが話しかけてくる。

『神と天使、墮天使、悪魔、これら三者が大昔に』

戦争をしていたのは知っているな？』

「ああ」

その話は部長や他の部員からも説明受けている。基本らしいからな。

『そのとき、いろんな存在もそれぞれの勢力に力を貸した。妖精、精霊、西洋の魔物、東洋の妖怪、人間。だが、ドラゴンだけがどの勢力にも手を貸さなかった』

「どうしてだ？」

『さて、どうしてかな。明確な理由は今では分からない。しかしな、ドラゴンってのはどいつもこいつも力の塊で、どいつもこいつも自由気ままにわがままだった。

中には悪魔になったり、神に味方したりした物好きなドラゴンもいたようだが、

大半は戦争なぞ知らんぷりして好き勝手生きていた』
「うわー、迷惑な生き物なんだな、ドラゴンって。フリーダムだぜ。」

『ところがな、三大勢力戦争の最中、大喧嘩を始めた。バカなドラゴンが二匹いた。しかもそいつらときたら、ドラゴンの中でも最強クラスで、それこそ、神や魔王に匹敵するほどの力を持っていた。

戦争なんて知る者かと、三大勢力の面々を吹っ飛ばしながら二匹だけで喧嘩をし始めたんだよ。三者にとつて、これほど邪魔な存在もなかっただろう。

真剣にこの世界の覇権をめぐる戦いをしているのに、そんなのお構いなしに戦場を乱したのだからな』

「最悪じゃないか、そいつら！チョー迷惑ドラゴンかよ！
「なんでそんなに喧嘩してたんだよ？」

『さて、何が面白くなかったんだろうな。』

そいつらもきつと、最初の喧嘩の理由なんて
思い出せもしないだろう。

それで怒り心頭の三大勢力は初めて手を
取り合った。

「この二匹のドラゴンを先に始末しないと戦争どころじゃない！」

協力して倒そう！」ってな』

：敵対している者同士が同盟か。

理由がドラゴンの喧嘩。

なんだか、複雑そうだ。

『喧嘩の邪魔された二匹はそれは怒った。「我らの邪魔をするな！」

「神如きが、魔王如きがドラゴンの決闘に介入するな！」って、

バカ丸出しの逆ギレだ。神と魔王、墮天使の親玉に食ってかかった。

まあ、それがいけなかったんだろうな」

マジで最低最悪最凶のドラゴンだぜ。

でも、だいたい分かってきた。

この二匹のドラゴンってのが――。

『その後、ドラゴン対三大勢力の戦いは熾烈なものとなり。

そこで奴が現れた。突如現れた唯の人間に俺達は敗北した。

それが、お前の兄と同じ「究極の闇」さ、その力は強大で

近くにいた三大勢力も巻き添えを食らった。

そいつに敵も味方もないかのように目に映る者を

全て倒していた。その後その人間は姿を消し。

二匹のドラゴンは幾重にも切り刻まれ、その魂を神器として

人間の身に封印された。神器に魂を封じられた二匹は

人間を媒介にして、お互いに何度も出会い、

何度も戦いをするようになってしまったんだよ。

毎回、どちらかが勝ち、どちらかが死んだ。たまに出会う前に

片方が死んでしまい、戦わない事もあったが、

だいたいは戦っていた。媒介である人間が死ねば、

神器であるドラゴンたちも機能を一時的に停止する。

次にドラゴンの力を宿せる人間が生まれてくるまで

この世に魂を漂わせるのさ。

それを長い年月の間、延々と繰り返してきた』

「それがお前と『パニシング・ドラゴン白い龍』か」

『ああ、そうだ。今回、俺の宿主はお前さんだった。

しかも悪魔になるとはな。これは長い年月で初めてのことだ。だから、楽しみにしているんだよ。今回はどうなるのかがな』
『おいおい、勝手に俺に宿っておいて、俺の人生を楽しまないでくれよ。』

でも、こいつに俺の夢をハッキリと伝えておいた方がいいな。俺は咳払いを一つして、高々と吼える！

「よく聞け、ドライグ！俺は上級悪魔に昇格して、

ハーレム王になりたい！女の子をたくさん

眷属下僕悪魔にして、俺だけの美女軍団を作るのが夢だ！」

一瞬だけ反応が薄れ、そのあとにドライブの笑い声が聞こえてくる。
る。

『ハハハ！そんな夢を持った宿主も初めてだ。』

たいがいの宿主は、俺達の力に溺れ驕るか、

恐れおののかか、どちらにしてもまともな

人生を送った者はいなかった」

「え？俺って異常か？変？」

『変ではあるが、異常ではないさ。どちらにしても、』

お前はドラゴンに憑かれた者。ドラゴンってのは、

どの時代、どの国でも力の象徴だった。

ほら、カタチは違えど、色んな国にドラゴンの絵や彫刻があるだろう？

人間は様々な時代でドラゴンに憧れを持ち、

敬意を払い、恐れたんだよ。ドラゴンは知らず知らずのうちに

周囲の者を魅了する。もしくは、ドラゴンのもとに力が集まる。

お前さんの下に憧れる者、挑戦する者が現れたとしたら

それはドラゴンの力だろう』

「…なんだか、傍迷惑な力だな。俺、いろんな奴に

狙われるかもしれないの？」

『力に引き寄せられた強者と相対する、』

それが龍帝を宿す者の常だよ。だが、

悲観的になることもない。女も寄ってくるぞ』

「マ、マジか!？」

『ああ、マジだ。俺の宿主だった人間たちは、皆異性に囲まれていた。モテモテっていうのか？異性には困っていなかったな』

「じゃ、じゃあ、女の子もとつかえひつかえ!？」

『毎晩、違う女と寝ていた奴もいた』

な、なあにいいい!?!歴代の先輩方は

そんなことをしていたのか!

す、素晴らしいじゃないか!素敵じゃないか!

う、うひよおおおおっ!

つい心の中で歓喜の雄叫びをしちまつたぜ!

こりやスゴイ!スゴイよ、マジで!

「う、うおおおおお…。マ、マジかよ…。お、お前、いえ、

あなたはそんなにスゴイ神器様だったのですね!」

いつの間にか俺は左腕に頭を下げ、敬意を払う言葉になっていた。いやー、そんな素敵アイテムだとは思わなかったからさ、その情報は俺にとって吉報だ。

『…急に尊敬の眼差しと警護になったな…。』

お前さんみたいにゲンキな宿主は初めてだ』

「そ、そんな、ドライグ先生に失礼なことなんて言える

立場じゃないっすよ!ああ、先生、これからもご指導

ご鞭撻のほど、よろしくお願いします!」

『…わからん男だ。しかし、確かに面白いことになりそうだ。

まあ、お互い「パニシング・ドラゴン白い龍」にやられないようにするか』

「そういや、『パニシング・ドラゴン白い龍』って強いのか?」

『強い。元来、俺達の力は神や魔王すらも

圧倒できるんだよ。ただ、神器として封印

された時に呪縛を掛けられてな、力を全て

解放するのには厳しい状態だ。

それでも、力を使い慣れれば上級悪魔や墮天使の

高位にいる者など歯牙にもかけない』

なるほど、俺も「パニシング・ドラゴン白い龍」を身に宿しているであろう奴も神器の扱いを極めれば、それだけ強くなれるってことだな。正直、神様を倒したり、魔王様を倒したりなんてのにまったく興味はないんだけどね。

魔王になって女の子をたくさん集めるってのも最高だろうな。
：墮天使と確執を持っているけど、幹部に会いたいとも思わないしな。

でも否応なしにいつか出会う事になるのか、その「パニシング・ドラゴン白い龍」ってのに。

宿主はどんな奴だ？知らない奴なのは確かだろうけどさ。でも、できれば女の子がいいな。

俺はドラゴンの運命に囚われることなく、
パニシング・ドラゴン思う存分生きてやる！「パニシング・ドラゴン白い龍」とやらにも負けないように日々精進する！

「どちらにしても今の俺の目標は部長のおっぱいだ。

部長のおっぱいを——」

『揉むのか？』

「いや、吸う！」

『……………』

ハッキリと言ってやった。

龍帝の野郎は何故か黙り込む。絶句してる？

『…そ、そうか、まあ、がんばれ』

何たる呆れ声。しかし、俺は真剣なんだぜ、龍帝さん。

「ドライブ、お前の力も貸してもらおうぜ！」

『…女の乳を吸う為のサポートか…。俺もずいぶん落ちたもんだ。

しかし、それも一興か。こういう相手もたまにはいい』

溜息交じりだが、あちらも了承してくれたようだ。

なんだか、変な所で達観しているよな、こいつ。

「おう…ともにやっつていこうぜ、相棒！」

『ああ、そうだな、相棒』

こうして俺と龍帝は目標を新たに深夜の誓いを立てるのだった。

第30話 「幼馴染」

俺は、イツセーとアーシアと共に帰宅していた。だが、いつもなら、リアス先輩も一緒に帰るんだが、今日はおらず、何故かイツセーは落ち込んでいた。

「部長さんは一緒にじゃないんですか？」

「ん？うん…。俺、部長を怒らせちゃったみたいで…」

「…何かしたんですか？」

心配そうに訊いているアーシアだが、

どうせ、女性関係のトラブルだろうから。

心配するだけ無駄だろうよ。

「いや、俺が悪いだけだよ。後で謝る。」

アーシアは気にしなくてもいいんだよ」

「…分かりました」

後に聞いたところによると、

朱乃さんに対するリアス先輩の嫉妬で怒っていたようだ、

イツセーは家に着くまでの間、大分悩んでいた。

乙女心は俺も分からないので、

自力でどうにかしてもらおうか、

家に着き、玄関の扉を開けようとしたとき、

言い知れない悪寒を感じた。

ブルツ…。

なんだ、これ？

体から危険信号が出ているような…。

この感じ、以前にも味わったことがあるぞ。

確かあれはアーシアと初めて会って、

教会へ案内した時のことだ。

教会を見て、俺は心底ブルツってた。

ぎゅっ。

アーシアが震える手で俺の手を握りしめてくる。

アーシアもどうやら不安なものを感じ取ったようだ。

イツセーも同じく不安な様で手がかすかに震えるいる。

となると、これは悪魔にだけ感じられるものということか。

俺の家に誰がいる？まさか。

家には母さんが！

俺は母の危機を脳裏に過ぎらせて、

急いで扉を開け放った。

靴を脱いで、一気に台所へ向かう。

嘘だろ！俺が悪魔だとバレたか？

誰に？墮天使？天使？教会の関係者？

「どれも危険な存在だ！

悪魔に関わった者は問答無用で殺すはず！

俺の頭の中では、あのクソ神父。

フリードに殺された人間が思い出されていた。

無惨な姿で切り刻まれた遺体。

あんな風に母さんが！

クソ！ふざけんなよ。そんなこと絶対にさせるものか！

間に合ってくれ！

台所に着くがそこに母さんの姿は無かった。

すると、笑い声らしきものがリビングから聞こえてくる。

速足でそちらへ向かった。

そこには、見知らぬ女性二人と談笑する母さんの姿があった。

「でね、これが二人の小学生時代の写真なの。」

ほらほらこっちなんで、イツセーがプールで海パン

破れた時のものよ。もう、大変だったわ。

破れたままプールの滑り台に行っちゃって。

止めようとしたユウスケと喧嘩まで始めちゃって」

「…か、母さん？」

俺達に気づいたのか、母さんがこちらへ顔を向ける。

「あら、二人共お帰りなさい。どうしたの？血相変えて」

「はううう。よかったです」

俺達の後方でアーシアが安堵のためか、

ペタンと力が抜けるように座り込んでしまった。母さんが無事だったことで、俺は落ち着いて息を吐いたが、言い知れない不安は拭えていない。

当然だろう。見知らぬ女性二人。

若い外国のお客さんが、十字架を胸に下げた者達なのだから。どちらも俺らと同じぐらいの年齢に見える。

栗毛の女性と、緑色のメツシユを髪に入れている目つきの悪い女性。どちらも物腰からただ者じゃないと理解できる。

二人共白いローブのようなものを着こんでいた。

栗毛の女性は何処かで見たとあるような？

キリスト教会の関係者。

エクソシストか？マズい。

こんなところで戦うわけにもいかないだろう。

「こんにちは、兵藤一誠くん、兵藤祐介君」

俺に微笑む栗毛の女性。

その隣にいる緑色のメツシユをいれた女性の傍らには、布に巻かれた長い得物が置かれていた。

それだ。その得物から特大の危険を感じる。

ヤバいものが肌にピリピリと伝わってくる。

おそらく、俺達を悪魔を滅ぼす為のシロモノだろうな。

先ほどのあいさつで、ようやく栗毛の女性の正体が分かった。

「はじめまして」

無理やり作った笑顔でイツセーは挨拶する。

しかし、栗毛の女性は怪訝な表情で眉を吊り上げた。

まあ、そうなるよな。

「あれ？覚えてない？私だよ？」

「俺は覚えているさ、久しぶりだなイリナ」

「…へ、ユウスケの知り合いだったのか!？」

急な展開に驚いているイツセーへ母さんが一枚の写真を取り出す。例の聖剣が映し出されたものだ。

そこへ写る子供を母さんが指差した。

「この子よ紫藤イリナちゃん。このときは男の子っぽかったけど、今じゃ立派な女の子になってきて、お母さんもビックリしたのよ」母さんの説明に驚愕するイツセー。

そう彼女は以前話をしていた、

俺の幼馴染だ。母さんの言う通り見違えたので、

最初見た時は気が付かなかったが、声を聴いてようやく気付けた。

「近いうちに、こっちに来るって聞いてたけど、

来るなら来るで連絡の一つでもよこせよ。

前に電話したことあったから分かったけど、

変わりすぎだろお前」

「お久しぶり、ユウスケくん、イツセーくん。

まあ、変わったのは仕方ないよね、あの頃、

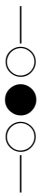
私ったら男の子顔負けにヤンチャだったから。

でも、お互い、暫く合わない間に色々とあったみたいだね。

本当に、再会って何が起こるか分からないものだよ」

意味深な言葉。

これは、彼女は俺達の正体に気づいていたようだ。



「よく無事だったわね」

俺達はリアス先輩に抱き寄せられていた。

あのあと、イリナともう一人の教会関係者らしき者は談笑を三十分ほどしてから帰っていった。

久しぶりに帰ってきた日本。

しかも幼い頃住んでいた町に再び来たので、

あの頃を懐かしんでつつい寄ってしまったらしい。

幼少時、親の仕事の都合でイギリスへ渡ったというが、

その仕事は教会関係とは人生何が起きるか分からないものだ。イツセーとアーシアは出来るだけ関わらないようにしていた。

俺と母さんで相手をしていた。

特にアーシアと教会関係者を接触させたくなかったから、用事を無理やり言いつけて自室に待機してもらっていた。いざとなったら、俺とイツセーでいつでも戦えるように覚悟も決めていたわけだが：何事もなくて良かった。

その後、リアス先輩が帰って来たのだが、俺達が帰宅した時と同様の反応のように血相を変えて部屋に入ってきたのだった。

俺達が無事なのを確認すると、間髪入れず俺達を抱きしめてきたんだ。

「ケガは？何もされてない？どうなの、

イツセー、ユウスケ、アーシア？」

心底心配そうに訊いてくるリアス先輩。

「大丈夫です部長、俺達の事、悪魔だって

認識はしていたみたいですけど」

「流石に一般家庭で、母さんも普通の人間だから

手を出しづらかったんだと思います

まだ、話が通じる相手で幸いでした」

「私もお二人も無事です、部長さん」

リアス先輩は俺達をいつそう強くぎゅつと抱きしめて、

離すまいと大切そうにしてくる。

「ああ、イツセー。よかった…。貴方達に何かがあったら、

私は…。表の部活動が終わってから、

ソーナに呼び出されていてそこで話を聞いていたの。

この町に教会の関係者が潜り込んできていると。

しかも『聖剣』を手にしていると聞いたわ」

会長と話し込んだため、帰りの遅くなったリアス先輩だったが、兵藤家が近くなった頃に異様な気配を家から感じたらしく、急いできたそうだ。

家の中に入って、さらに聖なる力の濃度が高くなっていたため、部長は一瞬青ざめたと告白した。よほどハラハラしたようだ。

「私のかわいい下僕達が危険な目に遭ったかもしれないと、最悪の事態も覚悟してしまったのよ……？」

あんな喧嘩別れしたままで貴方を失ったら、

私は死ぬその時まで後悔していたことでしょうね。

ごめんなさい。もつと貴方を大切にすべきだった……」

リアス先輩は俺達の無事を確認して、

安堵の息と共に涙を流していた。心配だったんだろう。

イツセーとも喧嘩した後だった。

リアス先輩を怒らせてしまったと悩んでたしな。

リアス先輩もそれをずっと気にしていたみたいだ。

落ち着いたところでリアス先輩が咳払いして話を進める。

「昼間に彼女たちと接触したソーナの話では、

彼女たちは私、この町を縄張りになっている悪魔

リアス・グレモリーと交渉したいそうなのよ」

「教会の者が、悪魔と？」

イツセーの問いにリアス先輩が頷く。

これは驚きの話だな。

長く敵対しているはずの悪魔とキリスト教徒。

それなのにあちらから交渉とは。

「つまり、契約ですか？それとも依頼？」

「……どういふつもりかはわからないけれど、

明日の放課後に彼女たちは旧校舎の部室に

訪問してくる予定よ。こちらに対して一切の

攻撃を加えないと神に誓ったらしいわ」

「信じられるんですか？」

俺の質問にリアス先輩が返答する。

「信じるしかないわね。彼女たちの信仰を。」

信徒にとって邪悪な存在である悪魔に依頼をするぐらいなのだから。

相当切羽詰まっついていて、かなりの厄介事であることは確かかしら。

……何か、嫌な予感がするわね。話ではこの町を訪れてきた神父が

次々と惨殺されているみたいだわ」
リアス先輩は目を細め、難しい表情となっていた。
：確かに怖い。墮天使側についたクソ神父のフリードですら、
俺達悪魔を心底軽蔑し、侮蔑し、嫌悪していた。
真つ当な信者ならば、その嫌悪感は最大なのではないだろうか？
——何かが起きそうだな。
そう感じられずにはいらなかった。

—○●—

次の日の放課後。

俺達グレモリー眷属の悪魔達は部室に集められていた。
ソファーには、リアス先輩と朱乃さん
そして、例の二人が座っていた。

俺達眷属は部室の片隅で教会関係者とのやり取りを見守っている。
部室に彼女たちが入って来てから、肌寒いものを感じてならない。
悪魔の本能が彼女達の危険性を察知しているのだろう。

二人も真剣な面持ちで対応していた。
だが、一番危なっかしいのは木場だ。

彼女たちを怨恨の眼差しで睨んでいる。

何かあれば、いや、今この時点でも彼女たちに突然斬りかかりそう
な

雰囲気を作り出していた。

木場の嫌いな現役信徒だもんな。

奴の過去を考えれば、腹の中は煮えくり返っているだろう。

この空気の中、最初に話を切り出したのは、
教会側、イリナだった。

「先日、カトリック教会本部ヴァチカン及び、
プロテスタント側、正教会側に保管、管理されていた
聖剣エクスカリバーが奪われました」
エクスカリバーが奪われた!?

でも、エクスカリバーがなんでカトリック、プロテスタント、正教会から盗まれたんだ？

エクスカリバーは複数本存在するのか？

「聖剣エクスカリバーそのものは現存していないわ」

俺、考えが顔に出ていたか!?

「御免なさいね。私の下僕に悪魔になり立ての子がいるから、

エクスカリバーの説明込みで話を進めてもいいかしら?」

リアス先輩の申し出にイリナは頷く。

「ユウスケくん、イツセーくん、エクスカリバーは

大昔の戦争で折れたの」

イリナが俺達の方へ顔を向けながら、そう言った。

折れたのか、エクスカリバー程の聖剣が!?

「今はこのような姿さ」

髪に緑色のメツシユを入れた女性が傍らに置いていた、

布に巻かれた長い物体を解き放つ。

現れたのは一本の長剣。

「これがエクスカリバーだ」

ぞわっ。

それを見た瞬間、全身の毛穴が開いたかのように感じ、

体中に冷たいものが走っていく。

恐怖。戦慄。畏怖。

たった一本の長剣に俺は強い拒否反応をしめした。

これは冗談ではなくヤバイものだ。

悪魔が触れれば、即死だと直感で理解する。

これが聖剣？

「大昔の戦争で四散したエクスカリバー。」

折れた刃の破片を拾い集め、錬金術によって新たな姿となったの

さ。

そのとき、七本作られた。これがその一つ」

なら、このエクスカリバーは本物ではなく、

破片で作られた新エクスカリバーなのか。

じゃあ、本来のエクスカリバーはこれ以上のものだったのか。

「私の持っているエクスカリバーは、『エクスカリバー・デストラクション破壊の聖剣』。」

七つに分かれた聖剣のひとつだよ。カトリックが管理している」
一度自分の得物を紹介したメツシユの女性は、

再び布でエクスカリバーを覆った。

よく見れば、その布には呪術の文字らしきものが記入されていた。
普段は封印しているのか。

まあ、抜き身で持ってたらヤバいからな。

イリナの方も長い紐のような物を懐から取り出す。

その紐が意志を持ったかのようにひとりで動き出す。

——っ。

俺達の目の前で紐は形を変えて、一本の日本刀と化した。

「私の方は『エクスカリバー・ミニミック擬態の聖剣』。」

こんな風に形を自由自在にできるから、

持ち運びにすっごく便利なんだから。

このようにエクスカリバーはそれぞれ特殊な力を有しているの
こちらはプロテスタント側が管理しているわ」

自慢げにイリナは言う。

あのエクスカリバーからも同様の恐怖を感じる。

あれも俺達悪魔にとって相当危ないシロモノだ。

「イリナ…悪魔にわざわざエクスカリバーの能力を

喋る必要もないだろう?」

「あら、ゼノヴィア。いくら悪魔だからといつても

信頼関係を築かなければ、この場ではしようがないでしょう?」

それに私の剣は能力を知られたからと言って、

この悪魔の皆さんに後れを取るなんてことないわ」

自身満々にイリナは言う。

絶対に俺達に負けるはずがないという自信があるんだろうな。

昔から仲良くしてたが、こちらが悪魔と分かると

こども態度が変わるとはな。悲しいもんだ。

まあ、この場に悪魔を簡単に殺せるエクスカリバーが

二本もあるんだからその自信も分からなくはないが、そのとき、俺は近くから感じるプレッシャーに気づいてしまった。

——木場だ。

いまだかつて見たことない鬼の形相でエクスカリバーと、彼女達を睨んでいた。

木場はエクスカリバーに恨みを持つ。

まさか、この場でエクスカリバーが出てくるなんて、夢にも思わなかった。

木場もここで出会うなんて、思わなかっただろうな。

それが今日の前にいる。こいつの心中は察して余りあるだろう。落ち着いてくれ、飛び出してくれるなよ、木場。

リアス先輩達は真摯な態度で敵対組織と話をしているんだ。

ここで、お前が飛び出せば全部パーだ！

下手すりゃ戦闘開始だぜ？

あのエクスカリバー相手に犠牲が出ないなんてことはないだろう。

「…それで、奪われたエクスカリバーがどうしてこんな

極東の国にある地方都市に関係あるのかしら？」

リアス先輩は相手が聖剣を出しても変わらざるの態度で話を進める。

髪に緑色のメッシュを入れている目つきの悪い女性、

ゼノヴィアと呼ばれていた女性が話を続ける。

「カトリック教会の本部に残っているのは私を含めて二本だった。

プロテスタントのもとにも二本。正教会にも二本。

残る一本は神、悪魔、堕天使の三つ巴戦争の折に行方不明。

そのうち、各陣営にあるエクスカリバーが一本ずつ奪われた。

奪った連中は日本に逃れ、この地に持ち運んだって話なのさ」

何故、この町に何か目的でもあるのか？

リアス先輩は額に手を当てて、息を吐いていた。

「私の縄張りは出来事が豊富ね。それでエクスカリバーを

奪ったのは？」

リアス先輩の問いにゼノヴィアは目を細める。

「奪ったのは『神の子を見張る者』だよ」

その答えにリアス先輩は目を見開いた。

「堕天使の組織に聖剣を奪われたの？」

失態どころではないわね。でも、確かに奪うとしたら堕天使ぐらいなものかしら。上の悪魔にとって聖剣は興味の薄いものだもの」

「奪った主な連中は把握している。グリゴリの幹部、コカビエルだ」「コカビエル……。古の戦いから生き残る堕天使の幹部……」

聖書にも記された者の名前が出されるとはね」

リアス先輩は相手の名前に苦笑していた。

エクスカリバーに堕天使の幹部か。

事態が大事になっているみたいだな。

彼女たちがここに来たのも、協力が目的か？

「先日からこの町に神父、エクソシストを秘密裏に潜り込ませていたんだが、ことごとく始末されている」とゼノヴィアが話す。

俺達の知らない所でそんな事件が起きていたなんて……

やっぱり、この町を縄張りになっている上級悪魔に協力の要請か？

しかし、俺の想像とは裏腹に彼女達はハッキリと言ってくる。

「私たちの依頼、いや、注文とは私達と堕天使のエクスカリバー

争奪の戦いにこの町に巣くう悪魔が一切介入してこないこと。

つまり、そちらに今回の事件に関わるなど言いに来た」

ゼノヴィアの物言いにリアス先輩の眉が吊り上がる。

「ずいぶん言い方ね。それは牽制かしら？もしかして、私達がその堕天使と関わりを持つかもしれないと思っているの？手を組んで聖剣をどうにかすると」

「本部は可能性がないわけではないと思っっているのね」

リアス先輩の瞳に冷たいものが宿った。これはかなりキレてるな。わざわざ自分の領土にまで足を運んだ敵が、

自分達のやることに手を出すな、口を出すなど言ってきて、

さらに他の組織と手を組んだら許さないと好き勝手に言ってくれば

上級悪魔たるリアス先輩のプライドは黙っちゃいけないか。

「上は悪魔と墮天使を信用していない。聖剣を髪側から

取り払う事ができれば、悪魔も万々歳だろう？」

墮天使どもと同様に利益がある。それゆえ、

手を組んでもおかしくない。だから、先に牽制球を放つ。

墮天使コカビエルと手を組めば、我々は貴方達を完全に消滅させる。

たとえ、そちらが魔王の妹でもだよ。と、私達の上司より」

ゼノヴィアはリアス先輩の睨みに臆することなく淡々とした口調だ。

「…私が魔王の妹だと知っているということとは、

貴方達も相当上に通じている者たちのようね。

ならば、言わせてもらうわ。私は墮天使等と手を組まない。

絶対によ。グレモリーの名にかけて、

魔王の顔に泥を塗るような真似はしない！」

拮抗状況の両者。

だが、ゼノヴィアはフツと笑った。

「それが聞けただけでもいいさ。いちおう、この町に

コカビエルがエクスカリバーを三本持つて

潜んでいる事をそちらに伝えておかねば何か起こったときに、

私が、教会本部が様々なものに恨まれる。まあ、

協力は仰がない。そちらも神側と一時的にでも手を組んだら、

三すくみの様子に影響を与えるだろう。特に魔王の妹ならば尚更だよ」

ゼノヴィアの言葉を聞き、多少表情を緩和させたリアス先輩は息を吐く。

「正教会からの派遣は？」

リアス先輩の問いにゼノヴィアは答える。

「奴らは今回この話を保留した。仮に私とイリナが奪還に失敗した

場合を想定して、最後に残った一本を死守するつもりなのだろうさ」

「では、二人で？二人だけで墮天使の幹部からエクスカリバーを奪還するの？無謀ね。死ぬつもり？」

呆れた声のリアス先輩だが、

イリナとゼノヴィアは決意の眼差しで言う。

「そうよ」

「私もイリナと同意見だが、出来るだけ死にたくないな」

「っ。死ぬ覚悟でこの日本に来たというの？相変わらず、

貴方達の信仰は常軌を逸しているのね」

「我々の信仰をバカにしないでちょうだい、

リアス・グレモリー。ね、ゼノヴィア」

「まあね。それに教会は墮天使に利用されるぐらいなら、

エクスカリバーが全て消滅しても構わないと決定した。

私達の役目は最低でもエクスカリバーを

墮天使の手からなくすことだ。そのためなら、

私達は死んでもいいのさ。エクスカリバーに

対抗出来るのはエクスカリバーだけだよ」

スゴイ覚悟だな。これが信仰なのか？

俺には理解できない事だ。

神様のためなら死んでも構わないとはな。

「二人だけでそれは可能なのかしら？」

「ああ、むろん、ただで死ぬつもりはないよ」

リアス先輩の問いかけにゼノヴィアは不敵だ。

「自身満々ね。秘密兵器でもあるのかしら？」

「さてね。それは想像にお任せする」

「……………」

「……………」

そのやり取り以降、両者は見詰め合ったまま、会話も途絶した。

イリナとゼノヴィアが目で合図を送り合うと、立ち上がる。

「それでは、そろそろおいとまさせてもらおうかな。イリナ、帰るぞ」

「そう、お茶は飲んでいかないの？お菓子ぐらい振舞わせてもらおうわ」

「いらない」

リアス先輩の誘いに手を振って断るゼノヴィア。

「御免なさいね。それでは」

イリナも手を合わせて御免と断る。

そのまま、二人はその場を後にしようとする。

が、二人の視線が一箇所に集まった。アーシアだ。

「兵藤の家で出会った時、もしやと思ったが、『魔女』

アーシア・アルジェントか？まさか、この地で会おうとは」

とゼノヴィアが言う。

『魔女』と呼ばれ、ビクッとアーシアは体を震わせた。

その言葉はアーシアにとって、辛いものだ。

イリナもそれに気づいたのか、アーシアをマジマジと見てくる。

「あなたが一時期内部で噂になっていた『魔女』になった

元『聖女』さん？悪魔や堕天使をも癒す能力を待っていたらしいわ

ね？

追放され、どこかに流されたと聞いていたけれど、

悪魔になっているとは思わなかったわ」

「…あ、あの…私は…」

二人に言い寄られ、対応に困るアーシア。

「大丈夫よ。ここで見たことは上には伝えないから安心して。

『聖女』アーシアの周囲にいた方々に今の貴方の状況を話したら、

ショックを受けるでしょうからね」

「……………」

イリナの言葉アーシアは複雑極まりない表情を浮かべていた。

「しかし、悪魔か『聖女』と呼ばれていた者。

墜ちるところまで墜ちるものだな。まだ我らの神を信じているか

？」

「ゼノヴィア。悪魔になった彼女が

主を信仰しているはずないでしょう？」

呆れた様子でイリナは言う。

「いや、その子から信仰の匂い、香りがする。

抽象的な言い方かもしれないが、私はそういうのに敏感だね。

背信行為をする輩でも罪の意識を感じながら、
信仰心を忘れない者がいる。それと同じものが

その子から伝わってくるんだよ」

ゼノヴィアが目を細めながら言うと、イリナが興味深そうに
まじまじとアーシアを見る。

「そうなの？アーシアさんは悪魔になったその身でも
主を信じているのかしら？」

その問いかけにアーシアは悲しそうな表情で言う。

「…捨てきれないだけです。ずっと、信じてきたのですから…」

それを聞き、ゼノヴィアは布に包まれたものを突き出す。

「そうか。それならば、いますぐ私たちに斬られるといい。

今なら神の名の下に断罪しよう。罪深くとも、

我らの神ならば救いの手を差し伸べて下さるはずだ」

——っ。

俺はゼノヴィアの発言に怒りがこみあげてくる。

アーシアに近づくゼノヴィア。俺はアーシアを庇うように前に立
っ。

「触れるな、てめえ」

ハッキリした口調で俺はゼノヴィアに警告する。

「アーシアに近づいたら、俺は許さない。

てめえはアーシアを『魔女』だと言ったな？」

「そうだよ。少なくとも今の彼女は『魔女』と

呼ばれるだけの存在ではあると思うが？」

ふぎけるなよこいつ。

「ふぎけるなッ！救いを求めるアーシアを誰も助けなかつただろう！？」

アーシアはただ優しくただただ！それを、理解できないお前らは
どうかしてるんだ、誰も友達になつてくれないなんて、

おかしいだろ！」

『聖女』に友人が必要だと思うか？大切なのは分け隔てない

慈悲と慈愛だ。他者に友情と愛情を求めた時、『聖女』は終わる。

彼女は神からの愛だけがあれば生きていけたはずなんだ。

最初からアーシア・アルジェントに

『聖女』の資格はなかったのだろう」

当然だというかのようにゼノヴィアは口にした。

なんなんだよ、こいつらは！

理解できねえよ！なんでこいつらはそんなにアーシアを悪者にしたいんだよ！間違っているだろう！

「自分たちが勝手にアーシアに理想を押し付けて、思っていたものと違うだけで、悪者扱いなんて、そりゃねえだろう!？」

俺は今まで溜まっていたものが止められなかった。

ずっと、教会関係者に思いをぶつけたかった。

「アーシアだって辛かったんだ、助けてほしかったんだ！

それなのに、なにが神だ！何が愛だ！その神は

アーシアが助けてほしい時に何もしてくれなかった！

神なら奇跡くらい起こして見せろよ！」

イツセーも思いをぶつけるが、ゼノヴィアは冷静に答える。

「神は愛してくれていた。何も起こらなかったとすれば、

彼女の信仰が足りなかったか、もしくは偽りだったただけだよ」

教会の連中はこんな奴ばかりなのか？

こんな奴らのなかでアーシアは暮してたのかよ。

「君達は彼女のなんだ？」

ゼノヴィアの問いにハッキリと告げてやった。

「家族だ。友達だ。仲間だ。だから、アーシアを助けるし、

アーシアを守る！アーシアの信仰心は偽りでもなかったし、

足りないなんてことはなかった！

てめえらの神こそ偽りだろうが！」

「ユウスケの言う通りだ、お前らがアーシアに手を出すなら、

俺はおまえらを全員のに回しても戦うぜ」

俺達の挑戦的な言葉にゼノヴィアは目を細める。

「それは私達、我ら教会全てを敵に回す発言だぞ、

一介の悪魔にすぎない者が、大きな口を叩くね。

グレモリー、教育不足では？」

「ユウスケ、イツセー、お止め——」

俺達を落ち着かせようとしたリアス先輩だったが、
そんな俺達の前に木場が介入する。

「ちようどいい。僕が相手になろう」

特大の殺意を体から発して、木場は剣を携えていた。

「誰だ、キミは？」

ゼノヴィアの問いかけに木場は不敵に笑った。

「君達の先輩だよ。失敗だったそうだけどね」

その瞬間、この部室内に無数の魔剣が出現していた。

第31話 「聖剣対魔剣」

やってしまったな。

アーシアを侮辱されて、頭に來たとはいえ。

ここまで大事にしたのは失敗だった。

俺達は旧校舎近くの広場に來ていた。

俺とイツセー、そして、少し離れた所に木場。

さらに俺達と対峙するかのようにイリナとゼノヴィアがいる。

さらに俺達の周辺事囀むように紅い魔力の結界が発生していた。

結界の外には他の皆が俺達を見守っている。

「では始めようか」

イリナとゼノヴィアは白いローブを脱ぎ、

黒い戦闘服の姿となっていた。

さらにゼノヴィアは得物の布を取り払い、

エクスカリバーを解き放つ。

イリナの持つ変化するエクスカリバーも日本刀の形になっていた。

なんでこうなったか説明しよう。

先ほど俺とイツセーが聖剣所持者二人と口論している中、

木場が飛び込んで來て、一触即発の空気となった。

リアス先輩としても立場的に下僕が喧嘩を売り始めたので、

対応に苦慮していた。そこへゼノヴィアが提案を申し込んできた

んだ。

「リアス・グレモリーの眷属の力、試してみるのも面白い。

それに『先輩』とやらの力も気になる」

俺と木場の喧嘩をゼノヴィアが買った。

しかも教会には一切知らせない私的な決闘だと、付け加えてきた。

あちらもこちらの立場を多少察してくれたようので、

殺し合いに発展しなければ問題無いとした。

場所は旧校舎近くの練習場。

余計な破壊と気配を周囲に与えないため、

朱乃さんが結界をはって来ていた。

これで多少の無茶も出来るらしい。
で、何故かイツセーも参加している。
確かに、口論にはなったが流石に決闘までは
やりすぎてしまったか。

あの時のリアス先輩の制止で止めていれば。
木場の介入でヒートアップしてこうなってしまった。
でも、冷静に考えれば聖剣を憎んでいる木場にとっては、
絶好の機会だしな。

「イツセー、ユウスケ、ただの手合いとはいえ、
聖剣には十分気をつけなさい！」

「はいー！」

「は、はいー！」

返事をする俺達だが、イツセーは

バトル前に見せられた『聖剣の恐怖特集！』

という題名のビデオを思い出しているようで身震いしている。

聖剣を持った者と上級悪魔の一戦を録画したものらしいが、
聖剣に斬られた悪魔は傷口から煙を立てていた。

しかも体の傷口部分が消滅していた。

聖剣で斬られると悪魔は滅せられる。

体を消失させられてしまうのだ。

木場の方は既に神器を発動して、

自らの周囲に魔剣を数本出現させている。

「…笑っているのか？」

ゼノヴィアが木場に訊く。

木場は不気味な笑みを浮かべている。

薄ら寒くなるほどの笑顔だ。

爽やかフェイスの面影なんてひとつもない。

お前はそこまで聖剣が憎いんだな木場…。

「うん。倒したくて、壊したくて仕方なかった

物が目の前に現れたんだ。嬉しくてさ。

ふふふ、悪魔やドラゴンの傍に居れば

力が集まると聞いていたけど、こんなにも早く
巡り合えるだなんてね」

以前イツセーもそんなことをドラゴンから教わったと
言っていたな。

ドラゴンの力に惹かれて、いろんなものが集まってくる。

今回もイツセーが、いや神器に宿ったドラゴンが関係しているのか
？

横のイツセーを見れば同じことを考えたのか自身の左腕を

じつと見ていた。

「…『魔剣創造』^{ソード・パース}か。神器所有者は頭の中で

思い描いた魔剣を創り出すことが可能。

魔剣系神器の中でも特異な物。：『聖剣計画』の

被験者で処分を免れた者がいるかもしれないと聞いていたが、

それはキミか？」

ゼノヴィアの問いに木場は答えない。

殺気を向けているだけだ。

おいおい、殺し合いは禁止なんだぞ。

木場の事は俺が気を付けないとダメか。

リアス先輩からも勝つのは当然として、

木場がゼノヴィア達を殺さないように見張っていて欲しいと

言われているしな。

試合以上の戦いは悪魔と神様の関係に介入する事になる。

それは魔王サーゼクス様にも迷惑を掛ける事になってしまう。

「兵藤祐介君、兵藤一誠君」

イツセーの前に立つのはイリナだ。

栗毛の女の子でイツセーは男の子だと思っていたみたいだが、

今では立派な女性へ成長していた。

「再会したら、幼馴染は悪魔になっていた…。ショックだったわ」

心底残念そうな表情だ。

いや、悪魔になろうとしてなったわけじゃあないんだけどな。

まあ、悪魔の人生？悪魔正も悪くないんだがな。

「えーと、紫藤イリナ…イリナでいいのかな？ やつぱり、戦わなくちゃダメか？ アーシアの悪口に対しては、俺もそちらへ言いたいことを言ったしき。バトルしなくてもいいような気もするんだけど」
イツセーの提案だ。

確かに、アーシアに関して教会関係者へ言ってやりたいことがあった。

今回、その機会に恵まれてやっと言えたから俺達的には、もうスッキリしている。

木場は止まらないだろうから戦うとして、

これは、俺と木場、そしてゼノヴィアが始めたことだ。

別にイリナとイツセーまで戦う必要は無い筈だが、しかし、イリナは哀れむ表情をイツセーに向ける。

ていうか、頬を涙が一筋伝っている。

泣いてるのか!?

「かわいそうな兵藤祐介君に兵藤一誠君。ううん、昔のよしみでユウスケくんもイツセーくんって呼ばせてもらうわね。

そして、なんて運命のイタズラ！ 聖剣の適正があつて、

イギリスに渡り、晴れて主のお役に立てる代行者

となれたと思つたのに！ ああ、これも主の試練なんだわ！

久しぶりに帰ってきた故郷の地！ 懐かしのお友達が悪魔になつていた

過酷な運命！ 時間の流れって残酷だわ！ でも、

それを乗り越えることで私は一步また一步と真の信仰に

進めるはずなのよ！ さあ、ユウスケくん！ イツセーくん！ 私がこのエクスカリバーであなたの罪を裁いてあげるわ！ アーメン！」

イリナは涙を浮かべつつも張り切った様子で聖剣の切っ先をこちらへ

向けてくる。

おっと、この子話を通じないタイプだったかあ…。

瞳が星のようにキラキラと輝いてやがる。

自分の信仰心に酔っているのか？
今の状況を楽しんでいる節があるな。

うん、これは関わってはいけなタイプ的女性だったかな。

「仕方ない、とりあえずイツセーはイリナの相手を

俺は木場のサポートをする」

俺が腰に手をかざすと銀色のベルト『アークル』が出現する。

「変身!!」

俺の掛け声と共にベルトのボタンを押しこむと、

ベルトの中央が赤く光り

俺の体は紅い鎧の戦士クウガへと姿を変える。

「よし、ブーステッド・ギア発動！」

『Boost!』

赤い閃光を放ち、イツセーの左腕に籠手が現れる。

同時に音声を発して、イツセーの力を倍にした。

イツセーの神器は十秒毎に宿主の力を倍にしていく能力を持つ。

さらに倍増した力を他者や物に譲渡することも可能だ。

俺の変身した姿とイツセーの神器を見て、

イリナとゼノヴィアがビツクリした様子を見せる。

「…『神滅具』に『究極の闇』」

「それって、『赤龍帝の籠手』と

戦争を止めた『古代の戦士』？

こんな極東の地で赤い龍の帝王の

力を宿した者と伝説の戦士に出会うなんて…」

どちらも顔をしかめていた。

「二人に気を取られていると、怪我では済まなくなるよー！」

ギイン！

ゼノヴィアに木場が斬りかかる。

木場の一撃を受け止めたゼノヴィアは不敵な笑みを見せた。

『魔剣創造』に『赤龍帝の籠手』。

さらにアシア・アルジエントが持つ『聖母の微笑』。

我々にとって異端視されている

「神器ばかりだ。悪魔になったのも必然と言えるのかもしれない」

「僕の力は無念の中で殺されていった同志の恨みが

生み出したものでもある！この力で、エクスカリバーを
持つ者を打倒し、そのエクスカリバーを叩き折る！」

木場は計画で殺された被験者達の復讐も誓っているのか。

「こちらもいくよ、イツセーくん！」

ヒュッ！

イリナがイツセーに勢いよく斬りかかる。

それに対して、イツセーは必死に避ける。

まあ、直撃したら死ぬからな。

焦って当然だ。

「まだまだ！」

イツセーはイリナの刀を躲しながら、

籠手の力を上げていった。

『Boost！』

イツセーも聖剣と戦うのは初めてだから

どう攻めればいいのか迷っている様だ、

「さてこっちもやりますか」

俺は木場とゼノヴィアが斬り合っている中に介入する。

「悪いけど、俺を忘れてもらっては困るぜえ！」

ガキイイインッ！

俺の拳をゼノヴィアは聖剣の腹で受け止めた。

「神器とは違う力か、興味深いな」

ゼノヴィアは自身の知らない力に興味がある様だ。

「あっちの赤龍帝の方も興味はあるが……」

ゼノヴィアがイツセーの方へ視線を向けてかたまってしまった

その反応が気になり俺もそちらに視線を向けると、

そこにはいやらしい表情のイツセーがいた。

「……いやらしい顔つきだね。何を考えているのかしら？」

イツセーの表情に怪訝な顔つきのイリナ。

そのイリナの反応に涎まで垂らすイツセー

「…気をつけてください。イツセー先輩は

手に触れた女性の服を消し飛ばす力を持っています」

小猫ちゃんが敵にイツセーの

『洋服崩壊』^{ドレス・ブレイク}の能力を教えてしまう。

それに対して、抗議の視線を向けるイツセーに

小猫ちゃんはズバリと言う。

「…女性の敵。最低です」

「あう！痛烈なツツコミだよ、小猫ちゃん！」

「なんて最低な技なの！イツセーくん！

悪魔に落ちただけではなく、その心までも邪悪に

染まって！ああ、主よ。この罪深き変態をお許しに

ならないでください！」

イリナがお祈りをあげながら、悲哀に満ちた表情を浮かべていた。

「そんなかわいいそうな奴を見る目で見ろな！」

「最低です」

ゴメンな、小猫ちゃん。

こいつはここで、煩惱だけ斬ってもらう事は出来んものか。

「なるほど。性欲の塊か。欲望の強い悪魔らしい行動だと私は思う

よ」

ゼノヴィアはため息を吐きながら言う。

その視線は軽蔑の物だったがな。

「ゴメン」

なぜか、木場が謝っていた。

「うちの愚弟が申し訳ない…」

俺がイツセーについて謝っていると。

突然、木場が自身の足元から新たに魔剣を一本生み出すと、

それを振るい、二刀流の構えでゼノヴィアに迫る。

「気を取り直して！燃え尽きろ！そして

凍り付け！^{フレア・ブランド}『炎燃剣』！

『氷空剣』！^{フリーズ・ミスト}」

片方の魔剣からは業火が渦巻き、

もう片方の魔剣からは冷氣とともに霧氷が発生した。

木場は『騎士』だ。『騎士』の特性はスピード。

神速の動きでゼノヴィアに攻撃をくわえている。

だが、ゼノヴィアは四方八方から斬りかかってくる

木場の攻撃を最小の動きだけで受け流していた。

『騎士』の軽やかな動き、そして炎と氷の魔剣か。だが甘い！」

ギイイイイン！

ゼノヴィアの一振りが、木場の魔剣二刀を粉々にする！

「ッ！」

一撃で自分の剣を破壊され、木場は絶句する。

あれが聖剣の威力なのか！

「我が剣は破壊の権化。砕けぬ物はない」

ゼノヴィアは長剣を器用にくるくる回したかと思うと、

天にかざし、地面へ振り下ろした。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！

突然、足元が激しく揺れて、地響きが発生する！

体勢が崩され、その場に膝をつく。

そして、周囲に巻き起こる土埃！

しばらくして、土煙が収まった。

ッ！

俺は練習場の変化に俺は目を疑った。

ゼノヴィアが聖剣を振り下ろした場所が大きく抉れ、

クレーターが生み出されていた。

「これが私のエクスカリバーだ。有象無象の全てを破壊する。

『エクスカリバー・デストラクション』
『破壊の聖剣』

の名は伊達じゃない」

威力がけた違いだな。あれをまともに食らったら

木場の魔剣じゃなくても粉々になるだろうさ。

木場はその光景を見て、苦虫を噛み潰したよう

表情を浮かべていた。

「…真のエクスカリバーでなくてもこの破壊力。」

七本全部消滅させるのは修羅の道か」

その瞳に映る憎悪の影は未だに消えて無いようだ。

木場は全部にエクスカリバーを壊す気の様だ。

一本であの威力だ、木場とはいえ七本全部は

流石にむりだと思いがな。

『boost!』

イツセーの神器から三度目の倍化の音声が響く。

「もう！ゼノヴィアったら、突然地面を壊すのだもの！

土だらけだわ！」

イリナが毒づきながら、服についた土を払っていた。

「でも、そろそろ決めちゃいませうか！」

再度イツセーへ刀を向けて走り出す。

速い！イツセーとの距離を一気に詰めてきた、

木場ほどじゃないが、俺達よりは確実に速い！

速度のイリナと破壊力のゼノヴィアかコンビネーションは

抜群のようだな。

こちらも木場とコンビネーションを發揮しないと！

「木場！俺が前に出るから！お前は隙をついてくれ！」

俺が木場に話しかけると。

「ここは僕一人でやる！君は引つ込んでいてくれ！」

木場は俺と協力する気はないようだ。

『boost!』

イツセーの四度目の強化。

「行くぜ、ブーステッド・ギアアツ！」

『Explosion!!』

イツセーの倍化が完了する。

イツセーはこっから攻勢に出るみたいだ。

「ユウスケくん。手を出すな！」

「何言ってるんだ木場！今のお前は冷静じゃない！」

一人では無理だ！協力して戦うんだ！」

「うるさい！これは僕の復讐だ！」

「キミには関係ないだろう！」

「何を言ってるんだよ…俺達仲間だろ」

「ふっ、悪魔とはいえ、心配してくれるいい仲間がいるじゃないか先輩」

「ゼノヴィアは関心したように言うがその目は真剣そのものだ
「私は別に二人掛かりでも構わないさ」

「ゼノヴィアがそう言うが、木場に強力の意志はなさそうだ。

「いやー！」

「アーシア!?!」

「アーシアの悲鳴が聞こえ、そちらに振り向くと

「イツセーの『洋服崩壊』^{ドレス・ブレイク}で

「アーシアと小猫ちゃんが裸にされており、

「アーシアは恥ずかしさから身を屈めており、

「小猫ちゃんの方は無表情のまま殺気を全身から放ちながら、

「震える拳を上げていた。」

「こ、小猫ちゃん…これは違うんだ！不発だよ！

「い、いや、成功しているけどさ！」

「でも、紫藤イリナが避けるもんだから…決して、

「アーシアと小猫ちゃんを狙ったわけじゃない！

「で、でも、ありがとうございます！」

「い、いちおうお礼は言ってる」

「どうやら、イリナに『洋服崩壊』を当てようとして

「誤って二人に当ててしまったようだ。」

「…この、ドスケベ！」

「ドゴン！」

「ぐっふううううー！」

「イツセーは腹に重い一撃を食らい吹っ飛ぶ。

「そして地面を何度もバウンドし転がる。

「あまりもの痛さに起き上がれないようだ。

「俺もイツセーに怒りを覚えたが、

「この光景を見てスッキリした。」

「イツセーくん、生きてる？あのね、卑猥な技を開発

した天罰だと思うの。これにこりたら、

あんなエッチな技を封印すること。いいわね？」

「…い、嫌だ。…魔力の才能をほぼ全部使い込んで開発

した技だぞ…。もっともっと女の子の服を弾け飛ばすんだ…。

これでも女子の服を透過させるとちらにするべきか

真剣に悩んだんだ…」

イツセーはのろのろと力なく立上り、イリナと再び対峙する。

「いつか、見ただけで服を壊す技に昇華するまで俺は戦い続ける！」

イツセーは自身の煩惱を叫び、イリナに突っ込んでいた。

「性欲だけでここまで戦えるなんて！どうかしているわ！」

「紫藤イリナ！性欲は力だ！正義なんだよおおお！」

「アーメン！主よ、このエロ悪魔を断じる力をお貸しください！」

イリナも聖剣を改めて握りしめ。イツセーへ向かっていく。

イツセーはそれに対して体制を低くし、下段からの蹴りで

イリナを足払いしようとするが、

イリナも狙いに気づきジャンプで躲す。

躲されたイツセーだが、地面を蹴り込んで、

アッパーカットをしながら立ち上がる。

まるで、どこぞの配管工のように。

『イヤッフウ〜』という声が聞えそうだ。

ブウン！

イツセーのアッパーがイリナの顎すれすれで空を切る。

イリナは目元を引きつらせていた。

イリナが刀を横薙ぎに振るうが、

イツセーは後方へステップし回避する。

その様子をイリナは驚いた様子で見っていた。

「…ゴメンなさい。あなたを少し

見くびっていたようね。いい動きだわ」

真顔になるイリナ。

すると、突然イツセーが地面に崩れ落ちてしまった。

イツセーの腹部を見れば、小さく煙が上がっている。
さっきの横薙ぎの攻撃の際に剣先を変形させて伸ばしていたのか
!?

「聖剣のダメージよ。悪魔、堕天使は聖剣の攻撃を
その身に受ければ、力と存在を消されてしまう。
たったそれだけの傷でもこれだけの事になるわ。
もう少し深く食らっていれば、致命傷だったかもね」
あの程度のかすり傷で動けなくなるのか…。

『Reset!』

ブーステッド・ギアの能力も解除されてしまった。
イツセーはもう戦えないか…。

「あと一度パワーアップすればその攻撃を確実に
避けられたでしょうね。いい勝負もできたはずよ。

貴方の敗因は、相手との力量差が分からずに神器を使っている事。
読み間違いは真剣勝負の場では致命傷よ」

「あつちは終了した、こつちもそろそろ終わりにしよう」
ゼノヴィアが長剣を構え直す。

俺は即座にゼノヴィアに向かい駆け出す。

「その長剣の大きさなら懐に入れば、
振り回すこともできないだろう！」

俺は拳を握り殴りかかるが、全てを躲されてしまう。
くうッ！隙が無い、やはり実力は俺以上か！

「はあああああああつ！」

木場が気合を発し、手元に何かを創り出していく。
それは剣のカタチとなるが…。

「その聖剣の破壊力と僕の魔剣の破壊力！
どちらが上か勝負だ！」

木場の手に現れたのは巨大な一本の剣だった。
禍々しいオーラを放ちながら、木場は両手で構える。
その剣は巨大で、木場の身長をはるかに超えている。
その大きさは二メートル以上は確実にある。

木場はそれを勢いよく振るい始める！

俺は即座にゼノヴィアから離れる。

俺と入れ違いに木場の一撃がゼノヴィアに伸びるが、彼女は心底落胆したように溜息を吐いた。

「残念だ。選択を間違えたな」

ガギイイイイン！

激しい金属音！巨大な刀身が宙を舞う。

折れたのは木場の魔剣だった。

ゼノヴィアのエクスカリバーは一切欠けることなく、難なく木場の魔剣を破壊した。

「君の武器は多彩な魔剣とその俊足だ。

巨大な剣を持つには筋力不足であり、

自慢の動きを封じることにもなる。

破壊力を求める？キミの特性上、それは不要なものだろうか？

そんなこともわからないのか？」

ドンツ！

木場の腹部に聖剣の柄頭が深く抉り込む。

たったそれだけの攻撃なのに衝撃波が発生していた。

柄頭の一発でも破壊力が大きいってことだ。

「ガハッ」

口から吐しゃ物を吐き、木場はその場で崩れ落ちた。

「刀身での一撃でなくとも、いまの打ち込みで

とうぶんは立ち上がれないよ」

ゼノヴィアは木場を一瞥すると、踵を返した。

「…ま、待てー！」

木場が手を伸ばすが、勝負が決着したのは誰が見ても明らかだった。

「そちらも、まだ戦うか？」

ゼノヴィアが俺に訊いてくる。

「いや、俺は木場がやりすぎないように出てきたが、

俺達の考えすぎだったようだ、俺もまた、君達を甘く見ていたよう

だ」

俺は変身を解除し、ゼノヴィアに返答する。

そして、朱乃さんが結界を解き、

辺りを支配していた紅いオーラが消えた。

戦いは終わったんだな。

『先輩』、次はもう少し冷静になって立ち向かってくるといい。

リアス・グレモリー、先程の話、よろしく頼むよ。それと、

下僕はもう少し鍛えた方がいい。センスだけ磨いても限界がある」

木場は憎々し気にゼノヴィアを睨んでいた。

ゼノヴィアの視線がイツセーに移る。

「ひとつだけ言おう。

バニシング・ドラゴン
『白い龍』は既に目覚めているぞ」

その名は、前に聞いたイツセーと対をなす存在か。

「いずれ出会うだろうが、その調子では絶対に勝てないだろうね」

ゼノヴィアはそれだけ言い残し、

持ち物を手に取るとその場を後にした。

「ちよつと待ってよ、ゼノヴィア。じゃあ、

そういうことでユウスケくん、イツセーくん。

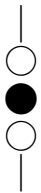
裁いて欲しくなったら、いつでも言ってね。アーメン♪」

胸で十字を切りながらウインクすると、

イリナも早足にこの場を立ち去る。

瞑目するリアス先輩。その心中は察するに余りあるだろう。

俺達は彼女達に完敗した。



「大丈夫ですか？」

アーシアがイツセーの腹部に手を当てて、

神器で回復してくれる。アーシアは旧校舎に用意してあった

予備の制服に着替えていた。

彼女の手から生まれた緑色のオーラがイツセーを包み、傷を癒す。

「格好悪い所を見せたな、アーシア」

イツセーは苦笑いしながらアーシアに言う。

だが、アーシアは首を横に振る。

「聖剣を相手にこれぐらいで済んで良かったです。」

イツセーさんが消滅させられてしまうのではないかと

気が気じゃ無かったんですよ?」

「今回は相手に殺す気が無かったから良かったが、

イツセー、お前勝利よりも、自分の欲望を優先したな?」

「ぎくう」

イリナの服を消し飛ばす事だけに集中していたようだからな、

「そのせいで、アーシアは裸になったんだぞ!」

ゴンツ!

俺はイツセーの頭に拳骨を落とす。

「イテテ、アーシア、服を消し飛ばしてゴメン」

イツセーが頭をさすりながら、素直に謝る」

「いえ、誰にでも失敗はあります、

イツセーさんとユウスケさんが無事でよかったです」

アーシアは笑顔で返す。その笑顔、眩しすぎる。

「…あと一段階神器の倍加を上げていけば、勝てたかも」

イツセーの肩を力いっぱいマッサージしながら小猫ちゃんが言う。
う。

揉むたびに、イツセーの顔がゆがむので相当痛いんだろうな…。

小猫ちゃんも同じく予備の制服を着ていた。

聖剣と戦い、負傷したイツセーへの労いか、

全裸にされた報復なのか分からない。

でも、小猫ちゃんがそんな風に言うのは始めてじゃないか?

「…それが分からないのは修行不足と実戦不足。」

あとエロすぎです。ドスケベ先輩」

おっと、精神の方も痛い所ついていくのか、

この後は、俺にもやってくれるらしいが、

イツセーの様子見ていると、断りたいところだな。

「待ちなさい！祐斗！」

リアス先輩の制止する声が聞えてくる。

そちらへ顔を向けると、その場を立ち去ろうとしている様子の木場と激昂しているリアス先輩の姿があった。

木場がどうかしたのか？

「私の元を離れるなんてこと許さないわ！」

貴方はグレモリー眷属の『騎士』なのよ。

『はぐれ』になってもらっては困るわ。

留まりなさい！」

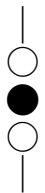
「…僕は、同志たちのおかげであそこから逃げ出せた。

だからこそ、かれらの恨みを魔剣に込めないといけないんだ…」

それだけ言うと、木場はその場から消えた。

「祐斗…どうして…」

リアス先輩の悲しそうな顔をしていた。



「あー。で？俺を呼び出した理由は？」

次の休日。俺とイツセーは会長眷属の

『兵士』である匙と駅前で合っていた。

気だるそうな匙。リアス先輩を介し、

イツセーがなんとか匙と連絡を取っていた。

「…そうです。三人で何をするつもりだったんですか？」

イツセーの服を掴んで離さない小猫ちゃんだ。

匙との待ち合わせ予定の駅前に向かう途中で

偶然鉢合わせとなり、イツセーが咄嗟に逃げ出したが、

呆気なく捕まってしまった。

どうやら、小猫ちゃんの顔を見るなり逃げ出したイツセーを

不審に思い。監視の意味でイツセーを拘束している。

恐らく、先日の全裸事件を根に持つての犯行だろう。

すると、イツセーがコホンとひとつ咳払いすると俺達に計画を告げ

る。

「聖剣エクスカリバーの破壊許可を紫藤イリナとゼノヴィアから貰うんだ」

イツセーの告白は今回のイリナ達からの注文を否定する内容だった。

第32話 「共同戦線」

「嫌だああああ！俺は帰るんだあああ！」

悲鳴をあげて逃げようとする匙。

それを小猫ちゃんが掴んで離さないでいた。

イツセーがエクスカリバー破壊作戦を提案したら、

小猫ちゃんはしばらく考え込んで

「私も協力します。祐斗先輩の事ですよね？」と察してくれた。

匙の方は話を聞くなり青ざめて逃げようとした。

それを小猫ちゃんが捕縛したと。

「兵藤！なんで俺なんだよ！おまえら眷属の問題だろう!？」

俺はシトリー眷属だぞ！関係ねえ！関係ねえええ！」

匙は涙を流しながら訴える。

「そう言ってくれるなよ。俺が知っている悪魔で協力

してくれそうなのはお前ぐらいなもんだったんだもんよ」

「そうそう、生徒会なら困った生徒を助けるのも仕事だろ？」

「ふざけんなああ！俺がためえらの協力なんてするわけ

ねえええだろおおお！殺される！俺は会長に殺されるううう！」

会長への恐怖が大分強いな。よほど怖いんだな、会長は。

「お前達の所のリアス先輩は厳しいながらも優しいだろうよ！

でもな！俺んところの会長はな！厳しくて厳しいんだぞ！」

日本語が可笑しいが、どれだけ怖いかは十分伝わった。

まあ、最後は一緒に怒られてやるさ、

いまだにぐずる匙を無理やり連れていき俺達は、

イリナとゼノヴィアを街中で探していた。

「なあ、小猫ちゃん。木場が聖剣計画の犠牲者で、

エクスカリバーに恨みを持っているのは知っているよね？」

イツセーの問いかけに小猫ちゃんは頷く。

「イリナとゼノヴィアが俺達の所へ訪れた時、

彼女たちはこう言ったんだ」

『協会は墮天使に利用されるぐらいなら、

エクスカリバーが全て消滅してもかまわないと決定した。私達の役目は最低でもエクスカリバーを墮天使の手から無くす事だ』

「つまり、彼女達は奪われたエクスカリバーを

最悪破壊して回収するってことだろうか？」

「…はい、そうですね」

「なるほど、つまりイツセーは、その奪還作業を木場を中心に手伝えないかと考えたのか。」

確かに、三本あるんだから一本ぐらいなら、俺らが

協力しても構わないだろうしな」

「…祐斗先輩にそこでエクスカリバーに打ち勝ってもらい、

想いを果たしてほしいというわけですね？」

小猫ちゃんの問いにイツセーが笑顔で頷く。

まあ、木場の気が済めば、今まで通りの生活に戻るだろう。

「木場はエクスカリバーに勝って、自分と昔の仲間の復讐

を果たしたい。ゼノヴィア達は墮天使達からエクスカリバーを破壊してでも奪いたい。意見は一致している。

あとは彼女達が俺ら悪魔の言葉に耳を傾けてくれるかどうかだ」

「…難しそうですね」

「うーん、そうだよな」

イツセーや小猫ちゃんのいう事は分かるが、

向うが悪魔と協力してくれるとは思わないがな。

しかもさ。

「…部長も他の部員には内緒」

小猫ちゃんの言う通りだ。

今回の件は、リアス先輩や朱乃さんに知られるわけにはいかない。悪魔と教会間での関係に支障が出るだろう。

それは、リアス先輩はよしとしないだろう。

『祐斗の為とはいえ、天使側の問題に首を

突っ込むべきではないわ』と。

上級悪魔だからこそ、立場がある。

俺達が、アーシアを奪還に行くときも大分反対されたからな。

「アーシアにも内緒だ、イツセー以上に顔に出ちゃうからな、嘘を付き通すのは下手だろうし、アーシア自身が罪の意識に耐えられないだろうしな。それに、その話し合いで、

またぶつかることがあったら関係も悪化するかもしれない」

そうならないように、俺がどうにか頑張らないとな、

「そういうことだ、だから、小猫ちゃんは降りてもいいよ。

匙も危なくなったら逃げろ。だけど、ユウスケはついて来いよな」

「今逃げさせろおお！最悪じゃないか！

エクスカリバー破壊なんて勝手なことしたら、

会長に殺される！絶対に拷問だあああ！」

「もしかしたら、交渉が成立するかもしれないだろう？

そうになったら、お前にも協力して欲しいんだよ」

「うわああああ！勝手な言い分だああああ！」

死ぬ！死んでしまおううう！」

まあ、人では欲しいからな、

手を貸してくれそうな同年代の悪魔って理由で読んだからな。

「私は逃げません。仲間の為です」

小猫ちゃんにハツキリと、強い眼差しで言われた。

この子は意外と熱血なんだよな。

街中を探す事二十分。

極秘任務中の身だ白いローブを着ているとはいえ

そう目立つとは思えないし、簡単には見つからないだろうと、

思っていたが…。

「えー、迷える子羊にお恵みを〜」

「どうか、天の父に代わって哀れな私達にお慈悲をおおお！」

簡単に見つかった。

路頭で祈りを捧げる白ローブの女子二人。めっちゃ目立ってる!?

何やら相当困っているようだ。

通り過ぎる人々も奇異な視線を向けていた。

「なんてことだ。これが超先進国であり経済大国日本の現実か。

「これだから信仰の匂いもしない国は嫌なんだ」

「毒づかないでゼノヴィア。路銀の尽きた私達はこうやって、異教徒共の慈悲無しでは食事も摂れないのよ？」

「ああ、パンひとつさえ買えない私たち！」

「ふん。もとはといえ、おまえが詐欺まがいの変な

絵画を購入するからだ」

ゼノヴィアが指差す方に聖人らしき者が描かれた下手な絵画があった。

「あちやあ、これは確実に詐欺だな。」

「何を言うの！この絵には聖なるお方が描かれているのよ！」

展示会の関係者もそんなことを言ってたわ！」

「じゃあ、誰かわかるのか？私には誰一人脳裏に浮かばない」

絵画にはそれっぽい外国風の人物が貧相な服装をしており、

頭の上に輪っかがあり、背景には羽の生えた赤ちゃんがラツパを

持って宙を舞っている。

「…たぶん、ペトロ…さま？」

「ふざけるな。聖ペトロがこんなわけないだろう」

「いいえ、こんなのよ！私にはわかるもん！」

「ああ、どうしてこんなのが私のパートナーなんだ…。」

「主よ、これも試練ですか？」

「ちよつと、頭を抱えないでよ。貴方って、

沈む時はとことん沈むわよね」

「うるさい！これだからプロテスタントは異教徒だというんだ！

我々カトリックと価値観が違う！聖人をもっと敬え！」

「何よ！古臭いしきたりに縛られてる

カトリックの方が可笑しいのよ！」

「なんだと、異教徒め」

「何よ、異教徒！」

ついには顔をぶつけながら喧嘩を始めちゃった。

ぐううううう…。

しかし、少し離れて様子を窺っている俺達にも届く腹の虫。

腹が鳴るなり、二人は力なくその場に崩れ落ちる。

「…まずはどうにかして腹を満たそう。」

そうしなければエクスカリバー奪還どころではない」

「…そうね。それじゃ、異教徒を脅してお金もらおう？」

主も異教徒相手なら許してくれそうなの」

「寺を襲撃するのか？それとも賽銭箱とやらを奪うか？」

どちらも止めとけ。ここは剣を使って大道芸でもしよう。

どの国でも通じるインターナショナルな娯楽だ」

「それは名案ね！エクスカリバーで

果物でも切れば路銀は溜まるはず！」

「まあ、その果物が無いわけだが。仕方ない。その絵を切るか」

「ダメー！これはダメよ！」

再び喧嘩を始める二人。

このままだと警察のお世話になりそうなので、

俺達は二人の元へ近づいていく。



「うまい！日本の食事はうまいぞ！」

「うんうん！これよ！これが故郷の味なのよ！」

ガツガツとファミレスで注文したメニューを腹に収めていく
ゼノヴィアとイリナ。

その食いつぷりは本当に教会関係者かと思うな。

あのあと、俺達を見るなり、眉をひそめていたが、

「訊きたいこともあるから、食事でも行かないか？」

と訊いたら、一発OKだった。

ファミレスに着くまでの間は、「私達は悪魔に魂を売ったのよ」、

「これも信仰を遂行するためのだ」などとぶつぶつ言っていた。

此処の会計はイツセーが出すと言っていたが、

二人の食いつぷりを見て小猫ちゃんも出してくれると言っていたが、
流星に後輩に頼るのは男が廃るからな、俺も出してやろう。

これも木場の為だ、この件が終わったら、木場のおごりで皆で食事にでもいこう。

「ふうー、落ち着いた。君達悪魔に救われるとは、世も末だな」と、ゼノヴィア。

「おいしい、奢ってもらってそれか」

イツセーが口の端を引きつらせながら言う。

これから交渉するんだ、流石に強くは言えないな。

俺も文句は言いたかったが、ここはイツセーに任せるべく。

文句はぐつと我慢した。

「はふうー、ご馳走様でした。ああ、主よ。

心やさしき悪魔達にご慈悲を」

『うっ！』

その瞬間、俺を頭痛が襲う。

他の皆も同様に頭へ手を当てていた。

どうやら、目の前で十字を切られて、

俺ら悪魔は軽くダメージを受けたようだ。

「あー、ゴメンなさい。つい十字を切ってしまったわ」

てへつとイリナは可愛らしく笑う。

水を飲み、息をついたゼノヴィアは改めて俺達に訊く。

「で、私達に接触した理由は？」

「っ！」

いきなり切り出されるとは思わなかったな。

まあ、偶然出会ったって感じで接触はしてないからな。

「あんたら、エクスカリバーを奪還する為にこの国に来たんだよな？」

イツセーが二人に目的を再度確認する。

「そうだ。それはこの間説明したはずだよ」

食事を摂ったばかりの為か、ゼノヴィアもイリナも今の所敵意を

出していない。

こんな一般人の多いファミレスで戦闘開始しても仕方ないだろうし、

いざ戦闘になっても俺達に圧勝する自身があるんだろう。

「エクスカリバーの破壊に協力したい」

イツセーの告白に二人は目を丸くして驚いている様子だった。

余りの驚きに互いに顔を見合わせていた。

今後の関係は彼女達の返答次第だ、

彼女達の返答を固唾をのんで見守っていた。

すると、ゼノヴィアが口を開く。

「そうだな。一本ぐらい任せてもいいだろう。

破壊できるのであればね。ただし、そちらの正体がバレないように

してくれ。こちらこそちらと関わりを持つているように上にも

敵にも思われたくない」

ツ。

意外にも簡単に許可が下りた。

まあ、正体がバレないようにだから、

俺は変身できないだろうな。

変身したら、一発でばれるだろうしな。

「ちよつと、ゼノヴィア。いいの？相手はユウスケくん達とは言え、

悪魔なのよ？」

イリナは異を唱えている。まあ、それが普通の反応だろう。

「イリナ、正直言って私達だけでは三本回収と

コカビエルとの戦闘は辛い」

「それはわかるわ。けれど！」

「最低でも私達は三本のエクスカリバーを破壊して逃げ帰って

くればいい。私達のエクスカリバーを奪われるぐらいなら、自らの

手で壊せばいいだろう。で、奥の手を使ったとしても任務を終え

て、

無事帰れる確率は三割だ」

「それでも高い確率だと私達は覚悟を決めてこの国に来たはずよ」

「そうだな、上にも任務遂行して来いと送り出された。

自己犠牲に等しい」

「それこそ、私達信徒の本懐じゃないの」

「気が変わったのさ。私の信仰は柔軟だね。」

いつでもベストなカタチで動き出す」

「あなたね！前から思っていたけれど、信仰心が微妙におかしいわ！」

「否定はしないよ。だが、任務を遂行して無事帰る事こそが、

本当の信仰だと信じる。生きて、これからも主の為に戦う。違う

？」

「…違うわいわ。でも」

「だからこそ、悪魔の力は借りない。代わりにドラゴンの力を借りる。

上もドラゴンの力を借りるなどは言っていない」

ゼノヴィアの視線がイツセーに向けられる。

「まさか、こんな極東の島国で赤龍帝と出会えるとは思わなかった。

悪魔になっていたとはいえ、ドラゴンの力は健在と見ているよ。

伝説の通りなら、その力を最大まで高めれば魔王並になれるんだろう？

魔王並の力ならエクスカリバーも楽々破壊できるだろうし、

この出会いも主のお導きと見るべきだね」

ゼノヴィアは嬉々として語った。

「た、確かにドラゴンの力は借りるなどは言っていないけど…。

屁理屈すぎるわよ！やっぱり、貴方の信仰心は変だわ！」

「変で結構。しかし、イリナ。彼らはキミの古い馴染みだろうか？

信じてみようじゃないか。ドラゴンの力を」

ゼノヴィアの言葉にイリナも黙り、承知の空気を出していた。

まあ、イツセーが魔王並の力を出す事は出来ないが、

木場に対して譲渡の力を使えばエクスカリバーにも勝てるだろう。

「OK。商談成立だ。俺はドラゴンの力を貸す。じゃあ、

今回の俺のパートナーを呼んでもいいか？」

そういうと、イツセーはケータイを取り出し、木場へ連絡を入れた。



「…話はわかったよ」

木場はため息を吐きながらもコーヒーに口をつけた。

ファミレスに木場を呼び出した俺達。

「今、例のエクスカリバー使いの二人と会っている。

木場にも来てほしい」

と、イツセーが伝えるとファミレスへ顔を出してくれた。

「正直言うと、エクスカリバー使いに破壊を承認されるのは遺憾だけだね」

「随分な言いようだね。そちらが『はぐれ』だったら、

問答無用で斬り捨てているところだ」

睨み合う木場とゼノヴィア。

これから共同戦線を組もうってんだから、喧嘩は無しだぜ。

「やはり、『聖剣計画』のことで恨みを持っているのね？

エクスカリバーと教会に」

イリナの問いに木場は目を細めながら「当然だよ」と

冷たい声音で肯定した。

「でもね、木場君。あの計画のおかげで聖剣使いの研究は

飛躍的に伸びたわ。だからこそ、私やゼノヴィアみたいに

聖剣と呼応できる使い手が誕生したの」

「だが、

計画失敗と断じて被験者のほぼ全員を始末するのが

許されると思っているのか？」

木場は憎悪の眼差しをイリナに向ける。

確かにイリナの言っていることは結果論だ、

その研究のおかげで得た物はあつたのだろうか、

人の処分なんて、非人道的な行為はあまりにも残酷だろう。

仮にも神の信徒が行う事じゃない。

イリナも反応に困っている様子だ。

そこへゼノヴィアが言う。

「その事件は、私達の間でも最大級に嫌悪されたものだ。

処分を決定した当時の責任者は信仰に問題があるとされて

異端の烙印を押された。今では墮天使側の住人さ」

「墮天使側じゃ？その者の名は？」

興味を惹かれた木場はゼノヴィアに訊く。

「バルパー・ガリレイ。『皆殺しの大司教』と呼ばれた男だ」

そいつが木場の仇ってわけか。

「…墮天使を追えば、その者にたどり着くのかな」

木場の瞳には新たな決意みたいなものが生まれていた。

仇の名がわかったただけでも木場にとっては大きな前進なのだろう。

「僕も情報を提供したほうがいいようだね。」

先日、エクスカリバーを持った者に襲撃された。

その際、神父を一人殺害していたよ。

やられたのはそちらの者だろうね。」

『！』

この場に居る全員が驚いた。

それもそのはずだ、俺達よりも先に敵と接触していたなんて、

俺達に黙っていたのは、やはり、関係無いと思っっているからなのか

？

木場にだつて思う所はあるだろうが、

襲われたことぐらいいは言っただけでほしかったぜ、

「相手はフリード・セルゼン。この名に覚えは？」

フリード！ 墮天使と一緒にいた。あのイカレ神父だ！

アーシアの一件で敵対した白髪の少年神父だな。

まさか、まだこの町に潜伏していたとは！

木場の言葉にゼノヴィアとイリナが同時に目を細める。

「なるほど、奴か」

「フリード・セルゼン。元ヴァチカン法王庁直属のエクソシスト。

十三歳でエクソシストとなった天才。悪魔や魔獣を次々と

滅していく功績が大きかったわ」

「だが奴はあまりにやりすぎた。同胞すらも手にかけてのだからね。

フリードには信仰心なんてものは最初から無かった。

あったのはバケモノへの敵対意識と殺意。そして、

異常なまでの戦闘執着。異端に掛けられるのも時間の問題だった」

あの神父は教会でも手を焼くほどの存在だったのか。

「そうか。フリードは奪った聖剣を使って私達の

同胞を手にかけていたか。あの時、処理班が始末出来なかったツケを私達が払う事になるとはね」

忌々しそうに言うゼノヴィア。

「まあいい。とりあえず、エクスカリバー破壊の共同戦線といこう」

ゼノヴィアはペンを取り出すと、メモ用紙にペンを走らせ、連絡先をこちらへよこした。

「何かあったらそこへ連絡をくれ」

「サンキュー。じゃあ俺とユウスケの方も」

「イツセー君のケータイ番号は叔母様から頂いているわ」

イリナが微笑みながら言う。

「マジかよ!!母さん!勝手な事を!」

「ユウスケ君のは前に教えてもらってるから大丈夫よ。」

私の連絡先も以前教えたものと変わってないから」

イリナの言葉にイツセーが食いついてくる。

「おい、ユウスケ!いつの間に関連絡先の交換なんてしてたんだよ!」

「落ち着けよイツセー。悪魔になる前からメールでのやり取りしてて

その時に番号教えてもらってちよくちよく電話もしてたんだよ」

「では、そういうことで。食事の礼、いつかするぞ。」

赤龍帝の兵藤一誠、そして、兵藤祐介」

そういうとゼノヴィアは席を立った。

「食事ありがとうね、ユウスケ君!イツセー君!」

また奢ってね!悪魔だけど、貴方達の奢りならアリだと主も許してくれるはずだわ!ご飯ならOKなのよ!」

ウインクしながらイリナはお礼を言ってくる。

二人を見送り、残された俺達はたまらずに息を大きく吐いた。ふうふう。

なんとか問題も起こさずに協力を取り付けることが出来たな。

最悪の場合悪魔と神側の争いの火種になっても可笑しくなかったからな

「…皆。どうして、こんなことを?」

木場が静かに訊いてくる。

木場にしてみれば、自分の怨恨をどうして助けてくれるのか不思議なんだろう。

「ま、仲間だし。眷属だしさ。それにお前には助けられた事があったからな。借りを返すつてわけじゃないけど、今回はお前の力になろうと思つてさ」

「そうイツセーの言う通りだ。お前はクールキャラを装っているが、意外と熱くなりやすい奴だからな。アジアの時には、

俺達に手を貸してくれただろ？今度は俺達が手を貸す番さ」

「僕が下手に動けば部長に迷惑がかかるから。それもあるんだよね？」

「もちろん。あのまま暴走されたら、部長が悲しむ。まあ、

俺が今回独断で決めたことも部長に迷惑かけているんだろうけど、お前が『はぐれ』になるよりはマシだろう？

結果オーライになつちまったが、教会の関係者と

協力態勢取れたんだしさ」

木場はそれでもまだ納得していない様子だった。

そこへ、小猫ちゃんが口を開く。

「…祐斗先輩。私は、先輩がいなくなるのは…寂しいです」

少しだけ寂しげな表情を小猫ちゃんが浮かべる。

普段無表情だからか、その変化はこの場に居る全員に衝撃を与えた。

「…お手伝いします。…だから、いなくならないで」
っ。

小猫ちゃんの悲痛な訴えは荒れていた木場の心に届いたようだ。

木場は困惑しながらも苦笑いする。

「ははは。まいったね。小猫ちゃんにそんなことを言われたら、僕も無茶はできないよ。わかった。今回は皆の好意に

甘えさせてもらおうかな。皆のおかげで真の敵もわかったしね。

でも、やるからには絶対にエクスカリバーを倒す」

木場も俺達と協力する気になつてくれたか！

小猫ちゃんも安堵したのか、小さく微笑んだ。

「よし！俺らエクスカリバー破壊団結成だ！」

がんばって、奪われたエクスカリバーとフリードのクソ野郎をぶっ倒そうぜ！」

イツセーの掛け声でやる気を出す俺達。

しかし、この場で一人だけ乗り気じゃない者がいる。

「…あの、俺も？」

手をあげながら、匙が訊いてくる。

「っーか、結構俺って蚊帳の外なんだけどき…。結局、

何がどうなって木場とエクスカリバーが関係あるんだ？」

ああ、完全に忘れていたが、匙には事情も何も説明してなかったな。

匙にしてみれば、先ほどからの会話も

断片的にしか理解できんだろうしな。

「…少し話そうか」

コーヒーに口をつけたあと、木場は自分の過去を語った。

カトリック教会が秘密裏に計画した『聖剣計画』。

聖剣に対応した者を排出するための実験が、

とある施設で執り行われていた。

被験者は剣に関する才能と神器を有した少年少女。

来る日も来る日も辛く非人道的な実験を繰り返すばかり。

散々実験を繰り返され、自由を奪われ、人間として扱わず、

木場達は生を無視された。

彼らにも夢があった。生きていたかった。

神に愛されていると信じこまされ、ひたすら

『その日』が来るのを待ち焦がれていた。

特別な存在になれると信じて。

聖剣を使える者になれると信じて。

三百六十五日、毎日毎日何度も何度も聖歌を口ずさみながら、

過酷な実験に耐えたその結果が『処分』だった。

木場達は聖剣に対応出来なかった。

「…皆、死んだ。殺された。神に、神に使える者に。」

誰も救ってくれなかった。『聖剣に適応出来なかった。』

たったそれだけの理由で、少年少女達は生きながら

毒ガスを浴びたのさ。彼らは『アーメン』と言いながら

僕らに毒ガスを撒いた。血反吐を吐きながら、

床でもがき苦しみながら、僕たちはそれでも神に救いを求めた」

木場の話を俺達は無言で聞いていた。

研究施設からなんとか逃げ出せた木場だが、

毒ガスはすでに彼の体を蝕んでいた。

一部の者を除いて、能力が平均値以下の被験者は

用なしと処分されたのだった。

逃げおおせた木場は、死ぬ寸前でイタリア視察に来ていた

リアス先輩と出会った。そして、今ここに至る。

「同志達の無念を晴らしたい。いや、彼らの死を無駄にしたくない。

僕は彼らの分も生きて、エクスカリバーよりも強いと

証明しなくてはいけないんだ」

…凄まじい過去だ。

アーシアも悲しい過去を持っていたが、

木場も俺達の想像を超える過去を過ごしていたんだな…。

正直、俺じやあ木場の苦しみは理解することはできない。

ただ、復讐心だけで生きていくことは辛いだろう。

リアス先輩だって剣の才能を復讐以外で生かしてもらいたい

と言っていたしな。

「ううううう…」

沈痛な面持ちで木場の過去を聞いていた俺達だが、

すすり泣く声が聞えてくる。

匙だ。

匙は号泣していた。

ボロボロ涙を流して、大泣きしていた。

鼻水まで垂れ流して…。

匙は木場の手を取り言う。

「木場！辛かっただろう！きつかっただろう！ちくしょう！

この世に神も仏もないもんだぜ！俺はなあああ、
今非常にお前に同情している！ああ、酷い話さ！

その施設の指導者やエクスカリバーに恨みを持つ理由もわかる！
わかるぞ！」

こんどは力強くうんうんと頷きだしたぞ。

「俺はイケメンのお前が正直いけ好かなかったが、

そういう話なら別だ！俺も協力するぞ！ああ、やってやるさ！

会長のしごきをあえて受けよう！それよりもまず

俺達でエクスカリバーの撃破だ！俺も頑張るからさ！

お前も頑張つて生きろよ！絶対に救つてくれた

リアス先輩を裏切るな！」

言つてゐることは滅茶苦茶だが、こいつも熱い奴だな。

そして、良い奴だ。いままで嫌な奴と思つていたが、

考えを改めさせてもらったよ。

「よっしー！いい機会だ！ちよつと俺の話も聞いてくれ！」

共同戦線張るなら俺の事も知つてくれよ！」

匙は気恥ずかしそうにしながらもランランと瞳を輝かせて言った。

「俺の目標はソーナ先輩とできちゃった結婚をすることだ！」

匙の告白を聞き、俺達は先ほどまでの熱い気持ちもどこへやら、

冷めた目で匙を見ていた。

だが、忘れてはならない。

此方にもどうしようもない変態が居たことを。

「匙！聞け！俺の目標は部長の乳を揉み、そして吸う事だ！」

イツセーも自身の野望を告白する。

お前の野望はハーレムじゃなかったのかよ。

その後、イツセーと匙は意気投合し自分達の野望を必ず叶えようと

二人で誓っていた。

「匙がイツセーを嫌つていた理由つて同族嫌悪じゃねえか…」

「…あはは」

「…やっぱり最低です」

号泣しあう二人の横で俺達はため息を吐いていた。

周りを見れば店内のいろんな人がこちらを奇異の目で俺達を見ている。いまからでも他人のふりは出来ませんか？
こうして『エクスカリバー破壊団』が結成されたのだった。

第33話「仇敵」

数日後。

俺は教室の自分の席で考え事をしていた。

このところ連日、俺、イツセー、木場、小猫ちゃん、匙の五人で夕方にエクスカリバーを捜索している。

相手は墮天使の配下のイカレた神父のフリード。

教会の追ってである神父を狩っていたようなので、

イツセーの提案で神父の格好をして夕方街中を皆で

歩き回る『疑似餌作戦』を行っていたのだが、

これが、なかなか出会えない。

まあ、二度と会いたくないのが本音なんだが。

一応、服装もゼノヴィア達から魔の力を抑える

神父の服を貰って捜索している。

だが、成果は無い。

これ以上アーシアやリアス先輩達に嘘をつき続けるのは

厳しいからな。アーシアは純粹だからこっちの良心が痛むし、

リアス先輩はいつ気づいてもおかしくない。

俺がそんなことを考えていると、

「最近難しい顔してばかりだが、困りごとか？ユウスケ」

同じクラスのスイッチが話しかけてきた。

「え？ああ、まあな。ちよつとした探し人がいてな

見つからなくて大変なんだよ」

「それは奈美部長が言っていた。外せない用事の件か

そういう話なら俺達だって力になるぞ」

スイッチが言っているのは、俺がフリード捜索のために、

皆に内容は伝えられないが、用事があつて部活を休むと言つてある

んだ。

もちろん、奈美先輩には事情は話してある。

木場の過去は勝手に話すわけにはいかないから伏せてはあるが、

木場の為にエクスカリバーを破壊する作戦の為、

フリードが見つかるまでの間は部活を休むと、
そしてこのことはリアス先輩と朱乃さんには秘密でとお願いした。
最初は良い顔はしなかったが、なんとか説得して、
黙っていてくれることを約束してくれた。
だけど、全てが終わったら、暫くは主材の手伝いや自宅の模様替え
等

雑用が待っているようだ。

「ありがとうスイッチ。だけど、今回の件は先方のお願いで

あまり大事にしたいくないんだよ。もしスイッチ達の手を借りたい

時は、迷わずお願いするからさ」

「そういうことなら仕方ない。ところでユウスケ。

例のボウリングとカラオケの会合はどうする？」

そう、俺達新聞部の同期三人と後輩の三人にアジア、クラスの女子の桐生、

さらにオカルト研究部からは木場と小猫ちゃんを誘って、

休みの日に半日遊び倒す計画を立てていた。

以前に教会でアジアに約束したからな。

今回はオカルト研究部と新聞部の親睦会でもある。

アジアと桐生は来る。スイッチと月詠も賛成してくれた。

スイッチはカラオケをどうやって歌うのかは不明だがな、

後輩の三人組もシカマルとチョウジは乗り気じゃ無かったが、

いのが乗り気だったので渋々参加してくれた。

そして意外なのは小猫ちゃんだった、絶対に断られると思っていた
が、

意外に乗り気で参加してくれた。

俺としては、アジアもだが、小猫ちゃんにも友人を増やして
あげたいと思っている。

学園内で偶に見かけてもいつも一人だったからな。

この気に同年代の友人を増やして欲しいものだ。

問題は木場か、話は既にしてあるが、

こんな状況じゃ……。

「一応木場以外は参加の予定だな。」

木場の方は俺から確認しておくよ、
参加してくれないと。

いのから文句言われそうだしな」

「いのちゃんだけでなく私も文句言うわよ」

そこへ桐生がやって来る。

「今回の会合の女性陣は木場君目当てなんだからね」

「これ、勝手なことを言うでない。わっちとアジアは

純粹に遊ぶのを楽しみにしてるんだからね」

そこへ月詠もやって来る。

「まあいいわ。とりあえず、木場君以外は来るのね？」

これ以上いじるのは無理だと思ったのか、

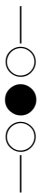
真面目な態度にガラリと変わった。

「いや、なんとか木場も来させるよ。」

一度は了承しているからな」

そうだ、この騒動をさっさと解決して。

木場も連れて来て皆で疲れるまで遊ぶんだ！



その日の放課後

俺達は公園に集まり神父やシスターの格好を شدした。

流石に十字架は作り物だ。本物だと俺達悪魔はダメージを受ける
からな。

この格好で街中を歩く。

できるだけ人気のない場所を中心に。

今日こそは奴を捕まえたい。

と。励んでみたものの、時間は残酷にも過ぎていき、もう夕方だ。
もうそろそろ家に帰らないと危ない。

リアス先輩達に内緒の行動だし、生徒会の者達にバレてもまずい
からな。

「ふう。今日も収穫なしか」

気落ちするように匙が言う。

実は一番気合の入っていた匙。

彼は本当にいい奴だ。出会うは最悪だったけど、

何だかんだで友人になれそうだ。

イツセー並にスケベではあるがな。

そんなことを思っていた俺だが、

先頭を歩いていた木場が突然歩みを止めた。

「…祐斗先輩」

小猫ちゃんも何かを感じ取ったようだ。

ぞくつ。

瞬間、俺の全身を寒気が襲った。

これは、殺気だ！

近くから俺達に向けて飛ばされている。

「上だー！」

匙の叫び。

全員が上空を見上げた時、長剣を構えた白髪の少年神父が降ってき

た！

「神父の二団にぐ加護あれってね！」

ギイイイン！

木場が素早く魔剣を取り出して、少年神父フリードの一撃を防い

だ。

「フリード！」

「！その声はイツセーくんかい？そつちにはユウスケくん

へええええ、これはまた珍妙な再会劇でござんすね！

どうだい？二人共パウワーは増大してるのかい？

そろそろ殺してもいい？」

相変わらずイカレた調子だな、この野郎は！

あいつの持っているのが聖剣エクスカリバーか。

確かにイリナやゼノヴィアが持っているものと同質の危なさを感
じる。

俺達は神父の服を脱ぎ捨て、普段の格好である制服の姿へ。
小猫ちゃんもシスターの格好を無造作に脱いでいた。

「ブーステッド・ギア！」

『Boost!』

すかさずイツセーが倍加を開始する。

今回、イツセーはサポートだ倍加した力を木場に譲渡する役割だ。

「変身！」

俺もクウガの姿へと変身する。

俺の役割は木場と共に前衛だ、

譲渡が完了するまでの間の壁役だ。

「伸びろ、ラインよー！」

ビューッ！

匙の手元から黒く細い触手らしきものがフリード
目掛けて飛んでいく。

匙の手の甲には可愛らしくデフォルメされたトカゲの顔らしき
ものが装着され、その口から伸びていた。

なるほど、あの触手はトカゲの舌か！

「うぜえッスー！」

それを聖剣で薙ぎ払おうとするが、

トカゲの舌は軌道を変えて下へ落ちていく。

ピタッとフリードの右足に張り付き、

そのままグルグルと巻き付いた。

フリードが剣で斬り払おうとするが、

実態が無いかのようにする抜けていた。

「そいつはちよつとやそつとじゃ切れないぜ。

ユウスケ！木場！これでそいつは逃げられねえ！

存分にやっちまえ！」

やるじゃねえか、匙！

フリードは足が速いスピードファイターだ、

それを封じて、更に逃亡できなくするのは名案だ。

「冴えてるな、匙！」

「ありがたい」

木場は一気に詰めていく！木場は二本目の剣を創り出して二刀の魔剣で攻め立てていった。

「チツ！『光喰^{ホリイレイサー}剣』だけじゃないってか！

複数の魔剣所持、もしかして『魔剣創造^{ソード・パース}』

でございますか？わーお、レア神器持っているとはなかなか罪なお方ですこと」

フリードの様子は口調とは裏腹に随分楽しそうだ。

イカレた戦闘好きも変わらずか！

「だが、俺様の持っているエクスカリバーちゃんはそんじよそこの魔剣くんでは」

ガギイイン！

破壊音を立てて、木場の魔剣が二刀とも砕け散る！

「相手になりはしませんぜ」

「くっ！」

再び魔剣を創り出す木場とフリードの間に介入して、創造の時間を稼ぐ。

だが、エクスカリバーの力は強力なようだ。

造ったそばから一振りで砕かれては世話が無いな。

「木場！譲渡するか？」

「まだやれるよ！」

木場はイツセーのサポートを拒否する。

大分イラついているみたいだな。

それもそうか。木場はゼノヴィアのエクスカリバーに一度負けている。

二度負けるなんてこと、あいつのプライドが許さないのかもしれない。い。

「ハハハ！君は随分とエクスカリバーを見る目が怖いねえ。

もしかして、憎悪とか持ってるの？何があったか知らないけどさ！

こいつで斬られると悪魔くんは消滅確定ですぜえ？死んじやうよ！

死んじやうぜ！死んじやえよッ！」

飛び出してくるフリード！木場が幅の広い魔剣を創り出して受け止めようとするが。

ガギインッ！

青白い聖なるオーラをまとった聖剣の一撃は木場の剣を易々と砕いてしまう！

間髪入れずフリードの二振りめが襲い掛かる！させるか！

俺は即座に二人の間に入りフリードに殴りかかる。カキイイン！

フリードはエクスカリバーで拳を受け止める。

「ハハハ、今度はユウスケ君が相手かい、

いやー、俺ちんもモテモテで辛いですな〜」

「言ってるクソ野郎！」

ブウン！

フリードが斬りかかってくるが後ろに下がり回避する。

聖剣の力も強大だが、悔しいがフリード自身も

相当に強いな。自分もある程度強くなったから分かるが、

以前戦った時は遊んでやがったんだらうな。

俺は後方の木場と並び立つ。

すると、

「うおおおおおっ！小猫ちゃあああんー！」

後ろからイツセーの叫び声が聞こえ振り返ると、

イツセーが悲鳴をあげながらこちらへ向かい飛んできていた。

如何やら小猫ちゃんに投げられたようだ。

「木場ああああ！譲渡すっからなあああー！」

「うわっ！イツセーくん!?!」

飛んできたイツセーが木場に飛びついた瞬間、

ブーステッド・ギアを発動させた。

『Transferr!!』

音声が発せられ、木場へドラゴンの力が譲渡される。

木場の全身からオーラ迸り、かなりの魔力が木場を覆っていた。

「…もらった以上は使うしかない！」

『ソード・パース
魔剣創造』 ツツ！』

ザンツ！

周囲一帯に刃が咲き乱れる！

路面から電柱から壁から、

あらゆるところから様々な形の魔刃が出現した。

「チィィィ！」

フリードが舌打ちしながら、自身に向かって伸びる魔剣を
横薙ぎに破壊していく。

タツ！

一瞬の隙を見つけ、木場が魔剣を持って消えた。

魔剣を足場にして、神速で縦横無尽に動き回る！

俺の動体視力じゃ残像しか動きが捉えられない！

これがスピード特化の『騎士』の本気か！

だが、フリードは目で追っている。

この速度に対応できるってのか！

なんて動体視力だよ！

ヒュツ！

風を切る音と共に生えていた魔剣が

フリード目掛けて飛んでいく！

木場が魔剣から移動するとき

一本抜いて放ったんだ！

いや、一本だけじゃない、

無数の魔剣が四方八方からフリードへ飛んでいく！

「うっはー…これは面白いサーカス芸だね！

この腐れ悪魔がああぁ！」

キン！キイン！キィィィン！

狂喜に彩られた表情でフリードは飛んでくる

魔剣を一本一本打ち落としていった！

「俺様のエクスカリバーは『天閃の聖剣』エクスカリバー・ラビッドレイ」

速度だけなら、負けないんだよツツ！」

フリードの持つ聖剣の切っ先がブレだし、ついには消え去った！
それだけの速度で聖剣が動いているってことなのだろう。

周囲の魔剣を全て破壊尽くしたフリードは

最後に木場へ向かって斬りかかる！

バキイイイイン！

「ダメか！」

木場が両手に持っていた魔剣は再び粉々に散っていった！

「死・ね！」

フリードの凶刃が木場へ降り注ごうとしたとき。

グンツ。

フリードの体が引つ張られて、体制を崩した。

「やらせるかよー！」

匙だ！トカゲの舌を引つ張って、

フリードの構えを解いたんだ！

それと同時にトカゲの舌が淡い光を放ち始める。

それはフリードから、匙の方へ流れていくようだった。

「…これは！クツソ！俺っちの力を吸収するのかよ！」

「へッ！どうだ！これが俺の神器！」

『アブソーブション・ライオン
黒い龍脈』だ！

こいつに繋がれた以上お前さんの力は俺の神器に吸収され続ける

！

そう、ぶつ倒れるまでな！」

なるほど、ただ相手を拘束するだけじゃなかったのか！

これが、匙の神器の真の能力か！

「…ドラゴン系神器か！一番厄介な系統だねえ。」

初期状態は大したことなくても、

成長した時の爆発力が他系統の神器と違って段違いに

凶悪だから怖い怖い。まったく、忌々しいことこの上ないってね

！

フリードがエクスカリバーで取り払おうとしても、匙の神器は無傷。物理攻撃じやダメーじが入らないタイプか？しかもイツセーと同じドラゴン系ってことは、あのデフォルメされたトカゲはドラゴンなのか！そこまで似てるのかよあいつら。

「木場！文句は言つてられない！とりあえず、そいつを倒せ！エクスカリバー問題はその次でいいだろう！こいつ、マジで危ねえ！こうして敵対しているだけで危ない気をビシビシ感じるしよ！このまま放置してたんじゃ、俺や会長まで害がありそうだ！

俺の神器で力を吸収して弱らせるから、一気に叩け！」匙が作戦を提案する。

良い作戦だし、今はそれがベストだろう。

こいつの危険性は本物だ。この場で始末した方がいいに決まってる。

だが、木場は複雑な表情を浮かべていた。理由は分かる。

自分の力で勝てなかったのが悔しかったのだろう。

けど、ここでフリードをやっておいて損なしなのは木場だつて理解しているはずだ。

決心を決めたのか、魔剣を創り出す木場。

「…不本意だけど、ここで君を始末するのには同意する。

奪われたエクスカリバーはあと二本ある。

そちらの使い手に期待させてもらうよ」

「ハッ！他の使い手さんより俺様の方が強いんだぜ？

つまりだ！俺を五人がかりで倒した瞬間、満足できる

聖剣バトルはなくなるぜ？」

不敵な笑みでそんなこと言うフリード。

木場もそれを聞き、目元を引きつらせていた。

「ほう、『魔剣創造』か？

使い手の技量次第では無類の力を発揮する神器だ」

そのとき、この場に第三者の声が届く。

そちらへ視線を送れば、神父の格好をした

初老の男性が立っていた。

「…バルパーのじいさんか」

フリードの言葉に全員が驚愕する。

バルパー!?

その名はゼノヴィアが言っていた、「聖剣計画」
で木場達を処分したっていう…。

「…バルパー・ガリレイツ！」

憎々し気に木場は初老の男性を睨む。

「いかにも」

その男性、バルパー・ガリレイは堂々と肯定した。

こいつが木場の仇敵か。

「フリード。何をしている」

「じいさん…このわけのわからねえトカゲ君

のベロが邪魔で逃げられねえんスよ！」

「ふん。聖剣の使い方がまだ十分ではないか。

お前に渡した『因子』をもっと有効活用してくれたまえ。

そのために私は研究していたのだからね。

体に流れる聖なる因子をできるだけ聖剣の

刀身に込めろ。そうすれば切れ味は増す」

「へいへい」

フリードの持つ聖剣の刀身にオーラが集まりだし、

輝きを放ち始める！

「こうかーそらよー！」

ブシユツ！

匙の神器が難なく切断され、フリードを捕らえる術が

取り払われた！マズイ、逃げられる！

「逃げさせてもらうぜー！次に会う時こそ、最高のバトルだ！」

捨て台詞を吐くフリードだが。

「逃がさん！」

俺達の横を凄まじいスピードで通り過ぎていくものがあつた。
ギィイイン！

フリードの聖剣と火花を散らす切り込み！
ゼノヴィアだ！

「やつほ。ユウスケ君、イツセイ君」

「イリナ！」

いつの間にかイリナも駆けつけていた。

ここにきて共同戦線の援軍か！

「フリード・セルゼン、バルパー・ガリレイ。

反逆の徒め。神の元、断罪してくれる！」

「ハッ！俺の前で憎つたらしい神の名を出すんじゃないやねえや！

このビッチが！」

斬戟を繰り広げるゼノヴィアとフリードだが、

奴は懐に手を突っ込み、光の球を取り出した。

あれは！以前使った逃亡用のアイテムだ！

「バルパーのじいさん！撤退だ！」

「コカビエルの旦那に報告しにくぜ！」

「致し方あるまい」

「あばよ、教会と悪魔の連合共が！」

フリードが球体を路面に投げ放つと。

カッ！

目を覆う眩い閃光が周りを包み込み、俺達の視力を奪う。

眩しい！

視力が戻った時には、フリードもバルパーも消えていた。

クソ！

ここまで来てみすみす逃しちまった！

「追うぞ、イリナ」

「うん！」

ゼノヴィアとイリナが頷き合つて、その場を駆けだす。

「僕も追わせてもらおう！逃がすか、バルパー・ガリレイ！」

木場も二人の後を追つて、この場を駆けだした。

「木場！まったく！イツセー！俺はこのまま三人を追うから
お前はリアス先輩やアジア達に説明頼む！」
そうして俺も三人の後を追って、駆けだした。



イツセーside

「お、おい！ユウスケ！説明ってなんだよ！まったく！何なんだよ！
毒づく俺。どいつもこいつも勝手だぜ！」

取り残された俺と小猫ちゃん、匙は戦闘態勢を解き、
息を整えていた。そのとき、背後に人の気配を感じる。

「力の流れが不規則になっていると思ったら…」

「これは困ったものね」

聞き覚えのある声に驚き振り返ると。

「イツセー、どういうこと？説明してもらおうよ」

「匙、貴方もですよ？」

険しい表情の部長と会長様の姿がそこにあった。

俺達は一気に青ざめた。

第34話 「宣戦布告」

イツセーside

「…エクスカリバー破壊って貴方達ね」

額に手を当て、極めて機嫌の

よろしくない表情の部長。

あのあと、俺と小猫ちゃん、匙の三人は

近くの公園に連れて行かれ、

噴水の前で正座させられていた。

「サジ。貴方はこんなにも勝手なことを

していたのですね？本当に困った子です」

「あうう…。す、すみません、会長…」

会長のほうも冷たい表情で匙に

詰め寄っていた。

匙の顔色は危険なほど青い。

よほど怖いんだろう。

「祐斗はそのバルパーを追ったのね？」

「はい。ゼノヴィアとイリナやユウスケも

一緒だと思えます。…何かあったら

木場かユウスケから

連絡をよこしてくれると思うのですが…」

「さっきの道にこの携帯が落ちてたわ。

戦闘の際に落としたのね」

そうやって部長が取り出したのは

画面が割れている見覚えのある携帯だった。

「それってユウスケの…」

なら、連絡は木場から待つしかないか…。

「ユウスケの携帯は…」

復讐の権化と化した祐斗が悠長に

電話をよこすかしら」

「ごもつともです、部長。

部長の視線が小猫ちゃんに移る。

「小猫」

「…はい」

「どうして、こんなことを？」

「…祐斗先輩がいなくなるのは嫌です…」

小猫ちゃんは自分の思いを正直に口にした。

部長もそれを聞き、

怒りというよりも困惑するような

顔に転じていた。

「…過ぎたことをあれこれ言うのもね。ただ、

貴方達がやったことは大きく見れば悪魔の

世界に影響を与えるかもしれないよ？

それはわかるわね？」

「はい」

「…はい」

俺と小猫ちゃんは同時に頷いた。むろん、

それは承知だ。いや、正直、

スケールなんてものはわからなかった。

ただ漠然と危ないと思っただけで

動いていたからだ。

部長の言う規模と俺の想像する規模は

隔たりがあると思う。

俺の方が遥かに浅はかだ。

「すみません、部長」

「…ゴメンなさい、部長」

俺と小猫ちゃんは深々と頭を下げた。

これで許して貰えるなんて思えないけど、

頭を下げるにはいられなかった。

本当に申し訳ございませんでした、部長。

ベシッ！ベシッ！

叩かれる音の方へ顔を向けて見れば、

匙が会長に尻を叩かれていた！

おおっ何という姿だ、匙よ！

「貴方には反省が必要ですね」

「うわあああん！ゴメンなさいゴメンなさい！

会長、許してくださいああああい！」

「ダメです。お尻を千叩きです」

ベシッ！ベシッ！

会長の手には魔力がこもっている。

あの手で尻叩きか！

かなり痛そうだ！うわあ、

高校生にもなってあれは辛いなあ。

「コラ、イツセー。余所見しない」

「は、はい！」

「使い魔を祐斗探索に出させたから、

発見しだい、部員全員で迎えに行きましょう。

それからのことはその時に決めるわ。いいわね？」

『はい』

部長の言葉に俺と小猫ちゃんは返事をした。

ぎゅっ。

部長が俺と小猫ちゃんを引き寄せ、抱きしめた。

部長の温もりが伝わってくる。

「…馬鹿な子達ね。本当に、心配ばかりかけて…」

優しい声音で部長は俺と

小猫ちゃんの頭を撫でてくれる。

…部長。すみません。こんな俺たちの事…。

ああ、部長の優しさが身に沁みる。

俺、部長の下僕で良かった。

こんなに優しい主を得たんだもん。

「うわあああん！会長おおお！」

あっちはいい感じで終わってますけどおおお！」

「よそはよそ。うちはうちです」

ベシッ！ベシッ！

匙の尻叩きは未だに終わりを見せてなかった。
こりや出来ちやった結婚は遠いな。

「さて、イツセー。お尻を出しなさい」
：へ？ぶ、部長、俺のことお許しに
なってくれたんじゃ…。

ニツコリ微笑む部長の右手が
紅いオーラに包まれた。

「下僕の躰は主の仕事。貴方もお尻叩き千回よ♪」
その日、俺の尻は死んだ。

—●—

ユウスケ side

フリード達を追って、俺たちは河川敷の工場に
辿り着いた。

「奴らはこの中に入って行った」

先頭を走っていたゼノヴィアが伝えてくる。

「ここがアジトなら応援を呼ぼう。

流星にこの人数じゃ、勝てるかわからんからな」

俺は携帯で連絡を取ろうとして変身を解除して
制服の中の携帯を取り出そうとしたが、

ポケットには入っていないかった。

「あれ？え、携帯は？」

俺は制服のポケットを全て探したが
どこにも入って無かった。

「マジかよ落としたのか!？」

慌てている俺を見て木場が言う。

「応援なんて待ってられない！

その間に逃げられてしまう」

「お、おい木場！」

木場は俺の静止を聞かず中に入ってしまった。

「そう言うことだ、なら我々も行こう」

木場にゼノヴィアとイリナも続く。

「はあ、仕方ない」

工場の中に入るとそこはどうかやら、

油の生産工場のような。

奴らはなんでこんな所をアジトにしてるんだ？

俺達は周りを伺いながら奥へ進む。

「…しっ、あそこに誰か居る」

ゼノヴィアの言葉に俺達は機械の裏に隠れて

中の様子を伺う。

そこは広場になっておりフリードとバルパーの

後ろ姿が確認できた。

「遂に残りのエクスカリバーが現れた

それに、悪魔共も一緒だったぜ！」

「奴らが持っていたのは2本だ！」

これで残るエクスカリバーは一本だ」

2人は誰かに俺たちの事を報告してるようだ。

コツ、コツ、コツ。

「なら計画を進めよう」

奥の暗がりから現れたのは、

漆黒の羽根を生やした若い堕天使だった。

ぞくっ！

その男を見た瞬間、俺の全身に悪寒が走る。

この男から以前出会った堕天使とは

比べられない程のプレッシャーを感じた。

こいつが…コカビエル。

堕天使の幹部の一人か…。

こんな強大な相手に俺達は勝つとしていたのか、

はつきり言って無策で勝てる相手じゃない。

「木場…あいつの強さはお前も感じてるだろ。」

悔しいがここは一旦退こう。

俺達だけじゃ聖剣どころか全滅だ！」

「分かっている、分かっているさ……」

木場は俺の話に状況の

理解は出来ているのだろうか、

気持ちの整理が出来ないでいる様子。

「よし、計画の手始めにリアス・グレモリーに
宣戦布告をしに行くぞ」

なッ！

なんで、ここでリアス先輩の名が!?

こいつの目的は何なんだ！

「はいはい、コカビエルの旦那。

その場で何人が殺してもいいっすかね！」

「いや、それは最後に残しておこう

そこで戦えば全員殺してしまっそうだ

それは少しもつたないだろう」

「そうじゃな、せっかくじゃ聖剣のテストの為に
得物は多い方がいいじゃろう」

「あいあい、了解しやした」

まずい、なんとか脱出を……。

「その前に、ここまで来た
者たちを歓迎してやろう」

っ！

バレていたのか!?

「こっそり隠れていないで、出てきたらどうだ」
俺達はコカビエル達に姿を現す。

「ほう、あそこから追ってきたのか

しつこい奴らじゃな」

「おやおや、何人かなくなってるが、

これっぽっちで俺っち達を倒そうと?」

「バルパー・ガリレイ!ここで貴様を倒す!」

「誰かは知らんが、儂を使命とは余裕じゃな」

木場はバルパーに剣を向けるが、

バルパーは余裕の表情だ、

「コカビエル！貴様が奪ったエクスカリバーは返してもらおう！神の名の下に断罪を受けよ！」

「下らんな、たった二人で何を言っている。」

だが、俺の元に聖剣を届けたことは、

感謝しているぞ」

「戯言を！」

「なら、ユウスケ君が

俺の相手してくれるのかな？」

此方に視線を向けながらフリードが訊いてくる。

流石に俺一人でフリードの相手はきついな。

「木場！今は戦えない爺さんはほっとけ、

今はエクスカリバーを優先するぞ」

「確かにそうか…、わかった、

今はフリードを相手しよう」

「おやおや、俺つちてばモテモテじゃねえですか、

なら二人共相手をしてさしあげやすってね」

フリードが嬉しそうな声音で聖剣を構える。

「フン、儂もなめられたものだな、

なら、ここは儂の実験体のテストも行おう。

来い！お前達！」

バルパーが叫ぶと奥から、

教会のローブ姿の二人の男女が

ふらついた足取りで歩いてくる。

その二人はそれぞれ別の聖剣を握っていた。

ツ！残りの聖剣使いか！

ペタッ。ペタッ。

二人が月明かりの元に現れその全容が見えた。

「なッ！」

「な、なんだよあれ！」

その姿に俺達は驚愕した。

その二人の首から上が黒いブヨブヨとした塊に
すぐ変わっていた。

「こいつらは、教会からの追ってじゃよ。

殺した後、死体に寄生生物を植え付け、

操り人形にしたのさ儂の研究の成果じゃ」

この爺さん、聖剣計画だけじゃなく、

他にも危険な研究を！

人を何だと思っていやがる！

「貴様、まだこんなことをやっていたのか！」

屍人の人形を見た木場は怒りに震えていた。

「ハッ、貴様らに理解してもらおうだ

なんて思つたらんわい」

「戦争の前の余興か、

俺は手を出さんから

その人形どもと遊んでろ」

そう言い、コカビエルは翼を広げて

空へと飛びあがっていく。

まんま、高みの見物かよ。

「フン、言われるまでもない、

さつきは、クウガの小僧に戦えないと

バカにされたからな奴は儂の手で

殺さんと気がすまんわ！」

バルパーは俺に指を差し叫んだ。

俺だって修行してるんだ、

「唯の魔術師の爺さんに殺されるもんかよ！」

「なめるのもこゝまでじゃよ」

奴がそう呟くと、体がボコボコと膨れ上がっていく。

この変化は！

みるみるうちに体が作り替わり人間大の
カエルの化け物へと姿を変えた。

「貴様はこの儂、ズ・トオド・レが殺してやろう」
奴はグロンギだったのか!?

「わーお、爺さんのその姿初めて見たけど
思ったよりグロイんだな」

フリードも始めて見たようで、
トオドの姿に引いていた。

「やかましい、貴様はそっちの魔剣使いと
戦っておれ、聖剣使いの女二人には人形
相手でちょうどいいじやろ」

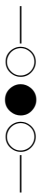
「はいはい了解しやした
ということできばきゅーん
俺っちの相手よろしくね!」

「今はキミを倒す事に集中しよう」

「ゼノヴィア、目の前の敵をさつさと倒して
ユウスケ君たちの援護にいきましょう!」

「ああ、唯の人形如きに遅れはとらんさ!」

「木場には悪いが俺が相手をしよう
悪魔としてではなくクウガとして
グロンギである貴方を倒す!変身!!」
こうして俺達のそれぞれの戦いが始まった。



— ユウスケVSトオド —
ブンツ!

俺の拳がトオドに迫る。
ニユル。

拳はトオドのガードした腕に当たったが、
表面の油のようなものに触れた瞬間、

拳が滑り衝撃も受け流されてしまった。

「ふ、この程度かクウガ！」

トオドの体をよく観察すると

奴の皮膚からドロドロした油があふれており
それが、滑る原因のようだ。

あの油をどうにかしないと

打撃は効かないって事か！

「ようやく、理解したか？」

貴様では儂は倒せんよ

古代のクウガのように

姿を変えられない貴様ではな」

クソツ！調べはついてるってか、

確かに五代さんが変身してた

紫や緑のクウガなら通じたかも知れないが、

ないものねだりは出来ない。

俺には俺の戦い方でやるしかない！

「悪いな、俺はバカなんでね

それでも戦い続けるさ！」

―― 木場VSフリード ―

バキィィン！

木場の持っていた魔剣がフリードの

振り下ろした聖剣により砕かれる。

「いい加減諦めて俺ちに消されちまえよ！」

「諦めないさ！皆の無念を晴らす為にも！」

木場は魔剣を創り出し走り出す。

「仲間の協力があつてようやく互角でしたのに

たった一人で何ができるんでやすか？」

「うるさい！たとえ一人でも君を

倒す事は出来る！」

木場はエクスカリバーではなく

フリード自身を狙い攻撃している。
速さは互角だが、どうしても

剣の性能差が出てしまっていた。

ガギイイイイン！

また魔剣を砕かれてしまう木場。

「僕はエクスカリバーを破壊する！

その為にも君を倒す！」

木場は決意と共に魔剣を創り出す。

「なら悔しがりながら死にな」

「いくぞ！フリード・セルゲン！」

魔剣と聖剣の戦いは更に加速する！

ゼノヴィア&イリナVS屍人形

ゼノヴィアとイリナは屍人形と戦っていたが、

突如相手の人形が分身した。

「これは、『エクスカリバー・ナイトメア夢幻の聖剣』の能力か!？」

「そのような実態がない幻術よ。

でもこれじゃあ、

何処に本物がいるか分からないわ」

屍人形は死んでいても、

聖剣の能力は使えるようだ。

「確かに幻覚の類は苦手だが、

本物だけが実態があるのなら！」

ガギイイイイン！

ゼノヴィアは背後から切りかかってきた

屍人形と切り結ぶ。

「たどえ幻覚で姿を増やそうと

本隊は足音ですぐわかる！」

「さすがゼノヴィア！よし私だつて！」

イリナは剣を構えて目をつぶる。

…コツ。

「そー！」

イリナは目を開き聖剣で突きを放つ。

その聖剣の切っ先が伸びるが、

伸ばした先には何もおらず空を切る。

ジワツ。

すると、何も無いはずが、

聖剣の切っ先から血が垂れてくる。

そして、そこに屍人形が姿を現した。

「あなたの『透明エクスカリバー！トランスペアレンシーの聖剣』」

なら、あの幻覚の中に透明になって

まぎれていると思っただわ」

「ゼノヴィア！伏せて」

ゼノヴィアがその場から下がり頭を下げると、

イリナは聖剣を伸ばしながら剣を横に薙ぎ払い、

幻覚とまとめて屍人形の二人を倒す。

屍人形は胸から上を切断された為、

動かなくなつた。

「やったなイリナ！」

「ええ、聖剣を回収して二人の援護に行きましょう」

—○○—

ユウスケ side

「待たせたわねユウスケ君！」

俺がトオド相手に攻めあぐねていると

イリナが援護にやってきてくれた。

「あっちは倒したのか!?!」

「ええ、所詮人形ね、簡単に倒せたは」

「ゼノヴィアはどうしたんだ？」

「もう一人の応援に行つたわ」

「聖剣だつてこの通り奪い返したわよ」

イリナの言葉に俺は安心した。

ゼノヴィアと木場ならあのフリード相手でも勝つことは出来るだろう。

まあ、木場がそれを納得するとは思えないが、

「どうだ、トオド！お前の人形は倒した、

あの二人ならフリードだって倒せる

あとはお前を倒して残すは

コカビエルだけだ！」

俺の言葉に激怒すると思っていたトオドだったが、

奴はイリナの話を鼻で笑い言った。

「フン、所詮我々に殺された雑魚じゃからな、

強くしたところで雑魚は雑魚のようじゃな

それに、貴様らあの

コカビエルに勝機はあるのか？」

俺はトオドの言葉に怒りを覚える。だが、

確かにコカビエル相手に勝てる保証はない、

だが、既に聖剣の内二本は取り返した。

木場が聖剣さえ破壊してくれば、

後は逃げるだけか、

「フフフフ……」

突如、トオドが笑い出す。

「何がおかしいんだ、この状況で

おかしくなったか？」

「なあに、この程度で勝った気に

なっているのがおかしくてな」

確かにコカビエルはいるが、

フリードもトオドだって、

倒されるのは時間の問題だろう。

奴の自身は何処からくるんだ？

ズリイツ。

何かを引きずる音がした。

「ユウスケ君！危ない！」

突如、イリナに突き飛ばされるユウスケ。

「なッ！」

俺を突き飛ばしたイリナに視線を

向けると先程の屍人形が上半身だけで

イリナにしがみ付いていた。

「フハッハハ！たかが胴を切った程度で

倒せるほどそいつらはやわじやないわい」

「クソ！イリナを放しやがれ！」

俺は屍人形を掴んで？がそうとしたが、

所々が油にまみれていて

掴むことが出来なかった。

「クソ！ヌルヌルして滑りやがる！」

「ハハハ、これで終わりじゃ！」

パチンッ！

ドオオオン！

トオドの合図と共に屍人形の頭が膨れ上がり、

爆発する。

「キヤアアアッ！」

ドサッ。

イリナは爆発の直撃を受けて倒れてしまう。

「うわああああー！」

俺も避ける事が出来ず爆発をもらに

受けてしまい吹き飛ばされる。

ドボオンッ！

吹き飛ばされた先の川に落ちてしまうユウスケ。

「ハハハハ、これでクウガも倒れたぞ

わしだって戦えるんじや！ハハハハ」

俺が川に流されて意識が無くなる寸前に見たのは

高笑いするトオドと

奴の足元に倒れるイリナだった。

イツセーside

部長にお仕置きされた俺達はあの後は連絡が入るまで自宅待機する事となった。

だが、使い魔も木場からも

連絡が入ることは無かった。

しかも、夕飯になってもユウスケが帰ることはなく。

アシアが心配しており、不安な様子でユウスケの帰りを待っている。

しかし、ユウスケは夜になっても

帰ることは無かった。

部長は心配しても何処にいるか分からないので、使い魔に搜索を命じた。

朝になったら、皆で搜索に行こうと約束し、

その日は眠りについていたのだが、

深夜、俺と部長はかつてないプレッシャーを

感じて、目を覚ました。

部長がベットから飛び起きて、窓の前に立った。

窓から見下ろすと、

俺の家の前にこちらを見上げる人影が。

『…クソ神父ッ！』

俺達へ挑戦的で下品な笑みを向けているのは

白髪の少年神父フリードだった。

野郎！あのあと、何があった？

ユウスケは？木場は？クソ！気になる！

奴がこちらを手招きする。

「…墮天使か」

部長は忌々しそうにつぶやくと

指パッチンをして、即座に学生服へ着替え、

部屋の扉をあけ放ったのだった。

「やっほー、イツセーくん、アーシアたん。

ご機嫌麗しいねえ。元氣してた？

あー、もしかしてお楽しみの中だった？

それはごめんね。空気読めないのがウリなの、僕ちゃん」

家の外に出ると、相変わらずふざけた口調でクソ神父が話しかけてくる。

「何か用か？」

俺が問うが野郎は嘲笑しながら肩をすくめるだけだ。

こいつがさっきのプレッシャーを？

いや、不気味さをこいつから感じるけど、

それだけだ。あの重圧は上級悪魔の比じゃ。

部長が何かに気付き、空を見上げた。

月をバツクに空で浮かんでいた者。

漆黒の翼を生やした…男の墮天使！

いち、に、さん…黒い翼が十!?

装飾の凝った黒いローブに身を包む

若い男の墮天使。

部長を捉えると、苦笑する。

「初めましてかな、グレモリー家の娘。

紅髪が麗しいものだ。

忌々しい兄君を思い出して反吐が出そうだよ」

いきなりの挑戦的な物言い！

憎悪を感じるぐらいだ。

部長も冷淡な表情を浮かべていた。

こ、怖い…。

「いぎげんよう、墮ちた天使の幹部

コカビエル。

それと私の名前はリアス・グレモリーよ。
お見知りおきを。もうひとつ付け加えさせて
もらうなら、グレモリー家と我らが魔王は
最も近く、最も遠い存在。この場で政治的な
やり取りに私との接触を求めるなら無駄だわ」

コカビエル!?

コカビエルって！墮天使の幹部って！

マ、マジか!?

聖書とか、有名な書物に記されている

本物さんでしょ!?

チヨー大物じゃん！やべえよ！

これ、絶対にヤバいつて！

上空の奴をよく見れば、

コカビエルは腕に何かを抱えていた。

目を凝らすと…人？人を抱えているのか？

「こいつは土産だ」

ヒュツ。

ふいにこちらへ抱えていた人間を投げってくる。

「お、おわっ！」

俺が即座に反応して、キャッチしようとする。

ドサツ。

俺の腕の中にうまく飛び込んでできたのは

紫藤イリナ！

血まみれだ！息も荒い！って

全身傷だらけじゃないか！

所々ひどいやけどを負っている！

あのあとフリードたちを追ってこうなったのか!?

じゃあ、ユウスケや木場や

ゼノヴィアはどうなったんだ!?

「お、おい、イリナ！」

俺が呼びかけても苦しそうに

呻くだけで応じてくれない。
ヤバいぞ、これは！

「俺達の根城まで来たのでな、
それなりの歓迎をした。」

まあ、クウガは川に落としてしまったし、
二匹は逃がしたがな」

コカビエルは嘲笑しながら言う。

奴の話だと木場とユウスケは逃げたんだな。

ユウスケだって川に落ちた
だけで死ぬわけじゃない！

まずは、イリナを！

「ア—シア—」

道にイリナを下ろし、ア—シアに治療してもらおう。

ア—シアの体から緑色の光が発せられ、

イリナの体を包み込んだ。

徐々にイリナの表情も緩和していき、

呼吸も穏やかになっていく。

イリナはエクスカリバーを持っていない

どうしたんだ？

俺の疑問なんてお構いなしに

コカビエルは会話を続ける。

「魔王と交渉などというバカげたことはしない。

まあ、妹を犯してから殺せば、サーゼクスの激情が
俺に向けられるのかもしれないな。

それも悪くない」

部長は侮蔑したような目でコカビエルを睨む。

「…それで、私との接触は何が目的かしら？」

部長の問いにコカビエルは嬉々として告げる。

「おまえの根城である駒王学園を中心にして

この町で暴れさせてもらうぞ。

そうすればサーゼクスも出てくるだろう？」

な…なんだとツ!?

「そんなことすれば、堕天使と神、悪魔との戦争が再び勃発するわよ?」

「それは願ったり叶ったりだ。」

エクスカリバーでも盗めばミカエルが戦争を仕掛けてくれると思っただが…

寄こしたのが雑魚のエクソシスト共と

聖剣使いが二名だ。つまらん。

あまりにつまらん!

だから、悪魔の、サーゼクスの妹の根城で暴れるんだよ。ほら、楽しめそうだろう?」

舌打ちする部長。

部長がそんな風に舌打ちするなんてよほどぶち切れている証拠だ。

つーか、なんて計画を実行しやがる!

ミカエルって神様の次に偉い天使だろう?

疎い俺でもミカエルって名前は他の書物で

度々見かけている。

そんな大物に喧嘩を吹っ掛ける!

さすがは堕天使の幹部ってことかよ!

しかもこちらにまで牙を向けて来やがった!

つまらないという理由だけで!

「戦争狂め」

部長が忌々しそうにつぶやくが、

コカビエルは狂気の笑いを上げるだけだ。

「そうだ。そうだとも!俺はみつどもえの

戦争が終わってから退屈で退屈で仕方なかった!

アザゼルもシエムハザも次の戦争に消極的でな。

それどころか、神器なんてつまらんものを

集めだしてわけのわからない研究に没頭し始めた。

そんなクソの役にも立たないものが俺達の

決定的な武器になるとは限らん！…まあ、
そのガキが持つ『赤龍帝の籠手』

ブーステッド・ギア
クラスの物ならば話は別だが…そうそう

見つかるわけでもないだろう」

コカビエルの視線が俺に及ぶ。

…すんげえプレッシャーだ。

マジで全身がガクガク震える…。

俺は強気の姿勢だけは崩さずに問う。

「…おまえらは俺の神器もご所望なのかよ？」

「少なくとも俺は興味ない。だが、アザゼルは
欲しがるかもしれない。あいつの

コレクター趣味は異常だ」

アザゼル？

墮天使組織の総督だったな。

神器を集めているのか？

「どちらにしろ、俺はお前の根城で聖剣をめぐる
戦いをさせてもらうぞ、リアス・グレモリー。

戦争をする為にな！サーゼクスの妹と

レヴィアタンの妹、それらが通う学び舎だ。

さぞ、魔力の波動が立ち込めていて、

混沌が楽しめるだろう！

エクスカリバー本来の力を解放sするのにも

最適だ！戦場としてはちようどいい」

無茶苦茶だ！こいつ、マジで頭がイカレてやがる！

「ひやははは！最高でしょ？俺のボスって。

イカレ具合が素敵に最高でさ。

俺もついつい張り切っちゃうのよお。

こんなにご褒美までくれるしね」

フリードが取り出したのはエクスカリバー！

しかも両手に一本ずつ！

腰にも二本帯剣してやがる！

「右のが『天閃の聖剣』、

左のが『夢幻の聖剣』、

腰のは『透明の聖剣』でござい。

ついでにその娘さんから

『擬態の聖剣』もゲットしちゃいました！

もう一人の女の子が持っている

『破壊の聖剣』

もゲットしたいところすなあ。

ひやはっ！俺って世界初のエクスカリバー

大量所持者じゃね？

しかも聖剣を扱えるご都合な因子を

バルパーのじいさんからもらっているから、

全部使えるハイパー状態なんだぜ？

無敵素敵！俺って最強じゃん！

ひやはははははははははっ！

フリードは心底面白そうに哄笑をあげる。

「バルパーの聖剣研究、ここまでくれば本物か。

俺の作戦についてきた時は

正直怪しい所だったかな」

コカビエルとバルパーは手を組んでいるって事か。

「エクスカリバーをどうする気なの!？」

部長が問う。コカビエルは十枚の翼を羽ばたかせ、

学園のほうに体を向けた。

「ハハハ！戦争をしよう、

魔王サーゼクス・ルシファー

の妹リアス・グレモリーよ！」

カッ！

フリードの野郎が懐から目くらまし用

のアイテムを発光させる！

またこれか！

しばらく視力を奪われた俺達だが、

回復したところにはコカビエルもフリードも姿を消していた！

クソ！

奴等が向かう先なんて決まっているじゃないか！

「イツセー、学園へ向かうわよ！」

「はい！」

堕天使の幹部が相手という

大決戦が始まろうとしていた！

—○○●—

ユウスケ side

ザパアッ！

俺は河川敷で川から上がることに成功した。

「クソオツ！イリナを救えなかった！」

俺は目の前で爆発に巻き込まれたイリナが脳裏に過る。

ドサッ。

俺は爆発での消耗が激しかった為

腕に力が入らず地面に倒れてしまう。

「行かなきゃー！こんな所で寝てるわけには…」

そう思い腕に力を入れるが

立ち上がる事は出来なかった。

ガサッ。

近くから誰かの足音が聞こえる。

「誰だ…」

誰かがこちらにやってくる。

カッ！

俺は限界が来たようで、

変身も解除されてしまい気絶してしまう。

「……スケ……？」

薄れる意識の中誰かに呼ばれた気がした。

第35話 「集結」

「…うーん、ここは？」

俺が目を覚ますとそこは、
どこかの寝室だった。

「目が覚めたっすか祐介先輩」

ベッドから起き上がると

部屋の隅から声がかけられた。

そちらへ視線を向けると

黒髪をチョンマゲのようにひとつ縛りした

三白眼の少年が椅子に座って読書していた。

「シカマルじゃあ…ここは？」

「ここはうちの病院っすよ。」

つつても小児科なんで、

大したことは出来ないっすけど」

シカマルは落ち着いた様子で答えてくれる。

彼の家は小児科の病院をやっており

俺も子供の時は世話になったな。

「聞かないのか？」

俺は疑問をシカマルに訊いた。

「何をつすか？」

「俺が変身した姿を見てただろ？」

俺の答えにシカマルは気まずそうに

頬を掻きながら答える。

「めんどいのは勘弁なので、

聞かない方がいいかなって思っただけですよ」

「ありがとうシカマル」

俺は後輩の厚意に甘える事にした。

ガチャッ。

そこへ部屋の扉を開けて、

1人の男性が入ってきた。

シカマルと同じく黒髪のチョンマゲ
で目つきもシカマルそっくりの

鋭い目つきだ。

「おお、起きたかユウスケ」

「お久しぶりです、シカクさん」

この人はシカマルのお父さんのシカクさんだ、

「シカマルが近くの川から

倒れているお前さんを見つけたと

連れてこられた時は

驚いたが何があったんだ？」

川に倒れていたらそりや不思議だよな。

「すみません、それにこたえる事はできません」

「そうかい、シカマルもこう見えて

頭は良いからな、救急車を呼ばずに

此処に運び込んだ時点で不思議には思っていたが

今は詳しくは聞かないでおこう

だけど、お前は重傷だ明日までは絶対安静だ

それは譲らないぞ」

「いえ、今はじっとしている

暇はないんです、直ぐに向かわないと」

おれはベットから起き上がろうとするが、

「痛うう。」

「その傷で何処に行くってんだ、

今はじっとしてろ

何か事情があるのは分かるが

身体を壊したら元もこうも

ないだろ！今は寝てろ！」

「できません！

直ぐに向かわなきゃ

大事な物が全て失うことになる！

俺はそうなったら死んでも後悔する…

行かせてください。

俺は後悔する選択はしたくないんです」

俺はシカクさんの目を見つめ

自身の想いを叫ぶ。

「はあ、その目は覚悟を決めた目か、

その目をしたものに何を言っても

考えが変わらないのは俺も知ったら

なら目的地までは俺が連れてってやる」

シカクさんはそう言い俺に肩を

貸してくれて起き上がらせてくれる。

「これは貸っすよ祐介先輩」

シカマルも肩を貸してくれる。

こうして俺はシカクさんの運転で

リアス先輩たちの元へ向かう。

行先は駒王学園だ、

あそこから、強い魔力を感じる。

コカビエル達が行っているんだろう。

リアス先輩達もそこへ向かってる筈だ！



車で駒王に向かう途中。

近くの公園に見知った顔を見つけた。

「すみません止まってください」

キキイッ！

「どうした？ユウスケ！」

「ここままで大丈夫です」

身体は大丈夫ですもう

何ともありませんから」

ガチャッ。

俺は大丈夫と解るように

1人で歩いて外に出る。

「これは一体!？」

確かに重症だったはずだぞ。

」

「すみません。詳しいことは話せませんが、ここから先は危険なので

二人は引き返して下さい」

「わかった、

この世には理解できない現象は幾つもあるからな。

今は聞かないでおこう

頑張っっていってこい」

シカクさんは何も聞かずに送り出してくれる。

俺は公園へ向かい歩き出す。

「祐介先輩!」

シカマルの声に俺は振り返る。

「また明日会いましょう!」

俺はシカマルにサムズアップで答える。

—○○—

「リアス先輩!」

俺は公園の中に入ると車から見かけたリアス先輩に声を掛けた。

『ユウスケ!』

皆俺の登場に驚いていた。

「すみませんリアス先輩、今まで連絡できずに居て、兵藤祐介、ただいま戻りました」

「ええ、皆心配してたのよ

でも、無事でよかったわ

それで、あの後何があつたの？」

「それが…」

俺は自身に起こった事、

イリナが怪我を負った事を話した。

「安心しなさいユウスケ。」

彼女ならアーシアが治療したわ」

よかった。なら彼女は助かったのか。

「ユウスケも怪我したんだろう！」

ならまずは自分の傷をアーシアに治してもらえよ」

イツセーが俺の怪我を

心配してアーシアを近くに呼ぶ。

「ユウスケさん、直ぐに治しますからね」

アーシアが俺に手をかざすと

俺の体を淡い緑の光が包む。

クウガの力で自然回復で回復をしていた傷も、

アーシアの神器の力で全快した。

「相変わらず、凄い力だな。ありがとうアーシア」

俺がアーシアを褒めると、

嬉しそうな表情になった。

「ありがとうございます。」

皆さんの力に慣れて嬉しいです」

俺達が話をしていると

公園の外から誰かがやってくる。

「リアス！」

走ってきたのは、

支取蒼那先輩と生徒会の面々だった。

「学園を大きな結界で覆ってます。これでよほどの

ことがない限りは外に被害は出ません」

匙がリアス先輩に現状の報告してくれる。

これでオカルト研究部と生徒会のメンバーが

集まったと思つたが、

木場だけがこの場に居なかった。
イツセー達の話ではコカビエル達から
逃げられたようだからあいつなら
大丈夫だろう。

直ぐに合流できると俺は信じてるぞ木場！
負傷したイリナも会長の家に転送された。
アーシアの力で回復はしたが
体力までは回復できないからな。

これからの戦いには参加できないそうだ。
匙が結界の説明をリアス先輩にしている。
話では、リアス先輩から話を聞いた会長の
支取蒼那先輩が、生徒会のメンバー全員を
招集して大掛かりな結界を学園に張ったという。

中で起きた事を外に出さない為の措置だ。
相手は聖書や関連書物にも出てくる

墮天使の幹部。何が起きてもおかしくない。

「これは最小限に抑える為のものです。

正直言つて、コカビエルが本気出せば、
学園だけでなく、この地方都市そのものが
崩壊します。さらに言うなら、既にその
準備に入っている規模なのです。
校庭で力を解放しつつあるコカビエルの
姿を私の下僕が捉えました」

なっ…。

会長の言葉に俺は絶句した。

ヤバイ奴だとは分かつてはいたけど、

そんな規模の話なのかよ!?

相手は幹部だそれだけのそれだけの力がある
ってことだよな。コカビエルって奴は…。
俺達の街を自分が戦争したいってだけで、
破壊するのかよ!?

ふざけるなよクソ堕天使が！

俺達がお前の野望なんか潰してやる！

会長は引き続き説明をする。

「攻撃を少しでも抑える為に私と眷属は

それぞれの配置について、結界を張り続けます。

できるだけ被害を最小に抑えたいものですから…。

学園が傷つくのは耐え難いものですが、

堕天使の幹部が動いた以上、

堪えなければならぬでしょうね」

会長は目を細め、

学園の方を憎々しげに見つめる。

おそらく学園にいるコカビエルへ

向けたものだろう。

学園に被害が出るのは確定事項か。

俺達の通う学校が…。

「ありがとう、ソーナ。

あとは私達がなんとかするわ」

「リアス、相手は桁違いのバケモノですよ？

確実に負けるわ。いまからでも遅くない、

貴方のお兄様へ」

首を横に振るリアス先輩。

「あなただって、

お姉さまを呼ばなかったじゃない」

「私の所は…。

あなたのお兄さまは貴方を愛している。

サーゼクス様なら必ず動いてくれます。だから…」

「すでにサーゼクス様に打診しましたわ」

二人の会話を遮って朱乃さんが言う。

「朱乃！」

非難の声をあげるリアス先輩だが、

朱乃さんが珍しく怒った表情を浮かべていた。

「リアス、あなたがサーゼクス様に……迷惑をおかけしたくないのはわかるわ。

貴方の領土、貴方の根城で起こったことでもあるものね。しかも御家騒動の後だもの。

けれど、幹部がきた以上、話は別よ。

貴方個人で解決できるレベルを

遥かに超えているわ。魔王の力を借りましょう」

……あんな風にリアス先輩へ

詰め寄る朱乃さんを初めて見たな。

リアス先輩も何か言いたげだが、大きな息を吐き、静かにうなずいた。

それを確認して、

朱乃さんはいつものニコニコ顔になる。

「お話を理解してくれてありがとうございます、

部長。ソーナ様、サーゼクス様の

加勢が到着するのは一時間だそうですわ」

「一時間……。わかりました、その間、私達生徒会は

シトリー眷属の名にかけて、結界を張り続けてみせます」
会長の決意を聞き、リアス先輩も肚を決めた様子だった。

「……一時間ね。さて、私の下僕悪魔たち。

私達はオフエンスよ。結界内の学園に飛び込んで、
コカビエルの注意をひくわ。

これはフェニックスとの一戦とは違い、死戦よ！

それでも死ぬことは許さない！

生きて帰ってあの学園に通うわよ、皆！」

『はーい。』

俺達が気合の入った返事をする！

「兵藤！あとは頼むぜ！」

「分かってるさ、中は俺達に任せろよ！

外は任せるぜ匙！」

「そうそう、中は俺達がやるから

匙。お前は尻のダメージでも気にしてろ」

「言うな！言われるとさらに痛く感じる！」

お前こそ、尻は？」

匙にそう聞かれたイツセーは痛みを

思い出したようで、尻をさすっていた。

「ふふふ。部長の愛が痛い。まあ、

今の状況はまさに尻に火が付いた感じだな」

「いやいや、笑えねえよ。」

それで、木場はまだか？」

「ああ、俺も無事だったんだ、

無事だと信じてるさ」

「木場の奴も必ず来るさ」

「そうだな、俺も信じる」

俺とイツセーと匙は拳を合わせ、

それぞれの健闘を祈った。

「決戦だ！いざとなったら、俺も」

『任せろ相棒。相手はコカビエルか。』

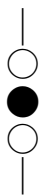
不足はないぞ。見せてやろうじゃないか』

イツセーも覚悟を決めたようだその目に

不安の色は無くなっていた。

そうだな、俺も自身の全力をだすさ、

見せてやろうぜ、クウガとドラゴンの力をな。



入った瞬間俺はクウガの姿に変身していた。

イツセーも『女王』へ昇格して、

力を底上げしていた。

俺はまだ、悪魔の力とクウガの力の両立は出来ない

それが歯がゆく思っている。

俺も強くないとな。

っ。

俺達は異様な光景に言葉を失った。
校庭の中央に四本の剣が神々しい光を発しながら、
宙に浮いている。

それを中心に怪しい魔方陣が
校庭全体に描かれていた。

魔法陣の中央にはカエルの怪人
ズ・トオド・レの姿があった。

あいつ、魔方陣を使って何をするつもりだ？

「これはいったい……」

疑問を口にする俺。

「生きていたか、クウガよこれは四本の

エクスカリバーをひとつにするのだよ」

バルパーはおもしろおかしそうに口にした。

「バルパー、あとどれぐらいで

エクスカリバーは統合する？」

「ツッ！」

空中から聞こえてくる声！

全員が空へ視線を向けた時、

月光を浴びるコカビエルの姿があった。

宙に椅子に座って、こちらを見下ろしていた。

余裕そうに足なんか組んでやがる！

「五分もいらんよ、コカビエル」

「そうか。では、頼むぞ」

コカビエルはバルパーから

リアス先輩に視線を移す。

「サーゼクスは来るのか？」

それともセラフオールか？」

「お兄様とレヴィアタンさまの代わりに私達が」

ヒュッ！ドオオオオオオオオオオオオオオオオッ！

風切り音のあと、爆音が辺り一帯に爆風と共に広がっていく。
ッ！

爆風が発生した先にあるのは
いや、あったのは体育館だった。

影も形も無くなってやがる!?

消し飛んだのか！

「つまらん。まあいい。余興にはなるか」

体育館のあった場所に巨大な

光の柱が斜めに突き刺さっていた。

あれは、もしかして墮天使の光の槍か？

デカすぎるだろ…。

以前であつた墮天使の比じゃない。

アレに比べれば物干し竿と爪楊枝程の差がある。

流星にこれはまともに勝負が

成立するとは思えないな、

完全に時間稼ぎに徹しなければ全滅だ、

悔しいが、コカビエルは魔王様に任せるしかない。

イツセーもドライブグと話し合つたようで、

最悪の場合は全身をドラゴンに変えようとも

禁じ手を使って時間稼ぎをするつもりようだ、

「さて、地獄から連れて来た俺のペットと

遊んでもらおうかな」

コカビエルが指を鳴らす。すると、

闇夜の奥からズシンズシンと

何かが地を揺らしながら

近づいてくるのがわかつた。

そいつは十メートルはあるであろう、黒い巨体。

四足は一つ一つが太く、そこから生えている爪は

鉄すら切り裂きそうだ。

闇夜にギラギラと輝く血のような真紅の相貌。

突き出た口から覗かせるのは凶悪極まりない牙だ。

ずらりと並び、牙と牙の隙間から
白い息が吐き出されていた。

コイツは俺もよく知っている地獄のバケモノ。
その姿は首が三つある大きな犬だった。

ギヤオオオオオオオオオオオオオオオオオンツツ!!
辺り一帯を震わせるほどの咆哮!

三つの首が同時に吼えた!

「ケルベロス!」

忌々しそうにリアス先輩が言う。

「ケルベロス?」

イツセーがリアス先輩に訊ねる。

「ええ、地獄の番犬の異名を持つ有名な魔物よ
本来は地獄、冥界へ続く門の周辺に生息している
のだけれど、人間界に持ち込むなんて!」

「ヤバいんすか?」

イツセーがリアス先輩に訊ねる。

「やるしかないわ!消し飛ばすわよ」

イツセー!ユウスケ!」

「はい、部長!いくぜ、

ブーステッド・ギアアアア!」

『Boost!』

俺はイツセーと共に気合を入れると

リアス先輩がイツセーの肩に手を置いた。

「イツセー、今回私達は貴方達をフォローするわ」

「力を高めて、俺がトドメですか?」

イツセーの問いにリアス先輩は首を横に振る。

「いえ、貴方はサポートに徹してもらおうわ。

高めた力を仲間に譲渡するの。ブーステッド・ギア
はあなた自身をパワーアップさせる神器であると

同時に、チーム戦でメンバーの力を飛躍的に
上昇させるものもあるわ」

ブーステッド・ギアは確かにサポートとしては効果は絶大だ、イツセーが力を高めて誰かに譲渡できれば、コカビエルにだって通用するかもしれない。大ダメージを与えずとも、相手の攻撃を打ち消すだけの力を得られるかもしれない!?

「ところでイツセー。譲渡は、貴方自身のパワーアップも含めて何回使用可能かしら?」
リアス先輩がイツセーに質問する。

確か、イツセーの神器には使用に限界があった。力を倍加させるイツセーの神器はかなり無茶苦茶なものだ、使用回数は所有者であるイツセーの力に依存する。使い切ると神器の機能が停止し、イツセーの体からも一気に力が抜けるそうだ、

「現時点の俺の体力も合わせると、限界まで高めたもので三回か、四回です。いや、四回目で俺自身がぶっ倒れそうなので、三回と考えるください」

「そう。無駄撃ちはできないわね、行くわよ、朱乃!」
バツ!

リアス先輩が背中から翼を出して、朱乃さんと共に空へ舞う。
ガルルルルルルルルルルルルツ!
ケルベロスが威嚇を向け、一気に飛び出してきた!
ゴウウウンツ!

首の1つが宙を舞うリアス先輩に向けて、炎を吐く!

「甘いですわ」
朱乃さんが前に入り、炎を瞬時に凍らせた。

「くらいなさい！」

朱乃さんの後ろから飛び出したリアス先輩は黒くデカイ魔力の塊をケルベロスに放つ。滅びの一撃。

リアス先輩の魔力は触れたもの全てを消滅させる強力なものだ。

ゴバアアアン！

ケルベロスの他の首が、火炎の球を撃ちだした！空中で激しくぶつかり合うリアス先輩の魔力とケルベロスの炎！

その間にももう一つの首が

火炎の球を吐き出してくる。

火炎球の連続攻撃か！

リアス先輩の一撃に押し切られそうだった

最初の火炎球を二撃目の炎が後押しする！

炎の勢いが増し、

今度はリアス先輩の魔力が

押し切られそうになっていた。

更に火炎球を放とうとしているケルベロス！

後一撃やられたら、いくらリアス先輩の魔力でも

負けるかもしれない

だが、

「隙あり」

「足元がお留守だぜ！」

ドゴオオオンツ！

俺と子猫ちゃんやんで奴の懐に飛び込んで、

ケルベロスの頭部を殴りつける！

「やらにもう一撃あげますわ」

朱乃さんが指先を天に向けると、

稲光が夜空に発生した。

そのまま指をケルベロスへ。

カッ！

一瞬の閃光のあと、

ケルベロスが激しい電撃に包まれる！

朱乃さんが特大の雷をケルベロスに落としたのか、そこにダメ押し、リアス先輩の一撃が加わる！

しかし、ケルベロスの体は消滅せず、

横腹に直撃するだけだった。

ケルベロスの脇腹から、ドス黒い鮮血が噴き出す。

煙を上げるケルベロス。

いまだ眼光是鋭い。あれだけの攻撃を受けて、まだ動けるのか。

グルルルルルル。

別の方向から唸り声聞こえてくる。

唸り声のした後ろを振り返ってみると。

「もう一匹いるのかよー！」

イツセーも追加で現れたケルベロスを見て叫ぶ。

ガアオアアアアツツ！

咆哮をあげて、もう一匹がイツセーと

アーシアの元に駆け出した！

まずい、離れすぎている、間に合わない！

ダッ！

俺はイツセー達の元へ駆け出す。

「イツセー、かまわず一度自分の力を高めなさい！」

イツセーに倍增使用の許可を出すリアス先輩。

イツセーがアーシアを守るために強化しようとした

その時、

ズバツ！

イツセー達に向かってきていたケルベロスの

首がひとつ宙に舞う！

斬った!? 誰が? 木場か!

しかし、俺達の前に現れたのは長剣の

エクスカリバーを振るう少女。
ゼノヴィアだった。
空に飛んだケルベロスの首が
塵となつて散つていく。

「加勢にきたぞ」

ダッ！

言うやいなやゼノヴィアは駆け出して、
首を一つ失つて絶叫を上げているケルベロスの
胴体に斬りかかった！

ギヤオオオアアアツアアアンツツ！

破壊力バツグンの一振りを受け、

ケルベロスの胴が割れる。煙が立ち込め、
ケルベロスの胴体が大きく消失していく。

聖剣の効果だ！

「聖剣の一撃。魔物に無類のダメージを与える」
ザンツ！

ゼノヴィアは倒れ込むケルベロスの胸元に
トドメとばかりに長剣を深く突き刺す。

その瞬間、ケルベロスの体が塵芥と化して、
宙へ霧散していった。

俺がイツセー達の元へ駆け寄ると、
イツセーの籠手が点滅していた。

俺も見た事ない現象だ、

イツセーも突然の状況に驚いているようだ。
「どうやら、部長と朱乃さんに譲渡すれば、

ケルベロスを倒せる段階になったと

教えてくれるらしい」

籠手にそんな機能があったのか!?

「ドライグが言うには、

俺も成長しているってことらしい、
今までどこまで強化すれば

いいかわからなかったから

俺の願いに神器が答えたみたいだ」

くっ、やっぱリッサーも知らないうちに強くなってるんだよな、

それに比べて俺は、トオドにも負けている…。

いや、落ち込んでいる場合じゃない！

悔しいなら、この戦いで挽回するべきだ、

俺は俺だ！これに勝って普段の

トレーニング量を増やすだけだ！

俺が決意していると、リッサーが

空を飛ぶリアス先輩と朱乃さんに向かって叫ぶ。

「部長！朱乃さん！ケルベロスを

屠れるだけの力を得ました！」

それを聞き、リアス先輩と朱乃さんが

顔を見合わせて頷く。

同時に両者が俺達の元へ降下してくる。

「リッサー！あなた、ライザーとの一戦で

十字架と聖水を同時に強化していたわね？」

「え？あー、確かにそうですね」

「ドライグに聞いたたら、同時に二つまでなら

可能だそうです。ただ、どちらも倍増分の

七割か八割しか譲渡出来なくなるみたいです」

リアス先輩と朱乃さんに説明するリッサー。

二人とも承知のようだ。

「それだけあれば十分ね」

「はい、いけますわ」

『お願い！』

リアス先輩と朱乃さんが同時に号令をかける。

リッサーがリアス先輩と朱乃さんの肩に手を置き、

神器を発動させる。

「いくぜ！ブーステッド・ギア！ギフト！」

『Transfer!!』

刹那、二人の体から凄まじい魔力が漂う。

両者とも溢れ出す力に驚いていた。

「いけるわ」

リアス先輩の不敵な笑みに朱乃さんもうなずいた。

「朱乃！」

「はい！天雷よ！鳴り響け！」

朱乃さんが天に指をかざし、雷光を支配する。

指の照準が、ケルベロスに向けられた。

ツ！雷撃を察したのか、

ケルベロスがその場から逃げようとする！

ザシュ！

ケルベロスの四肢を無数の剣が貫いていく！

地面から生える剣！

これは。

「逃がさないよ」

そこに現れたのは俺達の『騎士』だった！

木場の『魔剣創造』だ！

なんてグツドタイミングで駆けつけてんだよ！

流石『騎士』様だな。

カツ！

魔剣によって身動きできなくなった

ケルベロスに天からの雷が降り注いだ。

さつきとは比べ物にならないほどの大きさだ！

校庭の半分以上を覆いつくす、雷の柱！

ドオオオオオオンツツ！

「ツ！」

ケルベロスは絶叫をかき消され、

その体も雷光の中で無に帰した。

これだけの威力だ消費もはげしいだろうな。

ケルベロスが消えた瞬間、

間髪入れずにリアス先輩が

コカビエルの方へ手を向ける！

「くらえー！コカビエル！」

ドウウウウオオオオオオンツ！

リアス先輩の手から、

巨大な魔力も塊が撃ちだされた！

「デカイー！」

イツセーも声に出していたが、

いつもリアス先輩が撃ちだしている魔力の一撃の十倍以上はある大きさだ！

それが凄まじい速度を得て、

宙に座る墮天使の幹部へ襲い掛かる！

コカビエルに降りかかる滅びの一撃！だが。

奴は片手を前に突き出したただけだ。

ゴオオオオオオオオオオオオンツツ！

リアス先輩の一撃を片手で防いでやがる!?

あんなデカイ魔力を片手だけで防ぐなんて！

グンツ！

コカビエルは掌を上へ向けた。

リアス先輩の放った魔力の塊は軌道をずらされ、

天高く闇夜の彼方へ飛んでいき、

消えて行ってしまった。

掌から立ちのぼる煙を見て、

コカビエルは楽しそうな笑みを見せる。

「なるほど。赤龍帝の力があれば、ここまで

リアス・グレモリーの力が引き上がるか。

面白いぞ。これはひどく面白いぞ」

クククと一人おもしろおかしそうに

コカビエルは空で哄笑をあげていた。

「完成だ」

トオドの声。

その時、校庭の真ん中にあつた

四本のエクスカリバーが

有り得ないほどの光を発し始めた。

何が起こるんだ!?

空中で拍手を送るコカビエル。

「四本のエクスカリバーが一本になる」

神々しい光が校庭全域に広がっていく。

あまりの眩しさに俺達は手で顔を覆った。

目を凝らして校庭の中央を見て見れば、

四本の聖剣が重なっていくのがわかる。

もともと一本だったエクスカリバー。

七本に分かれたものだが、

そのうちの四本が一本に戻るのか。

眩い光が終わった時、校庭の中央には、

白いオーラを放つ一本の聖剣が浮かんでいた。

第36話「覚醒」

校庭の中央に白いオーラを放つ
一本の聖剣が出現した。

「エクスカリバーが一本になった光で、
下の術式も完成した。あと二十分も
しないうちにこの町は破壊するだろう。

解除するにはコカビエルを倒すしかない」
衝撃な事をトオドが口にした。
なっ…。

俺達は絶句する。
当然だ。

あと、二十分で俺達が住む町が壊れるだど!?
校庭全域に展開していた魔法陣に光が走りだし、
力を帯び始めた。

これは、術式が発動したのか!?
クソツ!

サーゼクス様達が来るまで持ちこたえるなんて
悠長なこと言つてられないじゃないか!

魔王様の加勢が到着する頃には、
この町が消し飛んでしまう!

「フリード！」
コカビエルがクソ神父の名を呼ぶ。

「はいな、ボス」

暗闇の向こうから、白髪の少年神父が歩いてきた。
「陣のエクスカリバーを使い。最後の余興だ。」

「四本の力を得たエクスカリバーで戦ってみせろ」
「へいへい。まーったく、俺のボスは人使いが

荒くてさあ。でもでも！チヨ一素敵仕様になった
エクスなカリバーちゃんを使えるなんて光栄の
極み、みたいいな？ウへへ！ちよつくら、

悪魔でもチョッパーしますかね！」

イカレた笑みを見せながら、フリードが校庭のエクスカリバーを握った。やっぱり使えるのか。

因子をトオドに貰ったと言っていたしな。

木場にゼノヴィアが話しかける。

「リアス・グレモリーの『騎士』、

共同戦線が生きているのならば、

あのエクスカリバーを共に

破壊しようじゃないか」

「いいのかい？」

木場の問いにゼノヴィアは不敵に笑う。

「最悪、私はあのエクスカリバーの核

になっている『かけら』を回収

できれば問題ない。フリードが

使っている以上、あれは聖剣であって、

聖剣ではない。聖剣とて、

普通の武器と同じだ。

使う者によって、場合も変わる。

あれは、異形の剣だ」

「ククク…」

二人のやり取りを笑う者がいた。

トオドだ。

「バルパー、いや、ズ・トオド・レ。

僕は『聖剣計画』の生き残りだ。

いや、正確には貴方に殺された身だ。

悪魔に転生した事で生き永らえている」

至って冷静にトオドに告げる木場だが、

その瞳には憎悪の炎が宿っていた。

トオドの答え次第では一触即発だ。

「ほう、あの計画の生き残りか。

これは数奇なものだ。

こんな極東の国で会う事になろうとは、縁を感じるな。ふふふ」

嫌な笑い方だ。

木場を小バカにしたかのような口調だ。

「私はな。かつて、

グロンギ族のゲゲルから追放された。

牙もツメも無く、決定打に欠けている。

そんな私では何度挑戦しても

ゲゲルを達成出来なかった！

だから、エクスカリバーの伝記を見た時、

これだと思った。これさえあれば、

私を追放した奴らに復讐が出来る！

グロンギ族の頂点に立てると！

だからこそ、グロンギ族には聖剣使いの適正が無いと知った時の絶望といつたらなかった」

突然、バルパーは語りだす。

奴の昔話か。

「自分には使えないからこそ、

使える者に憧れを抱いた。

その思いは高まり、聖剣を使える者を人工的に創り出す研究に没頭するようになったのだよ。

そして完成した。君達のおかげだ」

「なに？完成？僕たちを失敗作だと

断じて処分したじゃないか」

眉を吊り上げ、怪訝な様子の木場。

木場やりアス先輩、ゼノヴィアの話では、

木場達の研究は失敗だと聞いていた。

だからこそ、用済みだとして

処分したんじゃないのか？

だが、俺達の思いとは裏腹に

トオドは首を横に振った。

「聖剣に使うのに必要な因子があることに
気付いた私は、その因子の数値で適性を調べた。
被験者の少年少女、ほぼ全員に因子はあるものの、
それもこれもエクスカリバーを扱える。
数値に満たなかったのだ。」

そこで私は一つの結論に至った。
ならば『因子だけを抽出し、
集める事は出来ないか?』とな」

「なるほど。読めたぞ。」

「聖剣使いが祝福を受けるとき、
体に入れられるのは」

ゼノヴィアが事の真相に気付いたようで、
忌々しそうに歯噛みしていた。

何の話だ?

疑問に思う俺達を置いてトオドはさらに続ける。

「そうだ、聖剣使いの少女よ。」

持っている者達から、聖なる因子を抜き取り、
結晶を作ったのだ。こんな風に」

トオドが懐から光り輝く球体を取り出した。

眩い光だ。聖なるオーラってのが迸っている。

「これにより、」

聖剣使いの研究は飛躍的に向上した。

それなのに教会の人間共は私だけを
異端として排除したのだ。

研究資料だけを奪ってな。貴殿を見るに、
私の研究は誰かに引き継がれているようだ。
ミカエルめ。あれだけ私を断罪しておいて、
その結果がこれか。まあ、あの天使の事だ。
被験者から因子を抜き出すにしても
殺すまではしていないか。くくくくく」

愉快そうにトオドは笑う。

なるほどな、ようやく理解した。

現時点で聖剣使いを人工的に生み出すのは犠牲を払わないといけないって事か。

木場もゼノヴィアもトオドの研究から

始まる因果に巻き込まれていたんだな。

「同志達を殺して、

聖剣適正の因子を抜いたのか？」

木場が殺気のこもった口ぶりでトオドに訊く。

「そうだ。この球体はその時の物だぞ？」

三つほどフリード達に使ったがね。

これは最後の一つだ」

「ヒヤハハハハ！俺以外の人形ちゃんは

負けたから爆弾にしちやっただけだな」

チツ！あの時の屍人形か！

なら、因子を爆弾代わりにしたのか！

「…トオド、あなたは。自分の研究、

自分の野望の為に、

どれだけの命をもてあそんだんだ…」

木場の手が震え、怒りから生み出される

魔力のオーラが奴の全身を覆った。

凄まじいほどの迫力だ。

「くくく、人間がいくら死のうと、

私の糧になれば本望だろう、

それだけ言うのならば、この因子の結晶を

貴様にくれてやる。環境を整えばあとで

量産できる段階まで研究はきている。

まずはこの町をコカビエルと共に破壊し、

クウガを殺そう！

あとは世界の各地で保管されている伝説の聖剣をかき集めようか。

そして聖剣使いを量産し、
統合されたエクスカリバーを用いて、
ミカエルとヴァチカンに戦争を仕掛けよう。
そして、最後には私を追放した愚かなグロンギ族に
私の研究を見せ付けてやるのだよ」
それがトオドとコカビエルが手を組んだ理由か。
どちらも戦争を求めている。
トオドは興味を無くしたのかのように
持っていた因子の結晶を放り投げた。
ころころと地面を転がり、
木場の足元に行き着く。
木場は静かに屈み込んで、それを手に取った。
哀しそうに、愛しそうに、懐かしそうに、
その結晶を撫でていた。

「…皆…」

木場の頬を涙が伝っていく。
その表情は悲哀に満ち、
そして憤怒の表情も作り出していた。
その時だった。
木場の持つ、結晶が淡い光を発し始める。
光は徐々に広がっていき、
校庭を包み込むまでに拡大していった。
校庭の地面、その各所から光がポツポツと
浮いてきて、形を成していく。
それはハッキリとしたものに成形されていき、
人の形となった。
木場を現れたように現れたのは、
青白く淡い光を放つ少年少女達だった。
もしかして、彼らは。

「この戦場に漂う様々な力が因子の球体から魂を
解き放ったのですね」

と、朱乃さんが教えてくれる。
そんなことが起きるのか。
魔剣、聖剣、悪魔、墮天使、グロンギ
幾つもの力が集った状況だ、
そんな事が起きてもおかしくないのか。
木場は彼らを見つめ、懐かしそうに
哀しそうな表情を浮かべた。

「皆！僕は…僕は！」

彼らは木場と同じ聖剣計画に
身を投じられた者達。
処分された者達だ。

「…ずっと…ずっと、思っていたんだ。

僕が、僕だけが生きていていいのかって…。

僕よりも夢を持った子がいた。

僕よりも生きたかった子がいた。

僕だけが平和な暮らしを

過ごしていいのかって…」

靈魂の少年の一人が微笑みながら、

木場に何かを訴える。

口をパクパクしているが、

何をしゃべっているかはわからない。

すると、朱乃さんが代わりに話してくれる。

「…『自分達のことともういい。

君だけでも生きてくれ』。

彼らはそう言ったのです」

それが伝わったのか、

木場の双眸から涙が溢れ続ける。

魂の少年少女達が口をパクパクと

リズムカルに同調させていた。

歌を歌っているのか？

「聖歌」

アーシアがそう呟いた。

彼らは聖歌を歌っている…。

木場も涙を流しながら、聖歌を口ずさみだした。

それは、彼らが辛い人体実験の中で唯一希望と夢を保つために手に入れたもの。

それは、過酷な生活で唯一知った生きる糧。

それを歌う彼らと木場は、

まるで幼い子供のように

無垢な笑顔に包まれていた。

ッ！

彼らの魂が青白い輝きを放ちだした。

その光が木場を中心に眩しくなっていく。

『僕らは一人ではダメだった』

『私達は聖剣を扱える因子が足りなかった。けど』

『皆が集まれば、きつとだいじょうぶ』

彼らの声が俺達にも聞こえる。

本来、聖歌を聴けば悪魔の俺達は

苦しむと聞いた事がある。

現在この校庭が様々な力が入り乱れている特殊な

力場のせいだろうか、

俺は聖歌の苦しみを感じない。むしろ、

温かさを感じる。友を、同志を想う、

温かなものを。

俺の目からもいつの間にか、

自然に涙が流れていた。

『聖剣を受け入れるんだ』

『怖くなんてない』

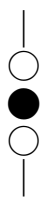
『たとえば、神がいなくても』

『神が見てなくても』

『僕達の心はいつだって』

「ひとつだ」

彼らの魂が天にのぼり、
一つの大きな光となって木場の元へ降りてくる。
やさしく神々しい光が木場を包み込んだ。
闇夜の天を裂く光が木場を
祝福しているかのように見えた。



木場 side

ただ、生きたかった。

研究施設から一人逃げ出し、

森の中で血反吐吐きながら走った僕は
それだけを考えていた。

森を抜け、とある上級悪魔の少女

と出会った時、命の灯火は消えかかっていた。

「あなたは何を望むの？」

死に逝く間際の僕を抱きかかえ、

紅髪の少女は問う。

かすれていく視界の中で僕は一言だけ呟いた。
助けて。

僕の命を。僕の仲間を。僕の人生を。

僕の願いを。僕の力を。僕の才能を。僕を…。

ただただ、それらを籠めて願った。

それが人間としての最後の言葉だった。

「悪魔として生きる。それが我が主の願いであり、
僕の願いでもあった。それでいいと思った。

けれど。エクスカリバーへの憎悪と

同志の無念だけは忘れられなかった。

…いや、忘れても良かった。僕には」

いま、最高の仲間がいるんだ。

ユウスケ君、イツセー君、小猫ちゃん。

復讐にかられていた僕を助けてくれた。

共に聖剣使いを探し回っていた時、
思ってしまったんだ。

僕を助けてくれる仲間がいる。

「それだけで十分じゃないのか？」と。

だけど、同志達の魂が復讐を願っているとしたら、

僕は憎悪の魔剣を降ろすわけにもいかない。

でも、その考えがまた仲間を失う所だった、

僕の勝手でユウスケ君を危険にさらした。

川に落ちた彼を見た時深く後悔した。

僕はまた失うのかと、

だから、僕は復讐を果たすべくか、

諦めるべきか悩んでいた。

だが、その想いも先程、解き放たれた。

自分達の事はもういい。君だけでも生きてくれ。

同志達は僕に復讐を願っていなかった。

願ってはいなかったんだ！

「でも、全てが終わったわけじゃない」

そう、終わりではない。

目の前の邪悪を打倒しないと

僕達の悲劇は繰り返される。

「ズ・トオド・レ。貴方を滅ぼさない限り、

第二、第三の僕達が生を無視される」

「ふん。研究に犠牲はつきものだと

昔から言う出ないか。

ただそれだけのことだぞ！」

やはり、あなたは邪悪すぎる！

「木場アアアアアツツ！フリードの野郎と

エクスカリバーをぶっ叩けエエエエエ！」

イツセー君。

「お前は、リアス・グレモリー眷属の『騎士』で、

俺の仲間だ！俺のダチなんだよ！

戦え木場アアアツツ！

彼奴らの想いと魂を無駄にすんなアアアツツ！」

君は僕を助けてくれた。

何も徳が無かつたのに、

主に罰を受けるかもしれないなかつたのに。

「祐斗！やりなさい！自分で決着をつけるの！」

エクスカリバーを超えなさい！

貴方はこのリアス・グレモリーの眷属なのだから！

私の『騎士』はエクスカリバー如きに

負けはしないわ！」

「祐斗くん！信じてますわよ！」

リアス部長、朱乃さん。

「…祐斗先輩！フアイトです！」

小猫ちゃん。

「祐斗さん、頑張ってください！」

アーシアさん。

「木場！俺達の想いも持っていき！」

今のお前なら、勝てるはずだ！」

ユウスケ君。

僕の無謀のせいで怪我をしたっていうのに。

こんな僕を信じてくれた。

ありがとう皆。

「ハハハ！何泣いてんだよ？」

幽霊ちゃんたちと戦場のど真ん中で

楽しく歌つちやつてさ。

ウザいっただらありやしない。もう最悪。

俺的にあの歌が大嫌いなんすよ。

聞くだけで玉のお肌がガサついちゃう！

もう嫌。もう限界！てめえを切り刻んで

気分を落ち着かせてもらいますよ！

「この四本統合させた無敵の聖剣ちゃんぞ！」
フリード・セルゼン。

その身に宿る僕の同志の魂。

これ以上悪用させるわけにはいかない！

この涙は決意の涙だ！

「僕は剣になる」

同志達よ。僕の魂と融合した同志達よ。

一緒に超えよう。

あのとき、達せなかつた想いを、

願いを、いまこそツツ！

「部長、仲間達の剣となる！

今こそ僕の想いに応えてくれツ！

ソード・パース
魔剣創造ツツ!!」

僕の神器と同志の魂が混ざり合う。

同調し、カタチをなくしていく。

魔なる力と聖なる力が融合していった。

そう、この感覚。僕の神器が、

僕の同志たちが教えてくれる。

これは昇華だと。

神々しい輝きと禍々しいオーラを放ちながら、

僕の手元に現れたのは一本の剣。

完成したよ、皆。

パランス・ブレイカー ソード・オブ・ビクトリヤ
「禁手、『双覇の聖魔剣』」

聖と魔を有する剣の力、

その身で受け止めるといい」

僕はフリード目掛けて走り出した。

『騎士』の特性はスピード！

フリードが目で僕の動きを追うが、

フェイントを何度も入れて彼の視界から脱する。

ギイイイン！

それでも僕の一撃をフリードは受け止めた。

本当、大した「はぐれ悪魔祓い」だよ。
しかし、彼のエクスカリバーを覆うオーラが
僕の剣によってかき消されていく。

「ツ！本家本元の聖剣を凌駕すんのか、
その馱剣が!?!」

驚愕の声を出す彼。

「それが真のエクスカリバーならば、
勝てなかっただろうね。

でも、そのエクスカリバーでは、
僕と、同志達の想いは絶てない！」

「チィー！」

舌打ちしたフリードは僕を押し返し、
後方へ下がった。

「伸びろオオオオ！」

彼のエクスカリバーが意思を持ったように
うねり始め、宙を無軌道に激しく
動きながらこちらへ迫ってきた！

『エクスカリバー・ミミック擬態の聖剣』の能力！

そうか、四本分の能力を有しているんだね。
さらに剣は先端から枝分かかれし、
神速で降り注いでくる。

こちらは『エクスカリバー・ラビッドリィ天閃の聖剣』か。

速度が武器だったねあれは。四方八方、
上からも下からも縦横無尽に
鋭い突きを放ってくるが、
僕は全て防ぐ。

キミの殺気は分かりやすい。
殺気の来る方向がわかれば、
防ぐのも容易なことだよ。

「なんでさー！なんで当たらねえええええッツ！
無敵の聖剣さまなんだろおお！」

昔から最強伝説を語り

継がれてきたじやないのかよおお！」

フリードが叫ぶ。

その姿には明らかに

楽しみと共に焦りの影も見えた。

「ならーなら、こいつも追加で

いってみようかねえっえ！」

聖剣の先端がふいに消える。

透過現象？

これは『エクスカリバー・トランススペアレンシー透明の聖剣』の力だ。

刀身を透明にさせる能力。

だけど、殺気の飛ばし方を変えなければ、

いくら刀身が見えなくても。

ギーン！ギーン！ギーン！ギィィィン！

透明な刀身と僕の剣が火花を散らす。

僕は彼の攻撃を全ていなした。

「ッ！」

フリードは目元を引きつらせ、

驚愕の表情になる。

「そうだ。そのままにしておけよ」

横殴りにゼノヴィアが介入してくる。

左手に聖剣を持ち、右手を宙に広げた。

「ペトロ、バシレイオス、ディオニュシウス、

そして聖母マリアよ。我が声に耳を傾けてくれ」

何かの言霊を発し始めている。

彼女は何をするつもりだ？

疑問に感じていた僕の視界で空間が歪む。

歪みの中心にゼノヴィアが手を入れた。

無造作に探り、何かを掴むと

次元の狭間一気に引き出してくる。

そこにあつたのは一本の聖なるオーラを放つ剣。

「この刃に宿りしセイントの御名において、

我は解放する。 デュランダル！」

デュランダル!?

エクスカリバーに並ぶほど有名な伝説の聖剣だ。

しかも斬れ味だけなら、最強だと聞いている。

それをなぜ彼女が？

「デュランダルだと！」

「貴様、エクスカリバーの

使い手ではなかったのか！」

トオドばかりか、コカビエルもさすがに

驚きを隠しきれない様子だった。

「残念。私は元々聖剣デュランダルの使い手だ。

エクスカリバーの使い手も兼任

していたにすぎない」

ゼノヴィアがデュランダルを構えた。

エクスカリバーとの二刀流。

「バカな！私の研究ではデュランダルを扱える

領域に達していないぞ!？」

「それはそうだろう。ヴァチカンでも

人工的なデュランダル使いは創れていない」

「では、なぜだ！」

「イリナ達現存する人工聖剣使いと違って

私は数少ない天然ものだ」

ゼノヴィアの言葉にトオドは絶句していた。

ゼノヴィアは僕達と違い、

元から聖剣に祝福された者だったようだ。

「デュランダルは想像を遥かに超える暴君でね。

触れたものは何でもかんでも斬り刻む。

私のいう事もろくに聞かない。

ゆえに異空間へ閉じ込めておかないと

危険極まりないのさ。」

使い手の私ですら手に余る剣だ。

さて、フリード・セルゼン。

お前のお陰でエクスカリバーと

デュランダルの上決戦ができる。

私は今歓喜に打ち震えているぞ。

一太刀で死んでくれるなよ？

せいぜいエクスカリバーの

力を存分に揮うことだ！」

デュランダルの刀身がフリードの持つ

エクスカリバー以上に聖なるオーラを放ち始めた。

あのオーラ、僕の聖魔剣以上の力を発揮している！

「そんなのアリですかあああ!?!」

ここにきてのチヨー展開！

クソツタレのクソビツチが！

そんな設定いらねえんだよオオオオオ！

フリードが叫び、殺気をゼノヴィアへ向けた。

目には見えないが、枝分かれした透明の剣を

彼女に放ったのであろう。

ガギイイイン！

たった一度の横薙ぎで、

枝分かれした聖剣エクスカリバーが

砕かれて姿を現した。

デュランダルからの剣風の余波で、

校庭の地面が大きく抉れる。

「所詮は、折れた聖剣か。

このデュランダルの相手にもならない」

ゼノヴィアはつまらなそうにため息を吐く。

凄まじい威力だ。

彼女の持つ『破壊エクスカリバー・デストラクシオンの聖剣』

など比べ物にならない。

「マジかよマジかよマジですかよー！

伝説のエクスカリバーちゃんが木っ端微塵の
四散霧散かよっ！酷い！これは酷すぎる！
かぁーっ！折れたものを再利用しようなんて
思うのがいけなかったのでしょうか？

人間の浅はかさ、教会の愚かさ、
いろんなものを垣間見て

俺様は成長していきたい！」

殺気の弱まった彼に僕は一気に詰め寄った！
彼も対応できていない！チエツクメイトだ！

僕の聖魔剣をエクスカリバーで
受け止めようとするが。

バギイイーン。

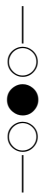
儂い金属音が鳴り響く。

聖剣エクスカリバーが砕け散る音だ。

「見ていてくれたかい？僕の力は、

エクスカリバーを超えたよ」

聖剣を砕いた勢いで、僕はフリードを斬り払った。



ユウスケ side

フリードが倒れ込み、

肩口から横腹までの木場がつけた傷から、

鮮血を滴らせる。

木場が勝った！

木場がエクスカリバーを超えた。

木場は天を仰ぎ、聖魔剣を強く握り締めていた。

「やったな！木場。」

俺は木場に駆け寄り、肩を叩く。

「ありがとうユウスケ君、

エクスカリバーを超えられたのは

皆んなのおかげだよ」

「せ、聖魔剣だと…？あり得ない…。」

反発しあうふたつの要素が混じり合うなんて事はあるはずがないのだ…。」

トオドが表情をこわばらせている。

そうだ、木場の悲願はまだ達成されてない。

奴を倒さない限り、同じ悲劇は続くだろう。

木場達のような被害者を

生み出してはいけないんだ。

「ズ・トオド・レ。覚悟を決めてもらおう」

木場は聖魔剣をトオドへ向ける。

「…よくも、私の研究成果をよくも！

これは使いなくなかったが！」

怒りに震えるトオドが注射器を取り出すと、

自身の腕に突き刺した。

「ぐあああああッ！」

トオドの体から魔力が溢れ出してきた。

どうやら、ドーピングして魔力を上げたようだ。

「今の儂ならクウガをも殺せるだろう！」

ぬううう！」

トオドが地面に手を付くと、

地面から泥状の物体が生み出されていく。

そして、形が変わっていき、トオドの姿に変化し、

数十体の泥人形が校庭を埋め尽くした。

「凄い数だな」

「ユウスケ君、共に戦ってくれるかい？」

木場がこちらを向きそうたずねる。

「やっと言ってくれたな

待ってたぜ、その言葉」

「共に奴を倒そう！」

「ああ、一緒に行こうぜ！」

すると木場の胸に青い淡い光が灯り。
その光は俺のベルトへと吸い込まれていく。
ドクンッ!

これは、『騎士』プロモーションに昇格したのか!?

クウガの変身もなぜか解除されてしまった。

「なんだい、今のは?」

木場は困惑して俺に訊ねる。

「分からないけど、もしかしたら…」

俺は腰に手をかざすと、

いつも通りベルトが現れる。

だが、ベルトの宝玉はいつもの紅色ではなく、
瑠璃色に輝いていた。

ベルトに手をかざし、右手を前に突き出す。

右腕を右前方へ動かしきったあと、

勢いよく左腰の拳を落とす。

そして、ベルトの起動スイッチを押し込む。

「変身!」

俺の体がクウガの姿へと変化していく、

だが、鎧の色は紅色ではなく、

蒼よりも深い群青色へと変化しており、

腕、肩、脚には西洋の騎士の様な

白銀の鎧が装着された。

『クウガが青くなった!』

皆が俺の変化に驚愕していた。

今の俺はクウガの力と『騎士』の力が使えていた。

これは、五代さんとも違うクウガだ…。

「さしずめ、クウガ、ナイトフォームって所か」

「ぬうう、あんだあの姿は、あんなものは、

知らんぞ、いや、姿が変わった所で

この数相手に勝てはしない!」

トオドもクウガの新たな姿に驚いていたが、

すぐに強気な態度に戻る。

それだけあの薬に自身があるのだろう。

「木場、剣を二本貰えるか？」

「？ああ、わかったよ」

木場は疑問に思いながらも、

神器で剣を作り渡してくれる。

「ふう、よし！」

俺が剣を強く握ると、

シユユウウウン!!

剣の形状が見る見るうちに変わっていき、

蒼い直剣に姿を変える。

「剣の形状が変わった!?!」

「ああ、このフォームだと、

剣を持てば、自身の武器に変わるみたいだ」

驚く木場に俺は答える。

俺は剣を構える。

「さあ、決着をつけようぜ木場！」

「ああ、ユウスケ君」

ダッ!

俺達はトオドに向かって同時に駆け出す。

大勢のトオド達もこちらに向かってくる。

俺達は『騎士』の特性である。

速度を生かし、相手の攻撃をかわして

すれ違いざまにトオドを斬りつける。

一撃斬りつけると、

形が崩れて元の泥に戻っていく。

偽物は耐久力は無いようだ。

そして、俺と木場は次々と泥人形を倒していく。

そして、残りは一体。

コイツが本体だろう。

「ぬうう、俺の分身をこうも簡単に!?!」

だが、こうすれば！」

トオドの体に倒した泥人形が集まり、
鎧へと姿を変える。

「儂の魔力で限界まで硬度を高めた

この鎧なら、貴様らの剣とて

斬れまい！儂の手で貴様らを

殺してくれるわ！」

トオドが腕を広げ突進してくる。

「ハ、今の俺達に斬れないものは無い、

そうだよな木場！」

「ああ、やろうユウスケ君！」

俺達は走り出し、剣にオーラを集める

そのまま並んでトオドに並んで剣を。

「はあああああああッツ！」

トオドに放ち、俺達はトオドとすれ違う。

「ククク、やはりこの鎧なら」

傷の無い鎧を見て、トオドは笑っているが、

ピシッ！

「何!？」

ピシッ！ピシッ！バキイイインツツ！

「ぐわあああああ！バカなあ！」

トオドの鎧は胸にX字に砕け

下の体も切り裂いていた。

そして胸の傷にクウガの文様が現れる。

ビキッ、ビキッ！

文様がトオドの腰のベルトへと伸びる。

「バカな儂の頭脳が失われるというのか！」

「さらばだ、バルパーガリレイ」

「闇に抱かれて眠れ」

ドカアアアアアンツツ！

トオドは倒れ、爆発する。

第37話 「真実」

「ハハハハ！」

カアーハツハツハハハハハハツ！」

コカビエルは高笑いを上げ、

宙から降りて地に足をつける。

圧倒的な重圧。

凄まじいまでの自信と

オーラを纏いながら、

墮天使の幹部がついに俺達の

前に立った。不敵な笑みを浮かべ、

奴は言う。

「限界まで赤龍帝の能力を上げて、

誰かに譲渡しろ」

自信に満ちた一言が発せられ、

リアス先輩がその言葉に怒る。

「私達にチャンスでも与えるというの!？」

ふざけないで！」

「ふざけないで？ハハハ、

ふざけているのはお前達の方だ。

俺を倒せると思っっているのか？」

奴の眼光で凄まれるだけで、

全身を射抜かれる。

身体中を恐怖が支配していく。

これが、聖書に乗る

墮天使のプレッシャーか。

剣を握る手が震えている。

この震えは今までの戦いとは

比べられないものだ。

死線。

この先は死ぬ覚悟、

死んでもおかしくない状況を
受け入れないといけない状態だ。

今しがたトオドを倒したが、
気持ちを切り替えなければ即死だ。

一つのミスで即死の自分を受け入れろ。

自分の死の次は仲間の死が待っているんだから。

「…イツセー。神器を」

リアス先輩の言葉にイツセーが応じる。

『Boost!』

機械的な音声と共に真つ赤な閃光が

神器の宝玉から発せられた。

それから数分後。

俺達は一步も動けず、少しの挙動もできずに
ブーステッド・ギア
赤龍帝の籠手の倍増を待っていた。

隙あらば斬りかかりたい所だが、

目の前の墮天使はただ立っている

だけだというのに隙ひとつ無かった。

飛び込めば、返り討ちに遭うと、

俺の本能が告げていた。

うかつな行動をできなかった。

おそらく、この場にいる全員が同じだろう。

ただただ赤龍帝の能力が

高まるのを待つしかなかった。

「来たー!」

イツセーの籠手が一層に眩い光を発した。

倍増が限界に達したのだろう。

「で、誰に譲渡する?」

興味津々な口調でコカビエルが訊いてくる。

コカビエルに手をむけたのは。

リアス先輩だった。

「イツセー!」

「はいー」

リアス先輩の呼びかけに
イツセーが譲渡を始める。
お互いに手を握り合う二人。
宝玉からの光がリアス先輩へ渡り、
歌の歩の体を覆う紅い魔力の
オーラが膨れ上がった。
っ。

絶大な魔力の波を肌にピリピリ感じ、
強大な力がリアス先輩の手に生まれていた。
食らえば塵一つ残さないのであろうと
「思えるほどの質量だ。」

あれをくらえば、
大概のものは消し飛ばす。
しかし相手は。

「フハハハハハ！いいぞ！その魔力の波！

俺に伝わる力の波動は最上級悪魔の魔力だ！
もう少して魔王クラスの魔力だぞ、
リアス・グレモリー！

お前も兄に負けず劣らずの
才に恵まれているようだな！」
心底嬉しそうに堕天使の幹部は笑っている。
それは狂気に彩られた表情だった。

奴は戦に喜びを感じている！

「消し飛ばエエエエツツ！」

リアス先輩の手から、
最大級の魔力の塊が滅びの
力を帯びて撃ちだされる！
ゴオオオオオオオオオオオツツ！
地の底まで響き渡るような
振動を周囲に撒き散らし、

強大な一撃がコカビエルに向かっていく。

コカビエルは両手を前に突き出して、

迎え撃とうとしていた。

「おもしろい！おもしろいぞ、

魔王の妹！サーゼクスの妹！」

コカビエルの両手に堕天使の

オーラの源である光力があつまっていく。

ドゥウウウウウウツツ！

コカビエルはリアス先輩の放った

最大の一撃を真正面から受ける。

その表情は常軌を逸した

鬼気のあるものだった。

「ぬうううううううんツツ！」

リアス先輩の一撃が、

徐々に勢いを殺され、カタチも崩されていく！

あの魔力でも倒せないのか！

しかし、コカビエルも無傷では無かった。

身にまとう黒いローブの端が破れ、

魔力を受け止める手からも血が噴き出している。

だが、魔力の塊は徐々に確実に縮小していった。

リアス先輩も先程の一発で疲弊したのか

肩で激しく息をしていた。

あれほどの一撃だ、

連発は不可能だろうな。

しかも魔力の消費量からいっても

同じ威力は無理だろう。

もう一度イツセーの神器を再び最大まで高めて

誰かに譲渡できればいいが、

このコカビエルを誰が倒せる？

朱乃さんか？

それとも聖剣デュランダルを持ったゼノヴィアか？

騎士に覚醒した俺もコカビエルに
決定打は与えられないだろう。
せめて、パワーに特化した『戦車』なら、
話は違っていたかもしれないが、
いや、できないことをあてにはできない。
仲間を守るんだ！
無駄かもしれないが、木場とゼノヴィアと
共に斬り込むまでだ！

「雷よー！」

朱乃さんがリアス先輩の魔力に
夢中のコカビエルに天雷を向ける。
しかし、彼女の雷はコカビエルの
黒き翼の羽ばたき一つで儚く消失した。

「俺の邪魔をするか、

バラキエルの力を宿す者よ！」

「…私をあの者と一緒にするなッ！」

朱乃さんは目を見開き激昂し、
雷を連発するが、

全てコカビエルの翼に薙ぎ払われてしまう。
バラキエル。

たしか、墮天使の幹部の名だ。

「雷光」の二つ名を持つ、

雷の使い手だったはずだ。

単純な戦闘能力では、

墮天使の総督でもある

アザゼルに匹敵すると聞いた事がある。

もしかして朱乃さんは…。

リアス先輩の魔力を完全に手の中で
消滅させたコカビエルは哄笑をあげる。

「悪魔に落ちるとはな！ハハハ！」

まったく、愉快的眷属を持っているな、

リアス・グレモリーよ！

赤龍帝、究極の闇、バランス・ブレイカー 禁 手に至った

聖剣計画の成れの果て、そしてバラキエルの娘！

おまえも兄に負けず劣らずの

ゲテモノ好きのようだ！」

「兄の、我らが魔王への暴言は許さないっ！

何よりも私の下僕への侮辱は万死に値するわっ！」

リアス先輩の怒りの叫びを

コカビエルは鼻で笑い、

挑発的な物言いをする。

「ならば滅ぼしてみろっ！魔王の妹！

ウエルシュ・ドラゴン 『赤い龍』の飼い主！

ルイン・プリンセス 紅髪の滅殺姫よっ！

お前が対峙しているのは、貴様ら悪魔

にとつて長年の宿敵なのだぞ!?

これを好機と見なければお前の程度が

知れるというものだ！」

コカビエル。

俺達のがどこまで通じるかは

分からないけどよ。やるしかない！

ダッ！

後方にいたゼノヴィアが駆け出した。

俺と木場の間を通り過ぎるとき、

つぶやく。

「同時に仕掛けるぞ」

その言葉を聞き、

俺達もその場から駆け出す。

剣を強く握り締め、

二人と共に斬りかかる！

先に斬りかかったゼノヴィアに対して、

コカビエルは光の剣を創り出し、

片手で迎え撃った。

「フーン！デユランダルか！」

一度壊れたエクスカリバーとは違い、

こちらの輝きは本物か！しかあぁあし！」

「ツッ！」

ブウウウウン！

空気が震え、耳鳴りが襲う。

コカビエルは空いている手から波動を放ち、

ゼノヴィアの体を宙に浮かせた。

そこへコカビエルの蹴りが彼女の腹に放たれる。

「がっ！」

苦悶の声を発し、

ゼノヴィアが吹っ飛ばされていく。

「所詮は使い手次第。娘！お前では

まだまだデユランダルは使いこなせんよ！

先代の使い手はそれはそれは常軌を逸する

ほどの強さだったぞ！」

ゼノヴィアは空中で体制を立て直し、

地面にうまく着地すると、

そのまま一気に切り込んでいく。

俺と木場もそれに合わせて同時に斬りかかった！

「コカビエル、僕の聖魔剣であなたを滅ぼす！

もう誰も失うわけにはいかないんだ！」

「そうだ！俺達はお前に勝って皆で帰るんだ！」

「ほう！三人がかりの同時攻撃か！」

面白い！実にいいぞ！来いツッ！

そのぐらいでなければ俺は倒せんツッ！」

コカビエルは片方の手にも光の剣を生み出し、

俺達の剣をさばいていく！

俺の直剣、木場の聖魔剣、

ゼノヴィアのデユランダルとエクスカリバー、

それら全ての斬戟を

コカビエルは難なくいなしていった。
くっ！

三人がかりでもコカビエルの方が上なのか！

「そー！」

コカビエルの後方から小猫ちゃんが
拳を打ち込んでくるが。

「甘いわー！」

黒い翼が鋭い刃物と化し、

小猫ちゃんの体を容赦なく斬り刻んだ。

地面に叩きつけられた、

彼女の体は鮮血を噴き出していた。

「小猫ちゃん！」

「ほら、余所見は死ぬぞー！」

小猫ちゃんがやられた事に

一瞬の隙を作ってしまった俺達を

コカビエルの光の剣が襲いかかる。

ギイイイン！

「なっ！」

光の剣を受け止めた俺達の剣に

ヒビが入る！

クソツ！

今の剣戟で剣の強度も限界だったか!?

俺達が剣のヒビに気を取られた。

そのとき、

ドンツ！

コカビエルの全身から発生した衝撃波に

俺と木場とゼノヴィアはなす術もなく、

吹き飛ばされていく。

なんとか、体勢を整える事は出来たが…。

俺達は全員肩で息をしていた。

：勝てない。

そんな考えが脳裏に過っていた。

実力の差が圧倒的だった。

新たな力に目覚めたつてのに

三人がかりでも簡単にあしらわれている。

堕天使の幹部。

これほどの差があるとは！

いや、ダメだ！

そんな考えは捨てろ！

勝つんだ！勝たないと皆が生き残れない！

俺達は生きて帰るんだ！

小猫ちゃんの元にイツセーと

アーシアが駆け寄った。

アーシアの神器が発動し、

小猫ちゃんの傷を癒している。

よし、これで小猫ちゃんは大丈夫だろう。

「コカビエル！まだだ」

木場が聖魔剣を修復してコカビエルに斬りかかる。

「ハハハ！まだ来るか！

いいぞ、来い！」

「聖魔剣よ」

ザンツ！

コカビエルの周囲に聖と魔のオーラを

放つ刃を出現させ、

堕天使を包囲する。

これで相手をその場に固定出来た。

あとは一気に攻めれば！

「これで囲ったつもりか？」

不敵に笑うコカビエルの十の黒き翼が

全て幾重にも重ねられた剣のようになって、

周囲の聖魔剣を難なく砕いた。

木場は構わず真正面から
コカビエルに斬りかかるが、
墮天使の幹部は動じずに
木場の聖魔剣を右手の人差し指と
中指だけで受け止めた！

「こんなものか」

嘆息するコカビエル。

受け止められた聖魔剣は微動だに出来ないようだ、
木場は聖魔剣をもう一本創り出し、
二刀目でコカビエルを狙うが、
それも左手の指で受け止められた。

だが、そんな状況でも

木場の目は諦めていなかった。

木場は口元に剣を創造する。

三刀流!?

聖魔剣を口にくわえて、首を勢いよく横に振った！

流星にこの攻撃は予想できなかったのか、

コカビエルは押さえていた聖魔剣を放し、

後方に退いた。

今のはどうだ？

コカビエルを見ると、

頬に横一文字の薄い切り口。

血が少しだけ滲み出していた。

今の攻撃であれだけしかダメージが無いのかよ。

俺達は全員が絶望的な表情を浮かべていた。

ただ一人、余裕の顔であるコカビエルは苦笑する。

「しかし、仕えるべき主を亡くしてまで、

お前達神の信者と悪魔はよく戦う」

突然、コカビエルは謎の話始めた。

何の話だ？

「……」

リアス先輩が怪訝そうな口調で訊く。
コカビエルは心底おかしそうに大笑いした。
まるで何も知らない事をあざ笑うかのように。

「フハハ、フハハハハハハハ！」

そうだったな！そうだった！

お前達下々まであれの真相は

語られていなかったな！

なら、ついでだ。教えてやるよ。

先の三つ巴戦争で四大魔王だけじゃなく
神も死んだのさ」

ッ！

何だと…!?

信じられない様子なのは

この場にいる全員がそうだった。

「知らなくて当然だ。神が死んだ等と、

誰が言える？人間は神がいなくて

心の均衡と定めた法も機能しない

不完全な者の集まりだぞ？

我ら墮天使、悪魔さえも下々に

それらを教えるわけにはいかなかった。

どこから神が死んだと漏れるか

わからなかったからな。

三大勢力でもこの真相を知っているのは

トップと一部の者達だけだ」

マジかよ、ならアジアや木場達の

想いは何だったんだよ…。

「戦後残されたのは、神を失った天使。

魔王全員と上級悪魔の大半を失った悪魔、

幹部以外のほとんどを失った墮天使。

もはや、疲弊状態どころじゃなかった。

どこの勢力も人間に頼らねば種を残せない。

墮天使は天使が堕ちれば数は増えるが、
純粹な天使は神を失った今では増える
事などできない。悪魔も純血種が希少だろう?」

「…ウソだ。…ウソだ」

少し離れた所で、

力が抜けうなだれるゼノヴィアの姿があつた。

その表情は見えていられないほど、

狼狽していた。

現役の信仰者。

神の下僕。神に仕える事を使命として、

生きてきた存在。

いまここで神の存在を否定されれば、

生き甲斐を失えば、そうなるのも当然か。

「正直に言えば、もう大きな戦争など

故意にでも起こさない限り、再び起きない。

それだけ、どこの勢力も先の戦争で泣きを見た。

お互い争い合う大元である神と魔王が

死んだ以上、戦争継続は

無意味だと判断しやがった。

アザゼルの野郎も戦争で部下を

大半亡くしちまったせいか、

『二度目の戦争は無い』と宣言するしまつだ!

耐え難い!耐え難いんだよ!

一度振り上げた拳を収めるだど!?

ふざけるな。ふざけるなッ!

あのまま継続すれば、

俺達が勝てたかもしれないのだ!

それを奴はッ!人間の神器所有者を

招き入れねば生きていけぬ墮天使共

なぞ何の価値がある!?!」

強く持論を語るコカビエル。

憤怒の形相となっていた。

事の真相は想像以上に仲間たちに
衝撃を与えている。

アーシアは口元を手で押さえ、
目を大きく見開いて、

全身を震わせていた。

アーシアは悪魔になった後も

毎日神に祈ることを欠かさない程、

強い信仰心を持っていた。

「…主がいらないのですか？」

主は…死んでいる？

では、私達に与えられる愛は…」

アーシアの疑問にコカビエル

はおかしそうに答える。

「そうだ。神の守護、

愛が無くて当然なんだよ。

神は既にもいないのだからな。

ミカエルはよくやっている。

神の代わりをして天使と

人間をまとめているのだからな。

まあ、神が使用していた『システム』

が機能していれば、神への祈りも祝福も

悪魔祓いもある程度動作する。

ただ、神がいる頃に比べ、

切られる信徒の数が格段に増えたがね。

その聖魔剣の小僧が聖魔剣を

創り出せたのも神と魔王のバランスが

崩れているからだ。本来なら、

聖と魔は混じり合わない。

聖と魔のパワーバランスを司る

神と魔王がいなくなれば、

様々な所で特異な現象も起こる」

コカビエルの言葉を聞き、

アーシアがその場で崩れ落ちた。

「アーシアーっ！っかりしろ」

崩れ落ちたアーシアを抱えて、

呼び掛けるが、返事がない。

アーシアは人生の大半を神に

捧げていたんだ。

神は必ず居ると信じ、

どんな辛い目に合っても

必ず救いがあると願ってたのだから。

そんな彼女には今の話は

シヨックが大きすぎる。

そんな俺達に構わず

コカビエルは拳を天にかざす。

「俺は戦争を始める、これを機に！」

お前達の首を土産に！

俺だけでもあの時の続きをしてやる！

我ら堕天使こそが最強だとサーゼクスにも、

ミカエルにも見せ付けてやる！」

っ。

サーゼクス。ミカエル。

どちらも各陣営のトップの存在だ。

コカビエルはその二人を相手に

しようとしている。

それだけの力もあるんだろう。

俺達はそんな存在と戦っていたんだ。

勝てるはずがない。

スケールが俺達とは違い過ぎる。

最初から負けるのは

決まっていたのかもしれない：

それでも、

俺は剣を握り、

立ち向かおうとしたが、

その時、俺の視界に眩しいほどの

赤い閃光が映り込む。

それは、イツセーだった。

「ふざけんなー！お前の勝手な言い分で

俺の町を、俺の仲間を、部長を

消されてたまるかツツ！

それに俺はハーレム王になるんだぜ、

てめえに俺の計画を邪魔されちや困るんだよ！」

イツセーはかつこつけているつもり

かもしれないが、最後に台無しだろ。

「くくく。ハーレム王？ハハハ、

赤龍帝はそれがお望みか。

なら俺と来るか？

すぐにハーレム王になれるぞ？

行く先々で美女を見繕ってやる。

好きだけ抱けばいい」

コカビエルがイツセーを甘い言葉で勧誘する。

それはさすがにイツセーをなめすぎだろ。

そんな戯言に揺れるバカじゃねえよ。

「……………」

イツセーはその場でかつこつけた

姿勢のままフリーズしていた。

「そ、そんな甘い言葉で

俺が騙されるかよ」

じゃあ、今の間はなんだ！

おまえ流石にそれは、

「イツセー！もう！

よだれを拭きなさい！

貴方どうしてこんな時まで！」

リアス先輩も怒っていた。

そりゃ、怒られて当然だ。

「…す、すみません。」

どうにもハーレムって言葉に弱くて…」

「そんなに女の子がいいなら、

この場から生きて帰ったら

私がいろいろしてあげるわよ！」

「マジですか!？」

じゃ、じゃあ、おっぱいを吸ったり！」

「ええーそれで勝てるなら安いものだわ！」

カアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ！

ブーステッド・ギアの宝玉が

かつてないほどの輝きを放っていた！

「ふふふ。吸う。吸える。」

吸えるんだ！」

イツセーが不敵な笑みを浮かべていた。

そう言えば吸うのが夢だと

この前言ってたな。

「今の俺は神すらも殴り飛ばせるぜ。」

あ、神様いないんだっけ。ハハハハ！」

眩いほどの赤い光！

とてつもない力がイツセーの神器から伝わってくる。

「よっしやあああああああ！」

部長の乳首を吸う為、やられてもらうぜ、

コカビエルウウウウウ！

今の俺は負ける気がしねええええツツ！」

そんな理由でか!？」

神器は宿主の想いに応えて力を増す。

夢を叶えたいと思うイツセーの想いに

ブーステッド・ギアが応えようとしているのか!？」

それが、たとえイツセーのスケベ根性だと
してもか『赤ウエルシユ・ドラゴンい龍』はそれでいいのか？

リアス先輩も大声で叫ばれて、
気恥ずかしいのか頬を赤く染めていた。

これは、心中さつするよ。

家のイツセーが申し訳ない。

「…女の乳首を吸う思いだけで力を

解き放つ赤龍帝は初めてだ。

…なんだ、お前は？何処の誰だ？」

目を引きつらせながらコカビエルが訊ねる。

それに対して、イツセーは胸を張って答える。

「リアス・グレモリー眷属の『兵士』！」

兵藤一誠さ！覚えとけ、コカビエル！

俺はエロと熱血で生きる

ブーステッド・ギアの宿主さ！」

先程まで実力差に絶望感が漂っていた周囲だが、

イツセーの活き活きとした叫びが

不思議と皆に活力を与えていた。

イツセーはあの熱血なところが

皆に影響を与えるらしく、

あいつの言葉に不思議と力が湧いてくる。

リアス先輩も朱乃さんも

アーシアも小猫ちゃんも

木場もゼノヴィアも

満身創痍のほずなのに

コカビエルに立ち向かう姿勢になっていた。

もちろん俺だって同じ気持ちだった。

まだ俺達は戦える。

まだ俺達は負けたわけじゃない！

そう、まだ勝利を諦めてはいない！

全員の気持ちが一つになった、

その時だった。

「…ふふふ、おもしろいな」

空から聞こえた突然の声。

この場に居る誰のものでもない。

最初に気付いたのは、

朱乃さんだった。

突然彼女は空を見上げた。

続いて何かを感じたのが、

リアス先輩だった。

二人が夜空を見上げる。

俺も怪訝に思いながら見上げるが、

何もわからなかったが、

その直後、直ぐに理解した。

ぞっ…。

全身を駆け巡る言い知れない

緊張感と恐怖。

圧倒的な存在感と絶望的

なまでに感じる力量差を

振り撒きながら、

それは空から降ってきた。

カッ！

空から一直線に伸びる白い閃光が、

闇の世界を切り裂きながら舞い降りる。

あの速度で地面へ降下すれば、

地響きと共にクレーターが生まれ、

辺り一面に土煙が巻き起こるのは

必然だろう。

だがそんな事は起きなかった。

俺達の目の前に闇の中で輝く、

一切の曇りも陰りも見せない

白き全身鎧が

地面すれすれの高度で浮いていた。

第38話 「白龍皇」

俺達の目の前に現れた。

プレートアーマー
白き全身鎧。

体の各所に宝玉らしきものが埋め込まれ、顔まで鎧に包まれて、表情は窺えなかった。背中から生える八枚の光の翼は、

闇夜を切り裂き、

神々しいまでの輝きを発している。

見覚えがあつた、

目の前の白い鎧に色と形は違うが、似ている。

その姿は『ブーステッド・ギア・スケイルメイル赤龍帝の鎧』

にそっくりだった。

恐らく、俺以外の皆も

同じことを考えているだろう。

そして、同時に把握した。

目の前の存在が何者なのか。

「…『パニシング・ドラゴン白い龍』

最初にその名を口にしたのは

堕天使の幹部であるコカビエルだった。

やっぱり、そうか。

イツセーの『ウエルシユ・ドラゴン赤い龍』と対をなす存在。
パニシング・ドラゴン
白い龍。

その神秘的な輝きを放つ白い鎧に

皆の視線が釘付けになる。

コカビエルはその白き鎧を目にして、

舌打ちした。

『ロンギヌス神滅具』のひとつ、
デイバイン・デイバイン
『白龍皇の光翼』…。

鎧とかしているということは、

しでにその姿は禁手バランス・ブレイカー状態である

『白龍皇の鎧』か。

『赤龍帝の籠手』同様、

忌々しい限りだ」

禁手バランス・ブレイカーの『白い龍』か。

「赤に惹かれたか。『白い龍』よ。邪魔立ては」

コカビエルが全てを言い切る前に、彼の翼が宙を舞った。そして、傷口から鮮血が飛び出す。

「まるでカラスの羽だ。薄汚い色をしている。

アザゼルの羽はもつと薄暗く、

常闇のようだったぞ？」

目で捉えきれなかったが、

白い何かか奴を襲ったように見えた。

『白い龍』は手に黒い翼を持っていた。

声からして若い男か？

「き、貴様！俺の羽をつ！」

翼をものがれ、怒りをあらわにするコカビエルだが、

『白い龍』はその様子に笑っていた。

「どうせ墮ちた印だ。地より下の世界へ墮ちた者に

羽なんて必要ないだろう？まだ飛ぶつもりなのか？」

『白い龍』ツ！俺に逆らうのか！」

空に無数の光の槍を出現させるコカビエルだが、

『白い龍』は動じずにハッキリと口にする。

「我が名はアルビオン」

『Divided!』

音声が聞こえ、

コカビエルを覆っていたオーラが一気に減少する。

宙に漂っていた光の槍も半数が霧散した。

「我が神器、『白龍皇の光翼』の能力のひとつ。

触れた者の力を十秒ごとに半分にさせていく。

お前の力は我が糧となる。時間はないぞ？」

早くこちらを倒さねば、人間にすら勝てなくなる」
なんて能力だよ!?

赤龍帝の能力は所有者の力を倍加し、何かに譲渡する。
白龍皇の能力は相手の力を奪い、自らの糧にするもの。
残った翼を羽ばたかせ、

コカビエルがアルビオンに立ち向かっていくが、
光速とでも言える動きで翻弄され、
捉えられていなかった。

俺達を圧倒していたコカビエルが、
アルビオンと名乗った男に弄ばれている。

『Divide!』

「おのれ!」

光の槍と剣でアルビオンに攻撃するが、

白龍皇は腕を横になぐだけで全てを消し去ってしまう。

コカビエルが苦戦している間にも、

彼の力は更に半分になっていく。

『Divide!』

何度目の音声か。

コカビエルの動きが俺でも相手にできるほど、
目に見えて落ちていた。

アルビオンがため息を吐く。

「…もはや、中級の墮天使並みか。つまらない。

もう少し楽しめると思ったんだが…

終わらせるか」

フツ。

視界から消え去り、

光の軌跡を残しながら、

アルビオンがコカビエルへ直進する。

ドゴツ!

アルビオンの拳がコカビエルの腹部に深く突き刺さった。
身体をくの字に折り曲げて、

コカビエルが吐しや物を地面に撒き散らした。
その姿に先程までの偉大なまでのオーラが
微塵も感じられなかった。

「…バ、バカな…。こ、この俺が…」

「なんだ、ありきたりの台詞を吐くんだな。

バカな？この俺が？そのあとはなんだ？

そんなはずはない、か？」

アルビオンはおかしそうに笑っている。

「あんたを無理やりにも連れて帰るよう

アザゼルに言われているんだ。

あんたは少しばかり勝手が過ぎた」

「貴様！そうか！アザゼルが。

アザゼルウウウウ！お、俺はああああ！」

ゴンツ！

アルビオンの拳がコカビエルの顔面に突き刺さった。
ずるっ…。

コカビエルは、その場に力なく崩れ落ちて、
そのまま地面に突っ伏した。

墮天使の幹部が、地に倒れ伏すのか。

アルビオンは自分で倒したコカビエルの
体を肩に担いだ。

「フリードも回収しなければならぬか。

聞き出さないといけないこともある。

始末はそのあとか」

倒れこむフリードのもとにも足を運び、

アルビオンは腕に抱えた。

彼は二人を回収すると、

光の翼を展開し、

空へ飛び立とうとした。

『無視か、白いの』

この声は…。

声はイツセーの籠手から発せられていた。
イツセーの籠手が光だしていた。

『起きていたか、赤いの』

アルビオンの鎧の宝玉も

白き輝きを発していた。

神器に宿る龍同士が会話しているのか？

『せっかく出会ったのにこの状況ではな』

『いいさ、いずれ戦う運命だ。こういうこともある』

『しかし、白いの。以前のような敵意が

伝わってこないが？』

『赤いの、そちらも敵意が段違いに低いじゃないか』

『お互い、戦い意外の興味対象があるということか』

『そういうことだ。こちらは

暫く独自に楽しませてもらうよ。

たまには悪くないだろう？また会おう、ドライグ』

『それもまた一興か。じゃあな、アルビオン』

赤龍帝と白龍皇の会話は終わったようだ。

別れを告げた両者だったが、

イツセーは納得がいかなかったようで前に出る。

「おい！どういうことだ!?!お前は何者で、

何をやってんだ!?!てか、お前のせいだ

俺は部長のお乳が吸えなくなっちゃったんだぞ!」

アルビオンに対して怒りをあらわにするイツセー。

怒るポイントが可笑しいだろ!?!

バニシング・ドラゴン
白い 龍の所有者は、一言だけ残す。

「全てを理解するには力が必要だ。

強くなれよ、いずれ戦う俺の宿敵くん」

彼は白き閃光となって、飛び立っていく。

誰もが予想してなかった

戦いの終わりに言葉を失っていた。

コカビエルの展開していた

破壊の魔方陣も既に消えている。
終わったのか。

突然の乱入があってもなんとか、この街はすくわれた。
パシッ。

音のほうへ向けば、木場の頭をイツセーが叩いたようだ。

「やったじゃねえか、色男！」

へー、それが聖魔剣か。白いのと黒いのが
入り混じっててキレイなもんどなあ」

興味津々の様子でイツセーは聖魔剣を見ていた。

「イツセーくん、僕は」

「ま、いまは細かいの言いつこなしだ。

とりあえず、一旦終了ってことでいいだろう？

聖剣もさ、おまえの仲間のこともさ」

「うん」

これで木場も聖剣の呪縛から解放されただろう。

「…木場さん、また一緒に部活できますよね？」

アーシアが心配そうに訪ねる。

神の死を聞かされて、シヨックなはずなのに

自分より他のだれかを心配できるのは

彼女が本当にいい子なんだと思ったよ。

「祐斗」

木場を呼ぶリアス先輩。

「祐斗、よく帰ってきてくれたわ。

それに禁フランス・ブレイカー手だなんて、私も誇れるわよ」

「…部長、僕は…部員の皆に…。何よりも、

一度命を救ってくれたあなたを裏切ってしまいました…。

お詫びする言葉が見つかりません…」

リアス先輩が木場の頬を撫でる。

「でも、貴方は帰ってきてくれた。もう、

それだけで十分。彼らの想いを無駄にしてはダメよ」

「部長…。僕は改めて誓います。」

僕、木場祐斗はリアス・グレモリーの眷属

『騎士』として、貴方と仲間達を終生お守りします」

「うふふ。ありがとう。でも、

それをイツセーの前で言ってはダメよ？」

イツセーを見れば嫉妬の眼差しで木場を睨んでいた。

「俺だって『騎士』になって部長を守りたかったんだぞ！

でも、お前以外に部長の『騎士』を務まる

奴がいないんだよ！責任持って、任務を完遂しろ！」

イツセーは照れくさそうに言う。

「うん、わかっているよ、イツセーくん」

「木場、今回はお前の事情に付き合ってやったんだから

今度俺のナイトフォームの練習相手してくれよな

高速の剣士の先輩として宜しく頼むぜ」

「ああ、君にも迷惑かけたからね任せてくれ」

「さて」

ブウウウン。

危険な音を立てて、

リアス先輩の手が紅いオーラに包まれた。

…な、なんだ。すごく嫌な予感が…。

怪訝に思う俺と木場にリアス先輩は

ニツコリ微笑んで言った。

「ユウスケ、祐斗、勝手なことをした罰よ。

お尻叩き千回ね」

魔王の加勢が到着したのは全てが終わってから

三十分以上たってからだった。

その間俺と木場はイツセーに笑われながら、

尻を叩かれた。

当分の間は全蔵先輩の事はバカにできないと思ったよ。

コカビエル襲撃事件から数日後。

放課後、部活も終わり、悪魔の活動の為

久しぶりに部室に顔を出した

俺とイツセーとアーシアは

ソフアーに座る外国の女の子に驚いた。

「やあ、兵藤兄弟」

緑色のメッシュを入れた女子

ゼノヴィアが駒王学園の制服を着て

堂々と部室に居た。

「なっ…なんで、おまえがここに!？」

動揺を隠せないイツセーは指を突き付けて訊ねる。

「教会からの新たな指令か？」

俺達は神の不在を知ったからな

監視で来てもおかしくないか。

バツ!

そのとき、ゼノヴィアの背中から黒い翼が生える!

ええええええええええええええ!

な、なんで?悪魔の翼がゼノヴィアから!?

ゼノヴィアはふんと鼻息をつきながら言う。

「神がいないと知ったんでね、破れかぶれで

悪魔に転生した。リアス・グレモリーから『騎士』

の駒をいただいた。デュランドルがすごいだけで

私はそこまで凄くなかったようだから、

ひとつの消費で済んだみたいだぞ。

で、この学園にも編入させてもらった。

今日から高校二年の同級生で

オカルト研究部所属だそうだ。

よろしくね、ユウスケくん♪イツセーくん♪」

「…真顔でかわいい声を出すな」

「真顔じゃ似合わないだろ…」

「イリナの真似をしたのだが、うまくいかないものだな」

「つーか、転生かよ！部長、

貴重な駒をいいんですか？」

神の不在を知ったからって、悪魔になろうとは破天荒すぎるだろ。

まあ、一緒にコカビエルと戦った仲間だしな

「まあ、デユランダル使いが眷属にいるのは頼もしいわ。

これで祐斗とともに剣士の二翼が誕生したわね」

リアス先輩は楽しげだ。

伝説の聖剣を持った剣士が味方ってのは心強い。

今後の「レーティングゲーム」でも

相手は悪魔だから、聖剣が活躍してくれるだろう。

これで、グレモリー眷属はさらなる強化が見込めるな。

「そう、私はもう悪魔だ。後戻りできない。

いや、これでよかったのか？ううむ、

しかし、神がない以上、私の人生は破綻したわけだ。

だが、元敵の悪魔に降るといえるのはどうなのだろうか…。

いくら相手が魔王の妹だからといって…」

ゼノヴィアは何やらぶつぶつと

呟きながら頭を抱えだした。

あー、アーシアみたいに祈ってダメージ受けたのか、

この子も変わった子だな。

「所でイリナはどうしたんだ？」

悪魔になるなんて彼女なら止めるだろうしな。

「イリナなら、私のエクスカリバーを合わせた五本を

持って本部に帰った。統合したエクスカリバーを破壊して

しまったせいとか、芯となっている『かけら』の状態で

回収した。まあ、奪還の任務には成功したわけだよ。

芯があれば錬金術で鍛えて再び聖剣にできる」

四本が一本になったエクスカリバーは

木場とゼノヴィアが破壊したからな。

元になった真のエクスカリバーの

「かけら」は無事だったのか。

「エクスカリバーを返しているのか？てか、教会裏切っていいのかよ？」

「いちおうあれは返しておかないとマズイ。

デュランダルと違い、使い手は他に見繕えるからね。

私にはデュランダルがあれば事足りる。

あちらへ神の不在を知った事に関して述べたら、

何も言わなくなったよ。私は神の不在を

知った事で異分子になったわけだ。教会は異分子を、

異端を酷く嫌う。たとえ、

デュランダルの使い手でも捨てる。

アーシア・アルジェントの時と同じだな」

彼女は自嘲した。

：教会つてのはそこまで異端の者を排除するのか。

徹底すぎだな。

「イリナは運がいい。怪我をしたため、

戦線離脱していたとはいえ、

あの場で、あの真実を知らずに済んだのだからね。

私以上に信仰の深かった彼女だ。神がない事を知れば、

心の均衡はどうなっていたか分からない」

敬虔なクリスチャンほど、真相は辛い物だろう。

下手すりゃ、

自分の生き方全てを否定されることになるからな。

そうなったら、人間つてのはどうなるか分かったもんじゃやない。

「ただ、私が悪魔となった事をとても残念がっていた。

神の不在が理由だと言えないしね。

なんとも言えない別れだった。次に会う時は敵かな」

ゼノヴィアは目元を細めながら言う。

イリナ、どんな気持ちで帰国したのかな…。

部員が全員そろったことを確認すると、部長が語りだす。

「教会は今回のことで悪魔側

つまり魔王に打診してきたそうよ。

『墮天使の動きが不透明で不誠実の為、

遺憾ではあるが連絡を取り合いたい』と。

それとバルパーの行いについても過去逃したことに
関して自分達にも非があると謝罪してきたわ」

：大分嫌々だが、まあ、敵同士だからな。

まあ、トオドの件で謝罪されただけでも構わないか。

「しかし、この学び舎は恐ろしいな。

ここには魔王の妹がもう一名いるのだもの」

と、ゼノヴィアはため息を吐きながら言う。

そういえば、コカビエルとの

戦いの前に会長とリアス先輩がそれらしい事言ってたな。

そういえば、コカビエルに破壊された校庭や体育館は

魔王の関係者が直してくれた。

一晩で直してしまう悪魔の力には驚きだよ。

考えてみれば、

別空間に学園のレプリカを作ったと聞いたし、

悪魔の技術力からしたら余裕なのかもな。

というか、魔王からの援助があるって、

この学園のどうなってるんだ…。

「今回のことは、墮天使の総督アザゼルから、

神側と悪魔側に真相が伝わってきたわ。

エクスカリバー強奪はコカビエルの単独行為。

他の幹部は知らない事だった。

三すくみの均衡を崩そうと画策し、

再び戦争を起こそうとした罪により、

『地獄の最下層』で永久冷凍の刑が執行されたそうよ」

リアス先輩がそう説明してくれた。

なら、コカビエルは二度と俺達の前には現れないのか。

まあ、それだけの事をしたんだからな。

『白い龍』が介入し、最終的に事を

収めた形になってしまったけどね。

自分達の組織の者が起こした暴動は

自分達の組織の者で收拾させる」

あの時、空から降ってきた「パニシング・ドラゴン白い龍」。

彼は既にバランス・ブレイカー禁手状態だった。

こちらは木場のみが到達している。

コカビエルにも歯が立たなかった

今の俺達が戦っても勝ち目はない。

更に強くないとな。

「近いうちに天使側の代表、悪魔側の代表、

アザゼルが会談を開くらしいわ。

なんでもアザゼルから話したいことがあるみたいだから。

そのときにコカビエルの事を謝罪するかもしれない

なんて言われているけれど、あのアザゼルが謝るかしら」

肩をすくめながら、リアス先輩が忌々しそうに言う。

豪胆 エゴの塊って話か墮天使の総督は。

三大勢力の代表者が一堂に集まるなんてとんでもないな。

そこで何を話し合うか俺には想像がつかないが、

今後の世界に影響が出そうだな。

「私達もその場に招待されているわ。

事件にかかわってしまったから、

そこで今回の報告をしなくてはいけないの」

「マジッスか!？」

リアス先輩の言葉にイツセーが驚く。

だが、俺だって驚いている。

各陣営のトップが集まる中に呼ばれてるんだからな。

すると、イツセーがゼノヴィアに訊ねている。

「…『パニシング・ドラゴン白い龍』は墮天使側なのか？」

「そうだ。アザゼルは『ロンギヌス神滅具』を持つ

神器所有者を集めている。何を考えているか

分からないが、ろくでもないことをしようとしているのは

確かだね。『パニシング・ドラゴン白い龍』はその中でも

トップクラスの使い手。

『グ神の子を見張る者』の幹部を含めた強者の

中でも四番目か五番目に強いと聞く。

すでに完全な禁フランス・ブレイカー手状態。

現時点でライバルの君よりも断然強い」

あの実力で四番目か…。

アザゼルは更に強いんだろうな…。

すると、ゼノヴィアの視線がアーシアに移る。

「…そうだな、アーシアアルジェントに謝ろう。

主がいけないのならば、救いも愛も無かったわけだからね。

すまなかつた、アーシア・アルジェント。

君の気が済むのなら、殴ってくれてもかまわない」

ゼノヴィアは頭を下げてる。

余り表情が変わらないからわかりづらいが、

初めて会った時の事を彼女は気にしていたのだろう。

「…そんな、私はそのようなこと

をするつもりはありません。ゼノヴィアさん。

私は今の生活に満足しています。

悪魔ですけど、大切な人に

大切な方々に出会えたのですから。

私はこの出会いと、今の環境だけで本当に幸せなんです」

聖母のような微笑みでアーシアは彼女をゆるした。

アーシアは本当にいい子だな。

神の存在を否定され、

一時的に精神の均衡が危なかったが、

俺とイツセーとリアス先輩が

接してなんとか元に戻ってくれた。

「…クリスチャンで神の不在を知ったのは私と君だけか。

もう君を断罪するなんてことは言えやしないな。

異端視か。尊敬されるべき聖剣使いから、

異端の徒。私を見る目の変わった
彼らの態度を忘れられないよ」

そのとき、ゼノヴィアの瞳に少しだけ
悲しみの影が映った気がした。

「では、私は失礼する。この学園に転校するにいたって、
まだまだ知らねばならないことが多すぎるからね」
部室を後にしようとするゼノヴィア。

「あ、あのー！」

そのゼノヴィアをアーシアが引き止めた。

「今度の休日、皆で遊びに行くんです。

ゼノヴィアさんもご一緒にいかがですか？」

屈託のない笑顔で言うアーシア。

ゼノヴィアは少しだけ驚くように目を見開くが、
直ぐに苦笑する。

「今度機会があればね。今回は興が乗らないかな。ただ」
「ただ？」

首をかしげるアーシアにゼノヴィアは笑顔で問う。

「今度、私に学校を案内してくれるかい？」

「はいー！」

アーシアも笑顔で答える。

ゼノヴィアの笑顔を初めて見たが、

不思議な子だが悪い奴じゃないと思うな。

「我が聖剣デュランダルの名に懸けて。

そちらの聖魔剣使いとも再び手合わせしたいものだね」

「いいよ。今度は負けない」

「その時はそちらのクウガとも手合わせしたいな」

「いいぜ、また手合わせしような」

俺達は笑顔で返答する。

それを確認するとゼノヴィアは部室を後にした。

木場の全身から自身と共に

何か力強いものを感じる。

あの場所で起きた出来事が

こいつを劇的に変えたんだろうな。

ポン！

リアス先輩が手を鳴らす。

「さ、全員が再びそろったのだから、

悪魔の活動も再会よ！」

『はい！』

全員が元気よく返事する。

その日、久しぶりに俺達は部室で談笑した。

第三章 登場キャラクター

グレモリー陣営

○兵藤 祐介：本作主人公

駒王学園2年生

役割：『兵士^{ポイン}』

種族：転生悪魔

人間だったが、殺されたことで悪魔に転生した。

大昔に居た民族のベルトを手に入れて、

平凡な日常が一変してしまった。

悪魔となり異形の怪物と戦ってばかりの為

日常の学園生活を大事に思っているが、

遂に知人にクウガの姿を見られてしまう。

能力：『クウガへの変身』

①グローイングフォーム

ユウスケがベルトの力を受け継ぎ始めて変身した姿。

未完成故に弱く、戦いの為の姿ではない為、

最弱のフォームである。

S P E C

身体能力は赤のクウガの半分程度

②マイティーフォーム

真紅のボディで、

パンチやキックなどの

肉弾戦を得意としている。

クウガの基本形態。

打撃の効かない相手に

苦戦を強いられることも

S P E C

パンチ力：約5t

キック力：約15t

ジャンプ力：15 m（ひと跳び）

走力：5・2秒（100 m）

視力：人間の数十倍

聴力：人間の数十倍

必殺技：マイテイキック（威力は約30 t）

③ナイトフォーム

ベルトが瑠璃色に輝き、

ボディが群青色に変化し、

腕、肩、脚に騎士の鎧が追加された姿。

悪魔の『騎士』の特性である。

高い速度と

二本の直剣『ナイトソード』

を駆使して戦う。

S P E C

パンチ力：約3 t

キック力：約10 t

ジャンプ力：15 m（ひと跳び）

走力：5・0秒（100 m）※加速時は1・8秒

専用武器：ナイトソード

必殺技：サイクロンスラッシュ

○兵藤 一誠：原作主人公

駒王学園2年生

役割：『兵士』^{ポイン}駒七個分

種族：転生悪魔

学園では嫌われ者で

変態で有名だが

熱い心を持ち

いざというときには

便りになる熱血漢。

スケベ心が神器の
パワーアップに
繋がっているのか
不思議な理由で

パワーアップをはたす。

神器：『ブリステッド・ギア赤龍帝の籠手』

かつて暴れた二天龍の片割れ

ウエルシユドラゴン、ドライグを宿す籠手。

能力は持ち主の能力を時間経過と共に倍加していく。

神をも殺せる神器『神滅具』の一つ

倍加の上限は持ち主の実力による。

イツセーの願いに応えて、

仲間に譲渡するタイミングを

教えてくれるようになった。

赤龍帝の籠手の能力

Boost：音声と共に10秒毎に力を倍加する。

Burst：倍加の限界を超えてしまい。

音声と共に貯めた力が霧散してしまい、

反動で身体能力が低下してしまう。

Explosion：音声と共に倍加のカウントを止めて、

それまでに倍加した力で戦う事ができる。

『ブリステッド・ギア・ギフト赤龍帝からの贈り物』

イツセーが勝利を願ったことにより発言した

第二の能力。蓄積した倍加能力を他人に譲渡する。

Transfer：音声と共に倍加した力を他人に譲渡する。

『ブリステッド・ギア・スケイルメイル赤龍帝の鎧』

赤龍帝の籠手の禁じ手
全身を覆う龍を模した鎧。
時間経過の制限が無くなり
一瞬で限界まで倍加し、
使用、譲渡が可能となった。
本来禁じては強い意志が切っ掛けとなり、
類まれなる運により至ることが出来る形態だが、
ドライブと取引を行い。
片腕を代償に時間制限付きで発動した。

技：洋服崩壊ドレスブレイク
イツセーの欲望が形となった技。
女性の体に触れて魔力を流すことで、
相手の装備を破壊する。
衣服も含めて破壊するので、
女の敵と仲間からも言われる始末。
だが防御魔法、装備の強度等は無視できるので、
大分強い技である。
弱点としては触れないと発動できないことだ。

○リアス・グレモリー

駒王学園3年生

役割：『王』^{キング}

種族：生来の悪魔

オカルト研究の部長であり、
祐介達を転生させた悪魔。
冥界の貴族グレモリー家の跡取り
人間界では欧米からの留学生として振舞っている。
真紅の長髪が特徴で、成績優秀、容姿端麗、
まさに貴族の振る舞いで人気も高い。

また、負けず嫌いで、

親友のソーナとの球技大会での試合では人目も気にせず本気で勝負をしていた。

戦闘面では生まれ持った滅びの魔力を使い。

『紅髪の滅殺姫』と呼ばれている。

○木場 裕斗

駒王学園2年生

役割：『騎士』

種族：転生悪魔

学園一の爽やかイケメンで、

リアスを守る騎士。

柔らかい物腰で頭も良い完璧超人。

魔剣を生み出す神器を持ち

速度を活かしたテクニクタイプ

の剣士で、騎士としての誇りを持つ。

元々協会で聖剣エクスカリバーの適正

候補者として育成されていたが

適正が無かった為、

仲間と共に殺処分された過去を持ち。

悪魔として転生したあとも

聖剣に並々ならぬ憎しみを持っている。

神器：『魔剣創造』

自身が思い描いた魔剣を

自由に生み出すことが可能である

だが、伝説上の魔剣に匹敵するものは

生み出せない

『双覇の聖魔剣』

聖剣因子を取り込み、同志たちの想いを受けた木場

の神器が至った、亜種の禁手

本来交わるはずのない聖と魔の力を併せ持つ

聖魔剣を創造する。

この聖魔剣もまた各種の魔力を与えることができる
頑強さは使い手の心次第。

本気ならば四本のエクスカリバーを結合させたもの
さえ破壊できる。

○姫島 朱乃

駒王学園3年生

役割：『女王』クイーン

種族：転生悪魔

黒髪ポニーテールで清楚な振る舞いで
学園では人気がある。

他の眷属からも頼りになる女性だが、
ドが付くほどのSで、

リアスからも究極のSと言われるほど、
眷属内でもトップクラスの魔力で、
敵を甚振りながら高笑いする一面を持つ。

○アーシア・アルジェント

駒王学園2年生

役割：『僧侶』レノン

種族：転生悪魔

高位の神器を宿していた為
堕天使に利用されて殺されたが、
リアスに悪魔へと転生してもらう。

金髪碧眼の美少女で誰にでも優しい。
学園でも人気があり

仲の良いイツセーが恨みを買ったりしている。
兵藤家に居候しており、

祐介達の両親からは娘の様にかわいがられている。
戦闘では戦うことは出来ないが、

貴重な回復要員である。

神器：『聖母の微笑み』トワイライト・ヒーリング

あらゆる傷を癒す能力があり、
他の回復用の神器と違い
種族を問わず癒すことが可能な為
教会を追放される原因にもなった。
強力だが、制限も多く、
至近距離でないと効果がない。

○搭城 小猫

駒王学園1年生

役割：『戦車』^{ルック}

種族：転生悪魔

駒王学園のマスコットの存在なロリ娘
小学生にしか見えない小柄な体格から
一部の生徒に人気がある。
何を考えてるのか分からない寡黙な性格で、
何かを食べていることが多い食いしん坊キャラだ。
戦車の能力を活かした怪力で戦う。

シトリー陣営

○ソーナ・シトリー

駒王学園3年生

役割：『王』^{キング}

種族：生来の悪魔

駒王学園生徒会長。

人間界では「支取蒼那」を名乗っている。
スレンダーな体型で、
日本人離れした美貌を持つ黒髪の少女。
匙からは「厳しくて厳しい」と言われており。
リアスとは親友で同じく魔王の妹である。

○匙 元士郎

駒王学園2年生

役割：『兵士』ポイン 四個分

種族：転生悪魔

元は人間で、ソーナを主として悪魔に転生した主であるソーナに好意を抱き、

ソーナとできちゃった結婚することを夢見ている。

イツセーとは悪魔に転生した時期が同じ同期であり、嗜好や思考が似通っている。

イツセー達と知り合った当初は、

彼が駒1つ分程度の転生悪魔であると

勘違いしていたことと

変態3人組ということで見下していたが、

神滅具を宿して駒8つ分の価値を持っていることを

知ると嫉妬心を抱くが、木場の過去を知り

自身の夢を打ち明けたことがきっかけで親しくなっている。

『アフソフンション・ライン黒い龍脈』

黒いトカゲの頭のような姿をした神器で、

口から触手を出すことができる。

この触手は、つなげた物体の間でのエネルギーの

移動を行うことが可能。

エネルギーを吸収して弱体化させることができる。

新聞部

○大空 奈美

駒王学園3年生

所属：新聞部 部長

種族：人間

オレンジ色のロングヘアの美少女

ユウスケと同じ新聞部の部長

ユウスケが悪魔とわかっててもこれまで通り
接してくれる優しい女性

また特ダネに目が無くよくユウスケを振り回している
ちなみに三大お姉さまの一人である

○服部全蔵

駒王学園3年生

所属：新聞部

種族：人間

いつも亜麻色の前髪で目が隠れていて、
常にマフラーを巻いている変人。

自称忍者を語っており、

身体能力は高い。

だが、尻が弱点であり

球技大会のドッチボールでは

そこを当てられて退場してしまう。

学園生活でも良く腹を壊して

トイレにこもりユウスケに助けを求める。

ユウスケを自身の忍者隊にいれようと

画策している。

○猿飛 あやめ

駒王学園3年生

所属：新聞部

種族：人間

淡い紫色のロングヘアにメガネをかけた女性。

忍者を語っているが、実力は本物で、

その身体能力を活かしてとある生徒の

ストーリーカーをしている。

○薄井 和義

駒王学園2年生

所属：新聞部

種族：人間

情報収集が得意で、
新聞部ではその能力を活かしている。
とある事情で声を出すことをせず、
手元のパソコンで合成音声ソフトを使い会話する。
運動が苦手であり、球技大会では
情報収集に勤めていた。

○吉原 月詠

駒王学園2年生

所属：新聞部

種族：人間

金髪を後ろでまとめ前髪を簪で留めている。
顔の左側には過去の事故のせいで
縦横二本の大きな傷がある。

それでも、学園の上位に入る美人である。
彼女は何故か古いこと使いで喋るが、
婆様の喋り方が写つたらしい。

忍者コンビの影響で

何故か制服の裏に苦無を隠し持っている。

○奈良 シカマル

駒王学園1年生

所属：新聞部

種族：人間

IQが高く成績はトップに入ることもある。
そのめんどくさがりな性格で
何事においてもやる気がない
成績は中間ぐらいを常にキープしており、
卒業の為の最低限を意識しているようだ。
奈美に続いてクウガの姿を知った人物だ。

○秋雨 チョウジ

駒王学園1年生

所属：新聞部

種族：人間

小太りでハリネズミのような逆立った茶髪で糸目が特徴の男子生徒で見た目に反して運動神経は良い。良くポテチを食べているところを目撃される。

デブと呼ばれることを嫌い

言った相手は誰であろうとタツクルする

変わった一面を持つ。

○山中 イノ

駒王学園1年生

所属：新聞部

種族：人間

金髪の長いポニーテールが特徴の女子生徒。

シカマルとチョウジとは幼なじみで

よく三人でいることが多い。

不良生徒である二人を気に掛けている。

協会関係者

○紫藤 イリナ

聖剣使い

所属：プロテストアント

種族：人間

快活な栗毛ツインテールの美少女

ユウスケとイツセーとは幼なじみ

イツセーからは男と勘違いされていた。

ユウスケとは今でもメールや電話での

やり取りをしていた。

まれたエクスカリバーを追ってゼノヴィアと共に来日

リアスに対し介入無用を進言し、

イツセーたちの協力にも否定的ではあったが

トオドとの戦闘でユウスケを庇い戦線離脱する。

戦いのあとに悪魔に転生したゼノヴィアとは

半ば喧嘩別れの形でヴァチカンへ帰還する。

『エクスカリバー・ミミック擬態の聖剣』

イリナが所有していた、七振りあるエクスカリバーの一つ
普段は紐状だが、形状を自在に変化させる
特性があり実体は日本刀型

戦闘中でも尖端を伸ばす攻撃が可能。

○ゼノヴィア

聖剣使い

所属：カトリック

種族：人間

青髪のショートヘアに緑色のメツシュを施している。

鋭い目のボーイツシュな容貌である。

イリナの相棒として来日した。

悪魔に対して、敵対的態度を取り、

特に教会関係者から悪魔転生したアーシアを魔女呼ばわりした。

コカビエルから神の不在を知り。

教会からも異端使あつかいされたショックにより

自棄になり悪魔へと転生した。

『エクスカリバー・デストラクシオン破壊の聖剣』

ゼノヴィアが所有していた、七振りあるエクスカリバーの一つ
破壊力に特化されており7本中最大の攻撃力を誇る。

ゼノヴィアが悪魔へと転生した際に

イリナへと渡している。

『デュランダル』

エクスカリバーと並び称されるほどの伝説の聖剣で、
青い刀身の剣。

斬れ味だけなら最強だが、使い手の言うことを

聞かないじゃじゃ馬で、必要以上の破壊を周囲に与える

危険極まりない代物で普段は異空間に封印している。

墮天使陣営

○コカビエル

墮天使幹部

所属：神の子を見張る者

種族：墮天使

ウエーブのかかった長い黒髪と10枚の黒い翼が特徴。

黒いローブのようなものを着用している。

数少ない武闘派幹部の1人。異常なほどの戦争狂であり、

先の大戦後に行動を起こそうとしない

アザゼルやシエムハザに業を煮やし、

天使・墮天使・悪魔による

三つ巴の戦争を再度引き起こすべく暗躍する。

○バルパー ガリレイ

皆殺しの大司教

所属：墮天使

種族：グロンギ

コカビエルに協力している眼鏡をかけた老人。

本当の名は『ズ・トオド・レ』

皆殺しの大司教という異名をもつ。

かつての聖剣計画の責任者。

自分を追放したグロンギ族への復讐のために

コカビエルと結託するが、

木場とユウスケのタッグに倒される。

○フリード セルゼン

はぐれ悪魔祓い

所属：墮天使

種族：人間

白髪をした人間の少年であり、

言動は下品極まりなく、

罨り殺しを好む残虐性をもつ。

バルパーから渡された

因子によりエクスカリバーを駆使する。

○白龍皇

所属：墮天使

種族：人間？

コカビエルとの戦いに介入した人物。

名前は不明で『神滅具』ロンギヌスである

『白龍皇の光翼』デイベイン・デイベイディングを持つ。

赤龍帝とは対となる存在であり

イツセーとは違い既に禁バランス・ブレイカー手となっている

『白龍皇の光翼』デイベイン・デイベイディング

かつて暴れた二天龍の片割れ

バニシングドラゴン、アルビオンを宿す光翼。

能力は触れた相手の能力を時間経過と共に半減していく。

神をも殺せる神器『神滅具』の一つ

白龍皇の光翼の能力

Divide：音声とともに、10秒ごとに触れた者の力を半分にする

その他

○奈良 シカク

種族：人間

シカマルの父親

町の小児科の病院を営んでいる。

顔には複数の傷があり

よく子供に怖がられている。

○桐生 藍華

駒王学園2年生

種族：人間

ユウスケのクラスメイトで、アーシアの友人。

三つ編みの眼鏡女子で、誰とでも打ち解けられる性格。

変態3人組のことは嫌っていない。

情報通で、勘が鋭い。

○松田

駒王学園2年生

種族：人間

イツセーの友人で、変態3人組の1人。
丸刈り頭の男子生徒。

身体能力が高く、

一見すると爽やかなスポーツ少年だが、
日常的にセクハラ発言をする。

○元浜

駒王学園2年生

種族：人間

イツセーの友人で、変態3人組の1人
眼鏡を掛けた男子生徒。

また眼鏡を取ると戦闘力が激減する。

松田とは違い、運動能力に乏しい。

番外編 異世界とのクロスロード 「手裏剣戦隊編」
第39話 「手裏剣戦隊」

俺達は休日を利用して

アミューズメントパークへ来ていた。

今日は新聞部とオカルト研究部の親睦会

みたいなもんだ、

その実はアーシアや小猫ちゃんに友達を増やして

欲しいというお節介だがな。

今日呼んだ面子を紹介しよう。

新聞部からは

情報収集なら右に出るものはいない

スイツチこと薄井 和義

クールビューティーな我らが姉御

吉原 月詠

やる気は無いが、頭脳は天才！

奈良 シカマル

その体はデブではないポツチャリ系だ

秋雨 チョウジ

新聞部の苦勞人、1年生人気トップ3

山中 イノ

そして、オカルト研究部は

学園一のハンサム王子

木場 祐斗

学園のマスコット

搭城 小猫

学園のアイドル

アーシア・アルジエント

それとクラスメイト

桐生 藍華

あと、誘うのを完全に忘れていた。

学園の変態三人組その一

兵藤 一誠

一誠の願いで追加で参加。

学園の変態三人組

松田&浜元

この13人で今日は遊ぶぞ。

さて、追加参加の二人はと言うと。

「すみませんしたー!!」

二人揃って土下座していた。

なぜこうなったかと言うとな。

二人が遅刻して三十分待ち惚けをくらったからだ。

理由は寝坊で昨日は楽しみで寝るれなかつたそうだが、

到着そうそう、イツセーと桐生の二人から

拳を食らっていたから俺からはなにも言うまい。

ちなみに、匙も誘ってみたが、

「会長から異性交遊を禁止されているんだ」と

涙を流しながら、断られた。

「さて、遅れてた二人は到着したから

さっそくボーリングに行こう

今日は楽しむぞ!」

『おー!』

—●—

「いやあ、まさか四ゲームも遊ぶとはなあ」

俺達はボウリングを堪能した。

無駄に体力を使った気がする。

「たまにはみんなアクティビティもいいもんだな」

スイッチも思いのほか楽しんでいた。

投げた球の半数がガーターに飲み込まれていたがな。

「たしかにこういうのも悪くないっすね」

シカマルも遊ぶときはまじめに遊んでいた。だが予想外だったのはチョウジだ。

玉の扱いがうまいのか、

何度もストライクを取っており、

4ゲームとも一位を取っている。

「ボウリングって初めてやったけど、

楽しかったね」

ポテチを片手にこのセリフだ。

初めてであればとは恐れ入るぜ、

小猫ちゃんも楽しんでくれたようで、

素の力も強い彼女は、

ピンを壊すんじゃないかとハラハラする

場面もあったが、何とか無事に終わった。

ゲームよりも皆からお菓子を貰って、

餌付けされている様子はほっこりした。

「どうだ、アジア皆との

ボウリングは？」

「皆さんで遊びに行くのは

はじめてで、分からない事もありませんでしたが、

とても楽しいです」

俺の質問に笑顔で答えるアジア。

彼女の笑顔が眩しい。

それに服装もいつもの恰好と違って、

桐生がプロデュースして、

今日はゴスロリ衣装に身を包んでいる。

この姿を見た時、

桐生に無言でサムズアップを送った。

「よしーこの後は、カラオケだ！

皆で歌うぞー！」

イツセーがはしゃいで俺達を先導している。

「歌っていつてもどうせ、

ドラグソ・ボールメドレーだろ？」

「良いじゃねえか！楽しめば」

俺が、イツセーと話していたその時、
グラツ。

強い眩暈が俺を襲う。

何だ…。これは。

眩暈は直ぐに治まった。

「ユウスケさん…」

アーシアの苦しそうな声が聞こえる。

そちらへ向けば、

アーシアが頭を押さえて、座り込んでいた。

「大丈夫か？アーシア」

「はい、大丈夫です」

アーシアの顔色は悪いがしばらく休めば

問題ないだろう。

流石に気分までは神器では治せないからな。

「イツセー…アーシアを休ませたいから

ちよつと休憩しよう」

俺はイツセーに声を掛けたが、

反応がない。

振り向けば俺達意外がいなくなっていた。

嘘だろ今の一瞬ではぐれたのか!?

「ユウスケさん、皆さんは何処へ行っただんですか？」

はぐれた、いや違う。

目を離したのは一瞬だ、

そんな生易しいものじゃない。

「とにかく皆を探そう」

「はい」

俺はアーシアを立ち上がらせて歩きだそうとした。
その時、

『キヤーツツ!!うわぁーツツ!!』

悲鳴や叫び声が聞こえた。

「なんだ!？」

なにか騒ぎが起きたようだ。

「ユウスケさん、もしかして皆さんが

何かに巻き込まれたんじゃない?」

アーシアは不安そうに

俺の服を掴んでいる。

「よし、とりあえず騒ぎの方に行ってみよう」

「はい!」

俺とアーシアは駅前の広場へとやってきた。

「なんだよ…これ?」

「そんな…」

『ジツパ!』

『ゾウヒョー!』

そこでは、青い鎧を着て頭に笠を着けた

足軽のような怪物が手に持った槍で

人を襲っていた。

「とりあえず他の人を避難させよう」

「はい!」

俺とアーシアは逃げ遅れた人を逃がしながら。

はぐれた皆がいなか探していた。

「皆さん!早く逃げてください」

「慌てないで、こちらへ!」

俺は怪物を殴って倒しながら

避難誘導を続けていた。

「一体一体はそこまで強くないなこれなら」

「ユウスケさん、この辺りの人達は全員

避難が終わりました」

「よし、ここらの怪物は片付いたから

俺達も避難しよう皆が心配してるだろうしな」

すると、遠くから風を切る音が聞こえてきた。

「危ない！」

「きゃっ！」

俺がアーシアを抱えてその場を離れると、先程まで立っていた地面に切り傷が生まれる。

「おいおい、せつかく良い感じにオソレが集まってたっていうのに邪魔するのはどこのどいつだよ」

声の方へ向けばそこにはチェーンソーが鎌のように湾曲した腕をした化け物だった。

「また、変なのが現れたな。」

「お前はグロンギ族か？」

「知らねえな、俺様は牙鬼軍団の妖怪カマイタチ様だ！」
妖怪!?

また、とんでもないのが現れたな。

俺はアーシアを守るためにベルトを出現させると、

「そこまでだ!!」

誰かの声が響き渡る。

そちらへ振り向けば六人の男女が

建物の上に立っていた。

それぞれ黒い忍び装束を着ており。

色とりどりの差し色が目立つ。

「きさまらは!!」

カマイタチは彼らを見ると驚きの表情を見せる。

俺とアーシアも彼らを見て驚いていた。

「あれはイツセーさん」

アーシアの言うとおり黒に赤の装束に身を包んだ。イツセーがそのなかにいたのだ。

あいつ、なにやってんだ？

よく見れば、他の面子も知る顔だった。

黒と青の装束を身に包む服部先輩。

黒と黄色の装束に身を包むスイッチ。
黒と白の装束に身を包む月詠。

黒と桃色の装束に身を包む猿飛先輩。
だが、それよりも驚きの顔があった。

「あ、あれは…」

「俺?!」「ユウスケさん!!」

そうイツセーの横には

もう一人の俺が黒と金の忍び装束に身を包み立っていた。

「もう一度、俺達が倒してやるぜ！」

行くぞ！皆！」

『おう!!』

イツセー達が刀を取り出すと、
柄の部分にそれぞれのカラーの
手裏剣を取り出す。

『アカニンジャー手裏剣!』

『アオニンジャー手裏剣!』

『キンジャー手裏剣!』

『シロニンジャー手裏剣!』

『モモニンジャー手裏剣!』

そのを刀の柄に取り付ける。

もう一人の俺は

ハンバーガーのような機械を取り出して、

星形の手裏剣を取り出した。

『スターニンジャー手裏剣!』

そして機械に取り付ける。

『ザ・変化!』『ザ・チェンジ!』

『ニン・ニン・ニン・ニン・ニン・ニン・ニン・ニン・ニン!』

ニン・ニン・ニン・ニン・ニン・ニン・ニン・ニン!』

「ニン」手裏剣変化!!」「ニン」

全員が手裏剣を回転させる。

六色の手裏剣が六人の回りを舞い踊る。

『アカジャー！』

『アオジャー！』

『キジャー！』

『シロジャー！』

『モモジャー！』

『スターニンジャー！』

回りを舞っていた手裏剣が六人のスーツへと変化する。

『WAO！』

「暴れて天晴れ！アカニンジャー！」

「轟け八雲！アオニンジャー！」

「煌めきの凧！キニンジャー！」

「一片風花！シロニンジャー！」

「揺らめく霞！モモニンジャー！」

「彩りの星！スターニンジャー！」

「忍びなれども忍ばない！」

「忍びなれどもパーリナイ！」

ギギイイイインツツ！！

もう一人の俺がギターを鳴らす

『手裏剣戦隊！ニンニンジャー！』

ドカアアアインツツ！！

六人がポーズを決めると、後ろで爆発がおこった。

「忍ぶどころか」

『暴れるぜ！』

いや、忍べよ。

すると、六人は建物から飛び降りる。

「よしや！行くぜ！」

イツセーがテンションを上げて突撃をかまそうと
したとき、イツセーをもう一人の俺が止める。

「待ってくれイツセー。先ずは逃げ遅れた人の

避難が先でしょう」

ポンツ！

「それもそうだな」

イツセーは手をたたき納得する。

「おーい、その人達！」

こいつらは俺達が相手するからすぐ逃げてくれ！

つて、ええええええツツ！ユウスケがもう一人いる!？」

イツセーが俺に気づいて驚愕している

「妖怪の変化か？」

服部先輩が俺に剣を向けて警戒する。

「どうなんだ？あやめ姉」

イツセーが猿飛先輩に訪ねる。

「うーん、彼からは妖気は感じられないわね」

「だが、ここまでそっくりなのは可笑しいだろ」

だいぶ怪しまれてるな、

どうやって誤解をとくかな…。

「まって下さい！ユウスケさんは

怪しい人でも、妖怪でもありません！」

アーシアが前に出て手を広げ俺を庇う。

「ユウスケさんは私を助けてくれた

恩人です！ひどい人ではないです！」

涙目で訴えるアーシア。

「ここはこの子を信じようぜ、

このままじゃ俺達が悪者みたいだし」

イツセーが他の皆を説得する。

「そうだなイツセーの言うとおりか、

とにかくあんたここは危険だ

逃げてくれ」

もう一人の俺は渋々納得し、

俺達に避難を促す。

「ありがとう。だけど、俺だって戦える

お互いに話したいことはあるだろうし

先ずはあいつを倒そうぜ！」

俺がカマイタチの方へ向くと

「ぐぬぬぬ、いつまでも俺様を無視しやがって
ヒトカラゲ共、こいつらをやっちまえ！」

『ゾウヒョー！』

「アーシアは離れててくれ」

「はい、ユウスケさん」

俺はアーシアが離れるのを見送ると
変身の構えを取る。

「変身！」

俺は赤いボディのクウガへと
姿が変わった。

「ええー！こっちのユウスケも変身するのかよ

よっしゃ！負けてらんねえ！燃えてきた！」

イツセーはテンションを上げてヒトカラゲと呼ばれた
奴らに突っ込んでいく。

「俺達も続くぞ！」

『おう!!』

服部先輩の掛け声に

俺達も続いて走っていく。

ザンツ！

ニンニンジャーが刀でヒトカラゲを、
斬りつけながら進んでいく。

ドカツ！

俺も殴り飛びしながら進んでいく。

「数が多いな、全兄、あやめ姉こいつで
一気に行くぜ！」

「ああ、わかった！」

「行きましょう！」

三人が金色の手裏剣を取り出して
刀に取り付けた。

『火の術』 『金の術』 『木の術』

『上級手裏剣忍法、熱々バーベキューの術』

三人が手裏剣を回転させる。

『メラメラジャー』

『キンキラジャー』

『モクモクジャー』

すると、目の前にいたヒトカラゲ達が

バーベキューの金網で焼かれていく。

「なんだこれ！」

「ふふふ、幻覚じゃよ

じゃが、食らえば立ち上がれなくなるだろうがな」

驚く俺に月詠が解説してくれる。

「俺だつて負けられないな」

俺はベルトに手をかざす。

「超変身！」

クウガのボディが群青色にかわる。

騎士の姿『ナイトフォーム』だ。

ユウスケは近くに落ちていた槍を手に取り

剣に変化させていた。

「いけるとは思ってたけど、

刃があれば変化できるのか」

そして、残像が見える速度で

ヒトカラゲ達を斬り捨てていく。

「おお、色まで変えられるのかよ！」

イツセーが俺の変化に驚いたようで、

肩を叩いてくる。

「ぬぬぬ、これでも食らえ！」

ヒトカラゲ達が次々やられる状況をみて

カマイタチがこちらへ斬撃を飛ばしてくる。

『水の術』

「そうはさせない、手裏剣忍法！鏡返し術！」

スイッチが金の手裏剣を刀に取り付けて回転させる。

『ザブザブジャー』

スイツチの前に水の楯が出現して、
カマイタチの斬撃を跳ね返した。

「足を止めるぞ月詠！」

「ああ！」

『木の術』『金の術』

二人も金の手裏剣を取り出して

月詠は刀にもう一人の俺は

ギターに取り付けた。

「手裏剣忍法、ツルツルツタの術！」

「手裏剣忍法、チェーンの術」

『モクモクジャー』

『キンキラジャー』

どこからともなくツタとチェーンが現れて、

カマイタチを拘束する。

「よっしゃ決めるぞ！」

イツセー達が刀に手裏剣を取り付け、

回転させる。

『ザ・技！ナンジャナンジャ？ナンジャナンジャ？』

全員が走りだす。

『一斉忍烈斬!!』

すれ違い様にカマイタチを次々斬りつける。

『忍者一閃』

「ぐあああ、またしても！」

ドカアアアンツ!!

カマイタチが爆発する。

『よっしゃ！忍ばずワツシヨイ!』

「ふう、とりあえず一件落着つてところか」

敵も倒し、一息いれたその時

『妖術、肥大蕃息の術』

女性の声が微かに聞こえた。

すると、倒したカマイタチから紫の炎が立ち上がる。
そして、カマイタチが巨大化していく。

「巨大になって、巨大なオソレを集めてやる！」

「うわあ、巨大化しやがった」

俺が巨大化したカマイタチに驚いていると、

「よっし、いくぜ！」

イツセー達が新たな手裏剣を取りつけそれを回転させる。

『手裏剣忍法！召喚の術！』

『ザ・召喚！ダレジャ？ダレジャ？ダレジャダレジャ？』

ダレジャ？』

すると、どこからともなく

五体のマシンが現れた。

赤い人型のマシン。

『シノビマル！』

青い龍型のマシン。

『ドラゴマル！』

黄色いダンプのマシン。

『ダンプマル！』

白色の犬型のマシン。

『ワンマル！』

桃色のリニアカーのマシン。

『ビュンマル！』

五体のマシンが現れたのを確認すると、

イツセーはもう一度手裏剣を回転させる。

『手裏剣合体！』

すると五体のマシンが変形していく。

ビュンマルがワンマルと合体して下半身へと変形する。

ダンプマルが右腕と胴体に変形する。

ドラゴマルが変形して左腕となる。

ダンプマルとビュンマルが合体すると、

シノビマルが胴体の操縦席に乗り込と、

巨大な手裏剣がシノビマルにかぶさり、
頭部へと変形する。

『シユリケンジン！』

五体のマシンが合体し巨大なロボットになってしまった。

「うおー！すげーロボになったぜ！」

俺は突如現れた巨大ロボに心奪われていた。

「よし、オレも！」

もう一人の俺がハンバーガーに新たな手裏剣を
取り付け回転させる。

『ザ・カモン！フーアーユー？フーアーユー？

ウ、ウォーオ！』

何処からともなく、

バイソンの頭をつけたバギーに乗った。

水色の人型のマシンが現れる。

『ロデオマル』

「今回は特別に一緒に乗せてやるぜ！」

「お、おい！」

もう一人の俺がそう言う俺の手を掴み

ロデオマルに乗り込む。

「ロボの中に入った!？」

「ハ！」

驚く俺に構わず、

もう一人の俺がギターを投げ壁に掛ける。

「バイソynchエンジ！」

ハンバーガーに取り付けた手裏剣を

もう一度回す。

すると、

バギーが変形していき、

車輪部分が腕と脚に変形し、

バイソンの頭が胸に合体する。

そして、ロデオマルが上部の操縦席に乗り込み、

巨大な手裏剣がかぶさり頭部へと変形する。

『バイソンキング』

二体のマシンが合体し、二体目の巨大ロボが誕生した。
「なあ、二対一とか卑怯だぞー！」

突如現れた二体のロボに対して、

カマイタチが騒ぎ出す。

「えー、卑怯かな？」

「まあ、ノリで出したが

もう一人の俺を乗せてやりたかったただけだし」

カマイタチの言葉にイツセーともう一人の俺が

話し合う。

「なら、一対一なら文句ないだろー！」

イツセーは『合』の文字が描かれた

手裏剣を刀に取り付け回転させる。

『キング手裏剣合体！』

掛け声と共にバイソンキングとシュリケンジンが

バラバラに分離する。

バイソンキングの手足がシュリケンジンの

手足に合体し、ダンプマルの上部にバイソンキングの

胴体が合体しそこに両腕が合体する。

そしてシノビマルとロデオマルがそれぞれの

操縦席に乗り込むと二つの巨大な手裏剣がロデオマルに

バイソンの頭と共に合体する。

『キングシュリケンジン』

俺達は他の皆と同じ操縦席へとやってくる。

「二体のロボが合体したあー！」

俺はロボの合体に興奮していた。

「これで、一対一だぜー！さっそく決めるぜー！」

『銀河破天荒斬り』

全員で刀を振り上げると、

ロボの持つ刀に光が集まってくる。

『破あ！』

刀を振り下ろすとロボがカマイタチを十字に切り裂く。

「くそ、こんなにあっさりと……」

ドカアアアアアアッアアン！

カマイタチはあっさりやられた事を悔やみ爆発した。

こうして、俺は突然巻き込まれた戦いは終わりを告げた。

だが、俺達はまだ気づいてなかった。

とんでもない事に巻き込まれたという事に。

第40話 「ニンニンジャー」

戦いのあと俺達は、

我が家へと向かっていた。

もう一人の俺がいた時点で

考えてはいたが、

やはりここは別の世界のようだ。

「じゃあ、二人は人間じゃなくて

悪魔ってことか？」

俺達の事情を話すと

皆興味津々に聞いていた。

「こちらにも悪魔がいるかは分からないが

向こうとは相違点が結構ありそうだな」

スイッチが俺達の話から

分析しているようだが、

スイッチが普通に話しているのが

違和感を感じるな。

「そちらの俺達はどんな感じなんだ」

「そうだな、大きな違いとしては

まずスイ、薄井は此方だと

常にパソコンで会話するな

過去の出来事が原因で

自分の声ではしゃべれない

あと眼鏡をかけてるな」

『えっ!?!』

皆が俺の話に驚愕していた。

「想像できないな、

和義はどちらかというと

パソコンは苦手で正文くんの

方が得意なのに」

「そうだな、俺には似てない

優秀な弟だよ」

スイッチは照れくさそうに
頬をかきながら答える。

「そうか、弟が…。」

だからこっちのスイッチは
パソコンでしゃべらないのか。

「他は、例えば私とか?」

考え事をしていると

猿飛先輩が訪ねてくる。

「そうですね、猿飛先輩は

こっちでも忍者らしいっすけど

その能力活かしてある生徒を

ストーリーしてますね」

「す、ストーリー!?!」

猿飛先輩は俺の話に驚愕していた。

「他はイツセー以外は代わり映えしないっすね」

「さつきから気になってたけど、

ユウスケはあやめ姉とか和義相手に

他人行儀だよな?」

「うーん、こっちはどうか分からないけど

薄井と吉原とはクラスメイトで

先輩二人は同じ部活っていう

関係だなイツセーは双子の兄弟だけど」

「イツセーは変わらないな

わっちと和義はイツセーとユウスケとは

親戚じゃ、全兄さんとあやめ姉さんは

じい様が弟子にと連れてきてからの

長い付き合いじゃな」

月詠が此方での関係を教えてくれる。

「そういえば、そっちの俺は違いがあるみたいだけど
どんな男なんだ?」

「イツセーはどんな世界でも熱い男なんだろうがな」
イツセーの質問に服部先輩が茶々をいれる。

「まあ、熱いところは変わらないけどな、

まあ、うん、変態だな」

『なんて!?!』

俺の言葉に全員が驚愕する。

「変態なんだよ、学園でも有名な

変態三人組の一人だな覗きでよく

しばかれてたよ。

最近では、触れた女性を全裸にする

技を開発してたな」

「最低だな」

月詠と猿飛先輩がイツセーを見ながら呟いた。

「いや、向こうの俺だから、

俺はそんな事しないよ」

此方のイツセーが慌てて否定する。

「ほら、我が家に着いたぜ

話はここまですべて早く中に入ろうぜ」

イツセーが話を切り上げ、

一件の家を指差した。

「は?なにこれ?」

「大きいですね」

俺とアーシアは驚いていた。

着いたそこは見慣れた一軒家ではなく。

立派な門がある。

大きなお屋敷だったからだ。

「なにこれって、我が家だよ」

「ここも違うのかうちは、

普通の一軒家だからな」

俺達が驚いて中に入ると

一人の男性が迎えてくれた。

「お帰り、みんな！」

「今日もお疲れ様！」

「現れたのは親父だった。」

「いやあ、イツセーも

立派な忍者になつてくれて

父さんも嬉しいよ！」

「ありがたいな親父！」

「もちろんユウスケだって

立派な忍者だと思うぞ！」

「ああ、俺だってラストニンジャを

目指してるからな！」

「こつちのユウスケも……

つて、ユウスケが二人いる！」

「グウ！こ、腰が！」

「父さんが驚きのあまりギックリ腰になつたようだ。」

「大丈夫ですか!?!お義父さん」

「アーシアがギックリ腰で倒れた親父に寄り添う。」

「ゴスロリの金髪美少女にお義父さんと呼ばれるなんて

これは夢に違いない」

「父さんは変わりにないようで安心したよ。」

「それがな親父、この二人は別の世界から来たみたいなんだよ」

「別の世界から！イタタタッ！」

「驚いた時のリアクションが腰に響いたようだ。」

「今治しますね」

『治す?』

「皆が疑問に思案中、

アーシアの神器が発動して、

親父の腰に淡い緑色の光が包む。

「おお、治った！」

「親父が立ちあがり、

治った腰を触りながら驚いていた。」

「アーシアさん今のつて？」

イツセーが驚きながら訊ねる。

「今のは私の『神器』です」

『セイクリッド・ギア？』

皆が驚愕してるところを見るに

こちらの世界には無いようだな。

『セイクリッド・ギア』
『神器』は此方の世界でも

選ばれた人に与えられたものだ。

アーシアの『聖母の微笑み』
トワイライト・ヒーリング

はどんな傷だろうと治療できる能力だ」

「すげーそんな能力持ってたなら引く手あまたじゃん」

イツセーが興奮して誉めていたが、

アーシアは複雑そうに顔を伏せる。

「アーシアは以前教会で聖女といわれていたんだが、

この能力が悪魔を治療できると分かると

魔女と罵って追放したんだ、

教会の人間からはアーシアは断罪する

対象にもなったことがある」

「え、あ、ごめん。おれ、何も知らずに」

俺の説明にアーシアが何故顔を伏せたのか察して

イツセーが謝罪する。

「いえ、もう大丈夫です。

私にはもう、兵藤家という自分の居場所もありますし

ユウスケさんのお陰で友達もたくさん出来ましたので」

アーシアは嬉しそうに話している。

「うん、うん、こっちの家も我が家だと思ってくれて

いいからね、そっちのユウスケも立派にそだってるんだね」

父さんは号泣していた。

見れば他の面子も男泣きしていたり

アーシアの境遇に思うところがあつたようだ。

「みんなのことも教えてくれよ

こっちの世界では妖怪が出るみたいだけど

あいつらは何者なんだ？」

「ああ、あいつらは以前倒した牙鬼幻月の部下だ」

「倒したってことは残党なんかか？」

「いや、一度倒した奴がもう一度現れたみたいなんだ」

一度倒した奴が復活するそんなこともあり得るのか

「大丈夫なのか？いずれはその幻月ってやつも

復活する可能性もあるってことだよな」

「それは分からないけど、たとえば復活しても

また倒してやるさ！」

「そういえば妖怪が巨大化するときに

女性の声が微かに聞こえてきたんだよ。

何かの忍術みたいなのを呟いていたんだが」

『なに!?!』

「女性の声ってことは誰かが

妖怪を復活させているって事か…」

「九衛門が使っていた、打出の小槌を

使っている奴がいるってことだよな」

イツセーの言葉にもう一人のユウスケが答える。

「九衛門ってのは？」

「以前俺達が倒した幻月の息子で

親父と一緒にじいちゃんの弟子だったやつさ

幻月が変わって天下統一を行おうとした奴だったけど

最後は改心して幻月を倒すのを協力してくれたんだ」

「あいつは、九衛門は家族が欲しかったんだよ。

ずっと孤独だったから。ラストニンジャに

なつてじいちゃんに認めて欲しかったんだろうな」

「私は親はいないのでユウスケさんのお義父さん達が

今では親のように思ってますが、

多分その九衛門というかたは、

親の期待に答えたかっただけだったんじゃないでしょうか」

俺達がアーシアの話にしんみりしていると。

『ガマガマガマガ』

「何事だ！」

突然部屋中に鳴り響くカエルの声に驚くユウスケ。

「妖怪が出たんだ！行くぞ皆！」

『おう！』

「俺も行くぞ！」

イツセー達が妖怪の出現を察知して飛び出していく

俺も続いて走り出そうとした

その時、

「待ってくださいユウスケさん！」

私も行きます」

「いや、アーシアはここで待っていてくれ」

「私ではお役に立てませんか？」

アーシアがうつむいて訪ねてくる。

「いや、そんなことはないよ。」

ただ敵も巨大化するような奴らだ

何があるか分からないから

「ここでまっつてくれないか？」

アーシアは納得していないようすが

「分かりました、頑張ってください」

笑顔が無理に作って俺を送り出してくれた。

アーシアに無理をさせているとこに

心が痛むが彼女が傷つくよりはましだと

自身に言い聞かせて俺はイツセー達を追いかける。

—○●○—

ユウスケ達が出ていき、一人残されたアーシア。

「やはり、私ではお役にたてないのでしょうか」

アーシアが一人落ち込んでいます。

『なら、僕が力を貸して上げよう』

声のした方に振り返るとそちらには神棚が置かれていた。

「誰ですか？」

『僕が君の願いを叶えてあげるよ』

すると、神棚に置かれていた緑色の手裏剣が

光を放った。

—○○—

イツセー達に着いていき、街までやってくると

昨日のヒトカラゲにた頭に鬼瓦を着け、

白い羽織を着た妖怪が街を襲っていた。

「キヤアアアアッ！」

声の方へ向けば一人の女性が

いままさに襲われようとしていた。

「はあッ！」

イツセーともう一人のユウスケが妖怪を切り捨てる。

「大丈夫ですか？」

服部先輩が近づき女性に声をかける。

「はい、大丈夫です」

「逃げてください、こいつらは俺達が倒しますので」

俺達は女性を背に庇い、妖怪達に向き直る。

「ふふふ、隙ありじゃ！」

ブンッッ!

突如女性の手に薙刀が現れて、

雷を纏い振り払う。

『なッッ!』

全員間一髪で避けたが、

危ないところだった。

「くうっ! あともう少しのところぞ!」

女性が扇子を取り出して踊り出すと、

その姿が女面の妖怪の姿へと変化した。

『有明の方!』

イツセー達は相手が何者か知っているようだ。

「知っているのか?」

「牙鬼幻月の奥方じゃ、一度倒したはずなんじゃが」

俺の質問に月詠が答える。

「おそれの力で甦ったのじゃ!」

それに甦ったのは妾だけじゃないぞ!」

「よう、忍者ども!久々の再会を

お前らの苦痛で祝おうぞ!」

次に現れたのは、赤い鬼面の妖怪だった。

『牙鬼萬月まで復活したのか!』

「また新しいのが現れたか!」

「奴は牙鬼幻月の息子の萬月だ!」

スイッチが奴の招待を教えてください。

「良いぞ!萬月鳥肌ものの登場じゃ!」

有明の方が喜び萬月に抱きつくもすぐに振り払われる。

「萬月や、このまま牙鬼

ファミリー復活の義を行おうぞ!」

「うるせえ!ババア!そんなもんは後回しだ!

忍者どもへの復讐が先だ」

「おおお、この腕白ぶり、まさに萬月じゃ!」

「前の俺と同じと思うなよ!」

萬月が空に手をかざすと巨大な火の玉が出現する。

「死ね!忍者共!」

萬月の放った火球が地を削り迫ってくる。

「ふん!」

変身もしていない無防備な俺達に当たる寸前

誰かが間に入り火球を一刀両断する!

『ツッ!』

その人物は黒と緑色の忍装飾に

身に包んだアーシアだった！

『アーシアちゃん』

驚く俺達にアーシアは振り返り答える。

「違うよニンニンジャー、僕の声を

忘れたのかい？」

『十六夜九衛門？』

俺は突然の出来事に声が出なかった。

アーシアの顔で低い声がでたのが衝撃的だった。

「兄者だど!?何故そのような姿でここにいる！

まさか…姉者だったのか！」

「僕は男だ！もう一人のユウスケが連れてきた

この少女に僕が取り付いただけのことさ」

「十六夜九衛門、アーシアは無事なんだよな」

「大丈夫ですユウスケさん、

この人の力を借りれば私も戦えます！

一緒に戦わせて下さい！」

アーシアの表情がいつも通りになり

俺の質問に答えてくれる。

アーシアは戦いに参加できないのが悔しかったのか。

「ああ、一緒に戦おう！」

「そういうことだったのか」

「久しぶりだねスターニンジャー

それにラストニンジャの孫達」

「何のつもりだ？」

突然現れた九衛門に服部先輩が問いかける。

「簡単な話だ、君達のせいで成仏できなくてね

君達に借りた借りはここで返させて貰う！

手裏剣忍法！風雷業火の術！」

アーシアが印を結ぶと手のひらから雷を纏った炎の竜巻が

現れて萬月達を襲う。

「ええい、死んでも邪魔な奴だ、

ぐあああツツ！」

炎の竜巻はヒトカラゲ達を倒して萬月達も吹き飛ばす。

「忍者共！許せない！」

『フツツ！』

イツセー達が煙玉を地面に投げつけると、

俺達は建物の上に移動していた。

「てめえら！」「かかってこいやあ」

「妖怪共でてきやがれ！」

「ふん、酒呑童子！」

「鶴！」

「子泣き爺！」

「大百足！」

「天狗！」

萬月の一声で妖怪が新たに出現する。

「行くぜ皆！」

『おう！』

『ザ・変化！』『ザ・チェンジ！』

『ニン・ニン・ニン・ニン・ニン・ニン・ニン・ニン！』

「ニン・ニン・ニン・ニン・ニン・ニン・ニン・ニン！」

「ニニニ手裏剣変化！！」

「ニニニ手裏剣変化！！」

「変身！」

『アカジャー！』

『アオジャー！』

『キジャー！』

『シロジャー！』

『モモジャー！』

『ミドジャー！』

『スターニンジャー！』

『WAO』

「暴れて天晴れ！アカニンジャー！」

「轟け八雲！アオニンジャー！」

「煌めきの凧！キンジャー！」

「一片風花！シロニンジャー！」

「揺らめく霞！モモニンジャー！」

「彩りの星！スターニンジャー！」

「滾る十六夜！ミドニンジャー！」

「忍びなれども忍ばない！」

「忍びなれどもパーリナイ」

ギギイイインツツ！

『手裏剣戦隊！ニンニンジャー！』

「兵藤祐介またの名を仮面ライダークウガ！」

ドカアアアンツツ！！

「忍ぶどころか」

『暴れるぜ!』

「うるせえ! かかれ!」

『うおおおおお!』

「行くぜ!」

『はあ!』

俺達は一斉に妖怪たちに飛び掛かる。

キンツツ! キンツツ! キンツツ!

「お、いいの見つけ」

俺は落ちていたセンカラゲ達の剣を拾う。

「超変身!」

俺は直ぐにナイトフォームへと変身した。

「全蔵さん、ここは俺が引き受けるよ」

「え!?!」

キニンジャーが妖怪達を一人で相手するようだ、

「なら俺も手を貸すぜ!」

スターニンジャーが協力を申し出た。

「よし、任せるぞ二人とも、イツセー!」

「わかった! 行くぜ!」

アカニンジャーは子泣き爺を蹴り飛ばし

萬月達の元に向かう。

モモニンジャーとシロニンジャーも

酒? 童子を蹴り飛ばしアカニンジャーを追う。

俺とミドニンジャーも鶴を切り捨てて皆を追う。

「分かってるなババア」「はいよ」

「俺様の盾となり矛となれ」

「お前の為なら、母は喜んでなんにでもなって見せようぞ」

—○○○—

「はあ!」

キニンジャーが剣で酒? 童子を切りつけ

『雷マジック』

「ライトニングロックスター」

スターニンジャーが雷を纏った斬撃を
大百足と鶴に浴びせる。

『サンダージャー』

すると、妖怪たちが一か所に集まる。

「行くぞ、ユウスケ！」

「ロックなビートでいくぜ」

『風マジック』

『ザ・技』

「スターライト忍列斬！」

キンニンジャーとスターニンジャーは

妖怪達を竜巻に閉じ込め高速で連続斬りを放つ。

『グアアアアアアア』

ドカアアアアアアアアン！

「イエーイ！」

「ハイチーズ」

カシャツ！

—○○○—

「チエア！」

有明の方が雷を纏った薙刀を振るい

シロニンジャー・モモニンジャー・ミドニンジャー
の三人を相手する。

薙刀のリーチのせいで近づけずにいた。

「ハア！」

そんな中ミドニンジャーが薙刀を受け止め、
押さえつける。

「むうう、元狐の分際で敵に味方するとは！」

「ハアツ！」

二人が背後から有明の方を切りつける

「手裏剣忍法奥義！超絶十字砲火の術！」

ミドニンジャーが印を結ぶと

有明の方の全方位に赤い手裏剣が現れ
レーザーを発射する

「ぬあああ」

有明の方はこの攻撃をかわす事も出来ず
薙刀も落として倒れる。

「アレ行くわよツツキー」

「ああ、任せろ！」

二人が手をつなぐ

「七超手裏剣忍法奥義！」

「ニンタリテイ爆裂破」

二人の掌からとてつもないエネルギーが
発射され有明の方を吹き飛ばす。

「なんでこんなことにく」

—○○—

キンツキンツ

アカニンジャー・アオニンジャーと俺は
萬月と切り結んでいた。

『ハァー！』

三人相手に善戦していた萬月だったが、
三人の同時攻撃には対応できず、
膝を着く

「ユウスケお前の強さを見せてくれよ！」

「いいぜ、ちゃんとみとけよ」

「おっと待ってくれ、その前に俺から
行かせてもらおうぜ」

「うるせえ！」

萬月が炎を飛ばしてくるが、

俺達は剣ではじく

そして、アオニンジャーが前に出る。

「新技だ！超手裏剣忍法！ドラゴン変化の術！」

『ナンジャー！ナンジャー！ナンジャーナンジャー！』

ニンジャー！』

アオニンジャーが空中飛ぶと青い炎のドラゴンへと変化して萬月を襲う。

「次は俺だ」

俺は剣にオーラを纏わせ萬月に近づく

「サイクロンスラッシュ！」

そのまま両手の剣で斜めに切り払う

「おお、二人とも凄いな

よーし！俺も！」

『ザ・技』

「新手裏剣忍法奥義！

イケイケドンドン斬り！」

アカニンジャーは跳躍し一回転する勢いで萬月を

一刀両断斬りつける。

『忍者一閃』

「グアアアアアアア」 「ああ、萬月！」

吹き飛ばされた二人が一か所に集まり

皆が合流する。

「どうだ、俺の新技凄いだろ！」

「力は凄いがネーミングセンスは壊滅的だな」

アカニンジャーの技にスターニンジャーが突っ込む。

「え？そうかな？」

「なんなんだこいつ！前よりも

とんでもなく強くなってやっがる！」

「ユウスケ、俺達兄弟で行くぞー！」

「オツケーユウスケ」

「全蔵私達も行くわよ！」

「ああ！」

四人が走り出す

「兄弟忍列斬！」

「萬月危ない！」

アカニンジャーとスターニンジャーの

上からの落下斬りからの横薙ぎの攻撃を

萬月と有明の方が受けると、

「はあ、ペア忍列斬！」

アオニンジャーとモモニンジャーの二人に続いた

連続攻撃もまともに受ける。

「アーシア一緒にやらないか？」

「はい！ユウスケさん！」

「ふん、面白いね」

「魔力を雷に！」

「雷招来の術」

俺とミドニンジャーが

雷を萬月達に当て怯んだすきに

二人で斬りつける。

「最後は俺達か」

「ああ」

「スーパー忍列斬」

シロニンジャーとキニンジャーが分身し、

回転しながら萬月達に

弾丸の如く放たれる。

『グアアアアアアアッ！』

「二人ともかっこいい」

皆が二人を褒めていると

萬月が立ちあがる

「まだまだ!!かかって来やがれ」

「よーし、最後はみんなで決めるぞ！」

『ザ・技！』

『ハアッ!』

皆が空高く跳躍し、

落下の勢いに乗せて一斉に剣を振り下ろす

『手裏剣忍法奥義!一斉衝撃爆裂斬』

『忍者一閃!』

「盾になれって言ったろクソババア」

「すまぬぞ、萬月!大好き!」

「母上!!」

ドカアアアアアッアアン!

「よっしゃー!」

「じゃあ、みんなでやるか」

『忍ばずくワツシヨイ!』

皆で勝利の勝鬨を上げる。

「アカニンジャー!」

ミドニンジャーが有明の方が爆発した場所から

金色の小槌を拾いアカニンジャーへ放り投げる。

すると、変身が解けて

アーシアから金色の光が現れ狐面の男性が現れた。

「これで、借りは返したよ忍者の者達

ようやく成仏できるといふものさ」

「あの、力を貸してくれてありがとうございました」

満足げな九衛門にアーシアが頭を下げてお礼を言う。

「いいさ、僕は体を貸してほしかっただけだ

君の頼みはついでだよ」

「それでも、ユウスケさんのお役に立てて

嬉しいですよ」

「何言ってるんだよアーシア、

アーシアの力には何度も

助けられてきたぞ」

「彼女は守られるだけじゃない

自衛のための力はあるさ僕が保証するよ」

九衛門の言う通り俺は少し過保護だったのかもな

「お前も忍者に戻れて夢を果たさせたって事か」

「冗談じゃないそれはこれから先の話だよ

さざらばだニンニンジャー」

九衛門は天へと昇り消えてしまう。

「終わったな」

俺は全てが終わり安堵する

「もう一人の俺に在ったり

妖怪と戦ったり驚く事ばかりだな」

「そうですね」

「二人とも戦いも終わった事だし家に帰ろうぜ」

イツセーが俺達に声を掛けてくる

「そうだな」

「はい」

グラツ、

俺達が歩き出すとまた眩暈がして膝をついてしまう。

「大丈夫かユウスケ？」

「ああ、大丈夫だ、妖怪との

戦いで疲れたのかもな」

「はあ、妖怪？何の話だ」

「え、何の話って、アレ？」

周りをよく見ると

先程まで戦っていた場所ではなく、

カラオケに向かう際に眩暈を起こした

場所だった。

「は、夢だったのか？」

俺は今までの事が夢かと思った。

「いえ、夢じゃないですよ」

そう言うアーシアの方へ振り向くと

緑色の忍手裏剣が握られていた。

「そうか」

「おいおい、二人ともどうしたんだよ？」

「いや何でもない、心配かけたな」

「早くカラオケに行こうぜ」

「おう、早く歌いたいぜ」

「イツセーはそう言い先へ行く」

「ユウスケさんこれって」

「ああ、あいつらからの選別だな」

「向こうでの出来事は俺とアーシアだけの」

「大切な思い出にしような」

「はい」

「おい、早く来いよ二人とも」

「向こうでイツセーが手を振る」

「行こうかアーシア」

「はい！」

俺達は前へと進むのだった。

—○○●○○—

カタカタツカタカタツ

薄暗い研究室で、

かつてユウスケにスタンプを渡した男

『メモリー』がパソコンのモニターを睨んでいた。

「今回は彼が別の世界ではなく同じ世界のパラレルワールドへと
行ったのか。興味深いなやはり彼は面白い」

本来のクウガとは違う進化か、悪魔となった影響か？

例の『アレ』を完成させるためにはもっと情報が

必要だな。さて少しは休憩でもするかな」

メモリーは休憩の為に席を立つ。

パソコンの画面には

『クウガ：15%』の文字が写っていた。

第四章 停止教室のヴァンパイア 第41話 「魔王来訪」

とある雪山、吹雪の中二人の男性が佇んでいた。

「こんな寄り道はさせたくなかった」

「え？」

「君には冒険だけして欲しかった

ここまで君を付き合わせてしまった」

「ありがとうございます」

謝罪をする男に向かいお礼を言う青年。

「俺、良かったと思っっています。

だって、一条さんと会えたから」

「五代…」

グツツ！

五代さんのサムズアップに

一条さんもサムズアップで答える。

『五代さんに一条さん？』

これはなんだ…、夢、なのか？』

俺は吹雪のなか二人の様子を見下ろすように見ていた。

「じゃあ、見てて下さい。俺の変身」

五代さんが腰に手をかざすと、

ベルトが現れる。

だが、以前見たときとは違い、

中央の宝玉は漆黒に染まっていた。

五代さんが変身の構えを取り

ベルトのボタンを押し込む。

すると、ベルトに金色の装飾が現れて

五代さんの体に金色のラインが走る。

すると、五代さんの体が

黒い刺々しい姿へと変わってしまった。

『あれは…究極の闇!?!』

だが、以前俺が夢で見たときとは違い
目が赤くなっていた。

そして、五代さんは吹雪の中へと走り去ってしまった。
そして吹雪の中一人の男性が五代さんを待ち受けていた。

「なれたんだね究極の力を持つものに」

すると、青年は五代さんと良く似た姿へと変化した。

五代さんとは違い白い体に金色の装飾を纏った姿に、

『あれは以前夢で見た!?!』

二人は近づきながら互いに手をかざして
相手を発火させ、燃やしていた。

『超能力のパイロキネシスか?!』

クウガにこんな力があるなんて!?!

そして二人は同時に走り出し、

殴り会いを始める。

殴られた箇所からは鮮血が舞い。

真っ白な雪を赤く染めていく。

そんな殴り会いの中、

五代さんの放った一撃が相手のベルトに直撃する。

だが、相手も破損したベルトに構わず

五代さんに殴りかかり、

ベルトに一撃を貰う。

ベルトはひび割れ、

いまにも割れてしまいそうだった。

『五代さん!!』

それでも殴り会いを止めない二人。

そして、遂に両者とも変身が解けてしまい、

人間の姿のまま、

殴り会いを続ける。

五代さんは相手を殴るのも辛いようで

苦しそうな表情を浮かべる。

それに対して相手は
楽しそうに笑いながら殴っていた。
互いに体力も限界のようだ、
お互いの一撃が両者の頬に当たり、
二人とも鮮血を吐き、倒れてしまった。

「五代!!!」

遠くから一条さんの声が聞こえた気がした。
突如、吹雪が全てを包みこむと、
目の前の景色が変わっていた。

そこはどこかの村のようだ。
人も多く生活しており

結構栄えていた。

村人の衣装はどこかの民族衣裳のようだった。

すると、村の外から黒い煙が流れてきた、

村人はすぐに逃げ出すが、

皆、煙に捕まってしまう。

「ぐあああああ!」

煙の中で村人が苦しんだかと思うと、

体が異形の怪物へとへん化してしまった。

「うわあああああつ!」

その光景を見た他の村人は恐怖し、

動けないものもいた。

『グルルルルッ』

異形の怪物へと変化した村人達が

残った村人を襲い出した。

『これはグロンギ?!』

その見た目は確かにグロンギに似ていたが、
彼らとは違い知性を感じられなかった。
まるで、ゾンビかのように

目の前の人間を襲っているようだった。

その景色はまさに地獄絵図だ。

すると、霧が濃くなっていき、
周りを包み込んで何も見えなくなってしまった。
人の悲鳴だけが絶えず聴こえてくる。

『もう、やめてくれ、なんなんだよこれは』

俺に何を見せたいんだ、これは夢なのか…？

『アオオオオオオンツツ!!』

遠くから狼の遠吠えのようなものが聞こえて、
俺の意識は遠ざかっていった。

『ピ。ピツ　ピ。ピツ』

「ううん、朝か…」

俺は起き上がると下半身に違和感を覚えた。

「俺、いつの間にベルトを？」

目覚めた俺の腰にはクウガのベルトが出現していた。

「悪夢を見て、無意識に出していたのか？」

ユウスケはベルトを消して、トレーニングに向かった。

だが、ベルトを消す瞬間、中央の宝玉に不自然な

影が映り込んでいたことに

ユウスケは気が付いてはいなかった。

—○○—

その日の深夜、俺は何故かバイクの後ろにイツセーを乗せ
イツセーの依頼者の元へ向かっていた。

「たっく、なんでお前を後ろ

に乗せないといかないんだよ」

「仕方ないだろ、自転車じゃ

バイクに追いつけないんだから」

「そこは根性で追いつけよ」

「いや、無理だろ！」

イツセーの依頼者が双子の兄がいると聞き次回は一緒に

来てほしいとお願いし、

このバカは脳死で了承したようだった。

「まったく俺にだって予定あるんだぞ」

「悪かったよ。でも奈美先輩からの依頼だろ

理由を知れば分かってくれるだろ」

「分かってはくれるさだけど、あの人に借りは

作りたくないんだよ。後で面倒ごとになるからな」

そんな風にイツセーと会話をしていると

依頼者の家へと到着した。

「よー、悪魔くん。今日も悪いな」

イツセーが呼び出した相手を見て、

ため息を吐いていた。

相手が女性じゃないからって態度が露骨すぎるぞ、

相手は黒髪の悪そうな風貌の男。

見た目から二十代ぐらいだろうか。

この人は外国人だから実年齢が分からんが、

外国人だが日本の文化にどっぷり嵌っているようで、

今も浴衣を着ていた。

しかも顔を良く木場よりも上じゃないか？

それがイツセーには気にいらないうだ。

それで、イツセーはこの人に連日召喚されていた。

今は、とあるマンションの彼の自室にお邪魔している。

彼の指名は決まってイツセーだ。

どうやらイツセーを気に入ったらしい。

まあ、イツセーを気に入る依頼者は大抵癖が強いからな。

連日イツセーを呼び出しては

大したことでもない依頼をするらしい。

聞いた話では夜中にパンを買いに行かされたり、

釣りに付き合ったりしたらしい。

悪魔を呼び出すより知り合い呼んだ方がいいだろうに、

代価がもらえれば、文句は言えないからな。

「悪魔くん達、今日はゲームでもやらないか？」

昼間にレースゲーム買ったんだ。

相手がいなくて寂しくてな」

そんな願いか、もしかしてこの人友達のいない

可愛そうな人なのか？

「は、はい、喜んで」

「一緒に遊びますか」

この人は契約面ではいい客らしい。

こちらが要求する以上の物をくれるらしい。

高級そうな絵画を始め、宝石、金塊を

代価によこしているらしい。

あのリアス先輩も相当驚いていた。

ゲームをセツトする依頼者。

そういえば、名前聞いていなかったな。

「おい、イツセーこの依頼人の名前は何て言うんだ？」

「そういや、俺も聞いてなかった」

「おいおい、お得意様の名前ぐらい聞いておけよ」

俺達が小声で話していると。

「よし、ゲームもセツトできた。

日本って国は時間潰しのアイテム

が多くていいな。悪くない所だ、ほら、コントローラー」

「あ、どうも。俺、この手のゲームに強いですよ？」

「勝ち負けまでは依頼の内容ではないですからね

本気で相手しますよ」

「へえ、そりゃ、楽しみだ。

こっちは初心者だから軽く頼む」

言う通り、イツセーはこの手のゲームは得意だ、

家ではあまり勝った事がない

だが、俺だって負けっぱなしじゃられない

シカマル達に頼み込んで練習したんだ、

練習の成果見せてやる。

『GO!』

と、スタートしたものの、依頼者を置き去りに俺とイツセーでの一騎打ちを数戦した辺りから依頼者の様子が変わった。

「一通り覚えたぜ。そろそろ、追い抜くか」

なんて、彼がほざいたと思つたら。

「うおおおお、マジかよー!」

「高等テクニックをこころも簡単に!?!」

俺達の動きを見て覚えたのか、

俺達の車を軽々と抜かしていく。

あんなに練習したのに!

初心者に速攻で負かされるなんて!

『WIN!』

この短時間でマスターしたのか!

「どうやら俺の勝ちだな悪魔達」

「まだまだ!」

「たった一勝で強者気取りとは」

「おー、気合入りまくりだねえ。じゃあ、

もうひとレースするか、なあ、悪魔

いや、赤龍帝とクウガ」

なッ!

男の口にした言葉。

俺はそれを聞くなり、全身に冷たい物が走った。

直ぐにベルトを出して、戦いに備える。

どうしてその事を知っている?

こいつは、人間じゃないのか?

突然雰囲気が変わった男にイツセーが恐る恐る訊ねる。

「…あんた、誰だ?」

男は口の端を少しだけ吊り上げ、

画面を見たまま漏らす。

「アザゼル。墮天使共の頭をやってる。

よろしくな、赤龍帝の兵藤一誠、クウガの兵藤祐介」

『WIN!』

ゴールの遥か手前で走行を止めた

俺達の車を追い抜き、

彼の車がゴールしていく。

その瞬間、男の背中から十二枚もの漆黒の翼が展開した。

—○●○—

「冗談じゃないわ」

紅髪の美少女が眉を吊り上げて、

怒りを露わにしていた。

リアス・グレモリー。

俺達のご主人様で上級悪魔。

学園では、オカルト研究部の部長もしている。

とても厳しく、どうじにとってもやさしい人だ。

と、そんな彼女は今イツセーを膝枕している、

ちなみに俺達の制服は既に夏服だ。

イツセーも皆が薄着だと喜んでいた。

「確かに悪魔、天使、墮天使の三すくみの

トップ会談がこの町で執り行われるとはいえ、

突然墮天使の総督が私の縄張りに侵入し、

営業妨害していたなんて…」

リアス先輩はぶるぶると全身を怒りで震わせていた。

先日、この町で起きた事件が悪魔、天使、

墮天使の三すくみの関係に多少なりとも影響を及ぼした。

その結果、一度トップ同士が集まって今後の

三すくみ関係について話し合うことになった。

俺達はその事件の当事者だった。

だからその会談に同席して、

事件の内容を報告しなければならぬらしい。
そんななか、突然アザゼルが会談前に接触してきた。
そう、イツセーの契約相手としてだ。

あちらは素性と気配を隠して、
俺達に接してきた。営業妨害するのは正しいかもな
しかもそれが墮天使の総督となると、
話は別になる。

お茶目じゃすまない。

しかし、リアス先輩の眷属ってのは、
イベントに困らないな。

まあ、赤龍帝の力が引き寄せているみたいだがな。

「しかも私のかわいいイツセーにまで手を

出そうなんて、万死に値するわ！

アザゼルは神器に強い興味を持つと聞くわ。

きつと、私のイツセーがブーステッド・ギアを

持っているから接触してきたのね…。大丈夫よ、

イツセー。私がイツセーを絶対に守ってあげるわ」

イツセーの頭をなでながらリアス先輩が言う。

リアス先輩は下僕の眷属悪魔を

大切にするタイプの上級悪魔だ。

自分の所有物を他人に触れられたり、

傷つけられたりするのを酷く嫌う。

特にお気に入りのイツセーにちよつかい出されて

今は過敏になっているようだ。

「…やっぱ、俺の神器をアザゼルは狙っているのかな。

墮天使の総督なんだろう？」

イツセーは不安を口に出していた。

アザゼルは俺にも興味を持っているようだが、

クウガについて知りたかったのだろうか？

イツセーの不安を聞き、

同じ男子部員のイケメン王子木場が口を開く。

「確かアザゼルは神器に造詣が深いと聞くね。

そして、有能な神器所有者を

集めているとも聞く。でも大丈夫だよ」

木場が熱い視線をイツセーに向け続ける。

「僕がイツセーくんを守るからね」

…木場、きもいぞ、

あいつ、この間のカラオケの時から、

イツセーに対する態度が明らかに変わったな。

「…いや、あの、う、嬉しいけどさ…。」

なんていうか、真顔でそんなことを

男に言われると反応に困るぞ…。」

「真顔で言うに決まっているじゃないか。

君達は僕を助けてくれた。僕の大事な仲間だ。

仲間の危機を救わないでグレモリー眷属の

『騎士』を名乗れないさ」

それはわかるが、そのセリフは普通

ヒロインに向けて言うセリフだろうに。

「問題ないよ。『禁手』となつた僕の神器と

イツセーくんのブーステッド・ギア、

ユウスケくんのクウガの変身能力が

合わさればどんな危機でも乗り越えられる

ような気がするんだ。

…ふふ、少し前まではこんな暑苦しいことを口に

するタイプではなかったんだけどね。

君達と付き合っていると心構えも変わってしまう。

けれど、それが嫌じゃないのはなぜだろう…。

胸のあたりが熱いんだ」

「…キ、キモいぞ、おまえ…。」

ち、近寄るな！ふ、触れるな！」

この二人はただでさえいかがわしい噂がたえないのに
こんな会話。猿飛先輩あたりに聞かれたら

明日の一面になりかねないな。

俺も学園生活では木場との接し方に気をつけないとな。

「そ、そんな、イツセーくん…」

しゅんと気落ちする木場、

これが女子ならな、男がしてもきもいだけだぞ、

「しかし、どうしたものかしら…。」

あちらの動きが分からない以上、

こちらにも動きづらいわ。相手は墮天使の総督。

下手に接することも出来ないわね」

考え込むリアス先輩。

悪魔と墮天使の関係をこれ以上勝手に

崩すわけにもいかないからな。

リアス先輩はその辺りかなり厳しいからな。

あちらから大きな行動を取ってこなければ、

こちらから動くこともない。

「アザゼルは昔から、ああいう男だよ、リアス」

突然、この場の誰でもない声が聞こえる。

全員が声のした方向へ視線を移してみると

そこには紅髪の男性がにこやかに微笑んでいた。

俺もよく知る顔だ。

って、朱乃さんたちがその場で跪き、

俺とイツセーとアーシアだけが対応に困っていた。

新顔のゼノヴィアも「？」と疑問符をあげていた。

ゴトツ！イツセーの頭を落として、

リアス先輩が立ち上がる。

「お、お、お、お兄様」

驚愕の声を出していた。

そう、相手はリアス先輩のお兄さんで悪魔業界の

現魔王『サーゼクス・ルシファー』様その方だった！

こんなところで魔王様に再開とは！

「先日のコカビエルのようなこととはしないよ、

アザゼルは。今回みたいな悪戯はするだろうけどね。
しかし、総督殿は予定よりも早い来日だな」

と魔王様がおっしゃられる。

その魔王様の後方には銀髪のメイドさん、
グレイフィアさんもいた。

魔王様の『女王』だから当然か。

惚けていた俺も急いで朱乃さん達同様に跪いた。

俺の行動を見て、

イツセーとアーシアも真似をする。

「くつろいでくれたまえ。」

今日はプライベートで来ている」

手をあげて、俺達にかしこまらなくていいと促して下さい。
全員がそれに従い、立ち上がった。

「やあ、我が妹よ。しかし、この部屋は殺風景だ。

年頃の娘たちが集まるにしても魔方阵だらけという
のはどうだろうか」

部屋を見渡しながら、魔王様が苦笑いを浮かべている。

まあ、確かに俺達は慣れているが、

他の人から見ればおかしな部屋だよな。

「お兄様、ど、どうして、ここへ？」

怪訝そうにリアス先輩が訊く。

そりやそうだ。悪魔業界を背負う魔王様が

人間界のいち学び舎の部室に顔を出すなんて

おかしいだろう。

すると、魔王様は一枚のプリント用紙を取り出した。

「何を言ってるんだ。授業参観が近いのだろうか？」

私も参加しようと思っついていてね。

ぜひとも妹が勉学に励む姿を間近で見たいものだ」

そういえばもうすぐこの学園の授業参観があったな。

俺達の所も父さんが仕事を有給取ってまで乗り込んで
くると張り切っていた。

まあ、目的は俺達じゃなくて、
アーシアの授業風景が見たいらしい。
娘同然の女の子が出来て俺達の両親は
何かあるたび、お祭り騒ぎだ。

「グ、グレイフィアね？お兄様に伝えたのは」
少々困った様子のリアス先輩の
問いにグレイフィアさんが頷く。

「はい。学園からの報告はグレモリー眷属の
スケジュールを任されている私の元へ届きます。
むろん、サーゼクス様の『女王』でもありますので
主へ報告も致しました」

それを聞き、リアス先輩はため息を吐く。
リアス先輩は授業参観に乗り気じゃない？
ご家族が来るのが嫌なのか？

「報告を受けた私は魔王職が激務であろうと、
休暇を入れてでも妹の授業参観に参加したかったのだよ。
安心しなさい。父上もちゃんとお越しになれる」
えっ、リアス先輩のお父さんも来るのか!?

例の婚約パーティーに飛び込んだ時に
一度お顔を拝見したが、ダンディな悪魔男性だったな。
「そ、そうではありません！お兄様は魔王なのですよ？
仕事をほっぽり出してくるなんて！

魔王がいち魔王を特別視されてはいけませんわ」
なるほど、リアス先輩はお兄さんが魔王だから、
いくら肉親とはいえ、

特別にしてもらうのを良しとできないのか。
しかし、魔王様は首を横に振る。

「いやいや、これは仕事でもあるんだよ、

実は三すくみの会談をこの学園で

執り行おうと思っただけ。

会場の下見に来たんだよ」

な、な、なにいいいい!?

マジか!?俺は驚きを隠せないでいた。

いや、俺だけじゃない、

部員の皆がビツクリしている様子だ。

この学園で悪魔、天使、

墮天使の大事な会議を行うのか!?

「っ……どこで?本当に?」

リアス先輩も目を見開いている。

そりゃ驚いて再度聞いてしまうよな。

「ああ。この学園とはどうやら

何かしらの縁があるようだ。

私の妹でもあるお前と、伝説の赤龍帝、

究極の闇、聖魔剣使い、聖剣デュランダル使い、

魔王セラフオール・レヴィアタンの妹が所属し、

コカビエルと白龍皇が襲来してきた。

これは偶然で片付けられない事象だ。

様々な力が入り混じり、うねりとなっているのだろう。

そのうねりを加速度的に増しているのが

兵藤一誠くん 赤龍帝だとは思うのだが」

サーゼクス様がイツセーへ視線を送る。

「貴方が魔王か。初めまして、ゼノヴィアという者だ」

会話に介入してきたのは、緑色のメツシユを

髪の毛に入れていている新人悪魔のゼノヴィアだ。

一見、只の美少女だが、こう見えても

伝説の聖剣デュランダルの使い手であり、

リアス先輩の新たな眷属でもう一人の『騎士』でもある。

「ごきげんよう。ゼノヴィア。

私はサーゼクス・ルシファー。

リアスから報告を受けている。

聖剣デュランダルの使い手が

悪魔に転生し、

しかも我が妹の眷属となるとは…正直、最初に聞いた時は耳を疑ったよ」

「私も悪魔になるとは思っていなかったよ。いままで葬ってきた側に転生するなんて、我ながら大胆な事をしたとたまに後悔している。

…うん、そうだ。なんで私は悪魔になっただらうか？やけくそ？

いや、だが、あのときは正直、どうでもよくて…。

でも、悪魔で本当に良かったのだらうか？」

また頭を抱えて考えこんじやったよ。

この子は大胆不敵なことを口にするけど、

その後たいがい後悔してるんだよな。

相変わらずおかしな子だな。

「ほら、ゼノヴィア、魔王様の前だぞ、

落ち込むのはあとにしような」

俺はゼノヴィアを落ち着かせる。

「ハハハ、妹の眷属は楽しい者が多くていい、

ゼノヴィア、転生したばかりで勝手が

分からないかもしれないが、リアスの眷属として

グレモリーを支えて欲しい。よろしく頼むよ」

「聖書にも記されている伝説の魔王ルシファーに

そこまで言われては私もあとに引けない。

どこまでやれるか分からないが、

やれるところまではやらせてもらう」

ゼノヴィアの言葉を聞き、魔王様は微笑む。

その微笑みはリアス先輩にそっくりだった。

「ありがとう」

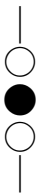
魔王様のお礼を聞いて、

ゼノヴィアも頬を少しだけ赤く染めていた。

「さて、これ以上難しい話をここでしても仕方がない。

うーむ、しかし、人間界に来たとはいえ、夜中だ。

こんな時間に宿泊施設は空いているのだろうか？」
そこは無計画に来たのかよ…。
まあ、探せばどこかあるだろうけど、
魔王様の満足する場所を探すとなると…。
と、考え事をしていて、
イツセーが手をあげながら発言する。
「あ、それなら」



「なるほど、妹が迷惑をおかけしてなくて安心しました」
「そんなお兄さん！リアスさんはとてもいい子ですわよ」
「ええ、リアスさんはイツセーにはもったいない

ぐらい素敵なお嬢さんです」
我が家のリビングで、伝説の魔王様と俺達の両親が
挨拶を交わしていた。

魔王様の隣にはリアス先輩。

その後方にグレイフィアさんが待機している。

あのあと、イツセーが提案した。

『それなら、俺の家に泊まりますか？』と。

最初、魔王様は目を丸くしていた。

当たり前だ、一庶民の家に呼ぶとは俺も驚いた。

だが、リアス先輩が我が家に
住んでいる事を思い出してから、

「それはいい。ぜひとも下宿先のご夫婦に

あいさつしたいと思っていたのだよ」と、

イツセーの意見を快諾した。

リアス先輩は「ダメ！ダメよ！」と抵抗していたけどな。

魔王様とグレイフィアさんの

二人を止められるはずもなく、

悪魔稼業終了後、こうして兵藤家に着いてしまった。

「ええ、仕事が一段落しているので、

この機会に一度妹の学び舎を見つつ、

授業の風景も拝見できたらと思ひましてね。

当日は父も顔を出す予定です」

「まあ、リアスさんのお父さんも」

「父は駒王学園の建設などにも携わっております、

私同様、良い機会だからと顔を出すようです。

本当はリアスの顔を見たいだけだと思いますが」

「グレモリーさん！お酒はいけますかね？」

日本の美味しいお酒があるんですがね」

父さんがキッチンから秘蔵の

お酒らしきものを取り出してきた。

父さん！いきなり酒かよ！

魔王様相手に失礼じゃないか！

知らないってのは恐ろしいな、

相手が魔王様と知ったらどうなるのやら

だが、俺の心配はよそに魔王様は笑みを浮かべる。

「それは素晴らしい！ぜひともいただきましょう！

日本の酒はいける口なのでね！」

想像以上にフレンドリーな魔王様は楽しそうに

父さん達と酒を飲み、

夜は過ぎて行ったのだった。

第42話 「プール開き」

サーゼクス様来訪から数日。

サーゼクス様とグレイフィアさんが

泊まった次の日に我が家を出立していた。

何やら町の下見をしているようだけど、

数日サーゼクス様に付き添った

俺からしてみれば、

観光しているようにしか見えなかった。

魔王様の事だから、

俺達には想像できないような視点から

物事を捉えているに違いないと

イツセーは言ってたが、

俺には俺にはただ遊んで

回リたかっただけなのでは…。

ゲーセンで俺達と競い合ったり。

(冥界にゲームセンターを設立したいらしい)

ハンバーガーショップで全種注文し制覇したり。

(冥界にも有名チェーン店を

オープンしたいと言っていた)

神社に行きお参りしたり。

(魔王の絶大な魔力で神社の神聖な力を

払いのけてむりやり参拝した)

一見外遊にしか思えないがひとつひとつに

何か意味があると信じたい。

メイド姿のグレイフィアさんを

引き連れていたから、

目立って仕方なかった。

まあ、今日は休日で魔王様と行動ではなく、

久しぶりのオカルト研究部との活動する日だった。

「いつてきまーす」

家から四人で登校する。

今日は日曜日で休みだが、

やることがある為、学園に向っている。

俺の隣では今日が楽しみだったのか

イツセーがよだれをたらしながら

「ぐふふー」と笑っていた。

はあ、兄弟じゃなかったら、

こんな顔の奴と一緒に歩きたくないな。

「おい、イツセー顔がにやけてるぞ、

気持ちは察するがよだれくらい拭けよ」

そんな俺達に声を掛けてくる者がいた。

「おはよう」

合流したのはゼノヴィアだ。

彼女は我が家の近所にある

マンションにて一人暮らしをしている。

破れかぶれで悪魔となった彼女は

二度とヴァチカンの土を踏めない。

そのため、この町に住むことになったが、

流石に旧校舎で住むのはいやだったらしく、

マンションを借りることになった。

そのマンションも悪魔の息がかかった所らしいが、

近所なのは、主であるリアス先輩や

同じ教会出身のアーシアが、

我が家に住んでいるから、

何か暮らしでわからないことがあったら、

気軽に訊ねてくれる距離が良いって訊だ。

いきなり文化と生活基準の違うところで住めば

分からないことも多い。

以前、アーシアとゼノヴィアが雨の日に

傘をさしている事に驚いていたな。

外国では雨の日でも傘は差さないらしい。

ビニール傘を見て酷く驚いていたのも印象深い。
本当に文化の違いを感じたよ。

「アーシア、例の宿題は済ませたか？」

「はい。ゼノヴィアさんは？」

「私は…日本語で分からない所があつてね。

教えてくれないかな？」

「はい！お任せください！」

…でも漢字はまだちよつと」

「私もだ。日本人というのは

こんなにも複雑な文字を覚えていくのだから

恐ろしい。経済大国の片鱗を垣間見るね」

雑談しているアーシアとゼノヴィア。

出会いは最悪だったけど、

なんだかんだでこの二人は仲が良い。

休み時間もクラスメイトのエロ女子である桐生と

我が新聞部部員の月詠と四人でいる。

二人が同じキリスト教徒だったのも

仲を深める要因だったのかもしれない。

男子の間でも「静のアーシア」、

「動のゼノヴィア」と外国の美少女二人組を証している。

「なるほど、これも主のお導きだね」

「はい、主のお導きだね」

『アーメン…うっ！』

こうやって、二人で何かあるたびにお祈りして、

同時にダメージを受けている。

「まったく何やってんだか…」

この光景も何度目か。

クスクス笑いながら、リアス先輩が言う。

「さて、あなたたち。今日は

私達限定のプール開きよ」

そう、オカルト研究部は生徒会からの

命令でプールの掃除を任されていた。
もう夏だし、学園のほうもプール開きとなる。

プールを一番最初に使っているいい事を条件に
リアス先輩は掃除を快諾しており、

俺は部員では無かったが、

木場がいるとはいえイツセーだけだと

不安だからと特別に生徒会から指名がきた。

多分匙辺りからの提案だろう。

俺も同じこと思ったよ。

俺達はプールの為懸命に水が抜かれた後の苔を落とした。

中でもエロを動力源としたイツセーは凄かった。

妄想で鼻時を流しながらも鬼の形相で

苔を落としていた。

アーシアと木場は熱中症を疑ったが、

あれはほつといて大丈夫なものだよ。

現に今も皆の水着姿を想像しているのか、

表情がヤバい事になっていた。

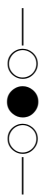
「イツセー、水着の妄想もいいけど、

顔を引き締めるにやけ過ぎだぞ」

「わかってる、わかってる」

俺の忠告もにやけ顔を止める事無く

聞いているのだった。



プールに到着し、早速着替えてプールに

向かう、そこには既にリアス先輩が待っていた。

「ほら、イツセー。私の水着、どうかしらっ？」

赤いビキニタイプの水着を着ており。

イツセーに水着の感想を聞いていた。

ブツ！

リアス先輩の水着を見たイツセーは、
勢いよく鼻から血が飛び出る。

水着が少し小さく今にも胸が零れそうで、
イツセーには刺激が強すぎたようだ。

「あらあら。部長つたら、張り切ってますわ。

うふふ、よほどイツセーくんに見せたかった
んですわね。ところでイツセーくん、

私のほうはどうかしら？」

と、朱乃さんがやってくる。

朱乃さんも同じくビキニタイプで、

「リアス先輩と対極的な真っ白の水着だった。

「ユウスケさん、わ、私も着替えて来ました」

俺達が振り向くとそこには

アーシアがもじもじしながら立っていた。

アーシアは学校指定のスクール水着だ。

ううむ、金髪美少女が日本のスクール水着を着ていた。

胸には「あーしあ」と名が書かれていた。

「アーシア、かわいいぞー！

お兄さん感動だ！よく似合ってる！」

「何がお兄さんだよ、だけど、

似合ってるぞアーシア」

「えへへ。ユウスケさんにそう言われると嬉しいです。

小猫ちゃんも同じスクール水着なんですよ」

そう言われ、小猫ちゃんを見れば、

アーシアと同じくスクール水着を着ていた。

胸には「こねこ」とかかれており、

その容姿も相まってアーシア以上に似合っていた。

まさにマスコットって所だな。

「…卑猥な目つきで見られないのも

それはそれって感じでちよつとふくぎつです」

何やらぶつぶつと残念そうな感じだが、

流石に変態でも常識は持ち合わせてるよ
小猫ちゃん。

すると、リアス先輩はそんな小猫ちゃんの
肩に手を置き、ニッコリ微笑みながら言う。

「それでね、イツセー、ユウスケ悪いのだけれど」

「はい？」

「なんででしょうか？」

「いち、に、いち、に」

俺達は今、アーシアと小猫ちゃんの手を持って、
彼女たちのバタ足の練習に付き合っていた。

先ほど、リアス先輩から、

「小猫とアーシアは泳げないの。イツセー、ユウスケ、
相手をしてあげてちょうだい」というお願いをされた。

当の二人は「ぷはー」と時折息継ぎしては、

一生懸命にバタバタと足を動かしている。

俺もイツセーも泳ぎは得意ではないが、

人に教えるぐらいなら問題ないだろう。

「ぷはー。…先輩、付き合わせてしまって

ゴメンなさい…」

小猫ちゃんがイツセーに申し訳なさそうに言っている。

「いやいや、別にいいよ。」

女の子の泳ぎの練習に付き合っているのも面白くて

俺は全然問題ないよ」

「私はユウスケさんに練習付き合ってもらえて

嬉しいですよ」

「こんなことならいくらでも付合おうよ」

早く泳げるようになって、今度は海に行こうな」

「はい！行きましょー！」

そのままバタ足練習を続けた。

「ととと、端に着いたよ」

二十五メートルをバタ足で泳ぎ切った小猫ちゃんは勢いあまって、イツセーにぶつかってしまった。

偶然にもそれが抱き着いているかのような体制になってしまった。

これは、いつものパターンで殴られるやつか。

と思っていたが、小猫ちゃんの

反応は違っていた。

「…イツセー先輩は、意外にやさしいですよね、

…どスケベなのに」

これは、褒められてるのか、まあ褒めてるんだろうな。

「ま、まあ、俺だって後輩に何かしてあげたいしき。

いつも小猫ちゃんには迷惑かけているから、

こいうときはぜひとも手伝いたいね」

そう言い、イツセーは小猫ちゃんの頭を撫でている。

すると、

ザバン！

誰かがプールに飛び込む音が聞こえてくる。

他のコースでリアス先輩が優雅に泳いでいた。

すると、イツセーが急に水に潜っていく。

『Transfer!!』

イツセーが神器を発動し、自身の顔に譲渡した。

ま、まさか自分の目を強化してるのか。

せつかく小猫ちゃんも見直したというのに…。

そう思い小猫ちゃんを見ると、

小猫ちゃんは手をチョップの形で振り上げていた。

ゴッ！

そして、そのチョップは容赦なくイツセーの頭に振り下ろされた。

ゴボツ!

水中でイツセーの息が漏れ、ザバツと上がってくる。

「…まだ練習は終わってませんよ?」

不機嫌な様子の小猫ちゃん。

イツセーは誤魔化すように咳払いしつつ、

小猫ちゃんに言う。

「よし、練習を続けようか」

「それじゃあ、俺達も続けようか」

「はい、ユウスケさん」



「…きゆうううう疲れましたあ」

プールサイドに敷いたビニールシートの上で

アーシアがボタンキューしていた。

俺が手に持ってバタ足の練習を

手伝っていたが、予想以上に

張り切っておりコースを何度も往復してしまった。

プールでの運動は陸上以上に

体力がいるからな。

運動が得意ではないアーシアではきつかったんだろう。

小猫ちゃんはさすがの体力で、

今ではプールサイドの日陰で本を

読んで休んでいる。

俺とイツセーもビニールシートに座っている。

体力には自信はあったが、

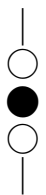
人の手伝いでも疲れたな。

「…すーすー」寝息が聞こえ横に見れば、

アーシアが疲れて眠ってしまった。

そのかわいい光景を眺めていると、

赤いコウモリがイツセーの元へ飛来する。
それは、リアス先輩の使い魔だった。
リアス先輩の方を見ると、
イツセーに向かい小瓶を持ちながら、
手招きしていた。
イツセーはそれを見ると、
先程までの疲労は何処へ
驚きの速さでリアス先輩の元へ走っていった。
流星のエロパワーだな。
すると、イツセーがリアス先輩に
オイルを塗っていた。
イツセーも本望だろうな。
そこへ、朱乃さんがやってきて、
二人にちよつかいを掛ける。
何か言い合っているようで、
このままではケンカに発展しそうだったので、
俺は急いで二人の仲裁へ向かう。
ここはイツセーがやれよと思いながら、
向かっていると、
二人が魔力を纏いながら戦闘態勢に入る。
ちよ、これはケンカなんて呼べる
もんじゃねえ、
俺はすぐさま引き返し走り出す。
後ろからは破壊音とイツセーの悲鳴が聞こえたが、
無視して俺は避難するのだった。



先程のリアス先輩と朱乃さんの頂上戦争も
ようやく終わり。
俺とイツセーは着替えを終え、

先に校門へ向かおうとした校舎を出た時、
視界に銀色が映り込む。

そちらを見れば、

校門の所に濃いダークカラーな銀髪の
美少年が立っていた。

その光景は、一瞬、絵画の一場面かと思つたほどだ、
年齢は俺達と同じぐらいだろうか？

ただ校舎を見上げていただけなのに、

何故、それだけの行為が俺には

幻想的に見えたのだろうか。

ふと、その少年が俺達に気付いたのか、

視線をこちらへ向ける。

その瞳は引き込まれるぐらいに

透き通つた蒼い眼だった。

少年は天使のような微笑みで俺達に話しかけてくる。

「やあ、いい学校だね」

「えつと…まあね」

「自慢の学校だよ」

イツセーは彼に對抗したのか、

無理矢理笑顔を作つてさわやかに答えていた。

彼は今度留学してくる生徒なのかもしれないな。

最初に出会ったのがイツセーとはついてないな。

このビジュアルなら登校初日から話題になりそうだな。

未来のスターにインタビューでもしておくか。

「こんどの留学生かい？」

俺は兵藤祐介だ、この学校の新聞部に

所属してるんだ君の名前を教えてくださいませんか？

期待の留学生を取材させてくれよ」

そんな俺の質問に彼は予想もできなかつた

一言を告げる。

「俺はヴァーリ。白龍皇『パニシング・ドラゴン白い龍』だ」

っ！

なっ！今こいつなんて言った。

「ここで会うのは二度目か『ウエルシユ・ドラゴン赤い龍』」

赤龍帝。兵藤一誠」

彼の蒼い瞳がまつすぐイツセーに向けられる。

その瞳を向けられたイツセーも

相手は何者なのんか理解したのか

眼を見開いたまま固まってしまう。

コイツからは敵意は感じられない。

アザゼルと同じように様子見に来ただけか？

「お前の目的はなんだ？ただの観光なら

案内するぜ？それとも一誠が目当てか」

ヴァーリ相手に身構える俺達バニシング・ドラゴンに『白い龍』

は不敵な笑みを見せる。

「そうだな。たとえば、俺がここで

兵藤一誠に魔術的なものを掛けたり」

バニシング・ドラゴン『白い龍』が手を

イツセーの鼻先に向けようとした。

その時、

ザッ！

三本の剣が『バニシング・ドラゴン白い龍』

の首元に刃を突き付けた。

瞬時に現れた木場とゼノヴィアと

即座にナイトフォームに変身した俺が、

聖魔剣と聖剣デュランダル、

そして、俺のナイトソードを

バニシング・ドラゴン『白い龍』に向けている。

全員『騎士』の神速での反応速度だ、

俺もナイトフォームになってからは、

普段の状態でも、

通常の騎士の半分程度の速度は出せるようになっていた。

二人とも、イツセーのピンチに駆けつけたのか。

「何をするつもりかわからないけど、

冗談が過ぎるんじゃないかな？」

「ここで赤龍帝との決戦を始めさせるわけには

行かないな、白龍皇」

「その手はそのまま降ろす事を勧めるぜ」

俺達はドスの効いた声音で忠告する。

しかし、白龍皇は少しも動じずに。

「止めておいたほうがいい。

手が震えているじゃないか」

そこで、俺は剣を持つ手が震えていることに気づく。

木場とゼノヴィアも同様だった。

「誇つていい。相手との実力差が分かるのは、

強い証拠だ。俺と君達との間には

決定的なほどの差がある。

コカビエルごときに勝てなかった君達では、

俺には勝てないよ」

コカビエルごときか…。

俺達が束になっても勝てなかった。

堕天使の幹部。

あの一戦は確かに彼の介入で勝負はついたが、

あのまま戦っていても勝てなかったろう。

そんな相手を「ごとき」と見下せる程の

力を彼は持っているのだろうな。

「それに兵藤祐介君の相手は俺ではないよ」

こいつは何を言ってるんだ？

そう思っていたその時、

その場に新たな人物が現れた。

ザッ！

そのものは白龍皇の背後に突然現れた。

『なっ！』

「まさかあんたは！」

俺達の前に現れたのは黒い皮膚に、

赤い鎧を纏い金色の角と赤い眼、

腰に見覚えのある宝玉を宿したベルトを着けた人物。

そう、そこに立っていたのはもう一人のクウガだった。

「五代さん…。いや違う！誰なんだお前は」

その人物が変身を解く。

その人物は茶色い髪と瞳の日本人と思われる。

「遅かったな」

「お前が勝手に先に行っただろうが」

白龍皇がもう一人のクウガに話しかける。

「お前がもう一人のクウガか、

聞いてた通り、違う姿になるようだな

だけど、未完成なのは変わりがないのか」

何を言ってるんだ…。未完成？

「何を言ってる…」

「正直言って、期待はずれだな、

アザゼルは喜びそうだけど

こいつは強くないだろ」

その男は俺を観察すると、

つまらなそうに鼻で笑った。

見ただけでも分かる。

同じ赤い姿だつてのに

こいつは俺や五代さんよりも

強いと感じた。

それだけのプレッシャーを放っていた。

「一応、挨拶はしておこうか

俺の名は東城雄輔。

真のクウガだ、覚えておけ」

真のクウガだと…。

「ところで、兵藤一誠、兵藤祐介、

君達はこの世界で自分が何番目に強いと思う？」

白龍皇からの突然の問いかけ？

強さだと？

「未完成な君達は上から数えた場合、

四桁、千から千五百の間ぐらいだ。

いや、赤龍帝はもつとしたかな？」

相手の真意が分からない何が言いたいんだ？

「この世界は強いものが多い。

『クリムゾン・サタン紅髪の魔王』

と呼ばれるサーゼクス・ルシファーでさえ、

トップ10内に入らない」

俺には想像できないが、

あの魔王様より強いのがそんなにいるのかよ…。

『バニング・ドラゴン白い龍』が指を一本立てる。

「だが、一位は決まっている。不動の存在が」

「？誰のことだ。自分が一番とでも言うのかよ」

イツセーの問いに彼は肩をすくめた。

「いずれわかる。ただ、俺じゃ無い。

あつちのユウスケでもないさ。

兵藤兄弟は貴重な存在だ。

十分に育てた方がいい、リアス・グレモリー」

『バニング・ドラゴン白い龍』が視線を

俺達の後方へ向ける。

そちらを向けば、そこにはリアス先輩が立っていた。

その表情は大変不機嫌だった。

リアス先輩の周りにはアシア、

朱乃さん、小猫ちゃんもいた。

皆、戦闘態勢に入っていた。

「白龍皇、なんのつもりかしら？」

貴方が墮天使と繋がりを持っているのなら、

必要以上の接触は」

『『二天龍』と称されたドラゴン。』

ウエルシユ・ドラゴン 『赤い龍』とパニシグ・ドラゴン 『白い龍』と

過去、関わった者はろくな生き方をしない。

あなたはどうなるんだろうな？」

「っ！」

彼の言葉にリアス先輩は言葉を詰まらせていた。

「今日は別に戦いにきたわけじゃ無い。

ちよつと先日訪れた学舎を見てみたかっただけだ。

アザゼルの付き添いで来日していてね、

ただの退屈しのぎだよ。

ここで『赤い龍』とは戦わない。

それに、俺達もやることが多いからさ」

パニシグ・ドラゴン 『白い龍』はそれだけ言い残すと、

もう一人のクウガと共にこの場を後にしていく。

奴が去っても緊張の糸は取れない。

俺は変身を解き、木場とゼノヴィアは剣をしまったが、

皆、表情を緩和させることはなかった。

寄り添ってきたアーシアは無言で俺の手を握ってくる。

アザゼル、そして『白い龍』に

もう一人のクウガ。

俺達の元へ、

予想だにしない者達が集いつつあった。

第43話 「授業参観」

東城雄輔と出会った日の夜、

俺は一人ベッドに座り、

今日の出来事を考えていた。

もう一人のクウガの出現。

以前、五代さんに出会っていた為、

他にクウガが存在するのは理解していた

つもりだ、だが、それは

別の世界での話だった。

確かに過去に俺とは違うクウガはいた。

だけどそれはこのベルトの前の所有者

のはずだ。

過去に暴れた『究極の闇』は

俺のクウガのことではなく、

向こうのクウガの話だったのか？

それに、未完成ってのは

俺が五代さん見たいに

他のフォームに変身できない

からか？

俺はそんな事をずっと

考えていた。

その時、

ガチャッ！

「ユウスケさん」

「ああ、アーシアどうしたんだ？」

部屋にアーシアが入ってくる。

「いえ、今日のユウスケさんの

様子が気になったので」

そう言つて、アーシアはベルトに腰掛ける。

「やはり今日出会ったあの人が

「気になりますか」

「アーシアはまっすぐ俺の目をみて言ってきた。」

「ああ、そうだね。」

俺は今までクウガという名に誇りを持っていた。だけど、今日出会った東城は俺よりも上だった。前に話したけど別の世界で他のクウガに合った時を感じたんだ、

何で俺はあの人に出る事が出来ないんだろうと。

今でこそナイトフォームを手に入れたけど、

それだけだ、あの男の話では俺は未完成らしい。

それがやっぱり悔しかったんだ。

努力はしているつもりだ、

だけど、俺には決定的な何かが欠けているんじゃない

無いかって最近では思ってるんだ」

アーシアは俺の話の黙って聞いてくれた。

すると、アーシアが突然膝枕をしてくれる。

「えっと、突然どうしたんだ？アーシア」

「いえ、ただ私がしたかっただけです。」

ユウスケさんが努力しているのは

私も知っています。

ユウスケさんが何で悩んでいるかは

分かりません。でも、

ユウスケさんは弱くはありません。

以前、私の事を助けてくれました。

友達だって言ってくれました。

その言葉で私は救われたんです。

だから、ユウスケさんは

私のヒーローなんです。

あの、東城さんという方が

どんな方かは知りませんが、

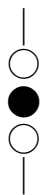
私のヒーローのクウガは

兵藤祐介さん、ただ一人です」

「ありがとう、アーシア」

「どういたしまして」

俺は安心したのか、いつの間にか眠ってしまった。



「ユウスケ、イツセー、アーシアちゃん。

あとでお父さんと一緒に行くからね」

朝から気合の入っている母さん。

玄関前でそんな事を言うが、

俺達よりもアーシアの授業風景を見たいようだ。

父さんも有給休暇を取ったと言っていた。

まあ、家の両親はアーシアを娘のように

可愛がっているから、

見たくなるのは分かるんだがな。

どうのアーシアも「はい！」と満面の笑みだ。

一緒に暮らしている「家族」の者が

来てくれるというのが、

たまらなくうれしいらしく、

アーシアはこの日を楽しみにしていた。

そして、授業参観の日。

授業参観とはいうが、

正確には「公開授業」だ。

親御さんが来ていいのは当然だが、

中等部の学生が授業風景を見学しても

いいことになっている。

その中学生の保護者も同伴で

見学可能という、結構自由だ。

自分の親御さんだけでなく、

駒王学園中等部の後輩たちも

見に来るとあって、

意外に高等部の俺達は

無駄な緊張したりする。

少しでもミスしたら恥ずかしいからな。

「…気乗りしないわね」

リアス先輩がため息を吐きながら言う。

どうにも授業参観が嫌らしい。

お父さんとサーゼクス様が

いらっしやるようだけど、

やはり授業風景を親に

見られるのはリアス先輩でも嫌なのか。

まあ、紅髪のイケメンの男性が二人も

教室を訪れたらそりや話題になりそうだな。

奈美先輩も今回はさすがに記事にはしないと

言っていたな。

家の両親は息子達よりもアジアだからな

イツセーも自分よりアジアの

授業風景を納めてくれと言っていた。

多分帰ったあとはアジアの授業の

上映会だな。

学校の玄関でリアス先輩と別れ

俺達は教室に向かう。

席に着くとスイッチと月詠が近づいてくる。

「ユウスケのところは両親が来るのか？」

「ああ、といつても目当てはアジアだけだな」

「まあ、気持ちは分からんでもないがな」

俺の返事にスイッチは頷いて答える。

まあ、俺も実の妹のように溺愛してますとも、

「私、こういうの初めてなので、すごく楽しみです」

アジアは心底楽しそうだ。

アーシアが楽しみなのはいいことだ。

「ユウスケ」

いつの間にかゼノヴィアが俺達に近づいてきていた。

ゼノヴィアはその見た目から男子からの人気も高いが、その運動神経の高さから女子からの人気も高いらしい。

「どうしたゼノヴィア？」

「いや、私もこういうのは初めてだからな、

何をすればいいのか分からないからな

分からないことはユウスケに訪ねれば

何でも答えてくれるとアーシアが言ってたからな」

「ゼ、ゼノヴィアさん！」

ゼノヴィアの話にアーシアが顔を真っ赤にして
慌てている。

「頼りにされるのは嬉しいけどな。

今日は別に見学者がいるだけで、

普段と何も変わらないぞ、

ただ休憩時間も見られるけど、

二人はいつも通りで大丈夫だと思うぞ」

ぶつちやけ、俺はイツセー達

変態三人組が何かやらかさないか心配だよ。

「わかった、ありがとう」

「どういたしまして」

すると、月詠が訪ねてくる。

「前から気になっておったのじやが、

ユウスケとゼノヴィアは最初から

仲が良かったな前からの知り合いだったのか？」

悪魔のことは言えないからな。

俺達の関係か。

「まあ、そうだな、俺の幼なじみが

外国から帰国したさいに一緒にいたのが

ゼノヴィアだったんだよ。

出会いは険悪だったけど

今では仲はいいかな」

「そうだな、最初は決闘もしたが
今では気の良い仲間だな」

いや、決闘でもつとオブラートに包もうよ
ゼノヴィア！

「決闘か、何があったかは聞かないが、

ユウスケのいつものお節介がでたのだろう」

月詠がため息を吐きながら、

やれやれと肩をすくめる。

「最近、兵藤兄弟がモテていると
学園内で噂になってるぞ」

マジかよ。

そんな噂がたってるのか、

変な噂があったら早めに処理しないとな。

「おかしな奴はどこにでもおるからな

嫉妬で襲われても知らないぞ」

そんなことを月詠は言うが、

こればかりは俺が悪いのかな。

色んな女に手を出してると思われてるのか？

「大丈夫です。そのときは私が守ります」

ありがとうアシア、

でもそうならないことを願うよ。

「そうだな、もし襲われたら私も

守ってやろう」

何故かゼノヴィアがその台詞いうと

イケメンみたいだな。

「ありがとう二人ともでも、

流石に自分の身は自分で

守れるから大丈夫だよ」

流石に悪魔に勝てる人間はいないだろうしな。

授業が始まり、
解放された後ろの扉から
クラスメートの親御さんが入ってくる。
最初の授業は英語。

授業参観だからか

いつも以上に気合いの入った先生が
袋に入った長方形の物体をみんなに配る。
なんだこれ？

え、最初は英語だよな？

まあ、このクラスには
帰国子女のアジアにゼノヴィア、
もいるからな俺も悪魔になつてから
英語の発音は完璧になつたからな
おかしな授業にはならないだろう。
そう思い、配られた物をよく見ると
それは紙粘土だった。

怪訝に思う俺達に先生が嬉々に言う。

「いいですかー、今渡した紙粘土で
好きなものを作ってみてください。
動物でもいい。人でもいい。
物でもいい。自分が今
脳に描いたありのままの表現を
形作って下さい。」

そういう英会話もあります」
いや、ねえよ！

普通に英語の授業しようぜ。
授業参観だからって。

いつもと違う授業しようとして
から回ってんじゃん。

チエーンの外れた自転車じゃねえんだからさ。

「レッツトライー！」

レッツトライじゃねえーよ。

「む、難しいです」

アーシアを見るともう制作中だった。

流石に順応力が高すぎませんか？

「アーシアちゃん、ファイトよー！」

「アーシアちゃん、かわいいぞー！」

聞き覚えのある声に後ろに振り向くと

いつの間にか両親がおり、

アーシアにエールをおくっていた。

アーシアが二人に気がつき

振り向いて嬉しそうに手を降る。

回りを見れば他の皆も各々

紙粘土をこねくりまわしていた。

俺がおかしいのかこれ！

仕方ないと俺も粘土をこね始めた。

しかし何を作るか。

頭に描いたもの…。

よし、この間、夢にでたあれを作るか。

俺は夢で見た、雪山での五代さんを

形作ってゆく。

全身から飛び出す。

刺々しくも力強いフォルム。

夢で見ただけなのに

俺の指は迷いもなく

究極の闇を形作ってゆく。

「兵藤君ー！」

粘土を作っていた俺に

先生が肩を叩き呼び掛ける。

俺はそこでようやく、

自分が夢中なつて粘土を作っていたことに気づく。

「素晴らしいよ。兵藤くん。」

君にこんな才能があつたなんて！

この授業は成功だ！

僕はまた素晴らしい才能を開花させてしまった」

俺のての中のそれは、

ベルト等の細かい装飾まで良くできた物だった。

「これ、俺が作ったのか？」

色こそないがそれは夢で見た姿と瓜二つだった。

「さすがです、ユウスケさん！」

この後みんなにも褒められ

授業は終了した。

ちなみにアーシアはニンニンジャーの世界で見た

ワンマルを作り、ゼノヴィアは自身の聖剣を作っていた。

アーシアはともかく、ゼノヴィアは

女の子なんだから、他にあるだろうに。

—○●○—

昼休み

俺達は昼にイツセーと合流して

飲み物を買いに自販機まで来ると、

リアス先輩と朱乃さんに出会った

「これが究極の闇…。」

貴方の夢に出てきたのね」

俺が撮った粘土の写真を見ながら

部長が呟く。

「興味深いわね後で詳しく調べてみるわ」

「部長俺が作った粘土も見てください！」

素晴らしい、イツセーがリアス先輩のミニファイギュアを渡す。

「良くてきてるわね」

素晴らしい、リアス先輩が微笑みながら手でさわっている。話を聞けば、俺達のクラスで成功したから

他のクラスの授業でも粘土を作っており、

イツセーはリアス先輩のミニファイギュアを作ったらしい。

何でもリアス先輩を想像したら勝手に手が動いたそう。

完全にエロパワーだな。

「あらあら、流石、毎日部長の体を

見て触ってるイツセーくんですわね」

朱乃さんも像の出来に驚きながらも

微笑を浮かべていた。

「私も今度作ってもらおうかしら。

再現するためなら脱ぎますわよ、

おさわり有りで」

「マジですか、朱乃さん！」

朱乃さんの言葉に食いつくイツセー。

すると、そんなイツセーの頬を

リアス先輩が引っ張る。

「ダメよ」

まあ、当たり前だな。

エロが動力だからな

そうじゃなければいい特技なんだがな。

「ところでリアス先輩、サーゼクス様は

いらっしやっただんですか？」

俺の質問にリアス先輩は

額に手を当ててため息をついていた。

「ええ、父も一緒に来たわ」

大分お疲れのご様子だ。

どんな授業になったのか気になるところだが、

これは聞かない方が良さそうだな。

「あ、部長、それに皆も」

そこへ木場も合流する。

彼も飲み物を買いに来たのか？

「あら、祐斗。お茶？」

リアス先輩が聞くと、

木場は廊下の先を指差す。

「いえ、何やら魔女っ子が撮影会をしてると

聞いたもので、ちよつと見に行こうかなと

思いました」

木場の返答に俺達は揃って首をかしげるのだった。

—○●○—

カシヤカシヤ！

フラツシユがたかれ、カメラを持った男どもが、

廊下の一角で何かを撮影していた。

人だかりができており、

何を撮っているかは分からなかった。

木場の話だと「魔女っ子」らしいけど…。

俺達は人垣をなんとかぐり抜けて、

前の方に進む。

そこでは、見知らぬ美少女が

アニメキャラのコスプレをしている。

確か、『魔法少女ミルキー

スパイラル7オルタナティブ』のミルキーだったかな？

以前出会った。心は乙女、

体は漢なイツセーのお得意さんの

『ミルたん』が同じ格好をしていたな。

向こうと違ってミルキーにそっくりだな。

いや、あれと比べるのはダメだな。

彼女がステツキを回すと、
回りのカメラ小僧どもが、
興奮して写真を撮っている。
イツセーもチラチラ見えるパンツに興奮して
写真を撮ろうとスマホを構えていた。
すると、人垣を越えてきたリアス先輩が
俺達の隣に到着して、
魔法少女の姿を見るとあわてふためいていた。

「なっ！」

あまりの狼狽ぶりに俺達も驚く。
リアス先輩がここまで驚くとはな、
もしかして知り合いとかか？
よく考えれば家族の授業参観の日に
魔法少女の格好してくるのは
流石にやりすぎだよな。

「オラオラー！天下の往来で撮影会たー

いいご身分だぜ！」

そんなことを言いながら
生徒会の一員である匙が人だかりに飛び込んでくる。
生徒会のメンバーらしき女子生徒も
匙に続いて中心の撮影現場にやってくる。

「ほらほら、解散解散！」

今日は公開授業の日なんだぜ！

こんなところで騒ぎを作るな！」
匙の仕事もさすがだな。

あれほどの人だかりが蜘蛛の子を
散らすようにいなくなっていく。
撮影をしていた男子生徒も匙にどつかれて
渋々去っていった。
残るは俺達と匙達、

そしてコスプレをした少女だけだ。

「あんたもそんな恰好をしないでくれ。って、もしかして親御さんですか？」

そうだとしても場に合う衣装ってものがあるでしょう。困りますよ」

「えー、だって、これが私の正装だもん☆」

匙が注意するが、彼女はかわいらしくポーズを取り聞く耳を持たない。

その態度に奥歯をギリギリ鳴らす匙だが、リアス先輩を確認すると頭を下げる。

「これはリアス先輩。ちようどよかった。

今魔王様と先輩のお父様をご案内していたところなんですよ」

匙が廊下の後方へ顔を向けると、

ソーナ・シトリー会長先導の元、紅髪の男性二人が近づいてくる。

「何事ですか？サジ、問題は簡潔に解決しなさいといつも言ってる」

厳格な会長がそこまで言いかけ、コスプレ少女を見かけるなり、言葉を止めた。

「ソーナちゃん！見つけた☆」

少女は会長を見つけると嬉しそうに抱き着いていく。

まさか、会長の知り合いか？さすがの匙も対応に困るようだな。

ん？二人をよく見ると、どこか似ているような気が…

疑問に思った俺。

サーゼクス様が構わずコスプレ少女に声を掛ける。

「ああ、セラフオールか。

君もここへ来ていたんだな」

セラフオール…？

その名前つてもしかして…。

「あの方は現四大魔王のお一人、

セラフオル・レヴィアタン様。

そして、ソーナのお姉様よ」

「ええええええええええええええええええッ!?」

イツセーの叫び声が廊下に響く。

まあ、イツセーはレヴィアタン様は

妖艶な女性だと思つてたらしいからな。

まさか実際は魔法少女のコスプレ好きとは…。

いや、魔法は使えるからコスプレではないのか？

まあ、魔王少女だなこりや。

「セラフオルさま、お久しぶりです」

「あら、リアスちゃん☆おひさ☆

元気になりましたか?」

魔王様なのにノリが軽いな。

リアス先輩も反応に困っているな。

「は、はい。おかげさまで。」

今日はソーナの授業参観に?」

「うん☆ソーナちゃんったら、酷いのよ。

今日の事、黙つてたんだから!

もう!お姉ちゃん、シヨックで天界に

攻め込もうとしちやつたんだから☆」

そんな事で戦争勃発かよ!

冗談か本気が分かんないな。

「イツセー。ユウスケ。ごあいさつなさい」

リアス先輩の言う通り、俺達は頭を下げて挨拶する。

「初めまして、自分はリアス・グレモリー様の

『兵士^{ポイン}』の兵藤祐介です。」

よろしく願いいたします!」

「は、はじめまして、兵藤一誠。」

同じくリアス・グレモリー様の下僕

『兵士』をやっています！

よろしく願います！」

「初めまして☆私、魔王セラフオール・

レヴィアタンです☆『レヴィアたん』

って呼んでね☆」

ピースサインを横向きでチエキする魔王様。

「ねえ、サーゼクスちゃん。

この子達が噂のドライグちゃんとクウガちゃん？」

サーゼクス様を『ちゃん』付けか。

同格の魔王様だからこそなのか？

「そう、彼らは『赤い龍』

を宿す者、兵藤一誠くんと

過去の戦争時に現れ『究極の闇』と呼ばれた

『クウガ』の兵藤祐介くんだ」

「あらあら、グレモリーのおじさま」

「ふむ。セラフオール殿。

これはまた奇抜な衣装ですな。

いささか魔王としてはどうかと

思いますか…」

「あら、おじさま☆ご存じないのですか？

今この国ではこれが流行りですよ？」

「ほう、そうなのですか。

これは私が無知だったようだ」

「ハハハハ、父上。

信じてはなりませんよ」

なんて会話をグレモリー親子と

レヴィアタン様がしている。

「ぶ、部長、想像を遥かに超えて軽い

ノリなんですけど、そのレヴィアタン様が…」

イツセーの困惑ぶりにリアス先輩も

「ゴメンなさい」と謝ってくる。

まあ、説明がなかったら困惑するわな。

「言うのを忘れていた。いえ、

言いたくなかったのだけれど、

現四大魔王様方は、どなたも

こんな感じなのよ。プライベート時、

軽いのよ、酷いぐらいに」

ため息を吐きながらリアス先輩は言う。

公私の差が酷いのか、

いや、レヴィアアタン様の公務時の姿は見たこと無いから

分からないけども、普段からこの格好なのか？

見れば、会長が顔を真っ赤にしていた！

姉のこの姿と言動が心底恥ずかしいみたいだな。

それに気がついたレヴィアアタン様が

心配そうにのぞきこむ。

「ソーナちゃん、どうしたの？

お顔が真っ赤ですよ。

せっかくお姉さまである私との再開なのだから、

もっと喜んでくれてもいいのですよ？

『お姉さまー』『ソーたん！』

って抱き合いながら百合百合な展開でもいいと思うのよ、

お姉ちゃんは！」

す、すごいな…、これが魔王様か。

会長は目元をひきつらせながら、

遺憾そうに言う。

「…お、お姉さま、ここは私の学舎であり、

私はここの生徒会長を任されているのです…。

いくら、身内だとしてもお姉さまの行動は、

あまりに…。そのような格好は容認できません」

「そんな、ソーナちゃん！

ソーナちゃんにそんなことを言われたら、

お姉ちゃん悲しい！

お姉ちゃんが魔法少女に憧れているって、
ソーナちゃんは知ってるじゃない！
きらめくステイックで天使、墮天使を
まとめて抹殺なんだから☆」

「お姉さま、ご自重ください。」

魔王のお姉さまがきらめかれたら

小国が数分滅びます」

魔法少女なのにステイックの使い方

おかしいだろ！

もはや鈍器じゃん！

「なあ、匙。先日の墮天使幹部が襲来してきたとき、

会長はお姉さんと呼ばなかったけど

…これを見る限り、仲が悪いからって

わけじゃないよな？」

イツセーがそう思うのも無理ないな

この様子だとどちらかというところ…。

「逆だ、逆。話ではセラフオール・レヴィアタン様が

妹を溺愛しすぎているから、

呼ぶと大変なことになるってさ。

妹が墮天使に汚されるとわかったら、

何をしでかすかわからなかったらしいんだよ。

即戦争だよ。あそこはセラフオール様を呼ばずに

ルシファア様を呼んで正解だ。

しかし、俺も初めてお会いしたけど、これは…」

やはり、そういうことか…。

過保護過ぎるほどのシスコンだな。

「うう、もう耐えられませんか！」

あの冷静沈着な会長が目元を潤ませて、

この場を走り去っていく。

「待ってー！ソーナちゃん！」

お姉ちゃんを置いてどこに行くの！」

魔王少女がそれを追って走り出した。

「ついてこないでください！」

「いやああああん！お姉ちゃんを

みすてないでえええええつ！

ソーたあああん！」

『たん』付けはお止めになつてください

とあれほど！」

シトリー姉妹の追いかけてこか…。

この学校を何かの拍子で壊さないといいけどな。

「うむ。シトリー家は平和だ。

そう思うだろう、リーアたん」

「お兄様、私の愛称に『たん』付けで

呼ばないでください…」

今度はグレモリー家でひと悶着が始まったな。

なるほど、リアス先輩は家では『リーア』って

呼ばれていたのか。

「そんな…リーアたん。昔はお兄様お兄様と

いつも私の後ろをついてきていたのに…。

反抗期か…」

シヨックを受けた様子のサーゼクス様。

だけど、少しからかっている様子だな。

「もう…お兄様！…どうして幼少時の私のことを！」

パシヤ！

怒ったリアス先輩を写真に撮る先輩のお父様。

感無量のご様子だ。

「いい顔だ、リアス。よくぞ、ここまで立派に育って…。

ここにこれなかった妻の分まで

私は今日張り切らせてもらおうか」

「お父様、もう！」

魔王の一家って大分個性的なんだな。

普通の家庭と変わらないことに驚いたな。

歴史のある家だからもつとお堅いと思ってたな。

「魔王様と魔王様の御家は面白い共通点があるのですよ」

朱乃さんが微笑みながら愉快そうに言う。

「共通点？」

「魔王様は皆様面白い方々ばかりなのです。」

そして、そのご兄弟は例外なく真面目な方ばかり、

うふふ、きつとフリーダムなご兄弟が魔王様になったことで、

真面目にならざるを得なかったのでしょうね」

リアス先輩も兄弟に苦労してるんだな…。

俺も他人事じゃないように思えたよ。

俺は横にいるイツセーを見ながら、

そんなことを考えていると、そこへ。

「おや、ユウスケにイツセーか」

「父さん」

学内を一通り見て回ったのか、

父さんと母さんが手を上げながら現れた。

「兵藤くん、此方のお二人がご両親かな？」

リアス先輩のお父様が俺達に訊いてくる。

「は、はい」

「俺達の父と母です」

「そうか。うむ」

リアス先輩のお父様が俺達の両親の前へ。

「初めまして、リアスの父です」

握手を求めながら、リアス先輩のお父様が

父さんへ手を差し出す。

相手の紅髪の子士がリアス先輩のお父様だと知り、

父さんと母さんの表情が楽し気なものから

一変して緊張の色が濃くなった。

そりやそうか、いきなりリアス先輩の

お父様に会えばそうなるよな。

「へ、へ、（ムニムニムニムニ）これは、どうも！

あつ、えつと、兵藤祐介と一誠の父です！

リアスさんにはお世話になっておりまして、

えーと、その…」

父さんが見てられないほど、テンパってしまっている。

「いえ、こちらこそ、

リアスがお世話になっておりまして、

いずれ、ご挨拶に伺おうと思っていたのですが、

なにぶん私もサーゼクスも多忙な身でして、

なかなか機会を作れませんでした。

この度、幸運に恵まれたようです。

今日はお会いできて光栄です」

「そ、そんな！ 私達も一度ご挨拶しなければ

いけないと父さんと、いえいえ、

夫と話していたのでしたのですわ」

母さんも言葉が可笑しくなってるぞ、

普段慣れていない言葉を使うから

混乱してるのか。

めっちゃはずかしいな。

まさか順番に家族の恥ずかしい所を

見るとはな。

リアス先輩もイツセーも俺も皆

顔が真っ赤になっている。

授業参観でもこの展開は

予想していなかった。

「うむ。落ち着いた場所でお話し

したいものです。ここは目立つ。

何よりもお互いの子供達が

恥ずかしいでしょう」

流星は年配者のリアス先輩のお父様だな。

魔王様達と違って常識があつて、

空気を読めるとは。

それに比べて家の父さんはまだ緊張
しまくってるよ。

すると、リアス先輩のお父様が
木場へ手を挙げる。

「木場君」

「はい」

「すまないが、落ち着ける

場所まで案内してくれないだろうか？」

「はい。それでは、ご案内します」

木場は俺達の両親に一礼すると、
廊下を歩きだした。

「それではリアス、兵藤祐介君、

兵藤一誠君。私は少しお話をしてくる。

サーゼクス、あとは頼めるな？」

「はい、父上」

サーゼクス様は抜きで話をするのか、

この間あいさつしたばかりだから

今回は親同士での話のようだな。

「ユウスケ、イツセー、父さんと母さん、

ちよつと話してくるから」

「ああ、父さん、変な事言うなよ？」

「イツセーの言う通り、リアス先輩のお父様
に失礼のないようにね」

「任せろ」

本当に分かっているのかね。

木場の先導の元、父さんと母さんと

リアス先輩のお父様はこの場を後にした。

「リアス」

「なんでしよう。お兄様」

「ちよつと、いいだろうか。

すまないね、イツセー君、

妹を少し借りるよ。

朱乃くんも一緒に来てくれるかな？」

と、サーゼクス様がおっしゃる。

「はい」

朱乃さんも応じていた。

何の話をするのだろうか？

まあ、上級悪魔同士の

大切な話だろうから、

下級悪魔の俺達では

参加できないんだろうな。

「は、はい。俺もいいですけど…」

サーゼクス様はリアス先輩と

朱乃さんを連れて、

いずこかへ消えていってしまった。

俺達三人は残されてしまった。

「とりあえず、教室に戻るか」

「そうだな」

「はい」

こうして、俺達は一度教室へ

戻ることにしたのだった。

第44話 「僧侶」

「あらーアジアちゃん、

よく映ってるわ」

テレビに映し出されたアジアを見て、
うっとりする母さん。

「ハハハハーやはり娘の晴れ姿を

視聴するのは親のつとめです！」

日本酒を飲みながら、

豪快に笑うリアス先輩のお父さん。

この方は酒を飲んだら人が変わった
ように陽気になった…。

普段はあんなにダンディだったのにな。

兵藤家の夕食後、リビングでは今日の
授業参観鑑賞会が行われていた。

参加者は家の父母、リアス先輩の

お父さんとサーゼクス様。

酒をあおりながら、

ビデオで撮影したものを交互に見比べていた。

当事者であるイツセーとリアス先輩は
リビングの端っこで顔を赤くしながら、

「早く終われー」と念じていた。

俺とアジアは気恥ずかしいものは

あるがおかしなことをしてるわけじゃないからな
イツセーはクラスの違う自分も

撮影していたのが意外だったのか、
紙粘土の作成風景を映されており

作っている物が物だけに

恥ずかしいようだ。

家の両親とリアス先輩のお父さんが
学校で何を話していたのかは、

知らないが、かなり意気投合して
仲良くなつたのは確かだ。

本当に何があつたのか？

「これは…かつてないほどの地獄だわ…」

顔をすごく真っ赤にさせた

リアス先輩がぶるぶると全身を震わせていた。

「見てください！うちのリーアたんが

先生にさされて答えるのです！」

サーゼクス様がハイテンションで妹の

晴れ姿を解説を始める。

リアス先輩の場合は家族の

反応の方が恥ずかしいようだ。

ついに、顔を手で覆つてしまった！

「耐えられないわ！」

お兄様のおたんこなす！」

おおっと、リアス先輩が

この状況に耐えられずに

この場を走り出してしまった。

スパーン！

グレイファイアさんにハリセンで

張り倒されるサーゼクス様。

「部長！」

イツセーがリアス先輩を追つていった。

—○○●○○—

イツセー s i d e

俺の部屋の扉の前で座り込む部長がいた。

不機嫌そうに頬を膨らませている。

どうしたものか。

「ぶ、部長、俺の部屋、入りますか？」

部長は無言で頷いた。なんだか、普通の女の子になっちゃったな。部屋に入るなり、部長はベッドへ飛び込み、うつ伏せのまま黙ってしまった。なんとも声のかけづらい状況だな。俺は床に座り、気の利いた言葉を脳内で探していた。

「俺の父さん母さんと部長の親御さんがなかよくなっちゃいましたね」

「……………」

うつ、無言だ。いや、静寂な部屋の方が不健康だと思うので、俺はかまわず続けよう。

「この出会いは…俺的には良かったと思います。父さんたちも楽しそうだし、部長のお父さんたちも…ちよつと盛り上がりすぎなところもありますけど…」

「……………わかつているわ。私も父と、

イツセーのお父様が楽しそうに話していて嬉しいのよ」

あ、返事が返ってきた。良かった。

「ねえ、イツセー」

「はい」

「イツセーは私と出会えて幸せ？」
っ。

その質問は予想してなかった。部長は続ける。

「私はイツセーと出会えて幸せよ。」

もう、貴方抜き我的生活は無理ね。

光栄に思いなさい。

私の心中は貴方で結構占められているのよ？」

そ、そこまで俺のことを

かわいがつてくれていたのか…。

下僕冥利につきます！

「光栄です！俺も部長と出会えて幸せです！

これは断言できます！…でも、

いつか部長にも彼氏ができるのかなと思うと、

俺、切ないです…。

遠くに行つちやうんじやないかって」

部長は顔をあげて、俺に言う。

「あら、私、彼氏なんて作らないわよ？

というよりもそういうことを

貴方が口にするなんてちよつとショックだわ」

「え？でも、旦那さんを

迎え入れないといけないんですよね？」

「そうね。御家存続のためにも

婿養子が必要だわ」

？うーん、いまいち見えてこない。

「自分の婿は自分で育てることにしたの。

どうせなら、自分の理想は自分で

育成するわ。その方が早いのよ。

ね、イツセー」

「はあ、なるほど」

よくわからんが、部長の婿育成か。

願わくば、俺がそこに入りたいけど、

それはそれでハードなんだろうな。

招来の部長の旦那…。

育成の末にどんな旦那が誕生するんだ？

いやいや、やっぱり俺がそこに入りたい！

…けど、無理なのかな。

「結婚式ももう考えているのよ？」

和式が良いわ。披露宴は日本のどこかがいいわね、

風景の綺麗な場所というと」

部長はすでにそこまでビジョンがあるのか。

うーん、部長と結婚してえ！

「ッ」

俺の口が塞がれる。

首に腕を回され、

ぶちゅーつと…

部長のキスを受けていたツツ!?

うおおおおっ！

お、俺、また部長とキスしてるうううう！

部長とのセカンドキス！

やった！部長のセカンドキス

ももらいました！

えーと、これは何のご褒美？

い、いや、細かい事は無しだ！

お、俺は今この感触を堪能していたいいいいッ！

そこへ銀髪のメイドさんが介入してくる。

「お楽しみ在所申し訳ございません」

突然現れたグレイフィアさんに驚く俺達。

「失礼するよ二人とも」

さらにサーゼクス様まで

俺の部屋に入ってくる。

鑑賞会は終わりですか？

「ちよっと抜け出してきたのだよ。

改めて話があるからね。

リアス、昼間の話の続きだ」

話？なんだろうか？あー、

部長と朱乃さんがサーゼクス様に
呼び出されていたな。

疑問に思う俺へ、

サーゼクス様は予想外の一言を口に出す。

「もう一人の『僧侶』^{ビシヨツプ}に

ついでの話でしょう」

っ。

それは、俺やユウスケやアーシアが転生する前に
すでにいたという、

謎の部員『僧侶』^{ビシヨツプ}のことだった。

―○●○―

ユウスケ side

次の日の放課後。

俺達は旧校舎一階の「空かずの教室」

とされていた部屋のの前の前に立っていた。

今は部員全員が集まっていた。

この部屋は外からも嚴重に

閉められており、中を見ることはできなかった。

何に使われているのか、

今まで説明が無かったのだが…。

話ではここにもう一人の『僧侶』がいるらしい。

もう一人の『僧侶』。

俺達が悪魔になる前から眷属だった存在で。

ずっと謎にされていた存在だ。

諸事情があつて先日のフェニックスとの

レーティングゲームやコカビエルとの

戦いでも姿を現さなかった。

話では、その能力が危険視されて、

リアス先輩の能力では扱い切れないと判断され、

上から封印するように言われていたらしい。
能力だけなら神をも殺せる力がある。

イツセー以上にヤバイ能力か、
どんなやつなんだ。

昨夜イツセーの部屋に呼ばれて

説明を受けたが、

リアス先輩が四大魔王、

大王バアル家、大公アガレス家、

悪魔のお偉い皆さんから

フェニックス家との一戦と

コカビエルとの一戦で

高評価を得たらしい。

封印されたもう一人の『僧侶』^{ビショップ}

を今なら扱えるだろうと判断され、

解禁となった。

で、「開かずの教室」の扉だけ…。

『KEEP OUT!』のテープが幾重にも

貼られており、呪術的な刻印も刻まれている。

「ここにいるの。一日中、ここに住んでいるのよ。」

いちおう深夜には術が解けて旧校舎内だけなら

部屋から出てもいいのだけれど、

中に居る子自身がそれを拒否しているの」

と、リアス先輩。

何やら扉に向けて手を突き出して

魔法陣を展開していた。

解錠の魔法陣だろうか？

しかし、こんな狭苦しい所に

ずっといるなんてな、

夜だけなら外に出れるのに

それも嫌がるなんてな。

「ひ、引きこもりなんですか？」

「ごきげんよう。元気そうで良かったわ」

「な、な、何事なんですかああああ？」

なかでのやり取りが聞こえてくる。

声からして、中性的だが…女の子か？

それとも年下の男か？

分からないが、酷く狼狽しているのは分かる。

「あらあら。封印が解けたのですよ？」

もうお外に出られるのです。さあ、

私達と一緒に出ましょう？」

朱乃さんが優しく声を掛けています。

しかし。

「やですうううー…ここがいいですうううー！

外に行きたくない！人に会いたくないいいいつ！」

これは引きこもりとして重症なのは…？

俺とアーシアは顔を見比べ、首を傾げる。

ゼノヴィアも「？」と疑問符を浮かべている様子だ。

木場と小猫ちゃんだけ、事情を知っているのか、

木場は苦笑し、小猫ちゃんはため息をついていた。

そしてイツセーが恐る恐る部屋を覗いていた。

俺も中が気になり、少しだけ中を覗いてみると、

カーテンが全て閉められた部屋で薄暗い。

部屋の中は以外にもかわいらしく装飾されていて、

女の子の部屋らしい、ぬいぐるみも置いてある。

だが、何故か部屋の一角には

葬儀に使われる棺桶が一つ置かれていた。

リアス先輩と朱乃さんが奥にいる。

その先に『僧侶』^{レシヨック}がいるのか？

俺達はそちらに近づくと、そこにいたのは、

金髪と赤い双眸をした人形みたいに

端正な顔立ちをした美少女だった。

床にへたりと力なく座り込み、

リアス先輩と朱乃さんから逃げようとしているようだ。すごい震えてるな。

服装も駒王学園の女子の制服に身を包んでる。可愛いと思うけどなんか違和感を感じる子だな…。

「おおっ！女の子！しかも外国の！」

相手が女の子だと知り喜ぶイツセーだが、リアス先輩が首を横に振る。

「見た目女の子だけれど、

この子は紛れもない男の子よ」
えー。

マジかよ違和感の正体はそれか。

「いやいやいや、どう見ても女の子ですよ。

部長！…え？マジで？」

「女装趣味があるのですよ？」

横から朱乃さんが平然と言ってくる。

まあ、身内にも変態がいるからな。

つうか隣にいるし、人の趣味趣向にケチはつけないが、

「ええええええええええええええええええええええっ!？」

イツセーがあまりの衝撃に大声を張り上げてしまう。

「ヒイヒイヒイヒイッ！ゴメンなさあああ！」

金髪っことはイツセーの声に

ビックリして悲鳴をあげていた。

その姿を見る限りは女の子に見えてしまう。

所作や声は完全に女の子だ。

「うわあああああああああああッッ！」

イツセーは頭を抱えて、

その場にしゃがみこんだ。

まあ、好みの子が現れたと思ったら

男だったわけだからな。

「こんな残酷な話があつていいものか…。

完全に美少女な姿で…男だなんて…

イチモツが付いているなんて…」

「…下品な単語禁止」

いつの間にか入ってきていた
小猫ちゃんがイツセーに声を掛ける。

「諦めて目の前の現実を受け入れろよ

イツセーどんなに文句言ったって

目の前のこいつが女になることはないぞ」

俺はいつまでも俯いているイツセーに

声を掛ける。

「女装趣味つてのがさらに残酷だ！

似合っている分、余計に真実を

知った時のショックがデカい！

引きこもりなのに女装癖かよ！

誰に見せる為の女装ですか!?!」

イツセーの一言に女装少年が反論する。

「だ、だ、だって、女の子の服の

ほうがかわいいもん」

「かわいいもん、とか言うなアアア！

クソツ！野郎のクセにいいい！

俺の夢を一瞬で散らしやがってえええつ！

お、俺は、アーシアとお前のダブル

金髪美少女『僧侶』^{レシヨツ}を瞬間的にとはいえ、

夢見たんだぞ!?!返せよう！

俺の夢を返せよう！」

勝手に自分の夢を他人に押し付けるなよ。

「…人の夢と書いて、夢い」

小猫ちゃああああん！洒落にならんから！」

「と、と、と、と、と、と、と、と、この方は誰ですか？」

女装少年がリアス先輩に訊く。

リアス先輩は俺とイツセー、アーシア、ゼノヴィア
を指して言う。

「貴方がここにいる間に増えた眷属よ。」

『^{ボーン}兵士』の兵藤一誠、兵藤佑介、

『^{ナイト}騎士』のゼノヴィア、

貴方と同じ『^{レシヨツプ}僧侶』のアーシア」

紹介されたので、『よろしく』と四人で挨拶するが、女装少年は「ヒイイイ、人がいっぱい増えてる！」と怖がっている。

これは対人恐怖症か？

また面倒なタイプだな…。

「お願いだから、外に出ましよう？ね？」

もう貴方は封印されなくてもいいのよ？」

リアス先輩が優しく声を掛けるが、

「嫌ですううう！僕に外の世界なんて

無理なんだあああつ！怖い！お外怖い！

どうせ、僕が出てつても迷惑を掛けるだけ

だよおおおおつ！」

すると、彼の言動に腹が立ったのか、

イツセーが彼に近づき、腕を引く。

「ほら、部長が外に出ろって」

イツセーは彼を外に引つ張ろうとする。

「待て、イツセー！この手の奴を無理に出そうとすると」

俺はすぐにイツセーを止めようとする。

「ヒイイイ！」

女装少年の絶叫と共に目の前が真っ白に。

…。

…あれ、目の前にいた女装少年が居なくなっている。

周りを見渡せば部屋の片隅でぶるぶると震えている。

なんだ、何が起きた？

なんで一瞬で移動してるんだ？

催眠術だとか超スピードだとか、

チャチなものじゃ断じてねえ。

「おかしいです。なにか今一瞬……」

「なにかされたのは確かだね」

「一体何をしたんだ？」

謎の現象に俺達は驚いていたが、

他のメンバーはため息を付くだけだった。

木場達はこの現象がなんなのか知ってるのか。

「怒らないで！怒らないで！」

ぶたないでくださああああいッ！」

彼は相変わらず叫んでいるだけだが、

彼が何かしたのは確かだな。

疑問に感じていた俺達に

朱乃さんが説明してくれる。

「その子は興奮すると、視界に写した

全ての物体の時間を一定の時間停止

することができる神器を持っているのです」

時間停止!?

そんな能力を持っているのか！

あの時、時間を止めて逃げたのか。

逃げた先が部屋の隅なのはやっぱり引きこもり

として重症だな。

「彼は神器を制御できない為、

大公及び魔王サーゼクス様の

命でここに封じられていたのです」

朱乃さんの説明で俺達は理解する。

時間を停止する。

それは凶悪な能力だ。

それを制御できないとなると、

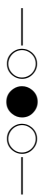
その被害は味方にもおよぶ可能性があるからな。

リアス先輩は女装少年を後ろから

優しく抱きしめ、俺達に言う。

「この子はギヤスパー・ヴラディ。」

私の眷属『僧侶』ビシヨップ。いちおう、
駒王学園の一年生なの。
そして、転生前は人間と吸血鬼のハーフよ」



「『停止世界の邪眼』?」
フオービトウン・パロール・ビユ

俺達の問いにリアス先輩が頷く。

「そう。それがギヤスパアの持つている
神器の名前。とっても強力なの」

「時間を停めるって、それ、

反則に近い力じゃないですか?」

「危険視されるのも当然か…」

俺達の言葉にリアス先輩も応じる。

「ええ、そうね。でもイツセーの

倍加の力も、白龍皇の半減の力も

反則級なのよ?」

それもそうか、それを考えると

リアス先輩の眷属はヤバい力が
集まってるんだな。

「問題は、それを扱えないところ。

それゆえギヤスパアは今まで封じられてきたのよ。

無意識に神器が発動してしまうのが問題視

されていたところなの」

俺の思った通りか。

「しかし、そんな強力な神器を持った奴を

よく部長は下僕に出来ましたね。

しかも駒ひとつ消費だけで済むなんて」

「たしかにな、これだけ強力なんだから

複数の駒が必要な気がするが…」

俺達の言葉にリアス先輩は手元に

一冊の本を宙に出現させ、
ペラペラとページをめくり、
開いたままこちらへ差し出す。

俺達が覗き込むと、

『イーザイル・ピース悪魔の駒』

についての説明ページだった。

「『ミューテーション・ピース変異の駒』よ」

「…ミューテーション・ピース？」

イツセーの問いに木場が答える。

「通常の『イーザイル・ピース悪魔の駒』とは違い、

明らかに駒を複数使う出あろう転生体が、

ひとつで済んでしまったりする特異な現象を

起こす駒のことだよ」

「部長はその駒を有していたのです」

と、朱乃さん。木場が更に続ける。

「だいたい上位悪魔の十人に一人は

ひとつぐらい持っているよ『イーザイル・ピース悪魔の駒』

のシステムを作り出した時に生まれたイレギュラー、

バグの類らしいんだけど、

それも一興としてそのままにしたらしいんだ。

ギヤスパークくんはその駒を使ったひとりなんだよ」

なるほど、そんな貴重な駒を持っていたのか。

「問題はギヤスパークの才能よ」

「どういうことですか？リアス先輩」

「彼は類稀な才能の持ち主で、無意識の内に神器の

力が強まっていくみたいなの。そのせいか、

日々力が増していつてるの。上の話では

将来的に『バランス・プレイヤー禁手』へ

至る可能性もあるという話よ」

ッ！

イツセーや木場が足を踏み入れた領域だ、

目の前でその力は見たが、

あれは危険な力だ、

それを力を制御できない奴が

あの領域に至ったらどうなるんだ！

俺達の驚いた様子を見て分かったのか、

リアス先輩も困り顔で額に手を当てている。

「そう。危うい状態なの。けれど、

私の評価が認められたため、

今ならギヤスパーを制御できるかもしれないと

判断されたそうよ。

私がイツセーと祐斗を『バランス・プレイヤー禁手』

に至らせたと上の人達は評価したのでしようね」

木場は分かるが、イツセーに関して言えば

限定条件があつて更に未完成だぞ、

まあ、それでも上級悪魔を倒したのが

評価されたのか。

「パニシング・ドラゴン白い龍」の介入があつたとはいえ、

コカビエルの一件で大きな被害もなく

未然に防いだからこそ、

今のギヤスパーを扱えると判断したのか。

「…うう、ぼ、ぼ、僕の話なんてして欲しくないのに…」

俺達の傍に大きな段ボールが置かれている。

声はそこからしていた。

イツセーが無言で蹴る。

「ひいひいひいひいっ！」

中から悲鳴が聞こえてくる。

もちろん、ギヤスパーの声だ。

あまりに外の世界が怖いので、

大きな段ボールに入り込んでいるみたいだ。

こいつは…。

そこまで嫌か、あの部屋以外の場所が、

「能力的には朱乃について二番目なんじゃないかしら。ハーフとはいえ、由緒正しい吸血鬼の家柄だし、強力な神器も人間としての部分で手に入れている。吸血鬼の能力も有しているし、人間の魔法使いが扱える魔術にも秀でて^{ビシヨック}いるわ。とてもじゃないけど、本来『僧侶』の駒一つで済みそうにないわね」とリアス先輩が言う。

この引きこもりはそんなに凄いのか…。

「部長、吸血鬼って太陽に弱いんですね？」

こいつ大丈夫なんですか？」

それもそうか、失念してたが、

太陽光は悪魔以上に弱いはずだ、

だから段ボールに入っていたのか。

イツセーの問いにリアス先輩は頷く。

「彼は『デイウオーカー』と呼ばれる

日中活動できる特殊な吸血鬼の血を引いてるから問題ないわ。ただ、苦手ではあるでしょうけど」

なら段ボールは関係ないのかい！

「日の光嫌いですうううう！」

太陽なんてなくなっちゃえばいいんだあああつ！」

まあ、悪魔にとつても太陽は天敵だしな。

だが、俺達は学生だ日中は学園生活をしないとな。

「おまえ、授業でてないだろう？」

力を克服してクラスと打ち解けなきやダメだぞ？」

イツセーもなじめているとは思えないがな

特に女子生徒からの苦情の数と言ったら。

イツセーの説得にギヤスパーはわめきだした。

「嫌です！僕はこの段ボールの中で十分です！」

外界の」空気と光は僕にとって外敵なんですうううツ！

箱入り息子ってことで許してくださいさあああいつ！
物理的に箱に入ってるじゃねえか！

これはひどいな。

「リアス先輩、こいつは血を吸わないんですか？

吸血鬼でしょう？」

俺の質問にリアス先輩が答える。

「ハーフだから、そこまで血に飢えている

わけではないわ。十日に一度、

輸血用の血液を補給すれば問題ないの。

もともと血を飲むのは苦手みたいだけれど」

「血、嫌いですうううう！」

生臭いのダメエエエエ！

レバーも嫌いですううう！」

血が嫌いな吸血鬼とかどうすればいいんだか。

「…へたれバンパイア」

小猫ちゃんの吐き捨てるような痛恨の一言。

さすが小猫ちゃんは容赦ない。

「うわああああん！」

小猫ちゃんがいじめるうううう！」

上級生相手でも容赦ないからな、

一年生の同級生同士でも容赦ないよな。

「とりあえず、私が戻ってくるまでの間だけでも、

イツセー、ユウスケ、アーシア、小猫、

ゼノヴィア、貴方達にギヤスパアの教育を頼むわ。

私と朱乃は三すくみトップ会談の会場打合せを

してくるから。それと祐斗、

お兄様が貴方のパランス・ブレイカー禁手に

ついて詳しく知りたいらしいから、

ついてきてちょうだい」

「はい、部長」

リアス先輩もやること多くて大変だな

木場も魔王様に呼び出しか、あの聖魔剣についてかな？

確か、あれは本来有り得ない現象で出現して神器の形態としてはイレギュラーなんだよな…。

そりゃ、調べたいよな。

「イツセーくん、悪いけど、

ギヤスパー君のこと、お願いするね」

「ああ、任せろ木場。まあ、

皆がいるし、なんとかなると

思うぞ。たぶんな」

まあ、引きこもりのバンパイア。

先行き不安だけどな。

「ギヤスパー君、そろそろお外に

なれないといけませんわよ?」

段ボール越しに朱乃さんが話しかける。

「朱乃お姉さまあああ!」

そんな事言わないでくださいいいい!」

「あらあら。困ったわねイツセーくん、

ユウスケくんお願いね」

「はい、朱乃さんにお問い合わせたら、

俺も頑張っちゃいます!」

「できる限りの事はしてみます」

「うん。では、ユウスケ、イツセー、

こいつを鍛えようか。軟弱な男はダメだぞ。

それに私は小さい頃から吸血鬼と相対してきた。

扱いは任せてほしいね」

と、ゼノヴィアはギヤスパーイン段ボール

に括りつけてある紐をひっぱりだした。

でも君の経験って滅した経験だよな。

「ヒイヒイッ!せ、せ、せ、聖剣デュランダルの

使い手だなんて嫌ですうううう!

滅ぼされるうううう！」

「悲鳴上げるな、ヴァンパイア。

なんなら、十字架と聖水を用いて、

さらにニンニクもぶつけてあげようか？」

「ヒイヒイヒイッ！ガーリック、

らめえええええ！」

まあ、ゼノヴィアとの出会いが

コイツにとって不運だったな。

つうか、ゼノヴィア。

悪魔が悪魔祓い行為をしたら

君もダメージ受けるんだぞ。

はあ、先行き不安だ…。

第45話「邪眼」

「ほら、走れ。デイウオーカーなら

日中でも走れるはずだ」

「ヒイヒイヒイ！ デュランダルを振り回しながら
追いかけて来ないでええええええ！」

夕方に差し掛かった時間帯。

旧校舎近くで吸血鬼が聖剣使いに

追いかけていた。

傍目から見たら完全に吸血鬼狩りだな。

デュランダルも「ブウウウウツッ！」

という危険な音を立てながら

聖なるオーラを放ち続ける。

ギヤスパーも逃げるのに必死だ。

まあ、追い付かれたら一瞬で滅ぼされるしな。

何でもゼノヴィア曰く、

「健全な精神は健全な肉体から」らしく、

ギヤスパーの体力から鍛えることに

したらしい。

彼女は相変わらず豪快過ぎるな。

伝説の武器を振り回しながら追いかけている

様もどこか楽しげである。

そういや、こつちに住むようになって、

今やることなす事全てが楽しいと言っていたな。

その辺はアジアがこの町に住むようになった時と

同様かもしれない。

使途として質素な生活をしてたわけだから、

ほぼ無宗教の国である日本での出来事は

全部新鮮だろうな。

「私と同じ『僧侶』さんにお会いして光栄でしたのに、

目も合わせてもらえませんでした…ぐすっ」

残念そうなアーシア。ちよつと涙目だ。

家でもよく「もう一人の

『僧侶』さんに会いたいです」って、

心待ちにしている様子だったしな。

せつかくの出会いも相手が極度の人嫌いじゃ仕方ないか。

まあ、俺達悪魔だけど。

しかし、うちのアーシアとも目を合わせられないか、

相手は悪魔としては先輩だが、

学園では後輩なんだから、

俺達が先輩として導かないといけないだろうか。

目指せ！脱引きこもりだな。

と件の後輩を見れば、

ニンニクを持った小猫ちゃんと聖剣を持つゼノヴィアに

追いかけてまわされていた。

「…ギャーくん、ニンニクを食べれば健康になれる」

「いやあああん！小猫ちゃんが僕をいじめるううう！」

一年生同志、仲が良いのかな…？

話では、小猫ちゃんが唯一、いじれるキャラだと

聞いたが…。イジメてるのか？

てか、こんな小猫ちゃん初めて見たな。

「おーおー、やってるやってる」

と、そこへ生徒会メンバーの匙が現れる。

「おっ匙か」

「どうしたんだ？こんな所まで？」

「よー、兵藤兄弟。監禁された引きこもり

眷属がいるとかって聞いてちよつと見に来たぜ」

「ああ、あそこだ。ゼノヴィアに

追いかけて回されているのがそうさ」

俺はギヤスパーを指差し答える。

「おいおい、ゼノヴィア嬢、

伝説の聖剣豪快に振り回してるぞ？

いいのか、あれ。おっ！

てか、女の子か！しかも金髪！」

うれしそうな匙。まあ、だと思ふよね。

「残念、あれは女装野郎だ」

それを聞き、心底落胆した様子の匙。

ガツカリしているな。

「そりゃ詐欺だ。てか、女装って

誰かに見せたいためにするものだろう？

それで引きこもりって矛盾過ぎるぞ。

難易度高いなあ」

「だよな。意味のわからん女装癖だ。

似合っているのがまたなんとも言えん。

で、そういう匙は何をやっているんだよ」

イツセーと意気投合する匙の格好はジャージだ。

軍手をして、花壇用の小さなシャベルを持っていた。

「見ての通りだ。花壇の手入れだよ。

一週間前から会長の命令でな。ほら、

ここ最近学園の行事が多かっただろう？

それに今度魔王様方もここへいらつしやる。

学園をキレイに見せるのは生徒会の

『兵士』たる俺の仕事だ」

えっへんと胸を堂々としているが、

要するに只の雑用係じゃ…？

まあ、誰もやらない事を

「進んでやるのも生徒会の仕事なのかな？

ザツザツ…。

そんな話をしていたら、

ここへ近づいてくる誰かの気配。

俺達がそちらへ視線を向けた時。

俺は我が目を疑った。

「へえ。魔王眷属の悪魔さん方は

「ここで集まってお遊戯してるわけか」

「あら、提督さん、彼らはまじめにやってるのよ」

浴衣を着た悪そうな男性と

長い黒髪をオールバックにしている女性。

俺達は男性の方に見覚えがあった。

「アザゼル…ッ！」

「よー、赤龍帝にクウガ。あの夜以来だ」

全員が突然現れたそいつを怪訝そうに

見つめていたが、俺達の一言で空気が一変する。

ギイン！

ゼノヴィアが剣を構える。

空気を察したのか、アーシアが俺の後ろに隠れ、

俺も彼女を守る為に変身する。

それに合わせてイツセーもブーステッドギアを

出現させる。

奴の目的はなんだ？

なんでこんな所にいやがる!?

匙も驚愕しながらも右手の甲に

デフォルメ化したようなトカゲの頭を出す。

匙の神器だ。

「ゆ、ユウスケ、アザゼルって！」

「その名の通り、堕天使の大将だよ！

俺達は以前に接触しているんだ！」

俺の真剣な反応で理解したのか、

匙も戦闘の構えを作り出した。

アザゼルと謎の女性は俺達の姿勢に苦笑する。

二人は殺気どころか、戦闘をする気配すら

うかがわせなかった。

「提督さんが変なちよっかい掛けるから

すっかり警戒されてるわね」

「はあ、やる気はねえよ。ほら、
構えを解きな、下僕悪魔くん達。

ここにいる連中が集まった所で
俺には勝てないのはなんとなくでも

分かるだろう？俺だつて、

下僕悪魔相手にいじめなんか
するつもりはない。

ちよつと散歩がてら悪魔さんの所に見学だ。

聖魔剣使いはいるか？ちよつと見に来たんだが？」

と、奴は言うが誰も構えを解かない。

まあ、堕天使の言うことを鵜呑みには出来ない、

目的は木場か奴は神器集めが趣味だったか、

特別な神器が現れたと知り

見に来たようだな。

「木場ならいないさー」

木場を狙つてるならそうはさせない！」

アザゼルにイツセーが噛みつくが、

向こうは呆れた様子で話だす。

「…つたく、コカビエルにも勝てなかつたくせに

俺と勝負になるわけねえだろうにさ。

そうか、聖魔剣使いは居ないのかよ。つまんねえな」

頭をポリポリかきながら、

アザゼルが近寄ってくる。

敵意は全くない。それが逆に不気味だ。

俺達は束になつてもコカビエルに勝てなかつた。

相手はあのコカビエルよりも強い存在だ。

その気になれば俺達なんて瞬殺かもしれない。

アザゼルはとある木を指差す。

「そこで隠れているヴァンパイア」

ビクツと木陰に隠れていたであろう

ギヤスパーが慌てふためく。

ギヤスパーに近づきながら墮天使の総督は言う。
フオーレ・トウン・パロール・レ・ビユー
『停止世界の邪眼』の

持ち主なんだろう？そいつは使いこなせないと
害悪になる代物だ。

神器の補助具で不足している要素を

補えばいいと思うが…。そういや、

悪魔は神器の研究が進んでいなかったな。

五感から発動する神器は持ち主の

キャパシティが足りないよ

自然に動き出して危険極まりない」

ギヤスパーの顔というか、

両眼を覗き込むようにしているアザゼル。

とうのギヤスパーは墮天使のトップの顔が

近づいてきてブルブル震えていた。

まあ、当然の反応だと思ふな。

アザゼルから不思議と悪意は感じられない。

むしろ、興味津々の様子だ。

それは俺以外の皆も感知したのか、

どう対応したらいいのかわからないでいた。

はた目から見たら、ギヤスパーが墮天使に

襲われているように見えてしまうが…。

アザゼルがこちらへ振り向くと、

匙を指さす。驚きながらも身構える匙。

「それ、『黒い龍脈』か？」
アフソープジョン・ライン

練習するなら、それを使ってみろ。

このヴァンパイアに接続して神器

の余分なパワーを吸い取りつつ発動すれば、

暴走も少なく済むだろうさ」

アザゼルの説明に匙も複雑な表情を見せる。

「…お、俺の神器、相手の神器の力も吸えるのか？」

ただ単に敵のパワーを吸い取って弱らせるだけかと…」

それを聞き、アザゼルは呆れた様子だった。

「つたく、これだから最近の神器所有者は

自分の力をろくに知ろうとしない。

『アブソーブジョン・ライン黒い龍脈』は伝説の五大龍の一匹、

『ブリズン・ドラゴン黒邪の龍王ヴリトラの力を宿している。

まあ、これは最近の研究で発覚したことだがな。

そいつは、どんな物体にも接続することができて、

その力を散らせるんだよ。

短時間なら、持ち主側のラインを引き離して

他の者や物に接続させることも可能だ」

「じゃ、じゃあ、俺側のラインを…

たとえばイツセーとかに繋がられるのか？

それでイツセーの方にパワーが流れると？」

「ああ、成長すればラインの本数も増える。

そうすりゃ吸い取る出力も倍々だ」

「……………」

匙が黙って考え込んでしまった。

奴の話が本当なら匙の神器の

能力は凄いな。

「神器の上達で一番てつとり早いのは、

赤龍帝を宿した者の血を飲むことだ。

ヴァンパイアには血でも飲ませておけば

力が付くさ。

ま、あとは自分達でやってみろ」

アザゼルはそう言う俺の方へやってくる。

「そうそう、今日はお前さんに

会いたいって奴が居るんだった」

アザゼルの言葉に反応して隣に居た

女性が話しかけてくる。

「あなたが、兵藤祐介君ね？」

「そうですけど、貴方は？」

「私の名前はニコ・ロビン、考古学者をしてるわ」

ニコ・ロビンと名乗った女性は俺の姿に興味あるのかジロジロと観察している。

「やはり、このクウガは

東城君とは別物のクウガのようね」

なっ！

「見て分かるのですかそんな事が！」

俺の質問に彼女が答える。

「ええ、貴方が付けているベルト『アークル』

にはリントの古代文字が刻まれているは

その文字はリント文明の碑文でも

確認されたものだけど、

貴方と東城君のベルトでは

内容が変わっているの」

俺のベルトにそんな秘密があるなんて

「碑文や東城君のベルトには

『心清く体健やかなるものこれを

身につけよさらば戦士クウガと

ならんひとたび身につければ

永遠に汝とともにありてその

力となるべし』と書かれているわ」

「俺のベルトは違うんですか？」

「貴方のベルトはこれを身につけよから

始まっているの、そのベルトは

東城君の付けているベルトより

前に作られたもの、

いわばプロトタイプクウガといふべきものよ」

「プロトタイプ？」

だから奴も未完成だって言ってたのか」

俺の変身するクウガそもそも

未完成の者だったからか？

「勘違いしているようだけど」

あなたと東城君のベルトの違いは
リミッターの有無だけよ

あと貴方のベルトには安全装置が
無く暴走するリスクが

東城君のベルトよりも上なの

それは、貴方も心当たりがあるんじゃない？」

たしかに、アーシアに出会ったばかりのころや

旧校舎でライザーの眷属と戦った時も

暴走の予兆があった。

「貴方のベルトの方がリミッターがない分

能力的には上だけれど、暴走の危険性が高いはず、

なのにあなたは今まで暴走の予兆はあっても

暴走した事がない。これは凄い事よ」

ロビンさんはクウガに大変興味があるようだ。

「うちのロビンが悪いな、

俺も神器とは違う力は大変興味はあるが

そいつはリント族の歴史に

大変興味があつてな

自分の分からない事は調べないと

気が済まないのさ」

はあ。

「予想だけれど、『イーヴィル・ピース悪魔の駒』が

制御装置の代わりをしているんじゃないかしら」

なら、俺は何故騎士の姿にしかねないんだ？

リミッターの有無だけなら、

俺のクウガの方が制御装置がついた分

強くなれるはずだ…。

だけど、五代さんと共闘したとき、

強さは同じぐらいだった…。

「ロビンさんの話しが本当なら

俺が変身するクウガは本来の者より強いって
ことですが、俺は以前出会った他のクウガと
力は変わりなかったですし
フォームチェンジも『群青ナイトフォームのクウガ』
にしか変身する事は出来ませんが、
それもプロトタイプだからですか？」
俺の質問にロビンさんは
興味深そうに聞いている。

「東城くん以外のクウガの話は気になるわね
ベルトは貴方のプロトタイプと
東城君の二つしかない筈…。」

貴方が他のフォームになれない件は
私にも分からないわ。

碑文の内容の通りなら、
貴方もフォームチェンジは出来るはずよ
出来ないのは多分あなた自身の
問題ね、それに新たに変身した姿は
駒の特性が強く出た結果かしら？

『兵士』のプロモーションの能力が
変化したのかしらね

私はあなたには期待しているのよ」

ロビンさんが微笑みながら言う。

「従来とは違う進化をするクウガ
興味は尽きないけど今はまだ

その時ではないから今日はここまで
三すくみの会談後にまた

貴方についておしえてちょうだい」
それだけ言うと、ロビンさんはアザゼルと共に
この場に後にしようとする。

しかし、アザゼルは一度だけ止まり、
俺達のほうへ顔を向けた。

「ヴァーリ、うちの白龍皇と東城が

勝手に接触して悪かったな。

さぞ驚いただろう？

なに、あいつらは変わった奴等だが

悪い奴等じゃないさ、ヴァーリも

今すぐ赤白ライバルの完全決着を

しようなんて思っちゃいないだろうさ」

とアザゼルは言うが…。

「正体語らずに俺へ度々接触してきた

あんたの方は謝らないのかよ？」

墮天使の総督相手にイツセーが文句を言う。

まあ、その件も大分驚いたからな。

墮天使のトップが悪魔の稼業に干渉とか、

あれは冗談では済まないからな。

だが、アザゼルは悪戯な笑みを

見せながら一言だけ言う。

「そりゃ、俺の趣味だ。

謝らねえよ」

それだけ言い残すと、

彼らはこの場から去っていった。

……。

取り残された俺達。

顔を見合わせて反応に困っていたが、

匙が息をついたあとに動きだす。

「…とりあえず、そこの新顔くんは

俺の神器を取り付けてみるか。

その状態で、神器を使ってもらって

練習でもしようぜ。

その代わりに今度お前らに

俺の花壇を手伝ってもらおうからな」

匙の提案に皆うなずき、

ギヤスパアの神器修行が開始された。

匙が『黒い龍脈』

の舌をギヤスパアに接続し、
余分な力を吸い取る。

アザゼルの言うように吸引は可能だった。

：本当に神器に詳しんだな、あの総督は。

その後、俺達が投げるバレーのボールを

ギヤスパアが視界に映した瞬間、

停止させていく。停止された物体は、

だいたい数分間だけ動きを完全に止められる。

ボールだったら、放った状態で宙に停止した。

生物ならその動き、格好のまま停止する。

止められた者は、その間、

意識まで完全に停止される為、

止められてる間の記憶がない。

俺も何度か体験したが、

違和感を感じるが、何をされたかは分からなかった。

『^{ナイトフォーム}群青のクウガ』なら止められる前に

視界から逃げる速度があれば問題ないが、

強力な神器であることには変わらない。

視界に写るのが近ければ近いほど

止められる時間が長く。

遠ければ遠いほど範囲は広くなるが

止められる時間は短くなる。

ギヤスパア自身も使いこなせていない為か、

視界に写した特定の物を停止することは出来なかった。

まとめて停止してしまう。

意識して発動することがまだ出来ず。

無意識に発動してしまうことが多々あり。

誰かの体の一部を停止することが何度もあった。

流星に不意打ちで来ると驚いてしまうが、

その度に「ごめんなさいい！」

と叫んで謝りながら逃げ出そうとしてしまう。捕まえて連れ戻すのも大変だ。

これは：思った以上に難しいのかもしれない。

神器の能力も大概だが、

所有者のギヤスパーもこれでは練習が進まん。

しかし、せつかくできた後輩の面倒は

最後まで見ないとな。

コイツを立派な時止めの吸血鬼にしてやるさ。

そう悪のカリスマのようにな。

「どう？練習ははかどっているかしら？」

俺達が練習していると、

リアス先輩がサンドイッチを作って

差し入れてくれた。

やはりギヤスパーのことが気になっていたらしい。

とうのギヤスパーは力を吸われ続け、

ヒイヒイ言っている。

俺達は休憩がてらサンドイッチをいただく。

これは！

スパイスが絶妙に効いているな！

うまい！

「部長、うまいっスー！」

この状況があいまってなのかいッサーが叫ぶ。

「ふふふ、ありがとう。」

材料もそんなに無かったから簡単にしか

作れなかったのだけど」

隣で匙も「うまい！」と唸っていた。

今はここに居ない朱乃さんと木場は

まだサーゼクス様の元にいるらしい。

その後、アザゼルが来たことを聞いた

リアス先輩は驚いてはいたが、

「アザゼルは神器について

造詣が深いと聞くわ。

神器についてアドバイス…。

知識を他者に助言するほど

余裕ということかしら」

何やら考え込んでしまった。

「リアス先輩が帰ってきたし、

俺はそろそろ花壇の作業に戻る」

匙がリアス先輩の作ってくれた

サンドイッチを二、三個口にした後、そう言う。

「匙君。わざわざ私の下僕に付き合っ

てくれてありがとう。お礼を言うわ」

匙はリアス先輩に礼を言われて

顔を赤くしていた。

「い、いいっすよ。先輩は

会長の大事なお友達ですし、

神器についての新たな可能性

も見えました。俺としても

収穫ありつてことで」

匙はやっぱいい奴だな

出会いは悪かったけど、

口が悪いだけで、付き合いもいいしな。

「じゃあ、兵藤兄弟。

あとは頑張れや」

「おう、サンキューな」

「花壇作業は今度手伝いにいくよ」

俺達からも礼を言ったあと

匙はこの場を後にした。

匙を見送ったリアス先輩は、

木の陰で休んでいたギヤスパーに向けて言う。

「ギヤスパー、まだいけるわね？」

匙君に吸われて、ちょうど力も

良い感じに調整されたでしょうし、

残りの時間は私も一緒に練習付き合おうわ」

「が、がんばりますううう」

リアス先輩の声にギヤスパーも

へろへろになりながらも立ち上がったのだった。

こうして、夜になるまでギヤスパーの

神器練習は続いた。

—○○—

次の日の夜ギヤスパーの自信をつける為、

イツセーの依頼についていくことになった。

俺は反対だったが、

本人がやる気だったのと、

イツセーが任せろと言っていたので、

納得いかなかったが二人を送り出した。

自転車の後ろにギヤスパーの入った

段ボールを縛って運んでいくのは

だいぶシユールだったがな。

まあ、イツセーの依頼は

契約せずに友人の家に

遊びに行くようなものだしな。

だけど、何か俺達は肝心な事を

忘れている気がする。

この胸騒ぎは何なんだろうか？

……。

……。

…。

イツセーの依頼者って
ほとんど変態しか
いないんじゃないか？



その日の深夜
依頼も終わり部室に戻ると、
ギヤスパーが依頼者を停めてしまい。
引きこもりに戻ってしまっていた。

第46話 「心の扉」

「ギヤスパー、出てきてちょうだい。
イツセーに連れて行かせた私が
悪かったわ」

ギヤスパーの部屋の扉前で
リアス先輩が謝っていた。

「イツセーと仕事をすれば、
もしかしたらあなたの
ためになると思って…」

『ふえええええええええんっつ！』

旧校舎の自室に閉じこもった

ギヤスパーは外にまで聞こえる

声量で泣いている。

人嫌いで神器を使いこなせず

迷惑を掛けていること、

こいつは抱えていることが

ややこしくなっている。

自信をつけようと思った

依頼者が変態で怖かったらしい。

これは、気がつかなかった

俺達が悪かったな。

リアス先輩から聞いたが、

ギヤスパーは名門の吸血鬼を父に持つが、

母が人間で妾だったため、

純血ではなかった。

悪魔以上に純血ではない者を軽視、

侮蔑する吸血鬼たちは、

たとえ親兄弟であっても扱い方は

差別的だという。

ギヤスパーは腹違いの兄弟達に

子供の頃からいじめられ、人間界に行ってもバケモノとして扱われて居場所がなかったという。しかし、ギヤスパーは類稀なる吸血鬼の才能と、人間としての才能特殊な神器を両方兼ね備えて生まれてきてしまった為。望まなくてもその力は歳を取ると共に大きくなつていったらしい。仲良くしようとしても、ちよつとした拍子に時間停止の神器が発動してしまい、相手を停めてしまう。

「ねえ、二人共、もし時を停められたら、どんな気分？」
そうリアス先輩に訊かれる。

「…少し、怖いですね」
イツセーが正直に答えた。

「俺も同じですね、時を停めらえた間の記憶がないので余計にそう思います」
ギヤスパーにその気が無くても停められている間に何されたかと考えてしまう。

今までギヤスパーに停めらえた連中もそう思ってしまったのだろう。一度生まれた不信感はなかなか消えない。そうなれば付き合うのは不可能になり、次第にギヤスパーを恐怖するようになったのだろう。ギヤスパーはそれを何度も体験したのだろう。

だから引きこもりになってしまったんだろうな。
神器を得た人間は普通の人生は送れない。

アーシアも同じだった。

聖女から魔女と呼ばれて。

神器は神からのありがたい贈り物らしいが、
強すぎる力はただの呪いでしかない。

そもそも、もう神はいない、

神の遺した神器プログラムとやらは

居今でも生きていて稼働している為、

神器は無くならないそうだ。

『ぼ、僕は……こんな、神器いらないっ！』

だ、だって、皆停まつちやうんだ！

怖がる！嫌がる！僕だって嫌だ！

と、友達を、な、仲間を停めたくないよ……

大切な人の停まった顔を見るのは……

も、もう嫌だ……』

部屋の中ですすり泣くギヤスパー。

家からも追い出され、

どちらの世界でも生きられないギヤスパーは

路頭に迷った。

その時ヴァンパイアハンターに狙われ、

一度命を落とした。

そこをリアス先輩に拾われたらしい。

けど、強力な力を有するギヤスパーを

当時のリアス先輩では使いこなすこともできず、

上から封印を命じられていた。

そして、解禁されて現在に至ると。

「困ったわ……。この子をまた引きこもらせて

しまうなんて……。『王』失格ね、私」

落ち込むリアス先輩。

実際、リアス先輩もギヤスパーも悪くは無いがな。

「部長、サーゼクス様達との打ち合わせが

これからあるんでしよう？」

「ええ、でももう少しだけ時間を延ばしてもらいわ。

先にギヤスパーを…」

「リアス先輩。後は俺達に任せてください。

何とかしてみせますので」

俺の申し出にリアス先輩も強く

異を唱える事はできなかった。

打合せも大事だからだ。

三大勢力のボスたちが会合するんだ。

その準備は大切だろう。

何か当日に不都合が起きてしまえば、

それだけで三者の間の溝がより

一層深まるかもしれないからだ。

「大丈夫です。せっかく出来た男子の後輩です！

俺とユウスケでなんとかします！」

と、イツセーが胸を張って宣言した。

まあ、強がりだな本当は自身が無いだろう。

イツセーはこの手の繊細なタイプは苦手だし、

そういう俺もギヤスパーの事情を

聞いてどのように接すればいいか

悩んでいた。

「…イツセー、ユウスケ。

わかったわ。お願いできる？」

「はい！」

俺達の勢いある返事を聞いて、

リアルは微笑んで頷いた。

リアス先輩は名残惜しそうに心配そうに

ギヤスパーの部屋の扉を一瞥し、

この場を後にした。

リアス先輩を見送った後、

イツセーは深呼吸して座り込んだ。

「お前が出てくるまで、俺達はここを」

「一歩も動かないからな！」

……。

座り込み十分が経過した。

「どうやらイツセーは持久戦を開始するようだ。」

「付き合ってもいいがこの場合変化は出ないだろう。」

「そう思い俺は語り掛ける事にした。」

「…怖いか？神器や…俺達が」

『…』

俺は扉越しに話し続ける。

「俺も古代の戦士の力を得た。」

「イツセーなんて最強のドラゴンが宿った」

「神器を持っている。でも、」

「お前みたいにヴァンパイアとか、」

「木場やアジアみたいな」

「凄い人生を送ってきたわけじゃない。」

「何処にでもいる普通の男子高校生だよ」

「俺の話が何処まで聞いてもらえるか」

「分からないが、正直な自分の想いを話そう。」

「俺は…正直、怖い。この力を使うたびに」

「身体が変化していく気がしてならない。」

「悪魔の事だつてよくわかってない。」

「だけど、俺は前に進み続けようと思ってる」

『…どうしてですか？も、もしかしたら、」

「大切な何かを失うかもしれないですよ？」

「せ、先輩はどうして、そこまで真つすぐに」

「生きていられるんですか…？』

「お、反応があったか。」

話を聞いてくれるのはありがたいが

この質問はどう返すか。

「…そうだな。あまり難しく考えた事はないが、

やっぱり皆の悲しそうな顔を見たくないからかな

以前、俺はリアス先輩のレーティングゲームの時に

知り合いがグロンギって奴等に攫われてな

今思えば俺を出させないための罠だったんだろうけど

俺が知り合いを救った後戻ってきたら

全てが終わってた。

俺は肝心な時に皆の役に立てなかった。

終わった後の皆の表情や、

イツセーを抱えて泣き続ける

リアス先輩は見ていられなかった」

ギィ…。

鈍い音を立てながら、

扉が少しだけ開かれた。

「…ぼ、僕もそのとき、いませんでした…」

扉の奥から姿を現したギヤスパーは

涙を懸命に堪えている様子だった。

そんなギヤスパーに俺は

優しく語り掛けた。

「ああ、分かってる。

俺達はそれを責めやしないさ。

でも、これからは違おうだろう？」

「…ぼ、僕じゃ、ご、ご迷惑をかけるだけです…。

引きこもりだし、人見知り激しいし…。

神器はまともに使えないし…」

俺はギヤスパーの顔を推えると、

両眼を覗き込む。

ここに神器が宿っているのか。

時間を停止する能力。

「俺達はお前の事を嫌わないぞ。

先輩としてずっと面倒見てやる。

悪魔としてはお前の方が先輩だけどさ。

でも、人生の先輩は俺達だからな

任せろ」

「っ」

ギヤスパーは目をパチクリさせているが、
構わず続ける。

「力を貸してくれ。俺一人じゃ足りないからさ
俺達と一緒にリアス先輩を支えようぜ。

お前が何かを怖がるのなら、俺達が一緒に

吹っ飛ばしてやるさ。

俺達はなんたって伝説の力を継承してるんだからな
ニカツと笑って見せるが、

ギヤスパーは何を話していいか困っているようだ。
するとイツセーがそんなギヤスパーに提案する。

「なあ、俺の血、飲むか？アザゼルの野郎の

言ったことが真実なら、俺の血を飲めば
神器を扱えるかもそれない」

たしかにあの時、アザゼルはそう言っていた。

しかし、ギヤスパーは首を横に振る。

「怖いんです。生きた者から直接血を吸うのが。

ただでさえ、自分の力が怖いのに…。

これ以上何かが高まつたりしたら…僕は…僕は…」
「大丈夫だ！俺やイツセーだって他の皆に

迷惑かけた事あるし、リアス先輩に

逆らった事だつてある。

知ってるか？

あの真面目な木場だつてリアス先輩に
逆らった事があるんだぜ。

お前はもう一人じゃないんだ！

迷惑かけたっていいじゃないか
お前の神器が制御できるように
なれば、俺達は強力な味方が増える。

制御出来たその時、迷惑かけたと思つた分
俺達に力を貸してくれよ」

俺はギヤスパーに素直な自分の気持ちをぶつけた。

彼は嬉しそうに微笑んでいた。

「…ユウスケ先輩って、優しいんですね」

極上の笑みでそうイツセーに言う。

「そんな風に言われたのは初めてです。

今まで迷惑かけていたのが申し訳なくて

怖かったです、そう言ってもらえて

ぼ、僕もなんだか少しだけ勇気が

湧いて来たような気がします。

本当に少しだけだけど…」

「よしよし、いい子だ。ほら、

俺の腰を見てみろ。

ベルトがあるだろ

これは古代の戦士が使っていた

物なんだが、実際は

暴走する危険性があつたようなんだ

だけど、今はそんな心配もなくなった

それも皆のお陰で俺の心が強くなったからだ

お前だつて強くなれるさ。

一緒に頑張ろうぜ」

「あ、ありがとうございます。

こ、今後も迷惑か、掛けると思いますけど

て、手伝ってもらっていいですか」

「任せろ！」

俺とイツセーはギヤスパーに向けて

サムズアップをする。

気が付くと、いつの間にか俺達は

彼の部屋に入り、ギヤスパーと話し込んでいた。

「さすがだね二人共。ギヤスパー君と

すぐに談笑できるなんてね」

俺達がギヤスパーと打ち解け合いつつある所へ

現れたのは木場だった。

部屋を覗き込むように登場した。

木場も心配していたのかな？

相変わらずいい奴だな。

「いや、俺は何もしてないさ。

殆どユウスケが説得してたよ。

そうだ。ちょうど男子眷属が全員集まった

所で話があるんだ」

「何だい、イツセー君」

「俺達は男だ」

「そうだな。そんな事確認してどうした？」

俺がイツセーに訊ねると奴は興奮気味に答えた。

「俺はグレモリー眷属の男子チームで

行える連携を考えた」

「それは…興味がそそられるね。

どういふのかな？」

珍しく木場が食いついてきたな。

まあ、俺もその連携は気になるな」

「まず、俺がパワーを溜める。そして、

それをギヤスパーに譲渡して周囲の時を停める。

その間、俺は停止した女子を触り放題だ」

…またこいつは。

「っ。…また、エッチな妄想をしていたんだね。

それはそうと、それだけなら僕やユウスケ君の役目は無いんじゃないの？」

イツセーのプランに木場は軽く言葉を失っていたが……。冷静に突っ込んでいた。

「いや、ある。お前は禁手バランス・ブレイカー化して、

ユウスケは変身して、俺を守れ。

もしかしたら、エツチなことをしている間も敵が襲来してくるかもしれない。

これは大事な連携だ。俺が溜めて、

ギヤスパーが停めて、俺が相手を触り、

二人が俺を守る。完璧な陣形だ」

「そんな危険な時にエロを優先するなよ」

「イツセー君、僕はイツセー君の為なら

何でもするけど……一度、

真剣に今後の事を話そうよ。

力の使い方がエツチすぎるよ。

ドライグ泣くよ」

まったくだな。

まさか龍の力をこんな事に使われようとは、思うまい。

「木場、てめえ！そんな眼差しで俺を見るな！

イケメンめ！お前はいいさ！

女の子を食い放題だろうけどな！

俺は食べる事すらままならないんだよ！」

「……君のことだから、気付いたら気付いたで

そっちに嵌り込みそうだし、

部長達も甘やかしそうだから言うのはやめておくよ……。

覚えたては怖いというからね」

「よし。男同士、肚を割って話そう。

第一回『女子のこんな所が好きだ選手権』！

まずは俺からだな！俺は女子のおっぱいと

足をみるね！」

イツセーの発言に木場とギヤスパーは苦笑しているが、嫌がってはいなかった。

でも、ギヤスパーが終始手を震わせていたのを俺は見逃さなかった。

多分怖いのだろう。

俺達を停めてしまおうんじゃないかと。

「すみません、段ボールの中でもいいですか？

：蓋は閉めないで。ただ、人と話すとき、

段ボールの中が落ち着くんです」

と、ギヤスパーは申し訳なさそうに言う。

無理強いしても仕方ないので、

皆了承した。徐々に慣れさせて

段ボールの中から出していこう。

「あー、落ち着きますう。これですよ。

段ボールの中だけが僕の心の

オアシスなんです…」

そんなに段ボールが癒し空間なのかよ！

あれかな、狭い所が落ち着くのかな。

しかし、こいつ、段ボールが似合うな…。

入り慣れてるといふか。

段ボール吸血鬼か。

反応に困るな。

その内外ではダンボーのかっこしないと

生活できないんじゃない…。

「そんなに人と目を合わせるのが

嫌なら、これとか」

イツセーが部屋にあった紙袋に穴を二つ空けて、

ギヤスパーの頭に被せた。

「へ、これは」

薄暗い部屋に紙袋を頭に被った女装少年。

穴の空いた部分から赤い眼光がギラリと！

「ど、どうですか？・似合いますか？・」

ゾンビのようにのろのろと歩いて近づいてくる！

なんて迫力だ！どこからどう見ても異常者だ！

マジで怖い！

「あ、でも、これ…。」

いいですねえ。僕には似合うかも…。」

「ギヤスパー、お前を初めて凄いつて感じたよ」

「ほ、本当ですか？・これを被れば僕も

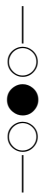
吸血鬼としてのハクが付くかも…。」

いや、吸血鬼ってよりも。

サイコホラーよりの迫力がするかな…。」

こうして、男子だけの夜通し猥談が

始まってしまったのだった。



次の休日、俺とイツセーとはある場所へ向かっていた。

朱乃さんに呼び出されたんだが、

本来はイツセーだけの用事だったが、

先方の要望で俺も付いていくことになった。

町の外れへと向かう俺達。

この先にあるめぼしい建物は一つの筈だが、

そして目的地に着いた俺達の目に映るのは、

石で出来た階段とそ伸びた先に立った赤い鳥居だった。

そう、目的地は神社だった。

悪魔になつてからは、神聖な場所は

近づけなくなっているからな。

と、考え事をしてしていると階段を下りてくる人がいた。

そちらを見れば、その顔は見知った顔であった。

「いらっしやい、イツセー君、ユウスケ君」

「あ、朱乃さん!？」

そこには巫女衣装を身に纏った朱乃さんの姿があった。石段を上る俺達。

先に行く朱乃さんは歩みを止めないまま言う。

「ゴメンなさいね、イツセー君、ユウスケ君。

急に呼び出してしまった」

「あ、いえ。俺もやる仕事がなくてヒマだったんで」

「そうそう。イツセーの言う通り暇で家でゲームする

ぐらいしかやる事ないですし」

「でも、何の用でしょうか?それと、

部長はあとから来るそうですけど……」

「ええ、知ってますわ。リアスは会談の件で

サーゼクス様と最終的な打ち合わせをしな

ければいけませんから」

しかし、朱乃さんは巫女姿が似合うな。

「雷の巫女」の二つ名もこの格好から来てるのか?

だが、悪魔が神社に居ていいのだろうか?

「朱乃さんはリアス先輩と打ち合わせに

行かなくていいんですか?」

『女王』の力が必要なんじゃない?」

「あちらはグレイフィア様がフォロー

してくださいるでしょうし、

ある程度進行していれば私が抜けても

大丈夫ですわ。

それよりも私はこの上でお待ちしておられる

方をお迎えしなければならなかったものですから」

と、朱乃さんは石段の遥か先へ顔を向ける。

鳥居が目の前に迫っている。

これを超えると悪魔はダメージを受けるので、

神社へ近づけないというが、

「ここは大丈夫ですわ。」

裏で特別な約定が執り行われていて、悪魔でも入ることができません」

言うや否や朱乃さんは何事もなく鳥居をくぐった。それに続き俺達も鳥居をくぐる。

鳥居の先には立派な神社の本殿が建っている。

古さを感じられるが、壊れている様子は一切無かった。

「朱乃さんはここに住んでいるんですか？」

イツセーが朱乃さんに訊ねる。

「ええ、先代の神主が亡くなり、

無人になったこの神社をリアスが

私のために確保してくれたのです」

「彼等が赤龍帝と新たなクウガですか？」

第三者の声に気付き、

そちらへ振り向くと、そこには。

輝くまでに金色の羽が俺の前で舞う。

端正な顔立ちの青年が俺達が視線を送っていた。

豪華な白ローブに身を包み。

頭の上に金色の輪っかが漂う。

青年が優しい気な笑みを浮かべ、握手を求めてくる。

「初めまして新たなクウガ、兵藤祐介君、

そして赤龍帝、兵藤一誠君」

誰だこの人？

疑問に感じる俺の目の前で青年の背中から

金色の十二枚の翼が出現した。

「私はミカエル。天使の長をしております」

目の前の青年の正体は天使のトップだった。

朱乃さん先導の元、俺達とミカエルさんは神社の本殿へ。

白い羽と輪っかは天使の証だと

以前リアス先輩から聞いていた。

ミカエルさんは金の羽で大物感が漂ってたがな。

かなり広い本殿内はデカイ柱が何本も立っている。

中央から、言い知れない力の波動を感じ、俺の肌をピリピリと刺激していた。

「実は赤龍帝にこれを授けようと思いましたがね」

ミカエルさんが指さす方へ視線を向けると、そこには腰にレイピアを携えた、

黒髪の女性が立っており、

そのそばに、聖なるオーラが滲み出ている

一本の剣が宙に浮いていた。

これは聖剣か？

エクスカリバーやデュランダルに近しい力を感じる。

「これはゲオルギウス。聖ジョージと言えば

伝わりやすいでしょうか？

彼の持っていた龍ドラゴン・スレイヤー殺しの聖剣『アスカロン』です

そして彼女はこの聖剣の所有者であった

聖騎士のギーラです」

そうミカエルさんが紹介すると

ギーラさんはこちらに頭を下げる。

「どうも、聖騎士のギーラです。

今回は新たなクウガにお会いしたく

無理を言つてユウスケさんもお呼びしました」

「俺をですか？」

この間のロビンさんみたいな人なのかな？

「ええ、話に訊くクウガがどのような

人物かこの目で見たかったので

可能であれば一戦交えたかったです」

怖いなこの人。

細目の美人だが結構バトルジャンキーなのかな？

「話がそれましたが、この剣は特殊儀礼を

施しているので悪魔の赤龍帝でも

ドラゴンの力があれば扱えるはずです。

貴方が持つというよりは、

ブーステッド・ギアに同化させるといった
感じでしようか」

と、ミカエルさんは言っている。

「なぜ、これをイツセーに？」

元々はギーラさんの物なのでしよう」

聖騎士ってことは戦うのがメインの人だろうし、

大切な武器を渡して大丈夫なのか？

それも宿敵の悪魔に渡すなんて。

ミカエルさんは微笑みながら答える。

「私は今度の会談、三大勢力が手を取り合う

大きな機会だと思っているのですよ。

すでに知っているそうですねですから話しますが、

我らが創造主。

神は先の戦争でお亡くなりになりました。

敵対していた旧魔王達も戦死。

堕天使の幹部たちは沈黙。

アザゼルも戦争を起こしたくないと

建前上は口にしてます。

これは好機なのですよ。無駄な争いを

無くすためのチャンスなのです。

このまま小規模な争いが断続的に続けば、

いずれ三大勢力は滅ぶ。そうでなくても、

横合いから他の勢力が攻め込んでくる

かもしれません。それはクウガもご存じでは？

その聖剣は私から悪魔サイドへのプレゼントです。

ギーラに関してはお構いなく、

この聖剣は使える者がおらず、

仮の所有者としてギーラが選ばれていただけなので、

もちろん、堕天使側にも贈り物をしました。

悪魔側からも噂の聖魔剣を数本いただきましたし、

こちらとしても有難い限りなのですよ」

他の勢力ってグロンギ族のことか。
つまり、ミカエルさんは悪魔と墮天使と
和平をしたってことか。

「過去、我々と敵対した『赤い龍』ウエルシュ・ドラゴン」

と『究極の闇』が悪魔になつたことを知りましてね。

ごあいさつと共に悪魔側へ私達からのプレゼントの

一つとして赤龍帝にその剣をお渡しするのです。

貴方はこれから龍王クラスや『白い龍』パニシング・ドラゴン

に狙われるでしょう。

『歴代の中でも最も宿主が弱い』と噂の貴方にとって

補助武器となるのではないかと思ひましてね」

まあ、まだ悪魔になり立てで

今まで戦闘なんてした事なかったからな。

「俺でいいんですか？てか、何故俺に？」

「一度だけ三大勢力が手を取り合つたのです。

それは赤と白の龍と戦つた時です。

我々の戦争に乱入してきた二匹のドラゴンは

戦場を乱してくれましたからね

その後、『究極の闇』に全員倒されましたが」

前代のクウガが暴れた時の話しか。

前に聞いた事はあつたが、

それはどっちのクウガだったのだろうか？

「あの時のように再び手を取り合う事を願つて、

あなたに、赤龍帝に願をかけたのですよ。

日本的でしょう？」

皮肉に聞こえるが、

天使のトップが満面の笑みで言うのだから、

信じるしかないだろう。

イツセーが聖剣に身体を向ける。

だが、まだ迷いがあるようで、

なかなか手を出さない。

そんなイツセーに朱乃さんが言う。

「その剣は神社で最終調整をしました。」

魔王様、アザゼル様、ミカエル様の各陣営の術式を施していますので、

悪魔でもドラゴンの力を宿していれば触れますわ」

朱乃さんのその話で勇気が出たのか。

イツセーが宙に漂う聖剣を恐る恐る左手に取った。すると、イツセーの左手に赤い籠手が出現する。

そして聖剣のオーラが籠手に流れ込んでいく、カッ！

赤い閃光を走らせると、

イツセーの左腕に甲の先端から刃を生やした

籠手が存在していた。

「…マジで合体しやがった」

それを確認するとミカエルさんが手をポンと叩く。

「と、時間です。そろそろ私は行かねばなりません」

もう帰るのか？だが、天使に会ったら言いたいことがあったんだが、

「あの、貴方に聞きたいことがあるのですが」

「会談の席か、会談後に聞きましょう。」

必ず聞きます。ご安心を」

そう言うと、ミカエルさんの全身を光が包み込み、

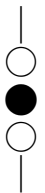
一瞬の閃光のあと、この場から消え去った。

「では、私も戻ります。ユウスケさん、

会談の前にお会いできて良かったです。

それでは会談で」

ギーラさんはそう言ってこの場を去ったのだった。



深夜、本来人のいない廃墟に

二人の男女の姿があった。

「そろそろ行動に移す時か？」

白いニット帽をかぶった男ドルドが訊ねる。

「ええ、彼らの協力の元、

今度の三すくみの会談時に

行動に移すわ」

その問いに答えるのは

以前ライザーの眷属であるザビネだった。

「なら『ザザグド・ゲゲル』のプレイヤーは

誰にするんだ？」

「私よ」

ドルドが振り向くと黒髪の女性が立っていた。

「ほう、ボダウか」

「彼女ならこのゲゲルも任せられるわ。

今回協力を要請した奴等をうまく利用して

クウガを殺しなさい！」

女性は黙ってうなずくとその場を後にした。

「さあ、これである方の復活にまた近づくは」

「ああ、ようやく我らの悲願も達成される時がくる」

二人のグロンギは目の前の壁に彫られた物を見て呟いた。

そこにはクウガのマークに似た文様と狼の文様が

刻まれていた。

第47話 「会談」

早朝。

俺とイツセーはギヤスパーの修行の為、
旧校舎周囲にある森の開けた場所に来ている。

「ぐふううう…。ユウスケ先輩…、

イツセー先輩…つ」、疲れましたよおおお」

両目をこするギヤスパー。

「弱音を吐くな！制御出来れば、

俺達の連携が完成するんだ！」

一生完成する必要のない連携だよ。

俺は弱音を吐くギヤスパーに構わず

ボールを投げつける。

「ユウスケさん、ボールです！」

早朝から俺達に付き合ってくれているアジアが、
俺にボールを手渡してくれる。

修行内容は変わらず投げたボールを停めている。

だが、ギヤスパーも成長しており、

今では、二十回に一回は成功するようになってきた。

最初の頃に比べれば大した進歩だよ。

そう思っていると、腕に違和感があった。

腕だけ動かなくなっており、

どうやら、ギヤスパーが間違えて俺の

腕を停止させてしまったようだ。

「ひ、ひい、ゴ、ゴメンなさいいいい！」

ギヤスパーは地面に屈んで縮こまった。

そんなギヤスパーに俺は苦笑しながら言う。

「だから、気にするなって、今は修行中だ、

お前は未熟なんだから仕方ないだろ！

まあ、全身止められたら困るが、

その回数だって減ってるんだから

「この調子だ！」

俺はギヤスパーを叱らずにフォローした。

しかし、ギヤスパーは複雑そうな表情で言う。

「…ぼ、僕は神器を持つ人間としても、

ヴァンパイアとしても半端者だから、

皆に迷惑ばかり…。も、もつと自分の力を

使いこなせれば…な、なんて中途半端な

存在なんでしょうか…、グスツ」

あー、また泣いちまったか。

その力を使いこなすための修行なのに

失敗するたびにこうなってしまう。

まあ、回数が減ってきたのが救いだがな。

「ギヤスパー！俺はお前が好きだぞ！」

気にすんな！くよくよする前にまずは

俺達にぶつかってこい！考えたらまげだ！

俺もそつちのほうがわかりやすくていい！」

イツセーがギヤスパーに本音をぶつける。

「同じリアス先輩の眷属で仲間だ！」

ドン！と来い！」

俺も胸を張って堂々と構える。

俺まで不安がっていたら、

コイツはダメになる。

俺達はコイツの先輩だ。

導く者としてしつかりしないとな。

ギヤスパーはそれを見て

涙を拭い立ち上がる。

「ユウスケ先輩、イツセー先輩、

ぼ、僕、がんばります…っ！」

「おう！学校が始まるまで、ビシビシ行くぞ！」

「そうだと百球いくからな！」

「わかりました！じゃ、じゃあ、

「この紙袋を被ってパワーアップを」

「やめとけって、視線が塞がったらどうする

それに、うちのアーシアはそういうの見たら泣くから！」

「？」と疑問符を浮かばせているアーシア。

前に殺人鬼の出るサイコホラーと一緒に見て

ちよつと泣いてたからな。

見せない方がいいだろう。

「頑張ってください！ユウスケさん！

イツセイさん！、ギヤスパークくん！」

「は、はいいいいい！ありがとうございます！」

アーシア先輩いいい！」

こうして、修行は再開された。

だが、俺はふと思う。

俺達に師匠、先生となるものが必要だと。

神器に精通していて、ドラゴン等の種族特有の力にも

詳しい人物。

ふと、黒い翼の男が脳裏によぎる。

だが、すぐに頭を横に振って思い直す。

その考えはあり得ない。

彼は仇敵の堕天使その総督だ。

だが、その知識は本物なんだよな。

指導者が居れば俺達はさらに強くなれる筈なんだ。

ー〇〇●〇〇ー

「さて、行くわよ」

部室に集まるグレモリー眷属の面々。

リアス先輩の言葉に頷いた。

そう、今日は三大勢力の会談の日だ。

ついにこの日が来た。

会場となるのは、駒王学園の新校舎にある職員会議室だ。

今日は休日。時間も深夜で人は誰もいない。

すでに各陣営のトップ達は新校舎の休憩室で待機している。そして、学園全体が強力な結界に囲まれ、現在誰も中へ入れなくなっていた。

もちろん、会談が終わるまで外にも出られない。

結界の外には、天使、墮天使、悪魔の

軍勢がぐるりと囲んでいる。

一触即発の空気だと様子を見てきた木場が言っていた。

もし、会談で問題が起こったり、協議が決裂したら、

この場で過去の戦争が繰り返されることになる。

大事な日だ今日の為に今まで準備してきたんだからな。

俺達はリアス先輩の後に続いて部屋を後にしようとする。

『ぶ、部長！み、皆さああああん！』

部屋に置かれた段ボールから声を掛けられる。

もちろん、中身は引きこもりヴァンパイアだ。

「ギヤスパー、今日の会談は大事なものだから、

時間停止の神器を使いこなしていない

貴方は参加できないのよ？」

と、リアス先輩はやさしく告げていた。

確かに神器の制御が出来ないギヤスパーが

何かのショックで会談中の皆さんの邪魔したら、

大変なことになる、それにそんな事になったら

一番傷つくのはギヤスパーだ。

また自分のせいだと引きこもりが悪化しかねない。

そんなわけでギヤスパーは留守番だ。

「ギヤスパー、おとなしくしていろよ？」

「は、はい、イツセー先輩……」

「ここに俺とイツセーが持ってきたゲーム機

置いていくから、それで遊んでもいいし、

菓子や飲み物も沢山買って

きたから食べてもいい、残っても小猫ちゃんの

そして給仕係としてグレイファイアさんがお茶用台車の脇で待機している。

天使側。

金色の羽のミカエルさんと知らない女性の天使さん。

墮天使側。

黒い翼を十二枚も生やしたアザゼルと

バニシング・ドラゴン
「白い龍」ヴァーリ、

そしてもう一人のクウガである東城。

アザゼルは俺達を視線に捉えると、

口の端を愉快そうにあげていた。

トップの皆さんは装飾の施された衣装を着ていた。

「私の妹と、その眷属だ」

サーゼクス様が他の陣営にリアス先輩を紹介する。

リアス先輩も会釈していた。

「先日のコカビエル襲撃で彼女たちが活躍してくれた」

「報告は受けています。改めてお礼を申し上げます」

ミカエルさんがリアス先輩へ礼を言う。

それに対してリアス先輩は冷静に振る舞い、

再度会釈するだけだ。

「悪かったな、俺の所のコカビエルが迷惑かけた」

あまり悪びれた様子もなく、アザゼルが言う。

一種族の長とは思えない軽さだな。

リアス先輩も口元をひくつかせていた。

「その席に座りなさい」

サーゼクス様の指示を受け、

グレイファイアさんが俺達を壁側に設置された

椅子に促してくれる。

その席にはソーナ会長が既に座っていた。

会長の隣にリアス先輩が座る。その横にリアス先輩が

イツセーを座らせ、その後には朱乃さん、木場、

俺、アジア、ゼノヴィア、小猫ちゃんと続いて座った。

それを確認したサーゼクス様が言う。

「全員がそろったところで、会談の前提条件をひとつ。

ここにいる者たちは、最重要禁則事項である

『神の不在』を認知している」

なら、ソーナ会長、グレイファイアさん、も知ってたのか、

周りを見れば、先程と変わりのない面々をみて

俺はそう思う。

「では、それを認知しているとして、話を進める」

こうして、サーゼクス様のその一言で

三大勢力の会談が始まった。

会談は順調に進んでいた。

「というように我々天使は…」

ミカエルさんが喋り。

「そうだな、そのほうが良いのかもしれない。

このままでは確実に三勢力とも滅びの道を…」

サーゼクス様も発言されている。

「ま、俺らは特にこだわる必要もないけどな」

たまに喋るアザゼルの一言で

この場が凍り付くこともあったが、

墮天使の総督はわざとその空気を作って

楽しんでいるように思えた。

会談は続き、ついにリアス先輩の出番となる。

「さて、リアス。そろそろ、

先日の事件について話してもらおうかな」

「はい、ルシファー様」

サーゼクス様に促され、リアス先輩と会長、

朱乃さんが立ち上がり、この間の

コカビエル戦での一部始終を話し始めた。

それに聞き入る三大勢力の面々。

リアス先輩は冷静に淡々と自分が体験した

事件の概要を話していた。

奉告を受けた各陣営のトップはため息をつく者、顔をしかめる者、笑う者と反応は個々に違った。

「以上が、私、リアス・グレモリーと、

その眷属悪魔が関与した事件の報告です」

全てを言い終えたりアス先輩は

サーゼクス様の「ご苦労、座ってくれたまえ」

という一言で着席する。

「ありがとう、リアスちゃん☆」

レヴィアタン様もウインクを

リアス先輩に送っていた。

「さて、アザゼル。この報告を受けて、

墮天使総督の意見を聞きたい」

サーゼクス様の問いに全員の視線が黒髪の

総督へ集中する。

アザゼルは不敵な笑みを浮かべて話始めた。

「先日^ッの事件は我が墮天使中枢組織

『神の子^ッを見張る者』の幹部コカビエルが、

他の幹部及び総督の俺に黙って、単独で起こしたものだ。

奴の処理は『白龍皇』がおこなった。その後、

組織の軍法会議でコカビエルの刑は執行された。

『地獄^トの最下層』で永久冷凍の刑だ。

もう出てこれねえよ。その辺の説明はこの間転送した

資料に全て書いてあっただろうそれが全部だ」

ミカエルさんがため息を吐きながら言う。

「説明としては最低の部類ですが、

貴方個人が我々と大きな事を起こしたくないという

話しは知っています。それに関しては

本当なのでしょうか？」

「ああ、俺は戦争に興味なんてない。

コカビエルも俺の事をこき下ろしていたと、

そちらの報告でもあったじゃないか」
たしかに、アザゼルの言うように、
コカビエルはあの時自分達のボスの事を
かなり悪く言っていた。

戦争に消極的で神器にしか興味の無い者だと。
今度はサーゼクス様がアザゼルに訊く。

「アザゼル、一つ訊きたいのだが、どうしてここ
数十年神器の所有者をかき集めている？

最初は人間たちを集めて戦力増強を

図っているのかと思っていた。

天界か我々に戦争をけしかけるのでは
ないかとも予想していたのだが…」

「そう、いつまで経ってもあなたは戦争を

仕掛けてこなかった。『バニシング・ドラゴン白い龍』

を手に入れたと聞いた時には、強い警戒心を
抱いたものです。更に最近ではもう一人のクウガ
までいると聞いていますし」

ミカエルさんの意見もサーゼクス様と

同様の様子だった。

二人の意見を聞いて、アザゼルは苦笑する。

「神器研究の為さ。なんなら、一部研究資料も

お前達に送ろうか？って研究していたとしても、
それで戦争なんざ仕掛けねえよ。

戦に今更興味なんてないからな。

俺は今の世界に十分満足している。

部下に『人間界の政治にまで手を出すな』

と強く言い渡しているぐらいだぜ？

宗教にも介入するつもりはねえし、

悪魔の業界にも影響を及ぼせるつもりもねえ。

つたく、俺の信用は三すくみの中でも最低かよ」

「それはそうだ」

「そうですね」

「その通りね☆」

サーゼクス様とレヴィアタン様、ミカエルさんの意見が一致していた。

やはり、墮天使の総督は信用されてないようだ。

アザゼルはそれを聞き、面白くなさそうに

耳をほじっていた。

「チッ。神や先代ルシファーよりもマシかと思っただが、お前らもお前からで面倒くさい奴等だ。

こここそ研究するのもこれ以上性に合わねえか。

あー、わかったよ。

なら、和平を結ぼうぜ。もともとそのつもりも

あつたんだらう？天使も悪魔もよ？」

っ和平って☒

アザゼルの一言に各陣営は少しの間、驚きに包まれていた。

リアス先輩や会長まで相当驚愕している。

アザゼルの和平発言はかなり驚くべきものだったようだ。

たしかに、アザゼルから提示されるとは思わなかったな。

そう思うと俺達は歴史的瞬間に立ち会っているんだな。

アザゼルの一言に驚いていたミカエルさんが微笑む。

「ええ、私も悪魔側とグリゴリに和平を

持ちかける予定でした。このままこれ以上

三すくみの関係が続けていても、今の世界の害となる。

天使の長である私が言うのも何ですが

戦争の大体である神と魔王は消滅したのですから」

ミカエルさんが和平をしたいというのは

この間聞いていたことだが。

アザゼルがミカエルさんの言葉に嘖き出して笑う。

「ハッ！あの堅物ミカエル様が言うようになったね。

あれほど神、神、神様だったのにな」

「…失ったものは大きい。けれど、

居ないものをいつまでも求めても仕方ありません。人間たちを導くのが、我らの使命。

神の子らをこれからも見守り、

先導していくのが一番大事なことだと

私達セラフのメンバーの意見も一致しています」

「おいおい、今の発言は『堕ちる』ぜ？」

と思ったが、『システム』はお前が

受け継いだんだったな。

良い世界になったもんだ。

俺らが『堕ちた』頃とはまるで違う」

サーゼクス様もミカエルさんと同意見を口にします。

「我らも同じだ。魔王がなくなるとも種を存続するため、

悪魔も先に進まねばならない。

戦争は我らも望むべきものではない。

次の戦争をすれば、悪魔は滅ぶ」

サーゼクス様の言葉にアザゼルも頷いた。

「そう。次の戦争をすれば、三すくみは今度こそ

共倒れだ。そして、人間界にも影響を大きく及ぼし、

世界は終わる。俺らは戦争をもう起こせない」

先程までふざけた調子だったアザゼルが

一転して真剣な面持ちとなる。

「神がない世界は間違いだと思うか？」

神がない世界は衰退すると思うか？

残念ながらそうじゃなかった。

俺もお前達も今こうやって元気に生きている」

アザゼルは腕を広げながら、言った。

「神がいなくても世界は回るのさ」

確かに神の手から離れても人は生きていけるからな。

その後、会話は今後の戦力の話に移っていった。

何やら、現在の兵力と、各陣営との対応、

「これからの勢力図を話している。
先程よりも緊張感が若干だが弱まった感じだ。
どの勢力も戦争を望まず和平を望んでいるからか。
」と、こんな所だろうか？」

サーゼクス様の一言で、お偉い方々が大きく
息を吐いていた。どうやら、

一通りの重要な話が終わったようだ。

大体会談が始まって一時間くらいかな

グレイフィアさんがお茶の給仕をしている中、

ミカエルさんが俺の方に視線を向ける。

「さて、話し合いも大分良い方向へ片付いていましたし、
そろそろ兵藤祐介殿のお話を聞いてもよろしいかな」
全員の視線が今度は俺に集中する。

この間の神社でのこと、ちゃんと覚えてくれていたのか。

俺がミカエルさんに訊きたかったこと。

俺はアーシアの方に顔を向けて、覚悟を決めた。

ここに来る前に、家でアーシアに確認を事前に行った。

「アーシア。アーシアのことを

ミカエルさんに訊いてもいいかな？」

アーシアは驚いていたが承知してくくれた」

「ユウスケさんがお聞きしたいのでしたら、

構いません。私はイツセーさんを信じていますから」

ニッコリ微笑んでアーシアは許してくれた。

だからこそ、聞かなきゃならない。

「アーシアをどうして追放したんですか？」

俺のミカエルさんへの質問に全員が

「何で今その話を？」って驚きの顔をしていた。

悪いが、俺はどうしても一度天使側の者に訊きたかった。

あれほど神を信じていたアーシアを、

なぜ教会から追放したのか？

俺はイツセーとアーシアを殺した墮天使よりも、

天使側を許せなかった。

この答えを聞かなければ和平と聞いても仲良くやっていけそうになかった。

俺なりにケリをつけておきたかったんだ。

ミカエルさんは真摯な態度で答えだした。

「それに関しては申し訳ないとしか言えません。

…神が消滅した後、加護と慈悲と奇跡を司る『システム』だけが残りました。

この『システム』とは、簡単に説明すると、

神がおこなっていた奇跡などを起こす為のもの。

神は『システム』を作り、これを用いて地上に奇跡をもたらしていました。

悪魔祓い、十字架などの聖具へもたらす効果、

これらも『システム』の力です」

なるほど、悪魔が十字架に触れるとダメージを受けるのも『システム』の影響なのか。

と、ミカエルさんへ思った事を聞いてみた。

「神がいなくなつて、『システム』に

不具合が起こつたんですか？」

俺の質問にミカエルさんが頷く。

「正直、『システム』を神以外が扱うのは

困難を極めます。私を中心に『熾天使^{セラフ}』

全員で『システム』をどうにか起動させていますが…

神がご健在だった頃に比べると、神を信じる者

達への加護も慈悲も行き届きません。

残念なことですが、救済できる者は

限られてしまうのです」

そう言えばコカビエルも似たようなことを言っていた。

神がいらないから、救えるものに限界があると。

「その為、『システム』に影響を及ぼす可能性のあるものを教会に関するところから遠ざける

必要があつたのです。影響を及ぼす者の例としては、

一部の神器これはアーシア・アルジェントの持つ

『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑』も含まれます。

そして、『ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手』、『デイバイン・デイバイディング白龍皇の光翼』なども」

「アーシアの神器がダメなのは悪魔や堕天使も

回復できるからですか？」

俺の問いにミカエルさんは再び頷く。

「はい。信徒の中に『悪魔と堕天使を回復できる神器』

を持つ者がいれば、周囲の信仰に影響が出ます。

信者の信仰は我らが天界に住む者の源。

その為、『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑』

は『システム』に影響を及ぼす禁止神器としています。

それと、影響を及ぼす例に：」

ミカエルさんの言葉を遮って、ゼノヴィアが続ける。

「神の不在を知る者ですね？」

「ええ、そうです、ゼノヴィア。

貴方を失うのはこちらとしても痛手ですが、

我々『セラフ熾天使』と一部の上位天使以外で

神の不在を知ったものが本部に直結した場所に

近づく『システム』に大きな影響が出るのです。

申し訳ありません。貴方とアーシア・アルジェントを

異端とするしかなかった」

ミカエルさんがアーシアとゼノヴィアへ頭を下げる。

まさか、天使のトップがアーシアとゼノヴィアに

頭を下げるなんて、当の二人も目を丸くしていた。

反応に困る事態だな。

しかし、ゼノヴィアは直ぐに首を横に振り、微笑む。

「いえ、ミカエル様、謝らないでください。

これでもこの歳になるまで教会に育てられてた身です。

いささか理不尽を感じてはいましたが、

理由を知ればどうということもありません」

「貴方が悪魔に転生した事。

それはこちらの罪でもありません」

「いいのです。…多少、後悔も致しましたが、教会に仕えていた頃にはできなかつたこと、封じていた事が現在の私の日常を華やかに彩ってくれています。そんなことを言ったら、他の信徒に怒られるかもしれません。…」

それでも今の私はこの生活に満足しているのです」
ゼノヴィアは俺達との生活を

そんな風を感じてくれたのか。

ちよつと浮世離れしすぎている所もあるが、やっぱり悪い娘じゃないよね。

アーシアも手を組みながら言う。

「ミカエル様、私も今幸せだと感じております。

大切な人がたくさんできましたから。

それに憧れのミカエル様にお会いして

お話もできたのですから光栄です！」

ミカエルさんはアーシアとゼノヴィアの

言葉に安堵の表情を見せていた。

「すみません。貴方達の寛大な心に感謝します。

デュランダルはゼノヴィアにお任せします。

サーゼクスの妹君の眷属ならば下手な輩に

使われるよりも安全でしょう」

アザゼルがアーシアを見ている。

アーシアも気付き、体をビクつとさせていた。

「俺の所の部下が、その娘を騙して殺したらしいな。

その報告はうけている」

俺はハッキリとアザゼルに言った。

「そう、アーシアは一度死んだ。

イツセーや俺も墮天使に殺されたけど、

それ以上にアーシアだ！

あんたの知らない所で起きた事かもしれないが、あんたに憧れていた墮天使の女性がアンタの為に、アーシアを一度殺したんだそれを忘れるなよ」

この会談において俺に発言の権利はない。

さっきのはミカエルさんからの特別な措置だ。

今の発言は完全に俺の私怨からの一言だった。

リアス先輩も「落ち着きなさい、ユウスケ」

といさめてくれている。

「俺達墮天使は、害悪になるかもしれない

神器所有者を始末しているのは確かだ。

組織としては当然だろう？

招来、外敵になるかもしれない者を事前に

察知できれば始末したくなる。

それでお前達は死んだ。

理由はなんの才能もない人間のそいつでは

赤龍帝の力を使いこなす事が出来ずに

暴走させて俺達や世界へ悪影響を与えかねないからだ

お前さんに関しては何も巻き添えだから

申し訳ないがな」

「おかげで俺達は悪魔だ」

「嫌か？少なくとも周囲の者たちは

お前達が悪魔になったことを喜んでいいると思うぜ」

確かに仲間たちは俺達の悪魔入りを喜んでいいる。

俺もイツセーも悪魔になっても

それぞれの力を使いこなせていない。

生前のままではどうなっていたか分からない。

もしかしたら、暴走した俺とイツセーが

戦う事になっていたかもしれない。

「嫌じゃないさ！皆が良い奴らで、

優遇もしてもらってるのも理解してる。だが！」

「今更俺が謝っても後の祭りだ。

だから、俺は俺にしか出来ない事で

お前達を満足させようと思う」

アザゼルは何を言ってるんだ？

「さて、そろそろ俺達意外に、世界に影響を及ぼし

そうな奴等へ意見を聴こうか。無数のドラゴン様と

究極の闇になまずはヴァーリ、お前は世界をどうしたい？」

アザゼルの問いかけに白龍皇ヴァーリは笑う。

「俺は強い奴と戦えればいいさ」

こいつ、マジで戦闘が好きなんだな。

アザゼルの視線が東城に向く。

「お前はどうか？」

「俺は強くなること以外に興味はない」

コイツも戦いしか興味がないのか？

そしてつぎにアザゼルの視線が来る。

「そつちのユウスケはどうか？」

「世界とか大きなことは言えないが、

俺は自分の手が届く範囲の人達の

笑顔を守りたいそれだけだな」

「じゃあ、赤龍帝、お前はどうか？」

「正直分らないです。なんか、

小難しい事ばかりで頭が混乱してます。

世界がどうこう言われてもなんというか、

実感わきません」

それは、イツセーの正直な感想だった。

「だが、お前は世界を動かすだけの力を

秘めた者の一人だ。選択を決めないと

俺をはじめ、各勢力の上に立っている奴らが

動きづらくなるんだよ」

と、アザゼルに言われて困っているイツセー。

「兵藤一誠、では恐ろしいほどにかみ砕いて

説明してやろう。俺らが戦争したら、お前も表舞台に立つ必要が出てくる。

そうなればリアス・グレモリーを抱けないぞ」

「ツ！」

なるほど、そう説明するのか。

「和平を結べば戦争する必要もなくなる。

そしたら、後に大事なのは種の存続と繁栄だ。

毎日、リアス・グレモリーと子作りに

励むことが出来るかもしれない。どうだ？

分かりやすいだろう？戦争なら子作りは無しだ。

和平ならやりまくりだ。お前はどっちを選ぶ？」

三すくみの会談の筈がなんとも頭の悪い話だ事。

「和平で一つお願いします！ええ、！平和ですよね！

平和が一番です！部長とエッチがしたいです！」

俺は手で顔を覆う。

お前の本心は最後の一言だろうに。

この場がどんな場か忘れたのかよ！

「イツセー君、サーゼクス様がおられるんだよ？」

そう、リアス先輩のお兄さんである魔王様がいるんだぞ！

サーゼクス様は小さく笑っていた。

「えっと…。俺、バカなんでこの会談の内容も

九割ぐらい意味不明です。でも、俺が言えるのは、

俺に宿る力が強力なら仲間の為に使います。

部長、朱乃さん、ユウスケ、アジア、それに

他のメンバーも、もし危険に晒されたら俺が守ります！

…て、俺、まだまだ弱いんですけどね。

けど、俺が出来るのはそれぐらいですから。

体張って仲間と共にいきこうかなって」

イツセーが精一杯発言している中、

最近よく味わうあの感覚が襲ってくる。

体の機能が一瞬停止する。

そう、これはギヤスパアの
時間停止を食らった時の感覚だった。

第48話 「襲撃」

「……あれ？」

気づいた時、職員室の室内は
少しだけ変わっていた。

ミカエルさんが部屋の外を見ていて、
サーゼクス様とグレイファイアさんが

真剣な面持ちで話し込んでいた。

「お、兵藤兄弟も復活したか」

アザゼルが俺達の方を見て言う。

「何かあったんすか？」

イツセーがアザゼルに訊ねる。

周囲を見て見れば、

動いている者と停まっている者に分かれていた。

各陣営のトップは全員動いていた。

サーゼクス様、レヴィアタン様、グレイファイアさん、

ミカエルさん、アザゼル、それと「白バニシング・ドラゴンい龍」と

東城も動けるようだ。

他の皆は。

「眷属で動けるのは私とイツセーと、

ユウスケ、祐斗、ゼノヴィアだけのようね」

リアス先輩は動いているのか。

だが、アーシア、朱乃さん、小猫ちゃん、会長は

停止していた。朱乃さん、も停まっているなんて…。

「イツセーは赤龍帝を宿す者、ユウスケはクウガであり、

祐斗は禁バランス・ブレイカー手に至り、イレギュラーな聖魔剣を

持っているから無事なのかしら。ゼノヴィアは

直前になってデュランダルを発動させたのね」

リアス先輩が言うように、ゼノヴィアは聖なるオーラ

を放ち続ける危険極まりない剣を持っていた。

「時間停止の感覚はなんとなく、体で覚えた。

停止させられる寸前にデュランダルの力を盾に使えば防げると思っただけで、正解だった」

時間を停止させられる瞬間を体で覚えたのか。

凄いなこの娘は、あの修行が変なところで生きたな。

「それはともかく。リアス先輩、何があっただんですか？」

「どうやら」

「テロだよ」

俺の質問に答えようとしたリアス先輩の言葉を遮って、

アザゼルが言った。

「マジか、大事な会談中にか、

「外、見て見ろ？」

アザゼルが顎で窓の方を示す。

俺達は会議室の窓に近づき。

カッ！

突然、閃光が目の前に広がる！

光と同時にこの新校舎も揺れている。

まさか…。

「攻撃を受けているのさ。」

いつの時代も勢力と勢力が和平を

結ぼうとすると、それをどこぞの

集まりが嫌がって邪魔しようとするもんだ」

アザゼルが外を指差す。

指した方へ視線を向けると、

校庭と空中に人影らしきものがあつた。

よく見れば、黒いローブを着込んだ

魔術師みかいな連中がこちらへ

攻撃を放っていた。

その攻撃は新校舎に打撃を与えている様子はない。

だが、攻撃が止む様子は見えなかった。

テロリストか会談の邪魔が目的なのか。

いつの間にか俺達のとりに立っていた

アザゼルが不敵な笑みを浮かべながら言う。

「いわゆる魔法使いって連中だな。」

悪魔の魔力体系を伝説の魔術師

『マーリン・アンブロジウス』

が独自に解釈し、再構築したのが魔術、

魔法の類だ。：放たれている魔術の

威力から察するに一人一人が中級悪魔クラス

の魔力を持ってやがりそうだな」

なら、素の俺達より強いのが校庭にわんさかいるのか。

「ようするに人間が悪魔みたいな力を

振るえるってことだ。もちろん、

悪魔にも出来ないことも可能らしいがな、

神器所有者が魔術を覚えたりしていると、

とても厄介だ。ま、奴らの攻撃は

この校舎には被害を出せないさ。

俺とサーゼクスとミカエルで

強力無比な防壁結界を展開しているからな。

おかげでここから出られないが：」

この総督さん、やっぱり博識なんだな。

俺達にわかりやすく噛み砕いて教えてくれる。

「さっき、時間が停止したのは？」

相手に時間停止の魔法が使える者がいるとか？」

「いや、おそろしく、力を譲渡できる神器か魔術で

ハーフヴァンパイアの小僧の神器を強制的に

バランス・ブレイカー 禁 手 状態としたんだろうな。

バランス・ブレイカー 一時的な禁 手 状態だろうが、

それでも視界に映したものの内部にいる者にまで

効果を及ぼすとは：。あのハーフヴァンパイアの

潜在能力が高いつて事か。

ま、俺達トップ陣を停めるにしては

出力不足だったようだが」

なっ！じゃあ、旧校舎の部室で留守番してたギヤスパーが拉致されて利用されてるのか。

「でも、譲渡ですか？俺のブーステッド・ギアみたいな能力は他にもあるんすか？」

「ブーステッド・ギアはほぼ無尽蔵の倍増能力と

譲渡の能力を合わせている。これらはそれぞれ

単独の神器が存在してるんだよ。

倍増神器と譲渡神器『神滅具』

ってのはどれも何かの能力＋別の何かの能力

ばかりだ。本来、組み合わせてはならない強力な

能力同士が組み合わさってるんだよ。

『神が構築した「神器プログラム」のバグ、

エラーの類から生まれたものが「神滅具じゃないか？」

ってのが、俺達『神の子を見張る者』の見解の一つだ。

赤龍帝にもわかりやすく言うなら、

他にも譲渡できる力はあるって事だ」

アザゼルの説明は分かりやすいものだった。

と、俺達が感心していると、

俺達の横にリアス先輩が来ていた。

「ギヤスパーは旧校舎でテロリストの

武器にされている…。

どこで私の下僕の情報を得たのかしら…。

しかも、大事な会談をつけ狙う

戦力にされるなんて…ッ！

これほど侮辱される行為もないわっ！」

リアス先輩が全身から紅いオーラ

を迸らせている。

「ちなみにこの校舎を外で取り囲んでいた

堕天使、天使、悪魔の軍勢も全部

停止させられているようだぜ。

まったく、リアス・グレモリー

の眷属は未恐ろしい限りだ」

アザゼルがリアス先輩の肩に手をポンと置くが、リアス先輩は容赦なく手を払いのけていた。

払いのけられたアザゼルは、ため息を吐きながらその手を窓に向ける。

すると、外の空に無数の光の槍らしきものが。

バツ！

アザゼルが手を下げると同時に光の槍が雨となって、魔術師達に降り注ぐ。

テロリスト達は防御障壁を展開するが、

それをなんなく貫き、魔術師達を一掃する。

校庭には魔術師達の無数の死体が散らばっていた。

ただ手をかざしただけでこれか、

この総督さんの強さを実感する。

「この学園は結界に囲われている。

それにもかかわらず、こいつらは結界内に

出現してきた。この敷地内に外の転移用魔方陣

とゲートを繋げている奴がいるってことだ。

どちらにしても『停止世界フォービトウン、パロール・レネーの邪眼』の効果

をこれ以上高められると、俺達も誰か一人ぐらい

停止させられる恐れがある。

この猛攻撃でここに俺達を留まらせて、

時間を停めた瞬間に校舎ごと屠るつもりだろう。

あちらは相当な兵力を割いてきているようだ」

アザゼルの視線の先、校庭の各所で魔方陣が出現し、

怪しく輝き始める。魔方陣から現れたのは

先ほどアザゼルにやられた魔術師集団と

同じ格好の者達だ。

「さっきからこれの繰り返しだ。

俺達が倒しても倒しても現れる。

しかし、タイミングといい、

テロの方法といい、こちらの内情に詳しい奴がいるのかもしれない。

案外、ここに裏切者がいるのか？」

呆れるようにアザゼルは息を吐く。

裏切者か…。グロンギ族の様に長いこと

潜伏している奴がいるって事か？

「ここから逃げられないんですか？」

イツセーの質問にアザゼルは首を横に振る。

「逃げないさ。学園全体を囲う結界を解かないと

俺達は外へ出られない。だが、結界を解いたら

人間界に被害を出すかもしれないだろ。

俺は相手の親玉が出てくるのを待つてんだよ。

しばらくここで籠城してれば痺れを切らせて

顔出すかもな。早く黒幕を知りたいもんだ。

それに下手に外へ出て大暴れすると敵の

思う壺かもしれないってわけだ」

余裕の態度だな。

相手が正体を現すまで待ちの姿勢か。

「というように、我々首脳陣は下調べ中で動けない。

だが、まずはテロリストの活動拠点

となっている旧校舎からギヤスパークんを

奪い返すのが目的となるね」

と、サーゼクス様が言う。

なるほど、現状一番危険なものを奪還するってわけか。

籠城していてもトップの方々まで止められたら

負けが確定だからな。

「お兄様、私が行きますわ。

ギヤスパークんは私の下僕です。

私が責任を持って奪い返してきます」

強い意志でリアス先輩が進言する。

その姿にサーゼクス様はふっと笑われた。

「言うと思っていたよ。妹の性格ぐらい把握している。

しかし、旧校舎までそう行く？

この新校舎の外は魔術師だらけだ。

通常の転移も魔法に阻まれる」

「旧校舎、根城の部室に未使用で残りの駒である

『戦車^{ルック}』を保管していますわ」

「なるほど、『キャスリング』か。

普通に奪い返しに行くのは彼らも

予想しているだろうから、

これは相手の虚をつける。

何手か先んじえるね」

キャスリング。『王』と『戦車』の位置を

瞬間的に入れ替えらせる技だ。

レーティングゲームの特殊技の一つだ。

つまり、リアス先輩は瞬時に旧校舎へ

転移する事が可能なのか。

「よし。だが、一人で行くのは無謀だな。

グレイフィア、『キャスリング』を

私の魔力方式で複数人転移可能にできるかな？」

「そうですね、ここでは簡易術式でしか

展開できそうもありませんが、

お嬢さなともう二方なら転移可能かと」

「リアスと誰かか…」

「サーゼクス様、俺も行きますー！」

イツセーが手を挙げて進言する。

「イツセーが行くなら俺も行きます。」

俺も続いて進言する。

ギヤスパーは大事な後輩だからな。

助けるならやっぱりグレモリー眷属でないとな。

サーゼクス様の視線がイツセーに一度向くが、

すぐにアザゼルのほうに移った。

「アザゼル、噂では神器の力を

一定時間自由に扱える研究をしていたな？」

「ああ、そうだな、それがどうした？」

「赤龍帝の制御はできるだろうか？」

「……………」

サーゼクス様の問いにアザゼルは黙り込んだ。

しかし、墮天使の総督は懐を探り出すと。

「おい、赤龍帝」

アザゼルがイツセーを呼ぶ。

「お、俺は兵藤一誠だ！」

「じゃあ、兵藤一誠。こいつを持っていけ」

アザゼルがイツセーへ何かを投げる。

それは腕輪のようだった。

「そいつは神器をある程度抑える力を持つ腕輪だ。

例のハーヴアンパイアを見つけたら

そいつを付けてやれ。

多少なりとも力の制御に役立つだろう」

「でも、これふたつあるけど…？」

イツセーの言う通り腕輪は二つあった。

一つはギヤスパアの物。もう一つは恐らく。

「もう一個はお前のだ。『赤い龍』ウエルシュ・ドラゴン」

の力を使いこなせないだろう？なら、はめろ。

短時間なら、代価を支払わなくても禁手バランス・ブレイカー状態

になるのも可能だ。そいつが代価の代わりになってくれる」

マジか!? あんな腕輪にそんな力があるとはな。

「副作用で一時的にお前に施されている

封印も解ける。確か、『兵士』の力を

封じられているんだろう？」

「どうやってその情報を？」

確かにイツセーは駒七つ消費の『兵士』だが、

その力に対応できるだけの力をまだ有していない為、
リアス先輩に力を抑えられている。

「これは俺の私見に過ぎないが、

駒配分的にドライグが六、お前が一つとところか？

いや、六割九分と一分かもしれない。

『プロモーション』もドライグの真の力を

発現する為に必要な土台作り。

どちらにしても封印の解放ってのは

ドライグの力を解き放つてことだな、

リアス・グレモリー」

アザゼルの問いにリアス先輩は

目を細めるだけで特に答えなかった。

「そのリング、使うのは最後の手段にしておけ。

体力の消費までは調整できんから、いきなり

至ったら無駄に消耗するだけだ。

『鎧』装着中は体力か魔力を激しく消耗させる」

と、アザゼルが補足説明をしてくれる。

まあ、タイミングを間違えたら一気にピンチになるからな。

さらにダメ押しにアザゼルは口にする。

「よく覚えておけ。現段階のお前自身は

人間に毛が生えた程度の悪魔だ。

強大な神器を有していても宿主が

役立たずでは意味がない。

今のお前でも相手が未熟な者なら、

ドライグの力を振りまくだけで勝てるが、

その力よりも上の者や能力を把握している

者にとってみれば御しやすい代物だ。

何せ、お前自身がその神器の弱点だからな。

使いこなせないというのはそれだけ

弱味の塊なんだよ。

力を飼いならせなければいずれ死ぬぞ」

「わ、わかっているよ」

イツセーはアザゼルに返答するが、今の話はイツセーがずつと気にしてた事だからな。痛いほどわかってるだろうな。

「それと、兵藤祐介の方もだな。」

お前は確かプロトタイプのカウガだったが、ロビンの調べではそいつは本来こっちのカウガと同じように四形態の姿を使い分けて戦うオールラウンダーの筈だが、

兵藤祐介は平均能力の赤と高速戦闘の蒼にしかなれない、その場合相手は距離を取って遠距離攻撃をすればいいだけだからな

他の姿に早い所なれるようにしなきゃ先はないぞ」

それは、痛いほどわかってる。

緑と紫の姿には未だなれない。

青だって本来の姿とは違っている。

改めて言われると、考えさせられるな。

しかし、アザゼルは凄くわかりやすくて

再認識させられることを口にしてくれるな。

教師に向いているんじゃないかな。

「アザゼル、神器の研究はどこまで

いつているというのですか？」

ミカエルさんがため息を吐きながらアザゼルに訊くが、墮天使の総督は不敵に笑うだけだ。

「いいじゃねえか。神器を作り出した神がないんだぜ？」

少しでも神器を解明できる奴がいた方がいいだろう？

お前だって知らないことだらけだと

耳にしているぞ？」

「研究しているのが貴方だというのが

問題だとは思いますが…」

リアス先輩はグレイフィアさんに特殊な

術式を額いから受けていた。

「お嬢様、しばしお待ちください」

「急いでね、グレイファイア」

俺達が準備中の中、

アザゼルと白龍皇と東城が話し込んでいた。

「ヴァーリ、雄輔」

「なんだ、アザゼル」

「俺達の出番か？」

「ああ、お前達は外で敵の目を引け。

白龍皇とクウガが前に出てくれば、

野郎どもの作戦も多少は乱せるだろうさ。

それに何かが動くかもしれない」

「俺達がここにしていることは

あっちも承知なんじゃないかな？」

「だとしても、『キャスリング』で

赤龍帝とプロトクウガが中央に転移してくると

までは予想していないだろう。

注意を引き付けるのは多少なりとも効果はあるさ」

「旧校舎のテロリストごと、

問題になっっているハーフヴァンパイアを

吹き飛ばした方が早いんじゃないかな？」

と、ヴァーリはごく自然に言う。

こいつ、何言ってやがるんだ。

「和平を結ぼうって時にそれはやめろ。

最悪の場合、それにするが、

魔王の身内を助けられるのなら、

助けた方がこれからの為になる」

「了解」

アザゼルの意見にヴァーリは息を吐きながらも同意する。

カッ！

バランス・ブレイク
「禁手化」

「Vanishing Dragon Balance Breaker」

「!!!!!!」
音声のあと、ヴァーリの体を真つ白なオーラが覆う!

光が止んだ時、ヴァーリの体は白い輝きを放つ

全身鎧に包まれていた。

最後にマスクがシユバツとヴァーリの顔を覆った。

ヴァーリはイツセーを一瞥したあと、

会議室の窓を開き、空へ飛び出していった。

刹那。

ドドドドドドンツ!

外で巻き起こる爆風!

見れば、魔術師の群れが白い鎧を着込んだ

者に蹂躪されていた。

夜の空に光の軌跡を描きながら敵の群れへ飛び込み、

一騎当千の様相を見せていた。

魔術師の集中砲火をまったく気にせず宙を舞い、

大量の波動弾を校庭に放っていた。

魔術師達は成す術もなく、

消滅させられていくが、

直ぐに魔方阵が展開して次の魔術師達が現れる。

キリが無いな!

「さて、俺も行くかな」

東城がそう言うのと腰に手をかざし、

俺と同じ構えを取る。

「変…身!」

その掛け声と共に東城の姿が青いクウガ

『青のクウガ』へと姿を変えた。

何かのデバイスを手を持ち。

東城は窓から校庭へと飛び出す。

凄まじい脚力で魔術師の群れに飛び込み。

先ほどのデバイスをドラゴンロッドに変化させ、

敵をなぎ倒していく。

強いな……。俺では同じことは出来ない。

そんな事実を突きつけられるな。

「アザゼル。先ほどの話しの続きだ」

サーゼクス様がアザゼルに訊く。

「あー、何だ？」

「神器を集めて、何をしようとした？」

『ロンギヌス神滅具』の所有者も

何名か集めたそうだな？

神もないのに神殺しでもするつもりだったのかな？」

アザゼルはその問いに首を横に振った。

「備えていたのさ」

「備えていた？戦争を否定したばかりで

不安を煽る物言いです」

ミカエルさんが呆れるように言う。

「言つたろ？お前らに戦争はしない。

こちらからも戦争を仕掛けない。

ただ、自衛の手段は必要だ。

つて、おまえらの攻撃に備えて

いるわけじゃねえぞ？」

「では？」

「――『カオス・ブリゲード禍の団』」

「…カオス・ブリゲード？」

初めて聞く名だが、サーゼクス様もご存じないようで

眉を寄せていた。

「組織名と背景が判明したのはつい最近だが、

それ以前からうちの副総督シエムハザが

不審な行為をする集団に目を付けていたのさ。

そいつらは三大勢力の危険分子を集めているようだ。

中には禁バランス・ブレイカー手に至った神器持ちの

人間も含まれている。『ロンギヌス神滅具』持ちも

数人確認してるぜ」

「その者たちの目的は？」

ミカエルさんがそう訊く。

「破壊と混乱。単純だろうか？」

この世界の平和が気に入らないのさ。

テロリストだ。しかも最大級にたちがわるい」

なら、今回のテロもそいつらが…。

「組織の頭は『赤い龍』と『白い龍』」

の他に強大で凶悪なドラゴンだよ」

『——ッ！』

アザゼルの告白に事情を知らない俺とイツセー以外の
全員が絶句していた。

「…そうか、彼が動いたのか。『無限の龍神』オーフィス。
神が恐れたドラゴン…。」

この世界が出来上がった時から
最強の座に君臨している者」

サーゼクス様も表情を険しくされている。

以前、ヴァーリが言っていた一番強い奴か？

そんな中、聞き覚えのある声飛び込んでくる。

『ええ、オーフィスが「禍の団」のトップですよ』
カツ！

声と同時に会議室の床に魔方陣が浮かび上がる。

これは、悪魔の魔方陣か!?

「そうか。そう来るわけか！今回の黒幕は」

舌打ちするサーゼクス様。

「グレイファイア、三人を早く飛ばせ！」

「はっ！」

グレイファイアさんは俺達を会議室

の隅に行くように急かせると、

小さな魔方陣を床に展開した。

ちようど、三人ぐらいしか収まらない規模の大きさだ。

「お嬢様、ご武運を」

「ちよ、ちよつとグレイファイア!?お兄様!」
転移の光が俺達を包み込んでいく。

第49話「禍の団」

木場 side

部長、イツセー君、ユウスケ君が転移の
魔方陣に消えてすぐ、

僕、木場祐斗の眼前では信じられない
展開が起ころうとしていた。

会議室の床に現れた魔方陣。

それを見て、三大勢力の首領面々は驚愕していた。
いや、アザゼルは笑い。

サーゼクス様は苦虫を噛み潰したような
表情をされていた。

「——レヴィアタンの魔方陣」

え…？

僕はサーゼクス様の言葉に耳を疑った。

少なくとも僕の知っている、

セラフォル・レヴィアタン様の

魔方陣の紋様はこれではない。

では、いったい。その疑問は直ぐに解消される。

「ヴァチカンの書物で見た事あるぞ。

あれは旧魔王レヴィアタンの魔方陣だ」

魔方陣を指差し、ゼノヴィアがそう呟く。

…なるほど、噂には聞いていた。

まだ存在していたってわけなんだね。

魔方陣から現れたのは、二人の女性。

一人の姿は胸元が大きく開いていて、

深いスリットも入ったドレスに身を包んでいる。

もう一人は、動きやすい服装に

西洋騎士の籠手のみを着け、

腰には細剣を携えた女性だった。

「いきげんよう、現魔王のサーゼクス殿」

不敵な物言い、ドレスの女性は
サーゼクス様に挨拶する。

「先代レヴィアタンの血を引く者。

カテレア・レヴィアタン。

これはどういふことだ？」

サーゼクス様はそう言われる。

やはり、旧魔王の一族！

話を聞いた事があつた。

旧四大魔王が滅び、

新しい魔王を立てようとした時に

徹底抗戦を最後まで唱えたのが、

旧魔王の血を引く者達だったという。

すでに戦力が疲弊しきつた戦後の悪魔達は、

最後の力を持って、タカ派の旧魔王軍の一門

全てを冥界の隅へ追いやつたと聞く。

「旧魔王派の者達はほとんどが

カオス・ブリゲード

『禍の団』に協力することに決めました」

——っ！……なんてことだ。

ここに来て、旧魔王派が。

「新旧魔王サイドの確執が

本格的になったわけか。

悪魔も大変だな」

アザゼルは他人事のように笑うだけだ。

「貴方もそちら側ですか、ギーラ」

ミカエル様がもう一人の女性に語り掛ける。

「ええ、個人的にこちらに協力すれば

私の目的も達成できますからね」

「教会に聖騎士として忠誠を誓った貴方が

裏切るとは残念ですよ」

「私が忠誠を誓ったのは一人だけで

元々教会には誓った覚えはないんですよ」

どうやら、教会側でも派閥争いがあるのかもしれない。

「カテレア先程の話は言葉通りと

受け取っていいのだな？」

「サーゼクス、その通りです。」

今回のこの攻撃も我々が受け取っております」

「——クーデターか」

そう、これはクーデター。

現魔王派に対する旧魔王の反乱だ。

こんなときに、こんな場面で宣言するなんて…。

しかも彼女たちはテロリストの集団に手を貸している。

「…カテレア、何故だ？」

「サーゼクス、今日この会談のまさに

逆の考えに至っただけです。

神と先代魔王がいないのならば、

この世界を変革すべきだと、

私達はそう結論付けました」

神の不在、三大勢力の和平、

それを全て知った上でのクーデターか。

しかも考えていることは

ここにいる方々とは全く逆の道。

「オーフィスの野郎はそこまで未来を見ているのか？

そうとは思えないんだがな」

アザゼルの問いかけにカテレアは息を吐くだけだ。

「彼は力の象徴としての、

力が集結するための役を担うだけです。

彼の力を借り、一度世界を滅ぼし、

もう一度構築します。

新世代を私達に取り仕切るのです」

——ッ！

こんなことが起きるなんて。

外で暴れている魔術師達は

彼等の賛同者というわけだ。

「貴方の目的もそれですか？ギーラ」

ミカエル様が聖騎士に訊ねる。

「いえ、私の目的は兵藤祐介と戦う事ですがこの場にいるはずですが、いないとなると

邪眼の彼を助けに行つたのですかね

どうやってこの包囲網を出たのかは

分かりませんが私はこの場に

もう用はありません

カテレア、ここは任せてもいいですか？」

聖騎士がこちらへ背を向ける。

「構わないわ、もともと私の獲物

なのだから」

マズイ!?

彼女はユウスケ君の元へ向かう気だが、

僕達が彼女を止める間もなく、

一瞬にして転移していつてしまった。

どのような手段を使ったかは分からなかったが、

先程のアザゼルの話が本当ならば、

旧魔王派、魔術師、聖騎士の他にも

堕天使や天使からも反逆者が出ている事になる。

他の勢力の力なのかもしれない。

…なんで皆戦いを望むんだ？

…そんなに和平が嫌なのか？

サーゼクス様は皮肉気に笑う。

「…天使、堕天使、悪魔の反逆者が集まって

自分達だけの世界、自分達が支配する

新しい地球を欲したわけか。

そののまとめ役が『ウロボロス』オフィス」

トップは神すらも恐れた最強のドラゴン。

伝説では「赤い龍」、ウエルシユ・ドラゴン「白い龍」バニシング・ドラゴン」

よりも強いと聞いている。

無限の力を有した神に等しいドラゴンだと。

「カテレアちゃん…どうしてこんな！」

セラフオルー様の叫びにカテレアは

憎々し気な睨みを見せる。

「セラフオルー、私から『レヴィアタン』の

座を奪っておいて、よくもぬけぬけと！

私は正統なるレヴィアタンの血を引いていたのです！

私こそが魔王に相応しかった！」

「カテレアちゃん…。わ、私は！」

「セラフオルー、安心なさい。今日、

この場で貴方を殺して、私が

魔王レヴィアタンを名乗ります。

そして、オーフィスには新世界の

神となつてもらいます。

彼は象徴であればいいだけ。

あとの『システム』と法、

理念は私達が構築する。

ミカエル、アザゼル、そしてルシファー

サーゼクス、貴方達の時代は終えてもらいます」

カテレアのその言葉にサーゼクス様も

セラフオルー様もミカエル様も表情を陰らせていた。

しかし。

一人だけ、愉快そうに笑う者がいた。

「くっ…。くっくっくっくっ」

彼だけは。

心底おかしそうに。

悪童らしい邪悪な笑みを見せていた。

「アザゼル、何が可笑しいのです？」

カテレアmp表情と言動には

明らかに怒りが含まれている。

「ハハハ。お前 いや、おまえら、

こそつて世界の変革かよ」

「そうです。それが一番正しいのですよ、

アザゼル。この世界は」

「腐敗している？人間が愚か？

地球が滅ぶ？おいおいおい、

今時流行らないぜ？」

腹を抱えて笑うアザゼル。

カテレアは目元を引きつらせていた。

「アザゼル、貴方も貴方なのですよ。

それだけの力を有していながら、

今の世界に満足などと…」

「言つてろ。お前らの目標はあまりに陳腐で

酷すぎる。なのにそういう奴等に限つて

やたらと強いんだよな。まったく、

傍迷惑だ。レヴィアタンの末裔、

お前らの台詞、一番最初に死ぬ敵役のそれだぜ？」

「アザゼル！貴方はどこまで私達を愚弄する！」

カテレアは激怒し、全身から魔力のオーラを迸らせる。

一触即発の空気だ。

「サーゼクス、ミカエル、俺がやる。

手を出すんじゃないぞ？」

アザゼルが立つ。

墮天使の総督が戦闘高揚でもしているのか

のように薄暗いオーラを放ち始めた。

「……カテレア、降るつもりはないのだな？」

サーゼクス様の最後通告だ。

カテレアは首を横に振った。

「ええ、サーゼクス。貴方はいい魔王でした。

けれど、最高の魔王ではない。

だから私達は新しい魔王を目指します」

「そうか。残念だ」

その確認を見ると、アザゼルは窓の方へ手を向ける。
ドンツ！

光の一撃に窓際全域が吹っ飛んだ！

なんてことを！

アザゼルは十二もの黒き翼を展開する。

その羽は常闇よりも暗い。

「旧魔王レヴィアタンの末裔。

『終末の怪物』の一匹。

相手としては悪くない。

カテレア・レヴィアタン、

俺といつちよハルマゲドンでも

シヤレこもうか？」

アザゼルの迫力ある挑戦状に

カテレアも不敵な笑みで応じる。

「望むところよ、堕ちた天使の総督！」

ドツ！

アザゼルとカテレア・レヴィアタンが

この場から飛び立ち、

校庭の遥か上空で光と魔の攻防戦を

繰り広げ始めた。

どちらも凄まじいまでのオーラの質量だ。

僕達とは次元が違う。

対応に苦慮する僕だが、

こうなった以上は魔王様をお守りするか、

部長を追うか。

そんな僕へサーゼクス様が、

「木場祐斗君。私とミカエルはここで

この学園を覆う結界を強化し続ける。

アザゼルとカテレアが暴れる以上、

被害は大きくなるかもしれない。
できるだけ外へ被害を出したくないからね。
悪いのだが、グレイフィアが魔術師転送用
の魔方陣の解析が済むまでの間、
外の魔術師達を始末してくれないか？」
魔術師討伐の命をくださる。
魔王様からの直接の命令だ。
光栄の極みだ！

「はい」

「ありがとう。妹の騎士が君で良かったよ。

その禁 バランス・ブレイカー 手を妹と仲間の為に

揮ってくれたまえ」

「はっ！ゼノヴィア、一緒に来てくれ！」

「ああ、私もリアス・グレモリーの『騎士』だ。

木場祐斗、私達は二振りそろってこそだと思う。

いざ、参ろうか」

僕とゼノヴィアはお互いに頷き合っていると、

校庭へ切り込んでいった。

—○○—

「はっ！」

僕の聖魔剣が魔術師の体を

防御障壁の魔法ごと斬り払う。

これで何人目だろうか？

かなりの魔術師を斬り倒したが、

すぐに魔方陣から新たな刺客が召喚されてくる。

「キリがないな」

ズバアアアアンツ！

聖剣デュランダルから斬撃と共に波動が放たれ、

校庭を縦横無尽にえぐっていく。

その攻撃が魔術師を大勢屠る。

ゼノヴィア、もう少し学び舎を大切にしようよ。

デユランダルはそれほど扱いつらい？

カッ！ドッ！

ドオオオオオオオオオオッ！

空から聞こえてくる轟音と、眩い光。

上を見上げてみれば、

アザゼルとカテレア・レヴィアタン

が激しい攻防を行っていた。

アザゼルが自分の身の丈を遥かに超える

極太の光の槍を幾重にも出現させ、カテレアに投げ放つ。

カテレアは空中に幾重もの防御方陣を張り巡らせて

光の攻撃を防いでいる。

その攻防の余波で校庭のあちこちが

大きなダメージを受けていた。

新校舎を魔王様方が守っていなければ

建物の方にも深刻な崩壊を与えていたであろうはずだ。

この学校の敷地全体が強力な結界

に囲まれているのも幸いだった。

じゃなければ、周囲の住宅街にも被害を出していた。

アザゼル、またはカテレアの避けた極大の攻撃が

結界にぶつかるたび、冷や冷やする。

実力では、アザゼルの方が上だと思っただけど、

カテレアは予想以上に食い下がっていた。

本来ならばカテレアに下僕の眷属悪魔が

いてもおかしくない。しかし、

彼女達旧魔王派は現在悪魔が導入している

イレイザイル・ピリス
「悪魔の駒」を否定したと聞く。

カテレアには補佐役の『女王』も身辺を守る

『騎士』もいないだろう。

そのカテレアは、懐から小瓶を取り出し、

中に入っていた小さな黒い蛇らしきものを？み込んだ？

刹那。

ドンッ！

空間が激しく振動し、

駒王学園全域に力の波動を波立たせる。

カテレアの全身から放つ魔力が膨れあがり、

不気味なオーラを漂わせていた。

サーゼクス様やセラフォル様に迫る質量だ…。

先程？み込んだ蛇はいったい…。

アザゼルが無数の光の槍を彼女に向けて放つが、

それをカテレアは右腕を横になぐだけで

難なく消失させてしまった。

そんなバカな！

墮天使総督アザゼルの力は今日この場に

いる方々の中でも一、二の力だというのに！

僕の眼前で、さらに驚くべき事態が巻き起こる。

カテレアと空中で戦うアザゼル。

その横合いから、予想外の一撃が

墮天使の総督を襲った。



俺は気づいた時、部室に立っていた。

最後はドタバタしてたが、転移は成功し。

ただし。

「——ッ！まさか、ここに転移してくるとは！」

「悪魔め！」

室内は不気味なローブを着た魔術師が占拠していた。

「ぶ、部長！ユウスケ先輩！イツセー先輩！」

ギヤスパアの声のした方へ視線を向ければ

そこにはギヤスパアが椅子に縄でくくりつけられていた。

だが、頭部には紙袋の切れ端が。

被っていたのか。

ギヤスパアの無事を確認し、

リアス先輩もホツとしていた。

「ギヤスパア…良かったわ。無事だったのね」

「部長…。もう、嫌です…」

しかし、ギヤスパアは途端に泣き出した。

「僕は…死んだほうがいいんです。お願いです。」

部長、先輩。僕を殺してください…。

この眼のせいで、僕は誰とも

仲良くななんてできないんです…。

迷惑ばかりで…臆病者で…」

ギヤスパアは涙をボロボロとこぼしていた。

敵に捕らわれ、利用され、

俺達に迷惑掛けたと思っっているんだろう。

リアス先輩はそんなギヤスパアに優しく微笑む。

「バカなことを言わないで。」

私は貴方を見捨てないわよ？

あなたを眷属に転生させた時、

言ったわよね？

生まれ変わった以上私の為に生き、

そして自分が満足できる行き方も見つけなさいと」

でも、リアス先輩の言葉はギヤスパアに届かず、

奴は首を横に振る。

「…見つけられなかっただけです。」

迷惑かけてまで僕は…生きる価値なんて…」

「貴方は私の下僕で眷属なの。」

私はそう簡単に見捨てない。

やっとあなたを解放させることができたのに！」

「そうだぞ、ギヤスパア部長も」

俺達もお前を見捨てないからな！」

「そうだ、一人で見つからないなら俺達も」

「お前の生きる理由を一緒に探してやるさ！」
「たかが神器一つ使いこなせなかつたって受け止めて。
ガッツ！」

俺達の目の前でギヤスパーが女の魔術師に殴られる。
魔術師はギヤスパーの髪を掴み、冷笑を浮かべていた。

「愚かね、貴方達。」

こんな危なっかしいハーフヴァンパイアを
普通に使うなんてバカげているわ。

「旧魔王派の言う通りね。」

グレモリー一族は情愛が深くて力に溢れている
割には頭が悪いつて」

魔術師はリアス先輩を侮蔑的な視線で見ている。

「さっさとこんなヴァンパイアを洗脳して、

道具として有効的に使えばもつともつと評価を
得ていたのではないかしら？」

敵対している堕天使の領域にこの子を

放り込んで神器を暴走させれば、

幹部の一人でも退けたかもしれないわ。

それをしないのは何？」

もしかして、仲良しこよしで下僕を扱う気なの？」

「ハ、ハ」

リアス先輩を侮辱され怒ったイツセーが

魔術師に殴りかかろうとしたが、

リアス先輩はイツセーを手で制止する。

「私は…自分の下僕を大切にするわ」

リアス先輩は冷静に返していた。

ヒュツ！ボン！

魔術師が小さな魔力の弾をリアス先輩に放つ。

リアス先輩に当たり制服の一部を消し飛ばす。

「生意気な口ね。それに悪魔のクセに

美しいのも気に入らないわ、グレモリーの娘」

女魔術師の嫉妬にまみれた言葉。

魔術師はギヤスパアの首元に刃を突き付ける。

「動くところの子が死ぬわ。ちよつと遊びましようよ」

魔術師は手を突き出し、さらに魔術を放とうとしている。

リアス先輩は言われた通り避ける気配を見せない！

マズイ！

魔力の弾が再び放たれる瞬間、

イツセーがリアス先輩の前に立ち、盾となる！

ボンッ！

弾はイツセーの首より下の部分に当たっていた。

位置的にリアス先輩の顔を狙っていたようだ。

すると、リアス先輩はイツセーの後ろから出てきて

ギヤスパアに優しく語り掛ける。

「ギヤスパア、私にいっぱい迷惑を掛けてちようだい。

私は何度も何度も貴方を叱ってあげる！

決してあなたを放さないわ！」

さすがは先輩だな。

俺に言われたわけじゃないが、

感動したぜ、

さて、ギヤスパア、お前はここまで言ってもらえて、

ただ黙ってる男じゃないよな。

「ぶ、部長…：僕は…：僕はっ！」

泣き出すギヤスパア。

だが、それは今までのような

恐れからでも悲しみからでもない。

うれしくて泣いている事に俺は気づいた。

「ギヤスパアアアアアアアアアアアッ！」

イツセーは室内に響き渡る大声を張り上げる！

「逃げるなッッ！恐れるなッッ！泣き出すなッッ！

俺も！部長も！ユウスケも！朱乃さんも！

アーシアも木場も小猫ちゃんもゼノヴィアも！

皆、仲間だ！絶対にお前を見捨てないツツ！
仲間外れなんかにしないぞオオオオオオツツ！」

「そうだなイツセー、言いたいことは

言われたが、俺達にとつてお前は欠かせない

大事な仲間だ！ここがお前の居場所だ！

それを忘れるな！ギヤスパー！」

「ブーステッド・ギア！」

『ブースト』

イツセーの左腕に赤い籠手が装着される。

「部長！『女王』に昇格します！」

リアス先輩が頷き、イツセーが『女王』に昇格する。

「アスカロン！」

『ブレード』

新たな音声と共に神器の甲から伸びたのは、

神社で手に入れた聖剣アスカロン！

女魔術師達がイツセーを警戒するが、

イツセーは剣の切っ先を自分の手元へ。

ザシユ。

イツセーは刃で右の掌を自ら斬った。

「イツセー…？」

「お前！何やってんだ！」

イツセーの行動を怪訝そうに見ているリアス先輩。

俺も何がしたいのか判らなかつたが、

イツセーはどうやら聖剣の力を切っていたようで、

悪魔とドラゴンに特攻を持つ剣でダメージは

そこまでないようだった。

「だけどな、ギヤスパー！」

自分から立たなくちや始まらないんだぜ？

女の子に活を入れて貰ったら、

あとは立てッ！

てめえにも立派なもんついてんだろうが

「あああつあああつっ！」

イツセーが左腕を突き出すと、
血の付いたアスカロンがギヤスパー
の方へ伸びていった！

魔術師達が反応するよりも早く、
アスカロンについた血は
ギヤスパーの口に付着する。

「飲めよ。最強のドラゴンを宿している
とかいるとかいう俺の血だ。
それで男を見せてみろッ！」

イツセーの言葉にギヤスパーは強い眼差しで頷いた。
ギヤスパーが舌で口元についた
イツセーの血を舐めとる。

ギヤスパーが血を口にした瞬間、
この室内の空気が一気に様変わりした。
不気味で言い知れない悪寒が俺の全身を駆け巡った。

椅子に繋がれたギヤスパーへ目を向けた時。
消えた！
ギヤスパーが椅子に座っていない！

椅子に残っているのはギヤスパーを繋いでいた縄だけだ。
女魔術師達もギヤスパーが突然消えた事に驚き、
辺りを見渡す。室内全域に視線を配らせると。

チチチチチ。
不気味な鳴き声が聞こえてくる。
部室の天井近くを無数のコウモリが飛んでいた。

赤い瞳をしたコウモリの群れは
一斉に女魔術師達に襲い掛かる。
「クッ！変化したのか、吸血鬼め！」

「おのれ！」
毒づく彼女達は手をコウモリに向けて、
魔術の弾を撃ちだそうとするが、

何かにして下へ引っ張られて体制を大きく崩した。
女魔術師達の影から黒い手が無数に伸びていた！

影から出てきた手は、

彼女達を影のなかへ引っ張ろうとしていた。

「吸血鬼の能力か！」

「くっえー！」

ドンツ！

影へ魔術の弾を撃ちだすが、

影の手は何事もなく霧散するだけだ。

その間にもコウモリは魔術師の体を包み込んで、
各部位を噛んだ。

「血を吸うつもりか!?!」

「いや、私達の魔力も吸いだしているぞ！」

苦戦している魔術師達。

コウモリと影から伸びる手になすがままにされていた。
これって。ギヤスパアのヴァンパイアとしての力か？

「イツセー、ユウスケ、あれが本来ギヤスパアが

秘めていた力の一部よ。イツセーの血を飲んだ事で、
解放されたのね」

とリアス先輩が言う。

やはり、あれはギヤスパアの力か。

「くっーならば、くっするまでよー！」

魔術師達が手の照準をこちらへ向ける！

俺達を狙うつもりか！

俺はすぐさま二人の前に出て盾となる！

ドシユツ！

撃ちだされた無数の魔術の弾が俺達を狙うが。

それら全部が、空中で停止した。

これはっ！

『無駄ですよ。貴女達の動き、

攻撃は全て僕が見ています』

室内に響き渡るギヤスパーの声。
コウモリの赤い目が輝いていた。
そうか、コウモリの視線から神器を発動しているのか！
しかも修行と違い、魔術師の弾だけを
ものの見事に停止させている！
イツセーの血を飲んだ影響か、
神器を使いこなしている！
『僕は貴方達を停めます！』

カッ！

無数のコウモリが赤い瞳を光らせ、
この部屋にいる全ての女魔術師の
時間を停止させてしまった。

『イツセー先輩・トドメです！』

「任せる！」

イツセーは駆け出し、魔術師達にタッチしていく。
そして部屋の中央でポーズを取りながら、叫んだ。

『洋服崩壊ッッ！』

バババッ！

時間を停止させられた魔女たちの衣服がはじけ飛んだ。
ブッ！

鼻血を噴き出しながら、

イツセーは勝利の笑みを浮かべていた。

「ギヤスパー、俺達が組めば無敵だ」

『はい！』

ペチッ。

「そうじゃないでしょ？」

リアス先輩がため息を吐きながら、
イツセーの頭を小突いた。

トドメどころか倒せてないしな。

欲望を優先しすぎだ。

こうして俺達は無事にギヤスパーを救出する事ができた。

魔術師を倒した俺達は魔術師達を縛り上げて、
部室の魔方陣へ置いていた。

全員を置き終わるとリアス先輩が魔方陣を展開させ、
魔術師達を冥界にある役所へ送る。

そこで捕縛されて、牢屋に入れられるという。

これでテロリストの生きた証人が手に入った訳だ。

マジで、イツセーの洋服崩壊は意味なかったな。
ドレスブレイク

「先輩、手は大丈夫ですか？」

コウモリや影から元の姿に

戻ったギヤスパーが訊いていた。

今はアザゼルから貰った腕輪をしている為、
神器の暴走も起きないだろう。

「ああ、このぐらいのケガは慣れっこだ。

これでも墮天使の攻撃で腹に

風穴があいた事もあるんだぞ」

いや、それ人間だったころの死因じゃん。

「うえええええっ！ほ、本当ですか…？」

せ、先輩はバイオレンスですね…」

「まったくだ、お前が持つてるアスカロンは

悪魔にもドラゴンにも効く聖剣だぞ、

能力切ったからって無茶しすぎだ

一瞬キモ冷やしたぞ」

「悪かったって。それで、

ギヤスパー俺の血を飲んで、どうだ？」

「はい、一時的に力が底から沸き上がりましたけど…

今は元の状態に戻ってます」

そうか、やはり時間制限付きか。

それでも血を飲めば十分なほどに戦力になるな。

「うん。全員、あちらへ転送したわ！
さて、イツセー、ユウスケー、ギヤスパー！
魔王様の元へ帰るわよ！」

『はい！』

俺達は返事をして、部室を後にしようとした。

「あら、もう終わってしまったのね」

声の方へ視線を向けると、

部室へ聖騎士ギーラが入ってきたところだった。

「あ、たしか、ミカエルさんと一緒にいた」

「ええ、ミカエル様に言われて応援に来ただけど

必要なかつたみたいね」

部屋を見渡しそういうギーラさん。

なにかおかしいと俺は思った。

「ええ、テロリストなんて俺達にかかれば

敵じゃないですよ！」

「そのようね、必要ないかもしれないけど、

ミカエル様の所まで護衛するわ

一緒に行きましょう」

そう言つて俺達に外へ出るように促すギーラさん。

イツセーが部屋を出ようとしたが、

俺は手でイツセーを止める。

「な、なんだよユウスケ」

「いや、気になることがあってな、

ギーラさん、貴方なんで無傷なんですか？

ここに来るまでの間に魔術師達と戦った筈なのに

怪我も追つてないし、剣すら抜いてないのは

可笑しいでしょう」

俺の言葉に他の皆はギーラさんを警戒する。

「たしかに、戦いはしてませんが、

それは私が隠れながら来ただけですよ

「そんな警戒する事はないでしょう?」
変わらぬ態度でそう訊ねるギーラ。

「俺は転移する前に貴方の声を聴いたんだよ。」

「アンタはテロリストの仲間で、

だから戦闘は行わなかった。」

「白龍皇達からは隠れてただろうが、

魔術師達からは狙われることはなかったんだろ」

俺の話にギーラはため息を吐きながら剣を抜いた。

「まさか、こんな早くバレるとは、

後ろから邪魔者を始末したかったんですが」

ギーラは剣を構えこちらを警戒している。

「どうぞ、変身してください。」

生身の貴方と戦っても意味がないので

さっさとしてください」

「コイツは何を考えてるんだ?」

「言われなくても、変身!」

俺は『群青ナイトフォームのクウガ』に変身し、

近くに飾ってあった剣を構える。

「さあ、クウガ、一対一の一騎打ちと行きましょう」

俺は能力で剣を変化させ、騎士の速度で駆け出し、

ギーラの懐に入り両手の剣でギーラに斬りかかる。

ガギインツ!

驚いた事にギーラは細剣で俺の剣を受け止めた。

「なっ! そんな剣でどうやって!」

あんな剣で受け止めた事もそうだが、

クウガになった俺の力に負けない力が

この女性のどこにあるんだ?

「あなたに改めて名乗りましたよ。」

私の名は『メ・ボダウ・バ』

今回のゲゲルで貴方の相手を務める者です」

そういうとギーラの肉体が変化して

人型の昆虫に姿を変える。

「こいつ、ザビネと同じ昆虫型か」

「ええ、最も向こうは私より上の階級なので

強さは彼女の方が上ですが私も能力では

負けてませんよ！」

ボダウが後ろに下がるとこちらに剣先を向ける。

「シヨット・ボム！」

剣先から複数の火種がこちらへ飛んでくる。

今避けると皆に当たる！

ドオオオオンツツ！

「く、まだだ！」

「ユウスケこっちは障壁を張るから

気にせず戦いなさい！」

「ありがとうございます。リアス先輩！」

剣の技術では負けてしまう。

なら魔法を撃つタイミングで懐に入れば！

「シヨット・ボム！」

ダツ！

俺は騎士の最大速度で相手が反応する前に懐に入る。

取った!!

ドオオオオンツツ！

「っ！足元が…爆発した…？」

ボダウに近づいた瞬間足元が赤く光り爆発した。

「キラーメイン。フッフ、地雷を仕掛けただけですよ

どんなに早くても通り道に仕掛ければ

貴方でもあたるでしょう」

ボダウが笑いながら、こちらへ剣先を再度向ける。

「ユウスケ先輩！避けてください！」

ギヤスパーが叫ぶが俺は爆発の衝撃で動くことができなかった。

「シヨット・ボム！」

ドオオオオンツツ！

俺は爆発をもちに受けてイツセイ達の元まで吹き飛ばされる。

『ユウスケ！』

皆が近づいて俺を起こすが俺は変身がとけてしまい生身に戻る。

「…くそ、強すぎるー！」

「貴方が今まで戦ったのはズのザインでしょう。」

私は『メ』です『ズ』と違いゲゲルに能力をつかえます。

私の能力『爆^{エクスプロージョン}発』の威力はどうですか？」

「貴方の目的は何？」

何故、ユウスケを狙うの！」

「私はある方の復活の為、

そちらのクウガに『ザザグド・ゲゲル』を行います

そしてクウガには死んでももらいます」

ボダウがそう答えた。

あの方の復活!?

分からないが、させる訳にはいかないし、

俺は死ぬ気もない！

「そんな事、私がさせると思う！」

「どう思おうと、貴方の勝手ですよ。」

私も私の願いの為に勝手に彼を殺しますので」

俺は起き上がりリアス先輩を制止する。

「待ってください。リアス先輩、

コイツの指名は俺です。

まだ俺は戦えます！下がっていてください」

「ユウスケお前そんな傷で！」

「ユウスケ…」「ユウスケ先輩…」

「グロンギ族が何故俺を狙うのかは

分かりませんがこれはグロンギとクウガの戦いです

他の人の助けは野暮つてものですよ」

「分かったわ。ならせめてこれを使いなさい」

そう言って、リアス先輩はフェニックスの涙を

取り出して渡してきた。

俺はそれを飲み干して傷を癒す。

「ゆ、ユウスケ先輩なんで

そんなになつてまで戦えるんですか？」

ギヤスパーが涙を流しながら訊ねてくる。

そうだよな、仲間が血を流すのは嫌だよな。

でもな…。

「前にも言ったろ、皆の笑顔を守りたいからだ、

こいつらは何をするか分からない。

ここで負ければ次は皆に牙が向くかもしれない。

皆で戦えば勝てる戦いだろうけどな。

男が一騎打ちを申し込まれて、

複数人で戦えば男が廃るつてもんだ！

お前も男なら！禪締めて勝負を黙って見届けろ！」

「は、はい！ユウスケ先輩！

信じてます！先輩が勝つて！」

涙を拭いながらギヤスパーが答える。

すると、ギヤスパーの胸から淡い緑色の光が飛び出し、

俺のベルトに吸い込まれる。

ドクンッ！

「これは？」

気が付けば俺は僧侶ビショップに昇格プロモーションしていた。

「今なら、もしかして」

俺は腰に手をかざす。

腰にベルトが出現し、

中央の宝玉が翡翠色に輝いていた。

俺はいつものポーズを取り。

自身を変えるあの言葉を叫ぶ。

「変身！」

俺の体に変化していく。

皮膚が固く変化していき、

黒い皮膚に緑色の装甲を身に纏い、

肩にはグレモリーの魔方陣が彫られた
銀色の装甲を纏う。

腰からは銀色の装飾が施された黒のローブを付けている。

クウガの新たな姿。

『ビシヨツブフォーム深碧のクウガ』だ。

「新たな姿！、ですが、

私も負ける訳にはいかないのです！」

「シヨツト・ボム！」

「風よ！」

『Aero』

俺が手をかざすと

自身の周りに風が巻き起こり

風のバリアが現れた。

ドオオオンツ！

風に阻まれた。

そして、近くに床に落ちていた木の棒を拾う。

すると、木の棒は細剣へと姿を変える。

「今度はこっちの番だ！凍れ！」

『Blizzard』

剣を指揮棒の様に振るうと目の前に

氷の礫が生まれて散弾のように放たれる。

「クツ！チェイン・エクスプロージョン！」

低速の火種を無数に生み出し、氷の礫にぶつけて相殺する。

「魔法戦を行うスタイルですか、

長引けばこちらが不利ですね。それなら、

『ブリリアント・デトネーション！』

ボダウが剣先に魔力を収束させると、

無数の火種が雨の様な密度で放たれる。

「時よー！」

『Stop』

俺が剣を上にかざし叫ぶと、

全ての火種とボダウがその動きを止める。

「こ、これはハーフヴァンパイアの能力!？」

そこで、ようやくボダウの余裕の表情が崩れる。

「さすがにこれだけの実力者は完全には停止出来ないか

これが俺のいや俺達の絆の力だ！」

「炎よ！」

『Fire』

俺が剣を相手に向け照準を合わせると、

無数の火弾が生まれボダウに向け放たれる。

途中、ボダウの放った火種を呑み込み

火は更に大きくなりボダウに命中する。

ドガアンツツ!!

「そ、そんな、私が……こんな所で？」

ビキツ！ビキツ！

ボダウの体に幾つもの紋章が浮かび上がると

ベルトに向け罅が入っていく。

「すみません……オルガ様」

最後に見せた表情は、どこか悲しげなものだった。

ドカアアアアアアアアアアアアアンツツ！

ボダウが力尽き倒れると

ベルトが爆発し弾け飛んだ。

こうして、突如行われた

「ササグド・ゲゲル」はクウガの勝利で

幕を閉じたのだった。

第50話「裏切り」

ボウドを倒した俺達は部室後にして
旧校舎の玄関まで移動していた。

「さあ、これから敵の包囲を突破して
新校舎まで戻るはよ準備はいい？」

リアス先輩が扉を開ける前に再度確認してくる。

『はいー！』

俺達はそろって返事をする。

まあ、部室でボウドとの戦闘の爆発音で

ここに俺達がいる事はバレてるだろうな。

というか、部室を含めて

何部屋か最後の爆発で吹き飛んだしな。

「すみません。リアス先輩。部室を吹き飛ばして」

俺が謝るとリアス先輩は優しく微笑み返答した。

「何言ってるの。貴方じゃ聖騎士を倒したのよ

誇る事はあっても攻める事はないは」

「そ、そうですよ。ユウスケ先輩！

か、格好良かったです」

そう言ってくれたのは、

部室からここまで背中に引っ付いて隠れる

ギヤスパード、アジアといい、

うちの僧侶は俺の背中に隠れたがるな。

とりあえず、コイツの引きこもりは

治していかないとな。

そう思い玄関を出た時だった。

ドツガアアアアアアンツ！

俺達の前に何かが落ちてきた！

敵か！

立ち込める土煙が消えたあと、

そこにいたのは。

「チツ。この状況下で反旗か、ヴァーリ、ユウスケ」
ダメージを負った墮天使の総督だった。

「そうだよ、アザゼル」

「まあ、俺とヴァーリの二人相手に

その程度のダメージとは流石は総督様だな」

眩い輝きながら、俺達の前に白龍皇が舞い降りる。

その傍らに『青のクウガ』ドラゴンフォームのクウガが着地する。

そして、見知らぬ女性が遅れてやってくる。

「和平が決まった瞬間、

拉致したヴァンパイアの神器を発動させ、

テロを開始させる手筈でした。

頃合いを見てから私と共に白龍皇とクウガが暴れる。

三大勢力のトップの一人でも葬れば良し。

会談を壊せればそれで良かったのです」

褐色の女性がそう説明した。

何者か知れないがとてつもなく強いのは分かる。

そんな中、イツセーだけは、

女性の格好に釘付けになっていたが、

「いやらしい視線を感じるわ。

その子が赤龍帝なのですか、ヴァーリ？」

「ああ、残念ながら、そうだよ。

本当に残念な宿主なんだ」

「それで、そちらの子がもう一人の

クウガって訳ねユウスケ？」

「だな、けどあちらの残念と違って、

少し目を離れた間に新たな力を手に入れてやがる

断然興味深いな」

「残念残念言うな！俺だって懸命に日々を生きてんだ！

……って、なんでお前達とアザゼルが対峙してる？

つか、その姉ちゃんだれだよ？」

まだ状況を分かっていないイツセーに

女性が哀れむような目で見ていた。

「なるほどね。本当に残念な子ね。」

ヴァーリ、ユウスケこの子たちは殺すの?」

「俺は今回は殺さない泳がしとけばさらに

強くなつて楽しめそうだ」

「俺はどうしようか迷っているのが本音だ。」

正直、俺は彼にそこまで

期待をかけているわけじゃないんだ」

出会った時から、仲良くなれるとは思ってなかったがな。

まさか、こんな展開になるなんて予想外だったな。

「…まったく、俺もやきが回ったもんだ。」

身内がこれとはな…」

自嘲するアザゼル。

ヴァーリがマスクを兜にシュバツと収納させて、

顔を見せる。

「いつからだ? いつから、そういうことになった?」

「コカビエルを本部に連れ帰る

途中でオファアを受けたんだ。

ユウスケにはその後誘った形さ。

悪いな、アザゼル。こちらの方が面白そうなんだ」

「ヴァーリ、『パニシング・ドラゴン白い龍』が

オーフェイスに降るのか?」

「いや、あくまで協力するだけだ。

魅力的なオファアをされた。

『アースガルズと戦ってみないか?』

こんなこと言われたら、

自分の力を試してみたい俺では断れない。

アザゼルは、ヴァルハラ

アース神族と戦う事を嫌がるだろう?

戦争嫌いだものな」

「雄輔、お前もそうなのか?」

「当然だ、俺は強くなりたい、

それには戦いが一番だ、

それも強者との戦いがな」

「俺はお前達に『強くなれ』と言ったが、

『世界を滅ぼす要因だけは作るな』とも言った筈だ」

「関係ない。俺達は永遠に戦えればいいだけだ」

「…そうかよ。いや、俺は心のどこかでお前達が

手元から離れていくのを予想していたのかもしれない。

お前達は出会った時から今日まで強い者との

戦いを求めていたものな」

「今回の下準備と状況提供は白龍皇とクウガの

二人ですからね。彼等の本質を理解しておきながら、

放置しておくなど、貴方らしくない。結果、

自分の首を絞めることとなりましたね」

と、女性がアザゼルを嘲笑した。

苦笑するアザゼルを尻目に

ヴァーリは自身の胸に手を当て、

イツセーに向かって言う。

「俺の本名はヴァーリ。

ヴァーリ・ルシファーだ」

なっ、ルシファーだと!?

「死んだ先代の魔王ルシファーの血を引く者なんだ。

けど、俺は旧魔王の孫である父と人間の母との間に

生まれた混血児。

『パニシング・ドラゴン白い龍』の神器は半分人間

だから手に入れたものだ。偶然だけだな。

でも、ルシファーの真の血縁者でもあり、

『パニシング・ドラゴン白い龍』でもある俺が誕生した。

運命、奇跡というものがあるなら、

俺のことかもしれない。なんてな」

そう言う、ヴァーリの背中から光の翼と共に

悪魔の翼が幾重にも生え出した。

悪魔だつて？ 白龍皇が…？

しかも、ルシファアの血縁者？

「嘘よ…。そんな…」

リアス先輩も驚愕の表情を浮かべている。

しかし、アザゼルは肯定した。

「事実だ。もし、冗談のような存在がいるとしたら、

こいつのとき。俺が知っている中でも過去現在、

おそらく未来永劫においても最強の白龍皇になる」

歴史に名を残す最強の白龍皇か…。

イツセーのライバルはとんでもない奴みたいだな。

「覚悟を決めてもらいましょうか、アザゼル」

未だにアザゼルの嘲笑う女性。

「…チツ、先程膨れ上がったオーラの量、

オーフィスの野郎に何をもらった？」

アザゼルの問いかけに女性は笑った。

「ええ、彼は無限の力を有するドラゴン。

世界変革の為、少々力を借りました。

おかげで貴方と戦える。

サーゼクスとミカエルを倒すチャンスでもあります。

彼等は愚かなトップ。貴方もですよ総督」

「…俺はそうだ。愚かかもな。

シエムハザがいなけりや、何もできねえ。

只の神器マニアだ。けどよ、

サーゼクスとミカエルはそこまでバカじゃねえと思うぜ？

少なくともためえよりは遥かに優秀だ」

アザゼルの言葉に女性は顔を歪ませる。

「世迷言を…いいでしょう、今ここでトドメを刺します。

新世界創造の第一歩として、

墮天使の総督であるあなたを滅ぼす！」

強い口調で物申している女性。

けど、アザゼルは愉快そうにしているだけだ。

アザゼルが懐から一本の短剣らしきものを取り出した。

「それは」

訝し気に見ている女性へ

アザゼルは短剣の切っ先を向ける。

「…神器マニア過ぎてな。」

自分で制作したりすることもある。

レプリカ作ったりな。

まあ、ほとんどの物が屑でどうしようもないが。

神器を開発した神はすごい。

俺が唯一、奴を尊敬するところだ。

だが、甘い。『神滅具』と『禁手』

なんていう神と魔王、世界の均衡を崩せるだけの

『バグ』を残したまま死んじまったんだからな。

ま、だからこそ、神器は面白いんだけどよ」

「安心なさい。新世界で

神器なんてものは絶対に作らない。

そんなものが無くても世界は機能します。

いずれは北欧のオーディンにも動いてもらい、

世界を変動させなくてはなりません」

ニンマリと口の端を吊り上げた後、

アザゼルは吐き捨てる。

「それを聞いてますますお前らの目的に

反吐が出る思いだ。ヴァルハラ!?

アース神族!?!横合いからオーディンに全部

かつさらわれるつもりかよ。

というよりもな、俺の楽しみを奪う奴は消えてなくなれ」

アザゼルの持つ短剣が形を変えるっ!

パーツが分かれて光が噴き出していく。

「ツーま、まさか！アザゼル、あなたは！」

何かを気付いた女性を前に墮天使の総督は

力のある言葉を発した。

「バランス・ブレイク禁手化…ッ！」

一瞬の閃光が辺りを包み込む。

光が止んだ後、そこにいたのは黄金の全身プレート・アーマー鎧を身につけた者だった。

金色に輝き、生物的なフォルムをしていた。

その姿は、まるでドラゴン。

バツ！

背中から十二枚もの漆黒の翼を展開させる。

黒い羽が周囲に舞った。

ドラゴンを模した黄金の鎧が黒い翼を羽ばたかせる。

ちよつと、カッコイイと思つちまつた。

アザゼルがドラゴンの鎧を装備した。

手には巨大な光の槍！

「パニシング・ドラゴン白い龍」と他のドラゴン系神器を

研究して作り出した、俺の傑作人工神器だ。

『ダウン・フォール・ドラゴン・スピア墮天龍の閃光槍』、その疑似的な

バランス・ブレイカー禁手状態

『ダウン・フォール・ドラゴン・アサラー・アーマー墮天龍の鎧だ』

鎧越しに感じるドラゴンの波動。

それは並じゃない！

俺が今まで感じた中でも圧倒的なまでに

トップクラスの力強いオーラを全身から発してる。

コカビエルなんて目じゃないな！

こんな神器を作るなんて流石は神器マニアだな。

ちなみに本来の具現化タイプの神器は

所有者が死なない限り、

何度壊れても再生できる。

逆に特殊な儀礼方式で神器を奪われたりすると、

死んだりすることもあるようだが。

イツセーの左腕の籠手の宝玉やバランス・ブレイカー禁手状態の鎧に

存在する複数の宝玉は機能の一つでしかなく、
破棄されても再生可能だったりする。

対の存在なら、白龍皇のも同様だろう。

「ハハハーさすがだな、アザゼルは！」

「やっぱり、すごい！」

ヴァーリが笑う。

強者を目の前にしてこの笑い！

イカレてやがる！

「天才とは思っていたが、

ここまでとは予想以上だ！」

東城の声もどこか嬉しそうだ。

「ヴァーリ、ユウスケ、てめえも相手をしてやりたい

ところだが……。まあ、『赤い龍』

とプロトタイプ・クウガと仲良くやってな」

たくツ！仲良くなんてできるかよ。

「でも、アザゼルと戦った方が楽しそうだ」

ヴァーリはそう答える。

「確かにな、だが、こっちはこっちで楽しめそうだ」

東城はそう言っただけに視線を向ける。

「…力を有したドラゴンをベースにしましたね？」

女性の問いにアザゼルは答える。

「ああ、ちよつくら『黄金龍君』ファブニールを

この人工神器に封じてな。

二天龍『赤い龍』と『白い龍』

の神器を模したのさ。今のところは成功ってところか」

「アザゼル！それだけの力を持ちながら、貴方は！」

「カテレア、『無限の龍神』を

バックにしておいてよく言うぜ」

「…神器の研究はここまで進んでいなかったはずですよ…」

「その様子じゃ、俺の組織を裏切った輩が

神器研究をいくらか持ち出したみたいだな。

だが、無駄だ。真理に近い部分は俺とシエムハザしか知らない」

舌打ちする女性の体を青黒いオーラが覆う。

「私は偉大なる真のレヴィアタンの血を引く者！」

カテレア・レヴィアタン！

貴方如き忌々しい堕天使に負けはしない！」

吼える女性！

この女性は死んだ魔王様の血縁者か！

ヴァーリと言い、テロリストは魔王の血縁者ばかりか、

カテレアと名乗った女性を、アザゼルは手招きする。

「来いよう？」

「なめるなッ！」

特大のオーラを纏って、女性が猛スピードで飛び出す！

ザンツ！

一瞬の出来事だった。

カテレアと呼ばれた女性がアザゼルに飛び込み、

アザゼルも槍を持って対応した。

刹那。

ブシユツ！

女性の体から鮮血が噴出した。

力なく、その場に膝を着く。

見れば、女性の遙か後方まで地面が裂けていた。

アザゼルの一撃の余波で地面が抉れたんだろうな。

すごい威力だ！。コンマの世界で攻防が起こり、

決着が着いたのだろう。

「ただではやられません！」

カテレアが自身の腕を触手のように変化させ、

アザゼルの左腕に巻き付ける。

女性の体に怪しげな紋様が浮かび上がった！

「あれは、自爆用の術式だわ！」

リアス先輩がそう言う。

自爆用？あの女性、死ぬ気か！

アザゼルは触手を引きはがそうとするが、一向に剥がされる気配は無い。

「アザゼル！この状態になった

私を殺そうとしても無駄です！

私と繋がれている以上、私が死ねばあなたも死ぬように強力な呪術も発動します！」

「ッ。犠牲覚悟で俺に大ダメージってか。

安っぽい発想だが、効果は絶大なわけだ」

「イツセー、ユウスケ、ギヤスパー！」

距離を取るわよ！このままでは自爆に巻き込まれる！」

「でも、部長！アザゼルは？」

「彼もいち組織の総督なら、

なんとかするでしょう！」

それよりも私達が巻き込まれて死ぬわ！」

俺達は急いで距離を取る。

ある程度離れた所で、

リアス先輩が防御障壁を幾重にも展開して

爆破の余波に備えようとしていた。

「風よ！」

『E a r o o！』

俺も周りに風の障壁を展開し、

爆風に備える。

「わっ！」

ギヤスパーの悲鳴！

見ればギヤスパーの両眼に

何かの呪術的な紋様が刻まれていた。

「悪いな、それ、封じさせてもらう。

時を停めるのはウザいんだ」

ヴァーリかッ！

「しかし、能力と発動条件を知れば

大した驚異でもないな、その神器は。弱点だらけだ。視界を奪う術なんていくらでもある。

それに幻術をくらえば味方にも被害を出す諸刃の剣と化すぞ」

奴は空を飛んでおり、

その足には東城がぶら下がっていた。

確かに、奴が言う通り、

ギヤスパーは現状で弱点だらけだ。

神器が強力だからって所有者が強いとは限らない。

アザゼルも言ってた事だけだな。

そう言う俺も修行不足だ、

クウガの時に悪魔の力が全然使えない。

徐々に使えるようになってはいるからな

修行あるのみだな。

離れた場所からアザゼルの様子を見ている俺達。

アザゼルは未だ触手を解けないでいた。

槍で斬ろうにもダメージを与えられずにいるようだ。

「その触手は私の命を吸った特別製。切れませんよ」

不敵に笑う女性。

アザゼルは切るのを諦めたのか、

肩をすくめた。

次の瞬間。

バシユツ！

左腕ごと触手を切り離す！

マジか！自分の腕を斬り落とした！

アザゼルの左腕の傷から鮮血が迸った。

斬り落とされた腕の方は塵と化す。

「ツ!?自分の腕を!」

驚くカテレアだが、その腹部をアザゼルが投げ放った光の槍が貫く！

「片腕ぐらいお前にくれてやるよ」
シユワツ。

カテレアの体は爆破することなく、
塵と化して空へ消えた。

光の大ダメージを受けたから、
消滅したのだろう。

悪魔だから、光は猛毒。

それに例外は無かったようだ。

墮天使の総督の光だからな。
カツ！

アザゼルの鎧が解除される。

墮天使の総督は失った腕に

未練もなさそうにして、舌打ちだけした。

「チツ。人工神器の限界か。

まだ改良の余地が多分にあるな。

∴核の宝玉が無事なら、

また作り直せる。

もう少し俺に付き合ってもらうぜ、

『ギガンテイス・ドラゴン黄金龍君』ファフニール」

と、手に持つ宝玉らしきものに軽くキスをしていた。

あのレヴィアタンと名乗った女性とアザゼルの
決着はあっけなくついたのだった。

第51話 「好敵手」

アザゼルがカテレアを倒した。

だが、テロリストはまだ残っている。

すると、夜空からヴァーリと東城が降りてくる。

「さすがアザゼル。でも、

鎧が解除されたな。

まだまだ人工神器は

研究が必要なわけか」

「この状態のアザゼルと戦っても

面白くなさそうだな」

ヴァーリと東城に向き直るアザゼル。

「さて、ヴァーリ、ユウスケ。どうする？

俺はまだやれるぞ？ 鎧が無くても

片手でも十分にお前らと戦える」

アザゼルは手に光の槍を出現させ、

刃を白龍皇とクウガに向ける。

そのケガでまだ戦えるのか？

なんとという闘争心だ！

構えるアザゼルを一瞥し、ヴァーリは俺達に問いかける。

「しかし、運命ってのは残酷だと思わないか？」

突然こいつは何を言ってるんだ？

「俺のように魔王プラス伝説のドラゴンみたいな

思いつく限り最強の存在がいる反面、

そちらのようにただの人間に伝説のドラゴンが

憑く場合もある。

幾ら何でもこの偶然は残酷だと俺は思うな。

ライバル同士のドラゴン神器とはいえ、

所有者二名の間の溝はあまりに深すぎる」

俺のことかと自身を指差すイツセー。

それに対して、ヴァーリはおかしそうにうなづく。

「君達の事は少し調べた。

父は普通のサラリーマン。母は普通の専業主婦で、
たまにパートに出ている。

両親の血統はまったくもって普通。

先祖に力を持った能力者、術者がいない。

君達の友人関係も特別な存在ではない。

君達自身も悪魔に転生するまで

極普通の男子高校生だった。

ブーステッド・ギアやアークル以外、何もない」

奴は哀れむような表情で、嘲笑う。

「つまらないな。あまりにつまらない過ぎて、

君達の事を知った時、落胆よりも笑いが出た。

『ああ、これが俺達のライバルなんだ。

まいったな』って。せめて親が魔術師ならば、

話は少しでも変わったかもしれないが…。

そうだ！こういう設定はどうだろうか？

君達は復讐者になるんだ！」

コイツの言っている意味がわからない。

いや、理解をしたくなかった。

こいつはギヤスパーと違って、

自身の血筋が自慢なんだろう。

生まれに苦しむものがいれば、喜ぶものもある。

だが次の言葉は嫌でも理解することができた。

「俺が君達の両親を殺そう。そして、

雄輔が君の兄を殺す。そうすれば、

君の身の上が少しは面白い物になる。

親を俺のような貴重な存在に殺されれば晴れて

重厚な運命に身を委ねられると思わないか？

うん、そうしよう。どうせ、

君の両親は今後も普通に暮らし普通に老いて、

普通に死んでいく。

そんなつまらない人生よりも

俺の話した設定の方が華やかだ！

君の兄も雄輔には勝てない。

いずれ殺される運命なら君の人生に彩りを
加える為に利用するのが一番だ！な？」

何言ってるやがるんだこいつは…？

今誰を殺すって言ったんだ！

俺達の大事な家族をそんな理由で！

その時、俺のベルトから黒い靄が現れていた。

その宝玉も黒曜石の様に漆黒に染まっていた。

ふざけるな…ふざけるな…ふざけんな！

俺が怒りに飲まれそうになった時、

俺の傍で、俺以上の怒りを感じ、

ふと我に返った。

「殺すぞ、この野郎」

ぼそりとイツセーが呟く。

俺はイツセーから初めて殺意を感じた。

「…お前の言う通り、俺の父さんは朝から晩まで

家族の為に働く普通のサラリーマンだ。

俺の母さんは朝昼晩と俺達家族の為に

うまい飯を作ってくれる普通の主婦だ。

…でも、俺達をここまで育ててくれた。

俺にとつてもユウスケにとつても最高の親なんだよ」

ああ、そうだなここまで大事に育ててくれた

最高の両親だ！

「ユウスケが負ける？殺される？

勝手に決めんな！

俺の兄弟だ！テメエらみたいな

クソ野郎に負けるかよ！

それに、…殺す？

俺達の父さんと母さんを？なんで、

てめえなんかの都合に合わせて
殺されなくちやいけないんだよ。

貴重だとか、運命だとか、

そんなの知るかよッ！」

ああ、負けないさ。

俺達がどれだけ弱くても！

彼奴らがどれだけ強くても！

あいつ等だけは絶対に許すわけにはいかない！

「てめえなんぞに俺の家族を

殺されてたまるかよオオオオオオツツ！」

『Welsh Dragon Over Booster!!!』

イツセーの怒りの咆哮に呼応したのか、

神器が真つ赤で強大なオーラを解き放ち始めた。

光が収まると、

イツセーは『赤龍帝の鎧』を装備していた。

「っ。見ろ、アルビオン。」

兵藤一誠の力が桁違いに上がったぞ。

怒りという単純明快な理由が引き金だが、

これは…ハハハハ、心地よい龍の波動だな」

『神器は単純で強い思いほど力の糧とする。』

兵藤一誠の怒りは純粹なほど、

お前に向けられているのさ。

真つ直ぐな者、それこそドラゴンの

力を引き出せる真理のひとつ』

「そうか、そういう意味では俺よりも

彼の方がドラゴンと相性がいいわけだ」

イツセーが単純って言いたいのか。

「だが！頭が悪いのはどうだろうか！

兵藤一誠！君はドライグを使いこなすには

知恵が足りなすぎる。それは罪だよ」

「さつきからベラベラ俺が分からない

ことを言ってるじゃねええつ！」

「そう！それこそ、

バカというやつなんだ！」

イツセーは背中への魔力噴出口からオーラを噴き出して、
ヴァーリへ向かって飛び出す。

そのまま、イツセーとヴァーリが
空中で戦いだす。

二天龍の戦いに誰も手を出す事も出来ず見守る
事しか出来ない。

だが、皆が二人の戦いを見入る中、

一人だけ俺を見ている者がいた。

東城だ、彼は俺の方をジッと見ていた。

「あの二人は戦い始めたぜ。」

ならこつちも決着付けないか？」

東城は『赤のクウガ』マイティフォームに姿を変え、

俺に聞いてくる。

「別に俺達はライバルでもなんでもないだろう

因縁があるわけでもないのに何の意味がある？」

俺の問いに嫌な笑みを浮かべながら奴は答える。

「意味ならあるさ、クウガと言う名は

ただ一人の為の名だ二人もクウガは要らないんだよ。

ましてや、君みたいな未完成の試作品ごときが、

俺と同じ名を使うのは我慢ならないんだ！」

コイツは何でここまでクウガにこだわるんだ？

「君はクウガがどのような存在か知ってるのか？」

知らないだろう！今まで一般人として生きていた君では！

なのに、グロンギ族は君の方をクウガだと思っている。

何故だ!?俺の方が先にクウガに選ばれたのに、

何故君はゲゲルに挑戦できる!?

俺だって奴等との殺し合いをしたいって言うのに！」

こいつもいかれてやがる。

ただ戦うことだけを求める危険な男だ。

「何でそんなに戦う事にこだわる！」

お前は何のために戦うんだ！」

「何の為？理由なんて無いさ！」

只自分より強い者と戦うそれだけさ

それだけで十分だろう」

戦闘狂が！

俺は『紅マイティフォームのクウガ』に姿を変え、

東城に向かい歩き出す。

「戦う事がお前達の全てかよ。

その為だけに平和を望む者が邪魔なのかよ。

戦いたいなら勝手に戦えよ

関係ない人を巻き込むじゃねえ！」

俺達は同時に駆け出し、

お互いに拳を振りかぶる。

ドゴツツ！

互いの顔面に拳を叩きこむ。

「グフツ！」

俺は衝撃で後ろに後ずさる。

「ハハハッ、いい拳じゃないか。

でもまだ軽い、

もつと怒りを拳に乗せろよ！

俺を殺す気で来い！」

これが経験の差か、同じ姿でここまで差が出るなんて！

「ならこれならどうだ！」

俺は『群青ナイトフォームのクウガ』に変身し駆け出す。

ダッ！

俺は拾ったガラスの破片を剣に変える。

東城は俺の位置を捉える事は出来ていない。

今なら！

ダァン！

「グッツ！」

俺は肩に痛みを感じ立ち止まってしまおう。

東城は『緑のクウガ』ベガサスフオームに姿を変えており、

こちらにペガサスボウガンを向けていた。

「今の速度は大したものだな。」

だが、この姿の聴力なら場所を捉えられる

まあ、経験の差だな。

で、これで終わりか？」

「まだまだ！」

今度は『深碧のクウガ』ビショップフオームに変身する。

「燃えろ！」

『Fire!』

ドカアアアンツツ！

やったか！

放った炎が奴に当たり爆炎が奴を包む。

爆炎が晴れると、『紫のクウガ』タイタンフオームに

変身した東城の姿があった。

「魔法を使えるクウガか面白い

やっぱりお前は俺と違う成長をしているな

これは、各フオームが変異してるのか？

なら紫の力も見て見たいな。

やっぱりお前はもう少し放っておいた方が

面白そうだ」

東城は先ほどの攻撃も気にせず、

俺の姿を観察している。

「なっ、決着はついてないだろ！」

「まだわからないのか？」

今のお前じゃ俺を倒せない

もう少し強くなってリベンジするんだな」

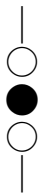
確かに奴にはなんのダメージも与えられなかった。

『騎士』の速度も『僧侶』の魔法も効かなかった。

「それにあつちは面白い事になつてゐるぞ?」

東城が見る方に視線を向けると、

そこでは、二天龍の戦いに決着がつこうとしていた。



時はイツセーが空中に飛び出す時まで遡る。

イツセーside

「さつきからベラベラ俺がわからないことを

いってんじやねええええつ!」

「そう・それこそ、バカと言う奴なんだ!」

背中の噴射口からオーラを噴き出して、

俺はヴァーリに向かって飛び出す!

ヴァーリが顔面をマスクで覆った。

戦闘態勢つてことか!

まだ二度目の禁^{バランス・ブレイカー}手だけど、

ライザーの時の様に攻撃の失敗は許されぬ!

しかし、ヴァーリは軽やかに避けて、

俺のタツクルをかわした!

まだだ!

俺は体制を宙で立て直し、

避けた先のヴァーリに再度飛び込んでいく!

籠手からアスカロンを伸ばして、

下手な剣術で攻撃を繰り返す!

けど、ただ振り回すだけの斬撃では、

光の動きで避け回るヴァーリに

一太刀も浴びせる事が叶わない。

『ヴァーリ、その剣は龍^{ドラゴン・スレイヤー}殺しの力を帯びている。

一太刀浴びれば大きなダメージは否めないぞ』

「そうか、アルビオン。」

だが、当たらなければ意味無いさ!」

奴の言う通り、俺の腕前ではかする事すらできない。
クソ！こんなことなら、木場からもつと
剣術を習っておくべきだった。

今度マジで習おう！

この禁手バランス・プレイヤー状態ならば倍增能力を好きな配分で
一時的に使用可能だ。

『だが使うたびに体力か魔力を消耗する。』

倍增する能力が高ければ比例して、

お前のスタミナを奪う。

それが本来の俺の禁手バランス・プレイヤー能力だ。

仮初状態の禁手バランス・プレイヤーとはいえ、

たった一回で鎧を維持する力を消耗してしまう
愚行だけは犯してくれるなよ？

アザゼルから貰った腕輪でも限界があるぞ。

使うたびに禁手バランス・プレイヤー手バランス・プレイヤーしている時間が減少する』

この状態を維持するだけでも体力使うってことか！

ヴァーリの方は余裕そうだ！

『相手のヴァーリは魔力が凄まじいようだ。』

対の存在である白龍皇もまた能力を使うたびに
力を削るが、所有者のスタミナが

強大ならば使用できる時間も膨大だろうな』

チツ…！嫌な現実だ！

俺とヴァーリの力量差は決定的！

やっぱ、俺の方が遥かに弱い！

当たり前か。あつちは完全な禁手バランス・プレイヤー。

こっちはいろいろな手助けがあつて。

制限が厳しい禁手バランス・プレイヤー。

いや、それ以前に俺と奴は基本スペックが違いすぎる！

ドンツ！

ぐはっ…！

一瞬、息が詰まった。

胸に重い拳の一撃を食らう！

「重い！てか、速過ぎて見えなかったぞ。

なんて一発だ！

「たったのこれで足がガクガクいつてやがる！

よ、鎧にもヒビが！こんなのを何発も受けてたら、

ソツコーで終わりだ！

「これが俺のライバルか！ハハハハ！

困ったな！弱いよ！弱すぎるよ！」

俺の事を散々バカにするヴァーリ。

でも、そう感じているのは本当なんだろう。

「イツセー！」

部長が俺のことを心配そうに見守っている。

惚れた女の前で恰好悪い様を見せたくない！

俺は一般家庭の両親の間に生まれて、

悪魔に転生し、偶然ドラゴンの力も得ていた。

あいつは旧魔王の血筋で、

伝説のドラゴンの力を得て生まれてきた。

俺に才能なんてないだろう。

そして、あいつには溢れるほどの才能があるんだろうさ。

強力な神器を使いこなす、

強い所有者理想的な存在。

まさにヴァーリのことだ。

『^{ディ}ivide！』

白龍皇の宝玉から音声が届こえ、

俺の力が一気に消失する。

あいつが俺の力を半分にしたのか!?

発動の原因は先ほどの胸に受けた一撃!?

『^ブoost！』

しかし、俺の神器も発動して、力はもとに戻る。

『奴は相手の力を半分にし、減らした分の力を

自分に加算するんだよ。つまり、

おまえの力を奪い、自分の力としている。
スタミナは回復できないがな。

あくまでパワーのみだ』

じゃ、じゃあ、俺はマイナスからもとに戻っても、
奴はプラスになっていくのか!?

『そうだ。だが、どんなに宿主が

スゴくても上限はある。

キャパシティを超える力は背中の

光の翼から吐き出す事で、

身を滅ぼすことなく力の上限を

維持し続けているのさ』

あいつは常に力をピーク状態にできて、

バーストし自爆することはないってことか：

「ほらほらほらー」

遊ぶようにヴァーリが撃ちだしてくる

無限にも等しい魔力の弾。

俺は逃げることも叶わなかった。

奴が軽く出しているであろう弾の一発一発は

重いダメージを残していく。

全身痣だらけになっているって容易に想像できる。
くっ…。

どうにかしてあいつに一撃浴びせたい。

じゃないと、この心中に生まれたドス黒いものを

抑える事なんてできない…ッ！

ヴァーリは攻撃を継続させながらも

ムカつく口調を繰り返す。

「攻撃も単調だ。ただ突っ込むだけ。

それでは意味がない。宝の持ち腐れ。

力の使い方も下手だ」

あー、そうかい。俺は下手かい。

だったら、わかったよ。

「これでは白龍皇と赤龍帝のライバル対決は」

ゴオオオオオオオオオオンツツ！

奴が言い切る前に、

俺の背中への噴出口から魔力を一気に噴かせて
弾幕の中へ飛び込んでいく。

体の各所に魔力の弾がごとごとく当たっていった。

痛い！けど、それがどうした！

たった一発。たった一発でいいッ！

左手を強く握る。力はここ一点で十分だ。

他に回すパワーなんていらなッ！

防御なんてものもこの際、捨ててやるッ！

鎧に魔力の弾が被弾して、

装甲が少しずつ破壊されていく。

顔面にも当たり、

マスク部分も壊れていった。

「突貫か。バカの一つ覚えだな。そんなもので」

ヴァーリが光の盾らしきものを前方に展開して、

防御しようとするが。

「ドライブグウウウッ！」

収納しているアスカロンに力を譲渡だツツ！」

『承知ッ！』

『トランスファー
Transfere！』

ドクン！

俺の左手に強大な力の波が流れていく。

どうせ剣の心得はない。

なら、剣を籠手に収納したままの状態で

龍殺しの力だけを拳に宿らせるッ！

殴るだけなら俺でもできるからな！

ゴンツツ！

俺の拳は奴の光の盾をなんなく破壊し、

顔面へ鋭く打撃を食いこませていた。

「ツツ????????」
「思^いがけない攻撃を受けたせいなのか、

奴の体勢がぐらりと歪む。
バキツ…。

白龍皇の兜はマスク周辺からヒビが広がり、
崩れた箇所からヴァーリの顔の一部を覗かせていた。
ここだ！

俺は白龍皇が余ったパワーを噴き出しているという
光の翼の付け根に手を回した。

「お前の神器の効果はここから
来ているそうだな。だつたら！」

『Trans fer!!』

俺の力が過剰なまでに

デイベイン・デイベイディング・スケイルメイル
白龍皇の 鎧へ譲渡される。

刹那、俺は体から力が一気に抜かれる感覚に襲われた。
体力と魔力をかなり消耗したか！

だが、これでいい！

「吸いだす力と吐き出す力を一気に高める！

処理しきれなくなるほどな！」

「くっ！」

ビイイイイイイーン！

デイベイン・デイベイディング・スケイルメイル
白龍皇の 鎧の宝玉全てが

白、赤、青、黄とハチャメチャな

点灯を繰り返すようになった。

途端に奴の体から凄まじいほどに感じた

ドラゴンの力が消失していく。

奴の神器の特性を利用させてもらった。

相手の力を奪い、自分の糧にしていく能力。

しかし、加算されていく力の上限は決まっ
ていて、
宿主の力量しだい。

上限を超える力は光の翼から噴き出されて処理される。
なら、奪う力と噴き出す力を
同時に加速させたらどうなる？
処理しきれないほどの力を奪い、
同時に過剰なまでに力が吐き出される。
白龍皇の機能をオーバードライブさせた。
結果、デイベイン・デイベイディング・スケイルメイル白龍皇の鎧
は機能を停止させたわけさ！

『ツ！なんてことだ…ッ！』

ヴァーリ、一度体勢を立て直せ！』

ヴァーリがアルビオンの声に反応して、
両腕をクロスして防御しようとするが、
バガンツツ！

アスカロンの力がこもった左拳を打ち出すと、
ヴァーリの防御を両腕の籠手ごと難なく破壊し、
腹部に打撃が突き刺さる。

白く輝いていた白龍皇の鎧はあっけなく壊れていく。
これが龍殺しの威力か!?

相手の鎧がまるで紙のようじゃねえか！

ゴボツ…。

ヴァーリの口から鮮血が飛び出す。

腹部を押えながらよろよろと後ろに下がっていった。

口の端から血を流しながら、

ヴァーリは楽しそうに笑う。

「…ハハハ、スゴいな！

俺の神器を吹っ飛ばした！

やればできるじゃないか！

それでこそ、ライバル」

ガンツ！

容赦ない俺のストレートが一撃奴の顔面に入っていた。

「…殴らせてもらったぜ。

「お前だけは殴らないと気がすまなかった」
よし！とりあえず、

俺の家族をバカにした分は返した。
だが、ドライブが舌打ちする。

「そうこうしているうちにヴァーリの鎧は
再び元の状態に戻ったからだ。

マジかよ。壊れた部分が直ってやがる！

まさか、何度も壊さないと倒せないのか!?

『所有者を戦闘不能にするまでツ高井は終わらんさ。』

このままではいかな。埒が明かない。

制御装置の限界時間内に奴を倒すのは至難の業だ。

逃げるのが一番の得策だが、

「そういう訳にもいかないのだろうか?」

「当然だ!部長達を置いていくわけがない!

「というか、この結界内でどこに逃げるってんだ!

「向こうではユウスケだつて戦つてんだ!

『では、どうする?』

「実力の差は大きく開いたままだ。

「制御装置のお陰でなんとかできているが、

「制限時間付きでは話にならない。

「負けるぞ?」

「……。どうしたものか。

「そのとき、ふと俺の視界にとあるものが映り込んだ。

「その瞬間、俺の脳内である考えが浮かぶ。

「…試してみるか?いや、ものは試した。

「どうせ、このままじゃ俺は時間が来て負ける!

「その前に何とかしなきゃ!

「なあ、ドライブ。」

「神器は想いに応えて進化するんだよな?」

『ああ、そうだが……。どうした?』

俺は足元に転がっている『バニシング・ドラゴン』白い龍の宝玉を拾った。

「先ほど、俺が奴を殴った時に
鎧が破損して飛び出した物だ。」

「奴本体の鎧は宝玉含め破損した部分を修復したようだけどな。
ヴァーリにとってみれば」

「この宝玉は時間が経てば塵に返る。
どうでもいいものだろう。」

「だが、これには少なくとも白龍皇の
力がわずかでも宿っているはずだ。」

「俺のイメージをお前に伝える。
やってみてくれ！」

「俺は脳内で思い描いたものを
内にいるドライグへ伝達させる！」

「強く思い描くんだ！」

「このイメージが可能ならば、俺は。」

『ツ。：相棒、危険なイメージを』

「送り込んでくるものだな。だが、」

「おもしろい！死ぬかもしれないが、」

「その覚悟はあるか？」』

「死ぬのはカンベンだな。」

「俺はまだ部長の処女をもらっていない。」

「痛みなら、我慢してやる！」

「それで目の前のクソ野郎を超えられるならなッ！」

『フハハハハハハハハッ！いい覚悟だ！』

「ならば俺も覚悟を決めよう！」

「正気の沙汰ではないが」

「我は力の塊と称された赤き龍の帝王！」

「お互い、生きて超えてみせるぞ、」

「相棒！否ッ！兵藤一誠ッッ！」』

「応ッ！」

「何をするつもりだ？」

「ヴァーリが興味深そうに訊いてくる。」

『パニシング・ドラゴン白い龍』！アルビオン！ヴァーリ！

もううぜ、お前の力！」

俺は右手の甲に存在する赤龍帝の宝玉を叩き割り、
そこへ先程拾った『パニシング・ドラゴン白い龍』の宝石をぶち込んだ！

お前の消失の力！俺の神器に移植してやる！

戦いの中、俺の脳裏にとある場面が思い出されたんだ。

それは先日のコカビエルとの一戦だ。

あの戦いで、不可能とされた

聖と魔の融合を木場は果たした。

右手から白銀のオーラが発生し、

俺の右半身を包み込む。

宝玉からの現象か？

ドクン。

俺の中で何かが脈打ち、

途端に形容しがたい激痛が宝玉を埋め込んだ

右手から全身に瞬時につたわっていく…ツ！

ぐっ…。あつ…。

「うがあああああああああああああああツツ！」
痛え！痛え！痛えよ！

クソ！なんだ、こりや!？」

「ぬがあああああああああああ！あ、あ、あ、
ああああああああああああああああつっ！」

あまりの痛さに思考が飛ぶ。

痛い痛い痛い痛い痛いツツ！

以前食らった光の槍のダメージなんて、

これに比べたら…。

ぐっ、あつ、がああああああああつ！

「ツ！俺の力を取り込む気か？」

俺のやろうとしていることに気付き、

ヴァーリが驚いた様子を見せる。

『無謀な事を。ドライグよ、

我らは相反する存在だ。

それは自滅行為にほかならない。

こんなことでお前は消滅するつもりなのか？』

淡々と話すアルビオン。

『ぐおおおおおおおおおつっ！』

ドライグも苦悶を漏らしていた。

神器に宿る龍帝も俺と同様に激痛を味わっているのか？

だが、ドライグは悲鳴を出しながらも、

笑いを含ませる。

『アルビオンよ！お前は相変わらず頭が固いものだ！

我らは長きに亘り、人に宿り、争い続けてきた！

毎回毎回同じことの繰り返しだった！』

『そうだ、ドライグ。それが我らの運命。

お互いの宿主が違ったとしても、

戦い方だけは同じだ。お前が力を上げ、私が力を奪う。

神器をうまく使いこなした方が

トドメをさして終わりとなる。

今までもこれからも』

アルビオンの言葉にドライグは不敵な笑いを向ける。

『俺はこの宿主、兵藤一誠と出会って一つ学んだ！

バカを貫き通せば可能になることがある、とな！』

バカで結構！どうせ才能で勝てないなら、

バカを通して勝つてやる！

「俺の想いに応えろオオオオオツツ！」

『Vanishing Dragon Power is taken

!!』

俺の右手が眩い白い光に包まれた！

真っ白なオーラが右腕を包む！

そして。

俺の右手には白き籠手が出現していた。

「…へへへ、『ダイバイディング・ギア白龍皇の籠手』ってどこか？」

赤い鎧の中で、右腕の肘から先だけが
白いんで不恰好になっちまったけどな。

『有り得ん！こんなことはあり得ない！』
アルビオンが驚愕の声音を出していた。

「いや、可能性は少しだけあった。

俺の仲間が聖と魔の融合をして、

聖魔剣なんでものを創り出した。

それは神がいない為にバランスが崩れているから、

実現可能になったらしい。まあ、

お偉いさん方の言葉を借りるなら、

システムエラーとか、

プログラムバグとかいう状態か？

それをちよつと利用したのさ」

『…「神器プログラム」の不備について、

実現させたというのか？いや、しかし、こんなことは…。

思いついたとしても実際に行うのは愚かだ…。

相反する力の融合は、何が起こるか分からない。

それがドラゴンの関わるものだとしたら、

死ぬかもしれないのだぞ？

否、死ぬ方が自然だ』

未だに信じられない様子のアルビオン。

まあ、正直俺も破れかぶれだったけどさ。

「ああ、無謀だった。

だが、俺は生きている」

俺の言葉に嘆息するドライグ。

『だが、確実に寿命を縮ませたぞ。

いくら悪魔が永遠に近い時間を生きようとしても』

「一万年も生きるつもりはないさ。

だが、やりたいことが山ほどあるから、

最低でも千年は生きたいけどな」

パチパチパチ。

俺へ拍手を送るヴァーリ。

何のつもりだ？

「おもしろい。なら、俺も少し本気を出そう！」

俺が勝ったら、君の全てと君の周りにある全ても

白龍皇の力で半分にしてみせよう！」

ヴァーリが空中に漂い、

腕を大きく広げる。光の翼も巨大に伸びていく。

「半分？俺の力ならともかく、

俺の周囲を半分にするってどういうことだ？」

俺の問いかけに奴は哄笑を上げた。

「無知は怖い！」

知らずに死ぬのも悪くないかもしれないな！」

なんだかムカつく！

こいつ、散々俺をバカにしゃがって！

『Half Dimension!』

宝玉の音声と共に眩いオーラに包まれた

ヴァーリが眼下に広がる木々へ手を向ける。

グバンツ！

木々が一瞬で半分の太さになってしまった！

おおっ！マジで半分になるのか!?

グババババンツ！

さらに周囲の木々が圧縮される

かのように半分になっていく。

旧校舎の風景を壊すな！

「赤龍帝、兵藤一誠。

お前にも分かりやすく説明してやろう」

と、アザゼルが言う。

おおっ、総督。お願いします。

バカな俺にも分かるように一つ。

「あの能力は周囲の物を全て半分にしていく。

つまり白龍皇が本気になったら、

俺の部長のおっぱいを半分にする？

それは許されないんだよッ！

あのおっぱいは俺のものだ！

小さくされてたまるか！

俺の夢を奪うな、このクソ野郎オオオオツツ！

改めて思い知った。こいつと俺は分かり合えない！

俺はヴァーリに指を突き付ける！

その指を突き付ける勢いの余波で

遙か後方の木々が吹き飛んだ。

「リアス・グレモリーに手を出してみろッ！

二度と転生できないぐらい

徹底的に破壊してやらあああああつ！

この半分マニアがあああああつ!!」

俺の絶叫で夜空の雲が割れた。

隠れていた萬月が姿を現す。

「今日は驚く事ばかりだ。まさか、

女の乳でここまで力が爆発するとは。

しかし、おもしろい！」

白龍皇が俺へ向かって、飛び出してくる。

遅く感じるな。

バツ！

俺はその場から離れ、

飛び出してきたヴァーリを横合いから蹴り飛ばした。

「速いッ！スピードで俺を超えるのか!？」

知るかッ！勝手にビックリしやがれ！

許すか！こいつを許して堪るか！

こいつを野放しにしたら部長どころか、

朱乃さんのおっぱいまで半分にされるツツ！

くっ！

想像しただけでゾツつとするぜ！

あの素敵なおっぱいが半分になるなんて

神ですら許されない行為だツツ！

俺は光速で動き回るヴァーリを難なくつかまえると。

「これは部長のおっぱいの分！」

ヴァーリの腹部に右拳で一撃！

『Divide!』

同時に移植したばかりの白龍皇の力が発動し、

ヴァーリを覆うオーラが激減したように感じた。

「ぐはっ！」

吐瀉物を口から吐き出すヴァーリ！

俺はそんなのお構いなしに攻撃を続ける！

「これは朱乃さんのおっぱいの分！」

顔面に一撃！

よし！兜が完全に壊れた！

「これはアーシアのおっぱいの分！」

光の翼を発生している背中の噴出口を破壊！

「これはゼノヴィアのおっぱいの分！」

勢いよく、空中高く蹴り上げるツ！

「最後だツ！これは半分にされたら丸つきり

無くなっちまう小猫ちゃんの

ロリおっぱいの分だあああああアツツ！」

猛スピードでタツクルをかます！

「ガハッ！」

俺の猛タツクルにヴァーリが吐血する。

よっしゃ、ざまーみろツ！

ダガンツ！

地面に叩きつけられるヴァーリ。

—○○—

ユウスケ side

イツセーの方は地面にヴァーリを叩きつけていた。

「あのヴァーリをここまで追い詰めるか」

東城はイツセーの突然の成長に驚いていた。
それは俺も同様だった。

白龍皇の力を取り込んで、パワーアップするなんてな。
憤怒するイツセーとは対照的に

ヴァーリは嬉々とした笑みを浮かべていた。

「…おもしろい。本当におもしろい」

『ヴァーリ、奴の半減の力に対する解析は済んだ。

こちらの力の制御方法と照らし合わせれば対処できる』

「そうか。これであれば怖くないな」

この短時間でもう対策をしたのか!?

「アルビオン、今の兵藤一誠ならば白龍皇の

ジャガーノート・ドライブ
『覇 龍』を見せるだけの

価値があるんじゃないだろうか?」

『ヴァーリ、この場でそれは良い選択ではない。

無暗に「ジャガーノート・ドライブ
覇 龍」となれば

ドライブの呪縛が解けるかもしれないのだ』

「おいおい、あれをやるつもりかよヴァーリ」

「願ったり叶ったりだ、アルビオン。」

『我、目覚めるは、覇の理に』』

ヴァーリが何かを唱え始めた。

東城の反応からしてヤバそうだな。

『自重しろ、ヴァーリッ!』

我が力に翻弄されるのがお前の本懐か!?!』

アルビオンが怒ってる?

すると、イツセーが何かされる前に動き出した。

イツセーがヴァーリにトドメと

ばかりに一撃を放とうとしたとき。

夜空に浮かぶ月をバックに人影が一つ、

イツセー達の元へ舞い降りた。

神速でイツセーとヴァーリの間に乗れ込んでくる。

…三国志の武将がきているような

鎧を身に纏った男だ。

「ヴァーリ、ユウスケ、迎えに来たぜい」

爽やかそうな顔つきの若い男性だ。

そいつは気軽にヴァーリへ話しかける。

「美猴か。何をしに来た？」

ヴァーリは口元の血を拭いながら立ち上がった。

「それは酷いんだぜい？仲間がピンチだっつーから

遠路はるばるこの島国まで来たつてのによろ？」

他の奴らが本部で騒いでるぜい？

北の田舎神族アースと一戦交えるから

任務に敗北したのなら、さっさと逃げ帰ってこいってよ？

カテレアはミカエル、アザゼル、ルシファアの

暗殺に失敗したんだらう？

なら観察役のお前らの役目も終わりだ。

俺たちと一緒に帰らうや」

「…そうか、もう時間か」

「楽しい時間はあつという間だな」

いつの間にか東城がヴァーリの傍にいた。

「なんだ、お前は？」

イツセーが突然現れたそいつに指を指して訊く。

「闘戦勝仏の末裔だ」

答えたのはアザゼルだった。

その名には聞き覚えがあった。

その一方でイツセーはその名に覚えが無かったようで、

疑問符を浮かべていた。

「ソッコで把握できる名前ですってやる。

奴は孫悟空。西遊記で有名なクソ猿さ」

「そ、そ、孫、悟空ううううっ!？」

聞き覚えのある有名な名にイツセーが驚愕する。

「正確に言うなら、孫悟空の力を受け継いだ猿の妖怪だ。

しかし、まさか、おまえまで『禍カオス・ブリゲードの団』入りとは

世も末だな。いや『パニシング・ドラゴン白い龍』にクウガに孫悟空か。

お似合いでもあるのかな」

アザゼルの言葉に美猴はケタケタと笑う。

「俺っちは仏になった初代と違うぜい。」

自由気ままに生きるのさ。

俺っちは美猴。宜しくな、赤龍帝、試作クウガ」

気軽に挨拶されたな。

美猴は、棍を手元に出現させるとくるくると器用に回し、

地面に突き立てた。刹那、

地面に黒い闇が広がる。

それはヴァーリ達を捉えると、

ずぶずぶと沈ませていく。

逃げる気か！

「待て！逃がすか！」

捕まえようと走り出そうとした俺とイツセーだが、

カツ！

イツセーの神器が解除され、鎧が消えて、

アザゼルから貰った腕輪も崩れ去った。

俺も変身が解けて生身に戻ってしまう。

クソッ！

もう限界なのかよ!?

「アザゼル！あのリング、まだないのか!?

こいつを逃がすわけにはいかない!」

イツセーが叫ぶが、アザゼルは淡々と答える。

「あれは、精製に恐ろしいぐらいの時間がかかる。

量産もできん。それにあったとしても、

多用すれば完全な禁バランス・ブレイカー手になれる

可能性が薄れるんだよ。あくまで緊急処置用だ」

焦るイツセーだが、既に立っている事も出来ず、

地に膝を着いている。

俺も同じ状況だった。

初めて使う力を限界まで使ってしまった。
ボダウとの戦いで、の消耗も激しかったが、
東城との戦いで、のダメージが結構響いている。
もう拳だつて握れそうにない。

「あれだけの力を一瞬とはいえ爆発的に発散すれば体力
やらも空っぽになる。いまの赤龍帝じゃ、
貯蔵できるものがかぎられていて長時間の戦闘は無理だ。
そっちのクウガも戦闘続きだ、

もう魔力だつて空っぽだろ」

確かにまだ俺達は戦える体力があつても
戦う力なんて残つてない、悔しいがな。

「旧魔王の血族で白龍皇である俺は忙しいんだ。

敵は天使、墮天使、悪魔だけじゃない。

いずれ、再び戦う事になるだろうけど、

そのときはさらに激しくやろう。

お互いにもつと強く…」

「そっちのクウガももつと強くなれよ。

そして俺に敗北つてものを教えてくれよ

楽しみにして…」

二人はそれだけ言いかけると、

美猴と共に闇の中へ消えていった。

第52話 「駒王協定」

戦いが終わり俺達が校庭に足を踏み入れた時、
三大勢力の軍勢が入ってきていて、
戦闘後の処理を行っていた。

倒した魔術師の死体を運んだり、
戦闘の後始末をしている様子だった。

校庭の中央に進んだ時、

サーゼクス様、セラフオール・レヴィアタン様

ミカエルさんが部下らしき者に

指示を出している姿があった。

サーゼクス様が俺達を捉えると、手をあげる。

「無事だったか。良かった。」

アザゼル、その腕はどうした？」

片腕のアザゼルを見てサーゼクス様が

アーシアに手を向ける。

アーシアはそれに応じて、

アザゼルの傷口に回復の神器を当てた。

淡い緑色の光がアザゼルの腕の傷を癒すが、

失った腕までは治らない。

「カテレアに捕まって自爆されそうになってな。

仕方なく切り落とした」

「そうか。彼女の件は悪魔側に問題があった。

その傷に関しては」

サーゼクス様が何か別の形で償う言葉を

言おうとしたのだろうけど、

アザゼルは手で制して「知らない」という意思を見せた。

「俺も…ヴァーリとユウスケが迷惑かけた」

「…彼等は裏切ったか」

「もともと、力にのみ興味を注いでいた奴等だ。

結果から見れば、『ああ、なるほどね』と納得できる。

だが、それを未然に防げなかったのは俺の過失だ」
アザゼルの瞳はどこか寂しげだった。

二人との間に、何かを感じていたのだろうか？

ミカエルさんがサーゼクス様とアザゼルの間に入る。

「さて、私は一度天界に戻り、和平の件と

『禍の団』カオス・ブリゲードについての対策を講じてきます」

「すまないな、今回このようなことになって。

会談の場をセツティングした我々としては

不甲斐なさを感じている」

「サーゼクス、そう責任を感じないで下さい。

私としては三大勢力が平和の道を共に

歩めることに喜んでいるのですよ？

これで無益な争いも減るでしょう」

「ま、納得できない配下も出るだろうがな」

と、アザゼルは皮肉を言った。

「それは仕方ありません。

長年憎み合ってきたのですから。しかし、

これからは少しずつでも変わっていくでしょう。

問題はそれを良しとしない『禍の団』カオス・ブリゲードですけどね」

「それについては今後連携を取って話し合おう」

サーゼクス様の案にアザゼルも

ミカエルさんも頷いていた。

「では、私は一度天界に戻ります。

すぐに戻ってきますので、

そのとき正式な和平協定を結びましょう」

と、この場をあとにしようとする

ミカエルさんに俺は不躰ながら言う。

「あ、あの、ミカエルさん！」

「何ですか、兵藤祐介さん」

「一つだけお願いがあります？

「いいでしょう、時間がありませんが、

ひとつだけ聞きましよう」

どうしても聞き入れて欲しい願いだ。

「アーシアとゼノヴィアの神への祈りで

ダメージを食らうのは『システム』の

せいですよね？」

二人は元信徒。時折、

昔の習慣が抜け切れずに祈りを

捧げてはダメージを受けていた。

「はい。悪魔や堕天使が神へ向けて祈りを捧げれば

『システム』が動いて軽くダメージを

与えるようにしています。

これは神が健在でも不在でも『システム』

に組み込まれたもの

ですから、自然に動きます。それがどうしました？」

「アーシアとゼノヴィアが祈りを捧げる分だけ、

ダメージを無しにできませんか？」

これは俺の願いだ。いつも見えていて、

苦笑いしかできなかつた俺だが、

可能なら普通にお祈りぐらいさせてあげたかつた。

悪魔だつて信じる物は自由でいいだろう。

「――っ」

俺の願いを聞き、ミカエルさんは

驚きの表情を見せていた。

俺の願いが、予想外のものだったか？

俺の両脇にいたアーシアとゼノヴィアも驚いていた。

しかし、ミカエルさんは小さく笑うと、

うんうんと頷く。

「わかりました。二人分ぐらいなら、

なんとかなるかもしれません。

二人ともすでに悪魔ですし、

教会本部に近づくこともないでしょうしね。

アーシア、ゼノヴィア、問います。

神は不在ですよ？それでも祈りを捧げますか？」

「はい、主がおられなくとも私はお祈りを捧げたいです」

「同じく。主への感謝と、ミカエル様への感謝を込めて」

二人の答えにミカエルさんは微笑んだ。

「わかりました。本部に帰ったら、

さっそくそうしましょう。ふふふ、

祈りを捧げてダメージを受けない悪魔が二人ぐらい

いてもいいでしょう。おもしろいでしょうね」

よし！言ってみるもんだな！

「これでアーシアは問題なく、

神様にお祈りできるな

まあ、いないけどさ」

アーシアはうるうると目元を潤ませ、

俺へ抱き着いてきた。

「ユウスケさん！」

俺は彼女を優しく抱きしめてやった。

良かったなアーシア。

「イツセー、ありがとう」

ゼノヴィアも礼を口にする。

俺はアーシアとゼノヴィア、

両者の頭を撫でてやる。

「別にいいさ、これから遠慮せず

祈ればいいさ」

ゼノヴィアの頬がほんのり赤く染まっているのは

照れているからか？

気にしなくていいのにな。

「ミカエル様、例の件、お願いします」

と、木場がミカエルさんに何やらお願いしていた。

「貴方から進言のあった

聖剣研究の事も今後犠牲者を出さぬようにすると、

貴方からいただいた聖魔剣に誓いましょう。
大切な信徒をこれ以上無下にすることは
大きな過ちですからね」

なるほど、木場の方でもミカエルさんと
交渉していたのか。

確かに聖剣計画は教会の汚点の一つだからな。

繰り返されることが無いようにしたかったしな。

「やったな！木場！」

「うん、ありがとう、イツセーくん」

イツセーがわが身の事のように

木場と共に喜んでいた。

そのやり取りを微笑ましく見ていた

ミカエルさんにアザゼルが言う。

「ミカエル、ヴァルハラの中へ

説明はお前がしておけよ。

下手にオーデインに動かれても困るからな。

あと、須弥山にも今回の事を伝えておかないと

うるさそうだ」

「ええ、墮天使の総督と魔王が説明しても

説得力がないでしょうから、

私が伝えておきます。

『神』への報告は慣れてますから」

それだけ言い残すと、

ミカエルさんは大勢の部下を連れて、

天へ飛んで行った。

アザゼルが墮天使の軍勢を前に言い放つ。

「俺は和平を選ぶ。

墮天使は今後一切天使と悪魔とは争わない。

不服な奴は去ってもいい。

だが、次に会う時は遠慮なく殺す。

ついてきたい者だけ俺についてこい！」

『我らが命、滅びのその時まで』

アザゼル提督のためにツツ!』

怒号となった部下たちの忠誠。

アザゼルはそれを見て「ありがとよ」

と小さく礼を言っていた。

すごいカリスマだな。

アザゼルは自分の軍勢に指示を出すと、

魔方阵を展開させて墮天使達が帰っていく。

悪魔の軍勢も同様に

魔方阵から転送していつているようだ。

あれほどの軍勢がひしめき合っていた校庭は、

どんどん寂しくなっていく、

ついには俺達を合わせた極少数の人員だけとなっていた。

墮天使で唯一残ったアザゼルは、

大きく息を吐くと校門の方へ去っていく。

「後始末は、サーゼクスに任せる。

俺は疲れた、帰るぞ」

手を振って帰ろうとするが、

一度だけ立ち止まり、

イツセーに向けて指を指した。

「そうだ、赤龍帝。自分、

ここに滞在する予定だからそっちの

リアス・グレモリーの『僧侶』共々

世話してやるよ。制御出来てない

レア神器を見るのはムカつくからな」

「え?」

驚くイツセー。

「赤は女を。白は力を。

どちらも純粹で単純なもんだ

そして、それぞれの道を行くクウガか

面白いじゃないか」

アザゼルはそれだけ言うと、口笛を吹きながら去っていった。その時はアザゼルの一言が冗談だと思っていた。

西暦二十××年七月。

天界代表ミカエル、墮天使中枢組織

『神の子を見張る者』総督アザゼル、

冥界代表魔王サーゼクス・ルシファー、

三大勢力各代表の元、和平協定が調印された。

以降、三大勢力の争いは禁止事項とされ、協調体制へ。

この和平協定は舞台になった俺達の学園の名を取って

「駒王協定」と称されることになった。

—○○—

「てなわけで、今日からこのオカルト研究部の顧問になることになった。アザゼル先生と呼べ。

もしくは総督でもいいぜ？」

着崩したスーツ姿のアザゼルが

オカルト研究部の部室に居た。

その横には見た事ある女性も一緒に居た。

「私の名前はニコ・ロビンよ」

総督の補佐役で普段は新聞部の

顧問をするつもり、よろしく」

彼女は微笑みながらそう言う。

「…どうして、貴方達がここに？」

額に手を当て、困惑している様子のリアス先輩。

「ハッ！セラフオールの妹に頼んだら、この役職だ！

俺は知的でチョーイケメンだからな。

女生徒でも食いまくってやるさ！」

「それはダメよ！つてなぜソーナがそんなことを」

「堅いな、リアス・グレモリー。いや、何。

サーゼクスに頼んだら、

セラフォルの妹に言えと言うんだ。

だから頼んだ」

そんなことで顧問になったのか!?

会長様は何を考えてるんだ?

もしかしてこっちに丸投げなんじゃ…。

「つて、その腕は？」

片腕失いましたよね？」

イツセーがアザゼルの腕を指差す。

確かにあの時斬り落としたはずだ。

「ああ、これか。神器研究のついでに作った

本物そつくりの義手だ。光力式レーザービームやら、

小型ミサイルも搭載できる万能アームさ。

一度、こういうの装備したかったんだよな。

片腕失った記念に装着してみたわけだ」

バシユツ!

アザゼルの左腕が飛び出した。

クルクルと横に何回転もする。

なるほど、機械仕掛けの腕か、

ゲームで見た事あるな。

「フフ、総督さんはゲームに影響されて

こういうのを多く作っているのよ

他にも試作品が研究所に転がってるわ」

やっぱりゲームに影響されてたか。

「いいんだよ、そこは男のロマンさ、

女共にはわからんだろうがな、

で、俺がこの学園に滞在できる条件は

グレモリー眷属の悪魔が持つ未成熟な

神器を正しく成長させること。

神器マニア知識が役に立つわけだ。

ロビンはクウガについて博識だから
ついでに連れてきた、

未だ謎の多いそのクウガの
成長の為にな。

お前達も聞いただろうが、

『禍カオス・ブリゲードの団』ってけつたいな組織がある。

将来的な抑止力の一つとして、『赤ウエルシユ・ドラゴンい龍』と

『試作クウガ』おまえら眷属の名が挙がった。

というよりも、

対『白バニング・ドラゴンい龍』と『クウガ』専門だな。

仕入れた情報では、ヴァーリは

自分のチームを持っているって話だ。

仮に『白龍皇眷属』と呼んでおくか。

判明しているメンツは今の所ヴァーリと雄輔と孫悟空を

合わせた数名だ」

「ヴァーリ達はまたここに攻めてくるんですか？」

俺の問いかけにアザゼルは首を横に振った。

「もう攻めてこないだろうさ。」

一応のチャンスだった三大勢力のトップ会談での

暗殺だが、それも失敗した。

奴等の当面の相手は天界、冥界だ。

冥界は俺の命令で全墮天使が悪魔と共闘する。

そう簡単に冥界を落とすことはできない。

天界もセラフの連中が黙っていないだろう。

それに天界には居候の強い聖獣、魔獣もいるしな」

「…戦争か」

「いや、まだ小競り合いレベルだな。

奴等も俺達も準備期間と言える。

安心しろ、お前らがこの学園の高等部どころか、

大学部を卒業するまで戦なんて起きやしない。

学園生活を満喫しとけ。」

ただ、せつかくの準備期間だ。
いろいろと備えようじゃねえか」

「うーん…」

イツセーが無い頭を絞って
アザゼルに何か言おうとするが、
特に何も出てこないようだった。

「赤龍帝、難しく考えるな。どうせ、
脳が足りねえんだから、

余計な心配をしても埒があかんぞ。

お前の敵はあくまでも白龍皇ヴァーリだ。
それだけは忘れるな」

確かにそうだな。

俺もイツセーもお互いの

ライバルとの決着だけを考えるべきか。

この間は全然敵わなかったが、

もつと強くなつてリベンジを決めようか。

「兄貴の方は現状を理解しているようだな。

いいか赤龍帝、お前がヴァーリを退けられたのは、

ミカエルから貰った龍殺しの剣と赤龍帝の籠手^{ブーステッド・ギア}

の力が合わさったからだ。あと、奴は手を緩めていた。

そうじゃなければ負けていたな。

というよりも今回は相性のお陰で戦えたに過ぎない。

仮に相手がヴァーリ並の力を持つ

ドラゴン以外の存在だったら、

お前は殺されていた」

アザゼルの言う通りだった。

確かにヴァーリも東城もどこか余裕があつた。

もしかしたら東城は

俺の知らない変身があつたのかもしれない。

「それで、白龍皇の力はあれから使えるのか？」

と、アザゼルがイツセーに訊ねる。

「いえ、まったく機能しません」

会談の後、何度か試してみたが、イツセーが手に入れた「相手を半分にする力」は使えなくなっていた。

「だろうな。あんな強力な物、

そう簡単に扱えるはずがない。

他のドラゴンの力を取り込むまでは良い。

それを自由に使えるかどうかはまた別だ。

下手すればバランス・ブレイカー禁 手に至るよりも

難しい技能かもしれない。

だが、一度取り込んだ力はドライグの魂に

登録されているだろう。

あとは修行しただいな。

それも地獄のようなしごきを長期的にこなしてだ。

弱いくせに無茶に張り切ると死ぬぞ」

じゃあ、今後別の形で使える可能性があるのか。

まあ、俺達は自身の力すらうまく使えてないんだから、

まずは自分の能力を鍛えないとな。

「赤龍帝も試作クウガも力が不安定すぎる。

その能力は凄まじいが、まだまだ使いこなせていない。

相手が格下ならそれで瞬時に倒せるだろうが、

格上の相手には封殺される。

お前達も悪魔として今後レーティングゲーム

にも参加するなら、バランス・ブレイカー強大な力を安定させろ。

赤龍帝の方はまず、バランス・ブレイカー禁 手になってからだな。

試作クウガの方は「戦車」の力を手に入れる事だ、

かと言って、レーティングゲームも一筋縄じゃない。

駒消費一の『兵士』が『王』を取るなんてことも起こる。

全ては戦い方次第だ。

それも含めてお前らに教えないとな」

「レーティングゲーム詳しいんだな」

「ゲームのファンは悪魔だけじゃないんだぜ？」

和平協定のお陰でゲームを堂々と観戦する

天使や堕天使も多く出るだろうよ」

そのうち、天使や堕天使からの参加もありえるかもな。

「とりあえず、長時間戦える体作りからだな」

「…はい」「了解」

言われたとおりだ、俺達事態の対策されたら

勝ち目はないかもしれない。

長時間の戦闘を強いられれば、

俺達は勝手にガス欠になつて簡単に負けるだろう。

まだ、『騎士』と『僧侶』の姿は

長く持たないから余計だ。

「俺達、強くなれますか？」

イツセーの真っ直ぐな問いかけだった。

「強くさせてやるよ。」

俺は暇な堕天使様だからな」

にんまりと悪戯な笑みを見せるアザゼル。

今はこの総督を信じるしかないか。

すると、イツセーがギヤスパーを指差す。

「仮に今度攻めて来たらギヤスパーの時間停止

でどうにかできないですかね？」

「せ、せ、せ、せせせせせせ、先輩！

な、な、な、な、なななな、何を

おっしゃるんですかあああああ！

ヒイイイイッ！」

イツセーの提案にギヤスパーは泣いて叫んでいた。

「単独じゃ話にならない。」

どんなのが『禍の団』にいるかわからないしな」

確かに視界を潰す方法なんていくらでもあるからな。

「ゴメンなさい！役立たずでゴメンなさい！

どうせ僕は役立たずです！屑です！

豚の餌です！海よりも深く猛省し、

エベレストよりも高い目標を持ちますからああああ！

見捨てないでえええええッ！」

泣きながら、段ボールに逃げ込むギヤスパー。

まずは、段ボールを卒業かね。

「そうだ、聖魔剣の。おまえ、

バランス・ブレイカー

禁手 状態でどれくらい戦える？」

アザゼルの問いかけに木場が答える。

「現状一時間が限界です」

「ダメだな。最低でも三日は継続できるようにしろ」

手厳しいな、木場も今の言葉で

気合の入った表情になっていた。

「お、俺は限定条件付きで十秒ですけど…」

恐る恐る言うイツセーにアザゼルは半眼になっていた。

「お前は一から鍛えなおす。

バランス・ブレイカー

白龍皇は禁手を一か月は保つぞ。

それがお前との差だ。後はクウガは

各フォームはどれくらい持つ？」

「赤と青は体力次第で、緑は魔力が切れたら

変身が解けてしまいます

この間の戦いでは魔力より先に体力が

尽きたので正確な時間までは」

「まあ、そんなものか、

今後は体力と魔力量の向上が目標だな」

次にアザゼルの視線が朱乃さんに向く。

「まだ俺らが、いや、バラキエルが憎いか？」

確かその名はコカビエルが言っていたな。

墮天使で朱乃さんの親父さんの名前だったか。

朱乃さんっは厳しい表情で返す。

「許すつもりはありません。

母はあの人のせいで死んだのですから」

「朱乃、お前が悪魔に降った時、

彼奴は何も言わなかったよ」

「当然でしょうね。あの人が私に何かを

言える立場であるはずがありません」

「そういう意味じゃねえさ。いや、

まあ俺がお前ら親子の間に入るのも野暮か」

「あれを父だとは思いません！」

朱乃さんはそうハッキリと言いつつ切った。

「そうか。でもな、俺はお前がグレモリー眷属になったの

は悪かと思うぜ。それ以外だったら、

バラキエルもどうだったかな」

「……………」

アザゼルのその言葉に朱乃さんは何も返す事は無かった。

ただ黙って、複雑そうな表情を見せていた。

と、今度はイツセーにアザゼルの視線が向く。

「おい、赤龍帝、イツセーでいいか？」

イツセー、お前、ハーレムを作るのが夢らしいな？」

「ええ、そうっすけど……」

確かにイツセーの夢はハーレムだったが……。

「俺がハーレムを教えてやろうか？」

「これでも過去数百回ハーレムを形成した男だぜ？」

話を聞いておいて損はない」

「マ、マ、ママママママママ、マジッスか」

「ああ、マジだ。お前、童貞か？」

「は、はいー！」

「よし、女も教えてやる。」

適当に美女でもひっかけて男になったほうがいいな。

これでも俺は人間の女の乳を揉んで堕ちた身の上だ。

エロに関して妥協はねえさ」

「そ、そんな事で堕ちたんスか!？」

「え？マジで!？」

本当にそんなことでも天使から堕ちたのかよ!?
信じられねえ。

俺達の疑問にリアス先輩がうんざり顔で頷く。

「本当よ。伝承の通り、グリゴリの幹部達は
人間の美女に誘惑されて、天界の貴重な
知識を教えてしまつて堕ちたのよ」

それを聞いてアザゼルは笑っていた。

「あの頃は俺達も若くてな。」

童貞丸出しで『神様はエライ!』『神様はスゴイ!』

つて盲信してたもんだ。ハハハツ、

結局誘惑に負けて女だきまくったら、

童貞失つて、天使の位も失つちまつた」

そりや、イツセーと気が合いそうだな。

「あー、なんだか、急に墮天使さん達に

親近感湧いてきたよ」

「おおつ、話が分かるじゃねえか。

そうだ、男なら欲望のままに生きる。

女を食らえ!抱いて抱きまくれば、

自身と共に強さもついてくる。

俺が卒業式をプロデュースしてやろう。

部下の美少女墮天使を何人か紹介してやる。

伝説のドラゴンが相手ならあいつらも

喜んで抱かれるだろうさ」

そうだろうけども、

仮にも教師になろうつて奴が言う事かね。

「うおおおおつ!マジで!?

卒業できるんですか!?

俺、先生についていきます!」

「おー、そうか。よし、じゃあ

童貞卒業ツアーにでも出かけるか」

アザゼルの話に目を輝かせているイツセーを見て、

リアス先輩が慌てふためく。

「ちよ、ちよつと、待ちなさい、アザゼル！」

イツセーに変な事を教え込まないでちょうだい！」

リアス先輩はイツセーを抱き寄せて、

アザゼルに触れさせないようにしていた。

「いいじゃねえか。そうだ、えーと、ユウスケか

お前もどうだ？なに、このぐらいの

年頃なら女の一つや二つ

知っておいたほうが健全つてもんだ。

それとも、リアス・グレモリーはお気に入りの下僕が

女を知るのに何か不都合でもあるのか？」

「イツセーの貞操は私が管理します！・イツセー、

人の貞操守っておいて、貴方が他の所で

貞操を散らすってどういうことなのかしら!？」

まあ、そりやそうだ、それと今しれつと巻き込まれたな。

「ユウスケさん、私を置いて

遠い所行ってしまうのですか…?」

いや、アーシア、何か勘違いしてないか。

俺は行く気はないぞ。

「あらあら、イツセーくん、

ツアーに参加したら寂しいですわ」

朱乃さんが悲しそうな表情をしている。

「…先輩、最低です」

小猫ちゃん、それってイツセーの事だよね。

俺の事じゃないよね？

でも小猫ちゃん怒ってないな。

むしろ笑っている。

「ふむ、ユウスケは童貞か…むう」

ゼノヴィアは何を真剣に悩んでる!？」

「モテモテです、先輩！

ひ、引きこもりの僕は憧れるばかりですうう！」

「いやー、段々僕の事を」

悪く言えなくなってきたよね」

と、ギヤスパーと木場が言う。

その光景を見て、アザゼルが豪快に笑う。

「ハハハ！なんんだよ！そうかそうか。」

「そういや、ドラゴンや英雄は自然と」

一夫多妻を形成するんだったな。」

俺が教えるまでもないのか。ま、

ここは三すくみ同盟の代表的な場所の

一つとなる。墮天使の総督、魔王の妹、

天使側のバックアップ、

そして伝説のドラゴンとクウガだ。

仲良くやっていこうや。

当面の目標は赤龍帝の完全なる禁手化。バランス・ブレイク

それとお前らのパワーアップだな。」

それらを夏休みに修行して達成するべきだ」

夏休み。

もう一学期も終わってしまうな。

にしてもこの墮天使総督様、いつの間にか普通に

なじんでるから怖いな。

ついこの間まで敵組織のボスだったとは思えない。

前に会った時も思ったが全然怖くないんだよな。」

「私達も強くならなくてはいけないのね」

リアス先輩の言葉にアザゼルも応じる。

「強くて損はない。で、話では近日中に」

若手悪魔共の会合があるんだらう？

デビューが近くて有望な若い悪魔が

リアス・グレモリーを含め数名いると聞いたが」

「ええ、名門、旧家、

その手の若手悪魔何名かで顔合わせ。

習わしみたいなものよ」

「テロがあつた時期にゲームのこと

考えていいですか？」

イツセーの質問だ。

まあ、ヤバい組織がいつ来るか分からんしな。

そんな疑問にアザゼルが答える。

「俺はむしろ推奨するね。戦闘経験の無い

現若手悪魔にゲームでの戦いは良い経験になる。

現在の悪魔には、人間、堕天使、魔獣やらの

転生悪魔がひしめきあっているからな。

相手には困らない。豊富なバトルフィールドも設置、

戦い方もそれに応じて千差万別ときた。

これほど好条件の若手育成環境はない。

案外、サーゼクス達は今の状況を将来的に

見据えてこのゲームを創り出したのかもしれない。

悪魔同士で競わせて、力の質を高めていく。

欲深い連中だからこそハマったんだろうさ。

食えない奴等だ」

なるほど、実戦経験を積むためのゲームなのか、

「なーに、俺が直接力の使い方と神器の使い方を

叩きこんでやるよ。それと、合宿中に

試合もセツティングする予定だ。

レーティングゲーム形式で一つやろうと思う。

すでにサーゼクスに打診済みだ」

アザゼルは本当に用意が良いな。

「ククク、未知の進化を始めた

ブーステッド・ギアにクウガ。

それに聖魔剣。さらに『フォービトウン・パロール・ピュー停止世界の邪眼』だ。

俺の研究成果を叩きこんで

独自の進化形態を模索してやる」

うお、アザゼルが危険な笑いと考えを発している!?

俺らは、実験体かなんかかよ!?

「ふふふ、確かに新たな進化をしたクウガ
過去の文献を調べて研究を進めるべきね。
面白くなりそうね」
ロビンさんも大分やる気だな。
先行きが不安過ぎるぞ、
どうなるんだ、この駒王学園は。

—○○—

夏休み入る前日。

終業式が終わった後の事だ。

「こんにちは」

「や、どうも。今日からお邪魔するよ」

朱乃さんとゼノヴィアが大荷物を

持って俺の家を訪れていた。

朱乃さんはイツセーを確認するなり、

「イツセーくん！」

イツセーに抱き着く！

おわっ！何事だ！

「朱乃、ただいま貴方の元へ到着しました。

イツセーくん……」

朱乃さんが潤んだ瞳でイツセーを見つめている。

知らん間に朱乃さんと仲良くなっただんだな。

まるで恋人みたいに対応だけでも……。

「……あ、朱乃とゼノヴィアもこの家に

同居することになったの……。

お、お兄様の提案だね。

後日、小猫も呼ぶ予定よ」

何やら遺憾に感じていそうなりアス先輩。

話しでは、サーゼクス様が眷属の

スキンシップ向上の為にそう提案したそうだ。

リアス先輩は最後まで抵抗したそうなんだけど、うちの両親が快諾して、朱乃さんと

ゼノヴィアの同居が成立してしまった。

で、朱乃さんは家に着くなり、

イツセーにべったり抱き着いて離れない様子だ。

イツセーは嬉しそうだが、

気付いてるのかね、リアス先輩が睨んでるけど、

朱乃さんはこの状況を楽しんでいるようだが、

「イツセーくん♪私、今夜は一緒に寝ますわ。」

うふふ♪一度、ベッドの中でイツセーくんと

一夜を共にしたかったの」

「マジですか!?!うおおおっ!は、鼻血が!」

「アーシア、私の部屋はアーシアと

同じでいいのかな?」

「はい、これからよろしくお願いします」

「なら、荷物は俺が持っていくよ」

ゼノヴィアはアーシアと同じ部屋を使う事となる。

リアス先輩がイツセーの頬をつねりながら、嘆息する。

「しかし、このお家も狭くなってきたわね。」

決めたわ。夏休み中に改築しましょう。

お兄様に連絡を取ってみるわ」

そりゃ、一軒家でもこの人数じゃな、

しかし改築するとか、どうなるんだよ兵藤家は…。

こうして俺達の一学期は終わったのだった。

第四章 登場キャラクター

グレモリー陣営

○兵藤 祐介：本作主人公

駒王学園2年生

役割：『兵士』ポーン

種族：転生悪魔

人間だったが、殺されたことで悪魔に転生した。

大昔に居た民族のベルトを手に入れて、

平凡な日常が一変してしまった。

能力：『プロトクウガへの変身』
グロインクフォーム

①白のクウガ

ユウスケがベルトの力を受け継ぎ始めて変身した姿。

未完成故に弱く、戦いの為の姿ではない為、

最弱のフォームである。

S P E C

身体能力は赤のクウガの半分程度

②真紅のクウガ
マイティーフォーム

真紅のボディで、

パンチやキックなどの

肉弾戦を得意としている。

クウガの基本形態。

S P E C

パンチ力：約5t

キック力：約15t

ジャンプ力：15m（ひと跳び）

走力：5.2秒（100m）

視力：人間の数十倍

聴力：人間の数十倍

必殺技：マイティキック（威力は約30t）

③ 群青ナイトフォームのクウガ

ベルトが瑠璃色に輝き、

ボディが群青色に変化し、

腕、肩、脚に騎士の鎧が追加された姿。

悪魔の『騎士』の特性である。

高い速度と二本の直剣『ナイトソード』

を駆使して戦う。

S P E C

パンチ力：約3t

キック力：約10t

ジャンプ力：15m（ひと跳び）

走力：5.0秒（100m）※加速時は1.8秒

専用武器：ナイトソード

必殺技：サイクロンスラッシュ

④ 深碧ビショップフォームのクウガ

ベルトが翡翠色に輝き、

ボディが深碧色に変化し、

腰にローブが付き、

肩には魔方陣が装飾された

アーマーが追加された姿。

高い魔力と魔法触媒となる

細剣『ビショップレイピア』

を駆使して魔法戦をする。

S P E C

パンチ力：約3t

キック力：約10t

ジャンプ力：15m（ひと跳び）

走力：5.2秒（100m）

魔法属性：炎、氷、風、時

専用武器：ビショッププレイピア

必殺技：マジックバースト

○兵藤 一誠：原作主人公

駒王学園2年生

役割：『兵士』駒七個分

種族：転生悪魔

ユウスケの双子の弟

熱い心を持ち

いざというときには

便りになる熱血漢。

スケベ心が神器の

パワーアップに

繋がっているのか

不思議な理由で

パワーアップをはたすことがある。

神器：『赤龍帝の籠手』

かつて暴れた二天龍の片割れ
ウエルシュ・ドラゴン
赤い龍ドライグを宿す籠手。

能力は持ち主の能力を時間経過と共に倍加していく。

神をも殺せる神器『神滅具』の一つ

倍加の上限は持ち主の実力による。

イツセーの願いに応えて、

仲間に譲渡するタイミングを

教えてくれるようになった。

赤龍帝の籠手の能力

Boost：音声と共に10秒毎に力を倍加する。

B u r s t : 倍加の限界を超えてしまい。

音声と共に貯めた力が霧散してしまい、

反動で身体能力が低下してしまう。

E x p l o s i o n : 音声と共に倍加のカウントを止めて、

それまでに倍加した力で戦う事ができる。

B l a d e : 音声と共に手の甲から聖剣アスカロンが出現する。

ブリステッド・ギア・ギフト
『赤龍帝からの贈り物』

イツセーが勝利を願ったことにより発言した

第二の能力。蓄積した倍加能力を他人に譲渡する。

T r a n s f e r : 音声と共に倍加した力を他人に譲渡する。

禁手：『赤龍帝の鎧』
ブリステッド・ギア・スケイルメイル

赤龍帝の籠手の禁じ手

全身を覆う龍を模した鎧。

時間経過の制限が無くなり

一瞬で限界まで倍加し、

使用、譲渡が可能となった。

本来禁じては強い意志が切っ掛けとなり、

類まれなる運により至ることができる形態だが、

アザゼルの用意した

腕輪を使用し、

時間制限付きで発動した。

技：洋服崩壊
ドレスブレイク

イツセーの欲望が形となった技。

女性の体に触れて魔力を流すことで、

相手の装備を破壊する。

衣服も含めて破壊するので、

女の敵と仲間からも言われる始末。

だが防御魔法、装備の強度等は無視できるので、

大分強い技である。

弱点としては触れないと発動できないことだ。

○リアス・グレモリー

駒王学園3年生

役割：『^{キング}王』

種族：生来の悪魔

オカルト研究の部長であり、

祐介達を転生させた悪魔。

冥界の貴族グレモリー家の跡取り

人間界では欧米からの留学生として振舞っている。

真紅の長髪が特徴で、成績優秀、容姿端麗、

まさに貴族の振る舞いで人気も高い。

また、負けず嫌いで、

親友のソーナとの球技大会での試合では

人目も気にせず本気で勝負をしていた。

戦闘面では生まれ持った滅びの魔力を使い。

『紅髪の滅殺姫ルイン・プリンセス』と呼ばれている。

○ギヤスパー・ヴラデー

駒王学園1年生

役割：『^{レシヨツプ}僧侶』

種族：転生悪魔（吸血鬼とのハーフ）

引きこもり気質の金髪美少女に見える

女装趣味の男の娘。

人間とヴァンパイアのハーフで

人間として強力な神器を手に入れ、

ヴァンパイアとして類稀なる才能を持つ。

だが強力な力を制御できず、

どちらの種族からも孤立してしまい

ついにはハンターに殺され、

リアスの持つ『^{ミューテーション・ピース}変異の駒』で悪魔に転生したが

その制御できない力を危険視され
封印されていたが、

コカビエル戦での功績で
解放されるが

長年の引きこもり生活により
極度のコミュ障となっていた。

神器：『フォービトウン・パロール・ビユー停止世界の邪眼』

視界内の物体の時間停止。

止められた相手は違和感を感じるものの
完全に行動不能になる。

○木場 裕斗

駒王学園2年生

役割：『ナイト騎士』

種族：転生悪魔

学園一の爽やかイケメンで、

リアスを守る騎士。

柔らかい物腰で頭も良い完璧超人。

魔剣を生み出す神器を持ち

速度を活かしたテクニクタイプ

の剣士で、騎士としての誇りを持つ。

元々協会で聖剣エクスカリバーの適正

候補者として育成されていたが

適正が無かった為、

仲間と共に殺処分された過去を持ち。

悪魔として転生したあとも

聖剣に並々ならぬ憎しみを持っていたが、

コカビエル戦にて因子の結晶の中に居た

同志達の魂に諭されて

聖剣への増悪から解放された

神器：『魔劍創造』ソード・パース

自身が思い描いた魔劍を
自由に生み出すことが可能である
だが、伝説上の魔劍に匹敵するものは
生み出せない

禁手：『双覇の聖魔劍』ソード・オブ・ビトレイヤ

聖劍因子を取り込み、同志たちの想いを受けた木場
の神器が至った、亜種の禁手
本来交わるはずのない聖と魔の力を併せ持つ
聖魔劍を創造する。

この聖魔劍もまた各種の魔力を与えることができる
頑強さは使い手の心次第。
本気ならば四本のエクスカリバーを結合させたもの
さえ破壊できる。

○姫島 朱乃

駒王学園3年生

役割：『女王』クイーン

種族：転生悪魔（墮天使とのハーフ）
黒髪ポニーテールで清楚な振る舞いで
学園では人気がある。

他の眷属からも頼りになる女性だが、
ドが付くほどのSで、
リアスからも究極のSと言われるほど、
眷属内でもトップクラスの魔力で、
敵を甚振りながら高笑いする一面を持つ。
新たに兵藤家の居候となる。

○アーシア・アルジェント

駒王学園2年生

役割：『僧侶』レシヨツク

種族：転生悪魔

金髪ロングの美少女

高位の神器を宿していた為

堕天使に利用されて殺されたが、

リアスに悪魔へと転生してもらう。

金髪碧眼の美少女で誰にでも優しい。

学園でも人気があり

仲の良いイツセーが恨みを買ったりしている。

兵藤家に居候しており、

祐介達の両親からは娘の様にかわいがられている。

戦闘では戦うことは出来ないが、

貴重な回復要員である。

神器：『聖母の微笑み』トワイライト・ヒーリング

あらゆる傷を癒す能力があり、

他の回復用の神器と違い

種族を問わず癒すことが可能な為

教会を追放される原因にもなった。

強力だが、制限も多く、

至近距離でないと効果がない。

○塔城 小猫

駒王学園1年生

役割：『戦車』ルーク

種族：転生悪魔

駒王学園のマスコットの存在な白髪ロリ娘

小学生にしか見えない小柄な体格から

一部の生徒に人気がある。

何を考えてるのか分からない寡黙な性格で、

何かを食べていることが多い食いしん坊キャラだ。
戦車の能力を活かした怪力で戦う。

○ゼノヴィア

駒王学園2年生

役割：『騎士^{ナイト}』

種族：転生悪魔

青髪のショートカットに

一房に緑のメツシユを入れた

ボーイツシユ美少女

コカビエル戦にて神の不在を知り

精神的支柱を失い

破れかぶれでグレモリー眷属に転生した。

『デュランダル』

ゼノヴィアが持つ伝説の聖剣。

天然の適合者のゼノヴィアでさえ

完全に扱う事の出来ない暴君

普段は異空間に収納されており、

必要に応じて取り出している。

特殊な能力を持たず

単純な破壊能力重視の聖剣である。

シトリー眷属

○ソーナ・シトリー

駒王学園3年生

役割：『王^{キング}』

種族：悪魔

駒王学園生徒会長。

眼鏡をかけた黒髪の美少女。

リアスとは幼い頃から一緒に遊んだ親友。
姉のセラフォルーには
振り回されている様子。

○匙 元士郎

駒王学園2年生

役割：『兵士』^{ボーン}

種族：転生悪魔

生徒会版イツセーと言える熱血漢。

イツセーとは似通った部分があり、

自分の夢を打ち明けた事がきっかけで

親しくなる。

神器：『黒い龍脈』^{アフソリユート・ライン}

どんな物体にも接続できる「ライン」で

自分と対象をつなぎ、対象の力を吸い取る。

また、本人が制御出来ない神器などに接続

して力を散らす事も出来る。

悪魔陣営

○サーゼクス・ルシファア

紅の髪を持つイケメン

見た目は若いが年齢はかなりの物

リアスの兄で現四大魔王の一人。

グレモリー家の性質として

非常に情が深く、

穏やかな物腰である。

○セラフォルー・レヴィアタン

魔法少女のコスプレをした

ツインテールの美少女。
ソーナの姉で四大魔王の紅一点。
魔王なのにノリが軽く、
妹の授業参観にコスプレで
登場し、カメラ小僧相手に
ノリノリでポーズをとる程軽い。

○グレイファイア・ルキフグス
サーゼクス・ルシファアの『女王』
グレモリー家に仕える使用人でもある。

教会陣営

○ミカエル
天使の組織『熾天使』を率いる天使長。
四大天使の一人
端正な顔立ちをした青年の姿で、
背中に12枚の金色の翼を持つ。
神の死後『システム』の代行を務める。

墮天使陣営

○アザゼル
墮天使の組織『神の子を見張る者』の総督。
矯正な顔立ちと前髪が金髪で
顎鬚を生やした外見と、
背中に生えた12枚の漆黒の翼が特徴。
研究者気質で、特に神器の研究に
のめり込んでいる。

人工神器：『ダウン・フォール・ドラゴン・スピア墮天龍の閃光槍』

アザゼルが作り出した人工神器

二天龍の神滅具などの「ドラゴン系神器」

を元に関発された物で、

五代竜王の一角『フアーブニル黄金龍君』の力を宿している。

疑似禁手：『ダウン・フォール・ドラゴン・アナザー・アーマー墮天龍の鎧』

黄金の全身鎧でアザゼルの力を高めることが出来る。

ただし、使い捨てであり戦闘後はフアーブニルを

封じた宝玉を残して消滅してしまう。

○ニコ・ロビン

墮天使の組織『グ神の子を見張る者』の一員

黒髪をオールバックにし腰まで伸ばした美少女

考古学者でクウガを含め、リント族について

調べている。自分の知らない事が

あるのを嫌い気になることは

調べないと気が済まない性格。

カオス・ブリゲード
禍の団

○カテレア・レヴィアタン

初代魔王レヴィアタンの血族であり「禍の団」

に所属する眼鏡を掛けた女性悪魔。

レヴィアタンの座を奪ったセラフォルを憎んでおり、

彼女を殺害して新世界では自分が

魔王レヴィアタンになろうと企んでいた。

○ヴァーリ・ルシファー

悪魔と人間のハーフで、

初代魔王ルシファーの血族である。

銀髪的美少年で、

神滅具『白龍皇の光翼』（デイベイン・デイベイディング）の所有者で

白龍皇と呼ばれている。

心技体に加え魔力・魔法にも

優れた才能を持ち史上最強の白龍皇とされる。

自身と同じ二天龍の一角を宿す

イツセーに対しては

圧倒的な実力差から見下している。

神器：白龍皇の光翼（デイベイン・デイベイディング）

二天龍の『白い龍』（パニシング・ドラゴン）アルビオン

を宿す光翼。

「半減」と「吸収」の力を持つ神滅具の一つ。

白龍皇の光翼の能力

Divide：音声と共に10秒事に振れた者の

力を半分にする。

また、半分にした力を

吸収して自分の物にできる。

禁手：『白龍皇の鎧』（デイベイン・デイベイディング・スケイルメイル）

白龍皇の光翼の禁手。

白銀の全身鎧を纏う。

「Vanishing Dragon Balance Breaker」の音声と共に発動する。

「半減」の力を一気に使用して攻撃を弱めたり、

相手を急速に弱体化させられる。

Half Dimension：音声と共に物体だろうと空間だろうと

周囲のあらゆるものを半分にする領域を展開する能力。

○東城 雄輔

もう一人のクウガであり、

ユウスケの事を未完成と見下していた。

五代と同じ四つの姿を使い分けて

戦うが、その実力は高く。

ユウスケでは歯が立たない程、

強くなることを望み

ユウスケの事は

自身とは違う進化を遂げた者と考えている。

○美猴

闘戦勝仏である孫悟空の末裔である猿の妖怪

野性的でノリの軽い人間の青年の姿をしている。

グロンギ族

○ラ・ザビネ・バ

グロンギ族の審判であり処刑人。

蜂の怪人で『禍の団』と手を組み

暗躍している。

○ラ・ドルド・グ

グロンギ族の進行の監視や記録を担当する。

コンドルの怪人で今回のゲゲルを

上空から監視していた。

○メ・ボダウ・バ

教会に聖騎士ギーラとして所属していた

今回のゲゲルのプレイヤーに選ばれ、

クウガと戦った。

オルガと呼んだ者の為に戦ったもよう。

番外編 異世界とのクロスロード 「テイガ編」
第53話 「光の巨人」

夏休みが始まり。

夏を謳歌するはずだったが、

今俺達とはある山にて戦闘の真ただ中だった。

「火を放つわ！防ぐわよ朱乃！」

「はい、部長！」

俺達は突如空から降ってきた怪獣と戦っていた。

その怪獣は蟹と海老を合体させたような姿をしており、シオマネキの様に片側だけ大きなハサミを持っている。

その口からは火球を放ったが、

リアス先輩と朱乃さんが防御障壁で防いでくれる。

「どうやら、眼の色で攻撃方法が変わるようですね」

木場の言う通り、先程目が青くなった

時は冷気ガスを放っていた。

奴は目が赤い時は火球を

青い時は冷気ガスを放ってくるようだ、

奴の体は甲殻類だけに防御力が高く。

俺達の魔法はあまり効いた様子はなかった。

「部長！どうするんですか？」

イツセーがリアス先輩に指示を仰ぐ。

「イツセー！譲渡は可能なの？」

「はい、もう限界まで溜まっています！」

「なら私に譲渡しなさい。」

ギヤスパー！あの蟹の動きを止めなさい！」

「はいいいツイッ！」

ギヤスパーは叫びながらも神器を使い蟹の動きを停める。

「イツセー！」

『トランスファー！』
『Transfer！』

「部長！受け取ってください！」

刹那、リアス先輩から凄まじい魔力が溢れ出す。そして蟹の方へ手を向ける。

「滅びなさい！」

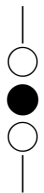
巨大な魔力の塊が撃ちだされ蟹に迫っていく！

ようやく蟹が動けるようになったようだが、

目の前に迫っている魔力から逃れる術がなかった。

「ギイイイイイイイイイイイイッ！」

蟹の怪獣は雄叫びを上げ倒れるのだった。



謎の怪獣と戦った後、

俺達はオカルト研究所へ戻ってきていた。

「しかし、あの怪獣はなんだったんだ」

返ってくるなりイツセーが呟く。

まあ、気持ちは分かるがな、

「あの蟹の怪獣はどこから来たんですかね？」

俺はリアス先輩に訊ねる。

「それが解らないのよ。」

突然空から降ってきたそうよ」

そんなことがあり得るのか？

「奴は俺達の監視をくぐり抜けて突然現れやがった。

正体も不明、何処から来たかも不明ときたもんだ」

と、突然現れたアザゼルが話に入ってくる。

いつからいたんだ！

「アザゼル!?いつから居たの貴方？」

「ついさっきな。あの怪獣の回収を

ウチの連中に命令してこっちに来た。

結果としては、何もわからないって事が

わかった」

「それって調査したっていうのか？」

アザゼルが頭を掻きながら話を続ける。

「いや、いろいろ調べたが、

正体は只のデカイ蟹としか分からなかった

ただ体に火球や冷気をだせる器官があるだけのな

上空に突然現れた方法も分からない。

魔術的な方法ではないのは確かだ」

「もしかして、『禍カオス・ブリゲードの団』の仕業とかですか？」

イツセーがアザゼルに訊ねる。

「いや、奴らの仕業としたらお粗末すぎる。

今回の怪獣は完全に水棲生物だったが、

現れたのは水辺の無い山岳地帯だ。

奴等ならこんなことしないだろう

それに他の地域でも複数の怪獣の目撃情報が

上がっていた。それぞれの組織で対処してるが、

今回で五件目の様だな」

そういつて、アザゼルが資料を俺達に渡してくる。

「その資料に載っている四体はそれぞれ

違う能力をもっていて全て突然現れたようだ。

だが今回も含めて共通した事があるのが、

全ての地域で過去隕石の落下が報告されていたようだな」

「それってつまり、奴らは宇宙から来たって事ですか？」

今回も突然空から降ってきたしな。

「いや、今回の奴が現れたのは

宇宙でなく空中に突然現れた。

まるで転移の様にな。だが、

その方法も結局分からずじまいさ」

「つまり、その隕石が今回の件と

何か関係してるんじゃないかと

考えてるんだな」

俺がアザゼルに質問すると、

アザゼルは笑いながら答えてくれる。

「ああ、今その隕石を調べるように指示してある
すぐ結果が届くだろうさ。」

他の四体についてだが、

一体目は二足歩行の恐竜のような姿で、
空中に突然現れた後、

直ぐに地中に潜ってどこか行きやがった。

その地域を収めてた悪魔が

搜索して倒したと報告が上がっている。

二体目は鳥とドラゴンを掛け合わせたような姿だ。
だが、強さはドラゴンに及ばないようだな。

飛ぶ速度は速いようだが、

討伐に当たった天使たちによって

上空で簡単に落とされた。

三体目は両腕が鎌になっている二足歩行の怪獣だ。
額から光弾を出してくるがこいつはウチの奴らが

神器の調査中に遭遇して、その神器所有者と

協力して討伐した。

最後に四体目だが、コイツだけ異質だな、

巨大な目に沢山の目が付いた手足、胴体がある

コイツだけは人型だったが、他の怪獣と違って
物体を吸収する能力があった。

コイツに関してはサーゼクスの野郎が

冥界に帰る前に接触して倒してやがる」

「お兄様がー」

突然サーゼクス様の名前が出て驚くりアス先輩。

「ああ、何でも冥界に帰る前に

観光したいところがあったらしい

そんな事より問題なのはこいつは最初

サーゼクスの魔力を吸収したようだな、

その事で危険と判断したサーゼクスが

滅びの魔力を放って吸収しきれず爆発したらしい。
いいか、お前ら相手は魔王級の力を
吸収しようとしたんだこれがどういう事か
わかるな」

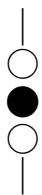
相手の能力は白龍皇の吸収に似ている。
相手の攻撃を吸収して、自身の力に変換するのか、
今回は魔王様の魔力が怪獣の限界を超えたため倒せたが、
これが他の者なら力を吸収して被害が
もつと大きくなっていたかもしれないな。

「また同じ奴が現れたら戦い方を考えないと
被害が大きくなるだけですな」

「その通りだ、今回戦った奴らは相性が良くて勝てたが
組み合わせ次第では全滅だって有り得た話だ
今後別々の怪獣が現れるかもしれないから
お前らも気をつけろよ」

アザゼルはそれだけ言い残すと部屋を出て行った。
「さて、夏休み始まってそうそう事件が起きたけれど、
明日は予定通り古々椰子村に向かうわ。
今日はもう解散して明日また集合よ良いわね」

『はこ』
こうして俺達の波乱の夏休みは始まったのだった。



「海だー!!」

イツセーが興奮して叫んでいる。
恥ずかしいからやめてほしい。

「今回はありがとうございました部長
イツセー達も一緒にお邪魔して」

俺達は今回、奈美部長の実家である。
古々椰子村に旅行に来ている。

去年も新聞部のメンバーで来ていたのだが、今回は他のメンバーは来れないとのこと。新聞部の顧問であるロビン先生と特別にオカルト研究部の皆と一緒に来ている。ただ、ギャスパーはまだ外は怖いとのこと。今回はお留守番となった。

「別にいいわよ。いつもユウスケが

お世話になってるから

そのお礼よそれに最近

ユウスケも忙しかったようだから

この機会にゆっくりしなさい」

「はいー部長ー」

奈美先輩はそういつてくれるが、

最近新聞部に余り顔を出せていなかったからな。

奈美先輩と会うのも久しぶりで、

すこし申し訳ない気持ちがある。

夏休みが開けたら新聞部にもこまめに顔を出さないとな。

「それでこの後はどうするの奈美？」

リアス先輩が部長に訊ねる。

「そうね。皆は海に行きたいだろうけど、

まずは今日泊まる旅館に荷物を置きに行きましょう」

そう言う奈美先輩に連れられて旅館までやってきた俺達。

「なんか、味のある建物っすね」

「私こういう建物初めてです」

イツセーとアーシアがそれぞれ感想を呟く。

「ふふ、只の古い建物よ

ここは私のお父さんの実家なのよ」

「おお、いらっしやい。

思ったより早かったな」

建物の中から身体中傷だらけの厳つい男性が現れた。

「只今、お父さん」

「ああ、奈美もお帰り。」

あと、久しぶりだなユウスケ。

今回は新聞部の皆は来ないんだっただか。

まあ、何も無い漁村だが、出来る限りもてなすよ」

そう言つて、厳さんはおれと握手する。

その手には思いつきり力が込められていたが、

「ほお、大分鍛えられているな。」

去年とは見違えたようだ。

これなら、奈美を任せても安心かもしれないな」

「ちよつと！お父さん！」

バカなこと言わないで！」

厳さんの発言に奈美先輩が怒る。

「ハハハハ、おつとこつちの皆は

初めましてだったな、

ワシは奈美の父親の大空厳だよろしく」

厳さんの挨拶に今回のメンバー唯一の大人である。

ロビン先生が挨拶する。

「初めまして、私は駒王学園で

歴史の教師をしている

ニコ・ロビンと言います。

奈美さんの所属している。

新聞部の顧問をしています。

今後ともよろしく」

「おお、よろしく」

「初めまして、今回はお招きありがとうございます。」

私はリアス・グレモリーと言います。

奈美とは仲良くさせてもらっています。

こつちは私の所属するオカルト研究部のメンバーである。

兵藤一誠、姫島朱乃、木場裕斗、

アーシア・アルジエント、

ゼノヴィア、塔城小猫です。

宜しく願います」

リアス先輩に紹介され、皆会釈する。

「おお、一誠君はユウスケ君の双子の弟だったな。話しは聞いているよ。ここで女子風呂覗いたら

命は無いからな覚悟しなさい」

巖さんはイツセーを睨みながらそういう。

「いや、覗きませんよ！

てか、ユウスケ何教えてんだよ！」

「いやだって、事実じゃん」

「ぐぬぬぬぬ」

パンッ！

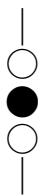
「おふざけはここまでよ

皆挨拶しなさい」

『宜しく願います！』

「おお、宜しく」

こうして俺達は旅館へと入る。



俺達は旅館に荷物を置き早速海へと来ていた。

「人がまったくいないな」

「当たり前だろ観光地じゃないんだからな」

「海と言ったら水着美女だろ！」

期待するのは当たり前だ！」

何言ってるんだこいつ。

「いや、イツセー君。

期待の女性ならこれから来るじゃないか」

「そうそう、リアス先輩達がいるのに

何を言ってるんだ」

「くうう、そうだけど、それはそれだろ」

イツセーがそんな事を言っていると女性陣が到着した。

「お待たせユウスケ」

聞きなれた声に振り替えると、そこには女神が立っていた。

オレンジの長髪を靡かせながら、

白のラインが入った緑のビキニタイプの水着を着ていた。

「どう？ユウスケ」

奈美先輩が訊ねてくるが、

俺は直ぐに返答できなかった。

「あ、に、似合ってますよ部長」

「あら、ありがとう」

何故か奈美先輩は頬を赤らめて視線を逸らしてしまった。

「ううう、ユウスケやっぱり

大きい方が良いんでしょうか」

「いや、アーシアだって大きくなるさ」

奈美先輩の後ろではアーシアが胸を押えながら

俯いており、ゼノヴィアが励ましている様子だった。

「どうしたんだアーシア？」

俺はアーシアに近づき訊ねる。

「いえ、何でもありません。

あの、ユウスケさん

私の水着はどうでしょうか？」

アーシアはプールの時とは違い

今回は水色の水着を着用していた。

「アーシアも似合ってるぞ、

新しい水着を買ったんだな」

「はい…この間桐生さんとゼノヴィアさんと

一緒に買い物行つて選んでもらったんです」

アーシアは嬉しそうに俺にそう話してくれた。

すると、ゼノヴィアもこちらに近づいてくる。

「私の水着はどうだユウスケ？」

そういうゼノヴィアは何故か競泳水着を着ていた。

「いや、似合ってるけどなんでその水着にしたんだ？」
俺の質問にゼノヴィアが首を傾げながら答えてくれる。
「うん？桐生が選んでくれたんだ、
私に似合うのはこれだと選んでもらったんだが、
ユウスケも似合うと思うならよかったよ」
ゼノヴィアは嬉しそうに頬をポリポリとかいている。
俺達はビーチバレーでヒートアップした
リアス先輩達と戦ったり。
スイカ割りをするはずが、
スイカの傍にイツセーと共に埋められて
小猫ちゃんの一振りに恐怖したりしたが、
存分に海を楽しんだ。



「なあ、ユウスケ？」

「どうしたゼノヴィア

また競泳でもするのか？」

「それもいいが、そうじゃない。

あそこにいる男の子なんだが」

ゼノヴィアが指を指した方へ視線を向けると、

一人の男の子が海岸沿いにある

洞窟に入っていくところだった。

「あの洞窟に子供一人は危ないな。

よし一緒にいくか」

「ああ、たすかる」

「部長！ちよつときになる子供が居たので

ちよつと様子を見て来ます」

「分かったわ。リアスには私から言っておくから

行ってきなさい」

奈美先輩に声を掛けて、

俺とゼノヴィアは男の子を
追いかけて洞窟へとやってきた。

入口には『崩落の恐れがあり、立ち入り禁止』の看板が、
中を覗くと洞窟は大分奥まで続いているようだ、

「これは、本当に只の洞窟か？」

自然に出来たって雰囲気じゃないぞ」

まるでダンジョンのような雰囲気の洞窟だった。

「とりあえず奥に行こう」

多分さっきの男の子はこの先だろう」

「そうだな、足跡は奥に続いているから

奥に居るのは確かだろう

崩落なんて起きたら危険だしな」

—○○—

ザクツ、ザクツ。

俺達が洞窟の奥までやってくると、

先ほど見かけた男の子が行き止まりの壁に

シャベルを突き立てていた。

「おい、少年ここで何やってるんだ？」

俺が声を掛けると驚いたように振り返る。

「なっ！だれだよ兄ちゃん達！」

「誰って聞かれたら只の観光客だけだよ」

「たった一人でこんな所に入っていくのを見たから

気になって追いかけてきたんだ」

俺達の返答に男の子が食いつくように反応した。

「観光つてこの町にか何も無いのに

何を目的で来たんだ!？」

「いや、知り合いの実家に遊びに来ただけだよ」

俺の返答に男の子はがっかりしたように俯いてしまう。

「なんだ、そうなんだ」

何故か申し訳に気持ちになつてくるな。

「で、話は戻るけど君、名前は？ここで何をしてるんだ」
俺の質問に顔を上げて答えてくれる。

「名前は、俺この町に」

観光スポットを作ろうと思つて：」

そういつて大吾はぽつぽつと話していった。

話によると、母親が一人で大吾を育てているようだ。

朝から夜まで働きづめで大吾は

寂しい思いをしているようだ。

それで、以前お母さんが咳いていた。

観光客が増えれば町の稼ぎも

増えてもう少し生活が楽になると

という言葉を聞き、ここにやつてきたようだ。

「でもなんでここなんだ、

確かに雰囲気はあるけど

ここは観光スポットといえる場所じゃないだろ？」

「たしかにユウスケの言う通りだな。

只の洞穴に何をしに来てるんだ？」

俺とゼノヴィアの疑問に大吾は悩みながらも答えてくれた。

「実は、この塞がれた道の先には

古代遺跡が眠っているらしいんだ、

俺がそれを発掘したら、

母さんも楽になるだろうし、

それで：」

大吾はそういつて黙り込んでしまう。

恐らく、大人たちには黙つて来たんだろう。

「ここは崩落の危険だつてある、

今日はもう遅いから帰ろう？」

明日から俺も手伝うからさ」

「なんで兄ちゃん達は手伝ってくれるんだ？」

大吾は不思議そうにこちらに訊ねてきた。

「そういう理由なら手伝ってあげたいからな」

「そうだな。皆でやればすぐ終わるだろうし、

私達が手を貸せば、安全面だって不安はなくなるだろう」

「ああ、リアス先輩達にお願いでして手を貸してもらおう」

「兄ちゃん達ありがとう！」

大吾は嬉しそうに微笑んでいた。

「なあに、良いって事よ。」

とりあえず戻ったら巖さんにこの遺跡の

事を訊ねてみようぜ。多分何か知ってるだろう」

「見つかったらロビン先生に調査してもらおう。」

考古学者の力も必要だろう」

俺とゼノヴィアで今後の事を話し合っていた。

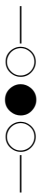
「なんだ、兄ちゃん達巖さんの所の客か

じゃあ、明日は旅館に顔出すよ」

「ああ、待ってるから

明日からよろしくな」

そして、俺達は洞窟を後にした。



俺達が旅館に戻ってくると、既に奈美先輩達が

戻ってきており、一人の女性と共に晩飯の準備を

している所だった。

「お！帰ってきたなユウスケ！

もうすぐメシにするから、

巖さん達を呼んできてくれるか」

俺達が帰ってきたことに気が付き、

赤髪を真ん中だけ残して刈り上げた女性。

奈美先輩の母親であるベルメールさんが声を掛けてきた。

「いいですけど、巖さん達は何処に居るんですか？」

「ノジコと一緒に裏で男性陣と稽古だっけさ」

「こっちは奈美やリアスちゃん達が手伝ってくれてるから様子見に行ってくれませんか？」

「分かりましたよんできます」

俺は直ぐ旅館の裏手へ回ると。

カアンツ！カアンツ！

木材がぶつかり合う音が響いている。

裏手の庭に到着すると、

青髪のショートカットの女性が木剣を使って、

イツセーと模擬戦をしていた。

「おお、ユウスケ帰ったか、

今ちようどノジコとイツセー君とで

試合をしている所だ、君もどうだ？」

先ほどイツセーと試合をしていたのは。

奈美先輩のお姉さんのノジコさんだった。

「いえ、ベルメールさんから

皆を呼んできてほしいと頼まれたので

呼びに来たのですが」

「おお、もうそんな時間か、

おーい、ノジコ！飯の時間だそうだ」

ノジコさんは試合を切り上げてこちらへとやってくる。

「久しぶりだねユウスケ」

「ええ、久しぶりです」

相変わらず強いですね」

「まあ、お父さんの娘ですから」

「ハハハ、流石私の娘だ、

よし、戻って飯にしよう」

厳さんは嬉しそうに笑いながら

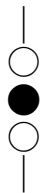
ノジコさんと共に家の中へと消えていく。

「あの、ノジコさんって人強くないか？」

俺悪魔になって身体能力上がった

はずなのに一回も勝てなかったんだけど」

「イツセー君の場合は力で押し切ろうとして受け流されていたからね。単純に技量が向こうの方が上なんだよ」さっきの試合に納得がいつてない様子のイツセーに木場が説明してくれるた。



飯も食べ終わった後、

俺は厳さんに大吾と会った洞窟について聞いてみた。

「大吾か、あの坊主最近見ないと思ったら、

あの洞窟に通ってたのか」

「お父さん、洞窟の話しって本当なの？」

「ああ、と言っても俺のじいさんが若い時の話だからその話を信じている者はほとんどおらんよ。

崩落事故で塞がって危険だから

誰も近づかなくなったからな」

奈美先輩の質問に厳さんが答えてくれた。

「手伝うのは良いが、俺らも仕事があるから

余り手伝えないからな、道具などは好きに使って

いいから、安全に作業するんだぞ

それと遅くならないようにな」

「大丈夫です、安全面に関しては

私の方で色々手配させますので、

安心してください」

「リアス先輩、ありがとうございます」

「別に良いわよこれぐらい」

リアス先輩の協力を得る事もでき、

俺達は明日行こう洞窟の遺跡発掘

について遅くまで話し合った。

皆が寝静まっている深夜。

俺は寝付けず風に当たろうと、外に出て風に当たろうと海辺までやってきた。すると、そこには先客がいた。

「眠れないのか、ゼノヴィア？」

「ああ、ちよつとな」

海辺では、ゼノヴィアが座って海を眺めていた。

「隣失礼するぞ」

「かまわない」

しばらく、二人の間に沈黙が続く。

「何か悩みでもあるのか？」

「ああ、これからについて悩んでいてね

今までとは生活も変わってしまった、

一番の変化は悪魔になった事だけだな」

ゼノヴィアはそういつて自分について話し出した。

「今まで教会の規則で女性の娯楽というものから

縁が無かった今日着ていた水着も今までなら

興味すら無かったからな」

「なら、悪魔になって良かったじゃないか」

「いや、失ってしまったものもあるんだ」

すると、ゼノヴィアは自身の過去を語りだす。

自分はキリスト教会であるヨーロッパで生まれ育ち、

聖剣が使える因子を生まれ持っていたため、

幼少の頃から神の為、宗教の為、

修行と勉学に励んできた。

「子供の頃から、これといって夢や

目標というものが、全て神や

信仰に絡んだものだったんだ。

たとえば、悪魔を倒すのは主の為、

布教させるのはヴァチカンの為だと信じて
疑う事も無かったよ。だから、

悪魔となった今、私は目標、夢が無くなったといえるんだ
前と違つて出来る事が沢山あるのに皮肉なもんだ」

「なら、新しく作ろうぜ。」

悪魔の生は長いんだからさ、

幾らでも夢を叶える事は出来るはずだろ、

悪魔は欲望に忠実な存在だぜ、

夢や目標が決まらないなら、

やりたいこと全部やればいいだけさ

夢は一個だけなんて決まってないしな」

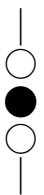
「フ、確かにそうだ。」

君の話を聞いたら今まで悩んでいたのが
バカみたいだ、ありがとうなユウスケ」

「どういたしまして」

先程と違い、迷いの消えた彼女の

笑顔は良い物に変わっていた。



翌日俺達は太吾と一緒に洞窟までやってきていた。

何をするかと言うと、魔法を使って壁の補強と

掘削を行つていくらしい。

「さて始めるわよ。」

皆準備はいい?」

リアス先輩含め皆作業着に

ライト付きヘルメットを被つていた。

「部長! 皆準備万端です!」

イツセーが代表して返事をする。

「さあ、作業開始よ!」

『はい!』

さっそく俺達は作業を開始する。

大吾も手伝いにかけて出たが、あまり重労働はさせられないので、外への土砂の運搬をお願いした。

まあ、その倍以上の量を小猫ちゃんが運んでいたが、俺、イツセー、ゼノヴィアで掘削作業を行う。

その間残りのメンバーで掘り進めた壁の補強と照明の設置を行っていた。

一時間程、掘り進めていると一段と堅い岩にぶち当たった。

「これはこの道具じゃ壊せそうにないな。

どうするかリアス先輩に相談するか」

「いやこれくらいならデュランダルで壊せるさ」

いや、簡単に言うけど、

「いや、それは無理があるんじゃないって、おいつ！」

俺がゼノヴィアの方へ視線を向けると

既にデュランダルを構えるゼノヴィアの姿が、

ドオオオンツツ！

流石聖剣と言うべきか、

目の前が土煙で全く見えないが、

岩の除去には成功したようだ。

だけどな、

「ゴホッ！ゴホッ！むやみにデュランダル使うなよ

崩落の危険だつてあつたぞ！」

「すまない、だが、成果はあつたな」

「はあ？」

俺はゼノヴィアが何を言っているか分からず聞き返す」

底へ音を聞きつけた皆が集まってきた。

「ちよつと貴方達！今の音は何!？」

大丈夫なの!!」

「大丈夫です部長！それよりもこれを見てください！」

土埃が収まった先には広い空洞が広がっており、俺達が探していた遺跡がそこにはあった。

「遺跡が本当にあった!!」

「良かったな大吾!」

待望の遺跡の発見に大吾とゼノヴィアが喜び合う。

「とりあえず、奥まで行ってみましょう」

リアス先輩の提案で遺跡の奥まで歩く俺達、

「これは神代文字ね」

ロビン先生が壁に彫られた記号を見ながらそう呟く。

「内容は読めますか?」

「ええ、所々風化しているけれど」

前後の文章を読めばある程度の予想はつくわ。

『天より舞い降りし光、巨大な獣となり災いをもたらさん

我等が祈り届きし時、光の巨人が現れ災いを退ける』

巨大な獣? 最近の出来事に何か関係するの?

「光の巨人と言うのは?」

「詳しくは書かれてないけれど、

この地域を救った英雄の名のようね」

「とりあえず、まだ先があるは奥へ進んでみましょう」

俺達は更に奥へと進むとそこには。

「これは!?!」

「これが光の巨人?」

俺達の目の前には石で出来た巨人の胸像が現れた。

第54話 「テイガ」

発掘した遺跡にて巨人の石像を発見した俺達。

「この石像が光の巨人で間違いなさそうね」

「ここまで細かい細工って当時の技術的に

可能なんですかね？」

「石を切り出すのは可能かもしれないけれど

この大きさととなると不可能でしょうね。

継ぎ目も無いから一つの大きな

石を切り出したようだけど、

この石が何の石かは分からないけれど、

私もこんな石像初めて見たわ」

俺の疑問にロビン先生は答えてくれたが、

ロビン先生でもこの石像に関しては分からないとはな。

「なあ、皆！これを覚えてくれよ！」

「どうしたのイツセー？」

「この壁画なんです」

イツセーに呼ばれて向かうと一枚の壁画を指差していた。

「これは!?!この間倒した怪獣に似ているわね」

「ロビン先生内容と呼んでもらっていいですか？」

『海獣レイキュバス』、火炎と冷気を吐く怪物

と書かれているわね。他にも報告書の

怪獣と似た壁画があるわね。

『超怪獣ゴルザ』、『超竜メルバ』、

『戦闘獣超コツヴ』、『奇獣ガンキュウ』

それがこの怪獣たちの名前ね」

「この怪獣たちが何処から

来たとか書いてないんですか？」

「書いてある内容から、空からつまり宇宙から

来たのかもしれないわ。

でも私も歴史には詳しいけれど

こんな怪獣が現れた歴史なんて存在しないわ
最近現れた怪獣を知っていなければ

この碑文は只の物語ととらえられるわね」

碑文を解読しながら、ロビン先生が教えてくれる。

「ならいいつらはどこから？」

もしかして、別の世界から？」

俺は一つの可能性に思い至りそう呟く。

「別の世界ってどういう事かしら？」

「前に二回ほど、別の世界に行つたことが

あつたんですよその時は戻つてくれましたが、

もしこの遺跡を作つた人物が異世界から

この世界に來た可能性があるなら

歴史にない怪獣の存在にも納得がいきます」

「ユウスケの予想が当たっているなら

最近突如として現れた怪獣は異世界から

送られてきたつていうの？」

「分かりませんが、その可能性だけの話しですね」

まだかもしれないという話だからな。

そんな時俺達しかいないこの場に

男の声が響く。

「この世界はつながつたのさ」

俺達が声のした方に視線を向けると、

黒いローブに身に包んだ男がそこに立っているが、

その顔はローブのフードで隠れていて見る事はできない。

「貴方何もの？つながつたて言うのは？」

リアス先輩の質問にその男は構わず続ける。

「この世界は繋がつた。

世界を隔てる壁に歪みが生じている。

そこのクウガが他の世界に何度も訪れた結果だ、

また他の世界から移動してくるものもあるだろう。

だが、私はこの世界の行く末を見届けるだけさ」

それだけ言うとは彼は立ち去ろうとする。

「待ちなさい！貴方にはまだ聞きたいことが」

リアス先輩が立ち去ろうとする

男を呼び止めようとするが、

突如、地面が大きく揺れだす。

「地震か!？」

突然の揺れに驚く俺達だったが、

揺れも収まった後、先程の男の姿は何処にもなかった。

「ここに居てはまずいわ皆まずは外に出るわよ」

リアス先輩に皆が賛成し洞窟の外へ出た俺達。

—○○○—

「ユウスケ！」

外に出ると奈美先輩がこちらへやってきた所だった。

「奈美先輩大丈夫ですか？」

「それはこっちの台詞よ今の

揺れで洞窟が崩れたんじゃないかと。

それよりもあれを見て！」

奈美先輩が指さす方を見ると海に新たな島が出来ていた。

「え？あんな島ありましたっけ？」

「それが、突然空から降ってきたのよ」

「もしかして、これは隕石か?！」

よく見ればそれは岩の塊だが、

宇宙から落ちてきたにしては被害が少なすぎる。

「いえ、あれは空中に突然

現れておそのまま落ちてきたのよ」

まさか異世界から送られてきたのか？

ピシイッ。

何か割れる音が周りに響く。

「今の音はなんだ？」

「音、何も聞こえなかったけど？」

奈美先輩には聞こえなかったようだけど、悪魔の聴力が確かに音はなっていた。

「ユウスケ！音はあの隕石からよ！」

リアス先輩に言われ、隕石の方を見ると、隕石に変化が生じていた。

ピシィッ！ビキィッ！

ガラッガラッ！

隕石が割れ表面の岩が剥がれ落ち、中の物が姿を現す。

「ガアアアアアッ！」

キュィィィィィッ！

ギヤアアアアッ！」

三体の怪獣の雄叫びが聞こえるがその姿は一体のみ。

「何だあれは!？」

イツセーが驚き叫ぶが俺も同じ気持ちだった。

隕石の中から現れた怪獣は資料を見た。

三体の怪獣が合体した姿をしていた。

その姿は上半身が『ゴルザ』、

背中には『メルバ』の翼が生え、

額には『メルバ』の顔が付いていた。

そして、下半身は『超コツヴ』となっている。

「あれは合体怪獣とでもいうのかしら。」

このままでは被害が出るわ、

私の眷属達！ここであの怪獣を倒すわよ！」

『了解！』

皆が悪魔の羽を展開し、怪獣へと向かう。

空を飛べない、俺とイツセーだけが残される。

「クソ！よし俺達も走って向かうか！」

走り出そうとするイツセーを俺は止める。

「何だよユウスケ俺体も急がないと！」

「まあ、待て俺があそこまで連れてってやるから」

俺は腰に手を翳してベルトを出現させる。

「変身！」

『ビシヨップフオーム
深碧のクウガ』へと姿を変える。

「兄ちゃん達何者なんだ!?!」

空を飛んだり、突然変身した

俺達に驚きを隠せない様子の大吾。

「何者か、俺はこの村を救いたい只の悪魔さ

奈美先輩、大吾の事お願いしますね」

「ええ、任せなさい。

さっさと終わらせて帰って来なさい。

帰ったらごちそうよ!!」

奈美先輩がこちらにサムズアップで答えてくれる。

「行くぞ、イツセー!!風よ！」

『Aero』

俺は風魔法を発動し、俺達は風を纏う。

ふわりと浮き上がり、俺達は怪獣の方へ向かうのだった。



その場に残された大吾はぽつりとつぶやく。

「なんで、あんな怪物に立ち向かえるんだよ…。

皆逃げてるのに何で助けてくれるんだよ」

「それはね彼らがお人よしだからよ。

特にユウスケはバカが付くほどの

お人好しよ。たとえ知らない相手でも

自分を犠牲にして助けたりする男よ」

奈美は怪獣の方へと向きながらそう答える。

「さあ、私達も避難するわよ。」

私達がいたら戦いの邪魔になるわ」

「うん！」

奈美は大吾の手を引いて村の方へ走り出す。



「ガアアアアアアッ！」

キュイイイイイツ！」

ギヤアアアアアッ！」

雄叫びを上げる怪獣は港へと向かってきていた。

「止まりやがれ！」

ドオンツツ！」

イツセーがドラゴンショットを怪獣に向けて放つ。

だが、その攻撃は少しも効いていなかった。

「イツセー、限界まで強化して、

私と朱乃に譲渡しなさい！」

「了解しました。」

「その間に、裕斗、ゼノヴィア、小猫は

近接攻撃で怪獣の注意を引きなさい

ユウスケは皆のフォローを」

『了解』

木場とゼノヴィア、がそれぞれ聖剣と聖魔剣を構え

怪獣に突撃し、小猫ちゃんもそれに続く。

「ガアアアアアアッ！」

キュイイイイイツ！」

ギヤアアアアアッ！」

近づいてくる者達に警戒してか、

怪獣が雄叫びを上げ近づく三人に向けて光線を放つ。

その光線の密度に三人は近づく事が出来ないでいた。

だが、三人が引き付けてくれたおかげで、

イツセーの増加が上限へと達していた。

「部長！譲渡可能です！」

「やりなさい、イツセー！」

「おっしゃー！いくぜー！ブーステッド・ギア・ギフト！」

『Transfer!!』

音声と共に二人のオーラが膨れ上がる。

「天雷よ！鳴り響け！」

朱乃さんが天に指をかざし、雷を呼ぶ。

そして怪獣に標準を向ける。

カツ！

怪獣に向け天からの雷の柱が降り注いだ。

ドオオオオオオンツツ！

雷の攻撃が効いたのか怪獣は怯んでいる。

「これでトドメよー！」

ドウウウウオオオオオオンツツ！！

リアス先輩の手から怪獣に向けて魔力の塊を打ち出す。

凄まじい速度で打ち出された魔力が

怪獣に当たると思われたその時、

何かの影がその間に割り込んだ。

キュイイイイイン！！

その影はリアス先輩が放った魔力を吸収してしまった。

「ギユイイイイイツツ！！」

「な!?この怪獣は」

巨大な目玉に手足が生えた姿の怪獣だった。

「こいつは、『奇獣ガンキュウ』？コイツいつの間？」

「こいつは部長達とは相性が悪い僕達が何とかしよう」

「ああ、分かってる！」

「…了解」

何とかしようと木場達が『ガンキュウ』に向う。

その時、

ザッバアアアアアアアアアア！

「ギイイイイイイイイツ！」

突如海中から『海獣レイキュバス』が姿を現し、

木場達を襲う。

「な!? コイツはこの間のー!」

木場達は『レイキュバス』との戦闘を余儀なくされた。

「こうなったら俺達であの合体怪獣と戦うぞイツセー!」

「おおー!」

突如現れた三体の怪獣との戦闘が始まった。

「だけどユウスケあの怪獣達をどうやって倒すんだよ?」

「ようは組み合わせを変えればいいだけさ」

そう、組み合わせが悪いのは

吸収能力を持つ『ガンキュウ』と

遠距離攻撃のリアス先輩と朱乃さん。

高い防御力で近接攻撃の効果が薄い『レイキュバス』と

拳や剣を使って戦う木場、ゼノヴィア、小猫ちゃん。

ここを入れ替える事さえできれば話は簡単だ。

「簡単に言うけどさ! 策はあるのかよユウスケ!」

「時間さえ稼げれば何とでもなるさ」

イツセーこれはお前がカギだ

お前ひとりであの怪獣を押しえられれば

他の皆を助けられる。できるか?」

「やれるさ、此処に来る前に

アザゼルからこいつを貰っているからな」

イツセーは懐から腕輪を取り出した。

「アザゼルが言うには前に

俺に渡した物の試作品だつてさ、

たった三分しか使えないが、

ノーリスクで禁じ手化できるらしい」

そんなものがあったのかよ。

「まあ、アザゼルからしたらたった三分しか使えない。

不良品らしいが、三分あれば十分だろう!」

「任せたぞイツセー！」

「ああ、任せろユウスケ！」

「俺に力を貸せ!! ドライグ!!」

『WellshDragonOverBooster!!』
ウェルシュドラゴン・オーバーブースター

イツセーは禁じ手の姿『赤龍帝の鎧』
ブーステッド・ギア・スケイルメイルに変化する。

『Boost!!』

「うおおおおおッ！」

イツセーはただ一人合体怪獣へと向かっていく。

「さあ、俺は役目を果たすか」

ユウスケはそう呟き、

『レイキュバス』と戦っている木場達の元へ向かう。

—○○—

ゼノヴィアside

「ギイイイイイイイッ!!」

今までどんな魔獣もこの

聖剣で一刀に伏してきたというのに、

この怪獣は聖剣の攻撃を物ともしていない。

祐介やあの黒服の男が言う通り異世界の存在だからか？

いや、何を弱気になつていゝるんだ私は！

「効果が無いなら！何度でも試すまでだ！

甲殻類なら関節は弱いだろう！」

「その意気だゼノヴィア！だがここは俺に任せろ！」

声のした方に振り向けば、深碧の姿をしたユウスケが

こちらへ向かっていた。

「お前には停まってもらうぞ！時よ！」

『Stop!』

時魔法を発動させ、『レイキュバス』の動きを停める。

「これは、ギヤスパアの時間停止!？」

ユウスケの魔法に驚くゼノヴィア達

そんな三人にユウスケが声を掛ける。

「今の内にリアス先輩たちのところへ、

お前達ならあの目玉の怪獣と相性はいいだろう」

ユウスケは『レイキュバス』に剣を構える。

「ああ、あちらの怪獣は私達に任せろ」

私達はその場をユウスケに任せて、

部長達の元へと向かう。

「部長！」

「祐斗!? どうやってこちらに?」

でもちようどいいわ手を貸しなさい貴方達!

「部長、ここは私達に任せてほしい!」

だからユウスケの元へ向かってくれ!」

私の叫びに部長は驚いた顔をしたが

こちらを見て直ぐに察したようだ。

「分かったわここは任せるわ。

行くわよ朱乃!」

「はい、部長!」

部長達が『レイキュバス』の方へと向かい飛んでいく。

「さあ、これで形勢逆転だ行くぞ二人とも!」

「ああ、騎士の力を見せてやろう」

「…私も頑張ります」

「はあああああああッ!」

私は剣を握り締め『ガンキュウ』へと飛び出す。

—○○—

ユウスケside

各怪獣の組み合わせを変え戦いの流れは変わった。

三体の怪獣は既に疲弊しきっており、

倒せるのも時間の問題であった。

「よし…トドメだ!」

カッ!

イツセーの鎧が解除されてしまう。

マズイっ！

「風よー！」

『Aero!』

俺は落下するイツセーを風魔法で回収する。

「もう三分か助かったユウスケ」

「気を抜くなよイツセー！まだ倒してないんだからな」

俺達が改めて気を引き締めて怪獣達に向き直った。

その時、

カツ！

ピカアアアアアアンツ!!

突如の閃光に俺達は目を開けられなかった。

「なんだ!?!」

「なにがおこったの!?!」

閃光がおさまり、眼を開けた俺達はその光景に

自分の頭を疑った。

「あれは、なんだ…?」

先ほどまで俺達が戦っていた怪獣に変化が起きていた。

合体怪獣の両腕に変化が生じておりそれぞれの腕が、

『ガンキュウ』と『レイキュバス』の頭部となっていた。

「また合体したというの!?!」

驚く俺達に合体怪獣は

それぞれの怪獣の頭部を向けてくる。

「リアス先輩！攻撃が来ます！」

俺の警告にリアス先輩達は防御壁を展開するが、

ガシャアンツ！

合体怪獣の五つの口から発された光線を防ぐ事は出来ず、

その光線は俺の目の前までせまっていた。

「危ないユウスケ!!」

光線が当たると思った瞬間、

ゼノヴィアが俺を突き飛ばし、庇ってくれた。

ドガアアアアアアアンツ!!

「ゼノヴィア！」

光線を受けたゼノヴィアは咄嗟にデユランダルで防いだようだが、勢いは殺せず遺跡のある海辺まで吹き飛ばされてしまった。

「ゼノヴィアはアーシアに任せて私達はあの怪獣の相手をするわよ！」

『了解！』

—●—

大吾side

突然現れた三体の怪物が合体して

お兄ちゃん達がピンチになっていた。

「お姉ちゃんが！」

ゼノヴィアが吹き飛ばされた様子を見て動揺する大吾。ふと大吾は一つの事を思い出した。

「そうだ遺跡に行けば！」

大吾は奈美の手を振りほどき走り出す。

「大吾くん！何処へ行くの！」

「遺跡に行けば、お兄ちゃん達を助けられる！」

—●—

ゼノヴィアside

「大丈夫ですか！ゼノヴィアさん」

傍に来てくれたアーシアが神器を使い回復してくれる。

「ああ、大丈夫だ、アーシア助かったよ」

「私にはこれぐらいしかできませんから」

アーシアはそんなことを言うが

アーシアの存在には大分助けられている。

「そんなこと言うなアーシアにはよく助けられている」

そんな事を話していたその時、

「大吾！待ちなさい！」

奈美先輩の声が聞こえそちらの方へ視線を向けると、大吾を追いかけて、洞窟へと入っていくところだった。

「アーシア、私は二人を追いかける

いまあそこに攻撃が行ったら

二人が生き埋めになってしまう！」

「分かりました！」

私は二人を追いかけて洞窟へと入っていく。

—○○●—

ユウスケ side

俺達は怪獣の攻撃が村に向かわないように気をつけて攻撃していたが、

こちらの攻撃はあまり効いていない様子だ。

「クソ！さらに強化されて強くなってるのか！」

攻めあぐねている俺達の元にゼノヴィアの回復していたアーシアがやってくる。

「ユウスケさん、大吾君と奈美先輩が洞窟の中に

ゼノヴィアさんも二人を追いかけていきました！」

なっ!?!?どうしてそんな事に？

「何を呆けているのユウスケ！今は戦いに集中しなさい」

驚いていた俺にリアス先輩の叱責を受ける。

「すみませんリアス先輩。」

ですがゼノヴィアが大吾と部長を追いかけて洞窟に！」

「何ですってー！」

俺達の視線が一瞬怪獣から逸れた一瞬を突かれ、

合体怪獣の光線が発射される。

「マズイッ！」

俺達は防ぐ事が出来ず、その光線は村の海辺に着弾した。しかもそこは遺跡があったあの海辺だった。

「ゼノヴィア、奈美先輩！大吾！」



ゼノヴィア side

大吾達を追いかけて私は

あの巨人像の前へとやってきていた。

「何をやってるんだ君は！」

「お、お姉ちゃん！傷は大丈夫なの」

大吾は驚愕しているがそんな所でない、

「こんな所に来て、今は怪獣が出てるんだ！」

もしここが襲われたらひとたまりもないんだぞ」

「でも、話が本当なら祈りで巨人が出てくれる筈でしょ

僕、それでいてもたってもいられなくて」

「大丈夫だ、私達がああ怪物を倒して見せる

だから安心して避難してくれ」

「ゴメンなさいお姉ちゃん。

でも、僕にも出来る事があるならって

思ってる…」

私は大吾を優しく抱きしめる。

「分かってるさ、大吾のその勇気は

私にも分かるだから私達を信じて、

その勇気を私にも分けてくれないか？」

「うん、ありがとうお姉ちゃん」

「ああ、さあ外に出よう」

その時、強い衝撃が私達を襲う。

「きゃああッ！」

「うわあああ！」

今の振動で遺跡の各所に罅が入る。

カラツカラツカラツ！

私達の足元に石で出来たオブジェが転がってくる。
私は何故かそれを拾わなければと思った。

「こ、これは…」

ピシイッ！ビキイッ！ガラッガラッ！！

天井の罅が広がり天井の一部が

私達に向けて落ちてくるのが見える。

「うわあああああッッ！！」

何故か私は石のオブジェを天に向け叫ぶ。

そして、石が光を放ち、

私達は光に包まれる。



ユウスケ side

怪物の攻撃で崩れる遺跡のあると思われる岸壁を見て

俺は呆然としてしまう。

「そ、そんな…三人が…」

皆が戦い中という事を忘れて、

遺跡の方を見つめていると、

一つの光が岸壁から現れるとそれは形を持っていき、

ついには巨大な人型となった。

それは銀、赤、紫の巨人の姿をしていた。

「あ、あれは光の巨人？」

巨人は手の上の何かを地上に降ろす。

「あれは、大吾君と奈美先輩です！」

アーシアの叫びで俺達も二人の無事を確認する。

「じゃあ、ゼノヴィアは？」

俺は光の巨人を見上げてあることに気付く。

「もしかして、ゼノヴィアか？」

「シユアッ！」

俺の問い掛けに巨人が肯定するように頷く。

「デュアツ!!」

光の巨人が合体怪獣に向けて突進していく。

「私達の可愛い眷属達現れた巨人と

連携してあの合体怪獣をやっつけるわよ!」

『了解』

「ガアアアアアアツッ!

キュイイイイイツ!

ギャアアアアアツ!

ギイイイイイツ!

ギユイイイイツ!」

合体怪獣がこちらへ走り出す。

俺達も光の巨人と共に怪獣へと向かう。

合体怪獣が両腕の頭部を巨人へと向けるが、

「させないよー!」

「…させません」

木場が聖魔剣でレイキュバスを斬りつけ、

小猫ちゃん拳がガンキュウに直撃し、

両腕の攻撃を阻止する。

「デュアツ!」

その隙を突き、巨人の蹴りが怪獣の腹に突き刺さる。

その鋭い一撃に合体怪獣は怯んでいる。

木場と小猫ちゃんは両腕を抑えようとしていたが、

合体怪獣が暴れて二人を吹き飛ばす。

だが、光の巨人が合体怪獣の頭部に飛びつき、

両手でゴルザとメルバの頭部を抑えつける。

「デュアツ!」

ダアアアツ!

そして頭部にチョップを繰り返す。

「炎よ!!」

『Fire!!』

ドオオオオオオオオオオツ!!

おれは怯んだ瞬間に合体怪獣の胴体に炎魔法を叩きこむ。

「雷よ!!」

ドオオオオンツ!

そして朱乃さんが巨人がチョップを食らわせた頭部に追加とばかりに雷を落とす。

ブウウン!

「キヤア!」

だが、怯んだのは一瞬で、怪獣の蹴りの余波で朱乃さんは吹き飛ばされてしまう。再度巨人が頭部を掴みかかろうとしたが、

ザツバアアアン!

首を振り回して巨人を投げ飛ばし、海面に投げつけられてしまう。

「負けていられるかよ!」

イツセーが合体怪獣の腕に突撃し

オーラを纏った拳を叩きこむ。

「私だつて!」

リアス先輩も負けじと反対の腕に

滅びのオーラを纏わせた拳を叩きこむ。

「シユアツ!」

そこへ巨人も参戦し頭部に拳を叩きこむ。

三人の攻撃にたまらず後ずさる怪獣だったが、

「ガアアアアアアッ!」

キュイイイイイツ!

ギアアアアアアツ!

ギイイイイイイツ!

ギユイイイイイツ!」

それぞれの口で雄叫びを上げると、

突如ゴルザの口が光り輝く。

カツ!

ドオオオオオオオン!!

光線が周囲を焼く。

「させない！」

先輩達が障壁を張り町への直撃は防いでくれる。

バツ！

海獣が翼を広げ上空へと逃げる。

「逃がすか！」

俺達も上空へ追うが向こうの

速度はこちらの上を行くようだ。

「ハア！」

突如巨人が顔の前で腕を交差すると

巨人の姿が変わり紫一色へと姿を変える。

「ドウアッ！」

紫の巨人は上空へと飛び上がり、

合体怪獣を追いかける。

両者の飛行速度は凄まじく。

俺達は見ている事しかできなかつた。

更にはお互いに光線を

ぶつけ合いその戦いは激しさを増す。

「なんだよありゃ…」

「は、速い」

俺もイツセーも目の前の状況に驚くしかなかった。

そんな空中戦の中、巨人の光弾が見事合体怪獣に当たり、

その衝撃で怪獣は墜落する。

ザツバアアアアアアアンツツ！

ドオンツツ！

巨人は地上に華麗に着地する。

「もう、怪獣も弱っているはずよ。

ここで畳みかけるわよ！

イツセー！いつでも譲渡

できるように待機していなさい！」

「はい、部長！」

「ハア！」

巨人が再び頭の前で手を交差すると
今度は赤一色へと変化する。

「シューア！」

巨人が殴りかかり怪獣の頭部にその拳を叩きこむ。

その威力は先ほどよりも強力な物となつているようだった。

先程よりも力が強くなっているのか、

今度は怪獣の頭を完全に抑え込み

海面に頭部を叩きつける。

「そこだ！」

木場が聖魔剣を両手にそれぞれ握り、

『レイキュバス』の頭部を斬りつける。

「凍れ！」

『blizzard!』

俺は木場が斬りつけた腕に更に氷魔法を放つ。

「…やられて！」

小猫ちゃんが『ガンキュウ』の頭部に

渾身の一撃を叩きこんだ。

「先ほどのお礼です！」

ガンキュウの頭部に更に雷をぶつける。

ドオオオオオオンツツ！

小猫ちゃんの一撃が効いていたのか、

もうガンキュウの吸収能力は発動していなかった。

俺達の攻撃で既に奴の両腕はズタズタだった。

「ここでもドドメよ！」

イツセー！私とユウスケに譲渡なさい！」

俺とリアス先輩は共に魔力を高める。

「はい！ブーステッド・ギア・ギフト！」

『Transfer!!』

イツセーに譲渡され俺の魔力が膨れ上がる。

俺達が怪獣に照準を合わせていると、

巨人が最初の姿に戻り構えをとっていた。

胸の前に腕を突き出し交差し、

腕を開いていくと胸のクリスタルに光が集まっていく、

「燃えろ!!」

『Fire』

「滅びなさい!」

俺達が魔力を放つと、

巨人も腕をL字に構え、

「デエアアアア!」

巨人の腕から光線が放たれる。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオンツツ!

三人の強力な攻撃に怪獣は耐えることは出来ず爆散する。

「デュアツツ!」

合体怪獣が倒れた事を確認すると巨人は俺達に向き直り

俺達に向け頷くと空へと飛んで行ってしまった。

その時胸から光が一つ海岸の方へと向かって行った。

恐らくそれがゼノヴィアだったのだろう。

「彼は何者だったのかしら?」

リアス先輩がふと呟く。

「恐らく、異世界で地球を救っていた勇者だったんでしょう」

「そうね、助けられたは、また会えるといいわね」



遺跡のあった岸壁に1人の人影があった。

「まさか、ウルトラマンティガが遥か過去にこの世界に
来ていたとはな。思いもしなかった。

それに、コイツの出番は無かったな」

黒ローブの男は懐から

ベルトのような物を取り出ししていた。

「まあ、まだ試作段階だ、テストの相手にはあまり向かないか次の機会にするとしようか」
男はその場を後にし、
銀色のオーロラの中へと消えていった。



怪獣との戦闘も終わり俺達が

この村に滞在するのも最終日となった。

「せっかく来たのにこんな

ことになってしまつて残念だよ」

蔵さんが帰り間際に残念そうにつぶやく、

「仕方ないですよあんな怪獣

が出て結構被害出ちやいましたし」

そう、怪獣の被害は出てしまつていた。

最初の地震と攻撃の余波での津波による被害が出ていた。

「皆には復興作業まで

手伝つてもらつてもうしわけないね」

バシイッ!

ベルメールさんが俺の背中を叩く。

「申し訳ないなら叩かないでくださいよベルメールさん」

「さて奈美も体には気をつけなさいよたまには

帰つてこないとお父さんが寂しがるからさ」

「なにを言うんだノジコは」

「また、長期の休みの時に帰ってくるわ」

「またみんなで来なさい」

「ありがとうございます」

「またここには来ますよ」

「ええ、此処は貴方のもう一つの実家だと思いなさい」

「何言つてるのお母さんは!」

「ははは、なに照れてるんだい!」

「ではありがとうございます。また来ます！」

俺達は三人に別れを告げて村を後にする。

「お兄ちゃん、お姉ちゃん！」

村を出ようとしたその時俺達を呼ぶ声が聞こえた。

「おお、大吾見送りに来てくれたのか」

「兄ちゃん達には世話になったからね

今回の事で、母さんと一緒に街の復興手伝うんだ。

お姉ちゃん達に勇気もらって、考えたんだ。

お母さんとあまり会えないなら

俺から会う時間増やそうって」

「そうだな、それに今回の事件で光の巨人

にあやかった町おこしするんだってな」

大分たたくましいよな。

「うん、俺は近くで見てたからね

だいぶ力になれると思うよ」

「ああ、頑張れよ次来たときは楽しみにしているよ」

「頑張るよ！じゃあね、お兄ちゃん達！バイバーイ！」

「子供は元気だな」

「ああ、だが子供は良いものだな

なあ、ユウスケ私が初日の夜に言ったことを

覚えているか？」

「目標や夢が無いって話か？」

ゼノヴィアはこちらを

真つ直ぐ真剣な表情で見つめてくる。

「ああ、一つ決まった。

それはな、子供を作りたいんだ！」

「おお、良い目標だな。

ほな、まずはお相手を探さなきゃな」

「ふむ、なら改めて言おう。

ユウスケ私と子供を作らないか」

『ええええええええッ！』

周りのみんなが驚きで声をあげる。

「君は伝説の存在の一人だその子供なら

最強になれるはずだ私の子には強くあってほしいからな」
その条件ならイツセーも当てはまるよな。

「そういうことかよ…、あのなゼノヴィア、

俺達はまだ学生だ子供とかはとりあえず、
卒業してから考えた方がいいと

俺は思うんだ」

「そうだな、勉強と育児は両立させるものでは無いしな

その点は私は構わない。なんなら

育児は私がおこなうからな」

「ちよつとゼノヴィア、こつちに来てくれるかしら」

「奈美先輩か、分かった」

何やら部長がゼノヴィアを連れて行ってしまふ。

数分話し合ったあと二人が戻ってくる。

「ユウスケ」

「はい部長」

「今、貴方達は同棲してるのよね？」

突然奈美先輩がそんな事を聞いてくる。

「はい、そうですね」

オカルト研究部でシェアハウスって所でしょうか」

「やはり、そうね」

何か考え込んでいた奈美先輩が

意を決した勢いで話し出す。

「ユウスケ！私も貴方の家に一緒に住むわよ！

これは決定事項よ！」

はっ？

「えええええええッッ！」

俺の夏休みは驚くことに奈美先輩との

同棲でスタートを切るのであった。

第五章 冥界合宿のヘルキヤツト 第55話「夏休み」

気が付けば俺は海岸に一人立っていた。

周りは霧に包まれており遠くは見渡せない。

だが、海岸線には月が浮かび輝いている。

此処はまるで、光と闇の堺、

昼と夜が出会う場所。

そんな場所に気が付けば立っていた。

「ここは何処だ？俺はいつの間に来たんだ？」

『どうして戦わないといけななんだッ！』

突如声が聞こえたと思ったら、

俺の横に知らない男性が立っていた。

その顔はモヤがかかったように

しつかりとは見えなかった。

『私達は戦わないといけないの。』

それでようやく封印が完成する』

浅瀬にもう一人人影が現れる。

その姿はモヤにかかってみる事は出来ないが、

声から女性であることは分かる。

『なぜだ！俺は戦いたくない。』

君を失いたくない！

ようやく一緒になれたのに』

男性が女性に向かって叫ぶ。

『貴方だっってわかっているでしよう？』

今のままではいずれ封印に綻びが出る。

だから外から貴方が中から私が封じ続けなさいといけない』

『だったら、戦う必要はないだろう！』

男性は涙声で女性に訴えかけるが、

女性は聞こうとはしていなかった。

『私にも立場がある、

他の二人は戦いの果てに封印された。

なのに私が自ら封印されるのは違うの。

私は最後の長として責務を全うさせてちょうだい』

女性が槍を構える。

男性も泣きながら拳を構える。

突如霧が視界を塞ぎ晴れたかと思うと

先程の男性が、横たわる女性を抱きしめていた。

『俺はもつと君と一緒に居たかったよ』

『貴方は多くの事を教えてくれた、

多くの物を私にくれた。

たとえ生まれが違っても

通じ合う事が出来るんだって

教えてくれたから。

だからこそ貴方には生きていてほしいの

だから最後は笑って見送ってよ』

女性も涙を流しているようだ。

その体は光の粒子へと変わっていく。

『それが君の選択何だね

君にその選択させてしまった

のが悔しくてしかたない。

だけど、最後じゃないさ

俺はいつか必ず君を

取り戻す。だから、

待っていてくれ。

どれだけの時間をかけようと、

必ず迎えに行くから』

じその言葉を聞いて女性は笑顔で頷く。

『うん、待ってる。

迎えに来てねユウスケ』

ピピッ！ピピッ！
カチャッ！

「うくん、はあ、何か夢見てたような
なんだろう思い出せないな」
「なんだか、もやもやした気分だった。」

「…うにゆう、もう、
朝ですかあ…ふああ…」
俺の声に反応したのか、

アーシアが眠気まなこをさすりながら起き上がってくる。

「アーシア、まだ眠ってていいからな…」
俺はアーシアの頭を撫でる。
「…うにかいつの間に俺のベッドに。」

「あ、ユウスケしゃん…じゃあ、
お言葉に甘えてユウスケしゃんに
抱っこして眠りまふうう…」
寝ぼけているアーシアは俺に抱き着きながら
再び眠りにつこうとしている。

俺も二度寝しようかね。
うん？そう言えば何かおかしくないか？

俺はそう思い回りを見渡す。
ベッドには俺とアーシアの他に
ゼノヴィアと奈美先輩が寝ていた。
ちよつとまで！俺のベッドこんな四人寝れるほど
デカくないぞ！

つかベッドだけじゃねえ。

部屋自体が広くなってるじゃねえか。

部屋のテレビも小さい物から、

最新型の壁掛け式の薄型テレビになってやがる。

欲しかった最新のゲームも！

俺は急いで部屋を出た。

絶対おかしい！

昨日寝るまではいつも通りの部屋だったはずだ！

うお、廊下も倍の幅になってる！

上に行く階段がある。

家は二階建ての筈だろお！

三階が出来たのか！

俺は駆け下りて、豪華になった玄関を裸足で飛ば出す。

外にでるとちょうどイツセーも出てきた所だった。

俺達は外から家の全容を見上げた。

なんとということでしょう!?

二階建ての我が自宅は匠の技によつて、

「な、なんじゃこりやあああああああつ!?!」

俺達の絶叫が辺りに木霊する。

只の戸建て住宅が倍以上の敷地に加えて、

六階建ての豪邸へと変わってしまった。



「いやー、リフォームしたんだよ。

父さんも朝起きてビックリだ。

寝ている間に家つてリフォーム出来るんだな」

朝食の席。以前の五倍は広くなった食卓で

父さんが満面の笑みを浮かべながらそう言った。

食卓には俺、イツセー、家の両親、奈美先輩、

リアス先輩、アーシア、朱乃さん、ゼノヴィア

と新しい家族も含めて全員集合していた。

朝食を食べ始めてから俺達は父さんに訊いてみた。

「どうしてこうなった？」と。

同じく五倍以上広くなったキッチンから

母さんが朝食の味噌汁を運んでくる。

「リアスさんのお父様がね、

建築関連のお仕事もされているそうで、

モデルハウスの一環でここを無料で

リフォームしてくれるっておっしゃったのよ」

そんなモデルハウスの話、

あるわけねえだろうが！

これは家の両親が抜けてるのか？

それとも、魔法でそう思わされてるだけか？

まあ、これがリアス先輩のお父さんが

行ったのは理解できる。

イツセーの隣の席でリアス先輩が

平然と黙々とご飯を食べているのも

全部知っているからだろう。

というか、これはリフォームってレベルじゃないだろ。

原型何処にもないし、敷地面積が広がってるじゃねえか。

両隣のお宅が丸々無くなって、新居の敷地になってたし、

「そっういえば、お隣の鈴木さんや

田村さんは引越したそっうだ。

なんでも急に好条件の土地が入手出来たって話だ、

そっちに移り住んだそっうだぞ」

と、父さんは言う。

っ！

それって、絶対リアス先輩のお父さんに

買収されてんじゃない。

これが、悪魔の交渉術か、

恐るべしグレモリー家！

母さんが家の凶面を持ってくる。

それは部屋の割り振り表らしきものだった。

自宅に見取り図とかどうなってるねん。

「一階は客間とリビング、キッチン、和室。

二階はユウスケとアーシアちゃんと奈美さんのお部屋
向かいにイツセーとリアスさんと朱乃さんのお部屋ね
イツセーとユウスケの部屋が挟まれる形ね。

お隣同士で部屋内を行き来できる作りの様よ」

俺の部屋もイツセーの部屋も以前の四倍になってる。

家具もグレモリー家持ちで設置完了だど!?

リビングには見たこともないサイズの

巨大なテレビがあるし、天井にはシャンデリア

も吊り下がってる。本当にこれは我が家か？

「三階は私と父さんの部屋と、書斎、物置など。

四階はゼノヴィアちゃんのお部屋と

今度来る小猫ちゃんのお部屋があるわよ」

ゼノヴィアの部屋は四階なのに俺の部屋で寝てたのかい。

母さんが部屋割りの説明を続ける。

「五階と六階は全体的に空き部屋ばかりね。

今のところはゲストルームとするつもりよ。

リアスさんに聞いたら、

二階以外はどうしてくれても構わないと

言うものですか」

「はい。ここはお父様とお母さまの御家ですもの。

私や奈美やアーシア達はあくまで

ホームステイの身の上ですわ」

気品溢れる言動でリアス先輩が返す。

「屋上には空中庭園もあるんだ。

父さん、野菜作るぞ」

目を輝かせながら父さんが言う。

ああつ、夢にまで見たリフォームで麻痺しているのか、

全然疑問を持ってない。

いや、夢のリフォームでも階数までは増えないか。

「頑丈に建ててありますので、

戦争になっても崩れませんわ」

「ハハハハ、リアスさんは冗談がお上手だなあ」というリアス先輩と父さんの会話。

まあ、リアス先輩のいう事は本当だろうな。有事の際は前線基地にでもする気かね？

突然変形して、砲台が出てくるかもしれないし、もしくは、巨大ロボになるんじゃないか？

「地下もあるそうだね」

ゼノヴィアが箸に苦戦しながらも言う。

「地下!?!」

「ええ、地下三階まであるわ」

素っ頓狂な声を上げる俺とイツセーに

リアス先輩は頷いて肯定した。

この家地下まであるのか!?!

「地下一階は広いスペースのお部屋。

トレーニングルームにもできるし、

映画観賞会もできますし大浴場も設備してます。

地下二階は丸々室内プールです。

温水も可能ですわ。地下三階は書庫と倉庫です」

リアス先輩が追加の凶面を取り出しながら

説明してくれた。

家に室内プールもあるのかよ。

まるで、ホテルじゃん!!

「エレベーターもありますので、

地上六階から地下三階までスムーズに

乗り降りできます」

この家、エレベーターまであるのか、

もう驚きで言葉もないよ。

こうして、我が家は夏休みが始まって

早々に豪邸と化したのだった。

—○○●○○—

「冥界に帰る!？」

朝食が終わり、自室でまったりしていたイツセーにリアス先輩が頷く。

今はイツセーの部屋にオカルト研究部のメンバー全員と奈美先輩が集合していた。

同居のメンバーは皆、ラフな格好をしている。

木場と小猫ちゃん、ギヤスパーも先程

我が家に到着したばかりだ。

三人とも普段着だが、ギヤスパーの服装は

女物だった、女装少年だから普段もそれかよ。

しかし、これだけの人数がいても、

部屋には余裕のスペースがあつた。

俺達は皆、高級なソファーに座り込んでいた。

まあ、ギヤスパーだけは自前の段ボール箱に

入り込んでいたがな。

「夏休みだし、故郷へ帰るの。」

毎年のことなのよ。つて、どうしたの、

イツセー。涙目よ？」

リアス先輩の言葉にイツセーは涙を流していた。

「うう、部長が冥界に帰ると突然言い出したから、

俺を置いて帰っちゃうのかと思いましたがよお…」

「まったくそんなわけあるわけ無いでしょう？」

そんなことあるわけ無いでしょう？」

貴方と私はこれから百年、千年単位で付き合うのだから、

安心なさい、貴方を置いてなんかいかないわ」

と、リアス先輩はイツセーの

ほっぺをさすりながら苦笑する。

たしかにそうだな。

俺達は悪魔になったから寿命が

人のそれとはだいぶ変わったんだよな。

俺達悪魔は長い時を生きられるけど、

両親や奈美先輩達とはいずれ別れの時が来るのか。そう考えると寂しいな。

俺は奈美先輩を横目にそんな事を考えてしまった。「そういうわけでもうすぐここに居る皆で冥界に行くわ。

長期旅行の準備をしておいてちようだいね」

リアス先輩はそう言うのと紅茶を優雅に飲んでいた。って、まてよここに居る全員？

「え!?!俺達も冥界ですか!?!」

「そうよ。イツセー、貴方達は私の眷属で下僕の悪魔なのだから、主に同伴は当然。

一緒に私の故郷に行くの」

「待ってください。奈美先輩は人間ですよ

冥界に入れるんですか?」

俺の質問にリアス先輩は答えてくれる。

「ええ、冥界では修行を行う予定でね。

奈美は貴方の修行のサポートをお願いしたの。

奈美も一緒に行きたいと言ってたから

お兄様をお願いして。

特別パスを用意したのよ」

簡単に言うが、大丈夫なのか?

「貴方が思っているより

冥界に行ける人間は多いのよ。

そういえばアーシアとゼノヴィアは

初めてだったかしら?」

リアス先輩の問いにアーシアは頷く。

「は、はいー！生きているのに冥府にいくなんて

緊張します！し、死んだつもりで

行きたいと思います!」

アーシアその意気込みは意味ないんじゃない?。

「うん。冥界、地獄には前から興味あったんだ。でも、私は天国に行くため、主に仕えていた

わけなのだけれど…。悪魔になった以上天国に行けるはずもなく…。天罰として地獄に送った者達と同じ世界に足を踏み入れるとは、皮肉を感じるよ。ふふふふ、地獄か。

悪魔になった元信者にはお似合いだね」

今度はゼノヴィアが訳の分からん悩みで沈んでいる。

「八月の二十日過ぎまで残りの夏休みを

あちらで過ごします。こちらに帰ってくるのは八月の終わりになりそうね。

さつき言った通り修行やそれらの諸々の行事を冥界で行うから、そのつもりで」

リアス先輩はそう俺達に

スケジュールを申し付けてくれる。

そっか、しばらく冥界か。

前にフェニックス戦の時に行っただけだからな。ちゃんと見てなかったし、空が紫だって事しか知らないしな。

「あー、でも、俺、夏休みやりたいこと

あったんですけどねえ」

イツセーがポツリとそう漏らした。

もしかして、松田と元浜と企画してたやつか…。

「あら、イツセー。どこか行く予定でもあったの？」

リアス先輩が怪訝そうにイツセーに訊く。

「はい。海やプールに行こうかなーって」

「海は冥界に無いけれど、大きな湖ならあるわ。

それにこの間海には行ったでしょ？」

プールだって、この家や私の実家にもあるのよ？

温泉もあるし、それではダメなの？」

まあ、イツセーの目的はナンパだろうからな。

流石に皆で行ってナンパは出来ないだろう。

だが、イツセーは皆で行った方がいいという

考えになったのか妄想を膨らませているようで
顔が凄い事になっている。

「…いやらしい妄想禁止」

イツセーが小猫ちゃんに半眼で突っ込まれた。

でも、突っ込んだ後、小猫ちゃんは

深いため息をついて、何やら遠い目をしていた。

なんだか、様子が変だな。

何か悩みでもあるのかな…。

「イツセー君、想像以上にスケベな顔だったよ」

「外だったら通報物だったな」

「先輩は想像が豊かで楽しそうです…」

うらやましいなあ…」

木場が爽やかに言い。

ギヤスパーは心底羨ましそうに呟いた。

「お前らはこの夏は女の子とデートしないのかよ？」

まあ、二人は顔は良いからな。でも…。

「僕は修行があるからね」

木場はあいかわらず、ストイックだな。

「僕はいいです。…ひ、引きこもり何で、

インドア派だし、お家でネットしながら

かわいい服をきられればいいんで…」

まあ、ギヤスパーはそうだろうな。

引きこもりなんだし、しかも

ヴァンパイアだ夏の日差しの下、

プールや海なんて行ける訳ないな。

「じゃあ、イツセー。冥界で私とデートしましょう。

デートをするだけの時間があればいいのだけれど…」

リアス先輩の提案にイツセーは泣いた。

「部長オオオオッ！

行きます！全力で付いていきます！」

「なら、ユウスケは私とデートね。」

冥界なんてめったにいけないでしょうから
観光しましょ」

奈美先輩はウインクしながら俺にそう告げる、

「はい！一緒に観光しましょー！」

「俺も冥界に行くぜ」

『ッ!？』

いつの間にか、席の一角にイケメンの

黒髪男性が座っていた。

アザゼル先生だ。

全員が先生の突然の登場に面を食らっていた。

悪魔と敵対していた墮天使の総督で、

先日の悪魔、天使、墮天使の和平会談に出席し、

何故か駒王学園に残り、教師を始めた。

しかもオカルト研究部の顧問にもなってる。

部下のロビンさんも先生となり、

俺達の新聞部の顧問となった。

ぶっちゃけ何を考えてるか分からないのが

不気味に思える。

それに今、何処から入ってきた？

扉が開いた事に気づきも出来ないなんてな。

だが、リアス先輩や木場さえ気づけないなんてな。

「ど、どこから入ってきたの？」

リアス先輩が目をパチクリさせながら先生に訊く。

「うん？普通に玄関からだぜ？」

平然と先生は答える。

「…気配すら感じませんでした」

木場が気持ち直を正直に答えていた。

「そりゃ修行不足だな。俺は普通に来たただけだ。

それより冥界に帰るんだろう？なら、

俺とロビンも行くぜ。俺達はお前らの『先生』だからな」

そうこの人は学校だけでなく戦闘面でも「先生」役を

引き受けた。豊富な神器の知識と経験から、今後の戦闘スタイルまで教えてくれるようだ。

まだ少ししか教えて貰えてないけど、俺も含め、イツセー達神器所有者は何かを掴んでいる様子だった。

この人は力の使い方や導き方、教え方がうまかった。

研究職だからか人に説明するのがすごい達人だった。

先生は懐からメモ帳を取り出すと開きながら読み上げる。

「冥界でのスケジュールは…リアスの里帰りと、

現当主に眷属悪魔の紹介。あと、

例の新鋭若手悪魔達の会合。

それとあつちでお前らの修行だ。

俺は主に修行に付き合うわけだがな。

お前らがグレモリー家にいる間、

俺はサーゼクス達と会合か。

つたく、面倒くさいもんだ」

ため息を吐く先生。マジでめんどくさそうだな。

いち組織のトップがそれはどうなんだと思うが、

この人部下からの支持は高いからな。

たまに名も知らない堕天使が

先生に会いに来る事があった。

なんでも「秘書にしてください！」とか

「人間界にいる間、身の回りの世話を！」とか

「身辺警備は絶対に必要です！」って訪問してくるんだ。

皆、アザゼル先生がこの町にいるのが心配らしい。

訪問してきた堕天使の中には上の位の者もいたって話だ。

それら全部を「いいから帰れ。命令だ」

の一言で送り返している。

それほどの堕天使が俺達に力を教えてくれる

というのだから、幸運だと思う。

「この機会にもっと強くなりたいたいからな。

少しでも東城の強さに近づかないと、

大切な物を無くさないようにな。

「ではアザゼル、先生はあちらまでは同行するのね？

行き予約はこちらでしておいていいのかしら？」

リアス先輩の問いに先生は頷く。

「ああ、宜しく頼む。悪魔のルートで

冥界入りするのは初めてだ。楽しみだぜ。

いつものは堕天使のルートだからな」

さて、冥界ってどうやって行くのだろうか。

やっぱり魔方陣？それとも特殊な方法かね。

冥界は悪魔の世界と堕天使の世界で

両断されているんだよな。

今は和平で二つの世界の垣根がなくなって

交流を始めたらしいけれど…。

おれはそんな事を考えながら

旅行の準備を進めるのだった。

第56話 「入国」

旅立ちの日。

俺達是最寄りの駅にやってきていた。

皆、服装は駒王学園の制服姿。

冥界入りするなら、

これが一番の正装だと

リアス先輩に言われたからだ、

冥界に行くのに駅に用事があるのか？

俺は疑問に思いながら、

リアス先輩についてきたが、

当のリアス先輩と朱乃さんはツカツカと

駅に設置されているエレベーターの方へ向かう。

確か六人程しか乗れなかったのは覚えているが、

リアス先輩と朱乃さんが先に入ると言う。

「じゃあ、まずはイッセーとユウスケと

アーシアとゼノヴィア来てちょうだい。

先に降りるわ」

「降りる？」

リアス先輩の言葉を怪訝に思う俺達。

なぜなら、この駅に地下はないからだ、

「ほら、目をパチクリしてないで入りなさい」

リアス先輩は苦笑しながら手招きしてくる。

俺達新人悪魔組はお互い顔を見合わせ

ながらもリアス先輩に応じた。

「慣れてる祐斗達は後から奈美達と

一緒に来てちょうだいね」

「はい、部長」

と、木場がリアス先輩に言うのと

エレベーターの扉は閉まる。

皆、大きな荷物を持っているものだから、

結構中は狭い。階層表示はやはり

「1」と「2」しかなかった。すると、

リアス先輩がポケットからカードらしきものを
取り出すと電子パネルに向ける。

ピッ。

何かの電子音。

何かに反応したのか？すると。

ガクン。

下へ降りる感覚が俺を襲う！

下があるのか!?

驚きを隠せない俺とイツセーとアーシア！

ゼノヴィアだけは反応薄で首を傾げているだけだ。

リアス先輩と朱乃さんは俺達三人が

驚いている様を見てクスクスと小さく笑っていた。

「この駅の地下にね、秘密の階層があるの」

「部長、俺、この町で育ちましたけど、

そんなの初めて知りましたよ!」

「それはそうよ。悪魔専用のルートだもの。

普通の人間は一生たどりつけないわ。

こんな風はこの町には悪魔専用の地域が

結構隠れているのよ?」

この町には俺の知らない部分が

まだあるのかと驚愕した。

それもそうか、

悪魔関連の物が一般人に

知られるわけにはいかないか。

こんど、他の施設なんかも教えてもらうか、

下がる事一分程、ついにエレベーターは停止した。

扉が開き、「さあ、どうぞ」

とリアス先輩に促されて、

イツセーに続いて出た俺の視界に映ったのは

だだっ広い人工的な空間だった、
地下の大空洞か!?よく見れば、
その造りは駅のホームに似ていた。
だが、模様や造りが人間界に
あるそれと少し違っていた。
線路もあるからやはり駅なのだろうか。
少し待っていると、エレベーターから
木場や奈美先輩達がやってきた。

「全員揃ったところで、三番ホームまで歩くわよ」
リアス先輩と朱乃さん先輩の元、
俺達は歩き出した。しかし、広い空間だな。
俺達が普段使っている上の駅と比べても
何倍も規模があると思うな。

天井も大分高いな。
これだけ広いのに俺達意外に人の気配が無い。
空間を照らす壁の灯りは魔力的な
怪しい輝きを放っている。
通路を進んでいくと俺達の
目の前に列車らしきものが現れた。
それは俺達の知る列車とは
違い独特なフォルムをしていた。
鋭角な見た目で、悪魔の紋様が多く刻まれている。
よく見ればそれはグレモリーの紋様だった。
それにサーゼクス様の紋様もあった。
これは、もしかして。

「グレモリー家所有の列車よ」
リアス先輩が堂々と答えてくれる。
凄いな。

リアス先輩の御家は列車も所有してるのか、
プシュー。

俺達が驚いている間にも列車の自動ドアが開く。

リアス先輩先導の元、俺達は列車の中へと足を踏み入れたのだった。

リイイイイイイイイイイイイイイイ。

発車の汽笛が鳴らされ、列車は動き出す。

俺達は列車の中央に座ることになった。

リアス先輩は列車の一番前の車両で、

眷属は中央からうしろの車両になるそうだ。

専用の車両だから細かいしきたりがあるのか。

対面する座席で、俺とアーシアが一緒に座り、

対面の席に奈美先輩とゼノヴィアが座っていた。

隣の席にはイツセーと朱乃さん、

ギヤスパーと小猫ちゃんが座っていた。

その後ろの席に木場とロビン先生が座っており、

更に端っこでアザゼル先生が既に眠っていた。

走り出して数分。列車は暗がりの道を進む。

この列車、動力は冥界にある独特の燃料らしい。

俺もまだ冥界について知らない事が多いな。

「どのくらいで着くんですか？」

イツセーが朱乃さんに訊く。

「一時間程で着きますわ。この列車は次元の壁を

正式な方法で通過して冥界にたどり着けるように

なってますから」

「魔方陣でジャンプして冥界入りだとしてつきり思っていました」

俺は疑問を朱乃さんに訊ねる。

「そうよね、まさか列車で別の世界に行くなんて

思ってもみなかったわ」

俺の質問に奈美先輩が同意する。

「通常はそれでもいいのですけれど、

今回は奈美もいるし、イツセー君達

新眷属の悪魔は正式なルートで一度入国

しないと違法入国として罰せられるのです。
だから、イツセー君達はちゃんと正式な
入国手続きを済ませないといけませんわ」

「えっ!?マジですか!?俺、以前、魔方阵から
ジャンプして部長の婚約パーティに乗り込んだじゃいましたけど!？」

たしかに、俺とイツセーは以前
グレイフィアさんに貰った

転移魔方阵で冥界に行っているんだ。

まさか到着と同時に牢屋に直行とかならんよな。
俺達の心配をよそに朱乃さんは小さく微笑む。

「あれはサーゼクス様の裏技魔方阵によって、
転移したものですから、特別みたいですよ？
もちろん、二度は無理ですけれど」

「そ、そうなんですか…。」

あっち行ったら即監獄行きは勘弁ですよ…」

俺達は少し安堵した。

俺達はまだ悪魔をのルールに疎いからな、
下手したら俺達よりアジアやゼノヴィア
のほうが詳しいからな。

「特例ですから、裏技魔方阵の件は大丈夫ですわ
けれど、主への性的接触で罰せられるかもしれせんわね」
と、朱乃さんが頬に手を当て、

うふふと笑いながら言う。

「なんですと!？」

それじゃあ、イツセーはアウトだな。

すると、朱乃さんがイツセーの手を取り
自身の体に誘導する。

あれ、いつもならこのタイミングで

小猫ちゃんから鋭い突っ込みが来るはずだが…。
視線をそちらへ送ってみれば、

窓の方を見ている小猫ちゃんの姿。

横であれだけ騒いでるのに無視か！
いつもの小猫ちゃんらしくないな。
隣のギヤスパーも話しかけづらそうだと、そこへ。

「まったく、油断も隙も無いわね朱乃。
だいたい、主と下僕のスキンシップ
はごく自然なことよ」

怒気を含んだ声が響く。

声の方を向けば、紅いオーラを全身から放っている
リアス先輩の姿が、大分怒っているようだな。

あれ、確かリアス先輩は先頭車両に居るはずでは、
「主から奪うっていうのも燃えますわね」

挑戦的な視線で朱乃さんはリアス先輩へ微笑む。

「あ、朱乃、いい加減に」

「リアス姫。下僕とのコミュニケーションも
よろしいですが、例の手続きはよろしいですか？」

リアス先輩の怒りの声を遮って、
第三者がひよっこりと現れた。初老の男性だ。
服装からして、車掌だろうか？

「ゴ、ゴメンなさい…」

「ホッホッホッ。あの小さな姫が男女の話とは。
長生きはするものですか」

男性の楽しそうな笑いに
リアス先輩は顔を真っ赤にしていた。

男性は改めて帽子を取ると、俺達に頭を下げる。
「初めまして、姫の新たな眷属悪魔の皆さん。

私はこのグレモリー専用列車の車掌をしている
レイナルドと申します。以後、お見知りおきを」
丁寧な挨拶に俺達も立ち上がり、一礼した。

「はい、こちらこそ、初めまして！

部長、リアス・グレモリー様の『兵士』、

兵藤一誠です！宜しくお願いします！」

「同じく『兵士』の兵藤祐介です！」

宜しくお願い致します！」

「アーシア・アルジエントです！」

『僧侶』です！よろしくお願いします！」

「ゼノヴィアです。『騎士』、

今後もどうぞお願いします」

新人悪魔全員が挨拶した。

「今回同行することになった。

リアスさんの同級生の大空奈美です」

「同じく同行者のニコ・ロビンです」

全員が挨拶を済ませると車掌さん

レイナルドさんは何やら特殊な機器を取り出し、

モニターらしきもので俺達を捉える。

「あ、あの…？」

反応に困る俺達、リアス先輩や

朱乃さんは知っている様子だ。

「これは貴方方を確認、

照合する悪魔世界の機械です。

この列車は正式に冥界へ入国する

重要かつ厳重を要する

移動手段です。もし、偽りがあった場合、

大変なことになりますので。

今のご時世、列車を占拠されたら大変なのです」

なるほど、あの機械で俺達が

本物かどうか確認しているのか。

リアス先輩が微笑みながら告げる。

「貴方達の登録は駒を与え、

転生した時冥界にデータとして

記載されたわ。だからそれを

その機械で照合させるのよ。

奈美やアザゼル達に関しては
事前にデータを送っておいたは
問題ないわ。皆、本物だから」
俺の前にレイナルドさんが来て、「ピコーン」と
軽快な音が鳴って、俺達の照合はパスされた。

「姫、これで照合と同時に」

ニユーフェイスの皆さんの

入国手続きも済みました。

あとは到着予定駅までゆるりと

お休みできますぞ。寝台車両やお食事を取れる

ところもありますので目的地までご利用ください」

レイナルドさんはニッコリと微笑む。

「ありがとう、レイナルド。」

あとはアザゼルかしら？」

リアス先輩が先生のほうに視線を向けるが、

先生はぐっすり眠りこけていた。

「…よくもまあ、ついこの間まで敵対していた

種族の移動列車で眠れるものね」

リアス先輩はあきれ顔だったけど、少し笑ってた。

「ホッホッホッ。墮天使の総督様は平和ですな」

レイナルドさんも愉快そうに笑っている。

本当、剛胆というか、大胆不敵だな。

「ふふふ、総督さんは勝手にスキャンしてくれて
構わないと思うわ」

ロビン先生の許可を得て、

レイナルドさんが寝ている

アザゼル先生の照合を行い。

全員無事に入国手続きを済ませるのだった。

発車から四十分ほど過ぎた頃、
トランプなどで時間を潰していた俺達に
アナウンスが聞こえてくる。

『もうすぐ次元の壁を突破します。
もうすぐ次元の壁を突破します』

レイナルドさんの声だ。

「外を見てごらんなさい」

と、リアス先輩は俺とイツセー、
アーシア、ゼノヴィアに言う。

本来、上級悪魔で主たるリアス先輩は
前方の車両にいなきやだめらしいが、

一人では寂しいらしく俺達の車両で過ごしていた。

俺達はリアス先輩に言われるまま、

アーシアと一緒に窓に張り付いた。

景色が暗がり一色から変わり、風景が出現する！

「山だ！木もある！ハハハハッ！

すげえ！すげえええっ！」

イツセーは大声ではしゃいでいた。

隣のアーシアも「すごいすごいです！」

と興奮気味だった！

そう言う俺も目の前の景色に

驚いて声も出なかった。

そこには俺の知らない

幻想的な世界が広がっていた。

「もう窓を開けてもいいわよ」

リアス先輩の許しも出て、俺は窓を上げた。

すると、風が入り込んでくる。

前の時にも感じたがどこか人間界とは違っていた。
ぬるりとした感触というか、独特なものを感じる。

だが、外はちよūdい気温だと思う。

寒くもなく、暑くもなく。

窓から後方を見てみると、黒い穴らしきものから列車が出てきたようだった。

あれが、次元のトンネルか!?

何はともあれ俺達は冥界入りをしたんだな。

席から改めて冥界の風景を見る。

山もあって、川もある。

木々も生い茂り、森だって存在していた。

町も見えるあそこで悪魔が暮らしているのか。

よく考えれば海外旅行もした事ないしな。

初めての異文化が悪魔とは

人生は何があるか分からんな。

「ここはすでにグレモリー領よ」

リアス先輩が自慢気に口にする。

「じゃあ、今走ってるこの線路も含めて

全部部長の御家の土地ですか!？」

驚くイツセーの問いにリアス先輩は頷いた。

じゃあ、さっきの町の住民は領民かよ。

「グレモリーの領土って

どれぐらいあるんですか？」

イツセーの質問だ。

確かに俺も気になる東京都

と同じくらいの広さかね。

木場が席の上からひよっこり

顔を出して応えてくれる。

「確か、日本で言う所の

本州丸々ぐらいだったかな」

………は?」

俺は木場の答えに一瞬耳を疑った。

予想の遥か上をいったな。

「ほ、本州うううう!？」

大声を張り上げるイツセー。

リアス先輩も木場も領いていた。

「冥界は人間界、地球と

同程度の面積があるけれど、人間界ほど入口はないわ。

悪魔と墮天使、それ以外の種族を

含めてもそれほど多くもないし。

それと海もないからさらに土地が広いのよ」

リアス先輩がそう説明してくれた。

グレモリー領は日本とほぼ同じ大きさか、

そりゃ、姫なんて呼ばれるか、

「本州ぐらいと言ってもほとんど手付かずなのよ？

ほぼ森林と山ばかりよ」

広さだけあって管理はされてないって事か？

イツセーはまだ解ってないようだ。

隣のアーシアも「???」状態だった。

ゼノヴィアに至っては考えるのを止めたのか、

木場と冥界の刀剣について話し始めたぐらいだ。

リアス先輩は何かを思い出したのか、

ポンと手を叩く。

「そうだわ。イツセー、ユウスケ、アーシア、

ゼノヴィア。あとで貴方達に

領土の一部を与えるから、

欲しい所を言っただけでいいね」

「りよ、領土、もらえるんですか!？」

「貴方達は次期党首の眷属悪魔ですもの。

グレモリー眷属として領土に住むことが

許されるわ。朱乃や祐斗、小猫、ギヤスパードって

自分の敷地を領土内に持っているのよ」

リアス先輩は魔力で「ポン！」と宙に地図を

出現させると俺達に広げて見せてくれる。

知らない地形だが、どうやら、

グレモリー領の地図らしい。

リアス先輩はニツコリ微笑んで言った。

「赤い所は既に手が入っている土地だから

ダメだけれど、それ以外の所はOKよ。

さあ、好きな土地を指で刺してちょうだい。

貴方達にあげるわ」

俺もついに領土持ちかよ。

父さん、母さん俺は見知らぬ土地で

凄い事になってるよ。

第57話「実家」

列車はそれからも十数分間、冥界を進んでいく。

結局、俺は自分の敷地に山岳地帯を選んだ。

そこは調査もされていないが、

鉦山などもあるかもしれないらしい、

一部には溪谷もあり俺は気に入ったが、

今は何かすることは出来ないからただ

選んだだけだな。

そこへアナウンスが再び流れる。

『まもなくグレモリー本邸前。皆さま、

ご購入ありがとうございます』

ついに到着か！

俺は窓から前方を見て見ると、

駅と思われる場所には凄い人混みが！

何かのイベントか!?

だが、よく見ればそれが

兵装の一団である事が分かる。

もしかして、グレモリー家の兵隊か？

「イツセー、ユウスケ、もうすぐ着くわ。

窓を閉めるわよ」

「は、はい、部長」

「了解しました」

リアス先輩に促され、

俺達は降りる準備をしだす。

しだいに列車の速度は緩やかになり、

徐々に停止させていく。

ガクン。

静かな停止のあと、リアス先輩先導の元

俺達は空いたドアから降車していく。

けど、アザゼル先生とロビン先生は降りる様子を見せなかった。

「あれ、先生達は降りないんですか」

「ああ、俺はこのままグレモリー領を抜けて、魔王領の方へ行く予定だ。

サーゼクス達と会談があるからな。

いわゆる『お呼ばれ』だ。

終わったらグレモリーの本邸に向かうから

先に行つて挨拶済ませて来い」

「私は総督さんに付いていくわ。

一応彼の部下だからね」

アザゼル先生は手を振つて、

ロビン先生は微笑みながら説明してくれる。

そーいやアザゼル先生も組織のトップだしな、

ロビン先生も側近だからな、

付いていけないとだめだろうな。

「じゃあ、先生あとで」

「お兄様に宜しくね、アザゼル」

イツセーとリアス先輩に

手を振つて応えるアザゼル。

「じゃあ、ロビン先生、またあとで」

「待つてますからね」

「ええ、終わったら直ぐ向かうわ」

俺と奈美先輩に対してロビン先生は笑顔で応える。

改めて先生達を抜かしたメンバーで

駅のホームに降りた瞬間。

『リアスお嬢様、おかえりなさいませっ！』

パンパンパンパン！

花火が上がリ、兵隊達が銃を空に向けて放ち、

楽隊らしき人たちが一斉に音を奏で始める！

空を謎の生物に騎乗した兵士達が飛び、旗を振っていた。

俺とアーシアは突然の

出来事にどうしていいか分からず

ただただ身を寄せ合っていた。

木場達は慣れた者の様だが、

所見の俺達にしてみれば驚きの状況だぞ、

イツセーは突然の事に放心しており、

ゼノヴィアは目をパチパチさせているだけだった。

「ヒイヒイ…。人がいっぱい…」

ギヤスパーに至っては

あまりの人の多さにビビって、

イツセーの背中に隠れていた。

よく見れば執事やメイドの姿も多い。

リアス先輩がそちらに近づくと一斉に頭を下げて、

『リアスお嬢様、お帰りなさいませ』

迎え入れてくれる。

「ありがとう、皆。ただいま。帰ってきたわ」

リアス先輩も笑顔でそれに返していた。

それを見て、執事や

メイドさんたちも笑顔を浮かべる。

そこへ見知った顔の女性が一步出てきた。

銀髪のメイドさん、グレイフィアさんだ！

「お嬢様、お帰りなさいませ。」

お早にお着きでしたね。道中、

ご無事で何よりです。

さあ、眷属の皆さまも馬車へ

お乗りください。

本邸までこれで移動しますので」

グレイフィアさんに誘導されて、

豪華絢爛な馬車の元へ。

馬も普通の馬ではなく

普通の馬より大きく眼光も鋭かった。

これが冥界の馬か！まるで魔物だな。
そういや、俺達の荷物はまだ列車だが、
と、列車の方へ視線を向けると、
メイドさん達が俺達の荷物を列車から
運び出した所だった。

さすが本場のメイドさんだな。

「私は下僕たちと行くわ。」

イツセー達は初めてで不安そうだから」

「わかりました。何台かご用意しましたので、

ご自由にお乗りください」

グレイフィアさんはリアス先輩の

意見を快諾してくれた。

一番前の馬車にリアス先輩とイツセー、

俺、アーシア、奈美先輩、グレイフィアさんが

乗り込んだ。次の馬車に残ったメンバーが乗った。

俺達が乗り込むと馬車は蹄の音を鳴らしながら

進みだした。

おお、初めて馬車に乗ったが、

意外と快適なんだな。

風景を見れば、綺麗に整備された道と

キレイに選定された木々が

真っ直ぐ伸びていた。

その道の先にある物に俺は目を疑った。

「ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、部長

…あ、あの巨大なお城は…?」

イツセーは驚きながらも巨大な城らしきものに

窓から指を指している。

「私の御家の一つで本邸なの」

ニッコリ微笑むリアス先輩は何気に

「御家のひとつ」と言っていた。

俺達は凄い人の眷属になったのではなからうか？

外を見れば美しい花が咲き誇り、
見事な造形の噴水から水が噴きあがり、
色とりどりの鳥が飛び回っている。
グレモリー艇の庭を馬車が進んでいた。

「着いたようね」

リアス先輩がそうつぶやくと、
馬車のドアが開かれた。

執事らしき方が会釈をしてくれる。

リアス先輩が先に降りて、後から俺達も続く。

二台目の馬車も到着して、

木場達も降りてきていた。

両脇にメイドと執事が整列して、道を作っていた。

赤いカーペットが巨大な城の方に伸びており、

大きい城門が音を立てて開かれていく。

「お嬢様、そして眷属の皆さま。」

どうぞ、お進み下さい」

グレイフィアさんが会釈をして、

俺達を促してくれる。

「さあ、行くわよ」

リアス先輩がカーペットの上を

歩き出そうとした時だった。

メイドの列から小さな人影が飛び出し、

リアス先輩の方へ駆け込んでいく。

「リアスお姉さま！お帰りなさい！」

紅髪の可愛らしい少年が

リアス先輩に抱き着いていた。

同じ紅髪だし、リアス先輩の弟かな？

「ミリキヤス！ただいま。大きくなったわね」

リアス先輩もその少年を

愛おしそうに抱きしめていた。

「あ、あの、部長。この子は？」

イツセーが聴くと、リアス先輩はその少年を改めて紹介してくれる。

「この子はミリキヤス・グレモリー。お兄様サーゼクス・ルシファア様の子供なの。」

私の甥ということになるわね」

サーゼクス様のお子様！

つまりは魔王の息子か！

正真正銘の王子様じゃないか。

「ほら、ミリキヤス。あいさつをして。」

この子達は私の新しい眷属なのよ」

「はい。ミリキヤス・グレモリーです。」

初めまして」

「こ、これは丁寧なごあいさつをいただきましたよ！

お。俺…いや、僕は兵藤一誠です！」

「自分は兵藤祐介です」

緊張してテンパっているイツセーを横目に

俺はミリキヤス様に挨拶をする。

イツセーの様子にリアス先輩もおかしそうに

小さく笑いながら言う。

「魔王の名は継承した本人のみしか

名乗れないから、この子はお兄様の

子でもグレモリー家なの。」

私の次の当主候補でもあるのよ」

なるほど、確かに長男の実子だもんな。

サーゼクス様は家を出ているが、

ミリキヤス様は大切な

グレモリー家の跡取りだもんな。

ミリキヤス様がいるなら、

サーゼクス様の奥様にも会えるのかな？

どんな人なのだろうかね。

「さあ、屋敷へ入りましょう」

リアス先輩はミリキャス様と手を繋いで門の方へ進みだす。

ズンズン進んでいく二人に俺達は置いていかれないようについていくだけで必死だった。

俺達は巨大な門を潜り、中を進む。

次々と城の中の門も開門されていく。

ようやく玄関ホールに到着した。

そこは、玄関と言うには広すぎた、

二階に通じる階段があり、高い天井に

巨大なシャンデリアが吊り下がっていた。

学校のグラウンドかと思える広さに

俺達は言葉が出なかった。

「お嬢様、さっそく皆さまをお部屋へ

お通ししたいと思うのですが」

グレイフィアさんが手を挙げる

何人かのメイドさんが集まってきた。

「そうね、私もお父様とお母様に

帰国のあいさつをしないといけないし」

リアス先輩はこの後の予定を考え中のようだ。

「旦那様は現在外出中です。

夕刻までにおかえりになる予定です。

夕餉の席で皆さまと会食をしながら、

御顔合わせをされたいと

おっしゃられておりました」

「そう、わかったわ、グレイフィア。

それでは、一度皆はそれぞれの部屋で

休んでもらおうかしら。

荷物はすでに運んでいるわね？」

「はい。お部屋の方は今すぐお使いになられても問題ございません」

ふう、やっと休めるのか、
ずっと移動続きで正直疲れたな。
自分の家も豪邸になったと思っただが、
冥界にやってきてからスケールの
大きさに驚いてばかりだったからな。
俺だけでなくイツセーやアーシア、
奈美先輩までも疲れている様子だ。

「あら、リアス。帰ってきたのね」

その時、上から女性の声が聞こえてきた。
階段の上から降りてきたのはドレスを着た
俺達と同じ年ぐらいの美少女だった。

：あれ、リアス先輩に雰囲気似ているな。
髪の色が亜麻色なのと、

リアス先輩に比べて目つきが鋭いぐらい
でほぼ似ているな。

リアス先輩のお姉さんだろうか？

だけど、グレモリー家って紅髪が
特徴だったような…。

リアス先輩はその女性を確認するなり微笑んだ。

「お母様。ただいま帰りましたわ」

……………はあ！お母様!?

「お、お、お母さまあああああああ!?

だって、どう見ても部長とあまり歳の
変わらない女の子じゃないですか!」

イツセーが驚き過ぎて大声を出している。

だが、気持ちは分かる二人が並ぶと

どお見ても姉妹にしか見えない!

「あら、女の子なんてうれしいことを

おっしゃいますのね」

リアス先輩のお母様は頬に手を当てて微笑む。

「悪魔は歳をとれば魔力で

見た目を自由に出来るのよ。

お母様はいつも今の私ぐらいの年恰好なお姿で過ごされているの」

なるほど、悪魔でも女性性は

若い姿であろうというのは変わらないのか。

横を見るとイツセーが

マジマジとお母様を見つめており、

その様子にリアス先輩が

拗ねてイツセーの頬をつねっていた。

「…私のお母様に熱い視線を送っても

何も出ないわよ?」

「あら、リアス。その方が兵藤一誠君ね?」

「お、俺、僕のことをご存じなんですか?」

イツセーの問いにお母様は頷く。

「ええ、娘の婚約パーティーに顔ぐらい

覗かせますわ、母親ですもの」

確かに、その通りだ。

あの時思いつきり名乗った上に

全部ぶち壊してリアス先輩を連れ去ったからな。

これはお叱り受けるのかな…?

あの場で暴れた俺も同罪だしな。

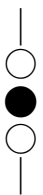
ビビる俺達に、リアス先輩のお母様

はクスツと笑う。

「初めまして、私はリアスの母、

ヴェネラナ・グレモリーですわ。

よろしくね」



玄関ホールでの出会いから数時間後、

俺達はダイニングルームにいた。

絶対に食いきれないで

あろう量の食事が並んでおり、

冥界でのマナーが分からず

何処から手を付けたもんか

悩むところだ、どれもすごいおいしそうだな。

席に座るのは主であるリアス先輩

と眷属悪魔に奈美先輩。

そして、リアス先輩のお父様とお母様、

あとミリキヤス様。

太陽も月のない冥界にも『夜』があるらしい。

空も暗くなっており、

見上げれば疑似的な月が浮かんでいる。

本物ではなく魔力で再現しているだけらしい。

冥界の夜の闇も同じく再現という話だ。

以前来たときは夜に来たと

思っていたが実際には昼で、

冥界の時間の概念は人間界に合わせてあるようだ。

冥界には独自の時間の流れがあったようだが、

転生悪魔や人間界で暮らす悪魔の為に

魔王様が特殊な術法で調整しているようだ。

「遠慮なく楽しんでくれたまえ」

リアス先輩のお父様の一言で会食は始まった。

アニメでしか見た事ないような

デカイ横長のテーブル。

天井には豪華なシャンデリア。

座っている椅子も装飾が施された物。

周りの全てが見慣れないものばかりだった。

早くも自宅が恋しく思える。

先ほど通された部屋も俺一人が止まるには

大きすぎる部屋で、生活の為の必需品が

全てそろっていた。

風呂、トイレ、冷蔵庫、テレビ、キッチン、
寝室とリビングにクローゼットがあり、
もはや一人暮らしの家のようだった。

部屋に通されてすぐにアジアとゼノヴィア、
奈美先輩が同時に俺の所に来たのが印象的だった。

「あまりにも豪華すぎて一人じゃ落ち着かないわ！」

ユウスケの所にお邪魔するわよ」

「はうううひ、一人じゃ、

あんなに広い御部屋は無理ですうう！」

「…落ち着かないんだ。悪いけれど、

ユウスケの部屋でもいいかな？

アジアも来ていると思うしね」

俺と同じく庶民の奈美先輩と

教会で質素な生活をしていた二人には

あの部屋の広さは衝撃的だったようで、

落ち着かないという理由で荷物を持って

俺の部屋に引越してきた。

その後、グレイフィアさんの計らいで

俺達は四人で部屋を使う事になった。

実際、一人暮らしでも手に余る広さだ

ルームシェアになれば丁度いいだろう。

話しは夕餉の席に戻る。

マナーに関しては人間界と同じだったようで、

ある程度は問題なかったが、

緊張であまり味が分からなかった。

もつたいない事をしているなど感じるな。

周りを見ればイツセーは

緊張で料理に手を付けられておらずいた。

いや、あれはマナーが分からないから

手を付けられていないだけか、

あれだけマナーは勉強しとけと言ったのに…。

木場や朱乃さんは優雅に食べているな。

こういう場も慣れてるんだらうな。

奈美先輩も問題ないようだ。

流石としか言えないな。

アーシアとゼノヴィアも苦戦はしているが、
様にはなっているな。

ギヤスパーに至っては

縮こまって涙目で食べている。

これだけ人が多いと引きこもりにはキツイか。

そんな中、小猫ちゃんは

食事に手を付けてなかった。

いつもなら人一倍食欲に忠実で

モリモリ食べてるつてのに。

そんな彼女がこのごちそうを前に

手を付けないなんて…。

この間から様子が変わるな。

ふと、目が合ったがすぐにそらされてしまう。

そういえば、アザゼル先生とロビン先生は

食事に間に合わなかった。

どうやら会談が長引いているようだな。

「うむ、リアスの眷属諸君、

ここを我が家と思ってくれればいい。

冥界に来たばかりで勝手がわからないだろう。

欲しい物があったら、遠慮なくメイドに

言ってくれたまえ。直ぐに用意しよう」

朗らかにおっしゃるリアス先輩のお父様。

いや、これ以上欲しい物なんてないだろう

全てそろってるじゃん。

「ところで「誠君、祐介君」

リアス先輩のお父様が俺達に顔を向ける。

突然のことで驚く俺達

何を聞かれるんだ？

「は、はい！」

「どうしましたか？」

「ご両親はお変わりないかな？」

「は、はい！二人とも元気です！」

ぶ、部長：リアス様の故郷に

行くと言ったらお土産を期待するほどです！

あ、あんなに立派な家にリフォームしていただいた

上でそんなこと言ってくるなんて、

本当、わがままな顔で：アハハ」

イツセーは冗談交じりに言うが、

「おい、イツセー！余計なことまで

話すなよ！」

「ふむ。お土産か。なるほど」

リアス先輩のお父様は手元の鈴を

チリンチリンと鳴らす。

するとすぐに執事らしい人が

近づいていく。

「旦那様、御用でしょうか？」

「うむ。二人のご両親宛に城を一つ用意しろ」

はあッ！城おおお！お土産の範疇から

逸脱してるだろ！

それとも、富豪なりのジョークなのか!?

「はっ。西洋式でしょうか？」

それとも和式でしょうか？」

執事さんも普通に答えている。

つてことは冥界では土産で

城をポンポン渡してるのか!?

「悩むところだな」

「ちよっ、ちよっと待ってください！

そ、そこまでのお土産はちよ、ちよっ

スケール違いというか！」

「そ、そう、家の両親へのお土産にお、お城なんて！もったいないですよ！」

俺達は急いでリアス先輩のお父様を止めようとした。

これが異文化かよ！
ついて行けないな。

「あなた、日本は領土が狭いのですから、平民が城を持つなんて不可能ですわ」
リアス先輩のお母様の一声。

助け舟だ、ありがたい！
そう家は平民です！

「なんと。確かに日本は狭かったな。

ふーむ、城がダメならば

何が良いのだろうか…」

「お父様。あまりそういう気遣いは逆にあちらへ迷惑を掛けますわ。

二人のご両親は物欲の強い方々ではありませんし」

リアス先輩は家の両親の事を良く知っているからな。

リアス先輩のお父様も「なるほど」と深く頷いていた。良かった。

城なんて貰っても目立つだけだからな。

「兵藤一誠君」

「は、はい！」

リアス先輩のお父様やけにイツセーに興味あるんだな

赤龍帝に興味でもあるのかな？

「今日から、私の事を

お義父さんと呼んでくれても
かまわない」

予想外の言葉だな。

「お、お父さんですか…?」

そ、そんな、恐れ多いですよ!」

イツセーっが両手を振って、

遠慮の意志を見せた。

「あなた、性急ですわ。

まずは順序というものがあるでしょう?」

リアス先輩のお母様が

夫をたしなめる。

「う、うむ。しかしだな。

紅と赤なのだ。めでたいではないか」

「貴方、浮かれるのはまだ早い、

ということですよ」

「そうだな。どうも私は

急ぎ過ぎるきらいがあるようだ」

リアス先輩のお父様は深く息を吐かれる。

どうやら、奥さんの尻に敷かれているようだな

発言的にリアス先輩のお母様の方が

家では強いようだな。

当のリアス先輩は恥ずかしそうにしている、

食も進んでいないようだ。

「兵藤一誠さん。

一誠さんと呼んでもよろしいかしら?」

リアス先輩のお母様がそう訊いている。

「は、はい!もちろんです!」

「しばらくはこちらに滞在するのでしょうか?」

「はい。部長…リアス様がこちらに居る間はいます

…けど、それが何か?」

「そう。ちようどいいわ。貴方には

紳士的な振る舞いも身につけて
もらわないといけませんから。
少しこちらでマナーのお勉強を
してもらいます」

おお、それは良い、
あいつには一番必要な教育だ！
バン！

テーブルを叩く音が響く！
見ればリアス先輩がその場で
立ち上がっていた。

「お父様！お母様！先程から
黙って聞いていれば、

私を置いて話を進めるなんて
どういうことなのでしょうか!？」

その一言にリアス先輩のお母様は
目を細める。

そこには先程快く俺達を迎えて
くれていた笑顔は無かった。

「お黙りなさい、リアス。

貴方は一度ライザーとの

婚約を解消しているのよ？

それを私達が許しただけでも

破格の待遇だと思いなさい。

お父様とサーゼクスがどれだけ

他の上級悪魔の方々へ根回し

したと思っているの？一部の貴族には

『わがまま娘が伝説のドラゴンと戦士を使って
婚約を解消した』と言われているのですよ？

いくら魔王の妹とはいえ、限度があります」

わがまま娘が伝説のドラゴンと戦士を使った。

リアス先輩のお母様の言葉から察するに、

俺達が乱入したあのパーティーは
そんな風に思われていたのか。

「私はお兄様とは」

リアス先輩が顔を怒りに歪ませて言おうとするが、
リアス先輩のお母様はそれを許さない。

「サーゼクスが関係ないとも？」

表向きはそういうことになっています。

けれど、誰だってあなたを魔王の妹として見るわ。

三大勢力が協力体制になった今、

貴方の立場は他の勢力の下々まで

知られたことでしょう。

以前の様に勝手な振る舞いはできないのです。

そして何よりも今度の

貴方を誰もが注目するでしょう。

リアス、貴方はそういう

立場に立っているのですよ？

二度目のわがままはありません。

甘えた考えは大概にしなさい。いいですね？」

その言葉にリアス先輩は悔しそうにしながらも

言い返せない様子だ。

納得できないまま、椅子へ勢いよく腰を下ろした。

リアス先輩のお母様は息を一度吐いた後、

笑みを俺達へ向ける。

「リアスの眷属さん達にお見苦しい所を

見せてしまいましたわね。

話しは戻しますが、ここへ滞在中、

一誠さんには特別な訓練をしてもらいます。

少しでも上流階級、貴族の世界に

触れてもらわないといけませんから」

なるほど、イツセーにはそこまでの

教育を行われるのか。

ギヤスパ―や俺にその話が無いのは
家の両親にお願いでもされたのか？

「あ、あの、どうして俺なのでしょうか？」

すると、リアス先輩のお母様は笑みを止め、

真面目な表情で真っ直ぐにおっしゃった。

「貴方は次期当主たる

娘の最後のわがままですもの。

親としては最後まで責任を持ちますわ」

な、もしかしてそういう事なのか？

第58話 「若手悪魔」

「つまり、上級悪魔にとって社交界とは冥界に到着した次の日。

俺とイツセーは朝から教育係の悪魔から上級悪魔、上流階級、貴族とは何か教えられている。

そう、イツセーに施すと云っていた。

マナー勉強だ何故俺も一緒に受けているかと言うと、俺がお願いして

同席させてもらった。

自分が転生した悪魔についてもつと知りたいと思つたからだ。

俺達の他にもミリキヤス様が

一緒に勉強している。

こんなに小さいのに勤勉な子だよ。

俺もイツセーも一生懸命

ノートに板書の内容を書き込んでいる。

ちなみに他の皆はリアス先輩と

一緒にグレモリーの敷地を観光している。

奈美先輩には一緒に観光に行く筈でしょと

怒られてしまったがな。

「若様、ユウスケ様は悪魔の

文字はご存知でしょうか？」

「い、いえ、ほとんどわかりません」

「同じくです」

「よろしい。では、そこから一つ一つ

覚えていきましょう」

教育係の悪魔は俺達に

新設丁寧に教えてくれる。

「若様にはグレモリー家の全てを

お教えしなければならぬもの
ですから。お覚悟を」

「あ、あの『若様』って
のは何なのでしょうか？」

「……。さあ、次はグレモリー家の
歴史についてお話しましょう」
はぐらかされたな。

まあ、恐らくイツセイが
リアス先輩の婿として
考えられてるんだらうな。
ガチャ。

ドアを開けられ、
入ってきたのはリアス先輩のお母様だった。

「おばあ様！」

そういや、ミリキヤス様にとっては
御祖母さんになるのか

見た目からは叔母にしか見えんがな。

「一誠さん、祐介さん、ミリキヤス。

お勉強ははかどっているのかしら？」

優しい笑みを浮かべながら

俺達と教育係の間に入る。

リアス先輩のお母様は俺達の

ノートを見て微笑んでくれた。

「サーゼクスやグレイフィアの報告通りね。

何事も一生懸命のようだわ。二人とも、

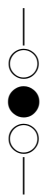
懸命に覚えようとする姿勢は見て取れます」

リアス先輩のお母様はメイドさんを入れて、
お茶を出してくれた。

「もうすぐリアスが帰ってきます。

今日は若手悪魔達が魔王領に
集まる恒例のしきたり行事

があるものですから」
「そういや、そんなスケジュールが入ってたな。
リアス先輩や生徒会長と同じ年ぐらいの若手悪魔
達が一堂に会するという。
全員が公式なレーティングゲームの
デビュー前の悪魔達だ。名門、旧家と
由緒ある上級悪魔の跡取りが
お偉いさんの元に集結し、
挨拶の後お互いを意識しあうという話だ。
その集まりにリアス先輩や生徒会長は
出席しないといけない。
同様に眷属の俺達も付き添う必要がある。
さて、どうなることやら？」



リアス先輩や奈美先輩達がグレモリー城の
観光ツアーから帰ってきてすぐに俺達は
行きと同じ列車で魔王様がいらっしゃる
領土へ移動した。
奈美先輩だけは今回は留守番となったが、
途中、宙に展開する巨大な
長距離ジャンプ用魔方阵を
何度か潜り抜けて、列車は進んだ。
列車に揺られて三時間。
到着したのは都市部だった。
駅もホームも近代的で自販機まで置いてあった。
先程までいたグレモリー領が
完全にファンタジーの世界だったから。
別の世界に来たかのようだ。

「ここは魔王領の都市ルシファード。」

旧魔王ルシファア様がおられたと言われている冥界の旧首都なんだ」と木場が説明してくれる。

ちなみに俺達の格好は
駒王学園の夏の制服。

既にユニフォームのようなもんだ。

「このまま地下鉄に乗り換えるよ。

表から行くと騒ぎになるからね」

ここには地下鉄もあるのか!?

でも騒ぎになるってどういうことだ?

「キヤーツー・リアス姫さまああああっ!」

突然、黄色い歓声が聞こえてくる。

見ればホームにいた悪魔の方々が俺達、

いやリアス先輩を見て憧れの眼差しを向けていた。

おおっ。リアス先輩は人気者なのか?

「部長は魔王の妹。しかも美しいものですから、

下級、中級悪魔から憧れの的なのですよ?」

朱乃さんがそう説明してくれた。

なるほど、魔王の妹だし、見た目も

いいからな人気が出るのも頷けるな」

「ヒイヒイヒイ…。悪魔がいっぱい!」

イツセーの背中でギヤスパーが

悪魔の多さに反応して

慌てふためいている引きこもり

にはきついだらうな。

「困ったわね。騒ぎになる前に

急いで地下の列車に乗りましょう。

専用の列車は用意してあるのよね?」

リアス先輩は連れ添いの黒服男性の一人に訊く。

俺達のボディガードらしく、

グレモリーの城から何人もついてきてくれていた。

この人達、かなり強いらしい。確かに、リアス先輩や眷属の俺達を守るわけだから、それなりの實力は必要だからな。

「はい。ついてきてください」

こうして俺達はボディガードさんの後に続いて、地下鉄の列車へと

移動したのだった。

「リアスさまあああつー！」

リアス先輩は男性からも大人気だ。

リアス先輩は苦笑しながらも

男性達に手を振っていた。

地下鉄から乗り換え、

更に揺られること五分ほど。

着いたのは都市で一番大きい

建物の地下にあるホームだった。

若手悪魔、旧家、上級悪魔の

お偉いさんが集まる会場が

この建物にあるのだ。

先程のボディガードの人達は

エレベーター前までしか

随行出来ないようで、そこで待機となった。

俺達はリアス先輩を先頭に地下から

エレベーターに乗り込む。

「皆、もう一度確認するわ。」

何が起こっても平常心でいること。

何を言われても手を出さない事。

上にいるのは将来の私達の

ライバル達よ。無様な姿は見せられない」

リアス先輩の言葉はいつも以上に

気合が入っていて、凄みがあった。

誰にも負けるつもりはないって
声音だった。

俺もアールシアも一旦気持ちを落ち着かせる。

緊張はするが、この先には

俺達と同じ『兵士』だっているんだ。

無様な姿は見せられないからな。

エレベーターが停止し、扉が開く。

外に出るとそこは広いホールだった。

そこには使用人らしき人がおり、

リアス先輩や俺達に会釈してきた。

「ようこそ、グレモリー様。」

こちらへどうぞ」

使用人の後に続く俺達。

通路を進んでいくと、

一角に複数の人影が。

「サイラオーグー！」

リアス先輩はその人影の

一人を知っている様子だった。

あちらもリアス先輩を確認すると、

近づいてくる。男性だ。

見た目、俺達と同一年ぐらい。

黒髪の短髪で野生的なイケメンだった。

活動的な格好をしていて、

凄く体格が良くて筋肉質だな。

プロレスラーのようだな。

武闘家系の悪魔さんの瞳は珍しい紫色で、

どこことなく、顔の面影が

リアス先輩、いや、

サーゼクス様に似ている気がする。

「久しぶりだな、リアス」

リアス先輩とにこやかに握手を交わしていた。

この若手悪魔からは迫力のある
魔力の波動は感じ取れる。

その人の眷属悪魔達はこちらに
視線を送っていた。

強そうな悪魔ばかりだな…。

「ええ、懐かしいわ。

変わりないようで何よりよ。

初めての者もいるわね。

彼はサイラオーグ。

私の母方の従兄弟でもあるの」

リアス先輩はその悪魔さんを

俺達に紹介してくれる。

「俺はサイラオーグ・バアル。

バアル家の次期当主だ」

確か、バアルって魔王の次に偉い

『大王』だったはずだな。

という事はリアス先輩のお母様は

バアル家の出身だったのか。

「それで、こんな通路

で何をしていたの？」

「ああ、くだらんから

出てきただけだ」

「…くだらない？」

他のメンバーも来ているの？」

「アガレスもアスタロトも既に来ている。

あげく、ゼファードルだ。

着いた早々ゼファードルと

アガレスがやり合い始めてな」

心底嫌そうなサイラオーグさん。

やり始めたって喧嘩でも始めたのか？

ドオオオオオオオオオオオッ！

建物が大きく揺れ、巨大な破碎音が聞こえてくる！
何事だ！近くから聞こえてきたんだが、
リアス先輩はそれが気になったのか、
躊躇いもなく音のした方大きな扉へ向かった。

「まったく、だから開始前の

会合などいらないと進言したんだ」

サイラオーグさんはため息しながらも

自分の眷属らしき者達とリアス先輩の後に続く。

俺達は疑問はあつたが主である

リアス先輩を追って行つた。

開かれた大きな扉の向こうには

破壊され尽くした大広間があつた！

テーブルも椅子も破壊尽くされている。

中央には両陣営に分かれた

悪魔方が睨み合っていた！

武器を取り出して、

一触即発の様相だった。

一方は邪悪そうな格好の魔物やら悪魔達。

もう一方は比較的普通の悪魔の一行。

ただ、両チームとも恐ろしいほどに

冷たく殺意に満ちたオーラを放っていた。

なんてオーラの量と質だよ！

眷属も俺らよりも上を感じるな。

広間では隅でテーブルを無事に保つたまま、

優雅にしている悪魔眷属の者達もいた

優しい気な表情の少年悪魔を中心に…

不気味そうなフードを被つた者達。

「ゼファードル、こんなところで

戦いを始めても仕方なくて？

死ぬの？死にたいの？

殺しても上に咎められないかしら」

睨み合う二チームの片方。
女の悪魔がクールに言う。

「殺す」とか普通に言ってるな。

俺達と同じ年ぐらいか？

眼鏡をしており、

冷たく鋭い視線が特徴的で、

オーラから伝わる魔力の波も凄く冷たい。

「ハッ！言ってるよ、クソアマツ！

俺がせっかくそっちの個室で相手してやろうって

言ってるよ！アガレスのお姉さんは

ガードが堅くて嫌だね！へっ、だから未だに

男も寄ってこずに処女やってんだらう!?

ったく、魔王眷属の女共はどいつもこいつも

処女臭くて敵わないぜ！

だからこそ俺が相手してやろうと

言ってるのによ！」

何だ、この下品な兄ちゃんは？

頭に魔術的なタトウを入れてて、

緑色の髪の毛も逆立っている。

格好も上半身裸に近くて、

やっぱり体にも魔術的なタトウばかり。

ズボンに装飾品をジャラジャラ付けていた。

どう見てもヤンキーだな。

：で、両者の間に起こったのは。

ヤンキーの兄ちゃんに

眼鏡の姉ちゃんがセクハラされたってことか？

まだ状況の分かってない俺達へ

後方からサイラオーグさんが来て説明してくれる。

「ここは時間がくるまで待機する

広間だったんだがな。

もつと言うなら、若手が集まって

軽い挨拶を交わすところでもあった。

ところが、若手同士で挨拶したらこれだ。
血の気の多い連中を集めるんだ。
問題の一つも出てくる。

それも良しとする旧家や上級悪魔の
古き悪魔達はどうしようもない。
無駄なものに関わりたくなかったのだが、
仕方ない」

首をコキコキ鳴らすと、

サイラオーグさんは睨み合う

二チームの方へ歩みを進める。

あの騒動を止めるつもりか!?

イツセーがサイラオーグさんを止めようと
したが、リアス先輩がそれを止める。

「イツセー、ユウスケ、彼

サイラオーグをよく見ておきなさい」

「え？は、はい。でもどうしてですか？

従兄弟だから？」

「彼に何かあるんですか？」

「彼が若手悪魔のナンバー1よ」

強いとは思っていたが、最強とはな。

喧嘩を今にも始めそうな二チームの間に

サイラオーグさんは入っていく。

「アガレス家の姫シーグヴァイラ。

ぐらしやらグラシヤラボラス家の

凶兇ゼフアードル。

これ以上やるなら、俺が相手する。

いいか、いきなりだが、これは最後通告だ。

次の言動次第で俺は拳を容赦なく放つ」

サイラオーグさんの迫力のある一言！

凄い凄みだ。ここまで、ピリピリと

プレッシャーを肌を感じたな。

その一言にヤンキー悪魔は
青筋を立てて、怒りの色を濃くする。

「バアル家の無能が」

ドゴンッ！

激しい打撃音！

ヤンキーは言葉を全部言い切る前に
サイラオーグさんの一撃で広間の壁に
叩き潰されていたっ！

ガラッ…。

壁からヤンキーが落ちる。

彼は既に気を失ったようで、

床に突っ伏していた！

一撃！

あれだけ強い魔力を放っていた
ヤンキーをたった拳の一撃で倒しただど!?

「言ったハズだ。最後通告だど」

迫力あるサイラオーグさんの言動だ。

「おのれ！」

「バアル家め！」

ヤンキーの眷属が主をやられた

勢いで飛び出しそうになるが。

「主を介抱しろ。まずはそれがおまえらの

やるべきことだ。俺に剣を向けても

お前達に一つも得はない。

これから大事な行事が始まるんだ、

主をまずは回復させろ」

『ッ！』

その一言にヤンキーの眷属達は
動きを止めて、倒れる主の元へ
駆け寄っていった。

次にサイラオーグさんは眼鏡の悪魔に視線を送る。眼鏡の悪魔が表情を強張らせるのがわかった。

「まだ時間はある。」

化粧し直してこい。

邪悪なものを纏ったままでは行事もままならんからな」

「っ。わ、わかっていきます」

眼鏡の悪魔は踵を返して、

眷属と共に広間を後にした。

それを確認したあと、

サイラオーグさんは自分の眷属に言う。

「スタッフを呼んで来い。広間が

滅茶苦茶すぎて、これじゃ

リアスと茶も出来ん」

俺はサイラオーグさんの挙動一つ一つに見入ってしまった。

強い！これが若手ナンバー1か！

「あ、兵藤兄弟！」

とそこに聞き覚えのある声が。

振り返れば、見知った

駒王学園の制服に身を包んだ人達。

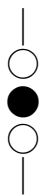
「匙じゃん。あ、会長も」

「お久しぶりです。ソーナ会長」

「ごきげんよう、リアス、

一誠君、祐介君」

匙とソーナ会長も広間に到着したようだった。



「私はシーグヴァイラ・アガレス。」

大公、アガレス家の次期当主です」

先程の眼鏡の悪魔。

アガレス家のお嬢様に俺達

グレモリー眷属は挨拶を貰う。

大広間はあのあと、

駆けつけたスタッフの魔力によって

修復され、ほぼ元に戻った。

改めて若手が集まり、挨拶も交わしていた。

さっきのヤンキーとその眷属を抜かした

者達でテーブルを囲んでいる。

リアス先輩、グレモリー眷属、

ソーナ会長、シトリー眷属、

サイラオーグさんのバアル眷属。

そして、先程のヤンキーがグラシャラボラス眷属、

しかしこの姉さんは大公の次期当主か。

俺達悪魔に命を下す魔王様の代理人。

魔王が社長なら、大王は副社長、

大公は専務だと教えられた。

社長が四人はおかしいがそれが悪魔社会何だろうな。

「ごきげんよう、私はリアス・グレモリー。」

グレモリー家の次期当主です」

「私はソーナ・シトリー。」

シトリー家の次期当主です」

リアス先輩とソーナ会長が

続けて挨拶する。

主達が席に着き、眷属は主の後方で

待機している。

「俺はサイラオーグ・バアル。」

大王、バアル家の次期当主だ」

堂々と自己紹介するサイラオーグさん。

そして次に先程、騒ぎの中優雅に

お茶を飲んでいた優し気な雰囲気少年も口を開く。

「僕はディオドラ・アスタロト。

アスタロト家の次期当主です。

皆さん、よろしく」

虫も殺せないような優男だが、

彼も悪魔だ裏があるんだろうな。

だが、アスタロト。

確か、現ベルゼブ様が出た名家だ。

あのヤンキー悪魔がグラシヤラボラスだから、

現アスモデウス様が出た家だ。

あれが次期当主とか世も末だと

思うけどな。

「グラシヤラボラス家は先日、

御家騒動があったらしくてな。

次期当主とされていた者が

不慮の事故死をとげたばかりだ。

先程のゼファードルは新たな

次期当主の候補ということになる」

サイラオーグさんがそう説明してくれた。

グラシヤラボラス家は大変そうだが、

他の御家のことだからどうでもいいけどな。

こうして若手悪魔六名が揃った。

グレモリーがルシファー、

シトリーがレヴィアタン、

アスタロトがベルゼブ、

グラシヤラボラスがアスモデウス、

そして大王と大公。この六家が揃ったのか。

皆有望で将来を背負って立つメンバーか。

約一人は不安しかないが、

皆、上級の世界にいるせいかな

立ち振る舞いやオーラから違っていた。

今回このメンバーを集めて

お偉いさんは何を考えてるのやら。

「おい、一誠、間抜けな顔を見せるなよ」

匙がため息を吐きながらイツセーに

注意をしていた。

どうやら若手悪魔相手に変な顔でも

していたんだろう。

「だってよ、上級悪魔の会合だぜ？」

緊張するじゃないかよ。皆、強そうだ」

「何言ってるんだよ。お前は

赤龍帝だぞ？お前も祐介みたいに

もう少し堂々とすればいいじゃないか」

「俺を巻き込むなよ匙」

「そんなこと言ってもよ…。」

って、なんで匙がキレてんだよ？」

「眷属悪魔はこの場で堂々と振舞わないと

いけないんだ。相手の悪魔達は主を見て、

下僕も見るとだから。だから、

お前がそんなんじや、先輩にも失礼だ。

ちったあ自覚しろ、

お前はグレモリー眷属で、赤龍帝なんだぞ」

匙からの意見にイツセーは困惑している。

「お前達は先輩自慢の眷属だからな。」

：俺だって、会長の自慢になってみたいさ」

匙は苦笑してるがその目は笑っていなかった。

匙にも何か思うところがあるんだろうな…。

そこへ扉が開かれ、使用人が入ってくる。

「皆さま、大変長らくお待ちいただきました。

皆さまがお待ちでございます」

ついに行事が開始となった。

第59話「目標」

俺達若手悪魔の面々が案内されたのは、
異様な雰囲気が漂う場所だった。

かなり高い。見上げた先に席が用意されていた、
そこにお偉いさんと思われる方々が座っており
その更に上の段にもお偉いさんが座る。

また一つ上の段には俺達もよく知る方がいた。

魔王サーゼクス様、その隣には
セラフオルー様が座る。

他にも二人見知らぬ人がいるが、
あの席が位を現しているなら。

あの二人は同じ魔王の
ベルゼブブ様とアスモデウス様だろう。

ただ座っているだけなのに、
強大な魔力を感じる。

俺達はお偉いさんに高い所から
見下ろされている状態だ、

いい気分じゃあないな。

俺達はリアス先輩の後ろに並んで待機していた。
特に何かやるわけではないが、

これだけの悪魔に見られていたら、
緊張するぜ。

そんな中、リアス先輩を含めた
若手六人が一歩前に出る。

さっきのヤンキーも復活して
同様に一歩前へ出ていた。

頬の腫れは未だに引かないようで
生々しい痕を残していた。

まあ、あれだけのパンチだ。
アジアのような回復神器

でもない限りは直ぐには消えないだろうさ。

まあ、アジアには絶対近づけさせないけどな。

「よく集まってくれた。」

次世代を担う貴殿らの顔を改めて確認する為、

集まってもらった。これは一定周期ごとに行う。

若き悪魔を見定める会合である」

初老の男性悪魔が手を組みながら言う。

「さっそく、やってくれたようだが……」

今度は髭面の男性悪魔が皮肉気に言う。

先程の争いの事だろう。

「君達六名は家柄、実力共に

申し分ない次世代の悪魔だ。

だからこそ、デビュー前

お互い競い合い、

力を高めてもらおうと思う」

一番上の段のサーゼクス様が

そうおっしゃられる。

競うってことはこのメンバーで

レーティングゲームでも行うのか？

そういや、アザゼル先生が

冥界での合宿中に

レーティングゲームをセッティングしたと

言ってたが、もしかしてこれの事か？

「我々もいずれ『禍の団』との

戦に投入されるのですね？」

サイラオーグさんが

サーゼクス様の訊ねる。

「それはまだわからない。だが、
できるだけ若い悪魔達は

投入したくはないと思っっている」

サーゼクス様の答えに

サイラオーグさんは納得できない様子だった。

「なぜですか？若いとはいえ、我等とて

悪魔の一端を担います。

この歳になるまで先人の方々から

厚意を受け、なお何も出来ないとなれば」

「サイラオーグ、その勇気は認めよう。

しかし、無謀だ。何よりも成長途中の

君達を戦場に送るのは避けたい。

それに次世代の悪魔を失うのは

あまりに大きいのだよ。

理解して欲しい。君達は君達が思う以上に

我々にとって、宝なのだよ。

だからこそ、大事に、階段を踏んで

成長して欲しいと思っっている」

サーゼクス様のお言葉に

サイラオーグさんも一応納得はしたようだ、

まあ、不満がありそうな表情ではあるが、

そのあとお偉いさんのありがたい話が続き、

今後のレーティングゲームに

ついでの説明もあった。

「さて、長い話に付き合わせてしまって

申し訳なかった。なに、私達は若い君達に

私たちなりの夢や希望を見ているのだよ。

されだけは理解して欲しい。

君達は冥界の宝なのだ」

サーゼクス様の言葉に皆聞き入っていた。

聴いていてその言葉に嘘偽りが無い

事が分かる。

「最後にそれぞれの今後の

目標を聞かせてもらえないだろうか？」

サーゼクス様の問いかけに

最初に答えたのはサイラオーグさんだった。

「俺は魔王になるのが夢です」

この人は、いきなり言い切ったな。

『ほう…』

お偉いさんたちも正面から

迷いもなく言い切った

サイラオーグさんの目標に

感嘆の息を漏らしていた。

「大王家から魔王が出る

としたら前代未聞だな」

お偉い男性悪魔がそういう。

「俺が魔王になるしかない」と

冥界の民が感じれば、

そうなるでしょう」

また言い切ったな。

凄い目標だな。

驚く間もなく、次はリアス先輩が言う。

「私はグレモリーの次期当主として生き、

そしてレーティングゲームの各大会で

優勝することが近い将来の目標ですわ」

それが、リアス先輩の目標か

始めて聴いた。

だが、それは俺達の頑張り次第か、

頑張るしかないな。

自分の目標か…。

そのあとも若手の人達が夢、

目標を口にし、

最後に残ったのはソーナ会長だった。

そして、ソーナ会長が夢を語る。

「冥界にレーティングゲームの

学校を建てることです」

学校か、ソーナ会長は

先生になるのが夢なのかな？

と、俺がそう思っていると、

お偉いさん達は眉根を寄せていた。

「レーティングゲームを学ぶ所ならば、

既にあるはずだが？」

確認するかのようにお偉いさんは会長に訊く。

会長は淡々と答える。

「それは上級悪魔と一部の特権階級の

悪魔のみしか行くことが許されない

学校のことです。

私が建てたいのは下級悪魔、

転生悪魔も通える分け隔てない学舎です」

差別のない学校か、

会長らしい良い夢だな。

これからの変わっていいこうって

冥界にとては良い話ではないか。

匙も誇らしげに会長の夢を聞き入っていた。

しかし。

『ハハハハハハハハハハハッ！』

お偉いさんの笑い声がこの会場に響き渡る。

俺は悪魔の本性をこの場で見た気がした。

リアス先輩の方を見れば、

目を細めて難しい顔になっていた。

イツセーも匙も突然の笑い声に驚いていた。

そして、お偉いさん達は嘲笑

を浮かべながら口々に言う。

「それは無理だ！」

「これは傑作だ！」

「なるほど！夢見る乙女というわけですな！」

「若いというのはいい！しかし、

シトリー家の次期当主ともあろう者が

そのような夢を語るとは。

ここがデビュー前の顔合わせの場で

良かったというものだ」

三すくみの和平が叶って

冥界が変わっても変われない者もあるのか？

「…今の冥界がいくら変わりつつ

あるとしても、上級と下級、転生悪魔、

それらの間の差別はまだ存在する。

それが当たり前だと未だに

信じている者達も多いんだ」

隣で木場が淡々とイツセーに説明していた。

「なんだ、それ？だって、部長

の御家は俺達を普通に向かい

入れてくれたじゃないか」

「イツセー君。グレモリーは情愛が深い

悪魔の一族だ。あまり人間にも

下級悪魔にも差別的な目を向けない。

だから奈美先輩だってあの家では

来客として対応してもらえる。

…だけど、フェニックスを思い出してくれ」

確かにリアス先輩達を見ていて

俺の思っていた悪魔像とかけ離れていると

思っていたが、リアス先輩達がおかしいだけで

これが悪魔本来の価値観か。

そんな中でもソーナ会長はまっすぐに言う。

「私は本気です」

その言葉によく言ったと言わんばかりにセラフオルー様はうんうんと力強く頷いていた。魔王という立場上、妹を応援出来ないからな。それでも心配ではあるんだろうな。

しかし、冷徹な言葉をお偉いさんは口にする。

ソーナ・シトリー殿。下級悪魔、転生悪魔は

上級悪魔たる主に仕え、才能を見出されるのが常。

そのような養成施設を作っては伝統と誇りを重んじる旧家の顔を潰すこととなりますぞ？

いくら悪魔の世界が変革の時期に入っていると

言っても変えていいものと悪いものがあります。

まったく関係のない、たかが

下級悪魔に教えるなど…」

その一言に黙っていられなくなったのは匙だった。

「黙って聞いていれば、なんでそんなに会長の

ソーナ様の夢をバカにするんスか!?

こんなのおかしいっスよ! 叶えられないなんて

決まった事じゃないじゃないですか!

俺達は本気なんスよ!」

「口を慎め、転生悪魔の若者よ。ソーナ殿、

下僕の躰がなってますんな」

お偉いさんの一人が言う。

匙は叶わないと決めるなと言うが

そういう話ではないのだろう

叶えてはい行けないって話なのだろう。

もし俺も奈美先輩を否定されたら

同じように反発してるだろうな。

「…申し訳ございません。」

あとで言っつきかせます」

会長は一切表情を変えずに言う。

匙はその反応が納得できないようだ。

「会長！どうしてですか！この人達、会長の、俺達の夢をバカにしたんスよ！どうして黙っているんですか!?!」

「サジ、お黙りなさい。この場は

そういう態度を取る場所ではないのです。

私は将来の目標を語っただけ。

それだけのことなのです」

「ッ！」

会長が目を細め、匙をたしなめる。

匙も何か言いたげだったが、口を閉ざした。

「なんならーうちのソーナちゃんか

ゲームで見事に勝っていけば文句も

ないでしょう!?!ゲームで

好成績を残せば叶えられるものも

多いのだから！」

突然のセラフオール様の提案に皆が驚いていた。

当のセラフオール様はご立腹の様子だ。

「もうーおじさま達はうちのソーナちゃんを

寄つてたかつていじめるんだもの！

私だって我慢の限界があるのよ！

あんまりいじめると私がおじさま達を

いじめちゃうんだから！」

セラフオール様が涙目で悪魔の

お偉いさん達に物申していた。

当のお偉いさん達はそんな

魔王様の態度に反応に困っていた。

会長はそんな姉が恥ずかしいようで、

顔を両手で覆っていた。

だが、今のセラフオール様の一言は
気持ちが悪く感じた。

冥界が変わっていきこうって時に
頭の固い上層部がいては

変わるものも変わらないだろう。

「ちようどいい。では、

ゲームをしよう。若者同士のだ」

サーゼクス様の一言に皆が注目する。

「リアス、ソーナ、戦ってみないか？」

っ！

予想外の事に俺っ体は驚愕した！

「……………」

「……………」

リアス先輩とソーナ会長も顔を見合わせ、
目をパチクリさえて驚いていた。

そんな二人にかまわずにサーゼクス様は続ける

「元々、近日中にリアスのゲームをする予定だった。

アザゼルが各勢力のレーティングゲームファンを
集めてデビュー前の若手の試合を観戦させる

名目もあったものだからね、だからこそ、

ちようどいい。リアスとソーナで

1ゲーム執り行ってみようではないか」

合宿修行の総仕上げの試合の相手は

ソーナ会長達、生徒会か！

いきなり、駒王学園の生徒同士での戦いか！

リアス先輩は一度息を吐くと、

挑戦的な笑みを会長に見せる。

それに対してソーナ会長も冷笑を浮かべていた。

どちらもやる気満々だな。

「公式ではないとはいえ、

私にとって初レーティングゲームの相手が

貴方だなんて運命を感じてしまうわね、リアス」

「競う以上は負けないわ、ソーナ」

さっそく火花を散らせているな。

「リアスちゃんとソーナちゃんの試合！」

うーん☆燃えてきたかも！」

セラフオール様も楽しげだ！」

「対戦の日取りは、人間界の時間で八月二十日。

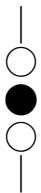
それまで各自好きに時間を割り振って

くれて構わない。詳細は改めて後日送信する」

サーゼクス様の決定により、

こうしてリアス先輩とソーナ会長の

レーティングゲームが開始されることとなった！



「そうか、シトリー家と対決とはな」

グレモリー家の本邸に帰ってきた俺達。

そこで迎え入れてくれたのはアザゼル先生だった。

広いリビングに集合し、

先生に先程の会合の顛末を話した。

「人間界の時間では現在七月二十八日。

対戦日まで約二十日間か」

「しゅ、修行ですか？」

イツセーが訊くと先生はうなずく。

「当然だ。明日から開始予定。

すでに各自のトレーニングメニューは考えてある」

「でも、俺達だけ墮天使総督のアドバイス

受けてていいのかな？」

反則じゃないんですか？」

イツセーがそう言うが反則ではないだろう

俺達にある強みは生かすべきだろうな。

「別に。俺はいろいろと悪魔側に

データを渡したつもりだぜ？」

それに天使側のバックアップ体制
をしているって話だ。

あとは若手悪魔連中の己のプライド次第。
強くなりたい、種の存続を高めたい、
って心の底から思っているのなら

脇目も振らずだろうよ」

「うちの副総督も各家にアドバイス
与えてるぐらいだ。ハハハ！

俺よりシエムハザのアドバイス
の方が役立つかもな！」

んな不安にある事言うなよ。

「まあいい。明日の朝、庭に集合。

そこで各自の修行方法を教える。

覚悟しろよ」

『はいー』

先生の言葉に全員が重ねて返事をした。

つと、そこへグレイフィアさんが現れる。

「皆さま、温泉のご用意が出来ました」



俺は温泉に入る前に部屋に一度戻ってきていた。

「…目標か」

俺には夢が無い。今日皆の目標を聞いて
改めて思った。

皆大層な目標を持っていた。

あのイツセーだつてハーレムという夢がある。
だからこそ俺には何も無いのは気にしていた。

「何か悩みユウスケ？」

ベッドに腰掛けていると

いつの間にか入ってきていた

奈美先輩が声を掛けてくる。

「奈美先輩、どうして？」

「なにか思いつめた顔してたからね

今回の会合で何かあったんでしよう？」

奈美先輩には何もかもお見通しか、

「ええ、少し思うところがあつて、

俺には夢がないんです。

やりたいことも無くて、

只周りに流されている

そんな自分を変えたくて

駒王学園に入ったのに

何も変わつてないのが悔しくて」

奈美先輩が俺の隣に腰掛ける。

「夢ね…貴方に夢がないなんて言うけれど

私はそうは思わないわ。

そう言えば、貴方に私の夢話したこと

無かったわね」

「先輩の夢ってビッグニュースを

取る事じゃないんですか？」

「それは新聞部での目標よ

私の夢はね気象予報士の資格を取って

お天気お姉さんをするのが夢なのよ」

それが奈美先輩の夢？

「始めて聴きましたよ」

「ええ、言っていないからね

子供の時に見たお天気お姉さん

に憧れて目指そうと思つたの」

「でも、俺に夢が無いとは思わないのは？」

そう、奈美先輩はそう言っていた

それはどういう意味だ？

「だってあなた夢が無いって言うけれど、

自分の夢を見つけるって夢があるじゃない
夢は人の原動力よ貴方にはそれが十分あるじゃない
夢を見つける為に駒王学園入ったんでしょ
あなたの夢は必ず見つかるわよ」
奈美先輩が優しく微笑みそう言ってくれる。
俺は流れた涙を見せないように
顔を逸らす。

「ふふふ、私は先に温泉行ってるわね

またあとでねユウスケ」

奈美先輩が部屋を出ていくのを

確認して俺は涙を拭う。

「やっぱり、敵わねえな

だけど、夢を見つけるのが夢か！

立派な夢も出来た！皆に負けてらんねえな！」

俺は新たに覚悟を決めて

気分転換に温泉へと向かうと

女子風呂でのぼせたイツセーが

運び出されるところだった。

「はあ、何この状況？」

「イツセーの奴にはまだ刺激が強すぎたようだな」

驚く俺に風呂上がりのアザゼル先生が答える。

「あいつ煩惱全快ですけど、

耐性無いからそりやそうなるでしょうね」

「ま、良い経験だろう

おれは風呂上りに一杯やるさ

お前もいい顔になったみたいだし

明日からはビシビシいくから

覚悟しろよ！」

「はー」

アザゼル先生は素晴らしい

手を振って通路を進んでいく。

「流石組織のトップか

あちらもお見通しか」

俺は気持ちを切り替えるべく

温泉へと向かうのだった。

第60話「指導」

次の日。

俺達はグレモリー家の

広い庭の一角に集まっていた。

皆、動きやすいジャージを着て、

庭に置かれたテーブルと椅子に

皆座って早速修行開始前の

ミーティングを行う。

俺達のデータと思われる資料を

持った先生が話を始める。

「先に言っておく。いまから俺が言うものは

招来的なものを見据えての

トレーニングメニューだ。

直ぐに効果が出る者もいるが、

長期的に見なければならぬ者もいる。

ただ、お前らは成長中の若手だ。

方向性を見誤らなければ良い成長をするだろう。

さて、まずはリアス。お前だ」

先生が最初に呼んだのはリアス先輩だった。

「お前は最初から才能、身体能力、

魔力全てが高スペックの悪魔だ。

このまま普通に暮らしていても

それらは高まり、

大人になる頃には最上級悪魔の

候補となっているだろう。

だが、将来よりもいま強くなりたい、

それがお前の望みだな？」

先生の問いにリアス先輩は力強く頷く。

「ええ。もう二度と負けたくないもの」

「なら、この神に記してある

トレーニング通り、
決戦日直前までこなせ」

先生から手渡された紙を見て、
リアス先輩は首を傾げる。

「…これって、特別すごい
トレーニングとは思えない
のだけれど？」

「そりやそうだ。基本的な

トレーニング方法だからな。

おまえはそれでいいんだ。

全てが総合的にまとまっている。

だからこそ、基本的な練習だけで
力が高められる。

問題は『王』としての資質だ。

『王』は時によって、

力よりも頭を求められる。

魔力が得意じゃなくとも、頭の良さ、

機転の良さで上まで上り詰めた

悪魔だっているのは知っているだろう？

期限までお前はレーティングゲームを知れ。

ゲームの記録映像、記録データ、

それらすべてを頭に叩き込め。

『王』に必要なのは、

どんな状況でも打破できる思考と機転、

そして判断力だ。眷属の下級悪魔が

最大限に力を発揮できるように

するのがお前の仕事なんだよ。ただ、

これも覚えておけ、実際のゲームでは

何が起こるか分からない。

戦場と同じだ」

基本おちやらけてるが、

こういう時は頼りになるよな。

「次に朱乃」

「…はい」

先生に呼ばれるものの、朱乃さんは不機嫌だった。

朱乃さんはどうにもアザゼル先生がいや、

墮天使が苦手のようなだ、

父親が墮天使なのと関係しているのだろうか？

そんな事を考えていたら、先生はそのことを

真正面から朱乃さんに言う。

「フェニックス家との一戦、

記録映像で見せてもらったぜ。

なんだありや。本来のお前のスペックなら、

敵の『女王』を苦も無く退けられたはずだぞ、

ましてや、相手は本気を出してないんだからな。

なぜ、墮天使の力を振るわなかった？

雷だけでは限界がある。光を雷に乗せ、

『雷光』にしなければお前の本当の力は発揮できない」

墮天使の血を引く朱乃さんは

悪魔の弱点である光の力も使えるのか。

今まで使わなかったのは自身にも

ダメージがあるからだと思っていたが

違うのか？

「…私は、あのような力に頼らなくても」

朱乃さんは複雑そうな様子だ。

「否定するな、自分を認めないでどうする？

最後に頼れるのは己の力だけだぞ？

否定がお前を弱くしている。

辛くとも苦しくとも自分を全て受け入れろ。

お前の弱さは今のお前自身だ。

決戦日までにそれを乗り越えて見せろ。

じゃなければ、お前は今後の戦闘で邪魔になる。

『雷の巫女』から『雷光の巫女』になってみせろよ」
「……………」

先生の言葉に朱乃さんは応えなかった。
だが、自分でもどうするべきか分かってる筈だ、
後は彼女の心の強さを信じるしかないだろう。

「次は木場だ」

「はい」

「まずは禁バランス・ブレイカー手を解放している状態

で一日保つて見せろ。それに慣れたら、
実戦形式の中で一日保たせる。

それが続けていき、状態維持を

一日でも長く出来るようにしていくのが

お前の目的だ。あとはリアスのように

基本トレーニングをしていけば十分に強くなるだろうさ。

剣系神器の扱い方は後でマンツーマンで教えてやる」

さすが、神器のエキスパートだな。

「拳銃の方は…」

お前の師匠にもう一度習うんだったな？」

「ええ、一から指導してもらおう予定です」

木場に剣の師匠がいるのか。

どんな人なのかな？

「次、ゼノヴィア。

お前はデュランダルを今以上

に使いこなせるようにすることだ。

それと気になることがあるから

身体検査も合わせて行っていく」

「気になる事？」

ゼノヴィアは先生の言葉に首を傾げる。

「ああ、以前お前は光の巨人に

なったそうじゃないか

体に何かしら異変が起きてないか

お前が言うのと本当に砕けそうだな。

「同じく『僧侶』のアーシア」

「は、はいー」

アーシアも気合入ってんな。

常日頃から、自分が皆の役に

立っていないかもしれないと

感じていると、言っていたな。

まあ、おれはそうは思わないがな。

アーシアの回復能力は**ずば**抜けている。

そこに自信を持つべきだ。

「お前も基本的なトレーニングで、

身体と魔力の向上。そして、

メインは神器の強化にある」

「アーシアの回復神器は最高の物ですよ。

触れるだけでどんな怪我でも瞬時に

治しますしね」

十分回復速度もある。あと他に何を強化するのか？

「それは理解してる。

回復能力の速度は大したもんだ。

だが、問題は**その『触れる』**って点だ。

味方がケガしてるのに、

わざわざ至近距離にまで行かないと

回復作業ができない」

なるほど、アザゼル先生がどう

強化しているか分かったよ。

「もしかして、アーシアの神器は

範囲を広げられるの？」

リアス先輩の言葉に先生が肯定する。

「ゴ名答だ、リアス。こいつは

裏技みたいなものだが、

トワイライト・ヒーリング
『聖母の微笑』の真骨頂は

効果範囲の拡大にある」

「アジアの神器は遠距離も可能なんですか？」

俺の問いに先生は頷いた。

「俺達の組織が出したデータの

理論上ではな。神器のオーラ

を全身から発して、

自分の周囲にいる味方を

まとめて回復なんてことも可能なはずだ

なるほど、癒しの波動ってことか。

それはいい一定のエリアに行けば

まとめて回復できるなら

今後の戦いの戦術は大きく変わるな！

「だが、問題は敵味方の判断が

出来ずに回復させてしまいそうなことだ。

敵味方を判別し、味方だけを

回復できればいいんだがな…。

アジアの生来のものが不安だ」

「アジアがやさしいからですね？」

俺の言葉に先生は肯定する。

「ああ、アジアは戦場で敵のケガした

奴を視認したとき、そいつのことも

回復してやりたいと心中で

思ってしまうだろうな。

それが敵味方判別の神器能力の

妨げになる。おそらく、

アジアは判別する力を

得られないだろうさ。

いま言った回復範囲拡大は

このチームにとっては

諸刃の剣となりかねない。

それでも範囲拡大は覚えるべきものだ」

アーシアは優しい子だ

敵である悪魔を回復させてしまうしな。

先生が気にするのも当然か。

「だから、もう一つの可能性を見出す。

回復のオーラを飛ばす力だ」

「そ、それは、ちよつと離れた所に

居る人へ、私が回復の力を送る

ということですか？」

アーシアが何かを投げるジェスチャーをする。

「ああ、直接飛ばす感じだな。

たとえば、ユウスケが十メートル先で

戦闘してて、ケガをしているとき、

お前がユウスケに向けて回復の力を

飛ばすのさ。さっきのが一定のフィールド

限定なら、いま説明したのは

飛び道具バージョンだな。

直接触れなくても回復できるようになる」

「そ、そりゃ、すげえ！

アーシア大活躍できるぜ！」

イツセーがアーシアの手を取って

はしゃいでいた。

アーシアも先生が教えてくれた情報に

驚きながらも喜んでる様子だ。

「直接触れて治すよりも多少パワーは落ちるだろうが、

それでも遠距離の味方を回復できるのは

戦略性が広くなる。前衛に1人か2人飛び込ませて、

後方で回復のアーシアとアーシアを護衛する

誰かを配置すれば、理想的なフォーメーションが

組めるだろうさ」

先生は俺達のフォーメーションの

想定までしていたのか、

というか、そういうのが
好きなんだろうな。

先生の意見にリアス先輩が同意する。

「王道だけれど、だからこそシンプルに
強い戦術フォーメーションだわ。

通常、味方を回復する術なんてフェニックスの涙か、
調査された回復薬ぐらいですものね。

アーシアの神器は汎用性と信頼性に関して、
それらよりも遥かに上だわ」

「そうだ。アーシアの悪魔をも治す

神器の力はこのチームの象徴的な

持ち味、武器と言える。

あとはアーシアの体力勝負だ。

基本トレーニング、

ちゃんとこなしておけよ？」

先生の言葉にアーシアは深く頭を下げた。

「は、はい！頑張ります！」

頑張れアーシア！

いざという時は俺がアーシアを守る

不動の盾になってやるからな！

「次はユウスケ」

「はい！」

ついに俺の番か。

「お前も基本トレーニングを行え、

それに加えて俺考案の耐性強化の

トレーニングだ、お前はフォームチェンジで

戦闘スタイルを多彩に変化出来るが、

耐久力と持久力が低いのが問題だ、

今回の修行でその克服と

『戦車』の姿になる事を目指す」

痛い所を突かれたな、

確かに俺はトオドとの戦いでは
爆破を食らって即ダウンしてしまつたし、
ボダウと雄輔との連戦でスタミナ切れ起こしたからな。
今後は多くの敵と戦うだろうしな。
流石のアーシアの神器でも
体力までは回復できない
この機に改善しなくては！

「それとなお前には

クウガのつまりリント族

についても勉強してもらおう」

リント族、クウガのベルトを

作つた部族だよな。

なんで修行で勉強も？

「リント族についてはロビンが

担当する。自分の力について

碑文から分かっている事を

知る事でお前の成長の

手助けになるかもしれないと

ロビンの奴が言うもんでな」

俺の成長の手助け。

先代のクウガの修行方法でも

しるされているのだろうか？

「次は小猫」

「…はい」

小猫ちゃんは相当気合が入っている様に見える。

ここ最近調子が悪そうだったのに、

今日は妙に張り切ってる。

「お前は申し分のないほど、オフエンス、

デイフェンス、『戦車』としての素養を

持っている。身体能力も問題ない。

だが、リアスの眷属には『戦車』

のお前よりもオフエンスが上の奴が多い」
「……わかつています」

ハツキリ言う先生の言葉に小猫ちゃんは
悔しそうな表情を浮かべていた。

最近様子が可笑しかったのは
それを気にしてたからか？

「リアス眷属でトップのオフエンスは
現在木場とゼノヴィアだ。

禁手の聖魔剣、聖剣デュランダル、
凶暴な兵器を有してやがるからな。

ここに予定だが、イツセーの禁手と
ユウスケの『戦車』が入ると」

オフエンスか、『騎士』の姿でも
出来なくはないが、やるなら

やはり『戦車』の姿の方が良いんだろうな。

「小猫、お前も他の連中同様、
基礎の向上をしておけ。

その上で、お前が自ら封じて
いるものをさらけ出せ。

自分を受け入れなっければ
大きな成長なんて出来やしねえのさ」

「……………」

先生の言葉に小猫ちゃんは何も応えなかった。
先程まであったやる気も『さらけ出せ』の一言で
消失してしまったようだ。

小猫ちゃんも何か抱えている物があるのだろう。

「大丈夫、小猫ちゃんなら
ソツコーで強くなれるさ」

イツセーが小猫ちゃんに気軽に言い、
頭を撫でようとしたが、

その手は小猫ちゃんに払いのけられていた。

文句でもあるのか、タンニーン」

先生はこのドラゴンと顔見知りなのか。

「ふん。まあいい。サーゼクスの頼み

だというから特別に来てやったんだ。

その辺を忘れるなよ、墮天使の総督殿」

「へいへい。てなわけで、イツセー。

こいつがお前の先生だ」

先生が巨大なドラゴンに指差して、イツセーに言う。

「えええええええええええええええええええええええつ！

この巨大なドラゴンが!？」

「久しいな、ドライグ。聞こえるのだろうか?」

ドラゴンはイツセーの方に語り掛けるように

語り掛けてくる。すると、イツセーの左腕が

勝手に赤く輝き、ブーステッド・ギアが出現する。

『ああ、懐かしいな、タンニーン』

籠手の宝玉からドライグの声が響く。

「知り合いか?」

イツセーが訊ねると『ああ』と肯定した。

『こいつは元龍王の一角だ。「五大龍王」

のことは以前話したろう?」

こいつタンニーンは「六大龍王」だった頃の

龍王の一匹だ。聖書に記された龍を

タンニーンと言うのだが、コイツを指している』

「タンニーンが悪魔になって、

『六大龍王』から『五大龍王』に

なったんだったな。いまじゃ、

転生悪魔の中でも最強クラス。最上級悪魔だ」

と先生が言う。

ドラゴンから悪魔に転生!

なぜそうなったのか気になる所だな。

『魔龍聖』タンニーン。

その火の息は隕石の衝撃に匹敵するとさえ言われている。未だ現役で活動している数少ない伝説のドラゴンだよ。悪いがタンニーン、この赤龍帝を宿すガキの修行に付き合ってくれ。

ドラゴンの力の使い方を一から教えてやって欲しいんだよ」

アザゼル先生はタンニーンにそう頼み込む。

アザゼル先生の頼みにタンニーンは嘆息する。

「俺がしなくてもドライグが

直接教えればいいのではないか？」

「それでも限界がある。

やはり、ドラゴンの修行といえば」

「元来から実戦方式。なるほど、

俺にこの少年をいじめ抜けと言うのだな」

先生のあとに言葉が続けるタンニーン。

「どうやらイツセーの修行は

過酷なものとなるようだな。

「ドライグを宿す物を鍛えるのは初めてだ」

タンニーンが目を細めながら楽し気に言う。

『手加減してくれよ、タンニーン。』

俺の宿主は想像以上に弱いんだな』

「死ななければいいのだろうか？ 任せろ」

「期間は人間界の時間で二十日間ほど、

それまでに禁手に至らせたい。

イツセー、死なない程度に気張れや」

そう言い残すと先生は手を振って去っていく。

「さて、各自各々に修行

メニューをこなすこと。いいわね」

『はい…』

イツセーに対してはスルーでいいのか。

「イツセー、気張りなさい！」

リアス先輩が親指を立てて

エールを送る。

「リアス嬢。あそこに見える山を

貸してもらえるか？こいつをそこに連れていく」

タンニーンが指で遙か先の山を指差す。

「ええ、鍛えてあげてちょうだい」

「任せろ。死なない程度に鍛えてやるさ」

タンニーンがイツセーを手に掴むと、

バツと羽ばたく！

「部長オオオオオオッ！」

イツセーが泣きながらリアス先輩に

手を伸ばすが当の本人は

笑顔で手を振っていた。

俺は手を合わせてイツセーの

無事を祈る事しかできなかった。

第61話 「人工神器」

イツセーがドラゴンに連れ去られた後
俺はロビン先生と合流した。

悪魔の勉強を行った部屋で、
スーツを着たロビン先生と
クウガの勉強会が始まった。

「さて、貴方にはクウガについて
一緒に勉強しましょう。まず、

貴方は何処までクウガに

ついて知ってますか？」

「えーと、リント族が作ったベルトで
変身する戦士の事ですよね？」

「そうね、それであってるわ。
付け足して説明するなら。

貴方と東城君が着けているベルトは

『アークル』と呼ばれるもので

その中央の宝玉は『靈石アマダム』って言うの
その石は装着者を戦いに適した姿に変化させる。
あとは痛みは伴うけど、強力な回復能力がある
とんでもない石なのよ」

「そのアマダムがフォームチェンジの要
つてことですか？」

「そうね、貴方のはプロトタイプでは
あるけれど通常のアークルと同じと
考えていいと思うわ。

貴方が今まで赤の姿以外に
変身出来なかったのは

プロトタイプだからというのも

あると思うけど他の要因もあると思うの
これは憶測だけど、貴方のアマダムには

まだ何か我々が知らない事があるのかもしれないわ貴方が新たな姿になったのも悪魔の『悪魔の駒』イーザイル・ピースの力との融合だと私は思っているわ」
力の融合？

俺の中でそんな事が起こってるのか。
なら『戦車』の力を引き出すには
他の姿と同じように『戦車』である
小猫ちゃんからあの淡い光を
貰えればいいんだろうが
あれが何が条件で出るか
分からないからな。

「じゃあ次はリント族について
話しましょうか」

「確か俺がこのベルトを
手にしたのもその部族の
装飾品が出たからだっただが」
俺の呟きにロビン先生が答える。

「リント族は碑文と
当時の道具等が見つかっているだけで
殆どが謎の歴史に名を残さなかった
部族よ。ここ最近になって

発見されたばかりの存在ね」
「そんな事ってありえるんですか？」
こんなベルトを生み出すほどの技術がある
部族が今まで誰にも知られなかったのは
ありえるのか？

「それがね、リント族の碑文を年代測定してみたら
全てがある一定の年代で停まっている事が
分かったの。もしかしたら、
その年代でリント族は滅んだのでは

ないかと私は考えているの」

「もしかして、グロンギ族に？」

「推測でしかないけれど、

その可能性は高いわね」

…これ以上は考えても答えは出ないだろうな。

「リント族はグロンギ族と違い心優しいく

戦いを好まない部族だったは。

そんな部族がクウガという戦士を生み出した。

その技術力は我々からみても驚くべき物ね」

ガチャツ。

すると、部屋の扉が開きアザゼル先生と

奈美先輩が入ってきた。

「おう、やってるか？」

「ええ、一通りの説明は終わったわ」

「なら、早速修行を開始するぞ、

ユウスケ、お前は耐久力を上げる為の

修行を始める」

「それで、具体的に何をやるんですか？

奈美先輩も手伝うんですよね」

「まあ、それは向こうに着いてから

教えるさ、皆で集まった広間に行くぞ」

—●—

俺達は広間までやってきた。

そして俺は変身した状態で

何故か奈美先輩と向かい合い立っていた。

まるでこれから決闘でもするかのように。

「えっと、これはどういうことですか？」

俺の質問にアザゼル先生が

笑いながら答えてくれる。

「なに、これから俺が作った人工神器
を使ってお前を攻撃してもらおうから
お前はひたすらそれを耐えろ」

「人工神器？この間、」

先生が使っていた奴ですか？」

アザゼル先生は俺の質問に頷き、

懐から青い三本の棒を取り出した。

「こいつは『天候棒』クリマタクト」

俺が作った神器さ、コイツは風や雷

といった天候を操る事が出来るって訳さ」

「じゃあ、俺は奈美先輩の攻撃を

耐えれば良いって訳ですか？」

「まあ、そうだな

物は試しだ奈美、

まずは風からだ」

「はい！行くわよ、ユウスケ！

ガストソード！」

奈美先輩が突き出した天候棒クリマタクトから

突風が噴き出す。俺はなんとか踏ん張り

耐える事が出来た。だが、その一瞬で

奈美先輩に次の攻撃を許してしまった。

奈美先輩は二本の天候棒クリマタクトから

赤と青の気泡を空に飛ばしていた。

「クールボールにヒートボールで

大気の水分を雲に変える」

上空の雲が見る見るうちに

大きくなっている。

「さあ、試させてもらおうわよ

雷の威力！さあ、行くわよ！

サンダーボルト・テンポ！」

奈美先輩が天候棒クリマタクトから

黄色い球を上空の雲へと投げつけた。
カッ！

ドカアアアアアッアアン！

「ぐあああああああああー！」

クッ、なんて威力だ！

一瞬意識が飛んでいた。

「とりあえず、そこまでだ」

アザゼル先生の声に俺達は修行を中止した。

「それで、ユウスケ、

この神器の攻撃食らってどうだった？」

「ええっと、思っていたより威力があつて

驚きました。連続で食らうのはまずいですね」

「ユウスケは基礎トレーニングを

行った後、奈美の攻撃を耐えていけ。

ある程度耐えられるようになったら。

次のステップに行くからな」

「了解しました」

「よし、取り敢えずは休憩してろ

ユウスケだけじゃなく奈美も

初めての神器の使用で疲れたろう

俺は他の連中の所にも

顔出しているよ」

アザゼル先生はそう言つて、

ロビン先生共に去つていった。

残された俺達は言われた通りに

休憩する事にした。

「奈美先輩はどうして

今回協力しようと思つたんですか？

先輩は戦うのは嫌だと

思つたので意外でした」

俺の質問に奈美先輩は微笑みながら

応えてくれた。

「別に嫌って訳じゃないわ
大事な友人が傷つくのが
嫌なだけよ。」

それに私が協力する事で
貴方が強くなれるなら
いくらでも手を貸すわよ

「ありがとうございます。」

じゃあ、がんがん雷を当ててください！

俺はそれに耐えて強くなって見せます！」

俺と奈美先輩はその後も

遅くまで修行を続けたのだった。

—●—

次の日俺は広間に来て基礎
トレーニングを行っていた。

「ユウスケ！」

そこへ奈美先輩が血相を変えて走ってきた。

「どうしたんですか!? 奈美先輩！」

「大変よ小猫ちゃんが倒れたそうなの！」

「小猫ちゃんが！」

俺達は急いで小猫ちゃんが運ばれた

部屋へと向かう。

そこには屋敷に居る

他のメンバーも集まっていた。

「来たのねユウスケ」

リアス先輩hがこちらに気が付き

声を掛けてくれる。

「小猫ちゃんはどうして倒れたんですか？」

「オーバーワークよアザゼルから

与えられたメニューを過剰に取り組んで
今朝倒れたのよ。修行での傷はアジアが
治せるけれど、体力の方は無理ね。
あの子もそれは分かってはいるけれど、
自分の存在と力に向き合おうと
必死になってるのでしょね

「存在と力ですか？」

「そうね、ユウスケ達にはまだ話して

無かったわね。それじゃあ。

少し話をしましょうか」

リアス先輩はとある話を語りだした。

それは二匹の姉妹猫の話だった。

姉妹の猫はいつも一緒だった。

寝るときも食るときも遊ぶ時も。

親と死別し、帰る家もなく、頼る者もなく、

二匹の猫はお互いを頼りに

懸命に一日一日を生きていった。

「二匹はある日、とある悪魔に拾われたの。

姉の方が眷属になることで妹も

一緒に住めるようになった。

やっとまともな生活を手に入れた

二匹は幸せな時を暮らせると信じていたの」

ところが、異変は起こった。

姉猫は、力を得てから急速なまでに

成長を遂げていった。

隠れていた才能が転生悪魔と

なったことで一気にあふれ出たと、

リアス先輩が言う。

「その猫は元々妖術の類に秀でた種族でした。

その上、魔力の才能にも開花し、

あげく仙人のみが使えるという仙術

まで発動したの」

短期間で主をも超えてしまった姉猫は力に？み込まれ、血と戦闘だけを求める邪悪な存在へと変貌していったそうだ。

「力の増大が止まらない姉猫は

ついに主である悪魔を殺害し、

『はぐれ』となり果てた。

しかも『はぐれ』の中でも

最大級に危険なものと

化したのです。

追撃部隊をことごとく

壊滅するほどの…」

悪魔達はその姉猫の

追撃を一旦取りやめたという。

「残った妹猫。悪魔達は

そこに責任を追及したの」

『この猫もいずれ暴走するかもしれない。

今のうちに始末した方がいい』と。

「処分される予定だったその猫を

助けたのがお兄様なの。

お兄様は妹猫にまで罪は無いと上級悪魔

の面々を説得したの。結局、

お兄様の監視する事で事態は收拾したの」

けど、信頼していた姉に裏切られ、

他の悪魔達に責め立てられた

小さな妹猫の精神は崩壊寸前だったそうだ…。

「お兄様は、笑顔と生きる意志を失った

妹猫を私に預けてくれたの。

妹猫は私達と出会って、少しずつ少しずつ

感情を取り戻していったの。

そして私はあの子に名前を与えたの

小猫と言う名を」

っ。

小猫ちゃんにそんな過去があったのか。

じゃあ、彼女は。

「あの子は元妖怪。猫又は知ってる？」

猫の妖怪。その中でも最も強い種族、

猫？の生き残り。妖術だけでなく、

仙術をも使いこなす

上級妖怪の一種なの」

ー○○○ー

リアス先輩の説明のあと俺は

修行に戻ったのだが、

小猫ちゃんの事が気になって

修行に身が入らなかった。

そんな中、小猫ちゃんの

目が覚めたと聞き急いで小猫ちゃん

の部屋へと向かった。

部屋に着くとイツセーが修行

から戻ってきており

先に小猫ちゃんと会っていた。

俺は邪魔してはいけないと

寝室の外で中の様子を窺っていると。

「…なりたい」

「え？なに？」

小猫ちゃんの眩きに

イツセーが訊き返すと、

小猫ちゃんは真つすぐとイツセーを見つめ、

ハッキリとした口調で言った。

目に涙を溜めながら。

「強くなりたいんです。裕斗先輩や

ゼノヴィア先輩、朱乃さん…そして

イツセー先輩やユウスケ先輩の様に

心と体を強くしていきたいんです。

ギャー君も強くなってきてます。

アーシア先輩のように回復の力もありません。

このままでは私は役立たずになってしまいます…。

『戦車』なのに、私が一番…弱いから…。

お役に立てないのはイヤです…」

「小猫ちゃん…」

最近小猫ちゃんの様子が可笑しかったのは。

それを気にしてたからか、

確かに最近、木場もギヤスパーも

強くなった。さらに聖剣を持ったゼノヴィア、

回復能力に特化したアーシアも加入し、

普段はあんなだが伝説のドラゴンを宿した

イツセーとクウガの力を持った俺も居る。

小猫ちゃんはボロボロと涙を

こぼしながらも続ける

「…けれど、うちに眠る力を…」

猫又の力は使いたくない…。

使えば私は…姉さまのように…。

もうイヤです…もうあんなのはイヤ…」

いつも感情をあまり表に出さない

小猫ちゃんのこんな泣き顔を俺は

始めて見た。

その顔を見て俺は胸が苦しくなった。

それだけ俺には衝撃だった。

この子はお姉さんが力を暴走させ、

主である悪魔を殺した。

そして、そのまま自分の元を去った。

そのすべてを見せられたと
リアス先輩は言っていた。

自分にも主を殺せるだけの危険な
力が眠っているのだと、

もしかしたら自分もリアス先輩をと、
けれども、これからの事情を考えると
力が欲しい。その矛盾した気持ちを

この子は抱えて冥界にまで来ていたんだ…。
オーバーワークは自分に眠る力を
使わずに強くしようとしたからか。

俺は小猫ちゃんに会わずに部屋を後にする。

「ユウスケ、小猫には合わなくていいの？」

「ええ、小猫ちゃんの気持ちは

イツセーが引き出してくれたので

俺は自分のすべきことをするだけです」

小猫ちゃんも自身の壁と向き合ってるんだ

俺だつて負けられない！

俺が広間で戻ってくると

ちようどアザゼル先生がやってきた

所だった。

「先生！次のステップをお願いします！」

「ふ、俺もそろそろかと思っていたが

心も燃えた所でちようどいいな

次のステップはこいつらとも相手してもらおう」

アザゼル先生が指を鳴らすと

腰ほどのチェスの駒が現れた。

「こいつはー！」

「なんだ知ってるのか、

こいつらはトレーニング用の

魔道人形『騎士』、『僧侶』、『戦車』

の三種だ。お前は奈美の攻撃と同時に

こいつらの相手もしてもらおう」
チエスの駒が変形して、
人型へと変形した。

馬の意匠に剣と盾を持つ騎士と
鶴の意匠の女性型の僧侶、

鰐の意匠に牙状の突起がついた

バックラーを装備した戦車の三体。

「三体とも強そうですね」

「今のお前なら一体が相手なら

どうにかなるだろうが、

奈美の攻撃を避けながら、

こいつらと交互に相手してみろ

ある程度慣れたら駒の個数を増やすからな

フォームチェンジを駆使して相手してみろ」

「分かりました！」

こうして俺の修行は始まるのだった。

—●—

「うおおおおおッ！」

俺は第二形態へと変わった

『戦車』の人形に殴りかかる。

ガキイイイインツ！

その皮膚は更なる硬度を持ち

俺の拳では歯が立たなかった。

騎士の速度、僧侶の魔力

どちらをとつても敵わず

他の二体にと違い

一度も勝つことが出来なかった。

ブウウウンツ！

ドカアアアッ！

人形の放った攻撃をまともに食らってしまった。
俺は吹き飛び、変身が解除されてしまう。

「グフウウツッ！」

「そこまでだ」

「ユウスケー！」

アザゼル先生の声に人形が止まり、
奈美先輩が駆け寄ってくる。

「俺はまだ戦えます！」

「いや、ここまでだ、

今日は修行の報告する日だろ

さっさと本邸向かえよ」

もうそんな日か先生の言う通り
そろそろ本邸に向かわないと
いけない時間だな。

—○●○—

本邸に着くと二人の人影が見えた。

「よお、イツセー、木場

お前達も帰ってきたのか」

「やあ、ユウスケ君」

久しぶりに見たイツセーも

木場もボロボロの

ジャージ姿だった。

すると木場がイツセーの上半身を見て眩く。

「…良い体になったね」

その言葉にイツセーは身を隠すようにする。

「や、やめろ、なんだ、

その目は…そういう目で

俺の体を見るな！」

当事者でない俺でも寒気がしたぞ。

「ひ、酷いな。僕は筋肉がついたねって
言いたかっただけなのに」

確かにイツセーは以前に比べて
がつしりした体つきに変わっていた。

まあ、そういう俺も前に比べて
筋肉はついた方だと思うが、
それに比べて、

「おまえは…：変わらないな」

「まあ、僕は肉が付きにくい体
だからね。二人が羨ましいよ」

「おー、ユウスケに

イツセーと木場か」

後ろから女性の声。

振り向けばゼノヴィアだった。

いや、ゼノヴィアだろうと推測だが、
何故か彼女は全身を包帯だらけで
格好もボロボロだった。

「ゼノヴィア、どうしたんだよ

その恰好…？」

俺が訊ねると、ゼノヴィアは
改めて自分の格好を見て言う。

「うん。修行してケガして

包帯巻いて修行してケガして
包帯巻いていたら、こうなった」

「そうか、ならアシアの

所に行つて治してもらつて来いよ」

彼女の奇行は相変わらずか、

だが、身に纏うオーラは

以前よりも静かで厚みがあるように見える。

そういえば、木場もイツセーも

オーラが濃くなっていたな。

「ユウスケさん！ イッセーさん！

木場さん、ゼノヴィアさんも！」

城門から出てきたのは

シスター服姿のアーシアだった。

「アーシア、久しぶりだな」

「イ、イッセーさん！」

ふ、服を着てください！」

イッセーの半裸にアーシアがあら

慌てている。

男の裸を見て恥ずかしいというよりも

イッセーの行いが恥ずかしいから

上に何か着ろという意味だろう。

アーシア意外と俺の裸は

見慣れているからな。

いまさら男の裸で慌てたりはしないか

「あら、外出組は皆

帰ってきたみたいね」

次に現れたのはリアス先輩だった。

「部長オオオオオオッ！」

会いたかったっス！」

「イッセー…随分たくましくなったわね。

胸板が厚くなったかしら」

「さて、皆。入ってちょうだい。

シャワーを浴びて着替えたら、

修行の報告会をしましょう」

はあ、成果があまりない事を

奉告しないといけないのか。

ー〇〇〇ー

俺達グレモリー眷属が全員集合

したのは実に二週間以上ぶりだった。
アザゼル先生から修行プランをもらった後、
以来の集合となるな。

外で修行していたイツセー、木場、
ゼノヴィアはシャワーを浴びて着替えた後、
イツセーの部屋に集まっていた。

集まって修行の内容を話していた。

俺は奈美先輩とチエス人形と共に修行を、

木場は師匠との修行顛末。

ゼノヴィアも修行の内容を。

イツセーはタンニーンの

サバイバル生活を話した。

俺達はイツセーの話に引いていた。

一人だけ修行のベクトルが

違うのか。

なんでコイツだけ

ハンターみたいな生活してるんだ？

「あの先生、なんか、俺だけ

酷い生活送ってませんか…？」

「俺もお前が山で生活できていたから

驚いたよ。途中で逃げ帰ると思っていたからな。

まさか、普通に山で暮らし始めていたとは

俺も想定外だった」

なるほど…、逃げ帰った後で

修行のメニューを教えるはずだったのが

サバイバル生活に順応したのかこいつが、

「ええええええええっ!？」

何それ…？お、俺、冥界産のウサギっぽい奴

とかイノシシっぽい奴を狩ってさばいて

焼いて食べてたんですよ…？

水だって、山で拾った鉄鍋で

一度沸騰殺菌してから

水筒に入れてたし：」

「だから驚いているんだよ。

おまえ、たくましすぎるぞ。

ある意味、悪魔を超えてる」

「酷い！こちとらあのお山で

ドラゴンに一日中追いかけて

回されて生活してたのにいいいっ！

何度死にかけたことか！

うえええええんっ！」

アザゼル先生の話に

イツセーは泣き出してしまう。

「部長と会いたくて会いたくて！

毎夜部長のぬくもりを思い出しながら

葉っぱにくるまって寝てたのにいいい！

辛かったよおおおっ！

ドラゴンのおっさん、

手加減しないで寝ている時も

襲ってくるんだもん！

岩が吹き飛んだよおおお！

山火事が俺を襲ってくるううううっ！

逃げろおおおおっ！

逃げなきゃ死ぬううううっ！」

「かわいそうなイツセー…。

よく耐えたわね。ああ、イツセー。

こんなにくましくなっ…。

あの山は名前がなかったけれど、

『イツセー山』と命名しておくわ」

イツセーも今回の事がトラウマ

だったのか、リアス先輩の

胸元で大泣きしていた。

「いや、それでもかなり

体力が向上したようだな。

これでいざ禁バランス・ブレイカー 手に至っても

鎧を着ている時間がそこそこあるだろう。

しかし、禁バランス・ブレイカー 手には至れなかったか」

イツセーも修行が達成出来なかったのか。

「ユウスケも基礎能力の

向上は出来たが、

『戦車』の姿にはなれなかった」

「ま、その可能性は予想していた範囲でもある。

ああ、お前達がショックを受ける事はないぞ、

イツセー。禁バランス・ブレイカー 手 ってのは

それほど劇的变化がないと無理という事だ。

サバイバル生活と龍王クラスのドラゴンとの

接触で何かが変化すると思ったんだが、

時間が足りなかったな。

せめて、あと一か月……」

まあ、俺の方だって条件が分かってないからな

いろいろ手を使つて探っているんだろうな

「ま、いい。報告会は終了。」

明日はパーティーだ。

今日はもう解散するぞ」

先生の一声に報告会は終了した。

こうして、俺の修行生活は

終わりを告げるのだった。

—●—

その日の夜。

既に時刻は就寝時間だが、

俺の部屋には、アジアとゼノヴィアと

奈美先輩が同室している。

四人で同じベッドを共にすることになっている。

三人とも広いベッドに落ち着かないと、俺の寝床に突撃してきた。

アーシアと奈美先輩は既に熟睡中だ。

修行で疲れたのだろう。

ゼノヴィアはまだ起きているようで、天井をじつと見つめていた。

そういえば初日も寝れない様子だった。

「…なんだ、お前、また眠れないのか？」

「…うん。なんだかんだで考えてみれば、

男と寝るのはまだ慣れないんだ。

いくら性的な意味でなくても：

緊張するものだな…」

おいおいマジかよ。

自分からここに来ておいて

緊張してるのかよ。

「そりゃな俺だって今は慣れてしまったけど、

アーシアと一緒に寝るようになった時は

緊張して眠れなかったし、

年頃の男女ならそれが当たり前だろ」

「そ、そうか。これは自然な事なんだね。

しかし、アーシアは凄いな。

安眠していそうだ」

「アーシアは…。家でいつも一緒に

寝ているからな。最初は恥ずかったけど、

今はもう慣れたよ」

「…ユウスケさん、私を置いて

いかないでくださいね…むにや…」

と、アーシアの寝言が…。

「ふふふ、みんながアーシアを

可愛がる理由がわかるよ」
ゼノヴィアが苦笑しながら言う。
そんな話をしていると、
いつの間にか、俺も意識が遠のき
夜はふけていった。

第62話「パーティ」

俺達が集合した次の日の夕刻、俺とイツセーは駒王学園の制服に身を包んで客間で待機していた。

今日はパーティに参加するからだ。

制服は学生の正装だからな

腕にグレモリーの紋様が

入った腕章をつけるだけで大丈夫らしい。

女子は準備に時間が掛かるとのこと、

全員メイドさん達に連れていった。

あと、木場もギヤスパーも

用事があるとかって

どっかに行っただけだな。

「兵藤兄弟か？」

聞き覚えのある声に振り返れば

そこに立っていたのは匙だった。

どうしてここにこいつが？

「匙どうしてここに？」

「ああ、会長がリアス先輩と

一緒に会場入りするってんで付いてきたんだ。

で、会長は先輩に会いに行っちゃったし、

仕方ないんで屋敷の中をうろろうろしてたら、

ここに出た」

まあ、この本邸、本当に広いからな。

迷ったあげくここに来たのか。

俺達から少し離れた席に座る匙が

真剣な面持ちで言う。

「もうすぐゲームだな」

「ああ」「ついにだな」

「俺は鍛えたぜ」

「俺もだ山で毎日ドラゴンに
追いかけられてた」

「そ、そうか。」

相変わらずハードな生き方してんな。

まあ、俺も相当ハードなメニュー

こなしたけどさ」

「それはお互い様だろ

今度のゲームの為に

俺もイツセーも今出来る

事を全力でやっただけさ」

まあ、そうだよな

匙も自身の主を勝たせたいだろうしな。

気合も入っているんだろうな。

匙は頬をかきながら言う。

「二人共、先月、若手悪魔が

集まった時の事覚えてるか？」

「たしか、レーティングゲームの

学校を作るって話か」

「ああ。それがどうかしたのか」

「あれ、俺達は本気だ。

…お、俺…。せ、先生に

なるのが夢なんだ！」

突然、匙は顔を真っ赤にしてそう言う。

「先生？何かを教えるのか？」

イツセーの問いに紅潮しながらも

真摯に答える。

「会長は冥界にレーティングゲーム

専門の学校を設立しようとしてる。

只の学校じゃないんだ。

悪魔なら上級下級貴族平民関係なしに

受け入れる、誰にも自由な学校なんだ。

会長に聞いたんだ。悪魔業界は
少しずつ、差別やら伝統やらなんか
緩和されてきたけど、

まだまだ根底の部分で受け入れがたい
部分もあるって。だから、

レーティングゲームの学校もいまだに

上級悪魔の貴族しか受け入れていない。

ゲームは誰にも平等でなければいけない。

これは現魔王様達がお決めになられた事だ。

平等なのに下級悪魔の平民には

ゲームの道が遠いんだよ。

おかしいだろ？もしかしたら、

貴族以外の悪魔でもやり方しだいでは

上級悪魔に昇格できるかもしれないのによ。

可能性はゼロじゃないはずなんだ！」

匙の真剣な意見に俺達は驚いていた。

匙は匙なりに将来を真面目に考えてるんだな。

「会長はそれをなんとかしたいって言ってた。

下級悪魔でもゲームができるってことを

教えたいって。だから、

この冥界に誰でも入れる学校を作るんだよ！

会長はその為に人間界でも勉強されているんだ！

スポーツが決して当たらなかった者達に

可能性を与えるんだ！

一パーセントでも！ゼロに限りなく近くても！

ゼロじゃなきゃ上級悪魔になれるかもしれないんだ！

一誠！俺達だって、その可能性を信じて

上級悪魔になろうとしているだろ？」

「ああ、その通りだぜ」

ドラゴンの力を宿した二人だ、

確かに可能性はゼロじゃない筈だ。

「だ、だからこそ、俺はそこで先生をするんだ。いっぱい勉強して、いっぱいゲームで戦って、いろんなものを蓄える。それで

『兵士』のことを教える先生になるんだ。

会長が俺にも手伝って欲しいってさ。

こんな俺でも学校の先生になれるかもしれない…。

お、俺、昔はバカなことばかりやっていき。

親にも迷惑かけたし、周りの人間にも嫌われてた。

でもよ、会長となら、夢が見れるんだ！

俺は生涯会長の御傍に居て会長の手助けする！

会長の夢が俺の夢なんだ！」

匙は照れながら言う。

「へへへ。お袋にはさ、

悪魔になった事は内緒だけど、

それでも将来の夢を話したら泣いちゃまってよ。

先生になるんだ！ってガラにもない事

言ったからかもしれないな。

でもよ、悪くないよな。

おふくろの安心した顔ってよ」

それが匙の夢か。

誰かの夢を叶えるのが夢か

こういう夢の形もあるのか…。

匙は会長の手助け、イツセーはハーレム王か

本当に夢は人それぞれと感じたな。

「良い夢だな。俺達は応援するぞ」

「ああ、立派な目標だと思うぜ、匙。

いい先生になれよ」

「ああ、そのためにも今度

お前達を倒さなきゃいけないんだけどな」

「あー、なるほど。なら、ダメだ。

俺達が勝つきー！」

「いや、俺達が勝つさ。」

上にバカにされた以上、

俺達は結果で見せなきゃいけない」

イツセーと匙はお互い笑いながらも

瞳は真剣そのものだ。

俺も胸張って語れる夢が欲しいな。

しかし、先生か。

先生というのアザゼル先生が

浮かび上がるな。

あの人はいい加減に見えて、

人に物を教える事がうまかったな。

人を導くのがうまいのは

流星組織のトップだと思ったな。

そんな時、

「ねえ、ユウスケ」

声の方に振り返ると奈美先輩がこっちに

手招きして俺を呼んでいた。

俺はそちらに近づく

「どうしたんですか奈美先輩？」

「貴方、これからパーティなんでしょ。」

なんか知らないけど、

何かまた悩んでる顔してたから

呼んだのよ！

いい！そんな顔でパーティ

なんて行っちゃだめよ！

それじゃあ、主であるリアスに

迷惑かけるでしょ、

だいたい予想はつくけど

貴方はまず今度のゲームに勝つ！

それが皆での目標でしょう

気張りなさい、ユウスケ！」

そう言つて奈美先輩は
俺の背中を叩いてくる。
それだけで俺は元気を
分けてもらえた気がした。

「ありがとうございませす。奈美先輩！

俺、頑張つてきます！」

俺は奈美先輩にそう伝え
イツセー達の元へと戻る。

すると、そこにはリアス先輩達が
やってきていた。

皆、化粧してドレスアップした姿だった。

全員普段と違う衣装で新鮮だった。

だが一人だけ問題な奴がいた。

「なんでお前までドレス姿なんだよ！」

イツセーに突っ込まれたのはギヤスパーだった。

用事があると言つていなくなつたと思つたら

この為だったのか、似合っているから

余計におかしく思える。

コイツの女装癖はここまで来たら

大したものだよ全く。

「サジ。サジ。どうしました？」

皆と同じくドレスアップしたソーナ会長が

匙の様子を怪訝そうに見て声を掛けていた。

当の匙は呼びかけに反応が無く。

ただただ小言を呟いているだけだった。

いや、俺がいない間に何があつた!?

俺達が会長達と挨拶を終えた後、

庭の方から地響きと共に

何かが着地したような

重い音が響いた。

しばらくして執事さんが来て言う。

「タンニーン様とその

ご眷属の方々がいらつしやいました」

―●〇〇―

庭に出ていみると圧巻の光景が広がっていた。以前出会った元龍王と呼ばれたドラゴンと同じサイズのドラゴンが九体もいる。

タンニーン様の眷属は全員がドラゴンなのか。

「約束通り来たぞ、兵藤一誠」

「うん！ありがとうございます、おっさん！」

「お前達が背に乗っている間、

特殊な結界を背中に発生させる。

それで空中でも髪や衣装やらが乱れないだろう。

女はその辺大事だからな」

女性への気遣いも完璧かよ。

このドラゴン様は。

「ありがとう、タンニーン。会場まで頼むわ。

シトリーの者もいるのだけれど、

大丈夫かしら？」

「おおっ、リアス嬢。

美しい限りだ。そちらの件は任せてくれ」

かくして俺達はドラゴンの背に乗り、

冥界の大空に飛び出した。

―〇〇〇―

パーティー会場となる超高層高級ホテルは、グレモリー領の端っこにある
広大な面積の森の中に
ポツカリと存在していた。

俺達に乗せたドラゴン達は、
スポーツ競技をする会場らしき
ところに降り立った。

「じゃあ、俺達は大型の

悪魔専用の待機スペースに行く」

「ありがとう、タンニーン」

「おっさん！ありがとう！」

イツセーとリアス先輩がタンニーン様に
お礼を告げる。

タンニーン様達は再び羽ばたき、
この敷地のどこかに移動していった。

その後、俺達は到着したスポーツ会場まで
向かいに来ていたホテルの従業員に連れられ、
高級そうなリムジンの乗車して
ホテルへと向かっていった。

少し前まではこんな車には
一生縁がないと思っていたがな。

俺の隣にはドレス姿の

アーシアとゼノヴィアが座っていた。

後方のリムジンには

シトリー眷属の皆さんが乗っている。

リアス先輩が向かいでイツセーは

タンニーン様の頭に乗っていたから
結界の中に居なかつたので

乱れてしまった。

襟元を正しながら説明をしてくれる。

「ホテル周囲に各施設も存在してて、
軍も待機しているわ。

下手な都市部よりもよっぽど嚴重なのよ？」
さらにリアス先輩は櫛を取り出して、
イツセーの身だしなみを整える。

子供じゃないんだから自分で
やりなさいよ。

「リアス先輩、アザゼル先生は
どうしたんですか？」

「あの人は他のルートでお兄様達と
合流してから向かうそうよ。

すっかり仲よしこよしなのだから…」

まあ、仲が悪いよりはいいのでは？

苦笑いする俺達にリアス先輩は
すぐに真剣な面持ちになる。

「さっきタンニーンの背で

ソーナに戦線布告をされたわ。

『私達は夢の為に貴方達を倒します』と

そんな事があったのか、

下の風景を見るのに夢中で

気が付かなかつたよ。

「学校。レーティングゲームの学舎。

ソーナはそれを建てるために

人間界で学生をしながら、

人間界の学校システムを学んでいた。

誰でも入れる土壌のある人間界の

学校はソーナにとって

重要なものだったのよ」

匙も同じことを言っていた。

会長は夢の為に学園にいるのだと。

イツセーも同じことを考えていたのか

リアス先輩に伝えていた。

「部長、匙も言っていました。

『先生になる』って。

すっげえ眼を輝かして語ってて、

でも真剣な目標で…」

「それでも勝つわ。」

私達の夢と目標であるのだから」

リアス先輩の決意は固かった。

相手が親友でも手は抜かないだろう。

いや、親友だからこそ全力で

挑むんだろうな。

なら、俺達もその気持ちに

答えて全力でぶつかるだけだな！

そうこうしているうちにリムジンは

ホテルに到着。出ていくと、

大勢の従業員に迎え入れられる。

そのままに入り、

フロントで朱乃さんが確認を取って、

いざエレベーターへ。

「最上階にある大フロアが

パーティ会場みたいね。イツセー、

各御家の方に声を掛けられたら、

ちゃんと挨拶するのよ？」

「は、はい。それはそうと部長。」

今日のパーティは：

若手悪魔の為に魔王様が

用意されたんですか？」

「それは建前。」

どうせ私達が会場入りしても

大して盛り上がりもしないわよ。

これは毎度恒例なの。どちらかというと、

各御家の方々がおこなう

交流会みたいなものね。

私達次期当主はおまけで、

本当はお父様方のお楽しみ

パーティみたいなものよ。

どうせ、四次会五次会まで

近くの施設で予約入れているのでしようし、

私達と別行動で会場入りしているのが

良い証拠。若手よりも先に集まって、

すでにお酒でできあがっているのではないかしら」

リアス先輩は不機嫌そうな

顔で愚痴を口にしていた。

隣で朱乃さんと木場も苦笑していた。

リアス先輩はこの手のパーティ：

というよりもお父さん達の行動に

うんざりしてそうだな。

このパーティは普段の社交界とは違う

気借なパーティだから

お父さん達はハメを外せる

数少ない行事として

楽しみにしているんだな。

エレベーターも到着し、

一步出ると会場入り口も開かれる。

そこではきらびやかな広間が

俺達を向かい入れてくれた

フロアいっぱいの大勢の悪魔と

美味しそうな食事の数々、

『おおっ』

リアス先輩の登場に誰もが注目し、

感嘆の息を漏らしていた。

「リアス姫。ますますお美しくなられて…」

「サーゼクス様もご自慢でしょうな」

と、リアス先輩に皆見惚れてる。

先ほどリアス先輩は盛り上がりもしないって

言ってたが、十分盛り上がってるじゃないか。

「ううう、人がいっぱい…」

「またもイツセーの背中に
ドレス姿のギヤスパーが
ピッタリと引っ付いていた。」

「お前、修行で人見知りの
訓練してたんじゃないのかよ」

「まあ、逃げないだけ改善されたんだな。」

「イツセー、ユウスケ、」

「あいさつ回りするわよ」

「へ？」

「間の抜けた声で返事した俺達だった。」

「何でも伝説のドラゴンとクウガが」

「悪魔になったことは有名らしく、」

「あいさつしたいって上級悪魔の」

「方々が大勢いらっしやるみたいだった。」

「そんなわけで俺達はリアス先輩に」

「連れられてフロアを一周する事になった。」

「あー、ちかれた」

「これは、思った以上に」

「きつかったな」

「挨拶も終え、俺達は解放された訳だが…」

「フロアの隅っこに用意された椅子に」

「俺とイツセー、アーシア、ギヤスパーが」

「座っていた。」

「リアス先輩、朱乃さんは」

「遠くで女性悪魔方と談話していた。」

「木場が遠くで女性悪魔に囲まれていた。」

「俺達はパーティに気疲れして、」

「ぐったりしていた。」

「たまにアーシアに声を掛けてくる」

「男性悪魔が居たがな。」

「俺とイツセーで追っ払っていた。」

「皆、料理をゲットしてきたぞ、食べ」

先ほど席を立ったゼノヴィアが

大量の皿を器用に持ってやってきた。

皿の上には豪華な料理の数々。

「ゼノヴィア、悪いな」

俺は料理を運んできてくれた

ゼノヴィアに礼を言い

皿を受け取る。

「いや、何。このぐらい安いものだ。

ほら、アーシアも飲み物ぐらい

口を付けた方がいいぞ」

「ありがとうございます。ゼノヴィアさん…。

私、こういうの初めてなんで、

緊張して喉がカラカラでした…」

アーシアはゼノヴィアからグラスに入った

ジュースを貰うと、口を付け始めた。

俺も貰った料理に手を付ける。

と、そこへ人影が。

見覚えがあるドレスを着た女の子だった。

真つ直ぐイツセーを睨んでいた。

「あ、おまえは」

「お、お久しぶりですわね、赤龍帝」

「焼き鳥野郎の妹か」

そう、イツセーに近づいてきたのは

リアス先輩の元婚約者、

ライザー・フェニックスの妹、

レイヴェル・フェニックスだった。

「レイヴェル・フェニックスです！

まったく、これだから

下級悪魔は頭が悪くて嫌になりますわ」

彼女はイツセーの態度にぶんすか怒っていた。

「悪かったな。で、兄貴は元気か？」

兄貴の事を聞いたら、

レイヴェルはため息を吐く。

グロンギに技術を盗まれたから

処分でも受けたか？

「…貴方達のおかげで塞ぎ込んでしまいましたわ。

よほど敗北とリアス様を貴方に取られた事、

一番信用していた『女王』に裏切らえた事が

シヨックだったようです。

ま、才能に頼って、調子に乗っていたところ

もありますから、良い薬になったはずですわ」

手厳しいな。仮にも兄貴だろうに、

「それで、ザビネに涙の

製造方法など技術を盗まれたけど、

それで兄貴は何か処分は食らったのか？」

「あら、クウガもいらっしやったんですね。

ええ、情報漏洩で謹慎を言い渡されましたわ。

まあ、そのまま引きこもってしまいましたわが」

俺の事は眼中にないってか…。

そんなレイヴェルの発言に

顔を引きつらせながら

イツセーが話を続ける。

「ハハハ…容赦ないな。

一応お前も兄貴の眷属だろう？」

「それなら、現在トレードを済ませて、

今はお母さまの眷属ということに

なってますわ。お母さまが、

自分の持っていた未使用の駒と

交換してくださったの。

お母さまは眷属になりたい方を

見つけたら、トレードしてくれると

おっしゃってくださいましたから、
実質フリーの『僧侶』ですわ。
お母さまはゲームしませんし」

「トレード？」

聞き返したイツセーだったが、
その制度は俺も知らなかった。

「あら？(´▽`)存じないの？・トレード。

レーティングゲームのルールの一つで、

『王』である悪魔の間で自分の駒を
交換することができますの。

同じ種類の駒であることが条件ですわよ」

はあ、そんなルールがあったのか、
なるほど、眷属を大事にしている

グレモリー眷属には無縁のルールって事か。

「と、ところで赤龍帝」

「その赤龍帝ってのはやめてくれ。

俺は兵藤一誠って名前があるしき。

お前、俺と同じ年ぐらいだろ？

なら、普通にいいて。皆、

『イツセー』って呼んでるぞ？」

そういうイツセーだが、

リアス先輩の母親の見た目忘れたのかよ

悪魔は見た目を自由にいじれるから

実年齢がいくつか分からないだろうに。

「お、お名前でも呼んでも

よろしいのですか!？」

突然、態度を変えたな

さっきまで見下した言い方だったのに

今では嬉しそうにしてるし、

もしかして、同年代の友人がいないとか？

「コ、コホン。では、

遠慮なく、イツセー様と

呼んで差し上げてよ」

「様？いやいや、だから

そういうのはいいて」

「いいえ、これは大事な事です！」

そこへ別の女性がやってきた。

「レイヴェル。」

旦那様のご友人がお呼びだ」

確か、ライザー眷属の一人だったはずだ。

「分かりましたわ。イツセー様、

今度、お会い出来たら、

お茶でもいかがかしら？

わ、わ、わ、私でよろしければ、

手製のケーキをご、ご、

ご用意してあげてもよろしくてよ？」

レイヴェルはドレスの裾を

ひよいと上げ、一礼して去っていた。

「やあ、兵藤一誠」

今度はイザベラさんが

イツセーに話しかけてきた。

「あんたはフェニックス家の

イザベラさんだよね？」

「ああ、あの時はいい一撃をもらった。

まだ覚えているよ。

そっちの兵藤祐介とも戦って見たかったよ

二人共また強くなったそうじゃないか。

君が強くなればなるだけ私の話しも

自慢話になるのかな」

「えーと、あいつ…」

レイヴェルの付き添いですか？」

「まあ、そんなとこ。」

あの子もあの子で我が主
ライザー様と同じぐらい
掴めない所があるものだから…。
婚約パーティーでの一戦以来、
レイヴェルは君の話ばかりを
しているよ。

ライザー様と君の戦いが
とても印象的だったようだ」

「どうせ文句でしょう？」

兄貴の婚約邪魔したし、

あいつにも暴言吐いたし」

「…いや、逆なわけだが。」

まあいい。いずれ、わかるだろう」

「？とりあえず、

お茶はOKだと言っておいてください」

「本当か？」

それはありがたい。

レイヴェルも喜ぶだろう。

さて、私はこれにて失礼する。

良い宴を」

そのままイザベラさんは
手を振って去っていった。

「…イツセー先輩って、

意外に悪魔の交友が

多いんですね…」

ギヤスパーは尊敬の眼差しで
イツセーを見つめていた。

それは、俺も思ったな

言葉使いはおかしかったが

赤龍帝だからか色んな人の
注目を引くんだろうな。

そんな事を考えていると

視界の端に小さな影が映る。

小猫ちゃんだ。

何やら急いでパーティ会場を

出ようとしている。

その表情は何か夢中なものだ。

何があったんだ？

突如、不安が俺を襲う。

何か嫌な予感がするな。

イツセーも小猫ちゃんに気が付いたのか

慌てて後を追う。

「三人共、ここで待っていてくれ」

「ユウスケさん、どうしたんですか？

イツセーさんもどっか行っちゃいましたよ、

もうすぐ魔王様の挨拶が始まりますよ」

「いや、ちよつと挨拶が出来なかつた

知り合いが見えたから会ってくるよ。

魔王様の挨拶までには戻ってくるよ」

「わかつた。私達はここにいますぞ」

「ああー」

二人には嘘をついてしまった。

大事にしたくは無かつたし、

もしかしたら気のせいかも

知れないからな。

俺は席から立ち上がった

イツセーの後を追う。

彼女はエレベーター乗って行く。

下に向かつたのか？

隣のエレベーターにイツセーが

乗り込んでいたので

俺も後に続く。

すると、さらに誰かが
乗ってくる。

振り返ればそれはリアス先輩だった。

「どうしたの二人共？」

血相をかえて」

「小猫ちゃんを見たんです」

「何かを追うように飛び出して行って」

「なるほど、二人共その姿が

気になったのね。わかったわ、

私も行く」

「わかりました！」

「はい！けど、

良く俺がエレベーターに

乗り込むの分かりましたね？」

怪訝に思うイツセーに

リアス先輩はニッコリしながら

答える。

「私は常に貴方の事を見ているんだから」

第63話「姉猫」

エレベーターは一階まで降りた。

外に出て、近くにいた悪魔に

小猫ちゃんの特徴を伝えて、

此処を通ったか尋ねてみる。

何人目かで、外に出た事が判明した。

リアス先輩は急いで使い魔のコウモリを

呼び出して空へ放った。

コウモリが返ってくるまで、

俺達は公園の外にある噴水前で待機した。

「やはり小猫の様子はおかしいわね」

「ずっと落ち込んでいたのに

彼女に何かあったんですかね」

「でも、小猫ちゃんが

あそこまで追う者って何でしょうか？」

イツセーの問いにリアス先輩は

深く考え込むが、何も答えてくれない。

少ししてリアス先輩のコウモリが帰ってくる。

「見つけたようね。森？」

ホテル周辺の森にあの子は行ったのね？」

俺達はコウモリの後を追って走り出す。

明るい場所を抜け出て、

闇夜の森を俺達は走り抜く。

なんとか、人の手が入っているようで、

走れない程ではない。

森を進むこと数分。

リアス先輩が俺達の腕を引き、

木の陰に隠れさせる。

木から顔を少し覗かせると、

小猫ちゃんの姿が！
小猫ちゃんは何かを探し求める
ように森の真ん中でキョロキョロと
首を動かしていた。そして、
何かに気付いて視線をそこへ。
俺達も小猫ちゃんの視線の先に
目を向けた。

「久しぶりじゃない？」

聞き覚えのない声が聞こえた。

音も立てずに現れたのは

黒い着物に身を包んだ女性だった。

どことなく、小猫ちゃんに似ている。

…って、よく見れば頭部に猫耳が!?

彼女の正体に気が付いた俺達に、

リアス先輩は「しーっ」と

様子を静観するように指示してくる。

「っ！……あなたは」

小猫ちゃんは酷く

驚いた様で全身を震わせていた。

「ハロー、白音。お姉ちゃんよ」

白音？

それが、小猫ちゃんの

本名なのか。

確か小猫って名前はリアス先輩
が与えたと言ってたな。

「黒歌姉さま……！」

絞りだすような声の小猫ちゃん。
っ！

小猫ちゃんのお姉さん！

確かにどことなく似ている気がする。
っ！
っ！

主殺しの危険な「はぐれ悪魔」
つてことじゃねえか！

黒歌の足元に黒い猫がすり寄る。

「会場に紛れ込ませたこの黒猫一匹で

ここまで来てくれるなんて

お姉ちゃん感動しちゃうにや！」

なるほど、小猫ちゃんは

あの黒猫を会場で見かけてここまで

来たのか。

「…姉さま。これはどういうことですか？」

小猫ちゃんの声には怒気が含まれていた。

しかし、相手は笑うだけだ。

「怖い顔しないで。ちよつと野暮用なの。

悪魔さん達がここで大きな催ししているって

いうじゃない？だからあ、

ちよつと気になっちゃつて。にゃん♪」

手を猫みたいにしてかわいくウインクする

黒歌。

「ハハハハ、こいつ、もしかして

グレモリー眷属かい？」

「こいつが、前に話していたお前の妹か？」

今度は聞き覚えのある声が。

さらに姿を現したのは

古代中国の鎧みたいなのを

着た男。孫悟空の美猴ツ！

それにもう一人は、

ラフな服装の茶髪の男

間違いない！東城雄輔ツ！

こいつらは『禍の団』だったはず！

このパーティーを狙ったテロ行為か！

ふいに美猴の視線が俺達の方へ向けられる。

気づかれたか!?

「気配を消しても無駄無駄。」

俺っちや黒歌みたいに仙術知ってるど、
気の流れの少しの変化だけで
だいたいわかるんだよねい」

バレたか、

流石にここで戦闘は避けたかったんだがな。

俺達は意を決して、

木陰から姿を現した。

俺達を確認して、

小猫ちゃんは驚いていた。

「：イツセー先輩、ユウスケ先輩、部長」

「よう、クソ猿さん。」

ヴァーリは元気かよ?」

「久しぶりだな。東城、

まさか冥界で再会とはな」

「ハハハハ、まあねい。」

そっちは…へえ、

多少は強くなったのかねい」

「そうか、美猴がそう言うなら

楽しめそうだな」

俺達の体を見ただけで

そこまで分かるのか?

「言つたろ?俺っちは仙術も

嗜んでいるんでねい、

気の流れとかである程度わかるのさ。

お前さんらを覆うオーラの量

が以前よりも上がっていたんでねい」

ゲームや漫画でよく見る

仙術がまさか本当にあるとはな

しかも敵対するとは思わなかったぞ!

「なんでここにいるんだ？テロか？」
イツセーが三人に直球で訊ねるが、
三人共笑うだけだった。

「いんや、そういうのは俺っちらに
降りてきてないねい。ただ、
冥界で待機命令が出ていてねい。

俺達は非番なのさ。したら、
黒歌が悪魔のパーティ会場を
見学してくるって言いだしてねい。

なかなか帰って来ないから、
こうして迎えに来たって訳。OK？」

「おい、美猴あまりベラベラ

余計な事喋るじゃない」

「まあまあ、良いじゃねいかい。

堅い事いうなよ」

東城が言う通り、

この猿結構重要なこと

喋っていたな。

相手の話が本当なら

偶然が重なっての遭遇って訳か。

「美猴、誰、この子達？」

黒歌が俺達を指差して美猴に訊く。

「赤龍帝とプロトクウガ」

それを聞いて、黒歌は目を丸くしていた。

「本当にやん？へえ〜。

こっちがヴァーリを退けた

おっばい好きの現赤龍帝と

ユウスケが気に入った

もう一人のクウガなのね」

：マジかよ、

イツセーは敵にもそんな

認識なのかよ。

美猴はあくびしながら言う。

「黒歌く、帰ろうや。」

どうせ俺つちらはあのパーティーに参加できないんだし、無駄さね」

「既に時間を無駄にしてるんだ

美猴の言う通り帰るぞ黒歌」

「そうね。帰ろうかしら。」

ただ、白音はいただくにやん。

あのと時連れて行って

あげられなかったからね♪」

「あーら、勝手に連れ帰ったら

ヴァーリも怒るかもだぜ？」

「その妹は使えるんだろうな

黒歌？」

「ええ、この子にも私と同じ力が

流れていると知れば、オーフィスも

ヴァーリも納得するでしょ？」

「そりやそうかもしれないけどさ」

「今は只の雑魚だろ。」

即戦力にはなりそうにないが？」

「そこは私が手取り足取り、

鍛えてあげるにやん」

黒歌が目を細める。

小猫ちゃんはそれを見て

小さな体をビクつかせた！

怖がっているのか。

そこヘイツセーが両者の間に入り、

真正面から宣言する。

「この子は俺達リアス・グレモリー眷属の大事な仲間だ。連れて行かせ

わけにはいかない」

「ああ、数は三対三だ、この子は

絶対奪わせやしない！」

俺もイツセーの隣に立ち、

三人に向けて吼える。

俺達の行動を見て、

美猴も黒歌も東城も笑う。

「いやいや、勇ましいと思うけどねい。

流石に俺達相手にできんてしょ？」

今回はその娘もらえればソツコーで

立ち去るんで、それで良しとしようやな？」

そんなことを美猴は言う。

完全に舐めてやがるな。

このクソ猿が！

リアス先輩が憤怒の表情で前に出る。

「この子は私の眷属よ。」

指一本でも触れさせないわ」

「あらあらあらあら、何を言っているのかにや？」

それは私の妹。私にはかわいがる権利があるわ。

上級悪魔様にはあげないわよ」

ピリッ。

この空間の空気が様変わりしたのはわかる。

リアス先輩とお姉さんが睨み合って、

一触即発の様相を帯びてきた！

先に睨みを止めたのは黒歌だった。

ニッコリ笑うと言う。

「めんどいから殺すにゃん♪」
っ。

その瞬間、言い知れない感覚が俺達を襲う！

なんだ、別の場所に飛ばされた感じがしたぞ！

風景は変わらないのに、

空気と雰囲気だけが変わったようだ。

「…黒歌、あなた、仙術、妖術、魔力だけじゃなく、空間を操る術まで覚えたのね？」

リアス先輩が苦虫を噛んだ表情で言う。

「時間を操る術までは覚えられないけどねん。」

空間はそこそ覚えたわ。

結界術の要領があれば割かし楽だったり。

この森一帯の空間を結界で覆って外界から

遮断したにやん。だから、

ここでド派手なことをしても外には漏れないし、外から悪魔が入ってくることもない。

貴方達は私達にここで殺されてグッバイにや♪」

黒歌の話しが本当なら増援は望めない。

俺達だけでこの場を何とかしないとイケないのか。

こいつら相手に逃げられそうにもないからな。

その時だった。空中高くから、声が聞こえてくる。

「リアス嬢と兵藤兄弟がこの森に行ったと

報告を受けて急いで来てみれば、

結界で封じられるとはな…」

この声！見上げるとそこには。

「タンニーンのおっさん！」

元龍王のタンニーン！

まさかここで心強い援軍が現れるとは！

「ドス黒いオーラだ。」

このパーティには相応しくない来客だな」

美猴が空のドラゴンを見て歓喜する。

「おうおうおう！ありや、

元龍王の『ブレイズ・ミーティア・ドラゴン魔龍聖』タンニーンじゃないかい！

まいったね！こりや、もう大問題だぜ、

ユウスケ！黒歌！やるしかねえって！」

「うれしそうね、お猿さん。いいわ。」

龍王クラス以上の首を二つ持っていていけば、
オーフィスも黙るでしょうね」

「いいね。ことうでないと、」

あのクウガの首を持っていけば
奴等も俺が真のクウガと認めるだろうしな」

黒歌とユウスケも殺気を放って

こつちを見つめている。

前と違って今度は

俺達を殺す気でくるな。

「筋斗雲ッッ！」

叫ぶ美猴の足元に金色の雲が出現し、

そのままタンニーンがいる空へ飛び出しいく！

「如意棒ッ！」

美猴の手元に長い棒が現れ、

タンニーン目がけて解き放つ！

「伸びろオオオオッ！」

如意棒ッッ！」

ギユウウウウウッッ！」

棍が伸びてタンニーンを襲おうとするが、

その巨体に似つかわしくない速度で

回避する！速いッ！体はあんなに大きいのに、

動きは俊敏なものだ！

「もう一丁！」

美猴はそのまま長く伸びた棍を横薙ぎに振るい、

回避したタンニーンに追撃する！

しかし、タンニーンは翼をうまく使って

宙で回転し、さらに回避した！

回転した状態のままタンニーンが

口を大きく開くッ！

ゴバアアアアアアアアアアッ！

大質量の火炎が空一面を覆い尽くした！

これが龍王クラスのブレスかッ！

以前アザゼル先生がタンニーンの火の息は隕石の衝撃と同じくらいだと言っていた。

ならこれほどの炎でも全力じゃあないって事か。

俺達を気にして力を抑えているのか！

大質量の炎が消え去った後

空中には全身から煙を立てる美猴の姿が。

「アハハ！やるねい！元龍王！」

笑っている。

鎧や衣服は焦げているだけで、

身体の方は無事だった。

あの威力の炎を食らって

生きているなんて、

さすが孫悟空ってことか！

「ふん！何者かと思えば孫悟空か！」

このタンニーンの一撃を

受けきるとはなんとも

楽しませてくれるわ！」

「美猴ってんだ！」

よろしくな、ドラゴンの大将！」

「クククク。猿如きが言ってくれる。

お前ら、いったい何を相手に

しているのかわかっているのか？」

「俺たちも伝説の妖怪の血を

引いてるんでねい。

そうそうやられるわけにもいかないさ」

「何にせよ、この猿は俺が相手してやろう。

リアス嬢と兵藤兄弟はその間にその猫と男

を倒して見せろ。

赤龍帝の主と赤龍帝、クウガだろう？

それぐらい乗り越えてみるんだな」

俺達でこの二人の相手か。
人数としたら四対二だがな。

「ハハハハッ！大きく出たねい！
俺っちと一人でいいだなんてさ！」

「鳴くな、猿。たかが猿一匹だ。
造作もない！それで豚と妖仙はどうした？
仲違いか？」

「八戒と悟浄の末裔のこかい？

ハハハハ！俺っちの一族の奴等も含めて、
皆保守派さね！だからこそ、『禍カオス・ブリゲードの団』
の誘いも喜んで受けて白龍皇ヴァーリ
と行動共にしてたりしてんだよねい！」

「フン！初代に一番近い気性は
貴様かもしれんが、
白龍皇と何を企んでいる？

噂では貴様達の部隊だけ別行動
を許されているというではないか！

オーフィスの『蛇』も与えられていない
唯一のチームとも聞いた！」

「聞きたきや俺っちに
勝ってみなよ！」

「言うか、猿めツツツ！ここは『あの世』
と呼ばれし地獄こと冥界だ！

貴様ら雑魚が後悔するには最高の場所だと知れツ！
ドンツ！ドゴンツ！

タンニーンと猿が空中で激闘を
繰り広げ始めた。

元龍王ならあの孫悟空を
倒してくれるだろう。

問題は…。

「ぐゃんん」「フフフ」

黒歌と東城だ！

二人共笑っているが、
ドス黒いオーラを全身から
滲みだしている！

二人からは俺達への
強い悪意と殺意を感じる！

「…姉さま。私はそちらへ行きます。

だから、二人は見逃してあげてください」
ッ!?

突然小猫ちゃんがそんなことを口走る！

「何を言うん」

俺が言い掛けようとするが、

「何を言っているの!? 小猫！」

貴方は私の下僕で眷属なのよ！

勝手は許さないわ！」

リアス先輩が間髪入れずに

小猫ちゃんを抱きしめる！

しかし、小猫ちゃんは

首を横に振る。

「…駄目です。姉さまの力を

私が一番よく知っています。

姉さまの力は最上級悪魔に

匹敵する者。

部長とイツセー先輩、

ユウスケ先輩では…。

元龍王の力があっても幻術と

仙術に長けている姉さまを

捉えきれるとは思えません…」

「いえ、それでも絶対に貴方は

あちら側に渡すわけにはいかないわ！

あんなに泣いていた小猫を目の前の

猫又は助けようともしなかつた！」

リアス先輩の激昂に黒歌は笑う。

「だって、妖怪が他の妖怪を助ける

わけないじゃない。ただ、

今回は手駒が欲しいから

白音が欲しくなっただけ。

そんな紅い髪のお姉さんより

私の方が白音の力を

理解してあげられるわよ？」

黒歌の言葉に小猫ちゃんは首を横に振る。

「…イヤ…あんな力いらない…」

黒い力なんていらぬ…

人を不幸にする力なんていらぬ…」

ふるふると震え、

涙をポロポロこぼし始めた。

リアス先輩はいつそう強く抱きしめる。

「黒歌…。力におぼれたあなたはこの子に

一生消えない心の傷を残したわ。

貴方が主を殺して去ったあと、

この子は地獄を見た。私が出会った時、

この子に感情なんてものはなかったわ。

小猫にとって唯一の肉親であった

貴方に裏切られ、頼る先を無くし、

他の悪魔に蔑まれ、罵られ、

処分までされかけて…。

この子は辛い物を沢山見てきたわ。

だから、私はたくさん楽しい物を

見せてあげるの！

この子はリアス・グレモリー眷属の

『戦車』塔城小猫！

私の大切な眷属悪魔よっ！

貴方に指一本だって
触れさせやしないわっ！」

それを聞いて、小猫ちゃんは
涙を溢れさせていた。

「…行きたくない…。私は塔城小猫。

黒歌姉さま、貴方と一緒に行きたくない！

私はリアス部長と一緒に生きる！生きるの！」

小猫ちゃんの叫び！

それは姉との絶縁とも言える宣言だった。

よし！小猫ちゃんの本音を

聞いたんだ！俺達もやる気が出てきたぜ！

「よし、もういいか？

殺ろうぜ！祐介！」

東城が赤のクウガに変身する。

「お前の相手は俺がする。

いいだろ？黒歌！」

「別にいいにやん♪

私はその二人を相手にするにやん♪」

「ハハ、いくぞ！」

東城は俺に突然殴りかかってくる。

俺は即座に変身し、ガードするが、

耐えられず吹き飛ばされてしまう。

「おいおい、簡単にはやられてくれるなよ！」

吹っ飛ばされた先で体制を立て直した俺に

東城が肩を回しながら声を掛けてくる。

皆と分断された。だが、コイツの相手は

俺がやるべきだな。

修行の成果見せてやる！

「超変身！」

俺は『ビシヨップフォーム深碧のクウガ』に変身する。

近くの枝を折りレイピアに変化させる。

「またその姿かそいつの攻撃はタイタンで防いだし、それにな」

東城は話の最中、『青のクウガ』ドラゴンフォームに変身し、跳躍で俺との距離を詰めてくる！

「こうやって、距離を詰めれば狙う暇もねえだろ！」

俺は慌てず呪文を呟く。

「炎よー！」

『Fire!』

ボオウツ！

呪文の後、俺の周りを炎のサークルが展開される！

「クッー！」

東城は炎に気が付くと即座に距離を取った。

「そりゃ避けるよな。」

紫と違ってその姿は

防御力は下がってるもんな？」

俺の質問に東城は舌打ちしこちらを警戒する。

「チッ！炎を自身の周りに展開したのか

確かにそれなら狙う必要もないし、

相手から当たってくれるってか」

そう俺は修行中にこの魔法の使い方を

思いついた。

それは騎士のチェス兵と戦っていた際、

アザゼル先生から『僧侶の姿でそいつと

戦えるように戦い方を考えろ』と言われて

俺は狙うんではなく相手から当たるように

魔法を放つことを思いついたんだ！

「やっぱり、強くなったんだな」

「修行の成果さ！」

もっと見せてやるよー！」

「雷よー！」

『Thunder!』

俺が剣を天に掲げると、

東城の頭上から一本の雷が落ちてくる。

「クッ！マジかよー！」

東城は雷に即座に気が付き

横に飛び避けられてしまう。

そう、俺は奈美先輩との修行で

新たに雷の魔法を覚えた。

「新たな魔法か！

やっぱりお前は面白いな！」

「新たな魔法はこれだけじゃないぜ！

水よ！」

『Water!』

俺が登場に向けた剣先から水球が放たれる！

「たかが水で！」

「いや！これは」

東城は水を手で払おうとし、

即座に回避して水球を避けた。

バキイツ！

水球は後ろの木に当たり

木をへし折る。

「只の水でこの威力か。

だが目的は雷への布石か」

そこに気が付くかよ。

そう水の魔法は当たれば相手を濡らして

周りに水が飛び散る。

そうすれば雷を水に当てるだけで感電させられる

攻撃の範囲も広がるって寸法だった。

まさか所見で気が付くとはな。

俺はその後、東城に雷を放ち

変身の隙を与えなかった。

「つたく、発動速度がいやに早いなこの雷、

時たま水も混ぜて、自身に有利な状況にしようってか、

前よりも魔力が増えたようだし持久戦はこつちに不利そうだな」

確かにスタミナが増えたおかげで持久戦も出来るようになったが、俺の方も決定打にかけている。

せめて一発でも当たれば、

こつちに有利に進むというのに！

そんな時、空からタンニーンの

驚愕の声が聞こえてくる。

「お、おい！戦場の最中、何をしている！」

そちらへ視線を向けてみるとイツセー達が居た辺りが霧に包まれていた。

あれは黒歌の能力か!?

「おっさん！俺が部長の乳をつつく間、保つてくれよ！」

俺は霧から聞こえて来た

イツセーの叫びに我が耳を疑った。

タンニーンも目玉が飛び出る勢いの驚き顔となっていた。

「乳をつつく!?!乳をつくだと!?!

何を言っている!?!

お前は戦場のど真ん中で

何をしようとしているのだ!?!」

「つづいたら禁^{バランス・ブレイカー}手に至れる

可能性が高い！」

「俺との修行は無駄か!?!

お前がそこまでバカだったとは!?!」

戦場で突然起きたイツセーの奇行に東城も動揺を隠せないでいた。

「これは何かの作戦か

戦いの最中でこんなこと

意味が分からないだろ！」

残念ながらイツセーは本気なんだろう。

「おっさん！大変だ！」

「どうした！何かあったのか！」

イツセーの慌てたような叫びに

タンニーンが確認する。

「右のおっぱいと左のおっぱい！

どっちをつついたらいい!？」

「イツセーのバカ野郎オオオオツ！」

今は戦闘中なんだぞ！

右も左も変わんねえだろ！

さっさと突いて至れエエエツ！」

「ふざけんなユウスケ！」

右と左が同じわけねえだろオオオオツ！

大切なんだよ！俺のファーストブザー

なんだぞ！人生かかってんだ！」

あまりにふざけたイツセーの問いに

俺も頭にきてイツセーと口論する。

「はあ、戦いの最中にこの茶番

付き合い切れないな、

もう真面目に戦うのも馬鹿らしく

なってきた」

東城から先程まであった

殺気が薄れていく。

完全に戦うやる気が無くなってしまったようだ。

「やめた、戦いはもっと神聖なものだ

こんな気持ちで戦っても楽しくない

お前との決着はまた今度だ」

東城はそう言って、黒歌たちの方へ跳んで行ってしまふ。

まさか、こんな方法で戦いを止めるとはな。
後はイツセーの方の戦いか。

そちらの方へ視線を向ければ

カッ！

霧の中から紅い閃光がオーラと共に
放たれた瞬間だった。

外の人達にもここが知られたはずだ、

「アハハハハ！」

他にも笑う者がいた。黒歌だ！

「ハッ！面白くないじゃないの！」

なら、妖術仙術ミックスの

一発お見舞いしようかしら！」

黒歌の両手がそれぞれ違う力を纏い始める。

ドウツ！

そのまま両手から二種類の

波動を撃ちだした！

イツセーはそれを真正面から受け止める！

ドドンツ！

「こんなもんか？」

真正面から攻撃を受けた筈の

イツセーは無傷で立っていた。

その姿に黒歌は表情を一変させ、

驚いていた。

「効かない!?嘘でしょ。」

かなりの妖力を練り込んだのよ！」

ドツ！

イツセーはその場を勢いよく飛び出し、

黒歌との距離を一気に詰めた！

「調子に乗らないでよッ！」

黒歌が先程の波動を幾重にも撃ちだしてくるが、

イツセーはそれらを打ち返し、

時には弾き飛ばして黒歌の眼前まで迫った！

ブウウウンツ！

イツセーは拳を繰り出すが、

黒歌の鼻先で静止させた。

今ならここでこいつらを倒せるか!?

五対三だが、直ぐに応援も到着するだろう!

と、俺達が覚悟を決めたとき、

目の前の空間に裂け目が生まれる!

裂け目から姿を現す者がいる、男性だった。

背広を着た若い男性。

手に極大なまでに聖なる

オーラを放つ剣が握られている。

あ、あれは聖剣か?

「そこまでです、雄輔、美猴、黒歌。

悪魔が気付きましたよ」

メガネをした男性は三人にそう言う。

新手!? 『禍カオス・ブリゲードの団』のメンバーか!

シユタツ。

空中から降りてきた美猴。

「お前、ヴァーリの付き添い

じゃなかったかい?」

男性は眼鏡をくいつと上げて言う。

「黒歌が遅いのでね、

見に来たのですよ。

そしたら雄輔と美猴までいる。

まったく、何をしているのやら」

ため息をつく男性。

「全員、そいつに近づくな!

手に持っている物が厄介だぞ!」

タンニーンが俺達にそう叫ぶ。

「聖王剣コールブランド。

またの名をカリバーン。

地上最強の聖剣と呼ばれる

コールブランドが白龍皇の元に……」

苦笑するタンニーン。

「しかし、二刀？」

鞘に納めている方も聖剣だな？」

タンニーンの問いに男性は腰の帯剣を指差す。

「こっちは最近発見された最後の

エクスカリバーにして、

七本中最強のエクスカリバー。

『エクスカリバー・ルーラー支配の聖剣』ですよ」

エクスカリバー!？」

行方不明の一本が見つかったのか!

「そんなに話して平気なの？」

黒歌の言葉に男性は頷く。

「ええ、実は私もそちらのお仲間さんに

大変興味がありますね。

赤龍帝殿、兵藤祐介殿、

聖魔剣の使い手さんと

聖剣デュランダルの使い手さんに

よろしく言っておいてくださいますか？

いつかお互いいち剣士として相まみえたいと」

大胆不敵だな。

二人がこの話を聞いたら、

どう思うかね。

「さて、逃げ帰りましょう」

男性がコールブランドとかいう剣で

空を斬ると空間の裂け目が更に広がり、

人が数人潜れるだけのものになる。

「さようなら、赤龍帝、兵藤祐介」

男性がそれだけ言い残すと、

ヴァーリの仲間達は空間の

裂け目に消えていった。

その後、騒ぎを嗅ぎつけた

悪魔の皆さんに俺達は保護され、

魔王主催のパーティは

カオス・ブリゲード
『禍の団』襲来により

急遽中止になったのだった。

—●—

アザゼル side

「失態ですね」

魔王領にある会談ルームで

うちの副総督シエムハザが、

開口一番にそれを言った。

俺は隣で「ほどほどにな」と

心中で思いながら、茶を飲んでいた。

魔王主催のパーティの日、

悪魔達は『禍の団』の襲来を受けた。

正確に言うなら、「結果的にそうなった」

と言うべか。

冥界指名手配中のSS級はぐれ悪魔

『黒歌』がパーティを使い魔使って

見に来ていたなどと、

誰も予想だにしなかっただろう。

その後、リアス・グレモリー眷属と

最上級悪魔のタンニーンが接触。

これを撃退。

事態は最小限に収まったが、

パーティ会場の隙を突かれたのは、

他の勢力にとって、

悪魔の警戒心の有無を

問う者だろうさ。

見ての通り、墮天使側の

シエムハザくと天使側のセラフさん達はお怒り中だ。

まあ、俺も人のこと言えないんだけどな。

総督の俺がハメを外して

カジノに夢中だったなんて

口が裂けても言えない。

即協定違反とされて、

大変なことになる。難しいもんだな。

シエムハザがさらに報告する。

「相手は『禍カオス・ブリゲードの団』独立部隊

『ヴァーリチーム』の孫悟空『美猴』と

クウガ『東城雄輔』と猫？『黒歌』、

さらに聖王剣コールブランド使いも関与。

一人一人が絶大な力を有する

チームの四名も来るとは…。

「だいたい悪魔の管理能力は」

あーあ、

こいつの小言が始まると長えんだ。

まいったね。

事件的には収集がついている。

リアスと小猫が黒歌の毒に当てられたが、

幸いにも軽症ですぐに解毒は済んだ。

ユウスケも修行の成果が出たようだし、

むしろ、全員無事の場合で

イツセーが禁バランス・ブレイカー手

に至ったつてのは嬉しい誤算だ。

その辺、皆は心中で分かってはいるんだよな。

魔王の妹リアス姫は無事。

赤龍帝は最初の一步を踏み出した。

パーティは中止されたが、

大局を見れば大きな収獲だ。

遠くでは、チビドラゴン化して

出席しているタンニーンと

上役達がもうすぐ開かれる

リアスとソーナ・シトリーの

戦いを予想していた。

「俺はリアス嬢を応援させてもらおうか。

何せ、俺が直々鍛え込んだ赤龍帝が

いるのでな。ククク、

おもしろい小僧だぞ」

「アザゼルのもたらした知識は

レーティングゲームに革命を

起こしそうだよ。

下手すれば半年以内に

上位陣に変動があるかもしれない」

「そりゃ良かった。

ここ十数年もトップの十名に

変化が無かったものですから。

これで面白いゲームが

拝めそうですな」

ハハハハ、協定してから緊張感ねえなあ。

大丈夫かね、三大勢力。

そのとき。部屋の扉が開かれる。

そこに姿を現す人物に誰もが

度肝を抜かした。

「ふん。若造共は老体の出迎えも出来んのか」

古ぼけた帽子を被った隻眼の爺さん。

白い髭を生やしており、

床につきそうなぐらい長い。

服装も豪華絢爛というよりは

質素なローブだ。

杖をしているが、

腰を痛めているわけでもないだろうさ。

「オーデイン」

そう、正体は北欧の神々の主神オーデイン！
鎧を着た戦乙女のヴァルキリーを
引き連れてのご来場だった。

「おーおー、久しぶりじゃねえか、

北の田舎クソジジイ」

俺が悪態つくつと、

オーデインはヒゲをさすつた。

「久しいの、悪ガキ墮天使。

長年敵対していた者と

仲睦まじいようじゃが…

まだ小賢しい事でも

考えているのかの？」

「ハッ！しきたりやら何やらで

古臭い縛りを重んじる

田舎神族と違って、

俺等若輩者は思考が柔軟でね。

煩わしい敵対意識よりも

己らの発展向上だ」

「弱者どもらしい負け犬の精神じゃて。

所詮は親となる神と魔王を失った

小童の集まり」

このクソジジイは…。

口数だけは相変わらず減らねえ。

「独り立ち、とは言えないものかね、

クソジジイ」

「悪ガキどものお遊戯会にしか

見えなくての、笑いしか出ぬわ」

チツ。このままじゃ埒が明かねえや。

そこへサーゼクスが席を立てて招く。

「お久しゅうございます、

北の主神オーデイン殿」

「サーゼクスか。ゲーム観戦の招待、来てやったぞい。しかし、

お主も難儀よな。本来の血筋であるルシファー眷属が白龍皇とは。

しかもテロリストとなっている。

悪魔の未来は容易ではないのお」

オーデインが皮肉を言うが、

サーゼクスは笑みを浮かべたままだ。

ジジイの視線がサーゼクスの

隣のセラフォルーに移る。

「時にセラフォルー。」

その恰好はなんじやな？」

セラフォルーの格好は日本の

テレビアニメの魔女っ子だ。

こいつもコスプレ好きだね。

「あら、オーデイン様！

ご存じないのですか？

これは魔法少女ですわよ☆」

ピースサインを横向きに

チエキシやがったよ。

相手は北の神だぞ？

「ふむう。最近の若い者には

こういうのが流行っておるのかいの。

なかなか、悪くないのう。

ふむふむ、これはこれは」

スケベジジイめ。

顎に手をやりながら

セラフォルーのパンツやら

脚やら見てやがる。

そこへ介入する人影がひとつ。

例の戦乙女ヴァルキリーだ。

「オーデイン様、卑猥な事はいけません！
ヴァルハラの名が泣きます！」

「まったく、お前は堅いのお。」

そんなだから勇者エインヘリヤルの

一人や二人、ものに出来んのじゃ」

オーデインの一言にヴァルキリーは
たちまち泣き出す。おいおい、
なんだ、こいつは。

「ど、どうせ、私は彼氏いない

歴Ⅱ年齢の戦乙女ですよ！

私だって、か、彼氏欲しいのに！
うろうろ！」

オーデインも嘆息していた。

「すまんの。こやつは

儂の現お付きじゃ。

器量は良いんじやが、堅くての。

男のひとつもできん」

ジジイの人選はわからん。

それであんたを守れるのかね？

まあ他の業界への

ツツコミはいいか。

オーデインはサーゼクスに訊く。

「聞いたとるぞ。サーゼクス、

セラフオール、おぬしらの

身内が戦うそうじゃな？

まったく、大事な妹達が

親友同士というのにぶつけおって

からに。タチが悪いのお。

さすがは悪魔じゃて」

「このぐらい突破してもらわねば、

悪魔の未来に希望が生まれません」

「うちのソーナちゃんか」

勝つに決まってるわ☆」

各魔王様方は自分の妹が

勝つと信じているからな。

オーデインは空いている席に

座ると、ふてぶてしく言う。

「さてと。『禍カオス・ブリゲードの団』もいいんじやがの。

わしはレーティングゲームを観に来たんじやよ。

日取りはいつかないな？」

パーティーでの一件は後日話す事となり、

オーデインの突然の登場により、

話題は今度開かれるゲームの話となる。

各勢力の要人をしこたま

ゲーム観戦に招待したからな。

俺は休憩といって席を一旦立ち、

廊下の長椅子で休んでいた。

お偉方でやる会議やら

会議は肩が凝るんでね。

長椅子に座っていると、そこへ

サーゼクスが姿を現した。

なんだ、こいつも抜け出てきたのか？

隣に座ると俺に訊く。

「アザゼル、ゲームが始める前に

ひとつ聞いてもいいだろうか？」

「なんだよ？」

「お前がリアスの対戦相手なら、

グレモリー眷属のなかで

確実に誰を取る？」

「イツセーとユウスケだなりアスのチームは

どいつもこいつもなんとなく
感じているはずだ。

眷属のテンションを維持して
いるのはあの二人だと、な」

テンションってのは戦いで大事なものだ。

その変動ひとつでバランスが崩れ、

一気に負けるなんてことは

よくある話だ。逆もしかり。

イツセーとユウスケはリアス達にとって

精神的な柱になりつつある。

理由も理解できるぜ。

あいつらは何をやってもどこにいても

諦めずに前へ突っ走る。

その姿が眷属悪魔達の活力に

なっている部分があった。

サーゼクスは手を組み、

真剣な面持ちで言った。

「…ソーナは狙うだろうな」

心配か、妹が。俺は正直に言う。

「ああ、問題は取られた時だ。

奴等の気力が上がるか、

それとも落ちるか。

奴等はまだどちらも目の前でやられた事が

ないからな」

―●―

シトリー眷属とのゲーム決戦前夜。

俺達は先生の部屋に集まり、

最後のミーティングをしていた。

あの美猴や黒歌の襲来もあったけど、

グレモリー眷属とタンニーンで
追っ払ったことで一応の決着は付き、

今はもう事件について落ち着きつつある。

リアス先輩はあの戦いでまた評価を得たって話だ。

ヴァーリ眷属を退けたこと、

イツセーを禁手バランス・ブレイカーに至らせたこと。

これらはポイントが高かったみたいだぜ。

で、ミーティングってわけだ。

アザゼル先生がさっそく禁手バランス・ブレイカー

に至った俺に訊く。

「イツセー、バランス・ブレイカー 禁手の状態はどうだ？」

「はい。なれるようになりましたが、

いくつか条件があります」

イツセーはその条件を話す。

「まず、バランス・ブレイク 禁手化しようとすると、

変身まで時間がかかります。

籠手の宝玉に変身までにかかる

時間が表示されるんです。

しかも、一度その状態になると、

神器は使えません。

増大も譲渡も無理です。

中止もできません。

さらに言うなら一日一度しか

変身できなくて、一度変身すると

解除しても神器は力をほとんど失ってます」

それを訊いて先生は頷く。

「ああ、データの通りだ。

過去の赤龍帝もほとんど同じだ。

鎧を解除しても神器が使える

例があるけどもな。で、

お前の場合、変身までに要する時間は？」

「二分です」

「それは鍛えるか、慣れていけば

短縮できる。だが、その二分は死活問題だぞ。

ハッキリ言うなら、実戦ではほとんど

役に立たない。何よりも変身するまでの間、

ブーステッド・ギアそのものが

使えないのが痛すぎる。

二分あればお前を倒せる奴なんて

山ほどいるからな。

変身までの時間をどうやり過ごすか、

それを考えておけ。その二分間は、

おまえの一番の弱点だ」

その二分間をどうするか、

今後の課題か。

「普通のブーステッド・ギアの増大と譲渡も使い方

に幅があるから大事だ。しかし、

強敵と戦うならばバランス・プレイヤー禁手も必須。

通常状態と禁手バランス・プレイヤー状態は

一長一短だな。それで禁手の使用時間は？」

「はい、フルで三十分です。

力を使う場合、もっと減ります」

「初めてのお前にしちや良い方だな。

修行の成果だ。だが、

公式ゲームだったら完全にアウトだ。

三十分、しかも力の使用込みとなる

少なすぎて話にならない。

長丁場のゲームになることもあるんだ。

イツセーの制限時間は今後増やしていくしかないな」

そうだな、戦略的に使い所が難しそうだな。

「リアス、ソーナ・シトリーは

グレモリー眷属のことを

ある程度知っているんだらう？」

アザゼル先生の問いにリアス先輩は頷く。

「ええ、おおまかなところは

把握されているわね。たとえば、

イツセーや裕斗、朱乃、アーシア、

ゼノヴィアの主力武器は認識しているわ。

フェニックス家との一戦を録画した

映像は一部に公開されているもの。

さらに言うならユウスケの力や

ギヤスパアの神器も

小猫の素性も割れているわ」

「ま、ほぼ知られているわけか。で、

お前の方はどれぐらいあちらを

把握してる？」

「ソーナのこと、副会長である『女王』のこと、
多数名の能力は知っているわ。

一部判明していない能力の者もいるけれど」

「不利な面もあると。まあ、

その辺はゲームでも実際の

戦闘でもよくあることだ。

戦闘中に神器が進化、

変化する例もある。

細心の注意をはらえばいい。

相手の数は八名。

まだ全部の駒はそろっていない

みたいだけれど、数ではこちらが上だ」

先生が用意したホワイトボード

に何かを書いていく。

「レーティングゲームは、プレイヤー

に細かなタイプをつけて分けている。

パワー、テクニク、ウィザード、

サポート。この中でなら、リアスはウィザードタイプ。いわゆる魔力全般に秀でたタイプだ。朱乃も同様。木場はテクニクタイプ。スピードや技で戦う者。ゼノヴィアはスピード方面に秀でたパワータイプ。一撃必殺を狙うプレイヤーだ。アーシアとギヤスパーはサポートタイプ。さらに細かく分けるなら、アーシアはウィザードタイプの方に近く、ギヤスパーはテクニクタイプの方に近い。小猫はパワータイプ。ユウスケは姿を変える事でテクニクやスピードタイプに変わることが出来る。小猫はパワータイプ。で、最後にイツセー。お前もパワータイプだ。ただし、サポートタイプにもいける。ギフトの力でな」先生は十字線を引いて、上下左右の端に各タイプ名を書いて、グラフを描き、各メンバーがどの位置にいるか、わかりやすく図にしてもらった。こうしてみると、俺達グレモリー眷属って結構バランスいいんだな。ウィザードタイプのパワー寄りの魔法剣士はいないけどな。

先生はパワータイプの
イツセーやゼノヴィア、小猫ちゃん
を一気に丸で囲うと言う。

「パワータイプが一番気を付けなくては
いけないのはカウンターだ。

テクニクタイプの中でも厄介な部類。
それがカウンター系能力。

神器でもカウンター系があるわけだが、
これを身につけている相手と

戦う場合、イツセーや小猫、

ゼノヴィアのようなパワータイプは

カウンター一発で形勢が逆転される

こともある。カウンターって

のはこちらの力プラス相手の

力で自分に返ってくるからな。

自分が強ければ強いだけ

ダメージも尋常ではなくなる」

なるほど、確かにイツセーの

力を返されれば驚異だな。

「カウンターならば、

力で押し切ってみせる」

勇ましいことをゼノヴィアは言う。

しかし、先生は首を横に振った。

「それで乗り切れることもできるが、

相手はその道の天才ならば話は別だ。

できるだけ攻撃を避ける。

カウンター使いは術の朱乃や

技の木場、もしくはヴァンパイア

の特殊能力を有するギヤスパイで

受けた方が良い。何事も根性だ。

パワータイプは単純に強い。

だが、テクニクタイプと戦うにはリスクが大きいんだよ」

ゼノヴィアも先生の説明に黙ってしまった。戦闘経験の豊富なゼノヴィアには

思い当たる節があつたのかもしれない。

次に先生はイツセーに視線を向ける。

「イツセー、お前、バランス・ブレイカー 禁 手になれるようになったが、木場に勝てる気がするか？」

「…正直に言うと、

スピードで翻弄されて、

攻撃が当たりそうにないです」

これはイツセーの本音だろう。

俺も同じ騎士なら速さは

互角には戦えるだろうが、

俺の剣技は未熟だ、

俺も木場には勝てる気がしない。

「そういうことだ。

木場もどちらかというと、

カウンター攻撃もいける口だ。

イツセー、お前もカウンター使い

の対策をしないと木場に一生勝てんぞ。

それが戦いの相性つてもんだよ」

確かに僧侶の姿なら、

木場には対抗できるのか？

いや、せめて戦車の

姿を手に入れないと厳しいだろう。

「リアス、ソーナ・シトリーの眷属に

カウンター使いがいるとしたら、

イツセーにぶつけてくるかもしれないぞ？

こいつの絶大なパワーじゃ、

カウンター食らったら一発アウトだ。

よく、戦術を練り込んでおけ」

「でも、相手が女性なら可能性は…低いわ」

ドレス・ブレイク
「…洋服崩壊。女性の敵ですから、

絶対に戦いたくないと思われます」

小猫ちゃんからの鋭い一言。

いつもの調子に戻ってきたな。

まあ、イツセーの煩惱は

女性の敵だからな

リアス先輩も頷いてるよ。

「ところでイツセー、

バランス・ブレイカー
禁 手に至ったことは

美猴達の襲来で周囲に

知られてしまったぞ。

ソーナ・シトリーも認識しているだろう。

十分に気をつけた方が良い。

お前なら、バランス・ブレイカー 禁 手に変身する前に

撃破される可能性が高いからな」

それは俺も心配だ。

「フツ。大丈夫です。

俺は大人ですから」

イツセーは額に手をやりながら、

ニヒルな笑みで返した。

「どうした？なんだか、

ずいぶん大人びたように見せているな？」

親指を突き立てて、

俺はうんうんと頷いた。

「あー、わかったわかった」

先生はペンをしまおうと最後のまとめを言う。

「お前達が今回のゲームで勝利する確率は

八十パーセント以上とも言われている。

俺もお前達が勝つと思っっているが

『絶対』に勝てるとは思っていない。

それに駒の価値も絶対的なものではない。
実際のチェス同様局面によって
価値は変動する」

先生は続ける。

皆、真剣に聞き入っていた。

この人の言葉は効く。

「俺は長く生きてきた。そのなか、
多種多様、様々な戦闘を見てきた。
だからこそ、言えるんだよ。

勝てる見込みが一割以下でも

勝利してきた連中がいたことを

俺は覚えている。

一パーセントの可能性を甘く見るなよ。

絶対に勝てるとは思うな。

だが、絶対に勝ちたいとは思え。

これが合宿で俺がお前達に

伝える最後のアドバイスだ」

それが今回の先生がした

最後のアドバイスだった。

その後、先生が抜けたメンバーで

決戦の日まで戦術を話し合ったのだった。

俺達が絶対に勝つために！

第65話 「冥界猫」

決戦日。

グレモリーの居城地下にゲーム場へ
移動する専用の巨大な魔方陣が存在する。

俺達眷属はその魔方陣に集まり、
もうすぐ始まるゲーム場への

移動に備えていた。

アーシアとゼノヴィア以外、

駒王学園の夏の制服だ。

アーシアはシスター服、

ゼノヴィアは出会った当初の頃に

着ていた戦闘服だ。

二人共そちらのほうが

気合が入るらしい。

転移直前、

リアス先輩のご両親、

ミリキヤス様、奈美先輩、

ロビン先生、アザゼル先生、が魔方陣の

外から声を掛けてくれる。

「リアス、一度負けているのだ。

勝ちなさい」

「次期当主として恥じぬ戦いを

しなさい。眷属の皆さんもですよ?」

「頑張つて、リアス姉さま!」

「リアス、ユウスケ、頑張りなさい!」

「頑張つてね、皆」

「まあ、今回教えられることは教えた。

あとは気張れ」

この場に居ないのはサーゼクス様と

グレイフィアさんだけど、

すでに要人専用の観戦会場へ
移動されているようだ。

そこには三大勢力のお偉いさんだけでなく、
他の勢力からのVIPも招待されているという。
先生達もこのあとその会場に移動するらしい。

この試合は俺達が思っている以上に
注目されているようだ。

緊張感が漂う中、魔方陣が輝きだした。

ついに初のゲームが始まる！

魔方陣でジャンプして到着したのは

テーブルだらけの場所だった。

：ここはレストランか？

と思い周囲を見渡してみれば、

ここはどうやら飲食フロアらしく、
テーブル周囲にはファーストフード
の店が連なっていた。

これが全部専用空間に用意された
本物そっくりレプリカか。

これが悪魔の技術力か。

うん、俺は此处を知ってるな…。

俺はフロアから出て見渡すと、

そこは、広大なショッピングモールだった。
見知った店が奥までずらりと続き、
天井は吹き抜けアトリウム。

硝子から光が零れていた。

やっぱり、ここは。

「駒王学園近くのデパートが

舞台とは、予想してなかったわ」

リアス先輩が言う。

今回のゲームの舞台は俺達駒王学園

の生徒ならよく通うデパートだった！

そのとき店内アナウンスが聞こえてくる！

『皆さま、この度はグレモリー家、

シトリー家の「レーティングゲーム」

の審判役を担うこととなりました、

ルシファー眷属『女王』の

グレイフィアでございます』

グレモリー家の使用人である。

グレイフィアさんが

ルシファー眷属と名乗ったのは、

ゲームの公平性の為なのかな？

『我が主、サーゼクス・ルシファーの

名のもと、ご両家の戦いを見守らせて

いただきます。どうぞ、よろしく

お願い致します。早速ですが、

今回のバトルフィールドは

リアス様とソーナ様の通われる学舎

「駒王学園」の近隣に存在するデパートを

ゲームのフィールドとして

異空間にご用意いたしました』

ゲーム会場が見知った場所なら

やりやすいと思うが、

それは相手も同じことか、

あちらもこのデパートには

何度も来てるだろうしな。

舞台となっているこのデパートは

二階建てだ。高さ的にはそこまででもない。

しかし、一階二階ち吹き抜けの長い

ショッピングモールとなっており、

横面積がかなり大きい。屋上には駐車場もあり。

その他にも立体駐車場も存在している。

『両陣営、転移された先が「本陣」で
ございます。リアス様の本陣が
二階の東側、ソーナ様の「本陣」は
一階西側でございます。』

「兵士」の方は「プロモーション」
をする際、相手の「本陣」まで
赴いて下さい』

俺達と敵の陣地はデパートの端だ
俺達は二階の一番東側。

相手は一階の一番西側だ。

俺達の陣地の周りには、

ペットショップ、ゲーセン、

飲食フロア、本屋、ドラッグストアが

存在している。本陣下の二階には

大手古本屋の支店とスポーツ用品店。

相手側にあるのは食材売り場と、

電気屋、ジャンクフード店、

雑貨品売り場だ。

戦いが始まれば、お互いデパートの
端を目指すことになるだろうが、
そう簡単には行かないだろうな。

『今回、特別なルールがございます。』

陣営に資料が送られていますので、

ご確認ください。回復品である

「フェニックスの涙」は今回両チームに

ひとつずつ支給されます。

なお、作戦を練る時間は三十分です。

この時間内での相手との接触は

禁じられています。

ゲーム開始は三十分後に予定

しております。それでは、作戦時間です』

アナウンス後、すぐに皆で集まる。

「バトルフィールドは駒王学園近くの

デパートを模したもの。屋内戦ね」

リアス先輩が飲食フロアの壁に

描かれたデパート内の案内図

を見ながら言った。

リアス先輩の手元にはチェスのマス目

に区切られた専用の図面も存在する。

先程の飲食フロアで俺達は

陣取って作戦を練っている。

しかし、屋内戦か！

俺はてつきりチェスの盤を

そのまま広くしたフィールドで

戦うものだと思ったよ。

リアス先輩が送られてきた

ルールの紙に目を通す。

「今回のルール、

『バトルフィールドとなる

デパートを破壊し尽くさないこと』

つまり、ド派手な戦闘は起こなう

なって意味ね」

リアス先輩は目を細め、

このルールをどうしたものかと

考えている様子だった。

「…なるほど、私や副部長、

イツセーにとっては

不利な戦場だな。効果範囲の

広い攻撃ができない」

ゼノヴィアの言う通りだ。

屋内戦、しかも建物を

あまり破壊するなということは、

イツセーのドラゴンショット、
朱乃さんの雷攻撃も屋上でしか
使えないだろうしな。

ゼノヴィアもデュランダルからの
聖なる斬撃波動も発生出来ないだろう。

ただでさえ、抜き身状態でも
聖なるオーラが迸る剣だ、
ルール上無暗矢鱈に振り回せないな。

それに、俺の『深碧のクウガ』も
魔法攻撃がメインだからな
外せば建物に被害が出るから。

「困りましたわね。大質量による攻撃戦は
ほぼ封じられたようなものですわ」

朱乃さんが困り顔で頬に手を当てていた。
木場は息を吐きながら意見を口にする。

「ギヤスパー君の眼も効果を望めませんね。
店内では隠れる場所が多すぎる。
商品もそのまま模されるでしょうし、
視線を遮る物が溢れています。」

「：困りましたね。これは僕らの特性上、
不利な戦場です。派手な戦いが出来るのが
リアス・グレモリー眷属の強みですから、
丸々封じられる」

リアス先輩は二人の言葉に
首を横に振った。

「いえ、ギヤスパーの眼は最初から
使えないわ。こちらに規制が入ったの。」

『ギヤスパー・ヴラディの神器使用
を禁ずる』だそうよ。理由は単純明快。
まだ完全に使いこなせないからね。」

眼による暴走でゲームの全てが台無しになったら困るとい判断でしょう。イツセーの血を与えるのも禁止。アザゼル開発の神器封印メガネを装着とのことよ。

『ギヤスパ―専用につってあるため、体への悪影響は特になし』と。本当、用意がいいわね」

ルールに加えて、ギヤスパ―の神器まで制限かよこつちに不利過ぎないか？

「では、ギヤスパ―は魔力とヴァンパイアの能力で戦えと？」俺の問いにリアス先輩は頷く。

「そういうことね。」

もともと時間停止はリスクが大きかったわ。例のカウンタータイプの存在だけでなく、能力を吸収する神器を持つ

匙くんが相手側にいるのだもの、

どんな返し技をされるかわからないのよ。幻術で封殺。他にも視界を奪う術はある。

そんなことを言っていたらゲームや戦闘なんて出来やしないのだけれど。

細心の注意を払うのは当然ね」

たしかに、この間の黒歌のような霧だつて十分視界を奪う事だつてできる。さつそくギヤスパ―が眼鏡を掛けている。

「…レーティングゲームは、単純にパワーが大きい方が勝てるわけでもない。バトルフィールド、ルールによつて

戦局は一変するわ。力が足りない
悪魔でも知恵次第で上にも上がれる
土壌があるからこそ、ここまで冥界や
他の勢力の間で流行ったのよ。
今回は私達にとつて不利なルール
かもしれないわ。けれど、
これをこなせなければこれからの
ゲームに勝ち残ることなんてできない。

『「兵士」でも「王」を取れる』

これはチェスの基本ルールでもあり、
レーティングゲームの格言よ。

つまり、『やり方次第では

誰でも勝てる可能性がある』という
ことを示唆しているわ」

朱乃さんもリアス先輩の意見に
賛同し、うなずいた。

「そうですね。実際の戦場でも、

このような屋内戦が今後あるかも
しれません。そうなった場合、

今日この日のように力が

完全に発揮できないこともあるでしょうし。
良い機会かもしれませんわね。

チームバトルの屋内戦に

慣れておくのに今回の戦闘は最適ですわ」

そんな中、イツセーが恐る恐る手を挙げる。

「あ、あの、部長。俺、禁手に

なることやパワーを上げる修行に必死で、
力を抑えて戦う練習なんてしてませんけど…」

「分かっているわ。今回、完全に裏目に出たのよ。

戦場とルールはランダムで決まるとはいえ、
今度のゲームはイツセーにとっては

最悪に近いかもしれないわ。
貴方のパワーは絶大すぎる。

ルール上、建物を破壊したらアウト。
でも、必ずどこかで禁手になること。
けれど、できるだけパワーを抑えて
戦ってちょうだい。ドラゴンショットも
できるだけ撃たない事。

デパートが吹き飛ぶかもしれないわ。
格闘戦でなんとか凌いでちょうだいね。

：難しいことばかりでゴメンなさい」

「…は、はい。って、

正直、不安すぎますけど…」

まあ、パワータイプは

状況によっては不利になってしまう

いい勉強になるな。

さらにリアス先輩の作戦案は続く。

「攻めるにしてもこの吹き抜けの

ショットピングモールが問題ね。

一階からでも二階からでも

進行する姿が見て取られるわ。

あちら側も同じでしょうけど」

リアス先輩が店内の様子を見ながら言った。

朱乃さんも意見を述べる。

「保管委は立体駐車場からの

攻めも考えられますけれど、

それはあちらも警戒するでしょうね」

「ええ、同様に屋上からの行動もね。

どちらにしても、中央突破、屋上から、

立体駐車場から、このルートで進まないといけないわ。

デパートの外には出られないのですものね」

「立体駐車場に車も存在するのでしょうか。」

見た感じ、商品や商品棚まで
再現されていますし。

もしかしたら、駐車されている車まで
コピーされているかもしれませんわ」

リアス先輩と『女王』朱乃さんの

話し合っていると、

木場が手を挙げて進言する。

「部長、屋上と立体駐車場を

見て来ます。近くに階段が

ありますから、確認してきます」

リアス先輩もうなずいた。

「お願い、祐斗」

直ぐに木場はその場を

速足に後にする。

「車が何か大変なんですか？」

イツセーがリアス先輩に訊ねる。

「車で店内に突っ込んできたら大変でしょう？」

それに車単体を爆弾に見立てて使ってくる

可能性も視野に入れておかないといけないのよ。

さすがに店内を暴走運転なんて行為を

ソーナがやるとは思えないのだけどね」

と、リアス先輩が言う。

「慎重ですわ」

「当然よ。まだ足りないと感じるぐらいだわ。

車の中で休むことや隠れることもできるわね。

そういえばスタッフルームの中は

見た事が無いわ。チェックして

おくべきかしら…。イツセーの『洋服崩壊』

があっても、モール何に服のブランド店なら

たくさんあるわ…。デパートだもの、

考えたらキリがないわね」

リアス先輩は細かいところまで考えているんだな。
リアス先輩は次にギヤスパーに指示を送る。

「ギヤスパーはコウモリに変化して、
デパートの各所に飛んでちょうだい。
序盤、貴方にはデパート内の様子を
逐一知らせてもらうわよ」

「りよ、了解ですー」

ギヤスパーも気合が入ってるな。
彼奴にとつても初めてのゲームだからな。

その後も作戦会議は続き、
細かい戦術まで決まっていった。

そして作戦会議が始まって
半分が過ぎた頃、ある程度のプランは固まった。
リアス先輩は俺達を見渡して言う。

「ゲーム開始は十五分後ね。」

十分後にここに集合。各自、
それまでそれぞれのリラックス方法で
待機していてちょうだい」

リアス先輩の言葉により、皆、一度解散する。
イツセーはリアス先輩に呼び止められている。
ギヤスパーはドーナツ店へ入っていき。

アーシアとゼノヴィアは
ハンバーガー屋へ向かう。

木場はドラッグストアに行き
商品を物色するようだな。

試合中に何か使えるか調べてるのか。
木場も真面目だな。

皆、それぞれのリラックス方法があるだろうし
邪魔はしない方が良いだらう。

俺はと言うと、飲食フロア近くの
本屋へとやってきた。

ずっと修行で冥界に居たからな。
娯楽に飢えていた。

おっ、目的の物を見つけた！

「やっぱり新刊が出たか！」

夏休みに入る予定だったマンガの新刊
をずっと楽しみにしてたが、

冥界に来ることになったから

結局、見れずじまいだったんだよな…。

俺はその場に座り込み

読書に集中する。

俺がもう少しで本を読み終わるとい

タイミングで後ろから声が掛かる。

「…ユウスケ先輩、そろそろ集合です」

声を掛けてきたのは小猫ちゃんだった。

俺を探していたのかな。

「もう時間かゴメンね

読むのに夢中で時間忘れてたよ」

「…いえ、まだ少し余裕はありますし、

まだイツセー先輩と朱乃先輩も

来ていないので」

「じゃあ、俺も探すの手伝うよ」

「…二人ならこの先に一緒に居ますよ」

「この先って…、

彼奴もマンガかと思ったら

目的はエロ本かい。

小猫ちゃん俺が、彼奴呼んでくるから

先戻ってていいよ」

小猫ちゃんが指さした先は

エロ本コーナーだったので、

流石に俺一人で呼びに行こうと

そう言ったのだが、

「…私も行きます。」

ただ呼びに行くだけですから」

そう言っつて小猫ちゃんは

スタスタと歩いて行っつてしまふ。

俺は急いで本を片して後を追ふ。

追いつくとちようど入れ違いで、

朱乃さんがやっつてくるところだった。

「先に行っつてますわね」

朱乃さんはそれだけ言ふと

その場を去っつていった。

棚の向こう側にはイツセーが

エロ本を拵げながらうんうん頷いていた。

「イツセー、バカやっつてないで、

さっさと行くぞ、俺達が最後みたいだからな」

「おお、直ぐ行くよ」

イツセーが立ち上がり共に皆の

所に行こうとしたところ、

俺とイツセーの手を小猫ちゃんが握っつてきた。

「こゝ、小猫ちゃん?」

「どうかしたのか?」

突然の小猫ちゃんの行動に驚く俺達。

小猫ちゃんは頬を赤く染めながら言ふ。

「…私に勇気を下さい」

っ!

そうだったこの子はずいこの間まで

自身の力を恐れていた。

封じていた力を使うのが怖いんだ。

彼女の手は震えていた。

よほど怖いんだな。自分も力に

?まれるんじゃないかと。

「うん、俺達でよかつたら」

「大した勇気じゃないけどな」

俺に勇気なんてない

ただ無我夢中にやるだけ

後先を考えない考えなしなだけだからな。

だけど、そんな俺でも

彼女に少しでも力になるのなら。

俺達は笑顔で握り返した。

「…先輩達は私が、猫又が怖くないのですか？」

不安げな表情で小猫ちゃんが訊ねてくる。

「いや、全然」

「小猫ちゃんは小猫ちゃんだろ」

俺達は平然と答えた。

小猫ちゃんは猫又だろうが

可愛い後輩には変わりない。

それを聞いて、小猫ちゃんは心底

驚いた様子だった。

でも、顔が俯いてしまう。

「…修行が始まる前、イツセー先輩に

酷い事言いました」

イツセーに小猫ちゃんが怒ったあれか。

「気にしなくていいよ。俺も悪かった。

事情を知らなかったとはいえ、俺は

気の利かない先輩だったよ」

「そんなことありません」

「小猫ちゃんも当人が気にしてないんだから

この話はここまでだ、それに今の小猫ちゃんは

その時とは違うんだろ」

「はい」

小猫ちゃんはいっそう強く

握ってくる」と

「…猫又の力を使ってみようと思います」

「っ！」

小猫ちゃんの一言にイツセーは驚いていた。だが俺はそうじゃないかと思っていた。…やっぱり小猫ちゃんは強い子だ。

「…姉さまのようになるのは嫌です。

けど、このままでは皆さんのお役に立たないかもしれません。だから使おうと思います」

決意の眼差しだった。

黒歌との再会と絶縁で吹っ切れたか。

「小猫ちゃん、将来的に猫又の力を乗り越え、いつか必ずヘルキャットになるんだ」

「…ヘルキャット？」

「冥界猫と書いてヘルキャットと読む。

さつき俺が呼んでたこれさ」

俺は先ほど読んでいた。

漫画を小猫ちゃんに見せる。

それは冥界から来た猫が

相棒の少年と協力して

悪い妖怪と戦う作品だった。

「俺も小猫ちゃんに宣言する。

もし、猫又の力で暴走しそう

になっても俺が止めるよ。

この赤龍帝の力は俺だけじゃなくて、

仲間の為に振るいたい。

あおれにあの怖いお姉さんが来ても

俺が小猫ちゃんを必ず助ける。

あんな姉ちゃん、俺がパンチで

吹っ飛ばしてやるから、

怖がる必要なんてないぞ」

「イツセーの言う通りだな

俺も一緒に戦ってあげる。

そして、小猫ちゃんが居たいと思う

この場所を一緒に守ろう。

その場所で、自分が本当に

好きだと思える自分を目指せば

良いんじゃないか！ね！」

俺は小猫ちゃんにサムズアップをする。

これが俺達の精一杯の励ました。

まあ、受け売りだけどね。

「…優しい先輩です、やっぱり」

小猫ちゃんは俯きながらそう言っていた。

第66話 「開戦」

俺達はフロアに集まり、開始の時間を待っていた。そして、店内アナウンスが流れる。

『開始のお時間となりました。』

なお、このゲームの制限時間は

短期決戦形式を採用しております。

それでは、ゲームスタートです』

短期決戦！

時間制限まであるのかよ。

レーティングゲームは

奥が深いな。

リアス先輩が椅子から立ち上がり、

気合の入った表情で言う。

「指示はさっきの作戦通りよ。

イツセーとユウスケと小猫、

祐斗とゼノヴィアで二手に分かれるわ。

イツセー達が店内からの進行。

祐斗達は立体駐車場を経由しての進行。

ギヤスパーは複数のコウモリに変化して

の店内の監視と報告。

進行具合によって、私と朱乃と

アーシアがイツセー側のルートを

通って進むわ」

リアス先輩の指示を聞き、

全員耳に通信用のイヤホンマイク

を取り付ける。

「さて、かわいい私の下僕悪魔達！

もう負けは見せられないわ！

今度こそ、私達が勝つツ！」

『はいッ！』

全員が気合の入った返答を行う。
前回のゲームで悔いが残っている者。
参加できず後悔した者。

今回初参加でやる気がある者。
全員の心にあるのは

必ず勝つという自信だった。

「では、ゼノヴィア、行くよ」

「ああ、木場」

先に動いたのは木場とゼノヴィア。
フロアを飛び出し、立体駐車場に
繋がる道へ向かった。

木場の話しでは駐車場に車は
置いてあつたらしい。

しかし、ただの作り物で

見た目だけの再現で、
運転する事は出来ないようだ。

これで、車での突貫を

っ気にする必要は無くなった。

さて、木場達が行った後は俺達だ。

「行くぞ、イツセー、小猫ちゃん」

「はい」

「よし、行くかー」

俺達はその場を後にして進みだす。

小猫ちゃんが力を使う事は皆に
伝えている。

リアス先輩の読みでは、

相手はこちらの動きを

こう読んでいると推測していた。

俺とイツセーは出来るだけ戦い
を避けながら本陣へ突入。

目的はイツセーの『女王』に

昇格するため。動きが俊敏な木場とゼノヴィアが組み、立体駐車場から裏手に回り、敵本陣へ。そこで相手の陣形を乱し、敵を引き付ける。イツセーを『女王』にする為、敵を素早く本陣から陽動させる。イツセーが『女王』になったら、一旦全員引き、改めて攻め込む。リアス先輩もこの時動き出す。要するに赤龍帝であるイツセーを『女王』にするのが最重要目的としている。

俺はクウガの状態じゃ

『女王』になることが出来ないしな。

イツセーがメインだと読むはずだ。

リアス先輩は会長がこう読むと踏み、逆の事をすることにした。

俺達は会長の読み通りに進む。

攻撃も受けるだろう。

しかし、俺達の本命は木場とゼノヴィアだ。

陽動ではなく、本格的に攻め込む。

逆に俺達が陽動となる。

メインアタッカーが二人

正面から突っ込んできたら

無視は出来ない筈だ、

相手は俺達を狙って、

何人か刺客を送ってくるだろうじゃら

『王』の周囲は手薄になると読むんだ。

もちろん、立体駐車場側にも刺客を

送ってくるだろうが、
そこまで手堅くはないだろうと予想し、
木場とゼノヴィアの二人で攻める。
そのまま、『王』を倒して
チエツクメイトだ。
全力を出せないパワータイプを
囷として活用する戦術だ、
今回、俺は全力の出せないイツセーと
小猫ちゃんのフォローだ。

敵陣へと向かう俺達は走るわけでもなく、
歩くわけでもない、微妙な歩幅で進んでいた。
このショツピングモール内で走れば、
音が響くから、下手に走って相手に
距離を測られる恐れがある。
しかも、店内は一直線のショツピングモール。
物陰に隠れながら進むしかない。
大きいデパートだといっても
端から端まで歩いても十分もかからない。
音に注意しながら動いていく。
あるところまで進んで、自動販売機の陰に
隠れて俺達は前方の様子を窺っていた。
見える範囲では敵影は無し。
ゲームが開始してから五分ぐらい
経つが警戒しながら動いているから
まだ四分の一程度しか進んでなかった。
俺達は戦闘を回避するため動くと見せて
実際は陽動だ、これは
慎重に動き過ぎたか？
突然、小猫ちゃんが頭に猫耳を生やした。
その猫耳がピコピコと動く！

すると、小猫ちゃんは遙か先に指さして言う。

「…動いています。真っ直ぐ向かってきている者が二人」

「わかるのかい？」

「…はい。現在、仙術の一部を解放していますから、

気の流れてそこそこ把握できます。

さすがに詳細まではわかりませんが…」
なるほど、猫耳がセンサーになっっているのか。

「小猫ちゃん、あとのどのくらいで敵と遭遇する？」

「…このままのペースなら、

おそらく十分いいです」
十分かそろそろ変身しておいた方がいいな。度の姿で行くか。

格闘、剣術、魔法どれで行く？

最初は赤で相手に合わせて変えるべきか。

俺がそう考えていたら、

「ッ！」

小猫ちゃんが突然、

前方の天井を見上げた。

「…上っ！」

驚愕する小猫ちゃんの視線を追うと。

天井へ一直線に伸びるロープいや、

あれはラインだ！

ターザンみたいなロープ使いで

天井から降ってきたのは。

「兵藤兄弟か！まずは一撃ッ！」
匙だった！

膝蹴りの体勢のままイツセー
目掛けて攻撃を仕掛ける！
匙の背中に誰か乗ってるのか！？
イツセーは即座にガードした。
突然の会敵に俺も小猫ちゃんも
構える。

「よー、兵藤兄弟」

突然、現れたのは匙。

その隣には匙の背中に
乗っていた少女。

生徒会のメンバーか。

確か一年生だったはずだ。

よく、匙と一緒にいた子だ。

匙の右腕は黒い蛇が何匹も

とぐろを巻いている状態だった。

以前と形がまったく違う！

前はデフォルメされたトカゲの頭部

がくつついているだけだった。

神器が変化したって言うのか！？

って、イツセーの籠手に黒い蛇が

巻かれており、匙の神器と繋がっていた。

さっきの攻撃の時に繋がれたのか！

右腕にもラインが繋がっているが：

こちらは匙の神器ではなく

遙か先のどこかと繋がっているようだ。

匙の神器の能力で何かが吸われているのか？

俺達が匙の神器に視線を送っていると

あちらも気付いたのか、苦笑しながら言う。

「まあ、俺も修行したってことさ。

おかげでこれだ。で、天井から店内の

様子を見ようとラインを天井に引っ付けて

上がって見たら、遠くの物陰に隠れている
三人が見えたんだ。気付いてないし、
チャンスとばかりにターザンごっこで奇襲さ
なるほど、それでこんな短時間で
ここまでこれたのか、納得だよ。

「こつちも修行したんだぜ。」

夏休みの大半ドラゴンとの

追いかけてここに費やしたけどな！」

イツセーは匙との遭遇をどこか

確信している様子だった。

何処か似ている二人だからか、

匙もこの展開は読んでいたようだった。

俺はそんな二人を見てモヤモヤする。

そんな時俺達の耳に信じられない

アナウンスが届く。

『リアス・グレモリー様の「僧侶」

一名、リタイヤ』

なっ！どつちが落とされた!?

開始してまだ少ししか経ってないぞ、

俺達が驚いていると匙がにやける。

「やられたのはおそろしく

ギヤスパー君だよ」

やられたのがギヤスパー？

何があつたんだ？

あまりにも早すぎるだろ。

確か奴は監視の為にコウモリに化けて

店内飛び回ってたんじゃないのか？

「ギヤスパー君は引つかかったんだ」

怪訝に思っている俺達へ匙は続ける。

「ルール上、ギヤスパー君の神器を

封じられていることはこちらにも

連絡があつた。そうになると、必然的に使ってくる能力はヴァンパイアの力。コウモリに変化して店内の様子を窺うだろうってさ。で、会長が思いついたのさ。俺等の本陣を活用しようってな」

本陣？あらは確か食材品売り場だったはずだ。悩む俺達に構わず匙は更に続ける。

「まずはシトリー本陣で一部の眷属が不審な行動をする。すると、監視に来たギヤスパ―君は気になつて追うだろう？さらに不審な行動を見せれば、他に飛ばしていたコウモリも呼び寄せて複数で監視を始める。多くのコウモリが集まればこちらのもんだ。コウモリが多く集まれば何かあつたとき、それが本体へと化ける。近くにまでコウモリを集合せたところで吸血鬼の苦手なニンニクだ。俺達の本陣は一階西側の食材品売り場。ニンニクなら大量に置いてある。ギヤスパ―君を捕らえるなんて容易いつてことだよ」

ニンニクの匂いで倒されたのか！
そんな、こんなやられ方なんて!?!
戻つたらゼノヴィア辺りがスパルタ指導が待つてそうだな。

「シンプルだろう？…んでもって、これ以上ないほどの倒し方だ。いくら修行したつて言つてもニンニク克服までは視野に入つていないだろうつて会長が

言っていたんだよ。

本陣の位置から出来た偶然の

発想だったけど、それでも撃破は撃破だ」

こんな偶然でうちのギヤスパーは負けたのか。

帰ったらニンニク料理作って

克服させるのは決定だな。

今の状況は最悪だ。

イツセーの神器と匙の神器が繋がっている

って事は下手に倍加は使えない。

禁手を切るしかないって事だ。

「スタート」

『Count Down!』

俺の予想通り、イツセーは

禁手を使った。

これから二分間は他の能力を

使えなくなる。

その間俺はイツセーを守る必要がある。

「仁村！あの自販機を使え！」

匙に仁村と呼ばれた後輩は

どこからか顔程の大きさの

箱を取り出すとそれを

自販機に向けると、

バチイッ！

箱から紫電が走ると自販機に当たり、

自販機がひとりでに動き出した！

ギゴガゴゴ！

ガチャン：ガチャツ、ガチャガチャ

ガチャララララガギンゴギン！

グウイーンガツチャン！

自販機が動き出したと思ったら、

変形しだして、人型へと変わってしまった。

そして、銃となった片腕をこちらに向けてきた。

「おいおい、それってありかよー！」

イツセーが銃口を向けられ後ろに引こうとするが、グンツとラインを引つ張られて体制を崩す！

ポオンツ！ポオン！

そこへロボットが銃を発射する！

「変身ー！」

俺は即座に「群青ナイトフォームのクウガ」

に変身し、発射された弾を斬り落とす！

木場に剣を貰つといてよかったぜ！

バシヤア！

「うお、これってコーラかよ」

弾の中から出た液体が顔にかかり

驚く俺の隙をついて、匙がイツセーとの

距離を詰める！

「逃がすかよ、一誠！」

イツセーはそのまま一気に間を詰められ、

ドンツ！

腹に蹴りを食らう！

だが、イツセーはそこまでダメージを

追っていないかった。

修行の成果か！

「へえ、結構マジで蹴ったんだけどな。

お前も半端じゃないトレーニング

積んだようだな」

匙も思ったほどのダメージを

与えられず苦笑していた。

イツセーが繋がれてる今

逃げる事も出来ない！

なら攻めるしかない！

俺はイツセーと共に

匙へ一気に向かう。

だが、匙の方へ向かおうとした

俺の目の前に自販機ロボが行く手を阻む。

クソッ！

コイツは今回のステージの一部だ。

壊すわけにもいかない。

そもそも車と同様只のハリボテだった

クセに何でロボットなんかに!?

あの箱の能力か！

殴りかかってくるロボの攻撃を

いなしている、近くの店舗に

ラインが向かい取り付けてあった

ライトに張り付く。

「仁村！さっき店で取ってきたグラサンだ！」

匙と仁村が懐からサングラスを取り出して、

装着した。まさかッ！

その意味に俺が気がつくも手遅れだった。

カッ！

照明が眩い光を発し、俺達の視界を焼く！

クソ！やっぱり目つぶしか！

ドゴンッ！

「ぐふっ！」

俺は胸に強い衝撃が襲う！

俺は直ぐに頭をガードする！

だが、朧げな視界の中、

その鈍重な姿に似合わない

俊敏な動きで更に殴りかかってくる。

バガンッ！

俺はロボのアップパーを食らってしまう！

余りの衝撃に、俺は床に突っ伏し、

変身も解除されてしまう。

変身を解除されるほど、ダメージを食らってしまった。
あの質量での攻撃は一撃が強大なものだった。
バギツ！

俺の横にやられたイツセーが転がってくる。

俺はイツセーが飛んで来たの方に視線を向けると、

こちらへ手を向け、魔力の弾を

放とうとしている匙の姿がっ！

ここで一気に止めを刺す気か！

俺達は急いで立ち上がり、横に転がった。

ドンッ！

放たれた魔力の一撃で床に大きな穴が空く！

なんて威力！食らっていたら間違いなく

退場していた。

俺達もギヤスパーのこと言えないぞ！

「…やるじゃねえかよ匙」

「一誠、俺は本気だよ。」

俺は本気で赤龍帝と呼ばれる

お前を倒す」

っ！

また、一誠か、

匙の瞳には決意に満ちていた。

その眼で匙の本気度が伺える。

だからこそだろ。

さらに匙はイツセーに手を向け、

魔力の一撃を放とうとしていた。

ドンッ！

再び放たれる高出量の魔力の塊！

大きさは大したことない。

おそらく建物を出来るだけ

壊さないというルールに

従っているからだろう。

だけど、今のイツセーを倒すなら
十分な威力の一撃だろう。

イツセーが避けた先に合った店舗が
魔力の一撃で破壊される。

この威力おかしいぞ！

いくら修行したって

ここまで威力が上がるなんて

ありえない!?

何か魔力が上がったカラクリが

あるはずだ！なにかが、

俺は匙を観察し、ある事実気付く。

匙の神器は自身の胸部、心臓に

向かってラインが伸びていた。

この一撃の源流は匙の命そのものか！

「匙！お前は自分の命を魔力に

変換してるのか!？」

「そうだ。魔力の低い俺が高威力の

一撃を打ち出すにはこれしかなかった。

神器の力で命を魔力に変換する。

見ての通りだよ。『命がけ』ってやつだ」

「本当に死ぬ気か…ッ！」

イツセーの問いに

匙は真剣な眼差しで微笑んでいた。

「ああ、死ぬ気だよ。死ぬ気でお前達を

倒すつもりだ。お前に夢をバカにされた

俺達の悔しさがわかるか？

夢を信じる俺達の必死さが分かるか？

この戦いは冥界全土に放送されてる。

俺達をバカにした奴らの前で

シトリー眷属の本気を見せなきゃいけない！」

俺はこの光景に見覚えがあった。

それはイツセーがリアス先輩の
婚約パーティーに乗り込んだ
時とそっくりだ。

自分の命を顧みず自身の目的を
達成しようとしたあの情景に

この戦いが重なった。

やっぱりこいつはイツセーと似ているな。
だからこそ俺は…。

その後もイツセーと匙、

俺とロボの戦いは続いていた。

その横では小猫ちゃんと仁村が

攻防を始めていた。

小猫ちゃんは格闘に秀でている。

それでも相手の女子もうまく

食い下がっており、戦いは激化していた。

だが、小猫ちゃんの拳が相手の頬を

掠めた後、変化は起きた。

仁村の体が少しだけ揺らいだ。

少しだが目を泳いでいたと思う。

小猫ちゃんの拳の余波にやられたのか？

小猫ちゃんはその隙を見逃さなかった！

拳に薄い白色のオーラを纏わせ、

相手の胸に打ち込む！

パンッ！

小気味の良い音が周囲に響き渡った。

その瞬間、仁村は膝を落とした！

「…気を纏った拳で貴方に打ち込みました。

同時に貴方の体内に流れる気脈にも

与えたため、もう魔力を練る事はできません。

さらに言うなら内部にもダメージは

通っています。…もう、貴方は動けません」

小猫ちゃんがそう言う！

たしか、先生が言っていた。

『小猫の仙術と格闘を混ぜた本来の

戦い方は確実に武器となる。

相手の肉体だけでなく、

体内を巡る気脈にまで打撃を与える

一撃は敵のオーラを根本から折る。

だが、力に呑み込まれそうになったら、

すぐに使うのを止めなければならぬ。

仙術は気を読めるようになり、

扱えるようにもなるが、世界に

漂う邪気や悪意まで取り込んで

しまうからな。小猫の姉がそうだった

のも邪気を吸い過ぎたせいだ』

これが小猫ちゃんの拳打！

気が籠った一撃を相手に打ち出す。

外的ダメージはもちろんだが、

メインの破壊力は体の内側へのダメージ！

拳に込められた気が相手の内側を通り、

内臓にダメージを与える。

拳のダメージが通らなくても

打ち出された気が内部を破壊すれば

効果は絶大！

人は内臓までは鍛えられない！

内部を破壊する拳、それが

小猫ちゃんが封じていた攻撃か。

俺達眷属の中で一番効果的な

攻撃をするかもしれない。

「…匙先輩、ゴメンなさい」

それだけ仁村は一言漏らすと、
身体が光り輝き、

この場から消えてなくなる。
深刻なダメージを負ったため、
リタイヤしたのだろう。
彼女が生み出したロボも
身体が錆びていき、
塵となって消えていった。

『ソーナ・シトリー様の

「兵士」一名、リタイヤ』

アナウンスも聞こえてくる。

これで、お互いのチーム、
一名欠けたな。

「…私は冥界猫になるんです。
負けません！」

これで三対一だが、
後輩が頑張ったんだ、
俺達も負けられないぞ。

さっきまで俺達は攻撃を
避けるので精一杯だったが、
此処からは形勢逆転だな。

「ハアハア…ハアハア…」

先程まで魔力を打ち続けた
匙の疲弊ぶりもかなり酷い。
あれじゃ、もう保てないだろう。

「…イツセー先輩、祐介先輩、加勢します」
小猫ちゃんが俺達の間に入ろうとする。

「ダメだ、小猫ちゃん。

ユウスケもだ、ここは
匙とサシでやらせてくれ」

イツセーの拒否に小猫ちゃんは
首を横に振る。

「駄目です。これはチーム戦。

協力しましょう」

「ああ、小猫ちゃんの言うことはもっともだ。けどな、小猫ちゃん。匙は、あいつは俺と戦っている間、小猫ちゃんやユウスケに直接的な攻撃は加えてこなかった。

その気になれば、ラインを二人に飛ばして力を吸う事も出来た筈だ。それでもそうして来なかったのは何故だと思う？」

イツセーの問いに答えられなかったが、匙がにんまり笑いながら答える。

「…悪いな、祐介、塔城小猫ちゃん。

俺はタイムマンで兵藤に、

赤龍帝に勝ちたいんだ。言っただろ？

俺達の夢は本気だ。学校を建てる

差別の無い学校を冥界に作る。

そして俺は先生になるんだ…。

俺の夢…。この戦いは冥界全土に放送だ。

だからこそ意義がある。

『兵士』の俺が！同じ『兵士』である

赤龍帝・兵藤一誠に勝つことがよツツ！

俺は赤龍帝に勝つ！勝って堂々と言ってやる！

俺は先生になるんだツ！」

匙は本気なのだろう。

その眼差しは強く、

一切の曇りも陰りもない。

「てなわけだ。こいつの挑戦から

逃げたらさ、俺、格好悪いじゃん？

やらないと。だから、

やらないといけないんだ。

ダチだからさ、こいつを本気で倒してやらないとしようがないんだよ。やってやらねえとよっ！

俺が部長に顔向けできねえんだよッ！」

二人が拳を握り相対するその時、

俺は二人の間に立つ。

「ふざけてるよな、お前達！」

勝手に二人だけ分かり合いやがって、

俺は無視か！俺だって『兵士』だぞ！」

「ユウスケ」

「ユウスケ先輩」

俺の話にイツセーも小猫ちゃんも

驚いた様子だった。

「匙、お前もお前だよ、

お前のライバルはイツセーだけか？

俺はライバル足り得ないか？

この戦いでお前に教えてやるよ！

俺の強さをな」

「ユウスケ、これは俺の我がままだ

俺と匙だけで戦わせてくれ

二体一で勝っても意味が無い！」

「お前の考えは分かっているぞ。

だから、俺も俺のわがままを

突き通す！お前は匙を倒す事だけを

考えろ！なら俺はあいつの攻撃を

全てを防ぎ彼奴の想いを受け止める」

俺の発言に匙が眉を吊り上げる。

「確かにお前の存在を無視して悪かったよ。

だけどよ、今のお前に俺の攻撃を

受けきれぬのか？」

匙の言う通りだ、今の俺では

匙の攻撃を受ける事は出来ないさだから。

「それは分かっている。

だから、小猫ちゃん。」

君の力を貸してくれないか？」

俺の言葉に小猫ちゃんは

動揺していた。

「私の力をですか？」

「ああ、君の力を貸してくれ

三人で勝とうぜ！」

「私の力でよければ、

いくらでも貸します祐介先輩！」

小猫ちゃんが応えてくれた瞬間、

彼女の胸から淡い紫色の光が現れ、

腰のベルトへと吸い込まれる。

ベルトの宝玉は紫紺色に輝きだす。

俺はベルトに手をかざし、

腕を突き出す。

「変身ッ！」

俺の皮膚は黒く硬化し、

胸部と肩部を紫色の鎧を纏い。

腕にはごついガントレットに包まれる。

クウガの『戦車』の姿。

『深紫ルークフォームのクウガ』

「この姿ならどんな攻撃でも

防ぐ事が出来るさ」

俺は近くに落ちていた

自販機のパーツを拾い上げると、

その姿をと変える。

「ならこれを防ぐ事は出来るか！」

匙の手元に今までにない質量の魔力が

集まり圧縮されていく！

「それでも、食らいやがれえ！」

ドゥンツッ！

俺は圧縮された魔力弾に変化した

それを突き出す！

「やったか？」

確実な手ごたえを感じている匙だったが、

土煙が晴れた際にその目に映ったのは。

人ほどの大きさの大楯を構える俺の姿だった。

「ハッ、その大楯なら、確かに

俺の攻撃も防げるだろうな！

だが、まさか、新たな姿は防御だけの力かよ」

いいや、違うさ。

俺は先ほど落としてしまった

剣を拾うとそれも姿を変える。

姿を変えた剣は剣と言うにはあまりにも

大きすぎた、大きく、分厚く、重い

大雑把すぎる剣だった。

それはソードメイスと呼ばれる武器だ。

「強そうな姿じゃないか

いいぜ！二人で来いよ！

祐介を突破して一誠お前を倒す」

改めて覚悟を決めた様子の匙だが、

悪いなもう時間だぜ。

「お前の覚悟確かに受け取ったぜ！

だけど、俺もこんな所で立ち止まる

訳にはいかないんだ。匙！ユウスケ！

行くぜええええええっ！

輝きやがれっ！ブーステッド

・ギアアアアアアアッ！」

イツセーの叫びに呼応して、

神器が音声を鳴り響かせる！

『Welsh Dragon Balance Breaker
!!!!!!』

赤く輝く特大のオーラがイツセーを包み込み、
それは鎧と化していく。

ゲームが開始してから、十分程が経過した。

イツセーは『赤龍帝の鎧』に身を包んでいた。

第67話「撃破」

木場 side

ゲームが開始してから数分。

僕とゼノヴィアは立体駐車場に入っていた。

薄暗い駐車場を警戒しながら進んでいく。

お互い、任務で密偵が多いせいか、

この手の進行は得意だ。

僕が先に進み、物陰から先を見定めてから、

後方のゼノヴィアを呼んで進む。

これを何度も繰り返して、

徐々に駐車場のなかを進んでいった。

二階の駐車場から、車用の通路を下りて、

一階に行く作戦だ。エレベーターも機能しているが、

乗っている間に襲撃されるのは怖い。

一番確実な方法で進むしかないだろう。

二階から通路を進んで、

一階の駐車場へ足を踏み入れたときだった。

前方に人影。

見れば、メガネをかけた黒髪長髪の女性が一人。

知っている。会長の『女王』、

「生徒会副会長」真羅椿姫先輩。

手に持つのは長刀だ。

そう、彼女は長刀の使い手と聞く。

かなりの有段者とも。

「ごきげんよう、木場祐斗くん、ゼノヴィアさん。

ここへ来ることは分かっていました」

淡々と話す真羅先輩。その横から二名。

長身の女性と日本刀を携えた細身の女性。

長身の女性が由良さん。『戦車』だ。

日本刀を持つ女性が巡さん。『騎士』だ。

由良さんは体術に秀でており、

巡さんは悪霊退治を生業にしていた一族の出なるほど、立体駐車場に三名を配置したか、

ソーナ会長。いい読みです。

こちらを手堅くしましたか…。

僕達が攻撃の本命だと読まれていたのだろう。

ゼノヴィアは腰に携えた剣を抜き放ち、

僕も手元に聖魔剣を創り出した。

ゼノヴィアはデュランダルを使わない。

デュランダルでは、ルールの特性上、

うまく立ち回れないだろう。

威力を制御できていない為、

建物を無闇に破壊してしまう。

『リアス・グレモリー様の

「僧侶」一名、リタイヤ』

っ！アナウンスから聞こえてきたのは

仲間の敗北だった。アーシアさんとは

考えにくい。方法はわからないが、

ギヤスパ―君がやられたか。

「冷静ですね」

真羅先輩がそう口にする。

「ええ、ここのうのに」

慣れておかないと身が保ちませんから」

僕はいたって冷静に返した。

心中でははらわたが煮えくり返っている。

仲間をやられた悔しさは僕だって持っているからね。

ギヤスパ―君。おそらく、

力を発揮できずにやられただろう。

僕がキミの分まで剣を振るおう。

「まったく、あいつは体の

鍛えが足りないから」

横でゼノヴィアも嘆息していた。
彼女も冷静だと思っていたんだが、
その目は座っていた。

「だが、かわいい後輩をやられたのでね。
仇は討たせてもらうよ」

彼女から凄まじいまでのプレッシャー
が放たれる。味方の僕にもピリピリ伝わってくるよ。
意外に彼女も身内に甘い。

ああ見えてもギヤスパ―君を可愛がっていた。
彼の敗北の報せは彼女にとって、
許し難いものだろう。お互いに得物をかまえ、
じりじりと間合いを詰めながら飛び出した！
ギイイイイインツ！

僕と真羅先輩、ゼノヴィアと巡さん
が剣を交える。その勢いに剣から
火花が散り、激しい金属音を奏でた。

その瞬間、巡さんがゼノヴィアの
手にしている物に気づき、一歩下がった。

「…聖剣!？」

彼女は驚愕の声をあげていた。
そう、ゼノヴィアが持っているのは聖剣。
しかも伝説上のものだ。

「ああ、これはアスカロン。
イツセーから借りた」

『ツ!?!』

ゼノヴィアの告白に相手全員が驚いていた。
アザゼル先生はブーステッド・ギアと
同化したアスカロンに注目していた。

「イツセー、それ外せないか?」

この一言により、アスカロンは
神器から取り外せることが発覚。

急遽、先生はゼノヴィアに
アスカロンに慣れてもらう
修行プランを渡したんだ。
外での修行でアスカロンの
扱いに慣れてきているようだ。
アスカロンには龍殺しの力と
赤龍帝の力が両方宿っており、
絶大な威力をほこる得物へと
変化している。

破壊力はデュランダルに及ばない
かもしれないが、使い勝手を
考慮するなら、デュランダルよりも
使える幅は広い。

ただ、現在イツセイ君の元に
アスカロンは無い。
それが今回徒とならなければ
いいんだけど…。
いや、ユウスケ君もいるから
心配はいらないか…。

その後、僕とゼノヴィアは
相手と激しい斬撃戦となった。
お互い避け合いにもなるが、
僕が気になるのは相手側の
もう一人『戦車』の由良さんだ。
彼女の動き次第で僕とゼノヴィア、
どちらを危険視して狙ってくるかがわかる。
彼女に警戒しながらも僕は
聖魔剣を副会長に放ち続ける！
僕とゼノヴィアの剣は聖なる
波動を持っている。

相手に一撃当てれば大ダメージは確定だ。

そうすれば回復する術を限定されている
彼女たちはリタイヤするだろう。

一太刀だ。一太刀浴びせれば
僕達の勝ちとなる！

攻防を繰り返すゼノヴィアは、
ふいに空間に穴を開けた。

通常ならここでデュランダルを出現させる
と思うだろう。だが違う。

空間の裂け目から聖なるオーラが漂い、
ゼノヴィアの持つアスカロンを包んだ。

「っ！デュランダルを空間に閉じ込めたまま!?
聖なるオーラだけを！」

意味を理解した新羅先輩は
驚愕していた。それに対してゼノヴィアは笑う。

「ああ、デュランダルのおもしろい
使い道を提示されてね。

修行でなんとか得られた。
今の私には十分すぎる使い方だよ」

部長とアザゼル先生は、ゼノヴィアの
デュランダルも重要視していた。

それと同時に彼女が剣を使いこなせ
ないところも勿体ないと感じていたという。

デュランダルは凄まじいまでの
切れ味をほこる聖剣だ。

それゆえ、持ち主が使いこなせなければ
凶刃となる。事実、ゼノヴィアは

デュランダルを使う者の、
破壊力に翻弄されている

部分も多分にあった。
いつかは使いこなせるかもしれない。

けれど、それまでただ闇雲に凶刃を

振るうには危険も伴う。

そこで先生は思いついた。

「そのデュランダルのオーラだけ、
異空間から放出できないか？」

どれをアスカロンか、木場が創り出した
聖剣に纏わせるんだよ」

アスカロンの件といい、それといい、
おそろしいまでの着眼点だと僕も驚嘆したよ。

その場にあるだけで強大な聖なるオーラを
放ち続けるデュランダルの。

そのオーラだけを異空間から取り出して、
他の剣に力を流す。デュランダルのほどではないが、

限りなくそのパワーに等しい能力が違う剣に
注がれることとなる。それが

ゼノヴィアが手にしている聖剣アスカロン
の新しい力だ。墮天使の総督アザゼル。

僕達にあらゆる可能性を提示してくれた。
このような墮天使を敵にまわしていたんだ。

こちらの陣営に加わってくれた事を歓喜するよ。
アスカロン+デュランダルのオーラで

ゼノヴィアは相手に攻め込んだ！
ギイン！ギイイインツ！

暗がりの駐車場に銀光と火花が煌めく。

『騎士』巡さんの持つ技量と刀は
かなり特別なのだろうか、

ゼノヴィアの速度とパワーに
巡さんは徐々に追い詰められていた！

「くらっ！」

一瞬の隙を見逃さず、

ゼノヴィアが一気に詰める！

取ったか！

だが、その間に入り込む者がいた

『戦車』の由良さん！

彼女が両手を前に出すと。

「反転^{リバース}！」

ゼノヴィアがかまわず一撃を繰り出すが、

聖なるオーラは消失し、

魔のオーラと変化した！

ゼノヴィアの斬撃はただ勢いのある一撃となり、

そのまま由良さんに振り下ろすが、

容易に躲されてしまう。

ドガアアアアアアアアンツ！

ゼノヴィアの一撃が地面を砕く！

なんだこの一撃は!?

まるで「戦車」並みの力だ！

修行の成果かと思われたが、

これは、ゼノヴィアにも予想外であったようだ。

自身の出した力に驚き隙を作ってしまった。

そこを由良さんに弾き飛ばされてしまう。

そのまま由良さんは追撃しようとするが、

ゼノヴィアは体勢を立て直して、蹴りを避けた。

ガツシャツアアアアアンツ！

蹴りは勢いのあるまま車両数台を

一気に吹き飛ばす。直撃は危険な威力だ。

僕は先ほどの現象に驚いていた。

聖なるオーラが魔のオーラに!?

由良さんは「反転^{リバース}」と叫んでいた。

つまり、聖なるオーラを魔のオーラ

に変質させたというのか!?

由良さんの能力？神器？

それはわからないが、これは厄介だ。

いわゆるカウンターの一種。

由良さんと巡さんが組んだ状態で
カウンターをされたらマズイ。

それにゼノヴィアに起こった現象も

不明だ、反転リバースされた結果か!?

ただ、アスカロンの聖なる力は反転リバースされて

魔の力となる。魔の力では、悪魔に普通の

ダメージしか与えられない。悪魔の源は魔力なのだから。

ただの斬撃となってしまう。あのパワーなら

当たればただじゃすまないが、

今回のルールでは力で押すわけにもいかない。

ゼノヴィアも凄まじいまでの技量のb

持ち主だが、聖剣ありきの修行と

戦闘をおこなってきているため、

この戦いは困惑するだろう。

カウンターをくらえば、

ゼノヴィアでも倒れる。

：やってくれる、シトリー眷属。こうなれば。

「ゼノヴィア・チェンジだー」

僕の一声に僕とゼノヴィアは

位置を交換し、お互いの相手を替えた。

これでいい。僕の聖魔剣ならば「反転リバース」

の効果も意味がないだろう。

聖と魔、入り交じった力に反転する

ものなどないのだから。

由良さんも「反転リバース」する構えも見せず、

巡さんと共に僕の相手を始めた。

隣ではゼノヴィアと真羅先輩の攻防が始まっている。

ゼノヴィアの猛撃は激しく、ついには

真羅先輩を壁に追い詰めるまでに至った！

取れる！

ゼノヴィア、そのまま一気に決めるんだ！

僕の心中が伝わったのか、
ゼノヴィアがアスカロンを振り上げ、
トドメの構えとなる！いけるぞ！

『女王』を取れば、だいぶ形勢も楽になる！

「これで、勝負を決める！」

ゼノヴィアが剣を真羅先輩に振り下ろし、
直撃する。

その瞬間だった。

「神器、『追憶の鏡』」

真羅先輩の前に装飾された巨大な鏡が出現する！

ゼノヴィアの斬撃は勢いを止めずに

その鏡を粉碎する。

ズオオオオオオオンツ！

「ツ!？」

割れた鏡から波動が生まれ、ゼノヴィアを襲った！
困惑した表情を浮かべたまま、

ゼノヴィアは鮮血を辺り一面に噴出させていた。

「この鏡は破壊された時、衝撃を倍にして

相手に返します。私はカウンター使いです。

木場祐斗君、パワータイプのゼノヴィアさんを

私にぶつけたのは失策です」

冷笑を浮かべる真羅先輩。

「がはっ！」

路面に転がるゼノヴィアは苦しそうに

口から血を吐き出していた。

やられた！

聞いていた能力とは違う。

変化と成長を遂げ新たな能力を得たか！

詰め寄る三人。僕はゼノヴィアを担ぐと、

神速で奥の物陰に身を隠した。

ゼノヴィアを車の陰に置き、

先程のドラッグストアで取ってきた治療グッズを展開する。

完全にやられた。カウンター使いを二人も投入してくるとは…。ソーナ会長は、まず僕達を完全に潰すつもりのようなだ。

僕達を本命と読んでいれば当然か。

確かに脚が速く聖剣の使える僕達は存在するだけで驚異だろう。

部長は僕達を組ませることで

お互いの弱点を補い、パワーに拍車をかけた。ここまで読まれていたというのか？

ゼノヴィアは：深刻だ。

デユランダル、アスカロンの威力を

そのまま倍で返された。

真羅先輩の神器。あれが聖なる攻撃を

そのままカウンターするタイプの

ものだったら、即リタイヤ。

下手をすれば死んでいた。

このケガでは、彼女の宣戦離脱も遅くない。

次の一手で彼女は完全にリタイヤだろう。

『フェニックスの涙』を持っているのは

部長だ。回復する術がこの場では無い。

ゼノヴィアは治療する僕の手を掴み、言う。

「…捨てていけ、木場。」

私はどのみちこのケガではもうすぐ

リタイヤでこの場から消え去るだろう」

でも僕はその手を離し、治療を続けた。

「ああ、分かっているよ。けどね、

僕は味方をそう簡単に見捨てないと誓ったんでね」

「…甘いな。まるでユウスケや

イツセーのようだ」

その一言に僕は笑みを浮かべる。

「うれしいな。彼らのようになりたいと

思っている部分もあるからさ」

そう、僕は二人のように何があっても

諦めない精神が欲しい。

彼等はすごい。

自分が弱い事を知っているのに、

それでも敵に立ち向かう。

イツセー君は自分を卑下しているが、

その実、誰よりも自分を理解して努力している。

ユウスケ君も戦いの度に成長して

強敵をうち倒してきた。

たぶん、単純な体力面ではもう僕は

彼等に敵わないだろう。

彼等の努力と根性は驚嘆に値する

領域に入っている。努力で一步一步進んできた

彼等の歩みは誰よりも気高い。

「二人の様になる？どうなりたいんだ？

スケベになるのか？」

「スケベはイツセーだけだよ。

それにそれはイツセー君のものだよ。

僕は根性つてのを手に入れたんだ」

その一言にゼノヴィアは苦笑した。

「…キミに一番似合わないものだね」

僕もそう思うよ。

「だろうね。けど、指が一本でも

動けるうちは倒れるわけにはいかないんだよ！」

「…なるほど。こんな私でも指一本ぐらい

動かせるのだから働けと言うんだな？

酷い奴だ」

「倒れるなら、やれることを一ミリでも

一インチでも進めてからにしよう。

後悔は死ぬほど辛いからね！」

『ソーナ・シトリー様の「兵士」一名、リタイヤ』

アナウンズだ。どうやら、

誰かが相手を一人倒したようだ。

僕達も踏ん張らないと。

相手の足音が近づいてくる。

ゼノヴィア。

君はもうすぐ此処からリタイヤするだろう。

だが、その前に君にも見ておいて

もらおうと思う。僕は相手三人の前に現れる。

「覚悟を決めましたか？」

長刀を構え、真羅先輩が近づいてくる。

僕の背に小さな空間の裂け目が生まれているだろう。

ゼノヴィアが発現させている。

これなら相手から死角で見えない。そして、

デュランダルのオーラが僕に流れ込んでくる。

さあ、ゼノヴィア。見せよう。

僕と君、リアス・グレモリーの『騎士』

二名が創り上げたこの技をツ！

ザザザンツ！

この立体駐車場一帯に聖魔剣の剣が生えていった。

一本一本がまとう聖魔のオーラは少ないかもしれない。

だが、デュランダルのオーラもプラス

されるのなら話は別だ。

「デュランダルのバースツ！」

その攻撃は由良さんと巡さんを貫いた。

とたんに輝き始め、この場から消えていく。

二人撃破。真羅先輩はどうやら、

逃れて駐車場から退いたようだ。

抱えるゼノヴィアの体が輝きだした。

「木場。いい攻撃だったな」

この場を去っていく彼女の表情は笑みに包まれていた。だから、僕も微笑んで見送る。

「ああ、僕とキミが組めばまた聖なる剣を咲かせられる」
彼女の重みが消え、そして彼女自身も消えていった。

パライイインツ。

儂い音を立てて、一帯に咲き誇る

聖なる刃は崩れて空を舞った。

sideユウスケ

匙との戦闘になってから数分。

俺達は未だに拳を放ちあっていた。

二対一でどう見ても俺達の方が有利だ。

匙は既にボロボロ。ラインを束ねて

盾にして防御しているが、

打撃を全て相殺出来ていない。

何度もイツセーが殴り倒した。

それでも奴は立ち上がる。

足だつてしつかりと踏ん張れていない。

それでも奴は何度も殴りかかってくる。

匙の拳はとづくにイカレてる。

俺の盾を殴り、傷口が開いて血に染まっていた。

匙がラインを飛ばしてきても

俺の盾でそれを防ぎ、接続を許さなかった。

ただ、出会った当初、イツセーに繋がれた

右腕のラインだけはまだ繋がっている。

ソードメイスでも切れなかった。

俺の技量では斬るのは無理だろう。

いったい、何処に繋がってるんだ？

ゼノヴィアか木場と合流した時に

切断してもらえないな。

他にもおかしな事がある。

俺の盾は強固な筈なのに、

匙が殴りかかってくる度に

一撃一撃が響いてくる。

「…勝つんだっ。…今日、

俺はお前を倒して…夢の第一歩を踏む…ッ！」

眼前のあれはなんだ？

血反吐をダラダラ吐き散らしている、

あれはいつたいなんなんだ？

匙の一撃には奴の想いが籠っている。

「こもった一撃」は体の芯に届くと

以前アザゼル先生が教えてくれた。

今なら分かる。匙の一撃は俺に届いた。

「兵藤オオオオッ！」

過酷な事実に関心が

苛まれても匙は攻撃の手を休めない。

それにイツセーが応じて、打撃合戦を始める。

「ひとつ聞かせろオッ！…どうなんだよ！」

主様のおっぱいは柔らかいのか!?

マシユマロみたいって噂は本当か!?

女の人の体は崩れないプリンのお如く

というのはマジなのか!?

匙は嫉妬に燃えた瞳で殴りかかってくる！

こちらの隙を見てラインを飛ばし、

後方のベンチに接続して力の限り

振り回してくるが、俺は即座に前に出て

盾で防いだ。

これぐらいなら容易に防げる。

「おっぱいを揉んだとき、どう思ったんだよ！

ちくしよおおおおおおおおおおおっ！」

なんだか、夢を語った一撃よりも

こつちの方が激しくないか!?

さらに家具屋にラインを伸ばすと、

そこから大型家具をしこたま

引っ張って宙で弧を描くように

俺の真上に持ってきた!

あのまま家具全部振り下ろす気か!

グンツ!

全ての大型家具が降ってくる中、

俺はソードメイスにオーラを纏わせ、

空に向かって放つ!

ドウンツ!

魔力の波動は大型家具を一気に消し去るが。

ドゴツ!

響いた音の方へ視線を向ければ、

匙が一本だけラインの軌道をずらして

タンスをイツセーにぶつけていた。

「俺だって揉みたい!」

揉みたいんだよおおおおつ!」

ぶわっ! ついに匙は悔し涙を垂れ流した!

「乳房すら見た事ないんだぞ!」

乳首なんて一生拝めるか分からないんだ!

それをお前は自由気ままに

見やがってええええええつ!」

そんな匙をイツセーは殴り飛ばすが、

奴はすぐに立ち上がる!

その根性は認めるが、

言動が酷いな、各陣営がこの醜態を見てるんだぞ…。

「でもな兵藤! 一番はおっぱいじゃない!」

先生だ! 先生なんだよ! 俺は先生になるんだ!

先生になっちゃいけないのか!?

なんで俺達は笑われなきやいけない!?!」

そして匙は俺達に吼えた。

いや、これを見ている多くの者達に向かつて。

「俺達の夢は笑われるために

掲げたわけじゃないんだ…ッ！」

「俺は笑わねえよッ！」

命かけてるお前を笑える訳ねえだろうがよッ！」

向かってくる匙をイツセーは殴った！

これでもかかってぐらい拳を叩きこむ！

匙の顔をみるみるうちに腫れあがり、

歯は折れ、口からポタポタと

血を垂れ流していた。

それでも匙は立ち上がり、

何度でも何度でも向かってくる。

「今日…ここで…俺は…」

お前達を超えていくッツ！」

匙その叫びは、俺の心にズドンと重く響いた。

その後、何十発、匙に打ち込まれただろうか。

「ひゅー…ひゅー…」

いつの間にか、匙の口元から聞こえるのは

消え入りそうな息の音になっていた。

もう限界の筈だ。口の中を幾重にも切り、

血がとめどなく溢れているのだから。

もう言葉すら吐き出せないほどとなっていた。

顔は腫れあがり、左目は完全に塞がれてしまっていた。

体はぐらぐらと揺らぎ、足取りもおぼつかない。

指も何本かあらぬ方向に折れ曲がっている。

それでも。それでも匙は強い眼光だけを俺達に向けていた。

「来いよ、匙。来いよ！匙！匙！匙！匙！」

終わりじゃないんだろう!?

こんなので終わりなんかにするつもりはないだろう!?

俺達バカに出来る事なんぞ、突っ走る

事ぐらいだもんな！」

イツセーの叫びに匙はゆっくりと、
一歩ずつ、前へ進んでくる。

俺達は逃げなかった。

匙は向かってきた。

イツセーから視線をずらすことなく、
真っ直ぐに進んできた。

その姿はイツセーがフェニックスとの
一戦で見せたものと似ていた。

俺も記録映像で見せてもらったが、
ボロボロになりながらも

ライザーに向かつて前進していた。

「お前も必死に修行したんだろう？」

俺も必死こいて修行したよ」

凄まじいほどのプレッシャーを匙から感じる。
明らかにこちらの方が勝っているはずなのに、
恐ろしいまでの畏怖が俺達を襲っていた。

殴っても殴っても倒れない。

そんな相手がこれほどまでに怖いとはな。

「匙、俺はお前を倒す」

匙は折れ曲がった手で、

イツセーへ攻撃を加える。

俺が防ぐ必要がないほど、

スローにも思える速度で

伸びてくるが、

イツセーは最小の動きで避けた。

そこにカウンターの一撃を交えた。

ダガンッ！

「っ」

イツセーの一撃は匙の顔面を完全に捉えていた。
完璧に意識を絶つ一撃だった。

それでも。それでも、匙はイツセーの
右腕をを両手でつかんでいた。

力強く、放すまいと。

匙は意識を失っていた。

だけど、イツセーの右腕から手が離れる事はない。

そして、右腕から手を離さないまま、

匙の体は光に包まれていた。

俺達は消えていくその時まで、

匙から一瞬も目を離せなかったんだ。

目を離したら、復活するんじゃないかと、

そう思えたから。

『ソーナ・シトリー様の「兵士」一名、リタイヤ』

匙：。お前の想い、しつかり届いたさ。

やっぱりお前も俺のライバルだ。

もう、お前達の夢を笑う奴なんていないだろうさ。

第68話「戦術」

匙との勝負も終わり、俺達は先程のロボットから零れ落ちたペットボトルを拾い水分補給を行った。

イツセーも小猫ちゃんも

同様に水分補給を行うが、

イツセーは先ほどの戦闘で

ダメージはそこまで無かった

筈なのに体がふらついている。

匙の繋げたラインは未だに

繋がったままで、よほどの念が

このラインには込められているのだろう。

イツセーの不調はこれが原因なのは明白だ、

速い所木場達と合流したいところだが、

先程のアナウンスで、俺達の『騎士』

一名が撃破されたようだ。

木場か？ゼノヴィアか？

どっちがやられたかは分からないが、

本命が一人やられたのは痛手だ。

相手側も『騎士』『戦車』を

一名ずつ撃破されている。

こちらは残り七。あちらは四。

まだ油断のできない数字だ。

イツセーの禁じ手状態

の残り時間も少ない

速めに決着を決めないといけないな。

その時、通信機器に連絡が入る。

『オフエンスの皆、聞こえる？』

私達も相手本陣に向けて進軍するわ』

リアス先輩からの通信。

そうか、リアス先輩もついに動くか。
序盤も中盤も終わり、

一気にラストスパートだ！

イツセーは大きく深呼吸した後、

俺達に告げる。

「行くぞ」

俺と小猫ちゃんはどうなずき、

俺達は最後の決戦に赴いた。

ショッピングモールの中央広場みたいなところがある。

円形のベンチに囲われて、その中央には

時計の柱が存在していた。よく、

買い物に疲れた客が座っている所だ。

そこまで歩を進めた所で俺達は足を止めた。

当然だろう。ソーナ会長が眼前にいるのだから！

「ごきげんよう、兵藤一誠君、兵藤祐介君、

塔城小猫さん。ぼるほど、それが赤龍帝の姿ですか。

凄まじいまでの波動を感じますね。

誰もが危険視するのは当然です。

それに、クウガの新たな姿ですか。

戦いの度に強くなる貴方も

十分危険ですね」

冷静な口調で言ってくる。

会長は結界に囲われていた。

結界を発生させているのは、

生徒会メンバーの『僧侶』

二人だ。イツセーの右腕から

伸びるラインが『僧侶』の

一人の方に伸びている。

もしかして、あの結界に

赤龍帝の力が利用されているのか？

少しして、眼鏡の副会長さん、
真羅先輩が姿を現す。

それを追うように木場も
俺達が来た方向とは逆から現れた。
やられたのはゼノヴィアだったのか。

「…ソーナ、大胆ね。」

中央にくるなんて」

声がした方へ振り返れば

リアス先輩もここに到着していた。

「そういうあなたも『王』」

自ら移動しているでは

ありませんか、リアス」

「ええ、どちらにしてももう

エンディング
終盤でしょうから。」

それにしてもこちらの予想とは
随分違う形になったようね…」

リアス先輩は厳しい表情だった。

確かに予定では木場とゼノヴィアで

会長を倒す目的だった。

俺達はそのための囮だったわけだけど…。

どうにもその辺を全部読まれていたようだ。

会長の方が一枚上手だった。

だが、俺達だって負けてはない！

ザッ！

横のイツセーがその場で膝を着いていた。

「…イツセー？」

イツセーの変化にリアス先輩も気付き、

アーシアが回復の神器をかける。

淡い緑の色を放ちながら、

イツセーの体をやさしい光が包むが

イツセーに変化は無かった。

リアス先輩が『フェニックスの涙』を
取り出そうとするが、踏みとどまった。

アジアの神器で完治しないということとは、
涙も効果が薄いと判断したのだろう。

眷属全員がイツセーの変化に気づき、
困惑しだした。

マズイ、不測の事態に皆冷静さを無くしている。
そんな中、会長が小さな笑みを漏らして言う。

「アジアさんの神器でも『フェニックスの涙』

でも効果はありませんよ。リアス、
私はライザーとの一戦を収めた

記録映像を観ました。その結果分かった事、

兵藤君は恐ろしいまでに戦いを諦めない子だと
いう事です。仲間の為、自分の為、

そして何よりもリアスの為に」
会長はさらに続ける。

「ダメージなどでは倒しきれないかもしれない。

何度打倒しても貴方は立ち上がる。

私達にとつて、貴方のその『根性』と呼ぶものが
赤龍帝の力と相まって驚異的存在だった。

そう、諦めず立ち上がり続ければ、
貴方はいつか敵を倒せると信じ切っている。

その心構えが赤龍帝の力に直結し、
パワーを幾重にも増大させてきた。

それが兵藤くんにとって何よりも
武器となっていたのです」

それは俺達の強みだからな。
諦めなければ負けはしない

それが、俺達がこのゲームを始める前に
誓った事だ。

「だからこそ、違う形で貴方を

倒すしかなかったのです」

『僧侶』の一人は抱えていた

バッグからパックを取り出した。

そのパックの中身は赤い。

ラインがそのパックに繋がれていて、

まさか、パックの中身は…。

会長がその中身を告白する。

「これは貴方の血です。

人間がベースとなつている転生悪魔。

人間は体に通う血液の半分を失えば致死量です。

知っているでしょう？レーティングゲームの

ルール。ゲーム中、眷属悪魔が戦闘不能状態

になると、強制的に医療ルームへ転送されます」

匙は最初からこれを狙っていたのか！

ヒュッ！

木場が聖魔剣の短剣を投げて、

イツセーに繋がっているラインを

切り離すが。切断された

ラインから赤い血が床に飛び出す。

「手遅れです。もう、貴方は

医療ルームに転送されるだ

けの血を失いました」

会長の冷淡な一言。

「ソーナ。あなたはッ！」

イツセーに駆け寄るリアス先輩の表情は

焦りに包まれていた。

俺達は完全に裏をかかれたつてことか。

「そう、匙は神器を用いて、

一誠君の血を少しずつ少しずつ

吸い取っていたのです。

危険な状態となる寸前まで。

対象のエネルギーを吸い取るのが
本来の能力である神器で

血液を吸い続けるには、

相当な修行と緻密なコントロール

がいりました。しかし、

匙はそれを完遂させたのです」

あんな状態でも殴り続けたのは

根性だけじゃなく、時間稼ぎの為でもあったのか。

血を少量ずつしか吸い取れないから、

自分の体を犠牲にして、目的の時間を稼いだのか！

俺はあいつと正面切ってぶつかつた。

目的が時間なら、撤退して時間を

稼いだって良かったはずだ、

それでも奴は、不利でも真つ正面から

突っ込んできた！

俺は勝った気でいた、

だが、結果的に匙の力で

イツセーが倒される。

俺は全然、仲間を守れてないじゃないか！

「兵藤一誠君。貴方はリタイヤに近いでしょう。

これから攻撃も一度か二度しか出来ないはずですよ。

理由は失血。貴方の鎧は堅牢。貴方の攻撃力は強大。

けれど、倒し方は探せばいくらでもあります。

貴方を物理的に倒せなくてもゲームのルールが

貴方を戦闘不能とみなします」

イツセーにはもう立ち上がる力すら

残っておらず、言い返す事もできなかつた。

会長がリアス先輩に訊く。

「リアス、あなたはこの戦いに何を

賭けるつもりでしたか？私は

命を賭けるつもりでした。

私の夢はとても難しいものです。
ひとつひとつ壁を崩していかなければ、
解決の道が切り開けません」
会長は真つ正面からリアス先輩に言う。

「リアス、貴方のプライドと

評価は崩させてもらいます」

会長の言葉にリアス先輩は苦虫を
噛み潰したようだった。

リアス先輩は心底悔しいはずだ、

この戦いはリアス先輩が有利で

勝つのが当たり前とさえ思われている。

それがこの結果だ。

会長に手を打たれれば撃たれるだけ、

評価を下げる事となる！

会長はそれも狙っていた！

ソーナ・シトリー！

どこまで計算してやがるんだ！

会長の視線がイツセーに移る。

「匙は。彼はずっと貴方を超えると

言っていました。匙にとつては貴方は

同期の『兵士』であり、友人であり、

超えたい目標だったのです」

それは共に戦った俺も感じていた。

「でも、貴方には伝説のドラゴンが

宿っている。ただそれだけで、

彼は貴方に劣等感を持っていました。

私はそんなものがなくとも戦えると、

あの子に伝えたかったです。

そして、それは匙に伝わりました。

ラインは匙が破れても消えませんでした。

それほどの強烈な念が籠っていたという事です。

もうすぐこの戦場から消え行く貴方に

言いましょう。上ばかりを

目指していたあなたのように、

匙は貴方を倒す事を目標に走っていたのです。

夢を持ち、懸命に生きる『兵士』は

あなただけじゃない！

貴方を倒したのは匙元士郎です！」

『今日こそ俺は！お前達を超えていくツツ！』

匙の言葉が俺の脳裏によみがえる。

彼奴はイツセーを超えるのに必死になっていた。

自分と同じドラゴンの力を宿した『兵士』

自分と似ているからこそ負けられなかったのだろう。

自分が勝てなくても、仲間の誰かが倒してくれると

信じていたのだろう。だが、彼奴の根性が

イツセーを失血まで追い込んだ、

俺の必ず守るといふ思いも

彼奴は超えていった！

すると、イツセーが最後の力を振り絞って

立ち上がる！そして少しだけ距離を取った。

イツセー！まだ戦うつもりかお前は！

イツセーはリアス先輩に向けて両手を前に出す。

新技でのサポートかッ！

「リタイヤ前に…俺は俺の煩惱を

果たしてから消えようと思う…」

イツセーの全身をオーラが包み込む。

「高まれ、俺の欲望ッ！煩惱解放ッ！

広がれ、俺の夢の世界ッ！」

刹那、イツセーを中心に謎の空間が展開する。

それを肌で危機を感じたのかグレモリー、シトリー

両眷属の女性陣は身を守る格好になっていた。

俺はこの段階で嫌な予感がしていた。

すると、イツセーがリアス先輩に声を掛ける。

「あなたの声を聞かせてちょうだいなッ！」

リアス先輩は突然の事に反応できなかったが、イツセーは満足したように何度も頷いていた。

「部長、今俺を心配してくれましたね？」

変な事ばかりしていると体に障ると…」

イツセーの言葉にリアス先輩は

驚愕の表情を浮かべる。

「イツセー…ど、どうしてそれを…？」

イツセーの新技ってもしかして…？

イツセーはさらに会長に質問する。

「貴方は今何を考えている？」

相手の心を読む力を身につけたのか？

「ソーナ会長、今俺の新必殺技が心の声

を聞けるものだと思いますね？」

イツセーの告白に会長は酷く驚いていた。

やっぱりそうだったのか、

これは凄い技が出来たものだな。

「ふふふ、違う。当たっているけど違うんですよ。

俺は聞きたかったんです。胸の内を！

否！おっぱいの声を！」

イツセーは格好つけたポーズで堂々と

新必殺技の名を叫ぶ。

「新技、『乳語バイリンガル翻訳』ツツ！」

俺の新技は女性限定でおっぱいの声が

聞こえるんですッ！…ハアハア。

質問すればおっぱいは偽りなく

俺にだけ答えを教えてくれる！…ハアハア。

相手の心が分かる最強の技なんですッ！

うっ、血が足りねえ…」

血が足りずフラフラで今にも死にそうなのに

イツセーは満足そうだった。

こいつは山籠もりまでして生み出した
新技がこれか…。

確かに強い技だが酷いだろこれは。

「へー！その『僧侶』のお姉さん
のおっぱい、どうなのさ！」

「いや、聞かないで！」

『僧侶』は身の危険を感じ、胸元を隠す。

「なんだよ！木場ばかりモテやがって！」

もう一人の『僧侶』のお姉さんの

おっぱいはどうなんだい！」

プライバシーのへったくれもないし、

絵面が最悪過ぎるな。

もう一人の『僧侶』は

イツセーが視線を向けるだけで

しゃがみこんでしまった。

「やめてください！キモイ！」

イツセーは声を聞いた後、

その場に崩れおちた。

あれは精神的なダメージを受けたんだろうな。

防ぎようのない技だが、

聞く内容によっては

イツセーの方がダメージ食らうのか。

ふと、イツセーが周りを見渡すが、

俺も含めて全員目をひくつかせていた。

イツセーはその光景に不思議そうに首を

傾げていた。

その姿に会長は目をひく尽かせ、

リアス先輩は額に手を当てて嘆息していた。

「リアス…。これはちよつと…」

「ゴメンなさい…」

「怖い技だと思うけれど、プライベート侵害で、

このままでは女性悪魔と戦えませんか？」

「ええ、嚴重注意しておくわ…」

「そりやそうだ最悪禁止技になるだろ、

イツセーがガバツと起き上がり叫ぶ。

「まるで俺が、本当のド変態じゃないか！」

『ド変態ですッ!!』

グレモリー、シトリーからの総ツツコミをイツセーは食らう。

自覚が無かったのかよこいつは。

皆の総ツツコミに絶句していたイツセーは

気を取り直して会長に訊ねる。

「会長のおっぱいさん！」

今の作戦はどういう感じか教えてくれ！」

会長の胸の内を聞いたイツセーが

俺達に情報を伝えてくれる。

「皆、会長のあの結界は…囧だ。」

結界の中に立体映像を出す『僧侶』

二人の術なんだ…。本物の会長は屋上だ！

映像に精神だけ映しているみたいだぜ…。

小猫ちゃんの索敵が屋上の会長を

捉えないのもそのせい。でも、

精神がこちらに来ているから、

パイリンガルも効いて映像の

おっぱいが話してくれたのかな…?」

イツセーはそれだけ伝えると、その場で倒れ込む。

「イツセーさん！」

アーシアがイツセーへ駆け寄ってこようとするが

会長の『女王』がイツセーの元に行かせまい

とする。

アーシアはその場で祈りのポーズを取ると、

その体が淡く輝きだし、周囲一帯に広がろうとする。これは、アシアの回復能力が範囲拡大したものか？修行の成果か！回復は意味が無いってわかっている筈だが、それでもイツセーを心配するのは彼女のやさしさからだろう。

「それを待っていましたー！」

『僧侶』の一人が会長の立体映像を解く。

結界と会長の映像が消えるが、

相手『僧侶』はかまわずにアシア

の回復領域に足を踏み入れた。

回復領域を利用して回復するつもりか？

いや、彼女はダメージを受けてない筈だ。

『僧侶』は両手を広げると、叫ぶ。

「反転ー！」

ドンツ！

淡い緑色の光が一瞬で変質し、

赤い危険なものを発する。

「あつ」

その瞬間、アシアが光り輝いて消えていく…!?

「…回復の反転はダメージ…」

アルジエントさんの回復能力は絶大…

それを反転すれば…」

アシアの回復領域に入っていた相手の

『僧侶』は血を吐きながらも満足げな

表情を浮かべていた。

アシアの回復能力を逆手に取られたのか！

「…グレモリーの回復要員を

倒しました…会長…」

会長の『僧侶』とアシアが

同時に消えていく。

そしてイツセーの体も光に包まれていく。

「やろう、イツセーだけじゃなくアーシアまでッ！」

俺が残りのシトリー眷属を倒そうと前に出たその時だった。

ドクンッ！

「グフッ！うっうううッ！」

ぐううう！あ、あああああ！」

突然、体に引き裂かれるような

痛みが走り、立っている事が出来ず、

その場に倒れ込み、体を抑え込む。

「ユウスケ！何が起きたの！」

俺の突然の変化に両陣営が驚いている。

「ああああ、な、何があああ、」

俺の体が光、白いクウガへと変わってしまう。

「グフウウッ！ガアアアアア！」

さらには変身も解けてしまい。

俺は血だまりの中に倒れ込む。

そして、俺の体は光に包まれていく。

ま、まさか、『戦車』の姿に

体がもたなかったのか…？

そ、そんな、こんな形で

負けるなんて、俺はまだ、

何もしてないのに…。

…匙、イツセー。俺は。

『ソーナ・シトリー様の「僧侶」一名、リタイヤ』

『リアス・グレモリー様の「僧侶」一名、

「兵士」二名、リタイヤ』

第69話「投了」

アザゼルside

俺はVIPルームで苦笑していた。

「…これが現赤龍帝か」

観戦している重鎮の誰かがつぶやく。

VIPルームは啞然となっていた。

当然だ。食い入るように観戦

していたのにモニターに映ったのは

バカの新技だったからだ。

パイリンガル

あまりに頭が悪すぎる。

エロに寛容な俺でさえ、一瞬何が起きたか

まったく理解できなかつた。

この俺がこうなのだから、他の連中の

心中は酷いことになっているだろうさ。

モニターに映るリアスは顔を真っ赤に

していた。同情はするが、

いやはや、これは面白い。

しかし、このパイリンガル。

派手さは皆無だが、

実際の所、恐ろしい技だ。

相手が女なら、高確率で戦いの様子が逆転する。

何せ、心の内を露わにさせるんだからな。

これほど相手にとって怖い技もない。

しかも立体映像でも精神を投影するタイプの

場合。心の内を知られる。

女限定の勝負ばら、やりようによっては無双

となるな。どんどん女に嫌われる技を

開発するな、あいつは。

本当にモテる気あるのか？

性欲の末に閃いた技だろうから、
本人がどれほど凄い物か、
いまいち理解ができていそうに
ないのが残念だが…。

というか、ゲームで使うのは禁止に
するようリアスに言っておこう。

このままでは他の悪魔とゲームしてもらえんぞ。

悪魔の多くが女性悪魔の眷属を

有しているからな。

ヴァーリ。イツセーよりも格段に格上の

お前が、歴代最弱と呼び声高い赤龍帝

「兵藤一誠」に興味を持ったのもわかる。

おもしろい。

この一言に尽きる。

見ている、戦っていて飽きない奴は、
バトルマニアにとつて最高の相手だ。

なあ、ヴァーリ。イツセーは、

お前と違う方向に進化して強くなるぞ。

そのときお前は どうする？

どう戦う？こいつは俺達の

予想を遥か斜め上に行く存在だ。

楽しみだよ。俺は実に楽しみだ。

おそらく、歴代最高の赤白対決に
なるに決まっている。

それもあるが、祐介の成長にも
目を見張るものがあった。

同じユウスケでクウガでも

「東城雄輔」と「兵藤祐介」では

全く別の力を有している。

今回の試合でも新たな姿に覚醒した。

祐介の姿は各駒の力が出現したものだ。

そして、「兵士」がプロモーション
できるのはあと一つ「女王」が
残っている。

祐介の成長はある程度予想できたが
最後のあの苦しむ様子は、

体の内からのダメージだろう、

予想としては、「赤龍帝の籠手、

と似ていて、限界まで強化した力に体が

耐えられなかったのだろう。

これがゲームで発覚してよかったな

実戦だったら死んでいただろうからな。

祐介のトレーニングは見直す

必要がありそうだな。

あとは、シトリー眷属が使っていた「反転」

と機械生命体だ。あれは俺達が研究していたものだ。

悪魔に技術提供が始まってはいるが、

あの「反転」と機械生命体は

まだ研究段階だぞ。機械生命体の

キューブにいたってはコピーした

試作機みたいだが、おいそれと使っていない物じゃない。

アルマロスかサハリエル辺りがゲームで

データを取るのを条件に提供したのか？

まったく…。研究段階だ、何が起きてもおかしくない。

それを承知でソーナ・シトリーと

眷属達は使用しているわけだ。

覚悟、絶対に勝ちたいと思う気概が

突き動かしているのか。

神器を抜き出して自分に埋め込む

堕天使もいたが、この「反転」も

同じように本来自分にはない能力を無理やり付与する。

寿命を縮めるか、自分の能力を潰す行為で危険だ。

「トランスフォーマー
機械生命体」は

使えば近くにある機会に命を与えて
戦闘ロボへと変化させる。

だが、生み出された物が味方とは限らない。
下手すれば敵が増えてしまう恐れもあった。

以前イツセーも白龍皇の力を得て生命を削った。
木場みたいに後付けで能力が増えても

無事な例もあるが、やはりオススメはできない。
ちなみに俺の人工神器は一から

俺専用の仕様で作っているから問題ない。
悪いが、今後のゲームでは「反転」

を使用禁止にするべきだと進言させてもらうぜ。
若い芽をこんな所で潰したくないと、

俺も感じるんでね。

「トランスフォーマー
機械生命体」は今後

ゲームに取り入れるのは面白いかもな。

下手したら第三陣営が生まれるかもしれないが、
車などの大きさの機械をロボにすれば

戦いの幅が広がる。

しかし、「反転」をこう

使ってくるとはな。元々、

あれは聖を魔へ、闇を光へと相反するものを
逆にするために作ったものだ。

相手の能力に合わせて巧みに「反転」させるとは。
今回はシトリーの覚悟を見届けてやる。

どこまでやれるか見せて見ろ。

ともかく、イツセーとユウスケを

失った眷属達はどう動く？

ここで気落ちしているようでは

先が知れるぞ。リアス、朱乃。

「ほっほっほっ、おもしろい一戦じゃな」

クソジジイのオーデインが満足そうに
モニターを見ている。

あのわがままジジイが褒めるなんてな。

オーデインはサーゼクスに話しかける。

「サーゼクス」

「はい」

「あのドラゴンの神器を持つ小僧じゃが」

「兵藤一誠君ですか？ 赤龍帝の」

しかし、オーデインの話は意外なものだった。

「いや、シトリー家の『兵士』のほうじゃよ」

…なるほどそっちを注目するか。

オーデインは話を続ける。

「いい悪魔じゃな。大切にしているがいいぞ。

ああいうのが強くなる。赤龍帝の小僧

を倒した功績は大きいぞい。これだから

悪魔どものレーティングゲーム観戦は

楽しいわい。弱者が一戦の間に化ける。

これぞ、真の試合というものじゃよ」

あのオーデインが数時間前まで存在

すら知らなかった者に最大級の贖辞を贈る。

「そうでしょうそうですね！」

オーデインおじいちゃんったら

話が分かるんだから☆」

セラフオールも妹の眷属を褒められて、

ご機嫌のようだ。今の今まで泣きそうな

顔でハラハラ見ていたのにな。

ソーナ・シトリーのあの『兵士』。

匙元士郎と言ったか。

イツセー以上にこの試合で

評価を一変させたと言っただろう。

全冥界に放送されたこの試合。

案外、赤龍帝よりも名も無き
ドラゴン神器使いの方が
有名になるかもしれない。
イツセー、ユウスケ、リアス。
前途多難だな、お前達が
飛び込もうとしている世界は。

ー〇〇ー

木場 side

イツセー君とユウスケ君とアーシアさんが
バトルフィールドから消えた後、
この場に残ったのは僕と主であるリアス部長、
朱乃さん、小猫ちゃんの四人だった。
相手は残り三名。

会長、真羅先輩、『僧侶』の生徒会メンバー。
半分取られたか。

優勢と言われていたゲームが、
いざ始まってみれば大番狂わせ。

優勢と見られていた側が半分もやられる。
上で見ている上級悪魔の方々の苦言が
聞こえてきそうだ。

確実に部長の評価は下がる。
けれど、これ以上下げさせるわけにもいかない。
僕達のムービーメーカーだった二人が消えた。

これは…大きい。

僕はなんとか耐えているが、部長の心中は如何に。
アーシアさんが残っていれば、
彼女はショックを受けていたかもしれない。

現メンバーは今の所変化はない。
衝撃はあつたとしても、

戦いに影響出なければ問題は無いのだが…。

アーシアさんも予想外の倒され方をした。

回復能力、しかも範囲拡大版の時を

見計らって例の「^{リバース}反転」。

回復の反対はダメージか…。

アーシアさんの回復能力は絶大。

「^{リバース}反転」によるダメージも想像を

絶するものとなっていたのだろう。

それによりアーシアさんは一瞬で退場。

相手の『僧侶』、花戒さんも一発で消えた。

おそらく、回復範囲が拡大すること、それを使用する事、

これらを事前に読まれて戦術を組まれていた

と思われる。アーシアさんの範囲拡大の

回復が敵味方区別することなく

回復してしまう点も考慮されていた。

もし、複数の仲間を回復している所で

「^{リバース}反転」をくらったら…全滅もあり得たかもしれない。

恐ろしい戦術だ。

そこまで考えていたか、ソーナ会長。

しかし、それにしたって、犠牲の精神とは…。

僕たち以上の結束力を感じる。

メンバーを信じているからこそできる力業だ。

それと、ユウスケ君だけど、

彼が急に倒れた時、

僕達もそうだったけど、シトリー眷属達も

動揺していた。

あれは戦術とは関係ない

アクシデントだったのだろうか？

あんな形で脱落してしまってショック

受けてないといんだけど…。

一方イツセー君の技は…。もはや、

何も語るまい。しかし、女性限定ならば
驚異となるかもしれない……って、

こういうのは僕の考えることじゃないんだけどね。
ソーナ会長は絶大なパワーで勝つのではなく、
絶大なパワーを持つ僕らを利用しての
カウンター狙いだった。

これが本来のレーティングゲーム。
力だけでは安易に勝てない！

部長は立ち上がり、上を見上げる。

屋上にいるという会長を見据えているのだろう。

部長は二人を失っても冷静だ。

流石、『王』『王』が機能しなくては
ゲームに影響が出るからね。

「小猫、気は感じる？」

部長が小猫ちゃんに訊ねる。

「……はい。先ほどは感じ取れませんでした、
今は屋上に会長の気を感じます。

さっきの結界は会長の姿をそこに
あるように見せる為の虚偽と幻影、

そして本人の気と位置を感じ取られないように
する特殊なデコイだと思います」

猫耳をピクピクと動かして、

会長の気を探っているようだ。

小猫ちゃんも二人が居なくなっても
戦える様子だ。ありがたい。

これなら十分に戦える。

僕は真羅先輩達二人のシトリー眷属に剣を向けた。
「さて、どうします？」

刃を持つ者同士、刃で決めますか？」

僕の問いに真羅先輩が答える。

「それもいいですね。チエスだと

『兵士』がプロモーションをするとき、

ほとんどの場合『女王』。けれど、

盤面によって「騎士」になることで

戦況を変えます。実際のチェスと

レーティングゲームでは差異も多いけれど

これは良い勝負でしょう」

僕と真羅先輩の戦いは決まった。

あとは相手の『僧侶』草下さんだけだ。

そのとき、僕の視界に黄金のオーラをバチバチと

全身から放つ朱乃さんが映り込む。

朱乃さんは涙に濡れた瞳に冷たいものを

乗せて異様なオーラを漂わせていた。

「…イツセー君に私の決意を

見てもらおうとしたのに…」

ふらふらとしたおぼつかない

歩き方で一步前へ出る。

その歩みには言葉に出来ない重圧が感じられた。

「…この嫌な力を彼の前で使う事で…」

乗り越えようとしたのに…」

朱乃さんが手をゆつくりと前へ突き出し。

「許さない」

S側の素顔を見せていた！

一番触れてはいけない状態の朱乃さんだ！

まさか、普段冷静な朱乃さんが

イツセー君を失った事に反応するなんて！

「消しますわ」

怒気の含んだ迫力ある一言のあと、

朱乃さんの手から大出量の雷が生み出されて、

シトリー『僧侶』草下さんに襲い掛かる！

ドオオオオオオオオオオッ！

「^{リバー}反転！」

直撃する瞬間、両手を広げて
雷を反転させようとするが。

ビガガガアガアガガガガッ！

激しい雷が草下さんを包み込む！

草下さんは、雷を反転できず、

まともに朱乃さんの一撃を受けた！

と同時に彼女は光に包まれて消えていった！

「無駄みたいね。雷を反転させようと

したのでしようけど、今のは雷光。雷と光。

反転させるには光の部分の反転が

足りなかったわね」

『ソーナ・シトリ様の「僧侶」一名、リタイヤ』

「反転するものを違えれば力を覆せないわ」

朱乃さんの言うように彼女達は「反転」

の力を使いこなすには修行が足りなかったようだ。

朱乃さんの手はそのまま『女王』

真羅先輩の方にも向けられる！

朱乃さんは既に僕と先輩の戦い

を無視しようとしている！

イツセー君を失ったシヨックとイツセー君に

雷光の力を見せられなかった怒りで我を忘れている！

結果として朱乃さんは力を克服できたかもしれないが、

予想外の展開だった。朱乃さんにとって、

イツセー君がこれほどまでの存在になっていたとは！

「くっ！」

真羅先輩は身の危険を感じて、

その場を駆け出した！

カッ！

ドオオオオオオオオオオオッ！

雷光が先輩に一直線に伸びる！

直撃すれば悪魔ならばひとたまりもないだろう！

雷の力と、悪魔の弱点である光力が
ミックスしているのだから、

その威力たるや想像するだけで恐ろしい。
しかし、雷光をうまく避けて、

真羅先輩はデパートの奥へ逃げようとしていた。
僕はそれを神速で追う！

速さならば引けは取らない！

ダッシュしたまま、聖魔剣を創り出し、
追いついた瞬間に斬りかかる！

一刀目は、長刀で受けられたが、

いつあのカウンター神器を出されるか
分からない！

真羅先輩が懐から小瓶を取り出す。

『フェニックスの涙』！

シトリーは『女王』が有していたのか！

小瓶を僕に向けて投げ、長刀で破壊した。

中の液体が僕に降りかかってくる！

「^{リバース}反転！」

先輩がそう叫ぶ！僕にかかった瞬間、

涙の絶大な回復力を先程のアーシアさんと

同様にダメージに変換するつもりだろう！

僕は聖魔剣を素早く水の剣に変える！

ビシャッ！

水の波動が涙と混ざり合った。

涙は他のものと混ざると、その効果を失う。

そして、これで「^{リバース}反転」も意味を無くす！

「少しでも隙が生じれば！」

先輩は長刀を鋭く僕へ向けてきた！

なるほど、今のは最初から防がれると

踏んでの攻撃。しかし。

ザンッ！

真羅先輩の周囲に聖魔剣が咲き乱れる！
床から幾重にも生えた聖魔の刃が
先輩の長刀を破壊した。

「隙なんか、今の僕にはありませんよ」

僕が二刀目を放とうとした時、

彼女は前方に例の鏡を出現させる。

剣の力を出来るだけ弱らせて

鏡を破壊できるほどの威力で斬りかかった。

バリントッ！ ドオオオオオッ！

儂く鏡は割れ、僕に倍のダメージで衝撃が返ってくるが

これぐらいなら耐えられる！僕は激痛に歯を食いしばり、

左腕を宙に向けた。

そして、力ある言葉を口にしていく！

「ペトロ、バシレイオス、ディオニシウス、

聖母マリア。我が声に耳を傾けてくれ！」

空間が歪み、裂け目が生まれた！

僕はそこに手をつ突っ込んだ！

「嘘でしよう!?そんなことが！」

真意を知った真羅先輩が驚愕している。

「聖なる刃に宿りしセイントの御名において、

僕は解放する。 デュランダール！」

僕が空間から取り出したのは伝説の聖剣デュランダール！

ゼノヴィア！晴らそうか、キミの無念をいまここでッ！

取り出した勢いで真羅先輩を斬りつける！

聖剣の一撃がヒットして、

真羅先輩に深刻なダメージを与えていた。

あの状況でもカウンター神器を発動しなかった。

連続で発動できないのか。

ゼノヴィアの提案です。もし、自分が機能停止した場合、

この剣がもつたいないから、僕に使用の権利を譲る、と」

そう、ゼノヴィアはデュランダールの

使用方法を僕に教えてきた。

聖魔剣を手に入れた僕なら、

デュランダルを使えるのでは？と。

「しかし、あなたは聖剣の適性が」

リタイヤ転送の光に包まれた真羅先輩がそう口にする。

「昔はありませんでした。それで地獄を見たけれど…」

今は違う。バランス・ブレイカー 禁 手のおかげでこうして

デュランダルも扱えるようです」

ブウウウウン…。

デュランダルは静かな波動を放っていた。

ゼノヴィアの時の様な荒々しく

暴走めいた波動は出ていない。

「くっ！これは…ッ！」

ゼノヴィアさん以上に扱えている!?!」

真羅先輩はそう言うが、僕はそうは思えなかった。

「…ゼノヴィアは威力を求めるオーラの

気質だから、デュランダルもそれに反応してしまった

のかもしれない。けど、僕は威力よりも確実性を選ぶ。

威力よりも能力です」

威力を抑えたつもりだったけど、

それでも真羅先輩を斬りつけた余波で

遙か前方まで床を真っ二つにしていた。

これはマイナス評価を受けそうだ。

「持ち主のいう事を聞かないじゃじゃ馬とは

聞いていたけれど、本当みたいだ。

僕が思う以上に切れてしまう…扱いはまだ難しいか」

「…ッ！計算外だわ、ソーナー！

兵藤兄弟よりも…ッ！真のエースは…ッ！

注意すべき眷属は…木場祐斗ッ！」

真羅先輩はそれだけ言い残し、

この場から消えていった。

『ソーナ・シトリー様の「女王」、リタイヤ』

「僕は二人を、いや赤龍帝とクウガを」

超える事を目標にしてみましたから」

悔しかった。僕は悔しかったんだ。

フェニックス家での惨敗。

イツセー君、ユウスケ君、君達だけが

悔しい思いをしたわけじゃないんだよ。

リアス・グレモリーの本当の『騎士』が

主を守れずにやられたのだから。

せつかく禁バランス・ブレイカー 手に至っても僕と同志の力は

コカビエルに通じなくて、そして白龍皇や

クウガとの戦いにも参戦できなかった。

あのときもそのときも僕は役に立てなかった。

悔しかった。

悔しかったんだよ。

だから、師匠の元で一から修行をした。

本当に一からだ。剣の基本から再び始めた。

キミンなら似合わないと言うかもしれない、

地道なトレーニングも愚直なまでおこない

続けたんだよ。バランス・ブレイカー 禁 手に至った

からといって慢心すれば、そこが弱味と成り果てる！

「何よりも赤龍帝とクウガだけの

眷属と思われるのはイヤだよ」

君達の目標は『禍カオス・ブリゲードの団』のライバルかもしれないが、

でも、僕は主の剣となり、仲間の君達の隣で

相棒として立つのが目標の一つだった。

リアス・グレモリーは赤龍帝とクウガだけじゃなく、

「聖魔剣の木場祐斗」も有している、と。

そう言われたいから、僕は。

「イツセー君が誓ったように僕も誓おう。

我が主リアス・グレモリーを二度と泣かせない」

相手の残りは『王』、ソーナ・シトリー会長のみとなっていた。

デパートの屋上。

外の空は白く、何もなかった。

ゲームの空間だからだろう。

僕達残ったメンバー四人がそこに赴いていた。

前方にはソーナ会長。会長はこちらに視線を送ると、

苦笑されていた。部長が訊く。

「ソーナ、どうして屋上に？」

「最後まで『王』が生きる。それが『王』の役割。

『王』が取られたら、ゲームは終わってしまうでしょう？」

「：そう、深くは聞かないわ」

「リアス、匙は赤龍帝に勝ちました。

イツセー君にも貴方にも落ち度なんてない。

あの子を舐めないで。必死なのは

貴方達だけじゃありません」

「ええ、身をもって体感出来たわ。

さあ、決着をつけましょう、ソーナ」

部長が一步前へ出る。

一対一をするつもりですか？

止めた所で聞かない人だ。ならば。

「危険を感じたら、即時に助けに入ります。

わがままは聞きません」

「……………」

僕の一言に部長は返事をしなかったが、理解はしているはずだ。

僕自身も部長がやられそうになったら、

かまわず助けに入る。

『王』を取られれば終わりだ。

貴方をやらせるわけにはいかないのです、

リアス部長。そして親友同士の戦いは始まった。

部長は不敵に笑い、
滅びの力を圧縮に圧縮を重ねて、
無数の魔力の弾を宙に展開させた。
あれ一発で力の足りない者は
霧散してしまうだろう。

あれだけの数を何度も圧縮させてしまうとは、
部長の魔力は修行でかなり練られたようだ。
どちらも魔力の室に秀でているが、
こうしてみると部長はパワー、
会長は技術が目立つ。
身構える両者。

そして二人は同時に攻撃を向けたのだった。

『投了を確認。』

リアス・グレモリー様の勝利です』

第70話「評価」

ゲーム終了後、

俺が目を覚ましたのは医療施設の一室だった。

ゲームの時に感じた痛みはもうなかった。

ゲームの結果は俺達の勝利。

けど、俺、イツセー、ゼノヴィア、

アーシア、ギヤスパー、半分も取られた。

俺以外の皆は戦いで相手の策でやられてしまった。

俺に至っては、多分だがあの姿の反動で

倒れてしまった。

ダメージなんて一切受けていなかった。

匙の攻撃を全て防ぎイツセーが

倒した瞬間、自分達の勝利を

疑っていなかった。

だが実際は、イツセーは匙の根性に

破れ失血で倒れた。

前日もそうだったが、

今回も何も出来ていなかった。

俺が居なくてもイツセーなら

匙に勝利していただろう。

今回のゲームは

開始前に圧倒的と言われていた

グレモリー眷属はその評価を

下げてしまった。

特に開始早々ギヤスパーを

失った事と、

赤龍帝がやられたこと

そして、俺が倒れた事が

特に評価を下げたらしい。

当然のことが出来なかったと、

上の評価は厳しかった。

俺は新たな姿とはいえ

自身の力の把握が出来ていなかった。

速めに他の姿に変わってほしいば、

あの場で倒れる事は無かっただろう。

今回の戦いが終わり

リアス先輩は心底悔しそうだった。

結果的にエース級の奮闘ぶり

を見せた木場の活躍もあつて

勝ちを収めたが。最後は『王』同士の

直接対決で勝つたらしい。

初の勝利がこんな形となるとは…。

俺達は完勝に恵まれず、

必ず辛い勝敗をしている。

膨大な力を持つ眷属が多いのにい、

俺達は完全な勝利に程遠かった。

このままじゃ、まずいな、

俺は落ち込んだ気持ちを切り替えるため、

匙の病室へ行くことにした。

まずは、俺達に勝った彼奴に

一言言つてやりたいしな。

戦いが終わればいつも通り友達だしな。

「これを受け取りなさい」

病室の前につくとちようど

イツセーと一緒に中に入ろうとしたら。

中からサーゼクス様の声が聞こえてくる。

俺達は少しだけ空いている扉から、

中の様子を窺う。

中にはサーゼクス様、会長、

ベットの上的の匙。

匙はサーゼクス様から何かを受け取った様子だった。

高価そうな小箱を手に持っている。

「あ、あの…これは…？」

緊張して震えている匙。

「これはレーティングゲームで優れた戦い、
印象的な戦いを演じた者に贈られるものだ」

サーゼクス様は微笑みながら言う。

しかし、

「お、俺は…二人に負けました…。」

これを受け取っていい立場では
ありません」

匙は悔しそうにベットのシートを掴んでいた。

「そうだ、けど、結果的にイツセー君を

あの赤龍帝を倒した。私達は君の戦い
を観戦室で興奮しながら見ていた。

あの北欧のオーデインも

君に賛辞を贈った程なんだよ」

サーゼクス様は小箱の勲章を取り出し、
匙の胸につけた。

「自分を卑下してはいけない。

君だって、上を目指せる悪魔なんだ。

私は将来有望な若手悪魔を見られてうれしい。
もっと精進しなさい私は期待しているよ」

そして、サーゼクス様は匙の頭をなでる。

「何年、何十年先になってもいい。

レーティングゲームの先生を目指しなさい」

サーゼクス様の一言に匙は無言で泣いていた。

とめどなく涙は流れ、顔はくしゃくしゃになっていた。

「…匙、あなたはたくさんの人々に

勇姿を見せたのですよ

貴方は立派な戦いをしたのですから」

ソーナ会長は我慢していたものを

目から溢れさせていた。
きつと、会長も嬉しかったんだろう。
自分の自慢の眷属が大きく評価されたことが、
匙は胸の勲章を触り、涙を手で拭い、
力強くうなずいた。

「…はい…ありがとうございます！」

…俺達はそれ以上聞くのは
失礼だと感じ、その場を後にする。
匙は見事イツセーを倒して見せた、
俺も負けてられないな、

次戦う時は、必ずお前に勝つぞ匙！

ー○○ー

俺達はイツセーの病室に入る直前の
リアス先輩を見つける。

「部長」

イツセーの声にリアス先輩もちちらに気づき、
微笑む。俺も一緒に招かれそのまま病室に入り、
談笑し始めた。

「イツセー、ユウスケ、ゲームお疲れ様。

よくやってくれたわ。でも、

イツセー、あまり私に恥をかかせないでね？

貴方は本当に性欲が過剰なのだから」

俺もだいぶ情けない姿見せたが、

イツセーのあれはそれ以上だったな。

「す、すみません…。どうにも新技や

パワーアップが煩惱に繋がりにやすくて…」

「あの技はゲーム時には封印よ」

「ええええええええええっ!?マジですか!?!」

まあ、そうなるだろうな。

「だって、女性悪魔と戦えなくなつて
しまうもの。だから、禁止」

「うう、部長がそう言うなら従いますうう」

リアス先輩の話にイツセーは涙目で頷いた。
まだあきらめてないみたいだけどな

「ユウスケ、貴方も『戦車』の姿は

アザゼルとの修行で使いこなせるように
なるまで、実戦での使用は禁止よ」

リアス先輩の忠告に俺は

黙ってうなづく事しかできなかつた。

落ち込む俺達にリアス先輩が苦笑する。

「けど、やっと一勝したわ。

前回に比べたらマシだけれど、

それでもこちらもイツセー、ユウスケ、

アーシア、ゼノヴィア、ギヤスパーを取られた。

才能に恵まれ、力に溢れた眷属と

呼ばれようとも、本番で力を

発揮できなければ意味が無いわ

勝つ確率が高くても負けるときは

負けてしまう」

リアス先輩の言う通りだ。

俺達も一歩間違えれば負けていたかもしれない。

相手は俺達よりも勝つ確率が低くても

必死で向かってくる。あちらもまた勝つ事を

信じて前進してくるんだから。

妥協、油断なんてものをしていたら、

勝てる試合も勝てやしない。

俺達は何処か勝てる試合だと

相手を舐めていたのだろう。

匙の相手だって俺とイツセーの

二人で攻めればすぐに終わったはずだ

このゲームで当たり前のことを

俺達は改めて思い知った。

「でもね、イツセー、ユウスケ。

朱乃と小猫、二人がこの試合で

自身の壁を越えてくれたのですもの。

こんなにも喜ばしい事はないわ」

リアス先輩は微笑みながら言う。

「はい、俺もそう思います！

試合に勝って、勝負に負けた感じですけど、

それでも朱乃さんと小猫ちゃんが

先に進めてうれしいっす！」

「今回のゲームは多くの物を得られたと思います

二人の成長はうれしいですね」

「二人のお陰ね貴方達のお陰で、

私の眷属は皆、抱えたものを

突破していくわ。私が思い悩んだものを

二人は全部打ち破ってくれる。

とても感謝しているのよ」

「そ、そんな、俺は別に何もしてませんよ」

「そうそう、イツセーの言う通りです。

皆が自身と向き合った結果ですよ」

「うんうん、ただ、皆で楽しくやっていくことを

考えているだけですから」

そう、俺達は仲間と一緒に先へ進みたい。

今回みたいな困難も仲間となら

共に突破できる。俺はそう信じているから。

コンコン。

ふいに病室のドアがノックされる。

「はい、どうぞ」とイツセーが返事をすると、

現れたのは見た事も無いご老人だった。

帽子を被って隻眼だった。

ソシヤゲに出てくるキャラみたいだな。

「じいさん、誰っすか？」

イツセーが怪訝に訊くと、老人は笑う。

「儂は北の田舎のジジイじゃよ。」

赤龍帝、クウガか、おぬしらはもう少し

修行が必要なようじゃな。まあ、

精進せい」

この人、今回の観戦してたお偉いさんか？

「オーデインさまですね？」

初めてお目にかかります。

私、リアス・グレモリーですわ」

リアス先輩は知っていたようだ。

オーデイン？それって、

北欧の主神、戦争と死の神じゃないか！

「うむうむ。サーゼクスの妹じゃな。

試合見ておったぞ。まあ、

ああいうこともある。お主も精進じゃな。

しかし、ううむ。デカイのお。

観戦中、こればかり見とったぞい」

突然のセクハラ発言だったが、

いつの間にか入室してきていた

鎧着た女性がオーデインの

頭をハリセンで叩く。

「もう！ですから卑猥な目は禁止だと、

あれほど申したではありませんか！

これから大切な会談なのでから、

北欧の主神としてしっかりしてください！」

「…まったく隙のないヴァルキリーじゃて。

わーっとるよ。これから天使、悪魔、

堕天使、ギリシャのゼウス、須弥山の帝釈天

とテロリスト対策の話し合いじゃったな」

オーデインは頭をさすりながら、半眼で呟いた。

「まあよいわ。サーゼクスの妹と赤龍帝に

クウガ。世は試練だらけじゃがな、

楽しいこともたくさんあるぞい。

存分に楽しんで、存分に苦しんで

前へ進むんじやな。がむしやらが

若造を育てる唯一の方法じゃよ。

ほっほっほっ

それだけ言い残すと、

オーデインと鎧着た女性は病室を後にする。

ー○●○ー

八月後半。

俺達グレモリー眷属は、

本邸前の駅で冥界との

別れの時を迎えようとしていた

「冥界での生活も終りね」

俺の隣では奈美先輩がおり

冥界での生活を思い出しているようだ。

「リアス、連れ来てくれて

ありがとうね。いい体験が出来たわ」

「いいのよ、奈美も前に実家に

連れて行ってくれたでしょ

今回は私が招待しただけよ」

駅にはグレモリー家の皆さんも

見送りに来てくれており、

先ほど、イツセーがリアス先輩の

両親に声を掛けられていた。

すると、サーゼクス様がミリキヤス様

を抱えてやってきた

「リアス、残りの夏休み、

手紙ぐらいは送りなさい」

サーゼクス様がご子息のミリキヤス様を

抱えながら言う。そのすぐ後方には
グレイフィアさんが待機していた。

「はい、お兄様。ミリキヤスも元気にね」

「うん、リアス姉さまー」

列車に乗り込み、窓から

サーゼクス様達に最後の別れを告げる。

あれ。

その時三人のスリーショットが

親子に見えた、

そうだったのか。

家でのあれは冗談では無かったのか。

―○●○―

帰りの列車の中。

俺は残りの宿題を片付けていた。

「もう、なんで、全部終わらせてないのよ」

宿題を終わらせていなかった事で

奈美先輩からお　りを受ける。

「いや、ある程度は終わってたんですけど

読書感想文だけは、よさげな本がなかったのよ」

まあ、向こうの座席で宿題を一切手を付けておらず

現在必死に取り組んでいるイツセーよりかは

ましだろう。

まあ、夏休みの大半を山籠もりしていたから、

仕方ないといえはそうだけでも。

しかし、冥界で夏休みを過ごしただけが、

すごい体験と仲間の成長があり。

大分勉強になったな。

俺達グレモリー眷属のパワーは確かに絶大だが、

アザゼル先生が言ってたように

カウンターに弱いってのがよく分かった。

『^{リバース}反転』という予想外の力もあったが、

今回のゲームでチームの弱点もわかったし、
戦術の重要性も改めて理解できた。

特に脳筋な二人には効いただろう。

俺も変身できる姿が増えて選択肢も増えてきた。

今後は状況の把握能力を磨いて、

フォームチェンジを使いこなさないといけないな。

今の俺じゃあ、東城にはまだ勝てないだろう

だけど、奈美先輩や仲間と一緒になら

もっと強くなれる！

俺は必ず強くなってやる！

「ふふ」

すると、俺の顔を見て奈美先輩がほほ笑む。

「その顔は、ようやく振り切れたようね

最近、ゲームの結果を気にして、

落ち込んでたようだけど、やっぱり

ユウスケは笑顔じゃないと」

「すみません、いつまでもくよくよ

するのは俺らしくないですしね

俺はもっと強くなりますよ！

そのために奈美先輩も力を

貸してくれませんか？」

俺の問いに奈美先輩は笑顔で頷く。

「もちろんよ、戻ったら一緒にトレーニングよ

今度の試合で今回の汚名を返上するわよ！」

「はい！俺、頑張ります！」

こうして、列車は俺達の住む人間界へと進んでいく。

人間界側の地下ホームに列車はたどり着く。
「ふー、久しぶりの人間界だ、

よし、じゃあ我が家に帰ろうかアーシア」
俺がアーシアに振り返った時だった。

謎の優男にアーシアが詰め寄られていた。

「アーシア・アルジェント……。やっと会えた」

「あ、あの……」

困惑しているアーシア。

これはマズイ！何者か知らんが、

家のアーシアに指一本でも触れさせてたまるか！

「おい、てめえ！アーシアに何の用だ！」

俺は間に入るが、

謎の優男は真摯な表情でアーシアに訊く。

「…僕を忘れてしまったのかな。」

僕達はあの時出会ったはずだよ」

優男は突然胸元を開き、

大きな傷痕を見せてきた。

深い傷痕だ。アーシアはそれを見て、

目を見開いていた。

「っ。その傷は、もしかして……」

覚えがあるのか、アーシア？

「そう、あの時は顔を見せられなかったけど、

僕はあのときの悪魔だ」

「っ」

その一言にアーシアは言葉を失っていた。

「僕の名前はディオドラ・アスタロト。」

傷痕が残らない所まで治療してもらえる

時間はあのときなかったけれど、

僕は君の神器によって命を救われた」

アーシアの過去は聞いている。

偶然、一人の悪魔を助けたことで

教会から魔女の烙印を押された。
そうか、こいつがアーシアが教会を
追放される切っ掛けとなった悪魔か。

「ディオドラ？ディオドラね？」

リアス先輩は彼に覚えがあるようだが、
：いや、思い出した。こいつは、

例の若手悪魔の会合でいた

あの時の美少年の上級悪魔か！

確か、現ベルゼブブが出た御家の！

ディオドラはアーシアの元に跪くと、

その手にキスをする！

この野郎、アーシアに何を！

とつさのことに殴りかかろうとする俺だが、

そんなことも構わずにそいつはアーシアに言った。

「アーシア、僕は君を迎えに来た。会合の時、

挨拶出来なくてゴメン。でも、

僕と君の出会いが運命だったんだと思う。

僕の妻になつて欲しい。

僕は君を愛しているんだ」

そいつは俺の目の前で

アーシアに求婚したのだった。

暑かった夏が終わりを告げ、

長くなるであろう秋が

もうすぐ始まるうとしていた。

—●—

遠くからユウスケを観察する者がいた。

カシヤツ！

「あれがこの世界のクウガか

その実力見せてもらおうか」

その男は首から下げた

トイカメラでユウスケ達を撮影すると

その場を後にするのだった。

第五章 登場キャラクター

グレモリー陣営

○兵藤 祐介：本作主人公

駒王学園2年生

役割：『兵士』^{ポーン}

種族：転生悪魔

元は新聞部に所属するただの高校生だったが、ある日リント族のベルト『アークル』を手にして古代の戦士クウガの

プロトタイプへと変身する能力を得る。

そして、リアスの手で転生悪魔となり

「悪魔の駒」^{イライル・ピース}兵士1個を消費し、

非日常の世界へと足を踏み入れる。

能力：『プロトクウガへの変身』

①白のクウガ^{グロウイングフォーム}

ユウスケがベルトの力を受け継ぎ始めて変身した姿。

その能力は低く、戦いの為の姿ではない為、

最弱のフォームである。

ダメージが蓄積されると強制的に

この姿になってしまう。

S P E C

身体能力は赤のクウガの半分程度

②真紅のクウガ^{マイテイルフォーム}

真紅のボディで、

パンチやキックなどの

肉弾戦を得意としている。

クウガの基本形態。

S P E C

パンチ力：約5t

キック力：約15t

ジャンプ力：15 m（ひと跳び）

走力：5・2秒（100 m）

視力：人間の数十倍

聴力：人間の数十倍

必殺技：マイテイキック（威力は約30 t）

③ 群青ナイトフォームのクウガ

ベルトが瑠璃色に輝き、

ボディが群青色に変化し、

腕、肩、脚に騎士の鎧が追加された姿。

悪魔の『騎士』の特性である。

高い速度と二本の直剣『ナイトソード』

を駆使して戦う。

S P E C

パンチ力：約3 t

キック力：約10 t

ジャンプ力：15 m（ひと跳び）

走力：5・0秒（100 m）※加速時は1・8秒

専用武器：ナイトソード

必殺技：サイクロンスラッシュ

イメージ

胸：群青色に変化

肩：タドルファンタジーをシルバーにリカラー

腕：メタルクラスタースターホッパー

脚：ドラゴニックナイト

剣：ザンバットソード（ザンバットバット無し）

④ 深碧ピシヨツプフォームのクウガ

ベルトが翡翠色に輝き、

ボディが深碧色に変化し、

腰にローブが付き、

肩には魔方陣が裝飾された

アーマーが追加された姿。

高い魔力と魔法触媒となる
細剣『ビシヨップレイピア』
を駆使して魔法戦をする。

S P E C

パンチ力：約3t

キック力：約10t

ジャンプ力：15m（ひと跳び）

走力：5.2秒（100m）

魔法属性：炎、氷、水、雷、風、時

専用武器：ビシヨップレイピア

必殺技：マジックバースト

イメージ

胸：深碧色に変化

肩：ウィザードの肩アーマー

（グレモリーの紋様）

腰：ウィザードローブ装着

剣：レモンレイピアのレモンを緑にリカラー

⑤ 深紫ルークフォームのクウガ

ベルトが紫紺色に輝き、

ボディは深紫色に変化し

腕にガントレットを装着する。

受けた攻撃を蓄積し自己強化を

行う大楯『ルークシールド』

巨大な大剣『ルークソード』

にて敵を薙ぎ払う。

S P E C

パンチ力：約15t

キック力：約20t

ジャンプ力：8.5m（ひと跳び）

走力：8秒（100m）

専用武器：ルークソード

ルークシールド

必殺技：バーストトルネード

イメージ

胸：深紫色に変化

肩：サゴーズ

腕：サゴーズ

剣：ガンダムバルバトスの

ソードメイス

盾：モンハン王国騎士槍ガードの盾

○兵藤 一誠：原作主人公

駒王学園2年生

役割：『兵士』駒七個分

種族：転生悪魔

ユウスケの双子の弟

元は普通の人間だったが、強大な神滅具「赤龍帝の籠手」を宿していたことを危険視され、墮天使

レイナーレに殺害される。

リアスの下僕として転生悪魔となったことで蘇生し、

転生時には「赤龍帝の籠手」のポテンシャル

の高さから、「悪魔の駒」の兵士分7個を消費する。

相棒は籠手に宿る「赤い龍」ドライグ。

神器：『赤龍帝の籠手』

ウエルシユ・ドラゴン
かつて暴れた二天龍の片割れ
赤い龍ドライグを宿す籠手。

能力は持ち主の能力を時間経過と共に倍加していく。

神をも殺せる神器『神滅具』の一つ

倍加の上限は持ち主の実力による。

イツセーの願いに応えて、

仲間に譲渡するタイミングを

教えてくれるようになった。

赤龍帝の籠手の能力

Boost：音声と共に10秒毎に力を倍加する。

Burst：倍加の限界を超えてしまい。

音声と共に貯めた力が霧散してしまい、

反動で身体能力が低下してしまう。

Explosion：音声と共に倍加のカウントを止めて、

それまでに倍加した力で戦う事ができる。

Blade：音声と共に手の甲から聖剣アスカロンが出現する。

ブリステッド・ギア・ギフト
『赤龍帝からの贈り物』

イツセーが勝利を願ったことにより発言した

第二の能力。蓄積した倍加能力を他人に譲渡する。

Transfer：音声と共に倍加した力を他人に譲渡する。

禁手：『赤龍帝の鎧』
ブリステッド・ギア・スケイルメイル

赤龍帝の籠手の禁じ手

全身を覆う龍を模した鎧。

時間経過の制限が無くなり

一瞬で限界まで倍加し、

使用、譲渡が可能となった。

○リアス・グレモリー

駒王学園3年生

役割：『王』
キング

種族：生来の悪魔

オカルト研究の部長であり、

祐介達を転生させた悪魔。

2代目魔王サーゼクス・ルシファアの妹で、

「元72柱」グレモリー家の次期当主。

紅髪に青い瞳の美少女。

自身の眷属悪魔に対する慈愛の情が深く、

戦闘面では生まれ持った滅びの魔力を使い。

『紅髪の滅殺姫ルイン・プリンセス』と呼ばれている。

○塔城 小猫

駒王学園1年生

役割：『戦車^{ルーク}』

種族：転生悪魔（猫又）

元は妖怪・猫又の中でも希少な「猫？」と呼ばれる存在で、耳は猫耳となっている

「小猫」という名前は、悪魔に転生した後

リアスが命名した名前であり、

転生前の名前は「白音」という。

かつては姉と共に暮らしていたが、あるとき黒歌が自らの主を殺害して逃亡したため、

その責任を押し付けられる

形で処分されそうになった*1過去を持ち、

その後サージェクスによって窮地を救われ、

リアスの眷属悪魔となった。

○姫島 朱乃

駒王学園3年生

役割：『女王^{クイーン}』

種族：転生悪魔（堕天使とのハーフ）

堕天使と人間のハーフであり、父は堕天使の組織

「神の子を見張る者」の幹部・バラキエル

黒髪ポニーテールで和風な佇まいの美少女で、

駒王学園ではリアスと共に

「駒王学園の二大お姉さま」と称されている

魔力の扱いに秀でており、戦闘では雷と光を使い戦う。

○木場 裕斗

駒王学園2年生

役割：『騎士^{ナイト}』

種族：転生悪魔

先天的にあらゆる属性の魔剣を生成できる創造系神器「魔剣創造^{ソード・パース}」を所有し、

元は人間で、「聖剣計画」に沿って

集められ聖剣使い候補として育てられていた。

しかし、主導者のパルパー・ガリレイに

候補者全員が因子不足であると判断され、

毒ガスで皆殺しにされそうになったところを

仲間の手助けで唯一人かろうじて

施設から脱出を果たすも、吸い込んでいた

毒が致死量を超えていたために辿り着いた

森で力尽きていたが、そこを

通り掛かったリアスの手で眷属悪魔に

転生させられたことで命を救われる。

神器：『ソード・オブ・バース魔剣創造』

自身が思い描いた魔剣を

自由に生み出すことが可能である

だが、伝説上の魔剣に匹敵するものは

生み出せない

禁手：『ソード・オブ・ビトレイヤ双覇の聖魔剣』

聖剣因子を取り込み、同志たちの想いを受けた木場

の神器が至った、亜種の禁手

本来交わるはずのない聖と魔の力を併せ持つ

聖魔剣を創造する。

この聖魔剣もまた各種の魔力を与えることができる

頑強さは使い手の心次第。

本気ならば四本のエクスカリバーを結合させたもの

さえ破壊できる。

○ゼノヴィア

駒王学園2年生

役割：『ナイト騎士』

種族：転生悪魔

短めの青髪に緑色のメッシュを入れている、

目つきの鋭いイタリア人美少女。

元々はカトリック教会の聖剣使いで、生まれながらにして高い「聖剣使いの因子」をもつという希少な存在であり、しかし、聖剣奪還任務の際に「神の死」を知ったこととそのせいで教会から異端認定されてしまったこと、その両方のシヨックから自暴自棄になっていたところに勧誘を受け、リアスの眷属になって悪魔に転生する。そして、リアスのはからいで

「駒王学園」の高等部2学年に転入する。

『デュランダル』

ゼノヴィアが持つ伝説の聖剣。

天然の適合者のゼノヴィアでさえ完全に扱う事の出来ない暴君。普段は異空間に収納されており、必要に応じて取り出している。特殊な能力を持たず。単純な破壊能力重視の聖剣である。

○アーシア・アルジェント

駒王学園2年生

役割：『僧侶^{レシヨック}』

種族：転生悪魔

イタリア出身の金髪の美少女。あらゆる負傷を治癒できる状態変化系神器「聖母の微笑」の所有者。かつてはキリスト教会のシスターであり、とても深い信仰心と神器を使って人々の負傷を癒していたことから「聖女」とされ敬われていた。しかし、傷を負って倒れていた

悪魔デイオドラ・アスタロトを治癒した

日を境に一転して「魔女」呼ばわり

され異端として教会から追放された、

一度はレイナーレに神器を無理やり

奪われて死亡してしまいが、「教会」

を敵と断定したグレモリー眷属の

殴り込みが行われ、「回復系神器」の

希少性と有用性も評価された

ことでレイナーレの消滅後に

リアスの眷属悪魔として転生を果たす。

神器：『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑み』

あらゆる傷を癒す能力があり、

他の回復用の神器と違い

種族を問わず癒すことが可能な為

教会を追放される原因にもなった。

当初は直接接触した者だけしか回復できなかったが、

修業を経て範囲回復もこなせるようになる。

○ギヤスパール・ヴラディ

駒王学園1年生

役割：『レシヨツク僧侶』

種族：転生悪魔（吸血鬼とのハーフ）

金髪と赤い双眸を持った、女装癖のある男の娘で、

デイトライトウォーカーと人間のハーフの美少年。

ヴァンパイアハンターの手掛かって命を落とし、

リアスに救われて悪魔に転生した経緯を持つが、

その制御できない力を危険視され

封印されていたが、

コカビエル戦での功績で解放されるが

長年の引きこもり生活により

極度のコミュ障となっていた。

神器：『フォービトウン・パロール・ビユー停止世界の邪眼』

視界内の物体の時間停止。

止められた相手は違和感を感じるものの完全に行動不能になる。

協力者

○大空 奈美

駒王学園3年生

所属：新聞部 部長

種族：人間

オレンジ色のロングヘアの美少女

ユウスケと同じ新聞部の部長

ユウスケの理解者の一人

修行の手伝いのため冥界にまで

来てくれた

人工神器：『クリマタクト天候棒』

三本の短い棒からは、熱気、冷気、

電気の気泡を発生させることができ、

三つの気泡を使い天候を操ることができる。

シトリー眷属

○ソーナ・シトリー

駒王学園3年生

役割：『キング王』

種族：悪魔

駒王学園の生徒会会長

スレンダーな体型で、日本人離れした

美貌を持つ黒髪の少女。

2代目魔王セラフォル・レヴィアタンの妹で、

「元72柱」シトリー家の次期当主

基本はサポートタイプだが、家系の特色である

「水の魔力」を得意とし、魔力が持続し水源が

ある限り広範囲・高威力の攻撃を継続することもできる

○真羅 椿姫

駒王学園3年生

役割：『女王』クイーン

種族：転生悪魔

駒王学園の生徒会副会長

眼鏡をかけた黒髪ロングの女子生徒。

武器は長刀で、加えてカウンター型の

神器を使いこなすことでパワータイプの対処を得意とする

○巡 巴柄

駒王学園2年生

役割：『騎士』ナイト

種族：転生悪魔

チーム内ではオフエンスで、剣士として

は型のある綺麗で無駄のない剣術を使うタイプ

○由良 翼紗

駒王学園2年生

役割：『戦車』ルーク

種族：転生悪魔

体術に秀でる女子生徒

容姿や性格に関してはいわゆるボーイッシュ

○花戒 桃

駒王学園2年生

役割：『僧侶』レシヨッフ

種族：転生悪魔

木場に好意を抱いている黒髪の女子

○草下 憐耶

駒王学園2年生

役割：『僧侶』レシヨッフ

種族：転生悪魔

木場に好意を抱いており、木場を

「木場きゅん」と呼んでいる。

お下げの女子

○匙 元士郎

駒王学園2年生

役割：『兵士』^{ポイン}

種族：転生悪魔

元は人間で、ソーナを主として悪魔に転生した。

強力な龍王の神器を宿していたため、悪魔に転生する際には「兵士」の駒を4個分消費している。

相棒は神器に宿る「黒邪の龍王」ヴリトラ。

イツセーとは悪魔に転生した時期が同じ同期であり、

嗜好や思考が似通っている

神器：『黒い龍脈』^{アフソリユート・ライン}

どんな物体にも接続できる「ライン」で

自分と対象をつなぎ、対象の力を吸い取る。

また、本人が制御出来ない神器などに接続

して力を散らす事も出来る。

○仁村 留流子

駒王学園1年生

役割：『兵士』^{ポイン}

種族：転生悪魔

気が強いツインテールの少女

単純な性格でノリが軽いうえ、結構喧嘩っ早い

悪魔陣営

○サーゼクス・ルシファア

代目魔王ルシファア。

リアスの実兄で、旧名は「サーゼクス・グレモリー」。

グレモリー家の魔力に加え、母方のバアル家から

「滅びの力」を受け継いだ強力な悪魔で、

自身の髪色から「紅髪の魔王（クリムゾン・サタン）」

の異名を持つ。性格は気さくで物腰は丁寧だが、子供っぽいところもあり、

魔王の公務から離れたところでは一気にノリが軽くなって自由に突拍子も無いことを言い出す。

○セラフォル・レヴィアタン

2代目魔王レヴィアタン。

元の名は「セラフォル・シトリー」といい、

ソーナの実姉に当たる

2代目四大魔王の1人として

冥界の外交を取り仕切っている

ノリと話し方がとても軽い少女。

超下級のシスコンであり、

ソーナのことを貶されると烈火のごとく怒り狂う

○グレイフィア・ルキフグス

サーゼクスの「女王」にして妻。

リアスの義姉で、「最強の女王」と称される美女

○ジオティクス・グレモリー

リアスとサーゼクスの実父で、グレモリー家の当主。

厳格そうな外見とは裏腹に、魔王の身内としては

珍しくノリが軽く、気さく

○ヴェネラナ・グレモリー

リアスとサーゼクスの実母で、バアル家の出身。

外見年齢は娘より少し上で、髪は亜麻色

○ミリキヤス・グレモリー

ゼクスとグレイフィアの息子。

紅髪碧眼の可愛らしい容貌をした美少年。

リアスの次のグレモリー家当主候補。

両親の血を色濃く受け継ぐサラブレッドで、

才能を持ちながら努力も怠らない。

○サイラオーグ・バアル

冥界の大王家「バアル家」の次期当主

リアスにとって母方のいとこに当たる。

短い黒髪、紫色の瞳を持つ体格の良い野性的な男で、次代の魔王となつて「力と志」がある者にふさわしい居場所を与えられる世界、すなわち家柄や生来の物に關係ない実力評価の世界を作ることを目標としている

○シーグヴァイラ・アガレス

冥界の大公家「アガレス家」の次期当主。

淡いグリーンがかつた長いブロンドで、

切れ長の双眸に眼鏡をかけ、クールというよりは

冷たい印象を相手に持たせそうな

雰囲気醸し出す女性悪魔。

○ゼフアードル・グラシヤラボラス

グラシヤラボラス家の次期当主候補

緑色の髪を逆毛にして、

顔や上半身に魔術的なタトゥーを入れたヤンキー風の男。

○ディオドラ・アスタロト

アスタロト家の次期当主の悪魔。

緑色の髪をしているやさしげな雰囲気的美青年。

かつてアーシアが教会から

追放されるきっかけをつくった張本人

天使陣営

○ミカエル

天界の組織「熾天使」を率いる

天使長で、「四大熾天使」の1人。

端正な顔立ちをした青年の姿で、

背中に12枚の金色の翼を持つ。

「聖書の神」の死後は「システム」の代行を行っている。

墮天使陣営

○アザゼル

全知全能の「聖書の神」に逆らつて人間に知識を与えた

「元天使」の1人にして、墮天使の組織「神の子を見張る者」の「初代総督」。

矯正な顔立ちと、前髪が金髪で顎鬚

を生やした、いわゆる「チヨイ悪オヤジ」

的な外見と、背中に生えた12枚の黒い翼が特徴

研究者気質の持ち主で、特に神器の研究

にのめり込んでいる。そのため神器に関する

豊富な知識を有しており、神器を使いこなすための

訓練方法を考案しているほか、後に自身の

手で人工神器やその補助装置を作成している。

○ニコ・ロビン

墮天使の組織『神の子を見張る者』の一員

黒髪をオールバックにし腰まで伸ばした美少女

考古学者でクウガを含め、リント族について

調べている。自分の知らない事が

あるのを嫌い気になることは

調べないと気が済まない性格。

カオス・ブリゲード
禍の団

○東城 雄輔

もう一人のクウガであり、

ユウスケの事を未完成と見下していた。

五代と同じ四つの姿を使い分けて

戦うが、その実力は高く。

ユウスケでは歯が立たない程、

強くなることを望み

ユウスケの事は

自身とは違う進化を遂げ

その成長に期待している

○美猴

ヴァーリチームのメンバー。

闘戦勝仏こと「初代孫悟空」の末裔である猿の妖怪。
外見は人間の青年。

野生的な爽やか系イケメンで、

ノリは軽くいつもヘラヘラしている

自慢の攻撃方法は、超高速で空中を飛ぶ「觔斗雲」
を乗りこなしながら「如意棒」を武器にして戦うこと。

○黒歌

ヴァーリチームのメンバー。

「妖怪」猫又の中でも強い力を持つ

「猫?（ねこしよう）」で、小猫の実姉。

主を殺して逃亡した罪でSSランク

の「はぐれ悪魔」となっていた。

その後は消息を絶っている

あいだにヴァーリチームに加入、

妹を「禍の団」に勧誘するため冥界に現れた

○アーサー・ペンドラゴン

紳士的な風体でスーツに

メガネという格好の金髪的美青年

番外編 異世界とのクロスロード 「デイケイド編」
第71話 「通りすがりの」

ブウウウウウウンッ！

今、俺は久々にバイクで移動していた。

「ユウスケー！もつと飛ばしなさい！」

後ろに乗っている奈美先輩から

もつと飛ばすように催促される。

「いやあ、もう制限速度

少し超えていますよ。

これ以上はマズイっす！」

なぜ奈美先輩がこんな

せかしているのかというと。

昨夜、リアス先輩の元に

とある、依頼が持ち込まれた。

それは駒王町にある博物館からの依頼だった。

そう、俺がアークルと出会ったあの場所だ。

肝心の依頼内容だが、

博物館に寄贈されたとある宝石の

護衛を頼まれた。

その宝石は『願いの宝石』と呼ばれる

ブルーダイヤモンドで、

その宝石には魔人が宿っており、

持ち主の願いを叶えてくれるという。

だが、その代償に命を奪うのだという。

その話が本当かどうか、

悪魔であるリアス先輩に

魔人が宿っているか

見てほしいという依頼だった。

そして、われらが部長は

そんな宝石が寄贈されたと聞いて
ぜひ取材したいとお願いされたのだ。

それで、俺が迎えに来たのだ。

「それで、その宝石って

誰が寄贈したものなの？」

「それがわからないみたいなんですよ

いつの間にか博物館の倉庫に置いてあって

寄贈しますという手紙が残されていた

みたいなんですよ」

「なにそれ！持ち主不明って面白いじゃない！」

ワクワクしている奈美先輩連れ、

俺は博物館への道を急ぐ。

ー〇〇ー

俺たちが博物館の倉庫に通されると、

そこには職員の男性と

リアス先輩、朱乃さん、イツセー、木場

ゼノヴィア、小猫ちゃんが待っていた。

「お待たせしました」

「来たわよ。リアス！」

「来たわね二人とも

それじゃあ、早速宝石の確認をしましょう」

リアス先輩がそういうと、

男性職員が一つの木箱を

持ってきて、机の上に置き、

蓋を開けると、中には

青いダイヤモンドが入っていた。

「綺麗…」

奈美先輩が思わずつぶやく

宝石に興味のない俺でも

その宝石は怪しい光を放ち

俺の目にはとても魅力的に映った

「皆、気をつけなさい」

この宝石からわずかだけど

魔力を感じるは、悪魔の魔力とは

違うけどこの魔力は見たものを

魅了する効果があるようね」

リアス先輩の忠告で俺たちは

正気に戻る。

「他者を魅了する宝石って

やばいじゃないですか！」

イツセーが宝石の正体に驚く。

だが、俺も同じ思いだ

これはさすがに展示は無理だろうな。

「これは、呪いの宝石の類ね

魔人が宿っているかはわからないけれど

危険なものなのは確かよ

これは展示するのはトラブルが

起きかねないわね」

「そんなー・どうにかありませんか

館長からはどうにか展示できないかと

言われているんです！」

リアス先輩の説明に男性職員は

どうにかできないか懇願する。

「そうね、私もこのままにするのは

マズイと思うから、冥界に送って

調べてもらいましょう。

今なら、アザゼルも向こうにいるから

見てもらえれば、解決策もわかるでしょう」

「本当ですかーいやあ、これで館長に

良い報告ができますよ！」

なんとか、解決できそうか

宝石の取材は戻ってきてからの
ほうがよさそうだな。
その時、

「それは、やめてほしいな」

突如、知らない男の声が響く。

「誰！」

『ATTACK RIDE！BLAST!!』

バツバババンツ！

突然の銃撃に俺たちはすぐさま

一般人である男性職員をかばう。

「な、な、なんですか！」

「襲撃よ！皆、気をつけなさい！」

銃撃も終わり煙が晴れると

先ほどの木箱から宝石がなくなっていた。

「部長！宝石がなくなってます！」

イツセーが宝石がないことに気づき

リアス先輩に報告する。

「ふふ、この宝石は僕がいただいていくよ」

声のする方に視線を向けると

知らない男性が拳銃をこちらに向け

宝石を手にもってこちらに微笑んでいた。

「何者だお前！」

イツセーの質問に男は微笑みながら答える。

「ただの怪盗さ」

男は宝石をしまうと一枚のカードを

取り出し青い銃に差し込む。

『KAMEN RIDE!!』

男は銃を上に向けあの言葉を口にする。

「変身！」

『DIEND!!』

男の姿がシアンと黒の鎧に身を包む。
その姿はまさに、

「…仮面ライダー…?」

「ああ、僕は仮面ライダーディエンド
覚えておくといい」

いや、相手と同じ仮面ライダーだろうと!

「相手が誰だろうと、それは絶対に取り返す!」

「ユウスケの言う通りよ!

行くわよ私の可愛い眷属達!

あの仮面ライダーから宝石を取り返すわよ!」

『了解!』

俺達は戦闘態勢に入り

怪盗から宝石を取り返すべく立ち向かう。

「変身!」

俺は真紅のクウガへと変身する。

「なるほど、君がこの世界のクウガか」

「この世界?この男何言っているんだ?

「だけど、僕は君に用はないんだ、

君たちの相手は彼らにお願いしよう」

ディエンドは更に四枚のカードを

銃に差し込んでいく。

『KAMENRIDE!』

『ACCEL!! METEOR!! BEAST!! LIVE!!』

銃を撃つと俺達の目の前に

赤いバイクの様なライダー、『アクセル』

彗星の様なライダー、『メテオ』

黄金のライオンのライダー、『ビースト』

白い蝙蝠のライダー、『ライブ』

が現れディエンドが博物館の外へと出て行ってしまふ。

「な、兵士の召喚!

何者なのこの男は!

ユウスケ、祐斗、ゼノヴィア
貴方達は後を追ってちょうだい！」

リアス先輩達がそれぞれのライダーの相手をする。
アクセルの剣をイツセーがアスカロンで鏝迫り合いし、
メテオと小猫ちゃんが格闘戦を繰り広げ、
ビーストの右肩がカメレオンとない、

朱乃さんと戦闘をしており、
リアス先輩がライブと魔力弾の打ち合いをする。

「ここは任せて。いこう、二人とも！」

「わかった、急ごう」

—●—

俺達が外に出るとデイエンドを見つけられることができた。

「見つけたよ。さあ、その宝石を返すんだ！」

「もう追ってきたのか、

思っていた以上にやるようだね

ならこれならどうだい？」

デイエンドは新たに三枚のカードを

銃に装填し引き金を引いた。

『KAMENRIDE!』

『BARON!!BRAVE!!BLADES!!』

デイエンドが三人のライダーを召喚する。

バナナの鎧の槍を持ったライダー、『バロン』

青いゲームキャラのようなライダー、『ブレイブ』

青いライオンを纏った剣士のライダー、『ブレイズ』

「じゃあ、後は頼むよ君たち」

デイエンドがこの場を去ろうとするので

追いかけてやろうとするが、それを阻止する様に

三人のライダーがそれぞれの武器を持ち

こちらへと走ってくる。

「ユウスケ君！ここは、僕とゼノヴィアで
何とかするから、君は彼を追ってくれ！」
「ああ、この三人は私達だけで十分だ！」
二人は三人のライダーの相手をしながら
そう告げる、
「わかった、あいつは俺に任せろ
必ず捕まえて、宝石を取り返すからな！」
俺はこの場を二人に任せてデイエンドの後を追う。

—●—

俺がデイエンドを追いかけると、
奴にはすぐに追いついた

「流石にしつこいんじゃないかな」

「盗人を簡単に逃がすわけないだろう！」

デイエンドはうんざりしたように呟く。

「悪魔っていうのは厄介だね」

「宝石は返してもらおうぞ！」

デイエンドに殴りかかろうとしたその時、

バツバババンツッ！

足元を銃撃される！

音がした方に視線を向けると

一人の男性がこちらへ銃を向けながら

歩いてくる。

「やあ、士。君もここへ来てたんだね」

士と呼ばれた男性はため息をつきながら呟く。

「どうせ、俺が来ていることは知ってたろ

悪いが俺はこのクウガに用がある

お前には用はない」

「お前もこいつの仲間か!?!」

「ハハハ、相変わらずつれないな

ならここは君に任せようか
僕はこれで失敬させてもらおうよ」
デイエンドはカードを一枚取り出し
銃に装填する。

『ATTACKRIDE！INVISIBLE!!』

デイエンドが引き金を引くと
姿が透明になり完全に消えてしまった。
だが姿が透明になっただけだ、

俺の耳には奴の足音が確かに聞こえる。

「まてー！このやろうー！」

先ほどの男が俺の前を塞ぐ。

「お前の相手は俺だ」

「どけ！俺はあんたに用は無い！」

「お前になくても俺があるんだ」

男は腰にピンク色のベルトを装着し
カードを一枚取り出す。

「な!?まさかお前も?」

「そのままさかだ、変身！」

『KAMENRIDE！DECADE!!』

残像が交差し彼の姿がピンクと黒の
鎧を身にまとう。

「ピンクの仮面ライダー!?!」

「ピンクじゃないマゼンタだ間違えるな！」

早く怪盗を追わないといけないのに

こいつを相手している場合じゃない!

「悪いがお前を倒してあいつを追わせてもらおう！」

「大した自身だな、だがそう簡単に行くかな?」

デイケイドはカードを取り出し、ベルトに装填する。

「悪魔には悪魔だ！」

『KAMENRIDE！REVI!!』

『バディアップ！オーイング！ショーニング！ゴーイング！

ローリング！仮面ライダー！リバイ！バイス！リバーイス！』

デイクイドがベルトを閉じるとその姿が、
恐竜を模したピンクと水色のライダー

『仮面ライダーリバイ』へと変化した。

「なっ!?別のライダーに変身するのか!?!」

「そういうことだ。いくぞー!」

デイクイドが殴りかかってくる!

「くっ、強い!」

俺は奴を侮っていたようだ。

怪盗の仲間なら大したことないと思

思っていた。

「もう油断はしない!」

俺は拳にオーラを纏わせ攻撃する。

デイクイドに俺の拳が直撃し吹き飛ばす!

「ふう、いい拳だな。ならこれはどうだ?」

デイクイドはカードを一枚ベルトに装填する。

『FORMRIDER!RIVE JACKRIVES!!』

『バイスアップ!ガッツリ!ノットリ!クロヌリ!』

仮面ライダーリバイス!バイス!バイス!バイス!バイス!』

デイクイドは真つ黒な悪魔のような姿

『ジャックリバイス』へとフォームチェンジした。

「いくぞー!」

ドガアッ!

デイクイドの拳を受け止めようとしたが、

あまりの威力に壁へと叩きつけられる。

「なんて力だよ」

あまりの実力の違いに俺はこのままでは

勝てないと実感する。

「お前の力はこんなものか?」

デイクイドは呆れたように訊いてくる

「いや、まだまだ!超変身!」

俺は『群青のクウガ』^{ナイトフォーム}に変化する！

「ほう、初めて見る姿だな」

「こいつの速度ならー」

俺は『騎士』の速度でデイケイドを奔放する。

「なるほど、大した速度だなならこいつだ」

デイケイドはカードをベルトに装填する。

『KAMENRIDE! GEATS!!』

『DUALON GET READY FOR』

BOOST&MAGNUM READY FIGHT!』

デイケイドは白と赤の狐のライダー

『仮面ライダーギーツ』へ変身する

「さらにこいつだ」

『FORMRIDE! GEATS BOOSTMARK!!』

『BOOST! MARK!! LADY! GO!!』

デイケイドはさらにカードをベルトに

装填し、真つ赤な狐

『ブーストマークII』に変身する。

「行くぞ」

デイケイドがそう呟くと目の前から消えてしまう。

「なっ！こいつも姿を消すのか!?!」

ブウウウウウウッ!

ドカアッ!

「ぐうううっ」

何が起きた!?

消えたと思ったら攻撃を

食いまた壁に叩きつけられていた。

まさか！俺よりも更に早く動いているのか!?

目で追うことも出来なかった!

「お前の強さは速さだけか?」

速さに対応できないなら、

魔力の弾幕で対処する!

「超変身！」

俺は『深碧ビシヨップフオームのクウガ』に変身し、

魔法を発動する。

「炎よー！」

『FIRE！』『FIRE！』『FIRE！』

ドドドンツ！

デイケイドの動きを予測し、火球を三発放つ

後ろが壁なら残りの三方向に攻撃すればいい！

「つうつ」

俺の読みは当たりデイケイドに攻撃を当てることができた。

これならまだ対応できる！

「なるほど、ウィザードの様に

魔法を使えるのか面白い変化だな

ならこいつならどうだ」

『KAMENRIDE！ZEROONE！！』

『Progrize！』

飛び上がライズ！ライジングホッパー！

A jump to the sky turns to a rider kick

デイケイドは黄色いバッタのライダー

『仮面ライダーゼロワン』へと変身する。

「姿が変わろうとも！

炎よー！水よー！風よー！」

『FIRE！』『WATER！』『AERO！』

ドン！ドン！ドン！

「ほう、ウィザードと違って同時に

複数の属性を使えるのか」

デイケイドは三次元的な

動きで全ての魔法を避けていく。

素早い！だが、目で追えない速度ではない！

「わざわざ、速度を落として意味あるのかよー！」

「速さだけが強さじゃないからな」

『FORMRIDE! ZEROONE SHININGHOPPER
!!』

『Progrize!
The^光 rider^り kick^輝 increases^く the^ラ power^イ b
Shinning hopper!
When^こ I^の shine^を,^照 dark^らness^せ fades^る!
だ
は
た
だ
一
人
俺
だ!

デイクイドは輝くバツタの

『シャイニングホッパー』へと変身し

こちらへ走り出す

「こいつならどうだ! 雷よ!」

『THUNDER!』『THUNDER!』『THUNDER!』

ドツドツドツオオオオオオオオオオ!

俺は三連続で雷を放つ

雷の速度なら当たるだろう!

「それはどうかな?」

ヒュッン!

デイクイドに雷が直撃する瞬間黄色い

残像を残し奴は消えてしまった

「な、なにがあッ!」

突如俺は横からデイクイドに殴られる。

「おいおい、戦いの最中によそ見か」

何が起きたかわからにがわからないなりに

攻撃で情報を集めるしかない

手数で勝負だ!

「まだまだ! 時よ! 炎よ! 氷よ! 水よ! 雷よ! 風よお!」

『TIME!』

「ツツ! 動きを止めるのか!?!」

『FIRE!』『BLIZAD!』『WATER!』『THUNDER!』

『AERO!』

デイクイドの時を止めて

魔法を一斉に放つ!

今の俺じゃあ奴を止められるのは
一瞬だがそれでも、着弾までの時間ぐらいは
稼げる！

デイケイドの時が動き出し、魔法が着弾するその時！
ヒュッン！

「またもや黄色い残像を残して消えるデイケイド
「また!?があッ！」

今度は後ろから殴られ俺はその場に倒れてしまう。

「な、なにが起こったんだ!？」
「わからないか？」

なら教えてやろう、この姿だと相手の動きを予測し
最適な行動パターンを教えてください。

相手の動きを予測する。経験がものをいうが、
それも十分な強さだ。さあ、お前の強さはこんなもんか？
格が違う。こいつの強さは

このチートの様な変身能力だけじゃない

その場に適した姿に即座に変身する
対応能力がもつとも厄介だ。

この力だけは使うつもりはなかった。
アザゼル先生にも使うなど釘を刺されていたが、

こいつ相手に出し惜しみは出来ない！
何より使わないで負けた時の方が絶対後悔する！

「なら、とっておきを見せてやる！超変身！」
俺は『深紫ルークフォームのクウガ』に姿を変える。

「パワー重視の形態か。ならこいつでくか」
『KAMENRIDE！SABER!!』

『烈火抜刀！ブレイブドラゴン！』
烈火一冊！勇気の龍と火炎剣烈火が交わる時
真紅の剣が悪を貫く！』

デイケイドはカードをベルトに装填して
真紅のドラゴンを纏った剣士

『仮面ライダーセイバー』へと変身する。

「またもう一段階変身あるんだろ？」

「さっさと変身しろよ」

「余裕だな。いいのか俺を強化させて」

「どちみちなるんださっさとなればいいさ」

この戦いで奴は俺に色んな強さを見せている

まるで指導するかの様な戦いだっただった。

こいつの目的はわからないが、

本気のこいつと戦いたいと俺は思う。

「なら、好きにさせてもらおう」

『FORMRIDER！SABER PRIMITIVE DRAGON

!!』

『烈火抜刀！バキッ！ボキッ！ボーン！

ガキッ！ゴキッ！ボーン！

プリミティブドラゴン！』

ディケイドは骨のドラゴンを纏った剣士

『プリミティブドラゴン』へと姿を変える。

ガキーン！

俺は拳同しをぶつけ自分を鼓舞する。

俺の拳は誰だろうとぶっ飛ばす！

ダッ！

ドガア！ドガアッ！

俺の拳をまともに食らったディケイドは

少し後ずさるだけで、動じてはいなかった。

「今度はこっちの番だ」

ドガアアッ！

ディケイドの拳を受けて俺は吹き飛ぶ。

耐えられると思っていた、その自信はあった、

だが、奴の一撃は俺のその自信を

潰すには十分だった。

「がはあッ！」

この場を去っていた。
俺は薄れゆく意識の中、
奴の後ろ姿をただ見ていることしか
出来なかった。

第72話 「仮面ライダー」

デイケイドに敗れた日の夜。

俺達はオカルト研究部の部屋に集まっていた。

「すみません。リアス先輩、

俺がああ怪盗を逃したせいで、

ああの宝石を取り戻す事が

出来ませんでした」

俺の謝罪にリアス先輩は

頭を押さえながら呟く。

「別に気にしてないわ。

私達も全員召喚されたライダーを相手に

勝つことが出来なかったわ。

時間稼ぎされていたのでしょね」

後で話を聞いたが、俺がデイケイドと戦っていた時も

リアス先輩達はライダー達と戦っており、

俺が倒された後、召喚されたライダーは

突然消えてしまった様だ。

「とにかく、終わってしまった事よ

宝石の行方はこちらで調べておくから、

見つけ次第、奪還に向かうわ。

それよりも、今日これから来る

依頼人はちよつと特殊なのよ。

普通の依頼は私達個人に依頼が

来るけど、今日の依頼者は

オカルト研究部に依頼を出すよ

言うの。それだけ大変な依頼と

だけ聞いているわ」

俺達全員への依頼？

一体どんな内容だ。

まあ、わかっているのは

ヤバい依頼だっただけだ。

「そろそろ、依頼者がここに来る時間ね」

コンッ！コンッ！

部室の扉を叩く音がする。

来たか？

ガチャッ！

俺たちが注目する中、扉を開けて

入ってきた人物は驚くことに

奈美先輩だった。

「え!? 奈美先輩が依頼者?」

「な、なに急に、私は今日のことを

改めて聞きに来ただけよ。

依頼者ってことはお客が来るの？

なら、出直すわよ

邪魔はしたくないしね」

「いや、別にいってもらっても構わないぞ」

突然部屋に男の声が響く。

「な!?!」

いつの間にか部室の壁に一人の男が

寄りかかりこちらにカメラを向けていた。

「貴方が依頼人? 誰にも気づかれず、

どうやってここに入ってきたのかしら?」

「なに気にするな。」

只、俺が特別なだけだ」

説明になってないぞ

しかも、この男は!

「リアス先輩! こいつです!

俺を倒した仮面ライダーは!」

『なっ!?!』

俺の言葉に皆が一斉に戦闘態勢に入る!

「よしとけ、お前達じゃ束になっても

俺には勝てないそれに今の俺は依頼者だ」

「依頼者だつて？あの怪盗の仲間だろ

さっさと宝石を返しやがれ！」

「あいつは別に仲間じゃない

それに俺の依頼はあの宝石に関してだ」

「その話詳しく聞かせてもらおうかしら」

リアス先輩がソファアにて改めて

デイケイドの話を聞くことになった。

奴は朱乃さんの入れたお茶を飲みながら

図々しくくつろいでいた。

ライザーみたいな俺様系かと思ったが、

まだこっちの方がましな感じだな。

「それで？あの宝石に関する依頼って何かしら？」

「あの宝石には持ち主の願いを叶える力が

あると言われているのは知ってるな？」

「ええ、だからあの博物館で

展示しようとしていたのよ」

「だが、今あの宝石にその力はない

只の宝石になっている。

原因は宿っていた魔人が逃げた事だ」

『魔人が逃げた!?!』

俺たちは驚きを隠せなかった。

そんな力を持った存在が逃げ出すなんて

危険でしかないからな。

「その魔人は過去に悪さとして宝石に

封印された力の弱い妖怪だった。

だが、その妖怪には他者の願いを

叶える力があつた。

最初は些細な願いしか叶える力しか

持つてなかったが、奴は多くの者の

願いを叶え続ける事で少しづつ力を

つけるようになった。

いずれ叶える願いが強欲な願いに

変わっていき、遂には願いを叶えた

者の魂すら吸収する様になり

宝石の封印を破って外に出てしまった」

なるほど、つまり依頼ってのは…。

「なら、依頼ってのは

その魔人の討伐かしら？」

リアス先輩の質問に彼は首を横に振った。

「いや、違う奴を倒すだけなら

俺一人でも十分だお前達に

やってもらいたいのは探し物だ」

探し物？

「探してもらいたいものはこいつだ」

彼が懐から出した写真に写っていたのは…、

顔のついた雲の姿だった。

—●—

俺たちは次の日の夜、あの雲の目撃情報のあった、

隣町の自然公園へとやってきていた。

「奈美先輩、本当にここにあの煙が現れるんですか？

自然公園って言っても人の多い公園に

いるとはとても思えないんですが」

「あら、私の情報が信じられないの？」

俺の質問に奈美先輩は不機嫌になってしまう。

「いや、疑っているわけじゃないですけど

奴の話の聞いたらもう別の場所に移ったんじゃない」

俺達が探している煙の正体は

ディケイドが魔人を倒した際に

魔人から分離した力の一部らしい。
だが、一部といってもその力は絶大で
町一つ滅ぼす力を持っているらしい。
デイケイドが雲を探している理由は
力の一部がある限り魔人がまた復活する
奴はそれを阻止したい様だった。
だけど、この雲は大変臆病みたいで
デイケイドから逃げ続けているらしい
だから一度発見されたら同じところには
いないだろう。

まあ、それはリアス先輩も予想している
様で今回は複数のチームで搜索を行っている。
俺は奈美先輩とチームで目撃情報のあった
場所を探している。

「ユウスケ、魔法で探すことはできないの？」

「いや、俺が使えるのは攻撃魔法だけですよ
索敵は他のメンバーが使い魔を使ってますよ。
俺達は奴の痕跡を探しましょう。」

「そうね、でも相手は雲でしょう？」
痕跡事態残すのかしら？」

奈美先輩の疑問は理解できる。

でも…。

「物理的な痕跡はないかもしれないけれど、
魔力的な痕跡は必ず残っているはずですよ」

「そうねあなたに任せるわ」

「そういえば、相手は雲なのよね
気体なら雨が降ったらどうなるのかしら？」
たしかに、相手が気体なら
ものによつては溶けるのかな？」

「出来ることは全部試してみましよう」

奈美先輩はそういうと『天候棒』

を取り出し、変形させて天に向ける。

ポウツ！

「天候は曇り！クラウドデイ！テンポ！」

一瞬で雲が自然公園全体に広がる。

「さあ、やるわよ冷氣泡！」

クールボール

奈美先輩が雲に向けて冷気を放つと横から飛び出してくる影があった！

「うわーい！ご飯だー！」

その影は奈美先輩が飛ばした冷気を食べてしまう！

「今の冷気はお前が出したのか？」

もっとおいらに頂戴よ！

腹が減って仕方ないんだ！」

そいつは俺達を探し回っていた魔人の分身だった。

「奈美先輩下がっててください！」

こいつは危険です！」

「なんだあ、お前は！」

俺はそっちの女に話があるんだ！

邪魔するなあ！」

雲の魔人は突如雷雲となり雷鳴を響かせる。

「本性表しやがったな！」

ならお前はここで倒してやる！」

俺はベルトを出現させる。

「待つてユウスケ！」

俺の前に奈美先輩が割って入る！

「危ないですよ先輩！」

「ええ、それはわかってるわ

でもこの子ただおなかが減って

いらだっているだけだと思っの」

奈美先輩は冷氣泡を

クールボール

いくつか生み出して魔人に与える。

「わーい、ご飯だご飯だ！」

冷たくておいしいね」

魔人にご飯を与える奈美先輩は
すぐくうれしそうだった。

「私の名前は大空奈美よ

貴方の名前はなんて言うの？」

「おいらに名前はないよ

そうだあ、じゃあ奈美が

おいらに名前を付けてよ

奈美はおいらにおいしい

ものいっぱいくれるから

大好きだぞ！」

雲の魔人は奈美先輩に

なついたようだな。

でも聞いてた話と違う気が

こいつが町を滅ぼすてのか？

いや、さっきの姿を見れば

あながち間違つてないのか

俺はとりあえず、

魔人を見つけたことを

リアス先輩へと連絡することにした。

—●—

俺達がオカルト研究部に戻ると

すでにみんなが集まっていた。

「戻ったわね、ユウスケ

早速報告を聞かせて頂戴」

「はい、目撃情報があった

自然公園で雲の魔人を発見しました。

倒そうとしたんですけど…」

俺は後ろを振り返ると。

「ナミくもつとぐ飯頂戴よ」

奈美先輩に懐いた魔人の姿があった。

『わた』ご飯は後であげるから

いまはおとなしくしていて頂戴」

「わかったよ、ナミく」

その姿を見てリアス先輩は

頭を悩ませる。

「もしかして、魔人を手なずけたの？」

「ええ、魔人を餌付けしたみたいで」

「これは、依頼者にどう報告するべきかしら

あの姿を見るといまさら倒すというのは

気が引けるわね」

「別に倒す必要はない。

俺は探してほしかったただだからな」

突然男の声が聞こえる。

そちらへ視線を向けると、

デイケイドこと門矢士が

優雅にコーヒーをに飲んでいた。

「倒さなくていいって、

どういうことだ？

魔人を倒すのが

目的じゃないのか？」

「そうだ、魔人を倒すのが目的だが話

はそう簡単じゃない奴は他者から奪った魂を

無機物に与えることが出来るしかも、

奪った魂の分命があり倒しても

倒しても復活する厄介な奴だからな

この雲を見つけて解析すれば

奴を倒す方法がわかると

思ったからお前たちに依頼したのさ」

なるほど、って説明が少なすぎるだろ！

あのまま倒してたら振り出しに

戻るところだったじゃないか！

奈美先輩には感謝だな。

「危うく倒すところだったぞ

説明しとけよな！」

「俺は探してほしいって言っただろう

倒してくれとは一言も言っていないぞ」

ぐぬぬ、確かにそうだが

「早速調べてみよう」

門矢士がベルトを装着し

カードを掲げる

『KAMENRIDER！』

「変身！」

『DECADE!!』

彼はマゼンタの仮面ライダー

『仮面ライダーディケイド』へと変身する。

「解説ならこいつだな」

『KAMENRIDER！DRIVE!!』

ディケイドは真っ赤な車の

仮面ライダーである。

『仮面ライダードライブ』へと

変身する。

ディケイドは更にカードを装填する

『FORMRIDER！DRIVE！TECHNIC!!』

ディケイドは真っ赤なボディから

黄緑色のボディの

『タイプテクニク』へと姿を変える

ディケイドは『わた』を見つめ

解析を始めた。

見つけること数分

「なるほど」

「何かわかったのか？」

俺の質問に門矢士が
変身を解除し答える

「わからないことがわかった」

「なんだよそれ」

俺達は何のために探してたんだか。

「まあ、聞けこいつは解析すると

正体は只の雲だなぜ動けるのか

わからない恐らく魔人に

無理やり魂を定着させられた

結果だろう」

「じゃあ、わたしは奪われた魂。

宝石の持ち主だったものか？」

「そうだろうな、後こいつを調べた

結果こいつからわらずかだが特殊な

電磁波が出ている。

その電磁波を解析して、

町中をサーチしたところ

町の至る所から微かにだが

同じ電磁波が発見できた」

なら、わたしみたいに魂を入れられた
存在が他にもいるのか？

「なら依頼は継続ね、

今度に残りの魂たちの回収ね

それでいいかしら？」

「ああ、騒ぎにもなる

全て捕まえれば魔術的な

観点で何かわかるだろう」

門矢士の話にリアス先輩もうなづく

「ええ、アザゼルあたりに
調べてもらえば何かは
わかるでしょうね」

そして、俺達は残りの魂の
大搜索が幕を開けたのだった。

―○●―

俺達はこの数日魂の入った

物体探しに明け暮れた

朱乃さんや小猫ちゃん

等索敵にたけたメンバーが

頑張ってくれたが、

魂の捕獲数が一番高いのは

以外にも奈美先輩だった。

というよりもわたが近くの仲間の位置が

だいたいわかるらしく夜に町中を俺と

奈美先輩とで搜索し魂を集めていた。

「さてと、これで町中に散らばっていた

魂は全部集められたかしらね？」

俺達は今、奈美先輩やオカルト研究部と共に

レーティングゲームで使った駒王学園を模した

フィールドにやってきていた。

目の前には顔の付いた

花や木はては食べ物にまで

魂が宿り動き回っていた。

逃げられてはマズイと

この特殊なエリアに隔離している

状況だった。

「魂を全部集めたってな」

そこへやってきたのは

門矢士だった。

「ああ、大変だったけどな

わたのおかげでなんとかなったよ
それで、この後どうするんだ？」

「こいつらは魔人を倒すための鍵だ

倒しても蘇る魔人。

種は恐らくこの魂たちだろう」

「じゃあ、こいつらを全員倒すってのか!?

それはあまりにも横暴すぎるだろ!」

そんなこと俺はしたくなかった

たった数日とはいえ、わたとも

ようやく仲良くなれたというのに

それにわたが消えたら奈美先輩も

悲しむに違いないそれだけは

したくない!

「えー、おいら、やられちゃうのか」

「そんなことさせないわ!」

わただって私たちの仲間だもの!」

「落ち着け、何も倒そうとは

考えてはいない、お前たちは

天使陣営ともつながりがあるだろう

こいつらは言わば迷える魂だ

本来なら成仏してないとおかしいんだ」

確かに、こいつらは無理やり

魂を奪われた人たちなんだもんな

そうすると、わたも成仏できずに

現世をさまよってる魂だもんな。

「奴が保有していた魂が減れば

それだけ奴は弱体化するだろう。

そうすれば再度封印することも

可能だろう」

「封印できるのか？」

「そんなことが」

俺の質問に門矢士はうなずく。

「出来る。今までは奴の力が

強すぎて封印は出来なかったが、

力が弱まればあの宝石に

もう一度封印することは

可能だ」

「いや、肝心の宝石がないじゃないか

あの怪盗が持つて行っちゃまったよ」

「なるほど、それで僕がここへ

呼ばれたってわけかい？」

突然男の声が響く。

この声は!？」

「怪盗やろう!？」

「やあ、クウガ、久しぶりだね」

そこにいたのは俺達から

宝石を奪ったデイエンドだった。

「なんでこいつがここにいるんだよ！」

「何故か？それは宝石を持つてきたからさ」

デイエンドは懐から呪いの宝石を取り出し

こちらへ投げってくる。

「それは今、ただの宝石になっている

それはお宝とは言えないものだ。

なら、魔人を封印したものを

改めていただけこうと思つてね」

「そういうことだ、

これに必要なものは揃つた

後は教会の人員に頼んで

魂を成仏させてやれば

全てが終わる」

『マンマ、マンマ！』

そうはいかないよ

ディケイド！』

突然、女性の声があたりに響く！

それは奈美先輩の近くにいます

わたから響いたものだった

「え、みんななんでおいらのこと

みてるんだ〜？」

俺たちの視線が集まる中

わたしは普段通りの姿だった

だが、さっきのは間違いなく

敵意を感じた。

「ねえ、どうしちゃったの？わたし」

「奈美先輩！下がってください！

そいつは危険です！」

俺が奈美先輩を離すと

わたしに変化が訪れる。

「ねえ、どうしたたたたの

おおいらあ…、なにいいか…

ハハハツハハマンマ、マンマ！

待っていたぜこの時を！」

わたの顔がノイズの様に乱れたかと

思うとその顔が女性のものへと

変わり体も大きくなっていく。

「さあ、私の元へと帰っておいで

お前達！」

わたが魔人へと姿を変えると

周りにいた魂たちを吸収して

ドレスを着た巨大な丸々と

太った女性へと姿を変える！

「これは驚いたね。

まさか姿を隠していた
魔人が現れるなんて」

「言ってる場合かよ

魂全部吸収したぞ！

まずいだろこれ！」

驚く俺達に構わず魔人は次の行動に移る

「マンマ、マンマ！」

出ておいで！わが子たち！

こいつらを倒してやりな！」

『はくいーママ』

チエスの兵隊が突如

現れ俺達へ向かってくる。

「あの兵士たちは私たちに任せない

貴方達は魔人を倒してちょうだい！」

リアス先輩が眷属達と共に

チエス兵を受け持ってくれる。

「ハハ、まさか君とまた

共闘できるとはね嬉しいよ」

「俺は別に嬉しくないな

だが、力貸せ海東、ユウスケ！」

「ああー！」

「喜んで」

『『KAMENRIDE！』』

「『変身！！』」

『『DECADE！！』『DIEND！！』』

俺は直接深碧ビショップフォームのクウガへと変身する

「行くぞー！」

『『ATTACKRIDE！』』

『『BLAST！！』』

「マジックフルバースト！」

二人の銃撃と俺の魔法を受けた魔人はひるむだけであまりダメージは無いようだった。

「マンマ、マンマ！そんな攻撃が

俺に効くかよ！」

魔人は自身から巨大な剣を生み出す。

「行くよナポレオン！」

「は〜いママ！」

「異国!!」

魔人がナポレオンと呼ばれた剣を振るうと巨大な斬撃がこちらへと飛んでくる！

「させるか！超変身！」

俺は深紫ルークフォームのクウガへ変身し、

盾で斬撃を受け止める。

「ぐうううッ！」

「ユウスケ！受けた攻撃を

そのまま斬撃に乗せて打ち返せ！」

何!?

「おらああああ！」

俺は言われた通りに

大剣にオーラを宿しそのまま打ち返す！」

ドカアアアアアアン！

「ぎゃああああああ！」

魔人の叫びが周囲に響く。

「すげえ、これなら自信に

負荷をあまり与えず力を扱える。

そうか、白龍皇と原理は同じかなんでこんな簡単なこと

思いつかなかったんだ！」

「よそ見するなユウスケ！」

「海東！」

「わかっているさー！」

二人はユウスケを守る為に
それぞれの武器で剣を防ぐが、

完全に防ぎきれず吹き飛ばされてしまい

二人とも変身が解除されてしまう。

そこでユウスケの意識は回復する

だが、戦いのさなか生身で意識を

失うのは二人がいなければ

死んでいてもおかしくなかった。

「な、なにが？」

「ハッハッハマンマ、マンマ！」

こんなものかい仮面ライダーってのは

特に最初に倒れたお前は特に弱いね

本当にライダーかい？正義の味方なんだろう

弱くても務まるんだねマンマ、マンマ！」

奴は俺を見てあざ笑っていた。

確かに俺は弱いさだが

それがなんだ！

「確かにこいつは弱い、

だが、仮面ライダーが務まるかは

力で決まるもんじゃない。

一番大事なのは心だ！

どんな強大な敵だろうと

折れずに立ち向かう心こそ

俺達仮面ライダーに必要なものだ！

その点こいつは確かに心の強さを

持っている！こいつは

間違いなく仮面ライダーさ！」

門矢士は俺をまっすぐ見てそう言う。

「それにお前は勘違いをしている

俺達は正義の為に戦ってるんじゃない！

俺達は人間の自由のために戦うんだ！」

「俺に説教かい何様のつもりだい！」

お前は一体何なんだい！」

「通りすがりの仮面ライダーだ、

覚えておけ！」

『KAMENRIDE！』

「変身！！」

『DECADE！！』『DIEND！！』

変身した三人の仮面ライダーを

見て一歩後ずさる魔人。

ブウウウンッ！

突如、デイケイドのホルダーが

ひとりでに開くと中から複数の

カードが飛び出してくる。

「なるほど、面白い

海東！クウガを出せ」

「ふむ、いいだろう

君の策を見せてもらおうか」

『KAMENRIDE！KUUGA！！』

デイエンドが仮面ライダークウガを召喚する。

「何をするつもりだデイケイド」

「すぐにわかるさ」

デイケイドは一枚のカードを取り出す。

『ATTACKRIDE！ILLUSION』

デイケイドがカードを使用すると

七人に分身する。

「[[[次はこれだ]]]」

[[[KAMENRIDE！KUUGA！！]]]

[[[KAMENRIDE！PROTOKUUGA！！]]]

一人を残して全員がクウガへと変身する。

「そんなこともできるのかよ」

困惑する俺を横目に六人が更に

カードを取り出す。

「面白いのはここからさ」

『FORMRIDE! KUUUGA DORAGON!!』

『FORMRIDE! KUUUGA PEGASUS!!』

『FORMRIDE! KUUUGA TITAN!!』

『FORMRIDE! PROTOKUUUGA KNIGHT!!』

『FORMRIDE! PROTOKUUUGA BISHOP!!』

『FORMRIDE! PROTOKUUUGA ROOK!!』

デイケイドが変身することで、

全ての姿のクウガがここに揃う

「ふん、人数が増えたからって

何だってんだい! まとめて倒してやるよ!」

「^{ヘブンリーファイター}天上の火」

頭の太陽の魂を掴むとそのままこちらへと

投げ飛ばしてくる!

その攻撃はタイタンとルークの二人が防ぐ。

「猪口才な! ヘラー!」

「は〜いママ!」

またもや雷を放とうとしていたが、

『FINALATTACKRIDE!』

『DIEND!!』『KUUUGA!!』『PROTOKUUUGA!!』

デイエンド、ペガサス、ビショップの

三人の必殺技に撃ち抜かれ倒される。

「ぎゃああああ!」

「ヘラー! おのれお前達!

っ!ぐううう!」

先ほどの斬撃を繰り出そうとした

魔人だが、いつの間にか後ろに回っていた

ドラゴンとナイトが攻撃し

魔人を吹き飛ばす！

その先にはタイタンとルークが待ち構える。

「なめんじやないよー！」

とつさに大剣を振り上げる魔人！

『FINALATTACKRIDE！』

『KUGA!!』『PROTOKUGA!!』

タイタンとルークの必殺技が

振り下ろされるナポレオンに

直撃し、

バキイツ！パリイインツ！

ナポレオンが碎け散る！

「ナポレオン！」

「今助けるよ！ママ」

すぐさま駆け寄るプロメテウスだが

そこにかげよる二つの影

『FINALATTACKRIDE！』

『KUGA!!』『PROTOKUGA!!』

背後からナイトの斬撃とドラゴンの攻撃を

食らうプロメテウス

「ぎゃああああー！」

「ああ、よくも私の子供たちを

許さないよお前達！」

雄たけびを上げる魔人！

「トドメだ行くぞユウスケ」

「ああー！」

『FINALFORMRIDE！PROTOKUGA!!』

「ちよつとくすぐつたいぞ」

「え？」

グッ！

突然、デイケイドに背中を刺されると

ユウスケの姿が変わっていき、

一台のバイク『トライチエイサー』へと

その姿を変える。

「バ、バイクになった!?!」

それを見たデイエンドもカードを取り出す。

『FINALFORMRIDE! KUUGA!!』

「痛みは一瞬だ!」

デイエンドが召喚したクウガを

撃ち抜くとクウガは巨大なクワガタ

『ゴウラム』へと姿を変える。

デイケイドがトライチエイサーにまたがると

二人がカードを装填する。

『FINALTACKRIDE!』

『KUUGA!!』『PROTOKUGA!!』

デイケイドがバイクで魔人に突進すると

ゴウラムがバイクを包むように変形し

合体する。二人のクウガが合体した姿

『トライゴウラム』だ!

「そんなもの! 押し返してやる!」

魔人もこちらに突進してくるが

トライゴウラムの角が輝き

更に速度も加速する!

「はあああああああッ!」

「おりやあああああッ!」

ドオオオンツ!

キキツイイイイイイ!

バイクをドリフトして止めるデイケイド。

バイクを降りると召喚されたクウガは消え

ユウスケも元のクウガの姿になる。

「そ、そんな、この俺が!

俺の魂たちがあ!」

「どうやらリアス先輩達の方も

全ての魂を倒し終わったようで

魔人もかなり弱っているようだった

「こうなったらあー！」

魔人は奈美先輩の方を向き、

魂だけとなった状態で

飛び出していく！

マズイ、間に合うか！

「お前の魂を寄越せえ

ライフオアツ！」

俺は走り出すがそれも先に

魔人が奈美先輩へその手を伸ばしたその時

奴のから一つの光が飛び出して、

魔人の前に立ちふさがる！

「ナミに手を出す奴は！

おいらが許さないぞ！」

バチイツバチイツバチ！

「わたー！」

「このお、俺様の魂の分際で！」

「いまだ、ユウスケ！」

わたの叫びに俺は答えるように

脚にオーラを纏い空へと飛ぶ！

「おりゃああああああつ！」

俺の放った蹴りは魔人に直撃する！

ドカアアアアアアアン！

魔人は今度こそ消滅したようだ。

「大丈夫ですか？奈美先輩」

俺は奈美先輩に駆け寄ると

奈美先輩は涙を流して

クリマタクトを握っていた。

「ええ、わたが最後助けてくれたから
私は無事よ。でも、でもせつかく
仲良くなれたのに…」

奈美先輩は黙って涙を流している。
魔人を倒した今、奴の一部だった
わただつて倒してしまった。

そのとき、

「泣かないでよ奈美く」

泣いてる顔なんて似合わないよ」
突然わたの声が聞こえる。

「わたしどこにいるの？」

俺達は周囲を探すが

わたの姿は見つけることは

出来ない、だが確かに

声は聞こえた。

「おいらはここだよ奈美く」

わたの声は奈美先輩の

手の中から聞こえてきた。

そちらへ視線を向けると。

クリマタクトにわたの

顔が現れる。

「貴方どうして、

クリマタクトに？」

俺も奈美先輩もわけがわからなかった

クリマタクトは人工とはいえ神器だぞ!?

「最後のユウスケの攻撃で飛ばされて

この神器？にぶつかったときに

もっと奈美と一緒にいたいと

思ったんだそしたらこうなってたんだ」

これは神器がわたの思いに

応えてくれたというのだろうか？

「どうやら、そいつは魔人とは切り離されて

新たな存在に生まれ変わったようだな」

そこへ、門矢士がやってくる。

「じゃあ、わたがいても魔人は復活しないのか？」

「それは問題ないだろう、奴はこの通り

この宝石の中に封印されたよ」

海東がやってきて呪いの宝石を見せつける。

先ほどの戦闘時に封印してたとは流石怪盗

手癖が悪いな。

「じゃあ、僕はお暇させてもらうよ

僕の目的は達成したからね」

「そうかよ」

「おや、取り返そうとはしないんだね

あれだけ返せと言っていたのに」

「それはこの世界には不要なものだわ

別の世界の貴方が持つて行った

方が私たちの為になるわ

博物館側には私から言っておくわ」

そこへリアス先輩がやってきてそう告げる。

「気づいていたのかい僕たちが

別の世界から来た人間だと」

「流石は上級悪魔様だな」

最近は何世界との繋がりが多かった

だからリアス先輩もわかったんだろう。

カシヤツ！

突然士が首から下げた

カメラで俺と奈美先輩を撮影する。

「突然なんだよ」

「俺も役目が終わったからな

これで次の世界に旅立たせて

もらう。これはこの世界での
記念だな」

この世界だけの思い出か
それはなんだかいいものだな。

「そうか、また会えるかな」

俺の質問に士は答える

「それはわからないが、

旅はまだ続くからな

どこかで出会うかもしれないな」

「そうか、じゃあさよならは言わないよ

今回はありがとうなまた会おうぜ」

ユウスケはサムズアップで士を見送る

士は先ほどとった写真を見ながら

ユウスケ達に背を向けて手を振り去っていく

その手の写真にはブレてうまく撮れていないが

ユウスケ、奈美、わたの三人の笑顔が

写っていた。

士と海東は銀色のオーロラに

入っていき消えていった。

「凄い人たちだったわね」

奈美先輩のつぶやきに俺もうなずく。

「ええ、最初はむかつくやつだと

思いましたけど実力は本物で

本当にすごい奴ですよ」

俺はデイケイドに出会ったことで

一段と強くなったと実感する。

彼はどこかで出会うかもと言っていたが

本来は別の世界の人間、世界を旅するなら

もう一度会うことは無理なはずだが

なぜだろう彼とはまた会えると

そう感じるんだ。

「次あったときは奴に勝てる程に

強くなってやりますよ」

俺の中で新たな目標ができた瞬間だった。

—○●○—

とある研究所の一室。

ピピッ！

着信音に気が付き

一人の男がモニターに

視線を移す。

「デイケイドが遂にこの世界に

やってきたか。クウガの能力も高まり

4フォームは揃った。それに

彼らのおかげで次のステージへの

成長も目前だろう。

そろそろ、奴らがこの世界に介入するはずだ

その時は私も出るしかないだろう

こいつの実験試験も行いたいからな」

メモリーの視線の先には

以前設計していた

ドライバーがケーブルに

繋がれており、

近くにはカードキーが

置かれていた。

第六章 体育館裏のホーリー

第73話 「転校生」

気が付くと俺は古い遺跡の前に
佇んでいた。

「何処だここは？」

初めて見る場所の筈だ。

だけど、何処か知っている気がする。

そんな不思議な感覚がある。

俺は遺跡の中に入っていく。

中に入るとそこには椅子に座る

大きな三つの石像が置かれていた。

真ん中の一つは以前見たことある

ン・ダグバ・ゼバの石像だった。

それが、鎖によって椅子に縛られている。

左右の二つの像は初めて見る姿だ。

片方はオオカミの様な姿をし、

もう片方はシャチの様な姿だった。

もしかしてこれはグロンギの像か？

「彼らはグロンギ族の王よそれぞれが

各部族のトップだけど、考え方が違ったの

後ろから一人の女性が現れる

この女性は!？」

「貴方とは始めましてねユウスケ」

その人は以前夢で見た女性だった。

「あんたは確か以前夢で見た気がするな」

「それは夢じゃなくて記憶ね。

でも、今重要なのはそこじゃないわ」

女性は困惑する俺に気にせず話を続ける。

「貴方も知っているみたいだけど、

彼の名前は『ン・ダグバ・ゼバ』

虫と植物のグロンギ族の王よ

彼は戦う事こそが喜びで、

自分と対等に戦える存在を求めているの」

確かに夢であつた時も戦いを遊びと言っていた。

「次にオオカミの彼ね。」

彼の名前は『ン・ガミオ・ゼダ』

哺乳類と鳥類のグロンギ族の王で

王の資質は高く王として自身の民を

まとめリント族の殲滅を目標としていた」

リント族の殲滅!?

ダグバと同じくらいヤバい

奴じゃないか。

「最後にこの私『ン・オルガ・ゼギ』

水棲生物、爬虫類、両生類のグロンギ族の王よ」

彼女はシャチの容姿のグロンギへと変化する。

「な!?!グロンギだと!」

驚く俺を横目に彼女は人間態に姿を戻す。

「驚くのは無理ないけど、

大丈夫よ私は敵ではないわ

私は唯一リント族と共存しようとした。

グロンギよ」

人間と共存しようとしたグロンギ!?

普段ならそんな言葉信じられない所だが、

何故か彼女の言葉は信じられる。

「一つ聞きたい。此処はどこなんだ」

「ここはいしの間貴方のベルト

『アマダム』と繋がる独自の空間

私達は此処に封印されているの」

封印されている割には自由に

動き回っているようだけど。

「その顔は何故私が動いてるかってことかしら？」

それは簡単今の私は意思だけの存在、
体は御覧の通り鎖で雁字搦めにされている。
だけど、封印にも綻びが生まれている。

だから意思だけは自由に動ける

貴方の夢に干渉したりね」

それが、今までの夢にグロンギが

出てきた理由か。

まさかここまで明確に干渉してくるとはな。

「貴方は特異点を超えたわ

気を付けてこれまで以上に

残存のグロンギが貴方を狙うはずよ」

「狙うってなんで？」

奴らの狙いは何なんだ？」

「彼らの狙いは私達王の復活

それぞれの王を復活させるために

ゲギバスゲゲルを行うのが

最終的な目的、そのゲームを

行うためには王に挑戦する資格

が必要なの」

王に挑戦する資格？

「資格とはゴに二対一で勝利すること。

今のあなたはまだそのステージにはいない

アマダムを通して見ていたけど、

この間戦ったボダウはメの中でも

下位に属する方よ

これからはさらなる強者が

貴方を狙うわ気を付けて」

あの強さで下位の實力なんてな。

すると俺の体がぶれて

体が薄くなっていく。

「どうやら、もう時間の様ね

此処での記憶は残るはずよ

じゃあ、また会いましょう

ユウスケ」

薄れゆく意識の中

最後に見た彼女の笑顔は

何処か奈美先輩と被って見えた。

―○●○―

夏が明け、既に新学期、二学期だ。

始業式も終え、駒王学園は

九月のイベント、体育祭の準備

へと入っていた。

この時期になると垢抜ける

学生たちも増えてきて

見ている面白いものだ、

夏が明けて別人の様になるものも

いれば、変わらない友人に

安心したりもする。

「久しぶりだなユウスケ

夏休み前と顔つきが

変わったが、この夏に

何かあったのか？」

俺の席に近づいてきたのは

相変わらずパソコンで会話する

新聞部の仲間でクラスメイトの

薄井和義だ。

「ああ、いろいろあったさ

夏休みに出会った人達

に影響受けてな人として

成長したなと思うよ」

「その様子を見るに」

成長したのは心だけでは

無いようでありんすな

体も以前に増して

引き締まってるで

ありんす」

古い言葉使いで話しかけてきたのは

同じく新聞部のクラスメイト

原月詠だ。

「先ほど弟の兵藤一誠も見たが

あの男もまた成長したのか

体が一回りデカくなっておった

何があつたかは詳しく聞かぬが、

起きた変化はいいことばかり

じゃないようじゃな」

そういうと、月詠の視線の先を

確認すると、アジアが

他の女子と雑談しているようだ、

「最近、アジアは遠い目を

する時があるその理由、

おんしなら知ってるんじやろ」

理由は分かるディオドラとの一件だろうな。

最近奴からのプレゼントが沢山家に

送られてきており、玄関を塞いでは

彼女は俺達に謝っていた。

初めてのことで動揺している

のかもしれないな。

俺の視線に気づいたアジアへ手を振った。

それに対して笑みを浮かべるアジアだが、

何処かぎこちない…。

先生の声に促されて入室してきたのは。

『おおおおおおおおおおおおっ！』

歓喜の声が男子から湧き上がる。

登場したのが、「栗毛ツインテールの
相当な美少女だったからだ。

しかし俺は転校生が来たっていう驚きより
その人物の正体の方が驚きだった。

見れば、アーシアも同様で、

ゼノヴィアに至っては目を丸くしてポカン
となるほどだ。

まあ、当たり前か、この子が突然現れたら、
関係を持った者たちは驚きもするだろう！

栗毛の転校生はペコリと頭を下げた後、
にこやかな表情で自己紹介をしてくれる。

首から下げている十字架が輝きを放つ。

「紫藤イリナです。皆さん、

どうぞよろしくお願いします！」

そう、夏前にゼノヴィアと共にエクスカリバー
強奪事件で来日した紫藤イリナその人だった。

ー〇〇ー

「ちよつと来てくれ」

休み時間、男子や女子から質問攻めの

イリナの手を引き、俺、アーシア

ゼノヴィアと転校生を見に来た

イツセーの四人は人気のない

場所へ急いで連れ出した。

紫藤イリナ。俺の幼馴染で、

小さい頃に外国へ引越してしまい。

そこで教会の祝福を受けて、

プロテスタント専属の聖剣使いとなった。

以前墮天使の幹部に教会が保管と管理
をしていたエクスカリバーを強奪され、
その一件でゼノヴィアと共に来日したんだ。

ゼノヴィアは神の真実を知り、
やけくそ気味に悪魔となって日本に残ったが、
イリナはそのまま元の場所へ帰った。

それ以来会っていないかったわけだけど…まさか、
こんな形で再開するとはな…。

三大勢力が協定結んだ後に来たということとは
イリナがここに来た理由って…。

「おひさ〜。ユウスケ君、それにゼノヴィアも！」
ガバツ！

イリナがゼノヴィアに抱き着く。

「ゼノヴィア！元氣そうで良かった！」

立场上複雑だけど、素直にうれしいわ！」

「ああ、久しぶりだね、イリナ

元氣そうで何よりだよ。

イリナが胸に下げた十字架が

チクチクと地味なダメージを

私に与えてくるのは天罰だろうか…」

元聖剣コンビの再会か。

ゼノヴィアも笑みを見せていた。

さてと、何から聞かか。

と、俺が迷っている

ゼノヴィアが切り出す。

「なぜ、ここに？」

おお、シンプルに一気に聞き出せる質問だな。

「ミカエル様の命により使いとして

此処に転校してきたの。詳しくは放課後に。

場所は噂の旧校舎で、ね？」

そんな風にイリナは可愛く
ウインクをしたのだった。

イツセーがリアス先輩にメールで

『紫藤イリナが来たんですけれど、

知ってました?』と送ったら。

『ええ、急に決まったのよ。』

放課後に詳しく紹介するから、

それまで相手をしてあげて頂戴ね。

一応、転校生ということになっているから』
と返ってきた。

なるほど、全て知っているのか。

そりゃ、ここはリアス先輩の根城だ

知らない方がおかしいか。

なら、放課後を待つしかないか。

—●—

「紫藤イリナさん、貴方の来校を歓迎するわ」

放課後の部室。グレモリー眷属全員、アザゼル先生、

ロビン先生、ソーナ会長、奈美先輩が集まり、

イリナを迎え入れていた。

ちなみに冥界での出来事の後から

小猫ちゃんはイツセーに懐いたらしく

イツセーの膝の上が定位置となっていた。

「はい！皆さん！初めましての方もいらっしやれば、

再びお会いした方のほうが多いですね。

紫藤イリナと申します！教会いえ、

天使様の使者として駒王学園にはせ参りました！」

パチパチパチ。皆が拍手を送る。

まあ、話では、天使側からの支援メンバー

として派遣されてきたらしい。

今思えば、ここは悪魔と堕天使しかいなくて、天使はいないからな。

一応、天界のバックアップを受けているんだけどな。

イリナが「主への感謝」とか

「ミカエルさまは偉大で」とか始めたが、皆、苦笑しながらも聞いてあげていた。相変わらず、信仰心が強い娘だが、

俺は一つだけ確認したいことがあった。此処にいる皆は神の死を知っている。

奈美先輩も冥界に行く際に教えていた。

まあ、奈美先輩の場合いるかどうかもわからない存在が死んでいたと知ってもってところだったかな。

だが、イリナの場合は信仰心が

高い分知れば相当なショックを受けるだろうしな。

などと考えているとアザゼル先生がイリナに質問する。

「お前さん、『聖書に記されし神』の

死は知っているんだろう？」

「せ、先生ええええっ！いきなり、

それはいかんでしよう！」

イリナがショックを受けると思い

突っ込むイツセーだが、アザゼル先生は

嘆息するだけだった。

「アホか。此処に来たということは、

そういうのを込みで任務を受けてきたはずだ。

いいか、この周辺の土地は三大勢力の

協力圏内の中でも最大級に重要視されている

場所の一つだ。此処に関係者が来るということは、

ある程度の知識を持って足を踏み入れることになる」

先生の言葉にイリナも頷く。

「もちろんです、墮天使の総督様。

安心して、イツセー君、ユウスケ君、

私は主の消滅は既に認識しているの」

「意外にタフだね。信仰心の厚い

イリナが何のショックも受けずに

ここへ来ているとは」

ゼノヴィアの言葉の後、一拍開けて、

イリナの両目から大量の涙が溢れ出る！

彼女はゼノヴィアに詰め寄りながら

叫んだ。

「ショックに決まっているじゃなあああ！

心の支え！世界の中心！あらゆるものの父が

死んでいたのよおおおっ！

全てを信じて今まで歩いてきた私なものだから、

それはそれは大ショックでミカエル様から

真実を知らされた時、あまりの衝撃で

七日七晩寝込んでしまったわあああっ！

ああああああ、主よ！」

あーあ、テーブルに突っ伏して大号泣

しちやったよ。まあ、熱心な信徒から

したら神の死は衝撃なんてもんじゃ

ないんだろ。家は無宗教だから

そういうのは分からないけど、

アーシアもその事実を知った時は

意識が喪失しかけてたからな。

「わかります」

「わかるよ」

アーシアとゼノヴィアがうんうんと

頷きながらイリナに優しく話しかける。

三人はガシツと抱き合う。

アーシアもゼノヴィアも今でも
神へ祈りを捧げているからな。

神様への感謝は未だに持っていると思う。

「アーシアさん！この間は魔女だなんて

言つてゴメンなさい！ゼノヴィアにも

別れ際に酷いこと言つたわ！

ゴメンなさい！」

イリナの謝罪にアーシアもゼノヴィアも微笑んでいた。

「気にしてません。これからは同じ主を

敬愛する同志、仲良く出来たら幸いです」

「私もだ。あれは破れかぶれだった私も

悪かった。いきなり、悪魔に転生だものな。

でも、こうして再会できてうれしいよ」

『ああ、主よ！』

三人でお祈りしだした。

和解つてことでもいいのかね？

色々と事情もあつたけど、

お互いにわだかまりが

消えそうで俺もうれしいよ。

皆で笑顔が一番だしな。

教会三人娘誕生の瞬間かもしれない。

うち二名が悪魔だけ……。

「ミカエルの使いつてことでもいいんだな？」

アザゼル先生の確認にイリナも頷く。

「はい、アザゼル様。ミカエル様には

ここに天使側の使いが一人もいないことに

悩んでおられました。現地にスタツフが

いないのは問題だ、と」

「ああ、そんなことをミカエルが言っていたな。

ここには天界、冥界の力が働いているわけだが、

実際の現地で動いているのはリアスト

ソーナ・シトリーの眷属と、俺を含めた少数の人員だ。まあ、それだけでも

十分機能しているんだが、ミカエルの野郎、律義な事に天界側からも現地で働く

スタツフがいたほうがいいってんで

わざわざ送ってくると言ってきたのさ。

ただでさえ、天界はお人好しを超えた

レベルのバックアツプ態勢だつーのに。

俺はいらなと言ったんだが、

それではダメだと強引に送ってきたのが

こいつなんだろう」

ため息を吐きながら先生はそう言った。

まあ、それぞれの陣営にも

考えがあるだろうしな

今後、天使の一人や二人は来ても

おかしくないだろうな。

しかし、ここも随分と大所帯になってきたなあ

最初は悪魔が数名だけだったのに。

今じゃ悪魔だけでなく堕天使も教会信者も人間も

普通に入入りして談笑してるんだからな。

人生、何があるかわからんものだな。

リアス先輩も当初は複雑そうだったけど、

「いろいろとタメになりそう」って点と

「名誉ある仕事でもあるわ」と魔王様から

直接ここを任せられた責任感に燃えていた。

イリナはふいに立ち上がると、

祈りのポーズをする。すると、

パアアアアと彼女の体が輝き、

背中からバツと白い翼が生えた!!

おおっ！まるで天使だな！

というか、人間から天使になったのか!?

全員驚くが、先生は顎に手をやりながら、冷静にイリナに訊く。

「紫藤イリナといつたか。」

「お前、天使化したのか？」

「天使化？そんな現象あるんですか？」

「イツセーが先生に訊くと、先生は肩をすくめた。」

「いや、実際には今までなかった。」

倫理的なものは天界と冥界の科学者の

間で話し合われてはいたが……」

考え込むように目を細める先生に

イリナがうなずいた。

「はい。ミカエル様の祝福を受けて、

私は転生天使となりました。

なんでもセラフの方々が悪魔や

墮天使の用いていた技術を転用

してそれを可能にしたと聞きました」

三大勢力の協力態勢は既にそこまで行っているのか

天使は神の消滅で誕生出来なくなったと聞いていたから、

転生天使とはいえこれで天使の数が増えていくのかな。

それより、イリナが天使か。

悪魔、墮天使、天使と、

ここに勢ぞろいしたな。

さらにイリナが続ける。

「四大セラフ、他のセラフメンバーを合わせた

十名の方々は、それぞれ、Aからクイーン、

トランプに倣った配置で『御使フレイブ・セイントい』

と称した配下を十二名作ることにしたのです。

カードでいうキングの役目が主となる天使様となります」

先生がイリナの話に興味を示していた。

この人、技術とか、その手の話が大好きだからな。

「なるほど。『悪魔イーザイル・ピースの駒』の技術か。」

あれと墮天使の人工神器の技術を応用しやがったんだな。つたく、伝えた直後に面白いもん開発するじゃねえか、天界も。悪魔がチェスなら、天界はトランプとはな。まあ、もともとトランプは『切り札』という意味も含んでいる。神が死んだあと、純粋な天使は二度と増える事が出来なくなったからな。そうやって、転生天使を増やすのは

自軍の強化に繋がるか」

『イヴァイル・ピリス悪魔の駒』を天使バージョンで

作り出したのか、技術提供でそういうことも出来るのか
「そのシステムだと、裏でジョーカーなんて

呼ばれる強い者もいそうだな。

十二名も十二使徒に倣った形だ。まったく、
楽しませてくれるぜ、天使長さまもよ」

くくくと先生は楽し気に笑いを漏らしていた。
裏を読むとか好きだよな。この墮天使総督様は。

「それで、イリナはどの札なんだ？」

俺は気になってイリナに訊くと

彼女は胸を張り、自慢げに言う。

「私はAよーふふふ、ミカエル様のエース天使

」として光栄な配置をいただいたのよ！
もう死んでもいい！主はいないけれど、

私はミカエル様のエースとして
生きていけるだけで十分なのよおおおつ」

おおつ、目が爛々と輝いている」

彼女の左手の甲に「A」の文字が！

「あー、新たな人生の糧はミカエルさんか」

俺が嘆息しながら呟くと、

隣でゼノヴィアも応じる。

「うん。自分を見失わないよりはマシさ」

ま、そりゃそうだな。神様の消失で

自分を見失うよりも新たな主の元で
仕事に励んだ方が前へ進めそうだ。

イリナは俺達へ楽し気に告げる。

「さらにミカエル様は悪魔のレーティングゲーム

に異種戦として、『イザイル・ピース悪魔の駒』と

『プレイフ・セイント御使い』のゲームも

将来的に見据えているとおっしゃっていました！

今はまだセラフのみの力ですが、いずれは

セラフ以外の上位天使様達にもこの

システムを与え、悪魔のレーティングゲーム

同様競い合って高めていきたいとおっしゃられて

いましたよ！」

ゲーム!?

悪魔と天使でシステムの対決か。

驚く俺達を尻目に先生は感心していた。

「天使や悪魔の中には上の決定に異を

唱える者も少なくない。長年争い合って

きた仲だ、突然手を取り合えと言えば

不満も出るさ。しかし、考えたな、ミカエル。

そうやって、代理戦争を用意することで

お互いのうっぷんを競技として発散させる。

人間界のワールドカップ、オリンピックみたいなもんだ」

不満を持った者達のガス抜きのために必要なのか、

協力態勢のおかげで各勢力の新政策が必要なのか。

「じゃあ、俺達グレモリー眷属と

天使のゲームシステムが戦うことも

あるんですか？」

イツセーの質問に先生は首をひねる。

「将来的にはそうなるかもな。と言っても、

すぐにじゃない。少なくとも十年…

もしかしたら二十年後だ。ま、

お前らはその頃ちようど新人悪魔
としても良い時期だろうし、
楽しめるだろうさ」

二十年後か……。気の長いことだな

まあ、悪魔も天使も長生きだからな。

「楽しめそうね」

ソーナ会長、クールな口ぶりだけど
乗り気だな。

「面白そうだね」

木場も興味津々だ。

我らが眷属のエース様は楽し気だな。

「きよ、教会は怖いですう……」

ギヤスパーは複雑そうだ。

ああ、教会はヴァンパイアハント

だけは未だ続けているって話だからな。

まだ吸血鬼と和平を結んだわけじゃないようだ。

三大勢力協定後の教会はどの派閥も表向きでは

今まで通りの教えだけど、裏では悪魔や

堕天使と色々と協力して事を

運んでいるって話だ。

それによる新たな悪さが生まれないように

専用の取り締まりチームも組まれたって

聞いたな。

俺らとシトリー眷属もその権限を得ている

らしい。つまり、三大勢力で不審な行動を

している輩を独断で捕縛できるんだ。

できるだけ、その場面に出くわしたくはないな。

せっかく仲良くしようと皆で手を取り始めたのにな……。

可能なら平和が一番だ。

まあ、『御使フレイブ・セイントい』っていつても、

当分のレーティングゲームには影響無い様で良かったな。

今は若手上級悪魔の相手をするだけで精一杯だからな。

「その辺りの話はここまでにしておいて、」

今日は紫藤イリナさんの歓迎会としましょう」
ソーナ会長も笑顔でそう言ってくれる。

イリナも改めて皆を見渡して言った。

「悪魔の皆さん！私、今まで敵視してきましたし、
滅してきました！けれど、ミカエル様が

『これからは仲良くですよ？』と

おっしゃられたので、私も皆さんと仲良く
していきたいと思えます！というか、

本当は個人的にも仲良くしたかったのよ！
教会代表としてがんばりたいです！

よろしくお願い致します！」

複雑な経緯もあるが、まあ、イリナも
駒王学園の仲間入りってことだな。

その後、生徒会のメンバーも合流して、
イリナ歓迎会が行われたのだった。

第74話 「居場所」

イリナが転校してきてから数日が経過。

「はいはい！私、借り物レースに出まーす！」
手を挙げる元気いっぱいイリナ。

既にクラスに溶け込んでいた。

持ち前の明るさのおかげで男女問わず人気が高い。

ちようどクラスはホームルーム中だ。

体育祭で誰が何の競技をするのか

決めているところだった。

…はあ。

俺はというと机に突っ伏して、
ため息をついていた。

実はイリナも家に住むことになったんだ。

夏休みに地上六階、地下三階という豪邸と

化した兵藤家。

オカルト研究部のメンバーの殆どが移り住み、

ついに、イリナまでも住み始めた。

まあ、余裕のスペースがあるから、

一人二人増えても変わりないけどさあ。

家の女性率が上がると、

肩身が狭いことの上ない。

あのイツセーでさえ、

行き場を失う時がある。

そもそも、共通の話題が少ないからな

教会トリオが揃うと話に入りづらいし、

ほぼ部屋に籠ってゲームする毎日だった。

こういう時、女性と付き合った経験のない

自分じゃあの女性陣の中に割って入る

ことも出来ないや。

空しくもゲームのレベルだけが上がっていく。

「ユウスケよ」

ふいに月詠に呼ばれる。

彼女は今、黒板の前に立ち、

体育祭の競技について書き込んでいる

ところだった。

「脇のところが、破れておるぞ」

「え？・嘘」

と、月詠の言うように自身のワイシャツの

脇を見るが。気づいたときにはもう遅い。

俺は脇の確認の為に片手を上げていた。

もちろん、破れてなんかいない。

「よし、決まりじゃな」

俺の名前がチョークで黒板に書き込まれる。

「おい！騙したな、月詠！」

マジでしてやられた。考え込んでいたから

隙だらけだったのか。文句を言うが、

彼女は怪しい笑みを浮かべるだけだった。

「おぬしが行う競技は二人三脚。相方は」

月詠のチョークがとある女子を指す。そこには。

アーシアが気恥ずかしそうに恐る恐る手を上げていた！

「おぬしとアーシアは二人三脚で走ってもらう」

こうして、俺とアーシアは月詠の陰謀により

二人三脚のパートナーに決定したのだった。

ー〇〇〇ー

次の日から学園全体で体育祭の練習等が始まっている。

俺のクラスも体育着に着替えて、男女合同で

グラウンドにて競技の練習をしている。

「勝負よゼノヴィア！」

「望むところだ、イリナ！」

イリナとゼノヴィアはグラウンドで駆けっこしていた。

クラスメイトもやんややんやと両者に応援を送っている。つたく、二人は何やってんだか、つーか、二人とも早すぎるだろお！

陸上部を置き去りにして、グラウンドを爆走してやがる！流石は悪魔と天使だ。これはうちのクラス、女子限定なら優勝できるかもな。

同学年のライバルなんて、

生徒会のシトリー眷属の数名だけだしな。

「お、ユウスケか」

「おお、匙か」

生徒会の噂をしてたら

メジャーやら計測器を持った

匙がやってきた。

「何やってんだ？」

「二人の競争を見てた」

「あの二人は力を隠す気もないな」

呆れる匙。あれ？

匙が右腕に包帯巻いてる。ケガか？

「その包帯どうしたんだ？」

「ん？ああ、これな」

少しだけ包帯を外すと

そこには黒い蛇みたいな痣が

幾重にも腕に現れていた。

「…なんだこれ」

俺が尋ねると匙は答える。

「アザゼル先生に訊いたら、

この間のゲームでイツセーと

やりあったのが原因とか言われたぜ。

どうにも禁手に至った赤龍帝の

神器とラインを繋いだのと、

イツセーの血を吸ったのが俺の

体と神器にも影響を与えたらしい。

手元から離れたラインが得た

赤龍帝の情報も俺に反映されたみたいだ」

「マジかよ凄いなもしかしてやばかったり?」

「いや、悪影響ということはないようだぜ。」

ただ、ちよつと体に出てきているだけだつてさ。

うーん、これとかな」

匙がさらに見せてくれたのは、

腕の一部分にだけ現れている

小さな宝玉みたいなものだった。

これつて、イツセーやヴァーリ、

が持つてるドラゴン神器の宝玉

にそっくりだな。

「お前…呪われてないよな?」

などと聞いてみると、心底嫌な顔をされた。

「お前な、俺の気にしてることを…」

さつき、イツセーにも言われたよ。

ヴリトラつて、あんま良い伝説を

残してないんだぜ?」

匙は気を取り直して改めて訊いてくる。

「そういや、ユウスケは競技、何にでるんだ?」

「俺は二人三脚にアーシアと出る事になったぞ」

「くっ!羨ましい野郎だ!俺はパン食い競争だよ」

へえー、パン食い競争か。それも楽しそうだな。

羨ましがる匙のもとヘメガネの女子が二人登場。

「サジ、何をしているのです。」

テント設営箇所のチェックを

するので、早く来なさい」

「我が生徒会はただでさえ男子が少ない

のですから、働いてくださいな」

ソーナ会長と副会長の真羅先輩だ。

二人が匙を呼んでいる。おおつ、

両者のメガネがキラリと光る。

「は、はい、会長！副会長！」

匙は慌てて、二人の元へ戻っていった。

会長も副会長も厳しそうだ…。

メガネと言え、

冥界で見たアガレス家の次期当主様。

あの人もクールでメガネだった。

メガネをかけた悪魔は淡々としていて、

冷静な人が多いのだろうか？

匙は手を振って、会長と副会長と共に

グラウンドの隅へ向かっていった。

さーて、そろそろ俺もアーシアと練習するかな。

俺はクラスごとに用意された競技用道具から

二人三脚用のひもを取り出した。

「アーシアー！練習しよう！」

「は、はい！」

話していたクラスメイトにぺこりと

頭を下げた後、アーシアはすぐに

俺の元へ駆け寄ってきた。

既に同じクラスの男女がペア組んで

練習してる。うまい奴はうまいけど、

あれは息が合わないと大変そうだな。

ぴったりにくっついてどちらも気恥ずか

しそうだった。

俺とアーシアもぴったりくつつき、

足首にひもを結んだ。

「よし、さっそく行くぞ、アーシアー！」

何度か土を踏んだ後、

俺はアーシアの腰に手を回し、

準備を完了させる。

「は、はい！」

アーシアも恥ずかしそうにしながらも俺の腰に手を回して来た。

うーん、隣のアーシアの髪から良い匂いがしてくる…。

いかんいかん！雑念を振り払わねば！

相手はアーシアだ！自制心自制心！

改めて息を整え、俺とアーシアは

お互いに頷きあつた後、

足を一歩前へ出した。

「せーの、いち、に」

声も出して、働きですが。

がくん！足を取られ、バランスを崩した！

「うおっ！」

「きやつ」

倒れそうになるアーシアを急いで捕まえて

態勢を直させる！

「…う、うーん。俺がアーシアに

合わせないとダメっぽいなあ」

と、考え込む俺だが、

ふと視線をアーシアに移すと顔を紅潮させて、

何かに耐えている様子だった。

はて？何だ？うん？なんだか、

右手がとても柔らかいものを

つて、俺、アーシアのおっぱいを揉んでいる

うううううう！

そ、そうか、さつき、アーシアが倒れそうに

なった時とつきに掴んだ場所がおっぱいだったのか！

俺はアーシアのおっぱいから

急いで手を離す！

「ゴ、ゴメンー！わざとじゃないんだ！」

謝る俺！なんてことだよ！

アーシアを大切にしたいと言ってきたながら、おっぱいを揉んじまうとは！

「…だ、大丈夫です。平気です。」

で、でも、触る時は一言言ってからにしてください…。

私も心の準備が必要ですから…。」

一言言えば良いのかよ!?

いや、違う！そうじゃない！

わざとじゃないんだあああ！

自己嫌悪ばかりじゃだめだ、

再び息を整えて言った。

「と、とりあえず、再開しよう」

「は、はい。でもすみません。」

私、運動はそこまで得意じゃないから
気落ちするアーシア。

「いいって、要は息を合わせること。」

コンビネーションだ」

「ゴ、コンビネーション?。」

可愛く首をかしげるアーシア。

「そう、コンビネーション。一緒に声を出して、

一歩一歩動かしてみようぜ。走るのはまず

それに慣れてからだ」

「はい」

そうさ。俺のトレーニングと一緒にだ。

ひとつひとつこなししていけばいい。

やっていけば必ず糧になる。

俺が今まで学んだことだ。

「じゃあ、もう一度行くぞー！」

「はいー！」

ー〇〇ー

その日の夜。

イツセー、アーシア、ゼノヴィア、イリナ
と共にオカルト研究部に顔を出す。

先に来ていたリアス先輩含めた

他のメンバーは顔をしかめていた。

何事だ？

「どうかしたんですか？」

俺が訊くと、リアス先輩が言う。

「ええ、若手悪魔のレーティングゲーム戦、
私たちの次の相手が決まったの」

へえ。もう決まったのか。

グレモリー対シトリーの一戦を

皮切りに例の六家でゲームがおこなわれている。

グレモリーもシトリー以外の家とも戦う

ことになっていた。

などと特に驚きもせずに思っていたが、

次のリアス先輩の一言で俺も部員の様子を
理解する。

「次の相手はディオドラ・アスタロトよ」

「っ！」

悪い冗談としか思えない対戦決定に

俺は言葉を失っていた。

ー〇〇ー

「おいつちにーさんしー、おいつちにーさんしー」

その日も俺とアーシアは早朝から体操着で

二人三脚の練習をしていた。

ゼノヴィアも付き添いで来てくれていた。
最近、ずっと朝練してる。

場所は体育館裏だ。練習を始めた日に比べれば
大分マシになった。競歩ぐらいの走りはできる
ようになったからな。

「あうーいち、にーはううーさん、しー！」

アーシアは俺に遅れないようにするため、
必死でついてきていた。やっぱ、日々の練習だよな。
コツコツと努力を重ねることで何事も
一歩一歩進めるのさ。

「よし。だいぶいい感じだね。じゃあ、

一度本番のように走ってみようか」

ゼノヴィアが俺達のひもを直しながら言う。

ふいにアーシアへ視線を移すと

少しだけ表情を陰らせていた。

「……………」

うん？アーシア、少し思い詰めてる？

…まあ、次の俺達の相手がディオドラだな。

決定してから、アーシアはさらに悩んでいる
様子だった。

「アーシア、思っていること、言ってみな」

俺の提案にアーシアは当惑した

表情になるが、少し考えたのち言った。

「…あのとき、彼を救ったこと、

後悔してません」

アーシアは教会にいたころ、傷ついた悪魔を救った。

それによつて、異端扱いを受けて、居場所を失い、
悲しい思いをしたんだ。

その助けた悪魔こそディオドラだった。

どういう経緯であいつがそこにいて、

アーシアと出会ったか、そこまではわからない。

けど、救ったのはアーシアが優しかったからだ。それを俺は責めない。誰にも責めさせはしない。アーシアは良い子なんだから。ディオドラを救ったことで、アーシアの人生は百八十度変わってしまったけど、今こうして俺達と楽しく暮らしているのは確かだ。でも、思ってしまう。

聖女としての暮らしが今でも続いていたら、アーシアは今より幸せだっただろうか？と。

俺達と一緒にいるのは、聖女だった頃よりも楽しいのか？と。

そして、俺はふと時折考えてしまう。

いまなら可能なことを。ミカエルさんに頼めば、アーシアは再び聖女として教会に戻れるんじゃないか？って。

いや、神様の遺した『システム』とやらにアーシアの力が影響を出しそうだから、教会本部とその関連施設、天界管理区に戻れないかもしれない。

けれど、昔の暮らしに近い状態に戻れるかもしれないんだ。

それを切り出したとき、

アーシアはどちらを選ぶのか？

俺は怖くて訊けなかった。

アーシアを失いたくなかったから。

俺のわがままだ。もし、俺がリアス先輩に言えば、それは実行できてしまうかもしれない。

ただ、今の生活からアーシアがいなくなるなんて想像したくないんだよな…。

「…ユウスケさん？」

アーシアが俺の顔を覗き込む。

「難しい顔をしてました。」

…悲しい表情にも見えて…」

「…なあ、アーシア。もし、

元の生活に戻れるとしたらどうする？」

「っ」

目を見開いて驚くアーシア。

いつまでも考えてるだけじゃいやだからな。

失うかもしれないのに。でも、アーシア

の幸せを願っちまうから、俺は…。

心中でドキドキして、覚悟も決めた。

握りしめる手が激しく汗ばむ。

だけど、アーシアの答えは。

「戻りません」

笑顔だった。迷いが無いほどの。

「以前にもユウスケさんに訊きました。

『ユウスケさんのそばにずっと一緒に

いていいですか？』ってユウスケさんは

『いいよ』って言ってくれました」

フェニックス家との一戦前、

確かにそのやり取りをした。

「私、ここが好きです。この駒王学園も、

オカルト研究部も好きです。リアス先輩も、

朱乃さんも、先生も、イツセーさんも、

木場さんも、ゼノヴィアさんも、小猫ちゃんも、

ギヤスパークくんも、イリナさんも、奈美さんも

好きです。そしてユウスケさんも

ユウスケさんのご両親も大好きです。

ここで始めた新しい生活は私にとって、

本当に大切に大事で、大好きなことばかりで

とっても素敵なんです。

毎日楽しくて。皆と暮らせるのが

凄く幸せなんです」

アーシア…。

俺は…本当にバカだ。

この子が今の生活を楽しんでいるのは分かっていたじゃないか。なのに、

どうして俺は…アホなことを訊いてしまったんだ！

俺はアーシアの肩を抱き、言う。

「そうさ、俺とアーシアはずっと一緒だ！

嫁にも出しません！アーシア、

ディオドラのことも深く考えるな。

経緯はどうあれ、嫌なら嫌と言えればいいんだぞ？」

俺の言葉にアーシアはしばしきよとんとするが、

すぐに笑みを見せてくれる。

「はい」

と、今度はゼノヴィアが思い詰めた表情で言う。

「…アーシア、改めてだけど、もう一度謝りたい。

初めて会った時、アーシアに暴言を吐いてしまった。

いまでも後悔しているんだ。…アーシアは私と

仲良くしてくれると、と、友達だと…」

あのゼノヴィアが珍しく顔を紅潮させているぞ。

アーシアはゼノヴィアの手を取り、満面の笑みで言う。

「はい。私とゼノヴィアさんはお友達です」

真正面からの屈託のない一言。

ゼノヴィアは少し涙ぐんでいた。

「ありがとう。ありがとう、アーシア」

うんうん。なんだか、俺まで感動して

泣き出しそうだよ。本当、

アーシアちゃんはやさしい子ですよ。

「うううううっ！良い話よねえ…」

感動の場面で聞こえてくる嗚咽。

声の方向を見てみればイリナだった。

「イリナか。お前も来てたのか？」

「うう、ええ、ゼノヴィアに誘われてね…。」

早朝の駒王学園も良いものだぞーって。

で、来てみたら、美しい友情が見れるんだもの。

これも主とミカエル様のお導きだわ…。」

感動している様子のイリナは天に向かって

祈りを捧げていた

「そーいや、お前、部活はどうしたんだ？」

俺が訊くとイリナは涙を拭い、

気持ち切り替えて満面の笑みで

親指を立てる。

「私は自分でクラブを作ることにしたの！」

「へー、自分でクラブを立ち上げたのか。

で、名前と内容は？」

イリナは胸を張り、堂々と宣言した。

「うふふ、聞いて驚きなさい！」

その名も『紫藤イリナの愛の救済クラブ』よ！

内容は簡単！学園で困っている人達を無償え

助けるの！ああ、信仰心の厚い私は主の為、

ミカエル様の為、罪深い異教徒共の為に

愛を振りまくのよ！」

妙なポーズで天に祈りを捧げていた。

おお、目が爛々と輝いている。

というか、凄いネーミングセンスだな。

名前だけを訊くと依頼したくないクラブだな

「…いや、うん。まあ、頑張ってる」

適当に相槌を打つ俺。

イリナは胸をどんと叩いて言う。

「任せなさい！もちろん、

オカルト研究部や新聞部が

ピンチの時はお助けするわ！

今回はリアスさんのお願いで

オカルト研究部の部活対抗

レースの練習を助けるの！」

はあ、体育祭はオカ研に参加するのか。

「ちなみに訊くけど、部員の数は？」

「まだ私だけよ！おかげで同好会レベルに

留まっただけで、正式な活動と運営資金は

規制されているわ。まずはソーナ会長を

説得するところからスタートね」

そりや大変だ。

あの生徒会は会長はもちろん

副会長も厳しいからな。

正式に通るには時間がかかりそうだ。

「とりあえずはオカルト研究部に

籍を置くことになっているの」

それって、オカルト研究部の

部員じゃねえのか？

いや、あえて突っ込まないぞ、

ま、気分を取り直して、俺は言う。

「それはともかく、練習再開だ」

ゼノヴィアもイリナも二人三脚に参加して、

練習は再開されたのだった。

「ふうー。ちよつと、つ、疲れましたねえ」

アーシアが体操着をパタパタさせながら

息を吐いていた。まあ、確かに朝から

けっこうな量走ったからな。

グラウンドの隅にある体育倉庫。

俺達は練習で使ったライン引き

等を片付けるため、そこに入っていた。

俺は走るのに慣れているせいか、

体力的にはこのぐらいは

ぜんぜん平気だが、

走る相方のアーシアを気遣いながらだったから、

精神的に気疲れしているところもあった。

まだ早めの登校時間内だから、

俺は新聞部の部室で記事をまとめて

から教室向かおうかね。

ライン引きを置くに置いて、

さて帰ろうとした時だった。

ガラガラ。ピシヤツ。

扉が閉まる音！

…見ればゼノヴィアが後ろ手に倉庫の扉を閉めていた。

何事だ：？アーシアもゼノヴィアの行動に

可愛く首をかしげていた。

「どうしたんですか？ゼノヴィアさん」

訊ねるアーシア。するとゼノヴィアは

真剣な表情で語りだす。

「アーシア、私は聞いたんだ。

私達と同じ年の女の子はだいたい

今ぐらいの時期に乳繰り合うらしいぞ」

……。

…は？ いま、なんていった？

俺はゼノヴィアの突然の発言に耳を疑った。

「ち、ちちくりあう？」

アーシアが怪訝そうに聞き返す。

ゼノヴィアはハッキリとした口調で言う。

「男に胸を弄ばれることだ」

ッ！

こ、この娘は！突然に何の話をしてるんだ！？

鍵を閉めてまで！？ しかもアーシアの前で！

相変わらず意味が分からん！

意味も勘違いして覚えてるしな！

「む、む、む、胸を…っ！」

アーシアが顔を最大までに赤く染め上げて、
声も上ずっていた！

「ゼノヴィア！いきなりふざけた話をするな！」

「ユウスケ、少し黙っていてくれ。」

まずはアーシアと話す。君の出番はそれからだ。
すまないが、倉庫の隅でウォーミングアップ
しておいてくれ。これから激闘になる」

出番!? 激闘!? 俺をイッセーと同類とでも
思ってるのか?! いや、イッセーだってここまで
しないぞ！

ゼノヴィアのトークは止まらない。

「クラス女子の中には彼氏に毎日の様に
バストを揉まれている者もいる。」

私はいろいろと調べたんだ」
頑張るところ間違ってるだろ！

「アーシア。私達もそろそろ体験

してもいいではないかな？」

ゼノヴィアはアーシアの肩に手を置き、

真剣な面持ちで言う。

何故だ！突然、深刻な話になってないか!?

「あ、あうううっ！そ、そんな、

きゅ、急に言われても…」

アーシアも困惑していた！

それが当然のリアクションだよな！

「大丈夫だ。初めは多少くすぐったいらしいが、
慣れてくればとても良いものらしいぞ。
きっと乳練り合えば自然と二人三脚も
上手にこなせる」

話の着地点そこおおお!?

「…コ、コンビネーションは

そこから生まれるのでしょうか…」

アーシアが説得されてやがる！

嘘だろ！それでいいのか、アーシア！

迷うアーシアにゼノヴィアは笑顔で答える。

「アーシア、私達は友達だ」

「はい」

「乳繰り合いも一緒にしよう。」

二人なら怖くない」

「…は、はい？そ、そうなのですか…？」

マズイ！話がまとまっていく！

アーシアをそんな話で怪獣しないでくれえええ！

ゼノヴィアがこちらに顔を向ける。

「では、しようか。私のほうは子作りも兼ねるよ」

「ちよつと待て！いきなり、こんな場所でおかしいだろ」

狼狽する俺をよそにゼノヴィアは体操着の上を脱ぎ捨てる

ぷるん。

ブラに包まれても確かな存在を見せる

ゼノヴィアのおっぱいが目の前に！

見事な脱ぎっぷりに俺はたじろぐ。

この娘には恥じらいはないのか!?

ゼノヴィアはさらにブラのホックを外した。

ぶるっ！

抑えるものが無くなった為か、

見事なものが勢いよく現れる。

「誰にも触らせたことのない胸だ

よく覚えておくといい」

この娘は前にも奈美先輩の実家がある

古々椰子村でも子作りしようと言われたしな

度々暴走するんだよな。

「ほら、アーシアも」

ゼノヴィアがアーシアへ迫る！

何でアーシアの体操着を掴んで
脱がそうとしているの！

「で、でも…やっぱり、まだ心の準備が…」
ゼノヴィアはもじもじするアーシアから
強引に体操着を取り払い
可愛らしい下着姿になってしまう。

「大丈夫だよ、アーシア。不安なら、
先に私がユウスケとしようか？」

私とユウスケの行為を見ていれば
どういうものか理解できて、
勇気と準備が整うはずだ」

「え…ええ、えつと」

「ふふふ、冗談だよ。やっぱり、
あとから来た者に先を越される
のは嫌だと思っていた」

「そ、そういう意味ではなくて…」
「今日がチャンスだよ。奈美先輩と
部長の目がない今がユウスケと
乳繰り合えるチャンスは
今しかないかもしれないんだ」

「っ」

その一言にアーシアが黙り込んでしまった！
うう、会話が可笑しな方向に行き過ぎていて、
ついていけないぞ！

パチン

ゼノヴィアの手が静かに伸びて、
アーシアのブラのホックを外した。

「あっ」

露わになった胸元をアーシアは顔を真っ赤にして
手で隠す！そう！普通の女の子はこういう反応！
ゼノヴィアさん！君も見習ってくれよ！

そのゼノヴィアが俺の手を引き
トンと体を押した！

「おわっ！」

倒される俺。舞うホコリの中、
上半身だけ起こした俺は自分が
体育用マットの上に倒されたことに気づく！
がばっ！

何かが覆い被さる！ぶるぶるっ！
眼前で揺れるおっぱい！

ゼノヴィアが俺の上に
覆い被さってきていた！

ゼノヴィアが俺の左手を取り、
自身の胸に当てる！

柔らかい感触が俺の手に伝わる！
沈んでいく俺の指。

「ユウスケさん…な、奈美先輩には
負けたくないから…」

隣に座ったアーシアが俺の右手を取って、
自分の胸元へ。

ふにゅんっ！

ゼノヴィアほどは無いが、
確かな存在感のアーシアの
おっぱいに俺の指が！

「…うん…」

甘い吐息がゼノヴィアの口から漏れる。

一瞬で俺の脳が麻痺した！

「やはり、自分で触ると、
男が触ってくるのでは違うね、
さて、ユウスケ、私とアーシア、
どちらも準備OKだ。もみしだくとい
いと、ゼノヴィアが言うが、

アーシアは守るべき存在だ！

そんな感情をぶつける相手ではない！

だが、俺だつて男だ、こんな場面用意されたら

俺はあああ！

ガラガラ。

突然開かれる扉。

「…なかなか出てこないから

心配して来てみれば、な、な、

な、な、なんてことを！」

入ってきたのはイリナだった！

マズイ！上半身裸の女子が二人

に男が一人！言い訳ができない状態だ！

イリナのことだ、「不潔！」とか

クリスチャン的な発言をしそうだが。

「べ、ベットでしなさい！」

「ここは不潔で衛生的によくないわ！」

不潔の基準が違った。

嫌そうじゃないだろ！

第75話「記録」

その日の放課後、本来なら部活の時間だが、リアス先輩に呼ばれて今日はオカルト研究部へと訪れていた。体育倉庫での事もあり

今日一日はアジアとゼノヴィアとまともに会話も出来なかった。さらにはイリナにまで警戒されてしまった。その様子に月詠から怪訝な視線を向けられてしまった。

「皆、集まってくれたわね」

眷属全員集まったことを確認すると、リアス先輩が記録メディアを取りだした。

「若手悪魔の試合を記録したものよ。」

私達とシトリー眷属のものもあるわ」

戦いの記録。そう、今日は皆で

試合のチェックをするために

俺は部屋に呼ばれていた。

巨大なモニターが用意される。

先生が巨大モニターの前に立って言う。

「お前ら以外にも若手たちはゲームをした。

大王バアル家と魔王アスモデウスの

グラシヤラボラス家、大公アガレス家と

魔王ベルゼブブのアスタロト家、

それぞれがお前らの対決後に試合をした。

それを記録した映像だ。ライバルの試合だから、

よく見ておくようにな」

『はい』

先生の言葉に皆が真剣に頷いた。

ロビン先生が再生の準備を行っている。

実際、他の若手悪魔達の戦いようは
気になっていた。俺達と同期な様な
ものだからな。

それは皆も同様で、すでにモニター
へ視線を向けていた。

「まずはバル家とグラシヤラボラス家の試合ね」
ロビン先生が最初のデータを説明してくれる。
サイラオーグさんとあのヤンキーの勝負か！
記録映像が開始され、数時間が経過する。
自分たち以外の試合を見られるわくわく感は
視聴していてすぐに取り払われた。
部員全員の顔つきは真剣そのものになり、
視線は険しいものになっている。
俺達が目にしたのは圧倒的なまでの

『力』だった。

あのヤンキーとサイラオーグさんの一騎打ち。
一方的にヤンキーが追い込まれていた。

眷属同士の戦いは既に終わっている。

どちらも強力な眷属を有していて、
それぞれの戦いは白熱したが、

問題は『王』同士の戦いだ。

最後の最後で駒を全てなくしたヤンキー

ゼファードルがサイラオーグさんを挑発した。

サシで勝負しろ、と。サイラオーグさんは

それにためらうことなく乗った。

ヤンキーが繰り出すあらゆる攻撃が

サイラオーグさんに弾き返される。

まともにヒットしても何事も

無かったようにサイラオーグさんは

ヤンキーに反撃していた。

自分の攻撃が通じないことで、

ヤンキーは次第に焦りの色を濃くし、
冷静さを欠いていた。

そこへサイラオーグさんの拳が放り込まれる！
幾重にも張り巡らされた防御術式も紙のごとく
打ち破られて、サイラオーグさんの一撃が
ヤンキーの腹部に鋭く撃ち込まれていく。

その一撃は映像越しでも辺り一帯の空気を
震えさせるほどの威力だと見て取れた。

ヤンキーはその場に崩れ落ちて、
腹部を押さええながら悶絶していた。

サイラオーグさんは打撃と蹴り
のみで戦っていた。

その戦い様は紅のクウガと同じだった。
だが、その打撃の威力が桁違いだった。

ヤンキーがよけたりしたとき、
その一発が建物に突き刺さって半壊したり、

周囲の景色が吹き飛んでいた。
俺にはあんな威力は出せないだろう。

あんな攻撃：一度でも食らえば致命傷だろう。
「…凶兇と呼ばれ、忌み嫌われたグラシヤラボラス

の新しい次期当主候補がまるで相手になっていない。
ここまでのものか、サイラオーグ・バアル」

木場もあまりの光景に目を細めていた。
その表情は険しい。木場は俺達

眷属のエースだ。彼なりに思うところが
あるのだろう。サイラオーグさんのスピードも

相当なものだったからだ。俺も何が起きたか
視認できなかった時もあった。

木場も時折その速度に目を奪われていた。
木場は映像だけで追いきれたのか？

徒手空拳だけでこれだ、同じ戦闘スタイルの

イツセーも画面をじつと見つめていた。その腕にはブルブルと震えたギヤスパークがつかまっており、膝の上には小猫ちゃんが座っており絵面としてはおかしいけどな。

「リアスとサイラオーグ、おまえらは『王』なのにタイマン張りすぎだ基本、『王』ってのは動かなくても駒を進軍させて敵を撃破していきやいいんだからよ。

ゲームでは『王』が取られたら終りなんだぞ。バアル家の血筋は血気盛んなのかね」
先生は嘆息しながら言う。

リアス先輩は恥ずかしそうに顔を赤くしていた。確かにリアス先輩は前に出てくるよな。

「そーいや、あのヤンキー悪魔って、どのぐらい強いんですか？」

イツセーの問いにリアス先輩あ答える。

「今回の六家限定にいなければ決して弱くないわ。

といつても、前次期当主が事故で亡くなっているから、彼は代理ということに参加しているわけだけれど…」

朱乃さんが続く。

「若手同士の対決前にゲーム運営委員会が出した

ランキングでは、一位がバアル、二位がアガレス、

三位がグレモリー、四位がアスタロト、

五位がシトリー、六位がグラシヤラボラス

でしたわ。『王』と眷属を含み平均で比べた

強さランクです。それぞれ、一度手合わせして、

一部結果が覆ってしまいましたけれど」

「しかし、このサイラオーグ・バアルだけは

抜きんでているということですか、リアス先輩」

俺の言葉にリアス先輩がうなずく。

「ええ、彼は怪物よ。『ゲームに本格参戦

すれば短期間で上がってくるのでは？」と
言われているわ。逆を言えば彼を倒せば、
私達の名は一気に上がる」
なるほど、一位と目され、
実力もその通りの相手を
倒せば上がるよな…。

「もしかして、ライザーより強い？」
イツセーが恐る恐るリアス先輩に尋ねる。
まあ、ライザーは不死身だが、
倒せないわけじゃない。

それでも強敵なのは間違いないだろうが、
「両者がやってみないとわからないけれど、
私の鼻肩目で見てもサイラオーグの方が
強い気がするわ」

そんなに強いのか、まあ、あの映像を
見た後なら納得できるな。

「ま、グラフを見せてやるよ。
各勢力に配られているものだ」
アザゼル先生が術を発動して、
宙に立体映像的なグラフを展開させた。
そこにはリアス先輩や生徒会長、
サイラオーグさん等、六名の若手悪魔
の顔が出現し、その下に各パラメータ
みたいなものが動き出して、上へ伸びていく。
ご丁寧にグラフは日本語だった。
グラフはパワー、テクニック、サポート、
ウィザード。これはゲームのタイプ別だな。
あと一個は『キング』と表示されている。

『王』としての資質かな。

リアス先輩、会長、アガレスの姉さんは
そこそこ高めだが、会長の方が現時点では

リアス先輩よりも上か。サイラオーグさんがかなり高めだ。ヤンキーが一番低い。

リアス先輩のパラメータはウィザード

魔力が一番伸びて、パワーもそこそこ伸びた。

あとのテクニック、サポートは真ん中よりも

ちよい上の平均的な位置だった。

そしてサイラオーグさん。

サポートとウィザードは若手の中で一番低いけど、

問題はパワーだ。ぐんぐんとグラフは伸び続けており、

部屋の天井にまで達していた。なんて異常な

伸び方だ！極端すぎるが、それだけパワーが

凄まじいってことか！

サイラオーグさんを除く五名の中で一番パワーの

高いゼファードルの数倍はあるぞ！

「ゼファードルとのタイマンでもサイラオーグは

本気を出しやしなかった」

と先生は言う。あれで本気じゃなかったのか。

パワーだけを見てもバランス・ブレイカー禁手のイツセーを

超えているだろう。

「やはり、天才なんですか。サイラオーグさんは」

どう見ても体術に秀でているよな。

所が俺の言葉を先生は首を横に振って否定する。

「いや、サイラオーグはバアル家始まって以来の

才能が無かった純血悪魔だ。バアル家に伝わる

特色のひとつ、滅びの力を得られなかった。

滅びの力を強く手に入れたのは従兄弟の

グレモリー兄妹だったのさ」

そんなことが…。

リアス先輩のお母さんはバアル家の出だ。

滅びの力はリアス先輩とサーゼクス様に

受け継がれ、本来の血筋、サイラオーグさん

には伝わらなかったのか。皮肉なもんだな。

「でも若手最強なんですよね？」

「家の才能を引き継ぐ純血悪魔が

本来しないものをしてな、

天才どもを追い抜いたのさ」

「本来しないもの？」

先生は真剣な面持ちで俺達に言う。

「凄まじいまでの修行だよ。

サイラオーグは、尋常じゃない修練

の果てに力を得た稀有な純血悪魔だ。

あいつには己の体しかなかった。

それを愚直なまでに鍛え上げたのさ」

アザゼル先生が話してくれたことは

衝撃的だった。俺は上級悪魔、

特に純血の悪魔は皆才能に溢れている

者達だと思っていたからだ。

リアス先輩は才能に恵まれていた。

サイラオーグさんは才能に恵まれなかった。

サイラオーグさんの試合を表情は複雑そうな

ものだった。

先生は俺達に語り掛けるように続ける。

「才能の無い者が次期当主に選出される。

それがどれほどの偉業か。敗北の屈辱と

勝利の喜び、地の底と天上の差を知って

いる者は例外なく本物だ。ま、

サイラオーグの場合、それ以外にも

強さの秘密はあるんだがな」

試合の映像が終わった。

サイラオーグさん、バル家勝利だ。

最終的にはグラシヤラボラスのヤンキー

が物陰に隠れ、怯えた様子で自ら敗北を

宣言することで戦いが終わった。

縮こまり怯え泣き崩れるヤンキー。

それをサイラオーグさんは特に何も

感じる様子もなく、その場を後にしていく。

ヤンキーの情けない姿を笑い飛ばすことも

出来なかった。映像越しでも伝わる圧倒的な

迫力に俺達全員も気圧されていたからだ。

勝つための執念みたいなものを感じた。

サイラオーグさんのあの表情は何事にも

妥協せず向かっていく男のそれだった。

あの姿は、匙が俺達へ向かってきた時と

姿がかぶった……。夢に向かつて、

ひたすらなまでに突き進む覚悟を持った

戦いっていうものか、そう感じた。

映像が終わり、しんと静まり返る

室内で先生は言う。

「先に言っておくがお前ら、

デオドラと戦ったら、

その次はサイラオーグだぞ」

「っーそれは本当ですか!」

俺は驚き聞くが、先生はうなずくだけだ。

リアス先輩も怪訝そうに先生へ訊く。

「少し早いのではなくて?」

グラシヤラボラスのゼファードルと

先にやるものだと思っていたわ」

「奴はもうダメだ」

先生の言葉にリアス先輩や皆、

訝し気な表情になる。

「ゼファードルはサイラオーグとの

戦いで心身に恐怖を刻み込まれたんだよ。

もう、奴は戦えん。サイラオーグは

ゼファードルの心、精神まで断ってしまつたのさ。だから、残りのメンバーで戦うことになる。若手同士のゲーム、グラシヤラボラス家はここまでだ」
っ！

俺の目に試合後も恐怖に打ち震えている映像のゼファードルが映る。

このヤンキーはこの時点で。

精神を断つ…。そうか、さつきリアス先輩がライザーよりも強いかもしれないと言つたのはそれか。不死身でも精神が疲弊すれば復活は出来なくなる。

「おまえらも十分に気を付けておけ。

あいつは対戦者の精神も断つほどの気迫で向かってくるぞ。あいつは

本気で魔王になろうとしているからな。

そこに一切の妥協も躊躇もない」

先生の忠言は心にしみるな。ああ、絶対に油断は出来ない！

せつかく、ルークの力も使える様になつたんだから皆でサイラオーグさんを必ず倒そう！

リアス先輩は深呼吸を一つした後、改めて言う。

「まずは目先の試合ね。今度戦うアスタロトの映像も研究の為にこのあと見るわよ。

対戦相手の大公家の次期当主シーグヴァイラ・

アガレスを倒したって話だもの」

「大公が負けた!?」

ヤンキー悪魔と対峙していたあの

メガネの女性悪魔が負けたのか。

あそこの眷属もかなり強そうに

感じたのだがな…。

それを倒したディオドラは

何者なんだ…。

「私達を苦しめたソーナ達は金星、

先ほど朱乃が話したランクで二位

のアガレスを打ち破ったアスタロト

は大金星という結果ね。悔しいけれど、

所詮対決前のランキングはデータから

算出した予想にすぎないわ。いぎ、

ゲームが始まれば何が起こるか

わからない。それがレーティングゲーム」

と、リアス先輩は言う。

俺達以外も苦戦していたってことか。

夏で思い知ったが、ゲームは何が

起こるかわからないものだったからな。

「けれど、アガレスが負けるなんてね」

言いながらリアス先輩が次の記録映像を

再生させようとしたときだった。

パアアアアア。

部屋の片隅で一人分の転移用

魔方陣が展開した。

何事だ！誰かがここに飛んでくるのか？

見覚えのない魔方陣の紋様だ。

「アスタロト」

朱乃さんがぼそりと呟いた。そして、

一瞬の閃光の後、部屋の片隅に

現れたのは爽やかな笑顔を浮かべる

優男だった。

そいつは開口一番に言う。

「ごきげんよう、ディオドラ・アスタロト
です。アジアに会いに来ました」

部室のテーブルにはリアス先輩とディオドラ、顧問としてアザゼル先生も座っていた。

朱乃さんがディオドラにお茶を淹れ、リアス先輩の傍らに待機する。

俺達他の眷属は部室の片隅にて状況を見守っていた。

なんか、ライザーがここに訪れた時を思い出すな。

あの時もこんな感じだった。上級悪魔と下級悪魔の差だよな。ライザーの時と違うのは、

今回はリアス先輩ではなくアジアってことだ。

当のアシアは俺の隣で困惑した表情をしていた。

不安げなアジアの手を無言で握ってやると、

俺の手を握り返してきた。緊張が俺にも伝わってくる

リアス先輩は悪いようにしないさ。それにな、

アシア。何が起こつても俺がアシアを

必ず守ってやるから安心してくれ。

いざとなつたらクウガに変身してでも

拒否してやるさ。…実際、そんなことを

上級悪魔相手にやったら、問題だろうけど、

どうせ、一度それでイツセーがリアス先輩

の婚約を解消させている。

俺がもう一度ぐらいやってやるさ。

そんな俺の覚悟を知らないディオドラは

優しい気な笑みを浮かべながらリアス先輩に言う。

「リアスさん。単刀直入に言います。

『僧侶』のトレードをお願いしたいのです」

『トレード』、『王』同士で駒となる

眷属を交換できるレーティングゲームの

システムだ。同じ駒同士なら可能だと

レイヴェルに聞いたな。

『僧侶』つまり、アシアかギヤスパ

のことだ。

「いやん！僕のことですか!？」

ギヤスパーが身を守るようにするが、
イツセーがすぐに頭をはたく。

「なわけないだろう」

ギヤスパーもずいぶん遅くなったもんだ。

少し前なら「ヒイイイツ！ぼ、僕の

ことですかああ!？」って悲鳴を上げて

段ボール箱の中に逃げたんじやないか？

ギヤスパーも冥界での修行の成果が

出てるわけだ。ちなみにニンニクの

克服修業は継続中だ。

たまにニンニク臭かったりするが

それはご愛嬌ってね。

…で、ディオドラが欲しい『僧侶』は

アーシアのことだろう。『僧侶』と

耳にした瞬間から、アーシアは俺の手を

強く握ってきた。『嫌だ』って主張だと感じた。

「僕が望むリアスさんの眷属は

『僧侶』アーシア・アルジエント」

ディオドラは躊躇いなく言い放ち、

アーシアの方へ視線を向けた、

その笑みは爽やかなもんだ。

チツ！やっぱり、狙いはアーシアか！

というか、トレードでアーシアを手に入れるとか

それはさすがに酷いんじゃないか！

求婚した相手だろうに！

「こちらが用意するのは」

自分の下僕が載っているであろうカタログらしき

ものを出そうとしたディオドラへリアス先輩は

間髪入れず言う。

「だと思っただわ。けれど、ごめんなさい。

その下僕カタログみたいなものを見る前に
言っておいた方がいいと思っただから先に言うわ。
私はトレードをする気はないの。

それはあなたの『僧侶』と釣り合わないとか
そういうことではなくて、単純にアジアを
手放したくないから。私の大事な

眷属悪魔だもの」

真正面からリアス先輩が言ってくれた！

「それは能力？それとも彼女自身が魅力だから？」

しかし、デイオドラは淡々と訊いてくる。

この野郎無駄なんだから、さつさとあきらめて帰れよ！
そこへリアス先輩は最高の答えを聞かせてくれる！

「両方よ。私は、彼女を妹の様に思っているわ」

「部長さんっ！」

アジアは口元に手をやり、グリーンンの瞳を
潤ませていた。リアス先輩が『妹』と

言ってくれたことが心底嬉しかったんだと思う。

「一緒に生活している仲だもの。情が深くなつて、
手放したくないって理由はダメなのかしら？」

私は十分だと思っただけれど。それに求婚
した女性をトレードで手に入れようという
のもどうなのかしらね。そういう風に私を
介してアジアを手に入れようとするのは
解せないわ、デイオドラ。貴方、求婚の
意味を理解しているのかしら？」

迫力のある笑顔で問い返すリアス先輩。
最大限配慮しての言動だったが、

キレてるのは傍から見ても理解できる！

デイオドラは笑みを浮かべたままだ。

それが逆に不気味だった。

「分かりました。今日はこれで帰ります
けれど、僕は諦めません」

ディオドラは立ち上がり、俺達、いや、
アーシアの元へ近寄ってくる。

当惑しているアーシアの前に立つと、
その場で跪き、手を取ろうとした。

「アーシア。僕は君を愛しているよ。

大丈夫、運命は僕たちを裏切らない。

この世の全てが僕達の間を否定

しても僕はそれを乗り越えてみせるよ」

わけのわからないことを抜かして、

奴はアーシアの手の甲にキスをしようと。
プチン

俺の中で何かが切れた。

がしっ。

気が付いたら、俺はディオドラの
肩を掴んでキスを制止させていた。

ディオドラは爽やかな笑みを

浮かべながら言う。

「話してくれないか？」

薄汚い者に触られるのはちよつとね？」

っ！この野郎！笑顔で言いやがったな！

「上は君を高く評価しているようだが

僕は違う。今までのデータは全て見たが

君は弱く僕の敵にはなりえない

姿を変え特性を変えなければ

力も満足に発揮できず、

その力もお粗末だ。

今までは戦えてきただろうが

所詮、人間が生み出した存在

いや、君は未完成品だったね

悪魔としても半端な君が僕に
触れて言い訳がないだろう？」

そうか、それがお前の本性かよ！
ぶちぎれそうになったが。

パチッ。

アーシアのビンタがディオドラの
頬に炸裂していた。アーシアは
俺に抱きつき、叫ぶように言った。

「そんなことを言わないでください！」

：アーシアがビンタをかますとは
思わなかった。けど、すっきりしたぜ！

ディオドラの頬はビンタで赤くなっていた。
それでも笑みを止めない。

ここで笑みを続けると怖いぐらいだ…。

「なるほど、わかったよ。

では、こうしようかな。

次のゲーム、僕はクウガである

兵藤祐介を倒そう。そうしたら、

アーシアは僕の愛に応えて欲し」

「お前に負けるわけねえだろッ」

俺はつい面と向かって言い切った。

だが、これでいい、奴を倒せばいいだけだ。

「クウガ、兵藤祐介。次のゲームで

僕は君を倒すよ」

「ディオドラ・アスタロト、

お前が半端といったクウガの力、

存分に見せてやるぜ！」

睨み合う俺とディオドラ。

アーシアをこいつなんか

渡してたまるかよっ！

そのとき、先生のケータイが鳴った。

いくつかの応答のあと、先生は俺達に告げる。

「リアス、ディオドラ、ちょうどいい。

ゲームの日取りが決まったぞ。五日後だ」

その日はそれで終わり、

ディオドラは帰っていった。

二度と来るな！塩撒け塩！

俺は新たな決意の元、

ゲームへの気合を入れる。

後日、魔王を通じた正式なゲーム通知が

俺達の元に届いたのだった。

第76話「忠告」

「次の戦いがもう決まったのね」

深夜の悪魔稼業。

奈美先輩の依頼で駒王町

にある不思議な会談の取材から
バイクで帰りの途中である。

「ええ、デイオドラって奴と

今度戦う事になったんですよ」

キキイイイ！

突然の気配に俺は急ブレーキを
掛けてバイクを止める。

「急にどうしたの!?ユウスケ」

「どうやら客の様ですね」

後ろの奈美先輩にそう答えると

闇夜から姿を現した男！

「久しぶりだな兵藤祐介」

「東城！何故お前がここに！」

そう、俺達の前に現れたのは

白いワイシャツ姿の東城だった。

俺はバイクを降りて奈美先輩を

かばうように立つ。

此奴がいるってことは他のメンバーも
居る可能性がある！警戒は必要だな。

「変身！」

俺は警戒を最大限にまで高めて、
その場でクウガに変身する。

「新たな姿に覚醒したそうだな。

これで俺と同じ四つのフォームが
揃ったか、うれしいよ」

不敵な笑みを浮かべ、

変身した俺を見ても構えることもなく
ただ、立ったままの東城。

「どうしたんだ？今までのお前なら
すぐにでも戦おうとしたはずだろ？」

「今日は戦いに来たわけじゃないからな」

「じゃあ、何の用だ？」

「今度、レーティングゲームをするそうだな？」

相手はアスタロト家の次期当主」

何でそれを知ってるんだ！

いや、こいつはテロリストの

一員だからな。独自の情報網

があるのかもな…。

「それがどうした？」

「気をつけたほうがいいぞ」

怪訝に思う俺は警戒したまま

東城に訊く。

「…どういうことだ？」

しかし、東城は肩をすくめるだけだった。

「記録映像を見たのだろうか？」

アスタロト家と大公の姫との闘いの記録を」

東城の言う通り、デイオドラが帰った後、

俺達グレモリー眷属はデイオドラ対アガレス

の記録映像を見た。

試合はデイオドラの勝利だったが。

デイオドラの実力は圧倒的だった。

彼だけがゲームの途中から異常な

ほどの力を見せて、アガレス家の

眷属と『王』を撃破した。

デイオドラの眷属は奴をサポート

するだけで、『王』自ら、

孤軍奮闘、一騎当千の様相を見せた

ディオドラは魔力の類の秀でた
ウィザードタイプだ。

映像ではリアス先輩を超える
魔力のパワーでアガレスを
追いつめていた。

これを見てほぼ全員が訝し気に思っていた。

ゲーム自体ではなく、ディオドラのみに

注目していた。あからさまに

急にパワーアップしたからだ。

いや、俺が言えたことではないが

奴の場合は違うだろう。それまでは

大公の姉ちやんが追いつめてた。

実力をギリギリまで隠していた？

何の為に？隠す必要はあっただろうか？

アザゼル先生はこの試合を生で観戦

していたらしいが、事前に得ていた

データでのディオドラの実力から

察してもあまりに急激なパワーアップ

に疑問を感じたようだ。

リアス先輩も同様の意見だった。

「ディオドラはあそこまで強い

悪魔ではなかったと」と。

二人の意見が一致していた。

急激なパワーアップをする前の

ディオドラでも十分強かった。

リアス先輩よりも魔力が

多少劣る上級悪魔だった。

けど、試合の途中からディオドラ

は皆が驚くほどの力を発揮していた。

短時間でここまで強くなれるのか？と。

皆が疑問を持っていた。

しかし、この試合も途中から

『王』同士の対決となった。

若手上級悪魔は皆、序盤、

ミドルゲーム中盤は戦術合戦を行い。

エンドゲーム終盤は直接対決しないと

いけない脅迫概念でもあるのだろうか？

ゲームを観戦している各勢力のお偉いさん

方は新鮮な試合ばかりで楽しんでるらしい

がな…。特に『王』対決はなんだかんだで

否応なしに盛り上がるようだ。

「まあ、俺からの意見では上級悪魔は

納得しないだろうがな。君が知って

警戒するだけでもまいぶ、違うだろう」

前に戦った時は戦闘狂という言葉が

似あっていたのに。今日は大分冷静だな。

変身すると性格が変わるのか？

「話はそれだけさ俺は帰るとしよう」

東城はそれだけ言うと、

この場を後にしようとする。

「待てよそれだけを言うために

わざわざ俺に会いに来たのかよ？」

訊ねる俺に東城は笑って見せる。

「近くを寄ったからな。

忠告しようと思つてな

君が俺以外にやられるのは

嫌だからな。君を倒すのは

俺なんだからな」

それだけ言うと東城は闇へ消えていった。

本当に何なんだよ…。

「そう、東城とヴァーリがね」

オカルト研究部の部室に来た俺は
悪魔稼業の終了後にリアス先輩に

先ほどの事を話したのだが、

どうやらイツセーの方でも

ヴァーリーと美猴がやってきたようだ。

目的は東城と同じく忠告だったみたいだ。

リアス先輩は顎に手をやり、

何かを考えている様子だった。

「……この町に寄ったのなら、

感知してもいいのだけれど……。

まったく彼らを察知できないわ。

気配を断つ術？仙術の類の応用かしら？

それとも黒歌の空間結界術で？」

リアス先輩は小さな魔方陣を宙に展開すると、

何やら連絡している様子だった。

「一応、今回の件をお兄様

とアザゼルに報告するわ」

報告を終えるとリアス先輩は苦笑する。

「ディオドラの件もよく注意しましょう。

二人の言葉を信じているわけではないけれど、

警戒する必要があるわ。さて、帰りましょうか？」

「はい」

そして、俺達は帰路につく。

俺はバイクで先に帰り、

イツセーとリアス先輩は

自転車と一緒に帰っている。

皆はもう家で休んでいるだろうな。

オカルト研究部の部員も木場と

ギヤスパー以外は俺の家で同居している。

木場とギヤスパ―は家の近くのマンションで一緒に住んでいるって話だ。

ギヤスパ―もやっと旧校舎から外に出られるようになったしな奴も成長したってことか。

一応、木場の家は何かあった時、すぐに俺の家へ集まれる距離にあるらしい。キキイイイツ！

その時、俺は不思議な気配を感じバイクを止める。

停車した場所はこの町の墓地の前だった。

「何だ？今の気配は？」

よりもよって墓地からかよ」

俺は警戒しながらも墓地の中へと進んでいく。

今の気配、敵意は無かったが亡霊の類か？まだそっちの方がいいか墓地の中を進んでいくと

一つの墓地の前に一人の男が佇んでいた。その男は全身を白のスーツに身を包んでいた。

「やあ、君も墓参りかい」

男性が振り返り、こちらに話しかけてくる。どうやら生きた人間のようにだった。

「いや、ちよつと気になることがあつたのでここに来ただけですな」

「そうですか、なら早く帰った方が良いですよ。今日は良くない風が吹いているので」

人間の様だけど不思議な

雰囲気がある人だな。

「それでは兵藤祐介さん

またお会いしましょう」

っ！何故俺の名前を!?

俺が振り返ると…。

『…クウガ…』

—●—

俺は気が付くと墓地の中に立っていた。

「あれ、俺なんでこんなところにいるんだ？」

おかしい、ここに来た記憶がないぞ？

いや、確か墓地に何か感じて…。

ダメだ思い出せない。

此処に来た理由は

思い出せないが帰る

途中だったのは確かか、

考えても答えが出ないなら

ここはおとなしく帰るとしようか。

家に帰ると何故かリアス先輩と朱乃さん

がイツセーを取り合って喧嘩していた。

俺はイツセーや他の女性陣と一緒に

俺の自室に避難することにした。

「で？リアス先輩達はいつもの

事だけど、皆の格好は何なんだ？」

俺と一緒に悪魔式人生ゲームをする皆、

奈美先輩、アシア、ゼノヴィア、

小猫ちゃんがゲームキャラの巫女服の姿に

コスプレしていた。

「ああ、朱乃先輩がコスプレ

するといふのでな私達もという

事だ似合っているだろう。ユウスケ？」

ゼノヴィアがポーズを決めて

こちらに訪ねてくる。

「ああ、皆似合ってるぞ」

「まあ、当然ね」

自信満々に胸を張る奈美先輩。

「にしても勝負は五日後か。

すぐだね」

人生ゲームの駒を進めながらゼノヴィアが言う。

この人生ゲームは悪魔の人生を進めるゲーム

下級悪魔から始め、中級、上級、

最上級と出世して行って、最終的に

魔王となればクリアだ。

実際の冥界はこんな簡単に出世は出来ないが、

冥界でも人間界同様ポピュラーな遊びらしい。

隣から激しい音が響くけど

魔法戦に突入しないよな。

俺がそんな心配をしていると、

そこへノックと共に一人

入室してくる。イリナだった。

「わー、家に帰ってきたら

リアスさんと朱乃さんが

大喧嘩しているんだもん。

驚いちゃったわ。あ！

人生ゲーム？私も参加させて〜」

離れたところにある教会に

用事を済ませに行っていた

イリナはすぐに人生ゲーム

に飛びついていた。

「悪魔式？わー、興味あるわ！

転生天使たる私が悪魔の人生を

疑似体験なんて複雑怪奇で
楽しめそう！」

この子はなんでも楽しめそうだな。
くすつ。

アーシアが小さく笑う。

「ん？どうした、アーシア？」

俺が訊くとアーシアは微笑みながら言う。

「はい。楽しいなって思っつて」

「ああ、楽しいな。」

改めてどうしたんだよ？」

「ユウスケさん、私、今の

生活大好きです。皆のことも大好きです」

「分かっているよ。今度のレーティングゲーム、

気にすんなよ。アーシアも俺達も普通に

仕事をすればいいだけなんだから」

俺が励ますとゼノヴィアもうなずく。

「そうだぞ、アーシア。私と

アーシアは友達だ。アーシア

へ危害を加える者はお前の剣となつて

倒してあげよう」

頼もしいというか、なんというか。

ゼノヴィアなりの激励なのだろう。

「アーシア、ゲームをちやちやつと

終わらせて体育祭で二人三脚の

一位を取ろうぜ！」

「はい」

満面の笑みのアーシア。

そうさ、アーシアは俺達を守る！

ディオドラなんかの元に

行かせるものかよ！

そこへ扉が開かれてリアス先輩

が入室してくる。

「突然で悪いけれど」

『?』

皆を見渡すリアス先輩に

俺達は怪訝な面持ちだった。

「取材が入ったわ。冥界の

テレビ番組に私たちが出るの。

若手悪魔特集で出演よ」

『……………』

俺を含め、全員が間の抜けた

表情だったが。

「「「テレビ番組イイイツツ!」「」」

驚きの叫びが兵藤家に響き渡った!

—●—

ア—シ—ア s i d e

私、ア—シ—ア・アルジエント

はとてもびっくりしました。

テレビ出演だそうです。

ユウスケさんのお家に

住むようになって、

もう数か月が過ぎました。

学校にも通えるようになって、

月詠さんを始め、スイツチさんや

クラスの皆さんとも仲良く

できました。

部長さんも朱乃さんも

イツセーさんも木場さんも

小猫ちゃんもギヤスパ—君も

私にとっても良くしてくれます。

ゼノヴィアさんは同い年のお友達です。
イリナさんともお友達になれました。

ユウスエさんのお父さんも
お母さんもおやさしくて、

日本での生活は新鮮で楽しいこと
ばかりです。夏休みには冥界
にも行きました。

教会にいた頃には出来なかった
ことが今の生活を彩ってくれます。

ディオドラさんからの求婚……
とても驚きました。

男性にそのようなことを
されたのは初めてだったので
どうしていいかわかりませんでした。

でも、ユウスケさんは

「そばにいていい」と言ってくれました。
私にはそれだけで十分です。

ユウスケさんのおそばにいられるなら、
もうそれだけで十分。

私はあの人と笑って過ごせる
だけで幸せだから。

主よ、どうか、ずっとユウスケさんと
一緒にいさせてください。

ユウスケさんの隣にずっとさせてください。
そ、それともう一つだけお願いを
お聞きください。

も、もし、望めるのなら、
次の求婚はあの人から。

わがままだと思っています。
でも、大好きだから

少しだけ夢を見てしまいます。

この夢を抱いていけるだけで、
私は本当に幸せです。
主よ、どうかこれからも
大好きなあの人との生活を
見守ってください。
トクン。
夢を願うアジアが握る
緑色の手裏剣がわずかに
熱を帯びる。

—●—

アザゼル side

「通信で悪いな、サーゼクス。

例のグラシヤラボラス家

次期当主の不審死とディオドラ

・アスタロトの魔力増大に

ついてだが…」

『やはり、繋がったか。悪魔は

未だ問題を抱えるばかりだ』

「まだ確証は得ないが、ヴァーリと東城

の忠告を信じるならば、ディオドラは。

例の案、やるしかないかもな。…つたく、

身内のイベントでただでさえテンション

低いのによ」

『聞いているよ。グリゴリの幹部が

また一人婚姻したようだな』

「…どいつもこいつも焦りやがって。

何よりも俺に黙って裏で他勢力の女

とよろしくやっていたなんて…。

クソ、そろそろ独り身は俺だけか！」

『ふふふ、アザゼルも』

身を固めたらどうだ?』

「嫌だね。俺は趣味に生きる男だ。

…お、女なんていくらでもいる!」

『そうだな。そういうことに』

しておこう。さて、例の案、

そちらを信じるぞ』

「ああ、任せてくれ。

あいつらには少々

悪いことをするがな」

—○●○—

???
side

「あれがこの世界の

プロトクウガですか。

青いですね。だが、それが良い」

どこかの建物の屋上で

墓地にいた白服の男が

時計の様な物を眺めながら呟く。

「この度仕掛けた種が

どう芽吹くか楽しみですね」

男はそれだけ言うと

闇の中に消えていった。

第77話「収録」

「テレビの取材かあ〜」

あの夜、リアス先輩のもとへ
グレイフィアさんから連絡が入った。

用件は「冥界のテレビ局からの出演オファー」

だった。しかもグレモリー眷属全員の出演オファー。

リアス先輩達を含む若手悪魔のレーティングゲーム
は冥界全土に放送された。もともと魔王の家族とし
て有名だったリアス先輩達は、あのゲームでさらに

冥界での知名度を上げたらしい。というか以前、
冥界で発売されている雑誌はどんなのがあるのか
調べていた時に「リアス・グレモリー姫特集！」

なんてものが記事として掲載されているのを
見たことあるな。リアス先輩が冥界で人気者

だということは夏休みの時に知ったが、
ゲームを経てさらに人気が出たという事が、
パシントツ！

急に誰かに背中を叩かれる。

後ろを見れば奈美先輩が立っていた。

「なーにしてるのよ。ユウスケ」

「いや、今度のテレビ取材について

考えていたんです」

「ふふ、心配しなくても

大丈夫よ冥界の事はリアスに

任せておけばいいのよ」

そういつて、微笑む奈美先輩。

「ねえ、ユウスケ、アーシアの事、

そこまで背負わなくてもいいのよ?」

奈美先輩はやさしげな口調で続ける。

「貴方、ここ最近、アーシア以上に

ディオドラを意識しているわよ。
もちろん、皆も気にしていたけれど、
それでも貴方はそれ以上にアーシア
を心配しているように見えるわ。
アーシアを悪魔の道に引き込んだこと、
自分のせいだとまだ思ってる？」
…奈美先輩は凄いな。俺の事はお見通しか。
俺は顔をうつむかせうなずいた。

「…はい。でも、アーシアは今の生活に
満足していると答えてくれたんですが、
俺もそれでいいと思ってます。
…でも。それでも俺は」
ぎゅっ…。

奈美先輩は俺を優しく抱きしめてくれて、
俺に優しく言ってくれる。

「ユウスケや私はもちろんオカルト研究部の
皆とあの子を幸せにしましょう。でも、
貴方も幸せにならないとダメよ」

「…奈美先輩…」
奈美先輩の言葉に俺は男泣きしてしまう。
そうだよな。俺達でアーシアを幸せにしよう
皆笑顔で毎日過ごせば、それが幸せになるんだから。

「奈美先輩、俺、皆で楽しく暮らす
為にも頑張ります」
俺の決意に奈美先輩は微笑む。

「そのいきよ、ユウスケ！」

—●—

なんやかんやで収録日当日。
俺達眷属悪魔は専用の魔方陣で冥界へと飛ぶ。

この間行つたばかりで、こんなに早くこの地に戻つてくることになるなんてな。到着したのは都市部にある大きなビルの地下。転移用魔方陣のスペースが設けられた場所で、到着するなり、待機していたスタッフの皆さんに温かく迎え入れてもらった。

「お待ちしておりました。リアス・グレモリー様。

そして、眷属の皆さま。さあ、こちらへどうぞ」

プロデューサーに連れられて、

エレベーターに乗って上層階へ。

ビル内、人間界とあまり変わらないが

魔力で動く装置や小道具があつたりなど

細かい差異があつたりするがな。

すると、廊下の先から見知った人が

十人ぐらい引き連れて歩いてくる。

「サイラオーグ。貴方も来ていたのね」

やってきたのはバアル家の次期当主

サイラオーグさんだった。

貴族服を肩に大胆に羽織り、

ワイルドな様子は変わらないな。

素人目から見ても一切隙が見当たらないな。

常に臨戦態勢ということか？

すぐ後ろに控えている金髪ポニーテール

の女性はサイラオーグさんの『女王』だ。

「リアスか。そっちもインタビュ収録か」

「ええ。サイラオーグはもう終わったの？」

「これからだ。おそらくリアス達とは

別のスタジオだろう。試合、見たぞ」

サイラオーグさんの一言にリアス先輩

は顔を多少しかめた。

「お互い、新人丸出し、

素人臭さが抜けないものだな」
サイラオーグさんは苦笑する。
彼はリアス先輩を励ましてくれたのかな？
その視線が俺達兄弟へと向けられる。

「どんなに強大な駒があっても

カタにはまれば負ける。相手は
一瞬の隙を狙って全力で来るわ
けだからな。とりわけ神器は
未知の部分が多い。何が起こり、
何を起こされるかわからない。
いや、それを言うなら君の所の
クウガも同じようなものか。
だが、ゲームは相性も大事だ。
お前らとソーナ・シトリーの
戦いは俺も改めて学ばせて
もらった。だが」

ポンポンつとサイラオーグさんが
俺とイツセーの肩を叩く。

「お前達とは理屈無しのパワー
勝負をしたいものだよ」
っ。

サイラオーグさんはそれだけ言って
去っていく。：軽く肩を叩かれたが、
ただそれだけのことなのに凄
重みを感じた気がする。

若手ナンバーワンに期待されているのか？
だが、今の俺達じゃ二人で立ち向かって
やっと対等に戦えるかどうかだろう。
イツセーも俺と同じことを感じたのか
サイラオーグさんをじつと見つめている
いつか俺達もあの人と…。

サイラオーグさんとの挨拶後、一度、楽屋に通され、そこに俺達は荷物を置いた。アザゼル先生は他の番組に出演らしいのでついては来ていない。

眷属ではないイリナは家でお留守番だ。今回は俺達グレモリー眷属のみ。

その後、スタジオに案内され、中に通される。

まだ準備中で、局のスタッフ達が作業をしていた。

先に来ていたインタビュアーの女性が

リアス先輩に挨拶をする。

「お初にお目にかかります。

冥界第一放送の局アナをしているものです」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

リアス先輩も笑顔で握手に応じた。

「早速ですが、打ち合わせを」

と、リアス先輩とスタッフ、局アナ交えて番組の打ち合わせを始めた。

スタジオには観客用の椅子も大量に用意されていた。

観客ありで放送されると思うと、なんだか緊張してきたな。

いくらリアス先輩がメインとはいえ、

俺達も本番はこのスタジオに
いるんだからな…。

「…ぼ、ぼ、ぼぼぼぼ、僕、

帰りたいですううう…！」

イツセーの背中でするぶる震えているギヤスパー。引きこもりにテレビ出演は酷なものな、よくここまでこれたよ。

我慢だぞギヤスパー。

「眷属悪魔の皆さまにもいくつか

インタビュ어가いくと思いますが、あまり緊張せずに」

スタッフの方が声をかけてくれる。

「えーと、木場祐斗さんと姫島朱乃さんはいらつしゃいますか?」

「あ、僕です。僕が木場祐斗」

「私が姫島朱乃ですわ」

木場と朱乃さんが呼ばれ、

二人とも手を上げる。

「お二人には質問がそこそこいくと思います。

お二人とも、人気上昇中ですから」

「マジっすか!」

イツセーが驚きの声を上げると、

スタッフはうなづく。まあ、納得だよな。

「ええ、木場さんは女性ファンが、

姫島さんには男性ファンが増えて

きているのですよ」

イケメンと美女だからな。

そりや、人気が出てもおかしくない。

そういえば、この間のシトリー戦が冥界全土に

放送されて、木場と朱乃さんに人気がでたわけか。

「えっと、もう二方、兵藤祐介さんと

兵藤一誠さんは?」

「あ、俺です」

「俺が祐介の方です」

俺はそこまで活躍しなかったが、

人気があつたのかね?

期待はしてしまうな。

しかし、スタッフさんは首をかしげる。

「…えっと、貴方達は…」

いや、誰かわからないのかよ!?

「えっと、俺がクウガの兵藤祐介で」

「俺が兵藤一誠です。一応、赤龍帝で…」

俺達がおそろおそろ言うのと、
スタツフが手をポンとした。

「あつー！貴方達がーいやー、変身した姿が

印象的で素の兵藤さん達がわかりませんでした」

確かにあの試合は短期決戦だった上に

ほとんど、変身してたしな。

俺達の素の姿が印象薄くなるのは当然か。

「お二人には別のスタジオで収録も

あります。何せ、『乳龍帝』と『空我』として

有名になつてますから」

「乳龍帝えええええっ!?!」

「はあ、空我かあ」

イツセーの二つ名もある意味お似合いだが、

クウガを漢字にして『空我』か面白い二つ名だな。

スタツフは喜々として続ける。

「子供に凄く人気になつているんですよ。

一誠さんは子供達からは「おっぱいドラゴン」と

呼ばれているそうですよ。シトリー戦で

おっぱいおっぱい叫んでいたでしょう？

あれが冥界の全お茶の間に流れまして。

それを見た子供たちに大ヒットしているんです」

マジか！あの姿が全お茶の間に!?!

悪夢だぜ…。なによりもそれが大ヒットとか

意味わからんだろ。冥界の子供の感性はわからんな。

いや、クレームが殺到するよりかはましか。

「では、兵藤さん達は別のスタジオへ。

ご案内します」

スタツフに専用の台本を渡された俺達は、

別のスタジオに移動した。

さて、俺達に何が待ち受けているのかね？

「ふうー、ようやく終わった」

収録後、俺達は楽屋でぐったりしていた。皆、緊張していたのは確かで楽屋に着くなり壁にもたれたり、テーブルに突っ伏していたりしていた。

番組は終始リアス先輩への質問だった。

シトリー戦はどうだったか？

これからどうするのか？

注目しているのか？その手の質問ばかりだった。リアス先輩笑顔で淡々と答え、高貴な振る舞いを忘れなかった。番組をお家の人も見るだろうから、変なところは見せられない。

リアス先輩はグレモリー家の次期当主としてかっこいい姿をお客さんにも見せていた。

その後、木場に質問がいくと

会場は黄色い歓声が響いた。

女の子からの人気はやばかった。

朱乃さんのときも男性のファンが

「朱乃さまー」って叫んでいた。

そしてイツセーの時は子供達から

ちちりゅーてー！」「おっぱいドラゴン」

って声を掛けられていた。

俺も「くうがー！」「クウガー」って声を

掛けられたけど声的に子供だけじゃ

無かった気がしたがな人気があるようだった。

俺達が変身した姿は着ぐるみみたいなの

感覚で見られているのかもな。

まあ、別のスタジオで撮影したあれは

そういう意図があるんだろうな。

「ところでユウスケさん、

別のスタジオで何を取っていたのですか？」
アーシアが訊いてくる。

「内緒だよ。スタッフの人にも本放送
まではできるだけ身内にも教えないで
くれていいわれたからな」

「なら、放送を楽しみにしています」
アーシアも楽し気に期待してくれている
様子だった。さて帰ろうかと皆で席を
立とうとした時だった。楽屋のドアが
ノックされ、入ってくる者がいる
それは、髪を縦ロールにしている
女の子だった。たしかあの子は…。

「イツセー様はいらっしやいますか？」

「レイヴェル・フェニックスか。」

どうしてここに？」

そうだ、ライザーの妹、

レイヴェル・フェニックスか

イツセーと視線があつたレイヴェルは

一瞬。パアつと顔が輝いたように見えたが、
すぐに不機嫌な表情に変わる。

手に持っていたバスケットを

イツセーに突き出す。

「こ、これ！ケーキですわ！この局に

次兄の番組があるものですからついでです！」

素直じゃないねえ、俺はニヤニヤしながら

二人の様子を見ている。

「これ、お前が作ったのか？」

「え、ええ！当然ですわ！」

ケーキだけは自信がありますのよ！

そ、それにケーキをご馳走すると

約束しましたし！」

「ありがとう。でもさ、お茶の
約束の時でも良かったのに」

「ぶ、無粋な事はしませんわ。」

アスタロト家との一戦が控えて
いるのでしょうか？お時間は取らせ
ませんわよ。ただ、ケーキだけでも
思っただけです。あ、ありがたく
思ってくださいな！」

強引なのか、謙虚なのかわからんな。
レイヴェルは用事も終えたとばかりに
そそくさと帰ろうとするが。

「ちよつと待てー！木場ー！」

イツセーはレイヴェルを引き留めて、
木場に小型のケーキ用ナイフを創ってもらおう。
バスケットのケーキを少しだけ切って、
そのまま口に運ぶ。

「うまいよ、レイヴェル。ありがとう、
家でもゆつくり食べさせてもらうから。
ハハハ、ほら、次に会えるのはいつか
分からないし、感想と礼を今言おうかな
ってさ。お茶も今度ちゃんと別にするから。
俺でよければだけどな」

イツセーがそう言うと、レイヴェルは
目を潤ませ、顔を最大級に紅潮させていた。
「…イツセー様、今度の試合、応援します！」

バツ！レイヴェル俺達に一礼したあと、
その場を早足に去っていく。
遺された俺達というと、

眉をしかめ、瞑目するリアス先輩。

そして、雰囲気怖い朱乃さん

小猫ちゃんがイツセーを睨んでいた。

他のメンツはかかわってはいけないと
じつとしていた。

こうして取材も終わり、ディオドラ
との一戦が間近に迫っていた。

余談だが、後日テレビ局から別撮りした
俺達の映像が届いたが、中身を確認して
驚いた。まさか、ここまでの物になるとは…。

俺達はリアス先輩にどう切り出すか
悩むことになったのであった。

—●—

「ふうう」

俺は家の地下一階にある大浴場の脱衣所で
湯上りにコーヒー牛乳を飲んでいた。

いやー、うまいな。やはり風呂上りは
牛乳が一番だな。

しかし、自宅の地下に大浴場かよ。

未だに信じられないよな夏休み中に
大改築された兵藤家。地上六階、

地下三階の大豪邸だしな。

地下二階にはプールもあるし。

女性陣も気が向いたら泳いでるようだし、
まじでどこのレジャー施設だよ。

まあ、両親も喜んでるし、まあいいのかな。
で、地下一階にある大浴場には

入浴後の飲料として各種牛乳が
冷蔵ケースに入って完備済みだった。

リアス先輩曰く、

「日本の湯上りは各種牛乳よね」

だそうだ。リアス先輩の日本への

こだわりは時折凄まじい。
俺が大浴場を出ると向かいにある
大広間の明かりが点いていた。
地下一階は大浴場の横に大広間があり、
映画観賞会も出来るし、各種トレーニング
も出来た。

扉が開いているので覗いてみると
練習用の剣を振るうゼノヴィアがいた。

トレーニングウェア着込んで、
真剣に剣を振るっている。

そのゼノヴィアが俺の気配に
気づいたのか、こちらに顔を向けた。

「…ユウスケか」

「よう、覗くつもりはなかったんだけどな、

ここの明かりが点いてたから気になってな」
俺はそのまま入室した。

「練習か？」

「うん、ゲームも近いからね」

「でも日が落ちる前にも相当

練習してただろ？」

そう、ゼノヴィアはゲームの日が近づく
につれ、練習量を上げていた。

今日も日中オーバーワーク前と
思えるほど打ち込んでいた、

何かに取り憑かれたような表情で。

手合わせ中、木場もゼノヴィアの気迫に
気圧されている部分もあったが、

焦りすぎているためか、

隙を突かれてカウンター食らうのも多かった。

「私は木場より弱いからな」

ゼノヴィアは真つすぐな瞳で言った。

確かに、出会った当初はゼノヴィアの方が木場よりも強かった。だが、聖魔剣を得てから木場は才能を開花させて強くなった。

「記録映像でもデュランダルを私以上に扱う木場の姿があった。単純に才能という点では木場の方が上なのだろう」

ゼノヴィアは少しだけ目を陰らせた。

おそらく、木場に嫉妬している部分があるのだろう。

「でも、アザゼル先生との実験で

新しい力手に入れたって聞いたけど？」

そう、アザゼル先生がゼノヴィアのパワーアッププランを思いついたと言って色々実験を

していたようで先日それが完成したとアザゼル先生が報告していた。

「ああ、もらったさ。だけど、私はまだコイツを使えないんだ。アザゼルが言うには私の心次第というがな」

ゼノヴィアは懐から剣の柄にも見える

アイテムを取り出す。あれが強化アイテムか。

「なら、ゼノヴィアならすぐに使える様になるさ。俺からすれば、お前も木場もすげえ奴だからさ」

俺の言葉にゼノヴィアが笑う。

「ありがとう。でも、一番許せないのは…」

前の試合で何もできずに敗退した自分自身なんだ。だから、次は油断しないよう

鍛え直している」

…そのことか。

ゼノヴィアはシトリーとの一戦でカウンター型の神器を持つ副会長の真羅先輩に敗北したんだ。パワーではゼノヴィアの方が上だった。けど、

相性、タイミング、それらが悪かったせいか、
真羅先輩にやられてしまっている。

俺も記録映像で見て、テクニクタイプの
恐ろしさを改めて知ることとなった。今ま
でのように単純なパワー勝負だけで決まら
ないところにゲームの奥深さを思い知ったな。

「今回俺も何もできずに自爆しちまったしな
どんなにすごい力を持っていても。

倒す方法はいくらでもあるんだって
思い知ったよ。パワーで決めるのが
一番わかりやすいだろうけどな。

特にレーティングゲームはチーム戦
だ、一人が突出して強くあるよりも、
チームワークを強めて連携攻撃できる
ようにしていかないと上級悪魔には
通用しないだろうしな」

俺は床に座り込み、ため息をつく。
俺は強くなることを目標としていた

今回、ただ強くなるだけじゃ悪魔の中で
上には上がれないんだと実感した。

「ユウスケは魔王になりたいと思うか？」

「いや、なりたいとは思わんけどな

どうしたんだ急に？」

「イツセーが将来、部長の元から

独立するらしい。上を目指すためにな

ユウスケはどうなんだ？」

「独立かそれもいいかもな」

「アーシアはユウスケが独立するなら

付いていくと言っていた」

「そこまで、話していたのか

まあ、そうだなずつち一緒に

いるって約束したからな」

「その時はアジアと共に

私も連れて行ってくれ」

っ

予想外の事だった。

まさか、ゼノヴィアが

そんなこと言うとはな。

「お前は どうして俺についてきたいんだ？」

俺が訊くとゼノヴィアが満面の笑みで答える。

「ユウスケと一緒にいると飽きないからな」

なるほどね。

「OK、まあ、考えておくよ」

「うん、前向きに頼むぞ」

将来の事なんてまだわからないからな

でも、二人と一緒に稼業を立ち上げるのは

面白そうだな。

おれがそんなことを考えていると、

ふいにゼノヴィアが剣を振るうのを止めた。

「なんだか、ユウスケと話していたら

張りつめていたものが良い感じにほぐ

れた気がするよ」

ゼノヴィアが俺に近づき。

チュツ、と俺の頬にキスをした！

なつなななあつ！突然のことに

驚いたあ！急にほっぺにキスカよ！

「お礼だ。君のおかげで吹っ切れたからな

次は口の方がいいのかな。ふふふ、

じゃあ、今日はもう休むよ」

そういうとゼノヴィアは退室していく。

俺はキスされた頬を指することしか出来なかった。

第78話「乱入」

「そろそろ時間ね」

リアス先輩がそう言い、立ち上がる。

決戦日。俺達は深夜にオカルト研究部の部室に集まっていた。

アーシアがシスター服、

ゼノヴィアは例の戦闘服。

他の俺達は駒王学園の夏服だ。

中央に集まり、転送の瞬間を待つ。

相手はディオドラ・アスタロト。

現ベルゼブブを出した御家の次期当主。

どんな力を使ったか知らないが、

絶大な魔力で単騎突入も出来る悪魔。

でも、『王』を取ればゲームは

終わるんだ！こちらにはパワー

なら負けない奴が何人もいるんだ

馬鹿正直に突っ込んでくるなら

返り討ちにするだけさ！

そんなことを考えていると俺の手を

アーシアが不安げに握ってくる。

俺は無言で微笑み、手を握り返す。

そして、魔方阵に光が走り、

転送の時を迎えようとしていた。

「…着いたのか？」

魔方阵のまばゆい輝きから視力が回復し、

目を開けてみると。

そこはただだっ広い場所だった。

等間隔にデカイ柱が立って並んでいる。

下は…石造りになってるな。

周りを見渡せば、後方に巨大な神殿の入り口が！

これはあれだな、ギリシヤのパルテノン神殿
みたいだな。あちらと違って壊れた個所も無く
出来あがったばかりの様相を見せていた。
空が相変わらず白いから雰囲気は合っていないがな。
さてと、ここが今回の陣地ってことか。
今回はどんなルールが適用されるかな？
まだわからないが、俺は出来ることをするだけだな。
おかしいな、いつまで待っても審判役からの
アナウンスが流れないなんて。

「…おかしいわね」

リアス先輩がそう言う。

他のメンバーも怪訝そうにしていた。

運営側でなにかトラブルか？

そんな風に首をかしげて思っていたら。

神殿と逆側に魔方阵が出現する。

まさか、デイオドラ？

この距離からスタートか!?

とにかく構える俺達!

だが、出現した魔方阵は

一つだけじゃなかった!

さらにパツパツと光りだして、

辺り一面、俺達を囲むように

出現していく!

「…アスタロトの紋様じゃない!」

木場が剣を構える。

朱乃さんも手に雷を走らせながら言う。

「…魔方阵全て共通性はありませんわ。ただ」

「全部、悪魔。しかも記憶が確かなら」

リアス先輩が紅いオーラをまといながら、

厳しい目線を辺りに配らせていた。

魔方阵から現れたのは大勢の悪魔たち!

全員、敵意、殺意を漂わせていやがる。
俺達を囲んで激しくにらんでくる！

「魔方陣から察するに『禍の団』カオス・ブリゲード
の旧魔王派に傾倒した者達よ」

ッ!?

リアス先輩の言葉に俺達に衝撃が走る！

マジか！『禍の団』!?

なんでテロリストが俺達若手悪魔の

レーティングゲームに乱入なんかするんだ！

しかも、よりによって俺達の試合に！

「忌々しき偽りの魔王の血縁者、

グレモリー。ここで散ってもらおう」

囲む悪魔の一人がリアス先輩に

挑発的な物言いをする！やっぱり、

旧魔王を支持する悪魔にとってみれば、

現魔王とそれに関与する者達が

目障りなのだろう。

「キャッー」

カシャンッ！

悲鳴！そいて何かが落ちた音が！

この声はアジア！

アジアの方向へ振り向くと、

そこにアジアの姿はない！

地面に緑の忍手裏剣が落ちていた！

「ユウスケさん！」

空からの声！上を見上げると、

そこにはアジアを捕らえた

ディオドラの姿があった！

野郎オオオオオオオオオオツツ！

「やあ、リアス・グレモリー。

そしてクウガ。アジア・アルジエント

はいただくよ」

ふざけたことをさわやかに言いやがって！

「アーシアを放しやがれ！このクソ野郎！

これはどういうことだ！ゲームで

決着を付けるんじゃないやなかつたのか！」

俺の叫びに、ディオドラは初めて

醜悪な笑みを見せた。

「バカじゃないの？ゲームなんてしないさ。

君たちはここで彼ら『禍の団』の

エージェント達に殺されるんだよ。

いくら力のある君たちでもこの数の

上級悪魔と中級悪魔を相手にできや

しないだろう？ハハハハ、死んでくれ。

速やかに散ってくれ」

リアス先輩が宙に浮かぶディオドラを激しく睨む。

「あなた、『禍の団』と通じていたというの？

最低だわ。しかもゲームまで汚すなんて万死に値する！

何よりも私の可愛いアーシアを奪い去ろうと

するなんて…ッ！」

リアス先輩のオーラがいつそう盛り上がる。

キレてる！あたりまえだ！

俺だつてぶちギレ寸前だ！こいつは！

この野郎だけはっ！

「彼らと行動したほうが、僕の好きなことを

好きなだけできそうだと思つたものだからね。

ま、最後のあがきをしていてくれ。

僕はその間にアーシアと契る。

意味はわかるかな？クウガ、僕は

アーシアを自分のものにするよ。

追ってきたかったら、神殿の奥まで

来てごらん。素敵なものが見られるはずだよ」

デイドドラが嘲笑するなか、
ゼノヴィアがイツセーに叫ぶ。

「イツセー、アスカロンを！」

「おう！」

イツセーはすぐに反応し、籠手を出現させて、
先端から剣を取り出し、ゼノヴィアに手渡した。

「アーシアは私の友達だ！」

「お前の好きにはさせせん！」

ゼノヴィアの瞳も怒りで燃え上がっていた。
素早く宙に浮かぶデイドドラに斬りかかろう
とするが。デイドドラの放つ魔力の弾が

ゼノヴィアの体勢を崩してしまふ。

剣はデイドドラに届かなかつたが、

刃から放たれた聖なるオーラの波動が

野郎に向かう！よし！当たれ！

そう思ったが、デイドドラは宙で

舞うように軽く避けやがつた！

クソ！そう簡単には当たらないか！

体勢を崩されたのがマズかつた！

「ユウスケさん！ゼノヴィアさん！イツ」

助けを請うアーシア！だが、「ぶううん」

と空気が打ち震え、空間が歪んでいく。

デイドドラとアーシアの体がぶれていき、

次第に消えていった。

「アーシアアッアアアアアアアッ！」

俺は宙に消えたアーシアに

叫ぶが、返事はもちろん返つてこない！

：クソツ！クソがツ！何がアーシアを守るだツ！

また俺は！俺は！守れなかつたのかツ！

「ユウスケくん！冷静に！」

今は目の前の敵を薙ぎ払うのが先だ！

そのあと、アーシアさんを助けに行こう！」
くずれおちる俺に木場が激を入れてくれる。

：…そうだ。何を諦めてるんだ、俺は！

簡単な事だろ！この場を切り抜けて

ディオドラを倒して、アーシアを

取り戻せばいいだけの話だろ！

ディオドラッ！お前だけは絶対に許さない！

俺達を困う悪魔達。旧魔王の血族のもとに

いたってことか。その辺の内情は詳しく

分からないが、俺達を邪魔するなら倒すまでだ！

悪魔達の手元が怪しく光る！

魔力の弾を一斉に放つつもりか！

中級悪魔だけじゃなく、上級悪魔も

含まれているとディオドラは言っていた。

此奴らが放ってくる魔力の雨を防ぎきれぬのか？

柱の陰に隠れてやり過ぎしながら各個撃破を

狙うべきか？それとも無視して一気に神殿に入るか？

打開策を模索する俺だが、一触即発のなか、

「きゃッ！」と悲鳴があがる。

朱乃さんの声だ！何事だ!?

そちらへ視線を向けるとローブ姿の

隻眼の老人が朱乃さんのスカートを

めくってパンツを覗いていた！

「うーん、良い尻じゃな。」

何よりも若さゆえの張りがたまらんわい」

イツセーがジジイから朱乃さんを引き離す！

「このクソジジイ！どっから

出てきやがった！って、あんたは！」

このジジイには見覚えがあった！

確か、この爺さんは

「オーデインさま…どうしてここへ？」

リアス先輩が驚きながら訊いていた。

爺さんは顎の長い白髭をさすりながら言う。

「うむ。話すと長くなるがのう、簡単に言うと、

『禍の団』にゲームを乗っ取られたんじゃよ」

「やっぱり、ゲーム自体がそうなっていたのか！

「今、運営側お各勢力の面々が協力態勢で迎え

撃つとる。ま、ディオドラ・アスタロトが

裏で旧魔王派の手を引いていたのまでは

判明しとる。先日試合での急激な

パワー向上もオーフィスに『蛇』でも

もらい受けたのじゃろう。だがの、

このままじゃとお主らが危険じゃろ？

救援が必要だったわけじゃ。しかしの、

このゲームフィールドごと、強力な結界に

覆われてのう、そんじよそこらの力の

持ち主では突破も破壊も難しい。

特に破壊は厳しいのう。内部で結界を

張っているものを停止させんとどう

にもならんのじゃよ」

「じゃあ、爺さんはどうやって

入ってきたんだ？」

俺の質問に爺さんが答える。

「ミーミルの泉に片方の目を差し出した時、

わしはこの手の魔術、魔力、その他の術式

に関して詳しくなつてのう。結界に関しても同様」

爺さんは左の隻眼の方を見せる。

そこには水晶らしきものが埋め込まれ、

眼の奥に輝く魔術文字を浮かび上がらせていた。

ぞくつ……。

その水晶の義眼に映し出された文字を見た時、

心身の奥底まで冷えて固まるかのように感じた。

なんて、危険な輝きだ…ッ！

「相手は北欧の主神だ！討ち取れば名が揚がるぞ！」

旧魔王派の連中は一斉に魔力の弾を撃ってくる！

この数はヤバい！

覚悟を決めて俺達が魔力の弾を迎え撃とうとした時、オーデインの爺さんが杖を一度だけトンと地に突く。

ボボボボボンッ！

こちらへ向かってきていた無数の魔力弾が宙で弾けて消滅した！爺さんは「ホッホッホッ」とひげをさすりながら笑う。

流石は神様だな。軽く消し飛ばしちまった！

悪魔達も顔色を変えていた。

上級悪魔も多数いるのにこの余裕か！

「本来ならば、わしの力があれば結界も

打ち破れるはずなんじゃがここに入る

だけで精一杯とは…。はてさて、

相手はどれほどの使い手か。ま、

これをとりあえず渡すよう

アザゼルの小僧から言われてのう。

まったく年寄りを使いに出すとは

あの若造はどうしてくれるものか…」

この爺さん、小言が多いな…。

と、爺さんから渡されたのはグレモリー

眷属の人数分の小型通信機だった。

「ほれ、ここはこのジジイに任せて神殿の

ほうまで走れ。ジジイが戦場に立って

お主らを援護すると言っておるのじゃ。

めっけもんだと思え」

爺さんが杖をこちらに向けると、

俺達の体を薄くオーラが覆う。

「それが神殿までお主らを守ってくれる。

ほれほれ、走れ」

「でも、爺さん！一人で大丈夫なのかよ！」

イツセーが心配を口にするが、

爺さんは愉快そうに笑うだけだ。

「まだ十数年しか生きていない赤ん坊が、

わしを心配するなぞ」

爺さんの左手に槍らしきものが出現した。

「グングニル」

それを悪魔達の方へ一撃繰り出す！刹那。

ブウウウウウウウンツ！

槍から極大のオーラ放出され、

空気を貫くような鋭い音が辺り一面に

響き渡った！

ツ！

俺は我が目を疑った。極太の一撃が作り出した

痕跡は遙か先まで一直線に伸び、深く地を抉っていた！

悪魔達はその一発に消し飛ばされて、

数十人ぐらいなくなっていた！

なんて威力だよ！桁違いなんでものではない！

「なーに、ジジイもたまには運動しないと

体が鈍るんでな。さーて、テロリストの悪魔ども。

全力でかかってくるんじゃないやな。この老いぼれは

想像を絶するほど強いぞい」

この強さでまだ全力じゃないのか、

流石神様だな。

悪魔達はいっそう緊張の色を濃くしていた。

先ほどのように名が揚がるとばかりに

安易に攻めてこようとする輩はいなくなっていたんだ。

「すみませんー……ここをお願いしますー！」

リアス先輩はオーデインの

爺さんに一礼すると俺達に言う。

「神殿まで走るわよ！」

俺達もリアス先輩の言葉に応じて、

神殿の方へ走り出したのだった。

その間にも後方では爺さんと悪魔達の

戦いが再開されていた。

神殿の入り口に入るなり、俺達は耳に爺さんから

譲り受けた通信機器を取り付けた。すると聞き覚

えのある声が聞こえてくる。

『無事か？こちらアザゼルだ。オーデインの

爺さんから渡されたみたいだな』

先生か。

『言いたいこともあるだろうが、まずは聞いてくれ。

このレーティングゲームは「禍の団」カオス・ブリゲード旧魔王派の

悪魔だらけだ。だが、これは事前にこちらも予想

していたことだ。現在、各勢力が協力して旧魔王派

の連中を撃退している』

じゃあ、観戦していた方も襲撃されてヤバイ状況

ってことか。てか、予想してたってどうやって？

『最近、現魔王に関与する者達が不審死するのが

多発していた。裏で動いていたのは「禍の団」カオス・ブリゲード

旧魔王派。グラシャラボラス家の次期当主が

不慮の事故死をしたのも実際は旧魔王派の

連中が手にかけてたってわけだ』

：あのヤンキー悪魔の関係者が「禍の団」カオス・ブリゲード

にやられてたのか。やっぱり、現魔王の

血筋だから、狙われたのか。

『首謀者として拳がっているのは旧ベルゼブブ

ときゆうアスモデウスの子孫だ。俺が倒した

カテレア・レヴィアタンといい、旧魔王派の

連中が抱く現魔王政府への憎悪は大きい。

このゲームにテロを仕掛けることで世界転覆

の前哨戦として、現魔王の関係者を血祭りにあげるつもりだったんだろう。ちょうど、現魔王や各勢力の幹部クラスも来ている。襲撃するのにこれほど都合なものもない。

先日のアスタロト対大公アガレスの一戦から今回の件を予見できる疑惑は生じていたんだよ』

つまり、俺達の試合は最初から旧魔王派に狙われていた。敵のターゲットは現魔王と現魔王の血縁者。リアス先輩。そして、観戦しに来ていた各勢力のボス。

オーデインの爺さんもターゲットの一人だったのだろう。

「では、あのディオドラの魔力が

以前よりも上がったのは？」

と、リアス先輩が訊く。

『オーフィスの力を借りたんだろう。』

ディオドラがそれをゲームで使ったことは

奴らも計算外だったろうな。それゆえ、

グラシヤラボラス家の一件と併せて、

今回のゲームで何かが起こるかもしれない

と予見ができたんだ。しかし、奴らは

作戦を途中で覆さなかった』

あの野郎、敵のボスの力で

チートして今までの試合に

勝っていたのか！気に入らねえな！

『あっちにしてみれば、こちらを始末できれば

どちらでもいいんだろうが。俺達としても

またとない機会だ。今後の世界に悪影響を

出しそうな旧魔王派を潰すにはちょうどいい。

現魔王、天界のセラフ達、オーデインのジジイ、ギリシヤの神、帝釈天とこの仏どもも出張って

テロリスト共を一網打尽にする寸法だ。
事前にテロの可能性を各勢力のボスに
極秘裏に示唆して、この作戦に参加するか
どうか聞いたんだがな。どいつもこいつも
応じやがった。どこの勢力も勝ち気だよ。
いま全員、旧魔王の悪魔相手に暴れてるぜ』
何処のお偉いさんも抵抗の姿勢だったのか。
「…このゲームはご破算ってわけね」

『悪かったな、リアス。戦争なんてそう
起こらないと言っておいて、こんなことにな
つちまっている。今回、お前達を危険な
目に遭わせた。いちおう、ゲームが開始
する寸前までは事を進めておきたかったんだ。
奴らもそこで仕掛けてくるだろうと踏んでい
たからな。案の定、その通りになったが、
お前達を危ないところに転送したのは確かだ。
この作戦もサーゼクスを説得して、俺が立案
した。どうしても旧魔王派の連中をいぶり
出したかったからな』

「もし、俺達が死んでいたらどうするんですか？」

俺が訊くと先生は真剣な声音で言った。

『俺もそれ相応の責任を取るつもりだった。

俺の首で済むならそうした』

先生は自分の死も覚悟してたのか。

そこまでの覚悟で今回奴らを引き寄せたのか…。

そうだ、それよりも重要なことが！

「アザゼル先生、アーシアがディオドラに
連れ去られたんだ！」

『っ。そうか。アーシアは俺達に任せておけ。

そこは戦場になる。どんどん旧魔王派の

連中が魔方陣で転送されてきているからな。

その神殿には隠し地下室が設けられている。かなり頑丈な造りだ。戦闘が静まるまで

そこに隠れていてくれ。あとは俺達が

テロリストを始末する。このフィールドは

カオス・ブリゲード
「禍の団」所属の神滅具所持者が作った

結界に覆われているために、入るのはなんと

かできるが、出るのは不可能に近いんだよ。

神滅具「絶デイモン・ジョン・ロスト霧」結界、空間に関する

神器のなかでも抜きん出ているためか、

術に長けたオーディンのクソジジイでも

破壊できない代物だ』

「先生も戦場に来てはいるんですか？」

『ああ、同じフィールドにいる。かなり

広大なフィールドだから、離れてはいるが』

「アーシアは俺達が救います」

俺は真つすぐに言った。

『お前、今がどういう状況かわかっているのか？』

先生の声は怒気が含まれている。けど、

俺は諦めることは出来ない！

「状況なら分かっています！でも、アーシアは俺の

仲間です！家族です！俺の手で助けたいんだ！

俺はもう二度とアーシアを失いたくない！」

そうだ！こうしてる間にもアーシアに危険が

迫っているかもしれないんだ！そう考えるだけで

腸が煮えくり返る思いだ！

リアス先輩が不敵な笑みで言う。

「アザゼル先生、悪いけれど、私達はこのまま

神殿に入ってアーシアを救うわ。ゲームはダメ

になったけれど、ディオドラとは決着をつけな

くちや納得出来ない。私の眷属を奪うという事

がどれほど愚かな事か、教え込まないといけな

いのよ！」

そこへ朱乃さんが続ける。

「アザゼル先生、私達、三大勢力で不審な行為を行う者に実力行使をする権限があるのでしよう？いまがそれを使う時では？ディオドラは現悪魔勢力に反政府的な行動を取っていますわよ？」

朱乃さんの話に先生は嘆息していた。

『…つたく、頑固なガキどもだ…。ま、いい。

今回は限定条件なんて一切ない。だからこそ、お前達のパワーを抑えるものなんて何も無い。存分に暴れてこい！特にユウスケ！

クウガの力を裏切り小僧のディオドラに見せつけてこい！それとイツセー！赤龍帝の力でユウスケをサポートしてやれ！」

先生、ありがとうございます！

「了解！」「オッス！」

俺とイツセーは気合の入った一声で答えた！

『最後にこれだけは聞いていけ。大事なことだ。

奴らはこちらに予見されている可能性も視野に入れておきながら事を起こした。つまり多少敵に勘付かれても問題のない作戦でもあるということだ』

「相手が隠し球をもってテロを仕掛けてきていると？」

『ああ、それが何かはまだわからないがこの

フィールドが危険なことは変わりはない。

ゲームは停止しているため、リタイア転送は無い。危なくなっても助ける手段はないから肝に銘じておけ。十分に気を付けてくれ』

なるほど、相手には確実に勝てるという自信があつたから、今回のテロが予想されていても強引に仕掛けてきたのか。

その自信が何なのかは知らないが、俺達がするべきことは簡単だ！

ディオドラを倒して、アーシアを救って、神殿の地下に逃げ込む！リタイアの転送がなくても、やられる前にやればいいだけさ！

「小猫、アーシアは？」

リアス先輩が小猫ちゃんにサーチする様に促した。小猫ちゃんは猫耳を頭部にぴよこりと出すと、神殿の奥を指で示す。

「…あちらからアーシア先輩と」

ディオドラ・アスタロトの気配を感じます」

よし！アーシア、待っていてくれ！
すぐに行くからな！

俺達全員は無言でうなずき合おうと神殿の奥へ向かって走り出したのだった！

第79話「古代の光」

神殿の中は、広大な空間だった。大きな広間がずっと続いている。広間に巨大な柱が並ぶぐらいで他に目立った物はない。

神殿を抜けると、さらに前方に新たな神殿が現れ、そこを目指す。それを何度か繰り返していくうち、とある神殿のなかに入った時気配を感じた！

前方から現れたのはフードを深く被った

ローブ姿の小柄な人影が十名ほど。

『やー、リアス・グレモリーとその眷属の皆』
っ！

神殿中にディオドラの声が響く！どこに居る！

『ハハハ、クウガ。辺りを見渡しても僕は

見つからないよ。僕はこのずっと先の神殿

で君たちを待っているからね。遊ぼう。

中止になったレーティングゲームの代わりだ』

などと、野郎はふざけたことを言ってくる！

声を魔力でこちらに飛ばしているのか。

遊びだと！何をしようってんだ！

『お互いの駒を出し合って、試合をしていくんだ。

一度使った駒は僕の所へ来るまで二度と使えないのが

ルール。あとは好きにしていんじゃないかな。

だけど、クウガ君だけは最後に一対一で戦おうじや

ないか。さてと、第一試合、僕は「兵士」八名と

「戦車」二名を出す。ちなみにその「兵士」達は皆

既に「女王」に昇格しているよ。ハハハ、いきなり

「女王」八名だけれど、それでもいいよね？何せ、

リアス・グレモリーは強力な眷属を持っていることで

有名な若手なのだから』

俺は最後に一対一か！望むところだぜ！

しかし、いきなり『女王』に昇格している
『兵士』と『戦車』が相手か、大丈夫なのか？

「いいわ。貴方の戯言に付き合ってあげる。

私の眷属がどれほどのものか、刻み込んであげるわ」
リアス先輩は快諾した。さすがの自信だな。

「相手の提案を呑んでいいんですか？」

イツセーがリアス先輩に訊くと目を細めながら言う。

「応じておいたほうがいいわ。あちらは…」

アーシアを人質に取っているんですもの」

そうか、下手な対応をすれば、奴が

アーシアに何するかわからないのか・

リアス先輩はイツセーを指さす。

「こちらはイツセー、小猫、

ゼノヴィア、ギヤスパーを出すわ」

眷属でもパワーに特化した三人を

ここで投入するか！

「今呼ばれたメンバー、ちよつときて頂戴」

リアス先輩に呼ばれて四人が集まる。

作戦会議を行うが、この組み合わせなら

ほぼ、圧倒的なパワーでのごり押しで

いくんだらうな。

『じゃあ、始めようか』

ディオドラの声と共に奴の一齐に構えだした。

イツセーは木場の魔剣で指を軽く切り、

ギヤスパーに血を与える。

ドクンツ！

ギヤスパーの胸が脈打ったのがわかった。

次の瞬間、ギヤスパーの体を異様なオーラが

包んでいた。赤い双眸も怪しく輝き始めていた。

これで準備は整ったか！

ゼノヴィアはデュランダルを開放すると、

あの夜、見せてくれた柄を持ち『戦車』二名の方へ歩みだした。

「アーシアを返してもらおう」

ゼノヴィアの全身からかつてないほどのプレッシャーが放たれていた。その眼光は鋭い。

「…友と呼べる者を私は持つていなかった。

そんなものがなくても生きていけると思っていたからだ。神の愛さえあれば生きていける、と」

「ダッ！」

『戦車』二名がゼノヴィア目掛けて走り出す。

速い！スピードのある『戦車』か！

ゼノヴィアは動じずに独白を続ける。

「そんな私にも分け隔て無く接してくれる者達が出来た。

特にアーシアはいつも私に微笑んでくれていた。

この私と『友達』だと言ってくれたんだ」

ああ、お前は俺達の仲間だよ、ゼノヴィア。

『戦車』二名の激しい打撃をすんで躲しながら

ゼノヴィアは憂いの瞳を見せていた。

「…私は最初に出会った時、アーシアに酷いことを

言った。魔女だと。異端だと。でも、アーシアは何

事も無かったように私に話しかけてくれた。それでも

『友達』だと言ってくれたんだ！」

ゼノヴィア…。あの時の事をずっと、気にしてたのか。

「だから、助ける！私の親友を！アーシアを！

私は助けるんだ！」

ドンッ！

デユランダルから吐き出される絶大な波動が

『戦車』の二人を弾き飛ばす。

ゼノヴィアは柄だけの剣を天高く振り上げると

涙交じりに叫んだ！

「だから！だから頼む！光の巨人よ！」

神殿が大きく揺れる！揺れが収まった時、俺の視界に映ったのは。ゼノヴィアの前方に伸びる大きな光線の爪痕。その先にあった柱、壁を丸ごと消失し、神殿の半分以上が光線で消し飛んでしまった！

今の攻撃はデユランダルの聖なるオーラを纏っていたので悪魔には必殺の一撃か。

いや、そうじゃなくてもあの威力なら

どんな相手でも当たれば関係ないか。

実際、『戦車』二名は完全に消滅したしな。

あの二名も大公との試合を見た限りでは、弱くはなく。むしろ、かなり強かった。

それを一撃で撃破か。まあ、この威力では前回の俺達の試合で使えば、一発でアウト

だろうし、使いどころも限られる。

ゼノヴィアは変身も解除され肩で息をしていた。

連発は無理だろう。

ゼノヴィアが『戦車』二名を倒したことで

イツセー達もやる気が出たみたいだ。

「小猫ちゃん、ギヤスパー！行くぞ！」

「はい！」

二人が元気に返事する。

「にゃん！」

小猫ちゃんが掛け声と共に猫耳と尻尾を生やした！

相手は『女王』と化した『兵士』八名！強敵だが、

あのイツセーの顔を見るに何か必勝法でもあるのだろうか。

「まずは俺も『女王』にプロモーション！」

普段のゲームなら敵陣でしか行えないが、ゲームが崩壊した今ならリアス先輩の合意があれば昇格することが出来る。

『Boost!!』

イツセーは更にブーステッド・ギアで強化する。

『Explosion!』

「煩惱解放！イメージマックス！広がれッ！」

俺の快適空間ッッ！」

イツセーを中心に謎の空間が展開していく！

「部長オオオッ！俺は変態です！俺はエロエロです！

それでも俺はこの技を貴方の為に使います！いえ、

俺自身の為に使います！」

イツセーがリアス先輩に誓いを立てた後、

前方の『兵士』八名に照準を向けた。

いや、イツセーが視線を向けた先は

彼女たちの胸であり、この後の流れに気づき

俺達全員はあきれ顔でイツセーを見るのだった。

『乳語翻訳ッ！』

シトリー戦でイツセーが開発した

胸を介して相手の心を読む技だ。

「へー！『兵士』のおっぱいさん達、

右から順にこれから何をしようか教えてちょうだい！」

イツセーは聞き出した情報を二人に共有する。

「あの子とあの子とあの子はギヤスパーを狙ってる！

ギヤスパー、今言った奴を停止させろ！」

「は、はいいいいい！」

イツセーが指さした『兵士』三名をギヤスパーが

神器の力で停止させる！

ピタッ。

『兵士』三名がギヤスパーの眼に捉えられ、

容易に動きを停止させられた！

「君たちは何を考えているのかな？」

敵の停止を確認したイツセーは逆側の

『兵士』の声を聞く。

「ギヤスパー、次はそつちの三名が小猫ちゃん方面に向かう！そこを停止させろ！」

「は、はいいいいいっ！」

カッ！ピタリ。

ギヤスパーの眼光がきらめき、

また三名がその場で動きを停止させられた！

あつという間に残りの『兵士』は二名となった。

イツセーとギヤスパーの連携がここまで決まるとはな。

「ウハハハハハッ！圧倒的じゃないか！『女王』

となった『兵士』八名が何もできずに俺達の連携攻撃

の前に沈もうとしているのだからな！」

イツセーは邪悪で下品な笑みを発していた。

女性相手限定とは言え相手の行動、作戦が駄々洩れ

というのは強すぎるな。仲間と情報を共有すれば、

連携の精度も上がる。実際に実戦経験の少ない

ギヤスパーとここまでの連携が取れるんだからな。

そりや、試合で禁止にされるよな。

「…どう考えても悪役側の態度」

小猫ちゃんのツツコミにイツセーは動揺するが、

すぐに立ち直りゆつくりと停止させられている

『兵士』に軽く触れていく。

バババツ！

すると、『兵士』の女性たちの服が次々と

弾け飛んでいく！

「…ふふふ。見たまえ。動けない者がこれほど

無防備とは。服も容易に破壊出来る。パイリンガル

とドレスブレイクのコンボ。相手が女の子なら、

ここまで無敵だとは…」

…あいつ、前にギヤスパーと話した連携を実現

しやがったのか。だけど、服を脱がす必要はあつたか？

「先生、俺、いつかおっぱいを支配できるんじゃないや

ないかって思えてきましたよ」

マジで欲望に忠実な男だな。

「さーて、残りのお姉さん達をどうしてくれるかなー！」
イツセーが下品な笑みで両手をわしやわしや動かして
いると「ゴンツ！」と一発小猫ちゃんに顔面パンチされた！
まあ、真面目な戦闘中にふざけてたらそうなるわな。

「…早く倒しましょう。ドスケベ先輩」

小猫ちゃんはそう言いながら停止している相手

『兵士』をパンチで打倒していった。

イツセーも小猫ちゃんに活を入れられて、
手早くギヤスパーに指示を出して、残りの

『兵士』も停止させていく。その後小猫ちゃん
の仙術で魔力を練れないようにし、ギヤスパー
のヴァンパイアの能力で気絶させて柱に縛り
上げていった。

これで初戦は俺達の圧勝だ。残す敵は『女王』、
『騎士』二名、『僧侶』二名、ディオドラのみだ。

「行きましょう」

リアス先輩の掛け声と共に俺達は次の神殿へ足を進めた。

二番目に俺達を待っていたのは敵三名の姿。

「映像の一件から僕の記憶が正しければ『僧侶』

二名と『女王』です」

木場がそう言う。木場は何処で見分けてるんだ？

皆、同じようなローブ姿で俺には見分けがつかん。
しかし、二番手に『女王』をぶつけてくるか。

序盤から主力をぶつけるのがディオドラの戦術か？

残りの『騎士』二人は映像を見た限りでは

木場の足元にも及ばない実力だったがな。

「待っていました、リアス・グレモリー様」

ディオドラの『女王』がフードを取り払い、
顔を見せる。碧眼のブロンド女性だ。

残る『僧侶』の二人は顔はフードで見えないが、片方が女性でもう一人は男性だったはずだ。映像では『僧侶』二人の魔力とサポートはかなり優秀だった。魔力だけならアーシアやギヤスパーを超えていると思う。サポート力では、こちらの『僧侶』の方が上だと思うがな。なんせ、回復能力と時間停止だからな。問題は『女王』か。この『女王』、大公アガレスの『女王』と直接対決して、最終的に勝っていた。炎の魔力が凄かったのは覚えている。

「あらあら、では、私が出ましようか」

一歩前に出たのは朱乃さんだった！

同じ『女王』の朱乃さんが行くのか。

「あとの『騎士』二人は祐斗がいれば

十分ね。私もあるわ」

と、リアス先輩もでるのか！

此処でうちのツートップが出るのか。

「あら、部長私だけでも十分ですわ」

「何を言ってるの。いくら雷光を覚えたからって、

無茶は禁物よ？ここでダメージをもらうよりは

堅実にいって最小限の事で抑えるべきだわ」

雷光と滅びの力！どちらも強力だ！

その二人の共闘が見られるとはな！

すると小猫ちゃんがイツセーに何か耳打ちしている。

「朱乃さーん」

するとイツセーが叫んで、朱乃さんが振り向く。

「えっと、その人たちに完勝したら、

今度の日曜デートしましょう！」

これが、小猫ちゃんの作戦か。

カッ！バチッ！バチッ！

突然、電気が辺り一面に散らばりだした。

うねりになって、敵を容赦なく包み込んでいった！
周囲の風景も木っ端微塵にぶっ飛ばしながら！

…プスプス…

煙を上げながら、『女王』と『僧侶』の二人が
床に倒れこんでいた。

…どう見ても再起不能だな…。

二人の口論に口をはさんだばかりにこの結果か…。

これは、酷い一戦だったな。戦いですらなかったぞ。

しかもまだ口論は続いているしな。

「うぬぬ！…まあ、いいわ。後はアジアを救ってから

ゆっくり話し合いますし。まずはアジアの救出よ」

「ええ、わかっていますわ。私にとってもアジア

ちゃんは妹のような存在ですもの」

ようやく、二人の意見が一致したようだ。

『女王』と『僧侶』を撃破した俺達は更に神殿の

奥へと進んでいくのであった。

—●—

「アジアちゃん、今度の体育祭、

お父さんと一緒に見に行くからね」

「晴れ姿、しっかりとカメラに収めるから！

はー、アジアちゃんの走る姿、きつと

可愛いだろいなあ」

レーティングゲームが始まる少し前、

父さんと母さんは撮影機器をチエック

しながら微笑んでいた。

アジアが我が家に住むようになって早数か月。

父さんも母さんもすっかりアジアを自分の娘

のように扱い、可愛がっていた。

まあ、俺もイツセーも妹の様に扱って

可愛がつてるけどな。

「つたく父さんと母さんはすっかりアーシアのこと娘みたいにしちゃって。息子の立場が無くなつてくよ」

半眼で呟くイツセーに母さんは言う。

「あら、だって、アーシアちゃんのほうが可愛いんですもの。ユウスケは真面目だけど、イツセーみたいなエロ息子を持った親の気持ち、分かってほしいわ。アーシアちゃんは癒しなのよ」

「うんうん。母さんの言う通りだ」

まあ、二人の気持ちはわからんでもないが、イツセーだって本気でばやいてないだろうに

アーシアが顔を赤く染め、もじもじしながら遠慮がちに言う。

「…わ、私、本当のお父さんとお母さんを知らないで育ったので…。ユウスケさんのお父さんとお母さんのことを『本当のお父さんとお母さんがいたら、こんな感じなのかな？』って思うこともあつて…。い、いえ、居候の身でそんなことを言ったらご迷惑かもしれませんけれど…」

父さんは真つすぐとアーシアに言った。

「アーシアちゃんのことを実の娘のように思っているよ」
母さんも優しく微笑む。

「私もよ、アーシアちゃん。こつちこそ、そんな風に思っ
ていて迷惑をかけているんじゃないかって思っていたの。
ほら、うちはバカ息子二人しかいなかったから、女の子
が住むようになって嬉しくて。ねえ、お父さん」

「ああ、アーシアちゃんではければこの国にいる間だけ
でも本当の父親と母親と思ってくれてもいいんだよ。

それにこの家はアーシアちゃんの家でもあるんだから
「そうよ。このお家はアーシアちゃんの帰るところなん
だからね。遠慮なんてしなくていいのよ」

「そうだぜアーシア、俺とユウスケの兄弟じゃなくて
家はアーシアも入れた三兄妹だつてことだぜ」

父さんと母さんとイツセーはアーシアを家族として
心底愛してくれているって感じたよ。

三人に申し出を受けたアーシアは目いっぱい
に涙を溜めていた。父さんも母さんもイツセーも
悪いことを言つたかと狼狽したけど、アーシアは
首を横に振つた。

「…違うんです。とてもうれしくて…。」

…お父様…お母様…イツセーさん…。

…私は…私は…」

うれし泣きしているアーシアの頭を俺は
うあさしく撫でてやつた。

「この家はアーシアの家だ

父さんも母さんもイツセーも俺もアーシアの家族だ。
それに他の皆だつて、仲間で友達で家族だと思つぞ。
だから、遠慮なんてしなくていいんだ。アーシアは
ここにずっと居ていいんだからさ」

俺は笑顔でそう言った。

アーシアの満面の笑み。俺が守りたい笑顔。俺が守ら
なくちやいけない笑顔だ。なあ、アーシア、俺達は
家族なんだ。あの家はアーシアの居場所なんだぜ？
俺と、俺達と一緒に帰るんだ。俺が！必ずアーシア
を助け出してやるからな！

き君たちがブツ倒してきた眷属悪魔の女達は元信者ばかりなんだよ！自分の屋敷にかこつている女共も同じ！ぜーんぶ、元は有名なシスターや各地の聖女様方なんだぜ！ヒヤハハハ！マジで趣味良いよなああつ！悪魔のお坊ちゃんが教会の女を誘惑して手籠めにしてんだからよ！いやはや、だからこそ、悪魔でもあるのか！熱心な聖女様を言葉巧みに超絶うまいことやって墮とすんだからさ！まさに悪魔のささやきだ！」

「ちよつと待てよ。じゃあ、アーシアは」

俺の言葉にフリードは哄笑を上げる。

「アーシアちゃんが教会から追放されるシナリオを書

いたのは元をただせばデイオドラ・アスタロトなんだぜ。シナリオはこうだ。ある日、シスターとセツ〇スするのが大好きなどある悪魔の坊ちゃんは、チヨー好みの美少女聖女様を見つけました。会ったその日からエッチしたくてたまりません。でも、教会から連れ出すにはちよいと骨が折れそうと判断して、他の方法で彼女を自分のものにする作戦にしました」

…ち、ちよつと、待てつて、それじゃあ、アーシアは。

「聖女様はととてもとおやさしい娘さんです。神器

に詳しい者から『あの聖女さまは悪魔をも治す神器を持つているぞ』というアドバイスをもらいました。そこに目を付けた坊ちゃんは作戦を立てました。『ケガした僕を治すところを他の聖職者に見つかれば聖女様は教会あら追放されるかも☆』と！傷痕が多少残ってもエッチできりやバツチリOK！それがお坊ちゃんの生きる道！」

—あのとき、彼を救った事、後悔してません。—

俺の脳内で、笑顔でそう言ったアーシアが思い出される。

………。

なんだよ。それ。なんなんだよ、それはよ…。

俺達を嘲笑うかのようにフリードはトドメとばかりに言った。

「信じていた教会から追放され、神を信じられなくなつて人生を狂わせられたら、簡単に僕の元に来るだろうと！ヒヤハハハハ！聖女様の苦しみも坊ちゃんにとつてみれば最高のスパイスなのさ！最底辺まで墮ちた所を掬いあげて、犯す！心身共に犯す！それが坊ちゃん最高最大のお楽しみなのでした！今までもそうして教会の女を犯して自分のものにしたのです！それはこれからも変わりません！坊ちゃんの　ディオドラ・アスタロト君は教会信者の女の子を抱くのが大好きな悪魔さんなのでした！ヒヤハハハツ！」

俺は。心の底で生じたどす黒い感情を我慢できそうになかった。

握りしめる拳からは血が垂れている。それは横のイツセーも同様に拳から血が噴き出している。俺がフリードを激しく睨み、一步前に出ようとしたその時だった。俺の肩を木場が掴む。

「ユウスケ君。気持ちにはわかる。だが、君のその想いをぶつけるのはディオドラまで取つておいた方がいい」

冷静な物言いだ。だが、俺の怒りはそんな容易く収まらねえよ！

「お前、黙つてろつて言う」

そこまで言つて、木場の顔を見て気づく。

木場の瞳は怒りと憎悪に満ちてた。

「ここは僕が行く。あの汚い口を止めてこよう」

迫力のある歩みで木場は俺の横を通り過ぎていく。

俺の怒りが一瞬冷めてしまいそうなほど、木場の全身から放たれるオーラは攻撃的な殺意に包まれていた。

木場は異形の存在と化したフリードの前に立ち、

手元に聖魔剣を一振り創り出す

「やあやあやあ！てめえはあのととき俺をぶった斬り

やがった腐れナイトさんじゃありませんかあああつっ！

てめえのおかげで俺はこんな素敵なモデルチェンジを

しちやいましたよ！でもよ！だいぶ強くもなつたんだ

ぜええ？ディオドラの『騎士』二人をペロリと平らげ

ましてね！そいつらの特性も得たんですよおおおつ！

無敵超絶モンスターのフリードくんをよろしくお願い

しますぜえ、色男さんよおおおつ！」

木場は剣を構えると冷淡な声で一言だけ言う。

「君はもういない方がいい」

「調子くれてんじゃねえぞおおおつ！」

憤怒の形相となったフリードは全身から生物的な

フォルムの刃を幾重にも生やしてこちらへ。

フツ！

木場が視界から消え。

バツ！

刹那、俺達の眼前にいたモンスターのフリードは

無数に切り刻まれて四散した！

「にだ、それ。強すぎんだろ…」

頭部だけになったフリードは床に転がり、

大きな目をひくつかせていた。

まさかの一撃か！

フリードが攻撃の姿勢を見せた途端に勝負は一瞬で

決した。神速で切り刻んだろうが、俺の目では捉え

きれなかった。

「…ひひひ。ま、お前らじゃ、ディオドラの計画も

裏にいる奴らも倒せないさ。何よりも神滅具所持者

の恐ろしさをまだ知らねえんだからよ…。ひやはは」

ズンツ！

頭部だけで笑っていたフリードに木場は容赦なく剣

を突き立て、絶命させた。木場は聖魔剣についた血を空で払う。飛び散った血液が半円を描いた。

「続きは地獄の死神相手に吼えるといい」

俺はその光景に心の中の黒い物が消えていくのを感じる。ざまあないな。

木場の奴更に強くなったか？

フリードの実力が全然わからなかったな。

あいつとは腐れ縁だったが最後はあっけなかったな。

木場は俺達に振り返り言う。

「行こう、皆！」

俺達はうなずき合い、デイオドラの待つ最後の

神殿へ走り出したのだった。デイオドラ。

俺はお前だけは絶対に許さない！

—○●○—

アザゼルside

俺はレーティングゲームのバトルフィールドで旧魔王派の悪魔どもをある程度片付けていた。残りは部下だけで十分だろう。俺は部下にあとを任せて、とある場所へ宙を飛んで向かっていた。ファーブニルを宿した宝玉の反応がこちらに向いている。オーデインの力で部下と共にこちらへ転送してきてすぐに懐の宝玉がさらに輝きを増した。俺はその人影の前に降り立つ。

：腰まである黒髪の小柄な少女。黒いワンピースを身に着け、細い四肢を覗かせている。

少女は端正な顔付きだが、目線をフィールド中央に並ぶいくつもの神殿の方へ向けていた。

：俺は目を細め、静かに言う。

「お前自身が出張してくるとはな」

少女は俺の声に反応し、こちらへ顔を向けた。薄く笑う。

「アザゼル。久しい」

「以前は老人の姿だったか？今度は美少女様の姿とは

恐れ入る。何を考えている？オーフィス」

そう、こいつは『無限の龍神』オーフィス！

『禍の団』のトップ！間違いないぜ。

こいつから漂う不気味で言いようのないオーラは

オーフィスのものだ。以前会った時はジジイの姿だったが、今回は黒髪少女かよ。まあ、こいつにとって姿なんてものは飾りに過ぎないか。いくらでも変えられる。

こいつ自身が出張ってくるってことは、今回の作戦はそれほどこいつにとって重要でデカいのか？神殿の方に視線を向けているってことは、そっちに作戦の中心があるってことかもしれない。

：ユウスケ、イツセー、リアス、あいつらを向かわせたのはマズかったかもな。

「見学。ただ、それだけ」

「高みの見物ね…。それにしてもボスがひよっこり現れるなんてな。ここでお前を倒せば世界は平和か？」

俺は苦笑しながら光の槍の矛先を突き付けるが、

奴は首を横に振った。

「無理。アザゼルでは我を倒せない」

ハッキリ言ってくれる。だろうさ。俺じゃあお前を

倒しきれない。それはわかつている。が、お前をこ

こで倒せば『禍カオス・ブリゲードの団』に深刻な大打撃を与えるのは
確実なんだよな。

「では、二人ではどうだろうか？」
バサツ。

羽ばたきながら、舞い降りてきたのは巨大なドラゴン！

「タンニーン！」

元龍王のタンニーン！

こいつもゲームフィールドの旧魔王派一掃作戦に参加

していたのだが、一仕事終えてこちらに向かつてきたようだ。タンニーンは大きな眼でオフィスを激しく睨む。

「せっかく若手悪魔が未来をかけて戦場に赴いているというのにな。貴様が茶々を入れるというのが気に入らん！あれほど、世界に興味を示さなかった貴様が今頃テロリストの親玉だ?!何が貴様をそうさせたというのだ！」

俺もタンニーンの意見にうなずき、さらに問いだす。

「暇つぶしなんて今時流行らない理由は止めてくれよな。

お前の行為ですでに被害が各地で出てるんだ」

そう、こいつがトップに立ち、その力を様々な危険分子に貸し与えた結果、各勢力に被害をもたらしている。死傷者も日に増えていた。もう無視できないレベルだ。何がこいつを突き動かし、テロリストの集団の上に立たせた？俺はそれだけがわからなかった。今まで世界の動きを静観していた最強の存在が何故今になって動き出したのか？そのオフィスの答えは予想外の物だった。

「静寂な世界」

……。

一瞬、何を言ったか理解できなかった。

「はっ。」

俺は再び問い返す。するとオフィスは真っ直ぐとこちらを見つめて言った。

「故郷である次元の狭間に戻り、静寂を得たい。

ただそれだけ」

っ！

そ、それが理由だったのか？次元の狭間。簡単に言うなら、人間界と冥界、人間界と天界の間にあるような次元の壁のことだ。世界と世界を分け隔てる境界。

そこは何も無い「無の世界」と言われて語る。オーフィスがそこから生じたのは知ってはいたが…。

「…ホームシックかよと普通なら笑ってやるところだが、次元の狭間ときたか。あそこには確か」

俺の言葉にオーフィスはうなずいた。

「そう、グレートレッドがいる」

次元の狭間は現在、奴が支配している。なるほど、オーフィスは奴をどうにかして次元の狭間に戻りたいのか。まさか、それを条件、グレートレッドを追い出すのを条件に旧魔王派の悪魔や他の勢力の異端児に懐柔されたってのか？そのとき、俺の脳裏にひとつの可能性が過ぎる。

そうか、ヴァーリ。お前の目的は！

俺の思考が何かを出そうとしたとき、オーフィスの横に魔方阵が出現し、何者かが転移してくる。

そこに現れたのは貴族服を着た一人の男。

そいつは俺に一礼し、不敵に笑った。

「お初にお目にかかる。俺は真のアスモデウスの

血を引く者。クルゼレイ・アスモデウス。

『禍の団』真なる魔王派として、

墮天使の総督である貴殿に決闘を申し込む」

…ハハハ、こいつはまた…。首謀者の一人がご登場つてわけだ。俺は頭をポリポリとかきながら、つぶやく。

「旧魔王派のアスモデウスが出てきたか」

ドンツ！

確認するや否や、そいつは全身から魔のオーラを迸らせた。色がどす黒いな。こいつもオーフィスの力を得たか。

「旧ではない！真なる魔王の血族だ！カテレア・

レヴィアタンの敵討ちをさせてもらうツ！」

カテレアの男か何かか。まあいい。今回の首謀者を

打ち倒せるのならば、またとない機会だ。
やらせてもらおうか。

「いいぜ。タンニーン、お前は どうする?」

「サシの勝負に手を出すほど無粋ではない。オーフィスの
監視でもさせてもらおうか」

こいつも根っからの武人だね。ドラゴンにしておくのが
もったいないぐらいだ。

「頼む。さて、混沌としてきたが、俺の教え子共は

無事にディオドラのもとにたどり着いている頃かな」

俺がふいに口にしたことだが、オーフィスは

それを聞き、首を横に振る。

「ディオドラ・アスタロトにも我の蛇を渡した。

あれを飲めば力が増大する。倒すのは

容易ではない」

「ハハハハハハハハハハッ!」

俺はオーフィスの言葉に爆笑した。わかってねえ!

わかってねえよ、オーフィス!

「なぜ、笑う?」

怪訝に首をかしげるオーフィスに俺は告げた。

「蛇か。そりゃ、けっこうだ。だが、

残念なことにそれじゃ無理だな」

「なぜ?我が蛇、飲めばたちまち強大な力を得られる」

「それでも無理だ。先日のゲームじゃ、ルール上、

力を完全に発揮できなかったがな」

俺やタンニーンの修行、あれがいかなるものか、

ディオドラ・アスタロトは身をもって知ることにな

るだろう。あいつらの修行相手が竜王と総督だ。

片方は禁^{バランス・プレイヤー}手に至った!もう片方の

成長速度は目見張るものがある。少し目を離れたすきに
新たな力を手に入れてやがる。今もまた新たな力を手に
しているのかもな。俺はファーブニルの宝玉を取り出し。

例の人工神器の短剣を構えた。

「さて、ファーブニル。付き合ってもらうぜ。相手はクルゼレイ・アスモデウス！いくぜ、禁手化ッツ！」次の瞬間、俺は黄金の全身鎧に包まれていた。

ユウスケ、イツセー、お前たちを制限するものはここどこにも無い。

暴れて見せろッ！

と、俺がカツコ良く決めようとしていたところで乱入する転移用魔方陣があった。その紋様は。そうか、お前自ら出張るか。輝く魔方陣から現れたのは、紅髪の王サーゼクス。

「サーゼクス、どうして出てきた？」

俺の問いに奴は目を細める。

「今回結果的に妹を我々大人の政治に巻き込んでしまった。私も前へ出てこなければな。いつもアザゼルばかりに任せては悪いと感じていた。クルゼレイを説得したい。これぐらいしなれば妹に顔向けできそうにないんでね」
「つたく、こいつは…。」

「…お人好しめ。無駄になるぞ？」

「それでに現悪魔の王として直接訊きたかった」

俺は構えていた槍を一度引いた。

サーゼクスを視認した途端、

クルゼレイの表情が憤怒と化す。

「サーゼクス！忌々しき偽りの存在ッ！直接現れてくれるとはッ！貴様が、貴様らさえいなければ、

我々は…ッ！」

見る。これが現実だ。奴らにとって、お前の存在は最大級に忌むべきものなんだよ。

「クルゼレイ。矛を下げてはくれないだろうか？」

今なら話し合いの道も用意できる。前魔王の血筋

を表舞台から遠ざけ、冥界の辺境に追いやったこと、いまだに私は『他の道もあつたのでは?』と
思つてならない。前魔王子孫の幹部たちと会談の
席を設けたい。何よりも貴殿とは現魔王のアスモ
デウスであるファルビウムとも話してほしいと考
えている」

サーゼクスの言葉は真摯だ。それゆえ、
クルゼレイの感情を逆撫でる。

無駄だ、サーゼクス

もともと、こいつらにお前達現魔王の言葉は届かない。
お前は甘いんだ。

激高するクルゼレイ。

「ふざけないでもらおう!墮天使どころか、天使

とも通じ、汚れ切った貴様に悪魔を語る資格など
ないのだ!それどころか、俺に偽物と話せという
のか!?大概にしろッ!」

俺は嘆息するとクルゼレイに言う。

「よく言うぜ、てめえら『禍カオス・ブリゲードの団』には三大勢力の
危険分子が仲良くあつまっているじゃないか」

奴は口の端を吊り上げる。

「手を取り合っているわけではない。利用しているのだ。
忌まわしい天使と墮天使は我々悪魔が利用するだけの
存在でしかない。相互理解?和平?悪魔以外の存在は
いずれ滅ぼすべきなのだ!それをなぜわからない!?

悪魔こそが!否!我々、魔王こそが全世界の王で

あるべきなのだよ!オーフィスの力を利用することで
俺達は世界を滅ぼし、新たな世界を創り出す!

そのためには貴様ら偽りの魔王共が邪魔なのだ!」

あー、こりやダメだ。典型的な雑魚の親玉の発想だ。
既に種として悪魔の存在自体が危ういかもしれない
つてのに何を考えているんだか…。

サーゼクス、心中複雑かもしれないが、よっぽどお前の方が王をやっているぜ？旧魔王がこんなだから、悪魔は滅びの道へ向かっていこうとしていたんだ。考え、認識、それらの根底からの相違。両者の溝は深く、決して埋まらない。

サーゼクスは寂し気な目でつぶやいた。

クレイゼイ。私は悪魔という種を守りたいだけだ。民を守らなければ、種を繁栄しない。甘いと言われでもいい。私はミライアル子供たちを導く。

今の冥界に戦争は必要ないのだ」

「甘いッ！何よりも稚拙な理由だッ！それが悪魔の

本懐だと思っているのか!?悪魔は人間の魂を奪い、地獄へ誘い、そして天使と神を滅ぼす為の存在だッ！

もはや、話し合いは不要！サーゼクスよ！偽りと偽善の王よッ！ルシファアとは！魔王とは！

全てを滅する存在だッ！滅びの力を持っていながら、何故横の墮天使に振る舞わない!?やはり、貴様は魔王を名乗る資格などないッ！この真なる魔王であるクルゼレイ・アスモデウスがお前を滅ぼしてくれるッ！」

それがサーゼクス、現魔王と旧魔王の子孫、

両者の最後の話し合いだった。

サーゼクスはオーフィスに語り掛ける。

「…オーフィス。貴殿との交渉も無駄なのだろうか？」

「我の蛇を飲み、誓いを立てるなら。もうひとつ、冥界周囲に存在する次元の狭間の所有権、それ、すべてもらう」

服従と冥界の閉鎖、ってことか。

「冥界を背負う魔王がそれに安易に応じるわけにはいかないだろう。」

サーゼクスは…を仰ぎ瞑目する。次に目を開けた時その瞳には背筋が凍るほど冷たいものが映りこんでいた。それを確認したクルゼレイは距離を取り、両手に巨大な魔力の塊を創り出していく。

「そうだーそれでいいーそのほうがわかりやすいのだよ、サーゼクスッ！」

クルゼレイは最初からこうなることを望んでいた。：サーゼクス、お前の話は最初っから通るわけがなかったのさ。それでもおまえは話したかったんだろうな。自分の想いを。冥界の想いを。サーゼクスが右手を突き出し、手のひらを上にかざした。

そこに魔力が圧縮していく。サーゼクスの魔力が徐々に異様なオーラを放ち始める。滅びの魔力。

サーゼクスは強い口調で言う。

「クルゼレイ、私は魔王として今の冥界に敵対する者を排除する」

「貴様が！魔王を語るなッ！」

クルゼレイが巨大な魔力を両手から掃射する。

サーゼクスは動じず、手のひらに生まれた

魔力を無数の小さな球体に変えて、前方に撃ちだした。ギユパ！ギユウウンツ！

クルゼレイの攻撃はサーゼクスの魔力に触れた途端、

削りとられたように消滅していく。サーゼクスの

撃ちだした小さな魔力の球体は意思をもつかのように宙を縦横無尽に動き回り、クルゼレイの攻撃を打ち消していった。消しきれない攻撃はサーゼクス自身が避

けたり、防御障壁を作り出すことで防いでいく。

そのクルゼレイの口内へ滅びの球体がひとつだけ入り込む。

ドウツ！

クルゼレイの腹部が一度だけ膨れ上がった。それが

収まると同時に奴の魔力が一気に減少していく！

サーゼクスの奴、クルゼレイが飲んだ蛇を取り

払ったのか？

サーゼクスがぼそりと呟く。

『ルイン・ザ・エクステインクト滅殺の魔弾』。腹に入っていたオオフィスの

『蛇』を消滅させてもらった。これで絶大な力を

振るえないだろう」

パワーアップの源である蛇を消されたことで、先ほど

まで余裕の表情を見せていたクルゼレイに明らか

焦りの色が見えてくる。

サーゼクスの攻撃、本物を始めてみた。サーゼクスが

魔王に選ばれた理由の一つそれは圧倒的なまでの消滅

魔力だ。

触れたものを全て消す。塵芥すら残さない絶対的な滅び。

物は小さいのにとんでもない威力だ。絶大な滅びの力を

溢れさせず、巨大にもさせず、最小のサイズでとどめ、

それを複数同時に手足のように操る。緻密なコントロール

と並外れた才覚が必要な技術だ。それをサーゼクスは有し

ている。

「おのれ！貴様といい！ヴァーリといい、なぜこうも

『ルシファー』を名乗る者は恵まれた力を持っていな

がら、我々と相容れないツ！」

クルゼレイは毒つきながらも再び両手に魔力を放出

しようとした。

ギユパンツ！

が球体のひとつがクルゼレイはの腹部に触れ、

腹を丸ごと削り取った。滅びの魔力は小さくても

威力は十分だった。触れた瞬間、周囲のものを

根こそぎ消していく。

「…な、なぜ…本物が偽物に負けねばならない…？」

口から血を吐き出しながら、クルゼレイは無念の

血涙を流していた。

サーゼクスは瞑目し、手を横にゆつくりと薙ぐ。その瞬間、クルゼレイは宙を無数に飛びあ回る滅びの球体にその体を全て打ち消されていった。

第81話 「金色の僧侶」

俺達がたどり着いたのは最深部にある神殿だった。その内に入っていくと、前方に巨大な装置らしきものが姿を現す。壁に埋め込まれた巨大な円形の装置で、あちこちに宝玉が埋め込まれ、怪しげな紋様と文字が刻まれていた。これは何かの儀式魔方陣を形作っているのか？と、俺は装置の中央を見て、叫んだ。

「アーシアアアアアアアアアアアッ！」

装置の真ん中にアーシアが張り付けられている！見た感じ、外傷はない！衣類も破れた様子もなかった！良かった！ケガとかはなさそうだ。

「やつと来たんだね」

装置の横から姿を現したのはディオドラ・アスタロトだった。優し気な笑みが俺の怒りにさらに高めてくれる！俺はすぐさま戦闘態勢に入る。

あの野郎をぶん殴ってやる！全ての力を拳に乗せて、あの野郎の顔面をぶち抜いてくれる！

「…ユウスケさん？」

俺の声を聞いて、アーシアがこちらへ顔を向けた。

…目元が腫れあがっている。泣いていたんだ。それも尋常じゃない量の涙を流したと思えるほど、目が赤くなっている。それを見て俺はある結論に至ってしまった。

「…ディオドラ、お前、アーシアに

過去の事を話したのか？」

先ほどフリードが語ったこと。

絶対にアーシアに聞かせてはいけないものだ。

だが、ディオドラは俺の問いににんまりと微笑みやがった。

「うん。全部、アーシアに話したよ。ふふふ、君たちにも

見せたかったな。彼女が最高の表情になった瞬間を。

全部、僕の手のひらで動いていたと知った時のアーシアの顔は本当に最高だった。ほら、記録映像にも残したんだ。再生しようか？本当に素敵な顔なんだ。教会の女が堕ちる瞬間の表情は、何度見てもたまらない」

「でも、足りないと思うんだ。アーシアにはまだ希望がある。そう、君たちだ。特にそのクウガ。君がアーシアを救ってしまったせいで、僕の計画は台無しになってしまったよ。あの墮天使の女、レイナーレが一度アーシアを殺した後、僕が登場してレイナーレを殺し、その場で駒を与える予定だったんだ。君たちが乱入してもレイナーレには勝てないと思っていた。そうしたら、君たちは伝説の存在だという。偶然にしてはおそろしい出来事だね。おかげで計画はだいぶ遅れてしまったけれど、やっと僕の手元に帰ってきた。これでアーシアを楽しめるよ」

「黙れ」

自分でも驚くほど出たのは低い声だった。なんとなく、こいつは小悪党だろうと思っていた。だけど、そうじゃなかった。小悪党どころか、こいつはそんな可愛いもんじゃない、外道だ！いや鬼畜野郎だった！こんなクソ野郎がアーシアに愛を語っていやがったのか！今までここまで怒りを覚えたことはなかった。この怒りを抑える事なんてできなかった。俺が我慢の限界に達しようとしたとき、ディオドラは下劣極まりない言動は止めない。「アーシアはまだ処女だよ？僕は処女から調教するのが好きだから、クウガのお古は嫌だな」こいつだけは。

「あ、でも、クウガから寝取るのも楽しいのかな？」
絶対にぶん殴らないと気が済まない。

「君の名を呼ぶアーシアを無理矢理

抱くのも良いかもしれ」

「黙エエエエエエツッ！」

俺の中で何かが弾けた！

「ディオドラアアアアアアツアツ！てめえだけは！

絶対に許さねえツッ！」

ベルトの力により俺の体は紅の鎧に姿を変える。

「皆、絶対に手を出さないでくれ」

「ユウスケ。全員で倒すわと、言いたいところだけど、

今の貴方を止められそうもないわね。手加減してはダメよ」

ああ、そのつもりですよ。

俺の姿を見て、ディオドラは楽し気に高笑いしていた。

その全身がドス黒いオーラに包まれていく。

「アハハハ！凄いいね！これがクウガ！でも、

僕もパワーアップしているんだ！オーフィスから貰った

『蛇』でね！君なんて瞬殺」

「…超変身」

俺は『群青ナイトフォームのクウガ』に変身し、

瞬間的なダツシユで間を詰める！

ドゴンツッ！

そのまま奴が言い切る前に俺は打鍵をディオドラ

の腹部に鋭く打ち込んだ。

「…がっ」

ディオドラの体がくの字に曲がるその顔が激痛に歪んだ。

俺の速度に反応は出来なかったようだ。打ち込んだ拳を

そのままねじり込み、中身を潰そうとした。

ごぼっ…。

ディオドラが内容物を血と共に口から吐き出した。

俺は拳を引きながら、訊く。

「瞬殺がどうしたって？」

ディオドラは腹部を押さえながら、後ずさりしていく。

その表情は先ほどのような余裕のある笑みは消失して

いた。

「くっ！こんなことで！僕は上級悪魔だ！

現魔王ベルゼブブの血筋だぞ！」

ディオドラは手を前に突き出すと、魔力の無数展開した。

「君のような下級で下劣で下品な転生悪魔ゴのときに

気高き血が負けるはずがないんだッ！」

ディオドラの放つ無限に等しい魔力弾の雨が

俺へ向かってくる。

「超変身」

俺は即座に『深碧ビショップフフォームのクウガ』に変身し、

その雨の中を突き進む。

「雷よ！」

『Thunder!』

俺は雷を身にまとい、雨を避けずに歩きだす。

纏った雷が弾を弾き、手で弾いたりしながら、

詰め寄っていく。体にも被弾するが俺は気にせず

前進する。ありがとう、奈美先輩。貴方との

修行で雷の魔法の熟練度は一気に高くなった。

魔法触媒であるレイピアが無くても自分に

付与して強化したり、簡易な障壁とすることが出来た。

相手はリアス先輩よりも強いはずだが、その攻撃は

まったく怖くない。

前のレーティングゲームでは全力を出せなかったが

今なら全力でぶん殴れそうだ。

奴の眼前まで迫った時、ディオドラは魔力の

攻撃を止めて、距離を取ろうとした。

「風よ！」

『Aero!』

俺は風を巻き起こし、自分を押し出し、すぐにディオドラに

追いついた。その瞬間、奴は幾重にも防御障壁を作り出す。

「超変身ッ！」

俺は『深紫のクウォム』に変身し拳を振り上げる！

「こんな障壁で守れるもんかよー！」

バリントツ！

俺の拳が防御障壁を全て難なく壊して貫いていく。

ゴンツ！

顔面へ一撃！やっといいいのが入ったぜ！

殴られた勢いでディオドラの体が床に叩きつけられる。

奴は顔から血を噴出させて、涙を溢れさせていた。

「…痛い。痛いよー！どうして！僕の魔力は当たっ

たのに！オーフィスの力で絶大なまでに引き上げられたはずなのに！」

俺はディオドラの体を引き上げ拳を打ち込む！

腹部に一撃！

「ぐわっ！がはっ！」

さらに顔面に一発！まだだツ！オーラを右腕に集結させて、ディオドラに叩きこもうとする！

「こんな骨董品如きに僕がああああっ！」

ディオドラは左手を前方に突き出し、分厚そうなオーラの壁を発現させる。

ガギンツツ！バチイツバチツツ！

俺の拳がオーラの壁にぶち当たり、勢いを相殺されそうになった。こんなもの。こんなものがなんだってんだツ！

「アハハハッ！ほら見たところか！僕の方が魔力は上なんだ！ただのパワーバカが僕にかなうはずがないんだよ！」

にんまり笑うディオドラの前で俺はオーラをさらに右手に込める。

「なら、そのパワーバカの力を見せてやる！」
増大したオーラにより拳の勢いが増していく。

ビキツ！

壁に少しだけひびが生まれる。そして。
バリントツ！

壁は威力が増大した俺の拳の一撃に
儂い音を立てて消失した。

「わりいな。今の俺はパワーバカだからな、こんな風に
力押ししかできねえや。でも今のお前相手なら十分か」

「ひっ」

一瞬で顔色を変えたディオドラに、

「俺ん家のアーシアを泣かすんじゃねえよッ！」

俺は真っ正面から叫びながら拳を繰り出した！

グシャッ！

前に突き出していたディオドラの左手を叩き折り、

その勢いで顔面に拳をぶち込んだっ！

ゴスンッ！

顔面に鋭く刺さる俺の拳！ディオドラは拳の

一撃に柱まで吹っ飛び、背中から激突していた。

床に落ちたディオドラはおろおろと地を這いずり

ながら叫んだ。

「嘘だ！やられるはずがない！アガレスにも勝った！

バアルにも勝つ予定だ！才能の無い大王家の跡取り

なんかにも負けるはずがない！情愛が深いグレモリー

なんか僕の相手になるはずがない！僕はアスタロト

家のディオドラなんだぞ！」

ディオドラが手を上へ突き上げると、俺の周囲に

魔力で作りの出した鋭い円錐状のものを幾重にも

出現させる。

鋭い切っ先がすべて俺に向き、そのままミサイルのように

射出してきた！残部は躲しきれない！

身を屈め、時には横に回避するが、それも限界がある。

いくつかのトゲを拳と蹴りで弾き飛ばすが、切っ先が

うねりはじめ、意思を持ったかのように俺の体に

まとわりついてきた！

ザシユッ！

鎧の隙間を探すようにぬって一番装甲の薄い黒い皮膚を貫いてきた!

クソが…痛ええええっ! 切っ先に魔力を集結させて、体に小さな穴を開けたのか。面でダメなら点ってわけか…。だが、まだまだ! 俺を貫くトゲを両手でまとめて一気に体から引き抜いた! 抜いた勢いで血が床にしたたり落ちるもう一度、同じ攻撃をしようとするディオドラに俺は瞬時に詰め寄り、蹴りを放つ! メキツ…。

鈍い音が神殿にこだまする。俺のキツクはディオドラのふとももをぶち抜き、骨を粉碎したようだった。

「ちくしよおおおおおおおっ!」

苦痛に顔を歪ませるディオドラがこちらへ手を向け、魔力を急激に集め出した。最大に高めた魔力の波動を撃ちだすつもりなんだろう。

ドゴオオオオオオオオオッ!

俺は勢いよく拳を床に叩きつけた。神殿そのものが大きく揺れる。奴は床にできた巨大なクレーターを見て、目を引くつかせていた。

ディオドラはガチガチと歯を鳴らし、震え上がっていた。わざと外した。当てても良かったんだけどな。…クソ。

甘いよな、俺は…。

歩み寄り、もう一度奴を引き上げる。

「二度とアークシアに近づくなッ! 次に俺達のもとに姿を現したら、その時こそ、本当に潰してやるッ!」

ディオドラの瞳は怯えの色に染まっていた。

それはまるでバケモノを見たかのように…。

『その者の心は折れたようだ、

恐怖に飲まれた弱者の目さ』

ふいに、男の声が辺りに響く。

「誰だ、どこから!」

コツコツ。

神殿の入り口から一人の男が現れた。

その姿は金色の鎧にマントをつけた金髪の男性だった。

「何者!？」

リアス先輩が即座に警戒する。

「なに、そのクウガに用がある。そこの男との

一騎打ちを邪魔してしまい申し訳ないが、私にもなさねばならない使命があるのでね。すぐその男

を開放してもらえらるだろうか？」

「おおっ！ やつと来たか、遅いぞ貴様、せっかく協力してやってるんだ。さっさとこの男を始末しろ！

褒美ならいくらでもくれてやる！何が欲しい？

金か？女か？いくらでもくれてやる！だから早く僕を助けるんだ！」

助けが来たからかさつきまでの態度から打って変わって強気になるディオドラ。

だが、敵が現れたのは事実だ俺はディオドラを放して男を警戒する。

「ハッハハハ！僕もまだ終わりじゃあ無いようだ！」

奴らの手を借りるのは気に入らないが君を殺せるなら安いものだッ！さあ、こいつらを殺せ！」

フッ！

急に男の姿が消える!？」

ザアンツ！

音のした背後を振り向けば、先ほどの男がカギ爪でディオドラの腹を貫いていたところだった。

「ぐう、貴様何故え？」

男の行いにディオドラも驚愕している様子で貫かれた腹を見つめていた。

ブンツ！ ドサツ！

奴は手を振り、ディオドラを放り投げる。

「お前、なんで味方を!？」

俺の言葉に男は淡々と答える。

「このようなゲスは味方ではないわ！」

男の一騎打ちに負けたのはこの男の実力不足ゆえ、ならば、敗者のその後は勝者が決める事。だが、

この男は神聖な一騎打ちを汚したのだ。

だから、某が手を出させてもらった！」

そんなのお前のかつてじゃないか！

いったい何者なんだこの男は。

「何者だよ！お前は！なんでそこまで

勝負にこだわってるんだよ！」

俺の疑問に男はカギ爪をこちらに向けて答える

よく見ればその手は獣のような異形の姿をしており、

カギ爪も腕から生えているようだった。

「拙者は此度の戦い。『ゲバンゾ・ゲゲル』の挑戦者

メ・ロウガ・ダ。貴殿を倒し次へと進む者」

ロウガと名乗った男の体に変化していき、狼の怪人へと

姿を変える。まさかのグロンギが乱入してくるか。

「グロンギ……。まさか、禍カオス・ブリゲードの団に協力してるのか!？」

「協力、とは違うさただ状況を利用しただけだ。

貴殿との一騎打ちをするために邪魔をするだろう

輩を抑えるために彼らと共にしただけ。

仲間でも協力者でもない関係つてだけよ」

よくわからないが、倒さなければならぬ敵つてわけか。

「一つ聞きたい？なんでお前達は俺をつけ狙うんだ？」

俺だけを狙うグロンギ族の目的は何なんだ？

「ゲゲルを通して、貴殿の力を測るのさ。

弱ければ鍵になりえない。この戦いは二つの意味がある。

資格のあるクウガに勝てば、勝者は次の階級に上がれる。

クウガが勝てば我らの王を迎える為の鍵となるだろう」

やっぱり、夢でみたことは本当だったのか。

オルガがいう資格とは別か？封印されたアークルを
持つのが資格つてところか。俺は負けるつもりはない
けど、奴らの思い通りに進むのも気に食わないな。

「ゲゲルの勝敗とか、復活の鍵とか知るかって話だ
だけど、これだけは分かる。お前を倒さなきゃ、
アーシアを助けることは出来ないんだろうさ。
なら、その一騎打ち受けてやるさ！」

かかってこい！俺はお前を倒してアーシアを救い出す！」
俺の叫びにロウガは笑みを浮かべる。

「そうだ、それでよい！後のことなど

今は考えるな！拙者との勝負だけに集中せよ！

我が爪流剣術お見せしよう！」

「相手は剣士か、なら俺も剣で応えようじゃないか。

木場あ！俺に剣を！」

俺は木場に手を向け叫ぶ。

「ああ、受け取ってくれ、ユウスケ君！」

「超変身！」

二本の剣を受け取り、『群青ナイトフォーのクウガ』へと姿を変える。

「改めて名乗ろう！我はメ族。

メ・ロウガ・ダ。参る！」

「リアス・グレモリーの兵士、兵藤祐介！勝負！」

ガキイン！ギインツ！

ロウガの爪と俺の剣が何度も衝突する。

奴の剣を弾くだけで有効打を与えられていない。

「様子見は此処まで、ここからは呪文を

使わせてもらおう」

『ソルド！』

ロウガが呪文を唱えると奴の爪が白いオーラを纏う。

ブウン！

ガギイインツ！

クツ攻撃の重みが増した！武器を強化する呪文か！？
ガギイン！

強化された攻撃に俺はたまらず距離を取る。

「距離を取ろうとも」

ロウガは距離を取った俺に対してさらなる呪文を唱える

『ソルセン！』

ロウガが爪を振るうと飛ぶ斬撃がこちらを襲う。

「ちッ！飛ぶ斬撃か！？だが避けられないほどじゃない

こちらからも行かせてもらおう！」

ガギイン！キイン！

よし、強化されたとわかっていれば対応はまだ出来る！

「ふむ、この呪文すら耐えて見せるか、

ならこれならどうだ？」

『ゴウ・ソルド！』

ロウガの爪のオーラが強い光と共に強化される！

そのオーラを見て、俺は受けてはマズいと感じた。

ブウン！ブウン！

俺は騎士の速度でロウガの爪を回避してゆく。

ザシユツ！

ふいに俺は奴の爪の一撃を受けてしまう。

「グウッ！」

なっ、俺は確かに避けたはずなのに！？

奴の攻撃速度が速くなったのか？いや、

俺の反応速度が遅くなっている！？

「これはいったい？毒か何かか？」

俺のつぶやきにロウガが笑う。

「流石だな、もう気が付いたか。この爪は呪術が

施されており、触れたものの力を僅かに吸い取る力が

あるのさ」

あの爪にそんな能力が！？

「まさか、卑怯とは言うまい？この呪術とて修行の
すえ手に入れた力なのだからな」

「別にそんなこと言わないさ」

なら、距離を取って戦えばいいさ。

バツ！

ロウガから距離を取り構える。

「超変ー」

「させぬよー」

超変身しようとしたが、

ロウガがすぐさま爪を大きく振り上げる。

『ジャン・ジ・ソルドー！』

奴の頭上に大きな光の爪が現れる

「ぬううん！」

ザアアンツ！

「ぐうううツ！」

振り下ろされた光爪を避けることが出来ず攻撃を受ける。

まだだ！こんな事で倒れるわけないだろう！

「ほう、まだ立てるのか。流石にこの程度では

倒れる男ではないって事か。ならこれならどうだ？」

『ボルセンー！』

呪文を唱えるとロウガが真つすぐ突っ込んでくる。

「流石にそんな直線な攻撃当たるわけないだろうー！」

向かってくるロウガに向け剣を振るう！

フワツ！

斬りつけたロウガが煙の様に消えてしまう。

なっ!?幻覚だと！

ザンツ！

「ぐあああツー！」

突如、背後から爪による攻撃を受ける。

仕込み武器に分身。こいつ侍かと思つたら

忍者だったのか。勝手に思い込んでいたな。

流石にこれ以上攻撃をうけるわけにはいかない。

相手が忍者なら、こちらも魔法で応戦だ！

「ハアアッ！」

俺は剣の片方をロウガに投擲する！

カアンツ！

「こんなもの！」

ロウガが剣に意識をそらした瞬間にベルトに手をかざす！

「超変身！」

俺は『深碧ビショップフオームのクウガ』に変身し、レイピアを構える。

「炎よ」

『Fire!Fire!Fire!』

三つの炎弾をロウガに向け撃ちだす！

ザアアンツ！

奴は爪で炎弾を全て切り裂く。

嘘だろ!?魔法を切りやがった。なら、

こいつならどうだ？

「雷よー！」

『Thunder!Thunder!Thunder!』

三つの雷を撃ちだす。

「ぬう、ぐああああああつ！」

バリバリバリッ！

ロウガは雷の一つを斬ることは出来たが残りは直撃する。

流石に雷の速さには反応できないか。

なら、このまま押し切る！

「ぐう、今のままでは流石に全ては斬れぬか

なら、迅速の攻撃ならどうか？」

『ウル・ソルト！』

奴が新たな呪文を唱える。

俺も負けじと続けて呪文を唱える。

「雷よー！」

奴が呪文を唱えると腰だめに爪を構え重心を下げている。

あの構えは居合の…!?

「ぜえあああああつー!」

シャッキンツ!

「ぐあああああああつー!」

ロウガの居合斬りをまともに受けてしまい吹き

飛ばされる!

「ユウスケー!」

俺を心配する皆の声が聞こえる。

マズイ、もろに食らっちゃった。

呪術の影響もあるだろう脚に力が入らない。

俺は負けるのか? アーシアを助けることも出来ずに?

必ず助けるって誓ったのにか?俺が弱いせいで…。

また、アーシアを失うっていうのか?

「ふっ、流石のクウガもここまでというところか

流石の強さではあったが、拙者の方が強かったという

ところか。では、トドメを刺させてもらおうか」

ロウガが爪を振り上げたその時!

「ユウスケさんツ!!」

アーシアが大声で俺の名を呼ぶ。

「私はユウスケさんを信じてます!」

ユウスケさんなら必ず勝利すると!」

ごめんアーシア。でも俺はもう…。

「ハハハ、状況が見えてないのか。

彼はもう立てない。私に負けたのだよ」

俺を嘲笑うロウガ。

アーシアは泣きながら叫び続ける。

「立ってください!ユウスケさん!」

私は信じてます!貴方なら必ず立ち上がるって!

私は知ってますから、ユウスケさんは一度負けても

最後には必ず勝つ私のヒーローだって」

アーシアの叫びと共にアーシアの胸から

淡い緑色の光が飛び出してアークルに吸い込まれる。

ヒーローかそうだよな。俺達はいつだって勝利してきた！

俺は最後の力を振り絞り立ち上がる。

「馬鹿な立てないはずだ!?居合の一撃を受けた！」

呪術が体を蝕んでいるはずだ！立ち上がれるはずはない！」

ロウガは立ち上がった俺に驚き後ずさりそう吠える。

「確かに体は限界さ、けどな俺はアーシアにとっての

ヒーローらしいからな。カッコ悪い姿は見せられないさ

俺にだって維持があるんだよ。俺は仮面ライダーなんだからな！」

バチイッ！

バチイッバチッ！

俺の体に雷が走り、アークルに金色の装飾が現れる。

バチイッバチッ！バチッ！

クウガの鎧も一部が金色に変化していく。

クウガの新たな姿『ライジング・ビシヨップフォーム金の深碧のクウガ』である。

「な、さらにな変わっただと、だがそんな

瀕死の状態で何ができる！」

奴の言う通り今のままなら何も出来ないさ。だが！

俺はレイピアを構えるとレイピアの剣先が金色に変化し

そのまま天にかざして呪文を唱える。

「癒しよー！」

『ケアルラー！』

俺の体を光のツタが包み全ての傷を癒してくれる。

「馬鹿な回復魔法だど!?しかも、あの傷を一瞬で!?!」

アーシアから貰った力で俺は回復魔法が使える様になった

一回しか使えないが奴はそれを知る由もない。

「新たに手に入れたのは回復魔法だけじゃないぜー！」

体が僅かに浮遊し、地面をすべる様に移動する。

「これでも食らいな！」

ダツダツダツダツダツダツ！

剣先から魔力弾を射出する。

その攻撃は威力はそこまでないが連射速度は目を見張るものがあった。

カツカツカツカツカンツ！

ロウガは全ての魔力弾を弾くことは出来たが、足が止まってしま
う。

その隙に距離は稼がせてもらった。

「小賢しい、回復しようがまた切つて見せよう！」

『ソルセン！』

飛ぶ斬撃が俺に向かうが慌てず呪文を唱える。

「風よ！」

『エアロラ！』

身にまとった風が飛ぶ斬撃をかき消す。

「ならこれはかき消せるか！」

『ジャン・ジ・ソルド！』

光の爪が現れる。

俺が手に入れた力は回復だけじゃないぜ！

「落ちろ！」

『グラビラ！』

黒い球が光爪に触れるとそれを地面へと縫い付ける。

「な、なんだこの力は！」

驚くロウガに答えてやる

「なくに、只の重力魔法さ」

先ほどの黒い球に触れたものは星の力で

重力が増して押しつぶされるのさ。

『ボルセン！』

ロウガは手を変えて幻術の呪文を唱える。

幻のロウガが走ってくるが、幻とは別に

奴が近づいてるはずだ、なら！

「ハアアッ！」

やっと倒せた。これもアールシアのおかげだな。
戦いも終わり俺達はアールシアの元へ集まる。

「ユウスケさん！」

俺はアールシアの頭を優しく撫でてやる。

「助けに来たぞ、アールシア。ありがとうな信じてくれて。
アールシアのおかげであいつに勝てた。約束したからな。
必ず守るって」

安堵したのか、アールシアはうれし泣きをしていた。
よし。アールシアを救ったら、神殿地下に避難して、
騒動が収まるまで待機しよう。

アールシアを装置から外そうと木場達が手探りに
作業をし始めた。

「…手足の枷が外れない」

何!? そんな! 俺もアールシアと装置を繋ぐ
枷を取ろうとするが。

「クソ! 外れねえ!」

どうする? 魔法を使うにしてもアールシアを
巻き込んじゃう!

アールシアの四肢についている枷を部員の皆で取り払おう
とするが、赤龍帝のパワーでも、聖魔剣、聖剣で切ろう
としても、魔力で外そうとしてもびくともしない!

何だ、この枷は!? 特殊な素材で作られていると
でもいいのか!?

そのとき、声が聞こえた。

声の主はまだ生きていたディオドラだった。

「…無駄だよ。その装置は機能上、一度しか使えないが、
逆に一度使わないと停止できないようになっているんだ。
アールシアの能力が発動しない限り停止しない」

「どういふことだ?」

俺が訊くと奴は淡々と答えた。

「その装置は神滅具所有者が作り出した固有結界の

ひとつ。このフィールドを強固に包む結界もその者が作り出しているんだ。『ディメンション・ロスト絶霧』、結界系神器の最強。所有者を中心に無限に展開する霧。その中に入った全ての物体を封じることが、異次元に送ることすらできる。それが禁手に至った時、所有者の好きな結界装置を霧から創りだせる能力に変化した。『ディメンション・クリエイト霧の中の理想郷』、創り出した結界は一度正式に発動しないと止めることはできない」

木場はディオドラに聞いただす。

「発動の条件と、この結界の能力は？」

「…発動の条件は僕か、他の関係者の起動合図、もしくは僕が倒されたら。結界の能力は枷に繋いだ者、つまり

アーシアの神器能力を増幅させて反転リバースすること」
反転？

まさか…。

以前、シトリ家との一戦で、アーシアの回復は反転リバースされた。

木場も同じことに気づいたのか、さらに聞いただす。

「効果範囲は？」

「…このフィールドと、観戦室にいる者達だよ」
ッ！

全員、その答えに驚愕した！ヤバイ！

アーシアの神器の回復能力の凄さは俺達が一番よく知っている。悪魔や堕天使さえも治す！それが増幅されてから反転リバースして、効果範囲がこのバトルフィールドと観戦室だとするなら…ッ！

「…各勢力のトップ陣がすべて根こそぎやられる
かもしれない…ッ！」

衝撃の事実には俺達は青ざめた！そんなことになったら、人間界も天界も冥界も大変なことになる！

「会長との一戦でそんな作戦が思いつかれたのか！」

イツセーの疑問にディオドラは首を横に振った。

「…いや、随分前からその可能性が出ていたようだよ。」

ただ、シトリーの者がそれを実際におこなったことで計画は現実味を帯びたそうだ…」

リアス先輩が顔を怒りに歪める。

「墮天使の組織に潜り込んだままの裏切り者がソーナに

『リバー反転』を貸すことでデータを集め、

利用していたかもしれないのね！」

…グラシヤラボラス家、シトリーとの戦い、

ディオドラ、今回のレーティングゲーム、全部に

『カオス・ブリゲード禍の団』が絡んで

いやがったのかよ…。

クソ！この神滅具が創り出した装置も『カオス・ブリゲード禍の団』の

者が関与している！なんでよりにもよって、『カオス・ブリゲード禍の団』

なんかそんな強力な神器を持った奴が属してやがるんだ！

「…クソッ！なんてことだ！…：…どうすれば…」

床を叩いて悔しがる俺にアジアはつぶやく。

「ユウスケさん、私ごと」

「馬鹿なこというんじゃないやねッ！次にそんなこと言っ

たら、怒るからな！アジアだって許さない！」

「で、でも、このままでは、先生やミカエル様が私の

力で…。そんなことになるくらいなら、私は」

俺はアジアの肩を抱き真つ正面から言う！

「俺は…俺はッ！二度と、アジアに悲しい思いをさせ

ないって誓ったんだ！だから絶対にそんなことさせやし

ない！俺が守る！もう一度誓ってやるさ俺がアジアを

絶対に守ってやる！」

つい泣いちゃったが、でも、本気だ！

俺は絶対にアジアを守るんだ！

「ユウスケさん…」

アジアも感極まって涙を溢れさせていた。

笑みを浮かべてアーシアに言っただけだ。

「だから、一緒に帰ろう。家で父さんと母さんが待っている。俺達の家に戻るんだ！」

ギユウウウウウウン。

静かに装置が動き出した！クソツ！ついに稼働し始めやがった！俺達は装置に向けて、攻撃をするが、ビクともしなかった！アーシア自身にも神器の影響が及んでいた、彼女に降りかかる魔力なども装置が強力に弾いていた。クソツ！どうすれば？

『どうやら、困っているようだね？』

ジユウウウウウツ！

「あっち、熱ち！あっち！」

どこかから声がしたかと思うと、懐が急に燃える様に熱くなる。俺が変身を解除すると、先ほど拾った忍手裏剣が浮かび上がる！

「な、お、お前は！」

忍手裏剣が光ると狐面の男の姿へと変わる。

「十六夜九衛門！」

「ご明察、ラスト忍者の孫。」

いや、君は別人だったね」

突然現れた九衛門にリアス先輩達が警戒する！

「貴方は何者なの！」

「僕は只の亡霊さ。彼女には恩があるのでね

今回は出てきたのさ」

まさか、ニンニンジャーの世界で

アーシアに体を借りた事か？

「まさか、この状況をどうにかできるのか？」

「ふ、流石の僕にもこの状況をどうにかできる力はないさ

だけど、君のベルトの力を使えば何とかね。

ずっと見ていたが、君が触れたものを望む物に

作り変える力があるだろうか？なら、僕の忍タリテイーを合わせれば彼女を救うことは可能だろう」

なッ！本当か！なら、

「早速やるぞー！アーシアを救えるならなんだってやるさ！

何をすればいい！」

「なに、やることは簡単だこの装置に手を置き

イメージするだけだ、ただそれだけでいい

細かい調整は僕の方でやろう」

イメージ！アーシアを救うイメージだ！

この装置全てを別の何かに変えるんだ！

「いいかい、ユウスケ。この装置は元は望んだ物を

創り出す霧。そこに、君のそのベルトの変換する力。

そして僕の手裏剣忍法これが組み合わされば、この

装置を変えられる。イメージするのは一つ、忍者一

番刀を思い浮かべるんだ」

忍者一番刀……。ニンニンジャーが使っていた刀か。

よっしゃッ！

「変身ッ！」

俺は紅のクウガになり装置に手を置く。

行くぞ！

九衛門が俺の手に重ねる様に手を置く

『手裏剣忍法！鍛冶錬成の術！』

アーシアを拘束していた装置は次第に形を変えてゆき、

アーシアの腕の中で一本の刀へと姿が変わる。

よっしゃ！これで解決！任務完了だ！

「ユウスケさん！」

「アーシア！」

アーシアが俺に抱きついてくる！

うう、アーシアが戻ってきてくれて良かった！

「信じてました……。ユウスケさんが来てくれるって

それと、九衛門さんも助けてくれてありがとうござ

いました」

「なに、僕は借りを返しただけ、ただそれだけさ」

九衛門はそういうと元の忍手裏剣へと戻ってしまふ。

「つたく素直じゃないな。でも、ゴメンなアーシア。」

辛いこと、聞いてしまったんだろう?」

アーシアは首を横に振り、笑顔で言ってくる。

「平気です。あのときはショックでしたが、

私にはユウスケさんがいますから」

うう!なんていい子なんだ!

ゼノヴィアも目を潤ませていた。

「アーシア!良かった!私はお前がいなくなつて

しまつたら…」

アーシアはゼノヴィアの涙をぬぐいながら微笑む。

「どこにも行きません。ユウスケさんとゼノヴィアさんが

私のことを守ってくれますから」

「うん!私はお前を守るぞ!絶対だ!」

抱き合う親友同士。アーシアとゼノヴィアの友情は美しい。

「部長さん、皆さん、有難うございました。

私のために…」

アーシアが一礼すると、皆も笑顔でそれに応えていた。

今度はリアス先輩がアーシアを抱き、やさしげな

笑顔で言う。

「アーシア。そろそろ私のことを家で部長と

呼ぶのは止めてもいいのよ?私を姉と思つて

くれていいのだから」

「っ。はい!リアスお姉さま!」

リアス先輩とアーシアが抱き合っている。

「良かったあ!アーシアが助かってよお!

俺達のアーシアが戻ってきたぜえ!」

アーシアの帰還にイツセーが男泣きしてやがる。

「良かったですううううっ!アーシア先輩が

帰ってきてくれてうれしうれしいよおおっ！」

ギヤスパーもわんわん泣き出した。あ、小猫ちゃんに頭まで撫でられ始めたよ。

やつと、無事帰れそうだ。装置も壊れたし、

これで終わりだ。

「さて、アーシア帰ろうぜ」

「はいーと、その前にお祈りを」

アーシアは天に何かを祈っている様子だった。

「アーシア、何を祈ったんだ？」

アーシアは恥ずかしそうにそう言った。

「内緒です」

笑顔で俺の元へ走り寄るアーシア。

カッ！

突如、俺達を眩い何かが襲う。

視線を送るとアーシアが光の柱に包まれていた。

光の柱が消え去った時、そこには。

「アーシア？」

だれも居なかった。

主よ。お願いを聞いてくださいますか？

どうか、ユウスケさんをずっとお守りください。

そして。

どうか、これからもずっとユウスケさんと一緒に

楽しく暮らせますように。